魔法少女リリカルなのはStrikerS〜影の守護者

左近 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～影の守護者

【Ｎコード】
Ｎ４９５４Ｌ

【作者名】
左近　遼

【あらすじ】
マイペースでめんどくさがりの主人公がいきなり機動六課へ出向。六課メンバーを巻き込んでドタバタとした日常を描いていく予定です。
お暇であれば見ていってください。

その1

「新設部隊への出向？」

「おおそうだ。」

ここはミッドチルダにある陸士１０８部隊の部隊長室。

「いつから？」

「今日からだ。これが終わったら行ってくれ」

部屋の中では、その部屋の主であるゲンヤ・ナカジマが机の前にいる男に向かって命令書を見せながら命令を伝える。

「今日から？」

「ああ、今日からだ。ユウ・サエグサ一等陸士」

「へぇ～今日から…」

「てぇ！！普通そういうのはもっと前からいっとくもんだろうが！！！じじい！！」

「うるせえ！！忘れてたんだからしょうがねぇだろうが！！それにおれはじじいじゃねぇ！！部隊長と呼べと何度言ったらわかるんだ！てめえは！」

「忘れてたって、それじゃあ老化現象のはじまりじゃねぇか！じじいといって何が悪い！」

「何行ってんだ！今回のはたまたまだ！俺だってまだまだ若いんだよ！」

「そういっている時点でもう…」

ガン！との音と共に倒れこむユウ。

「いてぇ～なぁ～何すんだ。ギンガ」

頭を抑えつつ立ち上がろうとするユウ。その目の前のにユウの頭をなぐりつけ頭の形が残る金属製のお盆を持つギンガ・ナカジマが鬼の形相でたっていた。

「何すんだ！じゃないでしょうが！部隊長に向かって！」

「あのな！このじじいがわけわか…」ガン！！

「だから部隊長！」

「お盆は横にして殴るもんだろうが…普通…」

頭を抑え立ち上がるユウ。ギンガは「フン！」といった表情で原型をなくした金属製のお盆を持ちゲンヤの方を向く。

ギンガの2撃に完全に戦意を失ったユウはハァ～とため息をつきゲンヤに話を始める。

「それで、どこに行けばいいんですか?部隊長?」

「たくぅ…ふてぶてしい言い方しやがって…まぁいい。おまえにいってほしい所は、今日から始まる部隊なんだが。詳しくは、こいつに書いてある。開設式があるらしいから、そいつには遅れんなよ」

「ちなみに…拒否権は…」

ユウが言いかけたところで横にいるギンガが”ギロッ”とユウを睨みつける。その表情と原型がない金属製のお盆見たユウはそれ以上の抵抗を諦めた。

「了解しました。では」

ゲンヤに敬礼をし立ち去ろうとするユウ。ゲンヤは頷きギンガと共にユウの後ろ姿を追う。すると出口付近でユウが立ち止まる。

「あっそうだ。」

何事かといった表情のゲンヤとギンガ。

「今日からって事は荷物整理の時間がないってことだよな。という訳でギンガ、俺の荷物よろしく!」

との言葉を残し一目散に逃げ出すユウ。やれやれといった表情のゲンヤ。

「ふぅ~やっと行ったか…」

「でもいいんですか?あの子のこと言わなくて」

「いいんだよ。あっちにいったらわかるだろ」

ゲンヤとギンガの会話が続くなか。メキメキといった異音がギンヤの耳を捉えた。

「そうですか…。でも私も行きたかったなぁ～」

ゲンヤは、恐れを感じつつ音が聞こえる方向を見る。

すると、先程までギンガ持っていたはずの金属性のお盆がギンガの手のなかで丸くなっていた。

「めっ……めずらしいな。おまえがそんなこと言うなんて」

「だってユウが行く部隊ってフェイトさんがいるんですもん」

背中に冷や汗を感じつつ、話を続けるゲンヤ。ギンガはといえば表情は普通だが、その目は怒りに満ちているかのようにゲンヤには見えた。

「そういえばそうだったな。まぁ、同じミッドの部隊だ。なんかあったら仕事や訓練で一緒になることがあるだろうよ」

「そうですね。では、私はユウの荷物を片付けてきますんで」

「ああ、頼む」

部屋を退室するギンガ。

「やれやれ、さて…やることはやったぞ。」

ゲンヤは、ふぅ～と息を吐き画面を開きその向こうにいる人物に向けて話かける。

「お手数をおかけして、申し訳ありません」

「たいしたことじゃねよ。けどすまねえなぁ。本来なら姉のミツキにきてほしいって話だったんだけどけどな」

「いえ、ミツキは元々、地上本部の方が出してはくれないと思ったんで…。でも弟のユウが来てくれるだけも。よかったと考えてますよ」

「そうかい…ならいいんだが…だがよ…ここまで戦力をそろえて何をするつもりだ？八神…」

画面の向こうに映る八神はやては一瞬困った表情するがすぐに真剣な表情に戻る。

「今はいえませんが、現状で出来ることはしておきたいんです。」

「なるほどな。まぁ…なんかあったら相談しにこい。」

「はい…。そのときは遠慮なく。では失礼します。」

といい画面を切るはやて。そして、イスの背もたれによりかかりふぅ～とため息をつく。

「これでよしっ…と。さて、あのミツキの弟…いったいどんなヤツ

なんやろ…楽しみやわ」

といいつつユウの経歴が表示される画面を見つつ笑みをこぼすはやて。

一方、そのころユウといえば…。

「たくぅ！機動六課ってなんて辺境地にあるんだよ！」

機動六課がある隊舎に向かう道にて普通にボヤいていた。

その1（後書き）

とりあえずアップしたぞ～！！

感想しては難しい！の一言ですね。

頭の中での思っていることをいざ文面しようとするとなんと難しいことか。

とりあえず、まだまだズブの素人なんで誤字脱字などなどあるとはおもいますがどうか温かい目で見守ってやってください。

呼んでいただきありがとうございました。

その2

その2

ユウ視点

機動6課。

ロストロギア・レリックとそれに付随して出てくるガジェットの対策にともなう独立性の高いエキスパート部隊の実験例…。

「とはいったもののミッドに管理局の実践部隊を創るとは随分大それた事をするもんだ」

現在、俺は渡された資料を画面に表示させながらその機動6課に向かっている途中。

尚、現在自分の車の中。目の前の信号赤であることを先に言っておこう。でないと色々あったら困るからな。

それはそれとして…。

渡された資料だが…。

「ようこそ機動6課へ。これから機動6課についてリインが詳しいご案内するですぅ～」

「なんじゃこりゃ？」

先程まで画面には文字しかなかったのがいきなり小さい陸士隊の制服を着た女の子が画面上に登場しあれやこれやと説明しだした。

「これ…なんかのプロモと間違ってないか?」

唖然としつつも、信号が青に変わり車をはしらせる。ちなみに画面上では先程の女の子が一生懸命喋ってる。まぁ、面倒なのでそのまま放置。だが、画面の隅になんか映ってる。これって…。

「むぅ~放置しないでほしいですー!!!」

とかなんか言っているが初日から遅刻はマズイのでスルー。

「無視しないでほしいですぅ~」

やっぱりスルーしようかと思ったがなんせ画面上で目に涙をいっぱいにしているリインとなのる女の子を見たらさすがにこれ以上のスルーは…ってやっぱりかよ。

皆さんお気ずきだろうか。

普通映像ってのは一方的なもんで、今の場合だと画面に映ってる女の子はただ喋ってるだけで今のような状況はありえない訳で…。

「やっぱこっちが見えてるって事かぁ…。何か仕込みやがったな。このデータに」

ビクっとするリイン。って、音まで聞こえてんのかよ…。

「いったいなんのマネですか？機動６課の部隊長さん？」

「なんやもう気付いたんか」

リインの後ろの映像が避けられその後ろからはやてが現れた。

「いったいいつ気付いたんや？なんでウチやと？」

笑みを浮かべつつこちらを見据えるはやて。

「そうですね～。隊舎の映像から食堂の映像に変わる時からですかね。うまく別の画面を前にだして隠してたようですけど、映像切り替えだけならでないはずの手が見えましてねぇ。それで後ろのは映像じゃなくて画像かなんかじゃないかな？と。それと機動六課の部隊長はこんな事をする人だとうちの姉貴が言ってたんで。それで」

「なんやミツキに聞いとったんか」

「ええ。さっきメールで」

「なるほどなぁ。それで気付いたんが、隊舎から食堂へって…それって最初の方から気付いとったんかい！それならそれとなんでさっさと言わんかったんや？！」

「それは…」

「それは…」

黙り込む俺。そして、画面の向こうで答えを待つはやてとリイン…。

そして、少しの間の沈黙。

「言うのが面倒だったんで。」

だぁ。といいつつひっくり返るはやてとリイン。

ってぇ！どこぞの新喜劇でやってるあれですよ。一体どこで仕入れたんですか？ここはミッドですよ。

「そんなもんネタを仕入れるもなにも笑いの基本中の基本や！そんなもんもしらんのか！」

画面の向こうで力説するはやて。どうしようか迷ったがやっぱ突っ込むのが面倒なんでスルー。

「突っ込まんかい！」

机を叩き声を荒げるはやて。ちなみにリインはついて行けないといった様子。

尚、俺もその意見に同意しているので部隊長の意見は脚下。

「このボケ殺し！」

さらにスルー。

「またスルー！あんたは！」

「はやてちゃん落ち着くですぅ～」

スルーしたのが頭に来たのか画面の向こうで怒りを表わにするはや

て。それを止めるリイン。

ちなみに俺はと言えば、画面はそのままに音声をミュートにっと。

さぁ、遅刻しないようにっと。

それから、どれくらいたったのだろうか。

「それじゃあ、隊舎についたんで後程。」

と言いつつ画面を閉じて車を出る俺。

画面の向こうでは、あっけに取られ「通信終了の文字を見つめるはやてとリイン。

「それにしても一体何だったたんだ?ありゃ」

そう思いつつもウイルスのチェックはしておこうと思う俺だった。

その2（後書き）

勢いそのままで第2弾！

といいつつ、ほんと勢いだけだよなぁ

思いつきで書いてるのバレバレ。

まぁ、色々これからも迷走するでしょうがよろしくお願いします。

その3

その3

なのは視点

今日からいよいよはやてちゃん…ううん、私達の部隊が始まる。
新人達もどんな風に育てようか考えただけで楽しくって仕方がない。
なんせ1年かけての教導なんて初めてだから。

「どうしたの？なのはさっきから嬉しそうな顔をして？」

私の横にいたフェイトちゃんが不思議そうな顔でこちらを見てる。
どうやら顔に出てるみたい。

「いよいよ今日からだって思うなんだか嬉しくなって」

「なのはらしいね。でもあんまり無理しないでね」

「大丈夫だよ。フェイトちゃん。フェイトちゃんも捜査主任だからって無理しないでね」

「うん。わかった」

さて、まずは部隊長のはやてちゃんに着任の挨拶だね。部隊長室はっと…。

「納得いかーーーーーん！」

？？？？これってはやてちゃんの声？

取り合えず私とフェイトちゃんは声がした部屋へと向かう。

「「失礼します」」

私とフェイトちゃんが部屋に入ったら…

「シグナム離し！うちは今からあのボケに説教しにいくんや！！お笑いがなんたるかを教えたる！！」

「主はやて、お待ち下さい。目的が変わってます！そもそも今回の目的はあいつの観察力などを測るもの。お笑いの力量とは違います！」

「いんや、お笑いも観察力が必要や！それを測るためにせっかくウチがボケたのにそれを放置するなんて！それにあの台本はウチが３日かけて作ったんや！それをあいつは～！ゆるさん！！説教や！絶対説教や！わかったらシグナム離しーーーーー！！」

何がなんだかサッパリわからなかった…。

部屋に入ったらシグナムがはやてちゃんを抑えているけど、ヴィータちゃんとリインちゃんその二人をただ、見守るというかついて行けないといった様子。それはそれとしてもはやてちゃんの席の周りにある照明設備や音響設備があるのはいったい…。

「ねぇ、ヴィータ？」

「おう、フェイトになのはじゃねぇか。一体なんだ？」

私が状況を整理しきれないでいる中、フェイトちゃんは近くにいた状況を聞こうとしてた。さすが執務官冷静だね。

「一体なんだじゃないよヴィータちゃん。これは、一体どうしたの？」

フェイトちゃんの行動に気付いた私はすかさずヴィータちゃんにこの状況を聞いてみた。

「いや何、今日新たに1人くるんだが、そいつがあたし達の知り合いの弟でな。そいつがどんなヤツだか試してみたんだが…」

「それでどうしたの？」

言葉にヴィータちゃんが詰まる。フェイトちゃんは話を続けるよう促す。

「いやさ…」

「どうしたの？ヴィータちゃん？」

なんか言いづらい事でもあったのかな？ヴィータちゃんの表情になんだか心配になってきた。

「いやさ、試した所まではよかったんだが、あいつ…はやてがボケたのを無視したみたいでそれではやてのヤツ切れちゃって…」

「へっ？」

私フェイトちゃんは唖然とするしか無かった。

「で、でもなんで言いづらくしてたの」

「いやさ、なんだかバカバカしくて恥ずかしくなってさ」

ヴィータちゃんの意見はもっともだと思う。試すつもりが違う方向に行ったあげく試した側がキレるって…。これじゃまるで本末転倒だね。

「でもはやて達がわざわざ試すなんて…その知り合いの弟って？」

フェイトちゃんは私とは違い知り合いの方に興味がある様子。

「フェイトは知ってるだろ？ミツキ？サエグサって」

「ミツキ？サエグサさん？フェイトちゃん知ってるの？」

「噂程度だけね」

「噂？」

「うん。私と同じ執務官で地上本部ですごい実績あげてる執務官がいるって」

「それが、ミツキ？サエグサさん」

「そう。あっでも何年か前に捜査中の事故かなんかで大怪我したと

かで今は、執務官の仕事はデスクワークだけしかしてないとか…」

あれ？ヴィータちゃんの顔が一瞬曇ったような…気のせいかな？

「そっ！そいつとはやてが昔からの知り合いでな。今回そいつの弟が来る事になったって訳だ」

「へぇ～。でその人ってスターズとライトニングのどっちに入れるつもりなの？」

「どっちにも入らねぇよ。なんせそいつ整備士だからな」

「「へっ？？」」

「まっ、まさか整備士の人を試してああなっちゃったの？」

さすがのフェイトちゃんも今回は驚いたみたい。

「だから、恥ずかしいんじゃねぇか」

そりゃそうだね…。

「確かにそうだね。でも、どう試したの？」

それは気になるね。私もフリーズしかけた頭をきりかえヴィータちゃんの話し耳を傾けた。

「詳しい事はわかんねぇが、あいつに映像資料を渡すとみせかけてかけて実は、こっちで通信してるってのをどれくらいで気づけるか

？ってのを試したみたいなんだけど…」

「それで、はやてちゃんがボケたのを無視されてああなった…と」

「いちいち蒸し返すなよ。恥ずかしいんだから。それに予算も使いこんだらしいからあまり大きな話には…あっ…」

「ヴィータ！それを言ったらあかん！」

「予算を使ったって？これに？」

なんだろう…私の中で黒い何かが…ささやくの…

感情を抑えるなって…。

「あっ…あのなのはちゃん。これには深～い訳があって…ってなのはちゃん」

はやて視点

なんや…なのはちゃんを黒いなんかが包んでる…

こっこれは…ウチの中のゴースト…いやないセブンセンシズ…でもない…これは感や。ウチの中の芸人としての感があれは受けなあかんっていっとる。で、でも…ウチがあれやこれや考えてる内にセットアップしとるしーーーーー！

「はやてちゃん…」

「はっ…はい！」

「お話…しよっか…」

ぎゃーーーーーーーーーーー！！！！！

ドゴーーーーーーーン！！！！！！

この先についてはみ…みなさんの想像に任せるわ。

ウチはもう…ガクッ。

ユウ視点

ドゴーーーーーーーン！！！

「なんだ？この音？」

機動六課の隊舎について数分がたっただろうか。

ドゴーーーーーーンって音がしたが、まっ、どこぞの方がお笑いに命かけたってところか。

まぁ、やりたいなら勝手にやってくれ。

「なんやとーーーーー！あんたはお笑いの基本ってのをぉ…」

となんか変な電波がとんできたんだが、とりあえずスルー。

「あんたはーーーーー！！！」

はいはい…話が進まないのカット、カット。

それにしても、さすが新設部隊。

何もかもが全て新品とは。ソファーなんてまだビニールがかかってるし。

さて、とりあえず部隊長に挨拶をしに…。いや辞めとこ…なんかイヤ～な予感がするので今は辞めとこ。

とはいえ、開設式まではまだ時間があるしどこでやるかもわかんねぇ。

「もしかしてユウ？」

「げっ…！アルト！」

「久しぶりに同期にあったと思ったらゲッ！とはなによ！」

「イヤ…なんだぁ～。久しぶりだなぁ。アルト。もしかしてお前も六課に飛ばされたんか？」

俺の目の前には短髪で陸士隊の制服を来たアルト・クラエッタ　が現れた。

なんで俺がゲッと言ったのかと言えば、こいつは俺の同期でいいヤツなんだが…こいつは昔から悪いくせがあって、機械を分解するのはいいんだがそれを戻せなくなるといったものだ。

なに？対した事ねぇじゃん。そう思ったヤツ、俺も最初はそう思っ

た。だが！こいつが分解するのはこいつが好きなもの！つまりこいつは、自分の好きな古い車やらバイクといった設計図がなさそうなヤツを分解するんだ。そして、戻せなくなって泣きながらよってくるんだ。ちなみにそのせいでおれは何度姉貴に殺されそうになった事か…。

「もう直しました！」

アルト…。いつの間にそんな技覚えたんだ…。

「ったく…相変わらずなんだね。それにしても飛ばされたって？私ここにはシグナム副隊長の推薦でスカウトされてきたんだよ。ユウはどうしてここに？」

俺はナカジマのじじいとのやり取りをアルトに説明。尚、１０８隊のある方角から殺気がとんで来たのは無視しよう。

「アハハハッ！それにしてもユウらしい人事異動だね。」

「それどういう意味だよ」

「だって、ユウの事だから何日も前に言ってたら言ったその日からずっ～と文句ばっかいってるだろうから、当日まで黙ってたんだよ。そうすれば文句も少しだけしか聞かないですむだろうから」

ありえる…あの古狸ならやりかねん。だが…

「それのどこが俺らしいんだ？」

「へっ？それは…え～とっ…」

答えに詰まるアルト。すると…。

「つまりだ、おめぇさんすぐに面倒くさがるからアルトはおめぇさんにはいい方法だったって言いてぇんだよ」

「ヴァイス陸曹！」

「ヴァイス！」

「よっ！久しぶりにだな。大将！」

俺の後ろから声が聞こえたと思って振り返ったらそこには、悪友のヴァイス・グランセニックがたっていた。

「なんだ、その説明は？もっとちゃんと説明しろ！」

チッ！どいつもこいつも地文にツッコんできやがって！

「これはこれは、その昔実の妹を撃ってデバイスが握れなくなった事が原因で、武装隊からヘリパイになったヴァイス陸曹ではありませんか」

「おいこら！ちょっと待て！そいつは普通徐々あきらかにしてくもんだろ！それを初登場でいうか普通！」

「いいじゃねぇか。どうせアニメで大した伏線にもなってねぇんだから」

グサッ！

「ケッ…どうせサブキャラの扱いなんてこんなもんさ…」

「いじけちゃった…どうすんのよ！ヴァイス陸曹以外と気にしてるんだから」

「ほっとけぇ！どうせすぐに復活する！」

「それはそれとしてアニメとか伏線とか言ってもいいの？」

「…」

返事がない。ただの屍のようだ！

「コラぁーーー！！！！！！」

その3（後書き）

ふぅ～。

ようやく3話…。

って言うか前回の修正と話しを進めようとする事でいっぱいいっぱい。

もう少し計画的にやらなければ…。

書いてる途中にあれやこれややろうとして返って話が進まなくなる…。

けどなぁ～はやてが出て来ると色々出てくるんだよなぁーと自分の中での葛藤は続くのであった。

その4

その4

アルト視点

「あんたー！ミツキの弟のくせしてお笑いの基本をしらんとは何事や！」

「知るか！そんなもん！たかが、そんなもんを試すためにあんな大掛かりな事してんじゃねぇ！それに姉貴は関係ねぇ！！」

「そんなもんやとーーーー！お笑いはそもそもコミュニケーションには必要な要素のひとつや！それをそんなもんとは、芸人に対して失礼や！」

「仕事には必要ねぇだろ！それに芸人になった覚えねぇ！！！」

ど…どうしよう…。

私の目の前では八神部隊長とユウが言い争いを始めてる。かれこれ5分くらい…。

へっ？なんでいきなりこうなったって？

そっ…そうだ！とりあえずどうしてこうなったかを説明しないと。

で…でもなんで、私視点で始めるの～！

普通こういうのって、なのは隊長やフェイト隊長とかそういった人達の担当じゃないの～！

二人の言い争いが続くなか、私の叫びが聞こえたのか天井から一枚の紙が落ちてきた。

やった！神様は、私を見放してなかった！

私はワラをもつかむ気持ちでその紙を書いてある事を読んでみた。

「え～と…なになに、それは、ユウとはやての二人以外あなたしかいないからですよ。ちなみに面白そうだったんで、やってみました。後はよろしくぅ！
ｂｙ　？作者ぁ～！」

「てぇ！思いつきでやらないでよね！しかも後はよろしくって、これって完全に丸投げだよね！自分でいつも丸投げするな！っていってるくせに～！もう～！」

とにかく、私の作者への怒りは後回しにして、この前回からここまでに至るまでの状況を説明すれば…。

あの後、私とヴァイス陸曹とユウの三人は開設式に参加。その後、ユウと私が所属するロングアーチの面々と顔合わせ。そして、ユウが部隊長に挨拶してないっていうから部隊長室に連れて来たのは、いいんだけど…。

「連れて来たら早々にこうなった…。って訳でいいんだよね。アルト」

「はっ…はい！そうです。あれ？確かここには、ケンカしている二人以外私しか…。なっ…なのは隊長！いつの間に！」

私の隣には何時の間にかなのは隊長がいた。

「今さっきだよ。」

「とりあえず、助かりました。でも、どうしてここに？」

「実はね。これから新人達の教導をするんだけど、それをサエグサ君にも手伝ってもらおうと思って。
それでグリフィス君に彼の居場所聞いたらここだっていうから…」

「そ…そうですか…。そう言えば、ユウ…デバイスマスターの資格持ってるって言ってましたし。それにシャーリーさんもデバイスの調整とか手伝ってもらうとか言ってましたし…」

「そうだね。それと…彼には整備士の他に戦闘にも参加してもらうかもしれないから、とりあえず新人達との顔合わせもかねてと思ってね…」

「な…なるほど…」

く…黒い…なんだろなのは隊長の周りに黒い何かが…。こ…怖い。
それになんでセットアップしてるの？

「アルト」

「ひゃ…ひゃい！」

「危ないから下がってて」

「ひゃい　？わかりました」

一目散で逃げる私。も…もしかして、これが管理局でも一番恐れられてる白いあく…。

「アルト…なんかいった？」

「イエ。ナンニモイッテマセン」

「そう。ならいいんだけど…」

あ…あまり余計な事いうのはやめよう。命あってのなんとかともいうしね。

私が部隊長室をでたところで部屋の中から部隊長とユウの叫び声が聞こえてきた。

まさに自業自得。

「なんで俺まで～」

って、ユウが叫んでそうだけど部隊長とやり合った時点でアウトだと思うよ。

とりあえず、やすらかに成仏して下さい。そして、決して私の枕元

には出てこないで下さい。ナムナム…。

心からそう願う私だった。

「「勝手に殺すなぁーーーーー！！」」

ユウ視点

「あはははは っ！それでそんなに制服がボロボロって訳？」

「まぁ、そんな感じです」

「笑い事じゃないよ。シャーリー」

部隊長室にて管理局の白い悪魔…もといスターズの分隊の隊長、高町なのは様の襲撃…いや、「お話」をありがた～くちょうだいした後、これから来るであろう新人達の教導の準備をしている。

ちなみに、あのちびだぬき…もとい八神部隊長は、どうなったかと言えば副官のグリフィス・ロウラン准陸尉にこってり絞られてる最中。

本来なら俺もそれを受けなければならないのだが、事情を知ったなのは隊長とグリフィスさんが今回に限りといって、免除して下った。まぁ、当然と言えば当然だろう。なんせ、俺は被害者…。

「ユウ君…いくら巻き込まれたとはいえケンカいけないよっていっ

たよね？それにさっきから変な言葉がチラホラ聞こえてくんだけど？まさかとは思うけど…ちゃんと反省してるよね？」

俺の横で黒くなりつつあるなのは隊長。

いっておくが、俺は八神部隊長と違い芸人ではない。で、あるからして身の危険を晒してまで笑いを取りに行くことはしない。

っていうか、もういいだろこのパターン。という訳で俺の答えといえばもちろん。

「は…はい。もちろん…以後気をつけます　。なのは隊長」

「よろしい」

という訳だ。コラッ！そこ！ちぃ！とか連邦軍の白いなんたらの真似をしてると言い訳をして舌打ちをするな！やってる事は同じだ。

それはそれとして。

ふぅ～危ない危ない。いくらなんでも着任初日に病院直行じゃあシャレにもならんからな。

「それにしてもユウ君の経歴を見せてもらったんだけど、こんなにいろいやってる人初めてだよ」

とシャリオ・フィニーノ一等陸士（本人曰くシャーリーと呼べとの事）さんは、画面に表示された俺の経歴を見ながら驚きの声を上げてた。

だが、俺から見ればいくつもの画面を広げそれぞれ違う作業をしながら話をする貴方の方がすごいよ。

さらにすごいのは…

「そうなのシャーリー？どれどれ？」

俺とシャーリーさんとともに教導の準備をしていたなのは隊長が作業の手を止め画面を覗き込む。

これが普通。だが、今なのは隊長がしたことと同じ事をシャーリーさんがするとしたらどうなるか？と言えば…。

画面を覗き込む所はなのは隊長と同じだが、作業は止まらない。

画面をみずに手が勝手に動いていると言った方がいいだろうか。

つまり、作業を止めずに会話に参加してしまうという事をしだすのだ。しかもノーミスで。

もう唖然とするしかありません。っていうか、俺がここにいる意味ないんじゃ…。

「そんな事ないわよ。」

シャーリーさん貴方もですか…。

とりあえず、話しを戻そう。

「経理に総務…それに武装隊に広報って！いったいどれだけのどれ

だけの部署まわってるの？」

「さあ？」

なのは隊長の質問に両手をあげわかりませんといったポーズをとる。

「全部で２２部署…あっ！でも短期でしか動いていなかった部署も含めたら、４０…」

「４０？いったいどうして？」

「もしかして…全部の部署でそこの上官とケンカしたとか…」

「全部とはしてません！ああなったのは、ここと１０８だけです！」

「ほんと～？」

疑いの目を向けるなのは隊長とシャーリーさん。そりゃそうだろうな。なんせ、いましがたやらかしたばかりだし…。

「本当です！なんだったらその部署の人に聞いて見て下さい！」

「そ…そこまでするつもりはないんだけど…流石に怒るよね、ゴメンゴメン」

「でも、どうしてなの？」

真剣な表情で答える俺に流石に怒らせたか？と感じたシャーリーさんは俺に詫びるを入れる。

だが、なぜなのか？という疑問は解決されておらず、再び同じ質問してくるなのは隊長。

俺は腕組みをしその原因を考えた。

「なぜか？と言われれば…そうですね、その原因は１０８の部隊長にあると思います。」

「１０８の部隊長と言えばナカジマ三佐？だよね？」

「いったいどうして？」

二人ともなぜあのジジイが？といった表情。

「あのですね。あのジジイ…。もといナカジマ三佐は義理人情にとお～ても！熱い方でして。人に頼まれたら、断らない人なんですよ。それで…」

「も、もしかして、引き受けるだけ引き受けといてそれをユウ君に丸投げ？」

「はい。その通りです」

「さすが古狸の異名を取る、ナカジマ三佐。話し方に恨みこめる辺りからすると、どうやら真実のようね」

うんうん。とうなずき納得の表情のシャーリーさん。それにしてもこんな事で嘘ついてどうするんですか？

一方、なのは隊長といえばなぜか苦笑い。

そんな事をしながら準備を進めていると

「お待たせしました～！！」

あれ？この声どっかで聞いたような…

「来ましたよ。新人達が」

シャーリーさんの声で俺となのは隊長がさっき声がした方をみると。

「まさか…なぁ」

なぜ、なのは隊長が苦笑いだったか？

なるほどそういう事…。

その４（後書き）

まだまだ、初日が続きます。まぁ、初日からそんなにいっぺんに出さなくても…。まっいいか。

その5

その5

シャーリー視点

私の目の前には、これからなのは隊長の教導を受ける新人達が並ぶ。

少し急いで来たのかな？少し息が荒いみたい。

それにしても、エリオ君とキャロちゃんスターズの二人とキチンと挨拶出来たのかな？

ふぅ～やれやれ、どうやらフェイトさんの心配症が移ったのかな？

いくらなんでもあの親バカっぷりだけは真似たくないんだけど。

それにしても、スターズの二人。

なんだか落ち着きがないなぁ。

まぁ、あのなのは隊長の前だから、緊張するなというのはヤボな話だし。

それにあの青髪の子…スバル・ナカジマさんだったかな？確かなのは隊長が憧れの人だとかなんとか…。もしかして、そのせい？

と自分の自己紹介をしながら考えてはみたんだけど…。

どうやらそれも違うみたい。

なぜかと言えば、私の横にいる彼がやれやれと言った顔つきで新人達を見ているから。

ちなみに彼がどんな容姿をしているかと言えば…。

エリオ君…。後お願いね！

エリオ視点

えっーーーーー！！

どうして、僕なんですかぁ？

いくらなんでも無茶振りです！

「だってぇ。彼、私の横にいるのよ。横をチラチラ見る訳にはいかないでしょ。」

でっ…でも～。いきなり容姿を説明しろと言われても～。

「だって、作者さんが、いい加減彼の容姿についていっとかないとマズイかもって思ってるみたいだし…。設定を説明するにしてもどうしようか迷ってるみたいだし」

あ…あの…シャーリーさん？

「なに？」

シャーリーさんって魔導士でしたっけ？

「違うわよ。でもどうして？」

だって、まだなのは隊長の説明が続いてるんですよぉ！

「それはね。私達に作者さんが与えてくれた特別な能力なの」

一種の超能力みたいなものですか？

「そうよ」

だったら、すごいじゃないですか！

「な～んて嘘」

嘘！？

「そう。作者さんのノリでやっちゃったんだって。それじゃ、後はよろしく！」

シャーリーさん…貴方って人は…。

と…とにかく僕の目の前には、身長が１７０くらいで。髪はボサボサで目の色は黒。そして、なぜかコゲが見える陸士隊の制服を着た男性が…。

「あ…あの…モンディアル君？」

ど…どうしたのルシエさん？

「あのね。イメージとしては、大食いで車を立てかけるくらい力ある婦警さんの彼氏だって」

???その婦警さんって魔導士?

「違うよ。その婦警さん魔導士じゃないよ。ちなみにフェイトさんと同じ地球の日本にいるんだって。その人、別名があって…確か…ホームランお…。

ルシエさん!それ以上は色んな問題が!

これ以上は僕には無理です!後はお願いします!ランスターさん!

ティアナ視点

ったく…作者のその行き当たりバッタリな展開は勘弁してほしいわ。

さて、いったいどうしよう。

私の左では、訓練校からの腐れ縁のスバルがソワソワしてるし右では、エリオが動揺しっぱなしだし。

さらにその右にそのエリオの姿をみて心配そうな顔をしているキャロ。

目の前では、これからの教導についての説明をしている高町なのは隊長。その横にいる…シャリオ…。

「だから、シャーリーって呼んでって言ったでしょ!」

…ピクッ

…ピクッ

…この人はーーー！！！

…まったく！…で、

その横にいるシャーリーさんが高町隊長の話に合わせて画面を操作してる。

そして、そのシャーリーさん右にいるのが…。

「それじゃあ、説明は大体こんな感じなんだけど。何か質問は？」

一通りの説明が終わった様子の高町隊長。

「あの～なのは隊長？」

「一人自己紹介がまだなんですけど…」

へっ？という表情の高町隊長。彼の事忘れてませんかぁ？といった表情のシャーリーさん。その横でどっちでもいいですよという表情の男の人。

多分、スバルが落ち着きがないのは恐らくあいつのせい。

スバルの幼馴染で兄さんの最後を看取ってくれた上に、その後の私の事まで色々とお気遣いして下さったあの人の弟。

それにしても、なんで私が尊敬するミツキさんの弟があいつなわけぇ！

あのトボけたツラを見ただけで腹が立つ！！

「にゃははは、ゴメンなさい飛ばしちゃったね。それじゃユウ君お願い」

頭かきながら苦笑いの高町隊長。そして、イエイエと相変わらずスッとぼけた表情のアイツ。

ちなみにスバルといえばやっぱり！といった表情でテンションがさらに上がっていた。

その逆にテンションが下がる私。

そして…

「え～シャーリーさんと共にデバイスの調整などを担当します。ユウ・サエグサ一等陸士であります。よろしくお願いします」

「「「「よろしくお願いします！」」」」

やっぱり…。

とりあえず、あいつの方が階級が上なんで挨拶はしておかないと…

でも頭痛の種が一つ増えたわ。

えっ？なんでかって？

それは、スバルが…。

スバル視点

やっぱりユウ兄だぁ！！！

久しぶりだなぁ～。

だってぇ、1年くらいぶりだもん。

これから一緒の部隊かぁ～。

それに！あのあこがれのなのはさんともに一緒だし！これから楽しくなりそぉ！

「スバル…少し落ちつこっか」

「ス…すいません！！」

嬉しいあまり態度でちゃったみたい…。

なのはさんに普通に注意されちゃった。

それにしても、ユウ兄。なんで制服があんなにボロボロなんだろ？

後で聞いてみよっと。

ユウ視点

やっと俺の番かよ。

とりあえず、自己紹介を終えた後、スバルがなのは隊長に注意されてた。

相変わらずだなあいつは。

それにしても1年見ない間に色々と…。

「ユウ兄。どこ見てるの？」

スバル…お前もか。

まぁ、いい。スバルのジト目は気にせず話しを進めるとして。

「むぅ～ーーーー」

それにしても、あの泣き虫がこうも変わるもんか？

まぁ、元々しゃべる時だけ明るかったからな。あいつは。

それ以外は暗くてウチの姉貴かギンガにべったりだったし。

そんなあいつが管理局に入ると言い出した時には、大騒ぎだったもんな。

特にあのじじい。

頭打ったんじゃないのかといって、病院に連れてくわ。

それが問題なけりゃ今度は、何かに取りつかれたんじゃないかって霊媒師の所につれていくわってそりゃもう一人で大騒ぎ。

姉貴とギンガは頭抱えてたなぁ、そういや。

そして、訓練校に入ったら、姉貴が面倒みてたって言うティアナが同室だったって聞いた時には、あの姉貴が腰抜かして驚いてたっけ。

ちなみに、訓練校に入るまでスバルとティアナは一度もあっていない。それに俺もギンガもじじいもだ。

3人共初めてあったのが、スバルが訓練校に入った後だ。まぁ、俺とじじいは話には聞いていたがな。

なぜかと言えば、ティアナが姉貴に迷惑かけたくねぇって全寮制の学校に入っちまって。

その後も何度か姉貴がウチに来るよう誘ってはみたが、なんだかんだ言って結局一度もウチにはもこなかっからな。

それがどういう訳か訓練校で同室になり、今でもコンビを組んでるってある意味奇跡だよ。

あ～色んな意味で笑いがとまんねぇ。

「笑うなぁー！！！！」

かくゆう俺達は、そんな脳内会話を繰り返しつつ訓練場に向かうのであった…。

ってぇ！！たいして進んでねぇじゃねぇか！！

その5（後書き）

という訳で、初日はまだ続きます（笑）次でなんとかなれば…

その6

その6

キャロ視点

えっ？今回は、私からですか？

でも…何を話したら…

あっ、成る程。前回から、また少し時間が経ってるからその辺の説明と今の状況なんかを言えばいいですね。

わかりました。

がんばろうね、フリード。

「クキュー」

えっと、今は前回から時間が少し経って私達の訓練は終わっちゃいました。

えっ？なぜですか？って

そうですねぇ…

えっと、主人公のサエグサ一士はただ見ているだけで原作と大して変わらないからだそうです。

決してバトルシーンがかけないからとか、面倒だから飛ばしたという訳ではありません。だって

せっかく、私とフリードが活躍してるところもあったのに…

残念だね、フリード。

「クキュー」

それで、今の私達といえば訓練が終わり隊舎に戻る帰り道。

初日から、訓練がハードでみんなもうヘトヘトです。

ただ、一人を除いて…

「ユウ兄～！」

「おっ、スバル！久ぶりだな。ってかあれだけハードな訓練だったのに結構元気そうだな？」

「うん。元気イッパイ…かな？てへへっ」

ナカジマさんが私達の前を歩くサエグサ一士を見つけるやいなや全力でダッシュ。大声でサエグサ一士を呼び止め話しなんか話しをしてるみたい。

でも、なんだかうれしそう。

ちなみに私達とサエグサ一士の間は、結構距離があって、私も追い

かけようか迷ったんですけど…

「あの子に付き合うと体がいくつあっても足りなくなるから、辞めといたほうがいいわよ」

とランスター二士言われたので追いかけるを辞めましたが、確かにそう思いました。

ちなみに、私の横にいるモンディアル君は、あのものすごいダッシュに目が点になってました。

ランスター二士と言えば、なんだか呆れた様子…

ティアナ視点

ったく…あの子は…

とりあえず、ちびっ子二人にあのバカと私達との関係について説明しながら先を急ぐ。

なんせ、私達が行く先でスバルとユウがまってるんだもん。

先に行ってくれたらどれ程楽だったことか。

「ティア〜!!早く早く!」

「うっさい!バカスバル!あんたとは違って、こっちは訓練で疲れてんの!!」

とスバルが急かすが聞く耳持たず。

「ティア～早く～」

「お～い。早くこいとさ。ツンデレ～」

「うっさい！ツンデレっていうな！」

「それをツンデレっていうんだぞ～。いい加減認めろ～。」

「うるさい！！あんたがイチイチ、突っかかってくるからでしょ！」

「それもツンデレという～」

「うっさい！！」

とかなんとか、この腹が立つやり取りしながらスバル達と合流。

ガン！！

「てぃ…ティア？」

「いってな～！何すんだ！いきなり」

「あ～スッキリした。」

全員いきなりの行動に目が点になってる。

「取り合えず、腹が立つから殴っときました。申し訳ございません。改めまして、お久しぶりです。ユウ・サエグサ一等陸士」

頭を抑えてるあのバカに敬礼。スバル達も慌ててそれに続く。

「んな、こったろうと思ったよ。とにかく、久しぶりだな。ティアナそれと…」

「固っくるしい挨拶は辞めてくれ。でいいのでしょうか？」

「ああ。わかってるなら…」

「問題ありません。単なる嫌味でやってますから」

「ったく…その減らず口は相変わらずだな」

「ええ、まぁ、そりゃもちろん」

スバル視点

うわぁ～。やっぱりこうなったよ。

二人とも意地っ張りだからなぁ。

でも、普通の人ならティアがこんなことし出したら鉄拳制裁だけど、ユウ兄は許してるみたい。

それにティアだって、嫌いとかいいつつも結構このやり取りに付き合ってるし…

あれ？もしかして二人って…なんだかんだ言って…

「「絶対に違う！！」」

うぅ～。なんでこんな時だけ息ぴったりなの？

ユウ視点

…たくぅスバルのヤツ余計なこといいやがって。

それはそれとして、とりあえずこのやり取りにまったく参加出来ずにポカ～ンとしている二人に挨拶しなきゃな。

「さっきも挨拶したが、ユウ・サエグサ一等陸士だ。ちなみに俺はあっちのツンデレが言ってた通り固っくるしいのが、苦手でな。俺のことはユウで構わない。それと敬語禁止いいな」

「えっ…でも…」

おいおい、二人ともフリーズしちまったよ。

「ちょっと、あんたいきなりで二人ともびっくりしちゃってるってしょ。それとツンデレっていうな！」

ゴスっ…

って、今度はケリかよ…。ったくスバルがあのツンデレにＳＡ（シューティング・アーツ）の基本を教えてからというもの威力があがってるんだよな。

「で、でも出来ることからってことでいいんじゃない？だって二人

はこれからコンビでやってくんだからお互いのコミュニケーションをとるためにも…」

えっ？今なんつった？

「だから、二人でコミュニケーションをとってくためにも…って…あれ？」

俺とティアなフリーズ。そして…

「たっ大変だぁ！！ティアナ！スバルがコミュニケーションなんて難しい言葉使ってるぞ！！こりゃ、明日雨…いやヤリがふってくるぞ！」

「そうね。今から対策取らなきゃ。とりあえず、八神部隊長とナカジマ三佐に連絡を取って…」

「二人とも惨いよ…」

おい！いくらなんでもスバルをバカにし過ぎだ！ってぇ。

おいおい、冗談はよしてくれ。

なんせ、こっちは普通に驚いてんだ。

まさか…こんなにまともな事をいいだすとは…。こりゃ今日のナカジマ家の夕食は赤飯だな。

「ユウ兄…酷い」

「と…とにかく。スバルの言う事は正しいはね。とりあえず、お互い名前で呼び合うってところから始めたら？それでいい？ユウ？」

「ああ。構わねぇよ。それじゃ、よろしくな。エリオ、キャロ。そして、フリード」

「「こちらこそ、よろしくお願いします。ユウさん」」

「クキュー！」

「うし！自己紹介も済んだところメシにするか」

「「「は～い」」」

「クキュー！」

「そうね。行きましょ」

とまぁ、こんな感じでようやく初日が終わりを告げた。

その６（後書き）

最後は、駆け足っぽくなってしまいましたが、ようやく初日が終了です。次回はファーストアラートの手前付近になるかと。なんせ、ユウが整備士だってのにまだなんにもしてませんのでその辺を書きたいと。

その7

その7

スバル視点。

え～と、あれから1週間ほど経ちました。

私達、新人フォワード4名は毎日訓練漬けの毎日。

そして、今は午前中の訓練が終わってみんなでお昼を食べてる所。

午後からは訓練はお休みとのことで、みんなホッとしてます。

「あの～スバルさんにティアナさん。ひとつ聞いてもいいですか？」

私がスパゲティを口に入れた所でまるで意を結したようにキャロとエリオの二人が聞いてきた。

「ふぁに？（なに？）」

「何よ。改まって？それとスバル！口の中に物を入れながら喋らない！」

私もティアも二人の方を見ながら手を止めた。

「「あの～。ミツキさんってどんな人ですか？」」

「ミツ姉の事？」

「私達の知り合いってのは、説明したけど…一体どうしたのよ？」

「よくスバルさんとティアナさん、」

「それにユウさんの話の中によく出てくるんで、一体どういう人なんだろうなって思って」

エリオの説明のキャロが続く。ほんとタイミングがバッチリなのがなんかすごい…。

「ちなみに同じ事をユウさんにも聞いて見たんですけど…」

そう言えば、ユウ兄とエリオって同じ部屋だったね。

「で、あいつはなんて言ったのよ？」

なんか言いづらそうにしてるエリオにティアがせかしてる。

「えっ…とですね…。噂好きでトラブルメーカーでメガネをかけた婦警さん…って…」

それって…外見のイメージだよね？エリオ…

ちなみにユウとミツキなどのこの作品にでて来る、オリジナルキャラのこの様な表現については、あくまでも外見のイメージですので、性格等が違うのでご了承下さい。ってこれって私が言う事？

「ええ。僕もそう言って見たんですけど…そしたら…」

そしたら?

「マッドサイエンティスト、悪魔、鬼、魔女…」

「ペテン師、ケチ、詐欺師、嘘つき、狸メガネ…」

うわぁ～悪口のオンパレードだぁ…

唖然とする私に対しどんどん機嫌が悪くなるティア…。

エリオとキャロもティアの表情の変化に気づいてるみたい。

だって、ティア…肩がプルプル震えてるんだもん。

あ～そろそろ爆発しそうだね。

細かく言えば、もうひと押しって所かな?

＞エリオ…そろそろ辞めとこっか?でないとティアキレちゃうから…＜

＞そうですね。さすがに危なそうですね＜

私はエリオに念話を送る。エリオとその横にいるキャロも同意してくれた。

まぁ、ミツ姉はティアが目指す所にいる人で私にとってのなのはさんみたいな人だから…

その人をああ言われちゃうと…怒っちゃうよね。普通。

私だって、なのはさんの事をああ言われちゃうと普通に怒るし…うん。

「あってるじゃねぇか？大体。」

えっ…？

私は即座にエリオとキャロを見る。

二人は僕らじゃないって顔してる。って、ティア！

ティアは立ち上がり周りに赤いオーラをだして、

「ちょっと…あのバカ潰してくる…」

って、ちょっとティア！まって！一体そのアンカーガンどっから持ってきたの？！

とティアを追おうと立ちがった所でふと自分のお皿を見ると…。

あーーーーーーー！！！私のスパゲティが無くなってるーーーー！！！！

ティアナ視点

私の後ろでスバルがスパゲティが無いって騒ぎだした。

まったく!早くあのバカに引導を渡してやらなきゃいけないって時にーー!!

私は、ハァーっとため息をして後ろをふりかえる。

だって、後ろから「ティア、ティア」って騒がれちゃたまんないでしょ。

どれどれ…あっ、ほんとだ。無くなってる。

「私のスパゲティ～（泣）」

涙目になってるスバル。エリオもキャロもえっ?といった表情。

私がスバルが使ってた小皿の辺りを見ていると…あれっ?なんか足が見える…。

「ふぅ～食った、食った!」

「あ～ーーーっ!」

スバルが何かに気づいたらしく小皿の横から何かをつまんで上に持ち上げた。

「よっ!スバル!久しぶり!」

ノア!!!

「あんた。私のスパゲティ食べたでしょ。」

「おう。うまかったぞ！」

スバルの目の前には、リイン曹長と同じサイズのミツキさんの使い魔（本人曰く）がケロっとした表情で挨拶してるし…。

ちなみに、外見イメージは、レベル7のサイコキノっていう超能力を使う小学生の女の子だって。

なにそれ？

いきなりのノアの登場に私の怒りはどこかに行ってしまい、その逆にノアにスパゲティを食べられたスバルがノアへの怒りを露わにしていた。

「私のスパゲティ返せ！！」

「まだあるからいいじゃねぇか。」

はいはい、ノアのいう通りスパゲティはまだあるから。それに話しが進まないから。

「むぅーーーーーーーーー！」

納得してないスバルを横に私はノアににエリオとキャロを紹介。

「むぅーーーーーー！」

「あたいは、陸士１０８部隊　？整備部技術開発室所属のノア陸曹だぁ。よろしくな！エリオにキャロ。それにフリード」

「よっ、よろしくお願いします！」

陸曹と聞いた時点で、エリオとキャロはまずいと思ったのか敬礼をしだす。

「エリオにキャロ。そんなに硬くならなくていいから、でしょ。ノア」

「ああ。固っ苦しいのは嫌いだから。それにさっきユウが言ってた事。大体あってるぞ。まぁ、悪い意味だけどな」

どうも私に気を使ったらしく、苦笑いしながら話すノア。

「でも、なんできたのよ。しかも、私のスパゲティまで食べて」

まだ根にもってるのね…。この子は。

「食べ物の恨みは恐ろしいんだから！」

はいはい。わかった、わかった。

「ティア…酷いよ…」

さて、話しを戻して。

「こっちの方にちょっとした用があってな。そのついでだ」

「用事って、ミツ姉に頼まれたの？」

「まぁ、そんなとこだ。」

スバルとノアが普通に会話してるように見えるけど実は、新たに大皿から取ったスパゲティをノア取られまいとスバルは小皿を守りながら喋ってるし。

「あの～ノアちゃんでいいかな？さっきのミツキさんの事だけど…もうちょと詳しく教えてほしいんだけど」

スバルの小皿にあるスパゲティをまた取ってやろうとしているノアにキャロが話しかける。

「？？？、ミツキの事？」

ノアは、エリオがユウが言ってた事を言いだした辺りに来たとのことでその前の私達の会話をノアに説明。

「そうだなぁ。ミツキは、明るくて優しいヤツなんだが、ヤリ過ぎちゃう所があってな」

確かに…。言われてみれば…。

「ユウは、そういった部分を誇張して言ってるにすぎねぇよ。ただし、あいつを怒らせなければな」

「つまり、怒んなければいい人って事ですか？」

「まっ、ざっくり言っちまえばな」

「でも、そんなにすぐ怒る人じゃないよ。ミツ姉って。」

「そうね。二人共いつもの通りしてたら、問題ないわよ」

「ミツキは基本子供好きで世話好きだからな。」

スバル、私、ノアの順でエリオとキャロの質問答える。二人もその内容にホッとしてるみたい。

ったく、二人によけいな不安を与えるんじゃないわよ！あのバカは！

やっぱり、今すぐ引導を…

ピピッーーーー！

何この音？

「あっ！わりぃ！これあたいだ！」

と言いつつ端末を取り出すノア。

「やっべー！もうこんな時間かよ！」

？？？を浮かべるあたし達。

「端末のアラーム機能だよ。あたいも色々と忙しくてな。スバル達と話すと楽しくってつい時間をわすれちまいそうでな。あらかじめ設定しといたんだ」

なるほどね。

「ミツキのヤツはあたいがいないと普通に無茶するからな。そいじ

や！」

といいつつ足元に魔法陣を展開。これって転送魔法？来るときもこれで来たって訳。

「ミツ姉によろしく言っといてね」

「おう！スバル達も無茶すんなよ！」

「ええ、ノアもね」

「おう！」

「「またね。ノアちゃん」」

「クキュー」

「まったなー！」

魔法陣の中に消えるノア。

まぁ、なんだかんだ言ってあの子もミツキさん同様に世話好きなんだから。

なんせ、忙しいくせにこっちに顔出すんくらいだから。

まっ、これはこれでありがたいと思わなくっちゃ。

「いっちゃったぁ」

「なんか、いきなり来てあっという間に帰ったような…」

「うん。びっくりしたね、フリード」

「クキュー」

ほんと。毎度の事ながらなれないわ。さて…私達もそろそろ…。

ピンポンパンポーン。

「スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士、エリオ・モンディアル三等陸士、キャロ・ル・ルシエ三等陸士。１３：００（ヒトサンマルマル）時に隊舎１階の玄関前に集合ですよぉ～」

？？？？を浮かべるあたし達。いったい何？

その7（後書き）

普通に食堂のシーンだけで終わってしまった…。次回はこの続きです。あっ…主人公出すの忘れた。

その8

その8

隊舎玄関前

「いったい何なんだろうね？」

現在、13時になる少し前。機動六課の新人フォワードの4名はリイン曹長がくるのを待っている。

「さあ？エリオとキャロはフェイト隊長からなんか聞いてる？」

「いえ。フェイトさんからは何にも」

「私もです」

スバルの問いに答えつつ、エリオとキャロにも確認するティアナ。

エリオとキャロもはティアナの問いに首を横にふりつつ答える。

「おー待たせですぅ！」

ティアナ視点

私達の後ろからリイン曹長の声がしたので全員振り返る。

「どうしたんですか？そのカッコ？」

「どうですか？似合ってますか？」

目の前に現れたリイン曹長は、いつもの陸士隊の制服が今日はなぜかバスガイドの格好をしている。

しかも、その制服の色は黄色…

「どうですか？」

答えを催促するリイン曹長。それに対し私達は

「か…」

「か？」

「「かわいい！！！！！」」

「とても似合ってますよ。リイン曹長」

「お持ち帰りしたいくらいですよ！リイン曹長」

「どうもです。それで…ティアナはどうですか？」

うっ…私だけ答えなかったのがバレた。

べ…別に可愛くないから答えなかった訳ではないのよ！

スバルとキャロみたいにしたくなかっただけ！

「と…とても似合ってますよ。リイン曹長」

「ありがとうです！」

「で。なんでバスガイドなんですか？」

やっと言わせてもらえた…。この疑問。

「新人の皆さんは初日から、訓練付けでしたのでオリエンテーションはまだだったので。それで、これからリインがオリエンテーションとして隊舎内をご案内するですよ～」

「それでバスガイド…ですか？」

「ハイです。」

なるほどそれで。

それにしても、リイン曹長が右手の持ってる…え～っとバスガイドさんがお客さんを案内する時に使うハタって言えばわかるかな？そのハタには「八神観光」って文字まで入っているし…

つまりは、細かいとこまでこだわってるって事？

と言うよりそこまでしなくても…って、思うわよね普通。

とまぁ、私がそんな疑問を抱いている最中スバルとキャロはリイン曹長を褒めまくってた。

「それでは、機動六課隊舎案内ツアースタートですぅ～」

ユウ視点

「ふぁ～～～あ」

「なんだなんだ。いい若いもんが昼間っから大あくびたぁ、いいご身分だな」

格納庫で配備されてるジープのオイル交換をしている最中。

その際、たまたま大あくびをした俺に整備斑の主任であるシゲさんが声をかけてきた。

「かんべんして下さいよ。デバイスの修理と調整で徹夜明けなんですから」

「なんだい。またあのスターズの二人かよ」

「ええ、まぁ」

「それにしても、そんなに壊れるもんかい？デバイスってヤツは？」

腕を組み疑問の声を上げるシゲさん。

「普通なら壊れませんよ。あの二人の場合、ここのハードな教導をあのボロボロのデバイスでやってますからねぇ」

「つまりは、そのツケをオメェさんが払ってるってわけかい？」

「まぁ、なのは様の命令なんで逆らう訳にも…」

ちなみに、ここに来てからもう完徹を3～5回くらいやってる。時間さえくれたら、なんとかなるんだが…

それを明日の教導までなんとかしろだと。

嫌味の一つもいいたくなるよ。まったく…。

「なのは様ねぇ…おまえは相変わらず…そういや、新デバイスの件はどうなった？」

苦笑いしながら質問も続けるシゲさん。

「うまくいってないみたいです」

さっきそれとなく様子を身にいったら半狂乱でしたよ…シャーリーさん。

「なんだい。オメェさんは参加してねぇのか？」

「声すらかかってませんよ」

なぜ、声をかけられてもいないのになぜ知ってるかと言えば…

こっそり教えてくれましたよ。シャーリーさんが。

スバル達には、内緒っていう条件付きですが。

どうやら驚かせたいようですよ、あの人達。

ちなみに、シゲさんにも内緒にしてもらってます。

「なんだ、それじゃオメエさん。のけ者にされてつまんねぇじゃないか？」

「いえいえ、今やってる事で精一杯ですよ」

まぁ、声かけられてもヤリませんけどね。

なんせ、スバルのあの魔法をデバイスから出せるようにしようなんて考えるあの人に、俺程度の知識じゃただ、足引っ張るだけだっつーの！

それに、手伝えたとしてもこんなもんじゃすまねぇからな。

そんなわかり切った事はしません。第一面倒だし。

ちなみに、今回シャーリーさんがやろうとしてる事を俺も挑戦したことがある。

しかも、お手本付きで。

結果は…

…

…

3日で挫折！！

ってか、難しすぎなんだよ！！あの先天魔法！！！

それをお手本なしでやろうとしているんだから、ほんとすごいよあの人。

だから、これ以上の文句は…だろ。

「まぁ、オメエさんがそれならそれでいいが、あんま無理すんなよ。オメエさんに倒れられても困るしな」

「へぇ～い」

じゃあな。と手を振りつつ、その場を離れるシゲさん。

まっ、ここの整備斑はシゲさんを筆頭に気さくな連中ばかりで助かったよ。

ただ…六課の場所が辺境地のせいか、格納庫の隅っこで干物だとつくるのはどうかとは思うけど…。

そこまで貧乏じゃねぇからな。ここの部隊…。

それはそれとして、俺がオイル交換をしてるジープに以外はＪ７０４式が1台と同型のジープが数台。

よっぽどヘリに金をかけたかったのかジープは、中古でもかなり古いものばかり…。

いいヤツは俺が今オイル交換しているヤツだけ。

まぁ、主に使う連中はただ走りゃいいって思ってるヤツ等ばかりだろうからこうなるんだろうが…。

ちなみに、その辺を考えたのかここの連中は俗に言うオタクに属するヤツ等を集めたようで。

だが、その辺の部隊にいる連中よりかは、そうとう出来る連中が集められてる。

まっ、かなり個性的な連中だけどな。

その個性的な連中が今何をしているかと言えば…

自分の仕事そっちのけでなんか作ってるよ。

さてと、俺は俺で作業を再開…。

「みなさ～ん。こちらですぅ～」

？？？！！なんだ？

黄色い制服着た…

小さいバスガイド？

その8（後書き）

やってみたかったネタの一つです。リインのバスガイド！
ちなみに、このネタはシリーズかしてみたいです。
リクエストがあれば、ぜひお願いします。

その9

その９

フォアードｓｉｄｅ

「それでは、機動六課隊舎案内ツアー！出発ですぅ～！！」

リイン曹長の号令と共に新人フォワードの隊舎案内ツアーが始まった。

「皆様～右手をご覧くださ～いですぅ～」

先頭をプカプカ浮かびながら進むリイン曹長。

まるで気分はバスガイドといった様子。

その後ろには、楽しそうな表情のスバル、エリオそして、なぜか恥ずかしそうな表情のキャロとティアナが続く。

＞ティアどうしたの？楽しくなさそうだけど＜

後ろの様子が気になったスバルがティアナの念話で声をかける。

＞あんた恥ずかしくないの？＜

パシャ。

＞何が？＜

スバルの答えにハァーと大きなため息をつくティアナ。

パシャ、パシャ。

＞ったくあんたは…周りをよくみなさい＜

？？？を浮かべつつ周りを見当たすスバル。

＞な…なにこれ～！＜

＞あ～んもう！スバルうっさい！＜

スバル達の周りには、いつの間にか人集りが出来ていた。

端末のカメラ機能を使って写真を取る人。

周りの同僚と共にキャッキャ騒ぐ人。

辺りはまるでお祭り騒ぎになっていた。

その原因はもちろん先頭の…。

「ちゃ～んと聞いてますかぁー！プンプン」

腰に手を当て後ろを振り向くリイン。

「き…聞いてます！ですが…」

「まずはこの状況…なんとかして貰えませんか？」

リインの問いにビックリした様子で答えるスバル。

そのスバルに続き恐る恐る状況の打開を促すエリオ。

その声に？を浮かべ周りの見回すリイン。そして、リイン達を囲むようにいる大勢の隊員達。

ポク。

ポク。

ポク。

チーン！

「むぅーーー！！みんな仕事するですーー！！！」

「「はっはい！すいませんでした！！！」」

リインの怒号に慌てて散開する隊員達。

「まったく！仕事をサボってなにをしてるんですか！リインはプンプンですぅ！」

腰に手を当てたまま怒りの様子をあらわにするリイン。

（その原因をつくったのはあんたでしょ）とジト目でその光景を見つめるスバル達。

「さっ！気を取り直して行きますよ～」

「「「「はっ…はい…」」」」

リインはスバル達のそんな様子を気にせず先へと進む。

（本当にここに来てよかったのか？）と疑問に思つつ返事をするスバル達。

そして、スバル達の疑問はそのまま流されてしまった。

その後も、リインも不可思議な案内に振り回されるスバル達。

例えば…

例1

「ここは、シャマルがいる医務室ですぅ！でもぉ！なるべくお世話になってほしくないのでスルーするですぅ！」

ズコーーー！

といい、医務室を通り過ぎるリイン。そして、医務室の中で大げさにコケるシャマル。

「はっ…はぁ…」

例2

「ここは、デバイスの開発と調整する部屋ですよ～」

「ただし…」

口に人さし指をあて静かにするよう促し部屋の中に聞き耳を立てさせるリイン。

すると…中から

「ふふふっ…あーしてこーして…」

…

…

…

「あーーーんもう！なんでうまくいかないのーーー！！」

「という具合いにシャーリーがご乱心の時があるから注意するですよーー！！」

「…はっ…はい…そうします」

などなど…。

リインなりに気をつけてほしい点などを言っているようで、それを教えることが出来上機嫌で先頭を突き進むのリイン。

その一方で、リインの説明に苦笑いするしかないスバルとエリオ。

いまいち理解出来ていないキャロ。

頭を抱え移動願いを書こうか本気で悩むティアナの姿が続く。

ｓｉｄｅ　？ｏｕｔ

ユウ視点

バスガイドの格好をしたリイン曹長に続き、なぜか疲れ切った表情のスバル達。

いったいなんなんだぁ？と思いつつ作業を続ける。

「ユウ！！ちょっとユウ！！」

なんだ？と思いつつアルトの声に作業を止め、ジープの下から顔を出す俺。

顔を出したら…あれ？なんかくらいぞ？あ…白

上をみたら顔を真っ赤にし下をみるティアナ。

そして、その足元にはえっ？マジ？と思う俺。ということは…やっぱり…。

ゲフッ！！

「ーーーーーー！！！！！こんのーー！！どすけべーーーー！！！！」

こら！なん度も俺の顔を踏むなー！こっちは身動きがとれないんだぞ！！

「うっさい！！だったらこのまま地獄に落なさい！いや！今すぐ落ちなさい！！！！！」

ゲシゲシ！

俺は悪くない！俺がたまたま頭を出した所にティアナのヤツがたってただけだ！！それをこいつは！！

「運が無かったとしか言えないね。今度こそちゃんと成仏してね。そして、私の枕元には出てこないでね。ナムナム」

アルトー！おまえ絶対狙ってたやっただろ！コレ！

「てぃ…ティアナさん…。」

「ユウさんなんか可哀想」

「エリオは絶対マネしちゃだめだよ。そして、コレは自業自得だからキャロは心配しなくていいんだよ。後、ユウ兄は私に近づかないで」

さっ、良い子は見ちゃだめだからこっちにいこー！といいつつエリオとキャロを連れその場を離れるジト目のスバル。

おまえらー！

その後、なんとか脱出した俺は次の日から女性隊員に白い目で見られる事となったのは言うまでもない。

一方、その頃リイン曹長と言えば…

「リイン曹長！こっち下さい！」

「ハイですぅ！」

パシャ

「次！こっちお願いしますリイン曹長！」

「ハイで～す！！」

パシャ

格納庫の隅で、機動六課整備班特製の撮影セットで整備班雄志による写真撮影会に臨んでいた。

つーか、てめえら！仕事放ったらかしにしてそんなもん作っとったんかい！

その9（後書き）

とりあえず、連続投稿！

こんなんでいいのかな？とも思いつつおきそうなネタを突っ込んでみました。

感想等ありましたらぜひお願いします。これからの作品作りの参考にしたいもので。

では次回。ファーストアラートどうしよう…。

その１０

その１０

地上本部　？執務室

ギンガ視点

「遅いなぁー。会議長引いてるのかな？」

私は今、地上本部にある執務室の一つでこの部屋の主の帰りを待っている。

あっ、言っとくけど誰かに呼ばれてって訳ではないわよ。

この部屋の主であるミツキさんの補佐官として、主の帰りを待ってるって事だからね。

えっ？ミツキさんってだれ？

う～ん…そうだな。

名前は、ミツキ・サエグサさん。簡単に言えば、この作品の主人公あるユウ・サエグサのお姉さん。

そして、普段は私と同じ陸士１０８部隊にて執務官兼整備部技術開発室室長として働いている。

でも、月に何度かこうして地上本部にて少将としても仕事をしている。

どうしてこうなったのかと言えば、元々執務官としてのその能力と手腕、そしてあくまでも趣味で作ったという様々な防衛システムの構築や魔導兵器の開発が買われて何度か誘われてはいたんだけど。

本人は自分には向いてないとか私やスバル、そしてユウの面倒を見るのを優先したいって事で辞退してたらしいんだけど。

そして、スバルが管理局に入局したのがきっかけでうちの父さんの説得、本人の意見なども考慮されこうなったの。

ちなみに、私が補佐官としているのは自分からミツキさんと父さんに頼んだの。

何故かって言えば、元々病気持ちの上に確か…4年くらい前だったかな?私とスバルが空港火災に巻き込まれるちょっと前に大けがしちゃって。

それでも、まだ完治してないのに色々と無茶するからその監視役として補佐官にしてもらったの。

だって普通に不安じゃない。

それに母さんが死んでから私達3人の面倒を一手にみてくれて。

その恩返しの意味も含んでいる。

あっ…面倒を見てたと言えばティアナもだったね。

ティアナとは、たまに外で会ってたみたい。

それで、陸士学校でスバルと同室になって初めて聞いた時には、おどろいたわよ。

それにこれはユウとスバル、そしてティアナにも頼まれた事なの。

ミツキさんに何かあったら頼むってね。

ガチャ

あっ…ナンダカンダ言ってるウチに帰って来た。

「た…ただいま…」

「お疲れ様です。少将」

入って来たミツキさんに声をかける。

「もう～…少将は辞めてって言ってるでしょ…」

「仕方がないですよ。そう呼ばないと私が怒られるんですから。今日だけ我慢して下さい」

勘弁してぇ～という顔をして執務室にある椅子に腰を降ろすミツキさん。

それにしても固っ苦しいのが嫌いなのは、サエグサの血筋なのかしか？

「どうでした?会議の方は?」

運んで来たお茶をデスクに置きつつ、ミツキさんが参加した会議の様子を聞いてみる。

「ダメねぇ。相変わらずの人が足りなって、あっちゃこっちゃで悲鳴が上がってるわよ。」

「そうですか…それじゃ機動六課への協力も…」

「そうね。どちらかと言えば後回しにされるわね」

機動六課。その所属は、地上本部ではなく本局でスバルとユウが現在所属している部署。

ただでさえ、元々地上本部と本局は仲が悪いのに…

つまり、六課の隊舎の近くにある周辺部隊が人が足りないのでいざという時は…援護、人員の増援など出来ない可能性が実しやかには囁かれてはいたが…

「まさか現実問題になるなんて…」

「まっ、はやての事だから想定内の事でしょ」

「そのためのエース部隊…」

ミツキさんの声に言葉が重くなる私…。

トントン。

「あっ、私出ます」

ミツキ視点

ギンガが声を落とした所でドアをノックする音がした。

その音にお仕事モードに切り替えたギンガが応対に向かう。

ギンガが暗くなるのも仕方がない。

なんせ、自分の家族がいる部隊に何かあってもその周辺の部隊は対し、増援等が出来ない可能性がありますよって事になるんだから。

そりゃ心配になる。

本当はなんとかしてあげたかったんだけど…。

「少将。お客様です」

応対から戻ったギンガの声が聞こえる。

やれやれ…またどこぞの昇進希望の方が、私を使って成り上がろうとでも考えて来たのかな？

それなり聞いてサッサと帰ってもらおう。

「ハイ、は～い…」

「なんや。相変わらず気のない返事やな」

？部屋の出口付近から聞こえる…　この関西弁…

「誰だっけ？」

「コラー！！！！ウチを忘れるなー！！ついこの間会ったやろ！！！」

「ダメだよギンガ。狸を中にいれちゃ。チャンと動物園に引き取って…」

「狸言うなー！！！！！」

「あれ？狸が喋ってる…これはもしかして…人間と狸を材料にして錬成を…」

「するかーーーーー！！！！！」

ハイハイ、相変わらずの全力投球だね。

後ろのギンガ達が普通に驚いちゃってるよ。

ほんとタイミングがいいというか…噂をすればなんとやらというか…

「こんなもんでいい？はやて」

「そなや。今日はこんくらいにしといたる」

といいつつ、姿勢を正して…

「改めましてお久しぶりぶりです。ミツキ・サエグサ少将閣下」

「お久しぶりです。八神二佐」

二人して挨拶し敬礼。面倒くさくてもこれはやらないと…。

「そちらは…」

はやてとの挨拶を終えふとその横目をやると…。

「初めまして。フェイト・T・ハラオウン執務官であります」

「ハラオウン？もしかして…クロノ提督の？」

「はい。兄をご存じで？」

「ええ。仕事などで何度か」

それぞれと挨拶を終えた二人を応対用のソファーに座るよう促す。

「で。いったい何の用？」

とりあえず挨拶も終わったんで普通のしゃべり方にもどす。

「とりあえず、六課設立の挨拶周りと…」

「もしかしてお願い関係？」

ギクッ！！！

ジト目ではやてに確認。

「まぁ、そんなところや…」

やっぱり…。

「とりあえず、話を聞きましょ」

「そやな。それじゃフェイトちゃん」

「うん。わかった」

話の内容は、ガジェットについて。

その対策などの協力要請。

といって捜査協力ではなく技術的な立場での協力と情報の共有。

細かく言えば、現在確認出来ているガジェットの情報交換と未確認のものが出た場合の分析。

それとガジェット、レリック関連についての情報共有。

最後に１０８と協力関係になった時にも同様に協力してほしとのこと。

はやて視点

フェイトちゃんの説明を一通り聞いたミツキはう～んとうなり考え込む。

「どやろ？ミツキ？」

まぁ、ウチ個人としてはスバルやユウを借りてるた上でこんなんお願いするのは心苦しいけど…

でも、現状だとミッドの地上に協力できるところが少ないウチらとしては、ミツキに協力してもらわんと色々とやり辛い所が出てくるんよ。

「あの？よろしいでしょうか？」

「いいよ。ギンガ」

ウチらの後ろで一緒に説明を聞いてたギンガが声をかけてきた。

「差し出がましいようで申し訳ございませんが、これはあくまでも技術的立場からという事でよろしいでしょうか？」

「その通りだよ。ギンガ？」

ギンガの質問にフェイトちゃんが笑顔で答える。でも、ギンガは真剣な表示。

「後から追加なんて事は…」

「どうしたの？ギンガそんな怖い顔して？」

ギンガの表情が少しづつ強張って行く。その表情の変化にフェイトちゃんは疑問の声をあげる。

「少し落ち着きなさい。ギンガ」

「でも、少将！」

「ギンガの言いたい事はわかっとる。あんたはミツキの事が心配なんやろ？」

ミツキの声にウチも続く。

「ええ。まぁ…」

そりゃそうや。

体調が今だに優れんミツキに対し、あれやコレやと次から次に要件を頼むヤツが多いって。

そういや、ユウも言っといたわ。

それに…最初は情報提供だけだったんやけど、その後散々こき使われて病院に担ぎ込まれたって事もあったってな…。

だって、ミツキとユウ。そして、ウチの師匠を筆頭にしたナカジマ家は家族みたいなもんなやもん。

心配にするわな。普通。

と少し考えたのちギンガに…。

「心配しないでええよ、ギンガ。ミツキには、今いった通りの事しか頼まへんよ。それ以外のミツキ関係については全部ユウに回すようにに話すでについとるから」

「なんやったら、後でユウに確認して見てもええよ」

「はい、わかりました。それと出しゃばった真似をしてしまい申し訳ございません」

頭を下げるギンガ。

「気にせんでええよ。それでどうやろ？ミツキ？」

「う～ん。そうだね。とりあえず、今持ってる情報は大体ユウに持たせてあるから、私が協力出来るとすればそれ以外のことがおきた時かなぁ～？」

「なんや。ユウに持たせとったんか？」

「そうよ。」

あんにゃろ～！！！

「まっ、あの子の事だから面倒くさがって出してないだろうけど？」

「そうですね。こっちが言わないと出しませんからね」

イラっとするウチに対し、やっぱりなぁという表情のミツキとギンガ。

やっぱついて来てへんなぁ～。フェイトちゃん。

頭の上に?????がイッパイや。

「了解や。とりあえず、なんかあったら連絡すると言う事で」

「だね」

と言いつつ、ミツキと握手し部屋を退室する。

とりあえず、帰ったらあのボケ事情聴取や！！

その１０（後書き）

ついにミツキの登場。いや～本当にどこで出すか迷ってました。とりあえずそれくらい重要なキャラであることだけと言っておきます。

その１１（前書き）

アルト視点

「え～っと、なになに。今回のお話は、前回から少し時間が経過し本編アニメの「ファーストアラート」終了後となります。そして、この場面は本編ではなく前書きになり本編はこれからになります？ちなみにおもしろそうだったのでやってみました」

って、またぁ～！！！あっ…まだつづきがある。

「最後に前書きだけにある特典があります？それは、今回のお話のタイトルコールが言える権利です！？そして、その最初の権利をアルトさんに進呈します。では、お願いします…」

だって…。え…マジ？…よっ…よし！それじゃ…

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～影の守護者はじまります」

その１１

その１１

部隊長室

はやて視点

「なんや？ウチとミツキの関係？」

部隊長室に書類を持ってきたシャーリーがふと聞いてきた。

「ええ。この間、地上本部にいった時にすごく仲がいいみたいだってフェイトさんがいってたもんで」

ああ。あの時の…。

「ミツキとは、ウチが１０８に指揮官研修にいった時からの付き合いやけど…」

それを聞いたシャーリーはへぇ～そうですか…となんや意味深な態度。

「なんや？その意味深な態度？もしかして…疑っとるんか？」

「いえいえ。そう言う訳では」

「それじゃどう言う訳や？」

ウチがちょっと強めに言ってみたら、シャーリーは観念した様子で。

「実は、このお話でまだ、部隊長とミツキさんの関係について一切触れられてませんでしたので…」

ずてーーーん!!!!!

「部隊長?そんなに椅子に座ったまま勢い良くひっくり返って大丈夫ですか?」

説明ありがとな、シャーリー。

「これもお約束やから問題ないで」

「それと…」

何?まだあるんか?

「ミツキさんとユウ君って一体いくつ何ですか?」

「フギャー!!!!!」

ズデーーーーーン!!!!!

「部隊長…。いくらお約束と言っても…同じ事をして今度は頭を打ったら元も子も…」

再びの説明ありがとな、シャーリー。

頭を抑えつつ、元に戻るウチ。なんやまだ、説明しとらんかったん

か…。

「そやな…確かミツキがウチのひとつ上の２０歳でユウが…ギンガと同い年で１７歳やったかな？」

再びへぇ～と言った表情のシャーリー。なんや？まだあるんか…。

ウチは再びひっくり返る態勢へ。

「期待されても今の所はありませんので」

「ないんかい！！！！！！」

グッジョブやシャーリー…。さすがお笑いを知っとる。

「それはそれとして、部隊長にお願いが…」

それはそれって、サラッと流しおったな。

ウチはボケを流された悲しみででる涙をグッと堪え、そのお願いってのは何なのか確認する。

「部隊長？泣いてなんかないですよね？」

シャーリー…。

いくらなんでもジト目はあかんて。

「いえ、そうしないと話しが進まないんで。それでお願いってのは、この間ユウ君もってたデータの中にあった…」

「例のお手本ってやつやな。それがどないしたん」

「ええ。そのお手本のお陰で大変作業がうまく行きましたんでそのお礼を言いたいんですが…見ず知らずの私がいきなり言うのも…」

「なる程なぁ～、それでウチを仲介してほしいって訳か」

「ええ。そうなんです」

「でも、それやったらユウに頼んだ方がええんやんか？」

当然の疑問やろ？なにせ姉弟やし。

「ええ。連絡してもらったんですが…」

「どないしたん？」

「それが…連絡した途端、いきなり説教がはじまってそれどこじゃなくなって…」

「説教？」

「ええ。通信がつながった途端に「あんたなにはやてと話勝手に進めてんの！！！って始まって」

シャーリーがミツキのマネをしながら話する。

もしかして、地上本部でギンガにいったあの事か？確かにあれは、ウチとユウの間で決めた事でミツキにはいっとらんかったけど…。

さすがにまずかったかな？

あっ…そういや、ミツキのヤツ無茶苦茶心配症やったのすっかり忘れとったわ。

ちなみに前回の話になるから、内容については省かせてもらうわ。

それにしてもさすが、同じメガネキャラ…。声はともかくとしても似とるわ…。確か作者もシャーリーとミツキのイメージの人を見くべて同じ事言っとったらしいし…。

「それで。ウチに…」

「はい。とても変われる状況ではなかったもんで」

右手の人差し指で頭をかきながら困った様子のシャーリー。

とはいえ、ユウであないな事になるって事はウチも…。

ウチの頭ん中で鬼の形相のミツキの姿が…

あかん、あかん！！このままではウチもユウの二の前や！！

なんか手は…スバルかティアナに頼もうにもあのお手本自体ふたりには内緒ってことになっとるし…。

「な～にやってるんだ？はやて？」

「うわーっ！！ノアか！！」

ウチがあれやこれや言っとるウチにいきなり現れたノアが声をかけてきた。

「うるせーな！そんなにでかい声ださんでも聞こえてるっての！！」

驚いたウチに耳を抑えながら声を荒げる。

「いきなり現れるからや！それにしても一体なんのようや？」

「いやなに、ユウからスバル達のデバイスが出来たってきいたから例のお手本返してもらおうとおもってなぁ」

助かったぁ！！！！

ウチはノアにシャーリーを紹介しその上で今シャーリーと話してた内容をノアに説明。

そしたら、すぐに連絡をとってくれたわ。今シャーリーと話とる。

「いえいえ。こちらこそユウ君にはお世話になりっぱなしで…」

（えーーーっあいつが！！！）

「ええ。スバルとティアナのデバイスの調整とか色々と」

なんや、まるでご近所のオバチャンの会話やな。

「はい。それじゃデータの方はノアちゃんにわたしておきます。それとスバルとティアナのバリアジャケット姿映像データで今度おく

りますんで」

（うん、お願いね。シャーリー。それとはやてに変わってもらえる？）

なんや？うちにか？

「なんや？ミツキ？」

（は～や～て～！！！！この間はギンガの前だから、黙ってたんだけど…！！！！」

画面の向こうには鬼の形相のミツキが…。

誰か助けてって、いつの間にかノアとシャーリーがいなくなっとるし！！！

それにもう終わりやて！！ちょ…ちょい待ち！！

いくらなんでもこのままオチつけんでいいんかい！

（はやて…これがオチだよ…）

そんなーーーーー！！！！！

その11（後書き）

ユウ
「おいコラ！作者」

作者
「なんでしょう？」

ユウ
「また俺の事出すの忘れただろ？」

作者
「それが何か？」

ユウ
「開き直んな！そもそも俺って主人公だよな！なんか他の作品より出番すくなくね？」

作者
「いや～。こういのもありかなぁ～って、てへぇ」

ユウ
「てへぇ、じゃねぇ！！！」

その１２

その１２

格納庫前

アルト視点

「ユウさ～ん。これでいいですか？」

「ちょっとまて、今見てやるから」

「はい！」

現在格納庫の前でエリオがユウの車のオイルを交換している所。

どうやら格納庫に見学にきてから車やここにある機材に興味を持ったらしく、あれからちょくちょく訪れては触りたがってた素振りを見せてはいたんだけど。

でもね、触らたいのは山々何だけども、さすがにここにあるジープやヘリなんかはいつ使うかわからないんで、素人のエリオに触れさせる訳にはいかないんだって。

それじゃ、いつも見る事しか出来ないのエリオがあまりにも可哀想だって事になってここにある機材等を触らせる代わりにユウの車のオイル交換をさせてるって訳。

とは言え、オイル交換と言っても、ユウが車のオイルを抜いておいたのをエリオが入れるだけという簡単なもの。

しかーし!!オイルをエンジンに溢しちゃうと、動かした時に室内にオイルの焦げた匂いが充満しちゃって臭くてたまんなくなるといった状態になるので、気は抜けない作業なのだ!!!

「って、おまえ誰に説明してんだ?」

へっ?ゆっ…ユウ?

もしかして今の…聞いて…

「聞いていたのなにも、おまえが誰もいない方向をみて身振り手振り説明してるからみんなおかしくなったんじゃないかって…」

えっ…?と思いつつ周りを見てみると周りにいた整備班のみんなが「何やってんだコイツ?」と言った目で私を見てるし…

「アハハハって、何でもないです。なんでも…あっ…ささっ、みんな作業に戻って戻って」

うわぁ~変なとこ見られた!!

とっ…とりあえず、なんかしなくちゃ!!

ユウ視点

何やってんだ?アイツ?

顔を真っ赤にしたアルトがあたふたしたしている姿をみつつ、エリオの元へと急ぐ。

「どれどれ」

と車のエンジンからオイルの量などを確認。

「よし！オッケーだエリオ！良く出来たな！」

といいつつ頭を撫でてやる。

「ありがとうございます！！」

頭をなでられてるエリオも褒められて嬉しいのか笑顔だ。

やっぱ子供はこうでなけりゃ。

ざわ、ざわっ…。

な…なんだ…この悪寒は…。

「ねぇ？ユウさん？」

俺が悪寒を感じているとエリオが声をかけてきた。

「なんだ？エリオ？」

「ユウさんの車ってジープのエンジンよりなんか色々ついてるみたいなんですが？」

「ああっ、これか？これは改造してるんだよ。この車」

「改造？」

？マークを浮かべるエリオに対しあれやこれや説明する。

内容については、ここで言ってもつまんねーだろうから省かせてもらうぜ。

とはいえ、あの見学ツアー以来ここにくるのはエリオだけ。後のＦＷ連中はよってもこない。

特にスバルとティアナとは、話もしてない。

まっ、あいつらも自分専用のデバイスが出来た事で前のデバイスの整備も不要となり俺もお役御免なった事で会わなくなったという事もあるのだが…。

ったく！整備班の連中のイタズラだって事をシゲさんから説明され仕組んだ連中が謝っても納得しとらんらしい。

ちなみに俺も渋々謝ってはみたが…。

それはともかくとして、俺の車の改造内容をエリオに簡単に説明した所

「つまり、普通の車より速く走れるって訳ですよね？」

「ああ、そうだぞ。」

「でもそんなに速くしてどこで走らせるんですか？」

俺の説明を聞いたエリオは、スピードをだせば制限速度を超えるから捕まるのでは？という当然の疑問にぶつかったらしい。

「一般道じゃださないぜ。捕まるから」

空いてる道ならスピードを出したいのは山々だがもし、捕まったら後が怖いからな。

「一体どこで？」

？？？を浮かべるエリオ。

「そうだな。例えばサーキットだとかだな」

「サーキット？」

「ああ、よく自動車のレースをしている所でたまに一般車も参加出来るレース大会をやってるんだ。そこでならスピード全開しても捕まる心配はないからな。」

「そっ、そんなのがあるんですか？」

「ああ、あるぞ。車メーカーの主催でな。今度休みがあったら一緒にいくか？」

「えっ、いいんですか？」

「ああ、いいぞ」

やったー！という表情喜ぶエリオ。それにしてもレースを見にいくだけでこんなに喜ぶもんか？そもそもコイツそんなに車に興味があると思えんが…。

エリオ視点

やったー！！！

えっ？なんでこんなに喜んでるかって？

えっとですね、僕の周りって女の人ばっかりなんですよ。それで、なんかするとどうしても女の子向きの話とか遊びになってしまうんです。

べっ…別にフェイトさん達やキャロやスバルさん、それにティアナさんが嫌いって訳ではないんです。

つ…つまりですね。僕としてはなんでもいいんで男の子の遊びやら話をしたい訳で…。

それで、そう望んでいる僕にとって今のユウさんが言ってくれた事はとてもうれしい事なんですよ！！

それに車や機械をいじるってのもそんなに嫌いって訳ではないし、何よりもレースがどんなものか興味があるし。

「そんなにうれしいのか？」

とかなんとか思っていたら、ユウさんが僕の嬉しそうな様子をみて聞いてみた。

「もちろんです！僕自動車レースがどんな物なのかみた事がないんでとても楽しみです」

「なるほどな、ならよかった」

「はい」

ユウ視点

「はい」

とエリオの元気がいい返事を聞いたところで…

ざわ、ざわっ…ざわ、ざわっ…

悪寒キターーー！！

一体なんなんだ！この背中からくる殺気みたいな悪寒は！

目の前では満面の笑みで工具やらの片付けを始めるエリオ。

俺が後ろを見てみるが誰もいない？

…。

…。

どうしたらいいもんだろうか…。

後ろを振り返ってみれば、慌てて隠れる人の姿が…

それも余程あわてたんだろうな。隠れた場所が建物の影や木の後ろではなく、背の低い街路樹の後ろ。

まさに頭隠してってヤツ。

確かあの人って…。。

「ユウさん!!片付け終わりました～!!」

「おう!それじゃ洗車でもするか!」

「はい!!」

まぁ、後ろにいる金髪のあの人にツッコミを入れたいのは山々だがエリオを待たせる訳にはいかんからな。仕方がない。次回まで放置とするか。

さて、ここで問題!

今背の低い街路樹に隠れてる人は誰でしょう!

答えがわかった方はこの下の感想欄の一言に書いて送信して下さい、その時一緒に感想を頂ければ幸いです。って俺に言わせるな!

その１２（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか。今回ちょっとした問題をだして見ました。
答えがわかった方は感想にある一言に記載して送信して下さい。答えについは次回本編にて明らかにしたいとおもいます。

ちなみに、このサイトにユーザー登録されていない方でも送信出来るようにしておりますし一言だけの記載でも送信できます。

もしよろしければ感想等も頂ければ幸いです。

注意点としては、今回の問題についてやこの作品以外の事については一切お断りいたします。

では次回。

その１３（前書き）

前回のクイズの解答編です。

その１３

その１３

？？？？視点

フゥ～危ない危ない。

危うくバレるところだったわ。

私は現在、格納庫の近くの街路樹に隠れています。

どうしてかって？

それはもちろん、最近エリオが一人で格納庫に通っているってキャロが言ってたから心配に…。

「ユウさ～ん！準備ができました～！！」

「おう！わかった！」

私の目の先では、エリオが誰かの車の洗車を始めてている。

どうやら、ユウ君がエリオにさっきからあれやこれや教えてるみたい。

それにしても…ああっ…なんてかわいい笑顔なの？

かわいい…

とっても可愛いよ…エリオ。

目の前の光景にうっとりしてしまう。

でもどうして?私には今まであんなにはしゃいだ表情なんて見せてくれなかったじゃない。

「うまいじゃないか?エリオ。」

「ありがとうございます。」

エリオを褒めつつ、頭をなでるユウ君。

エリオは満面の笑みを見せてる。

やっぱり原因はヤツなのね…。

ヤツが私のエリオを奪おうとしてるのね…。

ゆるなさい…。

ゆるなさいわよ…。

ユウ・サエグサ…。

ゴゴゴゴォ…。

私の中に黒い何かが広がって行く。
ヤツを殺せと轟き叫んでるの…。
「な～にやってんだ?フェイト隊長?」
へっ?

シゲ視点

ユウとエリオが洗車してるすぐ近くで街路樹に隠れたフェイト隊長がほんわかしたり殺気を出したりなんだか忙しそうにしてたんだが…。
「し…シゲさん?」
「あのよ～。お忙しいとこ悪いんだけど、セットアップして攻撃態勢をとるのやめてくれませんかね?」
へっ?という表情のフェイト隊長。
その姿は、執務官の制服からバリアジャケット姿に変わっている。
ちなみにいっとくけど今ユウとエリオは水汲みに行ってここにはいないのを確認してから声をかけてるからな。
いくらなんでもそういった配慮はしねえとな。後が恐いからよ。
とりあえず、元の制服姿に戻ってもらって近くの芝生へと移動。

「それにしてもいったいどうしたんですか？」

「えっとですね…」

フェイト隊長はモジモジしながらどうしてあそこにいたのかを説明そてもらい、俺はエリオがなんで作業をしているかを説明。

「それでエリオは…なんであんなうれしそうに…」

「さあ？」

俺は両手を上げてお手上げのポーズ。

だってそうだろ？俺はエリオにそんな事聞いてねぇんだし。

「さぁって？」

声を荒げるフェイト隊長。

「そんなに興奮されてもこまりますよ」

「あっ…すいません」

我に帰ったのか再びシュンとなるフェイト隊長。

どうやら、エリオが心配というよりエリオがどうしてあんなに楽しんでるのかが知りたいらしい。

やれやれ…それにしてもどうしたもんか…。

ユウやエリオ本人に聞くように言っても、あ～でもない、こ～でもないと言って聞こうとしない。

それに本人としては、このままある意味エリオをストーキング…もとい尾行をして確認したいらしい。

だが、それをされるといつ格納庫が破壊されるかわからんし、部隊長に言おうにもあの人の事だ…面白がってフェイト隊長の後をつけまわすだろうし…。

まっ、ユウの事は心配してねぇが

「してくれよ！仮にも上司だろうが一応！」

なんて、電波がきそうな勢いだがおめえさんと格納庫を天秤にかけたら１００人中１００人が格納庫っていうだろうよ。

「んなわけねぇだろ！」

とは言えこのままじゃ話しが進まねぇから…。

「まぁ、なんだぁ。エリオだってまだ子供だからなぁ、色んなモンに興味を持つだろうし…。親の知らないところ覚えるなんて、誰だってやるだろう？それを見守るのも親の…」

「そうよ。だから危ないのよ…私のエリオがそんな危ないことを…」

おいおい…。オイルを入れただけの事のどこが危ねぇんだよ？それよりもいつもあいつらがやってる訓練の方がよっぽどあぶねぇだろ？

芝生に座っていたフェイト隊長はいつの間にか立ち上がり祈るような格好で天を仰いだ。

その内容を聞く限り訓練については自分やなのは隊長とか見ているから問題ないだと…。

つまり、自分やなのは隊長などがいないところで知らない事をする事がフェイト隊長にとっては危ない事らしい。

どうやらとんだ親バカらしい…。

頭を抱える俺の横で

「そうよ！なら一緒に私も童心に戻っていっしょにやればいいのよ！ありがとう！シゲさん！」

「はっ…はぁ…」

といいつつ、ダッシュでその場から離れるフェイト隊長。いったいどうやったらそんな答えが出るんだ？

誰か教えてくれよ？

ユウ視点

「エリオー！！！！」

「ふぇ…フェイトさん？」

「私も混ぜて～～～～！！」

俺とエリオは洗車をしていたが、それがいつの間にか水の掛け合いになっていた。

といっても、それを仕掛けたのは俺だけどな。

なんせ、ただ洗車するだけじゃ面白くねぇからな。

と言う訳で俺とエリオの制服はびしょ濡れ。

お互いにどこから持ってきたのか水風船やら大量に用意した水を入れたバケツを駆使して水をかけあってる。

尚、ルールとしては魔法の使用は禁止。ギブアップすれば終了という至って単純なルール。

勝負は今のところ互角。

お互いにチャンスを待っていた状況で不意に聞こえたフェイト隊長の声。

エリオはその声を聞き後ろを振り向く。

まさにチャンス当来！

大人気ないなんていわせんぞ！勝負の世界とは厳しいんだよ！エリオ！

「くらえ～！！！！！」

「しっ…しまった！」

おれは水の入ったバケツを持ちエリオに近ずき水をかけようとする。

が…。

「なっ…」

足元にあった石につまづきバケツを手放してしまう。

バシャーーー。

手放したバケツはどうなったって？

「ふぇ…フェイトさん。大丈夫ですか？」

恐れ慄くエリオ。

そりゃそうだろ。

なんせ、手放したバケツはもののみごとしにフェイト隊長が頭からかぶってるんだもんな。

「ユウく～～～～ん！！！」

その後どうなったって？当然フェイト隊長に追い回されたよ。

「すいませ～～～～ん！！！」

「待てぇ～～～～～！！！！」

無論、俺だけ。

その１３（後書き）

と言う訳で答えはフェイトでした！！

ベタでしたね。

とは言え、どうしてもフェイトの親バカっぷりを暴走させたかったのでこうなりました。

いかがだったでしょうか？

尚、またどこかでクイズをやりたいと考えてますのでこれに懲りずに参加していただければ幸いです。

解答を頂いたみなさんどうもありがとうございました。

では次回。

その１４（前書き）

はやて視点

はぁ～～～…

ウチは今六課の隊舎の周りを散歩中。

なんでかって言えば、いわゆる気分転換やな。

いつも書類整理やなんやで部屋の中に篭りっぱなしやからたまには外でって事なんやけど…

…たーすーけーてー…

なんや？ウチの前の方からなんか声が…

「だっ誰か止めて～～！！！！」

！！！

なんや！前からバナナの皮に乗ったフェイトちゃんが…

ごちーーーーーーん！！

いったい…なんや？これ？

その１４

その１４

はやて視点

「んで！どうしてこうなったんや！」

「えっ…と…それは…」

正座をしながらモジモジとするフェイトちゃん。

ウチはと言うとフェイトちゃんの前に仁王立ち。

そりゃそうやろ！なんせウチが散歩しとったら、前からイルカに乗った少年ならぬバナナの皮に乗ったフェイトちゃんが現れてウチと正面衝突やからな。

ちなみに、ウチの頭の上にはいつもより三割増しのタンコブが鎮座しとる。

まだヒリヒリしとるわ。

そんなこんな説明しとる間もフェイトちゃんはモジモジ…モジモジ

モジモジ～モジモジ

「ええ～い！！はっきりせんかー！！」

「はっ！はい！」

ビシッとするフェイトちゃん。

さて…詳しく話してもらおうか…フェイトちゃん…

フェイト視点

私の前には仁王立ちしたはやてがいる。

そして、はやてに事の類末を話す。

そう…

事の始まりは前回のユウとの間でのあの追いかけっこ。

エリオと童心に帰って一緒に遊ぼうとした時に不意に襲ってきた水の入ったバケツ…。

我を失った私は、その原因を作った張本人を追いかけた。

そう…私とエリオとの大切な時間を奪ったユウ君に「お話」をするはずだった。

～回想～

「待ちなさ～い！」

「バケツをかけた事は謝ります！ですが、お話は勘弁してくれ～！」

「問答無用！バルディッシュ！」

＞ソニック・ムーヴ＜

以外と逃げ足の速いユウ君に対し、私はソニック・ムーヴを使って彼の前に回りこんだ。

「さぁ…お話しようか！！！」

「げぇっ！！！！な～んてな」

ぐちゃ…。

「えっ…」

彼の前に回り込んだその時着地した靴のしたにはなぜかバナナの皮が…

「ウソ～～～～～！！！」

何があったかと言えば、バナナの皮踏んでそのまま滑ってしまったのだ。

そのまま転んだ方がよかったんだろう…。

でも、転びたくなかった私はなんとかバランスをとってその場を凌ごうとした。

だって、滑っている間に彼をみたら…

「バイバ～イ」

って、手を振ってる手とは別の手にはバナナの皮と滑りやすくするためのワックスがあったし…

しかも、滑っているバナナの皮のしたには魔法で出来た氷の道…

それに、あの憎たらしい笑顔…。

～回想ｅｎｄ～

思い出しただけで腹が立つ！！

「そして、そのまま滑ったまんまウチとぶつかったって訳やな…」

「はい…そうです…」

怒りの態度を露わにする私を一蹴するはやて。

状況を確認した彼女は少し悩んだ後に

「なるほどな～。確かにこの原因を作ったのはあいつやな」

でしょでしょ。

そう！悪いのはあいつで…

「でもな…ひとつ聞いてもええかフェイトちゃん」

「えっ？なに？」

私は、はやてが状況を理解してくれたんだ！って思ってホッとした。

でも、次の瞬間…

「なぁ、フェイトちゃん？今日って確か外回りしとるんじゃなかったっけ？」

えっ…。

「それなのになんで今ここにいるん？」

ま…まずい…。

どうしてかと言えば…

「まさか、エリオを監視するためにワザと嘘をついとったなんて言わへんよな…」

ぎくぅーーーーー！！！

「図星…やな…」

「は…はやて…これには…なんと言うか、エリオが心配で…だって！危ないじゃ…」

「オイルを入れるだけのどこが危ないんや…？」

なんで知ってるの？

私は疑問の顔をしているとはやてがニヤリとした表情をして

「実を言うとなぁ、エリオが格納庫に何度も来とって手伝いたい～！見たいな態度だったんでなんかさせて上げたい！ってシゲさんがユウやアルトから相談をうけてるって報告と相談があってなぁ。」

淡々と話すはやて。

「それで、個人もんやったらオイル入れさすくらいええよってウチが許可したんよ」

へっ？嘘？

「ほんとなんよ。でもまぁ、まさかフェイトちゃんが監視しとったとはなぁ…」

「そ…それは何と言うか…でも！！」

「でも？…でもなんやの？フェイトちゃん？」

私は意を決しはやてに言った。

「確かに嘘をついてた事は、謝るけどそもそもこの事態を起こした

のはあいつなんだから！！」

私は、正座の状態から上体をあげはやてに向かって意見する。自分の正統性を認めてもらうために。

「そうやな。いくらなんでも今回のはちょっとばかりやりすぎやな」

「じゃ…じゃあ…」

腕を組んで仁王立ちの姿勢をくずさないはやて。

私はある確信を持ちつつ、はやての次の言葉を待つ。

「でもな、フェイトちゃん。それはそれ！これはこれ…や」

えっ？

？？？？

「確かにウチとフェイトちゃんがぶつかった原因を作ったのは、ユウや。あれはやりすぎや。それについては、後でシゲさんにでもコッテリ絞ってもらうつもりや。」

「そんでウチが怒ってるんのは、仕事ほっぽり出してフェイトちゃんは何しとるんやってことや…」

そっ…そっちの事…ね…。

「そうや…。さて…フェイトちゃんも理解してもらったところで…」

はやて…どうしたの？なんかいつもと違うよ…。

「そやな…なんせ、いつもお話される側やからなぁ～。たまにはする側ってのもええなぁ～」

は…はやて…なれない事はしない方が…。それにはやてってリインちゃんがいないと…。

「それなら問題あらへんよ。なぁ…シャーリー…」

＞はぁ～い。リイン曹長の代わりはばっちり任せて下さい！＜

はやての声に合わせるかのように画面が開いたかと思えば、その画面にはすでに臨戦態勢が整った様子のシャーリーの姿が…。

く…黒い…それにメガネがキラーンって…。

まるで、某侵略宇宙人の開発担当のようなオーラを身に纏っているような…それに「ククククー」って…。

まずい！！いくらなんでもこれじゃ…

生命の危機を感じた私は逃げようとした。そうした瞬間…。

「バ…バインドーーー！！」

「あかんよ～フェイトちゃん…。こういうのはキチンとうけなぁ…お笑いの基本や…」

その場を逃げようとした私をまるで見透かしたようにバインドをか

けるはやて。そして、セットアップはすでに完了済み…。

そして…やっぱ黒い！！！！！！

「さぁ…フェイトちゃん…。少し頭…冷やそうか…」

ドゴーーーーーーーーん！！！！！

「ごめんなさ～～～～い！！！！！」

そのお話の後、ドクロマークの形をしたキノコ雲が上がったような…上がらなかったような…。

次回に続く…？？

その１４（後書き）

ふぅ～～～。

とりあえず今回はこんな感じですがいがでしょうか？

前回の話を少しひっぱる形にはなりましたがこれはこれでいいかなと思ってます。

さて…そろそろ原作を絡ませないといけなさそうな…。

とりあえず、鳴海にいってもらいますかな？

祝！！5万HiT特別編（前書き）

作者
「え～日頃この作品を読んで頂きありがとうございます。前回の更新を持ちましてPVが5万HiTを超えました！！これはひとえに皆様のおかげです。ありがとうございました！」

作者
「今回は特別編と銘打ちまして登場人物達が行っているパーティー会場に盗聴機と隠しカメラをセットしてみました。」

作者
「さて…どうなることやら…」

作者
「それでは、魔法少女リリカルなのはStrikerS～影の守護者特別編！！始まります」

祝！！5万HiT特別編

祝！5万HiT特別編

作者
「え～本日は、5万HiT記念パーティーにお集まりいただき誠にありがとうございます。本日は、日頃の慰労を込めて誠にささやかながらこのような場を用意させて頂きました。皆様楽しんでいって下さい！」

作者
「それでは、カンパーイ」

「「「カンパーイ！！」」」

作者視点

会場には、沢山の料理が山のように用意されている。作者による乾杯の音頭とともに、各々が談笑をしている。

さて、パーティー会場とは別に用意した個室に移りました。これからこの作品の登場人物達がどんな事を話しているか？早速、会場内にセットした盗聴機からその内容に聞き耳を立ててみましょう。

ガツガツ…ガツガツ…

ティアナ

「スバル…あんたね…」

スバル
「ふぁあにぃ？ふぃあ？（なに？ティア？）」

ティアナ
「あんた！こんなところでガッツかない！それに口の中に物を入れながらしゃべらない！！ってなんどいったらわかるの？」

ギンガ
「そうだよ。スバル。お行儀が悪いわよ」

スバル
「だっ…てぇ～～～お腹すいてるんだし～～おいしいからつい…」

どうやら、ギンガさんとティアナさんがスバルさんの行儀が悪い行動を注意してるようです。それにしてもスバルさんの食欲…やっぱりすごいですね。周りの関係者は口をあんぐりしてます。

フェイト
「はい。エリオ、あ～ん」

エリオ
「ふぇ…フェイトさん。いくらなんでもこんなところじゃ恥ずかしいですよ」

フェイト
「そんなことないよ、エリオ。はい、あ～～ん」

こちらは、フェイトさんとエリオですか…どうやら、スプーンによそったオムライスをエリオに口に入れようとしているようですが…。

盗聴機と一緒にカメラも仕込んでおいたのですが、その映像を見る限り、フェイトさんの周りはお花畑がいっぱいです。対するエリオは、どうやら恥ずかしそうですが…。

あっ…。エリオが今折れました！

フェイト
「エリオ？どう？」

エリオ
「モグモグ…はい…おいしいです」

フェイト
「ほんと～～～！！！！」（フェイトの周りの更なるお花畑が登場。尚、当社比3倍）

フェイト
「次はキャロね。はい、あ～～～ん」

キャロ
「あ～～～ん。モグモグ…おいしいですフェイトさん」

フェイト
「ほんと～～～！！」（フェイトの周りにさらなるお花畑が登場。当社比6倍…）

相変わらずの暴走っぷりですね…。さて…お次は？

ヴィータ
「なのは?なに落ち込んでんだ?」

なのは
「だって…。出番ないんだもん…。アニメでは、主役なのに…ヒック」

今度は、なのはさんとヴィータさんですか…。でも、なのはさんなんか変ですね?

ヴィータ
「出番がないって、そりゃ私やシグナム達だって同じだぞ?」

なのは
「そりゃ…そうだけど…でもどうしてフェイトちゃんやはやてちゃんは出番があって普通に出てるのにヒック!…どうして私だけお話での登場しかないのよ~~~~!!!!」

ヴィータ
「そんなこと言われても…ってなのはおまえ何飲んでんだ!」

なのは
「へっ?これって…お水でしょ?それよりも、私の話しを~~~~」

ヴィータ
「水じゃねぇよ!これお酒だよ!!って泣きながら抱きつくなーー!!誰だぁ!!!なのはに酒渡したヤツはーーーー!!!」

いっときますが、私ではありません。

シャマル
「あれ?それお酒だったの?私はてっきりお水だと…（フッフッフ…。な～んてね。だって私なんか転んだだけだもん。こうでもしないと次何時出られるかわからなし…。）

ヴィータ
「シャマルーー！！！」

なのは
「ヴィータちゃん！わらしの話を～ヒック」

ザフィーラ
「シャマル…お前ワザとだろ…」

シグナム
「間違いないな…。だが、シャマルの料理を食べさせられるよりはまし…だな」

ザフィーラ
「…だな…」

どうやら、シャマルさんが仕込んだようです…。

状況としては、なのはさんすでに泥酔モードでヴィータさんに抱きついてます。その光景をみたシグナムさんとザフィーラさんが頭をかかえてます。

さて、なのはさん達より少し離れた所では、ゲンヤさんとヴァイスさんとシゲさんが一緒に飲んでますが…そこは地味なんでスルーで

すね。

ゲンヤａｎｄヴァイスａｎｄシゲ
「「「おいーーーー！！！」」」

さて、お次は…。

シャーリー
「それでこの部分ってどうなるんですか？」

ミツキ
「あっ、ここはね。あ～してこ～すればいいんだよ」

シャーリー
「なるほど！！そうなんですか！」

リイン
「ねぇ、ノア？」

ノア
「なんだよ。」

リイン
「シャーリーとミツキさんが話している内容ってわかります？」

ノア
「わかるわけねぇだろ…あんなマニアックな話」

どいやらシャーリーさんとミツキさんがデバイスについてのマニアックな話をしているようです。

聞いてて、何をいってるのかわかりません…。

ミツキ
「でね！ここをあ～してこ～すると…」

シャーリー
「凄いですね！！これ今度試してもいいですか？」

ミツキ
「うん、いいよ。やってみてよ」

シャーリー
「ありがとうございます！！」

二人だけで盛り上がってます…。

次行きましょう！次！！

はやて
「おおっ！なんやなんや！ユウとアルトないの！二人っきりで何しとるん！！」

アルト
「何してるって…普通に話してるだけ…ですが？」

はやて
「ほんまかー？」

アルト

「ほんとですよーー!!だって同期ですし…ねぇ!ユウ?」

ユウ
「大丈夫ですよ、ちび狸さん。期待するようなことはありませんから」

はやて
「なんや~それは期待して損したなぁ~ってあんた今ウチの事ちび狸っていうたやろ!!」

ユウ
「いいえ~聞き間違いじゃないですか?俺はちゃんと部隊長っていいましたよ?なぁ、アルト?」

アルト
「うっ…(こんな所で私に振ってくるーー!!っていうか、どうやったらちび狸が部隊長って聞こえるのよーー!!私にいったいどうしろと!!)」

普通に動揺してますね。アルトさん…そりゃまぁ、仕方がありませんね…。あっ…はやてが話を戻したようです。珍しい…。

はやて
「まったくあんたは~。そんで?同期の2人がなんでいっしょなん?」

なるほど~!どうやら2人関係の方がはやてさんにとっては気になようですね。それはこっちも気になります。

ユウ

「どうしたもこうしたも今さっきあって、普通に話しただけですよ」

アルト
「そっ…そうですよ！何にもないですよ～部隊長」

はやて
「ほんまか～」

はやてさん…アルトさんが顔を赤くしてるのが気になって仕方がないんですね。一方のユウと言えば…

ユウ
「ほんとですよ。だぁれがこんなヤツと好き好んでいっしょいたりなんて…。

アルト
「だぁれがこんなヤツですって！！！！！」

あっ…やっちゃいましたね…。アルトさん普通怒ってます。

ユウ
「なっ…何そんなに怒って…それにそのハンマーって…」

はやて
「おおっ！それは、地球の裏世界ナンバーワンのスイーパーでも恐れる伝説の１００ｔハンマー！！」

ユウ
「ちょ…ちょっと待て！！なんでお前がそんなもん持って…」

あっ…それさっき私が渡しておきました。そろそろ終わりなんで。

ユウ
「お前～～～～！！！！なんてもん渡してるんだ！！！」

いや～～～アルトさんだったら似合うかなーっ思いまして

ユウ
「ってぇまたいつもの思いつきかぁーーー！！あっ…アルト…話せばわ…」

アルト
「問答無用！！！！往生せいや！！！！このバカーーーー！！！！」

ドゴーーーーン！！！！

アルト
「ふん！！」

アルトさんはハンマーを担いでその場をヅカヅカ足音を鳴らしながらその場を離れていきます。

ユウ
「なっ…なんでこんな目に…」

ガクッ…

自業自得ですよ。ユウ

はやて

「まさにアルトを怒らせたら怖いっちゅうことやね」

ミツキ
「だね…。」

とまぁ、こんな感じでパーティはお開きとなりました。なんかグダグダな感じにはなってしまいますたが、いかがでしたでしょうか？

これからもこんな感じにはなりますが、なんとかやっていきたい思っておりますのでどうかよろしくお願いします。

祝！！5万HiT特別編（後書き）

特別編いががでしたでしょうか？

ちなみにネタ元はむかしラジオで一件バーでいろんなゲストの方が話しているのに聞き耳を立てて話を聞くといった設定の番組とテレビでよくやってるドッキリ企画をミックスしてみました。

次回は元に戻しておはなしを進めたいと思っています。

ではまた…。

その15

陸士１０８部隊　技術開発室

ミツキ視点

「ふぅ～これでおしまいっと」

現在時刻は午後の9時をちょっとまわったところ

私は自分のオフィスにて溜まりに溜まっている書類の作成を今ようやく終えたところ

なんせ、その書類ってのが技術開発室がらみのものだけならいいんだけど
それ以外にも執務官としての法務関係の書類と少将としてあがってくる書類やら
特に今月は結構な量がまとめて来たもんで今の今まで時間がかかっちゃたんだけど…

普段は執務官関係なんて特にこないのに…まったく…

トントン

「???は～い」

私のぼやきが終わったところでドアをノックする音が…

「なんだ？まだいたのか？」

「仕事が溜まってたんですよ。それにしても確かギンガとはやてと一緒に食事に言ってたんじゃないんですか？ゲンヤさん？」

入ってきたのはここの部隊長のゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。

通称古狸。

いっつもとぼけているようで意外と頼りになるウチのお隣さんであり、奥さんを事故で失ってから男一人で2人の娘を育てた苦労人と周囲には思われている。

が、実際は家事の大半とスバルとギンガの面倒は私とノアでやってたんだけど…。

「おいおい…。そこまでいう必要はねぇだろうよ。それに意外ってなぁ…」

「まぁまぁ。頼りにしているのは本当ですから」

「それならそれでいいんだが…」

「それで？食事の方は？」

話がそれてしまったので元に戻し再度質問すると

「そりゃなぁ、食事している最中に八神のところにハラオンの嬢ちゃんから電話があってな。何でもがジェットについての重要な証拠をつかんだらしくてな。それで緊急に会議することになったらしく

て途中で帰っちまってな。それでギンガと二人で食事をすませて帰る前に家に連絡してみりゃ、ノアしかいねぇってことがわかってな。ギンガ先に帰してこっちに戻ってきたって訳だ。」

「戻ってってきたって…そのまま帰ってもよかったのに…」

「なぁに言ってんだ…。要するに陣中見舞いだ。ほれおみやげ」

といってゲンヤさんが来る途中で買ってきたのであろう、缶コーヒーやミネラルウォーターなどの入ったビニール袋を差し出した。

「そりゃどうも」

といいつつ、袋の中から缶コーヒーを取り出し蓋を開け一口。

「それにしても、なんだこりゃ？」

ゲンヤさんも缶コーヒーを取り出し飲みながら私のデスクにある開きっぱなしの画面を覗き込む。

「あっそれですか？ちょうどよかった。ちょっと相談してもいいですか？」

「相談？いったいなんだ？」

？？？？を浮かべるゲンヤさんに私は話を続ける。

「まずこの画面なんですが、今日チョット地上本部によばれたんですけど」

「地上本部に？」

「ええ、以前私が作った防衛システムのメンテナンスに。それでその時一緒にサーバーにハッキングされていないかみてみたんですけど…」

「それで？」

「ハッキング自体はなかったんですけど、本局にある複数の端末から個人情報の閲覧が表示されていたんですよ。」

「？？？それのどこがこれにつながるんだ？」

「普通に見るだけなら問題はないんですけどこれ見てください。」

といって今開いている画面とは別の画面を開く。

「おい…こりゃ…」

画面に表示されたのは、その端末に表示された個人情報のリスト。人数はおよそ１００人程。

その中身は、管理局に所属する上層部の名前…それだけならまだましなんだけど…。

「なんでこの中にスバルやギンガの名前が…それに…こりゃ八神んとこの前線部隊の名前が全員のってるじゃねぇか？」

ゲンヤ視点

「ええ。実を言うとそこが気になってて…。」

といいかけたとこで言葉を詰まられるミツキ。

「どう気になるんだ?」

続きを急かす形になってしまったが、そうしとかねぇとこいつは一人勝手に動いちまうからな。

少し考えた様子…というより現時点での考えをまとめたって所だな。

少し時間を置いてミツキが話を続ける。

「気になることとってのは、これが始まったのってスバル達が初出動を終えたすぐ後からなんですよ。それも…ギンガとスバル、エリオ・モンディアル三等陸士とフェイト・T・ハラオウン執務官の4名については何度も表示されてるんですよ。」

「何度も?」

おいおい…その画面を見てたヤツってのは、うちの娘のファンかなんかか?

ジトーーーーーーーーーーーーー。

じょ…冗談だよ!冗談!そんな怖い目でみなくても…。

「まったく…。それで、その４人のが一番多くてその次がはやて達機動六課の隊長や副隊長…その後に管理局の上層部の連中ってな具合になんか変なんですよ。まぁ、閲覧がロックされてる部分までは見られてはいないんですが…」

「それで…それだけじゃねぇんだろ？」

その程度のことでこいつが気にするはずもねぇもんな。今のうちに出させておかないと…。

でねぇと後が怖いんだよ。特にウチの娘達なんかうちのかみさんに似たせいか怒ったら手加減なしなんだぜ。

俺はただの人間だってのに…。

それにこいつにゃ娘達の面倒やら任せっぱなしだったし、色んなもんを背をわされちまってるからな。

少しでもこいつの肩の荷を楽にしてやらなきゃならん。

まっ、その色んなもんについては、追々話すことになるかも知れねぇが今のところはユウとノアがそれについては動いているってところだな。もちろん、スバルやギンガ…それにティアナに八神なんかはそのことについてはしらねぇしミツキや俺も出来ればあいつらには関わって欲しくねぇと思っている。本当は俺とミツキ、それにノアの３人で片付けるはずだったんだが…。

とか考えてる内に諦めたんだろうな。

「まぁ、これはまだ調べてる途中なんですが…」

と前置きをいいつつ先に開いていた画面を前に出して話始める。

「この画面に表示されてるのは、さっき見せた画面に出てたリストを見ていた端末がどう使われていたかを示すログなんですけど…どうやら別の端末の経由に使っているようなですよ」

「つまりどういうことだ？」

「つまり、別の端末からこの端末を経由して個人情報を見たりしてるんですよ。それも経由地は複数」

「ってことは…外部からではなく内部から複数の端末を経由してさっきの画面を見てたってことか？」

「まだ…そこまでの結論は出せませんがその可能性はあると思います」

「そもそもそんなことが可能なのかよ？」

「まぁ、やり方としては、経由する端末自体に操作可能にするためのソフトかなんかを入れなきゃいけないんですけど…でもそういったことに詳しい人間…もしくはそういったことができるウイルスかなんかを端末に入れば可能だと思います」

「内部の人間に協力者が…まぁ…考えたくもねぇが、その可能性は大いにあるってことだな。」

「その可能性はあると思います」

表情が重くなりつつもはっきりと言い切るミツキ。

ある意味こいつもこういった関係のことじゃプロ中のプロだからな。

そいつがいうんだ。まず、その可能性はないとは思わない方がいいな。

「なるほどな。んで、どんな風にやってくつもりだ？」

「そうですね…。まずはその経由地として使われてる端末自体を調べなきゃいけないんで、それ自体を全部抑えて…それで実際に使われたときにでも逆探でもかけてみてって感じですかね？」

「だろうな。それじゃそいつについては俺がやっとくから…ほれ！情報の入ったデータを全部よこしな」

と言いつつ、右手を出す。

「えっ？だってこれは私が…」

「ダメだ！そもそもミツキには色々とやってもらわにゃならんことが山ほどあるんだ。まずはそっちを片付けてもらわねぇと。それにおめぇさんが本局にいくと面倒ごとが増えちまうだろ？それに比べて俺の方が色々と動きやすいからな」

「で…でも…」

「ブーたれても聞かねぇからな！それに出さねぇってならこっちだって考えが…」

「クッ…ハァ、ハァ、ハァ…ンクッ」

「おい？ミツキどうした？」

俺がミツキ奥の手を披露しようとした時あいつが急に苦しみだした。

これは…。

「おい！ミツキ！おまえ薬はどこに置いてる？」

「デ…デスクの…引き出しの…一番…上…」

デスク上にまるで頭をつけるように前かがみになり両手で胸を抑えつつ、苦しみながら薬の場所をなんとか言葉するミツキ。

「ここだな！」

俺はその言葉を聞きデスクの引き出しを開け薬が入ったピルケースを取り出し一回に使用する分をケースから取り出す。

「おい！ミツキ！薬だ！飲めるか！」

俺の問いに何とかうなづくミツキ。

そして、買っておいたミネラルウォーターのペットボトルの蓋を開け薬と共にミツキに渡す。

ミツキは俺から渡された薬を口の中に放り込み、続いてペットボトルに口をつけた。

ゴクゴクゴク…。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

時間にして大体5～10分後、どうやら薬が聞いてきたらしくミツキは息を整える。

「ご…ごめんなさい…」

「ったく…、あんまり無理すんなよ。おめぇさんはまだ完全に完治してねぇんだから」

「は…はい…。でも…やっぱり私…」

さっきあれだけ苦しんだのにやっぱり納得してぇな。こいつ…。

おれは端末にある番号を表示させミツキに見せる。さっきやろうとしてた奥の手ってヤツだ。

「も…もしかして…それって…」

呼吸を整えつつもゲッ！！と言う表情のミツキ。

「そうさ。この番号ってのは、ユウの番号だ。ここにかけてここでの事をあいつが知ったとしたら…」

「知ったとしたら…」

青ざめていくミツキ。今のことをあのバカが知ったら何するかわかってるんだろうな。

「そうだな～、あのバカのことだぁ。内容については嘘をつくだろうが速攻でスバルやティアナ、それにギンガやノアに一斉に伝えるだろうな。姉貴がまたなんかやらそうとしてるってな」

さあ…どうする…。俺は笑みを浮かべながらミツキに脅しをかける。

もし、伝えたらどうなるって？

そりゃもちもん、あいつ等のことだ。全員一斉にこっちに連絡よこして来て怒り出すだろうな。

なんせ、あいつ等ケンカしてようが何してようがミツキがこういった事をしようとしたら必ず無茶するって全員がわかってるからな。仲が悪くなってるのそっちのけで協力するからな。

あいつ等それぞれに色々と考えてるみてぇだが…。

まぁ、なんでこんな手を使うと言えば、ここでミツキに鉄拳制裁を加えるってのもありなんだが…どうも女に手を上げるってのは性にあわなくってなぁ。今まで色んな手を試してはみたが、ミツキにはこの手が一番効くらしい。

「わ…わかりましたぁ…。渡しますよ！でも！結果は教えて下さいね！」

どうやらミツキのヤツ観念したらしい。データを入れたメモリを俺に渋々渡してきた。

「わかったよ。ちゃんと教える」

といいつつ、そのデータが入ったメモリを受け取る。それだけではなく本当にこれで全部かミツキの端末を確認するのも忘れずに。

それから普通に談笑した後、二人して自宅へと帰宅することになった。

まぁ…大事にならなけりゃいいのだが…。そんなささやかな願いすら適わなかったのは後の話。

その１５（後書き）

今回と次回は原作アニメに絡むためのいわば序章になります。単なる説明文が多くなりますがご了承下さい。

その16

その１６

？？？？ｓｉｄｅ

「ドクター？」

「なんだい？ウーノ？」

ここはミッド周辺にあるとある研究施設。

どうやら洞窟内にあるらしくいたる所に岩肌が目立つ。

部屋の中は、巨大なモニターがおいてありその前でドクター呼ばれる男がその画面を見入っている。

「ドゥーエから新たな報告とデータが送られてきました。」

「それで」

ドクターからの問いにドゥーエは表情を変えず送られてきた内容に

ついて説明する。

「送られてきたのは、管理局の高官達の情報と機動六課に関しての追加情報でした。それとセキュリティのロックされている部分があるとのことでそのロックをなんとかしてほしいとのことでした。」

「そうか…。そのセキュリティについては、クワットロにでもやってもらうか…」

「はい。データと一緒に言い渡しておきます」

たんたんと二人の会話が続く。

「頼むよ。それと…例の件だがその後の進展は?」

「はい。今だにその痕跡すら発見出来ないと…」

「そうか…ひきつづき調査を続けるようドゥーエに伝えてくれ」

「はい、わかりました。それとドクター?お聞きしておきたいことがあるのですがよろしいでしょうか?」」

「なんだい?」

「なぜドクターは例の件に拘るんですか?」

「拘る…う〜ん…」

ウーノの問いに考え込む体制をとり少しの間を取るドクター。

対するウーノは相変わらず無表情のままドクターの答えを待つ。

「そうだな。いてほしいという願望があるからかな」

「願望？」

「そうだよ、ウーノ。私はね、見てみたいんだよ。あれを」

「ですが、あれはうわさや都市伝説の類では…」

「そうかもしれない。だが、つい最近も現れたっていうではないか」

「確か…4～5年くらい前に…ですが、あれとの確証がとれてません。それに…」

「それにスポンサーの方にも調べてもらったが存在すらなかった…だったかな」

「はい」

ウーノに続いて話を続けるドクター。ウーノは表情は変えていないがそんな無駄なことをいつまでやっているのか疑問を抱いているようだ。

「ウーノ私はね、いるような気が…と言うよりいて欲しいんだよ」

「いて欲しい？」

「そう、私は彼からその話を聞いた時に感じたんだ。それを見、そしてこの手にしたい…という欲望を！！」

狂喜に震えるドクター。ウーノは「わかりました」と言い残しその部屋を後にする。

「タイプゼロにFの遺産…それに影の守護者…その全てを手に入れることが出来れば…クックックッ…ハーハッハッハ…」

ウーノがいなくなった部屋で一人狂喜に湧くドクター。その声だけが施設中に響いていた。

side out

聖王協会

はやて視点

「お久しぶりやな。騎士カリム」

「お久しぶりってついこの間あったばかりじゃない。はやて」

「それでも2週間ぶりや。久しぶりには変わらへん」

ウチは今聖王教会の騎士カリムの書斎にきておる。

来ている理由は、前回の出動の報告と今後のことについて。

カリムは聖王教会の理事であるのと同時に機動六課の後見人の1人でもある。

そんなカリムはウチの友人の一人…というか色々と世話になってる人のひとり。

機動六課の設立の際にも色々と世話になっとるし…。

ウチとカリムは書斎においてある応接用のイスにすわる。するとそれを見越してかシスターシャッハが紅茶を持ってきてくれテーブルの上に置いてく。

「どうぞ…」

「ありがとう、シャッハ」

「おおきに、シスターシャッハ」

シャッハはお辞儀をし部屋を退室。

それから、ウチはまず前回の新人フォワードの初出動の内容を報告。

カリムはウチの話を紅茶を飲みながら静かに聞いてた。

「それでこれからの事なんやけど…」

報告を終えたウチはこれからの機動六課のことについて話を始めようとする。すると…

「その前に、地上での協力体制についてですが…」

「それなら問題あらへんよ。ミツキにもちゃんと協力してもらえる

よう頼んで了承してもらっとる」

「そうですか…それならはやても何かと動きやすいですね」

「まぁ、それはそうなんやけど…」

「どうかしましたか？はやて」

カリムの答えにウチは言葉を詰まらせる。

「ミツキが協力してもらえるのはあくまでも技術的観点からのみでその…情報関係についてはやっぱ無理やったわ」

「そうですか…やはりナカジマ三佐が…」

「そうや。この間、師匠の所に捜査協力を頼みにいったときにしっかり釘さされたわ。あんまりミツキに無理させるようなことはするなってな…それにユウにも…」

「ユウ？」

「ええ、今、機動六課に来てもらってるミツキの弟」

「確か…ユウ・サエグサ一等陸士でしたか？」

「そうや」

ウチの答えに少し考え込むカリム。

「本当は地上本部でミツキに協力を頼むときにそのついでって形で

頼もうと思ったんやけど、まさかギンガが一緒におるとは思わへんかったし…。どうやらそのときの事がギンガから二人の耳に入ったらしいんや。１０８に入ったときに師匠あんまりおもしろい顔せえへんかったし、ユウにも再度確認されたしな。」

考え込むカリムに対しウチはそのときの状況を説明。というよりこれは言い訳に近いな。

でも、最初から一緒に頼もうにもミツキはあくまで地上本部側の人間。正面きって依頼しようもんならミツキ自身の立場が危うくなりかねん…

まぁ、本人は気にはしないだろうが地上本部にいる幹部達からあれやこれや言われることには変わりあらへんからな…

ウチはあれやこれや考えつつカリムの返事を待つ。

「仕方がありませんね。こちらとしては彼女が独自に動き出す前にその情報を得たかったのですが…もし、これ以上こちらがそのことについて動けばせっかく予備兵力として来て貰っているサエグサ一等陸士も協力してもらえなくなりかねませんから…」

「そうやね。それにしてもごめんなぁ…ウチがうまいこと出来なくて…」

「いいえ、そんな事ありませんよ。はやて。」

カリムの言葉にただ謝ることしか今のウチにはできないわ。

なんせユウはあくまでも整備士として機動六課に来てもらっとる。

そして、万が一の場合にのみ戦闘に参加してもらうってことになっとってそれ意外のことについて

…つまりなのはちゃん達には出来ない情報収集やらスパイ染みたことなど…

いわゆる汚い仕事なんかがあったときには動いてもらうよう頼んどる。

…そう…それについてはあくまでもお願いや。

それに命令することも出来るがそれについては整備士だからといって拒否することが可能やけど強制的にやらせればあいつ…速攻で命令無視するっていうとるし…。

それと…ミツキにそのことをさせるなら、ただじゃすませないってなぁ…。

まぁ、ユウ一人でなのはちゃん達に立ち向かうようなことはせんやろうしそれにスバルやティアナもおるしな。

それに、あいつ一人で隊長陣を全て倒すなんてことは無理に近いやろうけど…

でも、あいつも情報関係には結構詳しいし…それでもし、ミツキの情報網をつかわれたらカリムやリンディ提督やクロノ君だってひとたまりもない…。

つまり、その情報網を使って管理局の上層部連中のことをあること

ないこと言いふらしたりとかして追い落とことも出来るっちゅうことや。

まぁ、ミツキもユウもその情報網を使って今すぐにどうこうする気はないらしいし、それを駆使して成り上がる気もないらしい。

そもそもあの姉弟そろって上昇志向自体ないらしいしな…。

それが唯一の救いやけど…

けど、それを使って成りあがろうとしている連中が後を立たないってことも事実や。それやから、師匠やらギンガなんかがピリピリするんや。

でもまぁ、うちらとしては、その情報網を駆使してレリックやロストロギア関連の情報やそれを犯罪につなげるようなことを事前に掴もうってことやったんやけど…

それが使えんとなると、うちら自身で集めた情報を元にユウに動いてもらうもしくは、協会騎士団やらにうごいてもらうしかないってことやし。

おまけに地上本部でうっかりそのお願いについてミツキの前で口を滑らしてもうたし…

それでミツキにもがっつり言われたしなぁ…

ミツキもまたユウの事が心配なんや…それを見越してこのことはミツキには教えないつもりやったんやけど…失敗したわ…。

「はやて…そんなに落ち込まないで。そもそも、二人の協力が得られるのもはやてとミツキさんとの間での良好な関係があってこそなんだから。もし、それがなかったら協力すら得られなかったわ」

「カリム…おおきに…」

カリム視点

私は、落ち込むはやてを慰める。

でも…それは嘘ではない…事実…。

そう…今回協力が得られたのは、はやてとミツキさんとの信頼関係のみ。

それが崩れれば協力関係すらなくなるということに等しいから。

ミツキさんについては昔から色々と勢力争いに巻き込まれることが多く、それに彼女自身にも色々と謎が多い…。

私たち聖王教会と彼女との間では、過去に色々あって今ではその関係は悪くなる一方…それに…リンディ提督やクロノ提督…管理局の勢力のひとつである、いわゆるハラオウン派と呼ばれる人達とは特に悪い。

それはリンディ提督やクロノ提督個人というよりその下の人達が提督達に取り入るために彼女に近づいたことが原因。

でも…2人の提督自身も彼女とは色々とあるらしいけど…今は、普

通に接してはくれてるらしい…。

今回のことについては、そもそもミツキさんに来てもらうつもりだったけど…どうやらナカジマ三佐と地上本部の人達が色々とこちらを警戒して彼女自身の出向を認めず、その変わりに弟のユウ君を送るってことになった。

それも、はやてが交渉してくれたからこそ可能になったことでもし、私達やリンディ提督などが交渉すれば自体は違ったことだろう。

はやてと機動六課の今後のことを話し合いを終え、今は部屋に一人。

シャッハから届けられた書類を見つつ、私は一人考えこんでいた。

届けられた書類…。

それは、影の守護者についてのことだ。

影の守護者…。それは、古代ベルカ時代より…様々な王に仕え、魔力とは別の力を駆使し仕えた王朝を影から支えたというもの。

その規模や構成人数など一切不明。

そのため、無限書庫に調査を依頼してはいるのですが…。

その調査の途中経過が記載されているのだが、どうやらうまくいっていないらしい。

なぜ、調べているかといえばそれは…過去に何度かその見たことがない力が現れたことが報告されているからだ。

その存在自体眉唾に近いものだが、その報告内容と影の守護者と呼ばれた者が使用したであろう力が告示したことを教会の幹部達が発見しそれに呼応するかのように私も調べている。

もし、そんな力があるのなら聖王教会として対応しなければならないからだ。

「ふぅ～」

報告書を読み終えた私はため息をつき、シャッハが用意してくれた紅茶を一口。

外は何時の間にか夕日が差しており、私はその夕日を眺めながら静かにその夕日が沈むのを見つめていた。すると…

ピピピピピッ…。

「はい…そうですか…わかりました」

その音に気づいた私は画面を開きその報告内容を聞き画面を閉じる。

その届いた内容は…管理外世界でロストロギア発見…

その１６（後書き）

次回からいよいよ原作アニメの内容に突入…とその前に…すいません…ちょっと暴走します（笑）

その17（前書き）

ユウ視点

「ユウ～大変！大変！！！」

「なんだ？アルト？やっとさっきフォワード連中が出張任務にいってこれで楽が出来るぞ～！って、人が喜んでる時に…」

「それがね。どうやら忘れ物したらしいんだよ…それで…これ…」

といいながら、アルトは俺に一枚のメッセージカードを渡す。

そこに書いてあったのは…

「ここにあるものはウチが忘れるつもりで置いてったもんや。それでこれを見た人はユウに届けさせるよう言うてな。ちなみに、ウチ等がいるところまでの交通費などの一切については経費では落とさせへんからな！これは、ウチのボケを散々無視したバツやからな！しっかり、反省しいや！それでは、海鳴でユウがくるのを首をなが～くして待っとるからな。　八神はやて」

「あんのチビ狸ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

アルト視点

といいつつ、ユウは私が渡したメッセージカードをグシャグシャに

しながら怒りを露にしている。

「という訳で、ようやく原作に入ることになりました。ですが、原作アニメ通りというよりここの作者が原作アニメを独自にアレンジしたオリジナルの内容となっております。面白い内容になるかはわかりませんが広い心を持って読んで頂きますよう作者一同お願いいたします。」

ペコリ

「それでは、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その１７…始まります」

その17

その17

ユウ視点

「ったく…せっかく楽が出来ると思ってたって時に…」

「仕方がないわよ。なんだかんだ言っても相手は部隊長なんだから」

現在、俺がいるのが第97管理外世界、地球の日本にある東京の神田にある神保町ってところだ。

あれからどうなったかと言えば、とりあえずアルトに促されチビ狸からのメッセージカードをグリフィスさんに報告。

それで、とりあえず置いてある忘れ物は向こうでも必要になるもの故そのままスルーすることが出来ず忘れ物を届けて後のことはチビ狸達が帰ってきてからってことに…

「それにしても、あのときのグリフィスさん本当に怖かったよね～」

「おい！アルト」

「なに？」

「何でおまえがいるんだ？」

「えっ？…なんでって荷物が多いから手伝いすることになってでしょ！そうでなきゃ自腹でなんかこないわよ！」

「それはそうなんだが…」

俺の横にはジーパンにTシャツ、その上に長袖のシャツといった動きやすい格好をしたアルトがいるんだが…ちなみに俺はジーパンにTシャツ…その上に薄手のジャケットを羽織っている。

まっ、管理外世界だからな。管理局の制服なんかでうろちょろすることも出来ず、それぞれ私服を着ている。

ちなみにここまで共に自腹。当然経費で落ちるよう言ってみたがグリフィスさん曰く、

「全ては部隊長が帰ってきてからにしてほしい」

とのこと。

「いったい何がいいたいのよ？」

俺の質問に納得いかない表情で詰め寄ってくるアルト。

「あのよ～これでも仕事できてるんだぜ。一応…なのにその右手にあるものは一体…」

といつつアルトの右手の中にある雑誌を指さす。

そこには…「これであなたも地球通!!完全観光ガイド」…と書かれている。

いわゆる旅行する時なんかに見る観光ガイドブックってヤツだ。

「アハハハハッ…ごめんごめん。だって私こういう管理外世界なんてきたことないし…それになのは隊長達の故郷って今じゃ立派な観光地だし…つい…」

頭をかき照れ笑いしながら雑誌を背中に隠すアルト。

アルトがこうなるのも仕方がない。なんせ、なのは隊長達の人気が凄すぎるせいで今やその注目は彼女達が育った地球にまで及んでいる。

いったい、彼女達はどんな世界で育ったのか?な~んて思うヤツ等をどっかの旅行会社が管理局に許可とって観光ツアーを始めたのがきっかけなんだが、それが広まっちまったんだな。

そのおかげで今は地球はそのブームの真っ只中。管理局の方もいわゆるイメージアップの一環としてこのブームを利用している。

だが、ここは管理局が管理していない世界。そのため旅行の際はこっちで言うパスポートの申請やらが必要になるんだが…

まぁ、有名になればいいことばかりでないってことで、無許可で入ってくる連中も中にはいるし犯罪を起こして地球を隠れ家として使っている連中までいるときてる。

でも幸い今までこの世界で魔法が大ぴっらになったことはないが…
まぁ…それにも色々とカラクリがあるのだが…それは別の機会に…
だな。

「それはそうと…なんで神保町なの？確か私達の行くところって海鳴じゃあ…？」

古本屋街を歩きながら疑問を浮かべるアルト。

「それはな…おっ！いたいた」

俺の声にその方向をみるアルト。すると、目の前には女性の二人組みの姿が…

「せんせぇ～こちらですよ～♪」

「待ってよぉ～先生！！」

一人は黒髪でロング、年は２０～３０歳台ってとこか？どっかの制服の上にロングコート…そして、なぜか男物の黒ぶちメガネをかけ、スーツケースをゴロゴロ引っ張ってる。後ろの方は…年は１０台半ばの学生さんだな、ありゃ。

それで茶色の髪で長さは肩にくっつくかくっつかないってくらい頭にはカチューシャだろうをなんかつけてる…ってやっぱりいたのか…神保町の主…。

「ユウもしかしてあの人達のこと？」

二人を指差し俺に確認するアルト。

「あ〜あの人たちに出会えたのはある意味、奇跡に近いが…だが、俺が探していたのはその奥。ほら、あの店先のワゴンセールを物色してる…」

といい手前にある古本屋の店前で本をみる女性の肩を叩き振り返ったところで声をかける。

「よっ！！姉貴！！」

「？？？…ってユウ…それにアルト？いったいどうしたのよ？こんなところで」

アルト視点

「お久しぶりです。ミツキ先輩」

ユウが声をかけたのは、自分の姉であるミツキさん。

私とも面識があり訓練校時代から色々と整備のこと教えてもらったり、色々と良くしてくれる先輩の一人。ちなみにフチなしのメガネをかけた髪は、黒で長さは背中に届くくらい…服装は、ロングスカートのワンピにカーディガンを羽織ってそれに肩からポーチを下げていて…それに先輩足元には…恐らくどっかの家電店の名前が書いてあるであろうか…大きな紙袋が置いてある。

「久しぶりね、アルト。それでいったいどういうことなの？…もしかして…こんなところまで来て…その…デ…デー」

「「ちぃ～～～がうううぅ！！！！仕事だ！！（です！）し！ご！と！」」

「って全力で否定しなくてもいいじゃない」

と耳を抑えつつ文句をいうミツキ先輩。

だってそうじゃない！私とユウはあくまでも同期の仲間で今は仕事場での同僚…なんだから…。

「それにしてもなんでミツキ先輩がここに…」

私は、なんで先輩がここにいるのか聞いてみた。

「ん？私？今日は久しぶりのオフだからこっちにきて色々と面白いもんがないか探しにきてたのよ。それであんた達は？」

「ほんとかよ～？」

先輩の答えに疑問を上げるユウ。まっ…そういって実は仕事できてたぁ、なんて事をしょっちゅうやってたらしいし…。

「本当よ！その証拠にほらっ！ちゃんと旅行できてるんだから」

といって管理局発行の旅券をみせる先輩。もちろん、私達にしか見えないようにしてるけど。

「まぁ、それならいいんだが…」

「なによ～！その信用してなさそうな顔は…」

ユウの不満そうな表情に不貞腐れた顔をして腕組みをしユウに詰め寄る先輩。

「まぁ、まぁ、二人とも落ち着いて…実を言うとこれこれこうで…」

私は二人を宥めつつ事情を説明する。

だって…二人が本気でケンカしたらこの辺いったい廃墟と化すんだもん…それって…つまり…私だって命に関わることだもん…怖いけど…止めなきゃ…グスン。

「アルト…泣きまねはよくないよ…」

えっ…バレてました?先輩?

「ええ。もちろん」

「それはそれとして…でぇ?海鳴に行くはずのあんた達がなんで私を追っかけてきたの?」

そうだよ、そうだよ。どうしてなの?ユウ?

「いやさ。どうせこのまま海鳴にいっても隊長達に物自体を届けろ!って話だったんでな。したら、姉貴がこっちで使ってる車を貸してほしくてな。それでギンガに聞いたらこっちにいるってことで神保町にきたんだよ」

「ふ~ん。はやてが聞いたってことね?それで荷物はどんくらいなの?」

「それについてはまだ持ってきてなくてな。こっちでの移動手段が確保出来たら送ってもらうようにしてもらってて…これがそのリスト」

ユウは先輩に一枚の紙を渡す。それを見た先輩は

「わかったわ。ちょうど近くに私のここでの拠点の一つがあるからそっちにある車をかすわ。そこに転送ポートもつけてあるからそっちに送ってもらいなさい」

「サンキューー！！姉貴！助かる」

「ありがとうございます！！先輩！」

先輩の答えにお礼をいう私とユウ。

「いいわよ、このくらい。それでこっちよ、ついて来なさい。」

先輩の道案内によりその拠点へと移動。その場所はすぐ近くあった。

地下にガレージがある雑居ビル。

先輩はそのビルのガレージのシャッターをあける。するとそこにあったのは数台の車

「すっご〜〜〜ーーーーい！！」

だっ…だってガレージの中にあるのってミッドじゃまずは手に入らない地球製の車ばっかりなんだもん！特に！あのミニってヤツ！！

あれって私もほしいのに～！！！！

私は、目を輝かせその車達を見て回る。

先輩はそんな私の行動など気にせずに一台のワンボックスタイプの車の前で足を止める。

「これなら荷物入るんじゃない？」

「そうだな。それじゃこれ借りてもいいか？」

「いいわよ。でもおわったらちゃんと戻しといてね」

「了解。おい！アルト！いつまでやってんだ！はやくヴァイスに連絡をとってこっちに荷物を送るよう手配してくれ！」

「えぇーーーーーーもうちょっとーーーー！！！！」

「だめだ！早くしねぇとチビ狸から文句がくるからな！」

「うぅーー！！後少しだけぇ～！……わかったわよ…」

ユウは、私に近づき握りこぶしを作って私の頭を殴るポーズをとる。さすがに殴られたくない私は未練をたっぷり残しながらヴァイス陸曹に連絡をとる。

荷物はすぐに届いた。そして車に荷物を積み込む。

「それじゃ。気をつけていってね」

「おう。姉貴もな」

こうして鳴海に向かう準備は整ったでも…

「アルト、今度休みが一緒の時に連れてきてあげるから今はこれで我慢して…ね」

「先輩…これって…」

「ああ、これはブラついてる時に見つけて衝動買いしちゃったものなの。ちなみにこれはユウの分」

といって先輩は私にはミニのミニカー、ユウには地球性の中古の一眼レフのデジカメを手渡す。

「いいのか?これ?」

「いいんですか!でも先輩の分は?」

「平気!平気!だってこれ同じ物もうひとつ買っちゃってるから。ほらね」

といって今私達に渡した物と同じものをみせる先輩。

「すまねぇな。姉貴」

「ありがとうございます!大切にします!」

先輩にお礼をいい車に乗り込む。ちなみに運転席にはユウ、私は助手席。

「それじゃ、車借りるわ」

「いってきま～す！」

「いってらっしゃ～い！スバル達によろしくいっといてぇ」

「わかりましたぁ～」

先輩に別れをいい旅立つ私達。

さぁて！いざ！海鳴へ！レッツゴーーー！！！

その17（後書き）

はやて
「あの～作者さん？ひとつ聞いてもええか？」

作者
「な…なんでしょう？」

はやて
「これってリリカルなのはの小説やな？」

作者
「はい。そうですが…」

はやて
「そやったら、なんで海鳴行く前に神保町なん！！」

作者
「いや～どうしてもあの方々にゲスト出演してほしくて…つい…ポリポリ」

はやて
「つい…って頭かきながらごまかすな！！いくらなんでも色々とまずくないか！それにだれがゲストなんやかわかるんか？！」

作者
「まぁ～設定自体はゲストの方達とはやてさん達との時間軸は同じ設定でやってますし、それに今回はあくまでゲストとして参加してもらってます。後は現実的な問題等々については穏便に見ていただ

ければとお願いしたいのとわかる分からないについては、あの作品のファンの方ならすぐにわかるでしょうし分からない方についてはそのままスルーしていただければ…」

はやて
「まぁ…それならそれとして…例のゲストは誰だ！ってな具合で今回はクイズとかにしないんかい？」

作者
「そうですね～作品自体は古い部類に入ってきてますから…わからない方が多いのでは？と思い、今回はクイズにはしません。でもまぁ、わかった方は感想とかに書いていただけたら幸いかな？と」

作者
「それに…ネタバラシは違う作品を書いたときにでもやろうかと…」

はやて
「また、始めたばっかりなのにもう違う作品って！あんた本当に飽き性やな」

作者
「もちろん、この作品が終わってからということになりますが、頭の中にはそんな構想をあるってことです」

はやて
「なるほどなぁ～、ほんで次回からいよいよ海鳴での出張任務になるんやな」

作者
「はい、そうなります。」

はやて
「いったいどないになるん？」

作者
「それは、次回のお楽しみってことで」

はやて
「このいけず～」

作者
「それでは、次回をお試しみに～はやてさん！シメのセリフをお願いします」

はやて
「よっしゃ！…それでは…君の周りで何か事件が起こったら、ベーカー街まで知らせてくれたまえ…」

作者
「はやてさん…この作品にロンドンにいた名探偵はでてませんよ…」

はやて
「そっ…そやったな…改めまして、次回リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その１８…テイクオフ…」

その１８（前書き）

ティアナ視点

「ほんとなのは隊長がいってたとおりミッドとあんまり変わらないわね」

「ほんとだね～でも私好きだよ」

「そうね。私もよ」

現在私達は、管理外世界の地球の日本にある海鳴市に来ている。

もちろん、仕事で。

なのは隊長達の故郷ってことで来る前に色々と聞いていたのだが、ミッドとあまり変わらないというのがいまいち信じられず、今スバルと一緒にそれを実感しているとのころ。

「ねぇ、ティア。あれってもしかして、アイス屋じゃ…」

「恐らくそうね…ってあんた仕事中に買い食いなんてやめてよね」

「あう～」

とまぁ、たわいもない会話をながら仕事を始めようとしたら…。

「ティア、ティアっ！」

「あんた、まさか違うアイス屋を見つけたなんていわないよね？」

「ちっ…違うよ！あれ見てあれ！」

私はスバルが指差してる方をみている。

なんだ…さっきのアイス屋じゃ…ってあれ？

「う～ん…どれにしようかな～これもいいし…あれもいいし…」

「あんまり時間かけるなよ。これでも一応仕事中なんだからな」

さっきまで客がいなかったはずのアイス屋の前に何時の間にか男女2人組の客がいた。

でも…あれって…。

「ねぇ、ティア！あれってユウ兄とアルト…だよね？」

視力には自信があるというスバルが私より早く恐らく本人であろう2人と断定し確認の声を上げる。

「ん？おい！アルト！あいつら、もしかして…」

スバルの声が聞こえたのか男の方がアイスを必死に選んでいる女性の肩を叩きこちらを指差す。

「なによ～今選んでるんだから～。どれどれ…あっ！！スバルにティアナだ！お～い！」

「やっぱりアルトだぁ！やっほ～！！」

お互いに確認したらしく手を振りあうスバルとアルト。その横には…考えたくもないがやっぱりアイツだった。

それにしても、なんで2人がここにいるの？

リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その１８…始まりますって、これって前書き！！！！

その18

その１８

なのは視点

＞なのは隊長。ティアナです＜

＞ティアナ？どうしたの？＜

＞あの～ちょっとこちらに来て欲しいんですけど…＜

＞？？？わかったよ。ちょっと待ってて＜

私とリインは、ティアナからの念話を受け2人がいるところへと向かう。

すると…。

「ごくろうさまです。なのは隊長にリイン曹長。」

「ど～も。お届け物を届けにまいりました。」

スバルとティアナと一緒にユウ君とアルトの2人がいた。
届け物…なんだっけ?と思っていたらリインが…。
「ごくろうさまですぅ。でもどうしてこっちに?てっきり待機所の方に来るのかと思ってたんですが…」
リインがユウとアルトに話し掛ける。私、スバル、ティアナの3人は置いてけぼり。
「あの~リイン曹長?」
「なんですかぁ?ティアナ」
「どうして2人がいるのか…その理由が知りたいのですが…」
ティアナがユウ君達とリインの話に割って入り質問する。
「あっ、それはですねぇ~」
ユウ視点
「それはですね~。サーチャーや探査機の数が予想していた数よりも足りないことがわかって、はやてちゃんの方からこっちに持ってきてもらうように頼んだんですよ~」
リイン曹長が俺とアルトが来た理由をティアナ達に説明する。その言葉を普通に信じる3人。

へぇ～そうなんだ…。

ちなみに俺とアルトは、そのこと実は裏があることを知ってる。

でも、そのことは今は言わない。

なぜかって？そりゃもちもん！帰った後に「お話」するためさ。

ちなみに「お話」するのは、俺ではなくグリフィスさんだがな。

「それでどうやってここまで来たんですかぁ？」

説明を終えたリイン曹長は話元に戻し改めて質問する。

「それはですね、転送ポートで東京の神保町までいってそこから車です」

「東京から車で？結構時間かかるんじゃ？」

「いえ。高速って言う所を通って来たらすぐについちゃいましたよ」

「すぐにって…」

アルトの説明に戸惑いの声を上げるなのは隊長。

「そりゃ、高速乗った途端に寝ちまったらすぐだよな」

俺の追加説明になるほど！の声を上げる隊長達。アルトはといえば照れ笑いしながら頭をかいてる。

「でもどうして東京なんかに？待機所にくればすぐだったのに？」

今度はなのは隊長。これには、アルトも説明を俺に託す。

「確かに待機所まで行けたんでしょうが、部隊長に確認したところそこから先の移動手段がないとのことで、ちょうど東京にウチの姉貴が来てたんで車を借りにいってここまで来たんですよ。」

一応確認はしている、それにあのチビ狸からも連絡がきた。だが、確認したのは俺ではなくグリフィスさんが…。ちなみに例のメッセージのことについては一切触れてはいない…それはもちろん…後の楽しみがなくなるからな。

それにしても、連絡を受けてるグリフィスさん。

ツノと尻尾が生えて…それにつけてるメガネがキラーンって、光ってたなんて音声オンリーで連絡してきたから知らねぇだろうなぁ～（笑）

まるで悪魔を彷彿とするようだったぜ（笑）

話は元に戻して。

俺の話に納得する全員。

ちなみにアルトには話しを向こうに合わせるよう高速に乗る前…つまりあいつが寝る前に説明済み。

「えっ…ウチの姉貴って…ミツキさんこっちの世界に来てるの？」

「ああ、神保町にな」

「ええ～。なんで連れてこなかったの～会いたかったのに」

「このバカ！！こっちは仕事で来てるんだから気を使ってくれたのよ。でも、ミツキさんはどうしてこっちの世界に？」

姉貴がこっちに来ていることに反応するティアナにスバル。

あれっ？こいつ等って確か…。

「普通にオフだとさ。今ごろこっちの世界のお店を色々と物色してるだろうさ」

「そういえば、先輩がスバル達によろしく言っといてっていってたわよ。それと…飲み物の差し入れももらっちゃいました」

俺の話にアルトが続く。そういや、荷物を積み込む際、これ持ってけってクーラーボックスにジュースやら詰め込んで持ってきてたっけ。

「そうなんだぁ。後でお礼を言わなくちゃ。」

「はいです。はやてちゃんにも知らせておくですぅ。」

「それで中のもん、どうしましょうか？」

とりあえずこれを確認しないと…。

「そうだね。こっちとしてはまず、どれくらい持ってきたのか教え

てもらってもいい？」

「了解しました。それじゃこれがリストになります」

といい姉貴に見せたのと同じリストをなのは隊長にみせる。

そういや…スバルとティアナと普通に話ししてんな？まっ…それならそれでいいか。

「あの～アイス…の方は…」

俺の後ろからさっきのアイスの店員の声が…そういやアイス頼んでた途中だった…。

「お～い…バカアルトーーーアイスどうすんだってよ！」

スバル視点

＞ねぇ…スバル？＜

＞ん？なに？ティア？＜

＞そういえば、あんたユウと話しないんじゃなかったっけ？＜

＞そうだっけ？＜

＞そうだっけって…あんたね～！！＜

あう～～～…ティアに念話で言われるまですっかり忘れてた…。

＞そっ…そういうティアだってーー！！！ユウ兄とは二度と口聞かないっていってたくせにー！！！！＜

＞わっ…私は…みつきさんにあったってあのバカが言うもんだから確認しただけよ！＜

むぅーーーーーーー。

納得いかない…。

でもなんでだろう…さっきアルトとユウ兄がアイス屋の前にいたときなんかチクッって痛かったような感じが…。

チクン…。イタッ！

まただ…これって…なに？

ティアナ視点

私の答えに納得いかない様子のスバル。

でも、どうしてそうなったんだろう…。

いくらミツキさんが来てるって聞いたくらいでこんなことって…。

まぁ…久しぶりあったから忘れてたんでしょ。

自分の気持ちに納得し横にいるスバルを見る。

？？？

スバルは胸に両手を当て目の前の光景に見入っている。

「こらぁ～！！！今！！バカって言ったなー！！！」

「おまえがアイスの注文をしないからバカっていたっんだよ！ってぇ！！おまえなんでまだ１００ｔハンマー持ってんだぁ！！！」

「やかましい！！逃げるなぁ～！！！」

スバルの目の先ではアルトが１００ｔと書かれたハンマーを持ってユウを追いかけてる。

逃げ回るユウ…そして…彼の前にはなぜかバナナの皮…あっ…そのバナナ皮に足を滑らして…そして…

ドカーーーーーーーーーーーン！！

「あっ…」

ユウがアルトに殴られるのを見て声を上げるスバル…

その表情…なんかいつもと違う…

そう…いつも…違って…

普通に女の子してるっていうか…

恋する乙女モード全開っていうか…

??乙女モード全開?

まさか…あの子!!

ユウを成敗したアルトは隊長達に許可をとって…ってくれるわけないわよね。渋々、アイス屋さんに注文をキャンセルし待たせたことを謝ってた。

「とりあえず~どうすのか確認とってきたんだけど…ユウ君。そろそろそれなんとかしてくれないかな?」

「りょ…了解…です」

なっ…なのは隊長…少しは心配しないんですか?

「ユウ兄?大丈夫?」

「ああっ…大丈夫だ…ありがとな!スバル。」

スバルがユウの上にあるハンマーをどけてユウの脱出を手助けする。

「ううん。たいした事ないよ…うん。」

「それいじゃ、みんな集合して!」

「はい!って、ティア!集合だよ。」

「あっ…ごめん。今行く」

考え事をしていたようでなのは隊長の声が聞こえずスバルに呼ばれる。

あれっ…戻ってる…。

さっきまで乙女モード全開だったスバルがいつの間にかいつもの元気っ子に戻っていた。

多分…私の考えすぎ…というかこれって勘違い…よね。

私は、さっきまでの思考から仕事モードに切り替えてなのは隊長達のところに向かった。

その１８（後書き）

ようやくドラマＣＤのＳＳ０１からの原作アニメへの突入となりなります。さてさて…どうなるこやら…。次回あの親子が登場します。お楽しみに

その19

その１９

アルト視点

「それじゃ、説明するね」

なのは隊長からのこれからの私達がこれから何をするのかを含めた内容が説明される。

「まず、先に来ていた私達については、さっき言ったのと変わらず、サーチャーと探査機を設置しながらの捜査を続けよ。二人ともいい？」

「「はい」」

なのは隊長の説明にスバルとティアナが返事をする。二人とも元気だぁ～。

「そして、ユウ君とアルトの二人については…」

あっ…次はこっちの番だ。

「持ってきた、サーチャーと探査機をスターズとライトニングでそれぞれわけることになってね」

「それで、スターズの分はここに置いてもらって、ライトニングの分は車で届けてほしいんですぅ」

なのは隊長の後にリイン曹長が続く。

「了解です。それで、届けた後のことは何か決まってるんですか？」

「うん。ライトニングに荷物を届けてもらった後は、ロングアーチの指示で捜索に参加してほしいんだけど…ユウ君探査魔法って出来る？」

ユウの質問になのは隊長が答えさらに質問。

そういえば、ユウって魔法使えるんだった。すっかり忘れてた（笑）

「姉貴の車のナビに簡易版の探査魔法のソフトが入ってるんで問題ないです。」

へぇ～そうなんだ。

「それなら問題ないね。なら、ユウ君とアルトの二人で車を使った捜査をお願いしてもいい？」

「「了解です」」

「それじゃあ、行動開始！」

なのは隊長の声に集まっていた全員がそれぞれの行動に移る。
とは言っても捜査なんてやったことないのに…大丈夫なぁ？
なんて、考えていたら
「なぁ～に、心配そうな顔してんだ」
どうやら顔に出てたらしく、車に乗り込む前にユウに言われた。
「えっ？そりゃ、捜査なんてしたことないし…私に出来るかなぁ～って…」
「そんなに不安がることねぇよ。捜査つっても車を適当に走らせて画面に反応がでないか確認するだけだからな。そんなに難しいことじゃねぇよ」
「そっ…そりゃあ…そうだけど…もし、ロストロギアなんかに遭遇したら…私、ユウみたいに魔導士じゃないし…」
私の中の不安な気持ちが一気に広がる。
「それについては、見つけてもこっちに連絡だけして後は退避しろってちゃんと指示受けただろ」
「で…でも…」
ユウの答えに私は納得できない。
だって、いくら暴走や襲ってくる危険性がないとはいえ、相手はロ

ストロギア。そして、私はただの人間で仕事だっていわゆる内勤や整備…。現場にでて来てスバル達みたいに戦うなんて事はまずないし、そんな状況にあっても逃げまわる事しかできないよ。

「それなら、来なかった方がいいんじゃないか?」

不安いっぱいの私に面倒くさそうな顔をしながら言う。

「だっ…だって…地球に来れる機会なんて滅多にないし!捜査に加わるなんて考えてもなかったし!」

ユウに言われた事にカチーン!としたことで、不安と怒りが入り混じって…

もう!なんだか訳わかんないよぉ!!!

そして、不安と怒りが頂点に達した私は、それをそのままユウに”ポカポカ”とユウを叩きながらぶつける。

それに対しユウは…

「わかった!わかったから!!そんなに心配したくても、急に襲われても俺がなんとかするから…痛いからもう殴るな!!」

「なんとかするってどうするのよ」

ユウへの攻撃を辞め、口を尖らしユウに詰め寄る。

「どうするかはなって見ないと分からないが、まぁ…なんとかなるさ」

「なにそれ」

ユウの答えは私には、届かない。

「まっ…この車には、姉貴が色々と仕込んでいるからそういう意味でなんとかなってことさ。おまえのことだから、俺のことは信じられないだろうから姉貴がいじったこの車を信じてみな。それなら安心だろ？」

「でも…運転はあんたでしょ？」

「確かにな（笑）だが、俺も死にたくねぇからな。それなりに必死にはなるさ」

私の頭をポンポンと叩き「ほれ、いくぞ」といい車に乗るユウ。

「バカ…」

と一言残し私も車に乗り込みそして、走り出す。

ユウ視点

アルトとのひと悶着を終えた俺達は、ライトニングの連中と合流し持って来たサーチャー類をフェイト隊長達に渡しその後は探査魔法のついたナビの画面をアルトに見てもらいながら海鳴を車で流す。

ちなみに反応はいっさいなし。

そのため、いつの間にやら仕事というよりなんだかドライブしてるようになっちまった。

「ねぇ、ねぇ、あっちになんか面白そうな建物があるんだけど！行ってみない！！」

「一応仕事だからな。通るだけだぞ。降りて中見たい！なんていうなよ」

「おっけ～！！」

まぁ、そのおかげか最初は機嫌の悪かったアルトも時間が立つにつれてその機嫌を良くしていった。

やれやれ…。どうもこいつといると俺が抑える側になっちまうんだよなぁ…。

でもまぁ、こいつが暗くなるよりかは明るくいてくれた方がまだマシだな。

とかなんとか考えつつもなんだかんだこの状況を楽しんでいたら…

（こちらロングアーチ。ロングアーチ０３及び０４、聞こえるか？）

チビ狸からの連絡が入った。

ちなみにロングアーチ０３ってのがアルトのコールサインで０４が俺。

通信方法は、俺は念話で通信してるがアルトは魔法が使えないため耳に小さな通信機をつけている。もちろんこの車に装備されてるもの。

アルトにさっき姉貴の車を信じろっていったのは、こういった装備がつんであるから。

それに大概のドンパチにも対応できるようになってる。

なんでかって聞いたら姉貴曰く、「こんなこともあろうかと！」ってピンチの時にどっかの戦艦の整備主任とかが言ってたセリフをいつか言いたかったんだって。

なんだそりゃ。

「こちらロングアーチ０３。どうしましたか？」

俺は運転してるのでチビ狸からの連絡にアルトが返事をする。

（あんな、そろそろサーチャーの設置が終わりそうなんでそっちの捜査も終わってもらおうと思ってるんやけど、スターズの帰りの足がないんよ。それでライトニングよりもそっちの方がスターズに近いから悪いんやけどなのはちゃん達迎えに行ってもらえへんやろうか？）

「こちらロングアーチ０４、問題ないですよ。んでスターズはどこにいるんですか？」

アルトがどうする？って顔してたんで変わりに俺が答える。

（こちら、スターズ０１。私達はこれから翠屋ってところに向かうつもりなんだけど、よかったらそっちで合流しない？場所はわかる？）

どうやらこの通信をなのは隊長も聞いていたらしく合流場所を指定してきた。

それにしても翠屋って…。

「あっ…あれじゃない？」

アルトが指差す方向の先に翠屋という看板がでている喫茶店を発見。

「なのは隊長。そこって喫茶店じゃないですか？」

といいその店の特徴を伝え、合っているかなのは隊長に確認をとる。

（あっ…それだよ、それ！どうしてわかったの？）

と驚きの声を上げるなのは隊長。

「今通ってる道に偶然あったんですよ。そこで待ってます。」

（了解。だいたい５分～１０分くらいでそっちにつくから）

「了解」

通信を切って。俺達はその翠屋って店に車を止めた。

その１９（後書き）

次回あの親子が登場しますって言っちゃいましたがそこまでいきませんでした。すいません。次回こそ登場しますんでお待ち下さい。

その２０

その２０

ユウ視点

カランコローン。

「いらっしゃいませ～お二人様ですか？」

「はい。」

「こちらへどうぞ」

俺とアルトの二人はなのは隊長達と合流するため翠屋という喫茶店に入った。

中に入った俺達は店員に勧められた席にすわり、出されたメニューに目を通す。

席は窓側の奥の席。二人用の席で窓側に俺、テーブルを挟んで反対側にアルトが座っている。

「メニューはお決まりですか？」

数分後、メニューを聞きに女性の店員が声をかけて来た。

「俺はコーヒー。アルトは？」

「それじゃ…私はケーキセットで」

「かしこまりました。」

といいメニューを下げる店員。

すると…。

「ねぇねぇ、今の店員さんなんだかなのは隊長に似てない？」

アルトが店員のことが気になったのか小声で俺に話しかけてくる。

「他人の空似じゃないのか？いくらなのは隊長がここの出身とはいえ…まさかなぁ？」

確かに似ていた。だが、まさかそんな訳…それにあの店員…なんかやってるな…っていうかポケットやら腰に膨らみが…あれはおそらく…。

「失礼します。コーヒーとケーキセットになります。」

そんな話をしていたらさっきの店員が俺達が注文したものを持って来た。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「あの～ひとつ聞いてもいいですか？」

？？？

「なんでしょうか」

店員がよくある接客マニュアルのような動作を一通り終えたところで俺たちに話かけて来た。

俺は、一応警戒しつつ店員の話を聞く。

「あの～さっきなのは隊長ってお二人の話の中にあったんですけど、それって高町なのはのことですか？」

「えっ…そうですか」

聞こえてたのか！と思いつつ答える俺。

「もしかして、あなた達ってなのはと同じ職場の人？」

な…なのは？同じ職場？

店員さんの言葉に普通に戸惑う俺とアルト。そして、警戒のレベルを上げる。

「え～っと…店員さんがいってる高町なのはって人と同じかどうかはわかりませんが、確かに俺たちの職場の上官には同名の人物がいます」

こう答えるしかねぇよな。だってよ、この世界じゃ管理局の存在は知られちゃいけない事になってるからな。

「美由希！そんな聞き方じゃお二人が答えづらいでしょ」

といいつつ店の奥から一人の女性が出てきた。

「すいません。私、高町桃子っていいます。そして、こっちが娘の美由希。」

む…娘！！！！！

「わ…若っ！！」

「娘さんなんですか…そうには見えない…」

つい若く見える桃子さんに驚きの声を上げるアルトに俺。

「ほめてくれてありがとう。それで手前の女性がアルトさん…で奥の男性がユウ君でいいのかしら？」

「ええ…そうですが…」

話の状況がまったくつかめない俺とアルト…。

名前を確認した桃子さんから詳細な説明を聞く俺達。

どうやら二人が行ってる高町なのはってのは俺達が知ってるなのは隊長と同一人物で、自分の娘だそうな。

そして、自分達も管理局のことを知ってるとのこと。

なのは隊長から職場の同僚の二人が合流するためにそっちにいくからと連絡があったらしい。

俺とアルトの名前については、そのときに聞いたとのこと。

マジかよ…。

いまいち信用できない俺たちに美由希さんが自分の携帯をひらきなのは隊長と美由希さん、それに桃子さんと一緒に写った画像を見せてくれた。

「これなら信用してもらえる？」

「ええ、信用しますよ。それで、その俺達になんのようですか？」

口をポカーンとしながらいまいち話について来れないアルトはほっといてなんで声をかけて来たのか聞いてみる。

「実は、なのはが来る前にあの子が仕事で迷惑とかかけていないか知りたいのよ。」

と美由希さんが答える。

なるほど…どうやら自分の妹が心配らしい。

それにしてもなんで俺達なんだ?そう思いつつ聞いてみると…。

「あの子…そういう事教えてくれないのよ。それで、なのはがくる前に同じ職場のあなた達に聞きたいのよ。」

とのこと。

なるほどね…。

「わかりました。ですが…俺達は同じ職場とは言え部署が違うからそんなに詳しくはお話できないんですが…それでもいいですか?」

「わかった。それと君は、うちのなのはとは付き合ったりとかはしていないんだな。」

???はい?

「だから!君となのはとの関係だよ!付き合ったりとかはしてないよな!」

何時の間にか男性が一人増えてた。

その男性はと言えば、俺の両肩を掴み前後に揺らしながら俺となのは隊長の関係を聞いてくる。

「あのね!!だれだかわからないけど、このバカがなのは隊長がなんかと付き合える訳ないじゃないですかぁ~!!!」

ようやく話に復帰できたアルトがテーブルをバン!と叩き男性にく

ってかかる。

「アルト…フォローはありがたいがバカッてなぁ…」

「なんかとはなんだ！なのははおれの娘だぁ～！！」

「「も…もしかして…なのは隊長のお父さん？」」

俺とアルト言葉にさらに激昂する…隊長の父親。

「お…お父さんだとぉ～！！貴様にお父さんなんて言われたくないわ～！！！」

といいさらに俺の両肩をぐわんぐわん揺らす隊長の父親…どうやら俺の一言が火に油を注いだらしい。

アルトも止めようとしているがどうやらこの親父…

相当力があるらしくアルト一人じゃどうにもなんねぇ。

それに、その光景に桃子さんも美由希さんも普通に楽しんでた…

誰かぁ～なんとかしてくれぇ。

なのは視点

カランコローン。

「ただいまぁ～…ってお父さん何やってるの～！！！」

「あっ…なのはおかえり～！！」

「なのは隊長～！！なんとかしてくださ～い！！」

「た～す～け～て～…」

私がスバル達を連れてお店に入ったら…お父さんがユウ君の肩を揺らしてるし、それをアルトがそれを止めてる…。

ちなみに会話順は、私にお姉ちゃん、アルトにユウ君の順番。

と…とりあえず、お姉ちゃんは無視してお父さんを止めなきゃ！

数分後…

「もう！お父さん！！私とユウ君は何にもないんだから！！」

「す…スマン…つい…」

お父さんをなんとか止めて店の角で正座をさせてる。私はお父さんの前に仁王立ちしてる。

そして、家族にはユウ君が機動六課の整備士であり単なる職場の同僚であることを説明。

「だ…大丈夫？」

「ユウ兄大丈夫？」

「大丈夫ですかぁ？ユウ？」

「あんたもついてないわね～。」

「なんとかなぁ～。やっぱりなのは隊長の実家だわ…」

私の後ろの方には、お父さんに揺さぶられたユウ君は顔にお絞りを当てソファーの背もたれよっかかってる…。

アルト、スバル、リイン、ティアナが心配そうな顔をしながらユウ君に声をかける。

ユウ君をもう心配させまいと声をみんなの声に反応する…

ユウ君の言葉が若干気に気にはなったんたけど…

でも、元々こうなったのはこっちが原因だから強くは言えない…。

「まぁ、まぁ…お父さんも反省してるんだから～そろそろゆるしてあげても…」

「まったく…お姉ちゃんもー！！なんで止めてくれなかったの！！」

「だって…面白そうだし。それに…もし本当だったらってねぇ～お母さん」

「ええ。もしそうならって…ねえ」

お母さんとお姉ちゃんは私が頼んだケーキを箱詰めしながら笑みを浮かべる。

「お母さん！！お姉ちゃん！！！」

「「ゴメンナサイ」」

まったく…。

私は家族に注意をし後ろを向きユウ君の元へ。

「ゴメンねぇ。家族には私から注意しといたから…」

「いえいえ、大丈夫ですよ。こういうのは意外と慣れっこですから…なっ…スバル？」

ユウの言葉にティアナが続く。

「そういえば…見たことがある光景だったわよね…」

ユウ君とティアナとスバルの会話に？を浮かべる私、それにアルトにリイン。

「ちょ…ちょっとユウ兄！余計な事はいわないでよ！それにティアも～！！」

スバルは思い当たる節があるようで顔を赤くし、ユウ君とティアナに対し声を上げるスバル。

「さてと…そろそろ…」

ちょうどケーキの箱詰めを終えたところでユウ君が声を上げ起き上がる。

「えっ…もう大丈夫なの？」

平気そうな顔をしているユウ君に私は声をかける。

「ええ、ご心配をおかけしました。もう、大丈夫です」

心配そうな私達を尻目に車の準備をしてくると言い外にでるユウ君。

そして、その後にスバルとティアナ…それにアルトが続いて箱詰めされたケーキを受け取り彼に続く。

「なぁ…なのは…」

「何？お父さん？」

彼が出て行ったのを確認したかのようにお父さんが私に声をかける。

「いったい何もんだ？あいつ？」

「もう！まだ納得してないの！彼は、同じ職場の人だっていったで…」

「いや、そういう訳ではないんだ。」

私の声をさえぎるようお父さん。

「じゃあ？どういうこと？」

「あいつ…本当に整備士なのか？なんと言うか…その…色んな修羅場を何度も経験しているような感じがしてな」

「えっ？」

「それは、私も感じたわ。だって、私が声をかけたとき普通に警戒されてたし…え～っと、確か…アルトさんだっけ？彼と一緒に来てた女の子？その子に手を出そうもんならただじゃすまないぞってな感じでね。」

「ほんと？」

私の驚きの声にただうなずくお父さんとお姉ちゃん。

「もし、美由希が手を出していたらまず倒されてただろうな…。それにあの揺さぶりも対して効いてはいなかっただろう。それに今日はいないが、恭也やそれに私でも彼とやり合えただではすまないだろうな…」

「えっ？お父さんや兄さんでも？」

さっきとは違いまじめな顔をしていうお父さんの言葉に声を上げるお姉ちゃん。

私は、その言葉にただ唖然とするしかなかった。

「リイン何か知ってる？」

私は、すぐに頭の中を整理してこの中で一番ユウ君について一番詳しいであろうリインに聞いてみた。

「リインは…よくわからないです…ごめんなさい…」

リイン俯き私の質問に答える。

「ううん、大丈夫だよ。ごめんね、リイン。」

「ごめんなさいですぅ」

私達はリインの頭をなでつつ、あきらかにおかしい態度をとるリインへの追求を諦めた。

「それじゃ、いくね！」

「ああ、気をつけてな」

「気をつけてね」

「うん、行こうリイン。」

「はいです」

そして、家族と別れをすませた私はみんなが待つ車へとのりこんだ。

「待たせてごめんね」

「ごめなさいですぅ～」

「いえいえ、それじゃあ～しゅっぱ～つ！！」

「アルト…おまえが仕切ってどうする…」

ユウ君の突っ込みに車内は大爆笑。

そして、車は待機所へ…。

その車中…私はお父さんが言ってた言葉について考えていた…。

それがいったいどんな意味をしているのか…今は何もわからいまま…

その２０（後書き）

うっしゃーーーー！！！５話連続投稿終了！！！
ちなみにコレ思いつきでやっちぃました。いわゆる気分転換ってヤツの一環です。ですが、ここまでギャグ方面よりもシリアス方面の方が強くなってしまっているせいかなんだがフラストレーションが…という訳で次回は久々のドタバタにできればと思っております。
では次回。

その２１（前書き）

はやて視点

「ユウ！これ頼むわ！」

「はいはい…よっと…」

「ユウ！今度これをこっちに！」

「へぇ～い」

「ユウ！」

「今度はなんです？」

「ただ、呼んだだけや」

「…。ハァ～」

なんや！あの「またどっから仕入れたんだよ…その古い笑いわ…」って言いたそう態度は！！

大きなため息をしつつ、そのまま持ってるお皿を運ぶユウ。

ったく…。

まぁ、ええ。

まだ、あのメッセージをまだ見つけてないからやろな。

なら、ネタばらしが楽しみや。

現在、待機所にて夕食の準備中。

機動六課前線メンバー全員と現地協力者の皆様方、そして、今回日頃の鬱憤晴らしといつぞやの仕返しのためだけに呼んだユウと何にも知らんとただついて来たアルト。

このメンバー全員で今夜は鉄板焼きや。

隊長陣とリイン、そして現地協力者であるすずかちゃんにアリサちゃん、それに美由希さんにエイミィさんとアルフで料理の準備。

新人フォワード陣とユウとアルトで食器類等を準備しとる。

そして、ウチは料理の準備をしつつ陣頭指揮や！

材料については、大変ありがたいことに現地協力者が用意してくれたのとたまたま東京に来ていたミツキが車を借りに行ったユウ達に飲み物意外にも食料の差し入れを持たしてくれてたらしく、もしかしたら足らんかも？と思っとったウチ等は用意する必要がなかったわ。

ちなみに余ったらどうすんのか？考えとったらユウが…。

「姉貴からこっちの食料が余ったらこっちに送り返してくれですって。理由は、こっちで使うからだそうです」やて。

相変わらずあいつは…。

そういうことで、先に現地協力者の方が用意してくれた物を使うことにしてミツキの方はその後でっちゅうことにする事となりみんなで準備しとる。

ウチはその夕食の準備をしとるみんなを見ながら感謝の気持ちでいっぱいや。

「はやてちゃんがシミジミしている今のうちに…。リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その２１！始まりますですよ～！」

「あっ！！リイン！！それウチが今言おうと思っとったのに～！！！」

「えへへっ。言ったもん勝ちですよ～！！はやてちゃん」

その21

その２１

ユウ視点

ジュー。

「ユウ兄まだぁ～！！」

「まずかったらただじゃすまねぇ～ぞ！！」

「へいへい…ほらぁよっと。お～いとりあえず1回目上がったからもってけぇ～」

「「はっ…はい」」

スバルが座っているイスから立ち上がり、こっちを向きながら俺を急かす。

それに続いてヴィータ副隊長が席に座ったまま腕組みしながらこっちを見ながら圧力をかける。

俺は、中華鍋をふりつつも二人の問いかけに答え出来上がったおよそ5人前のチャーハンを皿に盛り付け持ってくよう指示する。

その声に答えたエリオとキャロが大皿を持っていく。俺は再びチャーハンを作り出す。

やれやれ…。

やっぱり足りなかったか…。

現在、俺は待機所にあるキッチンに立ってる。

とりあえず、状況の説明をすれば…夕食の準備が終わり機動六課と現地協力者の方々との友好を目的にした夕食会が始まった。

ああ…始まったよ！

でもな！初対面の連中による自己紹介タイムが終わったて１時間もしない内に現地協力者が用意してくれた食材（焼肉）はあっという間にそこをつき、姉貴が用意してくれた食材に手をつけるハメに…。

だが、入っていたのが業務用の冷凍チャーハンの元。

所謂、スーパーなんかに売ってる冷凍チャーハンの業務用バージョン。

その量…一袋につき２０人前…それがダンボールに3袋…計６０人前ってことだ。

作り方は、ただ炒めて味付けするだけ。

すると…あら…どうでしょう…お店で出してるようなチャーハンの

出来上がり！！

ってな感じだったんだが…。

「ほらよっと。お次！！」

さっきとは別の中華鍋で炒めたチャーハンを大皿に盛り付ける。

ちなみにこれは料理が大体出来るヤツなら問題なく作れる。

とは言え、現在任務継続中のため隊長陣やフォワード達にも現地協力者の方々はある意味ゲストのためやらせるわけもいかず…結果的に俺とアルトでやるハメに…。

俺の目の前では3つあるファミレスなんかにある業務用のコンロがフル回転。

その全てでチャーハンを作っている。

どうやってるかといえば、両手でそれぞれの中華鍋をふる。

その間、空いてる中華鍋については焦がさないよう注意しつつ3つの中華鍋を入れ替えしながら炒めていく。

味付けについては、塩コショウ…それと一緒に入っていた姉貴特性のチャーハンのタレを鍋肌からひと垂らし…。

といった具合にチャーハンをつくっては次のチャーハンを作り…それを繰り返してる…それも一人で…。

そういえば…アルトのヤツは？つーか手伝え！！！

アルト視点。

こっちだって忙しいんだよ！！！

私は空いたお皿を片付けたり、スバル達から先に確保していたお肉を守ったり、それに今出来たばかりのてのチャーハンをパクリ！ってね。

う～ん、おいひぃ～。

「「おいしいです」」

「なかなかやるな。だが、はやての方がこれより１０倍うめぇぞ」

私は両手を口に両手を抑えて満面の笑みでおいしさを表現。

それに続いて、エリオとキャロが得意のユニゾンで感想をいい、それに続いてヴィータ副隊長は部隊長へのひいき目満載の感想が続く。

「う～ま～い～でぇーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

部隊長は昔あった料理漫画にでていたどっかの料理会の会長がやってたのと同じように口からビームを吐き出しつつおいしさを表現…っていうかいくらなんでも大げさですよ…部隊長。

とかなんと思いもう一口！パクリ！

「アルト。おまえは手伝いに行かなくもいいのか？」

げぇ！シグナム副隊長…。

どうやらこの状況を一番冷静に見ていたのであろうシグナム副隊長は他のメンバーに気づかれないよう自分の席を立ち、私に近づき耳元で小さな声で話かけて来た。

「あ…今いこうと思ってたんですよ～」

「そうか…ならいいのだが…」

私は、シグナム副隊長にその場の勢いで考えた言い訳いい席を立つ。

それを聞いたシグナム副隊長は、その言葉を信じてくれたらしく自分の席へと戻っていた。

ふぅ～危ない、危ない。

このままさぼってたら副隊長のことだ。普通にレヴァンティンを抜いて切りかかってくるからなぁ～。

とりあえず、ユウが作っておいてあったチャーハンの入った大皿を手にしてそれをみんなの所へ持っていく。

「アルト、それそのままちょうだい」

「ちょっと、スバル。あんたまさかそれ全部一人で食べるつもりじゃなんじゃ…」

私の持ってきた大皿を見たスバルがそれをよこせと私に要求。
そして、それを見たティアナが横にいるスバルに注意する。
が…。
「うん、そうだよティア」
「そうだよティア…って…あんたね！！ちょっとは他の人のことも考えなさい！！」
ティアナの注意に対しスバルは満面の笑みでティアナの言葉をまるで聞いていないかのように答える。
それを聞いたティアナは、再度スバルに周りのことを考えるよう注意する。
でも…スバルは…
「だってぇ～…おいしいんだもん！！」
やっぱり…聞いてないね。
ティアナの注意をニッコリしながら受け流すスバル。
「開き直るなぁ～」
「ティア～痛いよ～ギブギブ」
ティアナはスバルをプロレス技で言う所のヘッドロックのスバルに

かける。

その痛みにギブアップを宣言するスバル。

これってなんというか…漫才？

私は大皿を持ちつつ、その光景をただ呆然としながらその場に立ち尽くす。

「まぁ、まぁ。ウチ等はおなか一杯やからスバルが食べてもええよ」

「本当ですかぁ～！！」

そんな状況を見て八神部隊長がスバルに助け舟を出す。

その声に大喜びのスバル。

「いいんですか？八神部隊長？」

「うん、ええよ。それにほらまだ来るみたいやし」

ティアナの問いに八神部隊長はキッチンを指差す。

そこには、大皿に盛られたチャーハンがさらに増えていた。

「はい、スバル」

「アルト、ありがと！」

「アルト、こっちにも頂戴。エリオもほしがってるから」

「アルト～こっちもお願～い」

「アルト…こちらにも頼めるか」

私は持ってる大皿をスバルに渡す。

すると、フェイト隊長、シャマル先生…それにシグナム副隊長からこっちにも大皿を持ってくるよう声がかかる。

「はい、は～い！ただ今～♪」

私は、まるでレストランのウエイトレスかのように動き回る。

はやて視点

「それにても本当、よく食べるねぇ～」

「本当。いくら食べ盛りとは言っても…」

スバルとエリオのそのものすごい食べっぷりをみて、すずかちゃんとアリサちゃんは唖然としながらその光景を見つめる。

そりゃそうやろ。

なんせ、5人前はあろう大皿に入ったチャーハンがものすごい勢いで消えてくんやから…。

スバルとエリオの前には、空になった大皿がそのものすごさを表す

かのように積み上げられとる。

これじゃ…ユウとアルトは大変や。

そう考えたのはすずかちゃんも同じらしく、自分の席を立ってキッチンの中へ入っていった。

ウチもそれに続く。

「あれ？なのはちゃん？どうしたの？」

ウチ等がキッチンに入った所で目の前になのはちゃんが立っ取った。

そして、すずかちゃんがウチより先になのはちゃんに声をかける。

「あっ…すずかちゃんにはやてちゃん…それがね。忙しそうだったから手伝おうと思ってここに来たんだど…ユウ君が…」

「こういうのは、慣れっこですから大丈夫ですよ。」

すずかちゃんの問いかけに振り返ったなのはちゃんが答える。

それに、中華鍋を振りつつ、ユウがなのはちゃんに続く。

「慣れっこって、いったって…」

ユウの答えにいまいち納得がいかないすずかちゃん。

「ええ～っと、月村…さんでしたか。慣れっこってのは、あそこでものすごい勢いで食べる短髪の…スバルってヤツなんですが…あい

つとは昔からのご近所さんでしてね。まぁ～なんというか色々あってあいつん家の飯をウチの姉貴が作ってたんですよ。でも、見てのとおりあんなに食うんですよ。それも父親意外の3人…いや今は2人か…それで、姉貴一人じゃ大変で。それで色々と手伝ってたんですよ」

ユウは作業を続けつつ、すずかちゃんに理由を説明する。

「なるほど…。それでいつもどれくらい作ってたの？」

ユウの説明に納得したしたすずかちゃんが質問をする…。

そういえば、ギンガもスバルに似てものすごぉ食べよるって言うとったし…それにあの話やとスバルのお母さんも食べよるんやね。

「そうですね～。一人につき大体…一食２０～３０人前ってところですかね？」

「一人２０人前～３０人前！！それが一食でぇ！！」

「はい。そんなもんです」

ユウの答えにただ驚くばかりのしずかちゃん。

っていうかこれにはウチもなのはちゃんもびっくりしたわ。

「それで、ユウ意外は手伝わへんかったのか？」

今度はウチがユウに質問する。

「まぁ、料理を運ぶこととかはスバルやギンガとかも手伝ってはくれましたが…ただ、料理の方は…」

ユウがウチの質問に答えようとしとる途中で言葉に詰まる。

というかウチ等の方をみてゲッ!!とした表情になっとる。

それに気づいたウチはそれとなく後ろ振り返る。

それにしても何や?この悪寒…。

「ユウ兄…余計なことは言わないで…」

ああ…なるほど…。悪寒の原因はこれか。

ウチの後ろでは、チャーハンの大皿とスプーンを両手に持ち口元に米粒つけたスバルが…怒りの表情でたっとった。

「料理の方は?それでその続きは?」

「ええ~っと…何と言うか…その…」

どうやら、後ろのスバルに全く気づいていないすずかちゃんがユウに答えの続きを催促する。

その問いにどう答えていいのか困るユウ。

「まっ…まぁ、それぞれ色々あるってことだよ。ね!ユウ君」

「ええ、まぁ…そんなところです」

答えに困っていたになのはちゃんが助け舟をだし、それにユウが続く。

一方、その答えを聞いたすずかちゃんといえば…

「ふ～ん…そうなんだ」

といいつつ、いまいち納得がいってない様子だが、それぞれの事情となればそれ以上突っ込む訳にもいかない様子。

なんか色々と大変なんやね。ユウ…。

その後、ウチ等はそのユウの動きの良さに関心しつつもそのままいたら邪魔になるんで自分達の席へと戻っていった。

ちなみにスバルはといえば、ウチ等が戻ろうとするころには、何時の間にか自分の席にもどっとったわ…。

その２１（後書き）

とりあえず今回は一話のみの更新です。

次回は銭湯準備！になります。お楽しみに

では次回

その22

アルト視点

「ここが…」

「スーパー…」

「銭湯？」

私、スバル、ティアナの順で目の前にある建物スーパー銭湯という来た事もない建物を見ながら声を上げる。

現在私達は、食事を終えサーチャーを監視しつつみんなでお風呂を済まそうってことになったのだが待機所にはお風呂がないってことでなのは隊長達の指示で着替えを持ってここに来たんだけど…。

「ほらほら！そんなところでぼざっとしてないでみんなこっちよ！」

「「「はっ…はい」」」

シャマル先生の呼びかけに中へ入る私達。

「いらっしゃいませ～。団体様ですか？」

「あっ…はい。大人１６人と子供４人です」

中に入ったら、店員さんが声をかけて来た。

その声になれた様子の八神部隊長が店員さんの声に答える。
ちなみに子供は…エリオにキャロ…それにリイン曹長にアルフちゃん…だって。
「あの～ヴィータ副隊長は？」
「私は大人だ！」
スバルの問いかけに大人と主張するヴィータ副隊長。
でも…その…なんというか…やっぱり子供は５人じゃ…
「アルト…でめぇ、何がいいたい？」
「いっ…いえ！何でもありません！」
どうやら今思ったことが顔に出ていたらしい…。
なんとか切り抜けたけど…まだこっち見てるよ…これ以上は本当にまずいよね。
ヴィータ副隊長が逃げるように離れた私の耳にエリオとキャロの声が聞こえてきた。
「お風呂たくさんあるんだって、楽しみだね！エリオ君」
「うん。でも…スバルさん達と楽しんできてね」
そういえばここって、男女別だったよね。それでエリオは男湯にい

こうとしてるんだ。でも、キャロはエリオと一緒に入りたいんだね。
私はそのやり取りそっとのぞき見る。

「えっ…？エリオ君は？」

「えっ？！だって僕男の子だし…」

「でも、あれ。」

キャロがどこかを指差ししてたので私もそれを見る。

えっと…何々…注意書き？

「えっと…男児の女湯への入浴は１１歳以下の男児となります…」

「エリオ君１０歳！！」

注意書きを読んだエリオは「ゲッ」といった表情。

その一方キャロは、「エリオ君一緒に入れるねって」言わんばかりの満面の笑みでエリオの歳を言い、一緒に入ろうとエリオに迫る。

「私も…一緒に入りたいな…」

「えっ…ええっ！！で…でも、僕男の子だし…それに…スバルさん達にも色々と迷惑が…」

そんなキャロの様子を見ていたフェイトがキャロに加勢。

答えに困ったエリオは、スバル達に迷惑がかかることを理由に断ろ

うする…

が！！

「私は問題ないわよ」

「そうだよ！それに何度も頭洗ってあげる！っていってるのに…」

エリオの思惑は、ティアナ、スバルの言葉によりモノの見事に砕け散る。

その後、すずかさん達もスバル達に同様の答えをしエリオの逃げ道がどんどん狭まっていく。

「そっ…そうだ！僕が女湯へいったらユウさんが一人でかわいそうじゃないですか…だから、すいませんがご遠慮…」

「そんなことないわよ。っていうか、ユウなら先に言っちゃったし…それに、「一人でゆっくり入りたいからフェイト隊長にエリオのことを頼んどいてくれ」って…そういえば言われてたし」

「ええっ～！！！それ！本当ですかぁ？アルトさん！」

私の答えに驚くエリオ…どうやら納得がいかないらしく、私に聞き返してくる。

これって…ある意味とどめの一撃？

「本当だよ。という訳でフェイト隊長？ユウからの伝言ですが…」

エリオの問いかけに本当であることを伝える。そして、フェイト隊長に問題ないか確認を取る。

「うん、わかった。それじゃエリオ行こうか」

「あいつも中々わかってるじゃないかぁ～あたしは感心したよ～」

私の声に満面の笑みで答えたフェイト隊長。そして、アルフちゃんがフェイト隊長に気を使ってくれたことに感謝しつつ、フェイト隊長と共にエリオを引きづりながら女湯へと進む。

「そっ…そんなぁ！！」

女湯へと引きづられて行くエリオ。その嘆きの叫びを聞いた私は…頭の中にドナドナを流していた…。

はやて視点

うわ～ええ～な～。

お風呂に入ったウチ等は日頃の疲れを湯船に漬かりながらそれを癒しとる。

でも…まだ、任務中やからしな。あんま長湯はできへんけど…。

「それにしてもなのは相変わらずいいプロポーションしてるねぇ～」

「そりゃあ、いつも鍛えてるから…」

なのはちゃんを見た、アリサちゃんがうらやましそうな声をあげる。

それを聞いたなのはちゃんは恥ずかしながらそれに答えとる。

「フェイトの肌もスベスベ～」

「す…すずか…くすぐったいよ…」

すずかちゃんもフェイトちゃんの肌を触りながらうらやましがっとる。フェイトちゃんといえばくすぐられてるように感じてるみたいや。

それにしても、壮観な眺めや～！！

ウチの周りには、ここにきた女性陣＋エリオが一緒の湯船につかっとる。

そして、その湯船にはまるでメロンのような胸がいくつもプカプカ浮かんどる。

ゆっとくけどここにいるなのはちゃん達の胸をこれだけの物にしたのはウチやからな！！

「はやてちゃん…そんなに力説しなくても…」

何を言うとるなのはちゃん！これはウチが頑張ってみんなにコミュニケーションした結果や！！

「私も六課にきて少し大きくなったのかも…」

そうやろ！アルト！

「それじゃ…私もエリオ君のために…お願いします！部隊長！」

おっしゃ！！キャロ！ウチにまかせとき！！

「キャッ…キャロ！なっ…何言ってるの！！！」

「だって…エリオ君…フェイトさん見たいな胸の大きい人が好きなんでしょ？」

「ご…誤解だよ！！それって誰がいったの？」

キャロは顔を赤らめながらエリオに確認する。

エリオは顔を真っ赤にし、キャロの問いかけを否定しだれが言ってたのか確認する。

「えっ…それって、部隊長が…」

「部隊長！余計なこと言わないで下さい！！」

「エリオ…男なんて大概そんなもんやで？」

「…」（ガーン）ブクブク…

キャロの答えにエリオがウチに文句を言ってくる。ウチはきっぱりと言い切る。

それを聞いたエリオは無言のまま湯船に口まで浸かりおった。
ちなみに…フェイトちゃん達はとえば…ウチの答えになんと言っていいのかわからない表情やったわ…。

「それにしても…部隊長？」

「なんや？アルト？」

「そういえば、ミツキ先輩にもそのコミュニケーションってやったんですか？」

ふと、何かに気づいたアルトがウチに聞いてきた。

「どうしてそんな事聞くの？アルト？」

アルトの問いかけにティアナがその理由を聞く。

「だってぇ～ミツキ先輩って…そのなんというか…胸小さいじゃない？それって八神部隊長とコミュニケーションをしてないのかなぁ？って」

ティアナの問いにアルトは周りを確認しながら答える。

「アルト…何もそんなに警戒しなくても…」

「だってぇ～、自分で言っててなんだけど～これってなんかのネタ振りみたいな感じになっちゃってるような気がして…。それに先輩、今日東京にいたし…それに、もしいたら後が怖いし…」

アルトの異常なまでの警戒心に疑問の声を上げるスバル。アルトは、警戒している理由をスバルに告げる。

「悪かったわね…洗濯板で…」

「み…ミツキ先輩！！！！」

「みっ…ミツ姉！！って…あれ…」

ミツキ？の声に驚きの声を上げ、立ち上がるアルト。スバルも驚いたがウチがミツキの顔写真が貼り付けてあるお面をつけてしゃべってるのにどうやら気が付いたらしい。

「ぶ…部隊長…そのお面…いったいどっから用意してきたんですか…」

「なんかあったときに使おうと思ってなぁ。密かに持ちこんだんや。どうや？おもろかったやろ？」

ウチのお面姿にジト目のティアナがどっから用意してきたんか確認してきた。

それにしても…ティアナ…ジト目はアカンって。

「部隊長！！！からかわないで下さい！！（怒）」

「アハハハハっ！！すまんなぁ～アルト」

アルトもようやく気づいたようで涙目でウチに怒りの声を上げる。

ほんまにびっくりしたんやろなぁ～。とりあえず、詫びいれとこか。

「あの～それで…どうなんですか？部隊長？」

キャロは真剣な表情で聞いてくる。

「それなら…なぜかミツキちゃんだけ大きくならなかったのよ♪」

ウチが答えよう思ったらシャマルが答えとった。

シャマルの答えに「そうなんですか…」といまいち納得しとらん様子。

でも…シャマルの言うとおりや。なぜかミツキだけうまくいかんかった…。

作者が圧力でもかけてきたんやろか？

それは、まぁ…ええとして。

そういや、ユウのヤツいつの間に男湯にいったんやろ？

って言うても、男湯見ても楽しくないわな…

つー訳で！次回はこの続きや！！チャンネルはそのままで！

って！チャンネルないやん！！

その２３

その２３

はやて視点

「ねぇ、ねぇ、ティアにアルトあっちのお風呂に入ってみようよ」

「そうね、いきましょうアルト」

「了解～♪それでは部隊長行ってまいりま～す♪」

「いってらっしゃい。」

「あんまり、はしゃぎすぎないでね。まだ、任務中だから」

「「「は～い」」」

スバルは、どうやら他のお風呂にも興味をもったらしくある程度話終えたところでティアナとアルト誘おて目的のお風呂へと向かった。

アルトはウチに声をかけその声にウチが答えなのはちゃんがはしゃぎすぎないよう注意する。

「それじゃ、私達は体を洗いにいこうか。ねぇ、エリオにキャロ」

「は…はい」

「わかりました。フェイトさん」

それに呼応してかフェイトちゃんがエリオとキャロを洗い場へと連れてく。

その声にエリオは顔を真っ赤にし下を見ながら、キャロは笑顔でついていく。

残るは、八神家全員となのはちゃん。アルフに美由希さん…すずかちゃんにアリサちゃん、それにエイミィさんや。

「それにしても、みんな元気だぁ～」

スバル達を見たアリサちゃんが一言。

「それにくらべ、ウチ等はまったりと…」

アリサちゃんの声にアルフは極楽気分でそれに続く。

「それにしても、はやて。さっきのお面の人ってだれ?」

すずかちゃんが、ウチがつけてたミツキの顔写真がついたお面が誰なのか聞いてきた。

「あ…それはな、ユウのお姉ちゃんでチャーハンの元を差し入れしてくれた人や」

「へぇ～、彼のお姉さんなんだ。この人」

それに答えるウチ。その答えにすずかちゃんはウチからお面を受け取ってそれをみつつその答えに返答していた。

「それだけではなく、はやてちゃんともお友達なんですよ～」

「そうなの？」

リインが自慢下にミツキについての追加情報をいう。すずかちゃんは本当かどうかウチに聞いてくる。

「そうや」

「はやてちゃんがミツキちゃんのいる部隊に研修しにいった時からね」

「私達とも色々とお世話になっています」

すずかちゃんの問いにウチが答え、その後にシャマル、シグナムが追加情報を加える。

「あたしはあいつの事嫌いだがな」

ヴィータ…えらい、個人的な話やな。

「そりゃ、ヴィータはミツキに会う度に色々からかわれてるからね～」

「そして、その度にケンカを売っては返り討ちに会うんですよ～♪」

「うるさいぞ！リイン！本気でやってないだけだ！！」

「それも、何度も聞いたきがすのだが…」

「…」

そして、ヴィータの答えにシャマルがその理由を言い、リインがその後の結果を言う。

その内容を聞いたヴィータが弁明をするが、すぐにシグナムに突っ込まれ黙ってしまう。

「まぁ、まぁ、それじゃユウ君とも顔見知りって訳だ」

ウチ等のやり取りを見ていたすずかちゃんはヴィータを宥めつつ次の質問をする。

「いや、ユウとは六課で初めてあったんよ」

「ユウのことを知ってたのは、シグナムだけですよ～♪」

「そうなの？」

すずかちゃんの質問にウチが答えその後をリインが続く。

それを聞いたすずかちゃんはシグナムに確認する。

「はい。ユウとはなんどか私がいた部隊に手伝いに何度か来て貰っていまして…それからの付き合いです」

「「へぇ〜」」

シグナムの答えにすずかちゃんだけではなくなのはちゃんまで声を上げとった。

ティアナ視点

「なんか色々とすごいねぇ〜」

「ほんとだぁ〜」

「すっご…」

私とスバル、それにアルトの3人は、このスーパー銭湯にあるいろんな所を巡って現在露天風呂に来ている。

露天風呂に来た私達は、アルト、スバル、私の順でその豪華さに驚きの声を上げながらお風呂に入る。

「そういえば、アルトってミツ姉と知り合いだったの？」

ある程度まったりしたところでスバルがさっきの八神部隊長とのやり取りを思い出したのかアルトに質問していた。

「そうだよ。私、ユウと同期だからね。その関係でなんどか先輩に色々と教えてもらってたの」

「そうなんだ」

スバルの問いかけにアルトが答え、その答えに合いの手を入れるスバル。

「それはそうと…ほんとスバルって大きいよね。胸」

「えっ…そうかな？」

スバルの胸元を見ながらアルトが声を上げ、その声を聞いたスバルは、照れながらそれに答える。

「うらやましいなぁ～私なんてあまり大きくないし…ねぇ！ティアナ」

「へっ…？そ…そんなの関係ないわよ！」

アルトは、うらやましそうな声を上げ、私に同意を求めてくる。でも、私はそんな事関係ない旨をアルトに伝える。

そ…そうよ！うらやましくないわよ！

「ほんと～♪」

「ティア～ほんと～♪」

「ほ…ほんとよ！！」

私の答えにアルトがにやけ顔で追撃をかけてくる、それに続くスバル。

私は、二人答えるが…納得してないわね。

「「本当の事言おうよね～ティアナ（ティア）」」

さらに近づいてくるスバルとアルト。

「いいかげんにしろ！！」

ゴス！！ガン！！

「「いっ…痛ぁ～い！！」」

あまりにもうるさい二人に対し、私は殴りつける。

その痛みに声を上げるスバルとアルト。

まったく…いいかげんにしなさいっての！！！

その２３（後書き）

後１話、海鳴編が続きます。

その２４

その２４

ユウ視点

「ったく…いったいいつまで待たせるんだ～」

現在俺は、温泉を一人でゆっくりと堪能しスーパー銭湯の受付け付近のソファーで女共を待っている。

それにしても、エリオには悪いことをしたよな（笑）

「ユウ兄！お待たせ～」

とかなんとか考えていたらみんな一斉に出てきて、その代表としてスバルが俺に声をかける。

「おっせ～よ」

「ごめん、ごめん」

スバルの声に俺は遅い旨を伝えそれにスバルが答える。

「ユウさん！！どーして一人でいっちゃうんですか！！！（怒）」

俺とスバルとの会話は見たエリオが怒りの表情で俺に詰め寄ってくる。

「ああ…なんだぁ～その～いい社会勉強になっただろ（笑）」

「ユウさん！！！」

俺の答えに納得いかないエリオが声を上げる。そんな時…。

「センサーに反応！」

「クラールヴィンドにも反応がありました」

どうやら、キャロのケリュケイオンとクラールヴィントに反応が出たらしい。

「ほなら、任務開始といこうか」

八神部隊長の声と共に一斉に動き出すフォワード陣。

「ユウとアルトは現地協力者の皆さんをガードしつつ車で待機所に戻ってな」

「「了解」」

という訳で行動開始…だな。

アルト視点

反応がでておよそ１０分くらい。

現在、ティアナ達がロストロギアを指定ポイントまで追い込んでいる。

指定ポイントでは、八神部隊長を始めとした隊長陣が結界をはりつつティアナ達の様子を見ている。

そして、私達といえば…。

「ちょ…ちょっと～！！なんでこんなところにガジェットがでてるのよーー！！！」

なぜか私達をガジェットが追いかけてきている。それも１０体…しかもいつも見ている色とは違い黒。

私はその光景に驚きの声を上げる。

ちなみに現地協力者の方々には、私達が囮になるといい付近から離脱してもらっている。

「知るかーーーー！！っていうか早く連絡入れろーーーーー！！！！」

「う…うん！こちらロングアーチ０３！ロングアーチ００応答願います！！八神部隊長！！応答してください！！」

ザーーーーーーーーーーーー。

「ダメ！つながんない！！」

ユウの声に部隊長に通信を繋ごうとするが、ジャミングがかかっているみたいで通信がつながらない。

「ジャミングかぁ…それに…これだけ逃げ回っているのに応援がこない…となれば、向こうも気づいていない…かぁ…ならしかたがないな」

そう私の答えに声をもらしたユウは、片手でハンドルを握り空いた手でパネルを展開しなにやら操作しだす。

「ちょ…ちょっと！！どうして車を止めるの？」

パネルの操作を終えたユウがガジェットとの間に距離を置き近くにあった公園の駐車場に車を止める。

「おまえはここで待ってろ。連中は俺が片付けてくる」

いつものユウとは違い、真剣…なんだか怖いように見えるユウが私にそう伝え車を降りようとする。

「ちょ…ちょっと待ってよ！いくらなんでも１０体のガジェット相手にユウ一人でって…危ないよ！」

私は、ユウの腕をつかんで心配そうな声を上げる。

「心配すんな。たいした事じゃないよ。おまえはこの車の中に入れ

ば大丈夫だから」

ユウは私に振り向いて笑顔で答える。

「でも！！そういってあの時だって怪我したじゃない！！」

「あの時って…おまえまだ覚えてたんか。姉貴が大怪我したあんときの事…」

私は昔のことを思い出しユウに声を上げる。それを聞いたユウは静かに聞き返してくる。

「うん…ごめん…でも！！」

ユウの答えにうなずく…そして、涙目でユウに再度声を上げる。

だって…だって…。

「まったく…、心配するなっていってるだろ。それに、すぐ戻ってくるから安心して待ってろ。大丈夫だこの車の中じゃ問題ないから。」

ユウは、私の両肩を掴んで私を落ち着かせる。

そして、「言ってくる」と言い残し車から外へでる。

ユウが降りた後すぐに、車の周りをバリアが展開された。

「よし！！これなら！！こちらロングアーチ０３！ロングアーチ００！！応答して下さい！！」

私は、少し時間が経ち、意を決した私は車のコンソールから別の通信機を取って部隊長達への通信を再会した。

今の私に出来ることはこれだけだから…！

はやて視点

「なんやて！！それは、ほんとか！！」

ウチはアルトの通信をいつも使っている回線とは別の…以前ミツキから聞かされていた緊急用の回線から受けている。

（はい！今、ユウが一人で迎撃しています！援軍を！）

「了解やいまから向かう！」

（了解！お願いします！）

アルトとの通信を終えたウチはシグナムとヴィータを引き連れユウの元へと急ぐ。

が…。

「遅かったですね…部隊長」

ウチ等が到着した時には黒いガジェットの残骸とケロッとした表情のユウが後始末をしとった…。

「一体何があったんや？」

その状況を見たウチがユウに確認を取る。

「それは、後にしてもらっていいですが？今はこの状況をなんとかしないと…なんせ結界張ってなかったんで…さっさと元に戻さないといろいろと…」

「そ…そやったな…ほな手伝うわ」

とユウの答えに納得したウチは後始末を開始した。

そして…無事がロストロギアの回収も無事に終わりウチ等は帰宅の途についた…。

「お帰りなさい…お待ちしておりましたよ…部隊長（怒）」

無事ミッドに帰って来たウチを部隊長室で向かえてくれたんは、なぜか怒りの表情のグリフィス君やった。

「ぐ…グリフィス君…な…何をそんなに怒っとるんや？」

ウチの問いにグリフィス君は無言のままウチにメッセージカードを見せてきた。

「こ…これは…ウチが書いた…」

「そうです。ユウに宛てて書いたカードです」

ウチの答えにグリフィス君が確認したかのように話かけてくる。

「な…なんでグリフィス君がこれを…」

「これはですね…実は…」

ウチの質問にグリフィス君が今までの事情を説明してくれた…。

「ゆ…ユウのヤツ！！だましおったなぁ～それにグリフィス君やアルトまでー！！」

事情を聞いたウチは怒りの声を上げるが…。

「それは、部隊長があんな事考えるからですよ…さぁ…こちらでお話しましょうか…」

「いややーーー

その２４（後書き）

海鳴編終了～♪次回はオリキャラの設定集を公開した後、オリジナル話になります。

オリキャラ設定集～その１

オリキャラ設定集

作者
「さて、色々悩みましたが、現時点までで公開出来るオリキャラ達の設定を公開します。」

ユウ
「まず始めは、主人公であるこの俺から!!…って、こんなこと言わすなよ」

作者
「たまには、いいんじゃないですか?では、ごらん下さい」

名前：ユウ・サエグサ

年齢：　１７歳

性別：　男

身長：　１７４ｃｍ

体重：　６４ｋｇ

性格：　マイペース、面倒くさがり

階級：　一等陸士

髪の色：　黒

瞳の色：　黒

魔力の色：　紅蓮

魔力ランク：　A～

所有資格：　デバイスマスター、運転免許、捜査官資格　など

趣味：　無趣味

好きな物：　車、ゲーム

苦手な物：　キレ時のミツキ、ゲンヤ、ギンガ、スバル

二つ名：紅蓮の跳ね馬

備考：
考えて話しているが、それが余計な一言となってしまう事が多い（特にミツキやギンガなどに対し）

所属していた部署は短期での稼動部署を含め４０以上（経理や総務、武装隊に広報部隊など等）

捜査官としては、潜入捜査を得意とする。

ユウ

「まっ…とりあえずこんな感じかな？」

作者
「そうですね。魔法が使えることは言ってたので魔力の色やランクは公開しました。」

ユウ
「それにしても、備考の余計な一言って…」

作者
「いわゆる、お約束です」

ユウ
「あのな～！！」

作者
「次はミツキさんです」

名前：ミツキ・サエグサ

年齢：　２０歳

性別：　女

身長：　１５５ｃｍ

体重：　ヒ・ミ・ツ

性格：　優しく明るいがキレると怖い

階級：　地上本部勤務時：少将
　　１０８部隊勤務時：一等陸尉（執務官の時も同待遇）

髪の色：　少し茶色がかった黒

瞳の色：　黒

魔力の色：　蒼

魔力ランク：　ＡＡＡ～

所有資格：　デバイスマスター、メカニックマイスター、運転免許、執務官など

趣味：　機械いじり、魔道兵器、防衛システムの開発

好きな物：　車、デバイス、

苦手な物：　怒る男性（ゲンヤ、レジアスなど）

二つ名：　蒼龍の舞姫（正式名称：蒼き伏龍の舞姫）

備考：

いわゆるメガネっ娘。

人の面倒見がよく頭の回転が速く、相手の行動を先読みしユウ達の

サポートをする。

その一方、自ら危険に飛び込む傾向にあり、ユウやナカジマ家を心配させる。

幼少のころから、先天性の呼吸器系の病を持っており、一度発作が起きると呼吸困難に陥る（発作は不定期で主に疲れが溜まってくるとおきるらしい）普段は薬でそれを抑えてる。

およそ４年前スバルとギンガが空港火災に巻き込まれる少し前に参加した事件捜査にて大怪我をおったが、まだ完治はしていない。

以前は、執務官として事件などの最前線にでていたが、怪我や病の影響で現在は、デスクワークのみを行っている。

あくまでも趣味で行っているという魔道兵器、防衛システムの開発については、地上本部等で採用されている。

１０８部隊では、執務官以外にも技術開発室の室長をも兼任。

胸囲については、はやていわく洗濯板（サイズはＡ）。

以前、はやてがコミュニケーション（それをすると胸が大きくなる（はやて談））をしたが今だ効果はあらわれず。

ミツキ

「ちょっと～！洗濯板はないでしょ！！もっと大きくしてよ！！」

作者

「それはですね、私大きさより形なんで」

ミツキ
「あっ…そっ…」

作者
「では、最後は～」

ノア
「あたいだぁ！！！」

名前：　ノア
年齢：　？
性別：　女
身長：　５０ｃｍ～１８３ｃｍ
体重：　？
性格：　男勝り
階級：　陸曹
髪の色：　赤
瞳の色：　茶色
魔力の色：　白銀

魔力ランク：　ＡＡ～

所有資格：　執務官補佐　など

趣味：　お菓子の味見、

好きな物：　ミツキの料理。

苦手な物：　納豆

備考：
本人曰く、ミツキの使い魔。

性格は男勝りだが、ミツキ同様面倒見がよい。

通常時はリインと同じサイズだが、１８０ｃｍまで身長を大きくすることができる。（フルサイズ時は巨乳）

ノア
「こんな感じだな」

作者
「ちなみにフルサイズ状態でよくリインをからかってますよね」

ノア
「あ～あれか！確かあいつ子供サイズまでしかなれないからな。フルサイズであいつに巨乳とか自慢してやると怒るんだよ、それが楽しくってな。ただ、ミツキの前でそれやるとオヤツ抜きになるんだ

よ」

作者
「まぁ…なんというか…そうですか…」

ーーー

オリキャラ設定集～その１（後書き）

というわけでこんな感じの設定でやってきますので、これからもよろしくお願いします。

その２５（前書き）

ユウ視点

海鳴から帰ってきてから数日がたった。

あれからどうしたかと言えば、後始末を終えた俺は車を姉貴の車を元に戻し待機所にある転送ポートから帰った部隊長達から遅れる事およそ半日で無事ミッドに帰ってきた。

どうして行く時はあんなに早かったのに帰りだけ半日も遅れたかといえば…。

「観光してたんでしょ？それもアルトと二人っきりで」

シャーリーさん…。いきなりなんですか？まだ説明の途中ですが…？

「だから、私が説明して上げたんでしょ？んで、二人は付き合ってるの？」

「はぁ？なんでそうなるんですか？」

「だって～、今六課内ではその噂で持ちきりよ～」

「噂？…どんな噂ですか？」

「えっ…とぉ～同期の二人が六課に来て久しぶりに再会…それで海鳴に行って危険な目にあった事がきっかけでお互いを事を思うよう

になったとか…それで任務終了後に勢いそのままで部隊長達の目を盗んで東京にデートしにいったって…」

なんですか?その…3流ドラマにでも出てきそうなシナリオは…。

「それは…ね…私もそう思う…それで!実際はどうだったか確認しに来たって訳」

さいですか~それじゃ!

「という訳で…リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ~影の守護者~その２５!始まります…って、コラッ!!逃げるな~!!」

嫌ですよ~!!

その25

その２５

ユウ視点

ふぅ～なんとか振り切ったか…。

現在、俺は、シャーリーさんからからくも逃げ切り六課隊舎内の廊下を歩いている。

やれやれ…鳴海から半日遅れで帰ってきた俺に待っていたのは、俺とアルトが付き合っているという変な噂…。ここ何日かこんな感じでいろんな人から逃げ回っている。

なんでかって言えば、当然！答えるのが面倒くせぇからだ。

なんせ聞いてくる側は否定しても納得してくれねぇからな。

「恥ずかしがんなくてもいいから。んで本当はどうだったの？」ってな具合にな。

んで、実際はどうだったか？って、期待を抱かせて悪いが何にもね

ぇよ。

それじゃ実際はどうだったかって？

アルトが一緒だったってのは、本当だがただあいつは姉貴にこの間貰ったミニカーのお返しを買うためについてきただけって事だ。

東京でなんか珍しいものを見付けて姉貴にプレゼントするんだってぬかしてな。

だが、東京の手前で渋滞にハマッたんだよ。そのおかげでアルトは東京では何も買えず結局ミッドで買うって事になったんだ。

という訳で観光すらいかずに帰って来たって訳だ。

ちなみに車の中でのアルトは言えば…車ん中で爆酔してたよ。

まったく…だれがあんなデマを流したんだか…。

シャーリー視点

ハァハァハァハァ…まったく…日頃の運動不足が祟ったわね…。

私は、隊舎内の廊下でユウ君を追いかけるのを諦め、その場に止まり廊下の壁と膝に手をつき前かがみの状態で荒くなった息を整える。

それにしても、ユウ君…逃げ足速すぎ！
そういえば…フェイト隊長も…確か逃げられたとかなんとか…いってたっけ？

「何やってるんですか？シャーリーさん？」

「大丈夫ですか？」

とかなんとか考えてる私に書類を持ったスバルとティアナが話しかけてきた。

「大丈夫だよ。日頃の運動不足が祟っただけだから」

私は顔を上げ問い掛けてきたスバルとティアナに答える。

「運動不足っていったい何やってたんですか？」

私の答えにティアナが疑問の声を上げる。

「いやね。例の噂の件をユウ君に確認しようとしたら答え聞く前に逃げられちゃって…それ追いかけたんだけど…逃げ切られちゃったんだ」

「それでそんな事にって…それにしても、そんなに気になりますか？その噂？」

私の答えにティアナがまるで興味ないようなそぶりで聞いてくる。

「そりゃそうだよ！！あのユウ兄とアルトだよ！！どこからそうなったのか気になるじゃない！」

ティアナの問いにスバルがものすごい勢いで答える。

「スバル！うっさい！！耳元で騒ぐな！！」

スパーン！！

「痛った～ごめんティア。」

スバルは横にいたティアナの耳元で大きな声を上げたため、それを聞いたティアナが耳を抑えながらどこから持ってきたのかスリッパと取り出しスバルの頭をスリッパで叩く。

そのティアナの突っ込み？にスバルは叩かれた頭を抑えつつティアナに対し謝る。

ほんと…漫才よね…これって…。

「それにしてもティアナは興味ないの？こういうの？」

そして、この漫才？が終わった所で私は、興味がない様子のティアナになぜ興味がないのか聞いてみた。

「別に興味がないって訳ではないんですが…そんな事に構っていられるほど余裕が…い…いや！そ…そんなに大げさにする必要がないと思いまして」

私の問いにティアナは何かを言いかけて…すぐに何かに気づいたの

か慌てた様子で別の答えを言ってきた。

「何言ってるのよ～!!これは重大な問題だよ!!ティア!!」

「だ～か～ら!人の耳元で大声をだすな!!このバカ!スバル!!」

スパーン!!

「痛ったぁ～」

あ…また漫才が…って、ねぇティアナ…一体どこから出したのかな？そのスリッパ…。

私の目の前では、さっきと同じようにティアナの耳元で大声をだしたスバルがティアナに頭をスリッパで叩かれいる。でも、さっきより威力があったらしくその場に蹲り叩かれた頭を抑えてる。

「と…とりあえず、ティアナの言い分はわかったけど、スバルはなんでそんなに興奮してるの？」

目の前の光景をスルーしつつ今度はスバルに興奮している理由を聞いてみた。

「そ…それはですね!え～と…あの…その…あれ？なんでだっけ？」

「知るかーーーーーーーーーーーー!!!!」

スパーン!!

私の問いに対し理由を言おうとしたスバルは、どうやらその理由を

忘れたらしくティアナにどうしてかを聞く。

それに対しティアナは、その理由がわかる訳もなくスリッパで三度スバルの頭を叩く。

だから、ティアナ…そのスリッパ…どこから出してるの？

「う～ん。どうしてだっけ…。すいません。忘れちゃいました」

「そ…そうなんだ…」

「まったく…この子は…」

スバルは、頭をかきながら私に忘れた旨を伝える。どうやら私の疑問は完全にスルーされたみたい…。

それを聞いたティアナは腕を組んでなんだか呆れた様子。

とは言えこの噂の真相はぜひとも知りたい！

なぜかって言えば…それは…楽しいのよ！こういうのって。

でもまぁ…ユウ君とアルトには悪いとはおもうんだけど…。

けど！他人の不幸はミツの味って言うじゃない。

さて…ユウ君がダメなら…

と言う事で今回はここまで！次回に続く！！

その２５（後書き）

次！いってみよう～（笑）

その２６（前書き）

前回の続きです。

その26

その２６

機動六課　隊舎内給湯室

アルト視点

「ねぇ、アルト」

「何？ルキノ？」

「例の噂だけど…あれって本当なの？」

私は現在、隊舎内にある給湯室でお茶を用意しつつ、ルキノと一緒におしゃべりタイム中。

そんなときに急にルキノが私に問い掛けてきた。

「噂？…それってなに？」

ルキノの問いにそれが何なのかわからない私はルキノに聞き返す。

「アルト…本当に知らないの？今、六課内の女子の間じゃその話で持ちきりよ！」

「知らないよ。それでその噂って何々？ねぇ！教えてよ。ルキノ！」

ルキノは私がその噂ってのを知らないのを確認しつつ、それが現在六課内の女子の間でその噂で持ちきりなのを教えてくれた。

現在その噂が六課内の女子の間で持ちきりな事知った私は、それがなんなのかルキノに聞いてみた。

「本当に知らないんだ…それはね…。これこれこーで…」

それを聞いたルキノは、なんだか怪しい笑みを浮かべながら私にその噂を教えてくれた。

「えっーーーーーーーーーーーー！！！私とユウが付き合ってるって！！アチチッ」

ルキノからその噂を聞いた私は、驚きの声を上げ持ってたお茶の入った湯のみを零してしまう。

「まったく…そそっかしいんだから…。でぇ…実際はどうなの？」

どうやら、ルキノはその噂の真相が知りたいらしく驚く私を聞きつつ、私が零したお茶を布巾で拭きつつ詰め寄ってくる。

「実際はどうなのって？」

詰め寄ってくるルキノに対し疑問の声を上げる私。

「な…なにトボケてるのよ！つ…つまり…その…ユウ君と…その…

どこまで行ったのかな?って…」

「どこまで…て…」

戸惑う私を尻目に零れたお茶を拭き終えたルキノは、顔を赤らめ急にモジモジしだし私の問い掛けてに答える。でも、私はそれがなんなのかわからないためルキノに答えに詰まってしまう。

「ねぇ!実際はどうだったの!ミッドに帰ってきてすぐにホテルに入ったって話も出てるんだけど…その初めてって痛いって聞いてるんだけど…そんなに痛かった?」

答えに詰まる私に対し、ルキノは顔を真っ赤にしたルキノがまるで意を決したように私に聞いてくる。

「あ…あのね…ルキノ…一体何の話だか…私はさっぱりで…」

ルキノの問いに私はそれが何なのか一向にわからない…。

「な…なによ!その私はもう大人です!って態度は!どうせ、ラブホテルにでも行ってユウ君とやったんでしょ!それに対して私は…グリフィスさんにまだ一緒に昼食すら出来ていないのに~!!」

私のその態度を見たルキノは、興奮した様子でそれになんか悔しがってる…でも待って…今のって…。

「ええっ!!ユウと私がラブホテルで!!そんなことある訳ないじゃない!!」

ようやくルキノが言ってることを理解した私は、一人で悔しがるル

キノの両肩をつかんで声を荒げるてその噂を全否定。

「えっ…違うの？」

私の答えにキョトンとした表情のルキノがその否定に対して質問してくる。

「違うよ！」

「えっ？でも…海鳴からユウ君と一緒に帰って来たでしょ？」

ルキノの問いに私は再度否定。でもルキノは納得していない様子で再度質問してくる。

「それはね。これこれこれこういう理由で…」

ルキノに私は、海鳴に行くときミツキ先輩からミニカーを貰った事、そして、ガジェットに襲われた時の事…ってこれは、ルキノに変な誤解を生みかねないためそこ等辺はうまくごかしつつ説明。

そして、帰りの車の中で渋滞にハマリ先輩にお返しが東京で探せなかった事を説明した。

「つまり…何にもなかったって事？」

「そうだよ。」

私の真剣表情での説明にルキノは落ち着いた様子でそれを要約し確認してきた。

そのルキノの問いかけに私は、それでいい旨を伝える。

「そうだったんだ…その…ごめんね」

「ううん。わかってもらえたらいいから。それにしても一体誰が…そんなこと」

ルキノは私にさっきのことをについて謝ってくる。それに対し私は、そのことについて許す旨を伝えそれが誰が発信していたのかルキノに聞く。

「あっ…それなら…」

ガチャ。

「アルト～おるかぁ～」

「アルトいる？」

「部隊長？それにシャーリーさん？いますけど…一体なんのようですか？」

ルキノが答えようとしたところで給湯室の扉が開き、部隊長とシャーリーさんが私がいるのを確認するかのように入ってきた。そして、ルキノが部隊長とシャーリーさんに私がいる旨を伝え何ようか確認する。

「それはなぁ～」

「当然、ユウ君との事に決まってるでしょ！それでどうなのよ！！」

ルキノ問いかけにもったいぶった表情で部隊長声にシャーリーさんがそれに続く。

「だぁ～かぁ～らぁーーー！！ユウとは何にも…」

「まぁまぁ、そないに恥ずかしがらんと…これ見てみ」

私の怒号を軽くあしらうかのように私の肩をポンポンと叩きつつ部隊長は、何か書かれた書類みたいな紙の束を私に渡してきた。

「「捕縛しちゃうもん」！？って、なんですか？これ？」

それを見た私はその紙束の一番上の紙に書かれている文字を読み、これが何なのか部隊長に確認する。

「それはなぁ～…ええか！これはウチが考えたユウとあんたの恋を応援するための…言わば台本や！！」

「ええ～っと…部隊長…言ってる意味がよくわかりませんが…」

部隊長の答えがよく理解出来なかった私は、頭を人差し指でポリポリかきながら詳細な説明を求めた。

「あんな～…ええか！よく聞き！これはな！どうせアルトの事や。せっかくユウと二人っきりしてやったのに何にも進展してなかったし、それに噂流しても相変わらずやろうからウチが人肌脱いであんた等の恋を応援してやろうと…あ…アルト…どないしたん？」

はやて視点。

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ。

まだ、ウチがアルトに台本を用意した理由を説明をしてる最中なんやけど…。

それにしてもなんや?このゴゴゴって?

その音が気になったウチは、その音がする方を見る

すると…そのゴゴゴッて音と共にアルトの周り真っ赤なオーラがつつんどった。

「ルキノ…どうやら誰が言い出したのかわかったよ…」

「そ…そう?それはよかった…ね…アルト…」

ルキノはアルトからの問いかけになんや怯えながら答えとる…。

それにてもなんや?こ…この悪寒…これってまさか…いっつもなのはちゃんがいつもやってるあの…

「部隊長!!!」

「は…はい!!!」

アルトはいつもとは違う…ドスの効いたような声を出し内を呼ぶ。

その声にびびったウチは直立不動の姿勢になりアルトに返事をする。

あ～あかん…どうやら例のパターンにハマッてもうたわ…。それにどっから持ちだしたん？そのハンマー…

「余計なことしないでください！！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！

「あべしっ！！！！！」

アルトにハンマーで殴られたウチはその薄らいでく意識の中でハンマーを担いでその場を後にするアルトの姿をただ見つめていた…。

そして、いったいそのハンマーってどっから持ち出したん？と思いつつもどうやら意識を回復させるまでにはいかないため、ウチは横たわる体に意識を預けた…。

その２６（後書き）

とまぁこんな感じでしたがいかがでしたでしょうか？次回は番外編をお送りいたします。

番外編あとがきのコーナー　その1

作者
「あとがきのコーナー！！！！！」

ミツキ
「なんなの？急に？」

作者
「これはですね、いつものお話とは違い1回分の更新を使って不定期ですが、番外編と称して毎回この作品の登場人物を誰か一人呼んで、色々と言っちゃおうと思いまして…こんな風にしてみました」

ミツキ
「それって他の作者さんがやってる事のパクリじゃ…」

作者
「そんなことはありません（笑）」

ミツキ
「笑いながら言うと説得力ないわよ」

作者
「という訳で栄えある第1回目のゲストはミツキさんです！」

ミツキ
「どうも～って、私の話をスルーしたわね」

作者
「まぁ、まぁ…。それはそれとして、今回は、この作品についてです」

ミツキ
「この作品についてって随分大雑把な内容ね」

作者
「いえいえ。キャラ設定同様これについても今まで何も言ってなかったんでこの機会にネタバレしない程度に話をしようと」

ミツキ
「なるほど…いまいちわかりづらいかもしれないから今のうちに補足しておこうって魂胆ね」

作者
「まっ、そういうことです」

ミツキ
「それで？どうしてドタバタものなのに影の守護者なの？」

作者
「それはですね…。まだ詳しくはいえませんが重要なキーワードだからです」

ミツキ
「キーワード？」

作者
「はい。「その１６」で書きましたが、この作品は影の守護者とい

うものが一体なんなのか？というのをリリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓの話に合わせて謎を解いていく物語したいからです」

ミツキ
「それは、わかるけど…それがよくやってるドタバタ劇とどう絡んでくる訳？」

作者
「今よくやっているドタバタは、機動六課の日常を面白おかしくただ書いているだけ…というか主人公であるユウには、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓの本編を進んでもらう格好をとってもらっていて影の守護者についてとは、あまり関係ないんですよ。それでその事の謎解きについては、ミツキさんがその話の中心に動いてもらうって事になります」

ミツキ
「ということは、所謂ダブル主人公ってこと？」

作者
「そこまでとはいいませんがそれに近いことにはなりますね」

ミキツ
「へぇ～。あっ、でも「その２４」だったっけ？なんか私が怪我した時のことをアルトが知ってるような話があったような…」

作者
「ミツキさんの怪我の話については、ある意味共通ルートってやつです」

ミツキ

「共通ルート？」

作者
「はい。まぁ、簡単にいえばスパロボなんかによくあるヤツですよ」

ミツキ
「ということは、ユウは、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓの本編のルートで、私はその影の守護者関係のルートで私の怪我についてはその両方に関係するって事？」

作者
「そういうことです」

ミツキ
「なるほど…そうなると、ヒロインはアルトなの？」

作者
「ヒロインですか…確かに今のところアルトさんが一番近い位置にいますがまだ決まってはいません」

ミツキ
「ふ～ん。あっ…でも、こういうのは、アルトに対して失礼かもしれないけど…どうしてアルトがこんなに出番が多いの？」

作者
「リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓって、その世界の問題を全て魔導士目線でしか見てませんから魔導士じゃないただの人間の視点がほしかったんだです。それで、色々考えた結果私の場合、アルトさんが一番やりやすかったってことです」

ミツキ
「なんか難しそうな話だね」

作者
「まぁ、実を言うといわゆる後付けなんですけどね。でもこういった話をするに当たってなのは達と絡んだ話をするよりアルト達…つまり、サブキャラ達を目立たせたいなって思ったんですよ」

ミツキ
「へぇ～あっでも、ヴァイスとか今のところ大して目立ってないんじゃない？」

作者
「ええ。ルキノさんも「その２６」でこの作品では初登場ですからね。でもまぁ、その内出ていただきますよ。現在その使いどころに苦慮しているところです」

ミツキ
「色々と大変だね」

作者
「ご心配してもらってありがとうございます。ミツキさんもこれから色々と大変な事になりますけどよろしくお願いします」

ミツキ
「こちらこそ、よろしく」

作者
「では、そろそろ時間となりましたので今回はここまで！」

ミツキ
「こんな感じで作者は考えてるようですので、読者の皆様方も私同様広い心で引き続きご愛読のほどよろしくお願います。あ…後、感想なんかあったらよろしくお願いします」

作者
「いい感想を頂くと以外とテンションが上がるんですよね。他の作者さんも同じ事を言ってるのを効いて私も納得しちゃいましたし」

ミツキ
「悪い感想だと凹んじゃうしね」

作者
「少し凹みますが、そこも糧にするつもりです」

ミツキ
「なるほど…そういう考えもあるよね」

作者
「そう考えるようにしました。それでは、ミツキさんシメのセリフをお願いします」

ミツキ
「了解！次回、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その２７をみんなで読もう！！」

作者
「ミツキさんそれ…ナデシコです…」

ミツキ

「ありゃ?ごめんごめん。改めまして、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その２７…テイク…オフ…」

番外編あとがきのコーナー　その1（後書き）

以上番外編でした。次回はミツキさんサイドのお話になります。

その27

その２７

地上本部　廊下

シャーリー視点

「あの？シャーリーさん？」

「何？ティアナ？」

「これから会う方って一体どんな方なんですか？」

「さぁ？誰なのかしらねぇ～」

私の答えに憮然とした顔をするティアナ。

それも当然よね。なんせ、今日いきなり私について来るようになのは隊長に言われた上、行き先は地上本部としか言ってないし。

そして、ティアナが執務官志望であることを利用しこれから会う人と色々交渉するからこれからのために交渉ってのがどういう物なのか今のうちから体験しとこうかと言ってついてきてもらっている。

でも、まぁこれにもちゃんとした理由があるの。

それは、つい最近の事なんだけどホテル・アグスタってところで任務があったんだけどその際ティアナがミスショットをしちゃって…でも、それだけならまだよかったんだけどどうやらスバルと一緒になって特訓をしている見たいなの。

それも、やり過ぎってな具合に。

ヴァイス陸曹なんかも辞めるようにいったらしいんだけど、効果がなかった見たい。

まぁ、普通ならそのままやらして置いて模擬戦かなんかのタイミングで修正なりすればいいらしいんだけど今回の場合、ちょっとそういう訳にはいかないのよ…。

私も詳しいところまでは分からないんだけど、なんでも協力関係にある人が下手をしたら敵になるかも？って事らしいの。

私も最初それを聞いた時には、なんの冗談かと思っていたけどどうやら真面目な話みたい。

なんせ、なのは隊長やヴィータ副隊長はある程度のところで模擬戦をやって叩きのめすつもりだったんだけどそれに八神部隊長が待ったをかけたんだもん！そのことで。

あの！なのは隊長の教導にだよ！

それも待った教導はなのは隊長に教導は任せるって言ってた八神部隊長がだよ！

私もその場に居たけどそのやり取り見て驚いてたもん。

ちなみにあの場にいたのが私と部隊長、なのは隊長にヴィータ副隊長の４人。

でもさ…八神部隊長が止めた理由を言ってくれたとき…私も納得しちゃった…。

だって、この機動六課って所謂派閥ってやつで分けちゃうとハラオウン派って言ってフェイト隊長のお兄さんとお母さんがトップに君臨するグループの中にはいっちゃうのよ。

なんせ、そのトップ２人が六課の後継人だから。

その関係で隊長達やら私達もハラオウン派に入っちゃうわけ。

でも、その人つまりこれから私が会う予定をしているミツキさんとは大変中が悪くてね。

その中が悪いところにスバルやティアナ、それにユウ君まで出してくれてるのよ。

それも見返りや謀略なんか一切なしで！

しかも八神部隊長との信頼関係だけで！

普通ならやんないわよ！そんな事。だって、いい人ばかりじゃないからね、管理局って。

まっ、預かったが側の八神部隊長としては、もしティアナがこのま

まなのは隊長の修正を受けたり潰れたり…つまり、精神状態が不安定な状態でなんとかハラオウン親子に取り付こうとしている人達なんかにティアナ達が漬け込まれない為にも今のうちから待ったをかけてるんだって。

それにティアナの事だから、ミツキさんの為だって言われたらホイホイついてっちゃって…というより逆に騙された振りをしてって方法をとって一人で片付けようとしそうだし。

それが通用する人間ならまだしもそうじゃない場合、帰って危険だし。

まっ、表向きはそう言ってるけど、本音としては今回の事がきっかけでせっかく出来たミツキさんとの協力関係がつぶされでもしたら溜まらんってのが部隊長の本音みたい。

それだけ六課にとってはミツキさんとの関係は重要って事。

だって、彼女地上本部の少将だし。

ある種完全アウェーで活動している私達にとっては少将として協力しているって所がありがたいのよ。

それがなくなるとなると…。

なんかすっごく憂鬱な気分になってきた…。

それで、それを聞いたなのは隊長達と言えば！

「大丈夫！ちゃんと話せば！」とかなんとかいってたけど、

部隊長が「今のティアナに何をいっても上官としての命令としか聞こえへんで」って言われたら二人とも黙っちゃった…。

でも、このままあの二人を頼って置く訳にもいかない訳で、ティアナを良く知るスバル以外の人にアドバイスを貰ってここにいるって訳。

そのアドバイスってのが…。

「そもそもの原因を作っている本人に尻拭いでもさせたら?それに姉貴ならティアナも言うこと聴くし」だって…。

それで、私がティアナを連れてきてるって訳。

まっ、私もミツキさんに用事があるからそのついでって事なんだけど…。

とりあえず状況の説明を終えた私は引き続きティアナと一緒に地上本部の廊下を奥へと進む。

「あっ!ここだ…ね」

私は、手にもったメモと目の前にあるドアに表示されている部屋の番号を確認にドアをノックする。

すると…。

「はい!あっ!シャーリーさん…それにティアナ?」

「ギンガさん！なんでここに？ってまさか…」

「そのまさかだよ、ティアナ。お久しぶりだね、ギンガ」

ドアを開けて出てきたギンガが私の姿を確認する声とその横にいたティアナを見て驚きの声を上げる。

一方、ギンガを見たティアナも驚きの声をあげるがすぐに誰に会いに来たのかどうやらわかったみたいで私に確認する。その声を聞いた私は、ティアナにその考えに同意する旨を伝え久しぶりに会うギンガに挨拶をする。

「お久しぶりです。シャーリーさん、それにティアナ」

「お久しぶりです、ギンガさん」

その後、ギンガが私の声に挨拶を返しそしてティアナに挨拶をする。

ギンガの声にティアナもギンガに挨拶をし中に入っていく。

ティアナ視点。

うそ…まさかとは思ってはいたけど…。

シャーリーさんがノックしたドアから出てきたのがギンガさんだった時には正直驚いたわよ。

それと同時に地上本部にある佐官クラスが使うオフィスからギンガさんが出てきた事でシャーリーさんがミツキさんに会いに来たってことがわかった。

だって、ミツキさんが少将に昇格するって時にスバルやユウ、それに私にまでギンガさんからその旨の連絡とギンガさんがミツキさんの補佐官に付きたいって話が来てそれを同じ場所で聞いた私とスバルはそのギンガさんの提案に即座に同意したし。

そのころの私とスバルは訓練校に入ったばかりだったし、ユウもナカジマ三佐のせいでいろんな部隊にまわされてそんな暇なかったみたいだし…。

それに本来ならノアがつくはずだったんだけど、ギンガさんが自分でもミツキさんの力になりたいってことでノアが引いてくれたんだけど。

まっ、もし私がギンガさんと同じ立場なら同じ事を言うだろうし出来ることならミツキさんの執務官補佐官になって私もミツキさんの仕事を手伝いたいしその知識とか色々学びたい。

でも、まさかこのタイミングでミツキさんに会うことになるなんて…。

正直言って今は会いたくなかった。

だって、アグスタでのミスショット以来訓練の後や早朝訓練の前にスバルと一緒に特訓してて正直言ってその疲れが結構溜まっているの。

目の下にはクマがでてるし…それに顔色も悪そうだったし。

ちなみに…顔色やらクマなんかは化粧でなんとか隠してはいるけど…。

もし、そんな事がミツキさんにバレでもしたら何を言われることか…。

なぜかって言われたら…えっと、約束…したから…ミツキさんと。

で！その約束ってのが、昔のことになるけど私の兄さんが殉職して、その後テレビにでた管理局の高官が兄さんの事をバカにしたあの事を理由にミツキさんに無茶しないって約束したから。

でも、兄さんの…ううん、ランスターの弾丸は打ち貫けるって事を証明するって気持ちは今でもある。

いくらミツキさんに言われてもそれだけは自分で証明するんだって。

それに、エリートだらけの機動六課の中で唯一凡人である私がみんなについてくためにはこうするしかないって事。

それに…海鳴でユウが一人でガジェット１０体を撃破したなんて事もあり私の中じゃもしかしたらアイツと交代させられるかも…しれないし…。

アイツが優秀だってことは、六課に来る前から知ってはいた。

そして、私はその力を持ってるアイツに正直嫉妬している。

だから、アイツと会う度にケンカして…ミツキさんを困らせてる。

ミツキさんには、いくら感謝しても足りないくらいお世話になってるのに…。

それにミツキさんに最初に会った頃なんて…。

私は、いろんなことを考えつつミツキさんが待つであろう部屋の奥へと進むのであった。

その２８

その２８

地上本部　オフィス

ミツキ視点

「少将。お客様です」

「了解～通して下さい…」

ギンガの声に私は書類に目を通しつつ気のない返事をする。

「どうぞ…」

「「失礼します」」

「お久しぶりです。少将」

ギンガの案内の声に続いてシャーリーとティアナが中に入ってきていつもながらの敬礼。そして挨拶。

私はその声の後に挨拶をする。

ハァ～…いつもながら面倒～。

いくら礼儀とはいえ知り合いにまでこんなことしなきゃいけないなんて…。

”ギロッ”

と考えていたら私の横に来たギンガに睨まれちゃった（笑）

一連の挨拶を終えた私は、シャーリーとティアナを応接用のソファーへと案内。

二人は「失礼します」と言いながらソファーへと座る。

それにしてもティアナなんかいつもより化粧濃くない？それになんでシャーリーと一緒なの？

「確か…今日でシャーリーさんだけが来る予定だったはずじゃ…」

そんな考えをしているウチにギンガが二人の前に紅茶をおきつつシャーリーに聞いていた。

「当初の予定では、そうだったんだけど交渉することがあってティアナのこれからのためにも今のうちから体験させとこうと思ってね。連れてきちゃったの」

「そういえばティアナって執務官志望だったわよね」

ギンガは私の前にコーヒーを置きつつシャーリーの答えを聞き、そ

して今度はティアナに話かけた。

「ええ、そうです。でも、シャーリーさん！ミツキさんに会うなら最初から教えてくれても…」

ティアナは、ギンガの問いに答えつつもどうやら私に会うことをここに来るまで教えてもらえなかった見たいで今度はシャーリーさんにティアナが質問する。

「だってぇ～、私がティアナに話したときスバルと一緒だったでしょ。もし、そのときにミツキさんに会うってことをいったら…」

「私も行くっていいだすわよね…スバルなら…」

シャーリーの答えにギンガが続く。

「確かに…あの状況でなら…でもそれならスバルと別れた後にでも教えてくれたって…」

ティアナはまだ納得してないみたい…。

「う～ん、それはね。ティアナがギンガとミツキさんを見て果たしてどんな反応をするかなって思ってね。そのまま教えないで来たの」

ティアナの問いにシャーリーは悪戯っぽい笑顔で答える。その答えに呆れ顔のティアナ。

「それで、交渉っていってたけどその内容をそろそろ教えてくれない？シャーリー」

「あっ、はい。では、まずはこちらをご覧下さい」

とりあえず、今回二人が来ているのが仕事がらみでしかも交渉って事だから私は仕事モードに切り替えシャーリーに話を始めるよう促し、その為に表示された画面をみる。

「これは…確かユウが海鳴で倒したって言う黒いガジェット？」

「はい。その通りです。よくご存知ですね」

「まっ、ユウが車の鍵を返しに来たときにそういうのを倒したって言ってたし」

画面を見た私は、自分の記憶から表示された物と同じ記憶があったのを確認しそれと今画面に表示されている物が同じ物かどうかをシャーリーに確認する。

それを聞いたシャーリーはなぜそれを私がそのことを知っているのか確認。そして、その問いに私はユウがそのことを言ってたことを告げる。

それを聞いたシャーリーは、なるほどと思いつつも話を続ける。

「今回ミツキさんと交渉と言うか…お願いしたい事って言うのがこれの詳しい分析をお願いしたいんです」

シャーリーが私にお願いしたい事ってのを要約すると…

・黒いガジェットがどういう風に動いているか調べてほしい。

・実機については、本局や聖王協会に持ち帰ったその全てを持っていたため渡すことができず持っていかれる前に取ったデータのみで調べてほしい

・実機の中に影の守護者と言う文字があるがこれについてのデータや何か知ってることや過去の文献に載っていた力やそれについて類似するものがあればその全てを提示してほしい。

・そのデータからとった内容を実機を持っている本局や聖王協会とのデータを照合する作業を彼等と共同作業で行ってほしい。作業する場所についてはこちら側で用意する。

・本局側の責任者はクロノ・ハラオン提督、そして聖王協会側の責任者は騎士カリム

シャーリー視点

私の説明を聞いたミツキさんは、その表情が一気に険しくなる。

それを見たギンガもまた表情が険しくなる。その一方で、ティアナはミツキさんの表情に疑問顔。

ちなみにこの条件については、八神部隊長からと言うわけではなく

その上の機動六課の後見人の方から提示されたもの。

八神部隊長はこの条件に反論したが却下され、そして、その交渉には部隊長以外の人に当たらせるよう言われたとのこと。

私は、ミツキさんのその険しい表情を見ていた私は、今回の件ををミツキさんに伝えるようにいった時の八神部隊長のなんとも切ない表情を思い出していた。

でも、なぜ部隊長がこの条件に反論したのか？

そして、ミツキさんとギンガがこんな表情になるかについては何も知らされてはおらず部隊長もまた、それについては教えてはくれなかった。

「そうね。データのみでの検証することについては了承するけどそれ以外はお断りするわ」

ミツキさんはその険しい表情をくずしつつ私のお願いについて答えた。

その答えを聞いたギンガは何も言わず、ティアナはいきなり緊迫とした部屋の雰囲気に完全に飲まれていた。

「わかりました。でも、その理由を教えてはくれませんか？」

ミツキさんの答えを聞いた私はその理由について聞いてみた。

「理由…ね…でも、その前にこの話のことをはやては知ってるの？」

「はい…知ってます」

ミツキさんは私の質問に質問で帰して来た。その問いに私は俯きつつ答えた。

「そう…なら、断る理由はここが地上本部で私もそこに所属しているって事かな」

さっきまで険しい表情が一気にくずれたミツキさんはその悪戯っぽい笑顔をしつつ、私に断る理由を告げた。

「わかりました。それでは、データのことについては、今日持ってきてますのでお渡しします」

その答えを聞いた私もまたいつもの表情に戻し持ってきたデータを渡す。

「あれっ？こんなんでいいの？」

私からデータを受け取ったミツキさんは、私の答えに少々疑問の表情。

「はい。機動六課としては、データを検証してもらえるだけで十分ですしそれ以外のことについては六課には関係ありませんから」

ミツキさんの問いに私はその理由をきっぱりと答える。

本当は、いい答えを引き出してほしいと後見人の方達からは言われてはいたけど下手をして協力関係自体を破棄されちゃ困るのよ、ウチとしては。

それにティアナを使うって事も一応は考えてたけど、あの険しい表情のミツキさんを見てたらそれこそが地雷を踏む行為だって事がわかっちゃったし…。

…こういった政治的なことに巻き込みたくないんですね…ティアナとスバルを…。

そもそも私達としてはあの黒いガジェットについて事を調べたいだけだったんでそれが適えば後は私の範疇外だし。

もし！文句を言ってくるなら検証結果に「わかりません」なんて書いて送ってくるな！っての！

ちなみに今のってここに来る前に本局の技術開発部に検証を依頼した時の結果報告の書類に書いてあったのよ。

でも、まぁ文章そのままって訳ではないんだけど。

その内容ってのが、やれ生け捕りにしたものがほしいとか、検証するには実機が足りないだの、持ち帰った残骸の損傷が激しく確認は難しいだの…。

つまり！要約したらわからないって事！！

２週間もかけてやった結果あれよ！それだけでも頭に来てるのに余計な事まで増やしてくれちゃって！

とまぁ、色々と考えながらミツキさんの顔色を伺う。

どうやら、私の答えにミツキさんも納得してくれた様子。

ちなみにこのやり取りを見ていたティアナは唖然とした表情…。

これで、ようやく私も本題に移れるんだけど…それは次回のお楽しみに！

その２９（前書き）

ティアナ視点

「それじゃ、ギンガお借りします。それとティアナもがんばってね」

「それでは、行って参ります」

「はい。ありがとうございますシャーリーさん」

「いってらっしゃ～い。終わったらそのまま１０８でいいからね」

「は～い」

シャーリーさんとギンガさんが部屋にいる私とミツキさんに挨拶し部屋を後にする。

会話順としては、シャーリーさん、ギンガさん、シャーリーさんの声に答えた私そして、次がミツキさん。最後がミツキさんの声に答えたギンガさんって順番かな。

んで、どうしてこうなったのかと言えば前回の話のすぐ後、前に八神部隊長が１０８に来たときに捜査協力のお礼として機動六課からギンガさんにデバイスを進呈するって言われていたんだって。

そして、今回それが完成したとのことでその出来たデバイスを説明するのにギンガさんをシャーリーさんが連れ出したって訳。

ちなみにそのデバイスのメンテナンスについては、ミツキさんがやるらしくさっきまでシャーリーさんとあれやこれややってたわよ。

それで、なんで私が残っているかと言えばこれからミツキさんが執務官の仕事で何箇所か回らなければならなくて私にミツキさんが「ついて来る？」って誘ってくれたの。

でも、この後の仕事のことやらどうしようか考えていたらシャーリーさんが

「行って来なさいよ！いい経験になるわよ。それとこの後のことは心配しなくていいからね。六課には、私が連絡入れとくから」

と言ってくれたので、私はその誘いを受けた…でもね…。

「ねぇ、ティア？ひとつ聞いてもいいかな？」

「なんですか？ミツキさん」

シャーリーさん達と別れてからおよそ２０分くらい。

私とミツキさんは地上本部を後にし、現在ミツキさんの車で移動中。

そんな時だ、運転するミツキさんから私に質問があると言われそれが何か確認したところ

「あのね、なんで今日いつもより化粧濃いの？」

ざわっ、ざわっ…

「えっ？それがどうしたんですか？」

ミツキさんの質問に動揺しつつも私は、なぜそんなことを聞くのか確認する。

「だってさ、いつものティアならノーメイクに近いはずだったのに今日に限ってなぜかしっかりとメイクしてるててさ、それに目の周りが特に念入りにしてるみたいだったから何か無茶でもしてるんじゃないかな？って思ってね」

ざわっ、ざわっ…。

う…嘘…でしょ…。

「どうしたの？ティア。なんだかオバケでも見るような顔をして…さてはまさかっ！！」

私の動揺した表情にミツキさんは何に気づいたらしい…。

逃げたい…でも…今は車の中…逃げられない…

「さて、これから私は、ティアに事情聴取するからちょっと待ってね。では、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その２９！始まります…」

その29

その２９

ティアナ視点

「まったく…。私にバレたくないから化粧が濃かったのね」

「は…はい…」

車の助手席で俯いたままで私は、ミツキさんの問いに答える。

ちなみに前書きから本編に移るまでの間に全部吐いたわよ！

「まっ…頑張る事はいいけど…それでどうしてそうなったの？」

私の答えを聞いたミツキさんは、その原因について聞いてきた。

「は…はい…実は…」

私はまるで完全に落ちた犯罪者のように自供…じゃない話を始めた。

そう、アグスタでのミスショット…いや、機動六課にきてから自分だけが凡人であるためにみんなとの間に大きな差が出来てるのではないか？という疑問。

そして、それが大きくなっていって…

本当は、強くなってはいないのでは?…

もしかして…ユウと交代させられるのでは?…

自分で証明しなきゃ!!…ランスターの弾丸は撃ち貫けるって!!

って、いろんな考えが頭によぎって…そして…ミスをした。

その後、なんとか挽回しなきゃって思って始めた特訓…

それには、スバルも付き合ってくれて…

そんな自分の中にあることを…まるでそれを一気に吐き出すかのようにミツキさんに話をした。

そして、ミツキさんはそれを黙ったまま聞いてくれた。

「ティア…これ使って…」

俯いたままの私にミツキさんは信号に止まったタイミングで私にハンカチを差し出してくれた。

「えっ…あ…すいません…」

自分でも気がつかないウチに私の頬に涙が流れていた。

そして、ミツキさんからの声に反応した私は、差し出されたハンカチを受け取り涙を拭いた。

「約束…やぶってしまって…すいません…」

私は、ハンカチで涙を拭きながらミツキさんに約束を破ったことを詫びた…。

だって…私のやったことはミツキさんとの約束を破る行為だから…

それがミツキさんにバレるのが一番怖かった…でも、止められなかった…。

「謝らなくたっていいよ…」

「えっ…で…でも…」

怯えつつ謝る私にミツキさんはその必要はない旨を告げる。

私はミツキさんの顔を見て、疑問の声を上げる。

すると、ミツキさんは車を路肩によせて停止させた。

そして、私の方を見て…こう言った。

「あのね。確かにティアは約束を破った。でも、強くなりたかったからそうしたんでしょ?だったらそれはそれでいいと思うの。その気持ちは大切なことだから。」

「は…はい」

ミツキさんは私の顔を見ながら優しい顔で話し掛けてくる。その声

にうなずく私。

「でね、あの約束をティアとした本当の訳っててのがってね、それってのがティアが変な事を起こさないためだったのよ」

「変なこと？」

話を続けるミツキさん。私は出し切った感情を落ち着けつつミツキさんに質問する。

「まっ！復讐とかヤケになってグレちゃわないかなって思ってね。まっ…今となっては考えすぎだったけどね。でも…まぁ、そもそもの原因は私がつくっちゃったみたいなもんだし…それと。気がつけなくてゴメンね」

「ミツキさん…」

さっきまで笑顔だったミツキさんは急にシュンとなり私に頭を下げる。

私は、ミツキさんの名前を言った後…その後の言葉に詰まってしまった。

それから車の中に沈黙が流れる…

車内いる二人は黙ったまま、お互いにどう話を切り出していいのか迷っているようだった。

ティアナはミツキの方を向いたまま俯き、ミツキもまたティアナの方を向いてはいたが顔はティアナ動揺俯いたまま…そして、車のハ

ザードランプの音だけが車内に響いていた。

「あ…あのミツキさん！」

「？？なに？？」

何か意を決した表情のティアナが顔を上げ、ミツキに声をかける。

「兄さんの事ですが…そ…その好きだったんですか！」

「ちょ…ちょっと！！何をいきなり！！」

ティアナは顔を赤らめつつ真面目な表情でミツキに質問する。

一方のミツキは、ティアナのいきなりの突拍子もない質問に驚きの声を上げる。

「いや…その…前から一度聞いてみたかったんです。お願いします！教えて下さい！」

そう…前から聞いて見たかったら…でも、タイミングとしては最悪だけど。

そもそも、私とミツキさんが知り合ったのも兄さんが所属していた部隊にミツキさんが配属されて私が兄さんの部隊に遊びに行った時に兄さんが「後輩だって」って言って紹介してくれたのがきっかけ。

そして、兄さんが忙しくて私に会えないときなんか兄さんの変わりに私の相手をしてくれたりしてくれてた。そして、その後ミツキさんは執務官になってその部隊を離れることになったんだけど…。

でも、初めてミツキさんに会ったとき私の中ではひとつの感がはたらいたの…そう…所謂女の感ってヤツ。その女の感が言ってたのがミツキさんは兄さんのことが好きなんじゃないかって！

何度も確認しようとしたんだけど結局確認できないままで…そして、兄さんも死んじゃって…。

その兄さんの最後の任務の際、ミツキさんは、別世界からの任務を終えてミッドに帰ってきたところで、その直後に兄さんが怪我したっていう情報が入って応援に行ったんだけど…結局、間に合わずミツキさんが最後を看取ることになった…。

そんなことを思い出しつつ私は、ミツキさんの顔をみる。

「好き…だったよ…ティーダ先輩の事…」

私の質問にミツキさんは、顔を真っ赤にしながら答えた。

「あ…あのそのことを兄さんは…」

私は”やっぱり”と思いつつ自分の兄ティーダがそのことに気がついていたのか聞いてきた。

状況としてはさっきとは間逆。ミツキは顔を真っ赤のまま俯き、ティアナはミツキの顔真剣な表情で見つめる。

「知ってたみたい…最後の最後で…言われちゃってさ…気持ちに答えられなくてスマンって…」

「そ…そのスイマセン…いきなり変なことを聞いてしまって…」

ミツキさんの答えを聞いた私はただ、謝ることしか出来なかった。

「本当よね。いきなりだったからびっくりしたよ」

私の答えを聞いたミツキさんはどうやらそのときのことを思い出したらしく、涙を浮かべる目を指でその涙を払いつつ明るい声を上げた。

「そういや、ティアって初めて会った頃って私のことをまるでティーダ先輩に群がる害虫のような態度だったんだけど…ティアもそうだったの？」

「害虫って！そこまでは…でもそれに近い事は…でも、兄のことは大好きでした」

ミツキさんの問いに私は反論しつつも兄のことを答える。

よく考えてみたら…昔の私って、兄さんのお嫁さんになるとか…なんとか…言ってたような…。

なんだか話が全然違う方向に言ってしまったが、その後もう無茶はしないって事を再度約束し特訓も止めることにした。

でも…本当に強くなってるんだろうか…。

そんなことを疑問に思っていたら、ミツキさんが

「よし！ちょっと寄り道するよ！」

といい、再び車を発信させたミツキさんは本来行く道とは違う道へと車を走らせた。

その３０

その３０

ミツキ視点

「はい到着！さっ！降りた降りた」

「あの～ここって…」

車を駐車スペースに止めた私は、助手席にいるティアナを降りるよう促す。

私の声に車を降りて辺りを確認したティアナは、見たことのあるその風景に確認するかのような声を上げる。

「何度か来た事あるでしょ？この訓練スペース」

私がティアナを連れてきた場所、ここは管理局が一般の魔導士にも開放している訓練スペースでミッドの中じゃ中規模クラスのところ。

管理局が管理するする世界では、こういった施設がいくつもあってここでは魔力なしの人でも魔法を疑似体験する事とかもできる。

ちなみに局員であればここの利用は無料。

中にあるのは、本格的に魔法の訓練が出来るスペースからゲーム感覚で楽しめるものまであり一種の娯楽スペースでもある。

なぜこんなスペースを用意しているかといえば、魔法への悪いイメージへの改善のためと優秀な魔導士を発掘するためなの。

万年人材不足の管理局にとって、優秀な魔導士をいかに確保するかってことが最重要課題でもあってね。

それを容易にするためにここにある魔力なしの人が利用出来るゲームの中にリンカーコアがあるかどうかってのを調べることが出来る機械がついていているの。

それで、ゲームをしている間にそれを調べてコアがあるようならその人をスカウトするために人材を派遣するって訳。

けどまぁ、スカウトするのは早いもん勝ちって事にことになってるらしくて、本局と地上本部のそれぞれの部署ごとに独自に開発したゲームをこういったスペースに置いてるから場所によっては、魔導士ようの場所が一切ないところまであるのよ。

ちなみに今流行ってるのは…。

「ミツキさん準備できました」

とまぁ、説明しているうちにティアナの準備が出来ちゃった見たいだからまた後でね。

「それじゃ、始めるわよ。スタート！」

ティアナはバリアジャケットで小さな部屋（ブース）の中にいる。そして「開始」の文字が表示され中にあるシュミレーターが起動する。それと同時にブース四隅にあるシューターから魔力弾は次々と発射されティアナに襲い掛かる。

ティアナにやってもらっているのが、簡単に言えば四隅から出てくる魔力弾を時間内にいくつ落とせるかというもの。魔力の設定は非殺傷設定で1発や2発当たっても大したダメージは受けないようにはなっているが複数を受けるとそれなりのダメージをうけてしまう事に。

ティアナはそれを普段使っているクロスミラージュではなくミツキが用意したガンデバイスを使って行っている。（アンカーガンに似たものと考えてもらえればわかりやすいだろう）

バシュ！バシュ！

ティアナは襲い掛かる魔力弾を手に持ったデバイスから魔力弾を発射し次々と打ち落としていく。

ミツキは手にティアナから預かっているクロスミラージュを持ちつつ、ティアナが入っているブースの外からそれを見つめている。

ビーーーーーーーーーーーーーー！！

それからおよそ20分。機械的な音と共に肩で息をするティアナの前に「終了」文字が表示される。

「おつかれさん」

ブースから出てきたティアナにタオルを渡しつつ声をかけるミツキ。

「ハァハァ…あ…ありがとうございます」

ミツキからタオルを受け取りその汗を拭う。

「それで…結果は？」

「前来たよりもよくなってるわよ、ほら！」

汗を拭いつつ結果を気にしているティアナに結果を見せる。

その結果に驚きの表情のティアナ。

どうして、ティアナにこんなことさせたかと言えば、どうも強くなってるかどうか疑問に思っているティアナに自信をつけさせたかったのよ。

ここには以前から何度か来ていて、射撃魔法やら色々と私がアドバイスとかしてたの。

その際のスコアとかも登録してあったから前の自分と比べてどれだけ強くなっているのか確認してもらうためにこんなことをやらせたって訳。

でも、どうしてクロスミラージュを使わせなかったかというといいスコアをだしてもクロスミラージュのおかげなんて言わせないため。

ちなみに今回のスコアは今までの中でダントツの最高スコア！

「すごいじゃない！ティア！」

「あ…はい…でも、今回ここまでできたのがミツキさんが用意してくれたこのデバイスおかげですよ」

そのスコアを見た私は、大喜びでティアナに話かける。

その問いかけにティアナはこちらの思惑を裏切るかのような答えを言って来た。

そうきたか…なら！

「それじゃ次は私の番ね」

といいつつ、ティアナが使ったガンデバイスを使って同じ設定でスタートさせる。

２０分後～

「どうだった？」

ブースから出てきた私はその結果をティアナに聞く。

「相変わらずすごいですね」

私の声に反応したティアナそう感想を漏らすし画面に表示されたスコアを見る。

結果としてはまぁまぁかな？

でもまぁ、これでティアナが言ったデバイスのおかげなんてセリフはいえないだろうし…。

その後、ティアナの射撃姿勢なんかが表示された画面を使ってどこが良くなったのかを具体的に説明。

それと同時に訓練を担当している人が毎日よく見て一生懸命に教えないとこんなに急にうまくならない旨を伝えた。でも、その割には随分わかりづらい訓練をしているのでティアナの今回の行動もその辺をうまくやればよかったのにね…とティアナのせいだけはない事は付け加えておいた。

私の話を聞いたティアナは一応に納得してくれたみたいで話が終わった後はなんだかスッキリとした表情に変わっていた。

その後、ゲームコーナーなんかを見て回ってその後に裁判所に提出する書類なんかをティアナと一緒に提出したりとか体験してもらって起動六課の隊舎まで送って今回の件は終わりを告げた。

ちなみにさっき言い忘れてた今人気のゲームって言うのが…機動六課採用試験！！っていう機動六課に入るための採用試験を疑似体験できるゲーム。

で、人気の理由がそのゲームの中で六課メンバーであるはやてを始めとした隊長陣がゲーム中の色んなところで出てきて対戦したり共同でミッションをしたりするってのがウケてるんだって。

それとある一定の条件をクリアーすると隊長陣のお宝画像（水着、

パジャマ姿等など）なんかが表示されるみたい…。
まっ…はやてがやりそうな事だけど…

数日後～

「あっ…はい！もしもし！スバル？それでどうだった？」
私は１０８の技術開発室にあるオフィスでスバルからの連絡を受けていた。

（うん！ミツ姉のおかげでうまくいったよ～！！）

「何言ってるのよ。今回の件はそもそもあんたが言い出したことでしょ！」

（まぁ…そうなんだけど…でも、ミツ姉のおかげでティアも元気なったみたいだし！それにあれ以来早朝訓練もしなくなってティアの顔色とかもよくなってるし…）

実を言うと今回の件はスバルから以前に相談されていたの。
ミスショットの後、一緒に特訓してはいるけどこのままでいいのか

な？ってね。

それで、スバルから大体の内容を聞いた私が今回のことを計画。

そして、それを今日実行したって訳。

ちなみにはやて達はこのことをしらないのよ。

でもまぁ、こっちが動き出す前に余計な事をされちゃこまるから事前にユウには話はしてあって情報は常にこっちには流れてきてはいたんだけど。

（あっ…やば！こっちにティアがきそうだからそろそろ切るね）

「わかったよ。また今度連絡ちょうだい」

（うん！また！）

プツン！

どうやらまだティアナにネタ晴らしはしていないようでティアナがくる気配を感じたスバルが通信を切る旨を伝えてきたので私はそれを了承し通信がきれた。

ふぅ～…。

私はオフィスの机に置いてあったコーヒーを持って今ごろどうなってるかな？って思いつつ起動六課があるであろう方角をそこにある窓からその外を眺めていた。

その３０（後書き）

作者
「あとがきのコーナー！！！通常版！！！」

ノア
「普通のあとがきだから通常版なんだな」

作者
「そういうわけです。それで、今回のゲストはノアです」

ノア
「よろしくな！って、今回は、その２７～３０までを一気に更新したが…」

作者
「いかがでしたでしょうか？本編アニメのアグスタをからめつつオリジナルな解釈の元にやりました今回」

ノア
「それにしても撃墜なしでしかもなのはがほぼ出てこないってなぁ～」

作者
「まぁ、この辺の話だと通常ならアグスタでの警護任務→ティアナのミスショット→特訓開始→なのはとの模擬戦→撃墜されゴタゴタ→シャーリーのお話→なのはとティアナの会話って事なんでしょうけどそのままじゃなんかなぁ～って思ってまして」

ノア
「まぁ、賛否両論あるみたいだし…良くあるパターンって言えば、撃墜後なのはアンチが入って結局ケンカ両成敗っぽく終わらせるってパターンが多かったんだがそれじゃダメなのか？」

作者
「ダメという訳ではないんですけど、そのパターンも一応考えはしましたがそもそもウチの主人公ってそういうのに介入したがらないヤツでしょ？…それにミツキを介入させようにもいいのが出なかったんでボツにしました」

ノア
「な…なるほな…確かにユウだと模擬戦であんなことがあってもそのまんまだろうな…っていうかそもそも模擬戦を見に行かないだろうな…それじゃ話がすすまねぇな」

作者
「そうなんです。それに原作アニメをそのままやってもツマンナイですし…だから、大幅に変更することにしました。でもまぁ、ここに来るまでミツキとティアナの関係性を話機会がなかったというか話してなかったんで無理やり的な展開もありますがね」

ノア
「あの突拍子もない質問のことだな。あたいもあれ見て「なんで？」って思ったんだけど」

作者
「あれは、ティアナなりに場の空気を換えたかったからとお考えいただければ。それにそのときのティナの精神状態って結構不安定だったんで冷静な判断が出来なかったんでしょう」

ノア
「それにしては後付けの言い訳つくるのうまいなぁ～」

作者
「…それって誉めてるのか、貶しているのか果たしてどっちですかね…」

ノア
「そりゃ！もちろん両方！！」

作者
「なるほど…では、来週からオヤツを納豆に変更！！」

ノア
「ちょっと待て！なっ…納豆！！それだけは…勘弁してくれ～！！」
（ガクガクッ　ブルブル）

作者
「ご心配なく…何も納豆をかき混ぜてるときにあなたを一緒に巻き込むなんて事はありませんから（ニヤリ）」

ノア
「いやーーー

リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３１…テイクオフ！」

その３１（前書き）

今回は長いです。そして、書いてて少し鬱になりました。ご注意下さい（笑）

その31

その３１

聖王協会　カリムの執務室

リンディ視点

「そうですか…やはりデータの解析以外断ってきましたか…」

私とクロノは現在聖王協会の騎士カリムの執務室にてミツキさんとの交渉をしたシャーリーからの報告書を見ながら今後の対策について話合っている。

その報告書をみたカリムは、”やはりこうきたか”という表情をしながらこちらを視線を向けた。

「ええ。自分が地上本部の人間だからだそうです…相変わらず…こちらの意図をまるで理解しようとしない」

その視線を受けたクロノは、ミツキさんが断ってきた理由とこちらの意図を気づこうともしないミツキさんに腹を立てながらカリム方を見ながらカリムの問いに答えた。

「まぁ、今回の条件についてはいささか強引でした…」

「ですが、例の黒いガジェットの残骸に記載してあった「影の守護者」との記載があった以上…このままでは…」

クロノの話を受けたカリムは、今回ミツキさんに提示した条件が強引だったと反省の色を浮かべながらその声に答える。

それを聞いたクロノは、六課から回収した黒いガジェットの残骸から「影の守護者」の文字が出てきたことを上げ今回の条件の正当性をカリムに告げる。

そもそも、なぜ今回こんな条件をミツキさんに提示したかと言えば、元々影の守護者については聖王協会だけではなく本局の上層部でも興味を示している人達が多い。

そして、その大半はそれを今後の自分たちのために利用…もしくは、それを手柄に昇進しようと考えてる輩がほとんど…。

私たちとしては、そういった輩から彼女を守るためにも…そして、影の守護者ではないか？との噂も出ているミツキさんにその真相を確かめるために多少強引な手段であったがあんな条件を提示した。

でも、最初は交渉担当していたはやてにそれを伝え、そして、必要とあらば彼女の家族も同然であるスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター両二等陸士、ユウ・サエグサ一等陸士にも彼女の説得に当たらせるよう伝えた。

でも…私たちの話を聞いた見たはやては…

「後見人の皆様方の考えはわかります…でも…これをミツキに見せる事、そしてスバル達にミツキの説得に当たらせるなんて…ウチには出来ません！だって、こんな事をもししたら折角うち等を信じて…

「六課ならスバル達が抱いた目標をかなえる近道に…そして、それをまっすぐに導いてくれる隊長陣がおる機動六課ならっ大丈夫でしょ？」って、

言ってくれてスバル達を預けてくれて、それに少将として協力までしてもらってるミツキに申し訳が立ちません！！」

と言って交渉するのを拒否。私達もはやてを説得したがうまくいかず、結局はやてに自分以外の者に交渉させるよう命令した。その命令をはやては渋々了承した。

そして、後日はやてから話を聞いたシャーリーが私達がいい答えを引き出してほしい…と伝えるがシャーリーからは、

「最初の条件以外は難しいかもしれません」

と言われたがそれについては、最低限の答えとしてという前置きをしてそれでも構わない旨を伝えて交渉してもらった。

「リンディ統括官はどう思われてますか？」

二人の話を黙って聞いていた私にカリムが意見を求めてきた。

「そうですね…とりあえずは、これ以上の回答は正直厳しいでしょうから…」

「何を言ってるんです！統括官！！いつまであいつにでかい顔をさせて置くんですか！！いっそのこと六課にいるあいつの弟やら、近親者にあいつを説得させるよう命令すれば…」

カリムの問いに私が答えようとしたら、クロノが強行案を提示。

「クロノ提督…そんなことを言ってるから、彼女にこんな恥ずかしい写真を取られるんですよ…」

その案を聞いた私は、それがどんな結果になるかがすぐにわかりクロノに1枚の写真を見せる。

「とっ！！…統括官！！…まだそれを持ってるんですか！！」

私が見せた写真を見たクロノは顔を赤くし座っていた席から慌てた様子で立ち上がる。

「？？それは一体…？？」

その光景をみたカリムがそれが一体どういった内容なのか私に聞いてきた。

「これはね、その昔、クロノがミツキさんに撮られたぁ、失禁写真でぇ～す♪」

「母さん！！それだけは勘弁してください！」

私は笑みを浮かべながらカリムに写真内容を説明。それを見たクロノは慌ててその写真を私からとりあげようとした。

詳しく話をすると、その昔管理外世界地球で起こった所謂「闇の書事件」の後始末をしている時に地球のとある諜報機関にそのことがバレみたいで海鳴に調査員を派遣してきたの。

そして、それをなのはちゃんのお兄さんである高町恭也君が叩きのめしちゃって。

それを聞いたその当時執務官であったクロノがそれに介入してその事自体をなしにしちゃったのよ。

でも、実を言うとその諜報機関と管理局で交渉をしてたらしくそれによればその諜報機関は、「闇の書」と言う”書物”に興味があったらしく管理局側としては、事件の際闇の書は消滅したという風に説明したんだけど納得してくれなかったんだって。

それである程度一定の期間を決めて海鳴を管理局の人間の立会いを条件の元、その機関が調査することで折り合いをつけたみたいなの。

その立会人というのが当時クロノと同じ執務官として前線で活躍していたミツキさん。

その期間内にクロノがミツキさんに確認をとらずやっちゃったもんだからさあ大変！！

その諜報機関とも交渉していたミツキさんにとっては闇の書自体はやての体の中に解けてしまって見つけることが出来るわけもない事を知ってたし。

それに闇の書事件の関係者だったなのはちゃんとフェイトは別の任

務に協力してもらうよう都合をつけて地球から離れてもらっていたし、はやて達も管理局で拘束して取り調べとかしてたころだったから、何も起こらず終わるって考えてたところにこれだから…そうとう大変だったみたい…。

それで、だれがそんなことをしたのかミツキさんが調べているときにクロノと遭遇…ミツキさんはクロノと恭也君をフルボッコにしたったの。

そして、これ以上余計なことをさせないために叩きのめした2人の失禁姿を写真をとったんだって。

ちなみにはやて達八神家のみんなにはその件については伝えないことをミツキさんとの間でそれについては同意してるの。

だって、闇の書事件にその事自体あまり関係しないしそれをしったらはやて達に変な責任感を押し付けかねないからね。

そのことについては、クロノもその事については同意してくれてる。

それでその際、クロノはそのときミツキさんの恐ろしさにどうやら本気で失禁してたみたいで写真には、木に寄りかかった状態で足を伸ばし座っているクロノ腰のあたりに水溜りが出来ている様子が写っている。

私がこの写真をどうやって手に入れたかいえばミツキさんが私のところに怒鳴りつけてきた際もらったの。

ミツキさんとはそれが最初…それから私達に近づきたい連中がミツキさんに情報を提示するよう協力を要請するようになり…彼女が拒

否すれば、それが脅迫にかわり…そして、それが近親者の誘拐未遂事件に発展。

挙句の果てには、彼女に対し性的暴行事件を起こす輩まで…それも彼女が病気を持っている事を利用して…。

私達がそれを知って何度も誤りにも行った…。

なぜそんな事をしたかと言えば、それをした人間は少なからず私達の関係者だったためだ。

そして、それをした人間を厳重に処罰もした。

それは、同じ女性として…そして、同じ子供を育てる立場としてそれを行った連中が私は許せなかったから。

そして、そんな状況が続く中で私と彼女との間で共通点を見つけることが出来今では普通に会話してくれるまでに改善したのよ。でも、クロノとは相変わらずみたい…。

それは、彼女はこういった政治的なことに自分の近親者…つまりナカジマ三佐の2人の娘さん、ティアナ・ランスターさんそして、彼女の弟であるユウ・サエグサ一君をこういった事に巻き込みたくない事。

そして、私も自分の子供であるクロノとフェイトにはあまりこういうのには関わってほしくわないと思っている。

でも、そんな私達の思いをよそに私は、クロノでミツキさんは弟のユウ君ナカジマ三佐の娘のギンガさんがそれぞれの考えでこういう

事に関係してきてる。

そんな今の状況を今でもたまに連絡を取ってはお互いにボヤいてるのよ。でも、それはあくまでもプライベートでね。仕事は別よ。それは彼女も同じみたい。

ちなみに、私はフェイトでミツキさんはスバルさんとティアナさんは辛うじてこういったことに関与させてはいない。

とまぁ、今までこんなことがあった事を説明した私は、写真を見つつ顔を赤らめているカリムとその写真を見られたとこに頭を抱えるクロノに対し、自分の意見を述べる。

「とりあえず、現状としてはやてから今の状況を彼女に伝えてもらうことに。そして、後は彼女からの分析の結果を聞いてからにしましょう。まずは、例の黒いガジェットがなぜこっちのセンサーに反応しなかったのかを一刻も早く解明しないと…もし、あれがミッドに現れでもしたら大変な自体になるかもしれません。ですので、クロノ提督の案については現状の六課との協力関係を優先としたいので却下したいのですがよろしいでしょうか」

私の回答にカリムは同意を示し、クロノは自分の案が却下されたとこを不服に思うのか渋々同意してくれた。

そして、その後今後の六課の方針について話し合い結論とこちらで確認できているミツキさんに対しての情報を彼女に伝えるようはやてに私から伝えた。

私の話を聞いたはやては、

「わかりました。その旨を私のほうからミツキに伝えます。それとわがまま言ってすいませんでした」

と言い画面の向こうで私に頭を下げる。

「いいのよ。私もはやてと同じ立場なら同じ事をしただろうし今回はこっちがかなり強引に事を進めようとしただけだから」

私はそう言いつつはやてに頭を上げるよう促す。

そして、私から彼女に今回の件についてお詫びの連絡を入れるがはやての方からも私達が詫びていた旨をつたえてもらうよう頼み通信を終えた。

その３１（後書き）

作者
「あとがきのコーナー！！通常版！！今回のゲストはゲンヤ・ナカジマさんです」

ゲンヤ
「よっ！！来たぜ！！それにしても今回は長ぇ～な」

作者
「いや～。ハラオウン派の長でもあるリンディさんとクロノの登場ですからね。色々と説明することが多くてこんなになりましました」

ゲンヤ
「まぁな。それにしてもなんでゲストが俺なんだ」

作者
「今回の話の内容知ってるミツキの近親者って、ゲンヤさんとノアだけって設定になっている都合上ユウとか呼べなかったんですよ。それにノアは前回でてますし…それに今回は今の話の事についてなってしまうんで」

ゲンヤ
「なるほどな。確かにあのことをスバル達には言えねぇし、ここで知ったら大変なことになりかねねぇな」

作者
「ええ。それで話を進めますが確かあの時って、こき使われて入院したって事でごまかしたんですよね」

ゲンヤ
「まぁな。状況を説明すれば、まずノアがミツキの帰りが遅いって心配してな。そして、ミツキの魔力を頼りにしてミツキを探したんだが…見つけた時にはもう時既に遅しってヤツでな。それでノアが救急車で病院まで運んだんだ。幸い顔は怪我してなかったから、病院に駆けつけたスバル達にはそう説明したんだ。だから顔以外の怪我を布団とかで隠してな。だが、俺は男だから入院させたは言いが俺がお見舞いに行ったらミツキに怯えられてな。あん時ほど嫁さんがいなかった事を悔やんだことはねぇよ。あの時もし…クイントが生きていたら…色々とフォローしてくれただろうが…男の俺じゃじゃそれもままならなかったしな。ちなみにユウはその時はまだ子供だったからまだマシだったみてぇだ」

作者
「それは大変でしたね。でもその後は改善したんですよね？」

ゲンヤ
「まぁな。その点では、スバルやギンガのお陰だな。あいつら本当に何度もお見舞いに行ってくれたからな」

作者
「そうでしたか…。なんか自分で作って置きながらなんか申し訳ない気持ちになってしまいます」

ゲンヤ
「それはやらなきゃいけねぇ事だったんだから仕方がねぇし、俺らからすればもう終わった事なんだから気にすんなよ」

作者

「ありがとうございます。それじゃ終わったついでにその内にでも、今度はナカジマ家の赤面話でも…」

ゲンヤ
「ちょ…ちょっと待て!!もしかしてあれやこれなんかじゃねぇよな」

作者
「それも含めって事です。どうも最近シリアスばかりなんでいい加減もとに戻そうかと…」

ゲンヤ
「って!!ツラっとした表情で言うんじゃねぇ!!そん事はこの俺が!!って、あああああああああああっ」

急にゲンヤの足元に穴が開きそして、その中に落ちるゲンヤ。

作者
「やれやれ…やはり阻止しにきましたか…そんなことがあろうかと落とし穴用意しといてよかったよかった。と言う訳で今回はここまで!!それでは次回、リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３２…テイクオフ!」

その３２

その３２

ユウ視点

ティアナの一件が終わってからおよそ１週間。

あれからティアナはどうなったかと言えば、姉貴と会った次の日からスバルとの特訓を辞め、訓練にも熱心に打ち込むようになりなのは隊長達には積極的に質問するようになった。

そのティアナの態度の変化はスバル達にも影響を及ぼしスバル達もティアナに続けと言わんばかりに隊長陣に色々と話かけてた。

なのは隊長達もそのティアナ達の急激な態度の変化に最初こそは戸惑いつつも質問に答えたり、自分が行っている教導の意味を教えたりしていたが、その後はティアナ達の意見を訓練に取り入れたりしていった。

そんな会話から始って何時の間にか、プライベートな会話までするようになり隊長陣とティアナ達新人フォワードの距離も少しずつ上司と部下から先輩と後輩といった距離感になりつつあった。

さすがは、女同士…。一度切欠さえ掴めればお互いの距離感を縮め

るのが早い早い。

これが男同士だとこれが中々…。

「ユウさん！！僕のことを忘れてませんか！！」

とエリオの嘆きの叫びが俺の頭の中をよぎった。

あっ…エリオは男だったか…。

まぁ、いい。

「そんな～！！！！」

再びエリオの嘆きの叫びが俺の頭の中をよぎったが話が進まんのでスルー！！！

…とまぁ、こんな感じで六課フォワード陣の不協和音も改善されたとさ…。

そして、現在俺は何をしているかと言えば…とりあえず状況を説明しつつ、スバル達の教導を遠くから眺めているってところだ。

「なんや、もっと近くで見ないんか？」

「ええ、これでも仕事の途中なんで」

「そうやったんか」

海上に浮かぶ訓練施設を見ていたら後ろからうちの部隊長とシグナ

ム副隊長が一緒に現れ八神部隊長が俺にもっと近くで見ないのか？と声をかけてきた。

その声に反応した俺は、仕事の途中の寄り道であることをつげる。

「それにしてもティアナの件ではすまなかったな。主はやてに話を聞いたがなんだか色々と動いてもらったみたいでな」

「いえいえ、それを言うならスバルに言ってくれ。そもそもあいつが姉貴に相談しなけりゃこうはなりませんから。俺はただあいつ等が考えたことをやりやすいようにしただけだからな」

シグナム副隊長は「そうか」と言いつつ頷いた。

「でもまぁ、最初ユウからその話を聞いた時には驚いたけどな」

俺とシグナム副隊長との話を聞いた八神部隊長は腕を組みをつつそのときの事を思い出しながら話だした。

実を言うとティアナの件は部隊長とシャーリーさんには話しを通しておいたんだ。これは、俺の独断でこのことについては姉貴やスバルには所謂事後報告ってヤツだ。

なんせ、その辺はについては俺にまかせてくれるように事前に姉貴に話をつけてるからな。

だってよ～。ティアナを姉貴のところに連れ出そうにも誰か上司の許可がいるだろ？ともなればティアナの直接の上司であり、ある意味その原因のひとつでもあるなのは隊長とヴィータ副隊長になんか話をするわけなんか出来ねぇし。

それにフェイトと隊長やシグナム副隊長はライトニングだから問題外…。

姉貴は、連れてくるんじゃなくてこっちから行こうか？とも言ってはくれていたが、それについてもなのは隊長達があれやこれやありそうだったので姉貴の申し出については断っていた。

という訳で自然的に部隊長しか話せる人はおらず、ほんでもって部隊長話をしてティアナを姉貴の所に行けるよう話を通してもらたって訳。

それで、なんでシャーリーさんも話をしたかと言えば、俺や部隊長がティアナを連れ出したらあいつが警戒するだろうと思ってな。それで、色々考えて末シャーリーさんに声をかけたって訳。

理由としてはシャーリーさんって、フェイト隊長の執務官補佐官だからな。

それとあいつって執務官志望だからさ。

まっ、その辺を利用してってところだ。

ちなみに姉貴の方にも事前にその辺のことを話しており、執務官の仕事を貯めといてもらったんだ。

「でも、まさか姉貴との交渉の場にティアナをつれてくなんて思いも寄りませんでしたけど」

とりあえず、状況の説明を終えた俺は、部隊長の話にあわせるよう

に答えそして、姉貴との交渉の場にティアナを連れてったことについて突っ込んでみた。

「なんや、もう知っとったんか？あれは、あのタイミングでしかティアナを出せなくって…堪忍なぁ」

部隊長は俺の声に両手を合わせ俺に詫びる。

なんせ、姉貴と交渉するなんて事は聞いてないからなぁ。

「そのことなら問題ないですよ。ちなみになんで知ってるかと言えば姉貴から連絡が来ましたてね。はやてが六課の後見人達と色々とやらかしてないか？ってね」

部隊長の話に俺は問題ない事を告げなぜ知っていたのかその理由を告げる。

「なんやそうやったんか」

「とりあえず、姉貴には状況の説明と俺の身分じゃ話すことが出来ない案件でしょうから部隊長から姉貴に直接話をしてもらう話をしておくって言ってますんでお願いしますね。ちなみに姉貴には詳しい交渉内容については聞いてませんのであしからず」

「了解や。それと交渉の事にについては、ティアナは一切関わってへんからな。それだけは言うとくわ」

「了解です」

部隊長は、俺の話を聞き了承した旨と俺に対して交渉にはティアナ

は関わっていない旨を言ってきた。

なぜかって言えば、俺も姉貴と同じで極力こう言った面倒ごとにティアナやスバルとかを関わらせたくないからな。

まぁ、出世したらそうとはいかねぇが…とりあえず今の所は関わらねぇ事に越したことはねぇよ。

それに、俺やギンガみたいに色々と関わっちまうと見たくねぇもんまで色々と見たり聞いたりしちまうんでな。

どうやら部隊長も姉貴が色々と知ってる俺やギンガをもこう言った事に極力巻き込みたくない事を知っているようで色々と俺に隠し事をしてるみたいだ。

俺もギンガも姉貴がそんな考えてるってことは知ってる。

そこら辺については、ゲンヤのじじいから

「下手に首を突っ込めばミツキが心配するだろうから俺にまかせろ」

って言われてるからな。

それに、なんかあればじじいから連絡くる手はずにもなっている。

その言葉をギンガも俺も信頼しているからその辺については、じじいに任せてる。

とまぁ…なんやかんや考えていたら…

「どうだユウ！久しぶりに私と戦わないか！」

シグナム副隊長…なぜそんなに燃えてるんだよ…。

それになんだよ…この展開…

その３２（後書き）

作者
「あとがきのコーナー！！通常版！！という訳で今回はようやくの登場！！主人公のユウです！！」

ユウ
「どもっ！ってなんで主人公なのにこんなに登場が遅いんだ？」

作者
「いやまぁ…本編の都合上こうなってしまったんですよ…」

ユウ
「本当かよ？と言っといて実は忘れてたなんてことは…」

作者
「まさか…そんなこと…」

ユウ
「とかいいつつ目をそらすんじゃねぇ！！」

作者
「とりあえず、今回もまた説明文で終わってしまいましたね。」

ユウ
「（流しやがった…）そっ…そうだな。とりあえず、俺がなにやってたのかの状況や何考えてるのか説明しておく必要があったからな～まっ、仕方がないさ。それにしてもなんなだ？あの最後は？」

作者
「いや～シグナムさんだったらああなるだろうなって思いましてね」

ユウ
「ヤツならありえるな…それでどうするんだ？次回？」

作者
「さぁ？どうしましょう？」

ユウ
「って、コラー！！また思いつきでやったんか！！」

作者
「そ…そんな事ある訳…」

ユウ
「また目をそらしやがったな！！」

作者
「ね…ネタばれしないためですよ（笑）ユウだってそろそろ主人公として目立っておきたいでしょ？」

ユウ
「そっ…そりゃそう言われればそうだが…だが！面倒ごとはご免だ！！」

作者
「面倒事に巻き込まれるのは、主人公性ってヤツですよ。多少なりのことは我慢してください。それでは今日はここまで！！それ

では、ユウ〆の言葉をよろしく！！」

ユウ
「なんか…不に落ちない事が多いが…まぁ、いいか！！ほんじゃ…」

アルト
「次回、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～
その３３！！」

ミツキ
「…君は…時の涙を見る…」

アルト＆ミツキ
「…テイクオフ！」

ユウ
「コラーーーー！！アルトに姉貴ーーーーーーーーー！！いきなり出
てきておいしいところをもってくんじゃねーー！！しかもなん
か違うぞ！！最後の部分！！って、そのまま終わんかよーー！！」

その３３（前書き）

訓練スペース

スバル視点

「模擬戦するんですか？あの２人？」

「そうだよ」

私達の午前中の訓練が終わりそうになった頃、シグナム副隊長がユウ兄を引きずりながら八神部隊長と共に現れた。

そして、なのは隊長と少し話をした後二人して準備体操を始めてだした。

様子としては、シグナム副隊長は生き生きとしながら。

その一方ユウ兄は、なんだかとても面倒くさそうに…。

そんな光景を見ていたティアがなのは隊長に二人が模擬戦をするのか聞いていた。

ティアの問いになのは隊長がそれであってる旨を答えていた。

「スバルさん、ティアナさん？ユウさんっていったいどんな戦闘スタイルなんですか？」

そして、二人が模擬戦をすることになったため、私達の訓練は2人の模擬戦を観戦しそれをレポートにまとめる事になった。

訓練スペースが市街地の設定になっていたので私達は、さっさと後片付けをし近くのビルの屋上へと移動を始めた。

そんな時、私とティアの後ろにいたエリオが私達に質問をしてきた。

「私は…知らないんだけど、スバル？あんた知ってる？」

エリオの問いを聞いたティアはその答えを私に振ってきた。

「う～ん…。昔、母さんからギン姉と一緒にシューティングアーツを習っていたってのは知ってるんだけど…」

私は、自分の中にある記憶を探しながらエリオに答える。

だってさぁ…私が本格的に魔法とか習い始めた頃って、ユウ兄なんか既に局員だったし、確かそのころ仕事が忙しいとかなんとかで…。

結局、ユウ兄にとか魔法教えてもらってないんだよね…。

ちなみに、シューティングアーツは主にギン姉に教わって、ギン姉が仕事のときとかはノアがギン姉の代わりをしてくれて、魔法とかはミツ姉に教わったんだぁ♪

「となるとシューティングアーツがベースにあるってことなんでしょうか？」

ビルの中に入り階段を上っていた所で今度は、キャロが私の答えから導き出した推論を私に言ってきた。

「う～ん…私もユウ兄が戦ってる所なんて見たことないから詳しく説明できないんだよね…ごめんキャロ」

私は、キャロにうまく説明できない事をいい謝った。

その声にキャロは「いいえ」と答えながら笑顔で答えくれた。

それにしても、なんでこうなったの？

と…とりあえずコレッて前書きだから…。

よ～しっ！！いっくぞ～！！

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３３！始まります…」

てぃ…ティア！！それ私のセリフ～！！！

その３３

その３３

ユウ視点

いったい…なんでこうなった…。

俺は、訓練スペースで渋々準備体操をしながら記憶をめぐらせていた…。

あれは、確か…。

「どうだユウ！久しぶりに私と戦わないか！」

と俺と部隊長との話が終わりかけた頃、いきなりシグナム副隊長が話を切り出してきたら…俺は…。

「お断りします。面倒なんで」

って断ったら…。

「なんだその面倒とは！？そんなに私と戦うのが嫌か！！」

「はい！その通りです！！」

って、はっきりと答えたら…。

ガン！！

ドゴン！！

ガン！！って、いきなり殴られてその勢いそのまま俺は地面にダイブ！！。

ちっきしょ～殴るのに強化魔法使うか！！普通！！

「貴様ぁ～！！いい加減その腐った根性をたたき直してる！！」

とかなんとか殴られたと言うより、地面に顔面からダイブした影響で意識が朦朧としている俺の胸倉をつかみながらなんか言った後…。

俺の整備服の奥襟をつかんだままここまで引きずって来て、その後有無も言わさず模擬戦がするしかない状況に追い込まれたんだな。

ちなみに八神部隊長と言えば、俺とシグナム副隊長とのやり取りをケラケラ笑いながら見ておった。

そしてなのは隊長、ヴィータ副隊長との交渉は、

「そう言う事ならウチに任せとき！」

とチビ狸がその担当を買って出た。

その光景を見た俺は、朦朧とする意識の中で心から願った…。

頼む…断ってくれ…と…。

だが、俺の願いとは裏腹…それもあっさりと模擬戦をやってもいいと許可がおりていた。

どうやら、二人とも俺がどんな戦い方をするのか興味を持っていたらしく部隊長の話にすんなりＯＫを出していた。

その瞬間…俺の中での最後の希望は潰えた…。

「ユウ兄！！頑張ってぇ！！」

「ユウさん！ファイトです！！」

ビルの上から、訓練を中止されたスバル達がこっちを見ながら声をかけてきた。

その声に俺は手を振りつつその声に答える…。

って、あいつ等…訓練が中止になって喜んでやがるな…。

とりあえず、準備を終えた俺はシグナム副隊長が立っている所まで歩みを進めた。

「デバイスは…持ち歩いているな」

俺と向き合う形で立っているシグナム副隊長は、既にセットアップ済みで臨戦体制が整っていた。

そして、俺がデバイスも持っていることを確認してきた。

どうやら向こうさんは、デバイスでの魔法戦闘がお望みらしい…。

やれやれ…俺としてはデバイスなしの方がまだよかったんだがな…。

シグナムの問いに俺は、無言のままポケットから赤い宝石がついたドックダグを見せた。

それを見たシグナム副隊長は、ニヤリとした表情をし俺の次の行動を無言のまま待つ。

俺は、ハァ～っとため息をついて、

「しゃあない…ゲイル…セットアップ」

俺の声を聞いたドックタグ…俺のストレージデバイス、正式名称ゲイル・ファイングは赤い宝石を光らせた。

次の瞬間、俺の体はひかり包み数秒後俺はバリアジャケットを装着した。

俺の格好はと言えば、黒っぽいジーンズに黒のインナー、その上にベージュのロングコート身を包み、両手には指の部分がでた紺のグローブを嵌めている。

そして、腰の左側には、中国の刀である「苗刀」の形をしたカートリッジ機能付きのアームドデバイス「紅」と銃型に変化した「ゲイル・ファング」が腰の右側にそれぞれ刀の鞘と腰からぶら下がったヒップホルスターに収まっている。

その姿を見たシグナム副隊長は、自身の剣型アームドデバイス「レ

ヴァンティン」を抜く。

それを見た俺も紅を抜く。

ちなみに紅はその刀身は名前と同じで色は濃い赤。鞘と柄の部分は黒となってる。

無言のままお互いに一定の距離を置いて向き合う二人。

お互いに構えはせず、向き合ったまま剣をおろした状態のまま微動だせず。

そして、静かに開始の合図を待つ。

その表情はまさに真剣そのもの。

そして、ピーンと張り詰めた空気と緊張感が二人を包む。

その状況を見つめていた、なのは隊長が二人の間に立ち右手を上げる。

「それでは…レディー」

ヴォーン、ヴォーン、ヴォーン…

「これは…第一級戦闘体制!?」

「グリフィス君これはいったいなんや!!」

なのは隊長が開始の合図をしようとした所で警報が鳴り響。

それを聞いたなのは隊長がそれが第一級の戦闘体制の警報だと告げ、八神部隊長もまたその音と聞いてすぐにグリフィスさんに確認をとっていた。

ちなみにそれを聞いた俺はホッと胸を撫で下ろした。

そして…シグナム副隊長と言えば…

「ようやく…ようやくヤツの腐った根性を叩き直せるチャンスが…そして、ヤツとの楽しい戦いが出来ると思ってたその矢先に…またしても…またしても…」

と俯きレヴァンティンをダラリとさげたままブツブツと呟きながら肩をプルプル震わせながら苛立ちを露わにしていた。

その３３（後書き）

さて、模擬戦をやるかと思いきやこうなりました（笑）

ですが、このままではおわりません！！

次回ちょっとしたクイズを用意してますのでぜひ参加してみて下さい。

その３４（前書き）

シグナム視点

ユウ・サエグサ…。

ヤツとの出会いは、私がミッドチルダ首都航空隊第１４部隊に所属していた頃、ナカジマ三佐が率いる陸士１０８部隊からの応援部隊の整備士として我が部隊に訪れたのが切欠だ。

最初の頃は、挨拶程度だったがヤツがアルトと同期でありヴァイスとも知り合いであること。

そして、我が主である八神はやてのご友人であるミツキ・サエグサがヤツの姉であることを知ったことから私とヤツとの間での距離も縮まり会う度に話をするまでとなった。

そんな中、私はヴァイスからヤツが武装隊にも行った事がありそれも中々の強者であることを知り、その実力を自分の目で確認した私は、ヤツに模擬戦を申し込んだ。

無論、ヤツは私の申し出を受けると思っていた。そして、ヤツと私は似たもの同士で楽しい戦いが出来そうだと確信していた。

だが…。

「お断りします。俺は、シグナム二尉と違って戦闘狂ではないんで…すいません、仕事があるんで失礼します…あっ…それと訓練も間

に合ってますんで！！」

ガーーン！！

それを聞いたヤツの最初の一言目がこれだ…。

そして、呆然とする私を尻目にヤツはそそくさとその場から去っていった。

それからと言うもの何度も模擬戦や一緒に訓練をしないか？等、ヤツを誘ってはみたが似たような理由で断られた。

その後もヤツとは、同じ戦場で戦う事はあっても相対する事はなかった。

そして、ヤツが機動六課にくる事になり今度こそと思っていた所、今度は主はやてから、

「シグナム…ミツキの弟との模擬戦の事なんやけど…なのはちゃんのほうから新人達の自信を無くされたら困るから第一段階が終わる頃くらいまで模擬戦するの待ってくれへんかって言われてなぁ…。それで、悪いんやけどちょっとの間、彼との模擬戦するの待ってくれへんかな？」

主はやてからのその言葉に私は、ショックを受けたが高町の言い分には納得が出来たので私はその言葉に反論せずに従った。

そして…ようやく…高町の方からもＧＯサインが降りて…ヤツを強引に訓練場に引きずり出してセットアップまでさせたと言うのに…。

「ようやく…ようやくヤツの腐った根性を叩き直せるチャンスが…
そして、ヤツとの楽しい戦いが出来ると思ってたその矢先に…また
しても…またしても…」

私は、第一級戦闘体制の警報が鳴る中…そう呟いていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３
４…始まります…」

その３４

その３４

機動六課隊舎内　食堂

なのは視点

＜ハァーーーーーーーーー＞

＜ズバッ！！　ドゴーーーーン＞

＜ライトニング０２　これで３０機目の撃墜！！＞

＜とおりゃ！！　ザシュ！！　ドゴーーーン！！＞

＜ロングアーチ０４　２８機目撃墜！！＞

私達は現在、隊舎の食堂に表示された画面からユウ君とシグナムがガジェットとの交戦内容がＬＩＶＥ表示されその画面から二人の声と共にロングアーチからの…これは、アルトの声だね。

現在、六課隊舎内にある司令室にいるアルトからの音声報告が随時流れている。

「おお～！！さすがシグナム副隊長！この勝負もらったな」

「おいこらっ！！ユウさっさと撃墜しねぇか！！そうじゃねぇと俺

の負けじゃねぇか！！」

「いっけぇ～ユウ兄！！」

「そこです！！ユウさん！！」

「ユウさんファイト～！！」

「ユウ！！ちゃっちゃとやんなさい！！」

私の周りには、スバル達フォワード達とヴィータちゃんとフェイトちゃんそして、整備部のみんなが一緒になってこの戦闘を観戦中。

そして、この戦闘には、はやてちゃんの主催による「ユウ君とシグナム一体多くガジェットを撃墜させるか？」という予想クイズ大会が行われている。

ちなみに私は、最初賭け事だと思いはやてちゃんを止めようとしたけど…。

はやてちゃんから来た答えは…

「ええか！なのはちゃん！これは、単なるどちらが撃墜数が多いのか？と言う予想クイズなのでないんや！という訳で賭け事にはならんし、それに正解しても景品とかは出さないで！」

とのこと。

その後、フェイトちゃんから

「でも、二人はこれから戦闘に行くんだよ！いくらなんでも不謹慎じゃ…」

との意見もでたが、とある理由によりこれも却下された。

ちなみにさっき声を上げていたのは、最初がヴァイス君で後がシゲさん。

そして、その後にスバルとエリオ、キャロにティアナの順でが画面上に写るユウ君に声援を送ってる。。

それで何でこうなったと言えば…。

時間は遡り…

機動六課　訓練スペース

はやて視点

ヴォーン！！ヴォーン！！ヴォーン！！

第一級戦闘体制を伝えるアラームがシグナムとユウが模擬戦がまさに今始ろうとしたその時うち等がいる訓練スペースに鳴り響いた。

「これは…第一級戦闘体制！？」

「グリフィス君！これはいったいなんや！！」

なのはちゃんが声を上げたと同じくらいにウチは、通信画面を立ち上げ司令室にいるグリフィス君に確認した。

「部隊長！ガジェットが海上に現れました。その数およそ６０！！」

「海上にガジェット？それで、状況は？」

「被害は、今の所ありません…ガジェットは、何もない海上をただ動き回ってるだけです」

通信画面に出たグリフィス君からガジェットが海の上に現れたとの報告がされた。

その声にウチは、詳細な状況の確認をグリフィス君に求めた。グリフィス君からは、被害が今の所出ていないこととがジェットが海上をただ動き回っていることが報告された。

「高町なのは一等空尉、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官どう思う？」

ウチは、ガジェットのおかしな行動になのはちゃんとフェイトちゃんに意見を求めた。

「恐らく…私達の戦闘データの回収が目的だと思います」

「私も同じ意見です。八神部隊長」

ウチの声にフェイトちゃんがうち等の戦闘データの回収が目的であ

る可能性を示唆し、なのはちゃんもフェイトちゃんの意見に同意した。

「そやね。ウチもそう思うわ。それなら、現状戦力で撃墜させる方がええやろ」

ウチもフェイトちゃん達の意見に同意し新たな戦闘データを取らせない方法での撃墜をとることにした。

「主はやて、お願いがあります」

「なんや、シグナム？」

ウチ等の意見がまとまった所でシグナムがウチに声をかけてきた。ウチは、そのシグナムの願いとやらがなんなのか確認する。

「今回の戦闘ですが、現状から考えると既にセットアップを済ませている私とユウが向かうのが、最善だと考えます。ですので私とユウに出撃の許可を」

「げぇ…まじかよ！！」

どうやらシグナムは、模擬戦が中止になることを見越してその憂さ晴らしをしたいらしい。

シグナムの話にユウは嫌そうな顔をし声を出す。

「シグナム、憂さを晴らしたい気持ちはわかるけどユウ君をみすみす敵に晒すような真似は…ちょっと…」

ウチがシグナムに答えようとするその前にフェイトちゃんがシグナムがやろうとする事は、ユウを敵に見せる事になり六課の新たな戦力があることを敵に見せる事になるためその意見に反対した。

「それなら、問題ないですよ。フェイト隊長」

フェイトちゃんの意見に今度は、ユウが何かを見た後”やれやれ”といった表情でフェイトちゃんの意見に反論してきた。

「どうゆう事や？ユウ？」

ユウの声にフェイトちゃんに変わってウチが問いただす。

「それに答えるその前に…おい！アルト！ガジェットのいる所をよ～く見てくれ。もしかしたら、面白いもんがあるかもよ？」

「りょ…了解！」

ユウはウチに答えるその前に司令室にいるアルトにガジェットがいる海上の様子をよく見るよう伝える。

ユウの声にアルトは、了承した旨を伝える。

ちなみにユウとアルトのやり取りは、今さっきウチがグリフィス君に通信した画面から行われている。

「あ～ーーーーーーーーーーーっ！！」

少しの時間を置いたところでアルトから驚きの声があがる。

「アルトどないした？」

アルトの声にウチは、何が起こったのか確認する」

「ぶ…部隊長…う…海鳴で私とユウを襲った黒いガジェットがいます！その数およそ１１！！」

「なんやて！！」

アルトは、海鳴で見たちゅう黒いガジェットがいることを確認し報告してきた。

アルトの声にウチは驚きの声を上げる。

「やっぱり…となると敵さんは俺の戦闘データも持ってることになりますね。と言うことで俺が行っても問題ないって事です。ちなみになんで俺がそれを確認出来たかと言えば姉貴から今さっきメールが来ましてね。黒いガジェットがいるよってね。それがこれです」

驚きの声を上げるうち等に対しユウは、黒いガジェットとウチ等がよく相手をするガジェットを操っている連中は繋がっていて、自分の戦闘データも既に持っている可能性を示唆。

そして、もう既に戦闘データを取られてるなら自分が行っても問題ない旨とその情報元は、ミツキからのメールである事を告げそのメールの画面をウチ等に見せる。

「そやね。ユウの言う通りやね。なら、シグナムとユウにそのまま飛んでいって貰おうか」

「ありがとうございます！主はやて」

「了解…やれやれ…いっちょ、やってきますか」

…それにしてもミツキのヤツ…どうやって黒いガジェットがあそこにいるなんて事わかったんや？でも、今ユウに聞いてもわからんやろうから、今度向こうに言ったときにでもミツキに聞いてみよう…

ウチは、そんな事を考えつつもユウの意見を取り入れシグナムとユウに出撃するよう伝え二人は、了承した。

「ユウ…今回の出撃でもし、私がおまえよりも多くのガジェットを撃墜したら、模擬戦をやってもらうぞ！いいな！！」

「はぁ～…わかったよ…なら、俺が勝ったら二度と模擬戦にさそうな！」

「わかった」

「その話ウチも乗った～！！！！！」

シグナムがユウに撃墜数の勝負を挑んでいる話を聞いたウチは、その話にウチも乗る旨を伝えるため声を上げる。

「は…はやてちゃん…いったいどうしたの？」

ウチの声に疑問の声を上げるなのはちゃん。

「だから、シグナムとユウの勝負にウチも乗ったんや。つまりこれを機動六課全員でどっちが多く撃墜するのか予想するんや！！」

「はやてちゃん…それって賭け事じゃ…」

ウチの説明になのはちゃんは、賭け事じゃないかと聞いてきた。

「ええか！なのはちゃん！これは、単なるどちらが撃墜数が多いのか？と言う予想クイズなのでないんや！という訳で賭け事にはならんし正解しても景品とかはださないで！」

「でも、二人はこれから戦闘に行くんだよ！いくらなんでも不謹慎じゃ…」

なのはちゃんに説明し終えた所で今度はフェイトちゃんが意見してきた。

「俺等なら問題ありませんよ。その方が遣り甲斐がありそうだし…なぁ、シグナム副隊長？」

「ああ、主はやてが応援してくださるとなれば俄然やる気がでる」

「と…言うわけやフェイト隊長？ちなみにウチはもちろん！シグナムが勝つ方を予想するで！！」

フェイトちゃんの意見にユウとシグナムが問題旨を伝えてきた。その声にウチは、フェイトちゃんにその旨を確認。

フェイトちゃんは、その二人の意見を受け入れた様子でそれを確認したウチはシグナムが勝つ方を予想した。

再びなのは視点

と…言う訳で現在にいたります。

現状だとシグナムが2機ほどリードしており残りは、2機のガジェットと11機の黒いガジェットが残るのみとなっていた…。

再びはやて視点

ほなら最後に、ウチからこの作品を呼んでくださった読者の皆様方にクイズの出題や!!

今回の問題は、今のお話と同じでシグナムとユウ一体どちらが多くのガジェットを撃墜するか?ちゅう事や。

答えがわかった方は、下の感想の一言にどっちが勝つか記載して送信してな。

詳しいルール等については、この後この作品の作者から説明があるからよう見て応募してな。

そして!今回のクイズの正解した方全てにユウとミツキの無料出張権をプレゼントするで!!

ちなみにウチはシグナムが勝つ方を予想しておる。

他のこの作品の主要メンバーの予想は下記の通りや

・シグナムが勝つ

なのは、フェイト、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、ヴァイス、グリフィス、リンディ、クロノ、カリム、リイン

・ユウが勝つ

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、アルト、シゲ、ミツキ、ノア、ギンガ、ゲンヤ、ルキノ、シャーリー

と言う訳でシグナムが勝つに予想しているのは、ウチを含め１２人！ユウが勝つのを予想しているのも同じく１２人。

理由としては、「シグナムはやっぱ強いから」ってのがほとんどでその一方ユウの方は、「今残っている黒いガジェットを１０機それも一人で倒している所」を理由に上げてる人が多かったわ。

さて、現状を言えばシグナムが３０機でユウが２８機のガジェットをそれぞれ撃墜しておる。

そして、残りはガジェットが２機、黒いガジェットが１１機！ちゅうことは、ドローはなしの真剣勝負や！！

みんな！ドシドシ応募してなぁ！！

待っとるでぇ！！

その３４（後書き）

と言う訳で今回久々にクイズを決行する事になりました！

問題は、先ほどはやてさんからありました、

・シグナムとユウ一体どちらが多くのガジェットを撃墜するか？とのことです。

答えがわかった方は、あとがきの下にある感想を書くの中の一言にどちらが勝つか記載して頂きその下の「感想を書く」のボタンをクリックし応募して下さい。

今回の正解者の方全てにユウとミツキの無料出張権をプレゼントします！！

ただし、注意点がありますので下記内容をご確認の上のご参加をお願いします。

・申し込みは一人一回とさせていただきます。

・申し込みの際、作者様とその作者様の小説の登場しているキャラクター（オリキャラ、原作キャラも含む）との間で別々の答えを申し込んだ場合、そちらについてはその答えの両方とも無効とさせて頂きます。

そのため作者様と登場キャラとの間で話し合い？等をした上でどちらか一つにまとめて頂き答えて頂きますようお願いします。

・今回、クイズのに正解した方全てにユウとミツキの出張権をプレゼントいたしますが、

出張権が不要の方は、一言の欄に不要、

どちらか一人だけで言い方は同じく一言の欄にユウ、ミツキのどちらかの名前を記載して下さい。

尚、正解して獲得した出張権を他の作者様などへ無断で渡さないで下さい。

もし、そういった事が起こった場合恐れ入りますが1度こちらにご一報下さい。（感想を書くの一言もしくは、メッセージにてご連絡下さい）

・申し込みは、８月４日水曜日の昼の１２時、「いいとも」が始ったのと同時に終了いたします。

結果については、次回の「その３５」もしくは、「その３６」の中で正解を発表いたします。

皆様方の沢山のご参加お待ちしております！

それでは、次回魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３５…テイクオフ！

祝！！１５万Ｈｉｔ特別編（前書き）

作者

「何時もこの作品を御愛読頂きありがとうございます！（ペコリ）皆様のお陰を持ちまして、ユニークが１５万、ｐｖが１万５千ＨｉＴを突破する事ができました。そこで本日は、予定を変更しまして、ありきたりでは御座いますが特別編と称し登場キャラ達によります座談会を開催したいと思います。では、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！１５万ＨｉＴ特別編！！始まります…。

祝！！１５万ＨｉＴ特別編

祝！！１５万ＨｉＴ特別編！！

ミツキ
「…という訳だけど、とりあえず…なんかネタある？」

ノア
「そうだな…今までやって来た感想とか…苦労話とか…」

ユウ
「苦労ねぇ…苦労と言えば、俺等って結局の所作者の思いつきに振り回されてねぇ？」

ミツキ
「まぁね、その辺についてはよくあったよね…特にアルトとか…」

ノア
「あいつじゃねぇか？その思いついきの最初の被害者って？」

ユウ
「ああ、確か…俺とチビ狸が喧嘩してるところに捕織り込まれたって時だったか…」

アルト
「あの時は、本当辛かったんだから！！（泣）」

ユウ

「でたな!!怪人!ザ・クラッシャー!!」

アルト
「なによ!!そのヒーロー物にでてくる怪人の登場シーンにヒーローがいいそうなセリフは!!」

ノア
「なぁ…ユウ…そのザ・クラッシャーって一体どっからでて来たんだ…」

ミツキ
「それって、あれでしょ?昔アルトが古いメカとか分解しちゃうって癖の事でしょ?」

ユウ
「さすが姉貴!!よく解ってるじゃねぇーか!!ちなみにザ・クラッシャーってのはその癖を模してあだ名をアルトにつけようとした時の候補の一つで…」

ゴドーーーン!!!(アルト、ハンマー召喚!!それをそのままユウの脳天に振り下ろす…この間、約0.2秒)

ユウ
「ぐべぼっ…」

アルト
「ユウ…それって結局やる暇が無くって没にしたヤツでしょ…」

ユウ
「このハンマーも作者の思い付き…だったよな…ガクッ…」

ミツキ
「相変わらずおみごと…」

アルト
「いや～それほどでも…。これもヴィータ副隊長に色々と教わったお陰です」

ノア
「やっぱあいつだったか…アルトにハンマー教えたのは…」

アルト
「それはそうと、海鳴にいった時よくユウがナカジマ家の事をいってましたけど…あれって…」

ノア
「ああ…、翠屋でいってたスバルをからかってたヤツとユウが炒飯作ってた時のヤツだな…あれは確か…」

すぱーーーーーん!!

（突如現れた新聞紙の棒に叩かれるノア）

「フギャ!!」

ギンガ
「ふぅ～危うい所だったわ…」

スバル
「ギン姉!!間に合ったの!!」

ギンガ
「あっ、スバル！なんとか間に合ったわよ…」

スバル
「よかった～コラッ！！ノア！！それは言っちゃダメっていってるでしょ！！」

ギンガに叩かれたノアをつまみ上げ注意するスバル。だが、ギンガの一撃によりＴＫＯ状態のノアには聞こえていない。

その光景を見たアルトとティアナは…

アルト
「ねぇ…ティアナ」

ティアナ
「な…何よ」

アルト
「普通…あそこまでやる？」

ティアナ
「完全に延びちゃってるわね…でも、これって自業自得じゃない？」

アルト
「そうだね…。お互い気をつけた方がいいかもね、色々と…」

ティアナ
「そうね。気をつけましょう」

その一方で…

はやて
「こらっ!!みちゅき!!ウチのおしゃけが飲めへんのか!!」

ミツキ
「ふにゅ～もうらめ～飲めまシェ～ん」

シグナム
「おい!!シャマル!!お前またやったな!!」

シャマル
「シグナムいったいなんの話よ?」

シグナム
「とぼけるな!貴様5万HiT祝宴の際、高町に酒を飲ませただろう!!それを今度は主はやてとミツキに行うとは!!」

シャマル
「ち…違うわよ!!私じゃないわよ!!ほらあそこ見て!!」

と言いある方向を指差すシャマル。シグナムもそのシャマルが指す方を見る。

フェイト
「ヴィータ、本当これでいいの?」

なのは
「二人の飲み物をお酒に変えるだけで本当に本編でまともな出番が

増えるの？」

ヴィータ
「ああ！！間違いねぇ！！これは前回シャマルが試した方法ですぐに本編でシャマルがまともな出番来たんだ！！」

フェイト
「なるほど…これなら要約、暴走キャラじゃなくなるんだよね！なのは！！」

なのは
「うん！！私は悪魔なんて言われなくなるんだね！！フェイトちゃん！！」

なのはとフェイトはお互いの手と手をつかみ合い…そして…抱き合った。

シグナム
「ヴィータぁ～（怒）」

ヴィータ
「し…シグナム…まさか…今の…見てた？」

シグナムの表情を見たヴィータは恐る恐る質問をする。シグナムはそのヴィータの問いに無言で頷く。

その後…

ぺちーん

ぺちーん

ヴィータ
「ご…ごめんなさ～い（泣）」

ヴィータの悲しき叫びとともにシグナムがヴィータを尻たたく音が
響き渡り…

フェイト
「なのは!!」

なのは
「フェイトちゃん!!」

ガシッ!!

ヴィータがそんな目に会ってるとはつゆ知らずなのはとフェイトは
何度も抱き合い喜び合っていた…。

祝！！15万Hit特別編（後書き）

いががでしたでしょうか？

なんだか、座談会と言うよりコネタ集っぽくなってしまいましたが…。

こんな感じで引き続きやっていきたいと思いますのでおつき合いのほどよろしくお願い致します。

そして、前回出題したクイズの答えも引き続き募集しております。

問題は「その３４」でユウとシグナムがガジェットの撃墜数を争う事になりましたが？

・一体、シグナムとユウ一体どちらが多くのガジェットを撃墜するか？と言うことです。

答えがわかった方は、あとがきの下にある感想を書くの中の一言にどちらが勝つか記載して頂きその下の「感想を書く」のボタンをクリックし応募して下さい。

今回の正解者の方全てにユウとミツキの無料出張権をプレゼントします！！

ただし、注意点がありますので下記内容をご確認の上のご参加をお願いします。

・申し込みは一人一回とさせていただきます。

・申し込みの際、作者様とその作者様の小説の登場しているキャラクター（オリキャラ、原作キャラも含む）との間で別々の答えを申し込んだ場合、そちらについてはその答えの両方とも無効とさせて頂きます。

そのため作者様と登場キャラとの間で話し合い？等をした上でどちらか一つにまとめて頂き答えて頂きますようお願いします。

・今回、クイズのに正解した方全てにユウとミツキの出張権をプレゼントいたしますが、

出張権が不要の方は、一言の欄に不要、

どちらか一人だけで言い方は同じく一言の欄にユウ、ミツキのどちらかの名前を記載して下さい。

尚、正解して獲得した出張権を他の作者様などへ無断で渡さないで下さい。

もし、そういった事が起こった場合恐れ入りますが1度こちらにご一報下さい。（感想を書くの一言もしくは、メッセージにてご連絡下さい）

・申し込みは、8月4日水曜日の昼の12時、「いいとも」が始ったのと同時に終了いたします。

結果については、次回の「その35」もしくは、「その36」の中で正解を発表いたします。

皆様方の沢山のご参加お待ちしております！

それでは、次回魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３５…テイクオフ！

その３５（前書き）

とある研究施設

洞窟の中に作られたその研究施設では、ドクターと呼ばれる男がその部屋にある大型ビジョンに映っている光景を見つめていた。

＜ドゴーーーーーーーーーーン＞

＜バシュ、バシュ＞

＜ドゴーーーーーーーン＞

ドクターはその画面に映るガジェットとユウ達の戦闘内容をその部屋に用意されてあった椅子に座り腕組みをしながらそれを眺めていた。

画面上では、シグナムが３０機目、ユウが丁度２８機目のガジェットを撃墜したところだった。

「ドクター、ゼール様が参られました」

「通してくれ。ウーノ」

「わかりました」

突如、ドクターの目の前に画面が表示されその画面に映るウーノから客が来たことが告げられる。

プシュー

それから数分後その部屋の扉が開きそこからウーノと一人の黒いマント、鉄火面といった格好の男が中に入っていくる。

「久しぶりだね。ゼール」

「ああ、そうだな。スカリエッティ」

部屋に入ったゼールは、そのまま画面を見つめるドクターに近づく。

ゼールがちょうど椅子に近づいた所でドクターは、ゼールに声をかける。

それを聞いたゼールは、ドクターの事をスカリエッティと呼びその声に答え、スカリエッティの横にある椅子に座りスカリエッティが見つめる画面を見る。

「どうぞ」

二人の挨拶が終わった所でウーノが二人にコーヒーを用意されているテーブルの上に置いた。

「これが例の連中か？」

コーヒーが目の前のテーブルに置かれたことを確認したゼールは、スカリエッティに質問を投げかける。

「その通りさ。中々面白そうな連中だろ？」

ゼールの質問にスカリエッティは、笑みを浮かべながらウーノが持ってきたコーヒーに口をつけその問いに答える。

「そうだな。それにしてもまさかヤツが出てくるとはな」

スカリエッティの声に答えつつもゼールは、ユウが映っている画面を身ながら答えそして、彼もまたコーヒーに口をつける。

「これには、僕も驚いたよ。なにせ彼の情報は、君が地球であれの試験運用のテストをしていた時の映像で初めて知ったからね。正直に言うとまだ調べている最中なでまだ、データ不足なんだよ。そんな時に彼が現れてくれたことは、私にとっては、まさに願ったりかなったりだよ」

ゼールの答えにスカリエッティは、ゼールの顔をチラッと横目で見その後すぐにその視線を戻しガイゼルの問いに答える。

「そうか…だが、向こうもこちらの行動を予測しているらしい。今まで以上のデータは取らせてはもらえそうにないな。私には、関係ない事だが…」

「ふっ…。それならなぜ君は、君のがジェットを僕にかしてくれたんだい？」

スカリエッティの答えにゼールが画面の方を向いたまま話をする。その表情は鉄火面に覆われているため確認は出来ないが、鉄火面から唯一見える瞳からは、ゼールが言った事とは裏腹に真剣な眼差しが見られた。

それが気になったスカリエッティは、彼になぜ自分のガジェットを貸してくれたのか聞いてみた。

「それは、テストの続きだよ。あれは、君が作ったガジェットに私の技術を取り込んだ言わば実験機。データはより多くの魔導士から得られた方がいいと思ってな」

「なるほど…」

＜ドゴーーーーン、ゴドーーーーン＞

二人の会話が続く中、ユウが2機連続でガジェットを撃墜。

これで、ガジェットは全滅しユウとシグナムの撃墜数は３０対３０となり残りは黒いガジェットのみとなった。

ウーノ視点

コーヒーを出し終えた私は、ドクターの後ろで少し離れた場所に直立不動のままいつどんな指示がでてもいいように控えている。

お二人は、現在ガジェットと機動六課との戦いを観戦しながら何やら話をしている。

その話は、私の耳までは届いていない。

と言うより聞こえないように私がしている。

それは、なぜか言えばゼール様にご不快感を与えぬためだ。

ゼール様は、私が生み出される前からドクターとの親交があったとのことだが、その経歴など一切不明。

彼の声と彼が羽織るマントから垣間見える体格からして男性である可能性は高いがいまいちハッキリとはしない。

ちなみにドクターが言っている彼のガジェット…。

その名をノアールといい、その名のごとく全身の色は黒で統一されている。

その昔、ドクターが管理局に追い詰められた時、彼がドクターをその窮地から助けたことへのお礼としてガジェットの設計図を彼に渡し、その設計図を元に彼が作り出したもの…。

我々が使っている技術とは、違った物を使っているとのことだが…。

「ウーノ。ごきげんよう」

「これは、ルーテシア様。どうかされましたか？」

私は、ドクター達を見つつ思考を巡らしていた所に突如通信画面が表示されその画面の向こうから、紫の髪を靡かせ黒い衣装を身に纏ったルーテシア様が声をかけてきた。

それを見た私は、表情を崩さずルーテシア様に用件を伺う。

「大したことではなんだけどね…あのね、ここの作者さんにちょっと頼まれてね…」

「それは…いったい…」

私は、ルーテシア様に詳細な内容を教えて貰えるよう促す。

すると、画面の向こうのルーテシア様は、１枚のメモ紙を広げる。

そして…

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３５…始まります…」

「…」

その35

その３５

機動六課隊舎内食堂

なのは視点

＜ロングアーチ０４、これで３０機目のガジェットを撃墜！これで３０対３０のイーブンとなり残りは、黒いガジェット１１機となりました！果たして！勝負の行方はいったいどうなるのでしょう！！どうですか？解説の八神部隊長？＞

＜そうやね。これは、予想通りの展開といってもいいのではないんやろか？ユウもかなりやるみたいやし。でも、こっからシグナムにとっては初めて戦う相手になるからな。ちょっと今まで通りとはいかんやろな。なんせ、あの黒いガジェットと戦闘経験のあるんは、ユウしかおらへんし。それが、ユウにとって有利に働くんやろうけど…でも、そこは百戦錬磨のシグナムの事や！それくらいのハンデがあってもちょうどええやろ＞

＜なるほど…。ありがとうございます。＞

私の目の前に表示されてる画面では、ちょうどユウ君が３０機目のガジェットを撃墜しシグナムとの撃墜数をイーブンにした所が映っている。

そして、今までキチンと状況報告をしていたアルトが何時の間にかアナウンサーとなり、はやてちゃんを解説者として迎え、私の目の前にある画面に映されている戦闘をはやてちゃんとアルトは司令室からその戦闘を実況中継していた…。

もう！まじめにやってよ！アルトにはやてちゃん！

「なぁ、なのは？ユウの戦い方…なのはならどう見る？」

そんな私の横で画面を見ていたヴィータちゃんが私にユウ君の戦闘内容について私の意見を聞いて来た。

「そうだね。基本的には、機動力を活かした戦い方ではあるけど昔、シューティンアーツを習っていたってスバルが言ってた通り同じ高速戦闘でもフェイトちゃんと言うとよりスバルの戦い方の方がそれに近いかな」

「なるほどな…」

私の答えに納得した様子のヴィータちゃん。

でも、実際の所スバルそれともちょっと違うんだけど…。

スバルの戦闘スタイルって、その機動力を活かして相手の懐に飛び込みクロスレンジの爆発力で相手に協力な一撃を加え相手を倒す。

もしくは、ヒットアンドアウェイで相手に一撃を加えその後相手の攻撃範囲から離脱する…。

といった形で、私もスバルにそう訓練をしている。

でも、ユウ君の場合その機動力を活かして相手の懐に飛び込む所は同じだけどそこまで行くのにスピードに緩急がつくんだよね。

つまり、相手に突撃したかと思えば急停止して相手の死角に回り込んだり、相手の攻撃をのらりくらりとまるで木から落ちる木の葉がつかみ辛いのと同じようにその攻撃をかわしつつ攻撃をしていると思えば、いきなり相手に突撃かける。

そして、そのまま一気に相手の懐に飛び込んでその加速を活かした強力な一撃を加えたり…。

しかも、右手に刀型のデバイスの「紅」と左手に銃型のデバイスである「ゲイル・ファング」を本当に器用に使うんだよね。

例えばゲイル・ファングでクロスレンジで砲撃魔法メテオブレイカーっていってたかな?それを使ったり、中距離から紅の斬撃で風の刃を飛ばす魔法…名前はかまいたちって言うらしいけどそれで中距離から攻撃したり…とにかくその攻撃パターンがとにかく多いんだよね。

もちろん中距離からのゲイル・ファングでの射撃魔法もクロスレンジで紅による斬撃もやってるしティアナのバリアブル・シュートも使っている。それとユウ君のスピードをフルに活かして相手に向かって突撃しその加速と紅の斬撃による一撃必殺のシューティング・ストライク…。

どれも近代ベルカ式だからその射程距離はミッド式より短いけど、その威力は相当な物。しかも紅には、カートリッヂシステムが付いてる見たいだから威力を底上げする事も可能…。

でも、もっともやっかいなのはその移動速度の緩急の差。

その緩急の差が物凄く大きいから、彼を捕まえる事自体かなり厄介な事になる。

なぜ、移動速度の緩急の差が厄介なのかと言えば、それによって生み出されるわずかな間が問題なの。

その移動速度の緩急によって生み出されるであろう、その一瞬の間。

それが、まるで残像ようになって相手に見えちゃうらしく、その残像に相手はつい攻撃をしてしまう。

そして、相手が残像だと気づいた時によって一瞬の隙が生まれ、それを彼が見逃すハズもなくその隙をつかれ何も出来ないまま彼の攻撃を受けるハメになる。

そんな感じで、いつの間にか自分のペースを崩され完全にユウ君のペースに巻き込まれちゃうの。

その彼独自の戦い方…それ自体がもっとも厄介なことで出来れば彼を敵に回したくはない。

仮にもし、私が戦う事になれば苦戦は必死だし、海鳴で父さんが言ってた事が彼の戦い方を見てようやくその意味がわかった気がする。

でもそれって、余程の戦闘経験がないと出来ないしどうして彼がそれを得たのかが疑問として残る。

話を戻して彼が使う魔法としては、スバルと同じ近代ベルカだけど…その戦闘スタイルはスバルが使っているシューティングアーツとはそのベースにはなってるようだけどまるで別物。

その戦い方は、訓練で培われてきたと言うより実戦を繰り返して得られた物…言うなれば実際の戦場で得た経験を元に作られたユウ君独自の戦闘スタイル…。

それも私達が教える何かを守るための戦いとは違い…そう…あれは昔、ヴィータちゃんやシグナムとかと戦っていた時と似たような…。

まるで何かを守るためには、相手の命を奪ってでも守ると言ったような気迫と言うか覚悟を持った戦い方…。

私は、目の前の画面に映るユウ君を見てるとそう感じずには入られなかった。

ユウ君と私達…同じ何かを守るための戦い方のようではあるけど、私達とはまるで間逆の戦い方をしているような気がする。

そして、その何か危ない感じこそ私がシグナムに彼との模擬戦を控えるようはやてちゃんに頼んだそもそも理由。

彼が六課にくる事になって、はやてちゃんから彼がどんな風に戦うのかを聞いた時に感じた一抹の不安。

その時感じた、彼の戦闘スタイル…と言うか彼そのものが新人達に下手な影響を及ぼすのではないか?…そう感じた私は、はやてちゃんに頼んでシグナムに彼との模擬戦を新人達の教導が第一段階が終わりに近くなるまでまって貰った。

そして、今のスバル達ならその彼から感じることが危険な事だと感じてくれるだろう判断し、ヴィータちゃんとはやてちゃんとも話し合った上でシグナムに彼との模擬戦をしてもいいことを認めた。

でも実際に彼の戦いを画面で見て、私が取ったその行動に間違いがなかったと私は、彼の戦闘を見て今まさに確信していた。

でも、その時はやてちゃんから聞いた彼がユウ君でしかも、まさか整備士で来るなんて…正直、その時は思いもよらなかったんだけど…。

私は画面に映る彼を見ながら心の中でこう呟いた。

ユウ君…あなたは一体何者なの?

「今のユウ兄…なんか…いつもと違ってなんか怖い…」

私がユウ君にそんな疑問を抱いていたら、私のすぐ近くで一緒に観戦していたスバルが画面のユウ君を見てふと声をもらした…。

その言葉を聞いた私やヴィータちゃん…そして、ティアナにエリオ、それにキャロもスバルの漏らした声とどうやら同じ意見のようで無言のまま返す言葉を失っていた。

「これが、紅蓮の跳ね馬の実力ってヤツさ」

私達の無言の空気を切り裂くかのようにヴァイス君がスバルに声をかけた。

「紅蓮の跳ね馬？」

「ユウの二つ名さ。あいつ昔、内戦地域に借り出されたことがあってな。その時ついた二つ名が「紅蓮の跳ね馬」…」

ヴァイス君の声にそれが誰を指すのか聞き返すスバル。

その声を聞いたヴァイス君は紅蓮の跳ね馬がユウ君の二つ名である事。

そして、彼が内戦地域に借り出されていることを告げた。

「内戦地域にだと！そんな事、地上本部が今までやってなかったし、それに、そんな経歴自体ヤツにはなかったぞ！」

ヴァイス君の言葉にヴィータちゃんがそんな経歴が彼になかったことを旨を伝え声を上げる。

「ええ。経歴上はそんな記載は一切ありませんし表沙汰にもなっていません。ただ、ヤツが地上本部の武装隊に配属されたのってのがその時確か、その部隊の中から志願兵を募って内戦地域に兵を送って、その地域の武装組織を殲滅するって言う極秘作戦が進行してましてね。そんで、それを聞いたユウのヤツ…その作戦に志願しちまったんですよ…。

誰にも相談せずに自分で決めてね。

それでその志願したことが切欠で武装隊に移動する事になったんですよ。そして、武装隊に移動してすぐに内戦地域に送られる事になって、1年程内戦地域に行ってたんです。

その時のヤツの活躍ぶりを見てついた二つ名が「紅蓮の跳ね馬」なんです。

でも、そんな事ミツキ達が気づいたらさせるはずもなかったんですが、その時ちょうどミツキが大怪我して入院してたり…なんか色々と大変だったらしくて、あいつがその時の事で色々と思いつめてる事とか…内戦地域に移動する事自体、ミツキもナカジマ三佐も気が付く事が出来なかったらしいんですよ」

そっか…道理で、彼があの年齢であそこまでの戦闘がこなせるのか…。

そもそもあれ程の戦闘をこなせるともなれば、余程の実戦経験…それも短期間でかなりハードな経験が必要だとは思ってはいたんだけど…それがまさか内戦地域に行っての経験だったなんて…。

管理局が管理する世界ではあるけど実際の話その全てを管理局が管

理出来ている訳ではない。

今だその一部の地域で管理局とその地元の武装組織の間で小競り合いが続いている。

その小競り合いをしている地域を私達は総称して内戦地域と呼んでいる。

私は、内戦地域には行った事がなくてこれは教導隊の人から聞いた話になるんだけど、内戦地域では、非殺傷設定を使わない戦闘…つまり、私達の生まれ育った地球で起こっている戦争や紛争と同じく殺傷設定の魔法や質量兵器を使って戦ってるみたい。

そして、その事自体は公にはそのままの形では公表されず、

「戦闘での死者は相手側には出ておらずこちら側の死者は武装組織が持つ質量兵器によるものだ」

と言った形で相手側には死者が出ていないことを強調された上でその真実を捻じ曲げられた形として公表されている。

これは上の人達が言っている事で私達やはやてちゃんの立場でもこの事について文句を言う事が出来ないでいる。

はやてちゃんの話では、少将の立場でもあるミツキさんでも私達と同じらしい。

話を戻して、ヴァイス君の話にみんな表示される画面そっちのけで驚きの表情を浮かべる…でも、スバルみんなとなんだか違った表情をしていた…。

一体どうしたんだろ?スバル?

スバル視点

ヴァイス陸曹の話に私は、空港火災に巻き込まれた頃のことをを思い出してた。

その時…ミツ姉が大怪我して入院していて私とギン姉の二人で父さんのことろに遊び行くって事になって…そして、私とギン姉は、その火災に巻き込まれて私がなのは隊長にギン姉がフェイト隊長に助けてもらった。

その時ユウ兄は、ギン姉より1年先に管理局に入局していて…その時確か、整備兵としてミッドから離れた場所で働いてたはずなんだけど…。

「そういやあいつ…整備士のくせしてよく武装隊の訓練にも参加してたなぁ〜。ヤツが呼ばれたのってその辺の理由か?」

「まぁ、詳しい詳細についてはわかりませんが…そんな所ですかね」

私が考え事をしている内にシゲさんがヴァイス陸曹に話かけてた。

その話にヴァイス陸曹はシゲさんの問いかけに曖昧な返事をしていた。

「シゲさん。アイツの事知ってたんですか？」

シゲさんの声にティアがユウ兄との関係をシゲさんに聞いた。

「知り合いって程でもねぇが、俺は、昔よくミツキちゃんと一緒に仕事をしててな。その時にミツキちゃんによくユウがくっ付いてきてたんだよ。でもまぁ、そん時あいつとは話すことすらなかったんだが。ユウはミツキちゃんにくっ付いてきては、整備するのはそこそこにその部隊の武装隊の連中と訓練ばかりやってたよ。ミツキちゃんの心配をよそにな」

シゲさんの話を聞いた私達は「へぇ～」と言う声を出すしかなかった。

「なんだ、スバルにティアナは知らなかったのか？」

その声を聞いたシゲさんは、私とティアにその事を知らなかった事を聞いてきた。

「はい。ユウとは、スバルと訓練校でスバルと同じ部屋になってからの付き合いですから…その頃のことは…」

シゲさんの問いにティアはユウ兄との関係について困惑の表情で答えていた。

「んで、スバルは？」

ティアの答えを聞いたヴァイス陸曹が今度は私に答えを聞いてきた。

「私は…空港火災に会うまで魔法や管理局に入る事なんて考えても

いなかったし…それにユウ兄もミツ姉も仕事の事をウチで話してなかったんで…それで…」

その頃の私って…自分の力が怖くって…ただ泣いてるばかりだった。

そして、ユウ兄達が仕事のことを話す事を嫌がってた…。

そんな私を見て父さんを含めたみんなが私に気を使ってくれて、家で仕事の話をする事を極力控えてくれてた。

「そっか…なら知らなくて当然だね」

俯いたまま答えた私になのは隊長がやさしく声をかけてくれた。

でも…そんな事があったなんて…私は、正直その時の事を後悔していた…。

もし、私がそんなわがままを言っていなければ…ユウ兄がそんな所に行く事を父さんやミツ姉、それにギン姉やノアがユウ兄の事に気が付いてユウ兄が内戦地域に行くなんて事…止められたかもしれないのに…。

「まっ、とりあえず今は、ユウのヤツを応援しましょ！それであいつが帰ってきたら色々と話すればいい事だし。その時は私も手伝うわよ」

「そうですよ！スバルさん！！その時僕も手伝います！だから今は」

「スバルさん…一緒に応援しましょ！！」

私が気落ちしているのを見かねたティアが、今はユウ兄を応援することを優先させ戻ってきたらいろいろ聞いた方が良い事、そして、ユウ兄が帰って来たら色々と話をすれば良いしその時は手伝ってくれるって言ってくれた。

その言葉にエリオとキャロが続く。

「そうだね！ありがと！ティア！エリオ！キャロ！」

「そんな…お礼を言われるほどでは…」

「そうですよ！僕等もユウさんには聞きたい事が山ほどあるんですから」

「ほら！さっさと応援するわよ！スバル！」

みんなの声に私はその意見に同意し頭の中を切り替えてユウ兄を応援する事にした。

そして、ティア達にお礼を言う。

私の声にキャロ、エリオ、ティアの順で笑顔でそれに答えてくれた。

よ～し！！まずはみんなで応援だ！！

頑張れ！！ユウ兄！！

その３５（後書き）

なんだかんだやっていたらこんなに長くなってしまいました。すいません。

ちなみにクイズの答えは「その３６」になります。

お楽しみに

その３６（前書き）

いよいよクイズの正解発表です！！

その３６

その３６

ミッド海上

ユウ視点

「くらえ！かまいたち！」

俺は、右手に持った紅を黒いガジェットに向かって振り下ろす。

すると振り下ろした所に紅色の「＞」の形をした風の刃が形成され黒いガジェットに向かって襲い掛かる。

ガジェットは、その攻撃を交わそうとするがその間に合わずかまいたちによって真っ二つに切り裂かれる。

ドカーーーン！！

＜ロングアーチ０４これで３２機目撃墜！！これでライトニング０２も３２と再び撃墜数を同点に追いついたーー！！＞

通信から聞こえるアルトの声。

どうやら、シグナム副隊長との撃墜数はちょうど同じらしい。という事は、残り7機…。

現在、俺とシグナム副隊長の2人で残り7機となった黒いガジェットと交戦を続けている。

撃墜数は、通信から確認する限り共に32機。

最初は、黒いガジェットにシグナム副隊長が苦戦してくれる事を願ったんだがどうやらヤツには関係ないらしい。

ガジェット同様に問題なく倒しているよ。

まったく…あの戦闘狂が…。

ビシュ!!

おっと!考え事をしていた俺に新たな黒いガジェットがビームによる攻撃をしてきた。

「んりゃろ!!バリアブル・シュート!!」

俺はそれをひらりとそれを交わしすかさずゲイル・ファング（以降ゲイル）を相手に向けバリアブル・シュートを発射。

ドカーーン!!

黒いガジェットは紅色の魔法弾をもろに食らって大破した。

これで撃墜数33機目っと。

俺とシグナムはミッドの海上で共に飛行魔法を使って空を飛びながら黒いガジェットと交戦している。

そもそも黒いガジェットと普通のガジェットとどう違うかと言えば、性能自体は大して変わりはしない。

だが、黒いガジェットの方は魔導士相手に作られたと言うことだ。

なぜかと言えば、まずこいつは魔法探査に一切ひっかからないと言った点。

それがどうしてなのかは、今姉貴達が調べているが魔法探査にひっかからないって事は、どこに現れるのかわからないってことだしこっちから発見できないってことだ。

それにこの黒いガジェット…。

魔法攻撃がくると瞬時にＡＭＦの濃度をあげて魔法を解除しちまうんだ。

つまり、こいつに対してはＡＭＦの濃度が上がる前に魔法をぶち込むか魔法とは関係ない武器などで攻撃するかもしくは、そんなの関係なしで協力な魔法で撃墜するってところだ。

まっ、魔法を使って別なものに効果を加えて攻撃したり魔法を何かに変換してそれで攻撃するって手もあるが今いるのが海上のためそれはほぼ不可能…けど、海の水を使ってって手はあるがそんな魔法持ってないし、俺には魔力の性質変換なんて能力はないからな。

つまり、普通の魔法しかもっていないヤツにとってはかなりやっかいな相手だってことだ。

＜ライトニング０２！！これで３４機目撃墜！！これで３４対３３！！ライトニング０２が１機のリード！！これで残りは３機！こら～！ユウ！！サボるな～！！＞

通信からシグナム副隊長が一気に３機の黒いガジェットを撃墜し残り３機というアルトの実況と俺に対して怒りの声が聞こえてきた。

「おっと…こりゃいかんな…」

俺は、思考を止め黒いガジェットを目視で探す。

「おっ…いたいた」

俺が発見したと同時に向こうも気づいたらしく３機の黒いガジェットが攻撃を仕掛けてきた。

ビシュ！ビシュ！ビシュ！

その攻撃をかわしつつ相手との距離を開ける。

３機の黒いガジェットは連携をとりつつ俺に近づいてくる。

これも普通のガジェットとの違いだな。普通のガジェットは連携なんてしないからな。

だが！！それが命取りだ！！って…あれ？

「ハァ〜ーーーー！！」

スカッ！！

「くそ！！外した！！」

俺が黒いガジェットと距離を開けて攻撃のタイミングを図っていたらシグナム副隊長が一気にケリをつけるべく連携し纏まっていた黒いガジェットにレヴァンティンで攻撃を仕掛けてきた。

だが、それに気づいたヤツ等はその攻撃をそこから散開しシグナム副隊長の攻撃を回避。

攻撃を交わされたシグナム副隊長は、悔しいがり声を上げすぐにあたりを見渡す。

「くっ…しまった」

散開した黒いガジェットは、すぐさまシグナム副隊長を囲むように展開しすぐに攻撃態勢に入る。

それに気づいたシグナム副隊長は、声をあげる。

そして、黒いガジェットが一斉攻撃を加えようとした瞬間…

ドゴーーン！！×３

「いったいなんだ？ユウか？」

「その通りですよ、シグナム副隊長。これで俺の勝ち！」

「お前…一体何をした？」

疑問顔のシグナム副隊長。

俺が何をしたかと言えば、シグナム副隊長が囲まれた時にやつ等から少し離れた場所にいた俺は、やつ等がシグナム副隊長に気が向いてる隙に一気にやつ等に近づいて、バリアブル・シュートと紅での斬撃、それにかまいたちでこいつ等を撃墜したって訳。

「つまり…私をオトリにしたと言う訳か」

「そういうつもりはありませんでしたが、結果的にはそうなってしまいましたね。いや～オトリご苦労様でした（笑）ってあれ？どうかしましたか？シグナム副隊長？」

俺はゲイルと紅をヒップホルスターと鞘にそれぞれに収め、頭をポリポリ右手でかきながらどうやってやつ等を倒したか説明した。

それを聞いたシグナム副隊長は、俯きそしてプルプル肩を振るわせながら俺の話を聞いていた。

その様子に気づいた俺は、シグナム副隊長に疑問の声をかける。

「貴様ぁ～ーーーーー！！！」

どうやら俺の説明に怒りを感じたらしく怒りの声を上げる。

そして、シグナム副隊長の周りには、怒りのオーラが広がりその表情はもちろん怒りに満ちて目なんかもう血走っていたよ。こりゃ、

まずい…。

「やべぇ!!逃げろ!!」

それに気づいた俺はすぐに逃げる。

「貴様ぁ!!逃げるな!!今すぐそこに直れ!!レヴァンティンの錆にしてやる!!」

シグナム副隊長は俺が逃げ出したことにさらに怒りましたらしくレヴァンティンを振りかざしながら、俺を追いかけてくる。

「やなこった!これで俺の勝ちだからもう模擬戦なんか誘ってくるなよ!この戦闘狂!!」

「うるさい!!私をオトリに使って勝利を得るなど…騎士道に反している!!こんな結果認められるか!!」

俺はシグナム副隊長から逃げつつ後ろを見る。

そして、この勝負をする時に決めた俺が勝ったら模擬戦には誘わない事をシグナム副隊長に確認させるため声をかける。

だが、シグナム副隊長は俺の勝ち方に納得がいかないらしくこの結果は認められないとのこと。

「騎士道なんて知るかよ!!やり方はどうあれ撃墜数では俺があんたを上回っているんだ。俺の勝ちだぜ!と言う事で約束は約束だ!!ちゃんと守れよ!!戦闘狂!!」

そんなシグナム話を聞きつつその話に反論しながら逃げまわる俺。

だれか～!!この戦闘狂、なんとかしてくれ～!!

機動六課隊舎内　ロングアーチ

はやて視点

＜逃げるな!!待てぇ～!!＞

＜やなこった!!＞

ウチ等が見つめる画面からは、戦闘が無事に終わった後シグナムがユウを追いまわしている映像が表示されている。

ちなみに上の会話順は、最初がシグナムで次がユウや。

「部隊長…どうしましょう?これ?」

アルトが画面を指差しどうしたらいいのかウチに相談してくる。

「そやね。結果としては、ユウの勝ちやけどあの勝ち方じゃシグナムは納得せえへんやろうな。けど、結果は結果やユウの勝ちや。シグナムにはまた別の機会にユウと模擬戦が出来るようにウチが色々と考えるからとりあえず今は我慢してな。それとヴァイス君にヘリで迎えに行って貰うよう頼めるか?アルト」

「了解しました」

ウチの結論を聞いたアルトはすぐにヴァイス君に連絡を取る。

「ユウとシグナムもそれでええな？」

そして、その結論をユウとシグナムにも伝えそれでいいのか確認をとる。

「わかりました。主はやて」

「了解。とりあえず早く迎えに来るようヴァイスに伝えてください」

「了解や。それならもう追いかけっこもしまいや」

「わかりました」

「助かったぁ～狸…もとい！部隊長ありがとうございます」

通信を聞いたシグナムとユウは、ウチの結論に2人共同意をし追いかけっこが終了した。

それと、ユウから早く迎えを寄越すよう注文が入る。

そのユウの注文をウチは了承する。

「それとユウ今なんかへんな事言ってなかったか？」

「い～え！！そ…そんなことありませんよ！八神部隊長様」

「そうか…ならええんやけど…ほならヘリが行くまで二人とも待っとってな」

「「了解」」

プツン。

通信を終えたウチはフゥ～とため息をし、自分にかけていた緊張感をといていく。

「どうしてそれを言っちゃうんですか！！ヴァイス陸曹！」

ウチが座っている椅子の背もたれにもたれかかったのとちょうどその時ヴァイス君と通信を取っていたはずのアルトが自分の席から立ち上がり大きな声をあげてた。

いったいなんや？何があったん？アルト？

＜次回に続く＞

はやて

「と言うわけで、今回のクイズの正解はユウの勝ち！これが正解や！クイズご参加してくれたの皆様、どうもありがとうございました。

（ぺこり）

さて、クイズに正解した全ての皆様にはユウとミツキの無料出張権をプレンゼントするで！好きにつかってな。

ちなみに今回シグナムに勝つ方に入れてくれた人達のそのほとんどがシグナムとユウの模擬戦が見たいって理由で入れてくれたようで作者の方もその機会を今回とは別の機会にでもやろうと考えとおりますのでそれまで待っとってな。

以上、八神はやてでした」

その３６（後書き）

という訳で答えは「ユウの勝ち」でした。

たくさんのご応募ありがとうございました。

オリキャラ設定集～その2～

オリキャラ設定集～その2～

作者
「という訳で、ユウもいよいよ戦闘に参加しましたのでここでユウ、ミツキ、ノアの設定を追加したいと思います」

ミツキ
「今回は3人のバリアジャケットと使用デバイスと魔法、チームを組んだ時のポジションなど戦闘関係のものとなります。」

ノア
「でもよ。ユウは戦闘したから公開するのは、わかるんだけどもミツキとあたいのは公開してはもいいのか？」

作者
「はい、実際に戦闘シーンに参加してもらうのはまだ先になりますが、先に公開しても問題ありません」

ユウ
「つーか、別々に公開するのが面倒なんだろ？」

作者
「それもそうですが、先に公開しておけば後から説明しなくていいじゃないですか。」

ミツキ

「でもさ?あまりに出るのが遅くて再度説明が必要になるかもしれないかもしれないけど…」

作者
「その時はその時です!では、最初にユウからです」

ユウ
「うし!まぁ、とりあえず見てくれ」

名前：ユウ・サエグサ

バリアジャケット
・黒っぽいジーンズ
・黒のインナー、
・ベージュのロングコート
・両手には指の部分がでた紺のグローブ
・靴

使用デバイス
・ゲイル・ファング
＜待機時：紅色の宝石がついたドッグタグ＞
銃型デバイス
＜ストレージデバイス＞

・紅
中国の刀である「苗刀」の形をしたカートリッジ機能付きのアームドデバイス

魔法形式
・近代ベルカ式

ポジジョン
ガードウイング

使用魔法
＜ゲイル・ファング＞

・メテオブレイカー
銃型デバイスゲイル・ファング（以降ゲイル）より発射さ　れる紅色の砲撃魔法

・バリアブル・シュート
ティアナが使うものと同じ物。ただし、魔法弾の色は紅（この他に通常の射撃魔法も使えるが精密射撃はへたのため命中率はティアナ以下）

＜紅＞

・かまいたち
紅を振り下ろす事で「＞」上の紅の刃が形成され、そのまま相手に向かって飛んでいき攻撃対象を切り裂く。

・シューティング・ストライク
相手にトップスピードで突撃しその時生まれる加速を利用し一気に紅で切り裂く。一撃必殺

・トライシールド
ギンガが使うものと同じ魔法

・オプティックハイド
　ティアナと同じ魔法

戦闘スタイル
　移動スピードの緩急を使って相手を翻弄しながらクロスレンジと中距離から攻撃する戦闘スタイル。
　但し、近代ベルカ式のためその射程は短い。

ユウ
「とりあえずこんなもんか？」

ミツキ
「そうだね…ちなみにユウはを幻術を使えますが、ティアナと違って動きながらの使用が可能ですが、併用はできません。それに精密射撃はへたくそです」

ノア
「そんなことろもあってティアナはユウに嫉妬してると言うかライバル視してる所があるんだよな」

ユウ
「まぁな。それと幻術は姉貴に教わった物だ。ティアナもな。ちなみに精密射撃がへたなのと幻術が併用出来ねぇのは、両方とも俺にとっては、あれはまどろっこしいからある程度つかえりゃいいと思っているからだ」

ミツキ
「まどろっこしいって…あんたねぇ…それに幻術を教えたと言うよりただ、アドバイスをしただけだよ。だから、ほとんどは二人の独

学なんだよね」

ノア
「そうそう。それにミツキの幻術は、ティアナのお兄さんである、ティーダ・ランスターの幻術を真似したものだ」

ユウ
「なんだ。教えてもらえなかったんか？ティアナの兄貴に？」

ノア
「そんな度胸ミツキにある訳ねぇじゃねぇか」

ユウ
「マジで？あの姉貴が？」

作者
「実を言うとそうですよ。ミツキさんは恋愛関係だけは、いつもとちがって奥手なんです。では次はその奥手のミツキさんです」

ミツキ
「了解～♪…ってその言い方やめてもらえる（ギロり）」

作者
「すいません…」

ミツキ
「それでは、ご覧下さい」

名前：ミツキ・サエグサ

バリアジャケット
・蒼のロングスカート
・白のインナー
・蒼のベスト
・銀のフードつきロングコート
・両手には指の部分がでた紺のグローブ
・靴

使用デバイス
・蒼翔扇(そうしょうせん)＜待機時銀の腕輪＞
羽扇型デバイス
＜ストレージデバイス＞
モード1：羽扇
モード2：刀（小太刀）

・ファルシオン
中国の刀である「柳葉刀」の形をしたカートリッジ機能付きのアームドデバイス

魔法形式
・ミッド式、近代ベルカ式

使用魔法
＜蒼翔扇(そうしょうせん)＞

・シャイニング・ブラスター（ミッド式）
羽扇型デバイス蒼翔扇(そうしょうせん)をかざす事で術者の目の前ににミッド式の魔方陣が展開されそこから発射される砲撃魔法

・バリアブル・シューター（ミッド式）
　ティアナが使うバリアブル・シュートと同じ魔法弾を自分の周りに形成し相手に放つ射撃魔法。ただし、魔法弾の色は蒼。
魔力弾の数は1～数千をその時に応じて数を増やせる。
（この他に通常の射撃魔法（シューティング・ブリッツ）も使える）
ちなみに精密射撃については、管理局内でもトップクラスに入る。

・蒼翔陣（ミッド式）
　自分の周りに小さな蒼白の羽を数千枚形成しそれで攻撃と防御を行う魔法
（ブリーチの朽木白夜の千本桜と似たような物と考えていただければわかりやすいかも）

＜ファルシオン＞

・風神の舞　1式（近代ベルカ式）
　超高速スピードで相手に近づきファルシオンで切り刻む

・風神の舞　2式（近代ベルカ式）
　超高速スピードで相手に近づきファルシオンと蒼花のモード2（小太刀）の二刀流で攻撃する技

・風神の舞　ゼロ式（近代ベルカ式）
　飛び込んできた相手の死角に回り込んでファルシオンで撃するカウンター技

・プロテクション
　スバルと同じ魔法

・オプティックハイド
ティアナと同じ魔法

・フェイクシルエット
ティアナと同じ魔法

・風舞（かざまい）…（ミッド式）
自身の足元に魔方陣を展開。発動と同時に蒼色の「＞」上の風の刃を瞬時に複数形成（その数1～数千枚）し、その刃で相手を攻撃する。その攻撃速度は、ミツキが使う魔法の中では最速を誇る。

・風翔蒼乱舞（ふうしょうそうらんぶ）…（ミッド式）
蒼翔陣と風舞を同時に使う合体魔法。
魔力の消費量が激しいのが難点

＜ポジション＞
センターガード、フルバック

戦闘スタイル
蝶のように舞蜂のように刺すといった感じで相手の攻撃を優雅に交わし近距離もしくは、中距離から攻撃する。もしくは、上記魔法と幻術を併用し相手をかく乱し攻撃を加える。その中でもカウンターがもっとも得意。

ミツキ
「いかがでしたでしょうか？」

作者
「ミツキさんの場合、基本的には、蒼翔扇（そうしょうせん）を使いカウンターやクロスレンジでは、ファルシオンを使います」

ミツキ
「それと蒼翔扇をモード2の小太刀にしてとファルシオン共に二刀流でも攻撃しちゃうんですよ」

作者
「後、蒼翔陣と風神の舞（1式と2式のみ）の併用はできません」

ミツキ
「そう、ゼロ式なら問題ないんだけど1式と2式はどっちかしか使えないのよ。でも、蒼翔陣と風舞は同時使用可能です。」

作者
「風翔蒼乱舞の事ですね。ちなみに風花蒼乱舞は魔力の消費量が激しいんですよ。なんせ、二つの魔法を一気に使うわけですから…。後、蒼翔陣と風神の舞（1式と2式のみ）が同時に使えない理由としては、両方を一気に使うと体が持たないと言う事です。」

ミツキ
「まっ、やろうと思えば出来るんだけど…それやっちゃうとある意味、命がけになっちゃうんだよね。なんせファルシオンで相手を切りつけながら、蒼翔陣の羽を操作しなければならなくなるんで。でも、動きながら蒼翔陣と風翔蒼乱舞、それに風舞はできますよ。但し、どれか1つずつになるんですけど。でも、蒼翔陣と風神の舞の併用については、所謂奥の手の一つです」

ノア
「どれも動きが激しい大技でな。体の小ちゃいミツキには、正直どれもきついんだよ。だから、あたいやゲンヤのおっちゃんからそれは、絶対にするなって。あの3つ魔法の連続使用なんて持っての他

だ。あっ…後、幻術と上記3つの魔法の併用は可能だからな」

ユウ
「それと姉貴の攻撃を回避している姿がまるで舞を踊っているように見えるから二つ名に「舞姫」ってついてるんだよな」

ミツキ
「言われている方からすればとっても恥ずかしいんだけどね」

ノア
「それと二つ名にある伏流は、三国志の諸葛亮を肖ってつけたんだ」

ミツキ
「ちなみに伏流はゲンヤさんで舞姫はクイントさんがつけてくれました。それも…お酒の席で…」

作者
「とまぁ、そんな設定です！さて、最後になりましたがノアです」

ノア
「おう！待ってました！それじゃ見てくれ！」

名前：ノア

バリアジャケット
・白のインナー
・短パンジーンズ
・赤いフードつきダウンベスト
・両手には指の部分がでた紺のグローブ
・黒のロングブーツ

使用デバイス
ガイヤ・ナックル
　篭手型アームドデバイス＜待機時：銀の腕輪＞
　カートリッヂシステムつき

モード1篭手
モード2ガトリング砲（篭手の上にガトリング砲が装備される）
モード3ドリル
（篭手の手の部分をドリルが被う）

使用魔法
・シューティング・コメット
　モード2で使用可能
　装備されたガトリング砲から白銀の魔法弾が連続発射される。

・ギガ・ブレイカー
　モード1で使用可能。目の前に近代ベルカ式の魔方陣を展開その中央を殴ることによって発射される砲撃魔法。
（拡散モード、連射モードもアリ）

・シューティング・ブレイカー
　モード3で使用可能
相手に突撃しその加速とドリルの破壊力で相手を粉砕する魔法。一撃必殺

・かまいたち
　蹴りやパンチする事で「＞」上の白銀の刃形成され、そのまま相手に向かって飛んでいき攻撃対象を切り裂く。
通常時にも使用可能。でも威力はかなり落ちるし形成される刃も小

さい。

・トライ・シールド
　ギンガと同じ魔法

形式
近代ベルカ式

ポジション
フロント・アタッカー
ガード・ウイング

戦闘スタイル
格闘戦を得意とし相手に近づき攻撃する。
格闘術は、流派などは特になく我流。

ノア
「以上だ！ちなみに上記内容が出来るのは、フルサイズ時のみだぜ。通常時には転送魔法とちっちゃい「かまいたち」しか使えねぇからな」

作者
「それと待機時の銀の腕輪はミツキさんのと同じなんですよね」

ノア
「そうなんだよ。おそろいなんだよ」

ミツキ
「それと格闘術については、シューティング・アーツがベースになるんだよね」

ノア
「ああ。そもそもあたいのは、我流なんだが、基本的なところは誰にも習ってなかったからな。それでそこの部分をクイントさんに教わったんだよ」

作者
「それにしても…ドリルとは…」

ノア
「いいじゃねぇか！あたいのドリルは天をつくドリルだ！」

ミツキ
「天元を突破してどうすんのよ」

ユウ
「勇者特急隊じゃねぇんだ？」

ノア
「そっちもいいんだが…今度はそっちでやってみよう」

作者
「銀の翼に願いを込めてって…ヤツですか？」

ノア
「灯せ！平和の青信号！ってな」

ミツキ
「マジで…やるなら一人でやってよね…」

ユウ
「そうそう」

ノア
「そんな～いいじゃねぇか～（泣）」

作者
「という訳で、これで今回は以上となります」

ミツキ
「それと3人とも非殺傷設定、殺傷設定の切り替えは可能です。では、また次回お会いしましょう」

ノア＆ユウ
「まったなー」

その37（前書き）

機動六課食堂

スバル視点

＜どうしてそれをいっちゃうんですか？ヴァイス陸曹！！＞

ユウ兄の戦闘が終了し私達はレポートの作成のためオフィスに向かおうとした所でヴァイス陸曹と通信をしていたアルトが大きな声をあげた。

「いや～つい…すまん」

＜すまん…じゃないですよ！！あれについては、絶対に言うな！！ってナカジマ三佐から念を押されてたじゃないですか！！＞

通信画面に向かってひたすら頭を下げるヴァイス陸曹。

でも、待って？今父さんに口止めされてたって…それっていったい…。

「アルト？今の事詳しく教えてもらえないかな？」

「いったいどういう理由でユウが内戦地域に言ったことにナカジマ三佐が出てくるの？」

私がそんな疑問抱いていたのとちょうどその時、なのは隊長とティ

アが画面に映るアルトに向かって質問していた。

＜な…なのは隊長に…ティアナ…もしかして今の話…＞

「うん。よく聞こえてたよ。大きな声だったし」

「それに私だけじゃないわよ。スバルにエリオ、それにキャロにヴィータ副隊長など。ここにいる機動六課フォワード陣のそのほとんどが聞いてたわよ」

なのは隊長とティアの話に「まずい…」と言った表情の画面上のアルト。

＜え～とっ…あの～その～＞

真剣な表情でアルトをみるなのは隊長とティアにどう答えて良いのかわからなくなるアルト。

「「アルト！！」」

＜は…はい！！＞

そして、しどろもどろになっている所になのは隊長とティアがさらに追い詰める。

＜まぁまぁ、なのはちゃんもティアナもそんなにアルトを追い詰めんといてや＞

「八神部隊長？」

「はやてちゃん？」

二人に追い詰められたアルトは、涙目になりパニック状態になっていた。そんな所に八神部隊長が助け舟をだす。

＜ユウのことについては、ちょっと色々とあってな。その辺については、ウチから説明するからとりあえずユウが帰って来るまで待っといてな＞

八神部隊長の話に「わかりました」とイマイチ納得し得ない表情のなのは隊長とティア。

そんな中ヴァイス陸曹は、抜き足、差し足と言った感じで食堂を抜け出していた…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３７！始まります…」

その37

その３７

機動六課屋上ペリポート

ユウ視点

「なんでそんな事になってるんですか？シャーリーさん？」

ガジェット撃墜の任務を終えてヴァイスが操縦するヘリで無事に機動六課に帰ってきた俺を待っていたのは、「参った参った」と言う困惑顔のシャーリーさんだった。

ヘリから降りてくるなり、シャーリーさんにつかまり俺の過去のことでなんかあったらしいとだけ伝えてきた。

なぜ？そんな事になったのか？シャーリーさんに聞いてみた所、帰ってきたのが…

「ユウ君の戦闘シーンを見ていたなのは隊長たちがなんであんな戦闘が出来るのかってどうやら疑問に思ったらしくその疑問にヴァイス陸曹が調子に乗って話ちゃったらしいのよ。ユウ君が内戦地域にいってたってね。それで、それがアルトにバレて…それでヴァイス陸曹に怒ったのよ」

ズリズリズリ…

「それが、なのは隊長達に聞こえたってことですか？」

「スバル達にもね。それで、詳しく事情を話せって事になっちゃったのよ」

シャーリーさんの話に俺が、それに憶測を付け加えて話を返す。そして、俺の話にシャーリーさんがさらに話を追加する。

「ねぇ？いい加減自分で歩いてくれない？引きずってるのも結構つかれるのよ」

大体の事情を把握したところでシャーリーさんが自分で歩けと言ってきた。

ちなみに今の会話って、シャーリーさんが俺の襟首つかんで引きずりながら会話してたんだよ。

「へぇ～い…」

俺は引きずられる体勢から立ち上がりシャーリーさんの横を歩く。

そして、会議室に入った俺を待っていたのが、なのは隊長を始めとするＦＷ一同としょんぼりしているアルトと八神部隊長だった。

「八神部隊長…全員そろったみたいなんでそろそろ…」

俺とシャーリーさんそして、シグナム副隊長…それぞれ席についた

所でなのは隊長が話を始めるよう八神部隊長に促す。

「いや…あと一人…来るから待っといてくれへんか？」

「あと一人って…いったい…」

八神部隊長の話に疑問の声を上げる。ティアナ。

プシュー。

「ごめん、ごめん。遅れちゃって」

「わりい！遅れちまった」

「ミツ姉？それに…ノア？」

開いたドアから入ってきたのは、姉貴とノアだった。

会議室に入ってきた二人は、遅れたことを詫び二人が入ってきたことに驚きの表情の俺たち…そして、その驚きを声にだすスバル。

「いんや、こっちもちょうど今全員そろったところやから問題ないで」

「そう？よかった」

「あの～八神部隊長？今回の件についてどうしてミツキさんとノアがわざわざ六課に…」

「それはな、ティアナ」

「詳しく説明するなら、はやてやアルトだけじゃ説明不足な部分があるのよ。だから、そういう話になったら呼んでって事前にはやてに頼んでおいたの。そうでもしないとユウの事だから説明しないで曖昧にするだろうから帰ってギクシャクしちゃいそうだからね」

ティアナの質問に部隊長がいいかけたのをまるで征するかのように姉貴がティアナに答えた。

「ちぇ…先読みされてたか…」

「だてにお姉ちゃんやってませんよ」

姉貴の答えに舌打ちをしながら愚痴る俺。

それを見て、エッヘンと胸を張りながら俺の愚痴に答える姉貴…それにしてもそんなに洗濯板を強調しなくても…。

ガン!!!

「いっつぅ～」

俺がそんな姉貴をみながら考え事をしていた所に飛んできた姉貴の拳骨。

「なんか言った?」

「イイエ、ナンデモアリマセン」

ギロリ!といった表情で俺を睨みつける姉貴。

それに対しなんでもない旨を告げる、俺。

ったく…その先読みのすごさは相変わらずってか…

とかなんとか考えてると部隊長が話しを始めた。

なにかと言えばそれは、当然俺の過去の出来事。

まっ…どっから話をしたかと言えば今から約４年くらい前…。

つまり、スバル達が空港火災の巻き込まれるおよそ３ヶ月前…。そう…姉貴が大怪我したあの時からだ…。

その３７（後書き）

次回に続く！！

その３８（前書き）

アルト視点

目の前に広がるのは、火災と…残骸…そして、逃げ回る人々…。

そして、私の横には…さっきまで笑いながら話をしていた職場の先輩…。

それが、今ではただの肉の塊…。

さっきまで…一緒に笑って…一緒に仕事を頑張って…それが一体どうして…？

私は、混乱の中地面に腰を落とし動けずにいた。

ガチャ…。

えっ…。

何か音が聞こえたので顔を上げると誰かが何かを構えてこちらに向かってきた…。

「あ…ああっ…」

私は、声を上げるがそのいきなりの状況に頭の中がパニックになっていて声が出せずにいた。

誰か…誰か助けて！！

心の中で叫ぶ私。でも、それは声にならず誰にも届かず…そして、目の前には、ビームを発射する質量兵器を構えその質量兵器の砲身が光を放とうとしている。それもパニックになって身動きが出来ない私に向かって。

死ぬ？…死ぬの…私？

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３８…始まります…」

その３８

その３８

機動六課　会議室

はやて視点

ウチは全員そろった所で静かに話を始めた。

そう…あれは確か陸士１０８部隊での指揮官研修を終え特別捜査官として、事件に追われていたころだった。

ある密輸事件を追っていたウチは、そのアジトを発見、その施設の壊滅のために周囲の部隊に応援を求めた。

その組織の規模としては、今までウチが扱った中でも最大の物でウチはシグナムにヴィータ、そしてシャマルにザフィーラそれにリイン…と八神家全員を集合させ、さらに１０８部隊からミツキとノアにも来てもらう様に要請した。

ほんまなら、なのはちゃんにフェイトちゃんも呼びたかったんやけど、予定が合わず応援にはこられないとのことだった。

そして、周囲の部隊からも応援の部隊が到着、ウチの中で地上最大の人員で行う作戦が今始ろうとしていた。

作戦が開始して、いくらか時間がたったころシグナムとミツキが通信を入れてきた。

「主はやて！大変です！この作戦相手に漏れてます」

「な…なんやて！」

「スパイよ！！やつ等のスパイが中にいたのよ。今私とシグナムでそいつを捕まえたの！」

シグナムとミツキの報告に驚きの声を上げるウチ。

画面上にそのスパイの顔が映り…そして…

「おまえが八神はやてか…これは闇の書に…いやお前等に殺された家族の恨みの一撃だ…だが、直接お前にはしない…お前は最後だ…まずは…お前に肩入れしたそこの馬鹿な執務官の大切なものからうばってやる…」

「大切なもの？一体それはなんや？」

画面に映るスパイ（男）に怒り声を上げるウチ。

「わからないのか…だったら教えてやるよ…ミツキ・サエグサ…今日この作戦に参加してるんだろ？弟と…可愛がってる後輩が…」

男は、ミツキをみながら笑みを浮かべ話す。

その男の話に同様を浮かべるミツキ。

そのミツキの表情を見た男は、さらに追い詰めるため画面を広げる。

そして、その画面には…

「アルト!!…ユウ!!」

その画面には、後方に待機させておいた部隊が襲撃された映像とその交戦して攻撃を受けるユウ…そして、地面に座り込んで今や敵に攻撃されようとしているアルトの姿が映りだされていた。

「いいのか?こんな所にいて…?」

「くっ!!…アルト、ユウ!!」

「貴様ぁ〜!!」

ミツキは二人の名を呼び急いで現場に急行するためにとびだした。

そして、シグナムはその男の胸倉をつかむ。

「思い知れ!!八神はやて!!これがわれ等の恨み!!そして苦しめ!!自分のせいで他人の大切な物が奪われるこの苦しみを!!」

画面を見ていたウチは、拳を握り締めていた。

そして、男の笑い声だけが響き渡り…。

ドゴーーーーーーーーーーーン!!

そして、アルトに向けてビームが発射された。そして、その破壊力

凄まじく画面に広がるのは、爆音と閃光…そして爆風と共に上がる煙。

「くっ…」

男の胸倉をつかんでいたシグナムは、その光が広がる画面から眼を背けていた。

ザーーーーーーーー。

「こ…こちら…。１０８部隊所属の執務官…ミツキ・サエグサ…応答願います?はやて?聞こえる?」

「み…ミツキか?二人は…二人は無事か?」

俯いて画面を見れずにいたウチに入って来た一本の通信。

それは、さっき飛び出していったミツキの声だった。

ウチはユウとアルトの安否を確認する。

「な…なんとか…間に合ったよ…。二人とも…ぶ…無事だよ。ギリギリセーフって…ところかな?」

ミツキの報告に安堵するウチ等。でも、煙が晴れた画面をみたウチは衝撃の光景を見ることになった。

「み…ミツキ!!あんたまさか…!!自分の体を盾変わりにしたんか?」

画面には、ボロボロのバリアジャケット、そして、バリアジャケットの破けた所から血が噴出して…それに体中怪我だらけの…左手には気を失っているであろうぐったりしたユウを抱えそして、アルトの前に立ち右手にミツキのデバイスの一つである蒼翔扇(そうしょうせん)を前に突き出した格好のミツキの姿があった。

煙が晴れた所にいきなり現れたミツキの姿にアルトに向かって攻撃した男は驚いた様子。

「蒼翔扇…オールレンジで…周囲の敵を全てロックして…一発で決める…から」

ミツキはウチの声を無視し自身の周りに蒼色の魔方陣が展開。

そして、ユウを抱えたまま胸の前に蒼翔扇を構え立っている状態に戻し、そしてアルトの周りバリアを展開させた。

そしてその周辺に蒼色の「＞」上の風の刃が形成された。その数…数十～数百枚。

な…なんて数の風の刃を形成しているんや？

ウチはそのミツキの様子を見ながら背筋をゾッとさせていた。そして、ミツキの周りには、次々と増える風の刃…まだ…増えるんか？…。それになんや？この莫大な魔力…いつものミツキのもんとは圧倒的に違う…。

ミツキの周囲に広がっている蒼色の魔力光が何時の間にかその色が白銀に変わっていた。その色は風の刃も同様に…

「舞って!!　風の刃よ!!　風舞(かざまい)!!」

ミツキは、前方に蒼翔扇を翳す。するとそれを合図に周囲にいる襲撃者に向け風の刃が一気に放たれる。

ドゴーーーーーーーーーーン!!

そして、襲撃者達はミツキの風舞により瞬時に掃討された。

「ミツキ!!無事か!!報告しい!!」

ウチはミツキに状況の報告を求める。

「はぁ…はぁ…、ごめん…ちょっとドジっちゃった…。でも、なんとか襲撃してきた連中は、排除したから…安心…して…」

「何が安心してや!!このドアホ!!いくらなんでも無茶しすぎや!!」

ミツキの答えにウチは怒りの表情を露わにする。

「だから…謝ってるんでしょ…でね…ちょっと悪いんだけど…急いで応援…送ってくれないかな?…これ以上はちょっと厳しいか…ら…」

ドサッ…。

「先輩!!ミツキ先輩!!しっかりしてください!!先輩!!先輩ィ〜!!」

通信をしている最中に前に倒れ込むミツキ。それと同時アルトの周りのバリアも解除され、倒れたミツキアルトは近づき声をかけ体をゆする。

「おい！！姉ちゃん！！しっかりしろ！！」

アルトの声にユウも気を失っていたユウも気が付き、ミツキに声をかける。

「シャマル！！リイン！！それにザフィーラ！！急いで現場に急行！！シグナムはそいつに他に何かしてないかそいつから聞き出し！！手段は選ばんでええ！！ヴィータは、ウチと一緒に前線や！！」

「「「「了解！！」」」」

ウチはシグナム達に指示を飛ばす！

現場には、既にノアが到着。ユウと一緒に敵の援軍として現れた連中を撃墜しておる。

ちなみにミツキはアルトがしっかりと抱きかかえて守っていた。

そして、ずっとミツキに声をかけつづけていた。

「その後、その組織のアジトを壊滅させ、ミツキはシャマルが応急処置をしてヴァイスがヘリで病院に運んだって訳や」

「それにアルトも精神的にショックが大きくて私がたまにカウンセリングをしてたの」

「私はシャマル先生にカウンセリングを受けながら仕事をしてたんだけど…ユウからその時の事は姉貴は気にしてないしショボリしてると返って姉貴が心配するからってし早く忘れろって言われて…」

ウチの説明の後にシャマル…そして、アルトがウチの話の後に当時の事を話をする。

「アルトに俺がそう言ったその後、よく訓練に参加していた武装隊の人がその時の俺の戦闘光景を見ていたらしくな。その人が内戦地域での作戦の事を教えてくれてな。当時の俺は、姉貴とノアの足手まといにしかなっていないって思ってな。強くなるためにその誘いに乗ったって訳だ」

アルトの話の後に今度はユウが続く。

「私は、ユウがそんな事考えてるなんて事気が付かなかったのよ」

「あたいもミツキとおんなじだ。あたい等が気が付いたのは、ユウが内戦地域に行った後だったからな」

ユウの話の後に今度はミツキとノアが話し始める。

「それで、1年立って作戦は、無事に終了し俺はミッドに帰ってきたってわけだ。まっ…帰って来たらきたでじじいや姉貴と色々話をして今に至るって訳だ」

「ちなみに師匠からは、ユウのことはどっちか言えばユウやミツキ達の問題になるからあまり大事にしないでくれって言われて、別にスバル達に隠してたなんて事はないんよ」

「隠してた…と言うより私とユウの失敗話だったから、恥ずかしくてはなせなかったんだよね。ごめん」

ノアの話の後、ユウが内戦地域から帰ってきた頃のことを話始め、ウチがナカジマ三佐が口止めした理由を告げミツキがさらに詳細な理由を告げ、スバルとティアナに頭を下げる。

頭を下げられた、スバルとティアナは両手を振ってとんでもないといった表情だった。

そして、どうやらみんなうち等の話に納得してくれたみたい…と言うかどうしていいのかわからないといった様子だったので、なんかあった時にそれぞれに聞いて貰うようにしてウチ等は解散することとなった。

その３８（後書き）

ということでユウの戦闘参加からミツキ達の過去についてまででしたが…

いかがでしたでしょうか？

ここんところ重い内容ばかりやってるんでそろそろいつものドタバタに戻りたいんですけど…どうなることやら？

ちなみに今回の一連のことについては、ティアナの撃墜フラグが消えたことであまってしまったシーンをアレンジしてやってみました。

皆さん？わかりました？

というわけで次回はどんな風になるかはわかりませんが、とりあえずお楽しみに

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第1話　時空を越えた出会い（前書き）

機動六課隊舎内　男性宿舎

ユウ視点

「ユウさん！！起きてください！！」

「そうだよ！！今日こそ私と組み手やるって昨日約束したんだから早く起きて！！」

「むにゃ～また今度なぁ～」

時間は朝の六時ちょっと前、なぜいきなりこんな事になっているかと言えば、シグナム副隊長との出撃の後俺の実力を知ったスバル達が朝の訓練の前に「俺と組み手だとかがしたい」と言ってきたのが事の始まり。

だが、俺はそんな朝早くから動きたくないしあいつ等と違って時間が不規則なため色々と言い訳をつけてはその組み手等を断りつづけていた。

だが…そんな言い訳も続くはずもなく業を煮やしたスバル達は、ついに今日実力行使に出たって訳。

んで、最初の会話順がエリオ、スバルそして、俺の順。

そして、寝ている俺をゆすりながら上記会話をしていた訳で…。

「どきなさい！！スバル！エリオ！こいつはそんな事じゃ動かないわよ！！キャロ！！お願い！」

スバルとエリオが俺を揺らしていた所にティアナがどけるよう声をかけそして、キャロに俺を起こすよう依頼。

「はい！フリード！ブラストレイ！！」

「クキュー」

それを聞いたキャロはフリードにブラストレイの発射を指示…って…

「ちょちょちょっとティア！！キャロ！！」

「いくらなんでも！！待って下さい！！」

「って、聞いてない！！エリオ！！退避！！」

「はい！スバルさん！！」

その声にエリオとキャロは声を上げるが当の二人は聞く耳持たず…それを見たスバルはエリオに退避するよう指示。

「げぇぇ！！！」

ドカーーーーーーーン！！

スバルとエリオが退避したのと同時にフリードはブラストレイを発

射！

「てんめぇ！！俺を殺す気か！！」

そしてそのやり取りと聞いた俺は、瞬時に起き上がりブラストレイを回避！！そして、それを支持したティアナに詰め寄る。

「いいじゃない、ちゃんと起きれたんだから。それに何時までも狸寝入りされたらこっちとしてはたまったもんじゃないから」

詰め寄る俺に対しティアナはあきれた様子でそれに答えていた…ってか、段々ティアナが姉貴化していくのは気のせいか…。

「あ～ーーーーーーーーーなつかしい！！」

ん？？？

俺とティアナがそんなやり取りをしていたころスバルが一枚の写真立てを手に取り声を上げていた。

「どしたの？スバル？」

「あっ？ティア？これ見て？懐かしいでしょ？」

それに気づいたティアナがスバルに声をかける。

ティアナの声に気づいたスバルが持っていた写真立てをティアナに見せる。

「あ～これアウルさんじゃない？ユウ！あんた何時の間にアウルさ

んと写真とってたのよ？」

ティアナが見た写真には、俺と姉貴それにギンガと白髪の青年の姿が映っていた。

「ああ、アウルさんが帰る前にちょっとな」

「へぇ～」

ティアナの問いに答える俺。その声に納得の声を上げるスバル。

「あの～そのアウルさんって…一体…」

俺とスバルそして、ティアナの話についていけない様子のキャロが俺たちに話しかけてくる。

「ああ、そう言えばお前達も入たんだっけ…」

「さっきからいたんですけど…まだ寝ぼけてるんですね…フリード…もう一発…」

「わかった！わかった！ちゃんと説明するから！！だからフリードに発射指示だすな！！」

俺の話がよっぽど気に食わなかったらしいキャロがジト目でフリードに攻撃指示を出そうとしていた。

それに気づいた俺は、キャロを落ち着かせちゃんと説明する旨を伝える。

「それで？そのアウルさんってのは？」

キャロが落ち着いた所で改めて今度は、エリオが俺に質問をしてくる。

「ああ…彼とは、俺やスバルやティアナが六課に来るちょうど半年くらい前にひょんな事から知り合ってな…ほんの少しの間だが１０８にいた人なんだよ」

「本当！今でも信じられないよね」

「そうね。まさに世にも奇妙なっ…て話なんだもん」

「って！アウルさんは幽霊じゃないよティア！！」

「そうだっだわね。ごめん」

俺がエリオとキャロに説明を始めよう話だした頃スバルとティアナが思い出話に花を咲かせいた。

そう…この話は、決して出会う事のない者同士がほんの２週間だが、同じ時間を過ごしたというお話。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空（とき）を超えし蒼き羽根…始まります…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第１話　時空を越えた出会い

第１話　時空を越えた出会い

時間は今から遡る事およそ半年前。

ミッドにある陸士１０８部隊に白髪の彼…事アウル・アパレシオンが保護されたことに始る。

陸士１０８部隊　技術開発室オフィス

ミツキ視点

「う～ん…。それで…詳しく教えてくれないかな？…」

私は、デスクの上に置いてあるＩＤカードを手に取りそのＩＤカードの持ち主を保護したユウとギンガに詳しく話を聞いた。

「ええ、あれは、さっきユウと一緒に巡回をしていた所、市街地から少し離れた所の公園で爆発音がしたから二人で急行した所…」

「ガジェットと戦闘をしていたそのＩＤカードの持ち主を発見、ガジェットを撃退した後…その男性に話を聞こうとしたんだが気を失っちまってな。それでここに連れてきたって訳だ」

ギンガの説明の後にユウがその説明に続く。

「なるほどね…それでその男性が持っていた所持品がこれって訳ね…それでその彼は？」

「まだ、意識を回復していたないらしく医務室で休んで貰っていてノアに様子を見てもらっています」

その説明を聞いた私は、デスクの上にあるその彼の所持品に目を向けた。

その所持品というのが、彼を証明するＩＤカード、それに…このキーホルダー…かな？金色の小さいプレートがキーホルダー上になっているもの。

そして、その金色のプレートには…こう書いてあった。

「Ｔ…Ｔ…そして、Ｅ？…なんじが失いし光と影そして、闇…その全てが揃いし時…その扉は開かれその中より金色の女神現れ、なんじがいるべき場所へと導かん…だがなんじ望みしものはその終わり告げる…？」

「いったいなんだ？そりゃ？」

私はそのキーホルダーをデスクの上に戻し腕組みをし思考を巡らす。

そして、私の呼んだ文章に対しユウが疑問の声を上げる。

「それがわかればミツキさんに話はしないわよ」

ユウの声にギンガが声を上げる。

「まぁまぁ…とりあえずここで考えても始らないから今出来る事をしようか?私はこのＩＤカードの方を調べてみるからユウは、ノアと一緒に彼が目を覚ましたら話しを聞いてみて。そして、ギンガはこのことをゲンヤさんに伝えて。彼の処遇について出来ればこっちで預かりたいってね。何にもないことを願いたいけど…念のためにね」

「「了解」」

二人はそれぞれ部屋をでて私が指示したことを行動に移した。

さて…私も始めますか…

アウル視点

「う…う～ん…ここは…」

私が目を覚ますとそこには白い天井が目に入って来た。

「ここは…いったい…」

「おっ…やっとお目覚めか…」

「君は…いったい…」

私は、自分が今寝ていたであろうベットから身を起こし声をかけてきたリイン曹長と同じサイズの陸士隊の制服に身を包んでいる女の

子に話かけた。

「あたいの名はノア。そして、ここは陸士１０８部隊の医務室。あんたは、公園でガジェットとの交戦中にウチの部隊員に保護されここに入るって訳だ」

「なるほど…それでここに…あっ申し送れました。私は機動六課所属のアウル・アパレシオン二等陸尉であります」

私はベットから上半身を起こした状態でノアと名乗る女の子から話を聞き自己紹介をしノアに向けて敬礼をする。

「うわっ…それはどうもご丁寧に…あ…あたいは陸士１０８部隊技術開発室所属のノア陸曹であります。アパレシオン二尉」

私の自己紹介の後、ノアも慌てた様子で自己紹介をする。

でも…技術開発室なんて…１０８部隊にあったか？

「あの…ひとつお伺いしたいのですが…機動六課…っていったいどこの部隊ですか？」

私がそんな疑問を抱いていたらノア陸曹が私に質問をしてきた。

「えっ…機動六課はミッドにある管理局所属の地上部隊ですが…」

「ミッドに本局所属の地上部隊！？…ですか？」

私の答えに疑問の声を上げるノア。

「えっ…ええそうですが？…あのノア陸曹？私もひとつ聞きたいのですが１０８部隊に技術開発室と言う所は…いったいいつ出来たんですか？」

ノアの答えに戸惑いながら私は、答えそして今度は私の方から彼女に質問する。

「えっ？技術開発室は結構前から１０８部隊にあるんですけど…」

私の質問に今度はノアが驚きの表情で答える。

それにしてもどういう訳だ。彼女の話と私の話に若干のズレを感じる。ここはどうにかしてそのズレを修正しなくては…それに確か自分の部屋で寝ていたハズだが…。

そう私が考え始めた頃、医務室のドアが開き誰かが入って来た。

「あっ…ユウにギンガ！！ちょうど良い所に来た」

「？？なんだ？いったいどうしたって言うんだ？」

「一体どうしたの？ノア？って、お目覚めになられたんですね？どうですかご気分は？」

「君は…確か…ギンガ・ナカジマ陸曹ではありませんか？アウルです！アウル・アパレシオンです！あなたの妹さんのスバル・ナカジマ二等陸士と同じ機動六課に所属している…」

病室に入って来たのは、ユウと呼ばれる男性とスバルの姉のギンガの姿であった。

それに気づいたノアが声をかけその声に答えるユウ。

そして、起き上がっている私に気づきギンガが私に声をかけてきたので彼女に話をする。

そう…ユウという男性とノアは知らないが彼女のことはスバルから聞いていたし面識もあった。それで私は、この状況を打破するために彼女に声をかける。

「ギンガ?アパレシオン二尉と知り合いか?」

「えっ…と…あのごめんなさい。面識がない…というか確かに私には、スバルという妹はいますが…その妹のスバルが所属しているのは、あなたが言う機動六課ではなく陸上警備隊の第３８６部隊になるんですけど…失礼ですがスバルとは一体どこでお知りあいになったんですか?」

「えっ…スバルが六課ではなく３８６部隊に所属?これはいったい…」

私の話にノアがギンガに話しかけその問いにギンガが私に向けて答える。

そして、そのギンガの話に私は驚きの声を上げる。

「さっきからこうなんだよ…なんかびにょーに違うと言うか…」

ギンガとのやり取りを見ていたノアが私とのやり取りのことについてギンガとユウに話をした。

「う〜ん…どうやらこりゃ姉貴の結果待ちってことだな」

私とギンガのやり取りを見そして、ノアの話を聞いたユウが腕組みをし言葉を漏らす。そして、その声に私はユウに質問する。

「あの…結果待ちというのは…」

「結果待ちってのは、悪いんだがあなたを保護した時にその所持品をチェックさせてもらったんだ。んで、その中にＩＤカードが入っていてな。それを今ウチの姉貴が調べてる所なんだ。どうやら俺たちの持つ記憶とあなたが持つ記憶に若干だがズレがあるみたいなんでな。お互いに疑問点が沢山あるだろうからとりあえずは、その姉貴が持ってくる結果を聞いてからって事にしないか？ってことです」

「なるほど…わかりました」

私は、ユウと名乗る青年の指示に従う事にした。

どうやら彼も私と同じ疑問をもっているようでその疑問を解消するには、私がもっていたＩＤカードを調べていると言う彼のお姉さんの結果を待たなければいけないということらしい。

その後、改めて、ユウとギンガが私に自己紹介をし私も二人に自己紹介をした。それとお互いにもっとフランクに話をしようとユウ君が言ってきたので私もそれを了承した。

「へぇ〜アウルさんは以外と起用なんだな」

「ええ。これくらいのことは…はいどうぞ」

「さ…サンキュー」

「ギンガもこれくらい出来ればいいのにな」

「うるさい!!ユウはだまってて!!」

その後、ギンガが買ってきた果物を食べようと言う話になりギンガがナイフを使ってりんごを切ろうとしたがうまくいかず彼女の変わりに私がりんごを切った。

ちなみに今の会話順は、ノアに私、そして、私の話にノアがお礼をいいその光景をみたユウがギンガに向けて嫌味をいいその嫌味にギンガが答えるといったところ。

私はそのギンガとユウのやりとりをみてなんだか懐かしい光景を見ているようだった。

そう…確か…私が所属している機動六課も確かこんなかんじだったな…。だが…どういう訳だ?思い出せる部分と思い出せない部分がある。

「?どうかしたのか?アウルさん?」

そのギンガとユウのやり取りを見つめる私にノアが声をかけてきた。

「いや…その…なんだかとても二人が仲良くしているようにみえたんで…それで…あっ…すいません。なんだか一人で勝手に観賞に浸ってしまって」

私は、ノアの問いに照れながら答える。

「そりゃそうだろな。なんせユウとギンガのウチはお隣さんで幼馴染みたいなもんだからな」

「そ…そうなんですか？」

ノアの答えに私は、疑問の声を上げる。これもまた私の記憶と違う所だ。

「ええ…私にさっき話しをした妹のスバル。そして、ここにいるユウとノア…それと私の父とユウのお姉さんのミツキさん…昔からの隣人で家族みたいな物なんです」

「そうなんですか…どうりでそんなに仲がいいよ言う訳ですね」

ギンガの答えに私は、なんだが彼女達がうらやましく思えてならなかった。その理由については、なぜか今は思い浮かばないが今の二人のやり取りをみてそんな確信がえられたように思えた。

「腐れ縁ですよ…こいつとは…でなけりゃ誰がこんな暴力女…げふっ！！」

ユウが私の問いに答えていたらユウの横にいたギンガがユウに向かって肘ウチをしていた。

それを食らったユウは腹をおさえ悶絶している。

「まったく…こいつはいつも余計な事を…ご…ごめんなさい…これはユウが余計な事を言うもんで…いつもじゃないですから…おほほ

ほほほっ」

その光景に唖然とする私に向かってギンガは口を手でおさえつつ私に話しをする。

そして、彼女には逆らわないほうがいいと私の直感が伝えそれを感じた私は、今の内ならユウ見たいならないだろうと判断し、今もっている疑問を彼女達に話すことにした。

「そうですか…それで今ギンガさん達との記憶と私の記憶を比較しているんですが…どうやら抜けている部分があるようなんですよ」

「それはどういうことですか？」

私の話にギンガが詳細な説明を求めた。

「まだはっきりとはしませんが…もう少しだけあなた方の事を教えてもらえませんか？そうすれば、よりはっきりすると思うんで」

だが、ギンガの問いに私は曖昧な答えをし、ギンガ達にそれをはっきりとさせるためにその協力を仰いだ。

それを聞いたギンガ達は二つ返事でそれについて了承をしＩＤカードを調べているミツキさん達にもそれを伝えることを私に告げ、私はそれを了承した。

そして、そんなやり取りをしていた所に私達の疑問への答えを持って…そして、私にとってとても忘れがたい記憶になるであろう彼女と出会いが待っていることを今の私は何も知らずにいた。

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第1話　時空を越えた出会い（後書き）

作者
「いかがでしたでしょうか？「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空（とき）を超えし蒼き羽根！！第１話　時空を越えた出会い！！」

ノア
「それはいいけどなんでいきなり外伝なんだ？」

作者
「それはですね。まず最初にＥＸＡＭ先生が監修している「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～亡霊の弾丸～」が７０万ＨｉＴを超えたことを記念してその主人公であるアウル・アパレシオンさんの出張権がプレゼントされるという企画がありましてそれに応募し当たったのでこういう風にした次第です」

ノア
「ふ～ん…んで、なんで本編じゃなくて外伝…それも六課より前の話なんだ？」

作者
「まぁまぁあせらないで…それよりもなんでこうしたかと言えば、以前ＥＸＡＭ先生が私の所に感想を頂いた際、アウルさんが「もしもミツキが自分の姉なら…」という一文があったので今回それをやってみようと思ったのが最初でならあとがきとかに出すよりも本編とは別な形の方がいいと思いまして」

ノア

「それで六課が始る前にしたってのか？」

作者
「はい。なんせアウルさん程の人が本編に出るともなればそれなりの登場をして頂く事になるでしょうし、下手なことはできませんから」

ノア
「なるほどな…んでよ。どうなるんだ？今後は？」

作者
「それについては、お楽しみにして下さいとしかいえませんね。話としては４話くらいを予定しておりますのでそれをご覧下さい」

ノア
「４話って…普通こういうのは１話完結じゃねぇのか？」

作者
「いや～本当は１話完結にしたかったんですけど…なんだかんだやっている内に１話で完結することができなくなりまして…（笑）」

ノア
「ったく…そんなんだから本編もこんなにながくなるんだぞ！！」

作者
「まぁ…その辺はその辺として…とにかく！！この外伝はもう何話か続きますのでお楽しみください！！」

ノア
「それと、もしこれをみてこれはアウルじゃない！！って思っても

勘弁してくれよな。それは、こっちの作者の文才がないせいだからな」

作者
「どうか広い心で読んでいただければ幸いです」

ノア
「それじゃまったなー」

ー次回予告ー

スバル
「ギン姉達の前に突如現れた男…その名は、アウル・アパレシオン…」

キャロ
「すれ違うお互いの記憶…そして、新たな出会い」

ティアナ
「多くの謎を残したままのユウ達の前に一筋の光が差す」

エリオ
「次回、「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空(とき)を超えし蒼き羽根…第２話」

スバル
「蒼き舞姫と梟…」

FW一同
「テイク・オフ…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第2話　蒼き舞姫と梟（前書き）

陸士１０８部隊　技術開発室　オフィス

ミツキ視点

「あっ…はい…それで…えっ？…そうですか…わかりました。ありがとうございました、それでは失礼します」

プツン。

「う～ん…まいったな～」

ガチャ

「何がまいったんだ？」

私は保護したＩＤカードの件で地上本部に問い合わせをしその結果を伝える連絡がちょうど今来た所。

その通信が終わりその結果に思考を巡らせ始めた時、私のオフィスのドアが開きその開いたドアからこの部隊の部隊長であるゲンヤ・ナカジマ三佐が入って来た。

「あっ！ゲンヤさん！ちょうどよかった」

私は、入室してきたゲンヤに気づき話を始めようとする。

「ちょうどよかったってこたぁ、どうやらうまくいってねぇみたいだな。話は、ギンガから聞いたんだが…んでどうなんだ？その保護した男ってのは？」

ゲンヤさんは、私がいるデスクに近づきながら私の反応を見て頭をかきながら「やれやれ」といった表情で詳細な説見を求めてきた。

「それが…」

私は、ＩＤカードを見つめながらゲンヤさんに今受け取った結果等を知らせた。

「おいおい…そりゃマジかよ」

「マジです。なんせ情報網をフル回転させて調べた上に地上本部に確認まで取ったんですから…」

私の話を聞いたゲンヤさんはその結果に驚きを隠せずにいた。そして、それが間違いないのか私に確認してきた。

私は、そのゲンヤさんの問いに真剣な表情で答える。

「なら…それが事実って訳か…後は、本人に話を聞くしかねぇか。これから行くのか？…なら、俺も行く」

ゲンヤさんは、私の話を聞いて一応の納得を示してくれてこれから私がその彼に会いに行く事を知り自分もついていく事にした。

アウル・アパレシオン…か…一体何者なんだろ？

私は、彼が持っていたＩＤカードを見ながらそんな思考を巡らせていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空を超えし蒼き羽根…始まります…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第2話　蒼き舞姫と梟

第2話　蒼き舞姫と梟

陸士108部隊　医務室

ギンガ視点

「よし!!これであたいが1ば～ん!!」

「あっ…ちょっと…待って!!」

「ノア!!てめぇ!それお前がもってたんか!!」

りんごを食べ終えた私達はミツキさんが来るまでの間トランプの7ならべをする事にした。

そして、今ノアが最後カードを置いてあがりを宣言。

それを見た私が待ったをかけユウが自分が置いてほしいカードをノアが持っていた事に怒りの声を上げる。

「それじゃ…これで私も上がりです」

「げぇ！！マジ！！」

「嘘！！アウルさんそれ！！アウルさんがもってたんですか！！」

私とユウがノアとそんなやり取りをしていた隙に私とユウが保護したアウルさんが静かに上がりを宣言していた。

その鮮やかなやり取りに私とユウは、驚きの声を再び上げる。

「いえ～い！！さっすがアウルさん！！」

「いえいえ、これもノアさんのお陰ですよ」

先に上がった二人はお互いをたたえつつハイタッチをする。

「くっそ～！！これでまたギンガとビリ争いか…」

「こ…今度こそ…ユウなんかに負けてたまるもんですか！」

このやり取りがもうどれくらい続いたんだろうか？

7ならべを始めてもう2時間が過ぎる…。

結果としては、ノアが1位でアウルさんが2位…そして、私とユウが3位と4位を交互に繰り返しているといった感じ。

そのため、ノアはとにかく上機嫌。

アウルさんもそれをみつつ笑顔を見せる。

そして、私とユウはと言えばお互いにビリにはなりたくないのでとにかくその表情はまさに真剣そのもの。

でも…こんなことって…ううん！とにかく今は、ユウに負けない事だけを考えなくっちゃ！！あいつに負けることだけは絶対にいや！！

バチバチ…。

バチバチ…。

どうやらお互いに考えてる事は、同じらしく私とユウの間で激しい火花が散る。

アウル視点

私の目の前では、ギンガさんとユウが真剣な表情で7ならべの勝負をしている。

それにしても…こんなトランプになぜそんなに真剣になれるんだ？

「アウル？どした？気分でも悪いんか？」

私がそんな疑問を抱いていた時、ノアが私に気分が優れていないのでは？となんだか心配そうな表情で聞いてきた。

「いや、大丈夫だよ。ありがとうノア」

「そっか！ならいいんだけど…でも、気分が悪くなったらちゃんと

教えてくれよな？」

「わかったよ」

心配そうな表情をしていたノアに私はやさしく答えた。その声に安堵したノアは何かあったらちゃんと伝えるよう渡しに伝えその声に私は、了承した。

そんなやり取りをしていて、わたしは今まで感じた事のないいごごちの良さを感じていた。

私が目を覚ましてからと言うもの、何かにつけて自分のことを使い魔と名乗る少女…ノアが私に気を使ってくれる。

なぜ？そんなに気を使うのかとノアに聞いてみた所…。

「そんなの当たり前だろ？こういう時にはお互い様ってな。それにあたいはこういう事には慣れっこなんでな。とにかく！！アウルがあたいにちゃんと自分の体の症状のことを教えてくれないとあたいがミツキに怒られるんだからちゃんと教えてくれよな！！ちなみに！ミツキってのはここの執務官であたいのマスターなんだ」

「それにユウのお姉さん…ですよね？」

「そう言うこった！！んじゃ頼むな！」

ノアの答えに私は、今までに聞いた事の中からミツキさんという人物のことの情報を取り出しのアの説明に追加し確認した。

その声にノアは、満面の笑みで答えてくれた。

私は、そう言って気を使ってくれるノアにほんのささやかやお礼をする事にした。

とはいえ、今の私に何かを購入するとか何か作ると言ったことは今の状況では出来そうにないので、７ならべで彼女を勝たせることにした。

そう…このノアが勝ちつづけるといったおかしな状況は私が仕組んだいかさまによって起こっている。

ユウとギンガさんには悪いと言う気持ちを持ちながら…。

だが、目の前にいる二人はそんな事は気にしないと言った様子で真剣勝負を繰り広げていた。

それにしても…また私の記憶にないことが出てきた…私の記憶では、陸士１０８部隊には執務官はいないはずだが…

トントン。

「はいるぞ～」

「あっ…部隊長？」

「じじい！！今ギンガとの真剣勝負の最中なんだ！！用があったら後に（ガン！！）…」

「だから！！部隊長！！」

「痛っ～！！」

ノックの後、医務室のドアが開きその開いたドアから男性が入って来た。

そして、その男性の姿にギンガがその男性が部隊長である事を告げ、そしてユウがその男性に向かってギンガとの勝負を邪魔しないように告げようとした時、横にいたギンガから鉄拳制裁を受けていた。

どうやら、その部隊長に対しての言葉使いを注意したようだ…。

ちなみにギンガからの鉄拳制裁を受けたユウは自分の頭の上に鎮座するタンコブを抑えつつ痛みを露わにしていた。

その姿をみた私は、その入って来た男性に目を向けた。

その男の記憶は私の中にもある…確か…

「陸士１０８部隊…部隊長のゲンヤ・ナカジマ陸上三佐ですね？」

「ああ…そうだが、おめえさんがギンガ達が保護したアウル・アパレシオン二等陸尉だな？」

「はい…それと…彼女は？」

ゲンヤとの挨拶を終えた私は彼の後から入室してきたメガネをかけ腰まで伸びた黒髪がとても印象的な陸士隊の制服を来た女性に目を向ける。

「ミツキーーーーーーーーー！！」

私は、ナカジマ三佐に彼女のことを聞こうとした所で、ノアがミツキと言う名を叫びながら彼女の元へ飛び込んでいった。

「あたいちゃんとやったんだ！！だから今日のおやつはいつもより多めでな！！」

「まったく…あんたはいっつもこれなんだから…あっ…申し遅れました。私は１０８部隊所属のミツキ・サエグサ執務官であります。アウル・アパレシオンニ尉」

ノアは、ミツキと名乗る女性に自分の成果を告げおやつを増量する事を要求。それを聞いた彼女あきれつつも私に自己紹介をしてきた。

「あなたが…ノア達がいってた…」

私はノア達が言ってたミツキと言う女性が彼女のことなのかギンガ達に確認した。

「はい。その通りです」

それを聞いたギンガはその通りである旨を伝える。

それから私がいるベットの横にあるイスに座ったミツキさんが私のＩＤカードを調べた結果を伝えてきた。

「えっ…存在しない？私が？」

「存在しないと言うか…あなたが持っていたＩＤカードのこのナンバーなんですが…これ…こっちで調べた所ユウの番号なんです」

ミツキの言葉が放った言葉にその部屋にいた全員が驚きの声を上げた。

「まさか…ユウのＩＤを偽造？して…？」

「それはねぇな。なんせ俺のＩＤカードは今ここにあるからな。ほれ」

全員は驚いた表情をしていた時、ミツキさんとはちょうどベットを挟んで反対側にいたギンガが一つの可能性として私がユウのＩＤカードを偽造している可能性を示唆。

それに対しギンガ後ろにいたユウが自分のＩＤカードを差し出しその可能性を否定した。

「たしかに…同じ番号…ですね」

私は、ミツキさんが持ってきた自分のＩＤカードとユウが出してくれた彼のＩＤカードに記載されている番号が同じ事を確認する。

「これでカードの番号は同じ事はわかったが、だが、偽造したって疑いまではまだ晴れた訳ではねぇぞ」

「んな事ある訳ねぇだろ！！この中で一番一緒にいたのはあたいだ！！その…時間は短いけど、アウルさんはそんな事をする人じゃねぇ！！あたいがそれを証明する！！」

医務室のドアの近くによっかかり腕組みをしながらその話を聞いていたゲンヤの疑惑の声をノアがゲンヤの目の前に飛んでいきその疑惑を真っ先に否定する。そして、ユウとギンガもそのノアの声に同意の様子。

「そうとは言ってもな…証拠がねぇと…」

ノア達の話にナカジマ三佐は、戸惑いの様子。

確かに…今の現状だと私がユウのＩＤカードを偽造してると言う疑惑が起きても仕方がない…。

それに今の私には、それが違うと証明する事はできない。

一体どうすれば…。

「私も…ノアの意見と同じです」

ノア達のやり取りを静かに見守っていたミツキが自分もノア達と同じ意見であることをつげる。

「ミツキ…その根拠は？」

ナカジマ三佐は、眉をひそめミツキさんにその根拠を確かめる。

「あ…はい…まず、このＩＤカードですが調べた結果、偽造されないための細工など地上本部で作られた本物と同じであるが確認できました。そして、ユウのカードですが、紛失したとか、誰かに貸したなどそう言った記録はありませんでした。これは、地上本部に既に確認済みです。そうでしょ？ユウ？」

「ああ。その通りだ」

ミツキは、ユウの方を向き本人にその事を確認する。

その問いにユウが真剣な眼差しで答える。

そして、改めてナカジマ三佐の方を向いたミツキさんは説明を再開する。

「それに…このＩＤカードをつつんでいる透明な保護シート見たいものですが…私達がそれぞれ持っているＩＤカードについている保護シートとは、まったく別な方法で作られていて私達の世界の技術では、どうする事もできないようなんですよ。それに私達のＩＤカードの保護シートにもそうできないようになっています」

「つまり…おめえさんが言いたいのは、偽造したと言うより別の世界…それも所謂パラレルワールドってのが存在して、アパレシオン二等陸尉はそのパラレルワールドから来たってことだな」

「はい…。未来のパラレルワールドから…それも私達が知らないと言うか、私達がいる世界とは違う世界の未来から来た人だと言うことです」

ミツキの答えに自分なりにまとめてそれを話すナカジマ三佐。

その話にミツキが自分の結論を告げる。

「ちょっと待った！！姉貴！！いくらなんでも飛躍しすぎじゃねぇか？」

ミツキの結論にユウが疑問の声を上げる。

それは、私も同じ事で周りにいた全ての人間が驚きと戸惑いの表情をしている。

「あの…アウルさん…でよろしいですか?あなたが所属している機動六課ですが…私達がいるこの世界にはまだ存在していない部隊なんですよ」

周りのそんな様子を気にしない様子のミツキさんは今度は私の方を向いて話かけてくる。

「かまいません。ですが、まだ、存在しないというは一体どういうことですか?サエグサ執務官?」

ミツキさんの話に私は質問を投げかける。

「あっ…私のことは、ミツキって呼んでください。サエグサだとユウとごっちゃになっちゃうんで。それで、まだ存在しないと言うのは、これはまだ、表沙汰には、なってないんですが来年の春先に本局がミッドに本局所属の実験部隊を創設するって言う計画が進んでいるんですよ。その部隊の正式名称が「古代遺物管理部機動六課」なんですよ」

ミツキさんの話に私は驚きと戸惑いを受ける。そして、ナカジマ三佐がミツキさんに質問する。

「そんな事…おめえ何時の間に調べたんだ?」

「あっ…これは、はやてから教えてもらったんです。ようやく自分の部隊ができるってね」

ナカジマ三佐の問いにミツキさんは笑顔で答える。

「あの…み…ミツキさん?そのはやてと言う人はもしかして…」

「はい。この春からその機動六課の部隊長に就任が予定されている八神はやてです。ちなみにはやてとは、昔から友人でちょくちょくお互いに情報交換なんかをしてるんです」

また違う…確か私が知る八神部隊の友人には、ミツキさんと言う女性はいなかったはずだ。

ミツキさんの話に私は自分の記憶を重ねる。

「つ～ことは、俺たちの記憶とアウルさんが持つ記憶に若干のズレがあるのはアウルさんが違う未来から来たからってことか?」

私とミツキさんのやり取りを見ていたユウが一つの結論を出す。

「そういうこと。その記憶のズレってのが、私達にとってはアウルさんで、アウルさんにとっては私とユウ…そしてノアになるかな?」

「つまり…私達にとってアウルさんがイレギュラーな存在であり、アウルさんがいたであろう世界だとミツキさん達がイレギュラーな存在ってことですね?」

「そう言うこと」

ユウが出した結論にミツキさんがさらに付け加える。

そして、その結論をギンガがまとめる。

確かに…ミツキさんが言ってることは一番納得ができるだが…そんな事が果たして可能なのか?

「アウルさん…ひとつ確認したいんですが…これ…なんだかわかりますか?」

思考を巡らせている私に対しミツキさんは金色のキーホルダーを見せてくれた。

「いえ…わたしにはよくわかりませんが…これは一体…」

「これは、アウルさんの所持品の中にあったものなんです。そして、このプレートに書いてある文章。私には、どうもこれが何かのキーワードになるんじゃないか?と思うんですけど…」

キーホルダーをみた私はそれが何かをミツキさんに確認する。ミツキさんは、それが私の所持品の中にあったものだと告げ、それが何かのキーワードになるのでは?と言ってきたのだ。

だが、なんだろう?このプレートを見ているとなんだが、懐かしいような…それに触れていけないような感じも…

「T…T…そして、E…なんじが失いし光と影そして、闇。その全てが揃いし時、その扉は開かれその中より金色の女神現れ、なんじがいるべき場所へと導かん。だがなんじ望みしものはその終わり告げる…か…確かになんだかそう結論をつけるには十分な物のようだ

な。まっ…とりあえずこの謎については、ミツキが引き続き調査するって事とこのキーホルダーもミツキが預かる事になるが…それでいいか？」

プレート文字を読んだナカジマ三佐は、ミツキさんがそう結論付けたことに納得する。そして、この件については引き続きミツキさんが調査することとキーホルダーについてもミツキさんが預かる事でいいか私に聞いてきた。

「はい。お願いします」

私は、ナカジマ三佐のその提案を受け入れた。

それは、そうすることが今の私にとっても最善なことだと考えたからだ。

「まずそれが一つ目で、次にこれはギンガからさっきミツキに念話で知らせてきたんだが、おめえさん記憶が一部抜け落ちてるってのは、本当か？」

「はい…どうやらそのようです」

これは、ユウ達の記憶と私の記憶とを比較している時に気づいた事だ。

「記憶が抜け落ちてるって具体的に教えて貰えますか？」

ナカジマ三佐の話に私が答え、その答えを聞いたミツキさんが詳細な説明を私に求めた。

「それは、どうやら私の中の記憶では、機動六課のことについては思い出せるのですが私の過去の事やどうやって戦闘を行っていたのかその辺の事が思い出せないんです」

そう…確かに機動六課の日常の事やＦＷ達が訓練をしていた様子についてはつぶさに思い出せる。

だが、自分自身がどうやって戦闘をしていたのか？それに過去のことについては頭の中に靄がでたような感じになり思い出せずにいる。

そして何よりおかしいのが、あれだけ機動六課のことは、思い出せるのにその隊員の中でただ一人だけ思い出せない人物がいること…。

私は、自分の中をまるで整理するかのようにミツキさん達に説明した。

「わかりました。そっちについては、ゆっくりと思い出す事にしましょう。私も力になりますから…それとあせらないで下さいね」

「はい…。わかりました」

思い出せない事に頭抱える私にミツキさんはやさしくそして、笑顔で声をかけてくれた。その声に私は、やすらぎと言うかまるで姉に優しくされているようにも感じた。

「それと…おめえさんの処遇についてだが…ミツキ！アウルのことは、おめえが面倒をみるって事でいいんだな？」

「はい…あっ…でも、アウルさんがよろしければって事になりますが…いいですか？」

ナカジマ三佐の話を受けたミツキさんは、私の方を向いて確認をとる。その表情は、さっきまでとは違いなんだか申し訳なさそうな…そんな表情だった。

「そんな…私みたいな者のことなんて…帰ってご迷惑では…？」

「そ…そんなことはないですよ！！それに…アウルさんに入て貰った方が私としても…いいというか…その…えっと…」

私の話を聞いたミツキさんは、両手をブンブンと振って問題ない旨を伝えた後、なんだか顔を赤らめて急にモジモジとしだした。

「まっ！！あたい達にとっては、ひとり増えようが関係ってことだ！！それにあたいとしてもアウルさんに入てもたらった方がなんだか楽しくなりそうだし」

そんなミツキさんの態度を見たノアがなんだかニヤニヤした表情でミツキさんの話に続いた。

その声にギンガさん…そして、ユウもナカジマ三佐も同意している様子。

「わかりました。それでは、お世話になります」

「よろしくな！！アウルさん！！」

「はい！！こちらこそ！」

私は、ミツキさん達の提案が最善のことである事だと感じをその提

案を受け入れることにした。

私は、お世話になる旨を告げノアと握手をした。

そして、この瞬間から決して交わる事ない者達のその奇妙な生活が始まりを告げた。

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第2話　蒼き舞姫と梟（後書き）

作者
「さて、第2話を無事終える事が出来ました」

ノア
「それにしてもよ…このペースで4話で終われるのかよ?」

作者
「このままだとまずいんで次回はちょっと時間が飛びます」

ノア
「でた…いつものパターン…」

作者
「いつものというより久しぶりと言ってほしいものです」

ノア
「久しぶりってなぁ!!大体!本編自体連載開始してからもう少しで3ヶ月しかやってねぇのに久しぶりってことがあるか!!」

作者
「うっ!!それを言われると…反論出来ない…」

ノア
「まっ、あたいの出番を増やしてくれてるんだから今回はこの辺で止して置いてやるよ」

作者

「ありがとうございます」

ノア
「んでもよ。例のプレートの意味ってのは？」

作者
「それは見てのお楽しみです。でもヒントを出すとは、ＥＸＡＭ先生の「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～亡霊の弾丸～」の中にその答えがあると言ってもいいでしょう」

ノア
「と言いつつＥＸＡＭ先生の宣伝ってか？」

作者
「それくらいしてもバチは当たらないと思いますよ」

ノア
「そりゃそうだ（笑）そんじゃ待ったなー！！」

ー次回予告ー

キャロ
「突如始った同居生活…」

エリオ
「暖かい雰囲気とつかの間のやすらぎ…」

ルキノ
「そんな中、一本の通信文が彼女達を呼び寄せる…」

アルト
「次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空（とき）を超えし蒼き羽根…第３話！！」

エリオ＆キャロ
「平穏な日々」

エリオ、キャロ、ルキノ、アルト
「テイク・オフ…」

外伝…時空を超えし蒼き羽根　第3話　平穏な日々（前書き）

アウルが保護されてから1週間くらいがたった…。

あれからと言うもの、アウルはミツキ達のお世話になっている状態は続いており記憶も回復の兆しはなかった。

だが、アウル自身そのことについて焦ることはなく、むしろミツキ達との生活を楽しんでいた。それよりもお世話になりっぱなしと言うのもアウルからすれば申し訳ないと考えてはいた。

しかし、現状では、財布もない状態で異世界に来てしまった状態のため何もする事が出来ずにいた。

そんなアウルを見越して、ゲンヤがアウルにひとつの提案をした。

その提案を聞いたアウルも二つ返事で受け入れた。

その提案とは…。

「それじゃ…。これお願いしますね」

「はい…。わかりました…姉さん」

陸士１０８部隊の技術開発室のオフィス。

その部屋の主である、ミツキはつい最近ついたばかりの新任の白髪と真新しい陸士隊の制服に身を包みんだ男性補佐官に仕事を依頼した。

その補佐官は、ミツキのことを「姉さん」と呼んでいたが、どう見てもその新任の男性補佐官の方がミツキよりも年上に見え、その関係は、傍からみれば怪しい関係にも思われた。

だが、当の本人達は気にしていない様子でミツキから内容を受け取ったアウルは、自分の席へと移動、そして黙々とその作業をこなしていた。

ゲンヤの提案は、アウルにミツキの仕事の手伝いをさせる事だった。

ゲンヤからしてみれば、アウルのその能力については、優秀な部類に入ると思っていたし、昼間の間ひとり家に残して何かに巻き込まれでもしたら対応出来ないために自宅に残せずにいた。

しかも、ミツキとノアが空いてる時間を見つけては、アウルの世話を焼きにいくためミツキの近くに置いておけば余計な手間が必要なくなると思ったからだ。

とは言え、アウルを完全に信用している訳でもなかった。

なぜかと言えば、いくらこちらで保護したとは言え身内に敵が多いミツキにとって次に何が起こるかわからないし、実際問題、補佐官としてついた人間がその裏でミツキの情報を流し、その情報を元で彼女がピンチに陥ったこともあったし、何よりミツキ自身人が良すぎるため騙される事が多々あるからだ。

その事自体、彼女の長所でもあり欠点でもあるがゲンヤ自身それについてミツキを責めてはいないしそう言うことは自分がすればいいと考えている。

だからこそ、自分の側にアウルを置く事で万が一の自体にも備える事が出来るし、ミツキが言うには、未来から来たアウルの情報を利用したがる連中はいるだろうから、アウル自身をそう言った連中から守るためでもあった。

そして、何より記憶が抜けているアウルに仕事をさせる事で彼の記憶に影響がでるかも？と考えあわよくばミツキといい関係になってくれれば？と考えたからだ。

だが、ゲンヤの思惑とは裏腹にアウルに今のところ変化はなく、年上のはずのアウルがミツキのことを何故か「姉」と呼ぶようになりゲンヤは頭を抱えていた。

その奇妙な関係が変な噂を広めることになった。

陸上警備隊の第３８６部隊

「ちょ…ティア！！これ見て！！」

端末に届いた一通のメールを見たスバルが声を上げ相棒のティアナを呼んだ。

「？？…ちょっ…スバル！！これって…」

「大事件だよ…ティア…」

「そうね。確認しなくちゃいけないわね」

「うん！今度の休みでも」

「そうね。そうしましょう」

スバルが見せたメールを見たティアナはそれを驚きの表情でそれを見て声を上げる。その声にスバルも何か確信を得たような顔でティアナの顔を見る。そして、その真意を確認することをお互いに確認していた。

ミッド郊外　八神家

「なんやとーーーーーー！！これは、一大事や！！」

はやては休日を自宅で過ごしていた所に届いた一通のメール。それを見てすぐに驚きの声を上げる。

「はやてちゃんどうしたんですか？」

「リイン！！大変や！これ見てみ！！」

はやての声を聞いたリインがはやてに声をかける。そして、はやてから例のメールを見るよう促される。

「はやてちゃん！！これは一大事ですぅ！！」

「そやろ！？これは早速確認せなあかん！！」

「はいです！！」

メールを見たリインははやてが何を言いたいのかすぐに理解しそれが一大事である事を告げはやての話に同意する。

「主はやて、それにリイン。一体どうされたのですか？」

「はやてちゃん一体どうしたの？」

「はやて…おなかすいた…」

はやてとリインの声にリビングにいたシグナム、それにシャマルが何事があったのか声をかけヴィータはそんな事は露知らず自分が空腹である事を告げる。

「おお！！ちょうどええと頃に来た！！いいからこれ見てみ！！」

シグナム達の声にはやてはリインに見せたのと同じ画面をシグナム達に見せる。

「うっ…そぉ～！！」

「なっ…なに！！それは真ですか？主はやて！！」

「あのメカオタクにお…男だと！！」

「考えがたいな…ミツキに男が出来たなど…」

メールを見たシャマル、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの順で驚きの声を上げそのリアクションをみたはやてはその表情に腕組みをし頷く。

「まだ、このメールだけやから真実なのかはわからへんがそれが事実やったら一大事や！！そやからウチはこの情報が真意なのか確認

しようと思う」

はやての真剣な眼差しに守護騎士達は同意し早速作戦会議が開始された。

そんな自体が起こっていることは本人達は露知らず、淡々とその日々を過ごしていた。

そして、その情報を流した張本人と言えば…。

「う～ん！！うめぇ～！！大満足！！」

休憩室に用意されていたクッキーを口に入れ満足げな表情で仕事をサボっていた…。

これから起こる事態のトリガーを引いたのは自分である事の罪悪感は一切ないことだけは言っておこう…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空を超えし蒼き羽根…始まります…」

外伝…時空を超えし蒼き羽根　第3話　平穏な日々

第3話　平穏な日々

陸士108部隊　技術開発室オフィス

アウル視点

私は、姉さんから書類を受け取り自分ために用意された席に座り渡された書類の整理を始めた。

元々書類整理については、苦手ではなかったがそれにしても量が多い。

いくら姉さんがこの技術開発室の室長と少将、そして、執務官の仕事を兼務しているとは言えこの量は尋常なではなかった。

そもそもこの話は暇を持て余していた私にゲンヤ・ナカジマ陸上三佐が提案してくれたことに始る。

その提案に私は、普段色々とお世話になっているお礼も兼ねて受ける事にした。

なぜミツキさんのことを「姉」と呼ぶようになったかと言えば…

ミッド郊外～ナカジマ家～

ー回想ー

「はい！アウル！！それじゃこれお願いします！！」

「わかりました。サエグサ執務官」

アウルはミツキと一緒に夕食の準備をしていた。

そんな中台所に立つミツキからアウルに夕食を運ぶよう頼まれたアウルはミツキからそれを受け取り運ぶ。そして、そのころのアウルは、ミツキのことをサエグサ執務官と呼んでいた。

「んもう！！私のことはミツキ！！でしょ！！ミ・ツ・キ！！」

ミツキはアウルにそう呼ばれる度にファーストネームで呼ぶようアウルに言うがアウルは一向に変更しようとしてはいなかった。

「それにしてもそんなに呼びずらいのか？姉貴のことが？」

そんな光景を見たユウがアウルに声をかける。

「いや…そう言う訳ではないんだが…」

「まさか…女性をファーストネームで呼ぶ事が苦手なんて言わねぇよな？」

頭かきテレながらユウに答えるアウルを見たユウがアウルに話をする。

そのユウの話に「ドキリ！！」と同様するアウル。

そのアウルの態度に頭を抱えるユウ。

「でもよぉ、なんでミツキだけなんだ？ギンガやあたいはちゃんと名前で呼んでくれるのに？」

フルサイズの状態でテーブルをふきながらアウル達の話に参加するノア。

その格好といえば、Ｔシャツに短パンといったラフな格好で通常時とは違って、ショートカットの髪型に１８０ｃｍの高身長。そして、その胸元は、ギンガやシグナム達と同様に巨乳であった。

テーブルを拭き終えたノアは腰に手を当て困った様子でアウルに話をする。

その一方料理を持ってきたアウルは、持ってきた料理をテーブルにおきつつノアの話をはぐらかしながらその視線のやり場に困った様子だった。

「とは言え、ここにはサエグサが２人もいるし階級等で呼び分けるのも面倒だろうし、呼んだら呼んだで二人とも振り返っちまうからな。なぁアウル？おめえさん、ミツキのことをどう呼んだら呼びやすいんだ？」

テーブルに座るゲンヤがアウルに助け舟をだした。

その声にアウルは「そうですね…それじゃ…」と前置きを置いた上で話始めた。

「それじゃ…ユウと同じで姉さんと呼ばせてもらえませんか？」

アウルは頭をかきテレた様子で話だした。

「姉さん？」

アウルの話に？を浮かべその理由を聞くノア。

「はい。自分には、どうも姉と呼べる存在がいなかったみたいで私にやさしく接してくれるサエグサ執務官をみているとなんだか姉のように思えて…その…ご迷惑なければ…そう呼ばせてほしいんです」

顔を赤らめ恥ずかしながら話しをするアウルに周りのゲンヤ達は、目が点になっていた。

ー残念です。主ー

アウルの頭の中にふと残念がる女性の声が聞こえた。

アウルが回りをキョロキョロ見渡すがそんなことを言っている言っている人物はおらず、そんな光景をみたミツキが口火を切る。

「あははははっ、お姉さんか…そう呼びたいならいいわよ。私ももう一人弟が出来たみたいだったし」

台所から出てきたミツキがアウルにそう呼んでも問題ないとの話をする。

その声にアウルもホッとした様子でミツキに笑顔を答えていた。そ

の光景をみていたノアとユウそして、ゲンヤの3人はがっかりとした様子であった。

ー回想　ＥＮＤー

そんな事もあってアウルは、ミツキのことを「姉さん」と呼びミツキはアウルのことをアウルと呼ぶようになっていた。

だが、ミツキの仕事はアウルが想像して以上のものであった。

まず、ミツキが兼務している仕事が少将と技術開発室の仕事と執務官の仕事ととにかく重要なものばかりでその打ち合わせやら、一日のスケジュール足るや忙しい時には、分刻みになりそれを管理、調整するのがとにかく大変であり、普段はノアが管理するのだが、ノアがいない時には、自分かもしくはギンガがそれをしなければならず彼女の体調的なことも考えなければならないためいろいろと苦労していた。

ちなみにユウは言えば、ゲンヤやミツキの頼まれごとを一手に引き受けていたためミツキのスケジュール管理にまでは参加することはできずにいた。

それだけではなく、急な来訪者への対応や書類などの処理関係など…とにかく時間がいくらあっても足りないといった状態であった。

そんな中でも、ミツキは常にアウルのことを気にかけアウルもまた彼女への負担の軽減を常に心がけていた。

特にアウルが気にしていたのが、ミツキの体調に関してのことであ

った。

とにかく頑張り屋のミツキにとってその頑張りこそが自分自身の体調の回復を遅らせる事となり、ゲンヤやギンガそれにノア、ユウも心配していた。アウルもまたミツキが目の前で倒れる場面に何度も遭遇しており、その度に冷や汗をかいてたりしていたし、なぜそこまでするのか?と言った疑問に思う事さえあった。

そんなアウルの疑問に対しミツキは笑顔でこう答えた。

「だって…今やっておけば…後から楽だし、それに私がいなくなっても、なんとかなるだろうし私ってこんな体だからみんなに迷惑かけまくってるからね。少しでもやっておかないと…後から大変だから…ね！」

その笑顔をみたアウルは、こんな彼女だからこそギンガ達は彼女を信頼し彼女もまたギンガ達を信頼しているのだなと思っていた。

そんな彼女だからこそ、年下の彼女のことを姉と感じたんだろうと考えていたし彼女の側で手助けをしたいと思っていた。

アウルは常にミツキの側にいるよう心がけ彼女を補佐する事に専念していた。

そして、彼女に無理難題を持ってくる人達には毅然とした態度で臨み注意点などがあればギンガやノア、そしてゲンヤやユウにアドバイスを求めたりしていた。

その紳士的なアウルの態度は、１０８部隊の人間にとっては好意的に受け入れられ、ミツキもアウルの存在を心強く思っていたし、好

意的に印象を持っていた。そして、彼の知らない所でアウルのファンクラブまで出来るまでになっていた。

そんなアウルとミツキの様子を見ていたノアがスバルやはやて達に１通のメールを送信した。

それは…

「ミツキに春が来た！！」

それは、ノアからしてみれば、ディーダ以来の出来事でありこう言ったことに奥手なミツキの背中を押す意味でもあった。

だが、その内容はスバル達からすれば衝撃的な内容でありそのインパクトの大きさは計り知れない物でありその噂はすぐに広がっていった。

その噂に女性隊員達は、一喜一憂しその久しぶりの明るい話題に影ながら応援する者、または泣き出す者もさえいた。

だが、大半の人間は、その噂の信憑性について疑問視していた。なぜなら、当の本人達は恋人同士というよりまるで姉弟の関係にしか見えないからだ。

その噂の信憑性を確認するために…満を持して目の下に隈をつけた八神はやてと守護騎士代表として１０８を訪れるリインの姿があり、その後ろにいろんな機材を持ったシグナム達が続き、さらにアルトとヴァイスの姿があった。

そして、３８６部隊からティアナとスバルが休暇届をとってギンガ

の元を訪れその真意を確かめようと計画を立てていた。

「ミツキー!!おるかぁ!!」

「こんちにはですぅ!!」

技術開発室のオフィスに到着したはやてとリインは、お互いの顔を見て、意を決した様子で部屋の中へと入っていった。

そして、入った二人を待ち受けていたのは…、

「姉さん、これになるんですが…」

「??どれどれ…えっとこれについては…??はやてどしたの?」

部屋に入ったはやてを待ち受けていたはやてとリインを待ち受けていたのはミツキのことを姉と呼ぶ白髪の青年がミツキに書類を見せてる様子であった。

「姉さん???」

それを見たはやて「姉さん?」と声を上げは目が点になった。

ポク…。

ポク…。

ポク…。

チーン!!

「ミツキーー！！あんたいつの間にこんなええ男を！！一体どんな事をしたらそんなええ思い出来るんやー！！ウチは…ウチはええ～ん（泣）」

我に返ったはやては、部屋の入り口でミツキに対し激怒しその後、肩を落としいきなり…そして、ついには泣き出した…。

「はやてちゃん！！はやてちゃんには、リインがついてるですぅ！！例えミツキさんが男を誑かしていても…」

はやての横でリインもハンカチで涙を拭きながらはやてを励ます。

「あのさ…いきなり来て…その三文芝居…いったいどういう訳？」

泣き崩れるはやてとリインに近づいたミツキは、その光景をジト目で見ながら2人を問い詰めた。

一方アウルはと言えば、その光景をただ、呆然とした表情でみていた。

「はやてちゃん！！」

「リイン！！」

ミツキが声をかけたのをまるで無視するかのようにはやてとリインはお互いを見つめそして、抱き合い再び泣き出した。

「はぁ…。あのさ…ここで感想欄の私にチェンジしてその感情のままにした方がいいのか、すぐにその三文芝居を終われらせて事情を

話すか…どっちがいい？」

抱き合い泣き続けるはやてとリインに対し、ミツキは2人の前にジト目のまま屈がアウルに聞こえない程の小さな声で2人に警告をだした。

そのミツキの警告に対し…ビクリ！！とするリイン…。

だが、はやては一向に辞めようとしない。

「ふ～ん…。そう来るんだ…なら…ば仕方がないね」

と言い残し立ち上がるミツキ。

そして、パネルを開き何か悩んでいる様子だった。

「あの…姉さん？これから一体どうするつもりなんですか？」

唖然としていたアウルは、我に返りパネルを見ながら腕にぐみをしながら考え事をするミツキに対し声をかけた。

「ん？？あのね、これからチビ狸をどう料理しようか実を言うと悩んでるんだよね？」

そのミツキの答えを聞き、瞬時にその考えを察したアウルは、ヤレヤレとした表情でそのミツキの考えに付き合う事にした。

「それで、いったいどう料理されるつもりなんですか？」

「そうだね…。叩きにするか…、それかチビ狸の丸焼きユニゾンデ

バイスのミッド風…あっ…後、塩釜焼きってのもいいかな？」

アウルの問いに上を見つつ顎に右手の一指し指を当てながら答えるミツキ。

「それなら、砲撃魔法で一気に丸焦げにするってのもいいのではないでしょうか？特にＳＬＢなんて打って付けですよ」

ミツキの話にアウルもいたずらな表情でミツキに続く。

その声にピタリと動きが止まるはやてとリイン。

そして、リインの懐からなにやら紙束が落ちた。

「？？これは一体…」

それに気づいたミツキはその紙束を広いその中身を確かめる。

はやてとリインは、抱き合ったまま「まずい…」といった様子。

「なになに…八神はやて作…「本当にお金がない？」…ってこれどッかのトレンディドラマの丸パクリじゃない！」

「でも、配役とかちゃんとしてありますよ。ちなみに主人公のオギハラ役が私で姉さんは、幼馴染のヒロイン役ですね…。ちなみにオギハラの子供役がユウとギンガでオギハラの上司役が八神さんらしいです」

ミツキの横からアウルもその紙束を除き見をしその内容を伝えるアウル。

「そういや、最近、再放送してたわね。オバー○トラァボォって、その主題歌が流れてたな。テレビで」

その声を聞きつけたノアがミツキが持つ紙束を見つつそんな事があった事を告げその主題歌のサビの部分を口ずさむ。

「はぁ…、まったく…それで今やったるのが序盤のシーンで…って、ヴィータ…あんたカメラもって何やってんの？」

それを聞いたミツキはそのままドアへと向かいそのドアの向こうでカメラを構えているヴィータに声をかける。

「あっ…あのさ…これは…えっ～と…」

いきなりのミツキの登場に戸惑いの表情のヴィータ。

「ちなみに…音声がシグナムで、シャマルがＡＤ？…それとザフィーラが助監督？ってあんた達何やってんのよ？こっちは忙しいってのに…」

ヴィータ達の前に両手を腰に当て仁王立ちするミツキ。

「それと…アルトにヴァイス！！逃げようたってそうはいかないわよ！！」

ミツキの背後からその場から退避しようと抜き足差し足としていた大道具担当のアルトとヴァイスがミツキに見つかりミツキの声に「ビクリ！！」となりその場にフリーズする。

「いや～そのなんて言うか…なんせミツキ先輩に春がきたって言うメールが届いたもんでその…なんて言うか…それその真意を確かめようと八神特別捜査官に声をかけてもらって…その…ごめんなさい」

「俺も八神捜査官に誘われてな…その…すまん」

フリーズしていたアルトは、すぐに頭をかきながらミツキに事情を説明。そして、ヴァイスとともにいち早くミツキに謝った。

「こらーーー!!アルトにヴァイス!!ウチ等を即効で裏切るんかい!!」

そのアルトの態度の急変に先ほどまで泣いていたはずのはやてが2人に突っ込んでいた。

「はやて…やっぱり演技してたんだ…ねぇ…はやて…ちょっとお話しよっか…」

「み…ミツキ…何いきなりそんなに黒くなって…それにメガネキラーンってしてないで…そうやスマイルや!ス・マ・イ・ル!って聞いてへん!!それにウチの襟首をガシッって掴んで…いったいどこへ連れてくんや!!いやや～!!何でウチだけミツキとお話せなあかんのや!!シグナム!!、ヴィータ!!ザフィーラにシャマルにリイン!!ヘルプ!!ヘルプミーや!!って、なんでみんなしてウチを無視するんや!!まさかウチ一人を生贄にささげるつもりか!!」

はやて自分の状況を説明しつつヴィータ達に助けを求める。だが、そのはやての悲痛な叫びの声にハンカチを抑えつつ涙しながら無視するヴィータ達。

「さぁ、はやて…頭冷やそっか…」

「いややーーーーーーーーーー！！」

ミツキに奥襟をつかまれだだこねる子供のように引きづられてくはやて、その光景をノアは頭にドナドナを流しながらそれを見つめヴィータ達と言えば、

「申し訳ございません…これもわれ等が生き延びるため…」となんだか訳のわからない言い訳を頭の中に浮かべながら必死の演技をしていた。

そして、いち早くお話を回避したアルトははやてに対し成仏するよう手を合わせていた。

そんな一連の様子をアウルは、微笑ましい笑顔で見つめながら自分の仕事へと何食わぬ顔をしながら戻っていった。

ノア
「やっぱり伸びたな」

作者
「ええ、やっぱりドタバタになるとどうしても1話じゃおさまりませんでした」

ノア
「それにしてもよ。いくらなんでも無理やりすぎねぇか？アウルとミツキの関係って」

作者
「確かに、年齢的にはアウルの方が上になりますが、精神的な部分でアウルがミツキを尊敬する意味で「姉さん」と呼ぶようになりました」

ノア
「あたい的には、アウルとミツキがいい関係になればなって思っていたんだが…」

作者
「それも考えましたが、アウルさん自体向こうに恋人を残した状態

ですんでそう言うことになると色々と後から面倒な事になりそうだったんで…却下しました」

ノア
「ふ～ん…。となると、次回はこの続きになるのか？」

作者
「ええ、なんせスバル達と接触させてませんからその辺をまずかいてからいよいよ謎解きに入ります」

ノア
「謎解きって言ってもよ、こっちからじゃときようがないんじゃないか？」

作者
「まぁ、それは色々と考えてますんでお楽しみにして下さい」

ノア
「ふ～ん…まっ…いいか」

作者
「それと感想なんてもらえるといいんですが…」

ノア
「それにしても本当にこないな…感想…」

作者
「カウンターは、回るんですが…その何と言うかどう読まれてるのかリアクションはほしいところです」

ノア
「まぁ、ある意味作者の自己満足で書いてるみたいなもんだからな。
それがどう映っているのか気になるって訳だ」

作者
「そんな所です。評判がよければまた別の作者さんとの子ラボもし
ようとも考えてますんでぜひ！！と言う方がいれば感想なんかに書
いてくれれば幸いです」

ノア
「よろしくお願いしま～す！！」

作者
「では、また次回！！」

ノア
「お楽しみに～！！」

ー次回予告ー

シャマル
「たどり着いたその場所は笑顔でいっぱいだった」

シグナム
「その笑顔につつまれ彼は、いつになく幸せの中にいた」

ヴィータ

「だが、そんな彼の小さな望みも残りわずか…」

リイン

「祝福の風が彼等を包み込んだ時…別れのカウントダウンが始る」

ザフィーラ

「次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空（とき）を超えし蒼き羽根…第４話…」

はやて

「機動六課…」

八神家一同

「テイク・オフ…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第４話　機動六課（前書き）

ミッド郊外　ナカジマ家

スバル視点

「な～んだ！！そう言う事だったんだ」

私は、休暇を利用してティアと一緒に実家に帰ってきた。

なんで帰ってきたかというとそれはもちろん！ミツ姉とアウルさんって人との関係についてのその真意を確認するためだ。

「結局ノアの…早とちり…と言うか勘違いに振り回されたってことですか？ギンガさん？」

「う～ん…勘違いと言うか一種の願望…よね…」

自宅のリビングのソファーに座って寛ぐ私とティア。

私達は、ギン姉が入れてくれたお茶を飲みながらギン姉から事情を聞いた。

その事情を聞いた私がまず感想と言って、その後ティアが自分なりにまとめた内容をギン姉に確認、ギン姉がそのティアの答えに顎に指を当てながらそれがノアの願望であることを告げていた。

そして、ギン姉もお盆を台所に置いてきて私達がいるリビングのソファーに座る。

「まっ…当初は、ノアも含めた誰もがそう思ったんだが、まさかアウルさんが姉貴の事を「姉さん」って呼びたいって言い出したもんだからその…フラグがその瞬間へし折られたんだよ」

私達の話を少し離れた所で聞いてたユウ兄がその時の事情をつぶさに報告してくれた。

ちなみに今日は、父さんとノア、それにミツ姉とアウルさんが仕事でギン姉とユウ兄は休みで私達は、ユウ兄に迎えにきてもらったんだぁ。

それとウチとユウ兄達の家って渡り廊下で繋がってるからユウ兄は自分の家の駐車場に車を置いてその渡り廊下を伝ってコッチに来たって訳。

「フラグがへし折られたって…アウルさんってそんな能力もってたんだ…」

ユウ兄の話にティアが呆れた様子で答える。

「そこまでは…わからないんだけど…アウルさんって優しいから誰もが好意をもっちゃうみたいで…その…なんと言うか…恥ずかしい！！」

「ギン姉？どうしたの？」

ティアの話にギン姉が続こうとしたんだけど…急に顔を赤らめてモ

ジモジしだした。

私が声をかけるがどうやら聞こえてないみたい…。

「そう言えば、お前等明日…暇か？」

そんなギン姉を無視するかのようにユウ兄が私達に明日の予定を聞いてきた。

「？？明日はただ帰るだけだから特に予定はないんだけど…」

「私もスバルと同んなじよ」

「いったいどうしたのよ？ユウ？」

私、ティア、ギン姉の順でユウ兄に話かける。

「ほら、明日姉貴とアウルさん休みでそれを利用してアウルさんの着る物とか買いに行くっていってたろ。それで…」

「私達にその買い物に付き合ってほしいって事」

ユウ兄の話にティアが続く。

「まぁ、そんな所だ。なんせ俺とギンガは明日仕事だし、お前等が一緒ならなんかあっても大丈夫だろうしな」

「なるほど…ミツキさんの話相手件ボディガードって訳ね。わかったわ、あんたもいいわねスバル」

「了解～♪」

ユウ兄の話にティアがその話をまとめ、ユウ兄の頼みを受け入れ私にも同意を求める。そのティアの話に私は、ギン姉が出してくれたおかしを口にいれつつティアの話に同意する。

私達がそんな話をしていたのとちょうど同じ頃１０８部隊では…。

ミツキ視点

「まったく…いったいどこにそんな事考える余裕があるんだか…」

私は、はやてとお話をした後、オフィスにある応接スペースではやて達と話をしていた。

ちなみに、はやて達にメールを出したノアには罰としておかし抜きを言い渡してある。

それを聞いたノアは、アウルになんとかできないかと泣きついている。

泣きつかれたアウルといえば困った様子だ。

「まぁ、一種の気分転換や、それにしても彼があんたがいってた違う未来から来たッちゅう人か？」

はやては、アウルをチラッと見ながら私に話をする。

「まぁね。まずは、これをみてよ」

はやての話は私は、１枚の紙をはやてに渡す。

「こ…これって!!機動六課の組織図やないか!!なんであんたこんな物もってるんや!!」

紙を見たはやては驚き内に向かって声を上げる。

「それはね、アウルがいた世界にある機動六課の組織図なの。何か使えないかと思ってアウルに書いてもらったんだけど…あんたがその反応をするって事はこっちも同じって分けだね」

私は、はやての態度の変化にある結論をだした。

それは、アウルがいた世界の機動六課とはやてが今考えている機動六課が同じ組織であると言う事だ。

私の話にはやては真剣な眼差しを私に向けながら頷いた。そして、その紙をテーブルの上に置いてソファーに座り直した。

「そうや。これはウチが考えてるのとおんなじ物やただ、ひとつ聞いてええか?ここの部分…ライトニングの隊長の欄が空欄になってるのはいったいなんでや?」

はやては、その空欄の部分を指差し質問をしてきた。

「う～ん…。そこだけ思い出せないんだって。まっ…はやてのとこだから恐らくあんたの友達や家族で固めるだろうか想像はつくんだけど…」

「ほな…誰だかわかるか?」

私の話にはやてが「当ててみ」という表情で私に聞いてきた。

「そうね…恐らく…フェイト・T・ハラオウンって所かしら？」

私は腕組みをしながら少し考えたのちある人物の名前をだした。その名は私にとってはちょっとやっかいな人物。正直言ってこの人とは、出来ればあまり関わりは持ちたくない…。

私の答えにはやては、お手上げのポーズを取りながらそれが正解である旨を伝えてきた。

「フェイト・T・ハラオウン…」

「アウル？どした？…おい！！アウル！！アウル！！」

少し離れた所で私とはやての話を聞いていたアウルがフェイトさんの名を聞いた途端その名を口にした後、突如フリーズしてしまった。

そんなアウルの様子を見たノアが心配そうな表情でアウルに声をかける。

「あ…ノア…心配をかけてすまない…ちょっと考え事をしていて…」

ノアの声に気が付いたアウルは心配をしていたノアの問題ない旨を伝えその答えにノアも安堵の様子。

そんなアウルの様子を見ていた私は…なんだか悪い事をしてしまったと思い心の中で反省していた。

「大丈夫ですか？なんだが顔色がよくないですよぉ～。でも！！この祝福の風であるリインが来たからには心配無用なんですよぉ～！！」

アウルの様子を見ていたリインがエッヘンと胸を張り心配無用である旨を伝える。

「な～にが、祝福の風だぁ～！！おまえが威張った所で何にもなんねぇよ！！」

リインの様子にノアが突っ込みを入れる。

「ノア～！！いちいちうるさいですよ！！」

「チビッ子が何生意気な事いってんだ！！」

「むぅ～！！チビチビってノアも今はチビじゃないですかぁ～！！」

「何言ってんだ！！フルサイズだったらお子茶間の癖に！！生意気言うんじゃない！！」

「むぅ～！！ノアのくせに～！！」

アウルの目の前でノアとリインが言い争いを始めだした。

「お二人とも…落ち着いてください…って聞いてませんね…あ…あの姉さん…どうしたらいいんですか？」

そんな様子をアウルは、どうしていいのかこちらに助けを求めてきた。

「ノア～！あんまりアウルを困られないでね。じゃないとおかし…あげないよ…」

「リインもやで！！ちょっと落ち着き！！」

私とはやての声にノアとリインは「ごめんなさい」と私とはやて、それにアウルにも謝っていた。

でも…今ので少しわかった気がする…彼を元の世界に返すには、機動六課が何かしら関係してくるんじゃ…。でも、このまま返しても果たしていいものなのか…。

どう考えてもプレートに書いてあるキーワードってアウルにとっては思い出したくない物だろうし…それに…私自身このままアウルに入てほしいとも思い始めちゃってる…。

そして…アウルが好きな人って…金色の女神…その二つのキーワードがどちらもある人物に繋がっていく。

私は、もしかしたらその人に…嫉妬してる…アウルをとられたくないって考えちゃってる…ハァ～…なんだか考えれば考えるほどに自己嫌悪に落ち入ちゃうよ…。

そんな私を他所にただ時間だけが過ぎていった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空を超えし蒼き羽根…始まります…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第４話　機動六課

第４話　機動六課

ミッド市外

スバル視点

「ミツ姉～！！早く早く！！」

「ちょっと！！スバル！！少しはこっちのことを考えなさい！！まっ…たくもう！！はしゃいじゃって」

「まぁまぁ、それだけうれしいんですよ。スバルは？」

「それにしてもスバルとティアと出かけるなんて本当久しぶりよね～」

私とティアが自宅に戻った翌日。ミツ姉とアウルさんと一緒お買い物にレッツゴー！！って事になり４人で街にくりだしました。

とにかくミツ姉とでかけるなんて本当久しぶりだったから私は少しはしゃぎながら先頭を進み、後ろから来るミツ姉に声をかける。それを見たティアがはしゃぎすぎの私を注意しアウルさんがティアが宥め、そして、ミツ姉が私とティアとでかるのが久しぶりである事を告げてた。

「それにしてもそんな中に私がご一緒してもよかったんでしょうか？」

ミツ姉の話を聞いたアウルさんは、なんだか申し訳なさそうに声を出す。

「そ…そんな事はないですよ！！私だって…そのアウルさんと出かけられる事自体とても光栄な事で…出来れば…その…今度…二人っきりで…で…で」

アウルさんの声にティアはとんでもないといった様子。

でも…その後、ティアは顔を真っ赤にしながら急に俯いてなんだかブツブツといいだしていた…。

「それにしてもアウル…本当に下着だけでいいの？私服も買っておいたほうがいいんじゃない？」

ミツ姉は、ユウの私服を着て横を歩くアウルに向かって話しかける。

「ええ、私服はユウに借りられますし、それにあまり着る機会がないんで必要ないんです。それよりも、すいません。姉さんせっかくのお休みなのに…」

「気分転換よ！気分転換！それにスバル達と出かけるなんてこういった事がないと出来ないからね。こっちこそありがたいわよ。あっ…それとお金の事は心配しなくて言いからね！しっかりと下ろしてきたから！！」

ミツ姉は、アウルの話に笑顔で答える。

そんなやり取りを見ていた私はなんだかうれしくなってきちゃった。

「そう言えば、アウルさんがいた部署に私とスバルも一緒だったんですよね？確か…機動六課…って言ってましたけど…そこって一体どんな所ですか？」

我に返ったティアがアウルに質問する。

「そうだね…レリックやロストロギアを扱う部署だったんだけど…でも、隊長陣を始めとしたみんながなんだか家族みたいでね。その部隊長である八神部隊長は、そこをとにかく意識していたようでここ同様私にとっては、大切な場所である事は確かだよ」

ティアの話にアウルさんは恥ずかしそうな様子で上を向きなんだか懐かしそうな顔をしながら話をしていた。

「家族…か…なんだかはやてらしいね…」

そのアウルの話にミツ姉も笑顔でアウルさんの話を聴き入っていた。

そんなやり取りをしながら私達はデパートへと繰り出していった。

デパート内　紳士服売り場

ミツキ視点

「う～ん…こっちがいいかな…。でもこっちも似合いそうだし…ね

ぇティア？どっちがいいと思うってティア！？」

私がアウルさんに似合う服を探していた所、ティアが男性下着を掴んだまま顔を赤らめフリーズしていた。

「こ…これを着て…私と一夜を共に…そして、その後…」

「ティア？何想像してるの？」

私は、男性下着をもったまま固まってるティアにジト目をしながら話かける。

「す…スバル！！って私！！なんでもないわよ！！」

私の声に気が付いたティアは下着を元に戻し私の話をはぐらかそうとしていた。

「本当～♪もしかして、エッチなこと想像してた？」

「ち…違うわよ！！何いってんよ！！このバカスバル！」

「ちょっと…あんた達！！何やってんのよ！！ちゃんと選んでよ！！まっ…たく…もう！！」

私の質問に対しティアは、声を上げそれを聞いてたミツ姉が私とティアに注意する。

「まぁ、まぁ…それにしてもこんなに買ってもらっていいんですか？姉さん？」

アウルさんもいくつか選んだものもってミツ姉を宥める。そして、こんなに買ってもらっていいのか？なんだか申し訳なさそうに話を続ける。

「あっ…気にしないでいいわよ！今日はアウルの買い物なんだから…それにしても…本当にそれでいいの？もっといい物あるでしょうに…」

アウルさんの話にミツ姉は、気にしないでいい旨を伝えアウルさんが持ってきた。何本セットでいくらといったセール品ばかり選んでいるアウルさんにもっといい物を選ぶよう薦める。

「いえいえ。自分はこれくらいでいいんですよ」

「そう…？あ…スバル！！ついでだからユウとゲンヤさんのもの選んでくれない？」

「了解～♪」

そのミツ姉の進めにアウルさんは、これくらい物でいい事を伝える。そして、ミツ姉は私にユウ兄と父さんの物も選ぶよう頼んできたので私は、二つ返事で了承する。

私は、ユウ兄と父さんの下着やらをワゴンセールの中から選び出していた。

ちなみにティアは、今度は別の下着を持ったままどっか違う世界へと旅立って行った。

「子供は2人くらい…そして、新婚旅行は…どっか海が綺麗な所で

…ふたりっきり…いや～ん！！恥ずかしい！！」

「駄目だこりゃ…」

私がワゴンセールを物色していた所下着を持ったままのティアがなんだか暴走を始めていた。

そんな光景に私は、コント番組のオチのセリフをいいながらその光景を無視する事にした。

ぐぅーーーーーーーーーーーーーーー。

「あっ…ごめん…」

「ちょ…スバルあんたねぇ～」

私達が買い物を大体終えた所でスバルの腹の音が私達にお昼であることを告げてきた。

その光景にスバルは顔を赤らめ謝ってきてティアがその音を聞いてなんだかあきれていた。

「そっか…もうお昼かぁ…せっかくでてきたんだしどっか食べに行こうか」

「賛成～！！ねっ！どこにしようか？中華もいいし…和食…う～ン考えただけでお腹がすいて来た～♪」

私の提案にスバルが待ってましたと言わんばかりな声をあげ賛成す

る。

そんな光景を見つつも私は、アウルの観察をしつづけていた。

なぜそんな事をしているかと言えば今回の件は、どちらかと言えばアウルの個人的な記憶の部分が元に戻るための言わば鍵となる。

それが現状では、あまり確認出来ずにいるため私は、アウルを観察することでそこから状況を打破しようとしていた。

彼が元の世界に戻るためには、まず第一に彼の抜け落ちた記憶の回復が必須となり私やゲンヤさんも色々と試しては見たが、この間のはやてが来た時の一件依頼あまり進展はしていないが、どうやら彼自身何か寝言を言っているところを見るとなんだかいい傾向に向かっているかも知れない…。

でも、あの文章が事実だとすれば…彼が全てを思い出した時…あの人がアウルを迎えに来て…そして、この生活も終わりを告げることになる…。

それが…彼にとって果たしていい事なのか…まだその結論を出せずにいた。

そんな私を他所にスバルとティアナはお昼を何食べようかガイドブックを片手に必死に選んでいた。

なんせ、今回は、スバルとティアナがお昼をご馳走してくれるらしくそこについては、二人に任せることにしていたからだ。

私は、長いすに腰を下ろしその結論が出るのを待っていた。そんな私の横に両手に荷物を抱えたアウルが横に座った。

「大丈夫？疲れてない？」

「はい。大丈夫です。姉さんの方は？」

「私は、久しぶりの買い物だったからね。結構はしゃいじゃった…（笑）」

アウルの問いかけに私は、舌を出してへっやっちゃったという様子。

そんな様子をアウルは笑顔で答えてくれた。

年上の弟…最初その話を聞いた時には、私ってそんなにお姉ちゃん気質なのかな？と疑問に思ってしまったけど、今となっては、なんだかこれもいいかな？って思えてきた。

長いすに腰を下ろしたまま私は、ふと金のプレートをポシェトから出していた。

そして、そのプレートにかかれていた言葉…それを思い出しつつ、それが一体何の意味を示していたのか思考を巡らす。

そして、そのプレートの文章に変化が起こっていることに気が付いた。

それは…、「ｔａｓｕｒａｍｕ？（タスラム？）」

プレートの文字の光をさす所にローマ字でタスラムと言う表示に変わっていた。

そして、そのタスラムとかかれていた文字がチカチカと光っているようにも見えた。

「ミツ姉～！！行くよ～！！」

「あっは～い！！それじゃいこうか！アウル」

「はい！姉さん！！」

私はそのプレートの事を一度自分中にしまう事にしてスバルとティアが呼んでいる方向に歩みをすすめた。

そして、アウルもまた、私の声にすぐに反応し荷物を持って私の後に続いた。

そして、その後、スバルとティアが選びに選んだバイキングを堪能…お腹いっぱいの中スバルとティアナはユウの運転する車で所属する部隊へと帰っていった。

それと同時に私は、タスラムとのコンタクトを取る事を決意する…。

そう…この事が彼にとっていいことなのかという事とは別に…今その事が彼に取って必要なことであるし、仮初の姉としてそのことを知る事が必要だと考えたし私自身それを知った上でそれを受け止め行動するために…

タスラムとの話をする必要があった…でも…そのことが私とアウル

の別れの始まりだとは…その時の私は知らずにいた…。

外伝　時空を超えし蒼き羽根　第４話　機動六課（後書き）

作者
「いや～これから一体どうなるんでしょう？」

ノア
「って、あんたがそんな事言ってどうすんだよ！」

作者
「ようやく、物語も第３話を終了！いよいよ物語は佳境に差し掛かってきました」

ノア
「それに例のプレートも少しづつ謎が解けてきたな？んで次回はついにあいつが登場するんだな」

作者
「満をじして登場していただきます」

ノア
「まさかミツキとの対決するなんて事ないよな？」

作者
「お互いに多少の葛藤はあるかと思います。なんせ二人ともアウルのことを考えていますから」

ノア
「それにしても…ファンクラブはつくるは、ティアナを暴走させるわ…アウルってすげぇな」

作者
「それはひとえに彼の人間性がいいからでしょう。ウチのユウではそんな事で来ませんよ」

ノア
「だな、それにＥＸＡＭ先生の方も喜んでくれてるみたいだし」

作者
「それが来た時は、本当にホッとしました。なんせ、うまく書けてなかったらどうしようかと思ってましたから」

ノア
「そして、話も予定通りに戻せた事だし。後は、エンドロールを待つだけになるのか…」

作者
「うまく持っていけるようにしますよ」

ノア
「それじゃ待ったなー」

ー次回予告ー

ユウ

「かけがえのない時間はあっという間だった」

ギンガ
「ほんの短い時間ではあったが私は、彼のことは忘れない」

ノア
「アイツの笑顔…そして、あたい達との思い出」

ミツキ
「それは…決して思い出だけじゃなく私達と彼との記憶」

ユウ
「次回…魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空（とき）を超えし蒼き羽根…最終話…」

ミツキ
「時空（とき）を超えし蒼き羽根…」

全員
「テイク・オフ…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　最終話　時空を超えし蒼き羽根（前書き）

陸士１０８部隊　技術開発室　オフィス

ミツキ視点

あれから2～3日たった。

私は、今書類整理をひと段落させた所。

アウルは、ノアと一緒に定時に上がって貰って現在このオフィスには私一人。

「ふぅ～。さてと…」

書類をデスクの引き出しにしまい制服のポケットから例の金のキーホルダーを取り出す。

そのプレート部分には、光…影…そして、闇とその下に文章が並んでいたが、今は、その光の部分がｔａｓｕｒａｍｕ（タスラムという言葉に変わってその文字が点滅していた。

それが、何を意味している物かは、わからないがアウルに取って光を示すタスラムというのが何なのか？それにこの点滅…。

これは、私の推論になってしまうのだが、タスラムという人もしくは、デバイスがこのプレートを通じて通信を送って来てるのでは？

これが、ここ数日かけての私の結論…。

そして、今日その推論を試してみようと思う。

デスクの上にプレートをおもむろにおいて点滅しているタスラムという文字に触れてみる。

すると…。

「な…！！何！！！」

文字に触れた途端、プレート自体が光を放ち通信画面が広がる。

「あ…主…聞こえますか…私です…タスラムです」

開いた通信画面から女性の声が聞こえた。

その声を聞いた私は、息を呑んでその声に答える。

「こちら…陸士１０８部隊…技術開発室　室長のミツキ・サエグサです…。聞こえますか？タスラム？」

「はい…よく聞こえます。あの…そこに主はいますか？」

私の声にタスラムが答えてくれた。

そして…、私は…

「タスラム…主ってアウル・アパレシオンのこと？」

「はい…。その通りです」

タスラムが主と呼んでいる人がアウルであることを確認し現在状況とアウルのことについてタスラムに話をした。

そして…これが私とアウルのお別れの始まりだった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空を超えし蒼き羽根…始まります…」

外伝　時空を超えし蒼き羽根　最終話　時空を超えし蒼き羽根

最終話　時空を超えし蒼き羽根

タスラム視点

私は、通信画面の向こうにいるミツキ・サエグサさんから我が主の現状について説明をうけた。

そして、主が戻るためには、後2つのキーワードが必要であることを告げられた。

「そ…そんな…すぐに戻ってこれないの？」

私とミツキさんの通信をフェイト隊長を始めとした機動六課の皆さんも聞いていてフェイト隊長が驚きの声を上げる。

（そう言う事になります…ごめんなさい…）

フェイト隊長の声を聞いたミツキさんはなんだか申し訳なさそうな声を出す。

「フェイトちゃん！そんなこといったらあかん！第一今回の件はこっちが迷惑をかけてるんや！申し訳ありません。サエグサ室長。私は、機動六課の部隊長の八神はやてです。今回のことについては、ご迷惑をおかけしてもうしわけございません」

部隊長がフェイト隊長を注意しミツキさんに迷惑をかけた旨を陳謝した。

（いえ…。そんな…頭を上げて下さい。八神部隊長。それにしても、今回、なぜアウルが私達の世界に来たのかご説明ねがいますか？）

ミツキさんは、頭を下げる部隊長に頭を上げるよう言いなぜ、今回このような事になったのか？その原因について聞いてきた。

「それは、私から説明します」

私は、ミツキさんに今回の原因について説明した。

そもそも、主がなぜミツキさんがいる世界にいってしまったかと言えば、聖王協会からロストロギアの効果についての検証依頼がきてそれを主とスバルさん…それとティアナさんが試す事となった。

そのロストロギアの名前は、「ドリームメーカー」と言い対象者の深層心理にある希望を体感できるといった物。

対象者は、ロストロギアがあるベットで眠りまるで夢を見るかのようにそれを実感するとの事。

今回は、主とスバルさん、それにティアナさんが試す事になりスバルさんとティアナさんは、１日くらいで目を覚ましたが主だけ１週間を過ぎて目覚めずにいた。

スバルさんとティアナさんの話だと、体験している際、何かの条件をロストロギアが決めそれがプレート等に文章として記載されていて、それを解いた所目がさめたとのこと。

（なるほど…アウルにかかった条件ってのがこのプレートって訳ですね）

「はい、その通りです」

私の話にミツキさんはすぐ理解しその文章の内容を私達に教えてくれた。

（T…T…そして、E?…なんじが失いし光と影そして、闇…その全てが揃いし時…その扉は開かれその中より金色の女神現れ、なんじがいるべき場所へと導かん…だがなんじ望みしものはその終わり告げるという文章でその中の光を刺すTがタスラム…あなたって訳。それで、残りは、影を刺す「T」と闇を刺す「E」なんだけど…どうもこれって私はアウルの記憶に関わることになるんだろうけど…わかる?）

「「T」と「E」?タスラム?わかる」

ミツキさんの声に部隊長が私に聞いてきた。

「はい。主のことなら…ですが…」

私は答えるのをためらった。

なぜかと言えばそれは、主に取っては、暗い過去のことになり機動六課の皆さんには、あまり知られたくないことだったからだ。

（ねぇ、タスラム。これは、私の推論だけど…この2つってアウルにとって思い出したくない物だと思うんだ。だから私もアウルに深

く聞くつもりないし、その文字さえわかればアウルは、元に戻れる方法がわかると思うんだ。だから、文字だけこっちに送ってくれない？）

「ミツキさん…あなたは、いったい…」

ミツキさんの声に私は思わず声をもらす…。

（アウルがこっちに来て…そっちの楽しい事ばかり話してくれたんだ…。でも、人生って楽しいことばかりじゃないじゃない。だから、一時的にでも忘れたかったんじゃないかな…？それがロストロギアに伝わってって、ごめんなさい。偉そうな事言っちゃって）

「いえ、そんな事は…わかりました。では、その文字だけ送ります。よろしいですか？」

ミツキさんの言葉に私は、キーワードの文字だけを送ることを決意。

（いいわよ）

ミツキさんに同意を取ってその文字を送信した。

ミツキさんは、その文字をプレートに入力した。

ピカーーーーーーーー！！

通信画面が光にあふれる。そして…。

（タスラム…ありがとう。これでアウルをそっちに帰せるよ。時間にして約７２時間後に表示されてる座標にアウルを連れて行けばそ

っちにもどれるから…）

ミツキさんは、その座標を示してくれた。

「この座標…機動六課の隊舎…」

フェイト隊長はその座標を見ながらその位置を答える。

（こっちの機動六課は、まだ建物の建設途中だから…もう少し待っててね。必ずアウルはそっちに帰すから）

「わかりました。お願いしますミツキさん…」

私は、その言葉ミツキさんに送り通信を終了した。

ミツキ視点

通信を終えた私は、こっちのはやてに連絡。

建設途中の六課隊舎に入れるよう許可をもらった。

でも…私達とアウルとの時間は後、７２時間…。

私は、そんな思いを振り切るかの用にその時間を過ごす事にした。

そして…。

７０時間後…。

アウル視点

「姉さん。一体どこにいくのですか？」

業務終了後、私は、姉さんの車でとある場所に向かっていた。

その場所については、姉さんは教えてはくれなった。

そして、

「ついたわよ。ついてきてアウル」

姉さんの声に私は、車を降りて後を追う。

でも…ここは…。

中に入った姉さんは、建設途中の建物の中を進みある場所でとまった。

「姉さん…ここは？」

「ここは…あなたの肉体が眠っていると同じ場所…。あなたは、ロストロギアの検証中に魂だけ、こっちにきたの…でも、そのままじゃあなたが消えちゃうかも知れないからこれから…元いた世界に戻って貰う…」

私の前に立つ姉さんは私のほうをみず俯いたまま私に説明してくれた。

「帰るって…いったいどうやって…」

私は、姉さんの背中を見ながら疑問をぶつける。

「TASURAMU(タスラム)…T－MATRIX…そして、ENFORCER(エンフォーサ)これが、あなたが持っていたプレートに入るキーワード。これはね、あなたがいた世界にいるあなたの専用デバイスのタムラスがこっちに通信くれて私に教えてくれたの。そして、このプレートをこの壁のくぼみにハメる…そうすると」

ビカーーーーーーーーー!!

姉さんが私の疑問を聞き戻る方法について説明を始め手に持っていたプレートを壁にあったくぼみにハメた。

するとその周りが光り、姉さんの周りに光扉が出来上がった。

「あ…ああっ…」

私はその扉を見声を上げる。そして、抜け落ちてた記憶が戻ってきた。

「アウル…これでお別れ…さっ…行きなさい」

姉さんは、こちらを向き私をその扉に行くよう促す。

「待って下さい！これじゃ…姉さんは私が作った夢の中の人って事ですか？」

私は、姉さんを見ながらロストロギアの効果について思い出し私自身の真相心理が姉さんを作ったのでは？という疑問を抱きそれを姉

さんに告げる。

「そんなのわからないわよ…だから…これで確認してほしいの」

姉さんは私の問いに俯きながらわからないと答えそれを私に確認してきてほしいことを告げる。

「姉さん…これは…」

姉さんは懐からネックレスを取り出し私の首に蒼い羽根がついたネックレスをかけてくれた。

「これね。アウルに似合うかな?って思って作った物なの?それで、もし、アウルが向こうに帰った時このネックレスがあったなら、私はアウルの夢の中の人じゃないって確認できると思うの…だから…持っててって」

姉さんは、私にネックレスをかけて笑顔で話をしてくれた。

私はなんてバカなんだ…。

もし、姉さんが私が作った夢の人物ならそう言われて傷つくなは他ならぬ姉さんのはずなのに…。

「姉さん…すいません」

私は、笑顔の姉さんに抱きつき耳元で謝る。

「ちょ…ちょ…アウル…。まったく…向こうでも元気でね…。それとタスラムによろしくってね」

私に抱きつかれた姉さんは最初は戸惑っていたが、少ししたところで私の腰に上を回し別れの言葉とタスラムによろしく伝えるよう私と同じよう耳元で囁いてくれた。

「それじゃ…」

私は、姉さんから離れ光扉の中に入っていった…。

すると…。

「ふぇ…フェイト…」

扉の中に入った私は、金色のフェイト似の影に包まれその場から意識を手放した。

時間は元に戻り…。機動六課隊舎内　男性宿舎

ユウ視点

「ユウさん…その後どうなったんですか?」

俺がアウルさんとの話しを終えた所でキャロが質問してきた。

「さぁな?」

「さぁな?って、何よ!その態度は!」

キャロに対し俺は、両手を上げわからないポーズを取る。

その態度にティアナが激怒する。

「しかたねぇだろ！アウルさんを見送ったのって姉貴だけ出し、連絡を取るにも例プレートってのもアウルさんが帰るのに使ったから連絡がつかねぇんだよ」

ティアナの声に俺は、その時の状況を説明し結果がどうなったのかは通信が出来ないためわからない旨を伝える。

「で…でも！！無事戻れたらいいよね！アウルさん」

「そうですね。僕も一度お会いしたかったです」

俺の説明の後、スバルが無事に帰ってほしいと願望を話しだし、エリオがアウルさんに会いたいと言って来た。

「そうだな…俺も兄貴みたいに思えたからな。アウルさんは…。もう一度会いたいしその気持ちはギンガも姉貴も同じだろうよ」

二人の話を聞いた俺は、あの時のこと思い出しながらもう一度会いたい旨をもらした。

「あーーーーーー！！ティア！！時間時間！！」

そんな光景をブチ壊すかのように時計をみたスバルがティアナに声を上げる。

「もうこんな時間！！ユウ！！明日こそ付き合ってもらうからね！！」

「それじゃ！！朝連いってきます！！」

時間を確認したティアナが朝連の時間が迫っている事を確認し俺との訓練を明日に延ばす事を告げエリオが俺に朝連に行く旨を告げ外へと出て行った。

「さぁて…これで静かになったな…それじゃ…もう一眠り…」

おれは、スバル達がでていったドアを閉めてもう一眠りしようとした。

だが…アウルさんと映っている写真を見…。

「また…会おうな…アウルさん…」

そう呟き…写真立てを元の位置へと戻し、部屋の窓を開けた。

…ｆｉｎ。

外伝　時空を超えし蒼き羽根　最終話　時空を超えし蒼き羽根（後書き）

アウル視点

姉さんと別れ光る扉の中に入った私は…

「う…う～ん…」

「アウル！！」

「フェイトさん…」

目を覚ました私は、ベットに寝ていたようで目を覚ました所フェイト隊長に抱きつかれた。

「主お帰りなさい…」

私がいるベットの横から懐かしき声が聞こえた。

「ただいま、タスラム」

フェイト隊長に抱きつかれた状態でタムラムに話をする。

その後、泣きつきフェイト隊長を落ち着かせ、シャマル先生の診断を受け問題ないことを確認してもらい医務室を後にした。

私の周りには、スバル達ＦＷ達やフェイト隊長を始めとした隊長陣

…そして、八神部隊長がそれぞれに私に声をかけたり泣きついてたりしていた。

そのみんなの顔を見ながら私は、改めて機動六課が私に取って大切な場所になっていたことを再確認する事ができた。

そんな中…。

「主…その首にあるネックレスは一体…」

廊下歩いていた私にタスラムが私がネックレスをつけていたことを確認しそれが何か聞いて来た。

「ネックレス…こ…これは…」

タスラムの声に私は胸元にあったネックレスを確認した。それは、小さな蒼色の羽根がついた…ネックレスだった。

そう…姉さんが帰る間際にくれた…。

「どうかされましたか？主？」

私が同様してるのに気づいたタスラムは私に声をかける。

「いや…このネックレスは…私が唯一姉と呼べる人から持った物だ」

タスラムの声に私は、ネックレスの羽根を見ながらタスラムに答えた。

「それは…ミツキさんのことですね…私も少しお話をしましたが…

常に主のことを考えてくれた言い方でした…」

タスラムは姉さんと通信した時のことを思い出しながら私に話ししてくれた。

「そうか…。そういえば姉さんがお前によろしく伝えてくれとっていたぞ」

「そうですか…主…今度会う時は私も連れて行ってくださいね」

私は、姉さんがタスラムに伝えるよう頼まれた伝言を伝え次に姉さんに会う時には自分も連れてくよう告げてきた。

「ああ、今度姉さんと会う時はお前一緒だ。タスラム」

そう、タスラムに告げ私は、姉さんとの事を心の中にしまいいつの日かまた会える事を願った。

～時空を超えし蒼き羽根　ｆｉｎ。

祝！！２０万ＨＩＴ突破記念　外伝裏話（前書き）

皆様のおかげをもちまして２０万ＨＩＴを突破することができました。

ありがとうございます。

今回は、それを記念して外伝に登場したキャラ達と簡単ですが座談会を開催してみました。

お楽しみにください

祝！！２０万ＨＩＴ突破記念　外伝裏話

ミツキ
「外伝裏話！！」

作者
「皆様、いかがでしたでしょうか？初のコラボ作品魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～外伝…時空を超えし蒼き羽根！！」

ミツキ
「前回の第４話を持ちまして、２０万ＨＩＴを超えましてそれを記念して今回この外伝の裏話をしたいと思います」

ユウ
「それにしてもまさかいきなり外伝とはな」

ノア
「あたいもびっくりしたよ」

作者
「いや～ちょうど本編のネタ切れだっんたんで次どうしようかなって思っていたところにＥＸＡＭ先生の企画が上がってそれをみた途端にこの外伝を思いつきまして」

ギンガ
「でも、物語の舞台が六課じゃなくて１０８だったから私も出番がもらえたってことでしょ」

ミツキ
「なんせ、六課だとユウ達との話で終わっちゃうしね」

作者
「ええ、今回は、元々ミツキとアウルさんとの関係をかきたかったんで、どうしても１０８じゃないと駄目だったんですよね」

ユウ
「まっ、序盤は六課からスタートしそして、１０８へと話を移していったって訳だ」

作者
「なんせ、ユウは主人公ですからね、多少出番は挙げないと…」

ノア
「でもよ、１０８でもユウを出したいからこっちは、六課が始る半年前って事にしたんだろ？」

作者
「ええ、その方がはやて達やスバルやティアナもだせましたし、同じ六課だと話がややこやしくなりそうでしたし」

ミツキ
「ちなみに、３つのキーワードってどっからもってきたの？」

作者
「それは、ＥＸＡＭ先生の亡霊の弾丸にでていた物をこっちでキーワードって事にさせていただきました」

ユウ
「でもよ、なんでタムラスまでキーワードだったんだ？」

作者
「最初の内出張権は、アウルさんだけと考えていたんでＥＸＡＭ先生からの感想でタムラスもだせる事がわかったんで最終話に登場してもらいましたし、エンフォーサーの設定までこっちに持ってきちゃいますと偉い長くなりそうだったんでこうしました」

ギンガ
「へぇ～。でも、アウルさんってかっこよかったよね」

ノア
「ああ、ギンガもティアナもメロメロだったしな」

ゲンヤ
「何～！！おいギンガ！まさかお前～アイツの事～！！」

ギンガ
「と…父さん…普通にかっこいいって思っただけだからー！！」

ミツキ
「あ～あ、本当、ゲンヤさんって自分の娘のこととなるとこうなるんだから…」

ユウ
「二人が結婚したらいったいどうなるんだ？」

ノア
「二人が男を連れてきた時点で大変な事になりそうだな」

ゲンヤ
「んなのあたり前だ!!それは、ユウ!!お前も一緒だからな!!」

ミツキ
「そういえば、昔スバルが冗談でユウのお嫁さんになるって言ったらゲンヤさん…ユウに怒ってたしね」

ユウ
「ギンガでも同じだからな。海鳴でなのは隊長の親を見たときにデジャブウかと思ったよ」

ノア
「でも、ミツキの時には、ああはならないんだよな」

ミツキ
「まぁね。アウルが私の事を姉さんって言い出した時には、相当がっかりしてたみたいだし」

ギンガ
「ミツキさん…よく見てましたね…」

作者
「まぁ、この結果はタムラスもがっかりしてるようでしたし」

ユウ
「そういや感想でアウルさんにいつ春が来るのかってぼやいていたな」

ノア

「そういや今回だけなのか？こういう外伝って」

作者
「色々とやってみたいですね。とは言えやるとしたら本編よりも過去の話にゲストとして参加して頂くことになりますが」

ミツキ
「となると私がメイン？」

作者
「基本的には、ですが訓練校の時の話や内戦地域の話といった具合にユウがメインの時もあります」

ユウ
「訓練校時代？となればアルトもでてくんのか？」

作者
「その頃の話となればアルトにヴァイスも登場してもらいますね」

ミツキ
「まっ、それをやるかどうかはまだ決まってない訳だしとりあえず次回から本編に戻るんだよね」

作者
「そうなりますね。まずは、本編を先に勧めてその間にまたそういう話があれば外伝をつくりたいなと思っています」

ミツキ
「今回のをみて参加させたいって思ったらどうしたらいいの？」

作者
「とりあえず、こちらにメッセージをくれたら検討させてもらってやるって事でしょうか？」

ノア
「検討って？」

作者
「相手の作品がどんな時系列なのかとかこっちの時系列と合わせられるかどうかって所ですかね」

ミツキ
「要するに本編はストライカーズをやってる訳だからそれより前のA'sとか無印だと合わせられない可能性があるって事」

作者
「そうですね。今のところ本編で公開しているのがA'Sが終わった後からはできるようになってますが、無印となるとちょっと考えなければなりませんから」

ユウ
「あまり昔だと、姉貴しか出られねぇしな。その辺は考えないと…」

作者
「それに相手の未来の事とかもこっちでは、書けませんしね」

ギンガ
「なるほどね。海鳴だと大変だから出来ればA'S以降って訳ね」

作者

「無印でもいいんですけど、場所は海鳴ではなくミッドになりますね」

ギンガ
「そうなると私やスバル、ユウの小さい頃って事になるの！！」

作者
「そうなりますし、やってみたいんですよ」

ゲンヤ
「そんな事させるかぁ！！！って、あああーーー！！」

ギンガ
「父さん！！」

ミツキ
「また用意してたんだ。落とし穴」

ユウ
「こういうところは抜け目がないな」

ノア
「あたいは、クイントさんに会いたいな」

ミツキ
「だね。もう一度私も会いたい」

作者
「いずれ会わせられればいいですね」

ユウ
「それもこれもこれからどうなるかってことだな」

ノア
「そうだな。まずは本編だ」

作者
「はい。それでは、今回はここまで！！次回本編でお会いしましょう」

ミツキ＆ユウ＆ノア＆ギンガ
「「「「まったね～（なー）」」」」

祝！！２０万ＨＩＴ突破記念　外伝裏話（後書き）

感想をお待ちしております

その３９（前書き）

六課隊舎内　男性宿舎廊下

ティアナ視点

＜いい！スバル！！キャロ！！＞

＜おっけー！！だよティア！！＞

＜こっちも大丈夫です！！ティアナさん！！＞

私達は今ユウとエリオの部屋の前でとある作戦と開始しようとしていた。

私は、横にいるスバルとキャロに念話いつでもいけるか確認する。

私の声に問題ない事を告げる２人。

…そして、部屋のドアの前で中の様子を伺いつつ静かに作戦開始の合図を待つ…。

ってぇ！べ…別にユウとエリオの寝込みを襲おうって訳じゃないからね！！

（ユウさ～ん！！時間ですよ～！！早くしないとティアナさん達…

また来ますよ）

（う～ん…いくらなんでも人の寝込みまで襲ってこないだろ…部隊長と違って…あれでも一応女だからな…という訳でお休み…ｚｚｚｚｚ）

（ユウさん！！変な事言いながら寝ないで下さい！！）

部屋の中からエリオがユウを起こす声が聞こえた。

よし！！今だ！！

ガチャ！！

「ユウ！！今日と言う今日はちゃんと起きて貰うわよ！」

私は、部屋のドアを勢いよくあけ布団なかに包まっているユウに向かい声を上げる。

「てぃ…ティアナさん！！それにスバルさんにきゃ…キャロ！！」

エリオは、私達のいきなりの乱入に驚きの声を上げる。

そんなエリオは、無視して、スバルは、ユウが寝ているベットの布団を引っぺがしキャロが持つ拡声器を手に持ちユウに向かって大音量でユウの耳元で話しだす。

「ユウ兄！！なのは隊長も来てほしいっていってるんだから！！今日は付き合ってもらうよ！！」

す…スバル…いくらなんでもそれってやり過ぎ…。

キーーーーーーーーーーーーーン。

スバルが持つ拡声器がハウリングの音を上げる中、私達は、耳を抑えながらユウの反応を待つ…。

だが…反応がない…。

ただの屍のようだ…って！そんな事ありえないでしょ！！

反応がないことに気が付いた私は、ベットの前で拡声器を持ちながら「あれっ？」という表情のスバルを尻目にベットの布団をもう一枚剥ぎ取った。

いや～ん…。

「やられた！！」

布団を剥がしたそこには、骸骨のレプリカが恥ずかしそうな格好をさせられて横においてあった…。

「エリオ！！昨日ちゃんとユウ兄の事見張ってたよね？」

骸骨を見たスバルがエリオに向かい確認をとる。

「はい。昨日一緒にいましたから…それにさっきだってちゃんと話してましたし…」

スバルの話にエリオは、真顔で答えていた。

「どうやら…さっき会話って、これでしてたんじゃ…」

スバルとエリオの会話を聞いてたキャロが屍の横にあった通信機を取ってその会話に参加してきた。

そして…そこから…。

「あばよ～とっつぁ～ん♪」

「だれかとっつあんよ！！だれが！！」

どこかの大泥棒のセリフをマルパクリのユウの声が聞こえてきた。

「やられた…」

「いつの間に入れ替わったんでしょう…」

その声に唖然としながら声を上げるスバル。そして、何時の間にか入れかかっていたことに疑問の声を上げるエリオ。

そして私は、その通信機から聞こえるユウの声に突っ込みを入れつつこれから怒るであろうヴィータ副隊長となのは隊長のお説教に頭を抱えていた。

ったく…あいつは～！！（怒）

「とまぁ、ティアさん達は怒っていますがどうしてこうなったかについては、本編をご覧下さい、ね！フリード！」

「クキュー！！」

それでは、今回はキャロ・ル・シエとフリードがタイトルコールを…っと…。

「コホン。魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その３９…始まります…」

「クキュゥーーー！！」

その39

その３９

六課訓練施設

スバル視点

「なに～！！！また逃げられた！！だとぉ～！！」

「「「「すいませ～ん」」」」

整列した私達の前に立つにヴィータ副隊長の怒号が響く。

「にゃはははは…ヴィータ副隊長…それくらいにしておいて…」

「おめえは甘いんだよ！！なのは！！こうなったら私とシグナムの二人で…」

「その２人だと…隊舎がなくなちゃうんじゃ…」

「あんだとーーー！！」

「す…すいません！！」

怒るヴィータ副隊長に抑えるよう促すなのは隊長。

その声にヴィータ副隊長は、納得してない様子でなのは隊長につめよりシグナム副隊長と2人で今度は、やると言い出した。

それを聞いた私は、それだと隊舎がなくなるのでは?と持った事がどうやら声に出たらしくヴィータ副隊長の怒り矛先がなのは隊長から私に変わって来たのですぐに謝った。

んで、なんでこうなったかと言えば、前にユウ兄が戦った映像を見たなのは隊長達がユウ兄の戦闘スキルにめをつけたらしく、考え方はともかくとして、その技術を教導に活かしたいから手伝ってほしいってユウ兄に頼んだんだって。

でも、それを聞いたユウ兄と言えば…。

「勘弁して下さいよ。唯でさえ整備部で時間が不規則なのにそれに訓練にも付き合えって…そもそも俺の戦い方ってなのは隊長達とは間逆の考え方ですよ…。それにどうも教導隊のやり方ってのは俺には生にあわないんで…あっ…後、姉貴の遺言で…あんまりこういうのに関わるなっていわれてまして…それじゃ…」

それを聞いた私は、「ユウ兄…ミツ姉を勝手に殺さないで!!」って思いつつ手を振りながらその場を去るユウ兄のその背中を見つめていた。

「それにしても…昔あいつ…どうやって起きてたのよ?」

ティアはヴィータ隊長のやり取りを見ながらユウ兄がどうやって起きていたのか疑問に思っていた。

「確かに…。朝は弱いって言ってましたし…」

ティアの疑問にキャロも不思議そうな顔をしながら答えてた。

「スバル…。あんた昔どうやって起きてたか知ってる？」

その疑問をティアが私にしてきた。

「う～ん…確か…いっつもミツ姉に言われて私とギン姉が起こしにいっててぇ～、いくら声かけても起きないからってギン姉が最後の手段だって、ユウ兄の耳元で何かいってたような…」

「それだぁーーーーーーー！！」

私が顎に指を当てながらティア達の質問に答えてたら、ヴィータ副隊長が私を指差ししながら大声をあげた。

「ど…どうしたんですか？ヴィータ副隊長？」

「スバル！！お前は明日までにギンガに連絡をとってその方法を聞いて来い！！よ～し…これで明日こそ…シグナムよりも先に私が…クックックッ…明日こそ！アイツの仏頂面を拝めそうだ…ウッヒヒヒッヒ」

ヴィータ副隊長はそういいながらなんだか変な声を上げてた…。

そのヴィータ副隊長の姿をみた私達は呆れつつも明日も早起きだ…と心の中でため息をしていた。

陸士１０８部隊　技術開発室　オフィス

ミツキ視点

「えっ？昔ユウをどう起こしてたかって？」

（うん。ヴィータ副隊長がシグナム副隊長よりも先にユウ兄と戦いたいみたいで…私達にユウ兄を起こせって言われてて…。それで起こそうとしてるんだけどいっつも逃げられてるからギン姉にどう起こしたか聞こうとおもったんだけど…ギン姉いないからミツ姉にって…）

私は、自分の護身用のガンデバイスの整備している時にスバルがそんな連絡をいれてきた。

「逃げられてるって…どんな風に逃げられてるの？」

私は、作業の手を休めてユウがどうスバル達から逃げてるのかスバルから確認した。

スバルは、「え～と」と今朝方の事を思い出しながら私にベットにいた骸骨のことを含め教えてくれた。

「それって、恐らくベットのしたに人が一人入れるスペースをあらかじめ作っておいてその上から板かなんかをしいた上にガイコツ

君を置いてカモフラージュしてたんでしょうね」

（ガイコツ君？）

私の話にスバルは疑問顔の様子。

「ガイコツ君ってのは、骸骨の格好をさせたマネキンよ。元々お化け屋敷なんかにあった物なんでけどそこがつぶれちゃって倉庫の中で埃を被ってたのを私が見つけてね。ドッキリ用にユウがほしいって言ってたんであいつにあげたのよ。まさか、こんな風に使ってたなんておもわなかったけど」

私の説明に「なるほど」と言う表情のスバル。

（それで、どうやってユウ兄を起こしてたの？）

スバルはまるで思い出したかの様子で私に再度質問をしてくる。

「それをあんたが聞く？…まっくたく…」

スバルの質問に私はあきれた様子でスバルに聞き返す。

（え？それってどういう事？）

私の態度にスバルは、驚いた様子。

「ギンガが言ってたのって、「早く起きないと一緒にいるスバルが泣き出すわよ」って…あんた朝いっつもギンガの後ろについていっては、ユウが起きないと大声でないてたでしょ。「ユウ兄が一緒じゃないと嫌だー！！」って、ギンガはそれを利用してユウを起こし

てたって訳。もし、ユウを起こしたいならもう一度泣いてみたら？大声で？「ユウ兄が一緒じゃないと嫌だー！！」ってね。そしたらあいつ飛び起きるわよ」

私の説明にスバルは、顔を真っ赤にし「ううん。辞めとく…」といいどうやら別な方法を取る事にしたらしい。

まっ…懸命な判断ね。

小さい頃のスバルなら二つ返事で行動を開始したけど、今のスバルなら行動する前に羞恥心が先にでるみたいだからこうなるだろうとは思ってはいたんだけど。

それにしても本当、昔の事とはいえ、よく生きてたと自画自賛してあげたいわね。

なんせ、スバルが泣き出したら本当止まらないしおまけに衝撃波までてるんだから…あれって俗にいう怪音波よ…あれは…。

私は、部屋の窓の外を見ながらよくあの怪音波で窓が割れなかったなぁ～と思いつつお茶をすする。

スバルは、わたしの話を聞いた後、仕事があると言い通信を終了してた。

再びスバル視点

い…言えない…。

私がおお泣きするって言ってユウ兄を起こしてたなんて…

ミツ姉との通信を終えた私は、どうしようと頭を抱えてた。

確かに、ユウ兄を起こす時っていっつも私が、ユウ兄が寝ているベットの上にマウントポジションで座ってユウ兄の体を揺らしてたんだけど、それでも駄目な場合、ギン姉がユウ兄の耳元でなんか囁いて…それでもだめだったら…「いい！私が部屋を出たら思いっきり泣いていいからね！それまで我慢できる？」ってギン姉がそう聞いて来て…私がそれに頷いて…ギン姉が部屋の外に出た所で「いいわよ！」ギン姉が言うのを合図に私が…、

「ユウ兄が一緒じゃないと嫌だーーー！！うえぇ～ん！」

…と思い出した瞬間…私は、顔から火が出るような気分だった。

だってぇ…ユウ兄って男の子だし…その男の子の部屋に乱入して…わがまま発動って…た…確かにあの頃ってユウ兄とギン姉と一緒にラジオ体操行くのに早起きしてて私が一人で行くのが怖いし危ないからユウ兄達について行って、ミツ姉から言われてはいたんだけど…。

私は当時の事をモジモジしながら思い出す。

い…言えない…ティア達にこんな事…。

私の頭の中では、それをネタにしようと企んでいる八神家一同と唖然とするティア達の顔を映る…。

それもこれも…ユウ兄が起きてくれないからだ！！となんだか訳のわからない言い訳をしながら頭を抱える日々は続いていた。

ユウ視点。

ふぅ…。よくもまぁ毎朝毎朝…ご苦労なこった。

俺は、ベットに仕組んだガイコツ君2号をしまいながら大あくびをしていた。

さて、俺がどうやってスバル達から逃れていたのかと言えば、姉貴がさっき説明していた通り、俺は、ベットの中心に一人くらいが入れる穴をあけそこに俺が入りガイコツ君を板の上に寝かせたのを上から蓋をする形で置いた上に布団をかけたって訳。

つまり、スバル達は、布団を被ったガイコツ君に大声を上げていたって訳。

ちなみにベットしたにいた俺は耳栓をし声を出さないようにしながら隠れてたって事だな。

おかげで、せまい所でのんびりとしていたって事であちこち痛ぇがな。

とは言え、ベットをこんなにしちまったのを戻すのが大変だな。

俺は自分で起こした自体とは言え、どう元に戻そうか頭を抱えながら食堂に朝食を取りに行った。

そこには、俺同様頭を抱えるスバル達と眠そうな顔をしたアルトが並んでいた。

「あっ…ユウ！おはよう！！」

「おうって、相変わらず眠そうな顔してんなぁ～お前は」

俺は、アルトの後ろに並び眠そうな顔をし大あくびをし目をこするアルトに声をかける。

その声を聞いたスバル達ＦＷ一同の冷たい目線はとりあえず無視する方向で…っと。

俺はトレイをとり食堂のおばちゃんに定食を注文。

そんなやり取りを見ていたジト目のキャロがフリードに攻撃指令をだそうとしていたが…。

「クキュー？」

フリードはと言えばそんなキャロを見つつどうやら目の前の餌方に意識は向かっていくのであった。

「よくあんなにうるさくしてたのに寝ていられたわね」

ティアナが俺を見つけた途端呆れた表情で聞いてきた。

「あっ…あれは、耳栓してたからな。あれのおかげで心地よく眠れたよ」

「あっ…そ…。お陰様でこっちは寝不足なんだから…」

「さいですか～。まったくごくろうな事で…（ガン！）」

「痛っ～つぅ～！！」

ティアナの愚痴を聞かされた挙句、その愚痴を投げやりな態度で答えたらあの野郎…いきなり鉄拳かよ…。

俺は、頭の上に鎮座したタンコブを撫でつつ涙目でその痛みをこらえるのであった。

やれやれ…。いったいいつまで続くんだ？このネタ…。

「あっ…オバちゃん俺が頼んだ定食まだぁ？」

おばちゃんに定食を催促しつつのどかな日常を満喫しようとするのであった。

その３９（後書き）

とまぁ、リハビリの意味で書いてみましたがいかがでしたでしょうか？

今回は六課の朝の光景をご案内しましたが、こっから六課の休日に行きたいとおもっています。

ですが、休暇をえられるのはスバル達だけで整備部のユウはいろんな意味で忙しくしていきますのでお暇であれば、感想などいただければ幸いです。

以上、左近でした。

その４０（前書き）

やれやれ…どうやらここでなら調べられそうだな。

俺はとある違法施設に侵入しデータを調べている所。

そのデータというのがこの施設にある人造魔導士に関するのデータだ。

とりあえず、俺は、中のデータにここの施設の端末をつないでその中に人造魔導士に関してのデータを集める。

誰かベースとなっているのかがこのデータを集めることによってそのだれがその素体になったのかとかどういった理由で利用されているのかがここのデータでわかるっつう寸法だ。

ここのデータならだれが素体になってその行動理由や構成人数や規模なんてところも調べがつくって事だ。

とりあえずここの施設には、管理局の局員が魔導士は改造されいないようだが…。

端末から送られてくるデータを元に誰が人造魔導士なっているかを調べているが、今のところ該当者はいない。

人造魔導士の適応者がいることはわかっているがそれがどれくらいの人数で何人なのかってところまではわかちゃいるが…。

俺は、中のデータを確認しつつだれが人造魔導士なのか…それより

もここの研究員…一体何人の魔導士を素体にしてやがるんだ。

適応した人間ならいくらでもいるだろうになぜこいつ等はこんなに多くの魔導士を素体に適応してるなんて調べることができたんだ。

俺は、ここにあるデータが全て管理局の魔導士の者であったしここに来るまでの間にそういった連中を何人も見た。

そして、その人造魔導士されたやつ等が何人もいたって事は、ホストになったヤツは一体どこのどいつだ。

どうもここにいる連中ってのは、管理局の人間を容易く調べることが出来たらしいがそれを調べる似ても詳細なデータが必要だし適応するにしても遺伝子レベルのデータ必要だ。

だが、ここにあるデータはそこまで詳しい物はなくあるのは個人情報くらいだ。

俺は、ここに侵入してからというものある違和感を感じずにはいられなかった。

なぜ、こんなことろにクイントさんやゼスト隊のデータがるんだ？

俺はその個人データ何の意味を成しているかそれを調べずにはいられなかった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４０

…始まります…

その４０

その４０

ゼスト視点

どうやらここに例のデータがあるみたいだな。

俺は、とある違法施設へと侵入した。

ここで俺が生まれた事は間違いない。

だが、なぜ俺はここにいるのか？それを確認するためだ。

俺は、あの日…なぜここに連れてこられたたのか？それをしるために…。

人造魔導士として生み出されてルーテシアを共に旅をしながら自分が何者なのかそれを探していた。

ここには、俺が探していた私が存在したという理由がある。

それにルーテシアと共に探してる物の在りかもここにあるはずだ。

レリックの１１番。俺の部下であった彼女の部下メガーヌ・アルピーノを助けるためのものであり俺とルーテシアが探している物がそ

れだからだ。

アギトは俺やルーテシアのことを面倒をよく見てくれる。あいつを助けたのもそんな理由だっただろうか？

セットアップした俺は同胞である人造魔導士を次々と撃破していった。

そして、目の前には、ここの施設データ探していたのであろう男が立っていた。

「やれやれ…あんたここに何か用があってきたんだろうがここのデータは回収させてもらったぜ」

男は、端末にデータ移した様子でこちらを見る。

侵入した形跡は残しておらずその男は、こちらを見ながら臨戦体制をとっていた。

なぜ…こいつがここにいるんだ。

俺は、そんな事を考えつつもデバイスを使って攻撃態勢をとる。

だが…こんな事をするやヤツと言えば思いつく人物は一人…俺の元部下で…無茶ばかりして俺やレジアス…そして、クイントとその夫とティーダ・ランスターを心配させ続けたアイツしか…

ユウ視点

なんでここにあの人がいるんだ?

俺は、臨戦体制をとりつつ目の前の男の様子を見ていた。

ゼスト・グランツ…。

なぜあの人がここに…。もしかしてここのデータっていうのは…。

「あんた…ここのデータがなんなのかわかっているのか?」

「ああ、ここに俺と言う存在があるからな?」

「だろうな。だが、ここにはあんたの個人情報しかないぜ。人造魔導士…なんでこんなもんがあんたがいう存在を示していたのか?やれやれ…メガーヌさんもこんな事なら自分の体を提供しなかっただろうに…」

俺の言葉にゼスト隊長は眉をひそめた。

そして、ここにゼスト隊長が現れた理由を考えた。

ここには、違法施設のデータが満載だったし人造魔導士何て者つくるのに遺伝子データが必要だしな。恐らくここにそのデータあるってことだな。

それをここにいた研究員が調べて適応している人間の遺伝子を集めたんだろうな。

恐らくメガーヌさんの娘のルーテシアのデータもここにあってゼストさんのデータもってか。

似た連中もわんさかいたしそいつらをゼストさんがつぶしてここまで来たってことなら話が早い。

俺は端末のデータを回収しゼスト隊長がここに来た理由を考察した。

恐らくここで彼は生まれてその意味をしるためにここに来たんだろうがそいつは恐らく間違いだろう。

ここにあるといったらレリックの情報だけだし、その情報は既にノアに渡してあるからレリックを使って何か使用てことだろう。

「なんであんたがここにいるんだ?」

臨戦体制をとりつつ、ゼスト隊長に質問する。そして、その時間を利用しレリックの情報を検索する。

あった!!11番のレリック…。

これを使えば誰かを生き返らせる事ができるとは言われているいるがそれ自体眉唾者の話だ。

レリックを使って人造魔導士を作るって話はあるがそれには一人に対し一つのレリックが必要…そして、レリックそれぞれに適応する番号がありメガーヌさんはそれが11番ってことか…。

おっ!!今どこにいるのかその位置情報まで載ってやがる!よし!これをノアに送信っと!

するとノアからすぐにそこに向かうとの返信がきた。

ノアにはレリックの情報とメガーヌさんがどこにいるのかのその情報を確認し送信した。そして、メガーヌさんの肉体をノアが回収しに向かうって事は…。

「お前がここに来たのはミツキに頼まれたのか？」

目の前のゼスト隊長は戦闘態勢をとりつつ問い掛けてくる。その表情は真剣そのもの…これは答えねぇとな。

「ああ。違法施設の情報はあいつ等の方が持ってるからな。メガーヌさんもこれでレリックの必要がなくなるって訳だ」

「なるほどな。なぜおまえがメガーヌの事を知っているのかはわからないがお前はレリックを何のために使う」

「そうだな。とりあえず封印して本局に回収して貰うさ」

「そうか…なら、ルーテシアをお前達に任せてもいいな」

俺が姉貴の名前を出したと途端、ゼスト隊長は何か納得した様子でルーテシアを俺たち…というより姉貴に預けたいと言ってきた。

「そうかい。それなら彼女を預かってもいいのかい」

俺は、自分で理解した内容が間違いないか確認した。

「ああ。恐らくアギトをついてくるだろうが体調の管理などはあいつに任せてもいいだろう」

「なら、あんたにもついてきてほしいんだが…」

「私は、生きている意味を探している。ここなら私が生きている意味が探せるだろうからな。それに部下がなぜこのような目に会ったのかも確認できるからな」

「なるほどな…ならウチの姉貴があんたのことを探していたぜ。あんたがどう生きているのかその意味を探していたぜ」

「俺の事は、ほっといてもらおう。ミツキが生きている内にアイツがなぜ生きようとしているのか…この体になってその意味がなぜなのか知りたいだけだからな」

「ウチの姉貴は、あんたみたいに難しく考えてねぇぜ。それにあんたの事を今だに忘れちゃいねぇ。あんたがやっていた部隊…姉貴が今引き継いでる。生きてる意味って言えば、スバル達の夢ってヤツの結果を見てみたいんだってさ。それにあんなことをしていたが、現場にでるより書類整理してた方が生にあってるらしいしな。あんたを尊敬してるのは変わらないみたいだし、あんたの背中を追っかけていればあえるんじゃないかって。姉貴は…あんた達がそうなった理由を追ってる…例の違法施設の検挙だってあんたが調べていたのを元にしたらしいぜ。それと少将になった今でもあんたが作ってくれた情報網を大切につかっているぜ」

「そうか…あれは、ミツキが作ったような物だからな。あいつならあの情報網をうまく使うだろうな。それと主侍医の言う事は聞いているのか?」

「さぁな。姉貴は医者が嫌いだからな」

「その辺はノアがうるさいだろうからな。ここの情報もあれがあったからこそ探す事ができたか」

「ああ、ここの情報は元々姉貴からだし、データをチラッと見てみたらゼスト隊のみんなも遺伝子データあったからな」

「そうか…なら、私が生まれた理由もここにあるのか」

「そうらしいな…。そいつについては、ここのだがデータを姉貴が調べるのを待ってくれないか？」

「わかった。従おう」

ゼスト隊長に姉貴のことを伝えそしてここにあるデータがゼスト隊長が知りたがっている事があること。そして、そのデータの結果については、姉貴の解析を待つよう伝え隊長は俺の提案を同意してくれた。

「ちなみにこれから俺は、ギンガの手伝いをしなきゃならないからデータについては、少しまってほしい」

「わかった。データの解析がすんだらアギトから俺に伝えるようにしてくれ。それとルーテシアの方はお前達にまかせてもいいか？」

「ああそっちについては、俺と姉貴を任せてほしい。それとメガーヌさんについては、ノアがうまくやってるらしいからノアに任せてほしい」

「わかった。メガーヌの本体もうまくごまかすつもりなんだろうな」

「ああ、生体ポッドごとこっちに運び出してるらしい」

「なるほど…うまく隠していることを願うだけか」

「まぁな。アイツの幻術は見事だから問題はないだろう」

俺はゼスト隊長とのやり取りをしつつ、ルーテシア達との合流方法を考える事にした。

一方ノアはメガーヌさんの生体ポッドを幻術でうまく誤魔化しルーテシアとの合流方法画策していた。

俺は、今もっている情報を機動六課送信することにした。

部隊長この情報をうまくいかしてくれよ。

でもまぁ、一体そうやったらこの情報を姉貴より先に得る事が出きたんだろう？

ここでの情報は、後に人造魔導士を調べる方法を調べることに大変役立つ事になるからな。

ちなみにここに侵入するためにガイコツ君2号が大変役立った事はアルトにしか知らせてはいない。

なんせ、色々隠せたからな。ガイコツ君でここの情報もそうだし部隊長がどうやってここのことを俺に知らせたのかもな。

まったくガイコツ君の口に無線を繋げて置くか？普通？

どっかのスパイ映画じゃないんだからな。まったく。

そこから指示をだすか普通？

まったくティアナ達がしったら驚くぜ。ガイコツの口に無線機がついていて、そこに詳細な音声データを使ってでしゃべってたなんてな。

ガイコツの顎がかくかく動いてたぜ。

「君のチームに何かあっても当局は一切関与しないってなぁ。それをリイン曹長にやらせるか普通？」

そのおかげでゼスト隊長達とも連絡がついたんだが…。まっこれからが大変だけどな。

これで姉貴がどう動くか楽しみだ。

恐らく俺たちの行動になんかしら関与してくるだろうけどな。

姉貴が決着をつけてもいいが姉貴が今回の戦闘に関与するなら何かしらやった後だろうな。

ゼスト隊長達との事もあるし恐らくノアがこの戦闘に絡んだら姉貴も出張ってくるだろうな。

まっ、今日スバル達が休みでフラナガンに出てくるらしいし…何か起こさなきゃいいんだが…。

俺は違法施設から出てくるまでの間そんな事を考えていた。

ちなみにスバル達の行動や休みって事はシャーリーさんからメールで教えて貰った。

そういえばシャーリーさんから何か頼まれてなぁ～。

まさか2人を尾行するなんて子はねぇだろうな。

あの人ならやりそうだな。カメラとか持ち出して。

デートするんじゃねぇしなあの2人なら。

まっ、休憩時間にでもフェイト隊長でも誘ってみるか。

デートの予定なんかやらされてたらウケルがな。

そもそもあいつ等にデートなんか出来るのか？

あの予定をあいつ等こなせるかどうかそれも見物だな。

ピピピッ！！

ん？

そんな事を考えていた所、端末につけておいた通信傍受機能が通信を傍受した所をつげた。

「ちょっと失礼」

俺はゼスト隊長に断りを入れ端末を取り出す。

そして、その内容を確認するために端末を耳元にあてると…。

おいおい…嘘だろ…。

俺は、端末から聞こえてくるその内容に頭を抱える事となった…。

その４０（後書き）

いよいと次回六課の休日に入ります。

感想ご意見などお待ちしております。

その４１（前書き）

フラナガン国道

フェイト視点

「まったく…よりによってこんな時に…」

私は、自分で運転する車の中でそうボヤキつつも車を急がせる。

ユウ君が潜入して既に２時間…。

さっき、はやての所に連絡が来た所を見ると目的は達せられてると思われる。

今回、ユウ君が侵入した施設の情報ははやてがミツキさんから入手した物で、ユウ君なら問題ないだろうというミツキさんの判断があったから入手出来たとのこと。

侵入時期については、やるやらないも含めそれ自体、ユウ君に一任された物で私には今さっき知らされた。

「でも…よりよってエリオとキャロが休みの時にしなくてもいいじゃない」

私は、先をいそぎつつまたボヤイた。

今日は、第一段階が終わったとの事でエリオ達新人ＦＷには六課に来て初めての１日オフが既になのはから言い渡されていた。

その場所に私も参加しそして、その後はやてから情報をもらってエリオとキャロを送り出して車に飛び乗って来たといった所だ。

もし…こんな事がなければ…エリオとキャロが2人で出かけるって言うからそれを安全かどうか遠くから見てようと思ってたのに…。

「魔法少女リリカルふぇ！い！と！Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４１…始まります…」

「フェイトちゃん…それ…なんか違わないかな？」

な…なのは…大丈夫だよ…これで…。

その４１

その４１

機動六課　女子隊舎

ティアナ視点

あの子…いったい何を…

私がヴィス陸曹からバイクを借りに行きそして、スバルを呼びに自分達の部屋に入ろうとしたところで部屋の中をみたらあの子…私を無視して自分が着る服を一生懸命選んでた。

「てぃ…ティア！！　いつの間に…！！」

スバルは私がいるのにようやく気づいた様子で選んでいた服を隠してた。

「隠さなくてもいいわよ。それにしてもなんでそんなに真剣なのよ」

「え～と…それは…」

スバルは私の声になんだか恥ずかしそうな表情でモジモジしていた。

「ユウならいないわよ。どっか行ってるみたい。さっきアルトが迎

えに行くって出て行ったわよ」

スバルの行動を見た私は、スバルあるカマをかけてみた。

「え～そんなぁ～！！！」

私のカマにスバルは驚きの声を上げる。

なるほど…やっぱりね…。

私は、そのスバル態度を見ながらニヤニヤしていた。

「なによ～！！そのニヤついた表情は…！！」

私の態度を見たスバルがブーたれた表情しながら声を出す。

「やっぱりねって思っただけよ…」

「ティアのくせにーー！！」

「あっコラ！！…スバル…離しなさい！！…あん…くぅ…」

スバルは、私の話にブーたれた態度のまま私に飛び掛りそのまま私を押し倒し私の胸を揉んだ。

「いいかげんにしないと！！！」

ゲシ！！ゲシ！！ゲシ！！

私は、スバルのマウントポジションを解いた後、あの子のお尻を蹴

りまっくた。

「ごめん～ティア～！！（泣）」

スバルは四つんばいになりながら私に謝ってきた。

「まったく…。そろそろ行くわよスバル！！」

「えっ～！！ユウ兄は誘わないのティア？」

私は、スバルから離れ声をかける。

スバルは、ユウを誘わないのか？と聞いてきた。

「だからいないって言ったでしょ！？」

「本当～に？」

スバルは、私の声に納得していないらしく私に詰め寄ってくる。

「本当よ～！！」

「ホントに本当？ねぇ～ティア～誘おうよ～？」

でた！！スバルのわがまま！！発動！！

「いないのにどう誘うのよ？」

私は、スバルに問い掛ける。すると…。

「今通信するからちょっと待って!!」

と言いマッハキャリバーからユウに通信を始めた。

(ただ今通信に出られません…。ピーと鳴りましたらメッセージを…)

「出ないわね?」

私は、その通信画面が留守電表示になったのをみはらかってスバルに声をかける。

「むっーーーー!!ユウ兄!!なんで出ないの!!」

私の声を聞いてかスバルは再びブーたれ頬を膨らまし通信画面に向かって怒り出した。

そして、別の連絡先に通信をしだした。

「あっ…アルト!!私!!スバル!!ユウ兄いる?」

(スバル?ユウならまだ合流してないけど…)

音声通信にしたアルトがスバルの声に答える。

「どこにいるの?ユウ兄?」

(フラナガン郊外の廃墟にいるって。あっ…これいっちゃマズイんだった…)

アルトは、スバルにどうやら言ってはいけない事を言ってしまったようだ。

「ふ～ん…それ…誰が言ってたの？アルト？」

（えっ…それは…八神部隊長とか…なのは隊長とか…先輩…など等）

ジト目のスバルの声に白状するアルト。

あっさり言ったわよ。本当に…

でも、なんでユウがそんな所にいるのよ…。

アイツが動くなんて…。

それにこのことにミツキさんも絡んでいるみたいだし…。

私の中で何かが引っかかっていた。

それはスバルも同じ考えのようで、

「どうしてそんな所にいるの？」

（そ…それは…実は私も詳しくは知らないんだ。今日だって、ユウが帰りの足がないって聞いたから今外に出てるだけで…（笑））

スバルの問いにアルト苦笑いしながら答えている。

「それ…本当？…ほんと～に本当の事？もしかしてユウ兄後ろにいるんでしょ！？ねぇ！！出してよ！アルト！！」

アルトの答えに納得していないスバルが本日2度目のわがまま発動！
そんなスバルに対しアルトは車内を見せるといった方法でユウがいない事を伝える。
（ねぇ！いないでしょ！！車を止めてトランクの中までみせたんだからいいかげん信じてよぉ～すぅばぁるぅ～）
わがまま絶賛発動中のスバルにアルトがそう伝えるとスバルは渋々身を引いた。
そして、通信を終了したスバルはユウにその怒りの矛先を向けメールの作成画面を開き感情そのままの文章を打ち込みそれを送信。
「これでよし！！ティア！！行こう！！」
「はいはい…」
メールを打ち終えたスバルは、どうやらスッキリした様子で私に外に出る旨を伝え私はスバルのその声に呆れながらついていった。
ユウ視点
あっちゃ～いいやがった…。
俺は、アルトの通信を傍受し目の前にいるゼスト隊長を無視しながら頭を抱えた。

それにスバルから来たメール…こりゃ帰ったら大変だな…。

傍受した通信の直後に届いたスバルからのメールの内容と言えば…。

―ユウ兄!!なんでフラナガンの郊外なんかにいるの!!なんでアルトが知ってて私に教えてくれないの!!…後で詳しく聞くからね!!!―

「はぁ～…」

俺は、この頭が痛くなくなるような状況にため息をついた。

「お前…ミツキとはどんな関係だ?」

いまさらですか?やれやれ…姉貴から聞いてはいたが…この人は…。

「俺の名は、ユウ・サエグサ…。ミツキ・サエグサは俺の姉貴だ。あんたの事は姉貴から聞いた」

「そうか…」

ゼスト隊長はそういいつつ構えを解いた。

「いいのかい?構えを解いて?俺が捕まえるかもしれないんだぜ?」

「フッ…お前がそれをするなら有無も言わずだろう?それをしないとすれば…大方アイツの弟なら想像もつく」

ゼスト隊長はそういいつつ笑みを浮かべ俺の問いに答える。
俺は、やれやれと思いつつなるほどね…。
やっぱこの人には姉貴の考えなんてお見通しだね。
俺はそう考えつつ答えを探していた。
すると…。
「ミツキの事だ…。ユウ？といったか？ミツキに伝えとけ！！」
ゼスト隊長は後ろを振り向きそのまま俺に話しを続けた。
「黄天が動き出してる…。気をつけろ！！…と。それと…あまり無茶はするな…あまり無茶がすぎるとレジアスの血圧が上がるからな…」
「ちょっと待って下さい。姉貴はあんたに…！！」
俺がそのまま帰ろうとするゼスト隊長に声をかけ、隊長はその声にそのまま立ち止まってくれた。
「俺は…まだやることがある…ルーテシテア達の事は伝えとく…頼んだぞとな…まぁ、アギトのヤツは、嫌がるだろうがな？」
「わりかりました。…となると俺たち機動六課と戦う事になりますが？騎士ゼスト…いや…ゼスト隊長？」
俺は、その声になんだか威圧されたらしく敬語で話しをする。

「その辺は、ミツキにまかせた。あそこの部隊長とは、仲がいいんだろ?それなら問題ないだろう。ただ、ミツキの事だ、少々荒っぽい事になりそうだが…そうでもしないとルーテシアとアギトが納得しないかもな?だが…次にお前達に会う時は恐らく戦場だ…俺の邪魔をするようならその時は容赦はしない…かつての部下だとしても…それと…俺は、もう隊長ではない…それに騎士でもない…」

「わかりました…。」

俺の答えを聞かずにゼスト隊長はさっていった。

「なんて…。でかい人なんだ…」

おれは違法施設を脱出しギンガの仕事を手伝うためにその事故現場に向かう事にした。

これで俺の違法施設への侵入は終了した。

俺は…その背中をただ、見つめる事しか出来なかった。

その４１（後書き）

作者
「あとがきのコーナー！！通常版！！」

エリオ
「さすがです！！同じ騎士として騎士ゼストは目標です！」

作者
「おいおい…。と言う訳で今回はスバル達を押しのけエリオです！！」

エリオ
「改めまして、機動六課　ライトニング分隊所属のライトニング０３！　エリオ・モンディアル三等陸士です」

ビシっと敬礼するエリオ。

作者
「これはこれは、ご丁寧に…作者の左近です。」

エリオそれにしても騎士ゼストって最高じゃないですか？」

作者
「でしょ！！作者としては、アウルさん以上に好きなキャラの一人です！！」

エリオ
「えっ…？それじゃ…それ以外の人では…」

作者
「もちろん！！ユウとミツキとノアの３人＋ナカジマ家の面々＋ティアナです！当たり前でしょ！！エリオは論外！」

エリオ
「そっ…そんな…と言う事は…これから登場する方達も…」

作者
「当然です！！」

ウィンディ、ノーヴェ、ディエチ、チンク
「いえ～い！！」

ディエチ
「ってぇ！！あたし達の名前間違えるなんていい度胸してるじゃないっスか？」

チンク
「やはり…ここは…（怒）」

作者
「唯でさえ多いんですし！それに身長以外特にキャラの特徴がないんじゃないですか！！あっ…！！」

ノーヴェ
「てめぇ！！チンク姉！！付き合うぜ！！ガンナックル！！」

チンク
「やはりここは制裁を加えた上父上に…ＩＳ機動！！スティンガー

！！」

作者
「まった！！待った！！」

なのは
「そうだよ…。ここは私の出番…だよ…ナカジマ４姉妹…それにエリオ…に作者さん…」

作者
「げぇぇぇぇっぇ！！！」

なのは
「前説でのフェイトちゃんのあれ…ちゃんとｏｈａｎａｓｈｉしないと…ね…」

なのは以外
「ガクガクっ…ブルブル！！」

作者
「ギャーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

ノーヴェ
「あれがスバル姉がいってた白いあく…」

ディエチ
「ノーヴェ！！それ以上は！！って私達まで！！ぎゃー！」

ナカジマ４姉妹
「ぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！！」

エリオ
「僕も出すかぁ～！！！！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーーーん！！

なのは
「ふぅ～！！と言うわけで次回！！「魔法少女リリカルな！の！は！Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者…その４２…テイクオフ…！！」

その４２（前書き）

シャーリー視点

「んもぉ～あったまきちゃう！！もぐもぐ…」」

「アルト～お願いだからもう少し静かに…エリオ達に気づかれちゃう！！」

「あっ！！すいません…でもなんだかいい感じですね…あの２人…パクリ！！う～ん…おいち～！！」

「そうだね。エリオ…キャロの事ちゃんとリードしてるみたいだし…」

私とアルトは今フラナガンにあるファミリーレストランでエリオとキャロの行動を監視している。

なんでこんな事してるかと言えば、今日はエリオ達が１日お休みでエリオとキャロの２人でフラナガンに遊びに行くとのことで私が２人のために取っておきのデートプランを教えて上げたんだけど、フェイトさんが２人だけだと心配なんだけど急に仕事が入ったらしくフェイトさんがいけないって事でフェイトさんの代りに私が２人の後をつけているって訳。

ちなみにアルトがどうしてここにいるかど言えば、ユウ君を迎えにいったんだけどなんでも野暮用が出来たとのことで迎えがいらなくなったんだって。それで私を迎えにきてくれたんだけど、なんでも

スバルとの通信をユウ君が聞いてたらしく合流した途端、ユウ君に怒られたんだって。

それで、その怒りを私にぶつけつつケーキの自棄食い…。

アルトは、私の前に座りエリオとキャロの様子をみつつテーブルの上にある沢山のケーキをひとりで食べてる。

私は、昼食をとりつつランチセットについていたコーヒーを飲みエリオとキャロの様子をみつつさらに目の前のアルトの話を聞いている。

それにしても…雰囲気のいいお店での昼食ってデートプランには書いたはずなんだけど…ファミリーレストランを選ぶあたりなんてエリオもまだまだこど…。

「シャーリーさん!!私の話聞いてます!!」

私がそんな事を考えていたらアルトが口に生クリームをつけながら私に詰め寄ってきた。

「ちゃんと聞いてるから…それと口にクリームついてるわよ」

「えっ!!あっ!!ありがとうございます…」

アルトは私がクリームが口についていることを言うと急いでそのクリームを確認。そして、紙ナプキンで口を拭いた後、私にお礼を言った。

「さてと…エリオ達もそろそろ店を出そうだから私達は六課にもど

ろうか？」

「えっ！？この後エリオ達についてくんじゃないんですか？」

私の声に疑問符を浮かべながらアルトが質問をしてくる。

「さすがにこれ以上ついていくと八神部隊長に怒られそうだし…それに何かあった時に通信士が2人もいないんじゃルキノが大変じゃない」

「なるほど…。わかりました」

私の答えに納得した様子のアルト。

「それじゃ、エリオ達に気づかれないようにいきましょ！それとここの御代は私が持つから心配しないで！」

「あ…ありがとうございます！シャーリーさん！」

アルトは、私がここは、私が奢る旨を伝えた途端大喜び。

だから！あんまり大きな声をださないで！

私は、エリオ達がいる席の方をみ2人が気づいていない事を確認しお会計を済ませた後、お店を出る事となった。

「お会計は4，６００クレジットになります」

「（嘘！！こんなに…これで今月ピーンチ！！（泣））これで…」

「ありがとうございました！」

私は、予想外にかかったここの食事代を払いつつ心の中で少しばかり後悔した…。

まっ、給料日も近いしなんとかなるか…。

そう思いつつアルトが運転する車に乗り込みファミリーレストランを後にした。

エリオ…キャロ…楽しんできてね！！

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４２…始まります…」

その４２

その４２

ユウ視点

「遅い！！いつまで待たせるのよ！！」

「しゃ～ね～だろ！！ここまで歩いて来たんだから！！んで、いったいなにすりゃいいんだ？」

研究施設を抜け出した俺は、アルトにスバルとの通信の内容についてアルトに文句いったのちギンガが待事故現場に足を運んだ。

俺の目の前には、ご立腹の表情のギンガの姿がありここに来た途端「遅い！！」と抜かしやがった。

それに対し俺は、ここまで歩いてきたから遅れたとアルトのことをギンガに言わず別の言い訳でギンガの怒りを逃れた。そして、俺はここで何をすればいいのかギンガに確認した。

「あっ…実は、私がここに来る前までは、現場処理の手伝いをお願いしようと思ったんだけど…ちょっと来てくれる？」

ギンガは俺に何かを言いかけだが考えを変えた様子で、俺についてくるよう言ってきた。その声に俺は、「わかった」といいギンガの後についていく。

「これ…見てくれない？」

「ん？なんだこりゃ？」

「ユウはなんだと思う？これ？」

ギンガが指を刺す方向を見た俺は、ギンガにこれが何か聞いたがそれを聞いたギンガは、これが何に見えるか聞いてきた。

俺たちの目の前には、黒いケースと白い楕円形の形にしたケースが転がっていた。そして、楕円形のケースには、何かが入っていた様子でそこから何かを引きずるような後が残っていた。

「そうだな…。何かのケースのようだが何が入っていたのか？…ギンガは？」

ギンガの問いにとりあえず答えた俺は、今度はギンガに俺がこれが何に見えるか？と聞いてみた。

「ねぇ…ユウ…これ…この白いほう…生体ポッドに見えない？」

俺の問いにギンガは真剣な様子で白いケースみたいなものが生体ポッドに見えないか？と言ってきた。

「生体ポッド…確かにいわれてみりゃそうは見えないとはいえないが…。あれっ？この赤いのって…まさか…」

ギンガの問いに答えた俺は、その白いケースになんだか赤い液体がついていることに気づいた。俺の声にギンガはそれが何なのか確認

した。

「ユウ!!これ人の血よ!!」

白いケースの前に座りその赤い液体を綿棒に染み込ませ持っていた薬剤につけてその反応を確認。綿棒が指し示した反応は…人の血であることがわかり声を上げるギンガ。

「おいおい…それじゃこの中に入ってたのって、人間かよ!!しかもこの大きさって事は恐らく…子供…」

「どうやらそのようね。そして、この引きずった後があるって事は…」

「ああ!!どうやらその子供はここから下水道を使って逃げたってことだな。それも何かを引きずりながら…その引きずっているものがこの黒いケースと同じ物の可能性が高いんだが…」

ガチャ

俺とギンガは、現状の様子から推論を立てていた。そして、おもむろに落ちていた黒いケースを掴んでその中を確認した。

「ちょ…ちょっとユウ!!これって!!」

「ああ…レリックだ…つ～事は、ここから逃げた子供?が引きずってるのって…」

「恐らく…レリック…」

ケースの中には、赤いクリスタルが入っていた。ナンバーは１１…。
メガーヌさんが適応しているレリック…。

ケースの中を見たギンガは俺の声に続き俺たちの推測をさらに広げる。

やれやれ…よりによってこんな所でレリックって…

それも…１１番ってなぁ！！

俺は頭を抱えたくなった。

なんでかといえば、こんな面倒な状況のど真ん中に叩き込まれたからな…これで六課にも連絡せにゃならんし、このレリックの反応をみつけたガジェットがわんさとここに来るって事が目に見えてるからなぁ～。

しかも、今日はスバル達は休み…。

そもそも、今日にしたのはあいつ等はいない事で楽に動けると思って今日にしたんだが…どうやらその判断が裏目にでたようだ…。

「それでユウ？どうするこれから？」

俺が憂鬱になっていた所、ギンガ今後の行動について聞いて来た。

なんせ、レリックについては、俺がいる六課が専門だからな。レリック専門部署にいない言わば素人のギンガからすれば専門部署にいる俺の指示に従おうって事なんだろうが…さて…どうするか？…。

「そうだな。とりあえず、俺も六課にいるとはいえ前線部隊にいる訳ではないからな。とりあえず、ウチの部隊長に連絡してその指示を仰ごうくか…恐らくこれでスバル達の休みが消えちまう事になるだろうが…しゃ～ない…さすがに俺とギンガだけじゃいくらなんでも人手が足りねぇ。それと姉貴にも連絡して…」

（こちら機動六課所属のキャロ・ル・ルシエ3等陸士です。緊急事態のため全体通信で失礼します）

俺が、ギンガにこれからの行動を指示している途中、突然通信画面が目の前に開きその中からキャロの声が聞こえてきた。

「全体通信って…」

「なんだが穏やかじゃねぇな」

通信画面から聞こえるキャロの声にギンガは驚きの様子。

そして、俺は、その穏やかではない様子にやれやれという態度を取る。

（現在、小さな女の子を保護。そして、その女の子はレリックを所持。指示願います）

キャロに変わり今度はエリオが状況を報告。指示を願いでた。そして、エリオの声と共にキャロに抱かれた金髪の女の子をが横になっていた。

「ちょっとユウ!!この子!!足元見て!!」

画面に映る女の子をみたギンガは驚きの声を上げる。

「足元?…おいおいこいつは…」

ギンガの声に俺は、その女の子の足元をみた。

そこには、足に繋がれた鎖…そして、その先には、俺が持っているのと同じ黒いケースが転がっていた。

「恐らく…あのポッドの中に入っていたのはあの子…ッて事よね?そして、下水道を使ってここから二人がいる所まで逃げたって事?」

「まっ!憶測の粋は出そうにないがあながち間違っちゃいないと思うぜ!それに俺も考えは同じだ」

それをみた俺は驚きの声を上げると同時にこの生体ポッドに入っていた子がこの子ではないか?と言う推論にたどりついた。

どうやら、俺の考えはギンガも同じようでギンガは、自分の考えを俺に確認をとってきた。

ギンガの考えに俺は、憶測の粋を出ていない旨も付け加えた後その考えに同意した。

「それで…さっきの続きだが…俺は、これから姉貴に連絡を取ってどうするのか聞いてみる。ギンガは、ウチの部隊長に連絡をとってこいつをどうするかと捜査に参加出来るよう頼んでくれ」

「それはわかったけど…あんたは参加しないの?捜査?」

俺は、さっきいいかけていた事の続きを話だす。それを聞いたギンガは、俺は捜査に参加しないのか?と聞いてきた。

「俺か?本音としては参加したくはねぇが恐らく姉貴と部隊長から参加しろ!って言われるだろうからな…」

「だったらユウが八神部隊長に連絡すればいいじゃない?」

俺の答えにギンガが疑問の声を上げる。

「それもいいが…ちょっと姉貴に確認したい事があってな。悪りぃが六課の方は頼むわ」

「わかった」

俺の答えにギンガはあまり納得していない様子だったが俺の声に了承した様子でさっそく六課に連絡をとりだした。

さてと…俺も始めますか…。

陸士108隊技術開発室　オフィス

ミツキ視点

ピピピピピピピッ

「ん?ユウからの連絡?何かあったのかな?」

私は、六課の子からの全体通信を聞きつつ端末からにユウからの連絡が来た事を確認し全体通信とは別に画面を開いてユウからの通信に応じた。

「どうしたの？何かあったの？ユウ？」

（何かあったもねぇよ。姉貴実は…カクカク云々…という訳なんだ…）

「マジ？んで、とりあえずどうするつもり？」

（とりあえず、ギンガが今ウチの部隊長と話をしていてギンガが捜査に参加するって事になったらしい）

「あんたは？まさかこのまま帰るって事はないでしょうね！」

私は、ユウの話を聞きそして、ユウがこのまま帰るのでは？と聞いてみた。

（帰りたいのは山々なんだが…やっぱ…ダメか？）

ジトーーーーーーーーーーーーーーー。

（やっぱダメ…みたいだな…）

「ダメに決まってるでしょ！！もしかしたら、メガーヌさんの娘さんも出てくるかもしれないし、そこに私達の今の状況を知ってる人がいないといけないでしょ！どうせギンガには施設の事言ってないんだろうし…」

ユウは、私の問いに帰ってもいいか？と聞いてきた。その問いに私は、捜査に参加するよう指示。そして、ユウが潜入した施設の事をギンガに言ってない事をユウに確認した。

（ったく…そのことをギンガに言ったら怒るくせに…わぁったよ！やりゃいいんだろ！！ったく…！）

「まぁまぁ…怒らない怒らない…それと、私もそっちに行くから…」

（何！！姉貴が！！一体どうして！？）

私の答えにユウはブーたれた様子で私の話を渋々了承し、私が現場に向かう旨を告げると驚きの声を上げた。

「どうしても何もメガーヌさんの娘さんが出てきてうまい具合に保護出来たら身柄をこっちで預かれるよう六課と交渉しなきゃならないといけないし…そうなるとある程度の地位をもった人がそれをやらなきゃいけないだろうし、それにユウは今は六課の人間だしね」

（なるほどなっ！…んで、それを姉貴がするって訳だな…だがなぁ～ノアがいねぇんじゃ…）

私が現場に行く理由をユウに言うがユウはイマイチ納得していない様子。

どうやら、ノアがいない事がユウは気になってるみたい。

「心配しないで、ノアと合流するまで現場にはでないで近くで様子を見てるから。それにどうやら六課が前線部隊出すみたいだから私の出番があるとしたらやっかいな状況が来た時くらいだから」

（わかったよ…。それと一応、じじいに言っといてくれよな。それと一つ聞きたいんだが…）

「何？いいわよ？」

納得していないユウに私はノアと合流しない限り現場にはでない旨とやっかいごとにならない限り戦闘には参加しない旨を伝えてようやく納得してくれた。そして、何か聞きたい事があるって事なんだけど…。

（黄天っていったいなんだ？）

「えっ…。なんであんたが…そのことを…」

ユウの声に私は驚きの声を上げる。

だって…この事を知っているのは、私とノア…そして、ゲンヤさんを含めたごく一部の人…私の担当医の先生とその助手兼１０８部隊の情報部に所属しているミオちゃん…後は、レジアス中将とオーリス…そして…生きているかもしれないゼスト隊長達…それと…あとひとり…。

あの女性（ひと）とユウが施設であったなんて事はありえそうだけど…それとはなんか違うような…そうなると施設に侵入しようって考えそうな人は…。

まさか！！！

（実を言うと潜入した施設でゼスト隊長にあったんだ…そこで黄天

が動き出したって姉貴に伝えるよう言われてな。そう言ってゼスト隊長は行っちまったが…）

「そう…それで…とりあえずゼスト隊長のことは、後から聞くわ。それで黄天については…私が追っている人達の総称みたいな物かな…ごめん。今はこれしかいえない…」

私は、ユウに大雑把ではあったが黄天について話をした。そして、それ以上詳しくはいえない旨を付け加える。

（それは…まだ話せる状況じゃないのか話したくないのか…いったいどっちだ）

私の答えにユウは真剣な眼差しでさらに質問をしてきた。

「両方…。ごめん!!話す時がきたらちゃんと話すから!!今は…」

その問いは私は、ユウに頭をさげつつ待ってもらうよう頼んだ。

（わかったよ!だが!いずれちゃんと話してくれよな!じゃないと…スバル達に…）

「わかった!!わかったから!!ちゃんと話すから!!スバル達に言うのだけは!!」

私は、ユウの話にあたふたしながらそれだけは勘弁してほしい旨を伝える。

それを聞いたユウは、「ちゃんと話せよ!!」と念を押し通信は終了した。

「ふぅ〜…さてと…」

通信を終えた私は、椅子に深くすわり大きく深呼吸をした。

そして、ゲンヤさんに通信をとり了承を得た所で行動を開始しようと廊下出た。

すると…

「あらっ?その様子だと何かあったみたいね…私があげた情報は少しは役に立ったのかしら?」

私が廊下に出た所で陸士隊の制服にみを包んだひとりの女性が声をかけてきた。

その人は、私より背が高く紫の髪が背中まで伸ばしていた。

「お陰様でね…。それで、何かよう?」

私は、その女性の問いに答える。だが、お互いに顔を合わす様子はなくお互いに逆方向を向いたままその場に立ち止まり話を続けた。

「それはよかったわ。どうやら、私の妹達も動きだしたみたいよ…それにルーテシアお嬢様にも手伝ってもらうみたい…」

「それは大変ねぇ…でも、いいの?そんな事私に言って?」

女性は、私の声に笑みを浮かべさらに情報を教えてくれた。その話に私はその情報を私に言ってもいいのか聞いてみた。

「かまわないわ…私は、ただひとり事を言ってるだけだから。それに…どうやらあなたが言っていた事は本当みたいだから…」

「そう…なら私もひとり事を言おうからしら?どうやら近く本局が大規模的に違法施設の可能性があるところを一斉捜査するみたいよ。それも、フラナガン付近の山岳地帯を中心にね」

女性の答えに今度は、私は笑みを浮かべ情報を彼女に伝える。

「それは大変。でも…それこそまずいんじゃない?色々と…」

「だから言ったでしょ?私は、ひとり事を言ってるだけよ?」

「そう…だったわね。それじゃ…」

「それじゃ…ドゥーエ」

私の答えを聞いた女性はそう言葉残しつつ私に視線を一切合わさずにその場を後にした。

私は、彼女を追うことはせず彼女とは逆の方向に向かって歩きだした。

「さて…、とりあえず今聞いたことをウーノ姉様にでも教えておこうかしら…」

そして、ドゥーエもまたミツキの方を振り返ることはなくミツキから得た情報をウーノに知らせる旨を口にしつつその場を後にした。

その４２（後書き）

更新が遅れてすいません！！
ちょっとリアルの方が忙しくて遅れてしまいましたがこれとあともう１話アップしますんでお許しを！！

それではその４３！！どうぞ！！お楽しみ下さい！！

それと感想があれば是非！！お願いします！！

その４３（前書き）

機動六課　司令室

はやて視点

「そんならなのは隊長が言ってる通りで行こうか」

「「了解です」」

キャロとエリオからの通信を受けたウチ等は急いで司令室に移動。
そして、食堂におったなのはちゃんフェイトちゃんはそこから新人達に休みが終わったことを告げこれからの対応を指示しておった。

ウチはなのはちゃん達の話を聞きつつなのはちゃん達の指示を了承した。

「そんでもってどうやらウチ等と行動を共にしたい人がおるみたいやけど…」

ウチはそういいつつウチ等のやり取りが終わるのを待っとったギンガに話すよう告げた。

「こちら…陸士１０８部隊所属のギンガ・ナカジマ陸曹であります。全体通信を聞いて現在こちらでおっている事件と何か関連がありそうだったので捜査に参加させていただけますか？」

「なるほどな…まっ…詳しい話は後から聞くことにして…今回はギンガだけか？」

ギンガの話を聞いたウチは今回参加するのは、ギンガだけか確認した。

「いえ…私とあともうひとり…って！！ユウ！！ちょっとあんた！！何隠れてるの！！」

「違う！！俺は、ユウ・サエグサなどではない！！ここから遠い星から来たヤキソ…」

「んな訳！！あるか！！おのれはマイケル富○か！！それとそのお面！！いったいどこで手に入れたん！！」

画面の向こうからギンガに引きづられるよう現れたユウはなぜか昔ＣＭでカップやきそばのＣＭで登場したヒーローキャラのお面を被って登場し、そして、自分はユウではないと抜かしだした。

ウチはユウの話に激怒しその場から立ち上がりユウのボケを突っ込んだ。それと同時にギンガがユウの頭を殴りつけてた。

「まったくこちら、ロングアーチ０４…ユウ・サエグサ。なんでここにいるかといえば、ここにいるギンガ・ナカジマ捜査官に呼び出された…ちなみにこのお面は昔姉貴からのおみやげだったものを持ち出しました！！以上！！」

ギンガに殴られたユウは頭を抑えつつつけていたお面をはずしふてぶてしい態度でなぜそこにいるのか？とお面について説明した。

「なるほど…了解や。なら、ギンガとユウはこのまま下水道を進んでティアナ達と合流してほしいんやけど…」

「やだ…（ゴスっ！！）…痛っつ～了承…」

「了解しました」

ウチの指示にユウは拒否しようとしたがギンガに再び頭を殴られ頭を抑えつつウチの指示を了承、その後、ギンガも了承する旨を伝えてきた。

それにしてもこんな街中で…あんまり戦闘はしとうないし何かあれば地上本部が黙っとらんやろうからな…。しっかりやらんと…。

ウチはそう考えつつ何事も起こらないことを願った。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４３…始まります…」

その４３

地上本部　執務室

オーリス視点

「失礼いたします。中将、機動六課が動き出しました」

執務室に入室した私は、部屋の奥にいる大柄の中年男性で私の父でもあるレジアス・ゲイツ中将に機動六課が動き出した事を告げた。

「そうか…なら監視を厳に…なにかあればすぐに報告しろ。」

「はっ！！それと…ミツキ・サエグサ少将もどうやらこの件に介入する様子ですでに現場に向かったとの報告がありました」

「何！！ミツキが動いただと！！一体何があった！！」

私の報告に中将は驚きの様子で座っていた椅子から立ち上がり私にさらなる報告を求めた。

「詳細については、現在調査中ですが、どうやら少将が以前から追っている事件と今回、機動六課が動いているレリック事件との間でなんらかの関連が出たのではないか？と…」

「いや…大方弟とナカジマ三佐の娘が自分の近くで出動したから心配になって飛び出したんだろう…まったく…ミツキのヤツめ…あれ

ほど現場には出るな！と言っておるのにも関わらず…」

私の報告とそこから導き出した推論を述べた所、中将はそれをすぐに否定。そして、自分の考えをいらだちながら私に言った。

「お言葉ですが…いくら心配だとは言え、それくらいのことでナカジマ三佐が出撃をお認めになるとは思えないのですが…」

「確かにな…ナカジマも基本的には、私と考えは同じでミツキのヤツを現場には出したがらないからな…。それに…ユウやノアとかがそれを聞けばすぐに止めただろうな…ともなれば、ミツキが出なければならない事態が起きた…と言う訳か…」

「恐らく、その可能性が一番高いかと…」

中将の話を聞いた私は、その可能性をナカジマ三佐の名をを上げその可能性を否定した。

中将は、私の話を聞き落ち着いた様子に戻り自分の手を顎に当てその逆の手で顎に当てた腕を支えながら何やら思考をめぐらせていた。そして、先程とは別の推論を述べそれに私も同意した。

「それにしても、ミツキのヤツ…いくらなんでもあの犯罪者に肩入れしすぎた！あれがハラオウンの陰謀だという事がまだわからんのか…」

中将は、椅子に腰を下ろしながらそう呟いた。

その話に私は、返答することはぜずただ、その話を聞きそしてただ、頷くだけにした。

中将の話は聊か偏見がましいかもしれないが私も大方同じ考えだ。

ハラオウン派は昔からミツキに注目しことある事に色々とちゃちゃを入れてきた。

時には、犯罪行為まで行いミツキを従わせようとまでした。今回のミツキの介入については、ハラオウン派に取ってはまさに絶好のチャンス。中将は今回の介入がそのような事態にいたらない事を危惧していた。

そして、恐らくハラオウン派は今回のミツキの介入を利用し自分達に有利なるような事を言ってくるだろう…。

つまりは…ミツキの力を調べさせろ…そして、その力の詳細な内容を教えさらに自分達に協力しミツキが持つ情報網を自分達にも使わせろ…と…。

そして、中将が仰っていた犯罪者…つまりは、機動六課の部隊長である八神はやて二佐の事を指しており今回の一連の事態は、八神はやてとミツキとの関係を利用したハラオウン派により陰謀である事だと中将は結論付けていた。

なぜ中将がこんなことを言うかと言えば元々、レアスキルがお嫌いである中将は、レアスキルを持つミツキとその弟のユウの2人だけは他の者達とは違いまるで家族同然の付き合いをしていたからだ。

元々、ミツキとユウはとある違法施設から今はお亡くなりになっているクイント・ナカジマさんとディーダ・ランスターさんの両名により保護され、ミツキはその魔力の大きさから保護されて後、地上

本部にスカウトされ現在にいたる。

ミツキ達の両親は、その施設で何者かに殺害され2人は両親が残してくれた今の家に現在も住んでいる。

中将とは、2人の両親が共に知り合いであり両親が保護された後、何かと中将が気にかけていた。

ちなみにナカジマ夫妻とは、妻であるクイント・ナカジマさんとミツキの母親でありその施設の研究員であったミリー・サエグサさんとは10年来の親友であり、ミツキの主治医である、ユン・リーゲルもまた10年来の親友であった。

そして、元々ミツキの両親が残してくれた家に住んでいたミツキとユウ…そしてノアの3人が心配だという事でミツキの家の横の土地が空いていることを知ったクイント・ナカジマさんは別の違法施設から保護した、ギンガ、スバル・ナカジマ姉妹を自分達で引き取る事を決めた事を切欠に旦那さんであるゲンヤ・ナカジマ現三佐を説得、ミツキの家のとなりに家を建て3人の面倒を見る事となった…。

だが…現実は上記内容とは違い、ミツキの話によればナカジマ家の皆さんが引越ししてきた初日に何故か家を半壊させられおまけにその日からナカジマ家の人達の分まで食事を作るハメになった…と…。

そもそも私とミツキは、ミツキが保護されたころからの知り合いで私が小さい頃…ミツキの仕事の合間を縫ってよく地上本部で一緒に遊んで中将とゼスト隊長達によく怒られたものだ…。

私は、過去の思い出にひたりながら中将からくるであろう次の指示を待った。

「オーリス、今回の件が終わり次第、機動六課に査察に入れ。そして、本局に対しての攻撃材料を探して来い！」

「もし…それにミツキが介入しようとしてきたら…どうされますか？」

「それはないだろう…いくらミツキでもそこまでしたらどうなるかくらいはわかっておるし、それが原因でユウやナカジマの娘達が窮地に陥る事態になるやもしれないからな。だがもし、ミツキが介入するようなことがあればすぐに報告しろ！私からミツキに直接話を聞き処分を下す！」

「わかりました…。では、失礼します。」

私は、中将からの指示を受け取り部屋を後にした。

それにしても…ミツキに処分を下すなんて…そんな事いままで中将が言ったことなんて無い筈。

つまりは、そこまでしないといけないかもしれないって事ね。

なら、私はミツキに警告しておかないと…。

中将がそこまで本気だって事を…彼女に伝えないといけない…。

部屋からでた私は、端末を取り出しミツキに連絡を入れることにした。

だが、ミツキに通信をいれてはみたが…

「話中…いったい誰と？」

私は、ミツキが誰と話をしているのか気になりつつ連絡手段をメールに切り替えそして、送信した。

送信を終えた私は、気持ちを切り替え中将から受けた指示を実行するためにその行動を開始するために急ぎ自分のオフィスへと向かった。

レジアス視点。

「ふぅ～…」

ワシは、オーリスが部屋を出ていった後、椅子の背もたれに体重を預け大きくため息をした。

現在、部屋には誰にもいない…。ワシ一人だ。

ピピピピピッ…

「ん？ミツキからの通信？」

少しばかりの休息に勤しんでいた所ミツキから通信が入った事が知らされる。

「ワシだ。何のようだ？ミツキ？」

そして、通信画面を開いた私は、そっけない表情しつつミツキから

の通信に応じた。

「お仕事中に申し訳ありません。中将、実はお話したい件がありまして…お時間をいただけますか？」

「１０分だ…それ以上は時間の無駄だ」

「ありがとうございます。では、早速で申し訳ございませんが…実は…」

画面の向こうから聞こえるミツキの声に私は少し考えつつもミツキに１０分だけ時間をやることにした。

それを聞いたミツキは、お礼を述べつつ連絡してきた訳を話だした。

「何！！ゼストが生きておっただと！！それに…メガーヌの娘が今回の六課が追ってる事件に介入するかもしれんだと！！」

「はい…先ほどユウからその旨の連絡があり、私はそれを確かめるため現在ノアとの合流ポイントに向かっております」

ミツキが連絡を入れてきた理由は、どうやら今回の出撃についての事前説明…といった所か…なるほど…どうせ後から私かオーリスに聞かれるだろうから先に言っておこうと言った所か…。

ワシは、そんな思考を巡らせつつもミツキからの報告に驚きの声を上げた。

「そうか…では、今回の件に関してナカジマ三佐はなんと言っておったか？」

ミツキはワシの反応を驚きもせずにまるで予想通りの反応と言った様子で報告を続けた。

その報告を聞いたワシは、ナカジマ三佐には話を通してしるのか確認した。

「はい、ナカジマ三佐は今回の件について、既に説明済みで私の出撃についてもご了承を頂いております…ただ…いくつか条件はつきましたが…」

「条件？それはいったいなんだ？」

ワシの問いにミツキは、既にナカジマ三佐には報告済みで出撃の許可も条件つきではあるが了承しているとのことであった。そして、その話を聞いたワシは条件についてミツキに確認してみた。

「はい…その条件と言うのは、まず…ひとりでは現場に向かわず必ず近くにノアと合流してから向かう事、メーガ―ヌさんの娘さん…つまり保護対象であるルーテシア・アルピーノもしくはゼスト・グランツが現場に現れない限り介入はせず、もし現れなければそのまま帰還すること…最後は…必ず、現場に行く前に中将に話をしておく事…その3点になります」

なるほど…どうやら今回のこの連絡はその条件のひとつ…と言う訳か…。

それにしてもナカジマのヤツ…どうやらワシよりも先にワシが言わんとしていたことを言ってくれてたらしい…その上でワシにミツキから連絡させる事で後から起こるであろう色々な事態について事前

に対応できるようにしておきそして、何かあればこちらに対応を任せる…と言ったところだろうな…。

「わかった…好きにするがいい。だが…ミツキよ…いくらゼストが生きていた事がわかったとは言えあまり無茶はするな…ゼストにはいつか必ずワシが会わせてやる!!だから焦らずな…」

「はい…わかりました…では、失礼します…」

ミツキはワシの話を聞いた後、通信を終了させた。

ワシは、再び椅子に深く腰を下ろしつつ背もたれに体を預け天井を見つめた。

ゼスト…やはりまだ生きておったか…ミッドに現れたとのことであればワシと話をするために…どうやら決着をつけねばならないようだな…だが…ミツキとナカジマ三佐もまた…ゼストと同じ物を追っておるし…そして、恐らくミツキの事だ…ゼストがワシの元に現れたら自分もその場にいると言い出してキカンだろうな…さて…どうしたものか…

ワシは、そう考えつつもデスクの前にある書類に目を落とし仕事に戻ることにした…。

その４３（後書き）

作者
「あとがきのコーナー通常版！！今回のゲストはヒロイン候補筆頭のアルトさんです！！」

アルト
「どうも～それにしてもまだヒロインが誰か決めてないの？」

作者
「ええ…まったく…いっそのことこのままでもいいかな？と思い出したりもしてまして…」

アルト
「嘘！！って事は、ユウとはこのままってこと！！」

作者
「それはまだ決めてませんが、なんせ個人的な話になりますがどうも主人公とヒロインがゴールインしちゃうと面白くないというか…２人のラブラブっぷりしか書けなくなると言うか…ともかく！！そういうことです！！」

アルト
「確かに…他人のラブラブっぷりほど面白くないものはないからね…それはそれはとして、今回いよいよレジアス中将達が出てきたけど…なんかいい人っぽくない？」

作者
「そうですね…。レジアス中将については、原作では悪い人っぽく

描かれてるようですが、ここでは顔つきとは裏腹のギャップキャラにしていくつもりです」

アルト
「まさか…暴走するなんてことは…」

作者
「いいですね！！それ採用です！！」

アルト
「やったぁ～！！ってぇ！！そんなんでいいの！！」

作者
「他の作者さんはどう決めているのかはわかりませんが私の場合はこんな感じです」

アルト
「そんな感じでって…それをやらされてる私の立場も少しは考えてよね！！」

作者
「まぁまぁ…これでも結構悩んでるんですから…」

アルト
「以外と大変なんだね…」

作者
「心配していただきありがとうございます。それでは、今回はここまで！！次回についてはまだ未定です。それでは、アルトさん！！〆のセリフをお願いします！！」

アルト
「了解！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者…その４４…テイクオフ！！」

その４４

その４４

フラナガンの郊外　地下下水道内

ユウ視点

「はぁぁぁぁぁ！！」

ギュイーン！！

ドゴーーーーーーーーーーーーーーン！！

「お～お～、相変わらず豪快だこと」

あれから俺は、ギンガ共にティアナ達と合流するため下水道を決められた合流ポイントに向かうためさっきまでいた事故現場から回収したレリックを用意したリュックに入れそれを背中に背負いギンガの後を走って追走していた。

前を走るというより滑るって言ったほうがいいな？

とにかくギンガは、下水道内に現れたガジェットを左手につけたリ

ボルバーナックルのスピナーを唸らせ次々と撃破してゆく。

「まったく!!あんたも父さんもどうしてミツキさんの出撃を止めなかったのよ!!」

ドゴーーーーーーーーン!!

ドゴーーーーーーーーン!!

ギンガは、そう文句いいつつガジェットの攻撃を次々と交わしながらガジェットをまたも撃破。

「仕方がねぇだろ!!俺は今は六課の人間だし例の保護対象者が出てこなけりゃ姉貴も出てこねぇってじじいと約束してるしそれにノアと一緒じゃなけりゃ現場にも行けねぇーって話がじじいとの間であれからできちまってたんだから。あらよっと!!ほい!ほい!っと」

バシュ!!バシュ!!

ドゴーーーーーーーーン!!

俺は、ギンガの文句にじじいことゲンヤ・ナカジマ陸上三佐の名を上げ姉貴とじじいがそう約束しているため止められなかった事を告げる。

そして、俺たちの後ろにいたガジェットの攻撃を交わしゲイルによる射撃魔法で撃破した。

「でも!!その保護対象者が出てきたらどうするつもりよ!!」

ギンガは、撃破したガジェットの残骸には目もくれず再び俺の前をローラーブレードで滑り出した。どうやら俺の話に納得していないらしい…。

「そうだな…もし現れたとしたら姉貴かノアが来る前に捕らえる！！交渉だけしてもらえりゃギンガも問題ないだろ？」

「それは…そうだけど…もし…こっちに現れなかった場合は？」

「それは、ねぇな」

「どうして？そう断言出来るの？」

俺の話を聞いたギンガは滑りながら少し俯きつつ俺たちとは違う所に現れる可能性を示唆、俺はすぐさまその可能性を否定した。すると、ギンガからその理由を聞かれた。

「そんなの簡単だろう？向こうさんの狙いは、恐らくれりックだ。つー事はレリックがある所に向かってくる。まっ…俺たちみたいに地上から下水道に入ってくるだろうがな。

でもまさか、空にいるなのは隊長達の目の前から下水道に入るっつーことはしねぇだろ？なんせリスクが大きすぎるからな？と、なるとだ…」

「私達と同じようになのは隊長達とは離れた所から侵入するって事？」

俺は、ギンガにその理由を告げその話の途中で俺の言ってる事を理

解したギンガが俺の話の後に続きそれでいいのか俺に確認してくる。

「まぁ～な。だが、転送魔法で一気にって可能性もないとは言えねぇが…でもまぁ、そっちの方がこっちとしちゃありがてぇが…なんせノアと合流して地上から来るだろうからな～姉貴は?その姉貴達が来るまでの間に出来る多少のタイムラグの間に捕まえられりゃ…」

「それならなおさらスバル達に話して協力してもらった方が…」

俺は、ギンガの話が間違っていない旨を告げさらに話を続ける。話を聞き終えたギンガは、スバル達にこの事を話さらに協力して貰うよう頼む事を提案してきた。

「そいつはダメだ…。そうなるとあいつらに1から10まで話さなきゃいけなくなる…もしあいつ等がそれを聞いたら…」

「間違いなく私達と同じことを…でも、スバル達の前に出てきたらどっち道話さなきゃいけないんじゃない?」

ギンガの提案をすぐに却下。

これに対しギンガは、もし保護対象者がスバル達の前に現れ俺たちがそいつ等を捕まえればスバル達が黙ってはいないだろうから結局話をしなけりゃならないのでは?と俺にそんな疑問を投げかけてきた。

ちなみにスバルとティアナには、今回のことを含め姉貴が追っている物…そして、探している人物など姉貴があんな体のくせにこんなことをしてるのか?…そしてその理由については一切話してない。

もうひとつ言えば、ギンガには、今回の件に姉貴が探している保護対象者が出てくる可能性がありそれに対し姉貴が介入してくるかもしれないとということとそれが子供であることだけ伝えており、話の全てまでは教えられちゃいない。

まぁ、ギンガもそのことについては納得しちゃいねぇが俺も全部は教えてもらっちゃいねぇからな…。でもまぁ、ギンガよりかは多少は知ってはいるが…。

まったく…姉貴もじじいもノアも…もう少し俺たちを信用してほしいもんだが…。

「そうなったら、そうなったで姉貴に丸投げするだけさ…。それに八神部隊長もその辺についてはなんとかしてくれるだろうからな…」

ギンガの疑問に対し俺は、そんな事を考えながらそう答えた。その答えにギンガは渋々だが了承していた。

基本的に俺もギンガも多少ではあるが姉貴に協力しそして、色んな物を見てきた…。

まっ…特急隊志望のスバルと執務官志望のティアナもいずれは見る光景ではあるだろうが見ない事にこした事はないからな…。

それに俺たち以上に深入りしちまうと政治的な問題も絡んできて誰が見方で誰が敵だなんて区別がつかなくなりそうになるらしい…。

って、酒に酔ったじじいがそんな事を言ってたっけ？

つまりは、下手すれば同じ管理局の仲間を闇に葬らなけりゃいけな

くなるかもしれないからそんな汚れ仕事を俺やギンガにスバル…そして、ティアナや八神部隊長達にさせたくないらしい…。

…とまぁ、なんだかんだ考えながらギンガの後を追走した。

ギンガ視点

まったく…面倒事は他人まかせなんだから…ユウは…

私は、ユウの前を滑るかのようにスバル達との合流ポイントに向かって歩を進めている。

私の後ろからは、レリックが入ったリュックを背負ったユウが追いかけてきている。

なぜ、私がユウの前を行くかと言えば私のポジションがフロントアタッカーである事とただ、単純に私の方がユウに比べローラーブレードで移動している分その移動速度が速いからだ。

もうひとつ付け加えるなら…私の戦闘スタイル自体、母さんに教わったシューティング・アーツと言う所謂格闘術である事に対しユウは、ガンデバイスと刀型デバイスの二つを使って行う所謂変則のスタイル。

常に敵に近づかないと攻撃出来ない私よりかは、中距離からでも攻撃可能なユウの方がレリックを持っていた方が安全であるというのが最大の理由。

なら何も持っていない私が前をユウの前を行きユウを…と言うより

ユウが持つレリックを守った方がより安全であると言った結論に達しさらに、私に何かあっても後ろにいるユウがフォローしてくれるというおまけまでついてくると言ったことからこうなっている。

それにしても…ガジェットの数…もしかして、スバル達の所よりかこっちの方に多く来ているんじゃ…？

こんな事なら、急いで下水道に入らないで誰かレリックを封印できる人に封印してもらってからくるんだったなぁ～。

私は、そんな事を頭の中でボヤいていた。

そう…、ユウが持っているレリックはまだ封印処理されておらずミツキさんが介入してくるかも知れないとユウに告げられ焦って封印処理を後回しにした事がそもそもの原因…。

それをユウから聞いた時は、私は普通に驚いたしユウもさっき言ってた通りミツキさんが直接介入してくる前にカタをつけたいみたい。

そのことについては、私も同意見なんだけど…。

「おい!!ギンガ!!ちゃっちゃと動いてちゃんと俺を守れよ!!」

「あのね!!別にあんたを守ってる訳じゃないんだから!!あんまり余計な事を言うと…!!」

「おい!!ギンガ!!前見ろ!!前!!」

「えっ…うわっと…。んもぉ～!!邪魔!!ブリッツ・キャリバー!!」

＜オーライ　ウイング・ロード＞

ビューーーーーーーーーン。

ビシュ！

ギューーーーーーーーーーーーン！！

カシャン

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ギュイーーーーーーン！！

ズゴン！！

ドゴーーーーーーーーーーン！！

ユウは、私の後ろから嫌味満載の言葉を私に投げかけそれに対し私は、後ろを振り返りそれに応戦。

すると、ユウから今度は前を見るよう指示が飛びそれに従い前を向くとすぐ近くにガジェットが私に向かって攻撃態勢を取っていた。

それに気づいた私は、ブリッツ・キャリバーにウイング・ロード出すよう指示。

ガジェットが放ったビームを出てきたウイング・ロードを使ってそれを交わしすぐさまカートリッヂを1発ロード。

そして、ガジェットに近づき左腕のリボルバー・ナックルでガジェットを殴りつけた。

殴られたガジェットは、そのボディに私の左腕をめり込ませ爆発。

私は、その爆発が起きる少し前にその場を離脱。

そして、ガジェットは爆発した。

「まったく…手の抜きすぎだぜ…ギンガ。俺が声かけなけりゃ今ごろお前は…」

「それは、あんたが余計な事を言うからで…しょ!!」

ガン!!

「痛ってぇ〜!!な〜にしやがんだ!!この命の恩人に向かって!!それも左手で!!」

「はいはい…。それにしてもユウ…そろそろスバル達との合流ポイントじゃないの?」

ガジェットの爆発を確認した所でユウが立ち止まる私に向かって近づきそして、声をかけてきた。

それに対し私は、ユウが余計な事言った事がそもそもの原因だと告げそして、感情の赴くままユウの頭をリボルバー・ナックルをつけている左手で殴りつけた。

そのことにユウは抗議していたが、私はそれを軽くあしらいそして、そろそろスバル達との合流ポイントが近いことを確認した。

「ああ、そろそろと言うより、ここから右に２００m行ったところって感じだな」

「ここから右って…壁しかないわよ」

私の問いにユウは、右側を指差しながら詳しい位置を教えてくれた。だが、ユウが刺す方向見た私は、そこには壁しかない事を確認しそれをユウに質問した。

「ああ、だから少し遠回りなるがこの先に右折できる所があって…そこから…っておい！！ギンガ！！お前何するつもりだ？」

ユウの話を聞きつつ私は、ユウが指差したあたりの壁の前にたった。

「そんなまどろっこしいことなんてやってられじゃない！！だから…」

「だからってなぁ～…言っとくがギンガ…これでもここは一応公共施設なんだぜ…それに穴を開けたとなりゃ…水道会社から請求書がくるぜ？」

私の話を聞いたユウはどうやら私がやろうとしていることがなんなのかわかったらしくあきれながら私にここが公共施設でありもし、それを壊せばそれを管理している会社から修理代が請求されてくる可能性を言ってきた。

「心配しないで…これは、緊急事態だから…それにもし、向こうか

ら請求がきてもミツキさんがもみ消してくれるでしょうから…と言うわけだから…わかった!!ユウ!!」

「おいおい…結局最後は姉貴だよりかよ…でもまぁ、緊急事態ってのは理解できるしこういう事なら姉貴…と言うよりじじいに頼んだ方がいいかもな?だったら…好きにしな!!」

「そうね…そうなったら父さんに頼んだ方が早そうね…わかった!!そうする!!それと…ありがとう…ユウ」

私は、呆れ顔のユウに今さっき考えた言い訳告げ何かあったらミツキさんにお願いする旨を告げた。

それを聞いたユウは、さらに呆れた様子で頼むならミツキさんよりも父さんの方がいいとアドバイスをくれ私の案に同意してくれた。

そして、ユウの修正案を聞いた私はそれに納得しさらに私の案に同意してくれたユウに俺にいった。

「そんな事は、気にすんな!さっ!!さっさと済ませてスバル達と合流でもするか」

「ええ!!ユウ!危ないから下がってて!!」

「へ〜い」

ユウは、私のお礼に少し照れながら私の背中を押してくれる。その声に私は、ユウに危険だから下がるよう指示ユウもその支持に気のない返事をしつつ私から離れた。

そして、ブリッツ・キャリバーが私たちの周囲及びその先まで危険性そして、誰かを巻き込まない事を確認し私は壁の前に立ち…そして構えカートリッヂを1発ロード。

そして…。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーーーン！！

その４４（後書き）

いかがでしたか？

今回はユウとギンガのみの登場でしたが書いていてギンガもアリかな？とふと考えてしまいました（笑）

さて、次回は通常回はお休みさせていただき特別編をお送りしたいと思います。

ユウ達とナカジマ家の過去に起こったとある出来事をいつものドタバタ形式お送りできれば…と考えております。

以上、左近でした。

ではまた…

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～前編（前書き）

どうも！！左近　遼です。

いつも「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～」を読んで頂きまことにありがとうございます。

この度、お陰様を持ちましてＰＶが３０万、ユニークが３万ＨＩＴを突破！！さらに！！お気に入り小説件数が１００件を超えるという快挙を達成することが出来ました！！

これも読んで頂いた読者の皆様のお陰です！！

本当にありがとうございます！！（ペコリ）

さて…今回は「特別編」と称しまして通常回とは違った内容をお送りいたしたいと考えております。

んで、何をするか？と言えば…。

～序章～

地上本部　オフィス

「え～！！テレビの取材！！！」

部屋の中に大きな声が響きわたたった。

「取材というか…クイントも見たことがあるだろ？「初めてのお使い」って番組？今回あの番組に出演してほしいって地上本部の方にオファーが来たんだ…それでスバル達に白羽の矢が立ったと言うわけだ」

その部屋の主であるゲンヤ・ナカジマ一等陸尉はその部屋にある椅子に腰をかけ、デスクを挟んで向かい側にいる妻であるクイント・ナカジマ准陸尉に今回の内容についてその事情を説明…それを聞いたクイントは、大きな声を上げ、ゲンヤはその声に耳を抑えつつ詳細な内容を伝えた。

「な～んだ…。スバルとギンガに…か…実を言うと今回のオファーって私とゲンヤさんのラブラブっぷりを取材しに来たんじゃないかな？って思ってたんだけどどうやら私のとんだ思い違いって事かぁ～。でも、スバル達で本当にいいの？今回の話をティーダ君辺りが聞いたら…「うちのティアナちゃんの方がテレビ映りがいいしそれにかわいいから変わってくれ～！！」って、大暴れしそうだけど…」

ゲンヤの説明になんだかつまらなそうな声を上げるクイント。

「まぁまぁ、拗ねるなって…。それにあちらさんとしては、人数の多い家族を取材したいのと…今巷を賑わしてる現役最年少執務官様の日常とその関係者から色々と話を聞きたいみてぇ～らしい…」

拗ねるクイントを宥めつつなぜ？自分達の娘達になったのか？という理由を告げるゲンヤ。

「確か…ティーダ君の所って妹さんと2人っきりだもんねぇ…。まぁ、現役最年少執務官の関係者って事ではあるけど…」

その理由に納得しつつも今回の決定に恐らく文句いいに行くのであろうディーダ・ランスター一等陸尉の名を上げるクイント。

「それにしてもティーダかぁ…ヤツなら今回の件に納得してねぇだろうな…間違いなく本部のお偉いさんのところに行って自家談判しに行くだろうな。「ウチのティアナちゃんがなぜ出ないんですかぁ～！！」ってなぁ（笑）なんせあいつはある意味…妹命！！だからな…。実を言えばヤツの妹も候補に上がってたらしいんだが、人数が少ねぇ～ってことでスバル達になったらしい…」

その名を聞いたゲンヤはティーダが本部の幹部に詰め寄るティーダの姿を想像しつつ彼の妹がなぜ外れたかの理由を腕組みしながらクイントに伝えた。

「あれは一種の病気よ…まったく…ティーダ君は顔はいいんだけどあのシスコンさえなければ…ちょ！！ちょっと待って！！ゲンヤさん！！もしかして！！現役最年少執務官の関係者って事は、あの悪がきも出すって事？」

ティーダのことを考えつつもクイントは何かを思いついたらしくゲンヤに向かい声を上げる。

「その通りだ…。なんせあいつは現役最年少執務官のミツキの弟だからな…」

ゲンヤはクイントが言う「悪がき」と言う言葉を聞いた途端なんだか憂鬱そうな表情をし彼を出さなければならない訳をクイントに告げた。

「なんだか私…頭が痛くなってきた…」

「実を言うと俺もなんだが…。まぁ…何も起こらないことを願うしかねぇな」

「そうね…。色んな意味でね…」

2人は頭を抱えつつ今回の件を受けることにした…。

～序章　ＥＮＤ～

と！！言う事で今回は今からおよそ１１年前のユウとスバル、そしてギンガの３人が「初めてのお使い」というどっかで聞いた事があるようなテレビ番組に登場し大冒険を繰り広げる！！といった感じでお送りいたします。

尚、上記の会話文については、ゲンヤがいるオフィスで椅子に座るゲンヤとゲンヤの前にあるデスクを挟んで向こう側にいるクイントとの会話となっております！

「「それでは！！」」

ってぇ～！！クイントさん！！なんでここにいるんですか！！

作者の横に急にギンガ似の紫の紙を靡かせクイント・ナカジマが現れた。

作者コマンド

「戦う」、「はなす」、「逃げる」…

作者は逃げるを選択!!…だがしかしクイントに回り込まれた!!

「ちょっと!!なんで逃げるのよ!!」

作者の逃げ道をふさぎつつなぜ、逃げたのかその理由を聞く為に詰め寄るクイント。

いっ…いや～なんと言うか…そう!!癖!!クセなんです!!

「癖ッてねぇ…まぁ、いいわ!!ねぇ!!ここって前書きでしょ!!だから…タイトルコールを今回は私に言わせてよ!!」

作者の理由を納得しない様子で受けたクイント。そして、その理由を「まぁいい」と言いそれ以上の追求を止めたクイントは、そもそも自分が来た理由を作者に告げる。

な…なるほど…そういう理由ですか…。

（ふぅ～。やれやれ…もしかして、クイントさんとゲンヤさんのラブラブ話を書け!!って言ってくるかと思いましたが…）

いいですよ!!クイントさん!!

「ありがと!!」

作者はクイントの理由にホッとし冷や汗をふきつつクイントの用件を了承する。

それでは!!クイントさん!!お願いします!!

「よ～し！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～特別編！！初めてのお使い前編！！…私たち家族と幼い頃のユウとミツキちゃん達そして、ノアちゃんの過去の思い出…お楽しみ下さい…」

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～前編

初めてのお使い（前編）

ミッド郊外　ナカジマ家

クイント視点

「これを？私一人で？」

「ううん。スバル一人じゃないわよ。ギンガとユウと一緒にだよ」

「本当ぉ！！」

私の目の前には、私の娘でショートの青髪でかわいい半そでの白と青のシャツに赤いスカートを着たこの時４歳の次女スバルが私からある頼まれごとを頼まれていた。

その話にスバルは自分ひとりでするのか？と不安いっぱいの表情で私に聞いてきた。

それを聞いた私は、さすがに４歳の女の子を一人で行かせる訳にはいかないのでユウとギンガにも頼む旨をスバルに伝える。

それを聞いたスバルは不安そうな表情から一変、明るい表情へと変

わっていた。

ウチの旦那にテレビの出演依頼を聞いてからというものどうやってあの3人に用事を頼もうかテレビ局の人達と一緒に色々考えたんだけど…。

でも、中々いいものが思いつかず結局私が休みでゲンヤさんとミツキちゃん…それとノアちゃんが泊り込みでの仕事を無理やり作ってその時に私から3人にお弁当と着替えを彼等がいる地上本部まで持っていってもらうことになった。

ここから地上本部までレールウェイと徒歩でおよそ1時間…。

さすがにそこまで子供3人で行かすことには、結構不安でもあるけど…番組のスタッフの皆さんが見守っててくれるしそれにノアちゃんが仕事を抜け出して3人の周りにいてくれることになってることなど、安全面にも十分対処してくれているから私も了承したんだけど…。

ちなみに今回のことを知っているのは、私と旦那のゲンヤさん、それに番組のスタッフさん達と後はノアちゃんにティーダ君。

ミツキちゃんには、3人が行く事自体内緒でこのことでミツキちゃんにどっきりを仕掛ける事になっている。

そして、今日がその収録日でこの部屋にはいくつもの小型カメラが既にセットされていて今の私とスバルの話もカメラに取られている。

でも、なんでミツキちゃん達の仕事が泊まりになったかと言えば…。セットしたカメラを簡単に見つけちゃうのよ…ミツキちゃん…。

なんせ、今日を含めてこれまで何度か収録を開始しようとしたんだけど、その度にミツキちゃんがセットしたカメラとかを見つけちゃって収録どころではなかったんだよね。

その時は…、確か…？カメラの性能を確かめるためにミツキちゃんには内緒でセットした…って、ウチの旦那が言い訳をしてその場をやり過ごしたんだけど…ミツキちゃん…納得してなかったわね…あれは…。

なんせ、ジト目で「本当ですかぁ～？」って、ゲンヤさんに詰め寄っていたし…。それだからミツキちゃんがいない時にって事になり、ミツキちゃんがいない時間を増やすために泊まりの仕事にしたって訳。

それで、２人の着替えは既に準備済みでお昼のお弁当は私が…じゃなくてミツキちゃんが作り置いてくれたものを私がただ、詰め込んだだけのもの…。

どうもウチの調理器具ってヤワなのよね～？ちょっと力を入れただけど「ベキッ！！」って折れちゃうし、この間だって火のつきが悪いガスコンロを蹴ったらその周辺が吹っ飛んじゃったし…。

「く…クイントさん…それってちょっと違うんじゃ…」

「あらっ？そうなの？」

「あっ！？ユウ兄！！」

どうやら今考えていた事がちょうど部屋に現れた、ウチのお隣さん

で家族ぐるみの付き合いをしている黒いのボサボサの黒髪でTシャツにジーパン姿のユウ（当時6歳）に聞こえていたらしく…。

彼は、呆れた様子で私の話を否定してきた。

その声に私は、あっけらんと答えスバルは、突然のユウの登場に驚きの声を上げてた。

「あれ?ギンガも一緒に呼んだんだけど…ユウ?ギンガは?」

「さぁな?」

部屋に現れたユウに私は、ギンガはどうしたのか?と聞いてみた。

すると、ユウは両手を頭の後ろで組んで「さぁな?」とそっけない態度だった。

そんな時だった…。

バタン!!

「ゆ〜〜〜うーーーーーーーーー!!」

「ちょ…ちょっとギンガ?!一体どうしたのよ?」

「ギン姉ずぶ濡れぇ?」

ユウとそんなやり取りとしていたら部屋のドアが勢いよく開きそこから紫色の髪を腰辺りまで延ばし青いワンピースを着た私の娘で長女のギンガ（当時6歳）が何故か全身ずぶ濡れで赤い怒りのオーラ

を身に纏いさらに、頭の上に何故か蛙をのっけて現れユウの名を叫んでいた。

そのギンガの姿に私は、驚きの声を上げ一方のスバルは何でそんな姿なのかきょとんとしながら口に左手の一指し指の先を加えさらに頭を傾げ疑問の声を上げていた。

そして…恐らくこの事態を仕掛けた張本人であろうユウはギンガのその姿に腹を抱えて笑っていた。

「よくもやったわねーーーーーーーーーー!!!」

「いいじゃねぇか!!それに水も滴るいい女!ってよく言うじゃねぇか!!」

「うるさーーーーーーい!!」

ギンガはユウを見つけるや否や彼に飛び掛った。

それに対しユウは笑いながらギンガに対抗。

唖然とする私とスバルの目の前で2人による大喧嘩の幕が上がる事になった。

よりよってこんな時に…。

私は、顔に手を当て「はぁ〜」とおおきなため息をした。そして、目の前ではユウとギンガが蹴ったり殴ったりと…ケンカを繰り広げそれを見たスバルは不安げな表情でオロオロと私のほうを見ていた。

「もう！！いいかげんにしなさーーーーーーーーい！！」

ガン！！ゴン！！

「痛ってぇーーーーーーーーー！！」

「痛い！！なんで私まで…（泣）」

「これがケンカ両成敗！！ってヤツよ！！まったく…」

私は、２人のケンカ止めるため二人の間に割って入りそして、２人の頭に拳骨を振り落とした。

私の拳骨を食らった２人は、殴られた頭を抑えつつその場にしゃがんでいた。

そして、どうしてそうなったか？と聞けば、どうやらユウがお互いの家をつなぐ渡り廊下の上に水の入ったバケツをセット。

ちょうどそこにギンガ現れ足元に仕掛けてあった細い紐に足をひっかけそれを合図にギンガの頭の上に水の入ったバケツが落ちて来た…って。

ガン！！

「痛ってぇーーーーーー！！二度もぶったな！！親父にもぶたれたことないのに！！」

「そりゃそうよね…両親がいないんじゃ殴られないわよね…」

大体の事情を知った私は、ユウに拳骨をもう1発。
するとユウはどっかで聞いたような名言をいいつつ殴られた頭を抑えていた。

「ギン姉?意外と毒舌?」

「どこで覚えたのよ…そんな言葉…」

「ん?あれ!!!」

ユウの声を聞いたギンガは、ジト目のままユウにきっぱりと言い放つ。

ギンガの声にスバルはギンガの言った事が毒舌では?と言い出しそれを聞いたギンガはスバルがどこでそんな言葉を覚えたのか確認。

その問いにスバルはリビングにあるテレビを指差した。

それも満面の笑みを浮かべながら…。

数分後…。

「それで、これを父さん達の所まで持っていけばいいの?」

「そう。本部についたら受け付けの人に言えば父さん達の所まで案内してくれるように母さん頼んでおくから…だからお願い!!」

私はお願いのポーズをしながらずぶ濡れだった服を別の今度は白い

ワンピースに着替えたギンガとユウにスバルと同じ用件を2人にも頼んだ。

「や…（ガン！！）ってぇ！！まだ言ってねぇのに殴るな！！」

「どうせやだ！！って言うんでしょ？だったら…先手必勝！！」

「せ…先手必勝…って…」

「って言うか…問答無用？」

「スバル…あんた…」

私のお願いを聞いたユウは即座に断ろうとしたが、それに気づいた私は、ユウの頭に3度拳骨を振り落とした。

その私の行動にユウは抗議するが私は、右手で握り拳を自分の目の前でつくりその声を一蹴。

すると、私の声にギンガが疑問の声を上げその声に今度はスバルはどっかの宇宙人が言ってそうなセリフを再びの満面の笑みで言い放ち、それを聞いたギンガは「またテレビでそんなセリフを…」と思いつつスバルの話を苦笑いで聞いていた。

とまぁ…こんな感じだったが隔して3人による「初めてのお使い」が幕を開けることとなった…。

「いってきま～す！！」

「いってらっしゃ～い！！気をつけていくのよ」

「「「は〜い！！（へ〜い…）」」」

私の話をようやく受けてくれた3人は大急ぎで仕度を整え出発した。

私は玄関の外まで3人を見送った。

スバルは元気な声を上げながら私に手を振りながら声をかける。

その声に私は、手を振り返しながら気をつけていくよう声をかけた。

その声に3人とも元気な声でそれに答えてくれた。

ちなみにユウは大きな荷物を背負って振り返らず手を振りスバルは背中にピンクのリュックを背負いギンガに手をひかれこちらをギンガと一緒に振り返りつつ手を振る。

ギンガは、スバルの手を引き背中にスバルよりも一回りおおきなリュックを背負ってこちらを向き手を振っていた。

（ノアちゃん…。後はお願い！！）

（あいよ！！まかしとけって！！それと向こうへの連絡の方はたのんぜ！！）

（了解。ノアちゃんも気をつけてね）

（あいよ！！そいじゃ！！いってくるわ！！）

（いってらっしゃい）

私は、その3人の姿を見つつ魔法で姿を隠しているノアちゃんに念話で後のことを頼んだ。その声にノアちゃんは同じく念話で答え向こう…つまりは地上本部にいるティーダ君達にスバル達が出発した旨を伝えるよう告げた。

その話を了承しノアちゃんに気をつけるよう伝えた。

そして、私を了承したノアちゃんは姿をけしたまま色んな人に扮した番組スタッフの皆さんとともに3人を追って出発した。

そして、みんなが出発したのを見届けた私は、本部に連絡を取りつつ先ほどのケンカのシーンをカットしてもうよう番組スタッフに話をしようと考えていた。

祝!!30万HIT記念~初めてのお使い!!~前編（後書き）

ノア
「やっぱり…1話じゃ終わんねぇか…」

作者
「ええ…。色々と細かい描写なんかとかネタを入れていったらにあまりにも長くなりそうなんで今回はここまでと言うことにしました（笑）」

クイント
「でも!!いいんじゃない?これはこれで」

作者
「く…クイントさん?まだいたんですか?」

クイント
「いたら悪い?」

作者
「いえ…そういう訳では…」

ノア
「それにしても~クイントは今は足ねぇのか?」

クイント
「そうよ!!なんせ今の私…幽霊だから!!（笑）」

ノア

「ゆ…幽霊!!…だから頭に変な三角の布をつけてんのか…」

クイント
「そうよ。これってどうやらお約束みたいな物らしいのよ…それに手をこうやって…体の前に手の甲を相手に向けて…う～ら～め～し～や～ってね!!って…あれ?ノアちゃん?」

ノア
「(ガクガク…ブルブル…)。さすがに本物がやると怖ぇ…」

作者
「さすがに季節はずれではありますが…。それにこっちが何もしていないのに照明が落ちてクイントさんの周りに青い火の玉までできましたからね…。効果抜群でした」

クイント
「まぁ…どうやってやったのかは企業秘密だけど…次回はどうなるの?」

作者
「そうですね…。次回は今回の続きになる予定で例のシスコンにも登場して頂こうかと…」

ノア
「これを見たらティアナが怒るんじゃ…」

クイント
「その辺は心配ないみたいよ…ほら!あそこ見て」

クイントが指差す方向を見るノア。

そこには…。

ティアナ
「こらーーーーーーーーー！！いいかげんにここからだしなさーーーーーーーい！！」

スバル
「そうだよ！！いいかげんに出してよ！！」

ゲンヤ
「てめぇ！！いつの間にこんな檻なんか作りやがった！いいからだせぇ！！」

ギンガ
「なんで私までぇーーーーーーーーー！！」

ノア
「なるほどな…。予め檻を用意しておいてそこに文句をいいそうな連中を入れといたって訳か…それなら安心だな…」

クイント
「私としては、久しぶりにスバル達に会えたと思ったのに…」

作者
「まぁまぁ、檻越しにはなりますがこの後にでもお話をして下さい。おっと…その前に…それじゃクイントさん。〆のセリフをお願いします」

クイント

「オッケー！！それじゃ！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　特別編…初めてのお使い中編！！テイクオフ！！」

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～中編（前書き）

フラナガン　地上本部付近

ティーダ視点

「はい…、はい…。了解しました。それでは」

「お兄ちゃん、今のってお仕事の通信なの？」

「う～ん…そんなようなものかな…ティア」

私は、今地上本部付近のレストランで我が愛しき妹のティアナちゃんと共に少し遅めの朝食の真っ最中。

そんな時だ…。クイントさんから通信が入り娘達が出発したとの連絡がきた。

その通信をしていた様子を見た我が愛しの妹のティアナちゃんは、少し寂しそうな様子でクイントさんからの通信内容を聞いてきた。

う～ん…寂しげなこの表情！！

やっぱり、ウチのティアナちゃんは世界一かわいい！！

「あ…あの～お兄ちゃん？…お兄ちゃんってば！！」

「ん？どうした？ティア？」

「もう！！どうしたもこうしたも私の話！！聞いてたのぉー！！」

どうやら私は、自分の世界に浸っていたようで、その様子を見ていたティアがオレンジ色の髪をツインテールでまとめお気に入りのワンピースを着た我が最愛の妹（当時５歳）は、話を聞いていなかった私に対しご立腹の様子…。

それにしても…怒っているティアもかわいい！！

「お兄ちゃん…いいかげん帰ってきてよ…」

「あっ…すまんすまん（笑）兄さん、あまりにもティアの可愛さについ…うっとりしてたよ（笑）」

私は、頭の後ろを手でかきながら我が最愛の妹のティアにそんな言い訳をしていた。

「お兄ちゃん…そんな朝からそんな事言わないでよ！！」

それを聞いた我が最愛の妹のティアは顔を赤らめ私から視線を外し恥ずかしそうな表情で私の話に答えた。

この赤面の表情！！う～ん！！やっぱりかわいいぞ！！ティア！！

ティアナ視点

まったく…お兄ちゃんってば…。

私は、お兄ちゃんの口から飛び出した言葉に恥ずかしい思いをしつ

つまたも自分の世界の中に入りこんでしまった兄をみつつため息をついた。

それにしても…今の連絡…仕事の連絡みたいだったけど…なんかおかしい…。

もしかして!!あのメガネのオタク女（ミツキの事）からの通信!!

ゆるさない…。私のお兄ちゃんを誑かすあの女…。

お兄ちゃんはわ!た!し!が結婚するんだからーーー!!

…と私は、そんな考えを巡らせつつ絶賛妄想突入中の兄が帰ってくるのは待つのであった…。

時は遡り…１１年後…現在…。

ティアナ（１６歳）視点

「…って、ティア…。人のこと言えないよ…これじゃ…」

「うっさい!!って言うか作者!!なんで私まで出してるのよ!!」

今私とスバルは、作者が用意した檻の中で１１年前の自分と兄さんの姿を用意された画面から当時の様子を見ていた…。

私の横でスバルは、笑顔でさっき私がスバルのそのあまりもの変わりように驚きの声を上げていたのを持ち出してきた。

その声を聞いた私は、その声に反論しつつ作者へ文句を言った。

「心配しないでティアナ…。この後スバルが大暴走するから…」

「…！？ってぇ！！ギン姉！！そんな事してないよぉ～！！！」

「な～に言ってんだ…ただ、おめえが覚えてねぇだけじゃねぇか？なぁ、クイント…」

「そうよ♪スバル。あの部分って確かテレビ局の人達にカットしていったんだけど、結局放送されちゃって…色々と大変だったんだからぁ～」

私の作者への文句を聞いたギンガさんが私の肩を叩きつつこれから起こる事からすればこのことは、ほんの序章に過ぎないことを告げ、そのことにスバルはそれを否定するがそれをナカジマ三佐、そして、初めて会ったスバルのお母さんからそれが事実であったことを告げられた。

それを聞いたスバルは…。

「むぅーーーーーーーーーーーー！！2人してぇ！！なら確かめようよ！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～特別編　初めてのお使い後編…始ります！！…私はそんな事してなーーーーーーーーい！！」

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～中編

初めてのお使い（後編）

時は再び遡り…今から１１年前…。

フラナガン　地上本部の最寄駅

ユウ視点

「ついたぁ～！！」

「ふぅ～…ようやくついたか…」

現在、俺とギンガそして、スバルの３人はレールウェイに乗って地上本部に一番近い駅までたどりついた。

改札をでて地上にでた俺たちは、日の光を浴びながらまずはスバル到着した事を喜びつつ声を上げその声に俺が続いて声をだした。

「まだまだこれからよ！！なんせこっから歩かなきゃならないんだから！！」

俺とスバルの後から出てきたギンガは、まだこれから先があることを忘れないで！！と言わんばかりに俺たちに注意する。

「わ～ってるよ！！ギンガ！！それにしてもよ～。なんで俺だけこ

んなに荷物が多いんだ？中身が何なのか聞いてたか？ギンガ？」

俺は、ギンガの声に答えつつ自分の背中に背負っている自分の身長くらいある大きな荷物がなんなのかギンガに確認した。

「あ～、それって私たちのお昼なんだから転んだりしないでね！！」

「ユウ兄！！転んだりしたらメッ！！だからね！！」

「へいへい…」

俺の話を聞いたギンガがその中身は自分達のお昼である事を告げた。

そして、それを聞いたスバルが俺の前に回りこんで怒った様子で俺に転んでその中身グッチャグチャにしないように言ってきた。

それを俺は、やれやれ…といった様子でスバルに答えた。

そんなやり取りをしながら俺たちは、何も知らないウチの姉ちゃん達が待つ地上本部へと歩き始めた。

俺の横をギンガが並んで歩きその間をスバルが俺とギンガに手を握り３人並んで歩く。

いつの間にか出来た…でも、これが１番落ち着く…俺達にとって当たり前な光景…。

でも、人が多く歩いているため３人そろって横並び…と言うのが中々出来ないがそれでもスバルの手を俺もギンガも離そうとはしなかった。

なんせコイツの手を話してしまうと勝手にどっか行っちまうからなぁ～…。

とまぁ…考えを巡らせていたら…あれ？スバルの手の感触が…ない？！

「おい！！ギンガ！！スバルいるか！！」

「えっ？スバル？あの子ならここに…てぇ！！いないッーーーーーーーーーーーー！！」

「まじかよ！！と…とにかく探すぞ！！」

「うん！！わかった！！」

俺の声を聞いてスバルがいないことに気づいたギンガは、大きな声を上げた。

それを聞いた俺は、ギンガを責める事よりも先にスバルを探す事を優先させギンガにもスバルを探すよう告げギンガもそれを了承した。

お互いに魔力が使えることを知っているので何かあったら念話で通信を取る事を確認し二手に分かれスバルを探し始めた。

それから数分後…。

ギンガ視点

「全くこの子ったら…」

ユウと分かれてスバルを探し始めた私は、とりあえずあの子が行きそうなところを探し始めた。

すると…。

「どれにしよっかな～♪」

そんな事を言いつつアイス屋のショーケースに並ぶ沢山のアイスを見ながら右手の人差し指を加えアイスを選んでいたスバルを発見！！

まだ、アイスを買っていない事を確認しスバルをその店から連れ出した。

「うーーーーーーーー私のアイス～！！」

「はいはい…また今度ね～」

「むぅーーーーーーーー！！」

私は、スバルのシャツの奥襟を掴みアイス屋の方向を未練たっぷりの様子で見いるあの子を引きづりながらその場を後にした。

でも…まだ続くのよね…こういうのって…。

そんな事を考えていたら本当に続いたわよ！！

何があったかと言えば…。

～その1～

「ギン姉？ねぇ！ギン姉！！ギン姉ってば！！」

「もう何よ！！スバル！！」

「あれ！あれ！！ミー姉！！ミー姉だよ！！ギン姉！！」

「ちょ…ちょっと！！スバル！！そんなに引っ張らないで！！」

私の横を歩くスバルが握っていた私の手を引っ張りながら呼ぶんでそれに答えたところスバルが右手の人差し指で指を差しながらミツキさんがあそこにいると告げてきた。

まっさか～？と思いつつ私はスバルが指差す方向を見たところ…。

そこにいたのは…。

「ちょっと先生！！何やってんのよ！！」

「えっ？ですからあの人に菫川先生の本を買ってもらおうとこうして念じているんですよ？さぁ！！そこの両手に持つ本のどっちを買おうか悩んでいるそこのあなた…その右手に持つ本は、元に戻してその左手に持つ菫川先生の最新刊を…」

「そんな恥ずかしい事しないでぇ！！」

私がスバルが指差した方向を見たところ本屋の店先にいた2人組み

の女性がいるのが見えた。

その女性と言ったら、一人が年齢が２０~３０歳くらいで黒ブチのちょっと大きめのメガネを着けて髪が黒のロング…。

そして、どこかの制服に身を包んでいる人がなぜかかめ○め波を撃った後の格好をしながら何か念ののようなものを送っている人。

それともう一人が１０~２０歳くらいで肩に届くか届かないくらいの茶髪で頭にカチューシャをつけている私服の女性がなんだかひと悶着を起こしていた。

どうやらスバルは、その2人組みの一人の黒ブチのメガネをつけていた方の女性を見てミツキさんだと言ってるみたい…。

「ミー姉ーーーーーーーーーーーーー!!!!」

「ちょ!コラっ!!待ちなさい!!スバル!!」

スバルは、私が止めるのを聞かずにその二人組みに向かって猛ダッシュで突撃しようとした。

それに気づいた私は、突撃するスバルを急いで追いかけ両腕つかみ店に入る間際で止めスバルを持ち上げた。

「むぅーーーーーー!!ミー姉!!!って…あれ?進んでない?…あれ?ギン姉?」

スバルは、私が持ち上げたにも関わらず両足をジタバタさせていたが、店先から進んでいない事を認識した後私の存在に気づきジタバ

タしていた足を止めた…。

ちなみに…この頃のスバルは、ミツキさんの事をミー姉と呼んでいた。

どうしてか言えば、あの子…ミツキさんの「ツ」がどうしたか「ちゅ」と言ってしまうらしくそれが恥ずかしいため「ミー姉」と呼んでいた。

「スバル、あれはミツキさんじゃないよ」

「え～!!ミー姉じゃないの?」

「だって…ミツキさんってあんなに胸大きくないでしょ?それに…ほら!あんなに背も大きくないし…それに…ミツキさんってザ・ペーパーなんてコードネーム持ってないでしょ!!」

「あ～!!本当だぁ～!!って、ギン姉…なんでそんなに詳しいの?」

「さぁ?なんとなく…ね!」

私は、スバルがミツキさんでは?と言ってた人が違う人であることを説明。

それを聞いたスバルは、ミツキさんの所へと行こうとしてたが、改めて見てみた所それが違う人であることを確認しようやく納得するもどうして私がメガネの女の人の事について詳しいのか聞いてきた。

それを聞いた私は、そのことについてはお茶を濁しスバルが納得し

た事を確認。

そして、持ち上げていたスバルを下ろしその場を後にした…。

～その2～

それから少ししてからだ…。

私は、ユウと合流するために指定された場所に向かっていた所…。

「ねぇ？スバル？ミツキさんに会ったらなんて言おうか？…あっ…あれ？これ…お人形…てぇ！！スバル？スバル？！！」

私は、スバルの手を握りながら合流ポイントに向かいそして話かけた所スバルからの返事はなかった。

それに気づいた私は、握っていた自分の手を見てみた所そこには、なぜか熊のぬいぐるみの手を握っておりスバルの姿がそこにはなかった。

やられた！！！

そう思った私は、急いでスバルを探し始めた。

？？？視点

「んもぉ～！！この辺って違法駐車多すぎだよ！！」

「そうですねぇ～頼子さん。確かに多いですね…この辺」

私と頼子さんの2人は現在、フラナガンの地上本部付近の道路で違法駐車を取り締まっていた。

それにしてもこの多さ…道路の片側にまるで数珠繋ぎみたいに車が停車している。

ここは、駐車禁止区域のはずなのに…。

「それにしても葵ちゃん。なんで私達こんな所で仕事してるの?」

「さぁ?でも!!違法駐車どこでも一緒です!!ですからさっさとやってしまいましょう!!頼子さん!!」

「おーーーー!!」

私の声に警察服を着た頼子さんは、右手を上げ声を上げた。

その声に同じく警察服を来た私は、気合を入れなおし取り締まりを再開した…。

そんな時だ…。

「???…あの~頼子さん?」

「どしたの?葵ちゃん?」

「なんか…さっきから後ろから視線を感じません?」

「まっさか~?」

後ろ側から妙な視線を感じた私は、頼子さんに声をかけた。それを聞いた頼子さんは、そんな事はないことを言いつつ私の変わりに後ろを見てくれた。

「ん？」

「よ…頼子さん…どうしましたか？」

「ちょっと待って…だるまさんが…転んだ！！」

「あーーーーーー！！いたーーーーーー！！」

「えっ！？頼子さん！！どこっ！！どこですか！？」

「あそこ！！あの電柱の影に！！…ってあれっ？いない…」

「確かに入ましたよね…今…」

「うん…確かに…もしかしてこれって…」

「「幽霊～！！！！」」

「「いやーーーーーーーーーーー！！」」

私の後ろを見た頼子さんは、何か気づいたらしく私の問いかけを静止し一度前を向きすぐさま後ろを振り返った。

そして、振り返った頼子さんは、何かを見つけたらしく声を上げそ

の声に私も振り返り電柱の影に青い髪の小さな女の子を見つけた。

でも…瞬きした次の瞬間…その小さな女の子は、先ほどまで入たはずの小さな女の子は入なくなっていた…。

頼子さんと私は、その子が入たことを確認しお互いの顔を見合った。

そして、急に入なくなったことから私達は、それが幽霊だと思いその場で座り込みながら抱き合い大きな声を上げた…。

まさか…本当に幽霊?

ユウ視点

「まったく…頼むから一人でどっかいかないでくれよな!スバル!!」

「ん!!わかった…ユウ兄」

俺は、スバルの手を握りつつギンガとの合流を急いでいた。

俺の声にスバルは、先ほどとは打って変わり俯いたままおれの声に答えた。

って言うか俺はスバルを殴ってねぇぞ!!

さっき電柱の影にいたあいつを見つけて誰かに見つかったみたいだから急いでその場からスバルを抱いて逃げ出してきたんだから!!

ちなみに…スバルになんであそこに入たかを聞いた所…

「ミー姉だと思って行ってみたら…違う人だった…」

とのこと…。

まったく…こいつは、メガネをかけた黒髪のロングの女の人をみるとすぐに姉ちゃんだと思って突撃しちまうんだよな…。

まっ！でも、最近はどうやらコイツも学習したらしく見つけてもいきなり突撃しないで近くで様子をみることをしているらしいがな…。

と言ってもそれをするのは、3回中1回だけだが…。

どうやら今回は、突撃する前に確認したようで、あのどっかの制服を来た2人組みの一人のメガネをかけ髪は黒で背中くらいまで伸ばした小柄の方の女の人を姉ちゃんだと思って近づいたがそれが違う事がわかってそこから離れようとしたら向こうに見つかってフリーズしていた所、俺がみつけてその場から脱出したって事か…。

それにしても…あのメガネの人…姉ちゃんに似てたな…。

それに…あの制服…いったいどこのだ？

とかなんとか考えつつ俺はギンガと念話をしながら合流し地上本部へと向かう事となった…。

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～中編（後書き）

作者
「ふぅ～！！今回はやりきった…」

はやて
「何やりきった感にひたってるんや！！おんどりゃーまたやらかしたなぁーーーーー！！」

といいつつ、額の汗を拭う作者に飛び蹴りをかますはやて。

「ふぎゃーーーーーーーーー！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーーーン！！

作者は逃げる事が出来ずはやての飛び蹴りをまともにくらい壁まで飛ばされる。

作者
「い…痛ったぁーーーーーーーーー！！いいじゃないですか！！たまには！！」

はやて
「たまにはってなぁ！！スバルの暴走に託けてあんたまた勝手に他の作品のキャラ出しおって！！それも二組も！」

作者
「いやーーーなんせただ、スバルを迷子にするだけじゃ面白くないなぁ～なんて思いまして…。あっ！そうだ！！いっそのことあれや

っちゃいましょう!!はやてさん!!」

はやて
「あれって…?なんや?この紙…ふむふむ…よっしゃ!!それならいくでぇ〜!!」

作者、はやて
「「八神はやてからの挑戦状!!」」

作者
「という訳でいきなり始りましたが、何か言えばここでクイズの出題です!!これからはやてさんから今回の話の中からクイズを出題してもらいます。答えがわかった方はこの後にある感想の一言に答えを書いて送信してください。ちなみに今回は、出張件などは出ません!!ただ、正解すると言う名誉のみをかけ答えて頂きます。答えは、次回更新時の後書きに掲載させて頂きます!!それでは、はやてさん!!問題をお願いします!!」

はやて
「よっしゃー!!それじゃ問題や!!今回の話の中で作者の暴走によりゲストとして登場してもらったあるアニメのキャラがおったよな?ほら…「その1」、「その2」って所に出た…。今回は、「その1」「その2」に登場したアニメのキャラ名もしくは、そのアニメ作品を答えてな!!

ちなみに答え方は

その1　○○

その2　○○

と言った感じで○○の所にそのキャラクター名もしくは、そのアニメ作品名を書いてな。キャラクター名については、それぞれ2人づつ出ておったけどそのどちらか、もしくは、その両方をなるべくフルネームで書いてな!!ちなみにこのキャラアニメにでてへんやん!って突っ込みはなしやでーー!!それじゃ応募の方待っとるでぇーーーーーーーー!!」

作者

「という訳でひさしぶりにクイズを出してみました。答えが解った方は、感想欄よりクイズの答えを記載し送信してください。答えの方については、次回更新時の後書きにて明らかにしたいと思います。それでは!!次回!!」

はやて

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　特別編…初めてのお使い後編!!テイクオフ!!」

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～１後編（前書き）

フラナガン　地上本部　受付

ギンガ視点

「いらっしゃいませ！ようこそ時空管理局地上本部へ！」

「あっ…あの～ギンガ・ナカジマと言いますがゲンヤ・ナカジマ一等陸士をお願いします」

「はい…。ゲンヤ…ナカジマですね？かしこまりました。少々お待ち下さい」

あれから…私は、スバルを見つけたユウと合流しその後地上本部へと到着。

そして、受付にて父さんを呼び出してもらっている。

私は、母さんからもらったメモを見ながら受付のお姉さんにその内容を伝える。

それを聞いた受付のお姉さんは、通信画面を連絡をとっていた。

その結果を待っているのは、私一人…。

あの２人と言えば…。

ユウ視点

「ユウ兄?ミー姉は?ねぇ?ユウ兄?ミー姉は?…」

俺とスバルは受付から少し離れたエントランスの隅っこsで壁によっかかり頭の後ろに両手を合わせつつギンガを待っていた。

スバルは、俺の横から左手で俺のジーパンを引っ張り右手の人差し指を咥えながら姉ちゃんはどこか?と何度も聞いてくる。

「んあ?今ギンガがゲンヤのおっちゃんを呼んでもらってるからおとなしくここで待ってな…ってぇ!!」

俺は、スバルにギンガが戻ってくるのを待つよう告げたが…。

「よぉ〜し!!あっちに行こう!!れっつらごー!!」

ガシ!!!

ジタバタ…ジタバタ…。

「キーーーーーーーーーーーン…あれ?…ユウ兄?」

「全く…お前なぁ〜…」

どうやらスバルは俺の話をまっ…たく聞いていない様子で自分が行く方向を指差し両手を飛行機の翼のように広げどっかに行こうとしていた。

それに気づいた俺は、スバルのリュックを掴んでまずはその移動を止めそして、持ち上げた。

すると、スバルは、俺が持ち上げた事に気が付いていないらしくまるで空中を走っているかのように足をジタバタさせどっかで聞いたような声を上げていた。

それから少したった所で、ようやく俺に持ち上げられている事に気が付き俺の名を呼ぶスバル…。

その声に俺はただ…呆れるしかなかった…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～特別編！！初めてのお使い後編！！　はじまります！！以上！！スバル・ナカジマ！！４歳！！でした！！」

スバルは俺に持ち上げられながら…右手を前に出し自分の年齢である「４」を出しながら…しかも！カメラ目線でタイトルコールを言うのであった…。

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～１後編

初めてのお使い（後編）

フラナガン　地上本部　執務官室

ミツキ（この時９歳）視点

「いい！！この部屋からぜぇ～たいでない事よ！！今日は予定がいっぱいなんだから！！いいわね！！ミツキ！！」

「わかったわよ！！何度も言わないでよ！！オーリス」

「それじゃ、１時間後にまた来るから…じゃあ！！」

「了解～」

バタン！！

「ふぅ～…ようやく休憩…」

私は、自分が座る椅子の背もたれに体を預けようやくおとづれた休憩を少しだけ満喫していた。

なんせ一昨日…いきなりゲンヤさんから言われた急な用件…そのお陰で私は、地上本部に泊り込み…。

その急な用件ってのは、何かと言えば書類整理に武装隊のデバイス

のメンテなど等…それが終わったら少し仮眠を取って…朝からはマスコミへの対応…って、まるで急に作ったかのような用件をこなしていた。

それで、なんでオーリス（当時１１歳）がここにいたのかと言えばなんでも夏休みの自由研究で私の１日マネージャー体験をしてそれを学校で発表するんだって…。

まぁ…、以前からな何かあったら手伝うとは言ってたけど…まさかこんな事になるとはねぇ…。

～回想～

「どうしたの？こんなに朝早くから？」

オーリスは、今日の朝お気に入りのワンピースにメガネをかけやる気満々で現れたかと思えば…。

「いい！今日１日私がミツキのマネージャーだから！！それでこれが今日のスケジュール！！」

いきなり執務室に現れたオーリスは、自分が１日マネージャーだ！と告げ私のデスクの上に紙束を置いた。

「ちょ…ちょっと！！いきなり来てマネージャー？それにこのスケジュールってぇ！？しかもこれって分刻みじゃない！！」

「そうよ！！なんせ現役最年少執務官だからねぇ～ミツキは！マスコミ各社から取材の依頼が沢山きてたのよ！でも、お父様ったらキチンと対応してなかったみたいなのよ。だからここは、私が人肌脱

いで1日マネージャーとして対応するって事でお父様と交渉したのよ！！私の自由研究のためにね！」

「私の自由研究のためにってねぇ…」

オーリスは、私の前に立ち右手の一指し指を上に頭の横に上げ左手は腰におきつつ事の次第を私に告げた。

それを聞いた私は、オーリスの言葉に呆れつつレジアス中将がオーリスに押し切られる様を想像していた。

「と！言うわけだから！！行くわよ！ミツキ！！」

「ちょ…！ちょっと！！ひっぱらないでよ！！まだ私は納得して…」

「問答無用！！」

「そんなーーーーー！！」

オーリスは腕時計を見てつつ時間を確認。そして、私の腕をつかみ部屋の外へと連れ出そうとする。

私は、腕を引っ張られつつオーリスに抗議するが、即効で却下され執務室を後にするのであった…。

～回想ＥＮＤ～

「さぁ～て…これでようやく一人になれたし…いつまでもこんな事に付き合ってられないわよね…っと…」

私は、腰をかけていた椅子から立ち上がり周囲を確認。

「カメラは…ない…ね。盗聴器も…ない！よし！ここは部屋の1階だからね～。楽勝楽勝」

そして、部屋の中を細かくチェックし盗聴器等がない事を確認した上で部屋についている窓を静かに開けこの部屋から脱出しようとした…。

すると…。

ぷにっ…。

「あっ…あれ？何これ？…」

部屋の窓を開け頭から外に出ようとしたところで私の鼻に何か金属製の筒状なものがあったった感触がしたので小さく声を上げた。

「何これ？じゃねぇ～だろ？どこに行こうってんだ？ミツキ？」

「あら～…ヴァイスにストームレイダーじゃない…。いったいなんでここにいるの？」

私が声を出した直後、武装隊の制服姿の一人の男性隊員ヴァイス二等陸士（当時１３歳）がそこに立っていた。

どうやら私の鼻に当たっていたのは、彼のスナイパーライフル型のデバイス「ストームレイダー」だったようで…。

「どうしたもこうしたもねぇだろ？頼まれたんだよ・オーリスに。

ミツキが逃げねぇように見張っててくれってな」

「なるほど！！（ポン！）それじゃ！！」

「それじゃ！！ってそのまま行こうとすんな！！打ち抜くぞ！！」

「わっーーーー！！わかった！！わかったから！！引き金を引こうとしないで！！」

ヴァイスの話に耳を傾けつつ私は、窓から外に出てその理由に左手をグーにした右手の小指付近で「ポン」と叩きつつそのままその場を去ろうとする。

だが、それに気づいたヴァイスは私にストームレイダーを構えその引き金に指をかけた。

それを見た私は、両手を上に上げ降参のポーズをとりながらヴァイスに撃たないよう頼み込んだ。

「全く…。相変わらず時間が空いたらそうやって逃げたそうとするから…だから部屋に盗聴器やらつけられるわ、俺に見張られるんだよ…」

「あははは…。まさかヴァイスがいたなんて…まいったまいった（笑）」

ヴァイスは、両手を上げる私を見構えを解きつつなんだか呆れた様で建物に背を向け芝生の上に座った。

それを聞いた私は、頭をポリポリとかきつつヴァイスが座った場所

の横に座る。

ヴァイスとは、私が地上本部に勤めて始めた頃、オーリスから紹介してもらってからの知り合い。

私とは、４つも歳上のくせに先輩づらを一切せず、あげく初めて会ったときに「タメ口禁止!!」と言い放った変やヤツ…。

ちなみにオーリスとも知り合いでなんと!ヴァイスがたまたま地上本部を訪れていたオーリスをヴァイスが彼女がレジアス中将の娘だと気づかずにナンパしたんだって!

それで、オーリスが中将の娘だと気づいたヴァイスはオーリスに事あるとごとにナンパの件を中将に言いつけるぞ!って脅され色々とコキ使われてるって訳。

今回もその一環だと思うんだけど…。

ちなみにヴァイスとは、私が執務官になる前から何度か一緒に仕事をしていて執務官になってからも彼に色々と手伝ってもらっているし年が近いせいかオーリスを含めた3人で何度か遊んだりもしている。

そのせいか…地上本部では、私とオーリス、ヴァイスの3人で「地上本部のヤンチャトリオ」なんて言われたりもしていた。

まったく…。いい迷惑よ!いっつもヴァイスが言い出しっぺで私とオーリスがそれに巻き込まれてるのに…。

「なに言ってんだ。確かに俺が言い出しっぺだがそれにオーリスがのってきてさらにそれを裏で操る参謀役をやってるのはどこのどいつだっけ？」

どうやら今の事が声に出てたらしくジト目をしながらこちらを睨むヴァイス…。

「さぁ？」

その声に私は、両手を上げ「私にはわっかりませ～ん」と笑顔でヴァイスにジェスチャーをしそれに答える。

ヴァイス視点

まったく…すっとぼけやがって…。

俺は、ストームレイダーを壁にかけその壁を背もたれにして芝生の上に足を伸ばし座っていたらミツキがその横に座った。

「それにしても、脱出して何するつもりなんだ？もしかしてまた例のヤツのことを…」

俺は、ミツキの顔をみつつなんで抜け出したのかその理由を聞いた。

そして、俺が例のヤツと言った途端今まで笑顔だったミツキの顔が真剣な表情へと変わっていった。

「そうだよ…。だって、あいつは私が見つけなきゃ…」

ミツキは空を見上げつつ俺の問いに答えた。

「おいおい…それってゼスト隊長達が追っている件の重要人物じゃねぇかよ！それを隊長達に許可なく探すってなぁ…それに例の独立部隊もそいつを追ってるってるが今だにその痕跡すら見つからねぇって言うじゃねぇか？それをおまえ一人でって…。それに今忙しいんだろ？オーリスの件はともかくとしても…。そんなんじゃお前の体が持たねぇぞ？！」

俺は、ミツキの答えに止しかかっていた壁から上体を上げミツキに詰め寄る。

「心配してくれてありがとうヴァイス。でも、あいつは私がみつけなきゃ…。例えあいつが死んでいたとしても…それにあいつのお陰で今の私があるんだから…今度は私が！」

ミツキは、詰め寄る俺に顔を向け最初は笑顔で…そしてその表情はすぐにまるで決意が満ちた表情で俺に答える。

ミツキの右手には、真っ黒になったロケットが握られており俺の問いに答えた後、そのロケットの中をあけ中にある少し焦げた男女の大人が2人…その前に赤子を抱いた少女…おそらくミツキであろう少女とミツキと同じくらいの背格好をした茶髪の少年の姿があった。

「まさに命がけって訳か…。んで、どいつなんだ？そいつは？」

俺は、ミツキの話を聞きつつその写真を覗きこんだ。

「えっ？あっ…。この写真に写っているのが私のパパとママ…私が抱いてるのが弟のユウで…この男の子が…」

「例のヤツって訳か…。よし！ストームレイダー！この画像を撮っておいてくれ」

＜了解＞

俺は、ストームレイダーを待機モードに戻しミツキの写真をストームレイダーにその画像を撮ってもらった。

「ちょ…！！何すんのよ！」

ミツキは俺の取った行動に驚いて急いでそのロケットをポケットにしまった。

「な～に…もし、俺が任務の時にそいつを見つけた時のために記録に残しておこうかな？ってな。ちなみにもう保存しちまったからしまっても遅いぞ」

「んもぉ～！！ちょっと！ストームレイダーをこっちに寄越してぇ！！」

「や～だよ～！！」

ミツキはストームレイダーが既にその写真を画像として保存してしまっている事を知り俺からストームレイダーを取り上げようと上体を上げる。

それに気づいた俺は、持ってるストームレイダーを上に上げミツキに取られるのを阻止しようとした。

「そんなに俺にこのデータを持っていられるのが嫌か？もしかして…こいつってお前の彼氏かなんかか？」

俺は、ミツキの手を交わしつつミツキに例の少年が彼氏かどうか確認してみた。

ポカッ！！

「痛っぇ～！！てめえ！！なんでそんなハンマーどっからだしたぁ？」

俺の話を聞いたミツキは顔を真っ赤にしつつ立ち上がりだどっからか出してきた小さなハンマーで座っている俺の頭を殴ってきた。

ちなみにその小さなハンマーの横にはなぜか「１ｔ」と言う表示が書いてあった。

「んなのど～でもいいのよ！！まったく！！彼氏な訳ないでしょ！！あいつは私の昔の知り合い！！私とユウがクイントさん達に保護される前にはぐれちゃってそれで探してるだけなの！！そんな関係じゃ…」

ミツキは、俺をハンマーで殴った後その少年との関係を俺に話してくれた。尚、顔が耳まで真っ赤なのは相変わらず…。そして、最初の内は怒りまくっていたミツキであったが保護された時のことをどうやら思い出し何時の間にかシュンとなっていた。

まったく…こいつはこういう話になると…。

「そっか…。単なる知り合い…か…」

「それが一体何なのよ！！」

ミツキの話を聞いた俺は、再び壁によしかかりボソっとその話の感想を言った。

どうやら俺の声はミツキに聞こえていたらしく座っている俺の前に立ち両手を腰に当てながら今度は、ミツキが俺に詰め寄ってくる。尚、さっきまで耳まで赤かったミツキの顔を何時の間にか元に戻っていた。

「な…なんでもねぇよ！こっちの話。それよりこいつがもし俺の前に出てきたら連絡するから今日のところはおとなしくしてろや」

俺は、詰め寄ってくるミツキの顔を手で払いつつ立ち上がりミツキの頭ポンポンと軽く手で叩きその場を立ち去ろうとする。

「わかったわよ！！でも！！オーリスには言わないでよ！」

「わ～ってるよ！もし言ったら俺の命がいくらあっても足りないからな」

ミツキは立ち去る俺の背中にオーリスには内緒にするように言ってくる。

それを聞いた俺は、ミツキの声に手を振りつつ言わないことを告げその場を後にした。

そして、ミツキは俺が立ち去るのを確認してから自分がでた窓から再び部屋の中に入っていった。

地上本部廊下

ユウ視点

「まったく…こんなん流して本当にいいのか？」

「？そんなに大変だったのか？スバル？」

「うんん。そんなに…大変じゃ…」

受付でゲンヤのおっちゃんを呼び出す事に成功した俺達は、今姉ちゃんがいる部屋へと向かっている最中。

そして、おっちゃんが受付にきた時に一緒に現れたカメラを持った一団…つまりこれがテレビ番組の撮影で今までの俺達の行動は全てカメラに収められてる。それとこれから姉ちゃんにどっきりを仕掛けるから手伝ってほしいとのことだった。

それを聞いた俺は、今までの行動を思い出しつつこのままテレビに出していいのか？おっちゃんに確認。

それを聞いたおっちゃんは、おっちゃんの横で手を握って歩いてるスバルに大変だったのか確認。

スバルは…どうやらいきなり大人数の知らない大人たちが出てきたもんだから人見知りモードが発動。

先ほどまでの元気っ子はどこえやら…俯いたままおっちゃんの話に答えていた。

ちなみにギンガと言えば…。

「て！…テレビーーーーー！！それならそうと言ってよね！！もっといいの来てくればよかった…」

とそんなこと言ったら元も子もねぇだろ！と突っ込みたくなるような事をいいつつ必死に身だしなみをチェックしていた…。

「それでは！撮影を開始します！それで…これからなんですが…」

俺達の前を歩いていたテレビクルーの中から撮影開始の声があがる。

そして、俺達の前にＡＤさんが来てこれからどうするのかを説明してきた。

そのＡＤさんの話によると…。

姉ちゃんの部屋にまずスバルが突入。

姉ちゃんが驚いた所で俺とギンガが「どっきり成功！」と書いた看板をもってカメラと一緒に入る…との事…だが…

「おい…スバル？」

ＡＤさんの話を聞いてた時スバルがおっちゃんの後ろに隠れだした。

それに気づいたおっちゃんはスバルに声をかけるがスバルはその声

に答えずおっちゃんのズボンに顔を埋めていた。

「あの…撮影を始めても大丈夫でしょうか？…スバルちゃん…」

「まいったな～どうやら知らない大人多いんでどうやら人見知りしちまったなぁ～」

スバルの行動をみたＡＤさんは心配そうな表情をしつつおっちゃんに撮影を始めてもいいのか確認した。

その声におっちゃんは頭をかきつつスバルが人見知りをしてしまった事を話まいったといった様子。

「なぁ？ギンガ？なんとかなんねぇか？スバルのヤツ」

困ったおっちゃんはギンガに助け舟を求めた。

なんせ、さっきの話からするとスバルが突撃しなきゃ話が始らないからなぁ～。

おっちゃんの声にギンガは「う～ん…」とうなりつつこちらを見る。

仕方がない…やるか…。

「なぁ、スバル？もう少ししたら姉ちゃんに会えるぞ～」

ピクッ

俺はスバルの近くにより耳元でもう少ししたら姉ちゃんに会えることをスバルに告げる。

それを聞いたスバルは、体をピクッと反応させた。

「ねぇ？スバル？ミツキさん…おなかすかせてるだろうな～スバルが持ってるお弁当待ってるかもよぉ～」

ピクッ…ピクッ…。

俺の話を聞いたギンガが俺の後に続く。

どうやら少しずつ効果は出ているようでスバルは、再び体をピクつかせる。

「なるほどな…。なぁ、ＡＤさんよ！もう少しでどうにかなりそうだからいつでもカメラ回せるようにしといてくんねぇか？」

「わかりました！」

おっちゃんもどうやら俺の考えている事がわかったらしくＡＤさんにいつでも始められるようにしといてほしいことを告げる。

それを聞いたＡＤさんは、急いで回りに指示を出す。

どうやらスバルの行動開始と同時に撮影を開始するらしい。

さて…。後どんくらいかな？

「ねぇ…ミツキさんスバルにあったらなんて言ってくれるかな～？」

「もしかしたら、頑張ったご褒美にアイス買ってくれるかもな～な

んせさっきスバルが見てたアイス屋…確かここの近くにも同じ店あったな…」

「それなら地上本部の中にもあるぞ～。スバルがちゃんと出来たら俺からもミツキに頼んでみようかな？どうする？スバル？」

プルプル…プルプル…。

今だにおっちゃんのズボンにしがみ付いてるスバルに話かけその次に俺がアイスのご褒美があるかも？とギンガの話に続き、さらにおっちゃんが追い討ちをかける。

それを聞いたスバルは体をプルプル震わせどうしようと悩んでいた。

スバル視点

アイス…でも…周りに知らない大人の人がいっぱいで怖い…。

私は、ユウ兄達の話を聞きつつ考えていた。

「ほぉ～ら、スバル～！あそこのドアの向こうにミツキさんがスバルのことを待ってるよ～」

「この時間じゃ腹すかしてんじゃねぇか？ミツキのヤツ？まだ昼飯食ってねぇみたいだからなぁ」

「そっか…。なら、スバルがいかねぇとノアと一緒に昼飯食うのか…。となるとノアの事だから姉ちゃんにアイスをねだるかもな？スバルに内緒で…」

ビクッ!!

ノ!ノアが私に内緒でミー姉とアイスを食べるぅ~!!

ギン姉の声の後、父さんがミー姉がお昼ご飯がまだである事を言いそれを聞いたユウ兄がもしかしたらノアがミー姉に私に内緒でアイスをミー姉におねだりするかも?と告げた。

その言葉を聞いた私は、ノアがミー姉にアイスをおねだりする姿を…そして、おいしそうに食べてる様子まで想像していた。

「あ~!!大変!!スバル!!ノアがミツキさんの部屋に入ろうとしてる!!」

「えっ?」

ギン姉が私の肩を叩きつつノアがミー姉がいる部屋に入ろうとしている事を私に言ってきた。

私は、そのギン姉の言葉に驚いて父さんのズボンからチラッとドアの方を見てみた。

すると…。

「んあ?な~にやってんだ?ゲンヤさん?それに…ギンガにユウにスバル?」

私が見た先には、ちっちゃい姿をしたノアがギン姉の声に驚いた表情をしミー姉がいる部屋に入ろうとしていた。

「だぁーーーーーーーーーーー！めぇーーーーーー！」

ドドドドドドドドドドドドドドドッ！！

「ん？す…スバル？いったい…なに？」

「私が先に入るの！！ノアは後！！」

ドン！！

ピューーン！！

「んにゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

ドゴーーーーーーーン！

ガチャ

「ミーーーーーー姉ーーーーーーーーーーー！！」

「す…スバル！？いったいどうしたのよ？」

私は、ノアが部屋に入ろうとしたのを見た途端ノアに向けて猛ダッシュ！！

そして、ドアの前にいたノアを弾き飛ばしミー姉がいる部屋へと突入。

私に弾き飛ばされたノアは、廊下の壁にぶつかった。

部屋に入ったらすぐにミー姉を発見！
ミー姉の名を呼びつつミー姉へとダイブした。

ミツキ視点

「す！スバル！？いったいどうしたのよ？」

ヴァイスに部屋からの脱出を阻止された私は、次にオーリスが来るまでの間、部屋でボォ～としていた。

すると、突然ドアが開いたかと思えばそのドアからスバルが入ってきて私にダイブしてきた。

私は、驚きの声を上げつつダイブしてきたスバルを受け止める。そしたら…。

「「じゃ～ん！！」」

スバルに続いてユウとギンガがテレビクルーを引き連れて登場した。

そして、ユウがもつボードには…

「ドッキリ成功！！」

と書かれていた。

「ミー姉！アイスぅーーーーーーーー！！」

「えっ？アイス？それに…ユウにギンガ…一体何？」

それから私は事の次第をユウ達の後から入ってきたゲンヤさんから確認。

そして、スバル達が持ってきたお弁当を一緒に食べてつつ番組の撮影をこなしていた。

まさか…。こんな事のために泊まり仕事を作るとは…。

私は、昨日今日のことを思い出しつつカメラの向こうにいるオーリスに視線を向けた。

その視線に気づいたオーリスは、笑みを浮かべながら「これも全て私のお陰！」と言わんばかりに胸を張っていた。

そして、撮影も無事終了しスバルに本部の近くにある今人気のアイス屋さんでアイスを買ってあげて帰る3人を見送った。

帰りの時、スバルは、どうやら疲れちゃった見たいでユウに背負われスゥー、スゥーと寝息をたて夢の中に旅立っていった。

ノアは、食事シーンには参加せずカメラが回っていない所でお弁当を食べて3人が帰る時も後から家までついていった。

ちなみに…お弁当の中身は事前に夕食用に私が作り置いていた物だったんだけど…クイントさんが作ったと言うことになってるらしい…。

なんせ、放映された映像にはちゃっかりお弁当を作るクイントさんのシーンが映ってたし…。

でも…それって変身魔法でクイントさんに化けたノアがやってたんだって…。

まぁ…クイントさんが作ったら家…壊れちゃうからね…。

私は、そんな事を考えつつ3人が少し成長した姿をなんだかしんみりとしながらその背中を見ていた…。

初めてのお使い　ＥＮＤ

祝！！３０万ＨＩＴ記念～初めてのお使い！！～１後編（後書き）

作者
「と！言う訳でようやく完結しました「初めてのお使い！」いかがだったでしょうか…ってあれ？みなさん…いったいどこへ…」

アルト
「それで！ヴァイス陸曹？ミツキ先輩とはどういう関係なんですか？」

はやて
「そうやで～？ちゃんといい！」

ヴァイス
「な…なんともないですよ！あいつとは！！」

作者
「どうやら、今回の話でヴァイスがミツキとどういう関係だかはやてとアルトに問い詰められていたんですか…」

クイント
「それにしても今回って結構いろんな人出てたわよね？」

作者
「ええ。本編の過去になるんでミツキとの関係を中心に出られそうな面子を全てだしました」

クイント
「ちなみに…前回のクイズの答えって…」

作者
「言うんですか？誰も答えてくれてないのに…」

クイント
「でも、今回答えを言うって言ってたじゃない？」

作者
「そうですよね…。では、さらっといきますか…前回のクイズの答えですが…

その１

作品名：　R．O．D

キャラ名：読子・リードマン
　　葦川ねねね

その２

作品名：　逮捕しちゃうぞ！

キャラ名　二階堂頼子
　　葵双葉

となりますっと」

クイント
「それにしてもよくだしたわよね…」

作者
「いや～、どっかで遭遇させたかったんですけど良いタイミングでした（笑）」

クイント
「良いタイミングって…これって魔法少女リリカルなのはの二次元小説よね？」

作者
「そうですよ。でもクロス小説とかもあるんで…つまり今回のはそう言ったノリです」

クイント
「な…なるほど…それで？ヴァイスとミツキちゃんの関係ってどうなるの？」

作者
「正直、まだ決めてません。まぁ、ユウと同じで成り行きにまかせようと思います」

クイント
「つまり…、もしかしたらくっ付くかも？って事？」

作者
「まぁ、そんな感じです。その方が色々とやりやすいですし」

クイント
「やりやすいってねぇ…なんだか聞きづてならないわね！それって…」

作者
「まぁまぁ、なんにせよＢＡＤエンドにはするつもりはありませんが…結構引っ張るかも（笑）」

クイント
「つまり…結果はいつ出すかわからないって事よね…まったく…他の作者さんは結果を出してるって言うのに…」

作者
「他は他！ウチはウチ！です！それで次回は、本編に戻ります！」

クイント
「今回の話でチラッとヴァイスが言ってた事がようやく明にしていくのね？」

作者
「はい。今回のヴァイスが言ってた事は、ある意味これからの布石となり彼等の登場により物語が一気にシリアスモード突入です…」

クイント
「まぁ…アニメでもこの辺からシリアスモードだったしね…」

作者
「でも、たま～にドタバタもやりますので次回をお楽しみに！」

クイント
「それじゃ！次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！その４５！テイク…オフ…」

その４５（前書き）

ミッドから離れた宙域

ＸＬ級次元航行戦艦　ネェル・ファントム艦橋

ミオ・メイファ視点

「進路上に以上はありません。これだと予定より少し速くミッドに到着しそうです。司令」

「クラリス…何度言えばわかるのですか?私は司令ではなく司令官代理ですよ…」

「す…すいません!司令官代理!…つい…」

「仕方がありませんね…以後気をつけて下さい」

「はっ！」

現在、私達は、任務を終えミッドに帰還する途中。

この艦の副官を務めている赤茶色の髪でショートカットの女性、クラリス・メイ一等空尉からこの船の艦長であり私の兄である金髪の長髪を靡かせキャプテンシートに深く座るケイン・メイファニ等陸佐に報告。

それを聞いたお兄様は、自分は、司令ではなく司令官代理である事をクラリスに訂正し航行が無事に進んでいるとの報告を受けていた。

「どうやら今回も無事に帰れそうですが…ですがまたも空振りだったとは…姫はがっかりされるでしょうね…」

「それはないと思いますよ？お兄様。ミツキお姉さまは、結果の有無より私達の無事の帰還の方がお喜びになる方ですから…」

クラリスからの報告を受けた後、お兄様は、そうつぶやきながら申し訳ないといった表情だった。

それを聞いた私は、自分が座っていた通信士の席からキャプテンシートに座るお兄様に近づきミツキお姉様はそうは考えない事を告げた。

「そうですね…。まずは、我々の無事な姿を姫にお見せしなければ後が怖いですからね…」

「そうですよ！ちゃんとミツキお姉様の所に行かないとお話されちゃいますよ？（笑）そもそもこの艦と乗組員はミツキお姉様からお預かりしているんですから」

私の話を聞いたお兄様は、笑みを浮かべ私の方を向き私の話に答える。

それを聞いた私は、左手を腰にあて右手の人差し指を出した手を前に出しながらお兄様の話に続いた。

そもそも、この艦が所属している部隊…管理局所属の第１３独立部隊…部隊名「ファントム・ナイツ」はミツキお姉様が司令官を務めていて、ミツキお姉様のお体の状態がこういった長期任務に支障を

きたす可能性がここ2~3年前から出てきたためお兄様にキャプテンシートを譲り地上本部の少将の仕事と執務官…それに１０８部隊の技術開発室室長の仕事を優先させている。

とは言え、司令官としての地位はまだ残っていて現在も後方から私達に指示を出してもらっている。

まぁ、ミツキお姉様としては、司令官の地位もお兄様に譲るつもりだったらしいのですがそれを聞いたお兄様がそれを辞退。他の隊員達もミツキお姉様に司令官でいてほしいとの意見が殺到したためお兄様がその代理を務めているといった状況。

でも、実際の指示等はお兄様が出しているためさっきのクラリスさんみたいにお兄様の事を司令官と呼ぶ人もいるようで…お兄様はその度に自分はあくまで代理であると訂正している。

お兄様からすれば自分をここまでの地位まで上げてくれたミツキお姉様に対し司令官の地位を自分が奪い取ったと思われたくも、そう考えたくもないからだそうであるがミツキお姉様からすれば自分は、今じゃ形だけの司令官みたいなものだから早くお兄様に司令官の地位を引き継いでもらって自由にやってほしいみたいです。

その後、お兄様と二言三言会話をし自分の席へと戻った。

すると…。

ピピピピピピッ！

これはミッドからの緊急通信?いったい誰から?

私が自分の席についたのとちょうど同じくらいにミッドからの緊急通信が入った。

「こちらファントム・ナイツ一番艦ネェル・ファントム…ナカジマ三佐？いったいどうされたのたのですか？」

「ミオ！今受けている通信をメイン画面へ」

「はい！わかりました」

通信を受けた私は、その相手がナカジマ三佐であることを確認。この緊急通信の理由を聞いた。

私の声を聞いたお兄様は今受けている通信をメイン画面に移すよう私に指示を出した。

（すまねぇな。いや何、カクカクシカジカな理由でミツキが現場に行っちまってなぁ。それでどうやらそっちが探している子が出てきそうなんでな？）

「なるほど…それで？現状をお教え願いますか？ナカジマ三佐？」

メイン画面にナカジマ三佐が映りこの通信の理由を告げた。

それを聞いたお兄様は、詳しい現状をナカジマ三佐に確認した。

（ああ…。現状としちゃ、クラナガンにレリックが見つかってな。それを目当てにガジェットがわんさと来ていてユウが今いる機動六課がその対処をしている）

「そこに我々の保護対象者も現れる…と」

（そういうこった！ミツキが掴んだ情報じゃ十中八苦間違いないらしい…。んで、六課の連中に持っていかれないためにミツキが出たって訳だ）

「まったく…姫は相変わらず…了解しました。こちらからも応援をだします！ミオ！転送ポートの準備…それとフェラルドに出撃の準備を！私もでます！ミオおまえも出撃の準備を！」

「解りました！」

（おいおい…何も司令官のおめぇが出るこたぁねぇだろ？）

ナカジマ三佐の話を聞いたお兄様は転送ポートの準備などの指示とそれと私に出撃するよう指示をだした。

それを聞いた私は、即座に了承。するとその指示を聞いたナカジマ三佐がお兄様が出ることはない事を意見した。

「ナカジマ三佐…私は、司令官ではなく司令官代理です。それに現場に司令官自ら出撃しているのにその代理の私が艦橋でのんびりとしてられませんからね」

ナカジマ三佐の話をお兄様は笑顔で答えた。

（おめえさんも頑固だな…わかったよ。なら、頼むわ）

「おまかせを！」

（じゃあな）

プツン。

「お兄様！転送ポートの準備が整いました！それとフェラルド・キース一等空尉もそちらに直接向かうとのことです！」

「わかりました。クラリス！艦の事はまかせます！私は、先行して姫と合流…そして、事態に対処します」

「了解しました！お気をつけて…司令官！それとミオちゃん！」

「はい！ありがとうございます！いってきます！」

「クラリス…ですから私は…」

「失礼しました！司令官代理！」

「まったく…では、お願いします」

ナカジマ三佐との通信を終えた私に転送ポートの準備が整ったことを告げる通信が入った。

それを聞いた私は、すぐさまお兄様にそれを報告。

お兄様は、クラリスさんに後のことは任せることをつげ私について来るよう告げた。

クラリスさんは、お兄様の指示を聞いた後私とお兄様に気をつけるよう言ってくれた。

お兄様は、クラリスさんがお兄様の事をまたも司令官と呼びお兄様に注意されそうだったので急いでそれを訂正。

私は、クラリスさんの言葉にお礼を述べつつお兄様の後に続いた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４５…始まります…」

その４５

フラナガンの郊外　地下下水道

ティアナ視点

「スバル！エリオ！今よ！！」

「了解！エリオ！」

「はい！スバルさん！いきます！！」

ガキン！！

「はぁーーーーーーーーーー！！」

ドゴーーーーーーーン！！

「よしっ！！」

私達は、今下水道を進みレリックがある場所に向かっている。

目の前には、レリックの存在に気が付いたガジェットが数体現れた

った今スバルとエリオが私の指示に合わせて２人のコンビネーショ

ンでガジェットを次々と撃破。

そして、今最後の1体をスバルが撃破しそれを見た私は思わずガッツポーズをしてしまった。

「残存数0！お疲れ様です！エリオ君！スバルさん！」

キャロが残存しているガジェットがに事を確信した後前で頑張ったエリオとスバルに声をかけながら2人に近づく。

「とりあえずお疲れ！」

「お疲れ～ティア！」

パン！！

私もキャロの後に続いたスバルとキャロをねぎらう。

その声を聞いたスバルが私の問いかけに答えそして、2人でハイタッチをした。

「うし！この調子でガンガンいっくぞ～！！」

「こら！スバル！あんまり調子に乗らな…」

ドゴーーーーーーーーーーーーン！！

「なっ！？何？」

「スバル！！エリオ！！キャロ！！とりあえずみんな固まって周囲を警戒！！急いで！！」

「「了解!!」」

ガジェットを撃墜したスバルは私とハイタッチをした後、私に背を向けスバルの後ろにいたエリオとキャロに向ってこの調子でガンガン行くと宣言。

それを聞いた私は、スバルに対しあまり調子に乗らないよう注意しようとした所私達の少し前の壁が突如爆発。

それに気づいたスバルは、何が起こったのか解らず驚きの声を上げる。

爆発に気づいた私は、急いでスバル達に固まって周囲を警戒するよう指示を出す。

それを聞いたみんなはすぐさまその指示に従って私達は固まって爆発で起きた煙が晴れるのを待った。

そして…煙が少しづつ晴れてきて…そこから…

「ゲホォ、ゲホォ!!なぁ、ギンガ…少しハデすぎねぇか?」

「そう?でも!これくらいよくあんたもよくやってるじゃない?」

「な~に言ってんだ!!俺のほうがもう少しスマートに…」

「あーーーーーーーーーーーー!!ユウ兄にギン姉!!」

「ん?おーーーーーー!スバル達じゃねぇか?」

「どうやらうまく行った見たいね？」

煙の向こうからユウとギンガさんがなんだか言い争いをしながら現れた。

それにいち早くスバルが気づき目の前の2人に向って声を上げる。

それを聞いたユウとギンガさんもスバルの声に気が付きこちらに声をかけつつ近づいてきた。

「お久しぶりです！ギンガさん！！」

「ユウさん！無事でしたか？」

「無事合流できましたね。ユウさん」

近づいてきた二人に対し私、エリオ、キャロの順番でそれぞれに声をかけた。

そして…。

「なんでユウ兄とギン姉が一緒なの（怒）？」

「呼び出されたんだよ！こいつ（ギンガ）に」

「ちょっと手伝ってほしいことがあってね？それにしても一体なんで怒ってるのよ？スバル？」

「しらない！！（プイ！！）」

私達の後からスバルがジト目でどうして2人が一緒なのか質問してきた。

それを聞いたユウが左手の親指でギンガさんを指差してギンガさんに呼び出された旨をそして、その後にギンガさんがユウを呼んだ理由を私達に告げそして、なぜ?スバルが怒っていたのかその理由を聞いてきた。

スバルは、腕組みをしつつ「知らない!」といいつつそっぽを向いた。

なぜスバルが怒っているかと言えば…まぁ、それについては、前回までの話を読んでみたら解るわよ。

そのスバルに対し?を上げるギンガさん。

一方のユウは、その光景をみつつ知らん振りをしていた。

「それで、これからどうするんだ?」

「そうね。とりあえずこっちのリーダーはティアナだからその指示に従うって事でいいかしら?ティアナ?」

「わかりました。それじゃ具体的にですが…」

それから少したってユウがこれからについてギンガさんに聞いてきた。

それを聞いたギンガさんは、こっちのリーダーである私の指示に従

う事告げ、私はそれを了承した。

そして、ギンガさんと初めて会うエリオとキャロと顔合わせをしてもらいスバルとギンガさんでコンビを組んでもらって前を走ってもらい次にエリオそれに続いて私とユウからレリックを受け取ったキャロ、そして、後ろをユウに守ってもらうフォーメイションを提案。すぐさま行動を開始した。

なぜ、こうしたかと言えばスバルとギンガさんは2人してフロントアタッカーだし元々コンビーネーションもばっちりだし。

エリオには、私達とナカジマ姉妹の間でそのどちらのフォローができるように…そして、ユウについては、恐らくあいつに合わせられるのはギンガさんだけだろうから後ろからみんなのフォローをしてもらうのと後ろからの攻撃が来た場合にその対応をしてもらうためだ。

それを聞いたユウは、私の意図をどうやら解ってくれたみたいで私の指示に従ってくれた。

そのときには、さっきまで機嫌が悪かったスバルも元に戻り私達は、レリックがあるポイントに向うことにした。

フラナガン郊外　とあるビルの屋上

ルーテシア視点

「そう…レリックが…」

私の元にウーノからレリック発見の連絡がきた。

「はい…。それでどうなさいますか？ルーテシアお嬢様？」

ウーノは、さめた表情をしながら私に今回の件に参加するのか聞いてきた。

「もちろん…いくよ」

「わかりました。ですが、今回はお一人ですか？」

「うん…ゼストとアギトは、用事があって今は、私一人。でも…一人じゃないよ…」

「と申しますと？」

「私には、ガリューがいるから…」

「わかりました…。では…」

「ごきげんよう…ウーノ」

プツン。

ウーノ問いに私は、二つ返事で参加する旨をウーノに伝えた。

それを聞いたウーノは、今回は私一人だけか？って聞いてきたからゼストとアギトは今は一緒じゃない事をウーノに教えてあげてそれに私一人じゃない事も付け加えた。

それを聞いたウーノはその理由を私に聞いてきたから私は、ガリューが一緒である事を教えてあげた。

その理由にウーノは、どうやら納得してくれたみたいで私との通信は、それで終わった。

「そう言えば、ゼストからメールがきてたんだっけ?行く前に確認しようかな」

ウーノとの通信を終えた私は、ゼストからメールが届いていたのを思い出して行動を開始する前に確認する事にした。

その内容は…。

「えっ…?お母さんが…?」

そのメールの内容と言えば、ゼストの元部下の人がドクターの研究施設にいるお母さんをその部下の人達が連れ出したこととその人達が私のことも探してるみたいだから会ってほしいとのこと。

「よくも…私のお母さんを…取り戻す…待ってなさい…ユウ・サエグサ…」

私は、レリックを回収するのとお母さんを取り返すために自分の足元に転送魔法を展開。

そして、行動を開始した。

その４５（後書き）

作者
「さぁて！！無事に特別編を終え本編に戻ってきました！そして！今回のゲストは！この方！」

スバル
「機動六課所属　スターズ０３！スバル・ナカジマ！です」

ティアナ
「同じく　スターズ０４　ティアナ・ランスターです！ってようやくの登場なんだけど…どうして私とスバルが一緒な訳？」

作者
「いや～（笑）なんていうか…まぁ、この方が面白そうなもんで…」

ティアナ
「てぇ！！またいつもの思いつき！！あんたってねぇ！」

スバル
「まぁまぁ、怒らないでティア。私もこの方が安心するし…」

ティアナ
「安心するってねぇ…まったく…それでどうやらあのルーテシアって子なんだか勘違いしてるみたいだけど？」

作者
「あれはああしないと普通に保護されて終わってしまいますんで…そうした方がいいと思いまして」

スバル
「え～！！なんでそうしないの？！その方が私達が楽だったのに～！！」

ティアナ
「まったく…それで前書きの人達は？いきなりの新キャラ登場？」

作者
「はい！彼等については、ミツキサイドでの出番が多くなりとは思いますがそれなりの位置にはいる予定です」

スバル
「ふ～ん…私達との関係もこれから明かすって事なんだぁ。あっ！でも！これからって登場人物が一気増えるんだよね？大丈夫なの？」

作者
「その辺については…まぁ、なんとかなるとは思いますが…」

ティアナ
「それで？恋の行方の方は？」

作者
「それについてもこれからですかね？ティアナさんも参加しますか？」

ティアナ
「いいわよ！どうせ相手はあんなヤツなんだし…」

スバル

「ユウ兄はあんなヤツじゃないよ！ティア！」

ティアナ
「それじゃ…どう違うのよ？スバル？（ニヤニヤ）」

作者
「そうですね…私もどう違うのか聞いてみたいですね？（ニヤニヤ）」

スバル
「うーーーーーーーーーー！２人とも苛める～！！」

作者
「とまぁ、スバルいじりはこのくらいにして今回はここまで！！」

ティアナ
「次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４６！！」

スバル
「テイク…オフ…」

その４６（前書き）

フラナガン郊外　とある公園の駐車場

ミツキの車車内

ミツキ視点

（スターズ０１、ライトニング０１…エンゲージ！！）

「相変わらずの…力押し…か…」

私は、現在機動六課がガジェットと交戦している所から少し離れた公園の駐車場に車を止めノアが来るのを待っていた。

でも、ただ待つだけなのもつまんないんで車の中から機動六課の戦闘通信を傍受しつつその戦闘を持っていた双眼鏡で見ていた。

傍受している通信からは、シャーリーが2人の分隊長がガジェットとの交戦ポイントに入った旨を告げる声が聞こえる。

交戦ポイントに到着した高町なのは、フェイト・Ｔハラオウンの両分隊長はその強力な魔力を揮いつつ次々とがジェットを撃破していく。

その光景を見た私は、そう呟きながら何度も同じ手が通じる相手なのかな?と海上にいるガジェットの配置を確かめながらそんな疑問

を覚えていた。

（スターズ０１、ライトニング０１敵ガジェットに囲まれています！！）

（これは…幻術です！それもかなり広域の…）

「あらあら…。さて…どうする？…はやて？」

それから少し立ってからそれまで戦闘を優勢であった両分隊長が急にその動きを止めた。どうやら敵に囲まれたらしい。

通信からは、敵に囲まれた様子がアルトから、そしてシャーリーからは広域で幻術が戦闘エリアにかかっている旨がそれぞれ報告されていた。

そういや…ディードの話だと幻術を使う妹さんがいるんだっけ？

どうやらその子が色々と仕掛けてるみたい…。

私は、ディードからの情報を思い出しつつ自分ならどう対処するか？すぐさまその検討に入っていた。そして、はやてがこのことにどう対処するのか？も考えていた。

もし…はやてなら…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４６…始まります…」

その４６

その４６

フラナガン郊外　地下下水道内

ティアナ視点

「ユウ！！今よ！！」

「おめぇ～が仕切るなよ！！ほらよ！！」

バシュ！！

ユウとギンガさんとの合流を果たした私達は、レリックがあるポイントに向っていた最中に再びガジェットの強襲の受けていた。

前でスバルと一緒にガジェットと交戦をしていたギンガさんがユウに声をかけた。

その声にユウは、文句をいいつつ手にもっていたゲイル・ファングという銃型デバイスから私も使うバリアブル・シュートをギンガさんに向けて発射した。

「ちょっと！ユウ！これじゃギンガさんに当たるわよ！」

「まぁ…だまって見てな！！」

ユウの横でその光景を見ていた私は、ユウが放った魔法がこのままだとギンガさんに当たるのでは？と思いユウに詰め寄る。

それを聞いたユウは、そんな私に対し黙って見ているようにいわれた。

「はぁあああああ！！いっけぇーー！！シャイニング！！ストライーーーーーーーーーーク！！」

ガツン！！！

ドゴーーーーーーーーーーーーーン！！

「ま…魔法を…」

「蹴った…」

「そんなのアリ…なんですかね？」

「んな事がアリな訳がないでしょうが！！」

ガジェットに向って走るギンガさんは、背中から来るユウの射撃魔法をその絶妙なタイミングでバック転をしつつその魔法弾の後ろに回りこみそのバック転の勢いのままユウの魔法弾をガジェットに向けて蹴った…。そして、その蹴った魔法弾はユウが放った時とは比べ物にならないくらいの速度を出し近くにいたガジェットを貫きそのガジェットは破壊された。

そのギンガさんとユウのコンビネーションを見ていた私達は、唖然としつつスバル、エリオがその行動をいいそして、キャロがこれはアリなのか?と私に聞いてきたので即座にそんな訳ないことを告げた。

ちなみにガジェットを貫いた魔法弾は、その後下水道の壁まで貫いていた。

「ちょっと!!ユウ!!タイミングずれてたわよ!!今の!!」

「…ったく…ほんの少しだけだろ?そんな事でイチイチ怒んなって」

「ほんの少しってねぇ!!後0コンマ2秒発射タイミングがずれてたら私が危ないんだから!!大体いっ~つもあんたは!!…」

「へいへい…わーった、わーった…時間がないからさっさと行くぞ!!いつまでもボォーっとしてるとそのまま置いてっちまうぞ?」

「あっーーーーーー!!待ってよ!ユウ兄!!」

「今行きます!!」

「ティアナさん!行きましょう!」

「うん。わかったわよ。キャロ…」

周辺にガジェットがいない事を確認したギンガさんがさっきのコンビネーション?のタイミングがズレていた事についてユウに詰め寄る。

その声にユウは、そのズレはほんの数秒である事を告げその声を聞いたギンガさんは後0．2秒ズレていたら自分が危なかった事をいいユウに怒りを露わにしていた。

それに対しユウは、怒りまくるギンガさんをあしらいながら先を急ぐよう促す。そして、その光景に唖然としていた私にも急ぐよう告げ私達より先に走り出しギンガさんがそれに「まったく…」とつぶやきならがユウの後に続く。

その行動にスバル、エリオ、そして私に声をかけたキャロが続いていった。

キャロに声をかけられた私は、前を行くみんなの後に続いて走り出した。

それにしても…あと0．2秒って…なんてタイミングなのよ…。

私は、スバル達の後を追いながらさっきユウとギンガさんのそのコンビネーション?について考えていた。

はっきり言って今の私とスバルでも絶対無理!!それにもし、あれを私とスバルでやろうもんなら間違いなくなのは隊長からの「お話」よね?…今度こそ…間違いなく…。

前回は、ミツキさんのお陰でなんとか回避出来たけど…。

「あれは真似するなよ!!スバル!!」

「えーーーーーーー!!なんでさ!ユウ兄!」

私の前では、どうやら私と同じ事を考えていたスバルがユウに真似しないよう言われその理由を確認していた。

「あれはね？私とユウが小さい頃2人で遊んでいた内に出来た物で、それを母さんとミツキさんの前でやったら即効で怒られた物なのよ。あっ…でも昔は魔法弾じゃなくてサッカーボールだったんだけど…」

「えっ…母さんとミツ姉に？」

「そうよ！仲間に向けてボールをぶつけようとするんじゃない！！ってね」

憮然とした態度をしながら走るスバルに対しユウに続いて今度はギンガさんがその理由をスバルの横に並びつつ話をしだした。

「んでもって、それ以来姉貴達の前ではやらなかったんだが色々とバリエーションが出来そうだったんでな。色々と2人で研究してたんだよ」

「だから、もしスバルとティアナの2人でそれをやられちゃってそれがミツキさんや父さんにバレでもしたら私達まで怒られちゃうのよ（笑）」

スバルを挟んだ形で左側をユウがそして、右側にギンガさんが交互にスバルを説得にかかる…。

「つ～訳だから絶対にやんなよ！！スバル！！それとエリオにキャロにティアナお前達もだからな！！」

「ちぇっ！！つまんないの～」

ユウの声に口を尖らせ納得していない様子のスバル。
そして、頭だけを後ろに向かせ後ろを走る私達にも真似するな！と釘をさしてきた。

「真似をするなと言われても…」

「今の僕達じゃ真似する事もできませんよ…」

「つまんないの～じゃないわよ？スバル？もしさっきのあれを私達がやったとしたら私達もあのは隊長達からの「お話」確定よぉ！それでもあんた…やる？」

「やめとく…」

その声に対しエリオをキャロは、なんだか呆れつつ真似出来ない事をエリオ、キャロの順番でいい私はと言えばもし自分達がやったら怒られるのがユウやギンガさんだけではなく自分達にも及ぶ旨をスバルに告げそれに対しスバルは「ヤバイ！！」といった様子しつつ真似しない事を言った。

「前方にガジェット出現！！それも？型です！！」

ドゴーーーーーーーーーーン！！

シューーーー！！

そんなやり取りをしていた所、キャロから新たなガジェットが出現した事が告げられた。

「なんだありゃ？痛ぇ！！」

「丸い物に足が生えて…きゃっ！！」

「それに腕ですかね…なんだかそのようなものが…うわぁ！！」

「エリオ！！キャロ！！ユウ兄！！」

突然現れたガジェット…恐らく？型じゃないかとは思うけど…とっ…とにかくそのガジェットが私達の前に横の壁から現れたと思ったら伸び縮みするアームでユウとエリオそれにキャロそれぞれを叩きつけ、そのアームを食らった3人は、壁に次々と激突していった

ちなみに上記会話順は、ユウにエリオそして、キャロの順で最後のは、飛ばされた3人を見たスバルが声を上げたって事よ。

ガラガラ。

「痛っつ～。心配すんな…。大した事じゃねぇよ…」

「私もエリオ君も無事です」

スバルの声を聞いたユウとキャロは、崩れた瓦礫を払いつつ3人とも無事である事を告げ、その声に私とスバルそれにギンガさんは安堵しそして、目の前のガジェットに集中する。

「スバル…一撃で決められる？」

「もちろん！！」

「それじゃ行くわよ！！ユウ！！ティアナ！！フォローお願い！！」

ギンガさんは、スバルによって小声で声をかけその声に頷くスバル。

どうやら2人で殺るみたいで私達なんの相談なに動き出すナカジマ姉妹。

動き出したナカジマ姉妹は、私達にフォローを頼みつつガジェットが繰り出すアームやビームといった攻撃を交わしながらガジェットに近づく。

「おい！！ちょっと待てぇ！！ギンガ！！まだこっちの…ったく！！あいつ等…仕方がねぇ！！ティアナ！キャロ！！」

「んもう！！わかったわよ！！シューーーート！！」

「わかりました！！フリード！！ブラストレイ！！」

「クキュルー」

「食らいやがれ！！ファイヤ！！」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴーーーーーン！！

ギンガさんの声を聞いたユウは、いきなりの要請に文句をいいつつを自分に回りあった瓦礫を払いつつ私とキャロにも援護するよう告げる。

その声を聞いた私もいきなりのナカジマ姉妹のその行動に文句をい

いつつユウ同様2人を援護するために射撃魔法を放ち、キャロをフリードに攻撃命令を出す。

私とキャロが援護を開始したのと同じくらいのタイミングでようやく崩れた瓦礫を抜け出したユウもまた射撃魔法を放つ。

私達がそれぞれ放った魔法は、ガジェットに向って突き進むナカジマ姉妹を援護し2人に襲い掛かってくるアームやビームを弾く。

「はぁあああああああああ!!」

ついにガジェットの前に到達したナカジマ姉妹は、まずギンガさんがガジェットの前に飛び込み目の前でガードしてきたアームを左手につけたリボルバーナックルで上に弾く。

「スバル!!」

「まかせて!!」

ガジェットのアームを弾いたギンガさんは、ギンガさんの後ろにいたスバルに声をかける。

その声に対しスバルは、ガジェットに飛び込んだギンガさんを飛び越えアームをギンガさんに弾かれたことによりできたガラ空きのボディに飛び込み…。

「一撃必倒!!ディバイーーーン…バスターーーー!!」

ドゴーーーーーーーーーーーーーン!!

ガジェットの懐に飛び込んだスバルは、ガジェットに向けてあのなのは隊長も使っているディバインバスターを右手につけたリボルバーナックルから放った。

スバルの右手から放たれたディバインバスターは、ガジェットを貫きそして、ガジェットは破壊された。

「やったぁ！！」

「スバル！！よくやったわね！！（ガン！）痛い！！」

「うん！これもギン姉のお蔭だよ！！（ガン）痛った～！何すんのよ！ユウ兄！」

ガジェットが撃墜されたのを確認したナカジマ姉妹は、ハイタッチをしつつお互いの健闘を称えあう。

そんな事をしていた2人に突然2人の頭にユウが拳骨を振り下ろした。

頭を抑えつつ文句を言うスバルに対しユウは…。

「何すんのよ！じゃねぇよ！！まったく！！いきなりかましやがって～少しは、こっちの事も…（ポンポン）？んなんだ？」

ユウがスバルとギンガさんに説教をしていた所、私はユウの肩を叩きつつ交代を要求。

「まかせた！！」

「まかされたわよ！ユウ！！」

パン！！

それを見たユウは、私にまかせたといいつつ私が出した右手を叩き私に説教を交代した。

「まっ…たく…！！2人ともここでのリーダーは私なんですかね！！それを勝手に～（怒）」

クドクド…ネチネチ…クドクド…。

交代した私は、ギンガさんとスバルに対しうまくいったからと言って私達の体制が整うまでなんで待てなかったのか？などユウが言いたかった事も含め2人に説教をした。

それに対しナカジマ姉妹はと言えば…。

「ごめん…ティア…」

「もう少し周りを確認するべきだったわ…ごめんなさい…」

とスバル、ギンガさんの順番で反省の弁を述べていた。

キャロ視点

「あのっ！ユウさん？どうしたんですか？そんなにニヤけて？」

「2人が怒られてるのがそんなに楽しいんですか?!」

「くきゅるーー!!(怒)」

「違ぇ~よ!!なんだかティアナのヤツ…姉貴に似てきたなって思ってな。痛てて!!やめろって!!コラッ!!フリード!!」

ティアナさんがスバルさんとギンガさんに説教をしていた所から少し離れたでその様子を見ていたユウさんがなんだが微笑ましい表情をしていたので私は、どうしてなのか?聞いてみた。

私の声を聞いたエリオ君は、ユウさんが不謹慎な行動をしていたように見えたみたいでユウさんに注意するエリオ君。そして、フリードもまたユウさんのその行動に対しどうやら怒っているみたいで、ユウさんの頭の上から足でユウさんを攻撃していた。

「そうなんですか?」

「ああ、あの怒り具合…それに…あの…」

「何よ!!(ギロッ!!)」

「イエ…ナンデモ…アリマセン…ティアナサン…」

ユウさんは、フリードの攻撃を腕でガードしながら私の質問に答えてくれた。

それを聞いた私は、フリードにユウさんを攻撃するのを止めるよう促しつつもそんなに似ているのかユウさんに聞いてみた。

すると…、ユウさんは、笑いを堪えつつどこが似ているのか私達に教えてくれようとしてくれた。

その話の途中…どうやら私達の話が聞こえていたらしく、ティアナさんがご立腹の様子でユウさんに質問してきた。

そのティアナさんのものすごい形相にユウさんは、小さくなりながらなんでもないことを言っていた。

その…ティアナさんの顔を見た私とエリオ君…それにフリードは、一瞬固まりながらもなるほど…こういうことね…と言った感じでユウさんが言っていた事を瞬時に理解したような気がした。

「さぁ!!みんな!!行くわよ!!」

「「「おっーー!!」」」

「クキュルー!（喜）」

「へ～い…」

スバルさんとギンガさんへのお説教を終えたティアナさんは、先ほどまでのお怒りモードを切り替え気合を入れなおすために声をあげた。

それを聞いたスバルさんにエリオ君それに私は、ティアナさんの声に腕を振り上げ声を上げそれに答える。

フリードも私達に続いて喜んだ様子で声を出す。

それを見ていたユウさんは、「やれやれ…」と言った様子しながら面倒くさそうに声を出していた。

こうして、私達はレリックがあるであろうポイントに向けて再び走りだしました。

その４６（後書き）

作者
「さぁ～て！相変わらずのペースでノロノロと進んでおりますが、今回のゲストの方は２回目の登場ですかね？」

アルト
「アルト・クラエッタでぇ～す！！ってぇ！！私の出番…最近少ないんだけど…？」

作者
「なんせユウが戦闘に出てしまいますとアルトさんは、ロングアーチで戦闘管制となってしまいますからね。そうなるとどうしても出番の方が…」

アルト
「なら！！ロングアーチの場面も作ってよぉ！！」

作者
「それも一応…考えてはいるのですが…まぁ、その時まで待ってて下さい」

アルト
「それって…後何話先なの？（ジト目）」

作者
「そうですねぇ…まだルーテシアさんとの交戦すらしてませんからねぇ？後何話先になる事やら（笑）」

アルト
「笑い事じゃな～い！！」

ドゴーーーーーーーーーーン！！

（アルト１００ｔハンマーを召還！！そして、それを作者に向け振り下ろした！！）

（アルト快心の一撃！！）

（作者は、２万ポイントのダメージを受けた）

作者
「ンギャーーーーーーーー！！」

はやて
「まったく…いくらなんでもやりすぎやで？作者のヤツ完全にノビちまってるわ」

アルト
「あははははははは（笑）いや～つい…」

はやて
「ついってあんたなぁ～…とは言え次回は…これは…」

（はやては作者倒れている所から次回内容のかかれた台本を発見した！！）

アルト

「これって次回の台本じゃないですか?部隊長!!」

はやて
「そうみたいやな…どれどれ…」

(はやては、手にとった次回台本をみた)

アルト
「どうなるんですか?次回?…あの~部隊長?」

はやて
「(プルプル…)アルト…これ見てみ?」

アルト
「えっ?…あっ…はい…どれどれ…」

(はやてから次回台本を受け取り中を覗くアルト)

アルト
「えっと…何々…次回…それは　ひ・み・つ!!…PS可愛い声で言ってね♪ってぇ!!何これぇ!!」

はやて
「つまり…まだ出来てもいないっちゅー事やね…」

アルト
「まったく…こんな作者だから…あんな主人公になるんでしょうね…」

はやて

「それについては、ウチも同意見や…ほな…そろそろ〆ようかアルト」

アルト
「解りました、部隊長。それでは、次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４７！！」

はやて
「テイク…オフ…」

その４７（前書き）

フラナガン　とある公園の駐車場

ミツキの車の車内

ミツキ視点

（それは部隊長権限で却下や！！）

（はやてちゃん！それに騎士甲冑…って…）

「あらあら…ついにそのカードを切っちゃったんだ…」

私がつけているイヤホンからは、機動六課の通信内容が流れている。

現場では、飛行型ガジェットに囲まれた両分隊長は、自身のリミッターの解除を部隊長のはやてに進言。

それを聞いたはやては、それを却下。

そして、クロノ提督に頼んで2時間だけ自身のリミッターを限定的に解除。

さらにセットアップしかっこよく登場し自身の魔法で一気に撃破すると言い出している。

私は、イヤホンを耳につけ双眼鏡で現状の様子をみつつこの状況を傍観している。

べっ…別に好きでやってる訳じゃないのよ！！

これはノアが来てないからここで待ってるだけよ！！

「やれやれ…いきなりキャラの変更でもするのかい？ミツキ」

「へっ？」

不意に誰かの声が車内に響いた。

確か…この車には私一人だけだったはず…。

私は、驚きを隠せぬままその方向…つまりは、車の助手席の方を向いた。

すると…。

「お久しぶりだね…元気だったかい？」

「ミ…ミゼット提督！！！！！！！！！！！！！」

助手席には、いつ間にかスカートにブラウスその上にカーディガン羽織った初老の女性が笑顔で座っていた。

「あわわわわわっ…」

私は、右手でミゼット提督を左手で指差し右手で口を抑えながらさらに驚いた。

それをみた提督と言えば…。

「ようやく…ミツキを驚かせる事が出来たねぇ～。会議を抜け出してきたかいがあったってもんだよ。よしっ！次は、あの八神のお嬢ちゃんだね…」

といつつ喜びを露わにし次のターゲットを選定していた。

そりゃ…伝説の3提督の内の一人がいきなり車の助手席にいたなんて管理局の人間だったら誰だったひっくりかえるわよ…。

それに次は、はやてって…。

あの子ならひっくりかえるだけじゃすまないわよ…。

でも、どうリアクションするのか見てみたい…かも?

私は、そう考えつつ戦場で悠然と杖を構える次のターゲットに選ばれたはやてがミゼット提督に私と同じ事をされたらどうリアクションするのか現場の方をチラッとみつつその時は提督の後についていこうかな?とも思っていた。

でも…どうして提督がここに…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４７…始まります…」

その47

その47

ミゼット視点

「あの～提督？聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「いったいどうして来たんですか？それに車にはどうやって？」

「おや？聞きたいことが2つもかい？ひとつって話じゃなかったのかい？」

「もう！！上げ足をとらないで下さい！！」

車内にミツキの声が響く。

どうやら私がミツキの言った事に対し上げ足を取ったことに怒っている様子で、車の助手席に座る私に運転席から身を乗り出し詰め寄ってきた。

「はいはい…わかったよ…ちゃんとネタばらしするから落着いて落着いて…」

私は、詰め寄ってくるミツキを「まぁまぁ」と身振り手振りでミツ

キを落着かせつつネタばらしをしなくては、おちついてくれないだろうねと考えそうするようミツキに話し掛け彼女を運転席に座らせる。

「さて…。いったいどっから話をしたらいいのかねぇ？」

「それじゃ、まずはどうして会議を抜け出してまでここに来たんですか？」

落ち着きを取り戻したミツキは、私の問いに対しまずはなんで来たのか？と聞いてきた。

「そうだね～。会議中にいきなりゲンヤちゃんから連絡があってねぇ？なんでもミツキが出撃するってのをケイン君にいったらどうやら彼自身が出るって言うからねぇ～。変に拗れた大変だから私に連絡が来てね。それで、ノアが来るまでミツキが待ってられない可能性を鑑みて会議を抜け出してここに来たって訳」

「けっ！！ケイン君がぁーーーーーーー！！（ゴチン！！痛っ～たぁ～！！」

「だから、落着きなさいって言ってるでしょうに…」

私の話を聞いたミツキは、ケイン君が来ると聞いた途端驚きの声を上げ運転席から立ち上がろうとして車の天上に頭をぶつけ頭をハンドルにあて両手で頭を抑えていた。

それを見た私は、そんなミツキに対し落着くよう促す。

やれやれ…。

どうやらゲンヤちゃんの言ってた通り自分とノアだけでこの事態を解決しようとしてたわね。

まったく…、これだからゲンヤちゃんが心配してこっちにまで連絡してくる訳よね。

そもそも、ミツキが司令を勤める第１３独立部隊「ファントム・ナイツ」は、私とレジ坊とで作った物。

ミツキを保護した際にわかった恐るべき計画…。

その計画の阻止…そして、現在の本局と地上本部の関係の悪さを考え本局と地上本部…そのどちらにも組みさず彼等独自の判断で動ける独立部隊が必要と判断。

地上本部側をレジ坊やゼスト君が…管理局側は、私と他の３提督にも頼んで関係各所を説得…。

一応の所属として本局所属とし、私がその部隊の相談役、そして、初代司令にゼスト君を置いて始めたんだけど…。

でも、集めた部隊員のほとんどが素行不良の局員ばかりで…所謂やっかいばらいにされたらしく最初の頃は相当苦労したみたいだけど、ゲンヤちゃんやその奥さんにティーダ君…そして、執務官の資格をとったミツキが加入しその戦力を強化。

そして、素行不良だった局員達もフェラルド君を筆頭に態度を改め２代目司令になったミツキの事を「姫」と呼んで最前線で今も様々な任務に当たっている。

その部隊自体は、表立っては行動せず任務事態、本局や地上本部では、あつかいが難しい案件ばかりで死の危険性はきわめて高い。

それに表向き存在していない事にしているから管理局での仕事とも両立させなければならず部隊運用の面でも色々と苦労をかけっぱなしだからねぇ。

特にゼスト君が死んだ後、なんてまだ幼いミツキが司令官だからって事に納得できない連中が続出するしこの部隊自体面白くない連中や司令官についたミツキ自身気に食わないやら利用しようって輩までで何度となく病院に足を運んだもんだよ…。

そのたんびにユウやゲンヤちゃんの娘さん達に睨まれてそれをノアがよく宥めていたよ…。

それが今じゃ全員局員…。

こっちの事もユウとゲンヤちゃんの長女の子…確かギンガちゃんって言ったかね?その2人は知ってるみたいだし、何度かこっちの任務にも参加してる…。

まぁ、ミツキやゲンヤちゃんはそのことにあまりいい顔はしてないみたいだけど彼等のやりたいようにやらせてるみたいだね…。

私は、頭を抑え痛みに耐えるミツキを見ながらそんな事を考えていた。

「それで…どうして車に入れたんですか?確か…車のロックは、かけていた筈じゃ…」

ミツキは、余程ぶつけた頭が痛いんだろうね？

涙目になりながらこっちをみて私が車に入ってこられた理由を聞いてきた。

「クスッ、それはね？前にあんたが教えてくれただろう？ほら？針金に魔力を込めて…」

私は、ミツキの質問に対し懐からまっすぐに伸びた針金を取り出しミツキにそれを見せた。

「つまり…その針金を鍵穴に差し込んで魔力を流してロックを解除させた…と…」

「正解だよ！？」

「まったく…。こんな事なら教えなきゃよかった…」

「それは残念だね～。んで、今度はこっちが聞く番だね。ミツキ…あんたもしこの戦闘に介入するとしたら少将として介入するのかい？」

「はい…。でも、ケイン君が来るとなったからにはそれじゃまずいんですよね？」

先程まで、笑顔があふれていた車内が急にピーンとした緊張感があたりをつつんだ。

私は、先程までの笑顔を一変させ真剣な表情でミツキに問い掛けた。

その表情を察したミツキは、笑顔を消して私の問いに正直に答えさらに俯きつつ私に聞き返してきた。

「そうだね…。なんせ出てくるのがこっちでも追ってる保護対象者だからねぇ…さすがに三つ巴になるかもしれないからねぇ～…やっぱり…あまり見せたくないのかい？八神のお嬢ちゃんやゲンヤちゃんのもう一人の娘と、それにティーダ君の妹さんに司令官の姿は？」

「はい…」

ミツキは俯いたまま私の答えに小さな声で答えた。

私は、ミツキの表情をみつつもしこの部隊の事を知った八神のお嬢ちゃん達がどんな表情をするのかを想像していた…。

「ミツキ…。教えたくない気持ちはわかる…でも！これはあくまで仕事だよ！私情は禁物！それにちゃんと話せば解ってくれるよ…ギンガちゃんやユウの時と同じように…もし、納得しないようなら私から話するから…ね！？」

「わかりました…（コンコン）」

私は、俯いたままのミツキの肩に手を当てやさしく語りかける。そして、そのままミツキを両手で包み込むようにした。

ミツキは少し震えつつも私の問いに答えてくれた。

怖いんだね…。八神のお嬢ちゃ達に話をして…最悪の事態になるかも知れない事が…。

私がそんなミツキを宥めていたら車の窓をコンコンと叩く音がした。
その音に気づいたミツキと私は、その音がした方をみる。
すると…。
「な～んで、ミゼットの婆ちゃんがここにいるんだ？」
「おや？ノアじゃないかい？」
ビーーーーーーーーーン。
「婆ちゃん！！おひっさ～！！！」
ミツキが車の窓を開け半分くらい空いたところでノアが車内に入ってきて私に声をかけた。
それに答えた私は、ノアに事情を説明。
そして、ノアから保護したメガーヌ・アルピーノさんを無事にウチがもつ医療施設に運びそして、どうやら意識はまだ回復してはいないがどうやらレリックとかに頼らなくても大丈夫らしい事との報告を受けた…。
「よかったねぇ。ミツキ…後は…」
「はい！ケイン君達とも合流しつつ事態に対処します」
ミツキは、私の声に一瞬安堵の表情を浮かべつつもすぐにその表情

を一変させ真剣な表情で今後のことについてその旨を伝えてくる。

「わかったよ。なら私は行くから…後はよろしくね」

「え～！！もう行くのかよ！！」

「まぁまぁ、今度私のところにおいで。そしたらノアが好きなお菓子をいっぱい用意して待ってるから」

「ほんとかぁ～！！！！よし！！ミツキ！！さっさとやるぞ！！」

「もう…ノアったら…では！お気をつけて」

「あいよ。それじゃまたね」

「婆ちゃんまったな～！！」

ノアは、私の答えに大喜び。

それを見たミツキは、呆れつつ私に声をかける。

私は、それに答え手を振るノアに答えながらその場を後にした。

「さて…あのハラオウンの親子が色々言ってくる前にこちら側から手を先に打っておかないとね…あ～忙しい忙しい…」

車を降りた私は、少し離れた所でそんな事をつぶやきながらミツキ達がやりやすいようにするためにいくつかの手を打つ事を考えつつ迎えに来ていた車の後ろに乗り込みその場を後にした。

その４７（後書き）

感想をお待ちしております

その４８（前書き）

クラナガン　とあるビル屋上

クワットロ視点

「始ったみたいだね。クワ姉」

「そうね。ディエチちゃん。」

ビルの屋上で私とディエチちゃんは、画面を開きながら地下での戦闘を見ている。

画面上では、ルーテシアお嬢様とその召還獣のガリューが機動六課の連中と戦っている。

そんな中…。

「あら…」

＜烈火の剣精!!アギト様だぁーーーーー!!!」

戦闘は、向こうが人数が多い分ルーテシアお嬢様達が少し部が悪くなっていた。

ちょうどそんな時、花火とともにアギトちゃんが登場…。

みんなその登場の方法に唖然としていた。

「そう言えば…ルーテシアお嬢様とあの男…知り合いなのかな？クワ姉？」

画面をみていたディエチちゃんがこんな事を言ってきた。

そう言えば、戦闘が始る前…あの男…確か、ユウ・サエグサとか言ってたかしら？

何か話をしようとしていたけど、ルーテシアお嬢様が問答無用で戦闘を開始したのよね？

「さぁ？知らないわ。そんな事」

「そう…」

私の答えを聞いたディエチちゃんは、顔色一つ変えず画面を見入っていた。

…って言うのは嘘…。

本当の事を言えば、ルーテシアお嬢様とあの男の関係についての情報は、既に入手済み。

しかも、あのゼスト様とあの男が既に接触していてルーテシアお嬢様にもゼスト様からメールで連絡が言っているのも知っている。

まっ…情報を扱う者ならこれくらい調べられないと一流とは言えないわね。

それで、ゼスト様がルーテシアお嬢様に送ったメールに少し細工を

して…。ちょこっとだけ洗脳しちゃった（笑）って訳。

これについては、ウーノお姉様達は知らない事…。

なんでこうしたかと言えば、ルーテシアお嬢様とミツキ・サエグサを接触させたらちょっと色々と不味いらしいって情報があってね…。この情報は、ドクターが教えてくれてドクターもこのことについては、了承している。

でも、あまり面白い顔はしてなかったけど…。

どうやら、うまく言ったみたい（笑）

向こうは、かなり動揺してるみたいだし…。

フフフ…さて？どうしますぅ？機動六課の皆さん…それにミツキ・サエグサさん…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その４８…さぁ…これから楽しいパーティの始まり始まり…フフフ…」

その４８

その４８

フラナガン　地下下水道

ユウ視点

ドゴーーーーーーーーーーン！！

ドゴーーーーーーーーーーン！！

「ぐあっ！！」

「ユウ兄！！」

ドカーーーン

ガラガラ。

「痛つつ…心配すんな。大丈夫だぜ、スバル」

まったく…あのくそガキども！！！！！！

俺は、大型の虫型召還獣の攻撃とくそチビの火炎弾くらい壁に激突。

攻撃してきたくそがキ共に苛立ちながら壁から瓦礫を払いのけ心配

そうに声をかけてきたスバルに声をかけ立ち上がった。

「ユウ！！前！！」

「おおっと！！」

ドゴーン！！

「ちっ！！外したか！！」

「アギト…。あいつは、殺しちゃダメ…母さんの居所を聞き出さなきゃ…」

「お…おう…」

俺が立ち上がったと同時にリイン曹長サイズのくそチビが火炎弾をぶち込んで来上がった。

俺は、それを転がりながら何とか回避。

まったく…ギンガが声をかけてくれなかったらまた食らってた所だぜ…。

とりあえず、現在の状況を言えば、俺達の周りにはルーテシアってガキとリイン曹長サイズのくそチビが一匹。

それとルーテシアが召還したであろう虫型の召還獣が小型が１０匹大型のヤツが１匹。

どうやら、スバル達は、虫達に任せてルーテシアとくそチビとその

大型の…確か…ガリューってヤツの1人と2匹がかりで俺を倒って魂胆だな…。

それに…こっちの話はまったく聞こうとはしないし…姉貴からは、なるべく怪我させるな…って言われてるしなぁ～…。

俺は、頭をかきながらルーテシアとくそチビを見つめ次の行動をどうしようか考えていた。

アギト視点。

かわしやがった！…当たったと思ったんだけどなぁ…。

私とルールの目の前には、ゼストの旦那から聞いたユウってヤツが頭をかきながらこちらを見つめている。

「あいつが母さんを…」

ヤツを見つめながらルールーがぽつりと呟いた。

その表情は、澄ました顔をしているがルールーのヤツ…相当怒ってやがる…。

でもよ？ゼストの旦那からは、ルールーのお母さんは、ヤツの姉ってヤツに保護されていてあのくそドクターの所よりはかなり安全だって旦那のお墨付きはついているし、それにその姉ってヤツが出てきたら一緒に保護されろって言われてハズ…。

それにもしそいつがいなくてもその弟ってのがいるからそいつにも

話が通ってるだろうからそいつに連れってもらうか両方いなくても
そいつの名前、確か…ミツキ・サエグサってヤツを呼べば良いって
事だったんじゃ…。

その弟の名前が…ユウ・サエグサで…。

あれっ？確かさっきあの男の事…ユウって呼んでたような…。

まっ…ミツキってヤツとその以外の連中に対しては、好きにしろっ
て言われてるからこれに関してはまぁ…いいんだが…。

あっ！そう言えば、ミツキってヤツの直属の部下が出てくるかも知
れないからそいつ等には、手を出すなって言ってたような…。

う～ん…その部隊名ってなんだったけぇ～マンダム？…パントマイ
ム？…あーーーーーもう！メモっとけばよかった～！！！

「ガリュー…お願い…」

私があれこれ考えて頭を掻き毟っていた横でルールーは、ガリュー
に指示を出していた。

の声にガリューは、無言で頷き戦闘態勢を取りヤツの隙を伺う。

ギュイーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

ドカーーーーーーーーン！！

「な!!なんだ!!」

ガリューが攻撃を開始しようとした時、突然下水道の上から妙な機械音が聞こえたかと思えば私達とヤツの間の上が崩れだした。

「ゲホゲホっ!!大丈夫か?ルール?ガリュー?」

私は、崩れた瓦礫が床に落ちたことから出来た土煙に咳き込みながらルールーとガリューの安否を確認する。

「大丈夫…ガリューが守ってくれたから…」

私が声をかけてすぐにルールーから2人とも無事な事が知らされた。

な…なんだ?

ルールーの声に安堵してすぐに土煙の向こう男女の言い合いの声が聞こえてきた。

「まったく…もう少しスマートな登場ってのはネェのかよ?ノア?」

「うっせぇ!!あたいはこれでいいんだよ!!!」

「これでいいってなぁ…。あまりやりすぎるとまた姫にお菓子抜きって言われるぞ?」

「そ…そのときはもみ消すに決まってるだろ!!お前も強力しろよな?フェラルド隊長?」

「こんな時だけ隊長扱いかよ?おまえは?」

「!!!??…」

「ガリュー…どうしたの?」

土煙の中から聞こえてきた声を聞いたガリューが驚きの表情になった。

それを感じたルールーは、ガリューに問い掛ける。

「そう…なら、その人も知ってるかもね?母さんの居所?」

「ガリューは一体なんて言ってるんだ?ルールー?」

私は、ガリューがルールーになんて言ってるのか聞いてみた。

「…」

「おい!ルールー!!聞いてるんか?!」

「…」

ルールーは、私の声をまるで無視するかのように無言のまま土煙がはれてきた前を見つめる。

ルールーの目の前には、男女2人が言い争ってるシルエットがぼんやりと見えてきた。

私は、一瞬緩めた緊張感を再び入れなおし連中がどう行動するかを待つ。

すると…。

ガン！！ゴン！！！

なっ？なんだ？

警戒態勢を続ける私達に対しまだはれない土煙の向こう側から何かを殴る音が聞こえてきた。

「「痛ぇ～！！！何しやがんだ！！ユウ（このボケが）！！」」

「うっせ～！！テメェ等こそ何しに来てんだ！！こっちは、話を聞かないくそガキとその他大勢を無傷で捕らえなきゃならないつ～面倒な状況なんだよ！！」

「その他大勢じゃねぇーーーー！！烈火の剣精アギト様とエキストラの皆さんと言えーーーーーーーー！！」

「アギト…私とガリューもそのエキストラの皆さんなの？」

土煙の向こうから聞こえてきた声に私は、激怒。

そして、それを聞いたルールーは、自分とガリューもエキストラの中に入るのか？とジト目で聞いてきた。

「う…そ…それは…それはなしで！！可愛いルールーと強いガリュー！！そして、烈火の剣精アギト様とエキストラの…」

「なげーーーーよ！！」

「うっせーーーーーーーーー!!最後まで言わせろ!!この馬鹿とそのクズども達!!」

「クズじゃなーーーーーーーーーーーーーーい!!スバル!!強くて可愛い!!スバル・ナカジマと機動六課の愉快な仲間達!!」

「私達…愉快な仲間達じゃないですよ?!」

「そうですよ!!スバルさん!!機動六課所属のライトニング分隊ライトニング03かっこいい未来の騎士!!エリオ・モンディアルとライトニング04の可愛い竜召喚士のキャロ・ル・ルシエという立派な名前が~!!」

「3人とも馬鹿騒ぎに付き合わない!!」

ガン!ゴン!ゴン!!

「ティア~!!痛い!!」

「「痛いです…ティアナさん…」」

「ねぇティアナ?私は、なんて言ったらいい?スバルが強くて可愛いだから…」

「ぎ…ギンガさん…」

また土煙の向こうから誰かが殴られた音が聞こえてきた。

そこから土煙を挟んであれやこれやのいい争いが戦闘そっちのけで

拡大。

最初、お互いの名前の呼び合いから始ったこの展開は、何時の間にかそれぞれが馬鹿だのチビだのと言った体たらくな展開へ…。

およそ２０分くらいだろうか？そんな言い争いが続いたと思ったら突然…

「うっせーーーーーーーー！！黙りやがれ！！ガキ共ーーーーーーーーーー！！」

「何だ！！このバカデカイ声は？！」

「うるさい」

突然聞こえてきた大声に私とルールー、それにガリューまで耳ふさぎその声に驚いた。

そして、その声により土煙は一気にはれ私達の目の前には、耳を抑え蹲る女…それと怒りまくっているガッチリとした肉体に金髪のとさか頭の男が立っていた…。

その４８（後書き）

更新が遅れてすいません！！

なぜ遅れたかと言えば、リアルの方で無茶苦茶忙しかったため更新することができませんでした。すいません。

でも！！ようやくその長いロードを無事抜けることが出来ましたので更新スピードがもしかしたら上がるかも…？

話の流れは大体決まっているのであとは、気分しだいにはなりますが楽しみにしていて下さい。

それと読者の皆さんがこれを見てどう思っているのか感想を下さい！！

よろしくお願いします

左近

その４９（前書き）

今回は、短めです

その４９

その４９

フラナガン地下下水道

ノア視点

「あ～スッとした～」

「何バカデカイ声だしてんだよ！！」

あたいは、つい今しがたあたいの横で大声をだし現在スッキリとしたフェラルドに対し怒りの声をあげた。

「んあ？別にいいだろうがお蔭で視界も良好だし文句はねぇだろ？」

「その前にあたい達の鼓膜が破れる所だったんだぞ！！」

あたいの声をあっけらかんとした表情で受け答えをするフェラルド。

格好としては、髪は、金色の髪を短髪にしとさかのように髪をあげ体格は筋肉質で大柄。

バリアジャケットは、青いインナーの上に袖を肩まで切った黒のジャケットを着こなしたは、上同様黒のズボン。そして、背中には、ファントム・ナイツのエンブレムをデカデカとプリントしてやがる。

「どうだ。かっこいいだろ？」

あのな～（怒）ちなみにデバイスは、持っているんだが、今は持ってきて折らず両手につけたグローブが今はデバイスの役目を担っている。

「フェラルド危ねぇ！！」

あたいとフェラルドがそんな言い合いをしていた所突然後ろにいたユウが声を上げた。

バシッ！！

「う…嘘…」

「あれを受け止めちゃうんですか！？」

ユウの声が聞こえたかと思った直後、フェラルドに向って黒い何かが攻撃してきた。

それに気づいたフェラルドは、その攻撃を避けようとはせずそれを真っ向から受け止めた。

それを見たスバルとエリオは、驚きの声を上げる。

「おいおい…どいつかと思えばガリューじゃねぇか？久しぶりだな～」

フェラルドは、攻撃してきたのがガリューであることを確認した後ガリューに向って話しかけた。

それに対しガリューは、フェラルドを殴りつけようとしてその腕をフェラルドに捕まれていてそれを離そうと必死だった。

「おいおい…。いけすかねぇな？久しぶりの再会なのによ～」

フェラルドは、ガリューの腕を掴んだまま離しはせずにつまらなそうな声を上げる。

ガリューは、なんとか腕を離そうと蹴りをいれたり自分の腕を引っ張ったりするがいっこうに離そうとしないフェラルド。しかもガリューがした蹴りもフェラルドが別の腕や足を使ってガードしているためまったくダメージがなかった。

「ガリューー！！こんのヤローー！！」

脱出できないガリューを見かねたちっこくて赤いヤツは、フェラルドに向って火弾を撃ってきた。

ボン！！ボン！！ボン！！

「どうだーーーーーーーーー！！げぇ！！」

「まったく…味方に当たったらどうするつまりなんだ…」

フェラルドは、ガリューの腕を掴んだまま別の腕で火弾を全て手とうでそれを弾いた。

それを見た赤いヤツは、驚いた様子…。

「ほらよ!!帰してやるよ!!」

ガリューを掴んでいる事に飽きたのか突然ガリューを赤いヤツの方へ投げつけた。

投げ飛ばされたガリューは、すぐさま体制を整え地面に着地した。

「おい?ノア?あの赤いチンチクリンの横にいるのがルーマニアってヤツか?」

「だぁれがチンチクリンだ!!」

「私…ルーマニアなんて名前じゃない…」

「ルーテシアだよ。ルーテシア・アルピーノ。ちなみにその横のチンチクリンは…え〜っと…網戸?アジト?違うなぁ〜(ボン!!)痛ぇ〜!!」

「アギト様だ!!烈火の剣精アギト様!!てめぇ!!微妙な間違いするんじゃねぇ!!」

フェラルドにルーテシア達ともう一人のチンチクリンの名前を教えようとしていたらあたいの顔に向ってチンチクリンが火弾をぶつけてきた。

「なにやってんだ(笑)まぁ…それはそれとして…おい!!そこのルーテシアとミジンコ!!お前達の探し物は、俺達が既に保護している。こっちの指示に従ってくれるのなら合わせてやってもいいんだがどうだ!?」

「だぁから!!私は、ミジンコじゃねぇ!!つ〜か!!一文字もあってねぇじゃねぇか!!」

「…」

フェラルドは、火弾をぶつけられたあたいを笑いつつもルーテシア達に話書ける。

「ちょ…ちょっと待ってください!!いきなり現れて勝手に話を進めないで下さい!!」

「そうだよ!!ノア!!ちゃんとこっちにも説明して!」

「ん?!なんだ…コイツは?ノア…お前の知り合いか?」

フェラルドがルーテシア達に話を進めようとしていたらティアナとスバルがその話に割って入ってきた。

「まぁな…。ほら?ウチのお姫様が前にあんたにも話してたろ?機動六課の…」

「おお〜!!思い出したぞ!!確か名前は…ピコナ・マンチェスター!!」

「ティアナ・ランスターです!!」

「ノア…これってわざと?」

「いや…マジでボケてんだ…」

あたいは、以前ミツキがフェラルド達に将来有望な人物としてティアナとスバルのことを話してした時のことを話をしていたのを思い出しそのことをフェラルドに話をした。

それを聞いたフェラルドは、ポン！と手を叩き思い出したかのように別の名前を叫んでいた。

その声にティアナは自分の名前を呆れた様子で叫びそれを見たスバルは、これはわざなのか？と聞いてきた。

それに対しあたいは、マジボケであることを告げた。

「とにかく！！なんでここに来ているのか説明してください！！」

ティアナは、フェラルドに突っ込みを入れた後話を元に戻そうと声を再び荒げる。

「おい！？ユウ？お前こいつ等に説明してなかったのか？」

「当ったり前だろ！？俺だってここにファントムが来るなんてこと知らなかったんだからよ？」

フェラルドの話にユウは憮然とした態度でその問いに答える。

「だぁ～かぁ～らぁ～！！私達をおいてけぼりで話を…てぇ！！」

「はい…チェックメイト…。悪りぃな。あたい達、いつまでもガキ共のたわごとには付き合ってらんねぇんだよ」

「まっ…そういうこった…おい！ノア！ルーテシアってヤツの方ち

ょっとみてくれ？」

「おう…なるほどな…これくらいなら…これでよし！！っと」

「しっ…しまった！！」

「！！！？！？！」

「あれっ？アベシにガリュー？どうしてこんな所に？」

「ルールー…おまえまで…（泣）」

スバルが自分達をおいてけぼりにするな！と声を上げたのをきっかけにあたいとフェラルドは、ルーテシアとその諸々の連中をバインドで一気に確保した。

あたい達の突如の行動に驚きの声を出すルーテシア達。

そして、バインドを外そうとしていたルーテシアを抑えていたフェラルドがあたいに声を何か変だと言って来たから見てみた所どうやら何かしらの洗脳を受けていたらしい事がわかった。

それを見つけたあたいは、それをとりあえず解除っと…。

まぁ、大雑把に言えば…だけどな。

細かい所は、ミオとかミュン先生とかに見てもらわねぇといねぇがとりあえず落ち着いたみたいだし…大丈夫だろう？

そして、あたい達は、合流してきたヴィータ達と共にとりあえず地

上に上がる事にした。

さて…このまま何事もなく終わればいいけどな?…。

その４９（後書き）

作者
「あとがきのコーナー！！通常版！！今回のゲストは！！」

はやて
「うちやーーーーーーーーーーーーーー！！ってこのコーナー自体結構久しぶりのような…」

作者
「まぁ…色々とありましたんで…」

はやて
「それにしても今回、短くないんか？」

作者
「まぁ、それについては毎回キリがいいところでくぎってるんで今回は短めです」

はやて
「って言うか集中力が切れた所でクギッてるんじゃ…」

作者
「毎回一気に書いてるもんで、毎回このあとがきを書くころには、いっつもヘロヘロで…って違いますよ！！違いますから！！」

はやて
「これはマジやね…。それで…そろそろアルト達をださんとそのうち暴発しそうなんやけど…」

作者
「それについては、ようやく下水道の話を終えることが出来ましたんでそろそろでてもらいますから。もう少し抑えといてください」

はやて
「さよか…なるべく早くしてな…でないと…」

アルト&シャーリー
「「ガルルルルルルルッ!!!」」

作者
「マジでやばそうですね…（汗）」

はやて
「せやろ？とりあえず今は、あの折の中に入れとるから問題ないんやけどこのままやとそれももたんかもな？」

作者
「そ…それは…と…とりあえず今回はここまで!!」

はやて
「ちょ…ちょっと待ち!!ウチの話なんにもせんと荷物まとめて逃げ出すなーーーーーーーー!!」

キャロ
「えっと…、部隊長は逃げ出した作者さんを追いかけてお話するためにこの場を後にしました。それで〆のセリフ何ですが…私とエリオ君の2人で言う事になりましたので…それでは!!」

エリオ
「次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～
その５０！！」

キャロ
「テイク…オフ…」

その５０（前書き）

フラナガン　市街地上空

はやて視点

「はぁ…はぁ…はぁ…」

ウチが幻術の混じった大量のガジェットに対しリミッターを限定解除した上で広域魔法でその殲滅にあたって結構時間がたった。

数は、減らす事は出来たが相変わらずウロチョロとがジェットが飛んでおる。

ウチは、それをみつつ息を整えながら次の魔法の準備をしようとしとった。

すでに5、６発の広域魔法を打ち込んだんやんけど、幻術がある分本物がいったいどれくらい撃破出来たかどうかは正直わからへん。

現在、シャリー達が必死に幻術パターンを解析しとるからそのうち全て撃破出来るやろうけど…正直結構しんどいわ…。

「はぁ…はぁ…こんな時にあいつがいたら楽やったのに…」

ウチは、息を整えながら幻術使いの機械オタクの事を思い出していた。

「部隊長！！次いけますか！！」

そんな時シャリーから次弾発射の指示が飛んできた。

「いけるよ！」

その声にすぐに答え発射体制をとる。

アカン！アカン！いつまでもアイツに頼ってたアカン！このくらいウチが！！

ドゴゴゴゴゴゴゴゴーーーーーン！！

「な！！なんや！何があったんや！！」

機動六課隊舎内司令室　ロングアーチ

アルト視点

「現状報告！！」

部隊長が次の魔法を放とうとその準備を始めたちょうどそのときいきなり上空のガジェットが次々と撃破されていった。

「は…はい！！ガジェット全機撃墜！！詳細不明！！」

（とりあえず…その原因を調べてみてや？）

「りょ…了解」

グリフィスさんからの声に画面を見て驚いていた私は、急いで状況を報告。

「いったい…何があったのよ…」

私からの報告を受けた部隊長は、その原因を調べるよう指示を出す。その一方で私の横に座っているシャーリーさんが驚きの声をあげた。

「ま…魔力反応!!」

「位置は!!」

「部隊長のすぐ近く!!識別信号不明!!Sランクオーバーの魔導士です!!」

「なんだって!!部隊長!!」

みんな一斉に今起きた爆発の原因を調べて始めて少したった頃、ルキノが突然、魔力反応が出たことを告げる。

それを聞いたグリフィスさんは、その位置を確認。その場所が部隊長のすぐ側であるとの報告を受けた彼は、部隊長に声に向って声を上げる。

(やれやれ…姫のご友人との事で期待してましたが…この程度とは…)

「げぇ!!…ま…まさか…鉄仮面…」

八神部隊長の少し上に現れた金髪のロングの髪が腰につくくらいの

ながさで角張った細長い銀縁のメガネをかけ黒い陸士隊の制服に似たバリアジャケットの上に白いマントを羽織り左腕にファントム・ナイツのエンブレムをつけたイケメン風の男性が現れた。

それを見た私は、思わず声を上げるがすぐにその口を自分の両手でふさぐ。

舞台は再びフラナガン　市街地上空

はやて視点

「あんたいったい何者や！！」

ウチの上にいきなり現れた男は、ウチを見下ろしながらなんか言って来た。

それを聞いたウチは、その声を無視するかのようにそいつが誰かを確認する。

「おっと…これは失礼。私は、管理局所属第１３独立機動部隊「ファントム・ナイツ」所属、副司令のケイン・メイファです。八神部隊長」

男は、自己紹介をしつつウチに近づく。

「それで、今のは、あんたがやった事なんか？」

「ええ。以外にご苦労なさっていたいた様子だったのでそのお手伝いをと思いましてね」コイツ～！！（怒）なんやイケメンやと思っ

たらなんやムカツク事言いおってからに～！！

メイファと名乗る男の言葉に苛立ちを隠せないウチ。

再び機動六課隊舎内司令室　ロングアーチ

アルト視点

ケイン副司令のいきなり登場＆毒舌に混乱する司令室。

あ～あ…やっちゃった…。

混乱する司令室の中で私は、その行動に呆れつつどうしたものかと頭を抱えてた。

なんで私がこの人の事を知っているかと言えば、先輩にあれこれ教えてもらっていた時にファントム・ナイツの隊舎でも教えてもらう事が何度かあってね。

そこで副司令にも何度かお会いしたりしてて…。

それでどんな人かと言えば、先輩のファントムでの右腕でかなりの毒舌家…それを澄ました表情でいうもんだから、ついたあだ名が鉄火面…。

最初は、その施設に出入りするだけだったんだけど…あの事件があってから私にも何か出来ないかなって思って先輩に頼み込んでファントムのサポーターとして色々と協力している。

えっ？サポーターっていったいなんだって？

それはね、あそこの部隊って正規隊員の他に所謂予備兵力として「サポーター」と呼ばれる所謂協力者が局内にいて私がその中の一人って訳。

で、サポーターとして具体的に何が出来る事と言えば書類の手伝いとか作戦の支援とかしか出来ないだよね。

魔導士であれば作戦にも参加することは出来るんだけど…。

ちなみに、スバルお姉さんのギンガさんは私と同じサポーターでユウとミツキ先輩は正規隊員。

ナカジマ三佐も色々と関わってたらしいんだけど…詳しい所はわかっていないんだよね。

そして、ファントムの正規隊員であれサポーターであっても原則的にファントムとして行動していない限りその事を言っちゃダメなんだよね。

なんせ、その部隊自体公には存在しない事になってるからね…。

とまぁ…なんだかんだ説明してはいるが私も今回の事にファントムが関わって来る事なんて一切しらされてはいない。

だって、確か…予定では、別次元に探査任務に行ってるって話でそろそろ帰ってくるとは言ってたんだけど…。

私は、混乱する頭の中でどうしようか悩みながらグリフィスさんから指示された作業をしていた。

こっそりユウに聞こうかな？とは考えたけど…私魔導士じゃないから念話とか出来ないし…それにメールを打つにしてもユウのアドレスって私の端末の中しかなくってそれがあるのって私のロッカーの中なんだよね…。

「まいったな～…」

「ん？アルトなんか言った？」

「いっ…いえ！なんでもないですよ！！」

「そう…ならいいんだけど…」

私がボソッと言った一言がどうやらシャーリーさんに聞こえてたらしく私に声をかけて来た。

その声に私は、驚きを隠せない様子でなんでもない事を告げその場をやり過ごす。

もぉ～！！どうしたらいいのよ！！誰か説明してぇ～！！

「魔法少女！！リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ！！～影の守護者～その５０！！…始まります！！」

その５０

フラナガン市街地

ユウ視点

「何～！！そいつ等を連れて行くだと～！！」

「ああ、そう言う事だ。オチビさん」

「チビっていうな～！！」

地上にでた俺達は、いきなり現れルーテシアとアギトを拘束したフェラルドから今回出てきた理由を告げられ２人をこのまま連れて行くと言い出した。

そのいきなり手順を踏まない強引な方法にヴィータ副隊長は怒りを露わにそれを聞いたフェラルドは、下から文句を言うヴィータ副隊長をみてチビ呼ばわり。

それを聞いたヴィータ副隊長はさらに怒り出す。

「ヴィータちゃん落着くですよ～！！」

「副隊長！落着いて！！」

そして、フェラルドに食ってかかろうとするヴィータ副隊長をスバルが抑えリイン曹長が落着くよう声をかける。

そんなやり取りを見ていたノアは、ルーテシア達が逃げないように警戒しつつなんだか呆れた様子。

「ちょっとノア！これどういうこと？」

「んあ？ギンガか？まぁ…色々とあってなぁ…」

ヴィータ副隊長達のやり取りを見ていたノアに今度は、ギンガはノアに説明を求めた。

それに対しノアは、頭をポリポリかきながらなんだか歯切れの悪い返事でそれを返す。

それにしても当初の予定じゃ姉貴とノアだけのハズだったのがなんでファントム（こいつ等）が一緒なんなんだ？

俺は、そんな事を周りのやり取りを腕組みをしながらこの光景を静かに眺めていた。

エリオとキャロは、不安げな表情でオロオロしてるしティアナは、ムスッとした表情でフェラルド達のやり取りを見守りそして、ルーテシア達はあの召還獣を元に戻しバインドで拘束された状態でだまったまま突っ立ってる。

正直、ミオ辺りに詳しい事を確認したい所だがあのヤロー…いくらこっちから通信しようとしても未だにでねぇ…と言うことは、まだ終わってないって所なんだろうがいい加減姉貴に出てきてもらわな

いとおさまらねぇぞ…こりゃ…。

なんせ、フェラルドのヤツ…ありゃ交渉と言うよりヴィータ副隊長をただ、怒らせてるだけだし…どうやら上空でも部隊長が誰かと話してるみたいだが…激怒してるみたいだからな…でも誰だ?部隊長と話してるヤツは…。

俺は、部隊長とそいつがやり取りをしている声が聞こえてくる通信にその意識を集中させた。

「げぇ!!鉄仮面!!」

「鉄仮面?それって誰の事よ?」

通信を聞いてた俺は、その人物が鉄仮面（ケインの事）だとわかり思わず声をもらす。

それを聞いたティアナが、俺にそれが誰の事か聞いて来た。

「ガハハハハッ!!鉄仮面ってか!?ずいぶんと面白れぇ愛称をつけたもんだな?おい!そこの馬の尻尾を二つもつけたヤツ（ティアナの事）鉄仮面ってのは、ウチの司令官代理の事だ。でも今は姫がいるから…悪りぃ!!副指令の間違いだ!!ガーハッハッハ!!」

「だぁ〜れがロバの尻尾よ!!誰が!!」

「あの〜ティアナさん…ロバではなくて馬…ですよ…」

「ぐっ…。エリオ!!そこを掘り下げないで!!」

俺の声を聞いたフェラルドが鉄仮面が誰の事なのかをティアナに伝えそれを聞いたティアナが自分の事を馬の尻尾と言われたのに対し激怒。

さらにティアナの声を聞いたエリオが冷静にティアナの間違いを指摘。

間違いを指摘されたティアナは、どうやらその事を流してほしかったらしくエリオに顔を赤らめながら声を荒げる。

ルーテシア視点

（ルーテシアお嬢様♪聞こえますかぁ♪）

クワットロ…何？

目の前で私達を捕まえた人たちがなんだか言い争いをしていた所クワットロから念話での通信が入ってきた。

（ずいぶんと苦戦なさっている様子でずが…もしよかったらお手伝いいたしましょうか？）

…お願い…。

クワットロからの提案に対し私は、少し考えた後その提案を受け入れた。

（わかりました…それじゃ…おっとその前に少しお手伝いしてくれませんかぁ♪連中にちょっとしたメッセージを伝えたいんで…）

わかった…。

私の答えに対し、クワットロは脱出の手伝いをする前に私を通して彼女達にメッセージを伝えたいのでそれを私から伝えてほしいと言ってきた。

それを聞いた私は、それをすぐさま了承。

すると…。

（ルーテシアお嬢様…私です。ナンバー６のセインです。今ルーテシアお嬢様の足元におります。合図と同時にお嬢様を助けますのでそのままジッとしててください）

わかった…。

（それじゃルーテシアお嬢様♪お願いしますぅ♪）

うん…。

クワットロからの話を受け入れた私に今度は、セインから念話での通信がきた。

セインの話を聞いた私は、その旨を受け入その後クワットロからさっきのメッセージの件を彼女達に言うよう言われ私は、口を開いた。

ヴィータ視点

「いいの？…こんな所で言い争いなんかしてて？」

「あん？！なんか言ったか？」

私が目の前にいる大男（フェラルド）にチビと言われた事に文句を言ってた時、バインドで拘束されたルーテシアって女の子が突然こちらに向けて話かけて来た。

「だから…こんな所で言い争いなんかしてていいの？って言ったの…」

「てめぇ…いったい何がいいたい！？」

ルーテシアは、まるでロボットのような無表情のまま今さっき言ってた事と同じ事をもう一度私に向けて言ってきた。

それを聞いた私は、ルーテシアを睨みつけその本心を確認しようとした。

「あなた…助けられなかったんでしょ…あの人の事…それで今も色々と頑張ってるんでしょ？でも…」

てめぇ…。

その話に私は、昔…なのはが撃墜された時のことを思い出していた…。

そして、もう二度となのはは落とさせねぇと心誓った…。

どうやらその事を言ってるらしくそれをバカにされてるみたいで私

は、怒りを露わにする。

「でも…あなたは…また…助けられない…」

ドゴーーーーーーーーーーーン！！

「な！？なんだ！？」

ルーテシアが話を終えたとほぼ同時に突然爆発音が聞こえた。

「あの方角…まさかヘリが！！」

「何！？」

（ロングアーチより全隊員へ！！ヘリにロングレンジからの砲撃です！！ヘリの安否不明！！）

「シャマル！！」

「ヴァイス陸送！！」

私は、すぐさま爆発音がした方角をみた。するとロングアーチのルキノからヘリが攻撃を受けたとの報告が入った。

その声にリインがシャマルを心配する声をあげ、ティアナもまたヴァイスの身を案じ声をあげる。

「あ～あ…やっちまったな…それにどうやら連中…このドタバタを利用して逃げ出したみたいだしな…まぁ…あいつらは、ノアに任せとけばいいか…既に動いてる見たいだしな」

そして、大柄の男が頭をかきながらやれやれといった様子で周囲を確認し既にノアがいない事を確認しながら独り言を言い出した。

「てめぇ!!同じ局員が攻撃を受けたんだぞ!!それを!!」

私は、その大男の態度に怒りが爆発。

ヤツの胸倉を掴みその怒りをぶつける。

「おめぇ…本当にわかってねぇな…あのヘリは落ちちゃいねぇよ。なんせあそこには…」

「これ何?」

「蒼い…羽根?」

「こ…これって!?ユウ!!」

「ああ…こんな事出来るのは一人しかいねぇよ。なるほどな…それで今まで出てこなかったって訳か…」

大男は、私が掴んでいた腕を離し上空を見上げる。

すると、上空から蒼い色をした鳥の羽根のような物がふってきた。

ティアナが地面に落ちたそれを拾いそれを確認。

それを見たギンガは、驚きの声を上げ別の羽根を拾ったユウは、納得した様子でギンガとなんだか話をしだした。

「この…羽根…どっかでみたような…（ヴィータちゃんこれって！）ん？リインお前これが何か…思い出した！！まさか！！」

羽根を拾った私は、どっかで見たように思いそれが何か思い出そうとしていた。

すると、私の横からそれを見ていたリインが私より先にそれに気づいたらしく私に向って声をあげその声に私もそれが何を意味しているのか思い出した。

ヴォン！！

（こちらロングアーチ！！ヘリは無事です！！てぇ！！あれって！！）

私がそんな事をしていた時にロングアーチのアルトからヘリが無事である事の告げる通信がはいった。そして、いきなり周りある爆発で生じた煙が吹き飛ばされそこから無傷のヘリ…それと…。

「まったく…いつまでもこんな所をウロチョロしてるからこうなるよ。この…バカヴァイス！！」

ヘリの前には、蒼い色をしたバリアジャケットの上に銀色のフードつきロングコートを身に纏った魔導士がなんだか怒った様子でヴァイスに文句を言っていた。

「あのヤロー！！…いったい何のつもりだ！！」

それを確認した私は、あいつに対し声を荒げていた。

その５０（後書き）

というわけでいかがでしたでしょうか？

これでようやく下水道での話のゴールが見えてきたって感じです。

それで、私から皆さんにお聞きしたいことがあります。

それは、この話に出てくるオリキャラのイメージボイスは皆さんの頭の中ではだれになってますか？

これは、ある方から感想で聞かれた事なんですが、私自身はもともとつけていたイメージの方でやっていたのですがその方の中ではどうやら違う方だったのでいっそのこと読者の皆さんにも聞いてみようってことにしました。

お答えくださる方は、感想欄にユウ、ミツキ、ノアそれぞれのイメージボイスは誰なのか？というのを書いてください。

ちなみに…私自身声優さんには、あまり詳しくないのでどのアニメのこのキャラとつけ加えてくださるとありがたいです。

よろしくお願いします！

では…また…

その５１（前書き）

フラナガン上空　機動六課所有のヘリ内

シャマル視点

「んだとーーーーー！！いきなり出てきてバカとはなんだ！！このバカ女！！」

「んなによ～！！せぇ～っかく、助けて上げたのにありがとうのひとつもない訳！！」

「てめぇなんかに助けてもらう義理なんてねぇよ！？あ～あ、こんな洗濯板なんかよりもなのは隊長やフェイト隊長なんかに助けてもらいたかったなぁ～」

「へぇ～…それは残念だったわねぇ～。だったら今度は私がこのヘリ落としてあげてようか？」

「み…ミツキちゃん…このヘリはヴァイス君だけじゃなくて私ともう一人女の子が乗ってて…」

「上等じゃねぇか！？やってみろよ！？バカミツキ！！」

へっ！？ちょ…ちょっとヴァイス君…？

ヘリが砲撃攻撃を受ようとしてた時、私とヴァイス君の目の前に突然、ヴァリアジャケット姿のミツキちゃんが現れその攻撃を魔力で作った大量の羽根でヘリを覆ってそれを防いでくれた。

そして、それを解除したらいきなりこちらを向いたと思ったらヴァイス君に向って文句を言い出した。

それを聞いたヴァイス君は、すぐさまそれに応戦。

ヴァイス君がなのはちゃん達に助けてもらえばよかったと言い出した所、それに怒ったミツキちゃんは、いますぐヘリを落として上げるからなのはちゃん達に助けてもらえば?と言い出しヘリのパイロットシートに座っているヴァイス君に向って彼女のデバイスである蒼翔扇を構えた。

私は、すぐさまそれを止めようとしたんだけど二人とも私言葉を無視。まるで売り言葉に買い言葉のようにミツキちゃんの言った事に対しヴァイス君は、やってみろと彼女を挑発。

その声を聞いた私は、驚きヘリに乗ったことを後悔し始めていた。

けれども…。

「ミツキちゃん!!後ろ!!また来た!!」

「ミツキ!!」

そんな2人の光景を見ていた所、ミツキちゃんの後方からさっきの砲撃が第二射を放ってきた。

それを見た私は、急いでミツキちゃんにそのことを伝えヴァイス君も先程とはうって変わり真剣な表情で彼女の名を叫んだ。

ドォーーーーーーーーーーーン！！

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ！！～影の守護者～その５１…始まります！！」

その51

その５１

フラナガン市街地とある廃ビルその屋上

クワットロ視点

「目標に命中…。次、どうするクワ姉？」

「ご苦労様ぁ♪ディエチちゃん。そうねぇ…どうしようかしら…♪」

まさか…こんなところに彼女が現れるなんてぇ～。

第２射を発射し終えたディエチちゃんは、立ち上がりながら私に次はどうするのか？と聞いて来た。

それを聞いた私は、腕組みしながら爆発した所を見ながら考えてるような声を上げ、頭の中でいきなりのミツキ・サエグサの登場に少しばかり驚いていた。

なぜ？ディエチちゃんに第２射の発射指示を出したのかと言えばぁ…そうねぇ、ミツキ・サエグサってのがどんな者か少しばかり興味があってね♪それでディエチちゃんにお願いしたって訳。

でもぉ♪大した事なかったみたい♪ウフフッ…

「クワ姉！！」

「な～によディエチちゃん♪そんなに慌てて…えっ…」

ドォーーーーン！！

私が少々考えごとをしてたらでディエチちゃんがいきなり声を荒げ私の名を叫んだ。

それを聞いた私は、慌てた様子のディエチちゃんを宥めるように声をかけ顔を上げた所私に向って風の刃が飛んできた。

「クワ姉！！クワ姉！！無事か」

「大丈夫よ♪ディエチちゃん♪当たったと見せかけて私のＩＳシルバーカーテンを使ってかわしたら」

私は、シルバーカーテンを使って私自身を幻術で作り出しそれに風の刃を当てさその隙に私は、自分の姿を隠してその場から少し離れた所に移動した。

私がその姿を表した所、ディエチちゃんが心配そうな声を上げてくるんもんだからそれに対し問題ない旨を伝えた。

「よかった…でも、あの状況から反撃してくるなんて…」

私の姿を確認したディエチちゃんは安心した様子をした後、驚きの声をあげた。

「でもぉ♪私に当てることなんて…絶対に…（ピシッ）」

「く…クワ姉…か…顔…」

「顔？どうしたのよぉ？私の顔になんか…これって私の…」

ディエチちゃんと話をしていた時、ディエチちゃんが私の顔に何かついたかのような声を上げたんで右手で右頬をさすってその手を見てみた。

（あらぁ～？自分には当たらないんじゃなかったけぇ？）

「誰だ！！」

「あらぁ～誰かと思ったらミツキ・サエグサさんじゃありませんか…もしかして…こんなまぐれ当たりで喜んで（ドン！！ボン！！）んぐっ！！」

自分の手に血がついている事を確認した所ミツキ・サエグサからの通信が入ってきた。

私は、すぐさまさっきのがミツキ・サエグサがやった事だと確信し彼女からきた通信に応じその事をまぐれ当たりと彼女を挑発。

すると、今度は小さい魔力弾数発が私に直撃。

その痛みに私は、思わず声を上げる。

（あれぇ～？また当たっちゃったぁ～。これもまぐれ当たりなのかなぁ～」

「ふざけるないで！！ミツキ・サエグサ！！」

私は、怒りを露わにし声を荒げた。

（クスッ、それが本性って訳。あなた…どうやら私を怒らせたみたいね…それがどういう意味か…誰に向ってケンカを売ってきたのか…教えてあげる（プツン））

「クワ姉？」

「ククククッ…やってみなさいよ…ミツキ・サエグサ。返り討ちしてあげるから…ＩＳシルバーカーテン」

ミツキ・サエグサの話を聞きながら冷静さを取り戻した私は、通信が切れた事を確認しつつディエチちゃんの心配を他所にそれを受ける事にしシルバーカーテンを展開し彼女の攻撃を待ち構えた。

「なんて数なんだよ…」

「くぅ！！」

ドドドドドドドドドドォーーーーーーーーーン！！

ディエチ視点

「クワ姉！？」

私は、上空を見上げながらクワ姉の事を心配しながら声をだした。

上空では、ミツキ・サエグサがロング・レンジから放つ魔力弾が次

々とクワ姉に向って襲い掛かる。

その数…数十…いや！数百！？と…とにかく、通常の魔導士が放つ魔力弾の数より相当多い！って言うか多すぎ！！

クワ姉は、シルバーカーテンを使ってそれを避けようとするが、彼女の魔力弾がクワ姉が姿を表そうがそうでなかろうが次々と直撃すた。

「クワ姉！・無事か！？」

「はぁ…ハァ、ハァ、ハァ、ハァ…うるさいわね…ディエチちゃん…少し…黙ってて」

まるで嵐のような攻撃が突然やみ、私はクワ姉に向ってその安否を確認した。

その声を聞いたクワ姉は、まるでボロ雑巾のような状態でお腹の辺りを右手で抑え、左手は、どうやら機能しない様子なのか腕から血を流しながらその腕をダラリと下ろし、そして、少し前かがみの状態で息を荒げながら私に黙るよう言い放った。

「また来た！？クワ姉逃げろ！！…えっ？これって」

前方からまた大量の魔力弾が迫ってきたのを確認した私は、クワ姉に逃げるよう告げた。

すると…。

「なんだよ！？これ？？なんで、私がクワ姉の格好をしててクワ姉

が私格好なんだよ！！」

「言われなくて逃げるわよぉ～ディエチちゃん。でもぉ～このままじゃ逃げ切れなさそうだから、ディエチちゃん…私が安全な所まで逃げきるまでオトリになってね。それじゃぁ～バイバーイ♪」

突然、私の目の前に私が現れ私がクワ姉の格好をしていた。

それを見た私は、その真意をクワ姉に確認した所クワ姉は私にオトリになれと言い出した。

「そ…そんな…クワ姉ーーーーーーーーーーー！！ぐわぁーー！！」

ドドドドドドドドドーーーーーーン。

クワ姉は、そう言い残しその場から姿を消した。

私は、呆然としながら迫り来る大量の魔力弾の攻撃を浴びそして、そこで意識は途絶えた。

ミツキ視点

（全弾命中…。敵戦闘機人をひとり撃破。ですが、撃破したのは、幻術を使っていた方ではないようです。どうやら、砲撃を担当してた見方をオトリにして逃げたようですが…追いますか？司令）

「そう…とりあえず、引いてくれたみたいだから…追う必要はないわよ。ミオちゃん」

（了解しました。次の指示を）

ミオちゃんから敵を撃墜したとの報告が私の元に届いた。そして、逃げた方のはどうするか聞いてきたから追う必要はない事を告げた。

「とりあえず、警戒態勢はそのまま維持。それと…」

（どうしました？司令？）

ミオちゃんに次の指示をだそうとした所目の前にしたからしたから何かが下から飛んできたのが目に入り言葉に詰まった。

「あっ…と…下から何か飛んできたような…あれは！？」

（司令！！どこに行くんですか！？）

（おい！ミツキ！！どこに行くんだ！！おい！ミツキ！）

私は、目を凝らしてそれが何か見てそれを確認しその場を離れそれに向って飛び出した。

そのいきなりの行動にミオちゃんだけではなくヴァイスまでどこに行くのか確認してきた。

クッ…間に合う？…いや！！絶対に間に合わせる！！

私は、飛行スピードを上げ、落下を始めたその子に向って急いだ。

ボフッ！！

「ふぅ～間に合ってよかったぁ～」

「うっ…う～ん…あ…あなた…誰？」

「私？私は、ミツキ・サエグサ。あなたのお母さんメガーヌ・アルピーノさんの元部下です。ルーテシア・アルピーノさん」

「お母さん？…お母さんはどこ！！返して！！」

「ああっ…あのね、ルーテシアちゃん。少し落着いてくれないかな？そうじゃないと落ちちゃうから」

私は、自由落下するルーテシアちゃんをなんとかキャッチ。

すると、どうやら意識を失ってたらしく気が付いたルーテシアちゃんは私が誰か聞いてきた。それを聞いた私は、自己紹介をした所ルーテシアちゃんは、いきなり暴れだした。

それに対し私は、ルーテシアちゃんに対し落着くようやさしく声をかけた。

「うるさい！！離せ！！お母さんを返して！！」

「うわっ！！ちょ…ちょっと！！」

「落着け！！ルールー！！お前のお母さんは無事だ！！」

ルーテシアちゃんは、まるで私の話を聞かないように暴れるのを辞めようとはしない。

私は、暴れるルーテシアちゃんを何とか落着かせようとした。それもどうやら効果はないらしくどうしようか悩んでいた所、どこからかルーテシアちゃんから声がかかった。

「あ…アギト…逃げなかったの？」

「ああ…私がルールーを置いて逃げるかっての」

「そう…それでお母さん無事ってどういう事？」

「そいつは、あたいから説明するよ。これを見て」

「ノア？！」

私とルーテシアちゃんが、声が聞こえたほうを見たところアギトって名前のノアと同じサイズの女の子が表れルーテシアちゃんと話をしだした。

そして、ルーテシアちゃんがアギトにお母さんの事を聞いた所、アギトの下から今度は、ノアが現れルーテシアちゃんに向ってお母さんがベットに寝ている様子が写った画面を見せあれやこれや説明しだした。

私は、それを聞きつついきなりのノアの登場に驚きの声をあげた。

「そう…それで、レリックは…」

「つまり！必要ないって事だ。先生の話じゃ、今は眠ってるけどその内目を覚ますってさ」

「本当!?」

「ああ、本当だよ。なぁ、ミツキ」

「うん…、そうだよ。ルーテシアちゃんだからこれから私と一緒にお母さんに会いに行かない?」

「えっ…、でも…。ガリュー…うん…そう…わかった。あの…一緒に行ってもいいですか?」

「もちろん!」

ノアの説明にルーテシアちゃんは、レリックの必要性をノアに確認。それを聞いたノアは、その必要がない旨を言い私にもそれを確認してきた。

それを聞いた私は、すぐさまノアと同じ意見である旨を言いルーテシアちゃんにこれからお母さんに会いに行かないかと誘ってみた。

その私の話に驚きの顔をしたルーテシアちゃんは、ガリューに何か言われたらしくそれを聞き私に対し一緒に行ってもいいのか?と逆に聞き返してきた。

それに対し私は、すぐさま同意した。

「それで?ガリューはなんて言ってきたんだ?ルールー?」

「えっと、今いるミツキさんは、信用出来る人だから彼女の事を信じて上げてって」

「なんだよ～あたいじゃダメなのか？」

「当たり前だ！！なんせお前は、逃げ出そうとしたルールーを手を貸したセインごと異空間で蹴り飛ばしたんだからな！そう言われて当然だ！！」

「何を～！！」

私とルーテシアちゃんが合意した所で、アギトがルーテシアちゃんにガリューがなんと言ってきた聞いて来た。

それを聞いたルーテシアちゃんは、私を信じるようガリューが言って来た事を告げ、その話にブーたれるノア。

その態度を見たアギトは、どうしてそんな事をガリュー言ったのかその理由を言い出しそれを聞いたノアがアギトに怒り出した。

「アギト…それは、違う。ガリューは、ノアはすぐに甘い物で買収されるから信じるならミツキさんの方が言いって…」

「なるほどな！？（笑）」

「それは、アギトも同じ…」

「ルールー！！」

それを見たルーテシアちゃんは、ノアがどうして信じてもらえなかったのかその理由をつげた。それを聞いたアギトは、笑いながらそれを納得。でも、それを見たルーテシアちゃんは、アギトも同じだと告げその声に彼女は声を荒げる。

「よし！それじゃ、まずは下に下りよっか？ルーテシアちゃん」

「ちょっと待って…あの…私の事ルールーって呼んでもらってもいいですか？私は、ミツキさんって呼びたいんで」

「わかったわよ、ルールー。それじゃ行こうか？」

「はい。ミツキさん」

一連の話を終えた私は、ルーテシアちゃんに地上に降りるよう話をした。

するとルーテシアちゃんは、自分の事をルールーと呼んでほしいと私に言ってきたので私は、それをすぐさま同意。

そして、ルールーに再度地上に降りるよう話をしそれをルールーはそれを了承した。

さてと…後残るは…。

私は、ルールーを抱いたままゆっくりと地上に降下し始めた。そして、それに続くノアとアギト。

そして、残る懸案である機動六課…と言うよりスバル達になんて言おうか少し悩みながら私を不満げな表情で見つめる彼女達を見下ろしていた。

その５１（後書き）

作者
「あと書きのコーナー！！通常版！！今回のゲストは！？」

オーリス
「私…オーリス・ゲイツよ」

作者
「さて…オーリスさん？今回は、ヴァイスとミツキのやりあいから始まりましたが二人は昔からああだったんですか？」

オーリス
「そうね…最初の頃は、一言二言交わす程度だったんだけど時間が立つにつれてああなっていったって感じね」

作者
「なるほど…それにしても既に公開してますが、最初はヴァイスがオーリスさんの事をレジアス中将の娘さんだと知らずにナンパしたとか…」

オーリス
「プププッ！そう！そう！今思い出しただけでも笑っちゃうわよ。その事を言った時のヴァイスの顔…（笑）相当びっくりしたらしいわよ…で、それ以来あいつは私の下僕…」

作者
「げ…下僕…ですか…？具体的にはどんな事をさせたんですか？」

オーリス
「たいした事はさせてないわよ?私の変わりに書類整理させたり…私の車を洗車してもらったし…後…アッシー君にもなってもらったわね?」

作者
「アッシー君ですか…なんだか懐かしい（作者の言葉にギロッと作者を睨むオーリス）…い!いえ!それは…それとして…実際問題ミツキさんとヴァイスさんってどうなんですか?」

オーリス
「どうなんだろう?ミツキってとにかく奥手だし…あっ!そうだ!ちょっと待ってて」

作者
「は…はぁ…」

オーリス
「もしもし、ヴァイス!今すぐココに来なさい!えっ?仕事?へぇ～…そんなに仕事が大事なの～（イラッ）えっ?仕事がなくなったから来れる。ありがとう～♪なら、すぐに来なさい!それじゃ（ピッ!）申し少ししたら本人が来るからちょっと待ってて」

作者
（なんだかヴァイスに同情しちゃいますね…）

それからおよそ15分後～。

ヴァイス
「お待たせ～って、なんでここに作者がいるんだ?」

オーリス
「そんな事は、どうでもいいの！ヴァイス！あなた！ミツキの事どう思ってるの？」

ヴァイス
「んな！何をいきなりいいだすんだよ！オーリス！！」

作者
「少し顔が赤いようですが…」

オーリス
「そうね…この際だからハッキリいいなさい！！」

作者
「さあ！」

オーリス
「さあ！」

ヴァイスに詰め寄る作者とオーリス。ヴァイスh、オロオロしながら壁まで追い詰められる。

ヴァイス
（い…いきなり呼ばれたかと思えば…2人ともニヤニヤしやがって～。あいつの事を俺は…ダメだダメだ！今言ったら明日からどうなる事になるか…だが、このままだと…あっ！そうだ！）

ヴァイス
「あーーーーーーーーーーー！！中将がフルチンで裸踊りしてるー

ーーーーー！！（と言いつつオーリス達の後ろを指差すヴァイス）」

作者
「えっ！」

オーリス
「まさか！お父様！」

ヴァイスの言葉を目の当りした二人は驚き後ろを向いた。

「いーーーーーーまだぁーーーーーーーー！！逃げろ！！」

オーリス
「あっ！！しまった！！…」

作者
「どうやら逃げられてしまったようです。まぁ、そろそろ時間なんでしょうがないですね…」

オーリス
「逃げ足だけは速いわね。いずれ聞き出してやるわ」

作者
「お願いします。それでは、オーリスさん！〆のセリフお願いします」

オーリス
「わかったわ…次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５２！！テイク、オフ…」

その５２（前書き）

フラナガン　市街地

ギンガ視点

「おっ！？来たな？」

「ミツ…姉…」

フェラルド隊長の声を聞いたこの場にいる全員が空を見上げゆっくりと降りて来るミツキさん達を見つめ私の横にいたスバルは、その光景が未だに信じられないと言った様子でミツキさんの名を呟いた。

それも仕方がないわよね。

なんせ、ファントムってその存在自体は公にはされてはいないけど噂では囁かれててその噂と言うのが自分達の利益にならない事にしか動かず、そして人殺しも平気で行いさらに法律を無視した何でもありの「管理局の番犬」…。

その噂については、今さっきのフェラルドさんの行動から察するにその辺の事からなんだろうけど、でもその作戦行動自体通常の部隊では扱わない事件…つまり裏切り者の始末とか、犯罪組織なんかを殲滅させたり…中には、同じ局員を調べたり疑ったりと言った所謂汚れ仕事が多い。

そして、その作戦行動に影響が出ないよう殺人を犯しても罪に問われないと言う所謂「殺人許可証」と言う物まであるためその部隊に

協力しているって事だけでそれを聞いた局員は面白い顔はしない。

でも、「殺人許可証」にしても副司令のケインさんが身辺調査も含めその性格など細かい所までチェックした上さらにテストと面接をパスしないともらえなかったり、実際殺人許可証を行使するのは、最後の手段って言う決まりがあり教導資格を持つフェラルド隊長がその辺をみっちり仕込んだ上で作戦に参加させていると言ったくらいかなりその許可証を持つこと自体難しい物になっている。

ちなみに、その許可証は正規隊員しか持つことを許されずミツキさんもユウもこれを持っている。

私もファントムのサポーターとして参加した当初は、噂を信じてはいたが実際に中に入ってみたらミツキさんが司令をやってるだけあって作戦がない時なんて家族みたいでその絆は物凄い固い。

だから、今回もユウの話から想像するにミツキさんが単独で行動する事を知った誰かがケインさん達に連絡。

それを聞いたケインさん達が飛んできたって感じかな？

この憶測をユウにも言ってみたんだけど、ユウもその可能性が一番高いって言ってくれた事から私とユウについては、今回の件に対しミツキさんに協力する事で決めたんだけど…。

「おい！ミツキ！！これはいったいどういう事だ！！答えろ！！」

ミツキさん達が地上に着地した事を確認したヴィータ副隊長は、ミツキさんに近づき怒号をあげる。

「なんですか？あなたは？」

「てめぇには関係ねぇ！！私は、ミツキに用があるんだ！！ドケ！！（ドスン）痛てぇ！！てめえ！！何しやがる」

ミツキさんに近づこうとしていたヴィータ副隊長の前に合流して来たケイン副指令が立ちふさがる。

ヴィータ副隊長は、ケイン副隊長には声を荒げその横を通り抜けようとした所ケイン副指令に突き飛ばされ尻餅をついた。

「まったく…あたなはよくわかっていらっしゃらないようですね」

「なんだと！！」

「いいですか？あなたと司令の関係については、知ってますが、それはあくまでプライベート！！そして、ファントム・ナイツの司令は、管理局での階級に関係なくその地位は提督と同等！！三等空尉ごときが司令に対し馴れ馴れしくしないで頂きたい！！」

「んな！！てめぇ～！！」

「ヴィータ！！ちょい待ち！！」

「はやて！？」

ヴィータ副隊長を突き飛ばしたケイン副指令は、今のミツキさんは、司令と言う立場でその権力は提督と同等である事を説明した上で三等空尉であるヴィータ副隊長に馴れ馴れしくしないよう注意する。

それを聞いたヴィータ副隊長は、その話に怒りが増しケイン副司令に食ってかかろうとした所八神部隊長がそれを止めた。

やっぱり…こうなっちゃうのよね…。

ケイン副指令のその行動にユウと私、それにフェラルド隊長にノアは呆れた様子でその一方ミツキさんと言えばしょんぼりとも申し訳なさそうにもとれるなんだか複雑な表情をしていた。

でも、ミツキさんはケイン副司令を特に注意などする事はなかった。

いつものミツキさんなら注意する所なんだけど…。

でも、ケイン副司令って厳しいけどミツキさんの事情を知ってるからこそどんな事態が起こるかもしれないからこういう所だといつもピリピリしてるんだ…って前にフェラルド隊長から聞いた事があってその辺の事から注意とかはしないみたいなんだけど…。

この事を知っているのは、ファントムに関係してる人達だけでそれを知らないスバル達は、ケイン司令の行動にムスッとした様子。

なんだか…ケイン副指令とフェラルド隊長がこの状況をドンドン悪い方向に持ってってるみたいみえるんだけど…大丈夫なのかな？

私は、そんな不安を持ちつつこの状況を見守る事しか出来ずにいた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５２…始まります」

その52

その52

はやて視点

「なんで止めんだ!!はやて!!」

ヴィータは、ウチに止められた事が納得いかないらしく声を荒げる。

「なんでかって言えば、ケイン副司令の言っとる事がほんまやっちゅうことやからかな?」

「マジかよ…」

その声にウチが答えた所、驚きの声を上げるヴィター。

そして、それを聞いてたスバル達新人フォワードとリインも驚いた様子。

「申し訳ございません、ケイン副司令。なんせそちらは、極秘部隊故にサエグサ司令に提督と同様の地位がある事なんて知りませんでしたので」

ウチは、ヴィータの前に立ちケイン副司令に部下の非礼を詫びる。

「いえ、お分かり頂ければかまいません。八神部隊長」

ケイン副司令は、メガネを直しながらウチのお詫びを受け入れてくれた。

「それで…先ほどの件になりますが、そちらの保護対象の身柄になりますが連れて行ってもらっても構いません」

「はやて!!何言ってんだ!!」

ウチの話に再び驚きの声を上げるヴィータ。

「ですが…、これほどの事件を起こした以上このまま連れて言ってお咎めなしちゅうは、如何なもんかと思うんですが」

ウチは、ヴィータの声を無視しケイン副司令に向って話を続ける。

「なるほど…罪は罪だ…とおっしゃりたいんですね?」

「そうです」

「わかりました。少々お待ちください」

ウチの話を聞いたケイン副司令は少し考え込みその場を離れて行った。

「ふぅ〜…これでなんとかなれば言いんやけど」

ケイン副司令の背中を見ながらウチはこんなことをツ呟いていた。

なんせ、こっちに来るまでの間にアルトからファントムについて色々と教えてもらっててようやく解ったからなぁ〜。

と言うのも、ケイン副司令の登場を知ったユウがケイン副司令の事を鉄仮面と叫んでいたのを知ったウチは、ユウに問いただしそして、アルトとユウ、それにギンガの3人が関わってる事を確認。

そして、アルト達からファントム・ナイツ…と言うよりあの鉄仮面…もといケイン副司令がいったいどんな人物なのかを聞き出した。

なんせ、戦闘自体はとりあえず終わったみたいやしともなればココから先は、ファントム・ナイツとの言わば交渉になるからな。

連中にウチ等の主張を通すためにも今のところのウチとの交渉役であるケイン副司令について知っとかないと手の打ちようがないしな。

でまぁ、アルト達の話によればあのケイン副司令って規律に対し無茶苦茶うるさいらしい。それで、礼節をキチッとして交渉していけば問題はないとのこと。

それに、ユウの話だとナンバー2でとにかくいたいらしく難しい問題については、ミツキに相談しにいくらしい無理してミツキを引っ張りだすよりかは、こっちの主張をしてケイン副司令からミツキに伝えてもらった方が良いとの事。

それを聞いて今やってみたんやけど…どうやらユウが言ってた事は本当なんやね。

早速、ミツキに相談しに言ったわ。

ミツキ視点

「と言う訳なんですが如何しましょうか？司令」

はやてと話をしてたケイン君がその内容を私に相談して来た。

なるほどね。身柄については、こっちに渡すけど起こした事件についてはその責任をとらせないといけないって事。

まっ…はやてらしいと言えばらしいけど、もっともな話だね。

でも、ルーテシアちゃん達の身柄の保証だけ、確実に取っておかないと…。

私は、そんな思考を巡らせた上でこう答えた。

「そうね。それは問題ないけど…万が一の事があっちゃいけないからその辺の事を六課との間で話合わないとね…」

「よし！！そうなれば後は俺にまかせとけ！！」

ケイン君にそう指示した所、フェラルドが自分の出番だと言わんばかりな表情で声をあげた。

「はぁ…、フェラルド…あなたがやると自体が面倒な方向に行くだけです。今回の件に関しては私の方が適任です」

「おめぇだって、さっきあのチビと人悶着やったばかりじゃねぇか？」

フェラルドの声を聞いたケイン君は、自分の方が適任であると主張。

それを聞いたフェラルドは、先程のヴィータとの事を槍玉に上げ自分の方が適任である事を言う。

はぁ～…この2人がそろうといっつもこうなんだから…まさに水と油…。

私がそんな事を考えていたら…

「司令？ここは、私に一任していただけませんか？」

「ミオ！！いったい今までどこに行ってたんですか？戦闘が終了してから通信が取れなくて心配しましたよ」

「申し訳ありませんでした。副司令…少し野暮用がありまして…」

ケイン君より送れて、金髪のツインテール…黒のファントムの制服を来たどっからかレモンの香りがしてきそうな5人組の変身ヒロインの最年少の女の子を彷彿とさるイメージのケイン君の妹でファントム・ナイツの情報担当で陸士１０８部隊情報部所属のミオ・メイファちゃんが現れ今回の件について自分に一任してもらえないか？私に言ってきた。

その声にケイン君は、心配してた旨の話をしそれにお詫びをするミオちゃん。

「おい！！ちょっと待った！！そもそも今回の交渉担当は俺のはずだろ！！」

そう言えばそうだったね…。それもじゃんけんで決めたんだっけ？

「先程とは事情が変わっています!!あなたでは無理です!!」

「それはおまえもだろ?ケイン?通信で聞いたぜ?ウチの部隊長とやりあってるのを?」

「ユウ!?」

「ユウ・サエグサ…貴様ぁ!!」

フェラルドの話にケイン君が声をあげそれを聞いてたユウがいつの間にかこっちに来ててケイン君にタメ口で話出す。
ユウに気づいた私は、驚きの声を上げケイン君は、タメ口で言ってきたユウに向って苛立ちを露わにする。

「おいおい…まさか忘れた訳じゃないよな?俺の特権」

「ジョーカー…ですか…」

「そういう事。つまり、俺に色々言えるのは相談役か司令である姉貴だけって事。副司令のあんたにとやかく言われる筋合いはないって事。もし、俺に文句が言いたいなら早く司令になれっての」

「クッ…」

ケイン君の態度を見たユウは、自分が持っているファントムでの特権の事を告げケイン君には言われる筋合いではない事を主張。
その言葉に言い返す事が出来ないケイン君。
それで、ユウが言ってた「ジョーカー」って言うのは、何かと言え

ばファントムの中でもその能力が単独任務に特化した人物のみが持てる称号でそれを持っている者に対し指示命令が出来るのが、ユウが言ってた通り司令とその相談役のみ。

具体的に言えば、司令である私と相談役のミゼット提督がその立場にいるってことかな？レジアス中将も昔は、相談役にいたんだけど今はその立場から離れている。

私としては、正直いてほしかったんだけど…でも、本局と地上本部との仲が昔に比べさらに悪化したためにミゼット提督を会ってる所なんか見られたら大変だからって事から離れる事になったんだけど…。

「それで？何しに来たの？ユウ？」

「まっ、とりあえず状況視察って所だ。まさか姉貴がファントムの司令で出てくるとは思ってもいなかったんでな」

「ユウお兄様！！その事については…」

私は、ユウに何のようで来たのか確認した。

すると、ユウは事前に知らされてなかった事を根に持ってたらしく私に対し少し嫌味っぽくここに来た理由を告げた。

それを聞いた私は、何も言えず俯きその変わりにミオちゃんがユウに声をかける。

「まっ、大方じじい辺りが姉貴に黙ってそっちに連絡したんだろうな？そうだろ？ミオ」

「はい…その通りです。ですから…」

「わ～てるよ。これ以上は何も言わねぇ…でも、スバル達にはなんて言うつもりだ？」

ユウは、私の顔色を見た上で自分の推論を披露。

それを聞いたミオがそれで間違いない事を告げ、それを聞いたユウは、これ以上は何も言わない事を言いスバル達にはなんて言うか聞いて来た。

「そちらについても私が対処します」

「ちょ…ちょっと待ってよ!!それは私が!!」

「司令…、今司令が出て行って話をしてもスバルお姉様とティアナお姉様の事ですからもし納得されても…」

「ファントムに加えろって言ってくるな…間違いなく」

ユウの話にミオちゃんは、それについても自分が対処する旨を言いそれを聞いた私は、それについては自分がする事を言い出すもミオちゃんとユウがそれを止めてきた。

「ですので、まずは私がお2人とお話して気持ちを落着かせてからミツキお姉様とお話すればいいんです」

「でもよ、話だけで納得するのか？あの2人？」

「それなら俺の出番だな」

「フェラルド！！貴様まだ！！」

ミオちゃんは、焦る私にやさしく語りかけてくる。

その話に疑問を投げかけるユウ。

その問いかけにフェラルドが自分の出番だと言いケイン君は、フェラルドがまだ交渉役の事を諦めてはいないのか？と声を上げる。

「ケイン？お前なんか勘違いしてねぇか？俺が言いたいのは、そのギンガの妹ってヤツ達が頭じゃ納得してても体では納得してねぇ時に俺がその憂さ晴らしに付き合うって事だ。それにあの４人…どうやら俺の元教え子が教えてるみたいだからな？」

「元教え子？」

「なるほど…そういう事ならあなたの出番ですかね？」

「だろ？」

フェラルドは、ケイン君に対し上空を見ながらその真意を言いそれを聞いたミオちゃんが疑問の声を上げケイン君が上空を見ながら納得した様子を声に出す。

なるほど…なら任せてもいいかな？

私も上空を見上げ、降下してくるその人の姿を確認。

ミオちゃんとフェラルドに任せる決断をした。

「それじゃ、そう言う事でいいわね？みんな？」

「「「了解」」」

「という訳でお手伝いくださいね？ユウお兄様？」

「やれやれ…そうなるよな…」

全員それで納得した所で私が最終的な判断を下す。

その声にみんなは、了承する旨の返事をしミオちゃんがユウに手伝いを依頼。

ユウは、嫌そうな顔をしながらそれを了承。

「それでは、そう話をしてきます」

「お願い」

ケイン君は私にそういい残しミオちゃんを引き連れはやての元へと向って言った。

なのは視点

「はやてちゃん！！」

「なのはちゃんにフェイトちゃん」

「状況は？」

「相手さんの返事待ちって所や」

私とフェイトちゃんは、上空で今までの状況を見守りつつ警戒をしていたんだけどどうやら増援はこれ以上ない事を判断しフェイトちゃんと共にはやてちゃんの下へと降りてきた。

地上に降りたフェイトちゃんは、はやてちゃんに状況を確認。

それに対しはやてちゃんは、返事待ちである事を告げた。

「お待たせして申し訳ありません」

「いえ、それでお答えの方は？」

「ええ、そちらのお話については、概ね了承します。ですが、こちらの保護対象者の身の保証などの確認や取り調べ方法など細かい話合いが必要であると判断しましたが…如何でしょうか？」

この人がアルトが言ってたケイン副司令…。

私は、事前にアルトから説明を受けていた事を思い出しながらはやてちゃんの判断を待つ。

一方、フェイトちゃん方と言えば取り調べの際恐らく自分が担当することを確信した上でケイン副司令がまるでフェイトちゃんが捕まった子に対し強引な取り調べでもするのでは？と言いたそうな雰囲気に少しムッとした様子。

「そうですか…わかりました。それで、具体的には？」

ケイン副指令からの返事を聞いたはやてちゃんは、その旨を了承。
具体的なことについて聞いていた。

「そちらについては、私が担当させて頂きます」

「あんた…ミオちゃんない！！久しぶりやな？」

「お久しぶりです！はやてお姉様！！」

「それでは、ミオ後は頼みます。私はこれで失礼させていただきます」

「はい。それでは」

そのはやてちゃんの問いに対しケイン副司令の後ろから小さな女の子が出てきて自分がそのことについて担当する旨を告げてきた。

その子を見たはやてちゃんは、どうやら知り合いらしく再会の挨拶をする。

そして、それを見たケイン副司令は後はそのミオちゃんって子に任せる旨を告げその場を後にした。

その後、はやてちゃんの方からミオちゃんの事が私とフェイトちゃんに紹介されセカンドネームがケイン副司令と同じである事に気づいたフェイトちゃんがその事を確認。

「はい、先程までいたケイン副司令は私の兄です。それにしても申し訳ございません。どうやら兄が色々とご迷惑をおかけしたみたいで」

「そんな事はないんよ。でも、まさかあの副司令と兄妹とはな～。それにミオちゃんまでファントムにいたとは思わへんかったわ」

「申し訳ございません。何せ、ファントムの存在自体あまりもらしていけない決まりがありまして…」

ミオちゃんからケイン副司令が兄である事を告げられたはやてちゃんは驚きつつも今までファントムにいる事を教えてもらえなかった事に対しチクリと一言。

それを聞いたミオちゃんは、そのことを言えなかった理由を言いはやてに謝る。

「それで、話し合いの事なんやけど…」

「はい。そのことについては、すぐにでも始められますが…あの、この後…何かご予定はありますか?はやてお姉様?」

「いや、特にないんよ。なら、すぐにでも始めようか?あっ…こんな所やとなんやから話し合いは六課の隊舎でって事で」

「わかりました。フェラルドさーーーーーーーん。移動でぇーーーーす」

「おおっ!!今行く!!」

えっ？フェラルド…？

「なのは…今こっちに来る人って…」

はやてちゃんとミオちゃんの話合いは六課にて行う事が決まった所でミオちゃんが突然後ろのほうを向いて大きな声で誰かを呼んだ。

その声にどっか聞いたような声で大柄の男性が返事をしながらこちらに歩いてきた。

その姿を見たみたフェイトちゃんは、私に対しその人の事を確認してきた。

「きょ…教官！！フェラルド教官ですよね！？」

「おおっ！！やっぱり高町じゃねぇか？久しぶりだな！！」

その男性が近づく事につれ私は、その昔教導隊の候補生だった頃にお世話になってた教官である事を思い出しフェラルド教官に声をかけその声に気づいたフェラルド教官もなつかしそうに声をあげた。

「なんや？なのはちゃんの知り合いなんか？あの人」

「うん、そうだよ。でも、詳しい事については次回だよ！はやてちゃん」

「さよか～ってぇ！！これで終わりかい！！」

はやてちゃんは、私の言葉に一人で突っ込みをしながらなんだか満足そうな表情だった…。

その５２（後書き）

これで、３日連続投稿！！さて？これからどうしよう（笑）

その５３（前書き）

機動六課所有のヘリ内

ティアナ視点

「えぇ～っ！！フェラルドさんがなのは隊長の先生！！」

「マジかよ…」

「そうだよ。私が教導隊の候補生だった時のね」

地下下水道での戦闘が終わり私達は、ミオちゃんとギンガさんそれとフェラルドさんと一緒に六課へと帰還するためにヘリに乗り込み移動を開始した。

そのヘリの中でなのは隊長からフェラルドさんとの関係が明かされそれにスバルとユウが驚きの声を上げ、その声になのは隊長が答えていた所。

「それでぇ～ひとつ聞いてもいいですか？フェラルドさん」

「なんだ？いったい」

なのは隊長の話を聞いたスバルは、目を輝かせフェラルドさんに質問をしようとしていた。

「あの～…なのは隊長ってどんな生徒だったんですか？」

「ス…スバル！！そんな事聞かなくてもいいよ～」

スバルは、意を決した様子でフェラルドさんに質問をした。

その質問を聞いたなのは隊長は、なんだか恥ずかしそうな顔をしながらスバルの質問を辞めさせようとしていた。

何か言われたくない事でもあるのかしら？

「そうだな～…高町は…とにかく手のかかったヤツだったな～」

「フェラルド教官～！！って、ちょっとはやてちゃん！何するのよ！」

「いいやないの～なのはちゃん。昔の恥ずかしい話のひとつやふたつ♪さぁ！スバル！！なのはちゃんの事は、ウチにまかし！！」

「了解しました！部隊長！！それで…具体的には…」

スバルの質問を聞いたフェラルドさんは、昔の事を思い出してるかのように腕組みをしながらその質問に答えていてなのは隊長は、まだ止めようとしていたが部隊長にそれを阻まれさらに話を聞こうとするスバル。

「具体的にか？そういやこいつ、俺の授業の時によくイメージトレーニングをやっててな～。それが俺にバレてよく俺の拳固を食らってたな～」

「よく…わかりましたね…その事」

「感だよ！長年の感！！」

スバルに再度質問を聞いたフェラルドさんは、授業中での出来事を教えてくれそれを聞いた私は、よくイメージトレーニングをしている事がわかったのか唖然としながら聞くとフェラルドさんはそれを感だと答えた。

「それでそれで」

「まだ聞きたいのか？そうだな～…あっ！！あったあった！！」

「それはなんですか？」

まるで芸能記者のごとくなのは隊長の過去を聞き出そうするスバル。

「世界地図！！」

「「んな！！」」

「世界地図？それっていったい…」

フェラルドさんが何かを思い出したかように「世界地図」と叫んだ。

それを聞いたフェイト隊長となのは隊長は、顔を赤らめそれを聞いたスバルは、それが何のことか聞こうとした。

「あれは…高町が教導隊の隊舎に来始めた頃、なんでも次元航行艦隊にいる友達が泊まりに来てるってんで俺にその子を「泊めても言いか」って聞かれて俺がそれを許可したんだが…次の日の朝…ング

！！」

「ふぇ…フェラルド教官…その話は、スバルが聞かなくていいそうですよ～」

「スバル…もういいよね？その事は…」

「は…ハイ…モウイイデス…」

フェラルドさんがそのことを詳しく話そうとした所なのは隊長がフェラルド隊長の口を塞ぎ、フェイト隊長がいきなりセットアップをしバルディシュの魔力刀の刃をスバルの首先に近づけその話を聞かないようにスバルを脅す。

その迫力にそれ以上聞く事を諦めるスバル。

「そう言えば…部隊長は？」

「あそこでノビてますよ。ティアナお姉様」

ミオちゃんに言われてその方角を見てみると…。

「（プスプス）…普通…こんな所でお話するか…なのはちゃん…ガクッ」

部隊長は、どうやらなのは隊長からお話を食らったようで最後のセリフを言い残し力尽きた。

それにしてもどうやってお話したのかしら？

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５３…始まります」

その５３

その５３

機動六課部隊長室

はやて視点

「それでは、これで双方合意という事で」

「それでええな？フェイトちゃん」

「うん。後はまかせて」

ウチは、ミオちゃんとの話合いの結果問題ないかフェイトちゃんに確認し問題ない事を確認しミオちゃんにそれでええ旨を伝え握手をした。

今回決まった内容というのは、

・保護対象者の身柄は、ファントム・ナイツで預かる。
・今回の事件の事情聴取については、行う事としその際には、ファントム・ナイツの者がその聴取に立ち会う。
・事情聴取を行う場所については、事前に機動六課の担当者とファントム・ナイツの担当者が打ち合わせを行いその話し合いで決めた場所で行う。
・尚、機動六課はファントム・ナイツが保護した今回の事件の容疑者の身柄を保証しファントム・ナイツは機動六課が行う取り調べに

対し妨害行為などを行わない。

という事。

まぁ…これを聞いた直後、立会人がつく事についてフェイトちゃんは自分が乱暴な取り調べをすると向こうがそう考えそれでつくのか？と思ったらしく難色を示していたけど、その後ミオちゃんからフェイトちゃんの取り調べというよりそれ以外の連中がルーテシアちゃんの身柄を利用してミツキに揺さぶりをかけてくるかもしれないと言う可能性があるからだとのこと。

そのための立会人だと言う説明を受けさらに細かい所の話をしフェイトちゃんも納得してくれて合意。

「それでは、ハラオウン執務官。後日担当者の顔合わせを行いたいと思いますので担当者が決まり次第改めてご連絡いたします」

「わかりました」

「さて…これからが本題ですね…」

「本題？まだ何かあんのか？」

フェイトちゃんとミオちゃんが握手をしながら今後の事を話し終えた所でミオちゃんがポツリと呟いた。

それを聞いたウチは、そのことが何かミオちゃんに聞いた。

「ええ…あのはやてお姉様？ここにスバルお姉様達を呼んでいただけませんか？」

「スバル達を？それならええけど何を始める気や？」

それを聞いたミオちゃんは、ウチにスバル達を呼んでもらうよう頼んできた。

ウチは、そのこと自体は問題ない事をつげ何をする気なのか聞いてみた。

「そうですね…今回のことについてどうやらスバルお姉様達が納得されていないようなのでその辺の事を…」

「なるほど…その事をミツキの変わりにスバル達に説明しようって訳やな？ならそれにウチ等も参加させてもらってもええか？」

「もちろん。今回のことから機動六課の皆さんにも知っておいて頂きたいので」

「了解や。フェイトちゃんも参加って事でええか？」

「うん、いいよ。はやて」

ミオちゃんからその理由を聞いたウチは、その事に自分達も参加してもいいか確認。ミオちゃんからＯＫをもらいフェイトちゃんに参加する事を聞きスバル達を部隊長室までくるよう通信をした。

それからおよそ１０分後…。

ユウ視点

「これで全員そろったかな?」

「まだ、アルトが来てません」

「そっか…ならもう少し待とうか」

部隊長から通信を受けた俺とスバル、ティアナにエリオ、キャロそれになのは隊長にフェイト隊長とフェラルドは、部隊長室に集合した。

あらかたそろった所で部隊長が全員そろったのか確認の声をだし、それを聞いたスバルがまだアルトが来ていない旨を告げた。

本当ならヴィータ、シグナム両副隊長も呼ばれていたんだが仕事の都合で参加する事が出来ず俺達以外には、ロングアーチの面々も顔をそろえていた。

「すいませ～ん!!遅れました～!!」

「アルト!!遅いで!!」

「すいません!!なんせ…この方に捕まってしまって…」

アルトは、慌てた様子で部隊長室に入ってきた。

それを聞いた部隊長は、遅れてきた理由をアルトに確認した。

すると、アルトの後ろから緑色のウェーブの掛かった髪をひとつにまとめ地上本部の制服の上に白衣を肘近くまで腕まくりをしタバコをくわえたひとりの女性が現れた。

「さすが、先生。時間ピッタリですね？」

「んな！？ババア！？いったいなんで（ガン！）ゲボッ！！」

「あぁん！！誰がババアだってぇ！！誰が！！」

その女性に対しミオが感心したような声をだし俺がババアと叫んだらいきなり殴られた。

「先生！！お久しぶりです」

「あれっ？誰か思ったらスバルにギンガ…それにティアナじゃないかい。大きくなったねぇ～」

「お久しぶりです。先生」

「先生こそ相変わらずお元気そうで」

俺を殴りつけたのを見たスバルは、そのことがまるでなかったかのようにその先生に声をかけそこれに答えた後ティアナとギンガがそれぞれ再会の言葉を交わす。

「それで…そろそろ紹介してほしいんやけど？」

「そうですね…こちらミツキお姉様の主治医で元ファントム・ナイ

ツ副司令のユン・エリシャ先生です。今回の事で私が呼んだ言わば助っ人です」

「もしかして、ユン先生に連絡をとるために集合に遅れたって訳か？」

「はい。なんせ、スバルお姉様達に話をするとなるとかなり深い所まで話さねばなりませんので当時の状況を知ってるユン先生に助っ人をお願いしたんです」

部隊長の問いかけに対しミオがユン先生のことを紹介しそれを見たフェラルドが先程集合にミオが遅れたのはこのことか？と確認。ミオがその辺の事情を説明した。

「それで？何が聞きたいんだい？」

「その前に…なぁ？ミオちゃん？今回ずいぶんと大盤振る舞いやな？」

ユン先生が椅子に座り何が聞きたいのか？確認した所、部隊長がその前にミオに向って質問をした。

「ええ…通常ではここまでする事はありません。ですが、スバルお姉さま達とミツキお姉さまの関係上詳しく説明しなければならいと判断したまでです。

それに、今回の件でいずれ機動六課も今私達「ファントム・ナイツ」が追っている事件にすでに巻き込まれる可能性が出てまいりましたので…」

「つまり…レリックが絡んでくるから…なんやな？」

「はい。その通りです」

「わかったわ。それじゃ始めよか」

部隊長の質問にミオがその理由を答えそれを聞いた部隊長は、納得した顔をしながら話を聞く体勢をとった。

「それじゃ…なぜ？今回ファントム・ナイツが介入してきたのか？と言うのとミツキさんがファントム・ナイツに参加しているのを教えてくれますか？」

部隊長とミオのやり取りがすんだ所で、ティアナがユン先生に質問を開始した。

「その事かい…。まず、今回なぜ？ファントムが介入したかと言えば保護したルーテシア・アルピーノが出てきたからさ」

「なぜ？あの子なんですか？」

ユン先生がその理由を告げたところティアナが質問した。

「それはね。それは、１０年前…ファントムの初代司令が地上本部で違法施設の調査任務についてた時にその分隊が全滅されたって言う事件があってね。その子母親がその分隊に所属していたんだけど、母親が死んですぐに行方不明になってね？それでずっと探してたんだよ？」

「１０年前？…その初代司令って人は、いったい誰なんですか？」

ティアナの質問に答えるユン先生。それを聞いたスバルが質問する。

「ゼスト…グランツ…」

「ま…まさか!!その事件って!!」

「そうだよ…ギンガ…あんたとスバルの母親もいた分隊…ゼスト隊の全滅事件の事だよ?」

スバルの質問にユン先生がその名を言いそれを聞いたギンガが驚きの声を上げる。それに対しユン先生は、やさしい顔をしながらスバルとギンガに答える。

「もしかして…ファントムはその事件の事を?」

「いや、そのことについては、ファントムが関わっているのはルーテシア・アルピーノとメガーヌ・アルピーノの保護だけだ。なんせ、自分でその事件の詳細を知りたいってヤツがいてね…そのことについてはそいつにまかせてるんだ」

「その人って…」

「それは秘密だよ。スバル」

その話を聞いたスバルがファントムが動いている理由がそれでは?と質問するがミュン先生はそれを否定。

さらにスバルがそれが誰かを聞いてみたが、ミュン先生からそれは秘密と言われブゥーたれるスバル。

それを見たミュン先生は、笑顔でスバルを宥める。

「それで二つ目の質問ですが…」

ユン先生の話が終えた所でティアナが2つ目の質問のことを聞いた。

「えっと…ミツキがファントムに加入した理由だったね？それは、そもそもあの子がファントムを作るきっかけを作ったようなもんだからさ」

「えっ？ミツ姉が？」

「ああ…。それじゃ、最初から話をしようか？」

ユン先生は、椅子を座り直し静かに話し始めた。

ユン視点

私は、ふぅ～と一息いれてから周りを見話し始めた。

「まず…あんた達は、赤と蒼の龍の話を知ってるかい？」

「はい…確か…その昔、風の民って人達が赤い龍の怪我を治してあげたのがきっかけでその友達の蒼い龍と一緒にその風の民に龍の力が宿る石をあげてその人達を助けたって話ですよね？」

「私も知ってるわ。昔兄さんにその絵本を読んでもらったし」

「私も母さんに読んでもらったよ。その話」

ユン先生の問いかけにエリオ、ティアナ、スバル順でその話を聞いた事があると答えた。

「その絵本の話が本当だとしたら？」

「えっ！？あれって作り物のお話じゃ？」

「そんな事ある訳…（本当の話なんです。あれ…）キャロ？それって…」

先生の話にその話が本当ではないと否定するギンガが答え、ティアナもまたそれを否定しようとした所キャロがそれを肯定する。

「私も…フェイトさんに昔読んでもらったことがあってその事をヴォルテールに聞いて見た事があるんです。そしたら…」

「ヴォルテールがそれは本当だって言ったんだね？キャロ」

「はい。フェイトさん」

キャロは、昔ヴォルテールに聞いた事をみんなに話をした。

それを聞いたハラオウン執務官がキャロに確認した。

「それなら話が早いね」

私は、そう言い昔話を始めた。

この始まりは、今から２５年前。

ユウとミツキの両親…ムツキ・サエグサとミリー・サエグサがその赤と蒼の龍のお話を信じとある遺跡を調査していた時に「蒼天の石」を発見したことに始る。

ユウの父は考古学者、母は魔法関係の科学者であり風の民が残した言われている日記を元にそれを探したと言う。

蒼天の石とは、そのお話にもあるように龍の力を封じた石の事でその他に紅天の石ってのがあるがそれは現在行方不明。

そして、その石と契約をしその石に魔力を与える事で龍の力を得る事が出来ると言われている。

ユウの両親が発見した時、偶然その石と契約してしまいその石が本物であることを確認。

それ以来、ミリーが所属していた研究チームが中心となりその石の研究が始った。

だが、その研究は思うようにいかず契約したミリーもリンカーコアはあったが魔導士としての訓練自体していなかったために大した魔力を石に与える事が出来なかった。

そして、時間だけが過ぎ去り資金難からその研究自体危ういものとなった。

そんな時だ。

その研究チームにひとりの男が現れこう言った。

「こちらの条件さえ飲んでくだされば資金援助させてもらいますが？いかがですか？」

その条件とは、

ユウの両親の遺伝子の提供。

そのチームの所長は、困惑するユウの両親を説得し資金難を脱する事に成功した。

そして、資金援助を受けたチームはその勢いを取り戻し研究は一歩づつだが着実に成果を上げていった。

その後、ユウの母親がひとりの男の子を出産した。

「ちょっと待ってください！！どうしてそれが男の子なんですか？女の子の間違いじゃないですか？」

「そうだよ。今の話じゃユウ兄が先に生まれてミツ姉は…」

私の話に待ったをかけ椅子から立ち上がり質問してくるティアナとスバル。

「姉貴は…養女なんだよ…スバル」

「えっ…」

「俺も詳しい話は聞いてはいないがそう姉貴が言ってた。だから、

先生の話は間違いないって事だ」

スバル達の話にユウが間違いじゃない事を告げる。

それを聞いたスバルとティアナは「そうなんだ…」と言い残し席に座る。

「それじゃ、続けるよ」

私は、そう言い話を続けた。

ミリーの出産によりチームは、その抜けた穴を埋める必要が出てきた。

そして、資金援助をして来た男にそれを依頼。

その男がリストアップした中から選ばれたのがミツキだった。

チームに加入したミツキは、産まれたユウのお世話と研究の手伝い等をしていた。

それから少し時間が立ってからある事実がわかった。

それは…、

資金提供をしていた男は、実は犯罪組織の人間でその組織の目的は研究チームに資金援助をしつつそして、蒼天の石の力を使って管理局に対抗しようとしていた事だった。

つまり…ミツキは、研究の進展を見守りつつ研究の成果を他に持っ

ていかれないよう監視してたって訳だ。

それを知ったユウの両親は、特に何もせず逆にミツキを養女にすると言い出した。

「なんでそんな事を？」

ユウに気遣いつつ質問する八神部隊長。

「それは…あの子がユウの両親の遺伝子を元に作られた人造魔導士…だからさ…それも失敗作のね」

「んな！！！」

「えっ…」

「嘘…」

私の答えにユウ、スバル、ティアナの順で驚きの声を上げる。

「あの…人造魔導士って…もしかして…」

「いや…あんたがいいたいのとは、少しばかり違うんだ」

ユウ達の反応を見つつハラオウン隊長が私に質問してきた。それを聞いた私は、その事とは少し違う事を告げる。

「あんたが言ってる人造魔導士というのは、誰かの遺伝子を元に同じ容姿、同じ記憶を持った…言わば自分のコピーを作る事の事だろ？でも、私が言っている人造魔導士って言うのはベース遺伝子に色

んな遺伝子を組み合わせてオリジナルの人格を作り出す事なんだよ。それも蒼天の石を使わせるためにね。だから、ミツキは生み出されてれユウの両親の所にいくまでずっと戦闘訓練やその組織の任務をさせられてたのさ。

それで、失敗作って言うはミツキの体は通常の人間に比べリンカーコアが不安定でね。それがミツキの体調に色々と障害を与えていてね。ミツキの発作は、それが影響してるのさ」

「それじゃ…なんで養女にするなんて…」

私の説明を聞いたギンガが俯きながら聞いて来た。

「それはね…ミツキが昔血液検査を受けた時についでに私が遺伝子を調べたのさ。そのときに2人の遺伝子を使っている事が解ってね…それでああなったのさ」

ギンガはそれを静かに聞いてはいたがさすがにショックは隠し切れない様子。

その後、その組織はその昔蒼天の石の元に作られたと言われる人工の龍の石「黄天」を発見。

研究自体もある程度終わりに近づいた事を確認。

蒼天の石とそのチームが石とは別に、開発を進めていた情報管理システムを手に入れるため…それと手に入れた黄天がどれくらいのものなのかを確認するためにその研究チームがいた研究所を強襲…。

その時…ユウの両親はミツキとユウを残し死去。

そして、ミツキがその時に蒼天の石と契約…その力を最大限発揮しそれを撃退。

その時起きた爆発音を聞いて駆けつけたクイント達によってユウとミツキは保護されたって訳さ。

そして、その時ミツキが持っていたデータの中にその組織の計画の事があってね。それを知った管理局がその組織の計画の阻止を目的に造った部隊ってのが…

「ファントム・ナイツ…と言う訳ですか…」

「そう言う事だ。八神部隊長」

八神部隊長はそう言い私は話を終えた。

私の話を聞いた機動六課の面々はなんと言って良いのか正直解らないといった様子だった。

そして…静まり返ったまま時間だけが過ぎ去って行った。

その５３（後書き）

連続投稿がこれで４日目！！ようやく最大の山を越えました。

次回は、このことについてのその後になります

その５４（前書き）

機動六課部隊長室

スバル視点

嘘…嘘だよね？ミツ姉が人造魔導士だなんて…。

ユン先生の話が終わり、その後ミオちゃんが話をしている。

「その後、その組織自体は、黄天の契約者により壊滅させられ現在、その黄天の契約者はスカリエッティと行動を共にしている可能性が出てきました。それで今回この事をお耳に入れておこうと思いお時間を頂きました」

「なんやと！！スカリエッティやと！！」

ミオちゃんの話に驚きの声を上げる部隊長。

なのは隊長達もその話に真剣な表情であれこれ話をしている。

私とギン姉、ティアにアルト…そして、ユウ兄を除いて…

「なぁ…ユン先生？」

「なんだいユウ？」

みんながこれからの事をあれこれ話していた所、ユウ兄がその重い

口を開いた。

「ノアの事なんだが…もしかして…その石の…」

「ああ、お前が思っている通りノアは蒼天の石に封じ込められてる蒼龍の意思を具現化した存在だ。ミツキの魔力でこの世界に存在している」

みんながさっきの話にあまり触れないよう気を使ってくれていたらしくユウ兄とユン先生のやり取りを聞きなんだか気まずそうな顔をしていた。

「そうか…あとひとつ…姉貴のヤツ…後、無茶を何回したら持たなくなるんだ？」

「ユウ…」

「ユウ兄…」

ユウ兄は、ユン先生を見つめながらみんなが一番気にしている事を聞きその声にアルトと私は、心配そうな顔をしユウ兄を見つめる。

「そうだね…ミツキは、普段蒼天の石の力のその一部を自分の生命維持とノアの維持に使っていてね。普段の生活や魔導士としての戦闘であれば問題ないんだが…その生命維持に使っている分を戦闘に使う…つまり蒼天の石をフルドライブさせての戦闘となると…ダメージの程度にはなるがあと1回もしくは2回…」

「そうか…わかった…」

ユウ兄は先生の答えを聞き少し考え込んだ。

「ユウ…あんた…何考えてんの？」

俯きながら黙ったままのユウ兄にティアが声をかける。

「んあーーーーーーーー！！辞めだ！！辞めだ！！」

「な！！気でも狂ったんか？ユウ？」

「いや、先生からの話を聞いてあれやこれや考えてみたんだけどど～も同じ所をグルグル回ってるような気がして…それで面倒だから考えるのを辞めただけです」

「へっ？」

「つまり、産まれがどうであれ姉貴は姉貴だって…今まで通りでいいじゃないかってね？」

「フフフッ…ハァーーーーハッハッハッ！！あんたらしい答えだよ。理由はあれかい？考えるのが面倒くさいってヤツかい？」

「まぁ…そんなところです」

突然、大声を上げたユウ兄に部隊長が声をかけその問いかけにユウ兄の答えを聞いて唖然とする部隊長。

そして、話を続けるユウ兄に対しユウ先生が大笑いをしその理由を聞いていた。

周りのみんなのその答えに納得した様子でいたがこの時…私の中でひとつの不安が流れた。

ユウ兄…私のとき…同じ事言ってくれるのかな?…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５４…始まります」

その５４

その５４

聖王教会　騎士カリムの執務室

カリム視点

「そうですか…やはりそれが真実でしたか…」

「はい…騎士はやてから報告がありました風の民と蒼天の石ことを無限書庫に調べてもらいました所、報告と同じ内容の物が出てきて私達が考えていた影の守護者＝ミツキ・サエグサと言う仮説はその可能性が低いとの事でした」

「これで…振り出しに戻ったという事か…」

執務室にて私とクロノ提督は、シャッハからの報告を受けていた。

私は、紅茶を飲みながらクロノ提督は腕組みをしながらその報告を聞き自分達の仮説が崩された事に難しい顔をしいた。

「これから…どうしますか？騎士カリム？」

「そうですね…クロノ提督はどうしたいんですか？」

クロノ提督の話にそれをそのまま聞き返す私。

「とにかく。我々…と言うより聖王教会と管理局の大半の人間がそう思っていた仮説が今のシスター・シャッハの報告で崩れたようなもんですから…とりあえずはいちからやり直しですかね？」

「そうですね…ですが…ひとつ疑問に感じたのですが…なぜ、今までいくら探しても出てこなかったのに、機動六課に今回の事を話をした途端こんなにもあっさりと出てきたのでしょうか？」

クロノ提督の話を聞いた私は、ひとつの疑問を提示した。

「つまり、誰かが…意図的にこの事を隠していた…と？」

「いえ…それこまでの確信はまだありませんが…どうも変な感じがしまして…」

「確かに、もしこれをミツキ達が仮に隠したとしても自分達に有利な情報になる訳ですからそれを自分達で隠すとは考えにくい…。とは言えこのタイミングで…しかもはやて達にミツキの事を話をした途端と言うのは…おかしいと言えばおかしいですね？」

クロノ提督は、私の話を聞き今までの事を整理するかのように話をした。

「それに…この話が最初に出た頃、その話を聞いた全員が一斉にミツキさんの事を調べだした経緯からしても何か意図的な物を感じてなりません」

「では…とりあえずこの事については、再度調べ直しをしてみると言うのはどうでしょうか？」

「そうですね…そうしましょうか？」

そういい私とクロノ提督は細かい所とこれからの六課の事についても色々話合い今日の会合は終了した。

それにしても…もしこの事がもっと早くに見つけて入れば…ミツキさんはあれ程の事をされなくても済んだハズなのに…。

私は、クロノ提督が去った後、ひとり執務室で紅茶を飲みながらその事を後悔していた。

でも…今私がいくらミツキさんに頭を下げようが彼女の体を元に戻す事は出来ない…。

それに、この事で彼女の家族にこの事を知られた事により今後彼女が今まで耐えていた自体に巻き込まれる…もしくは、自ら進んでその中に飛び込んでくる可能性が出てきたという事…。

そう考えた私は、通信画面を開いて連絡を入れた。

「あっ？カリムやないの？いったいどうしたん？」

「はやて…シャッハからこちらでの調査結果の方は見ましたか？」

「ああ、それならもう見たよ？」

私は、はやてに通信を取りはやてがシャッハが調べた結果を見たか聞きそれを聞いたはやてが答えた。

「そうですか?では、それを他の人達には?」

「いや…今の所誰にも見せてないんよ。さすがにこれを見せたら今のスバル達ならものすごぉ激怒する事間違いなしやからな」

「そうですね。私もそれが心配で連絡をいれたのですが…」

「気ぃ使ってくれてありがとな、カリム。でも、さっきミツキからも連絡があってこの事については、閲覧の制限でもかけようか?って話をしてた所なんよ」

「ミツキさんも?」

はやてからの話を聞いた私は、はやての口からミツキさんの名が出た事に少々驚きの声をあげた。

「ミツキのヤツ…何時の間にかこの事を知っててな。それで連絡をくれたらしいんよ。それにしても、相変わらず自分の事よりも他人優先やからな?ウチやカリムがユウヤツにフルボッコにされてないかって心配しとったわ。まぁ…クロノ君の事は一切気にしとらんかったけど…(苦笑)」

「ふ…フルボッコですか…それは気をつけないといけませんね」

その話に私は、冷や汗をかきながらそう答えた。

「でも、そうされても仕方がないかもしれませんね。はやてはともかく私は、それくらいの事を既に彼女にしてしまってるんですから…」

「カリム…あんまり気を落とさんといてや。ある意味ウチも同罪なんやから…」

そして、ふと考え直しをした私は、そうされても仕方がないと言いそれを聞いたはやては、私に自分も同罪だと告げてきた。

そして、2人の間に無言の空気が少しの間流れ…。

「はやて、こういう言い方はミツキさんやそのご家族の方に対し失礼なのかもしれませんが…今までの事は今までとしてむしろこれからの事をお互いに考えてみませんか？」

「そうやね。まぁ…これをユウ達が聞いたら何と言うのかはわからへんけど、カリムの言うとおりやウチもそうする事にするわ」

私がはやてに元気なってもらうよう提案をしはやてもそれを受け入れてくれた。

その後、色々とこれからの事を話し合い私は、通信を終了させた。

スカリエッティのラボ

クワットロ視点

「なに!!セイン姉とディエチが死んだだって!!」

「そうよ～ディエチちゃんは私を逃がそうとして、セインちゃんはルーテシアお嬢様を逃がそうとしてそれぞれディエチちゃんがミツ

キ・サエグサにセインちゃんがその使い魔のノアって子に殺されちゃったのよ～♪」

私の声にラボに集まった全員が驚きの表情をしノーヴェちゃんがその中で怒号を上げそれを聞いた私は、詳しい状況を説明した。

「くっそ～よくも!!よくも2人を～!!」

「2人の仇は、この姉が絶対にとる!!」

それを聞いたノーヴェちゃんとチンクちゃんが声をあげ他の子達もその声に続いた。

それにしても単純よね～。

まっ、撃墜されたのは本当だけどまだ死んだとはわかってはいないのに私の言ったことを信じちゃって（笑）

あれからなんとかラボに戻った私は、その状況をドクターに報告。

そして、2人の事については死んだ事にしみんなの士気をあげるために利用する事にし今に至る。

「よし!これから訓練に入るぞ!!姉に続け!!」

「「おおっ～!!」」

チンクちゃんの掛け声にノーヴェちゃんにウインディちゃんが声を上げ訓練所に向った、その後にオットーちゃんにセッテちゃんそれにディードちゃんが無言のままその後に続いた。

それにしても…私にここまでの傷を負わせるなんて…ミツキ・サエグサ絶対にゆるせませんわ!!

今度会ったら、ギッタンギッタンのバッタンバッタンにして…

「クワットロ？いったい何をしている？」

私が戦闘の時のことを思い出し地団駄を踏んでいた所トーレお姉さまが声をかけてきた。

「これは、トーレお姉さま少し考え事をしてまして…」

「そうか？それにしても怪我の具合大丈夫なのか？」

「それはもちろん～♪もう万全ですわ」

トーレお姉さまは無表情のまま私の体の心配をしてくれそれに私は、笑顔でそれに答える。

「それにしても…お前をあれだけ追い詰めた…ミツキ・サエグサ…侮れないな…それでデータは取れたのか？」

「申し訳ございません。トーレお姉さま。取ろうとしたのでうが…」

「そうか…なら、お前が見たところで再現は出来るのか？」

トーレお姉さまは、ミツキ・サエグサの戦闘データが見たかったらしくそれがないとわかり私の記憶から再現はできないか？と聞いてきた。

「それについては、ドクターからも依頼されてましてぇ～現在その再現を作っている途中ですわ」

「なら、出来次第私にも見せてくれ」

「了解しました。トーレお姉さま」

そう言い残しその場から去って行くトーレお姉さま。

トーレお姉さまにはああは言ったものの正直いまだにどう攻撃されたのかイマイチわからないのよね～♪。

私の記憶領域には、遠くから魔力弾が飛んで来てただけだしヘリの周りは強力なジャミングみたいな物がかかっていたようでどう攻撃して来たのかハッキリとはわかってはない。

でも～その魔力弾のスピードとその威力については自分で食らっていたから解っているからそのへんをちょちょいっとやればいいだけよね。

どうせ、あんなヤツより私の方が上なんですし…今回は少しばかり余裕を見せすぎましただけなんですから…。

私は、そう考えつつ自分の研究室へと戻る事にした。

ちなみに今回、レリックは手に入れられずおまけにルーテシアお嬢様とセインちゃんとディエチちゃんを失いはしたけどまだこれから…ウフフフッ…

その５４（後書き）

これでようやく地下下水道での攻防は終了です。

如何でしたか？

さて、次回は本編を少し離れてＩＦの話をお送りしたいと思います。

設定としては、ＪＳ事件終了直後…そして、再びあの方にも登場していただきます。

お楽しみに

ｉｆ～その１（前書き）

フラナガン　機動六課隊舎内
ｓｉｄａ　「亡霊の弾丸」

タスラム視点

「あう～…ティア～」

「そのくらいもう自分でやんなさいよ」

「スバルもう少しですよ…」

ＪＳ事件の後始末も片付き地上本部襲撃の際、破壊された隊舎も再建されて少しの時間がたった。

現在オフィスにはスバル、ティアナそして、我が主であるアウル・アパレシオンが集まりスバルが目の前の書類に向かいぐったりとした表情をしたまま作業を続けている。

ですが、スバルは書類でわからない所でたのか？と言うより早く終わらせたいのでティアナに「手伝って！」と言わんばかりのまるで子犬が飼い主に甘えるかのような声を上げた。

それを聞いたティアナは、呆れた様子をしながらスバル一人で最後までやるよう告げ、主は、スバルを応援しつつその様子を見守っているといった状態。

なぜこんなことになっているかと言えば、機動六課は、元々騎士カ

リムが出した予言を覆すために作られた部隊。

そのためその予言が覆った今は、やる事がないのだ。

だが、スバル達にとってはこれからが言わば自分達の夢へのむしろ本番なのだ。

スバルは特別救助隊、ティアナはフェイト隊長の執務官補佐官とそれぞれの行き先も決まったそんな時ヴィータ副隊長よりとある指示があった。

その指示と言うのが、新人ＦＷ達の今後のために「今の内から行った先ですぐに対応出来るようにそのための練習をしておけ！」と言うもの。

現在、ティアナとスバルはそれぞれの行き先で使う書類の記載の練習を今している所。

なぜここに主がいるかと言えば、スバルとティアナが作った書類に間違いがないかどうかを確認するための…言わば先生役でここにいる。

本来ならフェイト隊長とかがつくはずだったのだが、主がフェイト隊長に気を使って現在なのは隊長達によるエリオのためのサバイバル訓練に同行させたため。

ですが、なぜ？こちらでは使った事がない書類が作れるのか疑問に思った私は主にそれを確認した所…。

「姉さんの仕事を手伝っていた時に教えてもらったんだよ。おかげ

で今じゃどこの部署の書類も作れるようになったよ。」

と笑顔で私の問に答えていた。

主曰く、向こうの世界…つまりはあのロストロギアの実験の際に主が行った世界と同じ書類を使っているとのこと。

あれからちょうど半年がすぎ主の胸元には、今でもそのときにお世話になったミツキ・サエグサさんから帰り際に頂いた蒼い羽根のペンダントがつけられている。

「終わったーーーーーーーーーーー!!」

「お疲れ！スバル」

「お疲れ様スバル。さて…確認させてもらいますよ」

スバルは、書類作成が終了したかを喜ぶようにガッツポーズ。

それをみたティアナはスバルに労いの言葉をかけ主もまた頑張ったスバルに笑顔で労いの言葉をかけつつ出来た書類に間違いがないかスバルの横から身を乗り出して画面を捜査しその確認し始めた。

「あれ?アウルさん?そのペンダント…」

「?あっ…このペンダントがどうしたんだい?」

確認作業をしている主の胸元からペンダントが出ていたのを見つけたスバルが主に声をかけた。

「そのペンダントって確か…アウルさんが前に行った世界であったお姉さんからもらったものなんですよね…？」

「ああ、そうだが…それが…」

スバルの問いかけに主は笑顔で答えていたがその表情がすぐにキョトンとした表情にかわった。

「あの…え～っと…その…」

「スバル…あんた一体何が言いたいのよ？」

主の話を確認したスバルはなんだか急にモジモジしだした。

その態度業を煮やしたティアナは、スバルに声をかける。

「あ…だから…、うん！よし！！ティア！！ゴメン！やっぱり私！！…」

ピッーーーーーーーーーーーーーー！！！！

「なっ…何？！！警戒態勢？！！」

「いや！違う！！こ…これは…」

スバルは、ティアナの声に何か意を決した様子で何かを言い出そうとしたのとちょうど同じ時、突然何かの音が鳴り出した。

ティアナはこの音が警報音だと思い声を上げ立ち上がる。

だが、主はすぐさま警報音ではないことをティアナに告げ画面を見たまま固まってしまった。

「何よ…これ…」

「まさか壊れたの?せっかく作ったのに〜!!!」

＜いえ、画面自体は壊れてはいません。と言うより…」

主が見ている画面をティアナとスバルも主の両サイドから覗き込む。

そして、その画面を見たティアナは驚きの声を上げスバルは画面が壊れたと思いせっかく作った書類が台無しになると思い頭を抱えるが私がそれをすぐさま否定した。

しかも…このようになっているのはこのスバルが使っていた画面のみ…これは…もしかして…。

「まさか!!ハッキング!!」

＜その可能性が一番高いですね…＞

「で!でもっ!!六課のセキュリティってかなり頑丈に出来てるってシャーリーさんが…」

スバルの答えを否定した私に対しティアナは、別の可能性を提示。

私はその問いかけにそれを可能性が1番高いことを告げる。

だが、スバルは六課のセキュリティの高さ理由にあげその可能性を

疑問を投げかける。

「確かに…。六課のセキュリティは、例の襲撃の時に比べより強化されてる…。通常のハッカーでもこんなに簡単にしかも誰にも気づかれずしかもこの画面にピンポイントでこんな事は出来ないだろう…私が知る限りそれができるのは…」

「誰なんです?…もしかして…この画面に出ている…」

「いや…姉さんはこんな文面を送ってくるような事をする人じゃない…」

「それじゃ…いったい誰が…」

主は、スバルの疑問に対しまるで全ての感情を押さえつけるかのような声で答える。

その声を聞いたティアナは主それが誰かを確認しようとしたが、主の表情を見それが画面に出ている言葉にある人物の可能性を示唆。

だが、主はそれを否定。

それを聞いたティアナはやったのか?腕組みをしながら疑問の声を上げ画面を見つめる。

その画面にはたった一言。それが画面一杯に同じ言葉が羅列されている。

その言葉は…。

ーもうミツキには会えないー

「姉さん…一体何があったたんですか?…」

主は画面をみたままそう呟いた。

これが、私と主の運命を大きくかえる出来事の始まりであった。

ー魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～ｉｆ～

その１…始ります。

if～その1

if　その1　「突然の再会」

sida　「亡霊の弾丸」

機動六課隊舎内　部隊長室

はやて視点

「ですから！部隊長！！信じて下さい！！」

「本当なんです！！」

「…と言われても…なぁ？リイン？」

「はいです。シャーリーにも確認しましたが、ハッキングされた形跡が一切ないんです…ですから…」

スバルとティアナは、私の前にあるデスクを叩きながら今さっき起こったことを説明している。

でも、私もリインも正直困惑しとる。

なんせ、さっきリインが言ってた通り六課の管理システムに侵入された形跡は、一切なくスバルとティアナの話のみ。

「アウル…あんたは、どう思う？」

スバルとティアナの話を2人の少し後ろからまるでその様子を伺うかのようにしていたアウルにどう思うか聞いてみた。

なんせ、スバルとティアナの話が本当だとすればそのメッセージは明らかにアウルに向けられた物…。

とすれば、この状況を打開するためにも彼の意見をきかなあかんからな。

「…そうですね…。私も、その画面は見ましたがこんな事を出来るとすればおそらく姉さんの関係者になると思います。ですが…、こんな事を向こうの世界のナカジマ三佐達が許すとは正直思えません」

アウルは、腕組みをしながら現時点での状況を整理しながら私の問いに答えてくれた。

「なぁ、一つ聞きたいんやけど仮にスバルとティアナの話が本当だとしたらなんで向こう世界の師匠は、このことをゆるさへんのや？」

アウルの答えを聞いた私は、少し考えた後自分の中で引っかかってる点をアウルに聞いてみた。

だって、もし本当やったら向こう世界で家族同然だったアウルに対し大変なことがおこっとるのにその事を言われへんってなんやおかしない？

「それは…姉さんには、あまり大きな声でいえないんですがある特

別な力と…それとあるシステムを持っていてそれを利用しようとする連中がとにかく多いんです。ですので、もしこう言った情報が流れれば…」

「つまり、彼女を守るために向こうの世界の師匠はそうしてるんやな？」

「はい…その通りです…」

私の答えに真剣な表情で答えるアウル。その声を確認した私は、さらに質問を続ける。

「なら…ＹＥＳ、ＮＯで答えてな。アウル…あんたはその事…つまりは、ミツキさんの秘密って言うかその事についてアウルはその全貌を知ってるんか？ちなみにこれの答えを聞いてどうこうするつもりはないんよ。ただ…このことついての状況判断の材料にしたいだけやから…」

「……はい…知ってます…」

私の問いかけに少し考えたアウルは、その答えを私に告げた。

「そか…なら、慎重に判断せんといかんね…。なんせ、下手したらまた向こうの世界の皆さんに迷惑をかけるかもしれへんから…」

「でも…今の所は、スバル達の証言のみなんですよ？はやてちゃん。ですので単なるバグか誰かのいたずらの可能性が…」

私の答えに横にいるリインがその信憑性について疑問の声を上げる。

「う～ん…そこがネックなんよ～。まぁ…スバルとティアナの事やから嘘はつかんと思うし…いたずらにしてもハッキングの形跡はないとなれば隊舎内からって事にも…」

（まったく…どこの世界でも馬鹿チビは馬鹿チビでしかないのかよ…少しは頭を使えっての）

「リインは、馬鹿でもチビでもないですぅ！！」

「なんや？リインの事やったんや？私は一体誰のことやら…」

「はやてちゃん！！」

私がリインの問いかけに答えている最中頭の中にまるで念話をしているかのうに今までに聞いた事がない声が聞こえてきた。

その声にリインは即座に反応。

私は、そのリインの反応の早さに驚きつつもリインを少しばかりからかってみた。

「何！！今の声！？」

「ティアも聞こえたの？この声」

「この声…まさか！！ノアなのか！？いるなら出てきてくれ！！」

どうやら今私が聞いた声は、スバル達にも聞こえてるらしく2人はそれを確認しあう。

それに対しアウルは、聞き覚えがある声らしく「ノア」という名を呼びつつここに来るよう部屋のあちらこちらを見ながら訴えかけていた。

「（そんなに焦らなくても…）出てくるつもりだったよ」

「ノア！！」

「よっ！！久しぶりだな！！アウル！！」

その問いに対しノア…と呼ばれるその声の主は、せかすアウルを落着かせつつ私の前にあるデスクの上に転送魔法の魔方陣をつくりその中から現れた。

「この子が…ノア？」

「ちっ…ちっさ！…」

「リインと同じサイズ…やな…」

「はい…です…」

転送魔法から現れたノアは、アウルとの再会を楽しんどった。

その光景をみつつスバル、ティアナ、私、リインの順でそれぞれが感想を述べつつポカーーンとしとった。

（こらぁーーーーーーー！！ノアぁ～！！おんどりゃ～！！いったい、いつまで楽しんどるつもりやーーーーーーーーーー！！）

（そうですよ！！ノアお姉様！！時間がないんですから！！）

「こ…今度はなんや？！」

「この声…今の声の人の一人って、は…はやてちゃん？…」

唖然としとった私達にさらに追い討ちをかけるように頭の中にさっきとは別な声が聞こえてきた。その声に私とリインは驚きの声をあげスバルとティアナはその声が一体どこから聞こえてるのかキョロキョロしとる。

それにしても…その中の一人…私の声にそっくりやったわ…。

「悪ぃ～わりぃ～…つい懐かしくってな？」

「ノア…もしかして…今の声は…」

「ああ、向こうの世界のはやてとミオだ」

「なるほど…そうですか…」

ノアちゅう子は、今さっき聞こえた声に誤りつつアウルとの再会の喜びを一時中断した。

それを見たアウルは、その声の主を確認し納得しとるわ。

（あ…あの…主？）

「どうした？タスラム？」

（とりあえず…その…今お話しているその方と声のみで登場されている方々を私達に紹介してくれませんか？主だけわかっていても何も始まりませんので…」

「そ…そうだったな…」

この状況を見かねたタスラムは、アウルに声をかけノア達を自分達に紹介するよう告げその声にアウルはまるで私達を忘れていたかのようしてたのを隠すかのように慌てていた。

どうやら…本気で忘れとったみたい…やね。

「それじゃ、紹介します。こちらが姉さんの…使い魔でいいんですよね？」

「ああ！！ノアだ！階級は、陸曹だ！よろしくな！」

（音声のみで失礼いたします。私は、陸士１０８部隊所属のミオ・メイファ三等陸士であります）

（ほんでもって最後は、機動六課部隊長件課長の八神はやて二等陸尉です。お久しぶりやな？アウル君）

「お久しぶりです。八神さんそれにミオちゃん」

「お久しぶりです。アウルお兄様」

ノアの後に続いてミオさんと向こうの世界にいる私がそれぞれ自己紹介とアウルとの再開の挨拶をしとった。

「は…話には聞いていたけど…」

「向こうの部隊長って…」

「なんやえらいパワフルやね？向こうの私は…」

（そうかな？ウチはあんま変わらへんやと思うんやけど…）

「ちげぇ～よ。アウルの世界にいるはやては、おしとやかであたい達の方のはガサツなんだよ」

（それ！ど～ゆ～意味や！！ノア！！）

「あん！！そのままを言ってるだけじゃねぇか！！」

（2人とも！！こんな所でケンカしないでくださ～い！！）

ノアと向こうの私が口ゲンカを始めたかと思えばミオさんがそれを止めに入った。

その状況にスバルとティアナ…それとリインはついていけないと言った感じ。

まぁ…それも仕方がないやろ…。

なんせ頭の中では、2人が口ゲンカをしとって目の前では壁に向ってノアが一人でさけんどるしな…。

「なぁ…アウル…いっつもあんな感じなんか？」

「ええっ。ですがまだまだこんな物ではないすよ…」

私のふとした問いかけに対しアウルは笑顔を見せながら答えてくれた。

それにしても…あれ以上って…一体どうなるや?

それからおよそ10分後…

アウル視点

「それで…ノア?一体なんでこっちの世界に…?」

ノアと八神さんのやり取りがちょうど落着いた頃、私は、ノアになんでここに来たのか?その理由を聞かれた。

「それは…なぁ?アウル?お前…メッセージは見たのか?」

「ええ、見ました。姉さんにはもう会えないと…」

「そっか…」

「ノア!教えてくれ!姉さんに何かあったのか?頼みます!!」

私は、感情を抑えることを忘れノアに詰め寄る。

その声に周りにいたスバル達は、その私の行動に驚きの表情をしていた。

「まぁまぁ、落着いてなアウル。そないにしとったら話せつことも話せんくなる」

「すいません…。つい取り乱してしまって…」

「とりあえずノア？でええかな？話をする前に一つ確認したいやけど…その話ぶりからするとティアナとスバルの言とった事って、ノアがやったんか？」

ノアにつめよる私に対し八神部隊長がそれを征しそして、ノアに話かけてきた。

（それは違うんよ…そっちのウチ…）

「どういゆうことや？」

ノアが八神部隊長のといかけに答えようとした所その話に八神さんが割って入り八神部隊長がその理由を聞いてきた。

（あれは…ウチが計画してミオちゃんに頼み込んで流したもんなのよ。そして、その文面を送った直後にノアにバレてな…でもな？あれだじゃアウルにうまく伝わらないだろうからって、ウチ等を代表してノアがそっちにいったんよ）

「なるほどな…ならなんでハッキングちゅうまどろっこしい方法をとったんや？最初からノアに頼めばもっと楽やったやろうし…」

あっちの八神さんと八神部隊長とのやり取りが続く。

だが…さすがに同じ声が続くと段々訳がわからなくなってきた…スバル達は、もはやついてこれないとった様子だ。

（ほんまは、そうしたかったんやけどな…でも、最初うちノアはアウルに知らせる事に反対しとったからなぁ）

（それにパラレルワールドに向うためには、各次元の間にとても不安定な空間が広がっていてその隙間をぬって通り抜ける形になるのですが…。今出来ているその道がとにかく小さく、私でも抜けられなかったんです。ですので、このような手段をとるしか…）

「それだけじゃなくて、あそこを抜けるためには相当な経験が必要でな。あの2人…どうしても無事にアウルにメッセージをちゃんと行ったか確認したいって言い出したらきかなくてな。あたいが折れたって訳。それにしてもすまねぇな。色々と迷惑かけちまったみたいで」

「そんな事はないんよ。それで、私達にも向こうで何があったか教えてくれないかな？ノア？」

八神部隊長は、ノアから理由をきき納得した様子でそれに対し不問とし詳細な事情を聞いてきた。

「ああ…でもよ…驚かねぇで聞いてくれ。特にアウル…」

タスラム視点

「ね…姉さんが記憶喪失！！…」

「ああ…その通りだ」

ノアは、すまなそうな表情をしながらそう主につげた。

「いったいどうして…」

驚きを隠せない主は、ノアに質問をする。

「ＪＳ事件…」

「ＪＳ事件！？あっちでもあったんか？」

「ああ…。こっちでも起きてたなら話は早ぇ～な。そのＪＳ事件がこっちの世界で起きて、地上本部が襲撃を受けた際にミツキも出撃してな…それで…その際にあいつ…大怪我をしちまってな」

（その後のゆりかご戦の時ミツキお姉様は、その怪我をおして出撃。私とノアが所属している独立部隊の旗艦にて後方の部隊やこちらの世界の八神部隊長が指揮する部隊を援護、そしてそのゆりかご戦が無事終結したのを確認した後…）

（意識を失って目覚ましたかと思ったらこうなったちゅう訳や）

ノア…ミオさんそして、あちらの世界の八神部隊長がこれまでの状況を説明する。

「姉さん…またそんな無茶を…」

それを聞いた主は、小声そう呟きそして、俯いたままその話を聴き入っていた。

と言うよりむしろ爆発しそうな感情を必死に抑えている感じが…。

（それでな…ミツキのヤツ…意識を失ってた時にうわごとでアウルに謝ってんのよ…。アウル…ゴメンってな…。ウチ等は、それがどんな意味をなしているのかはわからへんけど…とにかくアウル君にこのことを伝えなアカンと思ってな…）

「そうですか…」

話を聞き終えた主は、そう呟いたまま…。

そんな主をみたスバル達も何も言えず、ノアもまた、申し訳なさそうな表情をしていた。

それから少しの間、無言の時間が続いた。

と言うより、誰もがどう話していいのかわからないと言った状態だった。

「姉さんは…本当に全ての記憶を失ったんですか？」

「ああ…その通りだ…」

（体の方は順調に回復しております。ですが…記憶の方は…）

流れていた無言の空気をまるで無視するように主が、ノアに対しか

細い声でミツキさんの生死を確認。その問いにノアが答え、詳細な状況をミオさんが説明する。

「行って下さい！！アウルさん！！」

「な！何言ってんだ！！おめえ！！」

「そうだよ！！さっき言ってたじゃない！！ノアさんしか通れないって！！」

ミオさんの説明の後、再びおとづれた無言の時間…。

そして、その無言の時間を切り裂くように響くティアナの言葉。

その声に驚きの声を上げるノア…そして、それを辞めさせようとするスバル。

「スバルはだまってて！！ねぇ？確か…ノアとか言ったわよね？あんた話を聞く限りアウルさんとタスラムくらい連れて行けるんじゃない？」

ティアナは、スバルを制しノアに私と主を連れて行けるのでは？と突拍子もない質問を投げかけた。

「なんでそう思うんだ？」

「か…感よ！女の感！！」

その問いにノアは、質問で返す。だが、その表情には殺気がこもっていた…それに対し、ティアナもその殺気に負けじと声を荒げる。

「女の感か…。理由にしちゃイマイチだが、そのくらい事…いや！！…ダメだ！ダメだ！それは…出来ねぇ！！」

「その口ぶり…出来るんでしょ！！ならハッキリいいなさいよ！！ミツキさんって人、アウルさんに会いたいからそう言ってるんでしょ！！あんたその人の使い魔ならその願いをどうしてかなえてやらないのよ！！」

「ティア！！落着いて！！」

「てめぇ…どうやらわかってねぇな…。あのな！！次元の間にある不安定な空間を強制的に開くって事は、その反動も大きいって事なんだよ！！」

（なぁ…ランスターさん…ほんまは、ノアも今すぐにでもアウルをこのまま連れて行きたいんのよ。でもな…、もしこのままアウル君を連れて行ったらそっちの世界にアウル君…戻れなくなるかもしれんのよ…。それに…ミツキの記憶がこのまま戻らへんかったら…。）

「そやから、今回は伝えに来ただけだし…それに師匠はアウルに教えるなちゅう事をしたんやな。もしかしたら一生記憶が戻らんかも知れへんしな…」

「ああ…。ゲンヤのおっちゃんは、アウルの事だからミツキのことを知ったら自分のことは、二の次にしてこっちにどんな手を使ってでも来ようとするだろうからな…。でも、何にも知らせないでいきなり羽根に何が起こったら…それこそアウルが暴走しちまいそうだからな…だからあたいがそれを伝えに来た」

「でも！！」

部隊長達の話に納得いかないといった様子のティアナ。

（私も納得は出来ませんね…）

「た…タスラム！！何言ってのよ！！アウルさんこっちの世界に帰ってこれなくなっちゃうかも知れないんだよ！！」

ティアナの納得いかない様子を見ていた私は、彼女を援護する事にした。

だが、私の声に未だ主を無言を貫き、スバルは私とティアナの意見に反対の様子。

（それについては、私は一生主についていくと決めてますので問題はありません）

「そんな…そんなのズルイよ！！」

スバルは、私の声に怒りを露わにする。

「それで…なんでおめぇは、ランスターと同じ意見なんだ？」

ノアは、殺気を放ったままその矛先を今度は私に向けてきた。

（そうですね…。今のノアさんの話を聞く限り疑問に思う点がありまして…。なんせ、主を連れて行けるのに帰れなくなるかも知れないから連れて行けないとは…まるで主に対し何かを決断させるかのような言い方に私には聞こえまして…。その…このままミツキさん

に永遠に会わないのか?それとも今の人生を捨て新たな世界へと行くのか?とまるで主に決断を迫ってるかのように…)

「そう言われれば…」

「そんな感じやな…」

私の話を聞いたこちらの八神部隊長とティアナは、ノア達の話っぷりを思い出しつつ私の話に納得している様子。

「タスラムにティアナ…あんまりノアを苛めないでくれ…彼女は…姉さんの一番の理解者なんだから…」

私の話を聞いた主がついにその無言と解き口を開いた。

(ですが…主…)

主の話に私は、疑問の声を上げる。

それに対し主は…。

「恐らくノア達の事だ。私達の前に現れる前に私がこの世界で楽しくやれてるかどうかある程度調べているはずだ。なんせ、ミオちゃんがいるからね?彼女は、姉さんに続いての情報のプロだからね。だから、私が楽しく生活していることを確認したからこそこんな曖昧な話をしたんだろう?それにもし私を無理やり連れ出したとしても…記憶を取り戻した姉さんは絶対喜ばない…そして、私を帰そうと無茶をしかねない?そうだろ?ノア?」

主は、笑顔でノアを見つめ一方のノアは、殺気を未だに説かない。

そして、数秒の時間がたって…

「あ～んもう！！負けだ負けだ！！…あたいの負け！！まったく…なんでこんなにあっさりバレるんだよ！！」

（なんやもうギブアップか？）

（仕方がありませんよ。なんせミツキお姉様がもっとも信頼されてる方のお一人なんですから？）

「いったいどうゆう事？」

ノアは、頭をかきむしり自らの負けを宣言する。

その声に向こうの八神部隊長とミオさんは、やれやれといった様子。

その急激な態度の変化に戸惑いの声を上げるティアナ。

「つまり、なんらかの形で私がこのこと知った場合、私が無茶しないように事前に忠告に来くれたって事さ？向こうに行くにしても、こっちに残るにしても…もし私が動くならちゃんと私自身が考えてから動けってね？」

「と言うと…記憶喪失というのは…」

（その話は、本当です。ですが、ミツキお姉様がうわごとで言っていたのは、「ゴメン」ではなく「無茶しないで…」それと「私の事は忘れてくれていいから……幸せになって」だったんです、すいません。騙すような事をしてしまって）

「姉さん…そこまで私の事を…」

（それにこっちの師匠にもこの事について了承をもらっとるし、師匠もアウルに暴走だけはしてほしくないんやと）

「そうだったんですか…」

「そんな事とは知らずに…すいません」

（申し訳ありません…ノアさん）

ノア達の所謂ネタバラシを聞いた主は、申し訳なさそうな顔をし意識を失っても尚主の事を心配していた事を聞き悔しそうな表情をしていた。

そして、その事を聞いた私とティアナはノアに対しお詫びをした。

「いいよ！！気にすんな！！元々こっちが騙そうとしてたんだから！後あたいのことはノアで構わないぜ」

「わかったわ」

（ありがとうございます。では、私のことはタスラムで）

「ああ、わかったぜ。タスラム」

「それで…私はどうしたいいんだ？ノア？」

私とティアナそれとノアのやり取り笑顔で見つめていた主は、ノア

今後のことを聞いてきた。

「そうだな…。まずは、アウルが言ってた通りどうしたいか決めてもらって…もし、こっちに来るなら後腐れなしの状態にしてほしい。戻れなくなるかもしれないのは、本当だからな」

ノアは、スバルの方をチラッとみつつアウルに今後の事を告げる。

「それと…、もしこっちに来たとしてもミツキはこのことについては、一切知らないからな。その辺の事をどうするのか…それと…最悪の自体になった場合の事も一応考えておいてくれ…」

「わかった…。具体的にどれくらいの時間が作れる？」

（それについては…現在…ミツキお姉様を取り巻く状況があまりよろしくはないので…あまり長くは…）

「つまり…それだけ状況としてはかなり不味い状況ってことやな。なら書類上のことも考えて…2週間くらいの時間…もらえるやろか？」

（なるほど…書類関係なら4日もあれば片付くからなるべく考える時間を作ってあげたいって訳か？どうやろ？ミオちゃん）

こちらの八神部隊長が具体的な期間を決め向こうの部隊長がその理由を考察。

その考察は、どうやら間違ってないらしくこちらの八神部隊長その答えに笑顔で頷いた。

それを確認したあちらの部隊長は、それで問題ないかミオちゃんに確認する。

（そのくらいなら問題ありません。でも、正直ホッとしました。2，3ヶ月と言われたら正直どうしようかと…）

「心配すんな！！ミオ！！そう言われてもあたいが無理やりにでもミツキと会わせてやるさ！それでアウルはどうなんだ？」

「構いません」

「なら…それで決まりや！それで…連絡方法なんやけど…」

「それなら、コイツをそっちの部隊長さんに預けとくぜ」

ノアは、自分の足元に魔方陣を開きそこから自分の身長よりも大きな端末を取り出しこちらの八神部隊に渡した。

「コイツの使い方は、アウルが知ってるから後で聞いといてくれ。あたいかミオ…それとミツキの弟のユウに繋がるようにしておいてあるけど、その3人以外には通信出来ないからな。それとこのことについては、ユウにも話してあるからその辺については、問題ないからな？さてと…用事も済んだことだしそろそろ…」

「なんだ。もう行くのか？ノア？」

「ああ。ミツキ事が心配だからな」

「そっか…なら、よろしく伝えておいてくれ」

「わかった。あっ！！そうだ！！ナカジマ二等陸士！！おまえがやってた書類、あたいがチェックしてやったから後でちゃんと復習しろよな！そいじゃ！」

ノアは、再び転送魔法を開いてその中へと消えて行った。

「んな！！嘘…」

「うわっ…。これって…」

ノアが入なくなった後、スバルの目の前に先程作った書類をノアが赤ペンで採点した物が書かれた画面が表示された。それをみたスバルとティアナは驚きの声を上げる。

「ん？どれどれ…あ～これはやり直しやな～」

「いくらなんでも間違いすぎですぅ～」

「仕方がありません…お付き合いしますよ。スバル」

「あう～」

スバル達の声を聞いた八神部隊長、リイン曹長がその画面を覗き込みスバルにやり直しを指示。

それを見た主は、苦笑いをしながらスバルに付き合うと言うと声をかけ、それを聞いたスバルは落胆した様子。

ちなみに私もその画面を見ましたが赤ペンで×が沢山ついてさらに大きく「やり直し！」と書かれていました。

ｓｉｄａ「影の守護者」

とある病院の病室

はやて視点

トントン。

「あっ、はい！どうぞ」

ガチャ。

「アルト。ご苦労様やな」

「部隊長…」

「それで、ミツキは？」

「あっ…今は、眠っています」

「そっか…なら、後は、ウチがみるからアルトは休んでくれていいよ」

「えっ…でも…」

「でももへったくれもないやろ！…あんた…このところずっと病院

に泊まりこんでるんやろ?少しでも休んどかんとあんたが持たへんで」

アウル君がいる世界との通信を終えたウチは、その足でミツキが入院している病院に足を運んだ。

病室には、アルトがミツキの看病しとってそのアルトの話によればミツキは今眠っているとのこと。

ウチは、ここんところずっと病院と六課を行ったり来たりしているアルトに休むよう告げた。

「ご心配には、及びませんよ!部隊長。これでも私、結構頑丈なんです!これでも(笑)」

アルトは、ウチの心配をよそに笑顔でガッツポーズをとりながら心配無用と言った様子を見せる。

「ハァ~…あんたなぁ…」

アルトの様子を見たウチは空元気を見せてると判断。腰に手を当て大きくため息をつく。

「すいません…部隊長。でも、ユウやスバル、それにティアナやギンガさん達が頑張ってるのに何にも出来なかった私が今出来る事って…このくらいしか思いつかなくて…」

ウチの態度をみたアルトしょんぼりした表情で正直に答えてくれた。

アルトの言う通りで、JS事件後のスバル達はまるで現状を深く考

えたくないかのように仕事に没頭していた。

それを見ていたなのはちゃん達も心配してはいるが、どう言ったらいいのかわからないままだった。

そんな状況を見かねた師匠がスバル達と話をしてとりあえず無茶な事をするのは回避出来てはいるんやけど…。

「アルト…。気持ちはわかるけどあんたが倒れたらユウ達に余計な心配させる事になるやろうし…それに記憶を失っているとは言えミツキにも言われとるんやろ？」

「それを言うなら部隊長もじゃないですか…」

アルトは、少しムッとした態度でウチの話に言い返してくる。

「ったく…あんた達は…また来てるのかい？」

「…せ…先生…」

ウチとアルトの話が聞こえたのかドアの向こうから緑色の髪を一つに纏めタバコを咥え水色のシャツに黒い見にスカートの上に白衣を来たミュン・エリシャ先生が声をかけてきた。

先生を見たアルトは、ゲッ！といった様子でウチはと言えば見つかった！といった様子やね。

「な～にが「先生…」だ！２人ともミツキを心配するのは、わかるけどいいかげんにしないと出入り禁止にするよ！」

「で…でも～！！」

「ウチもそれは勘弁してほしいわ…」

先生の「出入り禁止」の言葉にヤバッ！といった様子で先生の話に抵抗する。

先生は、ウチ等の抵抗を聞きつつ頭をかきながらため息をつく。

「ったく…。なんでこうミツキの周りのヤツ等は、こんな連中バッカなんだい…。それで、八神！あいつとは話が出来たのかい？」

先生は、うち等の出入り禁止の件を一時棚上げにしウチにアウル君と無事に話が出来たのか？確認してきた。

「はい…ノアとミオちゃんに協力してもらって無事にミツキの事を伝える事ができました…後は…」

「本当ですか～♪部隊長♪」

「なんとかな…」

「後は、あいつ次第ってことだね…」

ウチの話を聞いたアルトは、喜びの声を上げ先生もとりあえずホッとした様子。

「でも！絶対に来てもらわないと！！これが最後の手段なんですから！！」

「おいおい…そんなに期待するな…。まだアイツが来るとも決まってる訳でもないし…それにアイツが来ないって言ってもそれを尊重するってみんなで決めた事だろ？」

先生の話をまるで、否定するかのように声を荒げるアルト。

それを聞いた先生は、みんなで話をし確認した事を告げ勢いあまるアルトを征する。

その「みんなで決めた事」ちゅうんは、師匠とユウ達との間で話した事をベースにウチと先生…それとミツキを知る関係者で話合いをした時に決めた事なんよ。

と言うのも、ミツキは少将に技術開発室の室長…それに独立部隊「ファントム・ナイツ」の司令官…それと執務官と言った具合にいくつもの仕事兼務してる都合上、それぞれに今後の事を具体的に決めなアカンかったし無理に記憶を引き出そうするヤツ等もいるかもしれんからそのときのための護衛についてやこのまま記憶が戻らんかった時のミツキの処遇について等色々話合ったんよ。

なんせ、あの子自身…例の情報網やとんでもない力を持ってるからなぁ…。

その話合いの中で決まった事は、記憶の戻る戻らん如何によらずロストロギアに指定するかの検討を始め、その護衛には、ウチ等六課とファントム・ナイツがその任務にあたる事に。

そして、ミツキがアウル君からもらったちゅうチョーカーを記憶を無くしても離さへん事から記憶回復のためにアウル君にその手伝いをしてもらう事や。

でもまぁ…ロストロギアの指定については、ユウやノアはもちろんスバルを始めとしたナカジマ家にティアナにファントムナイツの関係者…それだけではなくアルトにヴィータやシグナム達もそれに反対…。

でも六課がこの件に関わるためには、ロストロギアの指定がないと動けへんしクロノ君を含めた六課後見人皆さん…に地上本部に本局の上層部それに聖王協会が権力に者を言わせて押し通そうとしたけどミゼット提督が反対側についてに話し合いは平行線に…。

それで、とりあえず検討を始めるという玉串色の決着にしロストロギアの可能性があるミツキの護衛に六課とファントム・ナイツがその護衛任務につく事になり、アウル君にこの事を伝えることに関しては、ウチが担当する事になった。

それで、アルトはミツキの護衛件身の回りのお世話係りとしてミツキの側におる事になったんはいいけどアルトのヤツ…自分の睡眠時間を削ってミツキの看病しとるし…。

「それは、部隊長も同じなんじゃないですか?任務とか言って毎日周辺の警備についてるって話じゃないですか~」

「その話…どっから聞いたんや!?」

ウチのボヤキ&状況説明をどう聞いとったんかわからへんけど、ウチがみんなに黙ってやってた事をアルトに言われその情報源が誰か確認するウチ。

「それは、あ・た・し…あんた私のテリトリーでバレないとでも思

っていたんかい？」

「いや～…それは…」

アルトに情報源を確認した所、先生がそれは自分だと名乗り出て自分にバレてなかったのか？とタバコの灰を携帯灰皿にいれつつウチに聞いてくる。

その答えに戸惑うウチ…。

「まぁいい…とりあえず今日の所は…（う～ん…あれっ？皆さん…どうかしたんですか？）」

先生が話を切り替えようとした所、奥のベットで寝ていた目を擦りながらミツキが起き出した。

「単なる世間話さ。それにしてもすまないねぇ～ミツキ。うるさかったかい？」

「先輩すみません。起こしちゃって」

「すまんな。ミツキ」

起きたミツキに気づいたウチ等は、眠そうな顔をして目をこするミツキに対し先生、アルト、ウチの順にそれぞれ彼女に近づき謝った。

「いえ…大丈夫です。気を使って頂いてありがとうございます」

「気にするんじゃないよ。これが私の仕事みたいなもんだらな」

「はい…わかりました」

記憶を失ったミツキは、以前のような以前のような明るさはまったくなくまるでつくったような笑顔で先生の話に答えていた。

「あの…アルトさんに八神さんも…気を使って頂いてありがとうございます」

「そんな事ないですよ～気にしないで下さい。先輩♪」

「そやで～。今は、ゆっくり体を直す事だけ考え」

「はい。ありがとうございます」

先生との会話していたミツキは、ウチ等にも声をかけてきて感謝の言葉を述べ頭を下げる。

それに対し、ウチとアルトは気にしないように伝えその場を後にした。

その夜…機動六課　宿舎内　休憩スペース

ユウ視点

「ユウ～ちょっと助けてよ～」

「ん？おいお前等一体何やってんだ？」

俺が仕事終わりで宿舎の休憩スペースの横を通りかかったときアルトが俺に声をかけてきた。

そして、アルトがいる方を見たところ…。

「アルト～肩こってない？」

「飲み物いかがですか？」

「あっ！私、お菓子取ってきますね」

「ほらほら、楽にしててあとは私がやるから」

とまぁ、アルトを囲んでスバル達があいつをまるで接待？しているような光景が飛び込んできた。

ちなみに上記会話順はスバル、エリオ、キャロ、ティアナの順でアルトは困惑した様子。

「あっ！ユウ兄！！今ね、いっつもミツ姉の看病してくれてるアルトにお礼の意味で接待してるの～♪」

「いいよ～別に…」

「何言ってんのよ！私達が仕事でアルトにミツキさんの事任せっぱなしなんだからこれくらいの事はしなくちゃ」

「スバルとティアナはわかるが…エリオとキャロは？」

俺の声に反応したスバルが何をしていたかを説明。

それにアルトが気を使わないよう告げるが、すぐにティアナが反論。

それ等を聞いた俺は、スバル達に近づきエリオとキャロにこれに参加している理由を聞いた。

「あっ…それは」

「フェイトさんからアルトさんの労をねぎらってくれと言われて…」

「フェイトさん…ミツキさんの件に関われないから…それで」

「なるほどな」

俺の問いかけに対しエリオ、キャロ、エリオの順でそれに答える。

それを聞いた俺は、納得の声を上げる。

なんでフェイト隊長が姉貴の件に関われないと言えば、フェイト隊長の親とその兄貴ってヤツがその原因。

なんせ、リンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウン両提督はハラオウン派と言う派閥の長で姉貴の力や情報網に昔から興味を持っていて、要はそれを2人の所に持っていけば自分の昇進間違いなし！と言う連中が姉貴に色々とやってくれたもんだからファントムの連中がフェイト隊長がそう言った連中を姉貴の所に連れて行きかねないから外せ！！って言ってきてな。

まぁ、フェイト隊長自身元々ああ言った事には関わってないみたい

でそこら辺を部隊長と両提督を始めとした連中がファントムの連中に説明はしたが…正直納得しなくてな…それで仕方がなくフェイト隊長自らこの件から手を引いたって訳。

フェイト隊長からすれば飛んだとばっちりだが、ファントムの連中もこの事にそれほど高圧的にではなく、念のためと言った様子だったのでそれほど拗れることはなかった。

なんでファントムの連中がフェイト隊長を外すよう言って来たそもそもの理由ってのが、俺が六課に言ってる間にフェイト隊長の名前を勝手に使って姉貴に近づこうとしたヤツが出てきてたらしく…今の姉貴の状態も考えて本人には、申し訳ないが念の為そうしたいとさ。

なんせ…今の姉貴…ただの人間に近い状態だからな…そりゃ念には念をって感じになるわな。

でも、俺としてはなんだか申し訳なくてな。

フェイト隊長にはキチンと謝ったりはしたがな。

「なら、俺の分も一緒に頼めるか？スバル？」

「了解～♪」

「ちょ…ちょっと！！ユウ！！」

「さぁ！ナカジマ家特性マッサージの始まり始まり～♪」

「痛っ～！！！」

エリオ達の理由に納得した俺は、スバルに俺の分も頼むように告げる。

それを聞いたスバルは、了承した声をあげアルトは、驚きの声を上げる。

そして、スバルは、マッサージをしていた手に力さらにを加えそれをされたアルトは、痛みを訴える。

ピピピピピピピピピッ…。

「ん？俺のか…もしもし…」

俺の端末に誰から通信が届いたのでとりあえず出てみる。

すると…。

（ねぇ！！ティア！！繋がった！！繋がったよ！！）

（本当ぉ！！もしもし！！聞こえる！！）

「んな！！！！！！！！！！！！！！」

俺が通信画面を開くとその画面から今目の前にいるスバルとティアナの顔が出てきた。

「ユウ兄？どうしたの……ってぇ！！！！」

「（私だーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！）」

「（うっさい！！このバカスバル！！（スパーン×２！！）」

画面を見た俺は、驚きの声を上げる。

それをみたスバル達が俺に近づきその画面を覗き込む。

そして、画面の向こうのスバルと目の前のスバルが目を合わせた途端２人同時にお互いを指差しながら驚きの声を上げ、それをこれまた同時にどっからだしたか解らないスリッパを取り出しそれぞれのスバルの頭を殴りつけた。

「「「「おおっ！！…アンコール、アンコール…」」」」

それを見た俺とアルト、それにエリキャロ全員でそのお見事な光景に二組のスバルとティアナにアルコールを要求。

「（するかーーーーーーーーーーーー！！）」

それを聞いた二人のティアナは、同時に声を出す。

「いや～驚かせてすまなかったね。ユウ？」

「あの…ユウさん…この方は？」

一連のコントをみた俺達は、画面上に２人とは別の男性が声をかけてきた。

その人を見たキャロが俺に声をかける。

「嘘！！アウルさん！！」

「あ…アウルさん…？」

「あ～！！アウルさんだぁ！！！」

「アウルさんじゃねぇか？久しぶりだな。え～っと…この人は…ほらっ！前に話たろ？俺の部屋にある写真の…」

「アウル・アパレシオンさん…？」

「はい、そうです。久しぶりですね？ユウ、それとスバルにティアナにアルト。それと始めまして。そちらのエリオ君とキャロさん」

「「は…初めまして…」」

キャロの問いかけに俺が答えようとする前にアルトとティアナが驚きながらその名を呼びスバルは大喜び。

そして、俺がキャロとエリオにアウルさんのことを説明。

最後にアウルさんが笑顔でそれ等に答えエリキャロに挨拶をしそれに緊張した様子で答えるエリキャロの2人。

「というと、今出てきたのは、そっちの世界のスバルにティアナって訳か。にしてもさすがに驚いたぜ。んで、いきなり連絡してきた用件ってのは？」

「驚かせてすまなかったね。それで…連絡した理由ってのが…」

「姉貴の事か？」

「ああ…詳しい状況が知りたくて…」

「そっか…なら、ちょっと待ってくれ。少し移動を…（ガシ！！）…おい…お前等…」

一連の挨拶を終えたアウルさんに対し俺が今の状況を確認。そして、連絡してきた用件を確認しそして、場所を移動しようとした所スバル達に体を捕まれた。

「ユウ兄…こう言った話は、私達も混ぜるって決めたよね（怒）」

「まさか…いきなりそれを破ろうって事はしないわよね…（怒）」

「「ユウさん！！」」

「ユウ～（怒）私にも聞く権利…あるよね…（ジトー）」

俺が体を掴んだスバル達の方を見たところ、全員怒りの様子でそれぞれ自分達にも聞かせろと言ってきた。

ちなみに会話順は、スバル、ティアナ、エリオ＆キャロ…最後にアルト…だな。

「わ～たよ！！わかったからその手を離せ！！でもここじゃまずいから俺の部屋に行くぞ！！いいな！！つ～訳だからちょっと待っててくれアウルさん」

「「「「「は～い」」」」」

「わかりました」

スバル達の声に諦めを決めた俺は、連中も話に加える事を認め俺の部屋移動することをスバル達とアウルさんに告げ全員それを了承した。

それから数分後…。

ユウ、エリオの部屋

ユウ視点

「ユウ!!準備ＯＫだよ!!」

「よし!!こっちもだ。アルト!画面を出してくれ」

「了解～♪」

ブオン。

俺とエリオの部屋に移動した俺は、アルトと一緒に俺達の部屋に事前にセットしておいた防音結界と通信を傍受されないようにするための結界その他諸々のこの俺!自慢のシステムを起動そして、全員で向こうの様子が見れるように大きな画面を部屋に表示させた。

「い…いつの間にこんなの仕掛けたのよ…」

「ずっといるのに全然気が付きませんでした…」

「気が付かなくて同然だよ～なんせこれをセットした時ってエリオ達が訓練してる時だもん。それもこっそり…ね」

（相変わらず…用心深いんだね）

「普段は、こんな事しねぇさ。でも今回ばかりは話は別だからな」

それをみたティアナとエリオが唖然とした様子で声をあげそれにアルトが答える。

さらにそのやり取りを見ていたアウルさんが俺に話しかけそれに俺が答えた。

「これでＯＫだ。待たせてすまいなアウルさん。それで何がしりたいんだ？」

俺は、システムが正常に働いてるかどうかを確認した後アウルさんに質問をした。

（それでは…私の方から…初めまして、私はアウル・アパレシオンの専用デバイスタスラムと申します。それでお聞きしたいことですが…）

タスラムからノアと会ったときのことが話されそして…

（そのときのノアの表情が気になりまして…それで…）

（何か…まだ隠している事があるんじゃないかなって…思って…その…）

「なるほどな…」

タスラムと向こうの世界のティアナから事情の説明を受けた俺達は、俺の言葉の後誰も話そうとはしなかった。

と言うよりどう説明していいのか解らず全員俺の方をみていた。

（ユウ…教えてくれ！）

アウルさんの言葉が静まり返った部屋に響き渡る。

そして…。

「…わかったよ…」

「ユウ兄！！」

「ちょっとあんた！！」

俺の声に立ち上がり声を荒げるスバルとティアナ。

そして、俺は、２人を制するように話を続ける。

「わ～ってるよ！２人とも。アウルさん、ひとつ言っておくぜ。これから話すことは、あんたがこっちに来るまでは話すなって言われている事だ。それを話すと言うことは…」

（つまり…このことを私がこれを聞いてすぐに決断するなと言うことだね）

「そういう事だ」

「わかった…約束する…」

アウルさんの了承する声を聞いた俺は、一呼吸おいて話をしだす。
俺とアウルさんのやり取りと見ていたスバルとティアナは納得しないまま自分の座っていた席へと戻る。

「それはな…」

ｓｉｄａ　「亡霊の弾丸」

機動六課　隊舎内部隊長室

アウル視点

「ちょ…ちょっと待って！！それじゃ軟禁してるのと同じじゃない！！」

ユウからの話を聞いたティアナは声を荒げる。

（それは、本当なんですか？）

（ああ…だから、ウチの部隊長やじじい達…それにノア達も必死な

のさ…）

タスラムがユウに再度確認するがユウは悔しそうな表情でそれに答える。

「それにしても記憶が戻らんと聖王教会に連れて行かれた上、部屋の外には出されへんっちゅうんは穏やかな話ではないな」

（ええ…でも、先輩のリンカーコアって元々とても不安定なんです。そして、先輩自身の魔力が現状ではほとんどない状態で…あの力自体先輩の魔力がそのエネルギー源なんです…。そして、その不安定なリンカーコアを、元々は先輩のあの力とノアの力でなんとかコントロールしてきたんですが…先輩の魔力がほとんどない今の状況では…）

（とりあえず、今は姉貴の主治医が特別に作った魔力入りの薬でなんとかしのいではいるが…）

（いつミツキさんのリンカーコアが暴走してもおかしくはない…と）

（はい…）

（それに元々聖王教会の連中…姉貴の力にかなり興味をもっていたからな。今回の事で姉貴をモルモットにしかねないからな）

「でも？聖王教会がそんな事するとは思えへんけどな？」

（そっちの聖王教会はどうなのかはわからないけど、こっちの方は裏でこそこそやってる連中がいてな。だから…）

「その気持ち私にも解るよ…だって、自分の家族がそんな事になったら誰だってそうなるから…私だってもし…ギン姉達がそんな事になったら…」

「スバル…」

部屋のいつもの席で今のやり取りを聞いていた向こうの部隊長を腕組みをしながら静かに話をする。

それを聞いたアルトが詳しい状況を説明。それに俺が続き向こうの部隊長がさらに質問してくる。

その疑問に俺とアルトが答え、それを聞いた向こうの部隊長が質問。俺がそれに答えそれを聞いた向こうのスバルが俺達の気持ちを理解してくれそれを見た向こうのティアナが心配そうな顔をしながら彼女の方をみる。

「なるほどな…それでノアがティアナに「向こうに連れて行けるのでは？って、言ったときにあないな殺気を出しとったちゅう訳や…」

（必死に堪えていたんですね…これを言ったら主は間違いなく…）

「ああ…「今すぐにでも連れってくれ」と言っていただろう…」

一連の事情を知った部隊長とタスラムは、ノアと会った時の事を思い出しつつ話をまとめ最後に私がもしあの時ノアこのことを言ったのなら私がどうしていたのかを想像しながら話をする。

（それに今回、アウルさんに連絡をとったのには色々と条件がついてな。なんせ、パラレルワールドにいる人間と話をするんだ。そっ

ちに色々と弊害がでるかもしれねぇからな。その最大の条件ってのが…）

（意図的に主をそちらの世界に行かせるようなことはせず、そして主の意見を尊重すると言うことでしょうか？）

（そういうこった。これは、姉貴ならそうするだろうってみんなで話したときにスバルとアルトが言ってくれた事なのさ。それにこれについては、本局や他の連中も同意してくれてる。だから！これをアウルさんに話したことでこっちに来られると俺達が…ついては姉貴が益々まずい状況になりかねない…。だが、アウルさんなら姉貴や俺達の気持ちをわかってくれると思ったから話をした）

「そうか…すまない…無理を言って…」

（いいって事よ！つ～訳だからタスラム！その辺については頼むぜ！！）

私の言葉に気にしないよう告げるユウ。

そして、タスラムに対しその辺の監視を依頼するユウ。

（わかりました。私が主にキチンと判断させます）

「私が～？それ私達の間違いじゃない？」

「そやな。私達もこれにかかわった以上キチンと対応せなアカンしな」

「そ…そうだよ！アウルさんにはちゃんと決めてもらいたいし…」

「皆さん…ありがとうございます」

タスラムの言葉に続きティアナ、部隊長、スバルが続く。

それを聞いた私は、感謝の意を述べる。

その後、私とユウ達はその事については触れず他愛もない会話とお互いの世界のスバルとティアナの漫才…など等どちらかと言えば我々が彼等を元気付けるかのような会話をし通信を終了させた。

機動六課内　アウルの部屋

アウル視点

「ふぅ～」

部屋に戻った私は、上着を脱ぎタスラムをいつも置いてある位置に置いた。

「姉さん…」

私は、デスクに飾ってあったユウ達とった写真それと姉さんと2人でとってもらった写真が入った写真立てを手にとりベットに腰掛けその写真を眺める。

写真に写っている姉さんは、私の横で恥ずかしながら笑顔で写っていた。

（主…）

「なんだ？タスラム？」

写真を眺めていた私にタスラムが声をかけてきた。

（余計な事かも知れませんが…）

「わかっている。さっきの事があったからとはいえ、すぐには決めないさ…でないと自分達が不味い事になりかねないのにそれを覚悟で私に話してくれたユウ達に申し訳がないからな」

タスラムは、先程ユウ達が話してくれたことで私がそれを理由に決断しないか心配して声をかけてくれそれを理解した私はそれに答える。

（なら…よろしいのですが…）

私の話を聞いたタスラムは、安堵の声を出すがまだ納得してはいない様子。

「私は、この時間を使って自分と向き合ってみるつもりだ。私に取って姉さんがいったいどんな存在なのか？そして、今の私に何ができるのかを…」

（わかりました。ですが、あまり自分を責めないで下さいね）

「ああ、そんな事をしたら姉さんに怒られるからね。それじゃそろそろ休むよ」

（いい夢を…主）

「お休み…タスラム…」

私は、タスラムとのやり取りを終え写真立てを元に位置に戻し寝る事にした…。

スバル、ティアナの部屋

スバル視点

「スバルちょっといい？」

「ん？なにティア？」

部屋に戻った私にティアが声をかけて来た。

「あんた…そう言えばオフィスで私にゴメンとか言ってたわよね？」

「え？…私そんな事言ってたっけ？」

ティアの問いにトボけた声で答えた。

「あんたねぇ！！あのメッセージがでるちょっと前になんか言ってたでしょ！！」

「…覚えてたんだ…忘れてくれればよかったのに…」

「何だって！？」

「イエ…ナンデモ…」

私は、詰め寄ってくるティアに対し視線を反らしながらボソッと本音をもらす。

でも、それもティアには聞こえていたらしくジト目でさらに私に詰め寄ってくる。

それに対し私は、何にも言っていないよう振る舞いそれにティア呆れた様子で私から離れる。

「それで?何が言いたかったのよ?アウルさんに…」

デスクに腰掛けたティアは、再度私に質問してきた。

「だから…何の事だか…」

「トボけないで!!」

ティアの問いかけに私はまたわからないように振る舞う。

すると、ティアは、私の答えに怒ったようで大きな声をだす。

その声に驚く私。そして、ティアは…。

「まさかアンタ…。まだアウルさんの事諦めきれてないんじゃないの!?それであの時アウルさんにその事言おうとしてたんじゃない?これ以上トボけた振りはよしてよね」

厳しい目つきになったティアは、私がしようとしてたことをズバリ言い当てその上に私にトボけないように念を押してきた。

「うん…」

もう逃げる事は出来ないと感じた私は、俯き小さな声でそれに答えそして頷いた。

それを聞いたティアは、最初のウチは「やっぱり」と言ったが私の気持ちをわかってた様子でその後何もいわなかった。

そして…静かな時間だけがすぎてた。

アウルさんがいっちゃう…。

そして…もう二度と会えないかもしれない…。

行ってほしくない！！

でも…。

結局、考えまとまらないまま私もティアも無言のまま寝る事にした…。

そして…あった言うまに時間はすぎさっていった…。

ｉｆ～その１（後書き）

作者
「さて、如何だったでしょうか？ｉｆ話のその１！」

ノア
「それにしてもアウルがまた来てくれたとはなぁ～。それも今回はタスラムも連れて」

作者
「ええ、その辺についてはありがたいですよ」

ノア
「んで？今回は、なんでｉｆなんだ？」

作者
「そうですね～事の始まりは、私が「亡霊の弾丸」に感想を書いた際、ミツキとアウルさんのフラグをミツキが踏み潰したという小ネタをつけてそれをどうするのか？タスラムさんに振ったんですよ」

ノア
「んでんで」

作者
「その返信でタスラムさんが、「ｉｆ話をやってみたら？」と返ってきまして…」

ノア
「それでやっちまったと…」

作者
「まぁ、あれを見た途端思いついてしまったんですよ（笑）でも、正直言って当初私の予想では「無理です」と来ると思っていたんですが…まさかこう来るとは…」

ノア
「それにしても、よく感想のやり取りで思いつく事多いよな」

作者
「そうですね…ここのサイトって同じ2次小説を書いている方からの感想が圧倒的に多くしかも、自分の作ったキャラを連れてきて面白おかしくやり取りをしてますからね。その辺がいい刺激を受けてるんでしょうね」

ノア
「へぇ～それで、今回は向こうの六課とこっちの六課のやりとりなんかがあったけど違いとかつけたのか？」

作者
「それは、ちゃんとつけないと訳がわからなくなりますかね」

ノア
「んで、具体的には？」

作者
「具体的に…問い言うか大雑把に向こうの六課の皆さんは、比較的に原作キャラに近い感じにしこっちの六課は、本編よりも2割増くらいギャグキャラにしてますね。ですが、シリアスシーンとなると話は、別になりますが」

ノア
「あたいがアウルに知らせに言った時のはやて同士のやり取りやユウ達とアウル達との会話シーンの事だな」

作者
「ええ、そういった場合は描写を書いている文章でカバーはしてますけど…やっぱり難しいですね。文章のみでキャラの違いを見せると言うのは」

ノア
「にしても、なんで今回ミツキが記憶喪失なんだ?もっと明るくても…」

作者
「いや～これについては、アウルさんとミツキ…2人ともかなり重いキャラ設定が本編ではされてましてただ糖分一杯の内容って思いつかなかったんですよね～。それで最初は、ミツキを意識不明の重症にしたんですけど…それだと途中で詰まってしまってそれで、記憶喪失にしたと…」

ノア
「前回…確かアウルが記憶なかったんじゃ…」

作者
「まぁ、ある意味前回の逆パターンって事になりますがアウルさんがどう行動するのか?と言うのが話のキーになりますしタスラムさんには結構苦労してもらうつもりです」

ノア

「という事は、出番が増えるって訳？」

作者
「それは当然ですが…その辺については、次回以降のお話の中で。後、訂正する事などありましたら連絡下さい、ＥＸＡＭ先生」

ノア
「と言う訳でまったな～」

次回予告

エリオ
「悩んで上に出した結論…」

キャロ
「そして…彼は再びかの地を訪れる」

ティアナ
「でも…そこで見た彼女の姿は…」

スバル
「２人の絆が今…試される」

アルト
「次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～ｉｆ～その２！！」

スバル＆ティアナ

「2人のミツキ…」

スバル&ティアナ&エリオ&キャロ&アルト

「テイク…オフ…」

ｉｆ～その２（前書き）

ｓｉｄａ　「亡霊の弾丸」

機動六課隊舎内　部隊長室

はやて視点

「本当にこれでええのか？後から辞めますってのはもう出来へんで？」

「はい…。もう決めましたから…お願いします」

あれから1週間以上があっと言う間に過ぎ去った。

今私の前には、アウルが直立不動で立っておりそして、私が座る椅子の前にあるデスクの上には、アウルが持ってきた移動願いの書類が置いてあり私がその書類にサインすればその書類が受理される。

今回のことについては、本来なら退職と言う形が正しいのだが向こうの世界でも局員でいられるよう私が配慮したもの。

なんせ、向こうに行ってこっちの世界で局員を辞めてきたからかかわれない…なんて事を言われたらたまったもんやないしな…。

それに、いつでもアウルが戻ってきても問題ないようにするためにこういう形をとった。

私は、アウルに最終確認をした後その書類にサインをし手続きは、無事に完了した。

「これで…手続きは完了や。ノアは、外で待っとるっていっとったから荷物まとめたらそっちにいってな」

「ありがとうございます。八神部隊長」

「それと…体に気ぃつけてな。私は、仕事で見送る事が出来へんけど…体に気ぃつけてな」

「部隊長こそ…お元気で…では」

私とのやり取りを終えたアウルは一礼した後部屋を退室していった。

そして…スバル達とも別れをつげ旅立っていった。

尚、スバル達がアウルの旅立ちを止めるのでは?とも思っていたが、その場にいたなのはちゃん達の話によればどうやら2人でアウルの好きなようにさせるって決めていたらしく涙を堪えながら見送ったとのこと。

ー魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～ｉｆ～その2…始まります。

アウル…頑張ってな…。

if～その2

if～その2　「2人のミツキ」

sida　「影の守護者」

機動六課　隊舎内玄関

はやて視点

「そろそろ…来る頃やな」

ウチは壁にかかった時計を見つつ入り口の方を見つめる。

そして、それから少し時間がたって…

「うしっ!!到着だ!!」

「お疲れ様、ノア」

(ここが…主が来てた…世界…ですが、ここはもしかして…)

「そうや、機動六課の隊舎や。よう来たな、アウル。それにタスラム」

「お久しぶりです。八神さん…」

（始めまして、タスラムと申します。それにしても部隊長自らお出迎えとは…）

ノアと一緒に現れたアウルとタスラムは、ウチの出迎えに少々驚いた様子。

「なんせ、ある意味無理して来て貰ったんからな～これくらい当然や…それにミツキの所に行く前にアウルのこっちでの生活の事やら話さんといけんしな～それで、向こうの部隊長さんからの書類は、持って来たんか？」

「はい…これになります。それと…よろしくお願いします」

「こちらそこ、よろしくや。アウル、それにタスラム」

（よろしくお願いします。八神部隊長）

ウチは、タスラムの質問に答えそして、アウルから向こうのウチからの書類を受け取った。

今回のアウルについては、向こうの機動六課からこっちの機動六課への移動ちゅう少々無茶苦茶な事になっとるんやけど…でも、これはアウルの事を考え最悪の場合向こうに戻れるようにしたもの。

それにミツキが記憶を取り戻したとしてもどうなるかはわからへんしな。

この間、アウルには決断するよう言ったけどこればかりはアウルだけの問題ちゃうし…でも、ああ言ったのにはそれくらいの覚悟がないと今のミツキとってかえって邪魔な存在になるやもしれんしな…。

記憶のなくした今のミツキにとってウチ等も含め全員の人間が知らない人…になるからな…。

先生の話だと、それだけでもかなりの精神的負担がかかってるちゅう話やし…その上にアウルが来てショックを受けたままやったらその精神的負担をただ増やすだけになるからなぁ～。

ウチは、アウルと部隊長室に向かいながらあれこれ考えていた。

機動六課　部隊長室

アウル視点

「よろしくお願いします！高町隊長にハラオウン隊長」

「こちらこそ、よろしく！アウルさん。あと…私の事はなのはでいいから」

「私もフェイトでいいよ、アウルさん。私は、ミツキさんの件には関われないけど…何かあったら色々聞いて」

私は、なのは隊長とフェイト隊長との挨拶を終えなんだか不思議気分でいた。

まさか…、2度目の挨拶を交わすとは思っても入なかったから…。

こっちに来た私は、機動六課のロングアーチの所属とし階級は向こ

うと同じ二等陸尉。

本来なら違う世界の管理局になるためこちらに来てもう一度管理局に入りなおさねばならないと考えていたのだが…これは、両方の部隊長に感謝しなければ…。

「それで、これからの事なんやけど…アウルには、ミツキの身辺警護ちゅう事でミツキの側にいてもらう事になる。向こうでは、今のところアルトが身の周りの世話と身辺警護としているから向こうで紹介するわ。周辺警護については、ファントム・ナイツと連携をとってる都合上何かあった場合、まずはユン先生に連絡してもらってそれからなのはちゃんに連絡してや。病院での指示関係はユン先生に一任されとる。なんせミツキの入院先は、ユン先生が経営する病院やからな…。あと…これだけは、わかってほしいんやけど…」

「六課としては、姉さんの事をロストロギアとして扱う…と」

八神部隊長の説明を聞き、そして少し申し訳なさそうな顔をして何かを部隊長が言おうとした所私がその先の言葉を先読みして言ってみた。

「ニュアンス的には、そこまではいかないんやけどでも、そう思ってもらってもかまわへん…これが、六課の部隊長としての意見で…こっからミツキの友人としてのウチの意見や…」

部隊長は、私の話を少し訂正しながら話をしそして…。

「友人としてのウチは、正直ロストロギアとしてなんか見てほしくないねん…。だから…」

「はやてちゃん…」

「はやて…」

部隊長は、心痛な表情でまるで今まで溜め込んでいた言葉を吐き出すように私とタスラムに語りかける。

私もタスラムもユウから姉さんについてその話し合いをした時の内容を聞いていて、機動六課の部隊長としての立場と姉さんの友人としての立場…その間で揺れている部隊長心情を察してはいたのだが…。

（心配には及びません、八神部隊長。私も主もミツキさんの事を人として…接していくつもりです）

「八神部隊長…あなたの立場上色々お辛いとは思いますが微力ながらお手伝いをさせて頂きます。ですから…その涙を拭いて下さい」

私は、ポケットからハンカチをとりだし部隊長に渡す。

「ほんまええ人やな…アウルって…（チーン）」

「はやてちゃん…いくらなんでも鼻水をかむのは…」

「ちゃんと洗って返すにきまっとるやろ！！」

ハンカチを受け取った部隊長は、その瞳から流れる涙…だけではなく鼻水まで拭く。

少し唖然としていた私になのは隊長が注意をするが、部隊長はそのハンカチを自分のポケットにしまい洗って返すとなのは隊長に言い放っていた。

（主…今のは、お笑いと取った方がいいのでしょうか？）

「いや…それには触れずに流した方がいい…タスラム」

（そうですか…）

今のやり取りの対応に困ったタスラムは、私にどうしたいいのか聞いて来た。それを聞いた私は、部隊長達に聞えないようにそれを流すよう指示。

その後、黄色いバスガイドの格好をしたリイン曹長の案内により機動六課の隊舎内を案内され、用意された自分の部屋に持ってきた荷物を置き部隊長と共に姉さんが待つ病院へと向った。

タスラムは、リイン曹長のその姿にかなり戸惑った様子。

それも仕方がない…。

こっちの部隊長は、向こうの部隊長と違ってこういうのが大好きらしいし…。

以前の私なら、タスラムと一緒にその対応に戸惑ってはいたが…今となってはこれもなつかしいと感じている。

スバル達ともその隊舎内を案内された時に再会を果たしたが…。

どうやら、私が心配してた通り…いや…それ以上かも知れない…。

フラナガン市内　ユンの病院

タスラム視点

「これからミツキに会うんやけど…いきなり暴走せんといてな？」

「はい…わかりました」

ミツキさんが入院している部屋の前にたった部隊長は、私と主にそう一声かけノックをした後、ドアを開けた。

（はぁ～い）

ガチャ。

「あっ！！部隊長…それに…」

部屋の中に入った所、椅子に座っていたアルトさんが立ち上がり部隊長に声をかけ、後から入ってきた私達に驚く…。

そして、一言、二言話をした後その部屋の奥へ…。

するとその個室の奥のベットに…。

その姿をみた主は…。

「ね…」

「ど…どないしたん？アウル」

「姉さーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん！！」

「えっ…！？」

「んな！！！！！！！！！！」

（あ…主…）

ミツキさんの姿を見た主は、声を上げた途端ミツキさんに抱きついた。

その行動にその場にいたアルトさん、部隊長それにミツキさんは、驚き私は呆れていた。

「姉さん…心配しましたよ…あれ…姉さん？」

「ぶ…部隊長！！せ…先輩が！！」

ミツキさんに抱きついた主は、ミツキさんに声をかけるがその反応がないことに気が付く。そして、それを見たアルトさんが驚きの声を上げ…。

「先輩が真っ白になって燃え尽きそうになっちゃってます！！それになんだか白い物を吐き出しちゃってます！！」

「こんのドアホーーーーーーー！！今さっきウチが注意したばか

りやないかぁー！！（スパーーーン！！）」

いきなり主に抱きつかれたミツキさんは、体が真っ白になり口から白い物を吐き出していた。

アルトさんがそれを報告。そして、部隊長が主を履いていたスリッパで殴りつけた。

（あ…主…？）

「えっ…ええっ！？姉さん！姉さん！！」

「それにしてもなんちゅううらやましい事を…」

「右に同じです…部隊長」

私は主に声をかけるがその声は、届かず部隊長に頭を殴られた主は、真っ白になったミツキさんから少し離れその両肩を掴み彼女を揺さぶる。

主の一連の暴走を見た八神部隊長とアルトさんはその光景を羨ましそうな顔つきで眺めていた。

「でも…ちょっと不味いんじゃないです？このままだと？」

「アカン…ミツキのヤツ刺激が無茶苦茶ありすぎたんやな…。その証拠に口から魂吐き出しとるわ。ちゅう訳でアウル！！人工呼吸や！！それもウチにー！！」

アルトさんの声に部隊長は、ミツキさんの状況を説明しつつ主に自

分に人工呼吸をするよう要求。

「部隊長～ーーーーー！！！どさくさ紛れに何言ってるですかーーーーーーー！！それにアウルさんもーーーーー！！（怒）」

ガン！！ガン！！

「痛ぁ～！！」

「なぜ…私まで…」

この自体に怒りを露わにしたアルトさんは、両手にそれぞれ持った小槌サイズで横に「１ｔ」と書かれたハンマーをどこからともなく取り出し主と部隊長を殴りつけた。

殴られた二人は、その痛みを露わにしながらその場に倒れこんだ。

それから約１５分後…。

「いや～、いきなりスマンかったなぁ～」

「い…いえ…もう大丈夫ですから…」

真っ白な状態から元に戻ったミツキさんは、お詫びする八神部隊長に対しなんだか固い笑顔で答えていた。

「先程は申し訳ございませんでした…。私は、アウル・アパレシオン二等空尉であります。サエグサさんの身辺警護にあたらせて頂き

ます。よろしくお願いします」

「ど…どうも…私は、ミツキ・サエグサって言うらしいんです。あっ…すいません…昔の記憶…思い出せなくて…」

主の自己紹介にミツキさんは、顔を赤らめながら少し俯き不自然な自己紹介をした。

「あんたまたそないな事、言いおって～！！」

（まぁまぁ…。私は、アウル・アパレシオン専用デバイスのタスラムと申します。それにしても申し訳ございません。主は、あなたの事をどうやら別の方と勘違いしてまして…あの…どうかされましたか？」

ミツキさんの自己紹介に声を荒げる部隊長。

私は、それを宥めつつ自分の自己紹介をする。

だが、それを聞いたミツキさんはなんだかキョロキョロしだす。

「あの…アウルさん…タスラムを先輩に見せてあげて下さい。先輩…デバイスや魔法関連の事の知識もなくしちゃってるみたいなんで…」

キョロキョロするミツキさんを見たアルトさんが主に対し私を見せるよう耳打ちをする。

「サエグサさん…申し訳ございませんが両手を出してもらえますか？さぁ、タスラム、すまないがもう一度頼めるか？」

（わかりました。改めまして私がタスラムです。始めましてサエグサさん）

アルトさんからの耳打ちを聞いた主は、静かに頷き私を指から外し両手をだしたミツキさんの手の上に私を乗せた。

「始めまして…タスラムさん…えっと…あなたって確かデバイスって言うんですよね？」

（はい。そうですが？それが…）

私を手にしたミツキさんは、不思議そうな顔をしながら私に問い掛けてくる。

「あの…気を悪くしたらゴメンなさい。スバルさん達からもデバイスを見せてもらった事あるんですけど、あなたと違って物静かな方ばかりだったもので…」

（いえ…お気になさらずに…私がおしゃべりなのは、主がとても寂しがりやなもんで…それで私がよく話し相手をしているからなんです）

「へぇ～…そんな裏情報があったんや…」

「た…タスラム～！！」

ミツキさんの答えを聞いた私は、自分がおしゃべりなのは主のせいにしそれを聞いた部隊長は、ニヤニヤとしながら主を見つめ主は、驚いた様子で声をあげる。

「ほなら、アウル…顔合わせも済んだ事やしとりあえず、他の所も案内したいからそろそろ行こか？」

「それじゃ…タスラム…」

（主…お願いがあります。私…このままサエグサさんとお話がしたいのでが？」

一通りの顔合わせを終えたと考えた部隊長は、主を連れて移動する事を告げそれを聞いたミツキさんは、私を主に返そうとし主もまた私を受け取ろうとした。

その行動に対し私は、主にミツキさんとのコミュニケーションが取りたい事を告げる。

「そうか…私は、構わないが…」

（サエグサさん…もう少しお付き合い下さいませんか？私の事を色々とあなたにも知って頂きたいので…）

「わかりました。色々と教えて下さいね？タスラムさん」

（はい…もちろん）

主の答えを聞いた私は、ミツキさんにももう少し付き合ってもらうようお願いをしそれを聞いたミツキさんは、それを笑顔で了承してくれた。

その光景を見た部隊長と主は、その場を私とアルトさんにまかせ部

屋を退室した。

ふぅ～、とりあえず私を介して主との関係を少しでもよくしなければ…。

それにしてもいきなりの暴走とは…主らしいと言えば主らしいのですが…。

「それで？何をお話してくれるんですか？タスラムさん？」

（そうですね…。それでは…）

主の去った部屋でミツキさんは、私がどんな話をしてくれるのか興味深々の様子。

その様子を見たアルトさんも椅子に座り私の話を聞く体勢を取った。

それから私は、自分の事や向こうの機動六課あったあれこれ話始めた。

もちろん、主の過去の事や別の世界から来た事等今のミツキさんに知らせて下手に心配されそうな事については話はしていない。

その事については、話をすり替えさらに少し誇張しつつ面白可笑しく話しをしてした。

私の話にミツキさんもアルトさんも大笑いしながら聞いてくれた。

どうやらこれが…主が見ていたあなたの本当の笑顔なんですね…。

この笑顔を取り戻してあげたい…。

私は、そう考えながら話続けた。

機動六課隊舎　オフィス

ユウ視点

「えっ！！アウルさんもういっちゃったの？」

「今日来たばかりなのに…」

「そんなに驚かなくてもいいのに…」

「まったくだ…」

「つ～か…ティアナ…なんでそんなに化粧バッチリなんだ？」

「大方、さっきアウルさんに会った時にここぞとばかりに泣き付いたんじゃないか？」

「うらやまし～わね～…（ジトー）」

「（ギクッ！！）そ…そんな訳ないわよ！！」

ロングアーチのオフィスに書類を届に来たスバルとティアナは、アウルさんが既に病院の方に行ってしまった事を知り、落胆の声を上げる。

その場にお菓子を食べながら雑談をしていた俺とシャーリーさんは

そんな2人を見、そのオーバーなリアクション呆れた様子。

その一方、俺達と一緒にお菓子を食べていたノアは化粧がバッチリされていたティアナを見てその理由を聞く。

ノアの声に俺が推測をいいそれを聞いたシャーリーさんが、ジト目で羨ましいと声をあげティアナを見る。

それ等を見たティアナは、ギクリとしながら俺の推測を否定。

「それは、そうとアウルのヤツ…ミツキを見た途端暴走して病院…出入り禁止なってなきゃいいけど…」

「まさか～…ヴィータ副隊長やシグナム副隊長じゃないんだから…」

ティアナの態度をみていたノアは、アウルさんが暴走してないか心配な声を上げる。

ノアのそんな声にシャーリーさんが、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長の名を上げその話を否定していた。

どうして、両副隊長がユン先生の病院からの出入り禁止を食らったか言えば…

「でも、まさかヴィータ副隊長がミツキさんの部屋でアイゼンを振り回すなんて思わなかったわよ…」

「なんでも…「記憶喪失には、ショック療法が一番！」とか思ってたらしいわよ…」

「つ～事は、姉貴を外に無理やり連れ出して模擬戦をしようとしてたシグナム副隊長も同じ理由なのか？」

「似たような理由よ。「その弱りきった精神を叩き直してやる！！」とか言ってたみたいだから…」

ノアとシャーリーさんのやり取りを聞いていたティアナがヴィータ副隊長が出入り禁止になった理由をいいその後、俺がシグナム副隊長があなった理由も同じでは？と聞いて見たら今度は、シャーリーさんがその理由を告げた。

ちなみに、２人ともユン先生にその行動を起こしている最中に姉貴の部屋から外に出されバレフルボッコにされた挙句…。

翌日、２人を見た姉貴が怯えちまって結果的に出入り禁止になっちまったって訳。

そのお蔭で、病院内の警備が手薄になり俺まで警備任務につかされてる。

「でも、なんでノアはアウルさん達と一緒に行かなかったの？」

「んあ？あたい？あたいはここで休憩しての。さすがにミツキからの魔力供給なしであっちの世界からアウル達を連れて来るのは疲れるからなぁ～。それと糖分補給っっと（パクッ）」

スバルと問いかけにノアは、その理由をいいながらお菓子を食べ続けていた。

「そういえば、あんた…ミツキさんの魔力無しで大丈夫なの？」

「それについては、今までミツキのリンカーコアが暴走しかけて余計に作った魔力をあたいが吸収してたからな。ちっちゃいままなら別に問題はねぇ～よ」

スバルとのやり取りの後、ティアナが今回の事でノアは大丈夫なのか聞いた。

それに対しノアは、どうやら前々から姉貴の魔力をリンカーコアが暴走した時のみ、その時作られた魔力を吸い上げ蓄えてたらしくその事をティアナに説明していた。

「でも…本当にうまくいくのかしら？それに…もし記憶が戻らなかったら…アウルさん…どうする気なのかしら…」

「…」

シャーリーさんがふとそんな疑問を投げかけた所…その周りにいた全員が言葉を無くした。

「大丈夫ですよ…ミツ姉がアウルさんを不幸するなんてする訳ないですよ！！うん！！絶対！！ねっ！！ユウ兄にティア！！それにノア！！」

「そ…そうよ…ね！！そうよ！！ミツキさんがそんな事する訳ないわよね！！」

「そうだな…そんな事をミツキがしたらあたいが怒ってやる！！」

「まっ…そういうこった…」

部屋の中に広がった沈黙を破ったのは、そんなスバルの一言だった。
そのまるで自分に言い聞かせるように言い放ったスバルの声を聞いたティアナ、ノア、俺の順でスバル言葉にまるで後押しされたかのようにその後に続く。

ユンの病院内

アウル視点

八神部隊長から病院内の案内と周辺の警備を担当しているファントム・ナイツの面々を紹介された後、私は部隊長と解れ姉さんの部屋へと戻ろうと廊下を歩いていた。

そんな時だ…、

”あの姉さんは…本当に姉さんなのか?”

私の中にふと湧き上がってきたそんな疑問。

最初は、小さな物でも時間が経つにつれてそれは次第に大きくなる。

「ふぅ〜…」

私は、大きく深呼吸をし湧き上がった疑問を押さえつけ今までの事を整理する事にした。

ーあれが姉さん?…まるで別人じゃないか?ー

それが、姉さんと再会した時感じた私の第一印象。

私は、その部屋にいる間ずっと目の前にいる姉さんと私の記憶の中にある姉さんのとの共通点を探していた。

だが…今だにそれを見つけられてはいない…。

「やれやれ…考えすぎだな…」

私は、自分にそう言い聞かせつつ姉さんがいる部屋の前に立った。

すると…。

「ここはこれにしたほうがいいよ～」

（そうですか?私は、こっちの方がいいと思いますが?）

ドアをノックしようとした私の耳にタスラムと小さな女の子の声が聞えてきた。

トントン。

ガチャ。

「失礼しま…」

その声を聞き私は、笑みを浮かべながらドアをノックし部屋に入ろうとした所…。

「あっ!!アウルさん!!ちょ…ちょっと待ってて!!」

「な…なのは隊長?…いったい…」

バタン!!

ドアを開けた所、その向こうからなのは隊長が顔を出し私に待つよう言い残しドアを閉めた。

(い…急いで下さい!!)

「ヴィヴィオ!!それはこっちに!!」

「先輩!!それ!!こっちに下さい!!」

「あっ…はい…」

「ミーちゃん!!それ布団の中に入れて!!」

「うん…あっ…危ないよ…気をつけて」

ドタバタ…ガサゴソ…ドンガラガッシャーン!!

「いったい…中で、何が…」

ドアが閉じられその前に立ち尽くすしかない私。

そして、その中から物凄い音が聞えそして、タスラム、なのは隊長、アルトさんの順で声が聞えた。

…そして、小さな女の子の声に続き姉さんの声が聞えその後またそ

の女の子の声の後に姉さんの声が聞えてきた。
そして、その音から少し経って…。

ガチャ…。

「お…お待たせ!!アウルさん…さっ!!入って」

「し…失礼します…」

その後、ドアが開きその中から慌てた様子のなのは隊長が再び顔を出し私を部屋へと迎えくれてくれた。

入室した私は、先程何があったのか?と部屋の中をキョロキョロとするが特に変わりはなかったが…。

強いて言えばなのは隊長がいるのと、姉さんのベットの横に小さな女の子がいたことくらいだった。

あの子は…確か…。

「あっ!?アウルさんに紹介するね?ヴィヴィオ!!ちょっとこっちに来てくれるかな?紹介するね?こちらが私の娘の…」

「高町ヴィヴィオです!!」

「初めまして、私はアウル・アパレシオンです。よろしくヴィヴィオ」

「よろしくお願いします」

私は、彼女の目線と同じくらいの高さまで屈み彼女と挨拶を交わす。

そして、私との挨拶を終えたヴィヴィオは、元の位置に戻り姉さんの前にあるテーブルの上で何かを書いていた。

（あの…なのは隊長…あの子に姉さんの事は…？」

私は、ヴィヴィオが姉さんの事を知っているのかなのは隊長に念話で確認した。

（うん…ちゃんと話したよ。ミツキさんとヴィヴィオってミツキさんが記憶を無くす前に友達になってね？それで、ヴィヴィオにミツキさんの事を話したら…「もう一度友達になる！！」って言ってくれて…それではやてちゃんにお願いして連れて来れるようにしてもらったの）

（そうでしたか…。それにしてもヴィヴィオは何をしてるんですか？）

なのは隊長から説明を受けた私は、ヴィヴィオが何をしているのか聞いてみた。

（なんか絵を書いてるみたいだよ？私には、何を書いているのかまだわからないけど…）

私は、（そうですか…）と言いなのは隊長との念話を終えヴィヴィオ達に近づいた。

「ヴィヴィオ…何を書いてるんだい？」

（ヴィヴィオは、ミツキさんの夢によく出てくる景色を書いてるんですよ？そうですよね？ヴィヴィオ？）

「うん！！ヴィヴィオ！絵が上手なんだよ～！」

ヴィヴィオに聞いてみた所、タスラムがヴィヴィオの変わりに私に説明をしヴィヴィオにそれを確認。

ヴィヴィオは、絵に集中しながらもその声に答えてくれた。

「へぇ～、見せてもらってもいいかな？」

「だぁ～め！！見せるのはこれが出来てから！！」

「ヴィヴィオ…私にも見せてくれないんです」

「ミーちゃん！！目ぇ瞑ってなきゃだぁ～め！！」

「はいはい…」

ヴィヴィオに絵を見せてもらうよう頼むが出来るまで見せないと言われ、それを聞いた姉さんは閉じていた目を開け私に自分にも見せてくれない事を私に告げた。

それを見たヴィヴィオは、姉さんに対し目を瞑っているよう注意をしそれを聞いた姉さんは再び目を閉じた。

どうやら…ヴィヴィオは、姉さんの事をミーちゃんと呼んでいるら

しい…。

私は、そんな光景をなんだか微笑ましく思えた。

それと同時に何時の間にかタスラムが姉さんのことをファーストネームで呼んでいたことに驚いてもいた。

タスラム…いったいどうやったんだ？こんな短時間で…。

そんな疑問が私の頭の中をよぎりそして…。

「出ぇ～来たぁーーーーーーーー！！」

「もう目を開けてもいい？」

「うん！いいよ！はい！見て見て！？」

ヴィヴィオは、両手をバンザイの格好をしその絵の完成を宣言。

それを聞いた姉さんは、目を開けてもいいのかヴィヴィオに確認。

ヴィヴィオはすぐさまＯＫを出し姉さんに完成したばかりの絵を見せた。

「どぉお～？」

「うん！上手だよ」

「やったぁ～！！」

「どれどれ…私にも見せてくれますか？」

「はい…。どうぞ…」

ヴィヴィオは、姉さんに出来たばかりの絵を渡しその完成具合を確認。

その絵を見た姉さんは、ヴィヴィオを誉めその声に満面笑み喜ぶヴィヴィオ。

それを見た私は、見せてもらうようお願いし姉さんからその絵を受け取る…。

「こ…これは…」

「あ…主?」

「ど…どうかしたんですか?アウルさん…」

姉さんから渡された絵を見た私は、驚きの声を上げる。

それを見たタスラムとアルトが心配そうに私に声をかける。

この絵…この場所は…。

「この場所知ってます…」

「えっ!?」

「どこなんですか?」

私がこの絵に描かれた場所の事を思い出しそこがどこだか知っている旨をみんなに伝える。

その声になのは隊長が驚きの声を上げ、アルトさんがその場所を確認してくる。

「ここは…昔…姉さんと…いや、昔…ユウと仕事をしていた時に連れてってもらった事がある場所なんですよ…」

私は、「姉さんと」と言いかけた時にサエグサさんの心配そうな表情が映り即座にユウの名を上げすかさずその内容を作り変えその話をした。

「ユウと？」

「と言うとやっぱりミツキさんの記憶に関係する事が夢に出てたって訳か…」

（どうやら…そのようですね…）

「ヴィヴィオぉ～大手柄だよー！！」

「えへへへぇ～」

私の話を聞いたアルトさんは、ユウの名を聞き驚きの声を上げる。

その一方、なのは隊長とタスラムが私の話を分析そして、大役を果たしたヴィヴィオの頭を撫でながら誉めそれにテレながら喜びを露わにするヴィヴィオ。

その後、私は、八神部隊長に呼び出されラスラムと共にその部屋を後にしいくつかの雑務をこなした。

タスラム視点。

「タスラム…ここでいいのか？」

（はい…。部隊長から指示された場所はここになります）

「だが…ここは、講堂なんだが…」

雑務を終えた私と主は、八神部隊長から講堂に来るよう言われそのドアの前に立っていた。

ドアの前に到着した主は、その場所を私に確認した後講堂になんの用がある？と言わんばかりの表情で疑問の声を上げる。

（それは、中に入ったらわかる事でしょう。ささっ、早く中に入りましょう）

その声を聞いた私は、主に中に入るよう薦める。

「タスラム…何か隠してはいないよな？」

（いえ…そのような事は何も…）

その声をを聞いた主は、私に隠し事をしていないか確認してきた。

私は、その話を否定。

ふぅ～…さすが、主。

相変わらず感がするどい…。

正直な所、主に嘘をついている。

ですが、これは悪い嘘ではない。

なんせ…これは…ユウさん達が…主に対して…。

ガラガラガラ…。

カシャン。

パン！パン！パン！

「な！なんだ！！」

「せぇ～の！！」

「「「「アウルさん！！ようこそ！！機動六課へぇ～」」」」

「こ…これは…」

ドアを開けた主は、暗闇の講堂に入った途端その部屋の明りがつきクラッカーの音が鳴り響いた事に驚きの声を上げた。

そして、目の前には、「ようこそ！機動六課へ！！アウルさん」と書かれた大だんまくと機動六課の面々そして、ミツキさんにヴィヴ

ィオ…そして、ナカジマ三佐にギンガさんにファントム・ナイツの幹部クラスが現れヴィヴィオの声に合わせ主に向け驚く主を向いいれた。

「あ…あの…これは…いったい…」

「何言うとんねん。アウルの歓迎会に決まっとるやろ！」

「これはね。ユウ君とスバル達から「せっかく来てもらうんだからこれくらいしないと」って言われてね。それでこっそり準備してたの。ごめんね？驚かして」

「ささっ、今日は、アウルさんが主役ですよ～。席はこちらでぇ～す」

「アウルさんの好きな物ばかり用意しましたから」

驚く主に八神部隊長となのは隊長から事情が説明されその後、まだ状況が把握出来ていない主をスバルさんとティアナさんがその両腕を掴みその席へと案内する。

「それにしても…なぜ？私の好きな物を？」

「それは…」

（私がお教えしました。申し訳ありません主。騙すような事をしてしまって）

「構わない…ありがとうタスラム」

（いえ…ちなみにこの飾り付けは、ヴィヴィオとミツキさん…それにアルトさんが担当したんですよ）

「えっ！？それってもしかして？あの時…私が部屋に入れなかったのは…」

席へと移動する主は、なぜスバル達がそんな事を知ってたのかぎもんの声をあげそれに自分が教えた旨を伝え騙した事を主に詫びた。

主は、やさしい笑顔でそれを許しそれを聞いた私は飾り付けを作ったのがミツキさん達である事を付け加えた。

それを聞いた主は、先程部屋に入れなかった事を思い出していた。

「はい…ちょうど、あの時ここの飾り付けを作っていた所だったんです。まさかあのタイミングでアウルさんが来るとは思わなかったもので…」

「はやてちゃんがちゃんと連絡してくれたら、あんな事にはならなかったのよ？」

「いや～スマン、スマン」

主の声にアルトさんが申し訳なさそうにその理由を話、その後なのは隊長が八神部隊長の連絡ミスをしていた事を明らかにしそれを聞いた八神部隊長は、頭を書きながらその事を詫びていた。

そして、それから主の歓迎会が開始された。

その中には、出入り禁止を食らっていたシグナム、ヴィータ副隊長

とこの件に関われないフェイト隊長の姿もあった。

どうやら、ユン先生が特別に許可したらしい…。

私は、ミツキさんが両副隊長の姿を見て怯えないか心配したがどうやら問題ない様子。

それから時間が経ち歓迎会が何時の間にか無礼講の大宴会になり始めた頃…。

ミツキ視点

「あ…あの…私の顔に何かついてるのでしょうか？」

「あっ…いえ…そういう事では…」

まだ歩く事の出来なかった私は、車椅子に座り歓迎会に参加していた私は、ふとアウルさんの視線を感じ勇気を振り絞って彼に声をかけた。

その声にアウルさんは、私の声を聞きなんだか恥ずかしそうに顔を赤らめ声を詰まらせた。

（主…それでは、ミツキさんを余計に不安にさせるだけです。あの…ミツキさん…今つけているそのチョーカーの事なんですが…？）

「えっ？これですか？これは…」

タスラムさんが照れてばかりいるアウルさんを注意し私を見ていた理由を彼の変わりに私に聞いてきた。

その声に私は、その羽根の形をしたショーカーを手にとりその理由に言葉を詰まらせた。

「よく…わからないんですけど…でも、これをずっとつけていないといけないような気がして…それと…」

「それと…？ゆっくりでいいですから…」

私は、頭の中を整理しながらそのチョーカーの事を話を途中まで話をしもう一つの理由を言おうとした所で再び言葉に詰まってしまった。

その声にアウルさんが、私にやさしく声をかけてくれその言葉に無言のまま私は頷きゆっくりそれを声にだした。

「これをつけてると…なんだかとても落着くんです…誰かにずっと…守って貰ってるような気がして…」

「サエグサさん…」

「それで、このチョーカーの事をユウさんに聞いて見たら…ユウさんが…「それは、姉貴が大切に思っている人から貰った物だから大切に身につけておけ！それと…絶対にそれをなくすなよ」って言われてそれでずっとつけてるんです。あ…あの…どうしたんですか？アウルさん？」

「えっ？」

「涙…出てますよ…これで拭いて下さい」

私が話を終えた所でアウルさんをみたら…その優しい瞳から一筋の涙が零れていた。

それを見た私は、声をかけ持っていたポーチをからハンカチを取り出し彼に渡した。

「あ…ありがとうございます。サエグサさん…」

「い…いえ…それと私のことはミツキって呼んで下さい。そう…タスラムさんから頼まれましたので…」

「わかりました…ミツキさん…」

アウルさんは、それを受け取り感謝の言葉を私に告げた。

そして、私はさっきタスラムさんに頼まれた事をアウルさんに言いそれをアウルさんは了承してくれた。

で…でも…。

それから１０分…。

１５分…。

「あ…あの…アウルさん…その…」

「おんどりゃーーーーーーーーーー！！あんたいったいいつまで

ミツキの手を握っとるつもりやーーーー!!（スパーン!!）」

アウルさんは、私からハンカチを受け取りはしたがそれで涙は拭かず私の手をずっと握り締めたままじっと私を見ていた。

それに対し私は、顔を赤らめどうしていいかわからないままあたふたしていた。

それを見ていたタスラムさんは、我冠せずと言った感じのまま黙っていて私はアウルさんに手を握られたままただ時間だけが過ぎていった。

15分後…ようやくそれに気づいた八神さんが履いていたスリッパでアウルさんの頭をたたきようやくアウルさんは、私の手を離してくれた。

でも…、なんだろ?このドキドキ感…それにもっと手を握っててほしかったような…。

私は、ドキドキしながらそんな事を感じていた。

ｉｆ～その２（後書き）

作者
「いかがでしたでしょうか？ｉｆその２！！」

ノア
「ついにアウルのギャグパートに参加！！っていいのか？あんな事させて？」

作者
「おそらく大丈夫だとは、思いますよ？なんせミツキさんが向こうに行った時のアウルさん…あんな感じでしたから？」

ノア
「それはそうなんだが…なんだかやり過ぎじゃないか？」

作者
「あれは、シリアスシーンからいきなりギャクシーンに突入してしまったのでよりオーバーに見えるだけですよ」

ノア
「にしても珍しく話の展開がはやくないか？」

作者
「それについては、あまりにもダラダラやってしまうと話が長期化してしまいますからねぇ～。ですからサクサクとやってます」

ノア
「それじゃ？今回は？」

作者
「そんなに話数は増えないと思います。ですが、1話自体はながくなりますが…」

ノア
「長すぎだろ!!（スパーン!!）」

作者
「痛ぁー!!いきなりスリッパで殴らなくていいじゃないですか?」

ノア
「いいんだよ!!それで次回は?」

作者
「そうですね…とりあえずそれぞれ自分の気持ちに気づき始めたんで一気のその距離を縮めたいですね?」

ノア
「そうなりゃいいけどなぁ〜んじゃ、まったなー!!」

次回予告

はやて
「自分の気持ちにそれぞれが気づきその気持ち…」

ヴィータ
「その気持ちは時間(とき)が経つにつれてそれが…」

シグナム
「お互いの距離がちぢみ始めたそんな時」

ザフィーラ
「2人の前に暗雲が訪れる…」

リイン
「次回!!魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～ｉｆ～その3!!」

はやて
「アウルの気持ち…ミツキの気持ち…」

八神家全員
「テイク…オフ…」

if～その3　（前書き）

フラナガン市内　ユンの病院前

ユン視点

「それじゃ、いってきます」

「いってきます…」

「「いってらっしゃ～い」」

そう言い残し、ミツキとアウルは、出かけていった。

2人の挨拶に手を振ってそれを見送るギンガとスバル。

「それにしても…単なるリハビリがてらの散歩になんだいこの大騒ぎわ…」

私は、見送る二人に後ろから声をかけた。

「いえ!!これは単なる散歩じゃないんです!!」

「そうですよ!!これには私とギン姉の将来がかかってるんですから!!」

私の声を聞いたスバルとギンガはそんな私に対し真剣な表情で私に訴えてくる。

「そんな…オーバーな…なぁ？ティアナ？説明してくれないかい？」

真剣な表情で私に詰め寄ってくる2人に対し私は、一緒にいたティアナに事情を説明してもらうよう頼んだ。

「えっとですね…ようするにミツキさんとアウルさんに結婚してもらって…これをきっかけに自分達の恋愛についての所謂、援護射撃にしたいらしいです…その…ナカジマ三佐への…私からすれば別にそんな事をしなくても…」

「ティア！！父さんがどんな人かわかってないからそんな事言えるんだよ～！！」

「そうよ！！父さんは、私が昔その頃好きだった人とデートしてた時にその後ろから尾行してきた挙句！！その人とわかれさせようとしたんだからーー！！」

ティアナの説明＋自分の意見を言い終えようとした所でスバルとギンガが涙ながらにティアナに自分達の状況を訴えていた。

「そ…そりゃ…大変だな…でも…なんでそれがミツキとアウルなんだ？」

ティアナが物凄い勢いで訴える二人を見た私は、その光景に冷や汗を流しながらそれと今回の事になるのか聞いてみた。

「それは…なんでだろ？ギン姉？」

「（ガクッ…）す…スバル…それについては前に説明したわよね？父さん…ミツキさんだけにはよく「早く結婚でもしろ！！」ってよ

く言ってるって…」

「ああっ！！（ポン！）そうだったー！！」

私がスバルにその理由を聞いてみた所、スバルはどうやらその理由を忘れてしまってたらしくその理由をとなりにいたギンガに聞いた。

それを聞いたギンガは、その声にガクリとしながらその理由を説明。

その理由を聞いたスバルは、自分の手をポンと叩きながらその事を思い出していた。

「でも…なんでスバルとギンガさんには、ストーカーまがいの事をしててミツキさんだけには「結婚しろ！！」って言ってたのかしら？」

ギンガの説明を聞いたティアナふとそんな疑問を漏らした。

「う～ん…なんでだろ？」

「私も…その理由については、聞いてないわ」

ティアナの疑問にスバルもギンガもどうやらゲンヤに聞いていない様子。

「なんだい…。そんな事も知らないのかい？」

「それじゃ！先生は、知ってるんですか？！」

私の声にスバルは、ムッとした様子で私にその理由を聞いて来た。

「そんなのちょっと考えりゃわかるだろ?ゲンヤは、恐らくミツキがこのまんま結婚しないで自分の老後の世話をするんじゃないか?って心配してるんだよ?ミツキのあの性格なら…変な男に捕まりそうな心配はしなくてすむだろうからねぇ?」

「なるほど!!確かにあの超奥手のミツキさんなら、そんな心配をするよりもむしろその逆の事の方がナカジマ三佐から心配になるって訳ですね」

「そうだね…それに比べて…自分の娘と来たら…」

「変なイケメンに、ホイホイとついて行きそうですからね…」

「「ティア!!(ティアナ!!)」」

私がその理由を答えてた所、ティアナは納得しさらにゲンヤが自分の娘達に対しての心配ごとを想像しスバルとギンガをジト目で見つめる。

その視線にスバルとギンガは、そんな事ないといった様子で声を荒げる。

それにしても、あの歓迎会からはや一ヶ月…。

最初の頃は、いつアウルが暴発でもしないか?と心配していたが…それが今じゃ一緒に出かけるまでになったとは…。

それもこれも…タスラムがアウルの事をよくフォローしてたお蔭だね…。

あの歓迎会の後、アウルにずっと手を握られてた事から中々話が出来なくなっていた二人の間をタスラムが色々と話が出来るように話題を提供。

それから、アウルがミツキの足のリハビリに付き合うようになってからようやく2人っきりでも会話が出来るようにはなったんだけど…。

でも、交わせる言葉は二言三言…。

それにミツキから自分の事をファーストネームで呼んでもらうよう言われてその歓迎会中は、「ミツキさん」って呼んでいたんだけど…。

でも、その翌日には元の「サエグサさん」に戻っていた。

ミツキは、その事を気にしてる様子ではあったけど…今のあの子…中々言い出せなくってねぇ…。

タスラムは、それに気づいて何度もアウルに言ってるだが…。

まっ！アウルもアウルでミツキに負け時と奥手らしいし、それに自分の過去の事で色々とあるみたいだから中々自分の気持ちを表に出さないらしい。

って、前にタスラムと話をした時彼女はそんな事をもらしていたけど…。

それについては、ミツキも似たようなもんだからね…。

そういや、前にアウルがこっちに来て…あいつが帰る間際…確か自分の過去の事をミツキに話をしたとか…あいつが今回こっちに来た時に…そんな話をしてたような…。

ダメだね…。どうや徹夜明けで頭がうまく回らないねぇ…。

私は、あれこれ考えつつも目の前で先程からのやり取りを続けるスバルとギンガ、それにティアナを無視し少し仮眠をとるため病院内へと入っていった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～ｉｆ～その3…はじまります…。

「ふぁ～あ…眠い…眠い…」

if～その3

if～その3　「アウルの気持ち…ミツキの気持ち…」

フラナガン市内

タスラム視点

病院を出発してからはや20分…。

「…」

「…」

（あの…主…少しよろしいでしょうか？）

（なんだ？タスラム？）

無言のまま歩く2人に堪り兼ねた私は、念話で主に声をかけた。

（主…少しはミツキさんと会話をしてもいいんじゃないのでは？主だって…）

私は、ミツキさんの様子を見ながら主に話をする。

（いや…その…なんて言ったらいいのか…）

（主？どうなさいましたか？）

私の話に主は、シドロモドロになりながら答えてくる。その主の態度に私は「？」を出しながら主に質問をする。

（なぁ…タスラム？サエグサさん…いや！姉さんと…どんな会話すればいいんだ？）

ガクッ…。

（（はぁ…）以前、ミツキさんと色々話をしていたと言ってたではありませんか？その時と同じ事をすればいいだけですよ？主？）

主の答えを聞いた私は、心の中で大きなため息をし主に以前と同じ事をするよう助言をした。

（いや…確かに…話をしたが…あの時は、姉さんやノア達が私に色々聞いてきたりしてきたのをただ答えていただけなんだ…）

（なるほど…どう話題を提供し会話をリードすればいいのか？と言うことですね？）

（ああ…そういう事だ…。何せこういう事は初めてだからな…）

主の私の方を見ながらすまなそうな顔をしながら答えてきた。

私は、どうすればいいのか思考を始める。

まぁ…、いくら主でも女性と2人きりで歩く事はあるがこういう事…つまりは自分が意識をし始めている女性と所謂デートまがいなこの状況でどうやら主はどうしていいのかわからないらしい…。

これは、これでいい傾向のようです。

この1ヶ月…。

ありとあらゆる方法を使い!!

主とミツキさんの間を少しでも近づくよう努力に努力を重ねた私の結果がどうやら報いたようです!!（ジーン…）

（た…タスラム?…お～い…タスラム～…）

（おっと…主…申し訳ございません。もう少々お待ちください）

（そ…そうか…なら待とう…）

「あ…あの…。どうかされましたか?」

「い…いえ!!なんでもありません…」

「はぁ…」

どうやら少しばかり感慨に耽っていたようで…。

主は、その事に気づいていたのかいなかったのか…不思議そうな顔をしながら私の方を見ていた。

ミツキさんも主の不穏な姿を気にしたのか主に声をかける。

それに気づいた主は、驚きテレながらなんでもないようミツキさん

につげる。

その話を聞いたミツキさんは、疑問な表情を浮かべながらなんだかつまらなそうにその話に答えていた。

さて…いったいどうしたものか…。

私は、２人の様子を見てある事を考えていた。

それにしてもこの２人…どうしてこんなに似ているのか…。

その産まれから…その行動…それに考え方に至るまで…。

この１ヶ月の間、私は２人の関係を近づけるよう行動するのと同時にユウやスバル…それにユン先生といったミツキさんに近い人達に彼女の事を色々と聞いてみた。

それは…彼女の事は主から事前に聞かされてはいたが色々な観点から彼女の事を知る必要があったからだ。

なぜかと言えば、向こうの世界で主がミツキさんの事を話すとき…とても…それはとてもうれしそうな笑顔で話すからだ。

当初、私はその主の笑顔を見…。

そして、その話を聞きながら…。

妙な苛立ちを感じていた。

今考えれば、私はミツキさんに正直…。

嫉妬をしてたかもしれない…。

いや…嫉妬をしていたのだ。

だが…それも今回の事で彼女と直接会った時から…私の考えは１８０度変わっていた。

それがなぜかはいまだにわからない…。

私は、その答えが知りたくて…なぜ主はミツキさんの事を好意に思えるようになったのか…。

それが知りたくて色々と話を聞いていた。

だが…その答えはいまだに出ていない…。

事実としては、どうやら2人ともお互いの事を好意に思いそして…その気持ちを行動や言動に出せずにいるという事。

前回は、姉弟といった関係だったためそういった気持ちを家族愛と摩り替えていたのだろう…。

ですが今回については、ミツキさんが記憶喪失との事でそれが自体が最初から無く…それぞれお互いに異性として見ているようだ。

なら…私がすべき事は…。

（お待たせしました主…私がこの状況をとりあえずなんとかしますので主はそれについてきて下さい）

（わかった。）

私は、自分の中にある疑問よりも主のために彼女との中を良くする方を優先させた。

そして、主に対し私は自分の話についてくるよう念話で告げその声に主はそれに了承して下さった。

（あの、ミツキさん？）

「なんでしょう？タスラムさん」

（今日は、天気がよくてよかったですねぇ～。それにしてもその服…いったいいつの間に用意されたんですか？）

「そうですね…天気がよくってよかったです。こ…この服…は…その…スバルさんとギンガさんが今朝いきなり来られて…「この服を来て行って！！」と言うもんで…」

（そうですか…それにしてもとてもお似合いですよ？ねぇ主？）

「あっ…ああ…とてもお似合いですよ。サエグサさん」

「そ…そうですか…そう言われると…なんだかテレちゃいますね…（ポッ）」

私は、他愛もない会話からミツキさんが着ていた服を誉めるよう主を会話で誘導する。

そのミツキさんの服装と言うのが、ナカジマ姉妹コーディネートによる物で白いワンピースに寒さ対策のための水色のカーディガンに薬等が入った小さなポシェットを肩から下げワンピースと同じ色の靴…と言った感じ…。

主と言えば、茶色のズボンに白のTシャツ…。

その上に黒のジャケットを羽織っている。

ちなみに…このコーディネートは、主自身で行った…と言うより…私の助言を主が聞いてくれた…と言った所だろうか…。

話を戻すと私の声を聞いた主は、顔を赤らめながら彼女が着ていた服を誉める。

ミツキさんは、主の声に顔を赤らめながら俯きながらテレくさそうにその会話に答える。

それから基本的には、私とミツキさんの会話に主がついてくるといった形で先程までの無言の空気を吹き飛ばし和やかな会話を繰り返していた。

そして、当初はぎこちなかった2人の会話も時間（とき9が経つにつれて段々スムーズな会話になっていった。

そんな時だ…。

ドン!!

「ちっ!!邪魔だ!!」

「きゃ！！」

ドサッ！！

「サエグサさん！！」

「サエグサ～？」

「兄貴！！こいつは！！」

繁華街に入ってきた私たちにいきなり2人組の男がミツキさんにぶつかってきた。

ミツキさんは、その反動で転んでしまい主が心配そうに近づこうし声をだした所…。

ガチャリ！！

「動くなぁ！！」

「なっ！！」

男の一人が主の声とミツキさんの顔を見た所、驚いた表情になりもう一人の男に声をかけた。

その声にもう一人の男は、声をかけた男が何を言いたかったのか気づいたらしく隠し持ってたショットガンを倒れているミツキさんの頭にその銃口をむけ主に対しその場に立ち止まるよう大声で叫んだ。

その様子を見たもう一人の男も短銃を懐から取り出しそれを主に向ける。

「貴様…いったい何を…」

「もう観念しろ!!」

「その人を離すんだ!!」

「へっ…もう追いついてきたのか…。おい!!そこの管理局員ども!!こいつの命がほしけりゃそこをどけっ!!」

「そうだ!!俺達はもう既に何人も殺して来てるんだぁ!!言う事を聞かないとこいつの命がないぞ!!」

「い…痛い!!」

主が男達に声をかけようとしていた所周りから局員らしき数人が男達を囲みデバイスを一斉に向ける。

それに気づいた男の一人は、その銃口をミツキさんの頭に向けたまま大声で叫んだ。

もう一人の男は、ミツキさんの髪を引っ張りながら彼女をたたせようとしつつその声に続く。

髪を引っ張られたミツキさんは、痛がりながら立ち上がる。

「くっ…」

主は、男達の前に立ち止まり苦悶の表情をしながらその男達のことを睨みつける。

「それにしても…まさか現役の少将様がこんな所にいたとはなぁ～」

「そう言えば、こいつ…この間の戦いで怪我したとかなんとかで入院してるってこの間ニュースでやってましたが…」

「どうやらそのニュースはデマみたいだなぁ～。それにしてもコイツ…俺達に相当ビビってるみたいだな」

「こんなヤツが少将だなんて地上本部って、大した事ねぇ～なぁ～」

「こんなヤツがいるからこの間…変なヤツ等に襲撃されるんですよ」

「「はぁ～ハッハッハッ！！」」

2人組の男達は、どうやらミツキさんの事を知ってたらしく立ち上がった彼女のその怯えた様子を見ながら彼女の事をバカにしそして、周りにいた局員達の事を警戒しつつ高笑いをしていた。

どうやら…この2人…どこかで犯罪を犯して逃走している最中に我々と出くわした…と言った感じでしょうが…。

私は、いきなり起きたこの状況を分析しつつこの状況を打開する方法を考えていた…。

だが、今のミツキさんの事はここにいる中では私と主しか知らない…。

そのため…我々の周りにいる局員達もミツキさんのその態度に対し、どうやら「あれは、犯人を油断させる演技だ…」と思っているらしくいつでも突入出来るように2人組みの周りを取り囲んでいる…。

これは…かなり不味いですね…。

私は、そう思いつつミツキさんの方を見てみる…すると、男達に言われた事に対し、その声に一切反応はせずに俯いたまま右手で胸の辺りの服を掴んでいる。

（相当怯えていますね…）

（当たり前だ！今の姉さんは魔導士としての記憶もないんだ！怯えても当然…）

「ん？おい！！なんだそれは！！こっちにこよせ！！」

「あっ！！それは！！」

主が私の話に念話で答えている途中、ミツキさんのその様子を見た短銃を持った男は、ミツキさんの胸元から見えたチョーカーを取り上げようとした。

「おいっ！！コイツ…何か持ってるのか？」

「いや…デバイスかと思ったら…こいつは、単なるアクセサリーですぜ…」

「だが、現役少将が持ってる物だ…。高値で売れるかもしれねぇ…取り上げとけ！！」

「へい！！兄貴！！」

その様子を見たショットガンを持った男は、それが何かを確認しそれが高価物と勘違いしそれを取り上げるようもう一人の男に命じた。

その命令を受けた短銃を持った男は、ミツキさんからチョーカーを取り上げた。

と…次の瞬間！！

「返して下さい！！」

ミツキさんは、あの物静かなミツキさんが怒りの表情で取り上げれたチョーカーを取り替えそうとする。

「まずい！！」

ガチャリ！！

「貴様は、動くな！！」

「くっ…」

それに気づいた主は、声を上げ彼等に近づこうとするがもう一人の男がショットガンを構えその動きを征する。

「なっ…なんだコイツ！！」

「て…てめぇ！！何しやがる！！コイツが見えねぇのか！！」

そのミツキさんの行動に対しショットガンを持った男がショットガンを今度は、ミツキさんに向け怒号を上げる。

「そんなの知らないわよ!!それを返して!!」

そう男の声に答えたミツキさんの周りを青白い光が包み込む。

ブワン!!

「なっ!!なんだ!!こりゃ!!」

「くっ…来るなぁー!!」

バンバン!!

（ミツキさん!!）

「ミツキ!!」

ショットガンを持った男は、ミツキさんのその姿にたじろぐ。

それを見た短銃を持った男は、その様子に怯え彼女に向け短銃を発射した。

私と主は、その様子に声を上げる。

「う…嘘だろ!!」

だが、発射された弾丸をミツキさんは、右手の手のひらをその男に

見せるように出しその周りからでるその蒼白い…魔力とは違った何かオーラみたいなものでその弾丸を受け止めた。

「このやろー！！」

（主！！）

「わかってる！！」

ガスドカバキ…ドサ…。

その様子を見たショットガンを持った男は、ショットガンを構えミツキさんに攻撃しようとする。

その様子を見た私は、主に向け声を上げる。

主もその声にどうやら私が何を言いたいのかわかっていたらしくその場から飛び出した。

そして、ショットガンを蹴り上げその勢いのままショットガンを持った男を蹴り倒す。

そして、もう一人男もすぐさま今度は殴り倒した。

チャリ…。

「もう大丈夫ですよ…サエグサさん…ほらっ…ちゃんとこれも取り返しましたから…さ…サエグサさん？」

（み…ミツキさん？いったいどうかされましたか？）

「…」

男達を倒した主は、その男が持っていたチョーカーを拾いミツキさんに渡そうとする。

その声にミツキさんは、何も答えようとはせずそしてあの蒼白いオーラも以前出したままだった。

「返して…それは…私にとって大切な物なの!!…だから…返してぇー!!」

ドゴゴゴゴゴゴ…

（主!!これはまさか!?）

「こ…これが蒼天の石の力…なのか…」

ミツキさんに近づこうとした主に対しミツキさんは、そう声を上げそのオーラを増大させた。

ドゴーーーーーーン!!

力を増大させた事によりミツキさんの周りの地面が陥没しそのオーラは光の柱のように天まで伸びてく。

そして、そのオーラの周りから衝撃波が発生。

その衝撃波により辺りのビルの窓ガラスが割れ車等が吹き飛ばされる。

「うあっ!?ミツキさ…!?」

ドカッ!!

そのオーラを見た私は、主に声をかける。

その声に主は、驚いた様子で声を上げそのオーラから出た衝撃波に主も最初は耐えていたのだがすぐに耐え切れなくなり近くのビルの壁まで吹き飛ばされた。

(主…ご無事ですか?)

(ああ…だが…いったいどうすれば…)

私は、壁に激突した主に心配しながら声をかける。

その声に主は、問題ない事を告げ、そしてそのオーラを放出させ続けているミツキさんを見ながらどうしたら元に戻るのか?と心配しながら私の話に答えてくる。

アウル視点

私は、激突した壁から立ち上がりつつ蒼天の石の力を開放している姉さんを見ながらどうすればいいのか?…と無意識に姉さんから貰ったペンダントを握りしめていた。

そんな時だ…。

（なにやってんの！！あなたはミツキの事をいったいどうしたい訳！！）

「な…なんだ…この声は？…タスラム？お前には聞えたか？今の声…」

突然、私の耳に女性の怒鳴り声が聞こえてきた。

それを聞いた私は、タスラムにもその声が聞えたのか確認した。

（私には、聞えませんでしたが…いったいどうされましたか？）

「聞えなかったのか？…今の声が…空耳だったのか？」

タスラムの答えに私は、それが空耳だったのかと思った。

（空耳じゃないわよ。アウル・アパレシオンさん。初めまして…と挨拶したい所だけど…。今は、そんな状態じゃないからね。ちなみにこれは、あなただけ…というかミツキからあなたに渡したネックレスを通してあなただけに話しているの…わかる？）

私の頭の中にまるで念話のような…と言うよりノアが私に会いに向こうの世界から来た時の…部隊長達と同じような感じがした。

「えっ…そうなんですか？…どうりで、タスラムにも聞えない訳だ…それで、なぜこんな時に」

混乱する私は、一応の理解を示しつつなぜ私に話しかけてきたのか聞いてみた。

（それはね…今のミツキは、魔力がほとんど無い状態で蒼天の石の力を強制的に解放したばっかりに力の制御が出来なってるの。その上、ノアも今は近くにいなくてね？すぐになんとかしないとあの子…蒼天の石に…飲み込まれちゃうのよ。）

「なんですって！！何か元に戻す方法はないんですか！」

女性の話を聞いた私は、声を荒げる。

（だから…落ち着きなさいって！いいよく聞いて！！これから私と、ここにいないノアとであなたに力を貸すから！でも…それには、あなたがあの子に対してどんな気持ちなのか…それが重要なの）

「私の…姉さんに対しての気持ち？私が助けるんですか？」

その話を聞きながら、私は焦る気持ちを抑えつつそれが何の意味をなすのか疑問の声を上げる。

（そうよ…いい！！蒼天の力は、使う人の想いによってその力が増すの。今…ミツキは、あのチョーカーを取り返す事で頭が一杯なのよ…あなたから貰った…あのチョーカーをね？どうやら、ユウから言われた…「大切な物だから絶対なくすな」って言うのを間に受けてるみたいだけど…まったく…あのバカ息子（ユウの事）ったら…余計な事ばっかり言うんだから…。でも、それが切欠にはなってるみたいだけどそれだけじゃないみたいなのよね～）

「それだけじゃない…と言うのは？」

（それは、あなた自身であの子に聞いて見なさい！…でね、今のあ

の子を止めるためにはミツキの魔力…もしくは、その魔力が詰まった物を使ってあの子にその魔力を送って止めるしかないのよ…。それが今出来るのは…ミツキから貰った…あの子の魔力で作ったペンダントを持ってるあなただけ…それにあの子に近づくためにはあなたのあの子に対しての気持ちがないと私とノアがいくら頑張ってもあなたは近づけないのよ）

「つまり…あなた方からの力を私が使えるようにするために…そして…姉さんを今の状態から助けるために私の気持ちが必要…と言う訳ですね？」

私は、彼女の話を聞き自分が理解した内容で間違いないか彼女に質問をした。

（その通りよ…理解が早くてよかったわ…。それじゃ早速で悪いけど…いい？）

「はい…」

（いい！！あなたは、ミツキの事を考える事に集中して！！始めるわよ！！）

（主…何をするのかは、わかりませんがお付き合いいたします）

「すまない…タスラム…」

彼女の指示に従い目を瞑り姉さんの事を考え始めた。

タスラムは、私の話にイマイチ理解していない様子だったが私が何か始める事に気が付きそれに付き合う事にしたらしい。

姉さん…いや…ミツキさん…私は…私はあなたの事を…。

ピカー！！

（なんですか！！…ペンダントが光って…それに主の周りにミツキさんと同じ力が…）

タスラムの声に私は、静かに目を開けそのまま歩きだした。

ビュイン！！

（入った…こ…これは…いったい）

私は、タスラムの答えには答えず姉さんに近づき…そして…彼女を抱きしめた。

「落着いてください…姉…いや…ミツキさん。あのチョーカーは、私が取り返しました。もう大丈夫です…私がついていますから…だから…」

フッ…

そう私が彼女に話し掛けた途端、私の胸にあるペンダントがさらなる光を放った。

そして、その光が光ってすぐに彼女の周りからオーラが消えその場に倒れこんだ。

「サエグサさん！！」

（ミツキさん！！）

ドサッ！！

バシュ！！

「ミツキー！！無事かぁ！！」

（あ…あれは！？）

「ノアっ！！」

いきなり光の弾丸がどこからか飛んできたと思えば、その光の弾丸がミツキさんに近づきその中からノアが現れた。

ノアの登場に私とタスラムは、驚きの声を上げる。

オーラが消えた姉さんは、その倒れこむ。

それを私は、すぐに彼女を受け止め私と共に彼女に声をかける。

「あ…アウル…ご…ごめんなさい…迷惑かけちゃったね…。それと…タスラムとノアにも…」

（ま…まさか今ので記憶が？）

「ね…姉さん…姉さんなのか！？」

私と主の声に答えたミツキさんは、先程までとは違い…そう以前私

が少しだけ話をしたあのミツキさんだった…。

その声に私は、記憶が戻った事をつげその声に主はミツキさんに声をかける。

「そうだよ…。ごめんね…アウル…色々と心配させて…」

「どうやら、力の解放した事がいい方向に向ったみたいだな…」

（そのようです…）

「姉さん!?私こそ…色々と心配させてすいません!!」

私の声に頷きながら答えるミツキさん。

その様子にノアは、涙を浮かべながら記憶が回復した理由をいいその声にタスラムも同意する。

横になるミツキさんを抱えながら私は、涙を流しながらミツキさんの声に答えていた。

「うしっ!!あとの事は、ここの連中に任せてあたい達は病院に直行だ!!とりあえず、まずは検査だ!!」

「うん…」

「はい…」

（わかりました）

ようやくの再会を果たした二人を見たノアは、病院に向う事を私たちに告げその声にミツキさん、主そして、私の順でそれを了承。

ノアの転送魔法で病院へと向う事となった。

それにしても…あの声は…いったい…。

（ありがとうね…それとお幸せに…）

その女性はそう言い残しそれ以来聞える事がなかった。

あの声の人は…もしかして…姉さんとユウの…。

彼女の事は、その後も気にはなったがそれよりも姉さんの事が心配ですぐに頭の中を切り替えた。

そして…その事については何時の間にか忘れていた。

フラナガン郊外

引き続きアウル視点

「ねぇ…いったいどこに連れて行くつもりなのよ？アウル？」

あれから数週間がたった。

例の一件以来、記憶を取り戻した姉さんは力を解放した影響で少し

ばかり体調をくずしてしまったが今日ようやく晴れて退院となった。
それを記念して、私はユウの車を借りて姉さんをつれだした。
助手席に座る姉さんは、外の景色を見ながらどこへ行くのか私に聞く。

「それは着いてからのお楽しみですよ。姉さん」

「ケチぃ～」

私の答えを聞いた姉さんは、頬を膨らませムスっとした様子。
そんな姉さんを横目で見ながら私は、目的地へと車を走らせた。
ちなみに今日は、タスラムは一緒ではない。
タスラムには、事前に何をするのか？と言うのを伝えていてそれを聞いたタスラムは…。

（それでは、私はお邪魔になるだけですから行く前にノア辺りに私を預けといて下さい）

と言い、自ら参加を辞退…と言うより私一人でやってみせろと言わんばかりの勢いだった…。

「さぁ…つきましたよ…こちらにどうぞミツキさん」

「えっ！？あっ…うん…あれっ？ここって…」

車を山の方に向けて走らせそして、雑草が所々に生えている駐車場らしき所に車を止めミツキさんを案内する。

ミツキさんは、その声に驚きつつもここがどこなのかどうやら理解した様子。

私とミツキさんは、草木が生える昔は何かの研究施設だったような廃墟を横に抜け湖が見える高台の上へと向った。

「うわぁ～きれい…」

高台に立ったミツキさんは、そこから見える光景を見て感動したような声をあげる。

私は、彼女の後ろからその光景を眺めていた。

「ここは…変わりませんね…」

「そう？あの時…紅葉なんてしてなかったわよ？」

「そうですね…。あの時は、緑が生い茂っていましたからね？」

高台から見える景色を見ながら私とミツキさんは、依然来た時の事を思い出していた。

そう…。

この場所こそ、記憶を無くしたときのミツキさんがその夢に何度も出てきてヴィヴィオに描いてもらった場所。

その絵を見たときに私は、「ユウと来た事がある」と言っていたが実を言うとミツキさんに私が元の世界に帰る前の前日に連れてきてもらった場所なのだ。

そして…あの時からに思って…姉さんを助けた時から確信に変わっていたあの事を…今…。

「み…ミツキさん」

「えっ？アウル…何…」

私は、湖を流れるミツキさんに声をかけた。

ミツキさんはその声に驚きながらもこちらを振り返り私を見つめる。

「あの…ここにあなたを連れてきた理由なんですが…」

「う…うん…」

私は、こちらを振り向いたミツキさんにここに来た理由をつげようとする。

その私の真剣な表情を見たミツキさんは、先程までの笑みを消し私の話に耳を傾ける。

そのとき…。

風が２人の間に流れた。

その風は彼女のその長い髪を靡かせミツキさんは、その風によって

自分の顔にかかる髪を抑えながらこちらを見つめる。

あの時…。

そう…あの時ここに連れて来てもらい…。

そして、湖をバックにするミツキさんを見たときから…。

「ミツキさん…。私と付き合ってくれませんか？」

「えっ…？嘘…」

私は、焦る気持ちを抑えつつ彼女に向って告白をした。

その声に対しミツキさんは、驚いた様子。

「嘘ではありません。私は、あなたの事が好きになってしまいました…」

「で…でも…私…お…お姉ちゃんじゃ…」

私の答えに驚いたままのミツキさん。

「確かに…。以前、こちらの世界に来た時私はあなたに何かしらの好意を感じていました。ですが…あの時の私は、それをあなたの事を「姉」として向き合う事で満足していました。ですが…ここに連れて来てもらってから…それとは違う感情が私の中にありました…。それが、何なのかは再びこちらの世界に来て…ミツキさんと向き合うまでわかりませんでした。そして、記憶を亡くしたあなたと付き合い…それが何かわかりました…。それは、あなたを…姉としてで

はなく一人の女性として愛していたと言う事に…でうから…」

ミツキ視点

「み…ミツキさん?なぜ…泣いているのですか?」

「えっ!?」

アウルの話を私は、静かに聞いていた。

そして、話終えたアウルは、戸惑いながら私が涙を流している理由を聞いて来た。

その声に私は、驚きながら自分が涙を流している事を確認し持っていたポシェットからハンカチを取り出しその涙を拭いた。

でも…その涙は…止まる事はなかった。

「あ…あれっ?なんで…なんで私…」

私は、止まらない涙を拭きつつなんで自分が泣いているのか戸惑いながら自分に問い掛けてみた。

(それは…うれしいからでしょ?ミツキ…)

えっ…。

奥様…。

私の頭の中にとある女性の声が聞こえてきた。

（こらっ！！奥様じゃないでしょ！！まったく…何度言ったらわかるのよ…）

そうだった…ここは、私がユウと…それに先生と奥様に…。

いけないいけない…奥様なんて言ったらまた怒られちゃう…。

ごめんなさい…パパ…ママ…。

（それでよし！！それにしてもいい人見たいだから…絶対に！！逃がすんじゃないわよ！！）

そう言えば…この間アウルとも話をしたんだっけ？

（少しだけね♪あっ！それと…こっちへの挨拶はいいからね？幸せになりなさい！！それじゃ…またね♪）

うん…またね…ママ…。

私は、そう心の中でママと話ながら…そして、自分の気持ちを少しづつ整理し始めた。

そもそも、なぜここにアウルを連れてきたか言えばここは私に取ってとても大切な場所で色々あったけど…とても大好きな場所…。

あの時…タスラムと話しをした後、元の世界に帰る期限が明日と迫ったアウルに…この場所の事を…知っておいてほしかったから…。

でも…ユウはここの事…どうやら嫌いみたいだけど…。

まさか…ここでアウルに告白されるなんて…。

もしかして…

私…

最初からこうなる事を望んでいたのかも…。

でも…彼の口から出た…「姉さん」と言う言葉に最初は納得してはいなかったけど彼と一緒に過ごしている内にそれで満足していたんだ…。

そう…考えつつ彼にこう問い掛けた…。

「ありがとう…。気持ちはうれしいけど…私…こんな体だから…アウルに返って…」

「迷惑なんかじゃありません!!あなたじゃなきゃダメなんです!!私は、過去に色々とあって昔は「自分は幸せになってはいけない」と思っていました。ですが、あなたと一緒にいた今日までのこの時間で…。あなたの姿を見て…あなたと一緒に過ごす事でそうではない事を教わりました。今度は、私があなたをサポートします。あなたの残りの時間を私に下さい!!」

私の問いかけにアウルは、それを打ち消すかのように真剣な表情で私に話しかける。

それに対し…私は…、

「「残りの時間を下さい」なんてずいぶんとオーバーなんだから…私!!そう簡単に死なないわよ!!」

「そうでしたね」

私は、涙を流しつつ笑顔でアウルに反論。

それを聞いたアウルも笑顔でそれに答える。

「私なんかで本当にいいの?」

「はい…。あなたじゃなければダメなんです」

「ずいぶんと強引なのね?」

「ええ…少しばかりわがままになってみました。それで…そろそろ答えの方を聞かせてもらってもいいですか?」

「わかってるくせに…」

私は、アウルに近づきながらアウルにそう問い掛けた。

その問いかけにアウルは、やさしく…そして、笑顔で答えてくれた。

そして、答えを聞きたがるアウルに対し彼の唇にキスをした。

「これが、私の答え…」

「ずいぶんと強引なんですね…」

「私も…少しわがままになってみただけ…」

「そうですか…」

唇を離した私は、驚くアウルの顔を見ながらそう答えた。

それを聞いたアウルは、すぐにその表情をいつものやさしい顔つきに戻し私に話しかけてくる。

私は、そのアウルの話にさっきアウルが言った事と同じセリフで返した。

そして、お互いの気持ちを確認しあった私とアウルは、再び唇を重ねた…。

お互いの気持ちを確認しあうかのように…。

そして、2人の周りを…風がまるで私たちを祝福してくれるかのように静かに流れた…。

Ｆｉｎ…？

if～その3　（後書き）

作者
「如何でしたでしょうか？アウルとミツキのｉｆ！！」

ノア
「もしかして…タスラムって2人のキューピット役じゃねぇか？」

作者
「その通りですよ（笑）なんせ、ある意味言い出しっぺですし…それに前回は、大して出番がなかったのでタスラムの出番を増やそうと思ったらキューピット役が私の中でハマッてしまいまして」

ノア
「まぁ…2人とも奥手って事になってたからな…アウルといつも一緒のタスラムがそうなるのも無理はないな…」

作者
「私的には、影の主役と考えてましたからね。書いていて主役であるアウルさんがもしかして…食われてのかも…」

ノア
「それは、人ぞれぞれだろ？それにしても最後の「？」マーク！！あれはなんだ！！」

作者
「はい？何のことですか？」（ゲシッ！！）

ノア

「てめぇ！！な～に惚けてんだ！！本編の最後！！「Ｆｉｎ」の後だよ！！よ～く見てみろ！！」

作者
「はいはい…（まったく…蹴らなくてもいいじゃないですか…）あ～これですね。これは…」

ノア
「これは？」

パンパカパーン！！

突然、響き渡るファンファーレ。

ノア
「なんだ！！」

作者
「これは、前回の更新でついにＰＶが５０万ＨＩＴを超えました！！これも読者の皆様のおかげです！！ありがとうございました！！」

ノア
「うぉー！！すげぇ～！！…ってそれとあたいの質問といったい何の関係が…」

作者
「そこで！！５０万ＨＩＴをお祝いして実はもう１話！ｉｆを用意しております！！」

ノア

「何ぃ～！！」

作者
「ですが！！ここでの公開ではありません！！」

ノア
「ここじゃないって…いったいどこだよ？」

作者
「それは！！「ノクターンノベルズ」です！！」

ノア
「ノクターンだと！！…ってぇ事は…」

作者
「はい！！Ｒ－１８バージョンでその３のその後のお話をお送りいたします！！」

ノア
「なぁ…向こうさんの方は大丈夫なのか？」

作者
「その辺については、既に了承を頂いております。そしてタイトルはズバリ！！「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　Ｒ－１８場外乱闘！！エピソード１～ｉｆ　ｔｈｅ　ａｆｔｅｒ～！！」」

ノア
「なるほど…。んで、その後って事は？」

作者
「それは…見て頂いてからのお楽しみってヤツです。ですが、チラッと内容を言えばアウルがミツキに告白をした後…どうなったのか？と言う事ですね？」

ノア
「てぇ！！何にも言ってねぇじゃねぇーか！！」

作者
「まぁ…後は、ノクターンノベルズの方で！！と言う事で」

ノア
「でも！！１８歳以上の人しか見られねぇからな！！あと、修正点やここは違う！！と言うのがあったら連絡くれよな！！ＥＸＡＭ先生！！」

作者
「すぐに直します！！それでは！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　Ｒ－１８場外乱闘！！エピソード１～ｉｆ　ｔｈｅ　ａｆｔｅｒ～！！」

ノア
「テイク…オフ…」

～おまけ～

アウルがミツキに告白しようと2人して出かけている時…

サエグサ家　茶の間

タスラム視点

「なぁ…お前は本当にいいのか？」

茶の間で寛ぐ私に対しノアが話かけてきた。

「何がですが？」

「何が？ってなぁ～お前…アウルの事が好きだったんじゃねぇのか？」

私の答えにノアは、呆れながら主の事を聞いて来た。

「確かに…そうですが…今回は、彼女に主をお譲りしたまでです…」

「なんだそりゃ？」

私の答えにノアは、疑問の声を上げる。

そう…私の疑問…なぜ？今まで嫉妬していたはずのミツキさんに対し…彼女と初対面した時からその考えが変わったのか？…。

それは…彼女なら主を幸せに導いてくれると…そう感じたからだ…。

本来なら私がそれをしたかったのだが…だが…私は、あまりにも主の事を知りすぎた…。と言うより、主の思考に自分自身が何時の間にかその思考が主の考えと近い物になっていたために…主と同じ事を考えていた…。

だが…彼女は…どんな困難があろうと「いつかきっと…」と言う風に考えていた…。

これは、彼女の母親…それにスバル達やギンガの母親であるクイント・ナカジマの影響が大きいとの事…。

その話をユウやユン先生達から聞いて…。

それならば主の幸せのために…今回は、彼女に譲った方がいいと考えたからだ…。

「それについては…秘密という事で…。ですが…もう一言付加えるのなら…主のパートナーとしての座までは譲ってはいませんのでしからず…」

これは…私の意地…。

主とずっと一緒にいる私の…。

「う～ん…言ってる事がさっぱりよくわかんねぇがまっ！！いいか！！さて…テレビでも見るか！」

ノアは、私にまったく理解してはいないようで私がそうならそれで

いいと言った感じでテレビの電源をＯＮにした。

プチッ。

（こんにちは！！情報ライブ！！ヤガミヤです。では…早速参りましょう！！）

「な！！はやてぇ～！！」

（それに…部隊長の横にはリイン曹長…ゲスト席には…なのは隊長にフェイト隊長…それにシグナム…ヴィータ副隊長に…シャマル先生…）

テレビの画面が表示された途端、画面上には、部隊長と始めとした機動六課の主力メンバーがどっかで見たようなお昼の情報番組のパクリ番組を始めていた…。

ピロリロリン！！

（いよいよ！！今日！！告白か！？アウルさんとミツキさん！！）

私とノアの戸惑いをあざ笑うかのように部隊長の後ろにある大きなボードの隠している部分を部隊長がその上のシールを剥がした。

そして、そこから出た文章をリイン曹長が読み上げる…。

（（（（（ええっ～！！））））））

それを聞いたなのは隊長達がわざとらしい反応の声をあげる…。

（これ本当なんか？なのはちゃん…どう思う？）

プチッ！！

「やっぱり…やめとこ…」

（そうですね…。売れ残りの僻みにしか見えませんしね…）

その画面を見ていたノアは、ゲスト席にいるなのは隊長に近づきその感想を求めていた所で突然その電源をＯＦＦにす。

そして、苦笑いをしながら私に話かけてくる。

それに対し私は、その行動に納得しそのテレビの感想を言う…。

（それにしても…いい天気ですねぇ～うまく行くといいのですが…）

「大丈夫だろ？あの２人なら…」

（そうですね…）

私とノアは、外を眺めながらまるで先程の事がなかったかのようにいい結果がでる事を願っていた…。

おしまい…。

その５５（前書き）

管理局本局内　情報検索室

フェイト視点

「閲覧制限がかかっています。それも、所属部隊の部隊長と提督クラスの承認が必要な…」

「なら、はやてと兄さん達にでも頼んだら見られるね？」

「それも…厳しいんじゃないんですか？なんせ、これかけたのリンディ提督達なんですもん」

「なんですって！？」

私とシャーリーは、本局にある情報の閲覧が出来る部屋でファントムや影の守護者…そして、それに対しての母さん達の事を調べている。

そんな中端末を操作しているシャーリーがつい最近報告された「影の守護者」についての最新報告を見つけそれを見ようとした所、私達では解除出来ない閲覧制限がかかっていた事を告げる。

それを聞いた私は、母さんやはやてに頼めばいいと簡単に考えたのだが…。

どうやらそれは、違うらしい…。

私の話にシャーリーは、その制限をかけたのが母さん達らしく私達

が母さん達の事も調べている以上許可をくれない可能性を示唆。

なぜ、そんな事をしているかと言えば…。

この間…ミオさん達から明らかにされたミツキさんの出生の秘密。

そして、独立部隊…ファントム・ナイツのその部隊創設の理由…。

昔から、母さんや兄さん達が裏で何かをやっている事は知っていたしユウに母さん達の話事をあまりいい顔をしない事…それに…初めて地上本部でミツキさんに会った時のギンガのあの行動…。

その全てが、母さん達…もしくはその部下の人達がミツキさんやユウ達に対し何かしているのでは?との推論に達したからだ。

本当なら、はやて達に聞いた方が早いのでは?と思って聞いてみたんだけど、うまい具合に逃げられちゃって…それでシャーリーに強力してもらって自分で調べている。

ちなみにこれは、私的な捜査だけではなくミオちゃんから聞かされた「黄天」の契約者が私達が追っているあの次元犯罪者ジェイル・スカリエッティと行動を共にしてる可能性…。

最初は、黄天の契約者とスカリエッティとのつながりから調べて見たんだけど…。

どうやら、知り合いであることは間違いない。

その昔、一度だけ本局がスカリエッティを追い詰めた時があってその時に彼を助けた大男が名乗った名前…それが「影の守護者」…。

ちなみに今までの本局での解釈は、変身魔法で大男になりすましたミツキさん…もしくは、ミツキさんが誰かに頼んでこれに介入したって事らしい…。

その事について、ミツキさんの当時の供述書によれば当日は、会議に出席していたとのこと。

例の黒いガジェットに記されていた「影の守護者」との文字があったこともあった事からこの問題が再び問題になったようだけど…その報告書にもさっきのと同じ閲覧制限がかかっていた…。

それをかけたのも…母さん達…。

スカリエッティを捕まえるためにも私自身、「影の守護者」やファントム・ナイツ…それに管理局の裏で一体何が起こっているのかを…知る必要がある！…そう思ったから…。

「どうしますか？…これから？」

デスクの上に表示された端末に向って座っていたシャーリーが私のほうを向き声をかけてきた。

「そうだね…もう一度調べ直すしか…」

「またですかぁ～。これ以上どう調べればいいんでかぁ～（泣）」

私の声を聞いたシャーリーは、自分の周りにいくつもの閲制限とかかれた画面を表示させ泣きそうな顔をしながら私に聞いてくる…。

「そ…そうだね…。とりあえず…」

「そっ!!そうだぁ～!!」

シャリーの威圧感に圧倒された私は、どうしようかと悩んでいた。

そうしたら、シャーリーが何かを思いついたらしく端末を開き誰かの番号に連絡を取り出した。

ガチャ…。

(はい…。あっ!!シャーリーさん!?どうしたんですか?)

「ゆ…ユウ!?ってまさかシャーリー!!あなた!!」

「はい!!そのまさかです。ユウ君…ちょ～っとしたお願いがあるんだけど…いいかな?」

シャーリーは、どうやらユウに連絡をとっていたようで彼の顔をが画面に出た途端私は驚きの声を上げた。

そして、シャーリーは、そんな私の声に答えそしてユウにお願いをしだした。

「な…なんですか?…なんだか…すっげぇ～嫌な予感がするんですけど…」

画面に写るユウは、そのシャーリーの満面の笑みを引きつった笑顔で答えつつ詳細な内容を聞こうとしていた。

「それはね…」

シャーリーは、「ニヤッ」と口元から笑みうかべつつ彼に詳細な内容を伝えた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５５…始まります」

その55

フラナガン郊外　とある大富豪の家

ユウ視点

「さぁ！！ついたでぇ！！みんな降りよっか」

「「「「「「は〜い！！」」」」」」

部隊長の大号令と共に俺、アルト、スバル、ティアナ、エリオにキャロ…そして、フェイト隊長がそれぞれにドレスアップしフェイト隊長が用意した超大型リムジンから外にでた。

「すっごぉ〜」

「こんなに大きい家を見るのも初めてです」

「これが、あの鉄仮面の実家だったなんて…」

車から出たスバル、キャロがその正面に立つ大豪邸を見驚きの感想を述べた後アルトがここがあの鉄仮面（ケイン）の実家である事を告げる。

「それにしても、よくパーティがあるなんて事調べたわね？」

車をおりたシャーリーさんが先に降りていた俺に近づき声をかけてきた。

「調べた…と言うより、昔姉貴のデスクにこういったパーティの招

待状がおいてあったのを思い出してミオに聞いてみたんですよ。そしたら、都合よくあるってなもんで…それで俺等も入れるようにしてもらったまでですよ。しかも…余計なもんまでセットになってね」

「だぁ～れが、余計なもんよ！！」

「そうだよ！！私だって色々知りたいんだから！！」

「僕もキャロもスバルさん達と同じです」

「ユウ…（怒）ハンマー…食らっとく？」

「まっ…ウチはみんなの保護者って所やけど（笑）」

俺の声にティアナ、スバル、エリオ、アルトの順でそれに激怒。

そして、最後に部隊長がスバル達と俺とのやり取りを呆れた様子で眺めながら自分がここに来た理由を告げていた。

「それじゃ…中に入る入る前にもう一度確認してしとこっか？まず、フェイトちゃんとシャーリーは中に入ってからパーティを楽しみつつ自分たちが調べているっちゅう事の情報収集。ただし！絶対に深入りしない事！！これは、部隊長であるウチからの命令や！！ここで何かあってもウチ等じゃどうすることも出来へんからな。そして、エリオとキャロは、ウチと。ユウとアルト、それにスバルとティアナは、ミツキが来たら話をする。それについては、ミオちゃんが時間を作ってくれるちゅう話やから自分勝手な事はせぇ～へんでな。これも命令や」

部隊長の声をその場にいた全員が頷く。

そもそもなぜ、俺達がここにいるのか？と言えば…。

シャーリーさんからの通信をうけた俺は、とりあえず詳しい書類とかは俺でも姉貴や部隊長達の許可が必要である内容だったのでその旨を伝えた。

それを聞いたフェイト隊長がそれについては、自分たちで調べるからそういった事が調べられるから何か情報が入ったら教えてほしいって言われれ…。

そして、その後…さっきシャーリーさんに俺が言った通りなんだが…最初にシャーリーさんの通信を受けた場所が悪かった…。

なんせ、俺がスバル達と昼食をとっている時に通信が来たもんで食堂で一緒にいたスバル達にそのお願いが丸聞え…。

俺もその場から移動しようとしたんだが…案の定スバル達に捕まり…そして、俺達が無茶しないようにするための監視役として部隊長がついてきたって訳だ。

なんせ、ここはさっきアルトが言ってた通りケインとミオの実家。

２人の実家は、メイファグループっちゅう管理局が管理する世界の中じゃ５本指に入る巨大企業…。

それで巨大グループの総帥が親でケインはそこの三男坊でミオは、４人兄妹の末っ子…。

そんな未来を約束されたヤツがなんでファントムにいるかはわから

ねぇが、そんなグループの総帥がパーティを開くってんだ…。

もし、そこで何か問題でも起こせば管理局にも相当な影響力を持ってるらしいから最悪の場合…六課がつぶされかねないんだ…そうだ…。

ちなみにこれは、部隊長が言った事ではなくミオが俺達に警告してきたもの。

なんせ、今回のこのパーティ…。

普段の俺達じゃ到底お目にかかれない政界、財界のトップに本局や地上本部のお偉いさん…所謂この世界の行く末を考え決定する事が可能な連中が参加するからそういった中でフェイト隊長や俺達が知りたい事を調べる事自体…管理局の闇の部分に触れかねないためバレたら唯ではすまないし俺達自身ばかりではなくハラオウン提督や姉貴にまで迷惑がかかるかもしれない…とのこと。

今回は、ミオとケインの友人としてこのパーティに参加するって事にはなっているがその条件ってのがこういったパーティの事を知っている人物を最低でも2人はつけその1人が俺達が無茶しないように監視する事って事で一人はフェイト隊長…そして、もう一人監視役って事で部隊長にお願いした訳。

ちなみに、フェイト隊長も自分の居場所を監視役の部隊長がいつでも確認出来るようにと自分の服とそのデバイスのバルディッシュに発信機をつけているくらいの念のいれよう。

まっ…部隊長からすればそれくらいしても落ちつかねぇだろうな…つ～かこのパーティ自体参加するなっていいたいんだろうけど…あ

の人自身も色々と知りたいことがあるらしいからな…。

ちなみに、俺とスバル…それにティアナとアルトはここに今日来るっちゅううちの姉貴とちゃんと話をする…って言う目的…がありエリオとキャロ…と言うか特にエリオがなんでも姉貴と話がしたいって…。

キャロは、それについてきたって言うかヴォルテールと話をしたことを俺達に話した事に責任でも感じてんのか？別に大した事じゃねぇ～のにスバルとアルト…それにティアナのヤツ…。

例の話を聞いてから姉貴とどう向き合えばいいのか？わからない…って…姉貴と連絡をとろうともしようともしない…。

それに…あれ以来姉貴からの連絡もパッタリだし…。

それが返ってキャロのヤツが責任を感じてんだろうが…。

まっ…俺としては、姉貴がどんな事をしているのかが知りてぇしもし、それが姉貴の負担になるような事だったら…。

家族としてそれを見過ごす事は出来ねぇ…。

それに姉貴を司令官の席から引きずり落ろすっちゅう俺の目標のためにも…。

「ほな、いくでぇ～」

「「「はい」」」

俺があれこれ考えてる内に部隊長がみんなに中に入る旨を伝えそれにスバル、アルト、エリオが返事を返し全員そろって移動を開始する。

屋敷内　パーティ会場

アルト視点

「うわぁ～すっ…ご～い…」

「まるで、御伽噺の中に出てくるお城での晩餐会みたいね…」

パーティ会場へと足を運んだ私達は、その会場内に入りその人の多さ…そして、その綺麗な会場に驚きの表情をしていた。

中でもスバルは、目をキラキラと輝かせ驚きの声をあげティアナもまた驚きつつ自分の感想を述べていた。

会場の中は、シャンデリアがとても綺麗でテーブルには、果物や軽食が並んでいた。

そして、ドレスアップした人達がそれぞれ談笑し笑みを浮かべながらなんだか難しい話をしている。

私達は、フェイト隊長とシャーリーさんと別れ部隊長を先頭に周り

をキョロキョロしながらその後に続く。

「ね…ねぇ…ユウ？…本当にここに先輩…くるのかな？…私…なんだか…」

周りをキョロキョロしながら私の前を行くユウに、その事を聞いてみた。

だって…先輩こういう所…確か大がつくくらい…嫌いだったハズだし…。

「必ず来るさ…なんせ、メイファグループの総帥って言やぁ～ファントムにとっちゃ最大のスポンサー様だからなぁ。それにミオの話じゃ、仕事を理由に何度も断ってたんだが今回はぜひとも来てほしいって伝えるようケインとミオに言ってたらしいし…それに…ケインのヤツ…当日の姉貴の予定にそのパーティを変更不可で入れたって言うからな…渋々くるだろうさ…」

私の前を行くユウは、苦笑いをしつつ私の不安に対しこちらを無かないままそれに答えていた。

そう言えば…確かミオちゃんのお父さんの会社って軍需産業…特に魔法を使った様々な兵器の開発…そして、リンカーコアの無い人でも魔導士に対抗出来る兵器…なんかも開発しようとしているって…そして、そのグループの傘下にもそういった会社がたくさんいて…中でもミオちゃんのお父さんである総帥って人は、先輩のその兵器開発のアイディアの大ファンらしく…こういった事で先輩に自分達のアイディアの批評をしてほしいみたい…。

そのお礼って事で、ファントムのスポンサーになってるって…話ら

しいし…。

確か…ファントムで先輩の補佐をしているナリア・アッシュベルトちゃんの話によれば先輩…無茶苦茶ミオちゃん達のお父さんに気に入られてるらしいって話みたいで…。

そのスポンサーの件もファントムにって言うより、先輩個人への応援みたい…。

だから彼に会う度、「管理局とファントムを辞めてウチにこないか？」って言われてて…先輩もうまくはぐらかしてるって言ってたし…。

まぁ…ユウやスバル達からすれば、その方がいいかも知れないし私も…そう思う。

でも…当の先輩は、自分が抜けちゃうと他の隊員達が下手をすれば路頭に迷わせる事になるかもしれないからって…。

だって…ファントムに関係しているって事がわかっただけで管理局の上役はいい顔をしないし…。

そして、その人の立場は、悪くなる一方…。

先輩も…色々とやってるみたいなんだけど…なかなか上手くいってないみたい…

これは、ファントムのその独自性とその部隊が持つ権限を嫌ってって事からでその中でも正規隊員で執務官とか捜査官などそれになるためには資格が必要なものの…その…資格試験すらうけさせてもら

えないって…。

そして、ファントムを辞めた人達なんか…局内に戻っても一生局内での雑用のみだって…それをなんとかしないとって…先輩…悔しそうに言ってたっけ…。

それだから、スバル、ティアナのファントムへの入隊を拒んでいるいるし…私やギンガさんも正規隊員にはさせてもらえてはいない。だって…。私は、ともかくとしてもスバルやティアナはそれぞれに特急隊に執務官といった夢や目標があって…それを先輩は潰すようなことはしたくないって…。

今の事は、私やユン先生から2人に既に話をしていて…2人もその事を知っている。

でも…、2人とも…「何も出来なくて悔しい」って…先輩の気持ちを受け止めながら…泣きそうになりながら…そう…言ってた…。

私も…2人と同じ気持ちで…。

先輩に対しての気持ちと自分の中にある自分の想い…それがぶつかって…。

どう…先輩と向き合っていけばいいのか…私も…スバルも…それにティアナも…わからなくなって…。

あれから…何回もスバルとティアナと…話をして…シャーリーさんからユウにあのお願いがあった事もあって…先輩に直接会って…自分達の気持ちをぶつけてみようって事になって…

ちなみに…ユウの目標ってのは、「先輩を全ての役職から引きずり下ろして…のんびりとノアと一緒にしてもらう事」…だって。

だから、ファントムにもフェラルドさんに頼み込んで入隊したし…執務官補佐みたいな事もやってる。

私も…そうしたいんだけどな…。

あいつと一緒に…。

「おおっ！！」

「き…来たぞ！！急げ！！」

「どうやら…来たみたいだぜ…アルト…スバル…」

私が周りをキョロキョロしながら考え事をしていた所、急に会場全体がザワツキ始めた。

私達の周りにいた男性達が、声をあげ我先にと会場の入り口の方へと向っていく。

それを見たユウは、私とスバルに私達のお目当ての人が来た事を告げた。

そして…。

その人が大勢の人達に囲まれながら…ついにその会場へとその足を踏み入れた。

その５５（後書き）

作者
「さて！！「その５５」ですが如何でしたか？さて…今回のゲストは！？」

ナリア
「皆さん！！初めまして！！！独立部隊ファントム・ナイツ所属で司令官補佐をしていま～す！！！ナリア・アッシュベルト！！１５歳！！管理局での階級は、二等陸士でぇ～す！♪」

作者
「てぇ！？なんでおめぇが出てくるんだよ！！」

作者の横にいきなり登場した肌が褐色で髪の色は、茶色。

その髪をポニーテールに纏めた…と言うかどこぞの武装司書見習のような活発そうな女の子が登場。

それに驚く作者。

ナリア
「だっ…だってぇ～。今回なんてチラッとしか登場してませんしいつ本編に出られるかどうか…」

作者
「…なるほど…。仕方がありませんね…。と言う訳で今回は、今回名前のみの登場でしたナリアさんです！！」

ナリア
「よろしくお願いしま～す♪」

作者
「では、今回はファントムの部隊編成について…ナリアさん!!お願いします」

ナリア
「はい!!それでは、私の方から独立部隊「ファントム・ナイツ」について説明します!!そもそも、ファントム・ナイツ（以下ファントム）は管理局所属となっておりますが本局もしくは地上本部からの命令で動く事はせず、あくまで自分達で考え…そして、自らの責任でその行動をしております。ですので、その活動資金やなんか全て色んな人や企業からの資金援助から成り立っております」

作者
「その最大のスポンサーがミオやケインの父親が経営するいメイファグループって訳になるんですね?」

ナリア
「そうです!!メイファグループとは資金援助だけではなくファントムの隊員達が使うデバイスや次元航行艦の提供…そして、向こうが開発した兵器の評価やアドバイス…技術提供など部隊が創設した当初からのお付き合いをさせていただいております」

作者
「それで?どういった部隊構成なんですか?」

ナリア
「部隊員は、正規隊員とサポーターを含めるとおよそ５００～６０

0人ほどで、正規隊員はその半分を占めております。そして、次元航行艦を3隻所有しその艦ごとの部隊…そして、後方支援の部隊…あわせて4部隊から構成されております。詳しく説明すると…、まずケイン副指令が指揮をする一番艦　ネェイル・ファントムの第一部隊。そして、まだ本編には登場してはおりませんがファントムの参謀で…ご隠居ことミハエル・グリニッヒ提督が指揮をする2番艦…アーク・ビエラの2番隊…。そして、ユン先生が指揮を担当する後方支援部隊…。最後が、我がファントムの姫ことミツキ司令が直接指揮をとる0番艦　ヒナギクの本隊…。と言ったふうな構成です。そして、ユウさんとノアさんは本隊に所属していて…ユウさんは、独自行動の権限がある「ジョーカーオブクラウン略してジョーカー」を持っているって事になります」

作者
「ちなみにユウが持つ「ジョーカー」以外の権限等の名称はありますか？」

ナリア
「他にですか…権限とまではいきませんが、各部隊の指揮官にはその指揮をとるための所謂称号ってのがあって…え～っと…確か…ケイン副指令が「ナイトオブジャック」で…ユン先生が「ルークオブイージス」…ご隠居様が…「キングオブビショップ」そして、姫が「クイーンオブファントム」。後、それ以外にもどこの部隊でも指揮が出来る権限として第一部隊の戦闘指揮官のフェラルドさんが持つ「キングオブポーン」と本隊近衛部隊所属のノアさんが持つ「エースオブガーディアン」…ってとりあえずこんな所ですね？」

作者
「これ以外にありましたら、その都度公開していきます。では、今回はここまで！！」

ナリア
「えっ～！！！もう終わりですかぁ～！！まだ、私のことは何も言ってないじゃないですか！！」

作者
「それは、本編で！って事で！！では、ナリアさん。〆のセリフお願いします」

ナリア
「は～い…それじゃ！！気を取り直して！！次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５６！！テ～イク！！オフッ！！…」

その５６（前書き）

フラナガン郊外　パーティ会場

ミツキ視点

「さて…いきますか…ノア…ナリアちゃん」

「いいか？ナリア？とにかく突っ切るぞ！！」

「あっ！！あれをですか？…は～い…」

ガチャリ。

ザワザワ…。

「サエグサ司令！！少し私の話を！！」

「いや～。お久しぶりです。サエグサ司令」

「ご機嫌うるわしゅう…それで…さっそくなんですが…あっ…」

「すいません！！通して下さい」

「わりぃな。また今度な」

私とフルモード状態のノア…それにファントムでの私の補佐官のナリア・アッシュベルトちゃんの３人がケイン君とミオちゃんのお父さん…タキゾウ・メイファさん主催の晩餐会の会場に到着しその中

に入った途端、私達を多くの人達が取り囲む。

その中を私は、無言のまま通り過ぎそして、ノアとナリアちゃんの2人が私をガードするように奥へと進んでいく。

周りの人達は、私に何か話しを聞いてほしいらしく何度も話かけてくる。

私は、それを完全に無視しながらとにかくその人だかりの出口へとつき進む。

なんで、無視をしてるかと言えば…今私の周りを取り囲んでいる人達って…軍需産業のお偉いさんやデバイスの開発者の人達。

ようは、私に自分達の技術を見てもらってそれを売り込もうって訳。

こういうのもなんなんだけど…私…タキゾウさんにえらい気に入られてるらしくて、私からいい評価をもらったらそれイコール売れる商品って思っているらしく…連中は、そのメイファ財団から売り出すために私に近づいて来ているようで…。

「失礼！そこをどけて下さい」

「あなた方のお話は、後ほど私達の部下がお受け賜りますのでここを通して下さい」

「兄さん達…この方々にそう言っても聞きはしませんよ。ここは私が…」

「ケインお兄様…。そう言いつつデバイスを起動させようとするの

は、お辞め下さいませんか…（汗）」

私達が群集にもみくちゃにされながら先を進んでいた所その先からなんだか聞き覚えのある声がしてきて…。

その声を聞いた人々は、私達から離れ私達が行く先を見つめる。

そこには…

「で…出たぁ～!!メイファ４兄妹…」

「なんですか?ナリア…。人をまるで化け物のような目で見つめて…」

「いっ…いえ…なんでも…」

そこには、ここの家主であるタキゾウさんの息子や娘達が立っていた。

つまり、長男のダンさんに次男のニコルさん…そして3男のケイン君で最後が末っ子のミオちゃん…。

その４人の登場に周りの人達は、彼等の後ろから現れた人達に誘導され、そこには私達と彼等だけが残った。

「ようこそ…ミツキさん…」

「お久しぶりです。ミツキさん」

「お久しぶりです。ダンさんにニコルさん」

ケイン君とナリアちゃんを横目で見つつダンさんとニコルさんが私に話をかけて来た。

私は、それに笑顔で答える。

この2人は、普段…タキゾウさんの下でそれぞれそのグループの会社の経営なんかをしている。

「それにしても、お元気そうで何よりです。ミオから、最近お体の調子があまりよくないと伺っておりましたので」

「ケイン…。お前何かご負担をかけてはいないんだろうな？」

「いえいえ…。そんな事は…。ケイン君には色々とよくやってもらってます」

挨拶を終えた私にダンさんニコルさんが話しかけてくる。

私は、それに笑顔で答え彼等の話に出てきたケイン君は私の横で無言のまま。

「お兄様方…お話の途中ですがそろそろ…」

「そうか…あまり父さんをまたせる訳には、いかないな…それでは、ミツキさん…参りましょうか…お手を…」

「はい…それじゃエスコートをお願いします」

「よろこんで」

私達が話しをしている時、ミオちゃんが時計を見つつダンさん達に声をかける。

それを聞いたニコルさんは、私をタキゾウさんの所までエスコートしてくれるとの事で私はそれをお願いする旨を伝えた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５６…始まります」

その５６

その５６

パーティ会場

スバル視点

「あっ…あれもしかして全部…企業関係者なの？」

「そうみたいだな…」

私達の前に現れたミツ姉は、多くの群集に揉みくちゃにされ…そして、ミオちゃん達と一緒にどこかに行ってしまった。

その光景を見たアルトは、その群集の多さに驚きの声をあげその声にユウ兄が答えていた。

私は、と言えば…。

「もう…手を離してくれても大丈夫です…部隊長…それにティアも…」

「ほんまかぁ～。ついさっきまでウチとティアナで必死で抑えるのがやっとだったのに…」

「そうよ～。あんたさっき入り口で部隊長に言われてた事もう忘れ

てるでしょ～ミツキさんと話をする事については、ミオちゃんがなんとかしてくれるって話なんだから…」

「お願いやから、もうミツキを見つけても突撃しようなんて事しないでな～」

「その癖…まだ治ってねぇのかよ…おめえは？」

「治った…ハズなんだけど…」

「部隊長…いっその事スバルに首輪でもつけたらどうなんですか？」

「それもええなぁ～。スバル…犬みたいやし…」

「2人とも…酷いよ…」

私は、両腕を部隊長とティアにがっちり抑えられその上でのお説教…そして、ユウ兄からも昔の癖が治ってないのか？と聞かれ私は、治っていた事を告げるが…どうやら信じてもらえてはいないらしい…。

そのユウ兄の後にアルトが部隊長に私に首輪をつけるよう提案…。

それを聞いた部隊長は、なんだかそれにノリノリの様子…。

「それにしてもあれが、あの鉄仮面の兄弟とは…驚いたわ…」

「俺も初めて見ましたけど…、よく似てるなぁ～あの3兄弟…」

「それに…ミオちゃんも…なんだか似てると言うか…。よくあの中におれるわな～」

私を抑えつつ部隊長は、さっき見たミオちゃん達のお兄さん達の事を思い出しながら驚きの声をあげそれにユウ兄が続きその声に部隊長がその声を返す。

それにしても…本当に似てた…。

というか…あの副指令って人が3人いるかと思った…。

ミツ姉…。よく見分けがつくなぁ…。

「部隊長…用意出来ましたぁ～！！」

「うしっ！！さぁ…スバル…これつけな…」

「うっ…嘘…マジですか…部隊長…」

私は、そう関心しつつアルトが何時の間にか用意した首輪を見…そして、それを持つ部隊長の声に「ゲッ」とした様子でいた…。

「さぁ…スバル…ワン！！って言ってみい！！」

「わん！！…じゃないですって！！部隊長！！」

首輪を持った部隊長は、ニヤリとした様子で私に近づいてくる…。

「ええでぇ…。今度は、これをつけて言ってなぁ…」

「いーーーーーーーーーーーーーーやーーーーーーーー！！」

部隊長の声に思わず乗ってしまった私は、その大マジな状況に声を上げるが…どうやら無理みたい…。

私の悲しい叫び声は…会場にいる人達の声によってすぐにかきけされ…私は、それ以来…この癖を絶対直そう！！って心に誓うのであった…。

パーティ会場外　ケイン、ミオの自宅内　客間

ノア視点

「そうか…ついに知らせてしまいましたか…。ミオ…その後のフォローはするつもりなんだな…」

「はい…私なりにはそうしようとは…思うのですが…」

「あなた…いくらミオがミツキさんの弟さん達にミツキさんの事をユン先生の協力を得て話をしたとは言えこれはあくまでもミツキさんのご家族の問題…。私達がとやかく言える立場ではありせんのよ」

「べ…別に気になさらないで下さい。タキゾウさん。この事はいずれユウ達には言わなくちゃならない事だったんで…ミオちゃんには返って迷惑をかけちゃいましたから」

「そうだな…。ですが、ケインやミオの時と同様…ミツキさんには迷惑ばかりかけてしまって…申し訳ない」

ダン達に案内されたあたい、ミツキそして、ナリアの3人は、ミオ達の家族と一緒に用意された夕食をしながら談笑をしていた。

そんな中、この間ミオとユン先生が六課で話をした事が話題になり、部屋の上座に座るミオの親父タイキゾウ・メイファがミオにその後のフォローの確認をしそれにミオが答えさらにミオの母ちゃん…リオン・メイファさんがミオの援護に周りその声を聞いたミツキがそれに続き…そして、最後にタキゾウさんがミツキに向って頭を下げていた。

まぁ…。ハッキリ言ってしまえばここの家族…本当にミツキに色々と面倒事を持ってくるんだよな…。

そもそも、ケインがファントムに入隊する事になったのってケインのヤツがその当時の上官に「刺激が足りない」と文句を言い出し…たまたまそこを通りかけたミツキがそこに割って入り…そして、ケインをそのままこっちで引き取る事になったって事だったし…ミオの時だって…ケインに付いて行くっていきなりファントムの本部に管理局に入局前に乗り込んできたあげく…そのまま居座っちまったんだからなぁ…。

本当…2人とも父親に似たせいか相当の頑固もんで…ミツキが折れるしかなかったんだよな…。

でも、いまとなっちゃ…そのときの選択は正しかったと思うし二人とも本当にミツキのフォローをしてくれてるしな。

あたいは、そんなやり取りを見つつ目の前に用意された高級料理のフルコースをナイフとフォークを使いつつ行儀よく食べていた。

本当は、こんな面倒くさい事したくはねぇんだが…でも、いくらあたいでも空気は読んでるつもりだからな…。

面倒でも、ちゃんとしとかねぇと…。

「あ…あの…ノアさん…副指令とそのお兄さん達…よく見分けがつきますねぇ…」

あたいが、静かに食事をしていた所であたいの横にいたナリアがケインとその兄貴達の見分け方について聞いて来た。

「そっかぁ？まぁ…、あの3人は顔は似てるが性格が違うからなぁ…あたいは、顔で見分けると言うより喋り方とか…仕草なんかで見分けてるぞ」

「なるほど…、やさしい感じで喋るのが長男のダンさんで普通に喋るのが次男のニコルさん…そして、毒舌が…」

「まっ…そういうこった」

あたいは、ナリアが小声で話をしてきた事に連中を見分けるあたいなりのコツを教えそれを聞いたナリアはそれをすぐに理解していた。

それにしても…ナリアのヤツ…本当…理解が早いよな…。

元々ナリアは、ファントムの作戦中に保護した中の一人で保護した時からよくミツキに懐いてたんだけど…「自分もミオさん達みたいに姫のお手伝いがしたい」って事でその年の入隊試験をトップで合格してミツキの補佐をしてもらってもう2年にもなる。

とくにかくこいつは、手間がかからなかったしミツキの体の事もすぐに理解して医学の勉強までしてる…。

年下のミオが目標だってさ。

ちなみに…ユウの時は、ギリギリ合格したんだったっけな…。

でも、ケインやミオ…それにナリアにしてもミツキとの出会いよってその才能を開花して…そして、3人共ミツキの事を慕ってくれてる。

本当…ミツキのヤツは、部下や周りの人達に恵まれてるよな…。

これもミツキのその人柄がなせる業なのかもしれねぇが…。

これもミリーやクイントさんのお陰…かな…。

あたいは、そう思いつつミツキを心配そうな顔をしながら話を続けるタケゾウさんの顔を見ながらミツキにとっての2人の母親の事を思い出していた。

「それはそれとして…、ミツキさん。今後のファントムはどう行動される予定なんですか？ハラオウン提督達は、ファントムとの共同戦線の方向に動こうって考えてるみたいのようですが…」

「それは、難しい…と言うかあれだけの事をやらかしておいて、よくそんな事を考えられるなぁ…ってか確かおまえと同期だったよな…あそこの息子…」

「ええ…。あまり自慢はしたくは無いのですが…」

そんな中、ダンがミツキにファントムの今後の事を聞いて来た。

その話を聞いたニコルは、難しい顔をしケインとクロノ・ハラオウン提督が同期である事を思い出しケインに確認。

ケインは、相変わらずの無表情のままその事を肯定。

そして、その事を本当に忘れたいらしく…少しムスッとした表情をした後一言付加えていた。

「今後については、一度相談役やみんなと話し合って決める事になりますが私個人としてはあくまで機動六課や管理局の裏方に徹しつつ「黄天」が出てきたら…。闇に葬りさるまでです…」

ミツキ…。

いいのか?…おめえは…それで…。

真剣な表情をしミツキは、自分個人の意見としてハッキリと言い切った。

「なるほど…。機動六課には、このまま物語の主役になってもらって…ファントムはそれを影から支えると言う事ですな…」

「はい…」

タキゾウさんは、ミツキの話を聞き自分の解釈にしなおしミツキにそれで間違いないか確認。

ミツキもそれに間違いない事告げる。

ミツキ…。

やっぱり、おめえの魔力は嘘はつかねぇな…。

あたいの中に流れ込んでくるミツキの魔力…。

それは、とても悲しい感じがした。

ミツキがタキゾウさん達に言った内容…。

解釈を変えれば、機動六課をオトリにし自分達はその裏で黄天…

つまりは、あいつを…。

本当なら、そうはせずにあたいとミツキだけで全てにケリをつけるつもりだったがこうなった以上…。

スバル達には、スカリエッティの方をなんとかしてもらってそのバックアップをしつつ…って訳だしそのために後何手か手を打っとかねぇと…。

「ミツキさん…あまり、ノアと2人で全てを抱え込もうとしないで下さいね?私はあなたに何もする事は出来ませんが…その変わり私達の息子と娘があなたのお役立ってくれるはずから…」

「そうだな…なんなりと使ってやって下さい。2人ともいいな!!

ケイン、ミオ」

「はい、もちろん」

「お任せ下さい！！お父様！！お母様！！」

「それじゃ、お言葉に甘えて、頼りにさせてもらうわよ」

「「はい！！」」

ミツキのその表情に何かを感じたのか、リオンさんが優しくミツキに語りかけその後にタキゾウさんが続いた。

その声にケインとミオは、ハッキリと答えその一方少し俯いた後ケインとミオに笑顔でその返事に答えていた。

「失礼します。だんな様…ゴニョゴニョ」

「そうか…。ミツキさん、申し訳ないが所要が出来てしまってね。私達はこれで、失礼させていただくよ。ミオ…後の事は頼んだよ。」

「はい。お父様」

「わかりました。タケゾウさん、今日はありがとうございました」

「いやいや、大した事はないそれじゃ」

談笑が続く中ここの屋敷の執事らしき人物がタケゾウさんに近づき何かを耳打ちする。

それを聞いたタケゾウさんは、ニコルさん達の方をミツキにその場を離れる事を告げ後の事は、ミオに任せニコル、ダン、ケインそれにリオンさんと共にその場を後にした。

「ふぅ～…ようやく行ってくれたか…うしっ！！解除っと！！（ボン！！）」

「お疲れ様でした。ノアさん」

あたいは、今までしていたフルモードを解除し元のサイズに戻った。

その声にナリアも、フゥ～っとため息をし緊張を解きあたいに声をかけていた。

「それにしても…毎度毎度…よくこんな固っ苦しい食事がとれたもんだな…」

「そうですか？私とっては、普通なんですが？」

「まぁ…ミオちゃんにとっては、ココが実家だからねぇ…普通なのが当たり前なんだけど…」

あたいの声にミオは、不思議そうな顔をしながらあたいの話を聞き返しそれをミツキがあたいに変わって答えていた。

「あっ！！いっけな～い！！姫ぇ！！お薬の時間、とっくに過ぎてますよ！！」

「そっ…そうだっけ？確か…飲んだ気が…」

「ミツキ…いくら薬が苦手だからってとぼけんなよ…。あたいには、わかるんだからな…」

「うっ…ノア…そういや入たんだっけ?ガックシ…」

「あのな～（イラッ）」

「それじゃ、お冷を持ってきてもらいますね…」

時計を見たナリアは、ミツキに薬を飲む時間がとっくに過ぎてる事を告げる。

「あたいも…ちょっとお手洗いに…」

「それじゃ、私達もここから移動しようか?」

「それなら、休憩室が近くにありますからそちらで合流って事で」

「了解」

「わかりました」

「よしっ!!それじゃ移動開始!!」

それを聞いたミツキは、薬がどうやら飲みたくないらしくあたいの目の前で惚けていたがあたいがそれを阻止。

ミツキがガックリしてるを確認したミオは、水を貰ってくると部屋を後にしようとした所あたいもトイレに行く旨を言いそれを聞いた

ミツキは、みんなで移動しようと提案。
その提案にミオが休憩室で合流する事を提示。
全員合意であたいの声を合図に部屋を後にした。

パーティ会場内　休憩室

エリオ視点

「エリオ君。疲れてない？」

「大丈夫だよ？キャロ」

僕とキャロは、会場内で食事を済ませキャロと一緒に休憩室でフェイトさん達を待っていた。

初めてこういった所に来たからすごく緊張したんだけど、今は大分それにもなれてはきたみたい…。

でも、ちょっと疲れてたみたいでそれをキャロが気にしてくれたようで僕に声をかけてきた。

僕は、それを笑顔で返す。

「あっ！？姫ぇ！～ここですよ～。椅子は、あそこにありますから…ささっ！どうぞ～」

「もう…ナリアちゃんったら…」

「エリオ君…あの人って…」

僕とキャロがそんな話をしていたら休憩室に見覚えのある人と知らない人が入って来て僕等とは反対側の奥の椅子へと進んでいった。

それに気づいたキャロは、僕に確認を取ってきた。

「あれは…確か…」

「エリオ！キャロ！！お待たせ！！」

「お待たせ～♪」

「「フェイトさん！！シャーリーさん！！」」

僕がその人の事を思い出そうとした所でフェイトさんとシャーリーさんが用事を終わらせたらしく僕達と合流してきた。

「それで…どうだったんですか？」

「うん…。今回は、顔見せ程度って考えていたから…ね？シャーリー？」

「ええ、今回は部隊長達に迷惑はかけられませんから…って？フェイトさん…あれ？…」

「あれは…サエグサ…司令…」

合流したフェイトさん達にキャロがその成果を聞く。

キャロのといかけにフェイトさんは、これからだからとつげシャーリーさんにも同意を求める。

その声にシャーリーさんも同意。

そして、シャーリーさんが誰かを見つけたらしくフェイトさんに声をかけそれに対しフェイトさんがそれがユウさんのお姉さんであるミツキ・サエグサさんである事を告げた。

「やっぱり…。えっ…エリオ君!?いったいどこへ?」

フェイトさんから気になっていた人がサエグサ司令である事がわかったキャロは、納得の声をあげる。

「ちょ…ちょっと…ね?」

キャロに呼び止められた僕は、動揺しながらその事をごまかしサエグサ司令の所へ向った。

ミツキ視点

ゴクゴク…。

「にっが~…」

「これで、よしっ!!っと…。あっ…そうだった。姫?ミオさんと

ノアさんなんですけどちょっと野暮用が出来たみたいなんでこっちに来るのが遅れるみたいです」

「まぁ…大方…ノアがミオちゃんにお菓子コーナーに付合ってもらってるんでしょう…？」

休憩室に来た私は、そこにあったお冷でいつも飲んでる苦い薬を飲んでいた。

飲み終わった所で、ナリアちゃんからノアとミオちゃんがこっちに来るのが遅れる事が伝えられた。

私は、その理由を推測しそれをナリアちゃんに言っていた所目の前に男の子が現れた。

「あ…あの…ミツキ・サエグサ司令…ですか？ユウさんのお姉さんの…」

「あなたは…確か…」

「いったい、なんのようですか？司令は、今ご休憩中ですよ！！」

その男の子が私に話し掛けてきた所で横にいたナリアちゃんがその男の子に対しムッとしながらその話に割って入る。

「すっ！！すいません！！ミツキさん！！もう！！エリオったら…先に話をしてくれないとこっちがビックリしちゃうじゃない？」

「あれ？シャーリーじゃない？それに…エリオ…って…事は…」

ナリアちゃんのその険しい態度にシャーリーが慌てながらこっちに来て頭を下げていた。

シャーリーの登場に私が、彼がユウのルームメイトで機動六課のエリオ・モンディアル君である事をシャーリーに確認した。

「はい!!彼が機動六課ライトニング分隊所属のエリオ・モンディアル三等陸士。そして、向こうにいるのがキャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

「初めまして!!サエグサ司令」

「初めまして…でも?どうしてここに?」

シャーリーからモンディアル君とルシエちゃんを紹介された私は、なぜ彼女達がここにいるのか聞いてみた。

「え~…っと…なんでもユウからミオちゃんの実家でパーティがあるみたいだって話があって…みんなで来ませんか?って誘われたんです。それで、みんなで来ちゃったんです」

私の質問にシャーリーは、慌てながら予め用意されたメモ紙を取り出しそれを見ながらその理由を言う。

「そ…そうなんだ…(汗)みんなって事は、ユウ達も来てるって事?」

シャーリーのその嘘ですって言ってるような理由を聞いた私は、それに呆れつつもユウ達も来てるかどうかを確認した。

「はい！！スバルさんもティアナさん…！！」

「それにユウさんにアルトさん…！！」

「お目付け役としてはやても来てますよ？サエグサ司令」

私の質問にモンディアル君が答え、それに続いて彼の後ろから来たルシエちゃんとハラオウン執務官がそれに続いた。

「フェイト・テスサロッサ…ハラオウン…執務官」

ハラオウン執務官の姿をみたナリアちゃんは、ムッとした表情をさらに強める。

「はやてまでって…。やれやれ…いいんですか？こんな所に来ちゃって？リンディ提督に怒られますよ？」

「母は関係ありません。それに、あなたの話を聞いてから…なんだか単なる他人ではなくなりましたので？」

「あの…サエグサ司令…その…お体の方なんですが…細胞の崩壊とか…始まってませんか？」

モンディアル君達の話を聞いた私は、ため息をしつつハラオウン執務官にリンディ提督の事を聞いてみた。

すると、彼女はそれは関係ない事を言いそして、モンディアル君が私の体の事を聞いて来た。

「どうして…そう思うのかな？」

正直…私は、ドキッとしながらその理由を聞いた。

「それは、私の方から…それは、私とエリオは…人造魔導士…なんです。プロジェクトFの…それで、この間ミオさんの方からあなたの事を聞いてから…エリオ…サエグサ司令の事を心配していて…」

「僕の体!!何かに使えませんか!!だって…僕も…フェイトさんに保護される前…僕と同じ人造魔導士の何人もがその…細胞の崩壊を起こして死んでいったのを…見てましたから…それで…もし…そんな事になったら…スバルさん達が…その…」

ハラオウン執務官の説明の後に続いたモンディアル君は、どうやら私の事…と言うより私が最悪の場合スバル達が心配するんじゃないか?って思ってたらしく俯きながらその理由を告げてきた。

「心配してくれてありがとうね?モンディアル君。でも…その気持ちだけ…受け取っておくわ…」

「どうしてですか!!」

「ごめんなさい…。姫のお体は、あなたの体とは違うらしいの…。でも、どう違うのかは、専門家の人に聞かなきゃならないけど…そういう事だからあなたの体の細胞でもどうする事も…」

「そうですか…。エリオ…これで気が済んだ?」

「はい…すいませんでした。シャーリーさん、フェイトさん…」

私のその答えにモンディアル君は、納得していない様子。

その態度にナリアは、態度を軟化させ笑顔でその理由をつげた。

それを聞いたシャーリーが、その答えに納得しつつモンディアル君に納得したかを確認。

どうやら…モンディアル君も納得してくれたみたい…。

「あの～よろしければ、もう少しお話させてもらえませんか？私達…スバルさん達を待ってるだけなんで」

「私達も…ノア達を待ってるだけだから…ナリアもいい？」

「はい！！もちろん！！」

その後、ルシエちゃんからの提案により自分達の待ち人が来るまでの間…彼女達と談笑する事になった。

その５６（後書き）

もう一話続きます

その57（前書き）

パーティ会場内　食事スペース

ティアナ視点

「ちょっとスバル！！少しは行儀よく食べなさいよね」

「ふぇ～！！ふぁっておいひいんらもん（えー！！だって美味しいんだもんとの事）」

私とユウ、それにアルトと部隊長は、ミオさんからの連絡を待ちつつ食事スペースで夕食を取っていた。

先ほどの1件で首輪をつけられるのをなんとか免れたスバルは、用意された料理を自分の前に大量に確保し礼儀作法を完全に無視しながら大きな口にたくさんの料理をほお張り私の話を返してきた。

「それにしても…ミオちゃん…連絡遅ぉないか？」

「まぁ…、あいつも色々とありますからねぇ…なんせこのパーティの主催者側の人間なんで」

「それに…元々こっちからお願いしてますからねぇ…あまり急かす訳にも…」

「そう言えばそうやったわ。なら、もう少し待ってみようか？」

スバル以外の人達は、みんな粗方の食事を終えそれぞれ寛ぎながらミオちゃんからの連絡がない事についての話をしていた。

ちなみに会話順は、部隊長、ユウそしてアルトの順よ。

「あれっ？ユウ？あの子…ナリアちゃんじゃない？」

「ん？ああ…ありゃナリアだな…何やってんだ？あいつ…」

「誰なの？そのナリアって子？」

そんな中アルトが入り口近くでキョロキョロしている肌が褐色で髪の色は、茶色。その髪をポニーテールに纏めた…と言うかどこぞの武装司書見習のような活発そうな女の子を見つけユウに確認をとっていた。

その声に私は、それが誰か確認した。

「ほらっ…姉貴が来た時にノアと一緒に姉貴をガードしていたヤツがいたろ？それがあいつ…ナリア・アッシュベルト。ファントムでの姉貴の補佐官をしてるヤツさ」

「お～い！！ナリアちゃ～ん！！」

「あっ！！アルトさんにユウさん！！」

私達にユウがその子の事を説明している間にアルトは、彼女に近づきながら彼女に声をかけていた。

自分と同じくらいの歳の子が…ミツキさんのファントムでの補佐官…。

ユウの言葉を聞き、アルトと会話をするその子を見ながら…その光景に私とスバルは、なんだか複雑な想いをしていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５７…始まります」

その57

その５７

パーティ会場内　食事スペース

ナリア視点

「初めまして!!本局所属　第１３独立部隊「ファントム・ナイツ
司令補佐件　零番艦　ひなぎく艦長のナリア・アッシュベルトです!!」

「その若さで次元航行艦の艦長さんとは…すごいなぁ…」

「艦長と言っても実際の運用は、姫が行ってますので私はあくまでその補佐役です」

アルトさんに声をかけられた私は、そこでユウさんと機動六課の皆さんと会っていた。

「それにしても、なんでここに来たんだ?ナリア?お前…確かこういう所で姉貴から離れちゃ確かまずいんじゃ…」

それぞれの自己紹介を終えた所で、ユウさんから私がなぜここに来たのかその理由を聞かれた。

「それについては、本当ならまずいんですけど今はミオさんが姫の

側に入てもらえてるし…それに他の六課の皆さんもいてもらっているので…その変は大丈夫なんです。それで…皆さんは、ノアさん？見てませんか？」

「いや…見てねぇが…」

「ウチも見とらんなぁ～」

「そうですか…まいったなぁ～」

私は、ユウさんにここに来ても大丈夫な理由を告げノアさんを見てないか確認した。

私の問いかけにユウさんと八神部隊長は、見てないと言いそれを聞いた私は頭をかきながら困惑した表情をしていた。

「いったい、何がまいったなの？」

「あっ…それは、なんでも姫の事でミオさんが何か企みがあるみたいでそれにノアさんも参加してもらいたいらしく…私が探しているんですが…」

「へぇ～…そうなんだ…」

アルトさんに困っている理由を確認された私は、その理由を告げる。

それを聞いた皆さんは、なんだか苦笑いをしながら私の話を聞いていた。

「ねぇ！ティア！？アルト！？私達も一緒に探そうよ！」

「うん！そうだね。スバル！」

「それもそうね…。部隊長…いいですか？」

「あっ…あの！！そこまで皆さんにご迷惑をかける訳には…」

私の話を聞いたナカジマ二士は、その横にいたランスターニ士にノアさんを私と一緒に探そうと提案。

それを聞いたアルトさんとランスターニ士は、すぐさま同意。

八神部隊長に許可を取ろうとしていた。

その行動に私は、慌てつつ両手をブンブン振りながらそこまでしなくてもいい事を言う。

「う～ん…ええよ。なら、ウチ等はミツキの所に行っとるからノアを見つけたらそっちに来てな？」

「「「はい」」」

「それじゃ、行こう！！ナリアちゃん」

「わかりました」

部隊長の答えに3人は、返事をしそして、アルトさんが私の腕を引っ張り会場を後にした。

パーティ会場内　廊下

アルト視点

「ここにもいない…」

「これで、パーティ会場の大方の部屋は回りましたけど…」

「念話にも答えてくれませんし…」

「答えない…と言うより無視してるわね？仕方がない…最後の手段よ！！」

「最後の手段？」

「ティア…それってまさか…」

パーティ会場にある色んな部屋をある程度回った私達は、いまだに見つからないノアの捜索を諦めかけていた。

部屋の中を見た私が、ノアが入ない旨を告げそれに続いてスバルが粗方回った事を言う。

そして、ナリアちゃんが念話にも答えてくれない事を言い最後にティアが最後の手段を使うと言い出しそれにナリアが疑問の声を上げスバルが嫌な予感を感じながらティアナに聞き返す。

「そう…そのまさかよ…スバル！！あんたの出番よ！！」

「えっーーーーーーーーーーーー！！」

「何嫌がってるのよ！！あんたの鼻とその直感でノアを見つけないと私たちの目的が果たせないのよ！！」

「わかった！！わかった！！やるから！！ギブッ！！ギブッ！！」

スバルの話にティアナは、私がその最後の手段だと言い出した。

その声にスバルは、拒否をするがティアナはスバルにヘッドロックをかけながら強引に私を説得。

スバルは、ギブアップを宣言しながらティアナの指示に従う事にしたみたい…。

「いったい…何が始まるんですか？」

「まぁ…見てなさいって」

パンパン！！

「よしっ！！いっくぞーーーーーーーーー！！クンクン…クンクン…」

ナリアちゃんは、これから何が起きるのか疑問の声を上げるがティアナがそれを征する。

そして、私がみんなの前にでて両頬を自分の手で叩き気合を入れて周囲のにおいをかぎ出した。

「まさか…匂いでノアさんを追ってわけじゃ…犬じゃあるまいし…」

「匂い…と言うかあの子独特の直感ってヤツよ?私には、よくわからないんだけど…スバルだけが感じる匂いってのがあるみたいなのよ?それで、何度もミツキさんの発作や薬を飲んでないとか…それに、かくれんぼでユウを見つけたりとかしてたみたいよ?」

「ゆ…ユウさんをですかぁー!!」

ティアナの説明にナリアちゃんが驚きの声を上げた。

なんでかと言えば…ユウって潜入捜査が得意って言うくらい隠れたりコソコソ調べたりするのが得意なのよ…。

それだから、かくれんぼなんかやるといっつも最後まで見つからないのよ…。

私も…遊びでユウとかくれんぼやった事あるんだけど…本当に!!見つからないって言うか誰も隠れそうにない所に隠れてるもんだから…それをあれで見つけちゃうって言うんだから…驚くのも仕方がないよね…。

そんな中私達は、匂いを嗅ぎつつ進むスバルの後に続く。

「クンクン…クンクン…あっーーー!!いったーーーーーーーーーーー!!」

そして、それから5分くらいたったのかな?

急にスバルが大きな声をあげ突如ダッシュ!!

それに続く私達…。

それにしても…本当に犬みたい…って言うか犬よね…あれ…。

バタン!!

「うんめぇ〜!!!」

スバルがある部屋のドアをあけた所、その部屋に用意されていた大量のケーキの中からノアの声が聞えた。

「ノア!!何やってるのよ!!」

「もう!!探したんだから〜!!」

「あっ!!悪りぃ〜悪りぃ〜。トイレの帰りにミオの母ちゃんにバッタリ会ってな?日ごろのお礼って事でこ〜んなにケーキを食べていいって言われてな?」

「それで、夢中になって食べてたんだ…」

「スバルも食うか?」

「「そうじゃなくってぇ〜!!」」

ノアを見つけた私とスバルは、ノアに文句を言いそれに対し彼女は、誤りつつなんでここにいるのかその理由を告げスバルにその辺にあったケーキを食べないか?と誘ってきた。

それに私とスバルは、大きな声を上げる。

ティアナ視点

「なんだか…うらやましいな…」

「えっ…？どうして？」

スバルとアルト、それにノアのやり取りを少し離れた所で見ていたナリアはなんだか寂しそうな顔をしながら小声で声を漏らしていた。

それを聞いた私は、その理由を聞いてみた。

私からすれば、ミツキさんの補佐をやってる彼女の方がうらやましいんだけど…と思いながら…。

「あっ！！聞えちゃいました？すいません。私…小さい頃に家族を亡くしてそれ以来一人ぼっちで…犯罪組織が支配していた町で働かされてた時にファントムに保護されて…。それで、そのあと色々あってファントムに入ったんですけど…あんなにノアさんが笑顔なの初めてみたんです。それで…家族っていいな…って…ご…ごめんなさい！なんだか場違いな事を言って…」

「いいわよ。私もあなたと同じで天蓋孤独の身だから。それで、ファントムに入る時のノアってああじゃないの？」

ナリアからその理由を聞いた私は、その理由に戸惑いつつも自分も同じだと告げノアの事を聞いてみた。

「そうですね…。いつもあんなにニコニコしてはいない…と言うかノアさんって私の直属の上司なんです。ですから、ああいう付き合いはあまり出来なくって…姫は、色々と気を使ってはくれますが…それと…副指令がその辺の所がとても厳しくい…なかなかああ言う事は…」

なるほど…私達となのはさんみたいな関係なんだ…。

それに…私とも…。

それじゃ、ああも言いたくなるわね…。

ナリアの話を聞いた私は、なんだか急に彼女に親近感を覚えた。

そして、スバルとアルトがノアに説教をしている間彼女と色々と話をし始めた。

「そうなんですか…。ファントムに…」

「ええ…でも、ミツキさんはそれに反対してて…」

そんな中私は、ナリアに自分とスバルが想っている事をナリアに相談してみた。

「私も…それは辞めといた方が言いと思います。だって…アルトさんと先生が言ってた事って本当なんです。それに…」

「それに？」

「姫…いくつか夢があって…その中のひとつが自分の家族の中に執

務官志望の子と特急隊志望の子がいて…その2人が自分達の志望がかなったら…その2人と写真を取りたいんですって。その子達の制服姿と一緒に」

「えっ…それって…」

ナリアの答えに一瞬ムスッとしたが、その後のミツキさんの夢の事を聞いて…驚きの声をだした。

「多分…それって、ティアナさんとスバルさんの事だと思います。それに、機動六課の話がなかったら…姫…2人を自分の所で育てるつもりだったみたいです。でも、機動六課の話があってそっちの方が2人のためにいいって自ら身を引いたんです。もちらん、１０８部隊に…ですけど。なんで、ファントムじゃないかって言えば…ファントムにも入るんです。あなたと同じ執務官志望の人…。でも、その人達は、試験すら受けさせてもらえないんです。ですから、もしファントムにかかわりたいなら…ティアナさんの場合、まずは執務官…もしくは、執務官補佐になってから…でも、執務官になって…姫と写真ととってからにの方がうまくいきますよ?でも、仕事の方はかなりきつくなりますけど…」

「そうだったんだ…。私…そんな事も知らないで…」

ナリアの話を聞いた私は、ミツキさんの気持ちを知らず自分勝手な事ばかり言ってた事を後悔していた。

「そんな事はねぇぞ…ティアナ。ファントム自体色々な所から嫌われてるからなぁ～ミツキの色々と頑張ってるだが…それも中々な…それに今の話自体ファントムでも知ってるヤツはすくねぇし」

「そうですよ～。姫…いっつも言ってましたよ～。自分の家族の子2人とよく面倒を見ている後輩の子がいて、その子達は、絶対に自分の夢や目標をかなえるから私も負けてられないって」

「み…ミツ姉…よ～し！！ティア！！」

「そうね！！こんな所でションボリなんか出来ないわよ！！スバル！！アルト！！」

「そうよ！！私も先輩と写真とるぞ～！！」

ノアとナリアの話私とスバル、それにアルトは、今まで感じていたモヤモヤを吹き飛ばしケーキをまだ食べたがっているノアを引き連れミツキさん達がいる休憩室へと戻っていった。

「そういやナリア…今の事って…確かミツキから2人には恥ずかしいから言うなって言われてたんじゃ…」

「そ…そうだった…み…皆さん！！今の事はくれぐれも姫には内緒で！！」

「どうする～ティアナ…」

「そうねぇ～どうしよっかぁ～」

「そんな～！！お願いしますぅ～！！」

休憩室に戻る最中、ノアがナリアにさっきの事について思い出したかのような声で話かけてた。

それを聞いたナリアは、慌てながら私達に今の事は内緒にしてほしいと懇願した。

だが、アルトはニヤニヤしつならが私にどうしようか聞いてくる。

それに対し私もそれに乗っかりニヤニヤしながら悩んでるフリをした。

その対応にナリアは、涙目になりながら私達にお願いを繰り返すのであった。

パーティ会場内　休憩室

はやて視点

「そうか…なら、もう大丈夫やな…あの2人…」

「ええ…。あれから、ナリアちゃんとどうやら意気投合したみたいで…（笑）」

スバル達が休憩室にノアを連れて現れ今ミツキとなんだかニコニコしながら話をしとる。

それを見たウチは、さっきまで複雑な顔しとったのにそれがこっちに来たら笑顔で…それもナリアちゃんと一緒にミツキと話をしとった。

そのいきなりの変化に驚いたウチは、アルトを呼んでその理由を聞いた。

アルトからノアを見つけた時の事を聞かされたウチは、その理由に納得しホッと胸をなでおろしそれを見たアルトがさらに説明を続けていた。

「この中に…私達がほしがってた情報が…」

「はい…これは、ファントムで持っている黄天と管理局の裏事情を纏めたものです」

「これは、姉貴とミオで集めた物だが悪いが姉貴関係の物は削除させてもらっている。それについては、フェイト隊長達の範ちゅう外だからなぁ～」

「それは、問題ないよ…。私もあまり管理局の裏事情やミツキさんの事を深くまで突っ込むつもりはないから…」

ウチの横では、フェイトちゃんとシャーリーそれにユウとミオちゃんがフェイトちゃんがほしがってた情報をファイルにまとめた物をユウ達がフェイトちゃんに渡しとった。

どうやら、フェイトちゃん…ウチ等がここにくるまでにミツキといろいろと話をしとったらしい…。

そのフェイトちゃんの熱意にミツキが折れてあくまで今回の事件関係の事だけちゅう事で、あのファイルをフェイトちゃんに渡すようミオちゃんとユウに支持したいみたいやね…。

渡されたフェイトちゃんもどうやら、ミツキの言いたいことがわかっとるらしくミオちゃん達が言う前に自分から管理局の裏側とかには手ぇ～だされんって言っとっるわ。

ちなみに、今の会話順はシャーリーにミオちゃん、ユウにフェイトちゃんの順やで。

ちなみにこれには、ミツキもウチも手を出しとらん。

なんで管理局の裏側に手をだされんかと言えば、これについては、ウチ等側ではリンディさん。

ミツキ側だとご隠居ちゅう人がそれぞれ独自に調べとってそれぞれ余計な事はするなって言われとるや。

ミツキは、フェイトちゃんにそこ等辺の事を説明しとったみたいやし…。

ウチ等がここにきたときにもミツキから、フェイトちゃん達と話してたとこの説明があったからウチはこれを知ってるんやけど。

ちなみにデータが入ったディスクは、ミツキに頼まれたユウが用意したんやと。

（はやてちゃ～ん！！フェイトちゃん連れて早く帰ってきぇ～ーーーーーーーー！！！！）

（な…なのはちゃん？いったいどうしたん？）

ウチがみんなを見ながら事情説明をしていた所、なのはちゃんからウチに念話が入ってきた。

（ヴィヴィオが…泣き止まないのよ～だからー！！）

（なんや…そんな事か…まぁ…こっちは、もうちょいかかるから頑張ってな？なのはママ（笑））

（そんなー－－－－－－－－－－－－！！はや…）

なのはちゃんの話を聞いたウチは、泣き言を言うエースオブエースとの念話を切りミツキとスバル達の微笑ましい光景を眺めていた…。

「よかったな…ミツキ…」

ウチは、そんな事を呟きながら自分もスバル達のように彼女の事をしっかりと受け止める事を心の中でそう決意していた。

その57（後書き）

感想待ってます！！

特別編　前編　「ダグオン再び…」（前書き）

フラナガン市外　機動六課隊舎内　廊下

ユウ視点

「はやてぇ～!!いったいどこに行こうってんだよ?」

「何言ってんよ!!ヴィータ!!海鳴に決まってるやないか!!私がおらんとあの力君が何しだすかわからんやろ!!!」

「だから、その力君って誰だよ!?」

隊舎内の廊下に響き渡る部隊長とヴィータ副隊長の怒号が響き渡る。

その声を聞いた六課の隊員達は、その光景を不思議そうな顔で見ていた。

なんせ、外に出ようとする部隊長をヴィータ副隊長が必死しなって止めてるんだから…。

俺がそこを通りかかった時、それを見ていたティアナに声をかけた。

「おい、ティアナ?いったい連中何やってるんだ?」

「いや…私にも…よくわからないんだけど…」

朝っぱら始まったこの光景に俺の声を聞いたティアナも呆然しつつ

俺の話を返してきた。

「部隊長？いったいどうしたんですか？こんな朝っぱらから？」

「部隊長？私がそんな役職にいつついたんや？あるとすれば、それは八神組の組長や！！それにあんた誰や！？」

「八神組？なんだそりゃ？」

ティアナの話を聞いた俺は、部隊長に声をかける。

それを聞いた部隊長は、俺をまったく知らない様子で俺の話に答えそれを聞いた俺は、聞いたこともない組織らしき名前に疑問の声をあげる。

「何っ！！八神組を知らんって！！何言ってのや？八神組は、平和を守るための私の仲間達や！！でも…力君とか…色々とやり過ぎる事もあるんやけど…」

部隊長は、俺の話にその八神組はなんぞや？というのを怒り口調のまま言うがその途中からいきなりトーンダウンした。

「力…？なぁ？その力って南力の事か？」

「そうやけど…それがいったい…？」

「誰なのよ？その南力って？」

部隊長の話から聞き覚えのある名前が出てきた俺は、それがその事と違わないか部隊長に確認。

その声に部隊長は、間違いない事を告げそのやり取りを聞いたティアナがその人物が誰なのか確認してきた。

「ほらっ？前にあっただろ？ミッドで起こった連続爆破事件？南力ってヤツはその爆破事件の…」

「すいません！！ウチの力君がまた何かやらかしました？それともまさか…ついに犯罪に…あかん！！私のせいや～！！私がちゃんとあいつの暴走を止める事が出来れば～！！」

俺の話を聞いた部隊長は、ヴィータ副隊長に抵抗する事やめいきなり俺に誤りだし今度は頭を抱え喚き出した。

「いや…そう言う訳じゃ…。とりあえず、ここじゃなんですから…」

錯乱している部隊長に俺は、呆れつつも部隊長を宥めつつその場を後にした。

機動六課　医務室

「んで…なんで、ココで…私は、雁字搦めになってるんや？」

「そりゃ、このままじゃ部隊長…こっちの話を聞いてくれそうにないですし…あっ…その前にここ…恐らく部隊長が知ってるミッドじゃないんですよ？それで、一応身体検査をって…。まぁ…話は、ちゃんとしますから検査を受けながらって事で…」

医務室に運ばれた部隊長は、検査台の上にバインドで固定された上

シャマル先生が検査に必要な機械をいじっているのを見て俺にその事情を聞いて来た。

それに俺は、素直に答えそれを聞いた部隊長は、仏頂面をしながらその答えを返す。

「つまり…あんたにとったら一石二鳥って訳か？」

「いやいや…一石二鳥と言うよりお互いにこの状況をまずは整理しませんか？って事ですかね？そのために俺と話をしつつ自分の体に何か起こっていないか？一緒に確認しませんか？」

「なるほど…あんた…口の方は達者なんややな…なら…このバインド…外してもらえへんやろうか？」

部隊長の声に俺は、落着いた様子でその声に答える。

それを聞いた部隊長は、俺の声に納得しつつもバインドを解く様言ってきた。

「そりゃあ、俺だって外したいのは山々なんですがそうすると部隊長…なんだかんだやってここを逃げ出す気でしょう？つ～か恐らくまずは、俺とシャマル先生を魔法かなんかでぶっ飛ばしてその後ここの壁をぶち抜くつもりなんでしょう？それと…いい加減…その…魔力貯溜めるの…辞めてくれません？」

「（ギクッ！！）な…なんでそう思うのや？」

俺の声にギクリとしながらそれを聞き変えす。

「いやなに…俺の周りにもよくいるんですよ?今の部隊長みたいな…まるでペテン師みたいなヤツをね?そいつのお蔭で今じゃ相当慎重にもなりましたけど…」

俺は、過去にあった事…そしてその後…俺がそいつのお蔭でどんな目に会ったか…その…恨みを込めながらその話をしていた。

俺の顔を見た部隊長は、その顔に怯え…その後俺の言う事を聞いてくれた。

ミッド市外

ナリア視点

「クシュン!クシュン!」

「姫ぇ?もしかして風邪?ですか?」

今日休日であった私は、同じく本日休日中の姫と一緒にウインドウショッピングをしていた。

そんな中、街中を歩いていた私の横で姫がいきなりクシャミを2回しその様子を見た私は、心配になり声をかける。

「いや…そういう訳じゃないとは思うんだけど…多分…ユウかヴァイス辺りがまた私の悪い噂でもしてるんじゃない?」

「ま〜さかぁ?」

私のその声に姫は呆れつつ私の話に答えそれを聞いた私は疑問の声をあげていた。

そんな中…私たちがちょうどとある公園の入り口にさしかかった頃…。

「う…ううっ…」

「おいっ!!しっかりしろ!!楓!!」

「しっかりしな!気を確かにするんだ!!」

「姫!?あれっ!?」

「あの顔…どっかで…ちょっと行って見よう?」

公園の中ではベンチに横になっている女性に対しその横で男女2人が心配そうに声をかけていた。

その声に気が付いた私は、すぐさま姫に声をかけその声に気づいた姫はその3人組みに対しなんだか見覚えがあるみたいな事をいいながらすぐにその3人組の元へ行く事を告げた。

「どうしましたか!!」

「あっ…。急に楓のヤツが…」

「あっ!!あなたは!!」

「もしかして…力君?!!それに飛鳥さんに楓さん!?なんであんた達がここにいるのよ!!」

私がその男の人に声をかけた所、こちらを向いたその男の人がその事情を説明…そして、女の人が姫の顔を見た途端驚きの声を上げそして、姫もまた驚きの声を上げていた。

「姫…この人達…知り合いなんですか?」

「詳しくは後!!とりあえず…楓さん?大丈夫?」

「あっ…ミツキさん…その…」

「大丈夫!!しっかりして!!」

「楓ぇ!!しっかりしろ!!」

私が姫に対しこの人達との関係を聞くが、それに対し姫はその事よりもまずは、ベンチに寝ている人の方を優先させ私の話は後回しにされた。

そして、姫はそのベンチに横になっている女性に声をかけその声にその女性は弱々しく答えそれを聞いた男女二人組みは心配そうな声をあげる。

「しっかりしてください!!気を確かに!!」

その声に私も続く…。

そしたら…。

「あの…すいませんが…何か…食べさせて下さい…もう…雑草なんて…嫌だ…」

えっ…？

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～特別編　前編…始ります…」

特別編　前編　「ダグオン再び…」

特別編前編　「ダグオン再び…」

ミッド郊外　サエグサ家

ミツキ視点

「いや～!!すいません!!助かりました～!!」

「困った時はお互い様って言うでしょ?ささっ!じゃんじゃん食べて!!」

「まだまだ、たくさんありますよ!!」

「それで味の方はどう?」

「とっても美味しいです」

「なら、よかった」

公園で倒れていた楓さん達を保護した私は、自分家につれていき急遽用意した食事を彼等に食べてもらっている。

私は、台所から顔を出し彼等の様子を見ながら料理を作っていてそれをナリアに頼んで運んでもらっていて私の料理の味に彼等もどうやら満足してもらってるみたい…。

そうそう、さっきの会話順なんだけど、最初が力君で次が私…その後がナリアに私で最後が飛鳥さんに私…かな？

「それにしても…5日間も雑草のみで生活してたんですか？」

「そうなんですよー！！それも全てこのバカ（力の事）せいで！！」

「いくらなんでもこっちじゃ向こうのお金が使えないなんて思わなくって…ぐべぇ～」

ナリアの質問に飛鳥さんは涙目になりながらその横にいた力君の首をしめそれに対し力君はどうやら向こうとこっちの通貨単位が違う事を、どうやら知らなかったらしく…と言うよりその事をこっちに来てから知ったらしく…その事を言いながら飛鳥さんに首を締められ苦しそうな声を上げる。

「ごちそうさまでした…」

「あれ？もういいの？」

力君と飛鳥さんのそんなやり取りの横で楓さんは静かに箸を置き食事を終えようとしていた。

「はい…。なんだかもうお腹一杯で…」

私の声に楓さんは、テレながらお腹をさすりお腹一杯の様子を私にみせた。

「本当かよ～？いっつももっと沢山食ってるくせに～」

「ちょちょ…ちょっと!!何言ってんのよ!?（つ～か!!少しは、相手に気を使えこのバカ!!）」

「ば…バカとはなんだ!!せっかくさっきまで心配してやったのに!!それに!!この五日間…いったい誰がお前等の食事の面倒をみてたやってたんだ!!」

「「あれのどこが食事じゃーーーーーーーー!!」」

バキドカゴス…。

力君の声を聞いた楓さんは、その声に動揺した様子で返す。

でも…どうやらそれは、表向きでその裏では力君に対し念話か何かで何かを言ってたらしく…そっちの方に反応した力君は、楓さんに文句を言い出した。

そして、その声に今度は飛鳥さんだけではなく楓さんまでも加わり力君をその場でボコボコにしていた。

「なんか…すごい人達ですね…」

「そうね…」

私とナリアは、その光景を唖然としながら見つめていた。

すると…。

ぐぅーーーーーーーーーーーー。

「ほら…やっぱり腹減ってんじゃねぇか…」

「し…しまった!!このバカなお爺ちゃん（力の事）に余計な力を使ったもんだから…もうお腹が…」

「あんた…向こうさんの事を気を使うのはいいけどこのままじゃあんたの方が持たないよ?」

「で!!ですが…」

さっきの音は、どうやら楓さんの腹の虫がなったみたいで2人にボコボコにされていた力君は、その音にまるで知ってたかのような態度でだったがさっきのダメージがまだ残っているらしく弱々しい声を出す。

それに対し楓さんは、余計な体力を使ったみたいでその場にへたり込んだ。

楓さんのその態度を見かねた飛鳥さんは、彼女に対し心配しつつも注意するような声で彼女の事を説得するが当の楓さんはどうやら納得していないみたい…。

「たっだいま〜!!」

「今帰りました〜!!」

「お帰り〜!!ギンガ!!ノア!!こっちにいるから!今日は、こっちで食事にして〜!!」

「は〜い!!」

「わかった!!今行く!!」

「この声…」

「ぎ…ギンガだとぉ〜!!」

そんなやり取りをしている最中ドアの向こうからノアとギンガの声が聞えてきた。

その声に私は、こっちで食事をとるよう大きな声でそれを伝え二人はその声を了承。

その私とギンガ達のやり取りを聞いた飛鳥さんと力君は、なんだか驚いたような声をあげていた。

「ちょ…ちょっと聞いてもいいですか?今…さっきの声ってこっちの世界のギンガ・ナカジマさんですよね?」

「そうよ?それがどうしたのよ?」

「いや…その…いったい…どのような関係なんですか?」

同じくそのやり取りを聞いた楓さんは、戸惑いつつ私に対しさっきの声の一人がギンガである事を確認しその関係性を聞いて来た。

「ああ…。そういや言ってなかったわよね?ウチの隣って実はギンガ達の家なの?それで昔っからよく私がギンガ達の食事の世話とかしてたのよ」

「そ…そうなんですか…」

「そっ！だから、もし楓さんがご飯を沢山食べる人でも問題ないって事よ」

楓さんの質問に対し私は、その声に答えそれを聞いた楓さんは、なんだかほっとした。

それを見た私は、楓さんが大食漢でも大丈夫とウインクをしながらそれに答えた。

「ち…ちなみに…どれくらいまでなら大丈夫なんですか？」

私の答えに楓さんは、期待を持ちつつそして、慎重になりながら私に再度質問してきた。

「そうね…。今までの最高が…スバルとギンガがいっつも食べてる量×２０人分って所かしら…」

「す！！スバルさんとギンガさん×２０人分！！」

「それって確か姫はウチの隊員全員分の夕食の事でしたよね？もしかして…あの時の？」

「そうよ？」

楓さんの問いかけに私は、それをサラッと答え楓さんはその答えに驚いていた。

その声にナリアは、私にそれがいつの事なのか確認してきたため私は、そうだと答えた。

「あの～あの時って？」

「あの時って言うのは、あたい達が所属している部隊の忘年会があって…その時…頼んどいたオードブルが届かなかったんだよ。それで、急遽ミツキがそこにいた隊員全員分の食事をたった一人で準備したって訳さ」

「あっ！ノア。お帰り～」

「たっだいま～！！って！！なんでお前等がここにいるんだよ！！」

質問を続ける楓さんは、次第に希望に満ち溢れた顔つきになり私とナリアの話が何のことか聞いてきた。

それに対しタイミングよく部屋に入ってきたノアがそれに答えそれに気づいた私が声をかける。

ノアは、それに答えつつ一緒にいた力君達に気がつき驚きの声をあげた。

「まぁ…カクカク云々あったのよ。と言う訳だから大抵の大食漢には対応できるけど…どう？楓さん？本当の意味でのお腹一杯にならない？私の料理でよかったら？」

「い…いいんですかーー！！（泣）」

「いいわよ！！私も久しぶりに本気になれそうだから」

「わっかりました！！それじゃ…よろしくお願いします！！」

「はい…。お願いされました（笑）」

私は、ノアに事の次第を説明しつつ楓さんに沢山食べてもいい事を告げる。

それを聞いた楓さんは、涙を流しつつ私の手を掴みそれが本当なのか確認してきた。

それを聞いた私は、久しぶりに本気モードになれそうなその相手をみつつそれが本当である事をつげそれを聞いた楓さんもまたまるで私の挑戦を受けるかのように真剣な顔つきになり私の話を了承。

そして、改めて楓さんが私に頼んできたのでそれに対し私は笑顔で答えた。

ノア視点

パクパク…ムシャムシャ…ゴクゴク…。

「ん～！！美味しい！！あっ…あのおかわり…いいですか？」

「あっ…は～い！！さっきと同じ特盛りでいいですか？」

「はい！！」

「これで…２０杯突破…かよ」

「まさか…本当に私より食べるなんて…」

あたいとギンガの目の前では、楓がうれしそうな顔をしながら用意されている食事を次々と片手に丼飯を持ちながら平らげていく。

そして、申し訳なさそうな顔をしながら持っていた丼飯のおかわりを要求。

それを聞いたナリアは、ご飯の量をさっきと同じでいいのかを聞きそれを聞いた楓は満面の笑みで答える。

それを見ていたあたいは、その光景が既に２０回以上繰り返されている事に驚きギンガもまた自分より食べる人を恐らく初めて見たらしく楓の姿に驚いていた。

「あふれる勇気～タラリラ～ララ～♪」

「あの…楓に平気な顔してついていってる…」

「しかも…歌いながら…ってすげぇ～な。ミツキさん」

台所の向こうでは、ミツキはどっかで聞いたような歌を鼻歌で歌いながら次々と料理を用意していた。

それを見た飛鳥と力は、今まで何度も料理人が倒れる光景を見たのであろう。

平気な顔して楓の料理を次々と用意するミツキに対し驚きの声をあげていた。

「それにしても…お前達…なんでこっちの世界に来てんだ?」

「それは…。つい…一週間前…宇宙人の襲撃を受けてその宇宙人自体は撃退したんだが…次の日になって…」

「いきなり、はやての人格が変わっちまったんだよ?それで色々聞いてみたらどうやらこっちの…」

ドタドタドタドタ…。

バン!!!

「おりゃーーーーーーーーーーーー!!!」

ドカッ!!

「んぎゃーーーーーーーーーーーー!!」

「な!?なんだ!?」

「ふぁ…ふぁやて…?(は…はやて?)」

楓以外ある程度落ちついた所であたいが、力達がこっちに来た理由について聞いた所を聞いてみた。

すると飛鳥、力の順でその訳を言ってた途中…。

いきなりドアが開きそこからいきなりはやてが現れ力に向ってドロップキックを繰り出していた。

力は、それをまともに食らい後ろ壁に激突。

その光景にあたいは、驚き楓はエビフライを口に加えたままはやての名を呼んでいた。

ガシッ!!

「おんどりゃーーーー!!いったいここでいったい何やらかしたーー!!無銭飲食か!!それとも強盗かぁ!!」「ち…がう…お…落着け…はやて…」

「違うやとーーーーーーーー!!こらぁ!!力君!!この期に及んでまだ白を切るつまりなんかーーーー!!」

はやては、壁にぶつかり床に倒れた力の胸倉を掴みそれを揺らしながら大変ご立腹の様子でなんだか勘違いをしている様子…。

力は、はやてに対し落着くよう言うが当の本人はその声を一向に聞こうとしない。

「こ…この容赦ないお爺ちゃんへの攻撃…ねぇ!!お爺ちゃん!!はやてさんだ!!私達のはやてさんだ!!よかった~!!無事だったんだな~!!」

ガシ!!

そんな光景に楓は、涙を浮かべながら自分達の世界にいるはやてと確認しいはやての攻撃に対し既に気絶しかけている力にそのことを伝えはやてに抱きついた。

「んな!?…か…楓ないの?…ど…どないしたん…そんなに泣いて…」

「よかった~。ご無事だったぁ?」

「それに…飛鳥も…いったいどないしたん?」

楓のいきなりの行動にはやては、驚きの声を上げその光景を見ていた飛鳥もまた目に涙を浮かべてはやては力の上に乗っかったまま戸惑いの声をあげていた。

「あの~せっかくの再会の所悪いんだけど…まずはこの状況の説明をしてくれないかな?(イラッ!!)」

「ったく…頼むから勝手に動くなって言ってんだろ?はやて!!」

「せ…先輩!!その辺の事情については、私達の方から説明しますんで…とりあず落着いて下さい」

「あれっ?ユウにアルト…」

その状況を見ていたミツキは、どうやらはやてのドロップキックによりせっかく用意した料理が力の座っていた周りのみが滅茶苦茶になった事に腹を立ててた様子でその状況について説明を求めていた。

そのあたい達にとって最悪の状況にユウとアルトが現れミツキを落着かせていた。

それからおよそ15分後…。

アルト視点

「ほらっ!!しっかりと綺麗にし!!」

「な…なんで俺が…」

「なんやて〜（イラッ）」

「イエ…ナンデモ…」

あれから…とりあえず先輩とはやてさんを落着かせた私達は、食器を洗っている先輩とナリアちゃんそして…そもそも汚した原因を作ったはやてさんが掃除をしている力君の監視をしているというその訳のわからない光景を見つつその3名以外除き各々がコーヒーの置かれたテーブルを囲むように席についていた。

「んで?さっきの続き…聞かせてくれねぇか?」

ノアは、さっきまでの光景をまるで無視するかのように飛鳥さんにさっきの続きを話してもうらうよう話を切り出した。

「ああ…次の日になって…いきなりシャマル達から連絡があったんだ…」

飛鳥さんは、ノアの声に静かに語りだした。

～回想～

飛鳥視点

「何?はやてが変になった?」

連絡を受けたあたしと力そして、楓の3人は、八神家に急行。

そして、その光景に驚いた。

「せやから!!ウチは、八神組なんて組織は知らん!!あんたらいったい何者や!!シャマル達の偽もんやろ!!」

「いや…だから…さっきから説明してるでしょ?私達は本物で…八神組って言うのは…平和のために戦う…」

「それは何度も聞いとる!!せやかてロボットに乗っかって宇宙人と戦ってるなんて聞いたことがないっ!!」

私の目の前にはイスにバインドで固定されたはやてが頭を抱えながら同じ事を説明し続けるシャマル達に対し怒号を上げている光景だった。

「いったい…どうしたんだよ?」

「あっ…力君…。それが…今朝からこんな感じなのよ…」

家に入った力は、シャマルに声をかけその声にシャマルはあきれ果

てながらその声に答えていた。

「あんた等…いったい何者や?」

「何者って…私達はダグオンです!!それにあなたとお爺ちゃんは昔っからの友達で…まさか…そのことすら忘れて…」

あたし達に気づいたはやては、あたし達を睨みつけていた。

そのはやての態度を見た楓は、睨みつけるはやてに対し自分達はダグオンである事を告げるが…どうやらその事すら忘れている様子。

「はぁ?!あんた!!何訳のわからん事を言っとるんや!!ダグオンなんて知らんしそんな男の事も知らん!!ウチが知っとる友達は、ミツキちゅういっつも無茶ばかりやらかしてる執務官やなのはちゃん達くらいなもんや!!」

「み…ミツキ…だと?なぁ…もしかして、そのミツキって言う人の弟で…確か…ユウ・サエグサってヤツがいないか?」

はやての声に力は、その聞き覚えのある名前に対しその名前の人に弟がいないか?と確認してきた。

「ああ…確かにおるで…それがどないしたん?」

「もしかして…」

「楓…お前も気づいたのか?」

「いったいなんの話だよ!!さっさと説明しろ!!」

はやての答えを聞いた楓は、どうやら何かに気づいたらしく声を上げその声を聞いた力はその事を楓に確認。

その光景を見ていたヴィータは力と楓に説明を求めていた。

「ええ…ちょっと前になるんですけど…私とお爺ちゃんそして、飛鳥の3人は…ナスカの頭…ライゴウの罠に嵌り別世界の…つまりパラレルワールドのミッドチルダに飛ばされた事があって…そこで出会った魔導士が…」

「つまりそれが、ユウにミツキさんそれにノアって訳。つまり楓が言いたいのは恐らく今いるはやては、そのユウ達の世界のはやてはそのあたし達が出会ったユウ達の世界にいるはやてだって言いたいんだろ?楓?力?」

「ああ…」

「そうです」

楓の説明の途中で楓達が言いたいことに気づいたあたしは、楓の説明に続きそしてそれで間違いがないか二人に確認…2人は、あたしの説明と同じであることをつげる。

「でも…どうしてそんな事が…」

あたし達の説明を聞いたシャマルは、なぜこんな事になったのか疑問の声をあげた。

「なぁ…はやて…でいいかな?そのポケットにある手紙みたいな物

…何かわかる？」

あたしは、はやてが着ていた服のポケットから手紙のような物をみつけそれが何かはやてに確認した。

「いや…ウチはわからへん…」

「じゃ…確認させてもらうよ…どれどれ…まったく…どうやらこの状況をした犯人ってのがわかったよ」

はやてのポケットからその手紙を取り出したあたしは、その中身を確認。

そして、犯人が誰か…それがわかった事を告げた。

「いったい誰だ！！そいつは、」

「そうね…簡単に言えば昨日あたし達が倒したはずの宇宙人。連中…どうやら昨日あたし達に倒される間際にはやてになんでも呪い見たいな物をかけてたみたい…。その呪いみたいな物って言うのが…」

～回想終了～

再びナリア視点

「つまり、こっちのはやてと力君達のはやての人格がその呪いのせいで入れ替った…って訳？」

「ええ…そのとおりよ」

飛鳥さん達からの説明を聞きつつ食器洗いを終えた私と姫は、皆さんがいる茶の間に戻った。

そして、飛鳥さんの話に姫は、その呪いみたいな物が二つの世界の八神部隊長の人格を入れ替えた事では？と飛鳥さんに食器洗いで濡れた手を拭きつつ聞いていた。

その話に飛鳥さんは、それで間違いない旨を告げていた。

「それで…私達3人は、とりあえず私達の世界のはやてを見つけ出して…そこからその呪いを解こうと思ってこっちにきたんです」

「なるほど…とりあえずその目的の一つは達成されたんだな…それで…これからどうする気だ？」

その後…楓さんの説明を聞いたユウさんは、今後の事を彼等に聞いてた。

「どうする…楓…？」

「どうしますか…飛鳥さん？」

「どうする気だ…力…？」

ユウさんの質問に対し力君が楓さんに…それを聞いた楓さんは飛鳥さんに…そして、飛鳥さんは力君に…今後の事を聞いていた。（以下エンドレス…）

「もしかして…あんた等…後の事考えてなかったんか？」

「「「ぴんぽーん！！！」」」

ガン！ガン！ガン！

「「「痛ったぁ～！！」」」

「あんた等！！もうちょっと頭使い！！」

そのエンドレスのやり取りを見ていたはやてさんは、今後の事を一切考えていなかった事を3人に確認。

それを聞いた3人は、それが正解である事を告げるや否やはやてさんからの鉄拳制裁が3人の頭に炸裂！！

それぞれがその攻撃に痛みを訴えはやてさん腰に手をあてつつもう少し頭を使うよう注意していた。

「とりあえず…その手紙…今持ってる？それと…今こっちのはやては？」

「そちらのはやてについては、私達の世界の方で八神家の皆さんに警護してもらっています。そして…それが例の手紙になります」

はやてさん達の漫才？と思うような光景を呆れつつ見ていた姫は、楓さんに私達の世界の八神部隊長の現在の状況と話の中に出てきた手紙の事を聞いていた。

その話に楓さんは、八神部隊長の状況を説明そしてポケットからその手紙を取り出し姫に渡した。

「どんな内容だ？姉貴？」

「汚い…」

「なんじゃそりゃ？」

手紙を受け取った姫は、その中身を見つつユウさんからその内容を聞かれていた。

その声に姫は、渋い顔をしながらその感想を述べその声にユウさんは疑問の声を上げていた。

「私にも見せて下さい…え～っと…どれどれ…うわっ…汚い字！！

「どうだ！！ダグオン！！おそれいったか！！こののろいは、ただじんかくをいれかえてるだけじゃない！！このままほおっておけば、やがてそのじんかくとからだのふいっちから2人ともしぬのだ！！くやしかったらこれをといてみろ！！ヒントはなしだ！！2人のやがみはやてをみつけきょうから2しゅうかんごのおひるまでにもう一人わたしをたおしてみろ！！じゃあな！！」

ポク…。

ポク…。

ポク…。

チーン！！

「ヒント無しとか言っときながら…最後のコレ…ガッツリ答えじゃ

…」

「それにしてもよく読めたね？この平仮名だらけの汚い字？」

「そりゃ、いっつもあのフェラルドさんの書類を見てますから」

「そういや、フェラルドって…字書くの汚かったな…」

私は、姫のが見ていたその手紙を声を出して読んだ。私の話を聞いたアルトさんは呆れつつその手紙の内容についての感想を言ってた。

そして、姫は、私にこの手紙をよく読めたね？と声をかけてくれその話に私はフェラルドさんの名をあげ手紙が読めた理由をいいそれを聞いたノアさんは、フェラルドさんの文字の汚さを思い出していた。

「と言う事は…まずは、その期限までにその宇宙人を見つけて…」

「ぶちのめすだけだな！！」

話を理解したユウさんと力君は今後の方針をユウさん、力君の順で告げその声にその場にいた全員も頷く。

「そしてここに…時空を超えた八神組とチームミツキと言う二つの仲間達がその凶悪宇宙人に立ち向かうのであった！！次回に続く！！」

「あの…アルトさん…？八神組はともかく…チームミツキなんて…ありませんけど…」

「次回に続くぅ！！！」

「アルトさ～ん！！お～い！！」

「次回にぃ（泣）！！！」

…。

…。

後編に続く。

特別編　前編　「ダグオン再び…」（後書き）

作者
「いかがでしたか?今回の特別編は、ジャン先生の「勇者司令ダグオンA，s」とのコラボです!!」

ノア
「んで…今回はどんな感じでこうなった?」

作者
「いや～今回については、単に思いついてしまったと言うしかありませんね?まず、今回のお話は、ジャン先生の「勇者司令ダグオンA，sにユウ達が登場しまして、その続編と言う形でお送りしております」

ノア
「ああ～あれの事か?まぁ…詳しい関係については、ジャン先生の方を見てくれよな?」

作者
「それで、別の作者さんとのコラボを書いている時からいつか書いてみたいなぁ～なんて思っててましてちょうど今暇になったんでジャン先生に許可をとって書いちゃいました」

ノア
「いきなり暇になるなんてな…それにしてもとんだクリスマスプレゼントをもらったもんだ…」

作者

「ええ…まぁ、それはそれとして今回はドタバタメインでいきます！！」

ノア
「まさか…またあいつ等を出すんじゃ…」

作者
「それは、いいですねぇ～（笑）ひとつのネタとしてもらっておきましょう！！」

ノア
「（やべっ！！余計な一言だったか…）それじゃ次回はどうなんだ？」

作者
「そうですね…とりあえず解決編といった具合にはいきたいのですが…とりあえずお楽しみに！！って所ですかね？」

ノア
「まぁ…そういうこったな！！じゃな～！！」

次回予告

ユウ
「まったく…あいつ等…面倒事ばかりこっちに持ってくるなぁ～。とは言えこのままほっとく訳にもいかねぇから面倒だがいっちょうやってやるか！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　特別編！！後編！！

「炸裂！！アルティメット・ブレイク！！」

どうやら俺達を本気で怒らせたみたいだな…」

特別編　後編　「炸裂！！アルティメット・ブレイク！！」（前書き）

フラナガン郊外　サエグサ家

アルト視点

「う～ん…う～ん…」

話合いを終えた私達と八神組は、とりあえず八神組の皆さんが倒したと言う宇宙人の似顔絵をつくりそれを元にユウを始めとしたこっちの世界のみんなや六課のみんなにも協力してもらい捜査を開始した。

でも…。

「んだぁー！！！」

「どうしたんだ？力！！」

「って言うかなんで俺達だけが待機なんだぁ！！」

「それは、何度も言ったでしょ！！私達は、ここの地理には詳しくないから捜査に参加しても足を引っ張るだけだからまずは、ユウ達にまかせて宇宙人が見つかるまでここで待機しようって」

力君は、どうやら暇を持て余しいきなりその場から立ち上がり待機

であるこの現状について文句をいいだした。
それを聞いた飛鳥さんは、なぜこうなったのかの理由を力君に説明。
「それはわかってるよ!!俺がいいたいのはそれ以外に理由があるんじゃねぇ～かって事!!」
「まさか～」
「いや!!その可能性もあるな…」
「なら…あそこを使うか…」
「アルトさ～ん…ちょっとこっちに来てくれない?」
「はい?…なんですか?」
飛鳥さんからの説明を聞いた力君は、それとは別の可能性を示唆。
それを聞いた楓さんは、その可能性を否定しその一方飛鳥さんはその可能性があるかもしれないと言い出す。
その声を聞いた力君は、何か決意をした様子で立ち上がり飛鳥さんが私を手招きする。
ー「人には物語を暴露する場所がある。ここは…その部屋…通称「楽屋」（ｂｙ　勇者司令ダグオンＡ，ｓ1話より参照）ー
～楽屋～

「な…なんですか？ここは！！」

「ここはね…なんでも暴露しちゃう部屋で…楽屋って言うの」

「それで、なんで俺達がこうなったのかアルトさんにその裏事情を教えてもらおうとおもってね？」

その楽屋と言う部屋に入った私は、この部屋の説明を飛鳥さんから受けそして、力君からはなんでこの部屋が必要になったのかその理由が告げられた。

「そうですか…。それは…ここの作者がこの「楽屋」を使いたいがために力さん達を待機にしたんですって。ちなみにジャン先生からはここの使用許可をもらった上でね」

力君から話を聞いた私は、その部屋の効果かその裏事情をスラスラ力君達に話してしまう。

「そんな理由で…」

「それに…話自体も何話を続ける予定じゃないみたいだからあんまり力君達に動かれると困るみたい…」

「なるほど…力が動けば必ず何か起こるからな…懸命な判断だ…」

「俺は、常に問題の発生地点なのか？」

「そうだろ？」

「ガックシ…」

私が理由を聞いた楓さんは、その理由にガッカリしそれを見た上でさらに別の理由を話すると今度は、飛鳥さんが納得するような声をあげる。

そんな飛鳥さんを見ていた力君は、疑問の声を上げるがその疑問に対し飛鳥さんがキッパリと言い切った。

それに対しガッカリとした様子の力君。

「よしっ！！宇宙人をさっさとやっつけるためにもあたし達はここで待機だ！！」

「意義無し！！」

ガッカリする力君を他所に飛鳥さんは、ここでの待機を宣言。

その声に納得の様子の楓さん…。

それにしても…恐るべし…楽屋…。

私は、そう思いつつその部屋を後にするのであった…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～特別編…後編…始ります…」

特別編　後編　「炸裂!!アルティメット・ブレイク!!」

特別編後編　「炸裂!!アルティメット・ブレイク!!」

フラナガン郊外　とある廃工場

ユウ視点

「見つけたでぇ!!」

「何ぃ～!!もう見つかったのか!?お前等いったい何者だ!!」

「八神組とチームミツキや!!」

「チームミツキ?いつの間にそんな名前つけたのよ?」

「いつでもええやろ?この場のノリや!ノリ!」

俺達は、あっという間に宇宙人が潜伏していた廃工場を発見した。

そして、力達と合流しその中へと突入した。

いきなりの俺達の登場に驚く宇宙人は、よくあるこういった話の流れ…所謂お約束であるヒーロー達の名を聞きそれに対しはやてが俺達の事をチームミツキと言い出した。

その声に姉貴は、疑問の声を上げるがその声にはやてはその場のノ

リだと言いそれに対し姉貴は、「まいっか？」というような顔をしながらそれにどうやら納得した様子。

「納得がいくかーーーーーーーーーーー！！」

「なっ！！なんやいきなり！！」

「なんで、お前等いきなり俺を見つけてんだよ！！つ～か普通ならここに来るまでに色々とあるだろうが！！」

「うっせぇー！！こっちにゃそもそも時間がねぇんだ！！さっさと俺達にやられろ！！」

それを見ていた宇宙人は、いきなり怒号をあげた。

それにはやては驚きの声を上げ宇宙人は、それに反応しないままなんで納得しないのか…その理由を告げそれを聞いた力はその理由を一蹴。

「話には、流れってもんがあるだろう！！それを…完全に無視しやがって！！」

「これって…私達にと言うより…」

「まったくもう…面倒ね…わかったわよ！！ちゃんとその理由を説明するからあんた！！ちょっとこっちに来なさい！！それとみんなも！！」

だが、その力の怒号にも宇宙人は臆せず文句を言いつづける。それを聞いたナリアは、これが自分達に向けられたものではないと判断。

そして、姉貴は頭をかきつつその理由について言う事告げその場にいた全員でその場から移動する事になった。

～再び登場…「楽屋」～

「なんだと！！前回の話で粗方の事をやりきっただと！」

「そっ！！つまり、ウチの作者はあんたが考えてた程深くこの話を考えてはいなかったって事よ？」

「ガーーーーーーーーン！！」

楽屋を訪れた俺達と宇宙人は、姉貴からのいきなりこの展開について説明がれその理由に愕然とする宇宙人。

「な…なぁ？ここって…敵味方関係なかったのか？」

「さ…さぁ？」

「つ～か！！ユウ！！お前の姉ちゃんっていったい何者だ！！なんでここの使い方を！！」

「どうぞ…お茶です。熱いですから気をつけて下さいね？」

「こりゃどうも…アチッ！」

その光景を見ていた飛鳥さんが楓さんに対し疑問をぶつけるが楓さんもどうやらその理由を答えられない様子。

そして、今度は力が俺に対しウチの姉貴のことを聞こうとしていた所でナリアが力にお茶をくばっていた。

ちなみに…今ここにいるのが…俺、姉貴、ナリア、アルトにギンガ…そんでもって八神組の力、はやて、飛鳥、楓…最後が宇宙人って面子だな。

「そういえば、先輩って…ギャグ仕様になるとある意味なんでもアリ的なキャラになっちゃうみたいで…」

「それに、ウチの主人公って影薄いし…」

「なるほど…」

別な所で飛鳥さんにお茶を手渡していたアルトは、力が俺に聞いてた話が聞えていたのか自分なりのその理由を告げギンガがその後に続く。

その声に飛鳥さんはその声に対し納得したような声をあげていた。

「く…くっそーーーーーーーー!!見てろよ!!おいっ!!戦闘の再開だ!!」

「おいっ!!コラッ!!とか言いつつ逃げんな!!」

宇宙人は、よっぽど悔しかったんだろうな?苦やし涙を浮かべながら楽屋を後にしていた。

その行動にノアが声をあげその後を追う。

それに俺達も続いた。

ー再び廃工場ー

「あーーーーーーーはっはっはっ!!ちくちょう!!ちくしょーーーーーー!!」

ドガガアガガガガガガガガガガガガーーーーーン!!

廃工場に戻った宇宙人は、どうやらやけくそになったらしくとにかく大量のエネルギー弾を色んな所にぶっ放してやがる。

「あ〜あ…あのヤロー…自棄を起こしやがった…」

「どうすんだよ?これ…?」

「私のせいにしないでよね?それにしてもこのままじゃ…まずいわね…」

物陰にかくれた俺たちは、とりあえず作戦会議中。

既にダグオンの姿になった力は、物陰からこっそりと宇宙人の様子を見ながらやれやれ…といった様子。

そして、セットアップ済みの俺は同じくバリアジャケット姿の姉貴に今後どうするのか?と聞くがその前に姉貴は、自分のせいにする

な！といいつつどうするのか思考を巡らせていた。

「くっそーーーー！！俺たちをコケにしやがって！！兄貴！！ダグオンに倒された俺の兄貴よ！！俺に力を貸してくれぇ！！」

ピカーーーーーーーーーーーーー！！

「なっ！！なんや！！」

「魔力が増大してます！！」

「嘘…もしかして…パワーアップ…？」

攻撃をしつづける宇宙人は、嘆きながら…そしてダグオンに倒されたと言う自分の兄に向って…というか天を仰ぎながら何かを言い出した途端その体から光を放った。

その光に驚くはやて。

そして、そいつの魔力が増大している事がナリアから報告が届く。

それを聞いた姉貴は、冷や汗をかきつつパワーアップするのでは？と言い出した。

「はーーーーーーーーーーーはっはっはっ！！どうだぁ！！これが…これが俺の…俺達兄弟の力だ！！」

光のが落着いき外面的には何も変わらない様子の宇宙人は、再びその滅茶苦茶な攻撃を再開。

ズドドドドドドドドーーーーーーーン！！

「あっ！！危ない！！」

「うわっ！！」

ドガガガガガガガガガーーーーーーーーーン！！

その嵐のような攻撃にはやてが隠れていた瓦礫が壊され無防備になったはやてに向って数発のエネルギー弾が彼女を襲う。それにいち早く気がついたアルトが彼女庇いそして、エネルギー弾が次々と爆発した。

「はやて！！」

「アルト！！」

「どうだぁ！！俺達の力…思い知った…かぁ？」

俺と力は、その様子を見ながら俺がアルトのそして、力がはやての名を叫び爆発の後の瓦礫の山を見た宇宙人が威勢のいい声をあげるがその声はすぐにトーンダウンした。

「ハァーーーーーーーーーー！！イージス！！シェル！！」

ドカーーーン！！

「ナリアか！？」

「お2人ともご無事ですか？」

「なんとかな…」

「私も無事だよ!!…痛っ!!」

瓦礫の山が突然くずれたかと思えばその中から黄色い半球状バリアが展開。

そして、その中にその場に座り込んでいるアルトはやて…2人の前に立つナリアの姿あった。

ナリアは、後ろを見つつ二人の無事を確認。

その声に対し2人とも元気な声で返すがどうやらアルトが負傷したらしく左手で右腕を抑えていた。。

「あ…アルト!!大丈夫か!!私なんか庇うから!!」

「こんなの大した怪我じゃありませんよ?それにこれは私が勝手にやった事ですから…あなたのせいじゃありませんよ!!はやてさん!!」

「まったく…もっと!!後先考えてから行動して下さいよ!!…でも、後で姫に説教されてもこれなら文句はいえませんね…だって…アルトさん…自分勝手にやったんですから…ね~♪」

「ちょちょ!!ナリアちゃん!!そんなー!!」

バリアの中では、負傷したアルトにはやてさんが心配そうに声をかけそれにアルトが笑顔で答える。

それを聞いたナリアがアルトに注意を喚起しつつもこの後あるであろう姉貴からのお説教にまでは助けない事を告げアルトは、驚きの声をあげていた。

「くっそーーーーーーー!!あんな小娘に…俺達兄弟の攻撃が…ぐあああっ!!（ズバッ!!）う…腕が…グベボッ!!」

ドカーーーーーーーーン!!

「かまいたち…」

「ブレイブ…シューター」

そんな光景を見て安堵した俺は、攻撃を止め文句を言いつづける宇宙人に対しかまいたちで腕を切り落としその後力のブレイブシューターがヤツに炸裂…その勢いでヤツは壁に激突した。

「さて…どうしようか…こいつ…」

「そうだな…そういやコイツ…さっき話の流れがどうのっていってたよな…」

倒れこむ宇宙人の近づきヤツの目の前に立った俺と力は、コイツをどうするのか?まるで爆発寸前の怒りを抑えるかのように静かな声力が俺に相談。

その声に俺は、今までの内容を思い出しつつ力と同じく静かな声でその声に答えていた。

「それなら…かっこい名前の必殺技かなんかでトドメでも刺しちゃえば？それもみんなで？」

「えっ？？い…いつの間に…こんなに…」

「それはいいねぇーノアの意見にサンセ～…（ボキボキ）」

「私もそれにまぜてよね…」

「誰にケンカを売ったか…教えてあげる…」

どうやら、俺と力の会話が聞えたらしく俺達の後ろから同じく怒りＭＡＸのノア、飛鳥さんそれに楓さんに姉貴が登場。

そして、全員で宇宙人の周りを取り囲む。

「なら…全員一致と言う事で…くらえ！！アルティメット！！ブレイク！！（集団リンチ）」

「んぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

バキドゴグシャベキ…。

その後…。

機動六課隊舎内　食堂

はやて（影の守護者）視点

「美味しい！！」

「よかったぁ～。なら、もっと食べてなぁ？」

「はい！！でも…いいんですか？」

「何いってんのや？楓？今回は、私達がみんなに助け貰ったんやから…それのお礼や」

「なら…ミツキさんは？」

「ミツキは…あれは、趣味みたいなもんな…。どうやら、楓さんにおいしく食べてもらった事よっぽどうれしかったみたいやし…それに久しぶりにスバル達に自分の腕が揮えるって楽しんどるわ。という訳やからあいつの事は気にせんでええから容赦なく食べてな？」

「そうなんですか…わかりました」

宇宙人を倒した事でウチ等は、無事自分の体に戻ることが出来た。

そして、自分の世界に戻り元の世界に帰る力君達に帰るのをちょっと待ってもらって現在、ダブルはやてプロデュースによるお礼のためのパーティを催してる所や。

ウチ等が作った料理に美味しいと声を上げた楓さんに声をかけたウチに楓さんは、ミツキが手伝いをしてくれてる事を気にし取る様子。

それに対し向こうのウチが今回の趣旨について説明しその後ウチがミツキがなんで手伝ってくれてるのかを説明した。

その話に楓さんの方もどうやら納得してくれたみたいで目の前にある料理を次々と平らげていった。

「ちょちょちょ!!これってロマネニョロティーの３００年もの!!いったいこんな物どこから?」

「これは、ゲンヤのおっちゃんの秘蔵コレクションの中からあたいが頂いてきたもんだ?ちなみに赤と白…両方あるぜ…どっちがいい?」

「もちろん!!両方!!」

「うしっ!!それじゃこれも空けるぞー!!」

「おー!!」

別の席では、ノアと飛鳥さんが師匠の所からくすねてきたっちゅうワインや日本酒やらブランデー…所謂高級なお酒をまるで水かジュースかを飲んでるかのようにそのビンを次々と空にしていった。

「はい!おつまみ!!」

「さんきゅー!!んめぇ～!!」

「おいしい…これお酒に会うね～ミツキさん!!」

「ありがとう!!とりあえず空いたお酒は、ちゃんと片付けておいてね?（ギロリッ!!）」

「「は〜〜い♪」」

そんな2人のところへお酒のつまみを持ったミツキが訪れそれを食べた二人は、そのうまさを喜びで表す。

それを聞いたミツキは、笑顔？でそれに答え空いたビンを片付けておくよう指示。

2人は、それを笑顔で返事をしまわりある大量の空き瓶をさっさと片付け再び酒盛りを再開しとった。

「よ…頼子さん…本当にいいんですか？こんな所に来て…」

「何言ってんのよ！！葵ちゃん！！こういう所にこないとイケメンはゲット出来ないわよ！！ほらっ！！あの人達みたいに…」

なんか…どっかでみたような女…と言うか警察の制服を来たメガネをかけたミツキ似の人と色っぽい雰囲気を課持ち出していた女性2人組が突然ウチの目の前に入り…そして、そのミツキ似の人の方がなんだか別な人を指差ししとった。

「そこのあなた…あなたは…今日の帰り…そのまま本屋に立ち寄り…菫川先生の本を…」

「だから！！こんな所でそんな事しないで！！」

「何言ってるんですか！！これも菫川先生の読者を増やすための…」

「そんな事すんなーーーーーー！！（グリグリ）」

「ふみゃ～！！」

その人が指を刺す方向を見たと事…また管理局とは違う制服を来た…これまたメガネをかけた髪が黒髪のロングの女性がかめは○波を打つような格好しながらなにやらやっていた。

そして、その横にいたどっかの高校であろう制服をかけカチューシャを頭につけた女の子をその行動を止めようとしていた。

その声にその女性は、その行為を止めようとは、せずその女子高生風の女の子にほっぺを引っ張られていた。

「頼子さん…あれは…ちょっと違うような…」

「そ…そうだね…あれは…真似するの辞めとこう…」

そんなやり取りをみていたさっきの2人組みもその2人に対しなんや唖然としとった…。

それにしても…よく出てくるなぁ…あの人達…。

「うんめやっぱりぇ～はやての飯は、うめぇ！！」

「力君…本当よく食べるねぇ～」

「動いた後だからなぁ～。そりゃ腹が減るよ」

「それはそれとして…よく誰が作ったかなんてわかりますよね？」

「そりゃ、俺は、はやての家来だからな？（ムシャムシャ）」

さらに別の席では、ユウと力…それにアルトとナリアが食べながらおしゃべりをしとった。

そんな中力君は、もう一人のウチが作った料理を的確に宛て取るらしくナリアが驚きの声をあげその声に力君は、その理由を言ってた。

ちなみに会話順は、力君にアルトそしてユウナリアの順やね…。

でも…、

「へぇ～そんなに私が作った料理…わかるんだ…」

「おう！！そうだぞ！！はやて！！」

「あれっ？どうしたんですか？はやてさん？」

そんな中なぜか不機嫌なもう一人のウチが力君に近づきナリアちゃんに自慢げな態度を取る力君に問いかけ…それに力君が答えた所でその異変に気づいたアルトが声をかけた。

「ねぇ？もしかして…八神組のはやてが作ったって言ったの…このから揚げとエビフライと…それにこのピラフの事？」

「えっ…ええ…そうですが…そうですよね？力君？」

「ああっ！！その通りだ…」

「（はは～ん…それでこんなに機嫌が悪いんだ（ニヤリ））へぇ～

…でも、本当にそう思う？」

そんなやり取りにその場を通りかかったミツキは、ナリアからその状況を聞き力君にそれで間違いないか確認する。

「ああっ！！間違いない！！」

「本当に本当？」

「しつこいな！！はやての料理は昔っからよく食べてるだらが家来であるこの俺が間違える訳が…」

「あっ…！？それ！！ウチが作ったのよ！！よかった～力君に喜んでもらえて！！」

「えっ…」

その瞬間…あたりが凍りついた…。

そして、なぜ…ミツキがあんなにしつこく力君に確認していたのか…そして…いつのまにか…アルトとナリアを連れ…この場を脱出していたのかを…。

「こらーーーーーーーーーーーー！！力君！！往生せいやーーーーーーーーーー！！！」

ボデンジーーーン！！

その後…力君は…もう一人のウチ…。

後は、みんなの創造にませるわ…

Ｆｉｎ。

特別編　後編　「炸裂！！アルティメット・ブレイク！！」（後書き）

作者
「という訳で前後編お送りしました特別編！！いかがでしたか？」

ノア
「それにしても…今回ってクリスマスＳＰって意味合いもなかったんじゃ…」

作者
「時期的には、そうなんですが…まったくそういった雰囲気になりませんでしたね（笑）と言う事ですから…特別編と言う事で（笑）」

ノア
「それはそれとして…やっぱり出てきたか…あいつ等…」

作者
「まぁ…あの人達については、ある意味こういったときくらいにしかだせませんから…それにしてもノアに言われるまですっかり忘れてました（笑）」

ノア
「（し…しまった！！余計な事を言っちまった！！）そ…そうか？それで？次回は？」

作者
「とりあえず…本編に戻ろうかと…それにそろそろ彼女にも出てもらわないと…」

ノア
「そうだな…いい加減にしねぇとぐずるしな…」

作者
「それでは!!今回は、ここまで!!ちなみに何か変更店などありましたら連絡を下さい!!ジャン先生!!」

ノア
「すぐに直すってさ!!そんじゃ!!次回!!魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５８!!テイク!!オフッ!!」

その５８（前書き）

フラナガン郊外　機動六課隊舎内部隊長室

ユウ視点

「あかんーーーーーーーーーーー！！　最悪やーーーー！！」

「えーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「そんなーーーーーー！！はやてちゃん！！なんとかなんないのーーー！！（泣）」

「なのは隊長…やっぱり…ご自分でなんとかするしか…」

あのパーティが終わってから数日後…。

今、機動六課では部隊長の元に入った地上本部からの査察…その対策のためにバレちゃまずいものなんかを隠す作業で大混乱。

特に、今まで部隊長の暗黙の了解によりこっそりやってきた干物の製造販売やら余った資材を使っての自分達の趣味への投資をしていた整備部…。

そして、何より部隊長自身…個人的な予算の使い込みがありそれがバレれば部隊存続の危機にも成りかねないとの事で部隊長の大号令と共に現在…それをなんとかバレないようにしている最中で俺もそれに巻き込まれ大忙。

そんな中、いきなり部隊長に呼び出されて部隊長室の前に来たんだが…。

「なんだぁ？この大騒ぎわ？…失礼しま…」

「ゆ…ユウ兄ぃ～！！大変なんだよーーーーー！！」

「ユ～ウ～！！ウチを助けて～な～！！（泣）」

「ユウ君～！！なんとかしてぇーーーーーー！！（泣）」

「な…なんだぁ？」

部隊長室に入った俺を見た部隊長達は、それを見るや否や俺に泣きついて来た。

その行動に対し俺は、頭の中が混乱し声を上げる。

尚、今の会話順は部隊長、スバル、なのは隊長に俺…の順な。

「な…なぁ？こりゃ…いったい？」

「ユウ！！今はあんただけが頼りや！！ウチのピンチをなんとかしてぇ～な！！（泣）」

「ユウ君！！私の頼みを聞いてぇ～（泣）」

「ユウ兄！！私の話を聞いてよぉ～！！」

俺がスバル達に話を聞こうとするが当の本人達は、それをまったく聞かずワイのワイのと自分の言いたい事だけを言って来た。

その状況に混乱したままの俺は、ティアナに助けを求めようと彼女に視線を向けた。

「助けないわよ。せいぜい頑張ってねぇ～あ～いい気持ち…」

だが、ティアナはそうイヤミを言い俺の方に手を振りながらその状況を楽しんでいた。

ティアナ…てめぇ…（プチッ！！）

「おい…お前等…少しは落着けぇーーー！！」

「「ひぃーーーーーーーーー！！」」

「ユウ兄が怒ったーーーーーーーーー！！」

「ユウがキレた…珍しい…」

ティアナの態度を見た俺は、頭の中で何かがキレたみたいでその怒りをそのまま爆発させる。

それを見た部隊長となのは隊長は、悲鳴をあげスバルは恐怖に慄き声を上げる。

そして、ティアナは俺がキレた事がよっぽど珍しかったんだろうな？驚いていたよ。

それから１０分後…。

「はぁ～～～！？姉貴に連絡が取れない？」

「そうなんよ～？今までは普通に連絡が取れたんやけどここに急に…」

落ち着きを取り戻した俺達は、部隊長からその訳を聞いた。

それを聞いた俺は、疑問の声をあげ部隊長が自分の席で頬杖をつきながらそれに答える。

「それはそれとして、なんで姉貴に連絡を取らなきゃいけないんだ？」

「ああ…それはな…。ウチは、例の査察のためにミツキに相談したくて…そんでもってなのはちゃんがヴィヴィオについてなんでもミツキに相談したいって事なんやけど…そんでスバルにティアナは…なんやったっけ？」

「ああ…私達は、ミツキさんに…」

「ミツ姉に…というかナリアちゃんの連絡先を教えてもらいたくて…この間、聞きそびれちゃったんだよね…」

「そんなに大騒ぎする事じゃねぇだろ？スバル？（ジトー）」

「その…つい…その場のノリで…あはっ…アハハハハ…（照）」

俺の問いかけに部隊長が自分の理由となのは隊長の理由を答えそして、スバルとティアナが自分達の理由を答える。

部隊長となのは隊長の理由はともかくとしてスバルとティアナの理由を聞いた俺は、その理由に呆れながらスバルに聞き返しそれを聞いたスバルは照れながらその訳を話した。

「それにしても姉貴に連絡が取れないなんて…（ピポパ）…「は～い！！ミツキです！！ごめんなさい。今通信に出れなくて…ピッーって音の後にメッセージを…」（ピッ！）あれ？留守電…んじゃこっち…（ピポパ）「は～いミツキ…」これも留守電…なら！！（ピポパポ）「は～い！！…」（ピッ！！）本当だ…つながんねぇ…」

「ウチもミツキの知ってる連絡先全部試したんやけど…その全てが留守電で…それにノアにもつながらへんのや」

「それにギン姉や父さんも連絡が取れないみたいで…で…でも！誰かに誘拐されたとかじゃなくってファントムの本部って所にいるみたいなんだ…」

「そんで、ウチがミオちゃんにも聞いてみたんだけど…なんでも仕事が忙しいみたいで連絡が出来ないんやと…」

「それにミオちゃんもナリアの連絡先…知らないんだって…」

部隊長達の話を聞いた俺は、自分の端末を取り出し俺が知る限りの姉貴の連絡先に連絡した。

だが、その全てが留守番電話になっていてそれを見た部隊長が自分も同じ事をした事をつげその後にスバル、部隊長、ティアナの順で

その経緯が説明された。

「そうか…ともなれば姉貴に直接会うしかねぇが…あ～あ…こんな時にナリアでも来てくれたらなぁ～」

「そんな…ご都合主義じゃないんだから…そんな事…ある訳が…」

プシュー。

「失礼しま～す！！部隊長！！お客様です」

「こんちわ～！！…ってあれ？どうしたんですか？皆さん…何かあったんですか？」

「あっ…アルト…それにナリアちゃん！！」

「な…ナリア！！」

「嘘…」

「はい？」

俺は、腕組みをしながら次の手段を模索しながらボヤいて所アルトがナリアを連れて部隊長室に入ってきた。

それを見たスバルと部隊長は、いきなりのナリアの登場に驚きの声をあげティアナは一度俺のボヤきを否定していたためその驚きは人一倍であった。

そんな状況を見たナリアは、疑問の声を上げていた。

んでも…ナリアのヤツ…なんで地上本部の制服着てんだ？

確か…あいつ…管理局の仕事には、確か関われなかったんじゃ…？

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５８…始まりみたいだぜ…」

その58

その５８

機動六課隊舎内　部隊長室

ナリア視点

「姫に連絡…ですか？」

「そうや…なんとかならんやろうか？ナリア…」

「でもなんで姫に…」

「それはな…実は…」

私が八神部隊長を尋ねて機動六課に来てアルトさんに案内されて、その部屋の応接スペースにある椅子に座ってすぐに八神部隊長からいきなり姫に連絡が取れないか？と聞かれた。

その話に疑問の声をあげる私に八神部隊長が、その理由を教えてくれた。

「そうでしたか…それで、今回ここに来た理由と言うのが実は…その事についてなんです。」

「いったいどういう事や？」

八神部隊長からその理由を教えてもらった私は、今回ここに来た理由がその事についてである事を告げた。

それを聞いた八神部隊長は、その理由を私に聞いてきた。

今回、なぜ姫とノアさんに連絡が取れなくなったと言えば…。

それは、地上本部のレジアス中将が今回の機動六課への査察にもし姫が関与するなら厳重に処分すると言う情報が舞い込んできたきたと事に端を発する。

この情報を知った副指令とミオさんの父親でファントムの最大のスポンサーであるメイファ財団の総帥であるタキゾウ・メイファさんは、レジアス中将と姫との関係を悪化させないよう副司令に指示。

そして、副司令がミオさんに姫とノアさんそれに私の通信回線を非常時以外閉じるよう指示しこうなった。

本来なら、連絡を取らないよう姫や私達に言えば済むんだけど…姫…そう言われても聞く耳を持ってくれなくて…。

「それで、あの鉄仮面…もといケイン副司令が強行手段をとったって訳やな…」

「はい…その通りです」

「それにしても…その情報本当なのか？俺にはあの中将が姉貴にそ

んな事…言うなんてな…どうも…」

「私もユウと同じよ。だって、確かミツキさんとレジアス中将って相当仲が良くてその信頼関係もかなりなもんなハズよ？」

「うんうん」

私の話を聞いた八神部隊長は、腕組みをしながら私の話をまとめ私はそれで間違いない事を告げた。

そのやり取りを見ていたユウさんにティアナさんが疑問の声をがえその声にスバルさんも大きく頷きながら自分も同じ考えである事を示していた。

「私も…最初はそう思いました。ですが…今の情報源というのが…レジアス中将の娘さんでその補佐官の…オーリス・ゲイツ陸上三佐なんです…」

「お…オーリス三佐やと！！」

「あの…お嬢が？…どうやらこりゃマジな話らしいな…」

ユウさんとティアナさんの疑問に対し私は、その情報源がオーリス三佐である事を告げその声に八神部隊長が驚きの声をあげその一方でユウさんは、やれやれと言った様子でその情報が本当である事に納得していた。

「はい…オーリス三佐は、レジアス中将にそう直接指示された後姫に連絡したそうなんですが直接連絡が取れなかったみたいで…それで、ナカジマ三佐にウチの相談役…それにタキゾウさんに今回の事

を告げそれの対処するようお願いしたみたいなんです。どうやら、オーリス三佐も…姫と中将との仲を悪くしたくないみたいです…」

「そりゃ、そうだろ…なんせレジアス中将はミツキとユウにとっちゃ命の恩人みたいなもんだしレジアス中将もミツキに色々と助けてもらってたしなぁ～」

「ヴァイス陸曹！！」

「ヴァイス君…いったいどうしてここに…」

私は、皆さんのが落ちつた所でその詳細な内容を話し始めた。

そして、その話が終わった所でその部屋にヴァイス陸曹が何かのファイルを持って現れた。

そのいいタイミングでの登場にアルトさんは驚きそして、高町隊長がここに来た理由を彼に確認していた。

「いや～ヘリの補給物資を頼みたくて部隊長にその許可を貰おうと思ってここに来たんですが…部隊長室に来て見たらナリアの話をみんなが真剣な顔して聞いてるもんだから…こう入った方がインパクトあるかな?っと思いまして」

「インパクト抜群やったわ…ヴァイス君」

「そりゃどうも…部隊長」

高町隊長にヴァイス陸曹は、手で自分の頭をかきながらその理由に答え八神部隊長は、その理由の最後部分にあきれながらその感想を

述べヴァイス陸曹がそれに答えていた。

「それはそれとして…なんで中将が俺と姉貴の命の恩人みたいなもんなんだ？」

八神部隊長とヴァイス陸曹のやり取りを見ていたユウさんは「そんな話聞いたことがない」と言ったような表情でヴァイス陸曹に詳しい話を聞こうとしていた。

「なんだ？ミツキから聞いてねぇのか？ったく…あいつは…。まぁいい、お前とミツキが当時いた施設が襲撃された時、その情報をレジアス中将がいち早く入手して当時地上本部でゼスト隊の分隊長をしていたゼスト隊長にその施設の関係者の救出を命令。そして、その分隊にいたスバルの母さんのクイント・ナカジマとこの間ミツキ達が保護したルーテシア・アルピーノの母親であるメガーヌ・アルピーノそして、当時休暇で近くを訪れていたティアナの兄…ティーダ・ランスターがミツキとユウを救出したって訳。そんでもって、オーリスとミツキが友達になるよう仕向けたのもレジアス中将だって話だぜ」

「へぇ～母さんが…ミツ姉とユウ兄を助けたんだ…」

「兄さんも…そうだったんだ…」

「なるほど…そう言う事か…」

「そう言う事」

ユウさんの話に姫から話を聞いていない事を確認したヴァイス陸曹は、ユウさんと姫が管理局に保護された時の事を話始めそれを聞い

たスバルさんとティアナさんは、驚いてきユウさんは納得し声をあげその声にヴァイス陸曹がそれに答える。

「ちなみに～！！ヴァイス陸曹と先輩が知り合うきっかけってのは…ヴァイス陸曹がオーリスさんをレジアス中将の娘だと知らずにナンパした事がきっかけでぇ～その事でぇヴァイス陸曹は、オーリス三佐に逆らえないそうでぇ～す！！」

「アルト！！てめぇ！！余計な事を言うな！！（ポカッ！）」

「痛ったぁ～い！！いきなり殴らないで下さい！！」

その後、アルトさんがヴァイス陸曹と姫がどうして知り合いになったのかの理由を言いそれを聞いたヴァイス陸曹がどうやら彼にとってはその事が余計な一言だったらしくアルトさんの頭を殴りつけそれに対しアルトさんは頭を手で抑え涙目になりながらヴァイス陸曹に文句を言っていた。

「そうなると…まいったな～査察が入る前にミツキにチェックでもしてもらおうと思ったんやけど…」

「私も…ヴィヴィオ…私がいなくなるとすぐに泣き出しちゃうから…その事を相談しようと思ってたんだけど…」

「う～ん…高町隊長の方は、査察が終われば通信回線ももとに戻すとの事なんで査察の後という事であればなんとかなりますが…八神部隊長の方は…」

「それにしてもナリアちゃん？なんで地上本部の制服着てるの？確か…ナリアちゃんって管理局に所属してなかったんじゃ…」

大方の話が終わった所で八神部隊長と高町隊長がそれぞれ姫に連絡が取りたかった理由を言いそれに私が答えた所でスバルさんが私の格好を見て質問してきた。

「あっ！？これはですね…姫が通信出来なくなってそれに今ファントム本部にある姫の執務室に缶詰状態になってて、その他の業務…特に陸士１０８部隊の技術開発室の業務が滞ってしまいまして…それで私がその代理としてギンガさんに制服をお借りして色々と回っているんです。でも…本当は私…今日お休みで…これも…ボランティアなんです…副司令の指示で…」

「ナリアちゃんも色々と大変なんだね…」

「あっ…でも、ナカジマ三佐がそれを聞いて臨時のアルバイトとして雇ってくれたんで問題はないんですけど…」

「それやーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「ぶ…部隊長…いったいどうされたんですか…」

「びっくりした～」

スバルさんの質問に私は、憂鬱な顔をしながら答えたらそれをみたアルトさんがなんだか可愛そうな顔をしながらその感想を言いそれを聞いた私は、ナカジマ三佐が助け舟を出してくれたくれたことを説明した所で八神部隊長が私を指差し大声をあげた。

その声にティアナさんとスバルさんが驚きの声をあげる。

「なぁ…ナリア…ちょ～っとウチに協力してくれへんかぁ～」

「な…なんですか？八神部隊長…」

「いやな…ウチ今…いい事思いついたのよ…これがうまく言ったら…一石二鳥にも三鳥にもなるんやけど…」

八神部隊長は、なんだか不気味な笑みを浮かべながら私に近づいてくる。

それを見た私は、恐れおののきつつそれが何かを聞いてみるが部隊長はその不気味な笑みを崩さないままゾンビのように両腕を前に出しながら私にさらに近づいてくる。

「ナリア…そんなに怖がらんと…安心し…ウチがやさしくしてあげるから…（ニヤ～）」

「や…八神部隊長…何…訳のわからない事を…イーーーーーヤーーーーーーーーーーーー！！（泣）」

私…いったいどうなるんでしょう？

（次回に続く！！ｂｙアルト）

その５８（後書き）

感想待ってます！！

その５９（前書き）

機動六課　隊舎前

オーリス視点

ブロロロロロロ…キィ！！

ガチャ。

「お待ちしておりました。オーリス三佐」

「お出迎えありがとうございます。八神部隊長…あなた自らここに来たって事は…私がここに来た訳もわかっているってことね」

「ええ…」

「なら、話が早いわ…ね…えっ…？」

私が車から降りた所で八神部隊長…それにフェイト・テスサロッサ・ハラオウン執務官にシグナムライトニング分隊副隊長が私を出迎えた。

それに対し私は、そのお礼をいいつつも今回私がここに来た理由を八神部隊長に確認しすぐにでも査察を始めようとしつつもふと辺りを見渡しある一点に目が止まり驚きの声をあげた。

「あの子…やっぱり！！（イラッ）」

ツカツカツカツカ。

「あの…オーリス三佐…いったい…どちらへ？」

「ちょっと野暮用を思い出したのよ。少し待ってて」

「ハッ！！」

そう呟いた私は、その方向に向かい歩きだした。

それに気がついた部下の一人が私に声をかけそれに対し私は、その場で待機するようその部下につげた。

なのは視点

「ひ～めちゃ～ん！！なのはママぁ～！！早く早く！！」

「姫ぇ！！遅いですよ～なのは隊長もぉ！！」

ナリアちゃんとヴィヴィオが私とミツキさんの先にある芝生の上からこちらを振り返り私達を呼ぶ。

「はぁ～い…ヴィヴィオちょっと待ってよ」

「はいはい…今行くから…」

私とミツキさんは、その声に答えつつ少し急ぎながら二人の所へと

向おうとその歩みを速める。
すると…。
ツカツカツカツカ…ドドドドドドドドドド…
「あっ!!オーリ（ガシ!!）うわぁ!ちょ…ちょっと…オー…」
「高町隊長…少しの間このバカ（ミツキの事）借ります」
「は…はぁ…」
隊舎の方から物凄い勢いで現れたオーリス三佐は私にそう言い残しミツキさんの襟首を掴みそして、彼女を引きずりそのまま近くの物陰へと連れて行った。
私は、そのオーリス三佐の物凄い怒りの形相と「なぜ競歩？」と思いつつその光景にただ唖然とするしかなかった。
機動六課施設内　隊舎裏
再びオーリス視点
「あんた!!いったいなんのつもり!!」
建物の物陰にミツキ連れ込んだ私は、彼女を壁に背を向けるようたたせ彼女の制服を掴み声を荒げる。
「なんのつもりと…言われても…実を言うとナリアがこの間はやて

達が保護した女の子を高町さんが面倒見ていたんだけど…どうも彼女がいなくなると泣き出しちゃうみたいで…それで私に相談が来て…」

「それで、とりあえずナリアとその子を仲良くさせるよう仕向けてあなたが高町隊長に色々とアドバイスでもしようって訳…」

「そ…そうだよ…」

ミツキは、苦笑いしつつその理由を説明し彼女が企んでいる事を私が彼女に確認した。

「そう…。今回の査察にはあくまで手を出していないって訳…いいわ…なら、そう言ってなさい。調べればわかる事だから…」

「そうさせてもらうわよ…オーリス」

私は、呆れつつも制服から手を離しそして、彼女を睨みつつそう言い残しその場を離れた。

それに対しミツキは、私の背中を目で追いつつそう呟いていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その５９…始まります」

その59

その５９

機動六課隊舎内　廊下

オーリス視点

「何!!ミツキが六課に来ているだと!!」

「はい…。この間の地下道での事件の際、機動六課が保護した少女の面倒をどうやら高町隊長が見ているようでそのアドバイスをしに来たとか…」

午前中の査察を終えた私は、父であり上官のレジアス・ゲイツ中将に今のところの状況を報告…そして、ミツキが六課に来ている事とその理由も報告した。

通信画面の向こうで、私の報告を聞いた中将はミツキが来ている事を聞いた途端驚きそして怒りの表情をしながら声をあらげた。

「あのお人好しめが…犯罪者の口八丁なんかに騙されおって!!それで…ミツキは、査察に関与している証拠はでたのか?」

中将は、そう言いながら右手で拳をつくりその手を強く握り締めていた。

「それは、まだ出ておりません。それとファントムのケイン・メイファ副司令にも確認しましたがどうやらここ数日…ファントムの執

務室から出ていないようです。これが監視カメラの映像です。それとノアとナリア・アッシュベルト司令補佐官のここ数日の行動の記録がこちらになります」

「まさか…そこまでしておったとはな…。さすがは、メイファ財団の三男坊…やる事は徹底的だな…」

私は、午前中の査察の間にケイン副司令に送ってもらったファントムでのミツキの執務室にこっそりと仕掛けられた隠しカメラの映像をその場に表示させさらにここ数日のナリアとノアの行動履歴を文章にて表示させた。

それに対しレジアス中将は、そのケイン副司令の徹底振りに関心の声をあげていた。

「どうやら…あちらにとっても中将とミツキの関係悪化は、よくないのでしょう」

「その事については、わかった…。だが、相手はあのミツキだ。あいつがこのまま大人しくしているとは思えんしあの犯罪者の事だ！！ミツキを自分の昇進のために利用するに決まっておる！！いいか！！ミツキが今回の査察に関与している証拠と六課の粗を探しだせ！！それとミツキに監視をつけろ！！」

「監視…ですか？お言葉ですが…今更監視をつける必要はないかと…」

私は、ケイン副司令の行動のその裏を推理しそれを中将につげる。

その声を聞いたレジアス中将は、その一方的な解釈で八神部隊長が

自らのためにミツキを利用していると決め付けミツキに監視をつけるよう私に命じた。

その声に私は、疑問の声をあげる。

「監視…と言うよりボディーガード…と言った所だ、オーリス。ミツキがここにいると知ればあのハラオウン派の蛆虫どもがここにおしかけるだろうからな…そのためのものだ…」

「そうですか…なら、ユウもしくはアルトそれにヴァイスに連絡をとってそれなりに見てもうようにします」

「そうか…ユウにアルト…それにヴァイスか…ヤツ等なら心配ないな…念のためにメイファ副司令にも連絡をとってノア達にもフォローさせるよう伝えてしてもらうよう私から頼んでおこう」

「お願いします。では…」

ピッ！！

レジアス中将は、私に監視の意味を先ほどとはうって変わり優しい表情で告げる。

それを聞いた私は、その役目をユウに頼むよう言い中将はそれを了承。

そして、中将自らメイファ副司令にその旨を伝えると言い通信を終了した。

「いいのか?…今回の事で一番怪しいユウを味方につけて…」

「ヴァイス！！あなた…今の話を…」

報告を終えホッとした所で私の後ろからヴァイスが声をかけてきた。

「別に、聞くつもりはなかったんだが…つい…な？」

私の声にヴァイスは、手で頭をかきつつ苦笑いをしながらそれに答える。

「まったく…いいわ。その事については不問にしてあげる。それでユウについては、今の現状で私が信用出来る人間が彼を含めたあなた達くらいしか周りにいなかっただけよ」

ヴァイスの声に私は、ため息をつきながらヴァイスの行動を許しユウに頼もうとしている訳を話した。

「そうかい…。なら、帰る前までにいいから…ミツキと話せよ…あいつ…顔じゃ笑ってるが…心ん中じゃ…」

「わかってるわよ…そのくらい…。今回の事で一番辛いのは…中将と六課の間に挟まれたあの子なんだから…」

私の話を聞いたヴァイスは、なんだか申し訳なさそうな顔をしながら私とミツキがまるでケンカをしていてその仲介役をかってでたかのように私に彼女と仲直りをするよう告げる。

それを聞いた私は、窓の外でアルトとその保護した女の子が遊んでいる様子を見ているミツキを見ながらそのヴァイスの話に答えミツキをそれとなく警護するようヴァイス命じ午後の査察へと向った。

機動六課施設内　訓練スペース

ユウ視点

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ドカッ！！

「うわっ！！」

「それまで！！」

ビシッ！！

「まいりました…」

今訓練スペースでは、スバルとナリアが組み手をしていてスバルの攻撃にその場に倒れこみ起き上がろうとするナリアに対しスバルはさらに追撃しようと右腕の拳をナリアの向けて放とうするがティアナの声にその拳をナリアの顔の前で寸止めした。

そして、起き上がろうしていたナリアはティアナの声とスバルの拳を目の前に自ら負けた事を宣言。

「ヴィータ副隊長！！終わりました！！」

「んで、結果は…」

「スバルさんの五戦全勝です」

「まっ…当然の結果だろうな…」

「そっか…。おっかしいなぁ～」

スバルとナリアの組み手を見ていたエリオは、少し離れた所でのその様子を見ていたヴィータ副隊長と俺にそれが終わった事とその結果を伝えに来た。

その結果を聞いたヴィータ副隊長は、その結果に首を傾げていた。

「何が「おっかしいなぁ～」なんです？ヴィータ副隊長？」

それを見た俺は、その結果に不満そうな顔をしているヴィータ副隊長に声をかけてみた。

「だってよぉ～。あれでも、ミツキの補佐官だろ？なら、それなりに強ぇ～ハズ…。そんでもって、なんでスバルと組み手をさせたかって言うと…そもそも私の見立てじゃナリアってスバルと似たようなもんだと思ってな？それで、スバルのレベルアップのために…と思ったんだが…」

「すいません…」

「で…でも！！ナリアちゃんって！！すごい防御うまいんですよ～！！私も何発も…防がれちゃったし…」

俺の声に対しヴィータ副隊長は、その理由を告げその話をスバルと共に組み手を終え俺達の所に来たナリアはそれに対し落ち込みながら謝りそれをスバルがすかさずフォローする。

「でも…確かに防御は、すごかったけど…攻撃の方は…私が言うのもなんだけどからっきしダメだったわよね…」

「は…はい…その通りです…」

「てぃ…ティア…（汗）」

スバルのフォローにティアナがそのフォローをまるでぶち壊すかのように追い討ちをかける。

その声にナリアは、よりいっそう落ち込みを見せスバルはティアナに対し冷や汗をかきながらこれ以上フォロー出来そうにないといった様子。

「そんなに落ち込むなよ…ナリア。そもそもお前は、スバルと同じ格闘タイプじゃねぇんだからな」

「ユウ?そいつは、いったいどういう事だ?」

落ち込むナリアを見かねた俺は、ナリアにそう声をかけ彼女の肩をポンと叩く。

それをみたヴィータ副隊長は、その理由を俺に聞いて来た。

「まっ、口で言うより実際に見せた方がいいでしょ?ヴィータ副隊長?それでいいな?ナリア?」

「で！ですがユウさん…」

「心配すんな…。姉貴には、許可を取ってある…つ～か姉貴のヤツ…相当怒ってたぜ?ヴィータ副隊長の勘違いに…「バッカじゃねぇか?」ってな?」

「へぇ～そうかよ…（怒）なら、どうすればいい?」

ヴィータ副隊長の声に俺は、実際に見せると言いナリアにもそう告げる。

それを聞いたナリアは、俺に反論するが俺はすでにウチの姉貴に許可を取った事とその時の姉貴の様子を彼女に告げた。

すると、今度はヴィータ副隊長がどうやら俺の話にイラッとしたらしく自分はどうすればいいのか俺に聞いて来た。

「（かかった…）そうですね～。なら、ヴィータ副隊長がスバル達に向って攻撃してください。それをナリアが守るって事で…「わかった…言っとくが本気で行くからな…」了解しましたよ。さてと…ナリア…お前は、ヴィータ副隊長の攻撃からスバル達を守れ!!ちなみにこれは、ウチの姉貴…いや…サエグサ司令の命令だ!!ちなみにコレが命令書…いいな!!」

「姫からの命令…それにこれは…本物の命令書…。はい!!わかりました!!」

その声に対し俺は、ニヤリとしながらどうするのかを説明。

そして、それを聞いたヴィータ副隊長はすぐさまアイゼンと取り出し攻撃をする準備を始めた。

それを見た俺は、次にナリアに対し姉貴の名前と姉貴から預かっていた命令書をナリアに見せそして、指示を出す。

それを聞いたナリアは、姉貴の名前そして命令との言葉…そして、その命令書を見た途端目の色が変わり真剣な表情で俺の話に返事をする。

（ちょ…ちょっとユウ!!こういっちゃなんだけど…彼女…本当に大丈夫なの?）

（心配すんなって…ヴィータ副隊長も言ってたろ?ナリアはあれでも、姉貴の補佐官をやってるんだぜ?まぁ見てなって…。もし、やばくなったら俺が止めるから…）

「（まったく…もう!わかったわよ!）ナリア…任せたわよ」

「任せて下さい!!ティアナさん!!」

俺とヴィータ副隊長のやり取りを見ていたティアナは、俺に念話をしてきた。

そんな心配そうなティアナに対し俺は、あっけらかんとした声でそれに答える。

ティアナは、俺の声に呆れつつも納得しナリアに向って声をかけそれにナリアは笑顔で答える。

「ナリアちゃん!!頑張ってね!?」

「よ…よろしくお願いします。頑張って下さい!!ナリアさん」

「ファイトです!!ナリアさん!!」

「ありがとうございます。スバルさん、キャロちゃんそれにエリオ君」

ティアナに続きスバル、キャロ、エリオの順でナリアに次々と声をかけナリアもそれに答える。

～そして、それからおよそ5分後…～

「全員…準備はいいですか?」

「ああ…いつでもいいぜ?」

「はい!!こっちも準備ＯＫです!!」

「それじゃ、始める前にルールを確認するぜ。ヴィータ副隊長は、スバル達に攻撃をしそれをナリアが止める…一発勝負。んで!勝敗のつけ方は、ヴィータ副隊長の攻撃がナリアの防御魔法を撃破すればヴィータ副隊長の勝ち。んでもって、ナリアがそれを止めればナリアの勝ち。スバル達は、ナリアの防御魔法が壊れるギリギリまでその場から動かない事!!でも、まずいと思った時点でその場から離れる事を許可する。それでその判断だが…ティアナ…お前に一任する。だが…ナリアの防御魔法が壊れるギリギリまで逃げるなよ。

ちなみに俺が審判って事で…いいな？」」

「ああ…わかった…」

「了解しました」

「あんたが一番安全な役回りって所が、正直納得出来ないけど…いいわよ」

ヴィータ副隊長の準備が完了した所で、俺が2人に声をかける。

俺の声にヴィータ副隊長、ナリアの順で準備ＯＫの声が聞えその後俺がルールを説明した。

ルールを聞き話終えた所で最終確認を取りその声にヴィータ副隊長、ナリアそして、最後にいないち納得していなかったティアナがしょうがないといった様子でそれを了承。

そして、全員が所定の位置についた所で…。

「それじゃ…始め！！」

「いくぜ！！アイゼン！！＜ｙｅｓ！！＜うりゃぁぁぁぁぁ！！くらえ！！ギガント！！ハンマーーーーーーーー！！」

「絶対に！！スバルさん達を守ります！！ハァァァァァ！！イージス！！シェル！！！発動！！」

ガキーーーーーーーーン！！バチバチ…バチバチ…。

俺の開始の合図と同時にヴィータ副隊長がリミッターがかかっている状態のまま副隊長が持つデバイス、グラーフアイゼンにカートリッヂを2個使い魔力を底上げした。

そして、アイゼンをギガントフォルムに変えそのままナリアに向けて振り下ろす。

それに対しナリアは、スバル達の前に立ち右手を前に広らく。

すると、彼女の腕についていたリング状のアームドデバイス「リング・イージス」が彼女の腕から離れナリアの周りに大きなと輪になり彼女達を囲む。そこから白色の半球状のフィールド魔法「イージス・シェル」が展開。

ヴィータ副隊長の攻撃を阻む。

「はぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「こんのーーーーーーー!!…んな!!」

バチバチ…バチバチ…。ビューーーーン…。

プシュー。

「それまで!!ナリアの勝ち…だな…」

「ふぅ〜…」

「う…嘘…」

「す…すごいです！！ナリアさん！！」

「ナリアちゃんすっご～い！！！」

ヴィータ副隊長とナリアの拮抗がそれからおよそ5～10分続きそして、そのままアイゼンのギガントフォルムが音を立てそのまま動作停止しそれを見たヴィータ副隊長が驚きの声をあげる。

そして、それを確認した俺がナリアの勝ちを宣言した。

俺の声を聞いたナリアは、大きく深呼吸をしその一方でティアナ、エリオ、スバルの順で驚いた様子で声をあげる。

「ユウ…こいつはどういう事だ…詳しく説明しろ」

ヴィータ副隊長は、どうやらこの勝負の結果に納得していないらしく俺に対しイライラした様子で詳細な説明をもとめてきた。

「な～に簡単な話ですよ、ヴィータ副隊長。そもそもナリアは、相当不器用なヤツでしてね…。簡単に言えばそいつを守ると言う明確な目的と、守るヤツがいないと本気にはなれないんですよ」

「はぁ？なんだそりゃ？」

俺の説明に対しヴィータ副隊長は、疑問の声を上げる。

そりゃそうだろうな…。

俺も最初これを聞いた時…ヴィータ副隊長と同じだったもんな（笑）

「つまり…ナリアは、防御する事に関して天性の素質を持っているんでがそれを使うためにはそれを行使するための目的とその対象が目の前にいないと本気になれないって事なんですよ…。そして、その防御する事の天性の素質のひとつがナリアのみが持つ先天魔法…イージス・シェル…。どんな魔法かについては今見た通りって訳なんです」

「なるほど…それで、ヴィータ副隊長に私達を攻撃させるような事をさせさらにミツキさんからの命令ってナリアに言ったって訳ね…。そして、それを彼女にわからせる為にわざわざ命令書までミツキさんに出してもらって」

「ああ…。なんせ、ナリアは俺のいう事を聞いてくれないからなぁ～…。だから近くにいた姉貴に許可を取った時にそれと一緒に命令書を預かったんだよ」

「当たり前です！！ユウさんは、私に取って上官ではありませんから」

俺の説明を聞いたティアナは、俺が取った行動を思い出しながらなぜそんな事をしていたのか納得しながら俺の話に続く。

そして、さらに俺がそれに説明を付加えた所ナリアはその理由をキッパリと言い放った。

「それに気づいた姉貴は、フェラルドとノアに警護術を徹底的にナリアに対して叩き込ませたんですよ。だから、スバルとは戦闘タイプが違うって事なんです。ヴィータ副隊長」

「なるほどな…。格闘タイプと言うより防御専門って訳か。なるほ

どなるほど…うんうん。それについてはわかった…。だがな…それはそれ!!これはこれだ!!勝負はまだ決着がついて（ガン!!）…ねぇ…（ガクッ）」

「まったく…こんな事やろうと思ったわ…」

「ぶ…部隊長!?」

「いったい…どうされたんですか?」

俺が説明を終えた所でヴィータ副隊長は、どうやら俺の説明…と言うよりどうやら勝負に負けた事が納得いかなかったらしい…。再びアイゼンを手にし、ナリアを攻撃しようとした所でその後からいきなり現れたウチの部隊長に小槌で頭を殴られ…そのまま気を失いその場に倒れた。

それを見たスバルは驚きそして、ティアナが部隊長に声をかけた。

「いやなぁ…ユウとミツキが話しをしてる内容をなのはちゃんが聞いててな…。それをウチに報告してくれたんやけど…。ヴィータのヤツが、やりすぎないか心配になって来てみたんよ…そしたら、こうなってたからなぁ～。そんで、ヴィータにお仕置きついでにこれを止めたって訳なんよ～。なんせ今回は、ナリアちゃんに迷惑をかけっぱなしやからな…」

「なるほど…」

部隊長の説明にスバル達は、納得した様子でその話をうなずきながら聞き俺はそれを声にだしながら納得していた。

なぜかと言えば、

なんせ今回の査察…姉貴のヤツがウチの部隊長に色々とアドバイスをしてたからな～。

ナリアを使って。

んで、どうやったかと言えば…。

昔、ウチの部隊長と姉貴との間にはいくつかのいつでも連絡が取れるようにってんで直通の回線…所謂ホットラインってのがあって…今回それのひとつを使って情報をやりとりしてたって訳。

ちなみになんでナリアがこれに関与していたかと言えば、これをやるためにはそれぞれ設定やらなんやらが必要でな。ナリアは、回線が通じるまでの間六課とファントムの両隊舎の間を何度も行ったり来たりしてもらったのよ。

でも、まぁ姉貴の執務室に隠しカメラがあった事はとっくの昔に姉貴が知ってたから一応いろんな偽装工作をした上でだけどな。

つまり…姉貴は今回の件については、手を出してはいないが口は出したって訳。

さらに、それがケイン達にバレないためになのは隊長の相談に姉貴がのってそれをナリアが試すといった形で査察対策のカモフラージュのためとの事でヴィヴィオの面倒をみてたんだよ。

これは、カモフラージュ以外にもヴィヴィオがなのは隊長以外の人にもなれるため…なんだが…。

んで、なんで?ナリアかと言えば…あいつ施設にいた頃よく年下の子の面倒をみてたんだよ。

それで、こういう事には慣れてるからって理由でナリアが姉貴と部隊長とのやり取りを手伝いながらヴィヴィオの面倒をみてたんだよな…。

もちろん、臨時のバイトって事で六課からその分の給料はでてるがな…。

そんでもってなんでケイン達にバレなかったかと言えば…

姉貴も部隊長もそのホットラインの事をすっかり忘れてたらしくミオやケイン達にその事を言ってなかったって事らしい…。

もちろん、この回線がバレないように俺と姉貴であれこれ偽装をした上でだけどな。

ちなみに、このホットラインについてはオーリス三佐も中将も知らないらしい。

それに…じじいもノアも俺もギンガも今まで知らなかった…。

まぁ…そのおかげで今回ある意味…機動六課最大の危機は、回避する事が出来たんだが…。

俺は、目の前でスバル達がナリアにあれこれ聞いてる光景をみながらそんな事を考えていた。

機動六課隊舎内　休憩スペース

ミツキ視点

「どうやら…寝ちゃったみたいですね…先輩」

「そうみたい…」

「なら、私…毛布持ってきますね。なんなら、先輩もヴィヴィオちゃんと一緒にお昼寝してもいいんですよ♪」

「そうね…眠くなったらそうさせてもらおうかな？」

休憩スペースにあるソファーに私の横に座っていたヴィヴィオちゃんは、何時の間にか寝ちゃったみたいで今は私の膝枕でぐっすりと寝息を立てていた。

そんな様子を見ていたアルトが私になんだか微笑ましい光景を見ているような顔をしながら私に声をかけてきた。

私は、それに彼女が起きないように小さな声でそれに答えそれを聞いたアルトは、布団と取ってくると言いその場を後にした。

「すぅすぅ…なのはママ…フェイトママ…ムニャムニャ…」

「（クスッ）いったいどんな夢を見てるのかな？ヴィヴィオちゃん

は…」

アルトがいなくなった後、私はヴィヴィオちゃんの寝顔を覗き込んだ。

すると、彼女は高町隊長とハラオウン隊長の名を言いながら笑顔になりながら寝言を言っていた。

それを見た私は、どんないい夢を見てるのだろう？と思いながら自分が着ていた制服の上着を彼女にかけアルトが毛布を持ってくるのを待っていた。

「あらっ？ここに入たの…ミツキ…」

「あっ…オーリス…それで証拠は出てきたの？」

そんな時、休憩スペースを訪れたオーリスが私に声をかけてきた。

どうやら、私を探してたらしく彼女を見た私は今回の査察で私が関与したと言う証拠が出たのか…それをすぐさま確認した。

「出なかったわよ…。そうじゃなかったら私がここに来る事なんてなかったわよ」

「あっ…そうだったんだ…ごめん…」

オーリスは、私の話をお手上げのポースをしながらそれに答える。

それを聞いた私は、もしその証拠が出たのであればオーリスがここには来ずに私が地上本部に呼び出されそして、直接中将から処分を

受けていた事を思い出し彼女に謝る。

「謝らなくってもいいわよ。もう終わった事だし…」

「えっ…そうなの？」

「ええ…今さっきお父様に結果を報告したわ。何も出なかったって」

「そうなんだ…」

私が、彼女に謝った所オーリスは査察はもう終わりってその結果はすでに中将に報告したと言ってきた。

それを聞いた私は、なんだかさらに申し訳ない気持ちになってしまった。

「まったく…別にあんたが責任を感じても仕方がないでしょ？」

「で…でも！！んぐっ！…」

そんな私を見たオーリスは、ため息をしつつ私に対し今回の事を私が気にする必要がない事を告げる。

それを聞いた私は、彼女に反論しようとするがオーリスは右手の人差し指で私の口を抑えてそれをさせてはくれない。

「あんた…あまり騒ぐとその子…起きちゃうわよ…」

私は、その声にヴィヴィオちゃんの顔を見つつハッとした表情をし再度オーリスの顔を見るが目でオーリスに「でも！！」と訴えてい

た。

「まったく…わかったわよ…。なら、今日の事はもういいから今後そうするのか先に教えなさい!!それでいい？」

私の目を見たオーリスは、どうやら私がいいたいことが解ってくれさらにそのしつこさに呆れたらしく私の鼻をツンツンと先ほど口を抑えていたと同じ指で突付きながら私が納得する答えを即座に考え私に伝えて来る。

それを聞いた私は、頷いてそれに答える。

「それで、これからどうするつもり？まさかこれからも事がある事に六課に関わるんじゃ…」

私の対面のソファーに座ったオーリスは、私の考えを聞こうとする前に自分が今思いついた予想を私に言ってきた。

「う～ん…本音を言ったらそうしたいんだけど…ゲンヤさんから…「いい加減に子離れしろ!!」って言われてるし…それに…（ボソッ）ヤバッ!!」

「それにぃ～!!（ギロッ）」

オーリスの予想に対し私は、それが当たりである事を言いつつついウッカリ口にした事をオーリスに聞かれてしまった思いとっさに口を塞ぐ。

だが、時既に遅し…オーリスは、私をギロリと睨みつつ私の話の続きを促す。

「それに…今回どうやらアイツが出てくるみたいなのよ…」

「アイツ？…それってまさか！！…あんたと同じ施設に入ったって言うあの…」

「うん…そのまさかよ…。私は、あいつを助けなくっちゃ…それが…あいつの命を奪う事になっても…」

「ミツキ…」

私は、失敗したなぁ～と思いつつオーリスに話の続きを話した。

それを聞いたオーリスは、それが自分の頭の中で今考えている人物と同じである事を私に確認して来た。

私は、それで間違いない事を告げさらにその決意をオーリスに伝える。

オーリスは、そんな私を見つつ何も言えないといった様子だった。

機動六課隊舎内　休憩スペースすぐ近くの廊下

アルト視点

「ど…どうしよう…どうしたらいいんですか？なのは隊長？」

私となのは隊長は、今先輩とオーリス三佐が話をしていた内容を２人のすぐ近くの廊下に隠れその話を聞いてしまった。

ヴィヴィオのために用意した毛布を両手で掴みながら私は、どうしたらいいのか？なのは隊長にこの事が先輩達にバレない程度の小さな声で聞いてみた。

それに対しなのは隊長もまたどうしたらいいのか迷っている様子。

「それは、それとして…その子…これからどうするつもりなの？六課は？」

「とりあえず、当面はこのまま高町隊長が預かってその間に養子縁組の相手を探すんだって」

「そう…。なら、難しいはね…この子との付き合い方…」

そんな中、オーリス三佐が先輩にヴィヴィオの今後のことについて聞いていた。

先輩は、今後の方向性をオーリス三佐に説明しそれを聞いたオーリス三佐は難しそうな声をだしながらそれを聞いていた。

「ええ…。ヘタに深く付き合っちゃうと別れた後に戻って来ちゃうかも知れないし…それに…この子…人造魔導士らしいの…それとこの子の両目…どっかで見た気がするの…もしかしたら…まだ何かあるかも知れない…。でも、一番大変なのが…今までヴィヴィオちゃん…ずっと一人ぼっちだったみたいで高町隊長に本当に懐いている

んだよね…だから、高町隊長…ヴィヴィオちゃんのお母さんになりたい気持ちとあの子の将来の事を考えた時の気持ちがぶつかってるんじゃないかと思う…。だって…どっちもヴィヴィオちゃんの事を考えてるんだから…もしかしたら、自分の気持ちを押し殺してちゃってるかもね…高町隊長？」

「それは辛いわね…とは言え、今の高町隊長の状態だと…この子を養う事は経済的には可能だとは思うけど…。でも、それには相当な決意が必要ね。だって…高町隊長ってまだ独身だって言うし。それにこの子を危険な目に会わせないためには、ここより安全な環境で…それでいてキチンとした家庭に入れる必要があるし…ともなれば…大変ね…」

「うん…。ヴィヴィオちゃんに比べたら…まだ私の方がよかったかもしれない…だって…私には、ユウやノア…それにオーリス達がいたし…それにゲンヤさんにクイントさんスバルにギンガにティアナ…中将にティーダ先輩…それにユン先生…みんながいてくれたんだもん…私には…」

「そうかもしれないわね…」

私となのは隊長は、２人バレないように隠れながらそのやり取りを静かに聞いていた。

そして、先輩達の話がヴィヴィオの話になってから、なのは隊長のその表情はより複雑なものへと変わっていった。

「な…なのは隊長…」

その表情に気づいた私は、なのは隊長に心配そうな表情で声をかけ

てみた。

そしたら…

「…アルト…ミツキさんってどうして、私が心の中に仕舞いこんだハズの気持ち…わかっちゃうんだろうね…」

なのは隊長はそう言いながら、自分の気持ちをまるで整理出来ないといった様子だった。

「えっと…私には、まだよくわからないんですが…でも、先輩曰く色々やってたから…その経験からああいう事を言えるみたいなんですって」

「色々な…経験…」

「はい！！だって先輩って！ユウとギンガさんにスバルにティアナをノアと一緒に面倒みたり…ファントムの司令官やったり…それに今じゃ地上本部の少将までやってるんですよ？そりゃ、色々と失敗とかもしてるみたいですし…それに…」

「それに…昔、ものすごい悪戯とかしてるのよね～！オーリスとヴァイスと一緒に！！」

「そうそう！そうなんですよ～！！えっ？…せ…先輩…いつの間に…」

なのは隊長の質問に私は、その理由を言いそれをなのは隊長が詳しい事が聞きたいらしくさらに聞いて来たから私は調子に乗って大きな声で詳しく先輩の事を言っていたらいきなり先輩が私の目の前に

現れた。

「そりゃ、あんな大きな声で話をしてたらオーリスだって気がつくわよ（ジロッ）」

目を丸くする私に対し先輩は、その理由を私を睨みながら言った。

「あの…、もしよかったら…さっきアルトが言ってた事…その経験を詳しく教えてもらえませんか？私…ヴィヴィオとどう向き会っていけばいいのか…」

「わ…私のは、失敗談オンパレードだからそんなに詳しくは…でも、オーリスも仕事を抜きなら相談に乗ってくれるって言ってるから私の経験談を聞くって言うより向こうでみんなで一緒に話をしない？その方が今よりも気持ちが楽になるハズだから…ね！？」

「はい…わかりました…でも…ヴィヴィオが…」

「心配しないで…まだぐっすり眠っているわよ…でも、アルトがまた調子にのって大きな声を出さなければ問題はないんだけど…（ジロッ）」

「すいません…以後気をつけます…」

私と先輩のやり取りを見ていたなのは隊長は、まるで意を決したように先輩に質問をする。

それに対し先輩は、それが自分の失敗話になる事からその事を避けつつ向こうで一緒に考えようと私達を誘う。

なのは隊長は、それを聞きヴィヴィオの事を気遣った。

でも、先輩は、大きな声を出さなければ問題ないと私の方を見ながらそう告げる。

そして、私は以後気をつける事を言い先輩達と共にヴィヴィオの元へと向かいそれからオーリス三佐と共になのは隊長の相談に乗っていた。

そんな中、私はさっき先輩達が言ってた「アイツ」の事が気になっていたが…その事を結局聞く事が出来ず…そして、先輩とナリアちゃんは、オーリス三佐のが乗ってきた車で帰っていった。

その５９（後書き）

感想待ってま～す（笑）

その６０（前書き）

機動六課施設内　訓練スペース

ユウ視点

「ハァァァァァァァ！！」

バキッ！！

「ウォォォォォォォォォ！！」

ドカッ！！

「すごっ…」

「おいおい…朝っぱら元気だねぇ～…あの姉妹…」

「ユウさん…何年寄りみたいなセリフ…言ってるんですか…（汗）それにしても…すごいです！！スバルさんにギンガさん！！」

「確かにすごいけど…いい加減終わってほしいです…でないと首が…」

ティアナ、俺、エリオ、キャロの順で上を見ながら上空で双方ウイングロードを展開し模擬戦をしているスバルとギンガの２人の様子を見ていた。

2人は、自分で出したウイングロードの上を走りながら交差する度リボルバーナックルを繰り出しその度に金属音が辺りに響き渡っていた。

んで、なんで俺がここにいるのかと言えば…。

ギンガに起こされたんだよ！！

たまには、訓練しろってな…。

それも…セットアップして俺とエリオの部屋に乱入したかと思えばいきなり左手にあるリボルバーナックルで俺が寝ていたベットを破壊…。

運良くそれを避けそこから逃げ出そうとする俺に対し、あのヤロー…間髪入れずに廻し蹴りを噛まし…そしてここまで引きずられてきたって訳…。

んでもってついさっきまでエリオの相手をしていたんだが、その横でスバルとギンガの模擬戦にここにいた俺達もそして、なのは隊長にフェイト隊長…そしてヴィータ副隊長までもが何時の間にかその手を止め二人の戦いを見入っていた。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「うわっ！！」

ビシッ！！！

「はい…そこまで～！！」

「くやしい～！！もうちょっとだったのに～！！」

「まさかここまで強くなってたなんて…驚いちゃった…。でも…いいね！！スバル！！」

上空で交差しながら戦い続ける二人…。

その終わりは、交差した所でスバルの拳をギンガが交わしそして、そのお返しと言わんばかりに今度はギンガスバルに拳を繰り出す。

スバルは、そのギンガの乱打を最初は交わしたり防御していたがバランスを崩しその隙をついたギンガの一撃がスバルの顔の直前に来た所でなのは隊長の終了の声が響き渡りギンガは、その拳をスバルの顔に当たる直前で止めた。

そして、その後スバルは悔しさを露わにしその一方ギンガはスバルのその急成長ぶりに驚きそしてスバルを誉めていた。

「どうだった…ギンガ」

「ええ…すごくよかったです」

「ユウ君は？見ててどうだった？」

「正直驚いてますよ…。まさか、ほんの数ヶ月見てなかっただけであんなに強くなってたとはね…」

「そのうちあんた…スバルに抜かれるわよ？このままだと？」

「それならそれで構わないさ。そうなりゃ、俺が楽になる…」

「ユウ君…相変わらずだねぇ…（苦笑い）」

スバルとギンガの模擬戦が終わった後、俺とギンガはなのは隊長とフェイト隊長に呼び出され今の模擬戦の感想を聞かれそれぞれにその感想を言いそれを聞きそれに俺とギンガが答える。

俺の答えを聞いたギンガは、俺がスバルに抜かれるとニヤニヤしながらプレッシャーをかけてきたがそれには乗らずさっさと抜いてくれと言わんばかりな態度でそれを返す。

それを聞いたなのは隊長は、苦笑いをしながら俺とギンガのやり取りを見ていた。

「そう言えばギンガ？いいのか？六課に来て？」

「仕方が無いわよ。そうなっちゃったんだから…。それにミツキさん…あれからファントムの隊舎に篭りっ放しで少将の仕事も向こうでしてるみたいで…それで、少将補佐官の私の出番はなし！！って訳…。でも！！私だけ除け者にされるのが嫌だったからこの話を受けたのよ」

「なるほどな～…」

なのは隊長達との会話を終えた俺とギンガは、２人でクールダウンをしつつ今回ギンガが六課に出向なった事に対しギンガがその話を納得しているのか確認した。

俺の話に対しギンガは、最初こそ渋々といった様子だったがどうやら姉貴がファントムの司令官として動き出した事で自分だけ今回の事件から除け者にされる事が嫌だったらしく結果的に納得してここに来た事を俺に告げた。

それを聞いた俺もギンガの気持ちを理解しつつ納得した声をあげる。

「そう言えば…ヴィヴィオちゃん…だっけ？その後なのは隊長とうまく言ってるの？」

「ああ…うまくいってるみたいだぜ…あれ見てみろよ？ギンガ」

ギンガは、ストレッチをしながら恐らく姉貴から聞いたのであろうなのは隊長とヴィヴィオのその後どうなったのか聞いて来た。

それに対し、俺もストレッチをしながらなのは隊長達がいる方向を見てその様子を確認する。

そして、俺達の目の先でなのは隊長とフェイト隊長を迎えに来たヴィヴィオが2人の母親の目の前で転びそれを見たなのは隊長は一人で立つようヴィヴィオを促すが…。

だが、それが出来ずとうとう泣き出しそうな表情のヴィヴィオを見たフェイト隊長が急いでヴィヴィオ抱き上げ厳しいなのは隊長に怒っている様子を見ながらうまく言っていると答えた。

「まるで…アメとムチね…」

「そう？私には、なのはがクイントでフェイトがミツキさんで…そして、ヴィヴィオが小さい頃のスバルかギンガにユウに見えるんだ

けどなぁ～」

「ま…マリーさん!!な…何言ってるんですか!?」

「げっ…なんであんたがここにいるんだぁ?」

「相変わらず口が悪いわね～ユウ?なんでかと言えばギンガと一緒に六課に出向して来たのよ?という訳で当面六課にいるから～よろしく～♪」

なのは隊長達のやり取りを見ていたギンガがその感想を述べていた所、俺達の所に本局第４技術部主任のマリエル・アテンザが現れなのは隊長達をその昔クイントさんがまだ生きていた頃に実際にあった事を思い出させるような事を言ってきた。

それを聞いたギンガは、慌てた様子でマリーさんに突っ込みその一方で俺は、嫌な顔をしながらここにいる理由を聞いた。

マリーさんは、そんな俺をやれやれと言った様子でそれを見つつその理由を告げこれから当面六課にいる事を告げた。

「マジかよ…」

「マジよ…ユウ…」

そんなマリーさんの話を聞いた俺は、それが嘘である事をギンガに確認。

ギンガは、そんな俺の微かな希望をまるで一蹴するかのようにそれに答える。

だってよ～。このマリーさん…。

ウチの姉貴が、局に保護された頃からの知り合いでクイントさんと一緒に色々と俺達の面倒を見てくれてた人の一人で俺やギンガの小さい頃の…。

つまり、今じゃ恥ずかしくて言いたくない事を色々と知ってるんだよ…。

俺とギンガとスバルのな…。

そうともなれば、こういった話が大好きなウチの部隊長なんかにそれが知れれば次の日には全員が知ったも同然で…。

なんだか頭が痛くなってきた…。

「そう言えば…今日は、ミツキ…来ないの？」

「そんなにホイホイと来れるもんかよ。あのクソ忙しい姉貴が…」

「今…ミツキさん…ファントムの方で手一杯みたいで…。ファントムの隊舎に篭りっきりみたいです」

「そうか…それは、残念…」

「あっ…でも、ミツキさんから前に六課から頼まれてた例の黒いガジェットのデータの解析が終わったからマリーさんに八神部隊長達に見せる前に確認してほしいってデータを渡すの頼まれてたんで後で見てもらえますか？」

「おっけぇ～！いいわよ！ギンガ！！」

俺達の話を終えたマリーさんは、ウチの姉貴が今日六課に来ないのかと辺りを見つつ聞いて来た。

それに対し俺は、姉貴が仕事で忙しい事をあげここには何度も来れない事を言いそれを聞いたギンガが先程俺に言ってた事と同じ事をマリーさんに告げた。

ギンガと俺の話にマリーさんは、残念そうな声をあげそんな様子をみたギンガが以前シャーリーさんから頼まれた黒いガジェットの解析が済みその確認をしてほしいと姉貴から頼まれていた事を告げその確認をマリーさんに依頼。

それを聞いたマリーさんは、笑顔でその依頼を受けていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６０…始まります」

マリーさん…それ…俺のセリフ…。

その60

その６０

機動六課隊舎内　資材置き場

アルト視点

「ちょっとユウ…本当にやるつもりなの？」

「ああ…。なぁ？アルト？お前はそろそろ戻った方が…」

「何言ってんのよ！！そもそもあんたを一人にしておいたら何しだすかわかったもんじゃないんだから！！それに…今回の事のそもそものきっかけは…私…なんだし…」

私とユウが今いる所は、隊舎内の補給資材やら物資…そして整備班の班員が仕事をサボやってこっそり作っていたプラモやフィギアなんかが隠された資材置き場。

そこで、ユウは、その場に胡座をかいて座り複数の画面をひらき耳にはイヤホンをつけそれを操作をしている。

その近くでユウの作業を覗き込んでた私は、急に心配になりユウに声をかける。

その声にユウは、作業をしつつその声に答えさらにこれ以上ここにいない方がいいと告げ私はここに残る事をユウに伝えた。

そもそもなんで、こんな事をしているのかと言えば先輩とオーリス三佐とのやり取りをこっそりなのは隊長と聞いてしまった事が始り。

あの後、先輩に話を聞いていた事がバレその場は何とかやり過せたのはいいんだけど…。

それと同時に先輩に詳しく話しを聞くチャンスを失ってしまいあれからなのは隊長に相談してみたんだ。

そしたら…。

「う〜ん…。こればっかりは、ある意味ミツキさんのプライベートの部分にも引っかかっちゃう…。と言うよりそれで逃げられちゃう可能性が一番高い。それに、はやてちゃんにもそれとなく聞いて見たんだけど…。正直あまりそこら辺の事にはもう深入りしてほしくないみたい。ほら?この間、アルト達がミオちゃんの家族が主催したパーティに行ったでしょ?どうもその事がクロノ提督の耳に入っちゃったらしくて…あっ!でも、アルト達がと言うよりフェイトちゃんやはやてちゃんがそこに行った事に対してなんだけど…。そういった事があったから…。とりあえずこの事については、もう少し待ってくれないかな?」

との事。

でも、先輩の事だから私達が手を拱いてる間にさっさと事を済ましてしまうだろうし…。それになのは隊長が八神部隊長にそう言い包められた可能性だって否定する事は出来ない。

そう思った私は、私はユウにその事を話をしそれを聞いたユウは今日聖王教会で行われるという機動六課の今後についての重要な会議に先輩が参加する事を聞きつけフェイト隊長に頼み込んで隊長の制服に盗聴器をつけてもらってこの会議をこっそりと盗み聞きしようとしているって訳。

「なぁ…やっぱ俺は、ファントムの権限とかでなんとかなるが…お前は…」

「そんなの関係ないよユウ。私だって知りたい…ううん。知らなきゃいけないと思うの。だってそもそもファントムのサポーターになったのも先輩をサポートするためだしあの時の先輩の顔を見る限り…先輩…その「アイツ」って人と相当仲が良かったように見えたんだ…。だからそんな人を先輩に殺させるような真似なんてさせたくないの!!それもし、局を辞めるような事になったら…その責任をユウにでもとってもらうからいいの!?…と言うか私としてはそっちの方が…ゴニョゴニョ」

「はぁ?お前何途中からゴニョゴニョ言ってるんだ?」

「えっ!!あはははははッ!!なんでもないよ!!なんでも…」

「まったく…何テンパってんだか…まぁいい。そこまで言うなら少し手伝ってくれ。少しばかり手間取っててな」

「おっけ〜」

ユウは、作業の手を止めないまま私がこの事がバレて何らかの処分を受ける可能性を心配してこの場から離れるよう言ってきたが私は、それを拒否。そして、その理由を言っていたハズが何時の間にか自分の願望に変わっていた。

それに気づいた私は、顔を真っ赤にしながらゴニョゴニョユウに聞かれないようにしてみたんだけどそれに対しユウはその事をツッコンできた。

ユウのツッコミに対し私は、今のが聞かれたと思い慌ててなんでもない事を手をパーにして自分の前に出しブンブンと振ってなんでもない事を告げる。

それを聞いたユウは、やれやれ…と言うかなんだか諦めた様子で私の様子に疑問の声をあげつつ私に手伝いをするよう依頼。

落ち着きを取り戻した私は、そのユウの依頼を了承。

そして、ユウの横に座りその作業を手伝い始めた。

～それから約２０分後～

「どう？」

「もうちょい…。おっ…きたきた」

「ホント？ねぇ！私にも聞かせてよ！！」

「ああ、ならこっちのイヤホンを使えよ」

「ホントだ…これ？部隊長の声だね」

「ああ、ちょうど始ったばかりって感じだな」

ユウと作業を開始してからおよそ２０分くらいがたった。

作業自体は、既に終わり後はフェイト隊長につけてもらっている盗聴器の電波をこっちでキャッチできれば向こうの話を聞く事が出来ユウがその電波を探しどうやら見つけたみたい。

その声を聞いた私は、ユウに私にも聞かせてもうらうよう言いユウは自分の両耳につけていたイヤホンの片方を私に渡しそれで聞くよう言いそのイヤホンを受け取り自分の耳につけそこから聞えてくる部隊長の声を確認。

それが間違いないかユウに確認をとり、ユウもその声が部隊長の声である事を確認しちょうど会議始ったばかりである事を示唆していた。

でも、どうしてフェイト隊長につけてた盗聴器の電波がここまで届くかと言えば盗聴器が発信している電波をファントムで使っている色んな施設を経由出来るようユウが設定してたんだって。

ちなみにフェイト隊長につけた盗聴器から発信された電波を先輩が乗ってきたヘリについてる無線機にこっそり受信出来るようにしてそこから色んな所を経由させてるんだって…。

いつのまにそんな事をしてたんだか…。

「なぁ〜に、昔姉貴が使っていた盗聴用のシステムをちょっと拝借しただけさ」

先輩のって…この姉弟…。

私は、笑顔でそう告げるユウの横顔を見ながら呆れながら耳につけたイヤホンから聞えてくる音に聞き耳を立てていた。

「へぇ〜…2人っきりで、何やってるんだろう?って思ったら…そんな事やってたんだ」

「誰だ!!…って…よりにもよって…あんたかよ…」

「2人ッきりでって、私たちまだそんな関係じゃ…」

私とユウがイヤホンの声に聴き入っていたら後から女の人の声が聞えてきた。

その声を聞いたユウは、すぐさまその声が聞えた方を振り向き声を荒げるがその人を確認した途端その緊張を緩める。

一方、私と言えばユウ同様その声が聞えた方を向きなんだか訳のわからない言い訳をしていた。

「まったく…。あなた達…これが犯罪だって事知ってる?あっ…でも、ユウにはその事自体…ファントムでの捜査活動って言えば関係ないんだったっけ?」

「ああ…その通りだ。だが…」

その女性は、私の言い訳を軽く無視しユウに向って声をかけながら近づいてくる。

ユウは、その話に了承しつつ私の方をチラッとみる。

「そうよね～。ユウはともかくとしてそこの女の子の方はこのまま私が報告しちゃったら…不味いわよねぇ～色々と」

「何が目的だ？」

ユウの様子を見たその女性は、その横にいた私の方を見つつユウに対し自分が優位な立場にいるという雰囲気をだしながら彼とのやり取りを続ける。

その態度にユウは、その目的を彼女に確認する。

「まぁまぁ…焦らない焦らない。ゆ～っくりといきましょう」

彼女は、微笑ましい笑顔を見せながらその場の空気を和ませようとする。

でも…その彼女がかけていたメガネがキラーンって光っていて…なんだか…怖い…。

（次回に続く！！）

その６０（後書き）

作者
「その６０をお送りいたしました。いかがでしたか？それとあけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします」

ミツキ
「あけましておめでとうございます。今年も「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～」をよろしくお願いします！！」

作者
「さて…新年一発目は、なにやらコソコソとした展開になってしまいましたが…。あっ…紹介を忘れてました。今回のゲストは、ミツキさんです！！」

ミツキ
「どうも～。って、新年そうそう私の紹介を忘れるってねぇ～…。でも、今回のって本編にもあったお話でしょ？」

作者
「はい。はやてがなのは達に機動六課の設立の理由を告げるところになります」

ミツキ
「でも…なんでユウが盗聴する事にしたのよ？」

作者
「いや～これについては、原作そのまま＋ファントムとの話合いっ

て事にすることは決まってはいたんですがどうも原作そのままってのが納得出来なくてこんな形にしたのとユウも参加させないとと思いまして…一応主人公ですし…」

ミツキ
「なるほどね…原作そのまんまだったらユウの事だから愚痴口はじまっちゃうしね…んで、最後に出てきた女性って…」

作者
「その方については、次回までのお楽しみって事で…それでは今回はここまで！！感想待ってます！！ミツキさん…〆のセリフ…お願いします」

ミツキ
「はぁ～い。それじゃ！！次回！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６１！！テイク…オフ…」

その６１（前書き）

機動六課隊舎内　資材置き場

アルト視点

「まったく…ここはこうして…こうなって…こうでしょ！！」

「そうだったんた…なるへそ…」

「なるへそ～じゃない！！これくらいいい加減ちゃんと設定出来ないとミツキを出し抜くなんて夢のまた夢よ」

「へ～い…わかりました～マリー先生」

「さっきまでのあの流れはいったい…」

私の目の前では、さっきまで（その６０の事）緊迫とした空気がいつの間にか…と言うよりあの後すぐにマリーさんはユウが設定していた盗聴システムの設定を確認し出した。

そして、ユウが設定を間違っていた所を発見しそこを直しながらユウに色々と教えていた。

私は、その急展開な状況についていけずポカーンとしながらそう呟いていた。

「さて…これでよしっ！！っと。ササッ…聞くわよ」

「聞くってまさかマリーさんもか？」

「そうよ？」

設定を終えたマリーさんは、自分で用意したヘッドフォンを頭に被りながら盗聴している内容を自分も聞くといいだしそれを聞いたユウが驚きながらそれを確認した。

「た…確かマリーさんってファントムに関わってないんですよね？」

「そうよ？」

「なら…まずいんじゃないですか？だって、さっき自分で…」

「だから、バレないようにやるんじゃない…。そのために設定をし直したのよ♪それにぃ♪一度やってみたかったのよね～こういうの♪…さっ…始るわよ…」

ユウの話にマリーさんは呆気らかんとしながらそれに答えそれを聞いた私が今度は、私がマリーさんに質問をした。

するとマリーさんは、今度はニヤリとしながらユウが設定し直した理由を告げ一人だけハイテンションな状態で盗聴を開始した。

「いいの…これ…」

「そうするしかねぇ～だろ…これ…」

そんなマリーさんに対し私とユウは、呆れながらこのまま行くしか

ない事を確認しあっていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６１…始まります」

その６１

その６１

聖王教会　騎士カリムの執務室

はやて視点

「と言うのが機動六課設立の主な理由や…」

カリムの執務室には、ウチとなのはちゃんにフェイトちゃんそれにカリムにリンディさんにクロノ君…そして、ミツキとあの鉄仮面…もといケイン・メイファ副司令が用意されたテーブルを囲むように座りウチの話を静かに聞いとった。

ウチは、その周りのみつつ機動六課の設立の理由であるカリムが持つ希少能力「プロフェーティン・シュリフテン」にでた予言…

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。死者達が踊り、なおかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、それに先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる」

この予言を地上本部の襲撃から始る次元世界の崩壊を意味すると解釈しそれを防ぐために機動六課を組織した事を伝えた。

でも、これは3年前までの予言…

カリムの話によれば去年から今の予言の内容に追加された事があるとの事。

それは…

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。死者達が踊り、なおかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、それに先駆けに数多の海を守る法の船ともくだけ落ちる。古よりの影の守護者、死せる王の影の守護者によりその役目を終えるだろう」

とその追加された内容の事も一緒に告げた。

それを聞いたなのはちゃん、フェイトちゃんそれにケイン副司令に後見人の方々はウチの話を真剣な眼差しでそれを聞いていた。

その一方でミツキはっちゅうと…まったく興味なしっちゅう顔をしながら外を見取った…。

まぁ…ミツキ自身、カリムの予言自体その曖昧な内容と人によってその解釈が違ってしまう事からあまり重要視しとらんかったしなぁ～。

それにそんな曖昧な内容の解釈であれこれ時間を費やすくらいなら、自分が持つ情報網を駆使してそれ以外の事件なんかを解決した方がいいと思っておって…。

さらにもし、その予言の事が現実になったとしてもカリムの予言よりも正確な情報がそんなドデカイ事ならそれが起こる前にはそれと

なくミツキの元に入ってくるらしい。

そんで、その情報が入るのはカリムの方が圧倒的に早いんやけど正確性で言えばミツキの方が上やから結果的にカリムの予言を聞かずともそれを防げばいいという考えなんやて。

けど、リンディさん達はそうは思ってはおらず当初ミツキを六課に呼ぼうとしたのもカリムの予言をそのミツキの情報網でより正確なものにしたかったらしいし予言の中に出て来る二つの影の守護者についてそのどちらかの可能性が当時あったミツキを抑えたいっちゅう気持ちがあったらしい。

その事については、この間のミオちゃん達の話とそれを裏付ける証拠も出てきた事からその事自体はなくなってはいるけど…。

カリムの話じゃ聖王教会の中ではいまだにまだミツキを抑える事は諦めておらんヤツがおるらしい…。

その中心人物が、マルゲ司祭…。

聖王教会の司祭様や…。

だから、今回ケイン副司令がミツキの警護って事でついてきたしカリムもクロノ君も無事に話し合いが終われるように気ぃ使っとった…。

その中で特にピリピリしとったのが、リンディさんやね…。

今回この事を準備しとった時からいろいろと手を廻していてケイン副司令のお父さんにもミツキが来るよう頼み込みそして、マルゲ司

祭をミツキに会わせんようカリムにあれこれ注文をつけとったしな…。

なんせ、あれだけやってもしミツキ身に何かあったら自分の顔に泥が塗られるようなもんやからなぁ。

それにケイン副司令の父親…つまりメイファ財団の総帥のタキゾウ・メイファさんから何かあったらなんて言われるか…。

「それで、今回ミツキさんに来てもらったのはいうまでもなく今回予言が一番起こるであろう地上本部で行われている公開意見陳述会に向けて連携してそれを防衛し予言を…（それは無理なんです…リンディ統括官…）えっ？…いったいどうしてなのミツキさん？」

ウチの話の後に続いたリンディさんは、ミツキに向けて今回来てもらった理由を告げいた途中…ミツキがそれが出来ない事を言ってきた。

それを聞いたリンディさんはその理由を確認する。

「お話については、わかりました。ですが、そもそも今回の公開意見陳述会にファントム・ナイツはその警備及びその事自体関わる事を地上本部から拒否されてます。それに私自身も少将としても一個人としても参加自体認めれてないんです。それで…」

「そんな事お前が聞くはずがないだろう？」

「まったく…。どうやら昔から馬鹿だとは思っていたのですがここまでとは…。いいですか？仮にもし、あなた方と我々が手を組んだとしてその事を知った地上本部が何もしないとでも思っているので

すか?もし手を組んだ事を知れば機動六課自体その警護にすらつかせない事もしてくるでしょう。それに手を組んだ事でその予言を覆したとして実験期間が終わった地上本部に戻る六課の人間は恐らく相当な仕打ちを受ける事になるでしょう。姫は、その事を考えそれを今回伝えに来たのです」

「そんな事は、ウチがさせません!!」

「出来るのですか?二等陸佐でしかないあなたが…」

「そ…それは…」

ミツキのその理由を聞いたクロノ君は、ミツキの性格からして地上本部が言って来た事を聞くはずがないと断言。

それを聞いたケイン副司令は、クロノ君に対しそれが出来ない理由を嫌味たっぷりな態度で言い放つ。

それに対し今度は、ウチがそうはさせないと言うがケイン副司令はウチの階級をあげウチの立場でレジアス中将に対抗出来るのかと言わんばかり態度でウチの声を一蹴。

ウチは…それに対し何も言い返せなかった…。

「貴様!!相変わらずの減らず口だな…。提督に向って…」

「ふっ…親の七光りで提督になったような人間に言われたくはありません」

「何を〜!!!」

「クロノ！！少し落着きなさい！！」

「ケイン君…。気持ちはうれしいけど…今日は、ケンカしに来たんじゃないからね…。ですので…我々ファントム・ナイツは公開意見陳述会が行われる1週間前からミッドチルダ周辺からの一時退去を要求されていて、もし要求を飲まなければ武力行使も辞さないとまで言ってきてまして…」

ウチがションボリとしていたその横で今度は、クロノ君が自分の階級をあげそれに向って毒舌を吐いたケイン副司令に対しその怒りを露わにする。

それに対しどうやら、昔からクロノ君と知り合いらしいケイン副司令はその事に臆する事はなく言い返す。

そのやり取りにリンディさんがクロノ君をそして、ミツキがケイン副司令を止めに入りその後ミツキが先ほど言いかけていた協力出来ない理由の続きを話をした。

「そんな…。それで、どうするつもりなんですか？」

「今のところ…まだその返事はしてないんですが…恐らく…一時退去せざるを得ないでしょうね。いくらなんでも事が起こる前に地上本部と殺りあってしまったら…。それこそスカリエッティの思う壺ですし…」

「ん？ミツキどないしたん？」

それを聞いたなのはちゃんは、ミツキにどうするのか聞きそれにミ

ツキが答えている途中…急に立ち上がりフェイトちゃんの側に近づいていった。

「あ…あの～私の顔に何か…」

「と！！言う訳だから後の事はよろしくね！？ユウにアルト！！それにマリー！！」

「もしかして…これが盗聴器って事…気がついてました（冷や汗）でも…どうしてそれがユウ達だと？」

フェイトちゃんに近づいたミツキは、フェイトちゃんが着ていた制服についていたピンバッヂに顔を近づけその場にいないユウ達の名をあげ何やらメッセージを伝えていた。

それを聞いたフェイトちゃんは、ミツキが自分がつけていたそのピンバッヂが盗聴器である事を知っていたか確認した。

「もちろん。なんせこの盗聴器、見た目がわかりづらい上こっちの魔力探査には一切ひっかからない地球製。そして、それを知ってるのは、私以外だとユウとマリーとミオちゃんくらいなもんからね。それにこの間の査察の時の私とオーリスの話をアルトと高町さんが聞いてたから…。その辺からちょっと考えたらすぐに予想をついたんで、あとは盗聴器の電波をミオちゃんに頼んで逆探知してもらってユウ達がいた場所にあった監視カメラで確認したって訳」

「そ…そうなんですか…」

「フェイト…あなたねぇ…」

「大丈夫ですよ、リンディさん。恐らくユウがハラオウン執務官に頼み込んだ事ですから…。それに今日は話合い…なんですよね？」

「まぁ…ミツキさんがそこまで言うなら…仕方がないわね…。その事についてはまた後でこってり絞らせてもらうからね。フェイト」

「はい…。リンディ母さん」

冷や汗をかいているフェイトちゃんに対しミツキはその理由を告げそれを聞いたフェイトちゃんはどうやら納得した様子。

そして、そのやり取りを見ていたリンディさんは頭を抱え苛立ちを抑えながらどうしてこんな事をしたのかフェイトちゃんを問い詰めようとする。

だが、そのやり取りにミツキが割って入り元々ユウがフェイトちゃんに頼み込んだのであろうと推察し原因はこっちにある事をリンディさんに告げる。

それを聞いたリンディさんは、これ以上の追求を辞め後に持ち越す事をフェイトちゃんに告げフェイトちゃんはそれを了承した。

「では…今のやり取りから判断すると、サエグサ司令…あなたの弟さん達にあなたの変わりをやらせるという事ですか？」

「いえ…と言うよりはやて達のやる事を手伝わせるだけです。だって…あの子は私じゃありませんし…私もあの子じゃないんですから…」

「そうですね…」

ミツキ達の今までのやり取りを見ていたカリムは、今のミツキの言動を自分なり解釈しそれをミツキ確認する。

それに対しミツキは、そのカリムの解釈を否定しあくまでウチ等の手伝いをさせると言いその理由を聞いたカリムは静かに納得していた。

機動六課隊舎内　資材置き場

ユウ視点

「うっそ～!!あれに気が付いちゃうの～!!」

「監視カメラってあったの?ここに?」

「いや…ここにはそんなものついていないはず…。やっぱり!!チッキショー!!姉貴のヤツ!!事前にセットしていきやがったんだ!!この間六課に来た時に!!」

「嘘…という事は、先輩…その事を事前に予測してたって事!?」

「ああ…恐らくアルトにオーリスさんとの話を聞かれた時にそう考えたんだろうな…。どうりであれからなんのリアクションもない訳だ…」

姉貴にフェイト隊長につけてもらった盗聴器がバレたのを知った俺とアルトは、なんでそれがバレたのか大騒ぎをするマリーさんを他所にどうしてバレたのかその訳を確認した。

アルトに監視カメラの事を聞かれた俺は、それがここにはない事を告げその周囲を確認。

するとウチの整備班の連中が置いてったフィギアの中につい最近まで見る事がなかったヒーロー者のフィギアを発見。

そのフィギアが持っていたカメラに隠しカメラがある事を確認した俺は悔しがりながら声をあげる。

それにしてもよりにもよってこの間ノアが別世界で買い占めたロボットヒーロー者のフィギアを使うか…。

確か…これって…ストームか…。

隠しカメラのついたフィギアを見たアルトは、今回の俺達の行動を姉貴が事前に予測していた事を俺に聞き俺はなぜその予測がついたのかを推察しアルトに説明した。

「それで、ミツキからのメッセージはちゃんと受け取った?」

「メッセージ?先輩から?」

「そうよ。ミツキは、ユウに自分達ははやて達の手伝いが出来ないからそれをユウに頼んだよ…」

「そうなの？」

落ち着きを取り戻したマリーさんは、俺に対し姉貴からのメッセージをちゃんと受け取ったのか確認。

それを聞いたアルトは、そのメッセージの内容を理解出来ずマリーさんにそれを確認。

マリーさんは、それをアルトに説明しそれを聞いたアルトが俺にそうなのか確認してきた。

「まぁ…表向きわな…。だが、アルトの話から推察すると姉貴のヤツ…どうやら自分で決着をつけたいらしいな…その「アイツ」ってヤツと…」

「そんな…」

俺の話を聞いたアルトは、愕然とした表情をする。

「ねぇ…その話、詳しく聞かせてくれない？」

「マリーさん？いったいどうして？」

「だって…このままだとあなた達、止まってくれそうにないし…。だから、私が知ってる限りの事を言うからとりあえず今は…ね♪」

俺とアルトのやり取りを聞いたマリーさんは、やれやれと言った様子で俺達の話を詳しく聞こうする。

それを聞いたアルトがその理由を確認。

マリーさんは、優しい顔をしながらその理由を告げ俺とアルトはマリーさんの話を聞く事にした。

その６１（後書き）

感想お待ちしております。

あと、今回小ネタで他の作者様の作品のキャラを無許可で使ってしまいましたことをここでお詫びします。

その６２（前書き）

機動六課隊舎内　資材置き場

マリエル視点

「なるほど…それで…」

「ああ…」

「私達…どうしても先輩が何をする気なのかが知りたくて…」

私は、置いてあった木箱に腰掛け床に座るユウと別の木箱に座るアルトからどうして盗聴をしたのかその訳を聞いた。

それにしても…ミツキらしくないボンミスねぇ。

これが私が２人の話を聞いた最初の感想。

なんせミツキは、あれでもこういった事に関してはプロ中のプロの部類に入る人物。

それが、こういう他人には…と言うより聞かれたくない人物がすぐ近くにいる状況でそんな話をする時には特に慎重になるハズ…と言うより慎重にならなければある意味命取りになりかねない…。

これが、こういった情報を扱う者にとっては常識であるらしいしミツキも周りに常日頃口をスッパくして言ってるハズ…なんだけどなぁ～。

でも、相手があのオーリス三佐なら話は別…かもね…。

なんせ、オーリス三佐ってミツキの事を知り尽くしているしミツキにとってはあまり敵に廻したくない…と言うよりもっとも信頼している友人の一人。

小さい頃からレジアス中将の紹介で知り合ってから何かと言うと行動を共にしているしヴァイス君と3人でよく地上本部で悪戯とかして中将達によく怒られてたっけ。

そんな事もあってオーリス対してミツキのやその性格考え方とかを把握し尽くしちゃってて…それであの子…動揺でもしちゃったのかな?

とまぁ、昔の事を思い出しながらどこから話をしたらいいのか思考を巡らしていた。

「俺達の話は、以上だ…次は…」

ガチャ

「マリーさ～ん…いませんかぁ～って!!マリーさん!!ユウ兄達と何やってるんですか!?」

「スバル!!どうしたのよ!?こんな所に来て?」

私がそんな事を考えていた所、ユウが自分達の話を終わらせ私に話しをするよう言いそこで資材置き場扉が開きその中からスバルが顔を出してきた。

そして、周りをキョロキョロし私達を発見。
怒りながら私達に近づいてきた。
それを見たアルトが驚きながら声を上げユウは、盗聴器を急いで隠していた。
「マリーさんを探していたの!!私とギン姉の健康診断に一緒に行くために!!んで!!アルト達は、ここで何やってたの!!」
スバルは、腰に手をあて座っているユウ達を上から見下ろしつつ自分がここに来た理由告げそしてその後ユウ達がここにいる理由を聞いて来た。
「え〜…っと…その〜…」
「それはね。ユウとアルトが資材置き場の片付けをしてた時に偶然私がここを通ってね。それであれこれ喋ってたったって訳。そうでしょ?アルト、ユウ?」
「そ…そうなんだよね〜」
「そういうこった」
スバルの問いかけにアルトはシドロモドロになりその答えをどう言おうか迷っていた所、私が助け舟をだしそれを聞いたアルトとユウはそれに合わせる。
「本当ぉ〜…（ジトー）??」

「本当だよ～スバル」

その答えにスバルは、ジト目でアルトに自分の顔を近づけながら確認する。

アルトは、近づいてくるスバルの顔を冷や汗いっぱいになりながらそれに答えていた。

「それで？お前マリーさんにようがあって来たんじゃないか？」

「あっ！？そうだった！！マリーさん！！早くいかないとギン姉待ってるんだから～！！」

「いっけな～い！！もうこんな時間！！それじゃまた今度ねユウ」

「えっ！？ちょ…マリーさん！！マリーさん！！」

ユウは、スバルに対し私にようがあった事を言いアルトへの追求を交わすよう仕向けその声にスバルはなんでここに来たのかを思い出し私に健康診断に自分達と一緒に行くよう告げてきた。

それを言われた私は、自分の腕時計を見て時間がたっていた事を確認。

スバルと共にその部屋を後にしそれを見たアルトがその行動に驚きながら声をあげる。

「まぁ～待てよ…アルト…。ちゃんと残してくれてるから…」

ユウは、そんなアルトの肩を叩きながら掌に私から渡されたメモ紙を見せながら彼女に落着くよう告げる。

ごめんね…ミツキ…。

でも…私もユウ達と同じだから…。

私は、そう頭の中で呟きながらギンガが待つ場所へと足を速めた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６２…始まります」

その62

その６２

機動六課隊舎内　整備班事務室

アルト視点

「どう？うまく行ってる？」

「さっぱりだ…」

「そう…。それにしても「答えはゲイルの中」なんてマリーさん…なんでこんなメモを残したんだろ？はい、コーヒー」

「サンキュ。恐らくマリーさんは、俺達に言おうとしたことがゲイルの中にあるから後は自分で何とかしろとでも言いてぇんじゃないか？」

「ふ～ん…。でも、ユウのデバイスに何かあるならユウが知ってても可笑しくないのに…」

盗聴に失敗したユウは、マリーさんが残してくれたメモを頼りに昔先輩に何があったのかを調べていた。

私は、自分の仕事を片付けデスクで自分のデバイスのデータの画面を開きながら考え込むユウにコーヒーを差し入れた。

そして、その進捗状況を確認した所ユウはお手上げのポーズを取りながら自分の椅子の背もたれによしかかりながら私の方を見た。

私は、そんなユウを見つつ彼のデスクにコーヒーを置きその横の席に座り自分用に用意したコーヒーを飲みながらマリーさんがなぜこんな事をしたかユウと話をした。

私の疑問に対しユウは、背もたれりよりかかった体を起こしその時の光景を思い出しながら私が置いたコーヒーのお礼をいいつつも自分なりの推測を私に話してくれた。

それを聞いた私は、腑に落ちない声をあげながらユウに質問を投げかけた。

「まぁな…。でも、元々このゲイル・ファングは姉貴が作ってくれたもので半年くらいに一度姉貴に整備してもらってるんだ。なんせ、俺でも細かい所まではよくわかってねぇしシステム面で俺でも開けられない所とかがあってな。そこん所を重点的に調べてるんだが…（エラー）こんな感じだ」

私の質問にユウは、自分でもゲイルの事を全て把握している訳ではない事を告げた。

そして、自分が調べていた画面を表示させそこに出たエラーの文字

を見せながらお手上げのポーズをとっていた。

「へぇ～そうなんだぁ…。それにしてもこれってどう調べてたの？」

「んあ？とりあえず、俺が見たことがない…と言うか普段整備出来ない部分の画面を出して…通常デバイスの動作上使わないようなものが入ってないか調べてだな…」

「それで、そのフォルダが開かなかったのが…コレって訳？」

「そういうこった…」

ユウの話を聞いた私は、ユウが今までどうやって調べていたのかを聞いた。

それを聞いたユウは、私に画面を見せながらどうやっていたのかを説明。

そして、その画面を見ていた私は、表示されたエラーの文字を指差しそれが出た理由をユウに確認。

同じ画面を見ていたユウは、私の話に対し椅子の背中によっかかりそして頭の後で手を組みながらそれで言い旨の声を上げていた。

「まさにお手上げ…そもそも…そんなもの…あるのかな？」

「ん？どうしたんだいったい？」

エラー画面を見ていた私は、ふと本当にユウのデバイスの中に先輩に関しての情報があるのか？と不安に思いそんな事をもらした。

それを聞いたユウは、椅子の背もたれから起き上がりながら私の話に疑問を浮かべた様子でこちらをみる。

「もしかしたら…マリーさん、私たちの話を聞いてくれたフリをして実際は私たちを先輩の邪魔にならないように芝居でもしたんじゃないかって…急に思っちゃって…」

「んな訳ねぇだろ?姉貴でもあるまいし…そもそもあの人は根っからの技術屋であのペテン師（ミツキの事）みたいに駆け引きや嘘なんてつけねぇし姉貴の邪魔をさせないくらいなら一緒に盗聴なんてやろうなんて言わねぇよ」

「そうだよね…アハハハっ、ゴメン。そういえばマリーさんってそういう人だったね。どうも最近…先輩みたいな嘘や駆け引きが得意な人達ばかり周りに多くって…も…もしかして…また隠しカメラとか…誰かが変身魔法で変装とかしていないよね?」

私の答えを聞いたユウは、なんだか呆れた様子で私の心配を他所に面倒くさそうな顔をしながらそれに答える。

それを聞いた私もそういえばそうだったと思い出し慌ててさっきの事を訂正しつつ頭をかき笑いながら訂正する。

「あのな〜いくらなんでもそんな事をこれ以上したらウチの部隊長の責任問題になりかねねぇ〜だろうが。ただでさえ地上本部が目を光らせてんだ…か…ら…」

「どうしたの?ユウ?」

ユウは、慌てて言った私の話を呆れながら先輩がそこまではしない事を説明してくれた。

でも、その最中急に何か思いついたかのようにハッとし考え込んだ。

それを見た私は、心配そうにユウに声をかける。

ガタン！

ガシッ！！

「でかしたぞ！！アルト！！」

「えっ？ええ！！？いったいどういう事～！！」

その声に対しユウは、まるで気づかない様子でブツブツ言ってたかと思えば今度は急に椅子から立ち上がり私の両肩をつかみそしてその体を揺さぶりながら喜びを露わにする。

私は、そのユウの急変に対し驚きの声を上げる。

さらに、ユウの顔が自分の顔に近い事にドキッと思いつつも状況がわからないまま体を揺さぶられていたのでとりあえず状況の説明をユウに要求した。

「つまりだ。今まで俺は、俺が見れない所ばかり見ていたが実はそうじゃなくて俺でも見れる所にあるって訳さ。ってお前…なんで顔が赤いんだ？」

「えっ！？…これはそのあの～…と…とにかく！！今のじゃさっぱ

りわからないよ！！」

私の声にユウは、私の肩から手を離しそして、自分の席に座り端末の画面を操作しながら簡単に内容を説明。

そして、ふとこちらを見た所で私の顔が真っ赤になってるのに気が付きなんだかキョトンとしながらその事を聞いて来た。

ユウの声に私は、慌てふためきながらどういい訳しようか考えていたが結局いい事が思いつかずユウに詳細な説明を求めた。

「ふ～ん…まっ、いいか。つまり、姉貴は俺が見れない所に隠した訳じゃなくって俺くらいの技術をもった人間でも見れる場所にそいつを隠したって訳。もちろん、そのままじゃまずいからそのファイルを別の形に変換してわからないようにしてたって訳さ。いいか…よく見ておけ…恐らく姉貴の事だ。どれを変換すればいいのか自分でもわからなくならないように目印をつけてたハズだ…。あとはそいつを検索すれば…っと。頼んだぜ～検索開始っと」

私の話を聞いたユウは、私の様子に納得していない様子だったが、すぐにその追及を諦め詳細な説明を始めた。

それにしてもユウって…

普段は、あんなに惚けた顔してるのにこういう時の真剣な顔をしてる時って…やっぱり…。

「何人の顔をジーっと見てるんだ？アルト？」

詳細な説明をしていたユウは、私の視線に気がつき検索結果を待ち

つつ彼を見つめる私に声をかけてきた。

「えっ！？ち…違うよ！！だァ～れがあんたみたいな朴念仁みたいなヤツの顔を見てたりするもんか！！！バカ！！」

ポカポカ。

彼の声に私は、再び顔を真っ赤にしつつそれを否定しながら彼の頭を肩叩きするかのようにポカポカと叩き続けた。

「痛てて…わかった！！わかったから！！とにかく！コレを見てくれ！！変換するファイルをどうやら見つけたみたいだから」

「まだ終わってないじゃん！！」

「だから、もうちょっとだって」

それに対しユウは、ポカポカ叩く私の手を両腕で防御しながらどうやらファイルの検索をしていた端末の画面を見るよう私に言ってきた。

ユウの声を聞いた私は、彼への攻撃を辞め端末の画面を見て見た。

その画面はまだ検索中だったため今度は、ジト目でユウを睨みつける。

私の態度にユウは、もう少しかかる旨を言って来た。

ピコーン

「検索終了」

「ほらな？」

「……んで、これをどうしようって訳？」

そんな私たちをやり取りにまるで見ていたかのような丁度いいタイミングで端末が検索が終わった事を表示、それを見たユウはそれを自慢下な態度で私に見せその一方私は、一度振り上げた拳をどこに落とせばいいのかわからないままこの続きをユウに聞いてみた。

「その前にまずは、結果の確認をしてっと…この全てを変換して…なるほどなぁ～。ファイルをいくつかに分割してたってさらに変換してたって訳か。それじゃ、あとはコイツをひとつに結合してっと…あとはそれが終わるのを待つだけだ」

「ふ～ん…」

ユウは、端末の画面を操作しながら私に操作している内容を説明してくれた。

私は、その画面を見ながら納得したような声をあげる。

だが、その実は何をやってるのか正直さっぱりわかってはおらずとりあえず彼にあわせて合いの手を入れているといった感じ。

恐らくユウもその事について気づいている様子だったが、それについては特に何も言わず自分がしている作業の結果を今か遅しといった感じで待っているみたいだった。

ユウ視点

ピコーン

「作業終了」

「きた！！」

「ああ…それじゃ、早速開くぞ」

「うん…」

ファイルの結合の作業が終わりを今や遅しと待っていた俺達に端末から作業終了の表示された。

それを見たアルトは、待ってましたと言わんばかりに声をあげ俺は緊張の面持ちでファイルを開く事をアルトに告げる。

その様子にアルトもまたゴクリと息を飲みつつ俺の顔を見そしてその旨を同意する。

そして、再び画面を見て俺の作業を始めるのを待っていた。

さて…邪が出るのか蛇が出るか…拝ませてもらうぜ…姉貴…。

カチッ、カチカチ…。

ヴィーン…。

ピピピピピピピピピピッ

「な…何…コレ…」

「なんかのシステムの設計図みたいだな…」

結合されたファイルを開いた俺達の前に次々と画面が現れその中には、何かのシステムのような設計図が書かれたていた。

「そいつが、管理局や聖王教会…それに黄天や色んな犯罪組織がなんかが喉から手が出るくらいほしがってる情報管理システムの設計図さ」

「の…ノア！！いったいどうしてここに…」

「げぇ！！よりにもよって姉貴の次にやっかいなヤツが出てきた！！しかも最悪のタイミングで…」

開かれた画面を見ていた俺達の後ろからノアがいきなり現れた。

それに気づいたアルトは、それぞれ驚きの声をあげその一方俺はと言えばこれから起こるであろう悪夢を想像しながら声を震わしていた。

「ったく…マリーのヤツ…、よりにもよってこれをユウに見せるように仕向けるか…。あたいがここに来たのは、これが誰か見られた時のためにこのファイルが開かれた時にあたいに連絡が行くようになっててな。それでここに来たって訳。ちなみにこの件にマリーが関わっている事も盗聴してたって事から凡その想像はついてはいたがな」

ノアは、腕組みをしながらムスッとした様子で俺達の所に近づきながらここに来た理由を告げる。

「んで、これからどうするつもりだ…言っとくが俺は引く気はねぇぜ…」

「わ～ってるよ…おめぇの性格くらい…。ちゃんと教えてやるから…（ビュイーン）とりあえず一発殴らせろ！！」

近づいてきたノアに対し俺は、ノアがこれからどうするのかと自分はここでファイルを削除されても別の方法で調べる旨を決意を込めてノアに告げる。

それを聞いたノアは、俺の性格を理解している様子でこれがなんなのか説明すると言いそして、フルサイズになりつつこの怒りを俺にぶつけようとしていた。

そして、さっきまで５０センチほどの身長が１８０センチのくらいの…つまりフルサイズの状態に変身したノアが俺の目の前に現れ手をボキボキ鳴らしながら準備運動を始めていた。

「ちょ…ちょっと待て！！いくらなんでもフルサイズになるのは反則だろ！！そんなの食らったら不死身のヒーローでもない限り死んじまうだろ！！」

「うっせー！！だったら！！そんな事しねぇでのんべんだらりとしてりゃよかったんだよ！！それについ今さっきあたいにあんだけの事を言い切ったんだ！！潔く殴られとけぇー！！」

「うぎゃーーーーーーーーーーーー！！」

ドゴーーーーーーーーーーーン！！

「今度こそちゃんと成仏してね。そして、私の枕もとになんか出てこないよ～に…南無南無…」

「だぁから！！死んでねぇっての！！！」

フルサイズになったノアに対し俺は、反則だと訴えるが即座にノアがそれを却下。

そして、豪快に殴られた俺は、勢い余って壁に激突。

壁にめり込んだ俺を見たアルトは、なんだか訳のわからない事をいいながら俺が成仏するよう手を合わせていた。

それを見た俺は、めり込んだ壁から出つつアルトに勝手に殺すなと言わんばかりの声をあげる。

ノア視点

「あ～すっきりした～。さて、話を始めようか？」

ユウを殴りスッキリとしたあたいは、元の５０センチサイズに戻りムスっとしながらアルトに手当てを受けているユウを見ながらさっきの話の続きを始めようとしていた。

「チッ…自分だけスッキリしあがって…ングーー！！」

「ユウは黙ってて！！それで、これっていったいなんなの？さっきの話じゃ情報管理システムとか…言ってたけど？」

あたいの態度を見たユウは、よっぽど殴られた事が納得してないらしくあたいに対し文句を言う。

それを聞いたアルトは、ユウの頭に播いていた包帯でユウの口と鼻を塞ぎユウを黙らせあたいの話をさせるよう促す。

あたいは、その光景を唖然としならが見つつアルトに促され話を始めた。

「あっ…ああ…簡単に言えばあたいみたいに物質や人間を他の次元世界や目的の場所までピンポイントで転送する事が今の転送装置が出来ねぇみたいだからな。それを可能するためのシステムが今見ている設計図の機械なんだよ」

「へぇ～でも、なんでそれをこんな風に隠さなきゃいけないの？これがあれば現場で誰かが怪我をしてもすぐに病院まで運べるのに…」

「これが、それだけに使われればな…だが、その逆に爆弾なんかをピンポイントで重役達が会議をしている会議場の…それもど真ん中に送り込む事が出来るって訳だ。ったく…鼻まで塞ぐ事はねぇだろ。死ぬかと思ったぜ…」

「ごめん」

あたいが端末に出ていた設計図が完成したシステムがどんな物なのかその内容を大雑把にだが説明した。

それを聞いたアルトは、それを隠す理由に疑問をもったらしくそれをあたいに質問してきた。

質問を聞いたユウは、自分に口と鼻に巻かれていた包帯を外しつつあたいに変わりその質問に答えそして、やりすぎだと言わんばかりにアルトに文句を言っていた。

それを聞いたアルトは、ユウに両手を合わせ詫びていた。

「それだけじゃねぇよ。そもそもこのシステムのエネルギーってのが蒼天の石の力を使うつもりだったみてぇなんだ。だが、蒼天の石の力を使うためには人間が作った…それも石の力に対応出切る人間の純粋な魔力が必要なんだ…。ここまで言えば…もうわかるな…ユウ？」

「ああ…つまりこのシステムを使うためには、蒼天の石の契約者…それが今だと姉貴になるが、その姉貴をある意味人柱としてささげなきゃならねぇって訳だ…」

あたいは、ある程度話をした所でユウにあたいが言ってる意味をユウが理解しているのかを確認した。

それを聞いたユウは、真面目な顔をしながらそれに答えた。

「半分正解…。あのな～ミツキの契約者の前って誰だか聞いてるだろ？って事はだ…」

「それって!!ユウもその可能性があるって事!!」

ユウの答えを聞いたあたいは、それが半分正解である事を告げさらにヒントをだした。

あたいがユウにヒント出していた途中それを聞いたアルトは、ミツキだけじゃなくユウもその可能性を示唆する。

「正解…。それにミツキの場合、あの体だからな…つまり長時間システムの維持なんて到底無理な話だからな…。だから、より健康な体を持つユウ…お前が一番そのシステムの人柱にされる可能性が一番高いって訳だ…」

「そんな…」

アルトの答えにそれが正解である事を告げミツキよりもユウの方が人柱にされる可能性が高い事を付加える。

それを聞いたアルトは、愕然としながらユウの方をみていた。

「なるほどな…だから、姉貴のヤツ…俺を巻き込みたくなかったって訳か…」

「ああ…だが、一応言っとくがこれを守るためにお前やスバル達を今まで播き込ねぇようにしてた訳じゃねぇからな」

アルトの視線に気が付きつつもユウはそれを無視するかのように今までのミツキとあたいの行動を思い出しその理由をあたい告げた。

それを聞いたあたいは、それだけが理由ではない事を付加えてた。

なんせ、そんな事のためだけにユウ達をそれをほしがってた連中から守っていた訳じゃねぇからな。

それにそう思われたんじゃ、今まであれだけ色々やられても我慢したミツキの苦労が水の泡になるしあたいもそう思われたくねぇからな。

「ああ…そんな事言ったらすぐさまハンマーの餌食だよ。なぁ？アルト？って、お前…そのハンマー…まさか俺がそんな事を言うとでも思っていたのか？」

「えっ！？？ま…まさかぁ～。ユウに限ってそんな事言うはずないと思ってはいたけど…。その…なんて言うか…ね…念のためだよ！！念のため！！アハハハッ」

あたいの話を聞いたユウは、そんな事思っていないといった顔をしながらもしそんな事を言ったならアルトのハンマーが飛んでくると言いそれをアルトに確認。

すると、ユウの話を聞いたアルトは振りかぶっていたハンマーを急いで仕舞い始めていた。

それを見ていたユウは、アルトがそんな事を言うとでも思っていたのかとアルトに確認しアルトはハンマーを仕舞いながらそれを念のためと笑いながら誤魔化していた。

「んで、コイツについてはわかったが、アルトが聞いたって言う「アイツ」って言うのは？」

「それはな…。名前をミューゼル・カーバインっつてな。ミツキと一緒にユウの親がいた施設で警護やってたヤツで、ミツキが産まれてからその施設が襲われるまで、ずっとコンビを組んでたパートナー…。そして、今の黄天の契約者だ…」

「えっ…でも、ユン先生の話じゃ組織から行ったのって先輩一人だけって話じゃ…」

システムの説明を聞き終えたユウは、今度はアルトがミツキの話をこっそり聞いてた時の出た「アイツ」について聞いて来た。

それを聞いたあたいは、少し考えつつもこのままコイツ等に話さねぇと今度何仕出かすかわからねぇと判断。

アイツ…つまりミューゼルの事をユウ達に説明した。

あたいの話にアルトは、ユンが話したときの事を思い出しその時の話とは違うと言ってきた。

「それはな。ミツキがユウの世話で施設に行ってから少しってその施設の警護のための人間をその組織が送ったんだよその施設の依頼を受けてな」

「なら、なんでそいつが黄天の契約者なんだ?」

アルトの質問に答えたあたいに今度は、ユウが質問をして来た。

「そもそも黄天って言うのは、あたいみたいに人間と契約して力を与える訳じゃなくってより自分に適合した人間の体の中に入ってそいつ自身を乗っ取っちまうんだ。それで、襲撃した時に一度ミュー

ゼルに黄天が破れて今まで乗っ取ってた体がもうもたねぇと判断したんだ。その次に乗っ取られたヤツって言うのが、その時戦っていたミューゼルなんだ。それで、ミューゼルの事を心配して来たミツキと対戦…。最初の内は、ミツキが防戦一方だっただんだが、あたいと契約してそれをなんとか退ける事が出来て…。でも、あたいと契約するチャンスをくれたのが…」

「そのミューゼルさんって訳なんだ…」

ユウの質問に答えた所アルトが、ショボリしながらあたいの話に納得した声をあげていた。

「ああ…だから、ミツキはアイツの事をずっと探してる。そして、ミューゼルの体から黄天を開放させたいってずっと思ってるんだ。ただ…一度黄天に乗っ取られた人間ってのは、元々あった人格を黄天によってすぐに消滅させられちまうんだ…」

「だから、例え殺したとしてもって言ってた訳か…。あれからもうかなり時間が立っちまってるからな…そのミューゼルってヤツの意識が残っていない可能性が高いからな…」

アルトの話を聞き終えた所で、あたいは話を続けそれを聞いたユウもやるせない表情を浮かべながらあたいの話に自分なりの結論をつけていた。

「そういう訳だ。だから、お前達はこれ以上ミツキの邪魔はするな!!いいな!!」

「……」

あたいは、そう言い残しユウが開いていた画面を元に戻しその場を後にした。

それを聞いたユウとアルトは、あたいの声には一切答えずどうしていいのかわからないままただ黙ったままその場に俯いていた。

その６２（後書き）

感想待ってます

その６３（前書き）

次元航行ジャンボジェット機

「ディメンション・ファントム　ツヴァイ」機内

なのは視点

「いんや～まさか次元航行出きるジェット機があったなんてなぁ～。これもメイフィア財団から？」

「ええ、なんでもこれからは個人で次元世界旅行をする時代だとかなんとかでそのための短距離旅行者向けの次元航行が出来るジェット機の開発をしているらしくその実験機のうちの１機をこっちで検証してみてくれって事なんですけど…」

「そりゃ、うらやましいわ～。六課にも廻してくれへんやろか？」

「でも、いいものばかりではありませんよ。この前の機体なんか飛び立ったと思えばすぐにどこかしら故障ばかりでよく姫が修理とかしてたくらいなんですし、これを維持するコストもバカにならないみたいですよ。それにあくまで移動用で武装なんて一切積んでませんし、機体自体が大きいので降りれる所も限定されちゃったりとか…。使い勝手が以外と悪いんですよこれも。」

「それりゃ、色々と大変なんやな…」

聖王教会での話し合いを終えた私とはやてちゃんは、ミツキさんのご好意でファントムが持つ次元航行が出来る飛行機で機動六課の隊

舎まで送ってもらう事になった。

この機体の概観は、私達の世界にあるよく見る飛行機…名前は確か…コンコルド？だっけ？あれ見たいな感じで、いくつもの席があると思っていたんだけど…。

その私の予想とは裏腹に、機内はまるでどこかの大統領専用機のように応接用の椅子や机に休憩用のやソファーラウンジ…奥には、恐らくミツキさんが使っているであろう執務室など私なんかが絶対に乗る事がないであろう豪華な内装が施されていた。

私とはやてちゃんは、そこの来賓用の席でナリアちゃんに用意してもらった飲み物を飲みながら凡そ1時間くらいのフライトを満喫している。

そんな中、はやてちゃんがナリアちゃんに羨ましそうな声をあげそれを聞いたナリアちゃんは、そんな事はない事をはやてちゃんに伝えていた。

「あっ…はい、わかりました。確認します。あの、八神部隊長？お願いしてた事は大丈夫なんでしょうか？機長の方から確認してほしいとの事なんですが…」

ナリアちゃんが耳につけていた通信用のイヤホンに誰からか連絡が入ったらしく彼女は、イヤホンに指を当てその内容を確認後はやてちゃんにその内容を確認していた。

「それについては、問題ないよ。グリフィス君達にこっちの識別番号を伝えてあるからいきなり隊舎の前の海に下りても迎撃なんかされへんよ」

「わかりました。機長にはその旨を伝えておきます。失礼します」

ナリアちゃんの問いかけにはやてちゃんは、笑顔で問題ないと答えていた。

それを聞いたナリアちゃんは、その旨をこの機体の機長に伝える旨をつげそして一礼しこの場から離れていった。

「フェイトちゃんも乗れたらよかったのにね。はやてちゃん」

「そやね～。でも、あの盗聴してた事がバレた時のリンディさんの顔…相当カンカンやったからな～。それにフェイトちゃんもなんや言いたい事があったみたいやったし…。ありゃ、相当あれるで？ハラオウン家は？」

ナリアちゃんが去った後、私は、はやてちゃんにフェイトちゃんがこれに乗れなかった事に残念そうな声をかける。

それに対しはやてちゃんは、フェイトちゃんがユウ君達とやった盗聴についてのリンディさんとフェイトちゃんのその時の態度を思い出しながら腕組みをしやれやれと言った様子で私の話を返してきた。

あの話し合いが終わった後、フェイトちゃんはリンディさんに呼び出せれリンディさん達のいる所で話し合いをするために指定された場所に向い私達とは別行動となった。

ちなみにケイン副司令もまた別件があるとの事でミツキさん達とは別行動を取っている。

「まぁでも、ここで考えてもなんやからフェイトちゃんの分までウチ等が楽しむとしよっか！なのはちゃん」

「そうだね。もし、時間があったらヴィヴィオにも機内見せてあげたいな」

「そやね、ウチからもミツキに頼んでみるわ」

「お願いね。はやてちゃん」

はやてちゃんの答えに私は、複雑な表情をしていたらしくそれを見たはやてちゃんは、フェイトちゃんの分まで私達で楽しむ事を提案。

それを聞いた私は、これをヴィはやてちゃんの提案を同意しそして、ヴィオにも見せたい事をはやてちゃんに告げる。

はやてもそれを同意してくれ彼女の方からミツキさんに頼んでみる事を告げてきた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６３…始まります」

その６３

その６３

「ディメンション・ファントム　ツヴァイ」機内

司令官執務室

ユウ視点

「さて、本隊所属のユウ・サエグサ君に同サポーターのアルト・クラエッタさん…。ここに呼ばれた理由については、わかってるとは思いますけどいったいなんで盗聴なんてしたのか…一応捜査活動の一環と伺っていますが、具体的な説明をしてもらえますか？」

俺とアルトの目の前にあるデスクには、ファントムの制服を来た姉貴が座っていてこちらを睨みながら盗聴した理由を俺達に聞いて来た。

それにしても…まさか話し合いが終わったその足で六課に…それも移動用のジェットで乗り付けてくるとはな…。

ナリアから呼び出しの連絡を受けた時には、驚いたぜ。

まぁ、通信で姉貴からその内連絡が来るとは思っていたが…こんなに早く…それもノアにガツンと言われてまだそんなにまだそんなに時間がたってねぇっつうのに…。

「えっ…あの…その…」

俺の横でアルトは、オロオロとしながら姉貴からの質問にどう答えていいのかわからないといった様子。

それも無理もない…。

なんせ、俺もウチの部隊長なんかに言われたら俺が持つファントムの独自行動権限「ジョーカーオブクラウン」があるからそれで乗り切ろうと考えてはいたが…。

ただ、この権限の唯一の欠点あってな…。

それは、ファントムの司令もしくはその相談役には報告義務ってのがあって通常は書類のみでいいのだが…。

それとは別に、司令もしくは相談役から任務や捜査状況についての確認など直接口頭で報告にするといった場合があって…。

今回は、まさにそれ…。

んで、なんで呼ばれたかと言えば…俺がやった盗聴についての内容確認…だそうだ。

で、こうなるとキチンと直接報告しなければならない。

しかも、相手が姉貴…つまり逃げ道なしって訳だ…。

「それについては…姉…もとい今回の司令の行動が今後の私の任務において少なからず影響が出ると考えたまでです。尚、盗聴と言う手段に及んだのには司令の性格を鑑みて正確な情報及びその意図を教えて下さるとは思えなかったためです。ですが、いくら必要だとは言え聊か常軌を逸した行動でした。申し訳ございません」

俺は、姉貴の目を見ながら直立不動の姿勢で答えそして一礼をした。

なぜ、俺がこんなに丁寧に答えたかと言えば…。

俺と姉貴…それにギンガとアルトにノア…つまりファントムに関わっている俺達と姉貴の間でのひとつの約束事があってな。

それが何かと言えば、姉貴がファントムの制服の上着を着ているもしくは、腕にファントムの腕章をつけている時の姉貴は司令官としての立場でいるので馴れ馴れしい会話は一切禁止って事だ。

まぁ、戦闘時については制服じゃなくてバリアジャケット姿の場合は関係ないんだが…。

要するに姉貴から見た下の人間…特にケイン達への配慮の一貫で、こうでもしないと俺達に対してなんでもゆるしちまいそうだからな…。

なんせ、いつもああじゃ下の連中から何言われるかわからんしそれに、俺達も姉貴にいつまでも甘えたくないって言うのもあってこういう風にしてもらっている。

俺にとっては優しい姉ちゃん…。

でも、それを仕事にまで持ち込みたくはねぇしそれは姉貴も同じみたのようだ。

それに、司令としての姉貴はとても尊敬もしているし俺達にも他の連中と同等に扱ってほしいからな。

ちなみに今回の俺の任務って言うのが機動六課が関わる事件について六課が対応しきれない案件の場合にのみ、それをフォローもしくは、ファントムにその状況を報告しその対応をしてもらうって事。

それが表向きなんだが、その裏…と言うより姉貴から個人的にスバルとティアナが変な事に巻き込まれないようにするのと部隊長のフォローを頼まれててな…要するにコッチの方がメインって訳。

つまり、表向きの任務って言うのは俺があれこれ動きやすいようにするためとそのバックアップがいつでも出来るように姉貴が事前に用意してくれたもの。

自分が六課に関われねぇからってな。

そんだけ、ウチの部隊長達がやってる事って言うのが危ない橋を渡ってるかっていう事だ。

いくら、予言とかの裏付けがあったにしてもだ。

つまり、あんな本局と地上本部との政治抗争みたいものの言わば発火点にもなりかねねぇ所の部隊長になんか誰も行きたがらねぇって

事。

そんな所に自ら立候補したって言うんだ…。

そりゃ、部隊長の友人でもある姉貴も心配にもなる…。

それに姉貴は、事前にシグナム達からあれこれ相談を受けてたみたいらしい…。

自分の主が無茶してねぇかってな。

それとアルトには、俺が六課に来てからこの辺の事情については既に話していて書類関係のサポートはしてもらってはいたんだが…。

「ちょっと…ユウ！いくらなんでも言い過ぎじゃない？」

俺がそんな事を考えていた所、横にいたアルトが俺の腕を自分の肘で小突きながら俺が言った事について姉貴に聞えない程度の小声で俺に文句を言って来た。

「いいんだよ。ついさっきノアにあんだけ言われたんだ。これくらい言っても」

俺は、姉貴に聞かれていない事を確認しつつアルトに言い返す。

そして、俺の回答を聞いた姉貴は、少し考え込んでいる様子。

「まったくあんたは相変わらず…、ハァ～…おっと…コホン！そうね…。確かに、キチンと説明しなかったのは私の責任ですね。…ですが、次からは時と場所を考えて下さい。いくらあなたに特権があ

るとはいえ、その行動が機動六課に迷惑がかかる事もありますので」

「は…はい…以後気をつけます…」

姉貴は、腕組みをしながらあれこれ考え込んだ後俺に対して静かに…そして、俺を威圧するかのように注意をした。

そして、その話に俺はショックを受けながらそれを聞く。

それを見た姉貴は、スッと立ち上がりそして、着ていたファントムの制服の上着を脱ぎブラウスとスカートといった姿になり俺達に近づいてきた。

「この様子だと…ノアにガツンと言われたみたいだね…ゴメンね。そこまで知らなくって…どうやら、追い討ちかけちゃったみたいね。アルトも」

「先輩…」

「そんな事ねぇよ、姉貴。それで…ひとつ聞いてもいいか？」

「ん？いいわよ」

俺の目の前に立った姉貴は、いつもの優しい笑顔に戻り俺とアルトにいつもの口調で謝ってくる。

それを聞いた俺とアルトは、その笑顔に引っ張られるように次第に笑顔を取り戻し俺は姉貴に質問をしてもいいか聞きそれを姉貴が同意した。

「なんで…俺にあれを？俺なんかに…」

「ああ、その事。ユウ…ゲイル…貸して？」

「ああ…」

俺の質問を聞いた姉貴は、俺にゲイルを貸すよう言い俺はその言葉に従いポケットから待機状態のゲイルを取り出し姉貴に渡した。

ピッピピピピッ…ピ

ピュイン。

「こ…これって…」

俺からゲイルを受け取った姉貴は、自分の目の前にいくつかの画面を開き持っていた端末とゲイルをつなぎなにやら操作をしていた。

そして、その操作が終わった所でその中の1枚の画面を俺達に見せその画面を見たアルトが声をあげる。

画面には、何枚もの写真となにやら機能の説明書きが表示されていた。

「あの設計図は、そもそもこのゲイル・ファングの基本部分のプログラムでありこれを残しておくためのものなの…。あなたとパパとママが一緒にいた事を証明するためと2人に守ってもらおうと思ってね。あんたの事を…。つまりこれは、あんた向けのお守りよ。それで、この設計図…なんだけど…この下の部分よく見て」

「なんだこれ？…何かの落書きか？」

「うわ…設計図の上に…それもこんなに大きく…これなんですか？」

表示された画面について姉貴が説明している途中、表示画面左下に何か落書きのような物を指差しそれを見た俺とアルトが声を上げた。

「さぁ？でも、これ…ユウが書いたのよ？赤ちゃんの時にね（笑）これが書いている時の写真」

「ホントだぁ～。それにしても今と違ってかわいい～♪」

「ま…まさか、設計図がメインじゃなくってこの落書きを残すためなんて言わねぇよな…」

「その通りよ。でも、そのおかげでこのままじゃシステムが完成されないのよ。それもシステムのメインの所らしいわよ（笑）それで、この落書きを消してその下に何が書かれてるのか調べないと。ちなみに何が書いてあるかなんて私もノアも知らないから再現不可能。それに「これを消すな！！」って言われてるしね、パパとママに。そう言えば、この落書きを見たパパとママ…あんたを天才だって誉めまくってたわよ♪」

姉貴の説明をしながらその当時の写真（赤ちゃん（俺）がハイハイのような格好で、紙にクレヨンを持って何かを書いている写真や家族写真など）を俺とアルトにみせる。

アルトは、それを見一喜一憂しながら見その一方で俺は、その当時記憶がない事を確認しつつ呆れた様子でこの設計図が残っている理由を今までの姉貴の説明から推測し姉貴に聞いてみた。

すると姉貴は、俺の話をキッパリとそうである事を告げそのおかげでシステムが完成しない事そして、その時の両親の様子を俺に教えてくれた。

「天才…ねぇ～（笑）」

「アルト…てめぇ…」

「まっ、他にも色々あるけどこんな風にしたのはいくら完成しないとは言えこの設計図をそのままにしておけばユウが危ないのは変わりないからね。わからないようにしてたって訳」

「他には…どんな物があるんですか？先輩？」

姉貴の話を聞いたアルトは、俺の顔をニヤニヤしながらみつつ両親が言ってた言葉を言いそれを聞いた俺はアルトを睨む。

そして、その後姉貴から詳細な内容が告げられアルトはこれの他に何かないかと姉貴に聞いていた。

「そうね…。この他には…当時の様子を映した動画とか…ユウの落書き画像…それに家族で映した写真とかはいっているかな～」

「へぇ～…それじゃ、それをじっくりと…（プツン）あー！！ユウなんで閉じちゃうのよ！！」

アルトの質問に姉貴が中のものを思い出すかのような仕草をしながらそれに答えそれを聞いたアルトは、その画面を操作しそれを見ようとした所で俺がその画面を閉じた。

画面を閉じた俺に対しアルトは、俺に向って文句を言って来た。

「あのな～。俺の恥ずかしい過去をいつまでも見せてられっか！！これでお仕舞いだ！！」

「ええ～！！そんな～！！」

文句を言ってくるアルトに対し俺は、それを腕組みをしながら言い返す。

そして、姉貴はその様子をクスクスと笑いながらそれを見ていた。

「ディメンション・ファントム　ツヴァイ」機内

ティアナ視点

「すっご～い！！ねぇ！！なのはママ！！あっちに行ってもいい？」

「いいよ。でも、気をつけてね。ヴィヴィオ」

「うん！！」

「こんな豪華な飛行機…初めて見たね。エリオ君」

「そうだね。キャロ」

「ルキノはこういうの趣味ないんの？」

「私は…どちらかと言えば船の方なもんで…でも、すごい豪華ですね」

スバルが健康診断で六課を離れている間、私は自分とスバルの分の仕事をこなしていた。

すると外出していた部隊長となのは隊長が、なぜかジェット機で帰ってきた。

突然の光景に私は、驚きそしてその訳をそのジェット機から降りてきたなのは隊長に聞いてみた所、ミツキさんに送ってもらったとの事。

その後、部隊長が機内を他の六課隊員等に見せてもいいか？とミツキさんに頼み、ミツキさんの方も六課に用があるらしく重要部分を覗きその内部を公開してくれた。

今、その公開された機内を手の空いている六課隊員＋ヴィヴィオで見学させてもらっている所。

その機内を見ていたヴィヴィオとなのは隊長、エリオとキャロそして、部隊長とルキノがそれぞれ会話をしていた。

私は、ひとり機内を見て回ってる。

ここにスバルが入れば大ハシャギしてに違わないだろうから正直、スバルがいない時に来てくれた事に私はホッと胸を撫で下ろしていた。

あっ！！そう言えば、一緒に来てたハズのユウとアルトがいない…どこいったんだろ？

「あっ！！ユウちゃんにアルトさんだぁ～！！」

「あんた達、いったい今までどこに行ってたのよ？」

「まぁ、ちょっとな。それで、ヴィヴィオ？どうだ？楽しいか？」

「うん！！楽しいよ！！それで、姫ちゃんとナリアちゃんは？」

姫ちゃん？それっていったい…。

「今、シャーリーさんとお話してそれが終わったらこっちに来るって」

「ふ～ん…」

私がそんな事を考えていた所機内の奥からユウとアルトが現れそれに気づいたヴィヴィオがトテトテと歩きながら二人に近づき声をあげた。

その声を聞いた私も2人に近づきユウに話かける。

ユウは、私の話に苦笑いをしながらそれに答えユウの足元によってきたヴィヴィオの頭を撫でながら話かけた。

ヴィヴィオは、ユウの話に笑顔で答えそして、ナリアちゃんと姫ちゃんと言う人はこないのか？と聞きアルトがそれに答えていた。

「姫ちゃんって、誰？」

「んもぅ～、姫ちゃんは姫ちゃんだよ～！！ティアナさん！！」

「いやだから…それが誰なのかって言うのが…」

ヴィヴィオとアルトのやり取りを見ていた私は、その姫ちゃんが誰なのかをアルトに聞いてみた。

すると、その話にヴィヴィオがムスッとした顔をしながらその話を返してきた。

それを聞いた私は、苦笑いをしながらそれに答える。

「なんだ～、お前そんな事も知らないのか？なぁ、ヴィヴォ」

「ねぇ～、ユウちゃん」

ムカッ！！

ガツン！！

「痛ってぇ～！！いきなり殴るな！！」

「うっさい！！」

私とヴィヴィオのやり取りを見ていたユウがニヤニヤしながらそんな事も知らないのかと言いその話に割って入ってきた。

そして、ヴィヴィオを自分の見方につけその事を知らない私に対し自慢下な態度でこちらをヴィヴィオと一緒に見つめる。

その態度の私は、苛立ちを露わにしユウの頭を殴りつけた。

ユウは、その痛みを私に訴えるがそれに対し私はそれを一蹴する。

「まったく…それで!!いったい誰なの?」

「おいおい…そんなに怒るなって」

＜メールが来ました?マスター?＞

「メール来るって?クロスミラージュが言ってるよ?ティアナさん?」

私は、ユウの制服の胸倉を掴みさっきの事をもう一度ユウに聞いてみた。

するとクロスミラージュがメールが届いた事を告げそれを聞いたヴィヴィオがその事を私に教えてくれた。

「ありがと♪ヴィヴィオ。後で聞くからね!ユウ（怒）」

「えへへぇ♪」

「へいへい」

ヴィヴィオの声に私は、ユウの服から手を離しヴィヴィオの頭を撫でながらお礼を言う。

ヴィヴィオは、それに対し笑顔で答えそれを見つつユウには後で聞く事を言いメールを確認した。

ふ～ん…検査が終わったんだ…。

私は、腐れ縁のもう一人の相棒からのメールを読みながらそう思いつつメールの返信画面を開き返信を書いた。

検査の結果は問題ない？

あっそうだ。今、ミツキさんが六課にファントムのジェット来てるわよ。

すごいわよ～♪

その機内をみんなで中を見学させてもらってる所。

気をつけて帰ってきなさいよ。

後、例のおみやげ忘れないでね。

ティアナ

送信っと。

ピッ。

私は、そう返信を書き送信した。

さて…どんな反応をしてくるのやら…。

私は、「送信完了」と表示された画面を見ながらこの文を見た時のあいつの悔しがる姿を想像しながらふと笑みをこぼしていた。

スカリエッティのラボ

ウーノ視点

「何?ファントム・ナイツ司令と副司令がハラオウン派の連中が聖王教会で会談をしただど?」

(はい…。どうやら、機動六課との連携を含めた今後の事を話し合ったのかと…申し訳ありません…ゼール様。…絶好のチャンスだったのですが…。なにせ、騎士カリムのヤツめがリンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウン両提督と強暴しどうやらこちらには内密で事を起こしていたらしく…)

ラボにある大画面には、聖王教会の司祭…確かマルゲとか言う男がその画面を見るゼール様に対し申し訳ない表情で額に滲む汗を手に持ったハンカチで拭いながら状況の報告と言い訳をしていた。

「その事はもういい…。それで?例のシステムについては何かわかったのか?」

（そちらについても…現在調査中でありまして…。ですが、ハラオウン派の連中もその情報についてはどうやら入手し損ねたそうであります）

「だろうな…。あの出来そこないが簡単にバラすとは思えんしな…。後、お前が持っていた本は戻したんだろうな？」

（はい。それは、命じられた通り無限書庫に戻しておきましたが…なぜ？今更、あなた様の存在が記載されていた聖王教会の歴史書等こちらにとって悪い情報が書かれた書物を戻せなどと…）

画面の前で仁王立ちをしながらゼール様は、マルゲ司祭の報告を聞きながらそれに答えている。

一方、ドクターはと言えばその通信に写らない所に椅子を置いてそこに座りゼール様達のやり取りを静かに見ていた。

私は、それより少し離れた所でそれを見守っている。

そして、報告を終えたマルゲ司祭はゼール様に対し今回の指示について疑問を投げかけていた。

「フッ…、隠す必要がなくなったという事だ。つまり、時が近づいている…。聖王様が再び世界の覇権を握る時がな…。何かあればまた連絡しろ。以上だ」

（ハッ！！では…）

プツン。

ゼール様の答えを聞いたマルゲ司祭は、その声に歓喜の声をあげその通信を終了した。

「聖王が再び世界の覇権をか…ずいぶん柄にもない事を言うんだな…ゼール？」

「ふん。あんな小物を使うためには、あれくらいの事は言ってやらんとな…。それで？お前の方の準備はいいのか？この間の戦いで手持ちの駒を３つ程失ったとか…」

通信を終えたゼール様にドクターが椅子から立ち上がり彼に近づく声をかける。

その声にゼール様は、ドクターの方を向きつつそれに答えドクターに質問をしていた。

「それについては、問題ない。だが、君への頼みごとが増えてしまいそうなんだが…」

「そうか、詳細がわかったら連絡をしてくれ。これでも色々と忙しい身なのでな」

「わかった。それについては、決まり次第ウーノから連絡をさせよう。ウーノ、彼のお見送りを」

「かしこまりました、ドクター。それでは、ゼール様こちらへ」

「ああ、また来るよ。スカリエッティ」

「また今度…ゼール」

ゼール様の問いかけにドクターは、苦笑いしながら答えそれを聞いたゼール様は決まり次第の連絡を要求。

ドクターは、私を連絡すると言い彼が帰る見送りを私に依頼。

私は、それを了承しゼール様を出口へと案内。

ゼール様とドクターは、彼が出口に向う間際別れの挨拶を交わし私の後に続きその部屋を後にした。

「黄天の石の力…果たしてどれくらいの物なのか…楽しみだよ。ゼール…」

私とゼール様が出たのを確認したドクターは、そんな事を呟きながら自らの作業に戻っていくのであった。

その６３（後書き）

今回はもう１話あります

その６４（前書き）

本局医療施設

マリー視点

（まったく…それならそうと先に言ってよね！あれでクロノなんかに揚げ足でも取られたらたまったもんじゃないんですから！！）

「ごめん、ごめん。それで、ちゃんと説明はしたの？」

（一応ね…）

「一応って…まさか、あれは…やっぱり教えてないのね」

スバルとギンガの健康診断の結果を確認していた最中ミツキから通信が入った。

その内容と言えば、さっき私達がやってた盗聴についての事について色々聞かれそれに私は答えたんだけど…。

目の前の画面に映るミツキは、顔をムスッとしながら私の話を聞きそれがひとつ間違えれば大変な事になっていたかも知れないと文句を言われ私はそれを詫びた。

その後、ユウにあのデバイスの事について教えたか確認した所ミツキは苦笑いしながらまるで私の質問から逃げるように答えていた。

ミツキの答えに私は即座にユウに全てを伝えていない事をミツキに

確認した。

（言える訳ないでしょ～！！今のアイツがあれを制御なんて出来る訳ないんだから！！それにノアも私と同じ意見よ）

「なるほど…ノアがそう言うんじゃ仕方がないわね…」

私は、画面に向って頬杖をつきながらミツキの答えを聞き残念そうな声をあげた。

（ええ～！！そんな～！！ミツ姉！！六課にジェット機で来てるの～！！こうしちゃいられない！！）

（スバル！！どこに行こうって言うの！！ちょっと！スバル～！！）

私の部屋の外からスバルとギンガがなんだか騒々しく騒いでいる声が聞えてきた。

「やれやれ…どうやらスバルが騒ぎ出したみたいね…ミツキ？あんた今六課にいるの？」

（そうよ？ファントムのジェットでね。そう言えばスバルとギンガ…入なかったわね…）

「スバルとギンガなら健康診断で一緒に来てるわよ。今外に…なるほど…それで騒いでいるんだ…。それで、いつまで六課に入れるのミツキ？これが終わったらスバル達を連れて六課に帰るつもりなんだけど…」

スバル達の声を聞いた私は、ミツキに現在六課にいることを確認。

するとミツキは、そうである事をつげスバルとギンガがいない事を不思議そうな顔をしながらそんな声を上げる。

私は、そんなミツキに今スバルとギンガと一緒にいる事を告げその後のミツキの予定を聞いた。

（そうね？これからシャーリーと一緒に前に頼まれてた件の事で、はやてに話しなきゃならないし…。ヴィヴィオちゃんにも会って行ってって高町さんから言われてるから…あと3、4時間くらいは六課にいるわよ）

「わかった。なら、急いでスバル達連れて帰るからあの子達に会ってあげてね」

（了解。それじゃ）

プツン。

ミツキは、自分が持っている腕時計をみながらこの後の予定を私に告げ私は急いで戻る事を言い通信を終了した。

「さてと…」

ヴィーン。

そう言うと私は、座っていた椅子から立ち上がり部屋の外に出た。

「ちょっと待ちなさいよ！！スバル！！」

「だってぇ！！急がないとミツ姉帰っちゃうよ～ギン姉！！」

外にでた所ギンガが急ぎ六課に帰ろうとするスバルを必死に止めていた。

「スバル～もうちょっと待ってくれないかな～。待ってくれたら私達が帰るまで六課にいてもらうよう頼んであげるから～」

「それ！！本当！！」

私の声を聞いたスバルは、すぐさま私の目の前に現れそれが本当なのか確認して来た。

「そ…そうよ…。ちょうど今さっきまで、ミツキと通信してて待ってて貰えるか聞いてた所よ。あと3、４時間くらいは六課にいるって。それで後１０分くらいでこっちの作業終わるから、それが終わった後でも、十分間に合うもしダメでも私からお願いしておくから…ね！」

「うん！！わかった。それじゃ、ティア達にお見上げ買って待ってるから！急いでね。マリーさん」

「はいはい」

そのスバルの顔が近い事に私は冷や汗を書きながら、スバルに事情を説明。

私の話を聞いたスバルは、ティアナ達にお見上げを買いながら待ってる事を告げ笑顔で外に出て行った。

「相変わらず、忙しい子ねぇ…」

「ええ、特にミツキさんがらみとなると…。なんせ、昔っからミツキさんにべったりでしたから」

「そうそう、確か健康診断をする機器にはいる直前までミツキに入てもらわないとダメだったわね…」

「懐かしいですね。あっ、コーヒー入れてきます」

「よろしくね、ギンガ」

スバルの背中を見ながら、私はギンガと思い出話に花をさかせその後部屋に戻って作業を再開した。

さぁ～て、ちゃっちゃとやっちゃいますか～♪

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６４…始まります」

その６４

その６４

「ディメンション・ファントム　ツヴァイ」機内

司令官執務室

シャーリー視点

「ほぇ～、中々な部屋ないの～」

「まぁね。設備だけは豪華なのよ」

「それで、早速なんですが…。以前、ミツキさんにお願いした黒いガジェットのデータ分析の件なんですが…私だけじゃ判断しきれなくって…」

私の案内でこの部屋に入ってきた部隊長は、部屋の中を見回しその感想を言いその話にミツキさんが奥にあるデスクから立ち上がりながら返答していた。

そんなやり取り見ていた私は、部隊長を呼んだ理由を言い早速話し

を始めようとした。

「それで、具体的な話なんやけど…。どんな内容なのか詳しく説明してほしいんやけど…」

「了解…。とその前にまずはなんで私にだけ黒いガジェットが来るのがわかった事から伝えるわね」

部隊長は、その部屋の応接スペースにあるソファーに座り同じく座ろうとしていたミツキさんに詳細な話を聞いて来た。

それを聞いたミツキさんは、その旨を了承しさらにその前にまずはデータの分析結果を伝える旨を伝え話を始めた。

ミツキ視点

「熱センサー？」

「そう。はやて、サーモグラフィーって知ってる？」

「人の体温とかを色で見せてくれる機械の事やろ？」

「そっ、大雑把に言えばそのサーモグラフィーのレーダー版ってのが熱センサーって訳」

「ふ～ん…それで、その熱センサーがどないしたん？」

私の向かい側のソファーに座ったはやてが私の説明を聞きながら疑問の声をあげそれに私が答える。

ちなみにシャーリーはと言えば、ソファーに座るはやての後に立ち私とはやての話を黙って聞いていた。

「詳しい事については、書類に書いてあるからそれを見てほしいんだけど要するにあのガジェットには魔力探査に引っかからないような技術が解かされているらしいんだけど…。それ以外のレーダーに対して何もされていないのよ。それで、前にユウに貸した私の車には魔力探査用のレーダーの他に地球で使われてるレーダーもいくつか積んでてね。それで、ユウ達が襲われた時その地球製の熱探知レーダーに反応が出て…。それを詳しく調べてはやて達から預かったデータと照合した所その事がわかったんだけど」

「つまり、あのガジェットが出す熱にミツキの車に積んだレーダーが反応したって訳か…それで、シャーリーがウチを呼んだ訳は…そのレーダーを六課でもつけたいって言うんやな」

私の話を聞いたはやては、腕組みをしながらウンウンと頷きそして、今度はシャーリーと話始めた。

「はい…。黒いガジェットに対応するためにもそのレーダーが必要になってきますし…それには予算が…。これが見積もりになります」

「それについてはええけど…。んゲッ！！こんなに取るんかい！？」

はやては後ろ振り返りシャーリーにはやてを呼んだ理由を確認していた。

その声にシャーリーが申し訳なさそうな顔をしながら答えはやてに私が作成した見積書をみせた。

それを見たはやては、その金額に驚きの声をあげ私の方を見る。

「あったり前よ～！！なんせ、あの車に積んでるレーダーだって元々地球製の物を改造した物なのよ。だから、そのレーダー自体が高いのよ。それに広範囲の物となるとそれなりにかかるのよ」

「そこをなんとか～。なっ！ミツキ！頼むわ～！お願いや！！」

はやての話に私は、当然と言った態度でそれに答える。

すると、はやては、自分の顔の前で両手を合わせ見積もり金額を値切りだした。

「これでも、安くした方なんだけどな～」

「なら、もう一声！！頼むわ～！！神様、仏様、ミツキ様～！！」

「んもう～…。それなら、私に頼む前にシゲさんにでも相談してみたら？あの人なら、私のと同じ物くらい作れるはずだしそれなら、レーダー本体分くらいだけで済むはずだから」

「なるほど～。そう言う事なら早速…」

はやての声に私は呆れた様子で安くした事をボヤいた。

だが、その声にもはやてはめげない。

私としても、これ以上安くしてしまうと赤字になってしまうため六課の整備班班長のシゲさんに相談してみるようはやてに言う。

それを聞いたはやては、納得し早速通信画面を開きシゲさんに連絡を取っていた。

それからおよそ5分…。

「それで…どないやろ?」

(そうですね~。可能と言えば可能ですが、それにしてもなんでいちから作らなかったんだい?ミツキちゃん?)

はやてが通信画面の向こうに映るシゲさんに通信をとり事情を説明。

そして、それを聞いたシゲさんは腕組みをしながらはやての質問に答えさらに私に質問をしてきた。

「レーダーだけにかけてる時間がなかったからですよ。元々あの車につけてたのだって単なる思い付きでつけたようなもんですし、それにいつミッドにあの黒いガジェットが来るかわからなかったんで…。それで、ファントムの魔力探査レーダーに地球製の熱探知レーダーを繋げて同時利用出来る事にしたんです」

(なるほどな…。なら、今ミツキちゃんが教えてくれた方法なら早く…しかも低予算で設置可能だと思いますよ。あとは、通信関係なんですが…。なぁ?シャーリー?おめえさんどう思う?」

私の話を聞いたシゲさんは、納得しはやてに自分の結論を言いさらにシャーリーにも意見を聞いた。

「はい…。恐らくその方法であればいけると思います。ですが…、ファントムの通信システムと六課のシステムが違う物を使っていま

すので…。その辺がどうなるのかについてはまだ未知数ですね」

「その辺なら、ユウにやってもらいなさいよ。あの子もそれなりには出来る子だから」

「それにユウならわからない場合、ミツキやミオちゃんに聞くやろうしな。それくらいは協力してくれるやろ？」

「もちろん！」

「それなら、いけると思います」

シゲさんの問いかけにシャーリーは、慎重に言葉を選びながら…と言うよりやった事ないからイマイチ自信が持てないといった様子で答える。

それを聞いた私がその辺の事はユウにやらせるよう言いそれを聞いたはやてが私に協力を依頼。

私は、はやての声にすぐさま了承。

その声にシャーリーはようやく自信を持てた様子ではやてにＧＯサインを出した。

「ほな、それで決まりや。具体的な事については、シゲさんとシャーリーで相談してウチに報告してな。それとユウにはシャーリーから説明しとくのと、あいつのシフトの方は…シゲさん…悪いんやけどその辺の事は頼むわ」

「わかりました。（了解）それじゃ、これから詳しい打ち合わせで

もしませんか？シゲさん」

（了解したぜ。それじゃ今からこっちに来てくれるかい？シャーリー？）

「わかりました。では、失礼します」

プツン。

「と言う訳や。なんかあったら相談に乗ってやってな。ミツキ」

「了解。ミオちゃんには私の方から言っておくから」

「頼むわ」

シャーリーのＧＯサインを聞いたはやては今後の事をシゲさんとシャーリーに指示。

２人は、その指示を了承しシゲさんとの通信を終えシャーリーは部屋を退室した。

そして、シャーリーが退室するのを確認したはやては私にシャーリー達の相談に乗るよう私に依頼し私はそれを了承した。

「さて…話は、終わった事やしあとは久々にプライベートトークでもどうや？」

「そうね…時間的にも…あらら、もうこんな時間」

「なんや予定でもあるんか？」

仕事の話を終えた私とはやては、緊張感をとき雑談でもしようとテーブルにあるコーヒーを飲みながらはやてが私に言ってきた。

それを聞いた私は、自分がつけていた腕時計をみながらはやてと話はじめてすでに2～3時間くらいたっている事を確認に驚きの声をあげる。

それを聞いたはやては、私にこの後の予定について聞いてきた。

「予定にはまだ時間があるんだけど…（トントン）はい、どうぞ～」

はやての問いかけに私は曖昧な答えをしていた所この部屋のドアをノックする音が聞え私は、それに答える。

ヴィーン。

「失礼しま～す」

「しま～す！姫ちゃ～ん。お薬の時間ですよ～」

「スバル？それにヴィヴィオちゃん？」

「あんた等なんやその格好？」

私の声を聞き部屋のドアが開いたと思ったら、その中に入ってきたのは、なんとファントムの制服を着たスバルとヴィヴィオだった。

その2人の姿を見た私とはやてはそれぞれに驚きの声をあげる。

「私のは、ナリアちゃんに借りたヤツでぇ～。それで、ヴィヴィオのは、ミオちゃんが昔着てたヤツを借りたんだ～。サエグサ司令！！お薬の時間であります！！お冷をお持ちしました。ビシッ！！」

「そうであります！！ビシッ！！」

私とはやての驚いた様子を見たスバルは、着ていた制服について誰に借りたかを説明。そして、敬礼をしながら私とはやてに挨拶。

そして、ヴィヴィオは、そのスバルの敬礼を見よう見真似をしながらそれに続いていた。

「それは…わかったんだけど…」

「なんで、ファントムの制服着てるんや…」

スバルとヴィヴィオの敬礼をみながら私とはやてはなぜその制服を着ているのかスバルに声をかける。

「えっと…これはその…」

「驚いたか！？あたいが2人を驚かせるために考え…（ピコ！）フギャッ！！コラ！ミツキ！最後までちゃんと言わせ…（ピコ！）ンギャ！！」

「あっ！ノア…って、あんた等…何モグラ叩きやっとんのや…」

「だから、（ピコ！）フギャ！、あたいが（ピコ！）フミャ！、外に出ようとしたらミツキが（ピコ！！）ムギュゥ…」

「まったく…、ノアったら…」

私とはやてのといかけに対しスバルは、どう答えていいのかわからないといった様子で戸惑いの様子。

そして、そんな光景をまるであざ笑うかのように私とはやてが座るソファーの間にあるテーブルの上に転送魔法を開きそこからノアが自分が考えた事を告げながらそこから出てきた。

そのノアの話を聞いた私は、デスク置いてあったピコピコハンマーと取り出し転送魔法から出てくるノアをそのハンマーで殴りつけた。

殴られたノアは、再び転送魔法の中に入りその場から逃げ別の場所から出ようとするが出てきた所を再び私に殴られる。以下エンドロール。

それを見たはやては、その光景をもぐら叩きと称しながら唖然としていた。

はやての話にノアが答えながら別の場所から外に出ようとするが、私のピコピコハンマーの攻撃にそれを阻まれ結果的にそのハンマーに撃沈されていた。

そして、ノアの撃墜を確認した私は、やれやれといった様子でソファーに戻った。

そして、ノアはテーブルの上でピクピクとノビていた。

「はい、ど～ぞ」

「ありがとう。ヴィヴィオ」

「ゴクゴクゴク…苦っ～」

その後、ヴィヴィオが私の目の前にヴィヴィオが持ってきた水の入ったコップを置きそれにお礼を言い持っていた薬を飲み苦そうな顔をしながらそれを声にだした。

「なんやその顔？ヴィヴィオの前やで。もうちょい澄ました顔辺出来へんのか？」

「それは、無理ですよ部隊長。ミツ姉、私が小さい頃からこうでしたから」

「もう！スバルったら。それにしても早かったわね」

私の苦そうな顔を見たはやては、ヴィヴィオにそんな顔見せない方がいいと告げる。

が、それを聞いたスバルが昔からこうであった事を言いその言葉に私は過去の事を言われ顔を膨らませそれに答えていた。

そして、スバル達が本局の医療施設から早く帰ってきた事の理由を聞いた。

「あっ、それは、マリーさんの仕事が終わるのが早かったしそれに道がすっごく空いてたからなんだよ」

「なるほどな～。それにしてもなんでミツキが姫ちゃんなんや？」

「それはですねぇ～。ナリアちゃんがミツ姉の事を姫って呼んでたからなんだよね～」

「ね～」

質問も聞いたスバルは、その理由を答えそれを聞いたはやてがヴィヴィオが私の事を「姫ちゃん」と呼んでいる事を不思議そうな顔をしながら聞いて来た。

そのはやての話にスバルが答え最後にヴィヴィオと顔を合わせ2人一緒に声をあげていた。

「その事についてはわかったんやけど…、そもそもなんでミツキが姫なんや？」

「う～ん…それは…」

「わかんな～い」

スバルとヴィヴィオの様子を見ていたはやては、2人が言っていた事については理解しながらもそもそもなぜ私が「姫」と呼ばれる事について2人に聞くが2人はわからないと答えていた。

「そりゃな、下の連中からつけられたあだ名だよ。ファントムじゃ昔っから、役職で呼ばれる事なんて作戦時くらいしかなくてな。でも、司令官をさんづけでも呼ぶわけにはいかないってんでそういうあだ名を下の連中がつけてそう呼ぶそうになったんだよ」

「あら、ノア？もう大丈夫なの？」

「ったく…。シコタマ殴りやがって…」

スバル達のそんな疑問にようやく起き上がったノアが、その理由を答えそれを見た私がノアに声をかけそれを聞いたノアがムスッとしながらそれに答えていた。

「それなら、ノアはなんて呼ばれてるの？」

「あたいはそのまんま名前だよ。そもそも、ウチであだ名がつけられてるはミツキとご隠居くらいなものさ。なんせ、相当慕われないと普段から呼ばれるようなあだ名はつけられねぇからな。でも、裏では結構あるみたいだぜ？特にケインなんかは（笑）」

「その…悪い意味でのあだ名が鉄仮面って訳なんやな…」

「そういうこった」

ノアの説明を聞いたスバルは、ノアがファントムでなんと呼ばれているのか彼女聞いた。

それに対しノアは、自分にあだ名はつけられてはいない事を告げその理由を説明した。

ノアの話を聞いたはやては、ケイン君の事をユウが鉄仮面と呼んでいた事を思い出し苦笑いしながらなぜそう呼ばれていたのかその理由をノアに確認。

彼女は、了承しながらも苦笑いしつつそれに答えていた。

その後ナリアが持ってきたスバルとギンガのお土産をユウやアルトにティアナそして、ギンガや高町さん達も交えそれを食べそれぞれに談笑をしていた。

私にとって楽しかった時間は、六課に入れるギリギリまで続き私は六課を後にした。

その６４（後書き）

感想待ってます

その６５（前書き）

本局　執務官執務室

クロノ視点

ドン！！

「どうして教えてくれなかったんだ！！彼女と会う時には僕に教えてくれと頼んだハズじゃ！！」

「それはすまなかった。何せ急遽決まった事なんだったんだ。もしかして、ここに来たのはその為か？」

「君に通信で言っても埒があかないからね。それとなのは達がいる所にいるんだろ？彼女の弟が…」

執務室のデスクで仕事をしていた私の所に無限書庫司書長のユーノ・スクライアとその護衛任務でついて来たヴェロッサ・アコースが訪れてきた。

そして、ユーノは私の前にあるデスクを叩きいきなり私に文句を言ってきた。

それに対し私は、仕事の手を休め彼に陳謝しここに来た理由を彼に聞いた。

彼は、私の陳謝をどうやら納得してはおらずイラだった様子のままここに来た理由を言う。

「確かに…あいつの弟が六課にいるが?そのことを一体誰に聞いた?」

ユーノの問いかけに対し私は、冷静にそれを答えた。

「君のかわいい妹からだよ!」

「ふぇ…。フェイトだと!!」

「ああ…なんでも、この間リンディ統括官達が閲覧ロックをかけた書類の内容が知りたいからって僕の所に連絡が来たんだよ。そのときにね。でも、内容については言ってないけど」

「あいつ…本気であの事を調べてたのか…」

私の問いかけに答えるユーノの声のを聞いた私は、そのあまりにも予想外の答えに驚きの声を上げる。

そして、その理由を聞きながら私は頭を抱えた。

「やれやれ…。その様子を見るとハデに親子喧嘩したって言うのは本当らしいね」

「ああ…、相当ハデにな…。ヘタすると魔法戦闘しかねない勢いだったよ…」

私の様子を見たヴェロッサがやれやれと言った様子で私に声をかけてきてそれに対し私はそのときの事を思い出しながら答えさらにそのときの様子を2人に話をした。

そう…。

あれは、聖王教会での会合を終えた後フェイトと私…それと母さんの3人で例の盗聴についてフェイトと話をしていた時だ…。

「管理局の裏側でいったい何が起きているの?なぜ、この間聖王教会からだされた書類に閲覧ロックをかけたの?それを明らかにしてほしいの!!母さん!!」

と言うフェイトに対し

母さんは…。

「それは出来ない相談だわ…フェイト。それ等を明らかにすればその影響は計り知れない…。だから、あれを公開する訳にはいかないわ」

とそれを突っぱねる。

最初の頃は、冷静な話し合いだったが次第にそれぞれの考え方の違いが溝となり次第にエスカレート。

そこから取っ組み合いのケンカになり…。2人ともそれぞれデバイスを取り出しだ所で私と周辺にいた数名の部下でそれを止めたんだが…。

結局話し合いは、平行線のまま…。

フェイトは、

「わかりました。もう母さんには頼みません！！全ては、自分で…それ等を明らかにします！！」

と言いその部屋を後にしそれを母さんは、

「勝手にしなさい！…」

と話し合いはそのまま決裂…。

「それで、僕の所にフェイトが…。でも、あれを公開しても特に問題は…」

「ユーノの言う通りあれを公開しても我々には何の問題はない。何せ影の守護者についての今までの定説を覆した物だからな。だが、それを意としない連中が六課に押し寄せるだろう。そして、あいつの弟達に近づき、彼らを利用しねない。なんせ、自分達の出世の為ならなんでもアリだからな…あいつ等は…。それに恐らく、今まで極秘に処理してきたミツキに関しての事を教えるとでも言えばあいつの弟達の事だ…連中にホイホイとついて行くだろうからな」

「そうなると、はやてだけじゃ抑えきれないしせっかくの六課とミツキさんとの協力関係が崩れかねない…」

「ああ…。今のところ査察以外これといって地上本部からは、あれこれとは言われてはいない。だが、それもミツキの協力があってこその部分が大きい。それにもしその事をアイツの弟達が聞いたら黙ってはいないだろう。そして、それをミツキが弟達を止めにかかかるだろうし今回のフェイト同様連中も納得はしないだろう。そうなると最悪の場合…」

「まさか、本気での魔法戦闘…」

「まぁ…、ミツキちゃんならやりかねないだろうね…」

「ああ…私と母さんは、それだけは絶対にさけなければならないと考えている。なにせあいつは優しすぎる…。それにこういった事に巻き込ませないために弟達を六課に送り込んだだろうし、今まで公にはせずにひたすら我慢してきたのだからな。それをそいつ等のせいで無駄にはさせたくない。だが私は、個人的にはあいつの事は大嫌いだ」

私の話を聞いたユーノは、なぜ自分の所にフェイトから連絡が来た事にそのことが理由なんだと納得しながらも疑問を私に投げかける。

その疑問に私が答えヴェロッサがそれに続く。

ヴェロッサの話に私がさらにミツキとの協力関係が六課にとって重要である事の説明と彼女に対しての個人的な考えをつけくわえた。

「クスッ…それは相変わらずなんだ…。それなら…その事については、僕にまかせてくれないか？クロノ？」

「どうする気なんだ？ヴェロッサ？」

私の話を聞いたヴェロッサがそのことについて自分にまかせてほしいとニヤニヤしながら私に言ってきた。

それを聞いた私は、その真意をヴェロッサに聞いた。

「ようするに、過去に起こった事をわからないようにすれば…と言うよりもし知っても今回のフェイトのようにしなければいいんだろ?あの書類については、説明出来る人がここにいるし、彼もその事を話したがっている。それにこの事を聞いてほしい人物も恐らくその辺の事を知りたがっているだろう。なんせ、話し合い場に盗聴器を仕込んだんだからね。」

「なるほど…。まさに一石二鳥って訳か…」

「それだけじゃないよ。うまくいけばフェイトの事も解決出来るかも知れないし僕なら当時の事も知っているからその辺の事も彼らに説明出来る。それに、スクライア司所長が恋する人にも会えて一石二鳥が三鳥にも四鳥にも…」

私の話にヴェロッサは、その真意を説明。

それに私が答えた声を聞いたヴェロッサは、ユーノ方をみながらニヤニヤしながらそれに答える。

ユーノは、ヴェロッサの話に顔を真っ赤にしながらあたふたしていた。

「そう…うまくいけばいいのだが…。とりあえずその事についてはヴェロッサに任せるとしよう。それでいいな?ユーノ?」

「わかった。それじゃ」

私は、ユーノのあたふた様子を見ながら少し考えそしてヴェロッサにそのことについて任せる事にしユーノにもそれでいいのか確認をとった。

その声にユーノは、了承にヴェロッサと共にその部屋を後にした。

2人が部屋を出ることを確認した私は、手を止めていた仕事を再開しつつも上手くいくことを密かに願った…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その65…始まります」

その65

その６５

機動六課施設内　隊舎横の芝生

アルト視点

「「待てぇ～！！」」

「嫌なこった！！捕まえられるもんなら捕まえてみろ！」

「全く…よくやるね…あの２人…それも本気で」

「仕事のいい気分転換だって…。スバルの方は、よくわからないけど…」

私とティアナの目の前では、ユウがスバルとヴィヴィオと鬼ごっこをしている。

鬼は、ヴィヴィオでスバルがハンディとしてヴィヴィオと一緒になってユウを追いかけていている。

スバルとユウは本気で、ティアナはそんな二人を見ながらなんだか呆れた様子。

私は、そんなティアナの様子を見つつユウがヴィヴィオと遊んでいる理由を彼女に話をしそして、スバルがなんでそれに付き合ってるのかまではわからない事を彼女に告げた。

「よ～し!!ヴィヴィオ!!必殺技やるよ!!」

「はい!!スバルさん!!」

「まさかあの子…あれをやる気なの?」

「あれって何よ?」

私とティアナがそんな話をしていた所、スバルがヴィヴィオに対し声をかける。

それを聞いたティアナは、驚いた…と言うより呆れ具合がましたような顔をしながらそんな声を上げその必殺技がなんなのかティアナに聞いた。

ガシッ!!

「おーーーーりゃーーーーー!!大車り～ん!!」

「ロケットパーーーーーーーーーーンチ!!」

ヴォン!!

「てぇ!!ただヴィヴィオを投げてるだけじゃねぇか!!(ガン!!)グベボッ!!!」

ドスン！！

「ユウちゃんつっかまえた♪」

「やったぁ～！！どうだユウ兄！！」

「くっそ～…。やられた～」

私の声にティアナは、答えようとした所スバルがヴィヴィオの両手を掴みその場で回転をしだした。

そして、その勢いのままヴィヴィオをユウがいる方へと投げ飛ばした。

それに気づいたユウは、その事に突っ込みをいれていたがヴィヴィオがまるでスーパーマンのような格好で飛んできたのを交わす事が出来ずヴィヴォオの体当たりをまともに食らいその場にダウン。

ヴィヴィオは、あお向けになって倒れたユウの体の上にダイブする格好で着地。

そして、起き上がりユウのおなかを叩きながら彼を捕まえてた事を高らかに宣言。

一方スバルは、その場でガッツポーズをしユウは降参するかのようにその場で手を上げていた。

「もしかして…あれが必殺技？」

「そうよ…。呆れるでしょ？それは、私も同じよ。ちなみにスバル

は、これがやりたかったがためにヴィヴィオに付き合ってるのよ」

「そ…そうなんだ…。アハハハハ…はぁ～」

そんな様子を見ていた私は、スバル達を指差しそしてポカーンとしながらティアナの質問をした。

質問を聞いたティアナは、私の顔を横目で見ながらそれが必殺技であることを認めさらにスバルがなぜあの鬼ごっこに参加している理由を言った。

ティアナの話を聞いた私は、ティアナに私の心を見抜かれてると思いテレ笑いをするもそれがすぐにため息に変わってしまった。

「「ヴィヴィオ～！」」

「あっ！！なのはママにフェイトママ！！」

「なのは隊長にフェイト隊長…それに…あの人達は確か…」

私達がそんなやり取りをしていた所、後ろからヴィヴィオを呼ぶ声が聞えてきた。

その声に気が付いたヴィヴィオは、乗っかっていたユウの体から降りそして近づいてくるなのは隊長とフェイト隊長
方へと向ってトテトテと走り出した。

後ろから聞えてきた声に振り返ったティアナは、隊長達の姿とその後から来る二人の男性の姿を確認し声を上げる。

「ゴメンね。ヴィヴィオの世話をみんなに任せっぱなしで」

「気にしなくてもいいですよ。こちとら、いい気分転換になってますから。なぁ、スバル」

「うん！問題ありませんよ、なのは隊長」

走ってきたヴィヴィオを抱きしめたなのは隊長は、ヴィヴィオを一緒に起き上がるユウとそれに手を貸すスバルに近づき声をかけた。

2人は、その声に問題ない旨を答える。

「アルトにティアナもゴメンね。仕事があるのに」

「いっ！いいえ！ユウと同じでいい気分転換になってますから」

「ご心配には及びません。ユウやスバルと違って私とアルトは仕事をキチンと終わらせてからヴィヴィオと遊んでますで」

「おいおい…それじゃ、俺とスバルだけが仕事をサボってるようじゃないかよ」

「そうだよ！！仕事溜めてるのはユウ兄だけだよ！！ティア！！」

「お前なぁ…」

その一方、フェイト隊長はヴィヴィオ達の様子を見ながら私とティアナに声をかける。

フェイト隊長の声に私は、恐縮しつつそれを答えティアナは自分と

ユウ達とは違ういった態度を取りつつフェイト隊長の声に答える。

ティアナの話を聞いてたユウは、それに対し反論をしスバルがそれに続く。

でも、スバルはユウをフォローするかと思えばそれをしているのはユウだけだと言いそれを聞いたユウはスバルに見ながら呆れたような声を上げていた。

「それで、後のお2人さんは？」

「ああ…この人は…私達の…」

「初めまして。私は、ヴェロッサ・アコース申します。早速悪いのですが、今日の夜…ご一緒にお食事でもいかがですか？とても綺麗なお嬢様方？」

「えっ…！？お嬢様？」

「と…とても綺麗なだなんてそんな～（照）」

「てぃ…ティア？アルト？いったいどうしたの？」

ユウの問いかけになのは隊長が後の男性二人を私達に紹介しようとした所、イケメン風で緑色のロングヘアーの男性が突如私とティアナの前に現れいきなりナンパをして来た。

そのあまりにも大胆な行動にティアナは、顔を真っ赤にしながら戸惑いを見せる。

私はと言えば、イケメンにそんな事をいきなりそんな事を言われたのでなんだか照れてしまいティアナと同じく顔を真っ赤にしていた。

私の様子を見たスバルは、その様子に不思議そうなの声を上げていた。

「えっと…アコース査察官？いったい…何されてるんですか？」

「何って、せっかく綺麗なお嬢さんがいるんだからお食事にでも…（ガン！！）グハッ！！」

グシャ！！

彼の行動に対しフェイト隊長が、声をかける。

その声に対し彼は、そのままの状態でフェイト隊長に答えようとしその話が終わろうとした所で彼の頭の上からハンマーが降り注いできた。

「や…やぁ、はやて…」

「（ガシッ！！）なぁ、ヴェロッサ…。何ウチの部下を口説こうとしてるのや（怒）！？それになぁ～、ここにいるアルトにティアナ…それと向こうにいるスバルに余計な事すると１０８方面から怒り狂った邪神が舞い降りるで？」

「もうすでに光臨してる気が…」

「でも…もしその邪神…って言うか、ミツキさんがここに飛んできたら…」

「間違いなく死んでるな…。あの人…」

ハンマーを食らい地面に頭をめり込ませた彼をハンマーを持った部隊長がその地面から引きずり出しそして、彼の胸倉を掴みむ。

部隊長の顔を見た彼は、部隊長に挨拶をするがとてもご立腹な様子でその声を無視。

そして、その感情が赴くまま彼に対し怒りを露わにしていた。

それを見たスバルは、部隊長が言ってるのが誰なのかを考えつつも既に部隊長が言う邪神が既に光臨しているのでは?とその様子も見ながらそんな事をもらしその後になのは隊長とユウの順でスバルに続く。

ちなみに私とティアナは、そんな様子は露知らずポーっとしたままその場に立ち尽くしていた。

機動六課隊舎内　部隊長室

はやて視点

「んで、無限書庫の司書長さんと査察官が俺達に一体なんのようなんだ?」

外の芝生にて一通りの挨拶を終えたウチ等は、ユウとスバルそれにティアナとアルトにギンガを部隊長室に呼び出した。

この部屋にはウチとユウ達の他になのはちゃんとフェイトちゃん…それにヴェロッサとユーノ君が追ってユウ達を呼び出した理由としてユーノ君達がユウ達に用があるって事でここに来てもらっている。

ちなみにどんな感じでいるかと言えば、部屋にあるデスクにある椅子にウチが座りそのデスクを中心にその右側になのはちゃんとフェイトちゃん…それにリインがおる。そして、左側にはユーノ君とヴェロッサがおって、ウチの正面にユウ達が横並びで立っているって感じやね。

その呼び出しに対し、ユウ達はヴィヴィオの世話をエリオとキャロに任せた上で来ていた。

部屋に全員がそろった所で、改めてユーノ君とヴェロッサの2人をユウ達に紹介。

それを聞いたユウが、面倒くさそうな顔をしながらここに呼ばれた理由を詳しく聞いて来た。

「それについては、僕から説明をしよう。おっと…その前に…」

「まさか…今度は、ギンガをナンパするんやないやろうな…ヴェロッサ…」

「（ドキッ！！）ま…まさか…そんな事する訳ないだろう…はやて…」

ユウの声を聞いたヴェロッサがそれに答えようと一歩前に出たがその足は止まらずギンガがいる方へと向っていた。

それに気づいたウチは、ヴェロッサにすかさず釘を刺す。

ウチの声にヴェロッサは、慌てながらそれに答え元の位置に戻った。

「それで!!君は、なのはとはいったいどんな関係なんだ!!まさか…!!ヴィヴィオの世話をしているのも…。そうなんだな!!吐け!!その理由をはけぇ～!!」

「んな訳ねぇ～だろ!!つ～かいきなりなんなんだぁ～!!コイツは～!!!」

「ちょ…ちょっと!!スクライア司書長～!!何やってるんですか～!!」

「何…これ…なんかのデジャブ?」

「どっかで見た光景だよね…ティア…」

ヴェロッサが元いた位置に戻ったかと思えば、今度はユーノ君がユウに近づき彼の制服の胸倉を掴み彼の体をグワングワン揺らしながらなんだか怒り狂った様子でなのはちゃんとの関係をユウに聞いていた。

それに対しユウは、それを否定。見たアルトがそれを止めに入る。

ユウ達のそんな様子を見ていたスバルとティアナは、どこかで見た光景である事を言っていた。

「ユ～ノく～ん…。何訳のわからない事を言ってるのかな?…。ち

ょっと…向こうでお話でもしよっか…」

「えっ…なのは…。僕は君のためを思って…なんで、そんなに黒いの？…それに僕の服を掴んで隣の部屋に引きずって…（ドゴーーーーーーーーーーーーン！！）ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「なぁ…リイン曹長…なのは隊長の周りいる男共ってみんなあんなヤツ等なのか？」

「う～ん…それはないとは、思うんですけど…」

それを見たなのはちゃんは、ユウに激怒しているユーノ君に何時の間にかセットアップを終えつつ近づき彼に声をかける。

なのはの声に気づいたユーノ君は、ユウを揺さぶるのを辞め後ろに振り返り黒化するなのはちゃんを見つつその様子を自分で説明しながらなのはちゃんと一緒にとなりの部屋に連れて行かれ…そして、お話を受けていた。

ユーノ君の悲鳴を聞いたユウは、心配そうな様子で彼に近づいてきたリインに対しなんや思い当たる事であったかのような様子でその事についてリインに聞いた。

その質問に対しリインは、ユーノ君の行動に対し呆れつつも曖昧な答えでそれを返していた。

それからおよそ３０分後…。

「それで、いったいなんの用なんですか？」

「まさか、ティアとアルトをナンパするのとユウ兄となのは隊長の関係を確認するためだけに来たとか…」

「それについては、一種の病気みたいなもんやと思っておいてな」

「病気って…」

「まぁ…病気って言うのは言い過ぎなんだけど…今回みんなを呼んだのには、さっきのとは別件で…ユーノ？説明をお願い出来るかな？」

「わかったよ…」

ユーノ君達が戻ってきた来た所で改めてギンガがウチ等に呼ばれた理由を聞いて来た。

それを聞いたウチは、ヴェロッサを睨みつつその声に答えウチの声にフェイトちゃんが2人をフォロー。

詳しい説明をボロボロの状態のユーノに頼み彼がデスクの前に出てきてその理由を説明し始めた。

ユウ視点

「影の守護者？」

「それっていったい…」

部隊長の前にたったスクライア司書長は、俺達に向って「影の守護者」事について自分論説を説明すると言い出した。

それを聞いた俺、ギンガ、アルトの3人は眉を潜めその一方でスバルとティアナはそれが何かを聞いていた。

「影の守護者とは…古代ベルカの歴史書にその記載があってそこには王を守護する物とされ…その存在、規模においてその全てが謎とされてきた物なんだ」

「それが、例の黒いガジェットのフレームその記載があってそれとの関連性を本局からユーノに調べてもらっていたの。彼考古学において一目置かれた存在だから…」

「本局からの依頼で、色々と調べている内にある仮説にたどり着いてね。それで、その仮説をみんなに聞いて…（断る）えっ…」

「ちょ…ちょっとユウ！！」

「ユウ兄！！いったいどうしたのよ！！」

それを聞いたスクライア司書長は、スバルとティアナに対しその事を説明。

さらにフェイト隊長が説明を付加えそれにスクライア司書長が続く。

その説明が終えそうな所で、俺は断りを入れ部隊長室を後にしようとした。

それを見たティアナとスバルは、驚きの声を上げる。

「私も…お断りします…」

「私も…」

「ギンガさんにアルトまで…ちゃんと説明しなさいよ！」

「まぁ…理由は、なんとなく想像がつくけどちゃんと説明してな…ユウ？ギンガ？アルト？」

俺の行動を見たギンガとアルトもそれ続けとばかりムスッとした様子で部屋を後にしようとする。

ティアナは、その行動に対しその理由を聞こうと声を荒げそれを見かねた部隊長はその理由を理解しつつもみんなにわかるように俺に説明しろと言ってきた。

「わかりましたよ。つまり…スクライア司書長は、俺達に自分の仮説とやらを聞かせそれを足場に姉貴に協力してもらおうって考えてるんだろ？「影の守護者」の意味については知らねぇが姉貴に近づこうとしてる連中が口を揃えていってたぜその「影の守護者」って言葉をな」

「私もユウと同じ理由です。地上本部でミツキさんの補佐をしている時にその言葉をよく聞きましたけど、その大概の人はその「影の守護者」についての情報やらをミツキさんに要求して来る人達ばかりなんです。自分達の出世のために…スクライア司書長は、なぜこんな事をしているのかについてはわかりませんがそれがどんな理由にあれ協力する事は出来ません」

「私も…ユウやギンガさんと同じで、そのせいで先輩…色々と苦労とか体調を悪くしてるのを間近で見てるんです…申し訳ないんですが、それについては命令だと言われても聞く事はできません…」

部隊長の声に俺は、渋々その理由を説明した。

その理由に続きギンガとアルトがそれに続く。

俺達の話に部隊長とリイン曹長は、やっぱりといった様子。

その一方で、フェイト隊長とスクライア司書長はそんなと行った様子。

アコース査察官となのは隊長は、俺達の理由に納得している様子。

「そう言う事…それなら、私も同じって事で…」

「私も…」

「ティアナにスバルまで…いったいどうして？」

「フェイト隊長…私とスバルは、訓練校時代に2人で、色々とミツキさん事調べた事あるんです。でも、その時は何もわからなかったんですけど…。今のユウ達の理由を聞いてようやくハッキリしたわ。ミツキさんがなんでよく入院していのか…、その理由をね…。それとこれとがどうリンクするかについては誰に聞いても教えてはくれそうにない…と言うより今の立場じゃ返って迷惑がかかるだろうから教えないって所だろうからそれまで待つつもりなんです。スバルと2人で色々と話をした上で…。」

「それで、ユウ兄達の理由を聞いて…その顔を見たら3人ともそれが本気で言ってるって思って…。ユウ兄達がその理由を言ってる間にティアと念話で相談して…もし私とティアの2人で協力してもユウ兄達が絶対にそれを止めさせようって説得してくるしそのせいでミツ姉に迷惑…かけたくないんです…。それで…ごめんなさい！！」

俺達の理由を聞いたスバルとティアナは、どうやら俺達がその理由を説明している間念話で色々と相談してたらしく俺達と同じくスクライア司書長の仮説を聞かないと言いその理由をフェイト隊長が2人に聞く。

その問いかけにティアナ、スバルの順でその理由を説明していた。

「待ってくれ！！何も僕は己のためにこの仮説を作ったわけじゃない！！歴史の真実を明らかに…」

「それだけじゃないわ！！ユーノの仮説が証明されれば管理局の裏側で何が起こっていたのかもわかるかも…」

「それなら、フェイト隊長が動き出す前にウチの部隊長…もしくはナカジマ三佐やらがケイン達がとっくに動いているんだろうよ…。それを連中がしないって事は…それだけやってもあまり意味がない…と言うか姉貴や俺達になんかしらの影響があるかも知れないだろうって事だろうよ？ちなみに俺とアルト…それにギンガが知ってる事については全てとは言えねぇがある程度の事については、スバルとティアナに既に説明している。その上で、その後2人で色々と話をしたみたいだぜ。もちろん、姉貴とも通信でだがちゃんと話をしてるんだとよ。それじゃ！？」

部隊長室を後にしようとする俺達に対しスクライア司書長、フェイト隊長の順で思い留まるよう説得をしようと話をするが俺がそれに対し既にその事自体意味がない事をつげ部隊長室を後にした。

リイン視点

「なっ？ウチが言った通りやろ？ミツキがもうすでにユウ達に説明してるやろうから無理やって…」

「う～ん…僕としてはうまく行くとは思ったんだけどなぁ～」

ユウ達が部隊長室を後にした後、その場に残ったはやてちゃん達は、今の出来事について色々と話をしているのです。

その中ではやてちゃんは、納得していない様子のユーノ司書長とフェイト隊長…参った参ったといった様子のヴェロッサに対しホレ見たことかと言わんばかりの顔をしながらヴェロッサと話をしていた。

はやてちゃんの話を聞いたヴェロッサは、腕組みをしながら予想が外れた事を反省しつつはやてちゃんの話を返していた。

「フェイトちゃん…」

「心配しないで…なのは…。まぁ…ユウ達には協力してはもらえなかったけど…。でも、私には詳しく説明してくれるんでしょうね？ユーノ？」

ムスッとした様子のフェイト隊長の顔を見ながらなのは隊長が心配そうな顔をしながら彼女に声をかける。

その事に気が付いたフェイト隊長は、笑顔でそれに答えつつユーノに対しその仮説について自分には説明してくれるのか?確認していた。

「それが、約束だったからね…。わかったよ…ちゃんと説明する。でも…あくまでもこれは僕の仮説でしかもまだその仮説は完成してはいない…。もし、サエグサさんが協力してくれたならこの仮説が完成してただろうけど…それでもいいなら…」

「わかったわ…。お願い…ユーノ」

フェイト隊長の声にユーノは、ユウ達の思わぬ対応に凹みつつも私達には説明すると言いそして、その仮説についてはまだ完成していないけどそれでもいいか?とフェイト隊長に確認。

フェイト隊長は、その事を了承しユーノはその仮説を説明するための準備を始めた。

その６５（後書き）

今回は、もう１話！！

その６６（前書き）

機動六課隊舎内　廊下

ティアナ視点

「いいのかな～あんな事を言って…」

「今更心配しても仕方がねぇよ。もうやっちまった事だし。それに、自分のためでもなくても姉貴に協力してもらおうってのは確かだったからな。それに自分のためなんかじゃなくてもあいつの名前でその仮説ってのを発表しちまえば手柄は全てあいつの物…。やっと姉貴の周りに近づこうとしてた連中が来なくなったんだ。それをまたうるさくする必要はねぇよ」

「そうだよ～。それにもし、部隊長達から何か言われたらユウ兄のせいにすればいいんだよ！！アルト」

「そうよね～。一番最初に断ったのは、ユウだからねぇ～」

「そうか！！そうだよね！！」

「お前等…」

部隊長室から出た私達は、廊下を歩いていた所アルトがさっきの出来事の事を思い出し部隊長達からその事について何か言われるのでは？と心配そうな声をあげていた。

それを聞いたユウは、そのときの事を思い出しながら自分なりの意見をアルトに言いそれを聞いたスバルがもし部隊長達が何か言ってきたらユウのせいにしようと言い出しそれに私が同意する声をあげアルトもなるほどと声を上げギンガさんもそれに頷いきながら同意を示していた。

私達の様子を見たユウは、なんだか呆れた様子で声をだしていた。

「それにしても「影の守護者」の事…本当になにも知らないの？」

「ああ…。俺はな…。だが、ギンガは、何か知ってるんじゃないか？俺とは違って１０８でそれとなく調べてたんだろ？」

「そうなの？ギン姉？」

「確かに…調べたのは確かなんだけど…。でも、詳しい所まではわからないまま…それに知ってる事についてはあの司書長さんが言ってた事くらいよ」

私の質問を聞いたユウは、自分はそれについて知らない事を言いギンガさんに昔私とスバルと同じ事をしてた事を言い私と同じ質問をギンガさんにした。

その問いかけに対しギンガさんは、調べていた事は事実である事を言うがギンガさんが知っている事については、スクライア司書長既に私達に説明している事を告げた。

「ふ～ん…そうなんだ…。でも、協力はしなくてもその「影の守護者」ってのがいったいなんなのか聞いておけばよかったな～」

「そんな芝居、あんたが出来る訳ないでしょ？でも、聞いておいて損する事はないわよね」

「でも…今更引き返すって訳には…」

ギンガさんの話を聞いたスバルは、スクライア司書長が言ってた「影の守護者」について詳しく聞いておけばと失敗した様子でそんな声を上げた。

それを聞いた私は、スバルがそんな芝居が出来る訳ない言いでも、スバルの意見にも一理あると思いその事に同意。

私とスバルの意見を聞いたアルトは、今更戻るわけにはいかないと疑問の声を上げる。

「なら…その辺の事情に詳しいかも知れない人に話でも聞きに行こうか？ちょうど今、六課にいるしな」

「そっか～あの人なら知ってるかもね。私達に色々と話をくれたし…。それなら、私給湯室からお菓子とお茶とってくるね」

「色々と話を…もしかして…アルト！！私も手伝う！！」

「それっていったい…」

「なんとなくは、想像出来るけど…。スバル！！お茶を持って来るなら砂糖もお願いね」

「さ…砂糖？…わかった」

「まっ！！わからないなら黙ってついてきな。その方が面白いだろうし…俺が」

「ムカツク…」

アルトの話を聞いたユウは、それが誰の事だか想像がついたらしく給湯室にお茶とお菓子を取りに行った。

その声を聞いたスバルも誰だか思いついたらしくアルトの手伝いをすると言い彼女の後に続く。

2人の様子を見たギンガさんもどうやらわかったみたいでスバルに対し砂糖を持ってくるよう言いその声にスバルは疑問符を浮かべつつもそれを了承しその場を後にした。

その一方私は、それが誰なのか一向にわからずそれを見たユウはそのまま付いて来るよう私言いその態度にムカツいた私は、それを声と態度で表現しながらユウ達の後を突いて行った。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６６…始まります」

その６６

その６６

機動六課隊舎内　デバイス調整室

マリー視点

「なるほど…。それでここに来たって訳…」

私がシャーリーの仕事を手伝っていた所突然ユウ達がお茶とお菓子持って訪れた。

そして、持ってきたお茶を飲みつつ彼ら来た理由を聞いた私は、私の所に来た理由に納得の声を上げていた。

「それで…マリーさんは、「影の守護者」について何かしってますか？」

「う～ん…私は、専門家じゃないから詳しい所までわからないけど…」

私の話を聞いたギンガは、私がその事について知らないか聞いて来

た。

それに対し私は、口元に右手の人差し指をあてながらその事について答えた。

「なら…わかる範囲でその事を教えてほしいのと…。緑茶に砂糖入れて…美味しいのか？」

「美味しいわよ。ねぇ、ギンガ？（はい！！ユウもやってみたら？）（やだよ！！）これってリンディさんに教えてもらったのよ。それと私のわかる範囲の事でよければ話をしてもいいわよ」

私の答えにユウは、私のわかる範囲での説明を求めてきた。そして、私が緑茶に砂糖を入れて飲んでいる事を疑問に思ったのかそれが美味しいのかと聞いて来た。

ユウの質問に対し私は、それが美味しい事を言いそして、ギンガに同意を求めた。

その声にギンガは二つ返事でそれに答えユウにも薦めていた。

ギンガの薦めに対しユウは、即効でそれを拒否しそれを見ていた私は自分のわかる範囲でよければとその説明を了承した。

「それじゃ…早速始めてもいいかな…」

「ああ…。よろしく頼む…」

そして、ユウが私の言った事を了承した事を了承した事を確認した上でその説明を始める事を告げそれを聞いたユウは彼には珍しく頭

を下げてきたを見つつ私は話しを始めた。

機動六課隊舎内部隊長室

はやて視点

「それじゃ、僕の仮説を説明する前にまずは「影の守護者」について今までの定説の説明から始めようか」

準備を終えたユーノは、ウチ等の前に立ちそして、自分の仮説を説明をする前に今まで定説とされてきた事を説明すると言い画面を展開させ説明を始めた。

「そもそも今までの定説で言う所の「影の守護者」言うのは、古代ベルカ時代…ある王朝に使えていた武装集団…もしくはその個人である事をある事を指し示しその力は、魔力とは違う…別の力…所謂聖霊やら神の力とか…。その事については所説があるんだけどその力を使って王を影から守護する立場の者達の事を言いそして、その力さえあれば世界を制する事も出来ると言われている」

「そして、その可能性としてもっとも近かったのが…ミツキ…やね…」

ユーノが今まで言われてきた定説を説明しその後にウチがその可能性に一番近い存在としてミツキの名をあげた。

「そう…そして、その「影の守護者」が使えていた王朝と言うのが聖王が支配していた国であり古代ベルカ王家と言う説が最有力だっ

たんだ…」

「だから、聖王教会がやっきになって探していたんですね…。自分達の崇拝していた王家が持っていた力を他に渡したくないから…」

ウチの話を聞いたユーノは、それが当たっている事を言いさらに説明を付加えた。

その話に今度は、リインが聖王教会がやっきになってそれを探していた事をついて納得した様子で声を上げていた。

「それは、そうなんだけど…実を言うとそれだけじゃないようなんだよ…」

「それってどういう事なの?ユーノ君」

リインの声を聞いたユーノは、それだけではない事を告げその事を聞いたなのはちゃんが彼に対し詳しい説明を求めた。

「この画面を見てほしい。そもそも僕がこの仮説にたどり着いたそもそものきっかけは、クロノから僕の所になのは達がファントム・ナイツの方から説明を受けた件についてその信憑性を歴史的観点から検証を依頼された事に始るんだ。それで、今この画面に映っている本はその時に無限書庫で発見された本でこの本は今まで見つからなかった物なんだ…それで…この中身なんだけど…」

ユーノは、説明しつつ次の画面を表示させた。

「何々…「我々は、ゲイル族が持つ蒼き光と紅の光のうち蒼き光の模倣に成功した。そして、それを元に我々だけの光の完成させた…

その名を「黄天」と名づけた。これで、我々の覇業への道は確実のモノとなった?!!ちょ…ちょい待ちぃ!!これって…まるで古代ベルカ王朝が黄天を作ったみたいな事になってるんやないの!!」

「そう…これを見て僕も正直驚いたよ…」

次に表示された画面には、その本の中の原文の文章とそれを翻訳した文章が表示されウチはその翻訳された方の文章を読み…そして、その文章を読み終えた所でその内容をウチなりに解釈した事を口に出しユーノにその事を確認した。

ウチの声を聞いたユーノは、ウチが言ってる事が正しい事をいいそれを見たときの感想を述べていた。

「でも…これがなんで今まで見つからなかったの?」

「見つからなかった…と言うよりこれらの本が無限書庫から無くなっていたんだよ。僕が司書長になるずっと前から…。元々この本は行方不明本として今までずっと探していた本の中の数冊で…それがいきなり出てきたんだ…それも元々置いてあった所に…」

「それは、変な話ですね…。今まで行方不明だった本がいきなり戻ってくるなんて…まるで、家出した子供が戻ってくるみたいな…」

フェイトちゃんの質問に対しユーノはそのときの状況を説明する。

すると、その話を聞いたヴェロッサが腕組みをしながら疑問を投げかける。

「うん…それについては、皆目検討がつかないんだけどでも、その

お蔭で僕はこの仮説にたどり着いたんだ…。影の守護者は…今までの定説以外にもうひとつあるんじゃないかってね…」

「確かに…カリムの予言にも「古よりの影の守護者」と「死せる王の影の守護者」ちゅう二つの言葉が出てたくらいやからなぁ～」

ヴェロッサの問いかけにユーノの両手でお手上げのポーズをとりながらそれに答えそして、話の本題でもあるユーノ仮説について話始めた。

ユーノの話にウチは、カリムの予言の事を思い出しその可能性がある事を示唆。

「そうだね…。でも、そのふたつの「影の守護者」がいったいなんの意味を指し示しているのかについては今まで色々とあってね…。例えば、王を守護している影の守護者が復活して生まれ変われる…とか…ミツキ・サエグサさんが影の守護者としての使命を管理局に譲るとか…すごい所でミツキさんの弟のユウ君が姉の力を奪って管理局に氾濫を起こす…なんて所まで」

「まっさか～」

「ユウがそんな面倒な事するか？」

ウチの話にユーノは、カリムの予言の「影の守護者」のその解釈について所説あった事を明らかにする。

それを聞いたリインとウチは、ユウがそんな事をする訳がないといった態度でその解釈を否定した。

「僕も…本人に会って見てその可能性がない事は理解できたよ。それで、僕の仮説の始まりは先ほど見せた本にあった文章から「影の守護者」は古代ベルカ王家が作り出したものと古の時代から存在した「影の守護者」と言う二つの存在があり…。前者については、今説明した通りで後者についてはそれとは別の古の神が人間に与えた…と言うより人間を監視するために送り込んだものと考えているんだ…」

「人間を監視?神様が?」

「いったなんでそんな事を?」

「それは随分と定説とはかけ離れた仮説ですね…」

ユーノの説明にフェイトちゃんとなのはちゃんの順でその説明に対し驚きの声をあげ、それに続きヴェロッサが冷静にその感想を述べた。

「確かに…これをもし発表すれば、僕は非難の的になるだろうね?何せ、定説を否定し古代ベルカ王朝が黄天を作り出したって言ってるんだからね。それに恐らく…聖王教会からも文句を言われるだろうね…「そんな根も葉もない事を言うな」ってね。でも…これにはれっきとした根拠があるんだ…」

「根拠って?その…絵本?」

そう言うとユーノは、自分が持って来たカバンから絵本を取り出し私達にそれを見せた。

その絵本を見たフェイトちゃんは、疑問の声をあげる。

「そう…この絵本…正式なタイトルは、「赤い龍と青い龍と姉弟の冒険」と言いとある架空の村で出会った二匹の龍とその村にいた姉弟との出会いからその別れまでを描いたシリーズの中のひとつ。今僕が持っているこの絵本は、そのいくつかあるシリーズの中のひとつで…。二匹の龍と姉弟の出会った時の事が描かれたもの。これ以外の話については、絵本化自体…されてなくて小説化しかされてはいないんだ。でも、この話自体完全オリジナルではなくミッド北部にある伝説を元にされた作品であるんだ」

「へぇ～、この絵本に続きがあったなんて…初耳だね…」

「初めて聞いたわ。そんな事」

ユーノの説明に驚くヴェロッサとフェイトちゃん。

「そうなるのは、当然だね。なんせ、売れたのはこの絵本だけでその続きについては内容が結構残酷な内容で絵本にする事が出来なくってそれで小説と言う形で販売したんだ。でも、物語と言うよりその出会いから別れまでの色々な出来事を淡々と書いたモノで小説というより歴史書に近い形だったんだよ。それで、結局売れなかったんだよ。ちなみに僕は、これを全て読んだけどね。あまり面白いものとは言えなかったけど」

2人の反応を見たユーノは、それが当然の反応と言う態度で仮説の説明からは、少し脱線をしその絵本についての説明をしだした。

「そういえば、ユーノ君っ昔からそういう本好きだったよね？」

「うん。それで、この本を見はやてからの例の報告書を読んだ時に

この本の存在の事を思い出してね。それで、色々と調べてミッド北部にゲイル族と言う遊牧民族が生活していた遺跡を見つける事ができたんだ。そして、そこからはやての報告が正しい事がわかったんだ。僕の仮説は、そこで発見した出土品等から調べたものでゲイル民族は蒼天の石と紅天の石を神…もしくはそれに近い者から与えられるかその石を発見するかしてその力を使って自分達に起こった害を払ったのではないか？と言うものなんだ」

その話を聞いたなのはちゃんは、昔の事を思い出しながらユーノにはなしかけその話に彼は笑顔で返事をし説明を続けた。

「それにしてもよくこの短時間でそこまで調べ上げたもんやね？関心するわ」

「い…いや～正直な事を言うとこの仮説は、元々僕が考えたものじゃないんだ。つまり、僕の仮説は過去に発表された論文を元に僕なりに発展させているものでね。でも、その論文自体も僕自体その半分しかまだ見ていなくて…。調べ上げた内容もその論文の内容を確認したものなんだ…。僕としては、その内容が正しい事を証明したいと考えている」

「なるほどな…。でも、それになんでミツキやユウ達の協力が必要なんや？」

「それは…」

ウチの質問にユーノがその真意を明らかにした。

それを聞いたウチは、さらに疑問を投げかけた。

そのユーノの答えを聞いたウチは、驚きを隠せずにはいられなかった。

機動六課隊舎内　デバイス調整室

ギンガ視点

「え～！！ユウ兄のお父さんの論文が認められなった上に学会からも追い出されたの！！」

「そうよ。そもそもミツキが保護された後、スバルとギンガのお父さんとお母さん…クイント・ナカジマとゲンヤ・ナカジマがどうしてこんな事が起こったのかをユン先生やミツキの証言を元に調べ上げた事でわかった事なの。その時の定説とはまったく違うものだからって事でね」

マリーさんから「影の守護者」についての説明を受けた私達は、なぜそれにミツキさんが関与するのか？という疑問にたどり着きその疑問についてマリーさんがその理由を説明した。

それを聞いた私達は、驚きを隠せずそれを証明するかのようにスバルが声を上げそれを聞いたマリーさんがなぜその事を知っているのかをその事を説明した。

「それにしても定説から違うって事だけで、当時の学会を追い出されるなんて随分横暴よね」

「それについては、その定説をそもそも推奨していたのが聖王教会だったからそこの機嫌を悪くさせないと考えたらしいわよ」

「ともなれば、あの司書長がなんで姉貴の協力を仰ぎたいのか…。恐らくその親父の論文の入手もしくは、当時の研究資料かなんかを手に入れるため…か…」

「恐らく…その可能性が一番高いわね」

マリーさんの説明を聞いたティアナが同時の学会のやり方に対し疑問の声を投げかけた。

それに対しマリーさんは、当時の学会の内情を説明しそれを聞いたユウがスクライア司書長がなぜミツキさんの協力得たい理由を推測しそれを話した。

それを聞いたマリーさんもその意見に同意した。

「そうなると…。果たしてこのままで終わるかしら?」

「そうよね。もし、スクライア司書長の話を本局が信用したら私達じゃどうする事もできないわね…」

「出来るとしても精々命令無視するくらいか…。まいったな。コイツは…」

そんな様子を見ていた私がふと思った疑問を投げかける。

その声にティアナが思考を巡らせた後自分達ではどうしようもない事を告げ、その後ユウが自分達で出来る事を上げていた。

「そうなると…。今、私達が頼りに出来る人って部隊長か父さんくらいしか…」

「今何をしているかは、わからないけどなんとかしてくれないかな～。部隊長…」

マリーさん以外の全員が頭を悩ませる事にまるで追い討ちをかけるかのようにスバルとアルトの順で声を上げる。

「とりあえず、フェイト隊長がやっきなってるのさえ抑える事が出来れば公にもならないで済むんだろうけどな…」

「でも、なんでフェイト隊長がそんな事になっちゃったの？だって、ユウ兄達から管理局の裏側とかミツ姉に関しての事は調べないって事でデータを受け取ったんでしょ？」

そのアルトの嘆きを聞いたユウも部隊長室でのフェイト隊長の様子を思い出しながら今回のことを主導しているがフェイト隊長である事だと推論。大事にならなくてすむ方法を口にしていた。

ユウの話を聞いたスバルが、フェイト隊長にユウ達が渡したデータの事を話にあげなんでそうなったのかユウに聞いた。

「さぁな？でも、俺が盗聴の話をフェイト隊長にした時…二つ返事であの話に乗ってきたからな～。何かしらの事はあったようだけど俺にはそれが何なのかはわからねぇよ」

スバルの問いかけに対しユウは、頭を書きながらそれに答えいた。

その答えに対しスバル「ふ～ん」といった声を上げイマイチ納得していない様子だった。

でも、正直な事を言えばそれはユウがついた嘘。

私とユウそれにアルトとマリーさんの所には、既にミオちゃんからフェイト隊長がリンディ提督と大喧嘩をしそして彼女単独で管理局の裏側の事や影の守護者について調べている事の情報が既に届いていた。

それをなんでユウがスバル達に言わなかったのかと言えば、そんな事を言ったら全部言わなきゃいけなくなるしマリーさん以外その全ては知らないから余計な事はしないでおこうと言った所だろう。

まっ、私達がその事を知りたいと言えば知りたいけど…そのことについてはミツキさんからスバルが特急隊の防災士長以上、ティアナが執務官になったら言うって事で約束しちゃって。

もし、それにそうなる前に私達が勝手な事をして面倒事を起こしたらその話は無しって事なってて二度と話はしないって事になっちゃってるから言えないしスバルとティアナもその事を理解しているから追求はしてこない（緊急時はそれを覗く）。

そんな事で私達としては、部隊長と父さんに頼る事しか出来ないのよね～。

私達は、そんな事を考えつつため息ばかりつくのであった。

機動六課　部隊長室

ヴェロッサ視点

「なるほどな…。まさかその論文の製作者がミツキとユウの父親だったとはな…」

「そうなんだ。だから、僕は彼女がもしかして僕が知らない残り半分の論文を持っていないか…。もしくは、その当時の研究資料を持っていないかと思ってね…。でも！これはあくまで僕自身のためにではなく彼の…ムツキ・サエグサ博士の汚名を晴らすためと今後の考古学の発展ために…」

「恐らく…それは、無理やろうな…」

「はやて！！それはどうして！！」

スクライア司書長の説明を聞いたはやては、腕組みをしながら少し考え難しい顔をしながら感想を述べた。

それを聞いたスクライア司書長は、その声にさらに説明を追加する。

だが、それを聞いたはやてはその事が無理である事を告げその声にフェイトが声を荒げる。

「それはな…。そもそも、これにはユウ達の協力を得られないと話がすすへんやろうしもしそれを強引にでも進めるようならミツキを敵に廻しかねないやろうしな。と言うよりもう既にフェイトちゃん達の行動についてはミツキは把握してるやろうしユウの元にもその情報が既に言ってるやろうからこれ以上の説得も無理。それとそもそも今ミツキは、ファントム・ナイツの隊舎の中にいてウチでも向こうから来ないと会えない状況や。と言う訳でウチに頼られても無

駄って訳やし師匠にも恐らくそれは同じやろ。さらに言うなら悪いけど、ウチは協力は出来へん」

「もしかして…母さんや兄さんから何か言われたの？」

はやての話を聞いたフェイトは、眉を潜めクロノとリンディ提督の名をあげそこからの圧力の可能性を示唆した。

「それはないんよ…と言っても今のフェイトちゃんなら、信じてもらえないらろうからこれを見てな…うんしょっと…（ドン！）」

「何？このダンボール？…手紙？」

フェイトの話にはやては、それはない事を告げるが私も見てもわかるくらいに信じていない様子だった。

それを見たはやては、自分が座る前にあるデスクからダンボール箱を取り出しそれを見るようここにいる全員に告げそれをみたなのはがそのダンボール箱とその中身を見て声を上げその中にあった手紙を取り出し中身を見る。

「これって…ミツキさんへの紹介依頼？」

「そうや。これ全部…ミツキを紹介してくれって内容もんばかりや。ウチが機動六課の部隊長になってから毎日のように手紙やメールが最低1通はくるんよ。本局の高官からどっかのえらい学者さんまで…。その内容って言うのが…」

「今さっき僕が言ってた事と同じ…もしくは似た内容のもの…」

「そう言う事や。正直言ってウチはこういう事にうんざりしてるんや。でも、この箱の中にある手紙やメールで送りつけてきた連中を誰一人として紹介なんかしてへん。それが友達でもあろうともな。それだけミツキとの協力関係は六課にとって重要やしその事でミツキがどんだけ苦労してかについては師匠から聞かされてしその影響がミツキだけに限らないちゅう事もな…。なぁ…フェイトちゃん…もし今のミツキの立場がなのはちゃんでフェイトちゃんの立場がウチで…ウチの立場がフェイトちゃんやったら…フェイトちゃんどうしてる?怪我がまだ治っていないなのはちゃんを紹介するか?それならそれでもええけどその後…もしそれが大事になってなのはちゃんやその家族が危険な目にあってもそれだけの対処をフェイトちゃん一人で出来るんのか?ウチは、それをやろうとしたけど無理やったけどな…それが出来るちゅうなら紹介してあげるわ。」

「はやてちゃん…」

はやての話にその場にいた全員が声を失った。

そして、リインが心配そうな声をあげるがはやてはその声をまるで無視するかのようにジッとフェイトの顔を見ていた。

一方、フェイトそのはやての視線に耐え切れず目をそらして俯いていた。

フェイトがこうなるのも無理はないだろう…。

なにせ自分の仕事で手一杯の状態でさらにミツキちゃんやその弟達…そして、その影響が及ぶ可能性がある人物のその全てをたった一人でガードしろって言ってるんだからね。

でも、六課にその中心人物達が集中しているからやり易いと言えばそうなんだけど相手は本局に聖王教会…それに地上本部…。そのやり方は何でもアリで本人達からは既に協力を拒否されてるこの状況化では…。

それにもし、出来ると言ってもその詳細な内容を聞いて来るのは目に見えてるしはやてがそれをやってたのも事実だしね。

あれは、そうとう大変だったみたいだし…。

それと同じ事はフェイトにはさせたくないって所が本音だろう…。

だから、はやては真剣だしフェイトもその気持ちをちゃんと受け取ってくれてるみたいだから…。

別の手段を考えるとするか…でも、その前に…。

そんな思考を巡らせていた時スクライア司書長は、手紙を送ってきた連中とは違うとはやてに反論するももしそれが公開された時のフォローなどについてはやてに突っ込まれその返答が出来ずにいた。

「でも…このままって訳にはいかないだろ?はやて?」

「それはそうや。今はそのタイミングを計っている所や。でも、そのタイミングは今でもない事は確かや」

はやて達のやり取りを静観していた私もはやてに意見するがそのタイミングが今ではない事を告げこれ以降誰もはやてを説得する事が出来なかった。

そして、スクライア司書長とフェイトははやての意見を取り入れとりあえず時間を置く事で同意。

私とスクライア司書長は機動六課を後にした。

その後、フェイトとリンディ提督との間で仲直りもされ全ては丸く収まるのであった。

無論、お互いに話し合いをしてお互いの意見を取り入れ反省もしてたらしい。

もちろん、2人ともね。

その６６（後書き）

はやて
「と言うわけでその６５、６６どうやった？」

作者
「あの…それ私のセリフ…」

はやて
「んなのどうでもいいやろ！！それにしてもなぁ～ここん所なんやミツキの事やら影の守護者について明らかにする部分が多いんやけど…それてもっと後の話になるんやないの？」

作者
「よくあるパターンでいけばそうなるんですけど、元々のアニメでもスバルの事やらヴィヴィオの事やら結構そう言った部分が多いんでそっちを少し重視したかったのとまだ全ては明らかにしてませんので所謂そのためのたたき台といった意味合いで明らかにしてます」

はやて
「なるほどな～。それにしてもまだ何かあるんか？」

作者
「まぁ、詳しく言ってしまえばネタバレになってしまいますけどミツキ関連についてはゼールとの関係性とか…ユーノが言ってた仮説が正しいのか…と言った部分になりますし。ユウ関連で言えばミツキが今まで隠していた事についてユウなりの答えは出してはいませんからそれにどう答えをだすか…後はスバルとギンガについての事と主人公として目立たせないといけませんから管理局の裏側につい

ても彼なりに答えを出してもらうつもりです」

はやて

「そっか…答えが出てるんは、ミツキの産まれに関しての事だけやし影の守護者についても管理局の裏事情についてもまだハッキリとはしとらんしな…。それにしてもフェイトちゃんやなのはちゃんを悪もんにしていいんか？」

作者

「その辺については、両者のファンの方には申し訳ありませんでしたというしかありませんがでも、何か明らかにする場合のそのきっかけを起こす役割をしてくれる人があの2人にしか話の都合上頼めなかったんですよ。なんせ、それをユウ達にそれをやらせてしまうとグログロの展開になって話が進みませんしはやてさんは完全に聞き役になってしまっていますので…。ちなみにシグナムやヴィータ達になると肉体言語に走ってしまうので速攻却下しました」

はやて

「そうなるやろうな…間違いなく…。それと今回ようやく出てきたユーノとヴェロッサについては？いきなり暴走しとったけど…」

作者

「まず、ユーノに関してはなのはへの片思いをギャグとして暴走させて見たかったのと学者としてのまっすぐな所をだしたつもりであなりました。ヴェッロッサについては公式の設定上遊び人的な設定があったはずなんですがその辺を強調してみました」

はやて

「それはええけど…やりすぎじゃ…」

作者
「個人的な意見になりますが、原作アニメではそういったシーンあまりなかった気がしてそういったのもアリかな～なんて思いまして。ちなみにヴェロッサの暴走を止める役目ははやてさん限定です」

はやて
「んな！！何かってに決めてんのや！！ウチはそんな事一言も！！」

作者
「私の中では決定事項です！！諦めてください（笑）」

はやて
「絶対に阻止したる！！それで！！今後の展開は！！」

作者
「とりあえず、すぐに地上本部襲撃にはいかずにもうちょっとひっぱろうかと思っています。それとゆりかご戦での親子対決はなしでいきたいと思っております」

はやて
「それも決定事項？」

作者
「そうですね。これは、話の都合上でこうなってしまったのですがゼールという敵キャラがいてさらにヴィヴィオＶＳなのはだと上手く話が思いつかないのとあり過ぎるパターンになるのでそれは避けようとと言う事ですね。ですが、２人が親子になる所は別の所で使う予定です。でも、あくまで現時点での決定事項になりますのでそれが変更になる可能性もありますのでご了承下さい」

はやて
「それってネタバレちゃうの？」

作者
「このくらいの事をバラしても特に問題はない部分になりますのでネタバレとは考えてはいません。と言うか元々この話でのなのはとフェイトは、大して目立ってませんので…」

はやて
「そやな～…。って事はウチの見せ場あるんか！？」

作者
「それは、これからのお楽しみって事でそれでは今回はここまで！！」

はやて
「そこは、教えてはくれんのか…。なんか腹立つ…それでは次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６７！！」

ミツキ
「テイク…オフ…」

はやて
「んな！！ミツキいつの間に！！って終わりかぁー！！」

その67（前書き）

機動六課隊舎　施設内　駐車場

ユウ視点

「おい！アルト！！早く乗れ！！」

「ちょっと待ってよ～ユウ～！！」

バタン！！

ヴォン！！ヴォン！！

「ちょっと！！車に乗るのになんでこんなにコソコソしなくちゃならないのよ！！」

俺の車の助手席に乗り込んだアルトは、シートベルトをしながらこの車にのるために俺達がコソコソしながら乗り込んだ事についての説明を俺に求めてきた。

「よく考えても見ろよ？これから俺達は、ファントムの隊舎に行かなくちゃいけねぇんだ。それをスバルとティアナが知ったら連れてけとかいいかねねぇ～だろ？だからコソコソとしてたんだよ」

「ふ～ん…」

アルトの質問を聞いた俺はやれやれといった様子でそれを答える。

それを聞いたアルトは、納得していないような声でそれに返事をしていた。

本来なら、書類の提出なんざメールかなんかで送れば済む話なんだが、本隊が地上本部から要求されていた公開意見陳述会開催に際しミッドから一時退去を呑んだって言うからな。その確認と万が一の場合どう俺達や本隊がどう行動するかっていう所の謂相談関係だな。

まぁ、俺とかアルトとかギンガは機動六課に所属してるって事でそれを免れる事が出来たが俺達だけの場合対処しきれねぇ事もあるからな。

でもなんで、スバル達に気づかれないようにコソコソ行くのかと言えばこの事があいつ等がついて来たらあそこはなんだここはなんだと始って面倒だからな…それでだ…。

ちなみにギンガには、今日の事については話していて知らん振りをしてもらっている。

「それにしても…以外とすんなりと出れそうね…この様子だと…」

「そうだな…。案外つけられてると思っていたがそうでもなさそう…でもヤッパバレてたか…」

「ん？どうしたの？ユウ？」

六課の入り口を無事出られた所で、ホッとした様子のアルトが声を上げるがそれを聞いた俺は何かに気づいた。

「おい！！ヴィヴィオにスバルにティアナ！！いい加減出てこいよ！！ったく…、いつの間に俺の車に乗り込んだぁ～」

「えへへへ～バレっちった…」

「でも、作戦は成功だね！ティア！！」

「本当よね～。ギンガさんに頼んでユウの車のスペアキー作っておいて良かった～」

「うっそ～！！」

俺の声を聞いて後部座席を倒してその後ろからヴィヴィオとスバル、それにティアナの3人がひょっこり出てきた。

出てきた三人は、それぞれにその感想をいいそれを助手席から後をみたアルトが驚きの声をあげる。

「ったく…。ギンガの奴…」

「「降りろ！！」って言われても降りないからね！！ユウ兄！！」

そんな様子をルームミラー越しで見ていた俺が、ふとボヤいた声を聞いたスバルが俺がその後言うであろう言葉を想定しそれを封じるかのように俺に向けてその言葉を口にする。

「わ～ってるよ。そのくらいでお前等が引かない事くらい…。でもよ、隊長達には許可をとってるんだよな？ヴィヴィオもいるんだから」

「えっ？…え～とっ…それは…」

「やっぱりか…。さて…どうしたもんか…」

（こちら、スターズ０１…ユウ君？聞える？）

俺の声を聞いたスバルとティアナは、急にシドロモドロになるどう言い訳しようか悩んでいた。

それを見た俺は、予想とおりの答えに呆れながら車を運転しその一方でヴィヴィオは初めて乗る俺の車の中をポカーンとしながらキョロキョロしていた。

そんな時、俺になのは隊長から念話が入った。

（聞えてますよ。なんかようスッか？）

（えっとね？そっちにスバルとティアナとヴィヴィオがいると思うんだけど…）

（ええ…俺の車の後部座先に隠れてました）

なのは隊長の質問に俺は正直に答える。

なんせ、あいつ等に見方するメリットがないしお話は回避したいからな。

（それでね、出来れば…一緒にファントムの隊舎に連れてってほしいんだけど…）

（はい？！どしたんですか？いったい？）

なのは隊長からは、俺の予想に反した答えが返ってきたのでそれに驚きつつその理由を聞いた。

（ヴィヴィオがね…ミツキさんに会いたがってて…それでスバルとティアナがユウ君の車に乗り込むって話を聞いてそれにヴィヴィオが便乗したって訳なの。もちろんヴィヴィオには、ユウ君達の邪魔はしないって約束した上でね）

（なるほどね…。ちなみにスバルとティアナにその事は？）

（話す時間がなかったから…まだ…）

なのは隊長の話を聞いた俺は、スバルとティアナにはその事を話をしていない事を確認。

そして、なぜこのドンピシャのタイミングでのなのは隊長からの念話が来たのかを理解しそして…。

（了解しました。ですが、次からは俺達の行動を隊舎の窓から見ながら話すんでなくて事前に連絡を下さいね。いくら俺でも１００％姉貴に会えるとは限らないんですし…色々と聞かれたくない話だってあるんですから…）

（わかったよ。ゴメン次からは気をつけるね。それとスバルとティアナにお土産よろしくって。それで許してあげるって言っておいて）

（了解…それじゃ…）

プツン。

少し考えた後、俺はなのは隊長の頼みを聞き入れ次は事前連絡をくれるよう伝え隊長との念話を終了した。

「ったく…。今、なのは隊長から連絡が来てな…。今回はお土産を買ってくればゆるしてやるとよ」

「本当！！」

「ああ…。だが、俺とアルトのいう事をちゃんと聞けよ。でないと、あの鉄仮面に捕まっても俺は助けねぇからな」

「うん！わかった！！」

「わかった」

「りょうか～い♪」

なのは隊長との念話を終えた俺はその内容をスバル達に伝える。

それに驚きの声を上げたスバルの声に俺は、それを答えさらに連れて行く上での条件を提示。

俺の条件に対しスバル、ティアナ、ヴィヴィオの順でそれに従うとの返事が返ってきたのを確認し俺達はファントムの隊舎へと向った。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６７…始まります」

その67

その６７

フラナガン郊外　ファントム・ナイツ本部隊舎

スバル視点

「はい！！これが、入館証になるなるから胸に付けておいてなくさないでね」

「は～い！」

ファントムの隊舎に到着した私達に受付を済ませたアルトが受付証を私とティアに渡した後そう言いながらヴィヴィオが着ている服にその受付証をつけていた。

それを聞いたヴィヴィオは、元気よく返事をし私とティアはそれぞれ受け取った受付証を征服の胸元につけながら頷いていた。

「ねぇ…ユウちゃんどこ行ったの？」

「ユウは、提出しなきゃいけないものがあって先にそれをだしにいったの。後で合流するって」

「ふ～ん…」

「それで、私たちはどうするの？これから？」

ヴィヴィオの問いかけにアルトが答えそれを聞いたティアが今後の行動についてアルトに質問をしていた。

「う～ん…そうだな～。とりあえず受付の人に今先輩に会えるかどうか確認してもらってる所だから…」

ティアの質問に対しアルトはそう言いながらキョロキョロと辺りを見ていた。

それにしても、六課も隊舎が綺麗だったんだけどここも綺麗な建物って感じだよね。

でも…そんな建物のわりにはみんななんだかピリピリしてるって言うか…。六課と比べるとなんだかビシッとしているって言うか…、なんか固いイメージが…。

「アルトお姉さまにティアナお姉さま、それにスバルお姉さまではありませんか？いったいどうされましたか？」

「あっ！ミオちゃん！！」

「？？？？だぁ～れ～？」

「ミオちゃん！ちょうど良かった～実はね…カクカク云々で…」

私がそんな事を考えていた時、私たちの前からファントムの制服をきたミオちゃんが現れ私たちに声をかけてきた。

それに気づいた私が声をあげ、その声を聞いたヴィヴィオが誰なのかと疑問の声をあげそしてアルトがミオちゃんに事情を説明していた。

「ミツキお姉さま…ですか…？」

「なんとかなりそう？ミオちゃん？」

「はぁ…、とりあえず予定を見る限りでは、今会議中ですからナリアさんに連絡を取ってみますので少々お待ち頂けますか？」

「わかったわ」

事情をアルトが話し終えた所、ティアがミツ姉に会えるかミオちゃんに確認をとった。

すると、ミオちゃんはミツ姉が現在会議中である事をつげ補佐官のナリアちゃんにとりあえず連絡を取ってみるといいその場を離れその声にティアは了承した。

「ねぇねぇ（グイグイ）、スバルさんあの子だぁ～れ～？」

「あっ、あの子は、ミオちゃんって言ってミツ姉のお友達の一人だよ～」

「へぇ～。それじゃヴィヴィオもお友達になっても良い？」

「それいいね！それじゃ後で、紹介してあげるからもうちょっと待っててね～」

「うん！！」

ミオちゃんがその場を離れた後、ヴィヴィオが私の制服の上着を引っ張りミオちゃんのことを聞いて来た。

私は、ヴィヴィオにミオちゃんの事をミツ姉の部下の人とは言わず（そう言ってもわからなそうだったから…）友達と彼女に教えそれを聞いたヴィヴィオも自分もミオちゃんと友達になりたいと言い出した。

それを聞いた私は、それが名案である事を口にそれをするためにもう少し待っててもらうようヴィヴィオに告げそれを聞いたヴィヴィオは元気な返事でそれに答えてくれた。

それにしても素直でいい子だな～。ヴィヴィオ。

最初の頃は、なのは隊長以外の人にはあまりなつかずしかも隊長がちょっといなくなっただけですぐ泣いて大変だったのに…。

それが、ミツ姉とナリアちゃんが来て色々と話をしたり外で遊んだりしたらそれもすぐに治って…。

その後、私やティアやエリオにキャロ…それにユウ兄とアルトとかと遊んだりしながら、ザフィーラと六課の宿舎の掃除とかをしているアイナさんと交代で面倒見るようにして六課のみんなとも仲良くなったんだ～。

そう言えば、ヴィヴィオとすんなり仲良くなったのって…。なのは隊長とフェイト隊長以外だとギン姉とユウ兄だけで…。

その逆にヴィータ副隊長とシグナム副隊長にはいまだにヴィヴィオ…特にシグナム副隊長なんかはいまだに子供は苦手だとか言ってヴィヴィオに近づこうともしてない…。

そう言えば…ユウ兄とギン姉がその話を聞いた時…2人そろって…こんな事言ってたっけ…。

「そんなの誰かさんに比べたら相当楽な方ですよ…」

「本当～、ユウの言うとおりだよねぇ～」

って、私の方を見ながら言ってたんだよね。

おまけにそれを聞いた部隊長やシグナム副隊長とかも頷きながら同意してたんだよ～！！

本当、みんなして失礼しちゃうよね！！

私だってミツ姉よく「良い子だね」って誉められてたんだから～！！

「スバル…。お前…よくそんな事言えるなぁ…」

ってぇ！！ユウ兄がそんな事言ってるような気がしたんだけど無視！！無視！！。

「お待たせしました。ナリアさんに確認を取りました所、どうやら会議が長引いてるとの事でよろしければ私が会議が終わるまでの間

各施設をご案内いたしますが？」

「いいの？」

確認を取っていたミオちゃんが戻ってきて私たちに会議が長引いてる事などを告げそれが終わるまでの間施設見学をしないか？と私たちを誘ってきた。

それの声に私は、本当にいいのかとミオちゃんに確認してみた。

「はい、ですがお見せセキュリティ上ご案内できない場所はいくつかございますがそれでよろしければ…。それとアルトお姉さまはすぐに司令部の方へ来てほしいとの事です。報告書についていくつか聞きたい事があるとの事でしたので…。それでよろしいですか？」

「もちろん」

「お願いするわ」

「わかったよ。それじゃ、私行くから後はお願いね」

「了解しました。それではスバルお姉さま達は、こちらへ」

私の問いかけにミオちゃんは、見せられる所だけという条件がついているけれどもそれでいいのか？と聞き返してきたので私とティアはそれを二つ返事で同意。

その一方、アルトはユウ兄が提出しにいった書類のことで呼び出されたらしくミオちゃんにその場をまかせその場を後にし私たちはミオちゃんの案内で施設見学へと向うのであった。

ファントム・ナイツ隊舎内　会議室

ミツキ視点

「それで…いつ頃一時退去を始めるつもりなんだ？」

「現状ですと、ミッドには本隊と私の一番隊が駐留しており一時退去の準備に当たっております。ですが、全部隊移動となるともう少々時間がかかりリミットギリギリになるまでは完了出来ると思います」

「それで…二番隊は…」

「二番隊については、現在一時退去予定の基地にてその受け入れ準備をしております」

「なるほどな…。それについては了承した」

私とケイン君は、会議室にてレジアス中将とテレビ会議をしている。

その議題は、もちろん地上本部から要求があった公開意見陳述会前のファントム・ナイツのミッドからの一時退去について。

画面に映るレジアス中将の質問に私の横に座るケイン君が落着いた様子でそれに答え中将がそれを了承していた。

「それで…こちらがお願いしていた件ですが…」

「公開意見陳述会後のファントム・ナイツ隊員の各試験への参加…それと万が一の場合のファントム・ナイツの強制介入についてだったな…」

「はい…。ご協力いただけますでしょうか？」

ケイン君と中将の話が終わった所で、私が中将に声をかける。

今回の一時退去については、部隊の中でも地上本部の要求を無視する案やこれを素直に聞く案など賛否両論あってその妥協案として私が地上本部提示した物。

要求を受け入れる変わりに公開意見陳述会終了後にある執務官補佐試験など、管理局が行う各試験にウチの隊員が受けられるように地上本部が関係各所に対しその事を要請してもらう事。

そして、念のために万が一地上本部が攻撃をうけそこの防衛部隊だけでは対処できない場合のみ、ファントム・ナイツが地上本部の許可無しで強制介入する…といったもの。

私としては、本当はこれでも軽い要求だと思っている。

だって、こっちはミッドにいる正規隊員全部を動かさなきゃいけないしそれには当然その間の受け入れ先の確保や現在進行している各任務についてその間どうするのかといったありとあらゆる問題に奔走されてるたんだから…。

おかげで正直、寝不足で…。

「わかった。試験の事については、善処しよう。それと強制介入についても好きにするがいい。だが、単なる思い過ごしで済むと思うがな」

「わかりました。それでは…」

中将の答えを聞いた私は、いまいちその答えには納得していないけどその嫌味にムカツキ通信を切ろうとした。

「それと、あともうひとつ…。これは、今回の会議とは関係ないが…。ケイン副司令、サエグサ司令に出来るだけ休息を与えるように…。そうしてもらわんと私の所に文句を言って来る者が2名ほどいてな…。すまないが、よろしく頼む」

中将は、私が通信を切ろうとするのに待ったをかけケイン君に私を休ませるようなんだか焦りの様子で言ってきた。

そのいきなりの態度の急変に対し疑問を持った私がその画面の周りを見る。

すると、中将の後方から鬼の角を生やしたオーリスの姿がチラチラと画面に映っていた。

「クスっ…失礼しました。それで今のお話の件ですが了承いたしました。それについてはこちらも出来る限り対処させて頂きます。ですが、なにせ急に部隊全てを動かさなければならなくなりましたので司令にはご無理をして頂いており公開意見陳述会が何事も起こらなければその時に十二分にご休息を取っていただきたいと考えております。それでは…」

プツン。

それを聞いたケイン君は、先ほどの中将を嫌味をそのまま帰すかの答えを中将に返した。

それを聞いた中将もムスッとした様子をしその通信を終えた。

「これで、よろしいですか？姫？」

「上出来…でも、よくあのオーリスを見て笑いを堪えたよね。私…笑いを堪えるのでせい一杯だったよ」

「ええ…。さすがにあの鬼の形相と中将の焦った様子を見たときには私も噴出しそうになりましたがなんとか堪えましたが…あれを思い出すと…クスクス…」

通信を終えたケイン君は、その結果を私に確認する。

それの声を聞いた私は、それで問題ない旨を答えそしてあれを見てよく笑いを堪えた事を関心した様子でその時の事を彼に聞いてみた。

私の問いかけに対しケイン君も笑いを堪えるので精一杯だった事を証しそして、その時の様子を思い出しクスクスと思い出し笑いをしていた。

「それでは、私は一時退去についての方の進捗状況などを確認しましのので姫はその間一時ご休息を…。どうやら、姫には来客の方がお見えになっているようなので…。詳しくは、ナリア方に聞いてみて下さい」

「来客？ふ～ん…。わかったよ。それじゃ、そっちの方はお願いね」

「ハッ！！それでは」

そう言うと私に一礼をしケイン君は、会議室を後にしその後私も会議室を後にし自分の執務室にてその来客が来るのを待つことにした。

その67（後書き）

感想をお待ちしております

その６８（前書き）

フラナガン郊外　ファントム・ナイツ施設内　訓練棟

ティアナ視点

「わ～～い！！スバルさんもっと～！！」

「よーーーーーーし！！マッハキャリバー！！」

＜了解！相棒！＞

「す…スバルお姉様…もう少し安全運転をって、…きゃーーーーーーーーーー！！」

現在私の目の前では、セットアップしたスバルがウイングロードをジェットコースターのコースように道を作り台車を２人乗りの乳母車みたいに改造した物にヴィヴィオとミオちゃん乗せそれを押しながらそのコースを走り回っている。

「ずいぶんと楽しそうにしてるじゃねぇか？あの３人」

「すいません。せっかくの訓練中なのに」

「いいって事よ。別に訓練なんて生きてりゃ、いつでも出来るしそれにみんな楽しんでるしな」

私の横では、フェラルドさんが腕組みをしながらスバル達の光景を笑顔で見ているし訓練を受けていたファントムの隊員の皆さんもフ

エラルドさん同様笑顔でそれを見ていた。

そもそも、なぜこうなったのかと言えばミオちゃんの案内でファントムの施設を見学させてもらっている中今入る訓練棟と呼ばれる訓練施設に足を運んだ時にフェラルドさんがヴィヴィオがつまらなそうにしているのに気づいて…

「ん？どうした？つまらんか？」

「うん！ミオちゃん達と遊びた～い！！」

「そうか…よし！お前等！！訓練変更！！これからお前達はこのお姫様とミオが楽しめる遊びを考えるんだ！！いいな！！」

「はい？」

「わ～い♪ヴィヴィオ、お姫様～♪」

ヴィヴィオを話し掛けたフェラルドさんは、ヴィヴィオの声に少し考えたのち訓練をしていた隊員達に訓練を止め急遽ヴィヴィオとミオちゃんが楽しめる遊び考えろ！との内容に変更した。

それを聞いたミオちゃんは「？」を浮かべヴィヴィオは大喜び。

「ちょ…ちょっとフェラルドさん！！いいんですか？」

「もちろん！こいつは、ある意味意思統一のための訓練だ。こういう何気ない事を全員で考える事でお互いの考え方やその性格なんかを知る事ができるんだぜ。まぁ…普通ならその目標ってのがもっと真剣な物になるんだが俺はこういう方が好きなんでな。何よりこの

方が楽しみながら出来るだろ？」

フェラルドさんの声に私は、訓練の邪魔にならないかと思いながらフェラルドさんに声をかける。

それを聞いたフェラルドさんは、無理やり考えたみたいな言い訳を私達にしていた。

でも、本音としても自分も楽しみにしたいだけのように感じていた。

「なるほど～なら！私も参加してもいいですか？」

「よし！！ナカジマ妹！！お前も参加だ！！」

「よ～し！！頑張るぞ～！！もちろん、ティアもだよね？」

「わかったわよ。面白そうだから私もやるわよ。よろしいでしょうか？」

「構わん…。高町の教え子がどんな物か見せてもらうじゃないか…」

フェラルドさんの話にスバルは、自分も参加したいと言い彼がそれを許可。

それを聞いたスバルは、大喜びをしながら私も誘う。

スバルの声に私も参加する旨の声をあげフェラルドさんにその許可を取る。

そして、彼はその許可を私に出しその実力を確かめようと言った声

をだしていた。

それで…みんなで色々考えた挙句の結果が…あのジェットコースターって訳…。

ちなみにコース設定とか2人を乗せる台車の安全性とか…参加した私とスバルが唖然とするくらいみんな真剣に楽しんでいた。

「わーい！わーい！スバルさんもっと～！！」

「もう…勘弁してくださ～い…（グォン！）ひぃーーーー！！（泣）」

コースを回る台車の中では、シートベルトをしっかりとつけたヴィヴィオが両手を上げて大喜び。

その一方でミオちゃんと言えば涙を滝のように流しながらそれを止めるよう泣き言を言っていた。

それにしてもいつも冷静なミオちゃんに以外な弱点があったなんて…。

私は、そんな事を考えながらその光景を眺めていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６８…始まります」

その68

その６８

フラナガン郊外　ファントム・ナイツ施設内　訓練棟

ナリア視点

「ハァ、ハァ、ハァ…し…死ぬかと思いました…」

「楽しかった～！！」

「スバル！お疲れ！」

「お疲れ～！でも、楽しかった～」

私がスバルさん達と合流した時、ちょうどジェットコースターが終わった所で台車から降りたミオさんは四つんばいの状態で息を荒げその一方でヴィヴィオちゃんは大喜びをしていた。

そして、台車を押していたスバルさんに近づいたティアナさんは彼女の労をねぎらいその声に彼女が笑顔で答えていた。

「それにしてもまさかミオがこういったのが苦手だったとはな（笑）」

「ち…違います！！急に始ったのでその対応が出来なかっただけで…」

フェラルドさんが、落ち着きを取り戻したミオさんに近づきニヤニヤしながら話かけた。

それを聞いたミオさんは、フェラルドさんに大慌てで顔を赤らめながら言い訳をする。

「なら…もう一回乗ってみるか？」

「（ビクッ！！）いや…それはその…」

「ミオちゃんを苛めちゃだめだよー！！そう言う事をしちゃダメだってなのはママとフェイトママがいってたんだからー！！」

ミオさんの話を聞いたフェラルドさんは、台車を指差しながらもう1度乗るようミオさんに勧める。

それに対しミオちゃんは、あたふたとしながらどうしようか悩んでいた所2人の間にヴィヴィオちゃんが割って入った。

「おっと…そいつはすまなかったな。でもよ…なのはママにフェイトママ？まさか、お前さん高町とハラオウンの所のお嬢ちゃんの間の娘…？。んな訳ねぇ～よな…。おい！ナカジマ妹にマンチェスター！！こいつはいったいどういうこった？」

「ですから！！ランスターです！！」

「え～と…これには色々と訳がありまして…」

「そんなに複雑な物ではないと聞いてますが…と言うのも…カクカク云々で…」

ヴィヴィオちゃんの声を聞いたフェラルドさんは、彼女に誤りその上で話の中に疑問を感じスバルさんとティアナさんにその訳を聞く。

ティアナさんは、その前に自分の名前を間違えた事を訂正するように声を荒げその一方でスバルさんは複雑な状況であるかのような声を出していた。

そのやり取りを聞いてた私は、その事が難しい問題じゃない事を言いフェラルドさんに私が聞いた話の内容を説明した。

そして、その後さらに会議がまだ終わっていない事を告げ引き続き各施設を案内しながら時間を潰す事となった。

ファントム・ナイツ　隊舎内　司令官執務室

アルト視点

「失礼しま～す」

「あっ、ゴメンね。急に来てもらって」

私が執務室に到着しその中に入った所、それに気づいた先輩が私に声をかけてきた。

「いえ、大した事はありませんよ先輩。それにしても、どうしたんですか?それにメンバーは?」

先輩の声に答えた私は、その部屋の中にいたメンバーに驚きの声をあげた。

だって…その中にいたメンバーって、ユウにケイン副司令の副官のクラリス・メイさん…それにノアと通信画面にはご隠居様事…ミハエル・グリニッヒ提督といったものであったからでこれにケイン副司令とミオちゃんそれにフェラルドさんが加わればある意味ファントムの最強メンバー揃い踏みといった状態でありこのメンバーが集まるって事はつまり重大な事件が起こりつつある可能性を示しているからだ。

「特に意味はないみたいなんだけど…。公開意見陳述会の時にファントム全部隊がミッドからいないからその時の対処をどうしようかってジョーカー（ユウの事）から相談があってね。それで各セクションの人間の中で手が空いてるメンバーがこのメンバーだったって事よ。アルトさん」

私の様子を見たクラリスさんが、それを落着かせるように説明をしてくれた。

「それで、具体的な事になるんだが…姉貴?どうする気なんだ?それを聞かせてもらわねぇとこっちも動きづらいからな」

（そちらについては、私の方から…。現状についての行動方針につ

いては公開意見陳述会の様子を通信の傍受や偵察などを行いその状況を見守り地上本部が攻撃を受けそして地上本部だけでは危険と判断した時に次元航行戦艦で強制介入する予定ではあるんじゃ）

「その偵察任務については、我々1番隊に所属しているサポーターの方々にお願いする事となりすでにその指示は出してあるわ」

ユウの問いかけを聞いた画面上に映るご隠居様がそれに答えその後にクラリスさんが続きユウとその横に移動した私に説明をしてくれた。

「なるほど…。それで、アルトまで読んだ理由は？」

「それはね…。果たして地上本部のみの攻撃で済むのかな～って思ってね？もし、地上本部やその周辺だけを攻撃対象にするなら単なるスカリエッティによるテロ騒ぎだけで済む話になるんだけど…。あのマッドサイエンティストがそんな事するかな～って思ってね。なんせ、科学者がテロをするってなんのメリットなんていったら自分の技術を披露するくらいだしそれについてはもう何回もやってるハズだし…」

「要するに単に地上本部を攻撃するだけじゃ、あいつに取って特にメリットがないって言いたいんだろ？」

ユウの質問を先輩があれこれ考えながら答える。

それを聞いたユウは、それ等を要約しその事を先輩に伝える。

「そう言う事。それに連中の主力って今の所、ガジェットと戦闘機人なんだよね。黄天とあの黒いガジェットについては出てくるかは

わからないから除外したとしてもあれだけの戦力で本当に地上本部を落とせるのかな?もし仮に地上本部を壊滅させたとしても本局の魔導士部隊が出てくるのは目に見えてるし実力は、二の次にしてもその数は相当な物よ。最初はなんとかなってもその圧倒的な数で追い込まれる可能性が高いと思うんだ。それに、そんな計算くらいスカリエッティなら出来ると思うんだけどなぁ…」

「そうなると…何かまだ私達に見せていない…切り札みたいな物があるって事なんですか?」

「なぁ、アルト?戦闘機人っていったいなんだ?」

先輩の話を聞いた私が、ひとつの可能性を示唆しそれとは別にユウが私に質問をしてきた。

「簡単に言うと人間の体に身体能力を強化する為の機械の部品なんかを体に埋め込まれた人達の事を言って倫理的や技術的に色々と問題があって今までタブーにされてきた事なんだよね」

「その問題ってのが、機械の部品を人体に埋め込む事事態人間の体にはそんな適応能力なんてないのよ。だから、それに対して免疫力をつけなきゃいけないとか色々と技術的な問題があるのと人間に機械の部品を埋め込む事についての倫理問題があってね。それの問題をスカリエッティがクリアーにしたのはいいんだけど、まだ大量には作り出せてはいないみたいなのよ」

「つまり…その戦闘機人っていうのが、この間俺達が例の下水道で捕まえた連中って訳か」

ユウの質問に私が知る限りの情報を使ってそれを説明しその後先輩が私のフォローをするかのように説明を追加し最後にユウがこの間の戦闘で捕まえた二人の事を思い出し話をした。

「ええ…、この間捕まえた例の二人の事を本局が調べた結果その２人とも戦闘機人である事がわかったらしいの。でも、スカリエッティがどれだけの戦力を持っているとかその本拠地がどこにあるかとかについての取り調べには一切だんまりを決めてるらしいわ」

（本拠地については、聖王教会の教会騎士団などが調べている最中なんですがその戦闘機人を中心に構成されていると考えその戦闘機人自体その人数はそんなにはいないと判断しているんじゃ）

「ともなれば、ガジェット以外は少数精鋭って訳か…なんか六課と似ているな…」

ユウの話を聞いたクラリスさんとご隠居様が、本局と聖王教会の動きや捕まった二人の状況についてそれと予想する戦力についての説明がありそれを聞いたユウが六課と似ているとそれを聞いた感想を漏らした。

「そう言われたらそうなんだけど…。私の中で最大のイレギュラーって言うのがあるんだけど…。そのためにアルトを呼んだんだけど…。ねぇ、アルト?六課では、ヴィヴィオの事…どう考えているの?」

「ヴィヴィオだと?」

「あ…はい…。保護した時に病院でヴィヴィオの事を検査した所…あの子…どうやら、人造魔導士らしいことがわかってそれでレリッ

クを持ってた事となのは隊長にとても懐いていたのを鑑みてあの子を養子として受け入れてる所が見つかるまでの間六課で保護する事にしたらしいんです」

ユウ達のやり取りを見ていた先輩が、ようやく私を呼んだ理由をつげ私対してヴィヴィオについての事を質問してきた。

先輩の口からヴィヴィオの名前がでた事に対しユウは驚きの表情を浮かべ私は、六課でどう判断してたのかを答えた。

そして、私が養子を探しているといった時…先輩の表情が少し曇ったようにも見えた。

「それで?なんでヴィヴィオがイレギュラーなんだ?もしかして姉貴…それを調べるために六課に…」

「そんな事する訳ないでしょ!!そもそもあの子については全体通信でそんな事を聞いてただけで、まさか六課で保護してるなんて思わなかったわよ!!それにそんな事をするならはやてかあんたに直接聞くわよ!!」

私の話の後にムスッとした様子のユウが先輩に質問をしそれを聞いた先輩は、ユウの言葉にカチンとしたらしく声を荒げる。

(まぁまぁ…落着いてください…姫。とにかく我々としては、そのヴィヴィオという子供…その子自体がというよりなぜその子がレリックを持っていたかって言う事が気になってるんじゃ。そもそもあのような小さい子がレリックと言う物騒な物を持ってるんじゃ。何かしらの関連性は想像してまうしだろうし、今のアルトさんのお話からしてもその可能性はありえない訳ではなくったと言う事じゃ。

だが…、それが何かはいまだに皆目検討がつかんがな）

「それによ～。ミツキがそんな周りくどい方法をとらねぇ事自体おめぇもよく知ってるだろうし…。もし、そう言う事なら態々地上本部を敵に廻しかねぇ事なんかしねぇよ。ただな…あたいとしては、あのまんま高町隊長がそのままあの子の母親になってくれたら言いとは思うんだけどな…」

「そうだよな…。悪い…言いすぎた…」

「私も言い方が悪かったわね…ゴメン」

先輩とユウのやり取りを見たご隠居様が先輩に落着くよう声をかけそして、その状況を説明する。

そして、その後ノアが先輩の性格の事などをあげユウに宥めその後、ユウと先輩がそれぞれ謝っていた。

「そうなると、地上本部以外にも攻撃される可能性を考えなくちゃいけないしその女の子の事も考えなきゃいけないとなると…結構大変な事になりますよ？姫？」

「それについては、私にひとつ考えがあるの。そのためにアルトとユウにこっちに来てもらってミオちゃんとナリアにスバル達を施設を案内してもらってるの」

「それってまさか…連中に聞かれたくないからって、その時間稼ぎをミオ達にさせてるって事か？」

状況が落ちついた所で、クラリスさんが話し合いの内容をまとめそ

れが大変である事をため息交じりで話した。

それを聞いた先輩が、それについて妙案がある事を言い出しそれに対しユウがここまでの行動について先輩に質問した。

「そうよ。まさか、スバル達が来るなんて思ってなかったからね。急遽ミオちゃん達にお願いしたのよ」

「それは余計な手間をかけたな…それで、何をする気なんだ…」

先輩の答えにユウは、申し訳なさそうな顔をしながらそれに答え先輩が考えてる事を聞いた。

「それはね…。ゴニョゴニョゴニョ…」

そう言うと先輩は、私達を手招きしそして先輩からの指示が私達に提示されそれをたたき台にし色々と相談する事となった…。

その６８（後書き）

感想まってま～す

その69（前書き）

フラナガン北部　森林

ゼスト視点

ガサガサ…。

「誰だ！！」

私が木によしかかるように座っていた所、急に木が揺れる音がしたため急ぎ立ち上がりデバイスである槍を構える。

「ふふ…。私だよ…騎士ゼスト…いや…ファントム・ナイツ初代司令…とでも呼んだほうがいいか？」

「きさまは…ゼールか…。今の私は、そのどちらでもない…。いったい何のようだ？」

木陰から出てきたのは、黄金色の鎧甲冑を身に纏った黄天の契約者ゼールであった。

その姿を確認した私は、警戒をときなぜここに来たのかその理由を彼に確認した。

「今後の君の予定を確認しに来ただけだ…。君は、スカリエッティの例の計画には参加しないのか？」

「計画には、参加しない…。俺は俺のなすべき事をするだけだ…」

ゼールからの問いかけに対し私は、それが愚問であるような態度を取り彼のといかけに答えた。

「そうか…。なら、行くべき所は我々と同じと言う事だな…」

「お前は、どうなんだ?」

彼の話を聞いた私は、今度は彼に自分がされたのと同じ質問をした。

「ふふふ…。お前の魂胆は読めている…。もし、この場で私がＹＥＳと答えたのならあの出来そこないにそれを伝えるつもりなんだろ?せっかく、あの面倒な連中が出てこれないようにしたんだ。それを台無しにはしないよ」

「それは、どうかな?ミツキとはあれから連絡はとっていないからな…。伝える手段も持ち合わせてはいないからな…」

私の問いかけに対し彼は、不適な笑みを浮かべながらそれに答える。

彼の指摘を聞いた私は、それが出来ない事を彼に告げた。

「そうか…。なら、そう言う事にしておこう…。ぐ…、貴様…なぜ?こんな時に…」

「ん?どうかしたのか?」

私の話を答えた彼が急に頭を抑え苦しむようなそぶりをみせた。

それを見た私は、驚いた様子をしつつ彼に問い掛けた。

「み…ミツキに…。彼女にこれを…」

「この中心にあるのはメモリーチップ?…いったいなんだこのカードは?」

「いいか…。彼女が危険な状態になる前にこれを…。頼む…これを必ずミツキに…。それとヤツには、悟られるな…ゼールには…ぐぁぁぁぁー!!」

苦しみ出したゼールは、頭を抑えつつ落ち着きを取り戻したかに思えた所急にその人格が変わったかのような好青年のような優しい声に変わっていた。

その青年と思われる声の彼は、その手に魔方陣を形成しその中からメモリーチップがその中心についた透明なカードを取り出しそれを私に手渡しそして指示をいくつか言いそしてまた苦しみだした。

「はぁ、はぁ、はぁ…。すまない、最近頭痛が酷くてな…。何かあったのか?ゼスト?」

「い…いや…。何もなかったが…。いきなりの事だったのでな…」

苦しみが落着いたゼールは、元の状態に戻りそして荒げるの息を整えつつ驚く私を見て何かあったのかを聞いてきた。

ゼールの声を聞いた私は、手にもっていたそのカードを服の中に隠しつつそれに答える。

「そうか…。それはすまなかった。今日はもう帰らせてもらう」

「ああ…」

そう言いながらゼールは、去っていった。

彼が去った後、私の元にアギトが訪れミツキから解析が終わった例のデータが私の元に届いた。

それから、私はルーテシアの元には帰らずここに残ると言い張るアギトと共にそのデータを確認する事に時間を費やす事となり彼から渡されたカードの事などすっかり忘れてしまっていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その６９…始るぜ！！ｂｙ　アギト！！」

って言うか私のセリフはこれだけか～！！

その69

その６９

フラナガン郊外　ファントム・ナイツ隊舎内　訓練棟

ミツキ視点

「あっ！！ティアナさんみ～つけた！！」

「見つかったか…」

「ヴィヴィオちゃん？…あちらの方から微量の魔力反応がでてますよ？行って見ませんか？」

「よ～し！！ミオちゃん！！次はあっちに行こ～！？」

「わかりました～」

ユウ達との打ち合わせを終えた私は、ユウとアルトと共にスバル達がいる訓練棟に足を運んだ。

この訓練棟は、その名の通り隊員達の訓練施設なんだけどその大き

さは、学校の体育館4~5個分ととにかく大きな建物となっているためこのような呼び名がついている。

その1階には、六課の訓練施設にあるのと同じ設備があり今は市外地の設定がされてるみたい。

私達がそこに来た時、ちょうどヴィヴィオちゃんが建物に隠れていたティアナを見つけていた。

そして、ミオちゃんが近くに別の魔力反応を見つけヴィヴィオちゃんにそれを報告。

ミオちゃんの話を聞いたヴィヴィオちゃんは、彼女のてを握りその方向へと移動を開始していた。

「いったい何やってんだ?」

「何って、かくれんぼよ、かくれんぼ。鬼がヴィヴィオであの子に見つからないように私達は隠れていたの。でも、ヴィヴィオのサポートにミオがついているから魔力も消しながらっくれなくちゃならなくて…。ちなみに幻術などで隠れるのは禁止だって」

「遊びとかいいってしっかり訓練も混ぜてるから大変だったよ~。ちなみにエリオとキャロそれになのは隊長も隠れてるのよ」

ユウの問いかけに既に見つかっていたスバルとつい今しがた見つかったティアナがそれに答える。

「マジかよ!ってかいつ来たんだよあいつ等?」

「う～んとこれが始るちょっと前だよ。ここの見学とかしてたらフェラルドさんがなのは隊長達も呼べって事になって…」

「それで、手の空いてたなのは隊長がエリオとキャロも一緒に連れてきたって訳」

スバルの話に驚いたユウは、高町さん達がいつ来たのかを彼女達に確認。

その質問にスバル、ティアナの順でそれに答える。

「それで、フェラルドは？」

「あっ、フェラルドさんは、あそこで…」

スバル達の話を聞いてた私は、この場の責任者であるフェラルドがどこにいるのかを確認。

それを聞いたスバルは、ある方向を指差しながら彼がどこにいるのかを教えてくれた。

んで、そこでフェラルドは何をしてたのかと言えば草々にヴィヴィオに見つかった隊員達に罰ゲームとして腕立てなどをさせズルをしないかその監視していた。

ちなみにその中にエリオ君の姿が…。

スバル達の話だと、ヴィヴィオに見つかった最初の１０人には腕立てなどの罰ゲームが用意されておりエリオ君はその１０人の中に入ってしまいスバルとティアナとキャロちゃんはそれを何とか逃れた

んだって。

キャロちゃんは、フリードと一緒にその罰ゲームを頑張ってやってるエリオ君を応援している。

どうやら、エリオ君はそのまだ子供だからって事でその罰ゲームの回数を軽減してるみたいで他の隊員達より早くそれを終えていた。

「あっ!!姫ちゃん!!あのね～、なのはママが見つからないの～。一緒に手伝って!!」

ミオちゃんと共に隠れている隊員達を探していたヴィヴィオちゃんが私を見つけ近づいてきたかと思ったら、私の手を引っ張りながら一緒に高町さんを探してほしいと言ってきた。

「ん?見つからないの?高町さん?」

「ええ…。どうやら、彼女…本気で隠れてるみたいで…私でもいまだに見つけられていないんですよ」

「だから、姫ちゃんも協力してなのはママを一緒にみつけようよ?」

ヴィヴィオちゃんの話を聞いた私は、ミオちゃんに詳しい話を聞いた。

その声にミオちゃんは、腕組みをしながらそれに答えさらにヴィヴィオちゃんが私を仲間に加えようする。

「さすが…なのは隊長…なんでも全力全開なんだ…」

「へぇ～。それはそうとナリアちゃんもまだ見つけてないの？」

「うん！だから、一緒に探そうよ～？」

「ミツキお姉さま。私からもお願いします。もし…ナリアさんを見つけられなかったら私…ナリアさんやスバルお姉様達にお昼をご馳走しなければなりません…。それでだけは…」

ヴィヴィオちゃんの声を聞いたスバルは、高町さんのその本気具合に呆れた様子で声を上げる。

その後、私はナリアちゃんがここにいない事に気づきその事をヴィヴィオちゃんに確認。

そして、さらに私の手を引っ張りながら仲間に誘おうとするヴィヴィオちゃんに続きミオちゃんまでもが真剣な様子で私に頼んできた。

「なるほどな…そりゃ、ナリフリかまってらんねぇな…」

「うんうん…。スバルにお昼を奢るなんて…お金がいくらあっても足りないからね」

「2人とも惨いよ…」

ミオちゃんの話を聞いたユウとアルトが、その様子に同意するかのように話をする。

その話を聞いたスバルは、その2人を見ながらふと声をもらしていた。

「一応…フェラルドに確認しないと…（ＯＫですよ！！姫！！）あらま…。なら、一緒に探そうか？ヴィヴィオちゃん！」

「うん！！行こ！！姫ちゃんにミオちゃん！！」

「いいのか？姉貴を参加させて？」

「ふぅ…。いいんじゃない？元々勝つつもりでやってないし。それにミツキさんがどうなのは隊長を探すのか…そっちの方がむしろ興味あるわよ」

ヴィヴィオ達のお誘いに私は、フェラルドに確認しようとした所どうやら私と彼女達とのやり取りをしている間にティアナがフェラルドの所にひとっ走りして私の参加について確認してくれたらしくその話をしている時にフェラルド君が大声でＯＫである事を伝えてきた。

その声を聞いた私は、ヴィヴィオ達のお誘いを受ける事にしその場から移動を開始。

私がヴィヴィオ達と行動を開始してから、少し経った頃ティアナが私が元いた場所に戻ってきたのを見たユウがティアナに私が参加してもいいのか？と彼女に聞いていた。

ユウの話にティアナは、息を整えつつその話に答えていた。

ティアナ視点

ミツキさんがヴィヴィオに引っ張られるように市街地に足を踏み入れた。

私とスバルそれにユウとアルトは、その様子をその外から画面を開きその様子を見ている。

「さて…。どうすんのかな?姉貴のヤツ…」

「そう簡単には見つからないんじゃない?なのは隊長もさっきのフェラルドさんの声聞えてるだろうから?」

「そうだね。でも、ミツ姉もなんだかやる気出したみたい…」

「エースオブエースＶＳ蒼龍の舞姫…。まさかこんな所でその対決を拝めるなんて…」

「でもよ…。それが、かくれんぼって言うのはなぁ～」

画面を見ていたユウがミツキさんがこれからどんな風にするのか楽しみにしているような声をあげその声を聞いた私、スバルそして、アルトの順でそれぞれそれに答えアルトの話にユウがなんだかつまんなそうな顔をしながらその声に答えていた。

正直な所、私もユウと同じ意見だ。

だって…こんな言い方はフェラルドさんには失礼な事だが、私とし

ても本気でするかくれんぼよりも2人とも本気の模擬戦の方が見たいしそれをしたらいったいどっちが強いのか…。

それを間近で見てみたい思うのは、誰だってそういうのは当然な話だと思うから。

「ん？先輩…何か見つけたみたいよ？」

私がそんな事を考えていた所、画面を見ていたアルトが声を上げる。

その声を聞いた私は、その画面を見つめる。

画面に映るミツキさんは、ヴィヴィオちゃんをミオちゃんに任せなにやら地面を指差しながらそこをジッと見ていた。

「どうやら、誰かの足跡を見つけたみたいだな…」

「足跡？」

「ああ…。幻術なしの状態でどこかに隠れたのを見つける場合、その対象者がどう行動しているのかを見つけるのが手っ取りばやい方法なんだよ。ほら、よくテレビなんかで希少動物なんかを探す時…まずその足跡なんかを見つけたりしてるだろ？それと同じってことさ。どうやら、なのは隊長…隠れる事に一杯になってそこまで頭が回らなかったようだな…」

「普通…そこまで気にしないわよ…」

「気にしたほうがいいぜ～。特に姉貴が相手の場合はな」

「うんうん。だって、ミツ姉…本当にそういう所から見つけちゃうんだから」

画面を見ていたユウが、その様子から誰かの足跡を見つけた事を確認。

そして、彼の話を聞いたアルトが疑問の声をあげそれを聞いたユウとスバルがそれに答えていた。

（ナリアちゃん!!み～つけた!!）

（みつかっちゃいました～。それにしても、姫が参加してるなんてズルいですよ～）

（いいんです!!フェラルドさんからの許可は得てますから）

そんな話をしていた所、画面上ではヴィヴィオがナリア見つけたと声を上げていた。

見つかったナリアと言えば、自ら敗北を宣言しそしてミツキさんが参加している事に声を上げていたがその声をミオちゃんが一蹴していた。

どうやら、さっきの足跡はナリアのものだったらしい。

「これで、後は高町だけだな…」

「あっ!フェラルドさんにキャロ。エリオ達は?」

「エリオ君は、少し休んでから来るみたいです。あっ、来ました!

？エリオ君！！こっちこっち！！」

その様子を見ていた私達の所に罰ゲームの監視を終えたフェラルドさんとキャロが合流してきた。

それを見たスバルがエリオが来ていない事をキャロに確認。

キャロは、エリオが遅れてくる事を告げそしてエリオが来た事を確認しこちらに呼び寄せていた。

「キャロ！？それで、どうなってますか？」

「後は、なのは隊長だけみたいよ？」

「そうですか…それにしてもミツキさんまで参加してるんですか？」

私達に合流して来たエリオは、開口一番状況をキャロに確認してきた。

その声に現状を私がエリオに伝えそれを聞いたエリオがミツキさんが参加している事に驚きの声をあげていた。

「そうだよ。どうやら、ミオちゃん…本気で私達にお昼をご馳走したくないみたいでヴィヴィオと一緒にミツ姉を誘ってフェラルドさんがそれにＯＫをだしたの」

「その方が色々と面白いだろ？」

「それはそうですが…」

エリオの話を聞いたスバルがその時のことをエリオに説明しそれに続きフェラルドさんがその訳を彼に話す。

フェラルドさんの話を聞いたエリオは、それにどう答えていいのかわからない様子のままとりあえずその話をあわせるような答えをしていた。

ミオ視点

「さて…後は高町さんだけだね」

「どこに隠れたんだろ？なのはママ？」

「魔力反応は、一切ありませんね。どうしますか？ミツキお姉様？」

ナリアさんを見つけた後、ミツキお姉様が残るは高町隊長のみである事を確認するかのように声をあげそれを聞いたヴィヴィオちゃんは彼女がどこに隠れているのか辺りをキョロキョロしていた。

そして、その様子をみていた私がミツキお姉様に対しどうするかを確認する。

「そうだね…。とりあえず、ルールなんかあるの？」

「はい…まず見つける側の我々が捕まえる方法は、ヴィヴィオちゃんがその対象者…今ですと高町隊長にタッチをしそして、捕まえた事を宣言しなければ捕まえられません。私とミツキお姉様は、見つけるのを手伝うだけになります。そして、逃げる側の高町隊長は、

幻術や魔法で隠れるといった事は禁止されていますがそれ以外の事での魔法の使用はＯＫです。ですが、ヴィヴィオちゃんに向けての攻撃とその周辺での戦闘行為については禁止されています。ですので、制限時間がすぎるまでにヴィヴィオちゃんに捕まらないように逃げたり隠れたりするといった事で時間を潰す事になります。そして、その制限時間が過ぎても捕まっていない場合金一封がフェラルドさんから贈呈されます。ちなみに私とスバルお姉様、ティアナお姉様そして、ナリアさんとエリオ君にキャロさんとの間でその制限時間が過ぎるまでに捕まっていなかった場合私がその皆さんにお昼をご馳走する事になり全員を捕まえる事ができれば私が皆さんにお昼をご馳走してもらう事になっております」

「なるほどね…。となるとミオちゃんは、すでにお昼ご飯はゲットしてるって訳なんだね」

ミツキお姉様からの問いかけに対し私が、ルールを説明しそれとは別に私とスバルお姉様達との間で交わされたかけの事を説明した。

それを聞いたミツキお姉様は、そのかけには既に私が勝っている事を確認してきた。

「はい…。それと後制限時間が残り5分となっております…が…ミツキお姉様？いったい何をされてるんですか？」

「えっ？何って気分を出すためにサングラスをかけているのよ。あっ！だったら、より気分を高めるために黒いスーツでもみんなで着ようか？」

「それはお辞め下さい…。ミツキお姉様…」

ミツキお姉様の問いかけに答えた私は、お姉様がかけているメガネからサングラスに変えようとしている素振りを見せいたのでその意図を確認。

すると、ミツキお姉様はどこかの某番組を想像していた様子でその番組に出てきた追いかける側の格好をしようと言い出していた。

それを聞いた私は、即座にそれを止めに入った。

「さてと…冗談はそこそこにして…ヴィヴィオちゃん?どうしたの?」

「シーーーーーーーー!!ちょっと待ってて…」

私の話を聞き持っていたサングラスをかけるのを辞めたミツキお姉様は、ヴィヴィオちゃんが何かを見つけたらしく彼女に声をかける。

その声にヴィヴィオちゃんは、私達に静かにするようにするのとその場で待ってようつげ物陰の奥へと入っていった。

そして、それから少し時間がたって…。

「なのはママ!!み〜つけた!!」

「見つかっちゃった〜。すごいよ!!ヴィヴィオ!!」

物陰の奥からヴィヴィオちゃんの声が聞えたと思ったら高町さんがヴィヴィオちゃんを抱き上げそして、彼女を誉めながらその奥から出てきた。

「すっご〜い。ヴィヴィオちゃん！！」

「まさか、一人で見つけちゃうなんて…」

奥から出てきたヴィヴィオちゃんと高町隊長の姿を見た私達は、ミツキお姉様がヴィヴィオちゃんの事を誉めそして、私が一人で見つけた事に驚きの声をあげる。

そして、その後雑談など各々がファントムの隊員と交友を合わせ六課の隊舎へと帰っていった。

その６９（後書き）

感想をお待ちしております

その７０（前書き）

フラナガン郊外
スカリエッティのアジト内スカリエッティの研究室

スカリエッティ視点

「ドクター？」

「誰かと思ったらドゥーエか？どうしたんだい？」

私が自身の研究室で作業をしていた所ドゥーエから通信が私の元に入った。

彼女の声を聞いた私は、その通信画面に見向きもせず作業を続けながらその通信に答える。

「管理局に捕まっているセインとディエチの件ですが…」

「その事かい？それでどうなった？」

「とりあえず、妹達に接触しドクターに頼まれた事を話はしましたが…」

「納得はしてもらえなかったのかい？」

「はい…。ですが、なぜ?あの事をあの子達に?それにウーノお姉様やクワットロと言った他のナンバーズには内緒で、直接ドクターにこの件に関してのみ連絡を?」

ドゥーエからの返答を聞きながら私は、その答えを先読みしそれを言いそれを聞いたドゥーエはその通りである事言いつつも私に質問をしてきた。

「念のため…といった所かな。何せ、この事に関してはドゥーエから報告を受けたのはいいが私も正直まだ疑問に思っていてね。もし、これがウーノやクワットロから他の娘達に知れれば今後の士気にも関わりかねないからさ。セインとディエチに話をしてもらったのは、我々よりも連中の行動について色々と確認しやすし、協力する場合まずは君達がそうしてもらう事になるからね。それで、私からの答えを彼女はどう答えて来たんだい?」

「それについては、こちらに任せると言ってきております」

「なるほど…。協力するならそれでもいいが、協力しない場合は敵として…と言うことかな?」

ドゥーエに質問に答えた私は、今度は自分の番だと言わんばかりに彼女に質問をしその答えを聞き自分なり解釈でいいのかを確認する。

「はい…。無論、どちらにしろドクターや私と含めたナンバーズの生命は保証するとの事でした」

「だろうな…。仮にも彼女達もその所属は管理局だからね…妄りに命は奪えないだろうからね。わかった。では、彼女には状況に応じてやらせてもらう事を伝えてもらってその判断については…ドゥー

エ…。君に一任する事にするよ。無論、セインとディエチにもこの事言って君の指示に従うよう伝えておいてくれたまえ」

「了解しました。ドクター、それでは…（プツン）」

彼女の答えを聞いた私は、今後の事をドゥーエに指示。

それを聞いた彼女は、通信を終了した。

「それにしても…。まさかここまでして来るヤツが管理局にいたとは…。面白い…」

通信を終えた私は、そおう呟き自身の作業に戻るとこにした。

同クワットロの研究室

ウーノ視点

「どうだ?進み具合は?」

「あら～。ウーノお姉様にゼール様♪順調に進んでおりますよ♪」

クワットロの研究室を訪れた私とゼール様は、クワットロに声をかけそれに気づいた彼女がその声に答えていた。

「そうか…。それで生産状態は?」

「はい…。そちらについては、予定通りガジェットの生産ラインのひとつをノワールのラインへの変更は既に済ませており砲撃型と飛

行型の方もガジェットの?型?型のラインにて生産作業に入っております」

「それと~例の件については、ドクターの計画の第一段階の終了後には間に合いますわ~♪」

クワットロの報告を聞いたゼール様は、生産状況を確認。

それを聞いた私は、手元にある画面を見ながらそれに答えその後クワットロが自分の担当している分の状況について説明していた。

私達の報告を聞いたゼール様は、「そうか」とだけ答えていた。

「それにしても~♪このままドクターに黙ってやってもよろしいのですか?もし、ドクターにこの事がバレたら…」

「心配には、及ばない。ヤツについては、現状のまま放置しておいて構わない…。なんせ、ヤツにはうって付けの役回りだからな…」

クワットロの質問を聞いたゼール様は、落着いた声でそれに答える。

「なるほど~♪ドクターにはこのまま道化役を演じてもらって、その影でこちらの準備を整えようって訳ですね~」

「そう…。なんせ、ヤツがいなくてもその次が君達の中にはいるしな…。ヤツにはせいぜいこのイベントを盛り上げてもらうさ」

ゼール様の話を聞いたクワットロは、彼に近づきニヤリとしながら彼の考えを示唆する。

それを聞いた彼もまたニヤついた声でそれに答えていた。

「そうでしたか～♪なら、計画が上手く言ったのなら私をあなた様のお側で世界の崩壊を見せて下さいますよね～♪ゼール様～♪」

「ああ…。上手くいけばお前の願い適えてやらん事もない…」

「お願いしますね…。ゼール様…」

ゼール様の話を聞いたクワットロは、彼にさらに近づき色目を使って彼を誘惑しながら話をする。

その声を聞いたゼール様も彼女と目を合わせながらそれを受け入れながらそれに答える。

でも…その道化は、あなたも同じよ…クワットロ…。

あの方のお側にいれるのは…私だけ…。

私は、その様子を見ながら、そう思い口元をニヤッとさせていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７０…始まります」

その70

その７０

本局　クロノの執務室

はやて視点

「すまんな…急に呼び出して…」

「そんな事はないんよ。クロノ君それにヴェロッサ」

「やあ、はやて…それにしても今日はお供がいるとはね…」

「機動六課所属のティアナ・ランスターニ等陸士であります。始めましてクロノ提督。それとお久しぶりです。ヴェロッサ・アコース査察官」

「私は、クロノ・ハラオウン提督だ。君については、はやてからよく聞いている。とても優秀だと…」

「いいえ、私はそんな…」

「そんなに謙遜する必要は、ないよ。お久しぶりだね。ティアナちゃん」

「たった2度目でもう呼び方が名前になるんか?ヴェロッサ?そんでもってティアナは、執務官志望やから今後のためにもこういった席につれてきた方がええと思ってな。それに彼女は、新人フェワードのリーダーやから公開意見陳述会の外の警備について詳しく知っといる人がいてもええかな?って思ってな」

「なるほどな…それじゃ、早速詳しい話でもしようか」

クロノ君の執務室に入ったウチとティアナは、出迎えてくれた二人にまずウチが挨拶をしその後ティアナが2人に敬礼しながら挨拶をしウチが彼女を連れてきた理由を告げた。

そして、そんなやり取りの後、クロノ君に薦められその部屋にあった応接用のソファーにウチとクロノ君とヴェロッサがそれぞれ座りティアナはそこには座らずウチの後に立っとった。

「それで、これが公開意見陳述会当日の警備体勢を表示したものだ」

「なんや、ウチ等以外地上本部の部隊ばかりやないか」

「そうだ…。本局の魔導士部隊についてはいつ何が起きてもいいように本局にて待機させておくつもりだ」

「でも…到着までには、時間がかかる」

「つまり、本局からの応援が来るまではウチ等六課と地上本部の部隊で対処せなあかんって訳やね」

クロノ君がウチ等の前に当日の警備体制が表示された画面を開きそ

れを見たウチがその画面を見て声をあげた。

それを聞いたクロノ君は、ウチの声に答えそして本局の魔導士隊の状況を伝えそれを聞いたヴェロッサがそれにつけるように説明をする。

2人の話を聞いたウチは、そのやり辛さを心配しつつもそのときの状況を整理しながらそれを声にだした。

「まぁ…命令系統については、いつも通りにやってほしいのだが何かあった場合現場で判断してくれ」

「それしかないやろうな～。それにしてもミツキがおらんとなると色々と面倒やね。あの子がおればウチ等としても少しは自由に動けるんやけど…」

「そうだね。彼女がいたのなら地上本部の部隊と何かあってもそれなりに味方をしてくれるだろうけどそれがいないとなると…色々と制限がかかりそうだね」

「その辺については、我々の方から地上本部に対し要請はしている。それに当日何かあった場合すぐに報告してくれ！！」

クロノ君の説明にウチは、ミツキがおらん事を上げその槍やり辛さを声に出した。

それを聞いたヴェロッサもウチの声に同意しウチの話に続く。

それを聞いたクロノ君は、なんだかイライラしながらその話を返していた。

「なんや？何イラつきながら言ってるんや？ヴェロッサ？」

「ああ…。あれは、ミツキちゃんが嫌いなだけだよ。昔からクロノのヤツ…、自分が担当した事件にミツキちゃんが絡んでくるとろくな事なかったみたいだからね…」

「つまり…、美味しい所は全部ミツキに持っていかれた上面倒事はクロノ君に押し付けたっちゅう訳やな？あいつ～そういうの得意やから～」

「なるほど…そういえばミツキさん…。本局になんでも押し付けられる人がいるとかいないとか…昔言ってたような…」

「それがクロノって訳。ミツキちゃん、本当仕事早いからね…。クロノが来た時にはその事件のほとんどが解決されかかっている所だからね～。そんな悪いタイミングで現れるから後始末とか押し付けられちゃうんだよ…」

「「へぇ～」」

「ヴェロッサ…貴様…余計な事をペラペラと…」

クロノ君のその態度を見たウチは、ヴェロッサに耳打ちなんであああなったのかを聞いた。

それを聞いたヴェロッサは、ウチとティアナに聞えるか聞えないかくらいの小声でその理由について話をする。

ヴェロッサの話を聞いたウチがそれに答えさらに、ウチの話にティ

アナが昔ミツキが言ってた事を思い出しそれを話す。

ティアナの話を聞いたヴェロッサが同意しつつそれに答えそれを聞いたウチとティアナは納得した声をあげていた。

ウチ等の様子を黙って見ていたクロノ君は、そのヴェロッサの態度に苛立ちを露わにしていた。

そんでもってその後、色々と話をした後、ウチとクロノ君は細かい打ち合わせのためにその場に残りティアナとヴェロッサはウチ等が受け取る予定の書類を取りにいくためにその場を後にした。

本局内　喫茶スペース

ティアナ視点

「すいません。ありがとうございます」

「いやいや、どうって事ないってティアナちゃん」

私とアコース査察官がクロノ提督の執務室を出た後、書類を受け取りなどをした後まだ部隊長達のお話が終わっていなかったためアコース査察官が私をお茶にさそってきた。

そのお誘いを正直、私としてはお断りしたかったのだがそれを無碍にも出来なかったのと部隊長の話が終わるまで特にやる事もなかったため仕方がなくお受けする事にした。

喫茶スペースに来た私達は、アコース査察官の奢りでジュースを買

ってもらいそこの空いている席に座った。

そして、私が彼にジュースを買ってもらったのとここまで運んでくれたお礼をいいその声にアコース査察官が答えていた。

「それにしても、ティアナちゃんは執務官志望なんだよね？そうなると誰かの執務官補佐になる方がなりやすいんだけどもう誰か希望はいるのかい？」

「まぁ…それとなくは…」

私は、ジュースを口にしつつ査察官の問いかけに答える。

それにしても…あって2回目で名前で呼ばれる事になるとは…。

彼…イケメンだからいいんだけど…馴れ馴れしすぎるのはちょっと…。

でも、相手は査察官…。

どういったらいいのか…。

私は、そう考えつつも彼の顔を見つつそれにポーっとしつつも彼のその馴れ馴れしさをどう直してもらおうか考えていた。

「それなら、フェイトの補佐なんてどうだい？彼女、捜査の出来る魔導士を探していたから君なんか打って付けだとは思うんだけど…」

「お話があれば…ですが…」

私の考えを知ってか知らずか査察官は、フェイト隊長の名を上げ彼女の補佐になれば?と言ってきたのでそれに対し私はオドオドしながらそれに答える。

「あれ～?もしかして謙遜してる?それとも…誰か別に補佐になりたい人でもいるのかな?例えば…ミツキちゃん…とか?」

「えっ!!…それはその…」

私の態度を見た査察官は、私の顔に自分の顔を少し近づけながらその様子を見て私の答えを推測していた。

そして、査察官がミツキさんの名を上げた事に驚きの声をあげそしてその声に気づいた私はどう言っていいのかわかないまま黙ってしまった。

「そんなにならなくてもいいよ。別に君が誰の執務官補佐になっても僕もクロノも何も言わないから」

「ですが…」

オドオドする私を見たアコース査察官は、私の顔から離れ自分が座っている椅子の背もたれに体を預けながら紅茶を口にしそして、私に心配させまいとやさしく声をかける。

それを聞いた私は、その話がイマイチ信用できず疑問の声をあげる。

「まぁ、君が心配するのも無理はないか。なんせ、クロノは派閥の親分で君が行きたいと思っているのは彼と仲が悪いミツキちゃん。それをクロノの友人である僕が聞いたともなればこの場では何もし

ないと言ってもその裏でヘタしたらミツキちゃんに迷惑をかけるかもしれない。でも、正直な所君の希望は難しいかもしれないね？」

「どうしてそう思われるんですか？」

私の態度をみた査察官は、私が考えている理由と同じ事を言いそして私の希望が難しいと言い出した。

それを聞いた私は、ムッとしながら彼の話の真意を確かめる。

「そうだね。正直に言ってしまえばミツキちゃんとフェイトを比べるとその能力は、別として現状から言うとフェイトは次元航行艦専属の執務官…。執務官誰もが一度はやってみたいと思う所で仕事をしているし、そこで働けばかなりの経験を得られるだろう。それにフェイトの母親であるリンディさんとその兄であるクロノはさっきも言ったけど派閥の親分…。上手くやれば自分の出世も思いのまま…。それに比べミツキちゃんと言えば、執務官以外の仕事は少将と１０８部隊の技術開発室の室長…それに独立部隊ファントム・ナイツの司令と重要なポジションを兼務しそこで優秀である事を証明しているが執務官としてのみで比べれば地上部隊付きの執務官。その業務としては、その部隊が担当する事件の法務関係の仕事がその殆どで事件捜査の出番はかなり少ない。その２人を比べるとなると…誰もがフェイトの方を押すだろう」

「ですが！！私は！！」

査察官の話を聞いた私は、その場から立ち上がり声を荒げる。

「まぁ、まぁ…落着いて…。僕はただあくまで２人を周りから見た

見解を言ったまでだよ。それに彼女だってそんなに無理は出来ないだろうしファントムの任務には君は関われないだろうしね」

「すいません…つい興奮してしまって…ですがなぜ、私がファントムの任務に関われないのでしょうか？」

私は、先ほどの興奮した態度について査察官にお詫びをしそして、なぜ自分がファントムの任務に関われないのかそれについて聞いてみた。

「それは当然だろう。なんせ、あの部隊は管理局でつまはじきにされた者やその身元がわからなくって管理局に入れなかった人達が行く所だからね。そんな所に君がファントムの任務とかに関わったとわかれば、君は執務官の試験すら受けさせてもらえなくなる。でも、ファントムに関わる前にその資格を持っていれば別だけどね。その資格って言うのは捜査官やら執務官なんかと言った所か…。ちなみにミツキちゃんやその弟君なんかはその口なんだけどね。それとサポーターであれば例外の場合なんかはあるけど、執務官とか重要なポジションになるであろうその資格やその部隊には関われなくなる…。スバルちゃんの希望は確か…特急隊だったよね？それに君は執務官…。つまり君達2人がこれからファントムの任務に関わっていけば君達の希望は適わなくなる…そんな事を果たしてミツキちゃんは望むだろうか？」

「ですが…ユウなんかは既にファントムの任務に関わってるみたいですが？」

査察官の話に私は、一応の納得をしつつもそれならなぜユウが深く関わっているのかを聞いてみた。

「ミツキちゃんの弟君の事か…。彼については、その昔自分の仕事をぜずに武装隊の訓練に参加したり内戦地域に自ら志願したりそれにファントムの入隊試験を当時の上司に相談せずにやってたらしくてね。それで、その上官が匙を投げたのさ。でも、それじゃ彼の将来が不味いってんでナカジマ三佐とミツキちゃんが彼がファントムに入る条件として１０８部隊も任務をこなすって事でファントムへの入隊を許可したって訳さ。それに彼…どうやらミツキちゃんをファントムと管理局から追い出したいみたいらしいからね」

「それについては、私やスバルそれにギンガさんやアルトも同じ考えではいるんですけど…」

私の問いかけに査察官は、ユウに関しての事を自ら調べたのであろうその内容が書かれた画面を開きながらそれに答えた。

それを聞いた私は、自分達もそうしたいことを査察官に話をした。

「だったら、ミツキちゃんの弟君やギンガちゃんやアルトちゃん達には彼女をファントムから追い出す事に専念してもらって君とスバルちゃんで管理局から彼女を追い出すよう頑張ればいい。だって君が執務官になって色々な事件を解決していけば彼女の出番は益々なくなるしそれにスバルちゃんだって特急隊活躍すれば少将としての彼女の出番は減るからね。だって彼女、地上本部では防災担当だからね。つまり、君達全員で彼女の仕事を楽にするようにしていけばする事がなくなった彼女は別な事に目を向ける事になるだろうし君達に任せて局を辞める事も考えるだろうしね」

「そんな事…果たして出来るのでしょうか？」

「出来ないやないよ、ティアナ。それをやるんや。ウチも協力する

から」

「部隊長！！いつからそこに！？」

「おやおや、もう話は終わったのかい？はやて？」

査察官の話を聞いた私は、そんな大それた事果たして自分達で出来るのか？と思い疑問の声を上げる。

それを私の後の席で聞いてたのであろう八神部隊長がその席から立ち上がりそして、私に近づきその肩を叩き自分も協力すると言い声をかけてきた。

部隊長の声に気づいた私は、驚きながらその声がする方を向きその一方でアコース査察官はニヤつきながら部隊長に話かけていた。

「何言うてんのよ、ヴェロッサ。さっきウチが来た時にティアナの後の席にいるよう言って話の内容まで念話で教えてくれてたくせに…。それとティアナ。何もミツキのヤツを局か追い出したいのはティアナやユウ達だけやないんよ。ウチもクロノ提督もリンディ提督もそれにここにいるヴェロッサも色々とミツキには世話になっとるからゆっくりとしてほしいと思う気持ちは今でもあるんよ」

「でも、クロノはそれだけじゃないみたいだけどね（笑）それにいつまでも彼女だけに苦労はかけられないからね。僕の情報では、今回のファントムの排除についてはそんな理由も含められてるって話もでているしね」

「そうなんですか？あのレジアス中将が？」

「まぁ、その真意まではわからないけどあそこにはオーリス三佐がいるからそういう事もあるやろうしな。なんせ、オーリス三佐はウチよりミツキとの付き合いが長いからな」

部隊長の話を聞いたアコース査察官は、部隊長の話に自分が持つ情報を披露。

それを聞いた私が疑問の声を上げ、さらに部隊長が自分なりの意見を述べた。

「と言う事ではやても来た事だし僕はそろそろ失礼させてもらおうかな？後の事は、はやてに任せるけど…いいかな？」

「了解や。それじゃ、ヴェロッサ」

「ありとうございました。アコース査察官」

部隊長の話を聞いた査察官は、自分の席から立ちそういいながら私と部隊長の声に答えその場から去っていった。

「さてと…。ウチ等は、後は帰るだけやけど…」

「なら、先ほどの話の続きを別な所でしませんか？部隊長？私、美味しい所知ってますんで？」

「それはええなぁ～。丁度ウチも小腹が空いてた所なんや。ほな、そこに案内してくれるか？」

「わかりました。それでは」

アコース査察官が去った後、部隊長は私の顔を見つつ事後の事について聞いて来た。

それを聞いた私は、今さっきの話をより深く話しがしたかったため部隊長を食事へと誘ってみた。

私の話を聞いた部隊長は、それを笑顔で答え私と一緒にそのお勧めのお店に行く事となった。

その７０（後書き）

感想待ってま～す！！

その７１（前書き）

地上本部　執務室

オーリス視点

ガチャ

「失礼します…」

バタン

（もし、黄天が出てききたとしたらどうされますか？）

（ヤツについては、あいつ等にでも任せるとしよう。何せ元々ヤツを消す事が目的で作る事を承認したのだがな…）

（それにしても、あの女…まだ生きているのか…。しぶといな…。いっその事ヤツもろとも…）

（まぁ～待て。今それをしてしまえばせっかくもみ消したヤツに対してのことが表沙汰にもなりかねん）

（どうやら、その事を嗅ぎまわっているヤツもいる事だしな…）

（またハラオウンか…。まったく…。あの部隊といい…ミツキ・サエグサに関する事といい…。せっかく我々が世界の事を考えてしてきた事をあやつ等は、いまいち理解してはおらんようだな…）

（あの石の力は、我々が使う事で正しい使い方が出来ると言うのに…。レジアスよ、お前の事は信用している。我々のために尽くせ！いいな！！）

「はっ…。それでは…」

プツン

「そこにいたのか？オーリス？」

「申し訳ありませんでした。中将…」

私が中将の執務室に入った所、中将が誰かと通信をしていた。

その相手については、誰だかわからなかったがその声からして3人…。

中将は、その3人の声がする画面の前に直立不動で立ちその話を静かに聞いていた。

私は、それを少し離れた所でそれを聞いていたが通信が終わった中将が話し掛けてきた。

それを聞いた私は、中将にお詫びをしつつ近づいていった。

「構わん。それで？なんのようだ？」

「はっ…はい！この書類にサインを頂きたく…」

中将は、自分の椅子に座り私の声に答えつつここに来た訳を聞いて来た。

その声に私は、持っていた書類をデスクに差し出しつつその理由をつげた。

「あの…中将。失礼ですが今の通信は？」

「まったく…好きかって言いおって！！連中は、ミツキの事をいったいなんだと…はっ！！お…お前には関係ない！！それと…この事はミツキには黙っておけ！！いいな…」

「はい…。わかりました…それと、申し訳ございませんでした。失礼します」

書類にサインをしている中将に対し私は、今さっきの通信について意を決し聞いてみた。

すると、中将はため息交じりの声をもらしていた。

そして、私の顔を見て何かを思い出したかのように声をあらげ私に一喝をしそしてこの事についてミツキには黙っているよう告げてきた。

私は、それを了承しそして、サインがされた書類を受け取り再びお詫びをしその部屋を後にした。

お父様…いったい何をなさっているのですか？

私は、そう思いつつも何もできない自分に対し腹を立てていた…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７
１…始まります」

その71

フラナガン郊外　機動六課隊員宿舎　休憩スペース

ユウ視点

「どうだ～！！」

「うっそ！！やったじゃない！！」

「おめでとうございます！アルトさん！！」

「すごいですよ！！アルトさん」

「アルト！！すっご～い！！」

仕事を人段落させた俺が休憩スペースの前を通りかかった所、アルトがスバル達に向け自分のＩＤカードを高らかに見せていた。

それを見たティアナ、エリオ、キャロ、スバルは、その順番でアルト賛辞していた。

「ん？何やってんだ？」

「あっ！！ユウ！見てよコレっ！！」

「んな！！お前ヘリパイの資格試験…受かったんか！？」

「まだＢ級だけどね。でも！これからもっと上を目指すんだぁ～」

「マジかよ…」

アルト達のやり取りを見ていた俺は、連中に声をかけた。

俺の声を聞いたアルトは、俺の姿を見るや否やそれに近づいてきてスバル達同様に自分のＩＤカードを俺の目の前に突きつけそれを見るよう告げる。

それを見た俺は、アルトのＩＤカードにヘリパイＢ級の資格が増えている事を確認し驚きの声を上げる。

俺の様子を見たアルトは、ＩＤカードを俺の顔から離し自分でそれを見ながらそれがまだＢ級である事を告げさらに上の資格を目指す事を話し出した。

その話を聞いた俺は、それがまだ信じられない様子でそれを見つめる。

「それにしても、学科はミツキさんに頼み込んで作ってもらった予想問題集がドンピシャだったから良かったものの実技の方はあれでよく受かったもんよね～」

「それについては、俺がアルトに特訓してやったからな～。と言う訳で、賭けは、俺の勝ちだなユウ。ほれ？例のもん…」

「ちっくしょー、持ってけ泥棒！！（パン！！）」

「毎度あり」

俺とアルトのやり取りを見ていたティアナが、試験対策のために勉強をしていた時の事を思い出しながら声をあげそれを聞いたヴァイスがどこからともなく俺達の前に現れた。

そして、自分が特訓してやったと言わんばかりの態度でティアナの話に答えその後俺の前に自らの手を差し出しその手を揺らしながら俺との賭けの結果をいいつつ賭け金を寄越すよう俺に要求。

俺は、自分の財布からお金を取り出しその手の上に叩きつけるようにそれを渡す。

それを受け取ったヴァイスは、その枚数を確認。

声を上げその場から立ち去っていった。

「もしかして…ユウ兄…アルトが試験に落ちる方に賭けてたの？」

「酷いです！！ユウさん！！」

「んな事言われてもなぁ～」

「でも、あの操縦を見てたらそうなるわよね…」

俺とヴァイスのやり取りを見ていたスバルが俺にジト目で声をかけてきた。

それに続きエリオが声をあげスバルと2人して俺に詰め寄ってくる。

2人に対し俺は、それを眺めるようにしながら声をあげる。

そして、俺達の様子を見ていたティアナが、そうなった俺の気持を鑑みながら声をあげる。

「まぁまぁ、スバルもエリオも落着いて。この賭けの事は私も知ってたし…。それにこれで明日から一週間ユウにお昼奢ってもらう事になったからね～。と言う訳で明日からよろしく～♪」

「あんた!?まさか、ユウと賭けをしてたの?」

「そうよ。1週間のお昼を奢るって事でね」

「だぁーーーーーーーーー!!なんで、あれで受かるんだぁーーーーー!!」

俺達の様子を見ていたアルトは、2人を宥めつつその事を知っていた事を言いつつ俺と賭けをしていた事を明かした。

そして、俺に対し声をかけそれを聞いたティアナが驚きの声をあげる。

ティアナの話を聞いたアルトは、それを認めその賭けの内容をティアナにつげていた。

そのとき俺は、頭を掻き毟りながらなぜ賭けに負けたのかと終えを荒げながら悔しがっていた。

その翌日…

機動六課　部隊長室

リイン視点

「あかん…」

「どうしたのですか?はやてちゃん」

私とはやてちゃんが、部隊長室で書類整理に追われていた所1枚の書類を見たはやてちゃんがいきなり固まり悲観そうな声を上げていた。

それを聞いたリインは、はやてちゃんに声をかけたのです。

「アルやトのヤツ…受かりおった…」

「それは、よかったです~」

「よかったやない!!アルトが受かったらウチをあいつが操縦するヘリに乗るって約束してしまったやろ!!それを忘れたんか?リイン!!」

「（ぎくぅ~）そ…それは…」

はやてちゃんの声を聞いたリインは、その結果に喜びの声を上げたのですがそれを聞いたはやてちゃんは、アルトが試験を受ける前に約束した事を言いリインに対し声を荒げていったのです。

その声にリインは、その事を思い出してゾッとなってのでうす。

そもそも、アルトが試験を受ける事となってリインもはやてちゃんもその練習の様子を見たことがあって…。

そのときは、実機ではなくシュミレーションだったのですが…その結果が…。

操縦ミスからの墜落回数６０回以上…。

乗っていた乗員を振り落とす事数百回…。

その散々たる内容にリインもはやてちゃんも「受かったらアルトの操縦で移動する」という試験申し込みの際に交わしたアルトとの約束が起こらないようにと密かに願っていたのですが…。

「こうなったら…。仮病でも使って逃げ回る…いや！それはすぐにでもバレそうやからヘリを使わないようにするか…そうや！！別な世界にいるちゅうウチにその時だけ…変わってもらって…」

「はやてちゃん！約束はちゃんとしないとダメですよ！アルトだって頑張ったんですから！！」

はやてちゃんは、ある意味その命がけの約束を何とか回避しようとあれこれ考えいたのでリインはそれに声を上げて怒ったのです。

「そないな事を言われてもな…リイン…。あっ！！そうやこれならイケる！！よっしゃ！！思いついたら即行動や！！ほな、後の事は頼んだで！！リイン！！」

「はやてちゃ～ん！！」

リインの声に答えていたはやてちゃんは、急に何かを思いついたらしく書類をそのままに部屋の外に出て行ってしまったんです。

その行動の速さにリインは、声をかけるのが精一杯だったのです。

そして、その書類の山をリイン一人でする事になったのです。

それから数時間後…。

機動六課隊舎　屋上

ミツキ視点

「何よ～こんな所に呼び出して？」

「いや～今日丁度ミツキがこの近くに来ててこの後１０８にいかなあかんって聞いてな。それやったらウチ等もこれから１０８に行くから一緒にどうかな？って思ってな」

病院で検査を受けそれが終わった所、はやてから急に呼び出された。

六課についた私は、はやてにその呼び出された理由を彼女に聞きそれを笑顔で答えながらヘリがある所まで案内されていた。

「確かに…今日は、ユン先生の病院がこの近くだからそこで健康診断を受けた後その報告方々１０８に行くことにはなっていたけど…」

「ほんで?その健康診断の方はどうやったんた?その顔色からするとあんまええもんやなかったんやないの?」

はやての話に私は、今日の予定をおもいだしながらそれに答える。

私の話を聞いたはやては、今日受けてきた健康診断の結果を聞いてきた。

「まぁ、隠しても仕方がないから言うけどあまりいい結果じゃなかったわよ。それにコレ…」

「魔力の制御リング…。あんた?そんなに調子が悪いんか?」

はやての話に私は、スバルにでもあったらすぐにバレるだろうから正直に健康診断の結果を彼女に言いそして左手につけていた銀色のリングをはやてに見せた。

それを見たはやては私に心配そうな顔をしながら声をかけてきた。

私の左手についている銀色のリングは、デバイスとかじゃなくはやてが言ってた通り魔力を制御するためのリング。

これをつけているそもそもの理由は、自身の体調が悪くなればなるほど自分での魔力の制御が難しくそれが大きくなるとリンカーコアが暴走しかねないため魔力ごとそれを抑えるためにつけいる。

別に何かの制限があってと言う事ではなくこれをつけるつけないの判断は、私ではなくユン先生が私の体調を見ながら判断してくれている。

でも、これにはひとつだけ欠点があってこのリングで魔力を制御してしまうと私自身本来の力は発揮出来なくなり魔力ランクで言えばB～Cの間って所まで下がってしまうと言う事。

このお蔭でこれをつけてるときやこれを私の隙を見てこれをつけられたりして、色々とやられちゃったんだけどね…。

でも、今の所これ以外体調が悪い時の…魔力を制御する方法がこれしかないって事で正直不安だけど…今でもこれをつけている。

「ここん所、色々と忙しかったからね。そのツケが回ってきたのよ」

「ったく…。相変わらず…少しは休めって言うとるやろ」

「それをあんたに言われたくないわよ」

はやてからの問いかけを答えた私は、リングを制服で隠し彼女からの話を返す。

「あれで行くのね…。でも、あれっ？スバルにティアナ？いったいどうしたの？」

そんなやり取りとしていた所、ちょうどヘリの後部ハッチにたどり着きその中を覗いた所スバルとティアナが震えながらその座席に縛り付けられていた。

2人を見た私は、彼女達に疑問の声をあげる。

「（ガクガクブルブル…）み…ミツ姉？良かった！道連れが増えたよ！！ティア！！」

「（ガクガクブルブル…）そのようね…。あの…ミツキさん…覚悟決めて下さいね…」

「覚悟？それっていったい…」

私の声に気づいた2人はスバル、ティアナの順で震えながら私に話しかけてきた。

それを聞いた私は、疑問の声をあげる。

「そんな事はないんよ。ささっ、さっさと乗った乗った～。ほな！出発や！！」

ガタン

私の疑問をまるで無視するかのようにはやては、私の背中を押すようにヘリの中に私を押し込み出発の合図をだした。

そして、後部ハッチが閉じた所で…。

「お待たせしました～！！それでは、出発しま～す！！」

「あ…アルト！！あんたが操縦するの！？」

「その通りでぇ～す！！」

ヘリの座席に座った所画面開きそこから操縦席に座る笑顔のアルトの顔が表示され出発する旨の声を上げた。

それを見た私は、驚きの声を上げ彼女が操縦する事を確認した。
私の声に笑顔でテンションを上げながら答えるアルト。
「帰る！！」
「それはもう無理やで～ミツキ…。もうヘリは発進体勢にはいっとる…。それに今のあんたにヘリの壁…果たして壊せるやろうか？」
私は、不味いと思いその場から立ち上がりヘリを降りようとしたがそれを見たはやては不適な笑みを浮かべながら私に声をかける。
「んぐぅ…。はやて…あんた…」
「まぁ…、あんたがリングをつけてる事まではわからんかったけど…。ウチも一緒に乗ってる事や…一緒に死のドライブとでも行こうか…ミツキ…」
はやての話に私は、その場でたじろぐ。
「イーーーーーーーーーーヤーーーーーーーーー！！」
それを見たはやては、してやったり！と言った顔をしながら私に声をかけこれで私は問答無用で死の空中散歩へと参加させられる事になった。
そして、私の声はただむなしく空へと響くだけであった。

その７１（後書き）

感想待ってます

その７２（前書き）

フラナガン上空　ヘリ機内

はやて視点

「うぁーーーーーーーーーーーー！！」

「きゃーーーーーーーーーーーー！！」

機動六課を出発したうち等は、１０８部隊にアルトが操縦するヘリで移動している所。

乗る前から不安いっぱいであったうち等の予想は見事に的中。

ヘリがまるでジェットコースターに乗っているかのように上下左右に動き回っておるわ。

そんな中ティアナとウチが近くの柱をしっかりと握りながら声を上げていた。

ガタン！！

「えっ？…嘘…」

「ミツキ！！」

「あーーーーーーーーーーれーーーーーーー」

「ちょっ！！なんでいきなり後部ハッチが開いてヘリが私達を落とすような格好になるのよーーーー！！」

そんな中急にヘリの前方が上に傾いたかと思えば、後部ハッチが開きだしうち等を外に落すような格好になった。

そして、この状況で椅子に座っていたハズのミツキがその傾きに乗じて急に外へと転げ落ちていった。

ミツキのそれに気づいたウチは、声を上げるがそれを見送る事しか出来ずティアナが操縦席に向ってツッコミを入れる。

しかしまぁ、ミツキのヤツ転がりながらももっと女らしい声を出されへんもんかぁ？

まるで気のないような声を出しながら開いた後部ハッチに吸い込まれているミツキを見ながらそんな事を事をふと思ってしまった。

ガシッ！！

「ミツ姉！！」

「よっしゃ！！スバル！！そのままミツキを捕まえとき！！こら！アルト！！いい加減元に戻し！！」

（す…すいません！！今戻します！！）

ガタン。

ヴィーン

ウチがそんな事を考えていた所、スバルが近くの柱を掴みながら落ちていくミツキの腕を掴んで彼女が落ちるのをなんとか阻止。

それを見たウチは、スバルに指示をだしそして操縦席にいるアルトにも声をあげる。

ウチの声にアルトが焦りながらその声に答えヘリをも度との状態に戻していた。

それからおよそ5～10分後…。

「ふぅ～、ようやく落着いたわね」

「なら、もういいよ。スバル」

ようやくヘリが落着いて飛ぶようになり、それに気づいたティアナが安堵の声をあげる。

そして、スバルの膝の上にまるで大きな人形を抱きかかえられるように座っていたミツキがスバルに声をかけていた。

「いや!!まだ終わってないかもしれないからこのままの方がいいよ。」

「と言うよりスバル…あんたミツキを自分の膝の上に乗せられてる

からって離したくないんやろ？こんな事滅多にないからな」

「ちっ…違います！！」

ミツキの話にスバルは、振り向いて話ミツキの顔を見ながらまだ安全が確認されていないからこのままの体勢でいる事を薦めそれを聞いたウチがスバルの膝の上にちょこんと乗るミツキを見ながらスバルをからかった。

それをスバルは、顔を慌てながらそれを否定していた。

「とか言って、私を人形みたいに抱いて髪にほお擦りなんかして…」

「それくらいいいじゃない！だって久しぶりなんだもん！！（スリスリ）」

「まったく…もう…」

ウチとのやり取りを見ていたミツキは、スバルの膝の上に乗っている間スバルがミツキの髪にほお擦りしていた事を上げそれを聞いたスバルは先ほどから裏腹ニコニコしながらミツキの髪にほお擦りをしていた。

そして、それに対しミツキは呆れた様子で声を上げていた。

「無理もありませんよ。確か…スバルって昔っから、ミツキさんにベッタリだったって聞いてますし局に入ってからと言うもの中々会える機会がなかったんですから…」

「まぁ、もう少ししたら１０８部隊に着くからそれまで我慢しとき

（笑）」

「はぁ…それしかないようね…」

「ふふ～ん。ミっツ姉～♪」

それを見ていたティアナが、スバルの過去の事や局に入ってからの事をあげミツキに甘えるチャンスがなかったからこうなったのだと言いその後ウチが１０８に着くまで我慢するよう告げる。

それを聞いたミツキは、どうやら諦めたらしくため息交じりの声を上げそれを聞いたスバルはルンルンでミツキをまるで大きな人形に抱きつくかのようにしながらミツキに甘えておった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７２…始まります」

その72

その７２

フラナガン郊外　陸士１０８部隊　部隊長室

ティアナ視点

「ハハハハハッ、そうか…。そりゃ、災難だったな」

「ええ…色んな意味で…災難でした」

「ちょっと！！父さん！！災難ってどう言う意味よ！！ミツ姉まで～！！」

無事１０８部隊に到着した私、ミツキさん、スバルの3人は、その足でナカジマ三佐が待つ部隊長室へと足を運んだ。

そして、ミツキさんの健康診断の結果とヘリの中で起きた出来事を話をしていた。

それを聞いたナカジマ三佐は大声で笑いミツキさんは出されたコーヒーを飲みながらその声に答えその一方でスバルが座っていた応接用の椅子から立ち上がり声をあげていた。

ちなみに部隊長は、ここに顔を少し出した後他の仕事があると言いこの場を後にしその一方でアルトは１０８に先回りしていたヴァイ

ス陸曹と共にアルトと先ほどのヘリの運用についての反省を別の部屋でやっている。

「それで、スバルとティアナを私と一緒に連れて来た訳を教えてもらいましょうか？ゲンヤさん？」

「そうだった！父さん！いったいなんで私とティアをここに？」

スバルの態度を他所にミツキさんは、ナカジマ三佐に対しなぜ私とスバルをミツキさんと共にここに連れてこさせたのかその訳を聞きその声を聞いたスバルがあっ！っと言うような顔をしながらミツキさんと同じ事を聞いていた。

そもそも、今回私とスバルは部隊長から１０８で手伝いをしてこいと言われここに来のよ。

なんせ、フェイト隊長がエリオとキャロを朝から捜査の手伝いと称して二人を連れ出してしまったため早朝からの訓練をする事が出来なかったのよ。

それで訓練がなくなって、私とスバルが今日１日の予定が丸々空いてしまったためそれを埋めるためにこれを入れてくれたんだけど…。

でも、まさかアルトの操縦するヘリで来るとは思わなかったわよ。

「おおっと、それを言うのをすっかり忘れてた。さてと…スバル・ナカジマ二等陸士…返事は？」

「は…はい！！」

「ティアナ・ランスター二等陸士」

「はい」

スバルとミツキさんの問いかけに対しナカジマ三佐は、何かを思い出したかような声を上げ自分のデスクから書類を取り出しスバル名を呼んだ。

急に名前を呼ばれたスバルは、キョトンとした顔をしていたがナカジマ三佐から返事をするよう言われともかく直立不動の姿勢で返事をした。

それに続き、ナカジマ三佐が私の名を呼びそれに対し私はスバル同様直立不動の姿勢でそれに返事をする、

「お前さん達2人には、ここにいるミツキ・サエグサ執務官件技術開発室室長の今日1日の臨時補佐官を命じる」

「「えっ？」」

「はい？とりあえず詳しい説明が聞きたいんですけど？」

ナカジマ三佐からの話を聞いた私とスバルは、驚きの声をあげミツキさんは詳しい説明を要求していた。

「な～に、そもそもミツキを今回ファントムからここにきてもらうようにしたのは執務官の方の仕事と技術開発室の仕事がどうも滞ってな。それでその補佐にギンガをこっちに戻してもらうよう八神の方に言ったんだが、事件の捜査でハラオウンの嬢ちゃんに持っていかれてな。それでその変わりとしてスバルとティアナをこっちに

送ってきたって訳だ。それにティアナの今後のためとナリアからの報告じゃミツキの調子がイマイチだっつうからな。スバルがそばにいりゃなんとかなるかと思ってな。まぁ、仕事の方はミオやユウがフォローする事になっているから1日体験をさせるとでも思って使ってやってくれ」

「なるほど…。わかりました。それじゃ、早速行こうか。スバル、ティアナ」

「はい」

「了解～」

ナカジマ三佐からの話を聞いたミツキさんは、納得した様子で私とスバルに声をかけその場を後にした。

そして、ミツキさんの声に私とスバルはそれに答えミツキさんの後についていった。

同技術開発室　研究室

スバル視点

ガチャ

「おっ、来たな」

「お帰りなさい。ミツキお姉様」

「たっだいま〜。それにしてもユウ？なんで一緒にヘリで来なかったの？」

技術開発室を訪れた私達は、その部屋の中に入った所ミオちゃんとユウ兄が迎えてくれた。

ミオちゃんの声に答えたミツ姉は、ユウ兄に対しなぜ一緒に来なかったのか話を聞いた。

「来る途中に色々と仕事があったんだよ。それを片付けてからヴァイスと一緒にこっちに来てな」

「へぇ〜…そうなんだ（ジト目）」

「それにしても…なんでミオちゃんはメガネなんかかけているの？」

「それは、この方があまり目立たないとケインお兄様に言われましてそれでかけているんですよ」

「そのビン底メガネの方が返って目立つような…」

ミツ姉の話にユウ兄が仕事を理由にあげながらそれに答えそれを聞いたミツ姉は、ジト目をしながらそれを聞いていた。

その一方で私は、ミオちゃんがビンの底のような厚いメガネをかけているのに気がつきそれを書けている理由を聞いた。

私の問いかけに対しミオちゃんは、ケインさんからアドバイスを受けた事を上げてたがそれを聞いたティアがそっちの方が返って目立

つのでは？とボソッと呟いていた。

「とりあえず…ティアナは、ミオちゃんについてもらって一緒に法務関係の書類を片付けてもらってスバルは私とユウと一緒に技術開発室の仕事を手伝ってもらって。んで、書類が出来たか私が最終確認をするからそれがすんだらティアナと私で書類を提出しに行ってユウとミオちゃんとスバルは開発中の機器のテストなんかを研究員達と一緒にやるって事でいい？」

「「「はい（あいよ）」」」

「では、ティアナお姉様。私達は、こちらで」

「ええ」

そんなやり取りをしていた所、ミツ姉が私達に指示を出しそれを聞いた私、ティアそしてユウ兄がそれに返事をする。

その後、ミオちゃんがティアに声をかけ別の部屋へと移動して行った。

それからそれから…。

ユウ視点

「ねぇ…ユウ兄…私…なにやったらいいの？」

姉貴からの指示を受けた後、俺達はそれぞれの仕事を始めた。

そんな中スバルが自分はどうしたらいいのか？と話かけてきた。

「う～ん…そうだな…。書類整理…と言ってもお前苦手だからなぁ～書類…」

「あう～…苦手…」

スバルの問いかけに対し何をやらせようか考えていたがとりあえずの所、書類整理をさせようとするもスバルがそれが苦手である事を思い出しそれを彼女に確認。

俺の話を聞いたスバルは、落ち込みながらそれに答える。

とは言え、この技術開発に今ある仕事といや～今までやってた研究をまとめる作業に入っていてどちらか言えば書類整理が中心でな。

今回俺や姉貴が呼ばれたのもその書類の確認と精査のためにここに来てるんだが…。

「なら、姉貴の様子を見ててくれ。とりあえず、お茶くみとかしてながらでいいから。書類の方は、俺が片付けておく。まっ、お前としては納得いかねぇかもしれねぇが今日の姉貴の体調は最悪だから

な。お前が姉貴が無理しようとしたらすぐに止めるか俺に教えてくれ頼むな」

「は～い。了解～」

俺は、とりあえずスバルにみんなのお茶くみなどをしながら姉貴の様子を見ているよう指示をだした。

それを聞いたスバルは、納得してはいない様子だったがそれを了承。

つまらなそうな顔をしながらみんなのお茶を用意するためにその場を後にした。

ミツキ視点

「お茶で～す。どうぞ、ミツ姉」

「あっ、ありがとう。ごめんね、六課のフォワードにこんな事させちゃって」

「いいの、いいの。それよりも少しは、休まないと後にひびくよ」

「ありがと。あっ、これ美味しい！」

「ホント！！やったぁ～！！ギン姉に念のために聞いといてよかった～」

自身のデスクでみんなから提出された書類の確認やそれにハンコを押してたりしていたらスバルがお茶を持って声をかけてきた。

その声に私は、お礼とお茶くみをさせてしまった事にお詫びをしそれを聞いたスバルはお盆を自分の胸元を隠しながらそれには及ばない旨を話してきた。

スバルとそんなやり取りをした後、スバルが持ってきたお茶を飲みそれが美味しかったのでそれを声に出した。

その声を聞いたスバルは、両手を上げ大喜びをしていた。

クスッ。なるほど…。これは、ギンガ仕込みだったのね。

スバルの声を聞きながら心の中でクスリと笑いながら、そんな様子を微笑ましく眺めていた。

「室長。例のバリアの件なんですが、中々優秀な魔導士の空きがなくてテストする事が出来ないんですが…どうしましょう？」

「う～ん…。近接攻撃でかなりの破壊力を持った魔導士は、中々いないからなぁ～」

そんな様子を一息入れながら見ていたところ、男性研究員の一人が私に声をかけてきた。

それを聞いた私は、う～んと唸りながらどうしたらいいのか思考を巡らせていた。

「ねぇねぇ、それって一体何？」

「新型の魔力バリアなんですが、砲撃や魔力弾などへの耐久テストは既に行っているのですが打撃系の魔力攻撃に対してのテストがまだ行えていないんですよ。なんせ、魔導士の大半がどちらかと言えば中間距離の魔導士が多いですからね。中々クロスレンジで強力な打撃攻撃が出来る人がいないもんでその人選に苦労してるんです。バリアグレイクと言ったらそんな人達の代名詞みたいなもんですからね」

私が思考を巡らせていた所、スバルがそのバリアの事を聞いて来た。

それを聞いた研究員が私の変わりにスバルにそのことを説明していた。

「それなら、打って付けのヤツがいるじゃないか？姉貴？機動六課の…それもあの高町なのは一等空尉が鍛えているフロントアタッカーがな」

「そうか！その手があったね」

「えっ！？それってもしかして…」

私達のやり取りを見ていたユウが、それに打って付けの人物がいるとスバルを見ながら言い出した。

それを聞いた私は、その声に納得した様子でスバルを見その一方でスバルはキョトンとしながら声を出していた。

陸士１０８部隊　訓練場

スバル視点

「いい！！こっちが合図を出したら、本気で展開されたバリアぶん殴ってね」

「りょうか～い。マッハキャリバー！！」

＜オーライ、相棒。いつでもいいですよ＞

ミツ姉達と一緒に訓練場に来た私は、ミツ姉達から少し離れた所でセットアップした上で準備運動をしていた。

そして、拡声器を持ったミツ姉がそこから私にこれからのことについて説明しそれに私は了承しマッハキャリバーに声をかける。

私の声を聞いたマッハキャリバーは、問題ない旨を私に言って来た。

「それでは、実験を開始します！！バリア展開！！」

ヴィーン。

研究員の人がマイクから声を発しそして、私からおよそ２００ｍ離れた所にある機械の前でバリアが展開。

その様子を見た研究員達がその場から離れ何かあった時のための安全対策がされた計測機器が置いてある所に退避した。

「いい！！ヤバイと思ったらすぐに止めるんだよ！スバルが怪我したら元も子もないんだから。用意はいい！？」

「うん…わかった。いいよ！ミツ姉！！」

研究員の退避を確認したミツ姉が再び私に声をかける。

それを聞いた私は、それに答えそして、真剣な眼差しで攻撃対象を見つめ体を屈め突撃態勢に入った。

「それじゃ、行くよ！！レディ…ゴーーーーー！！」

「行っぞーーーーーー！！！」

ミツ姉の合図を聞いた私は、その合図と共にその場から声を上げそして、スタートをした。

ローラーブレードを滑らせながら私は、どんどんスピードを上げる。

「マッハキャリバー！！」

＜オーライ＞

カシャン

バリアに近づいた所で私は、マッハキャリバーに声をかける。

それを聞いたマッハキャリバーは、私の声を聞き即座に私の右手にあるリボルバーナックルにカートリッヂを1発争点した。

「うりゃーーーーーーーーーーーーー！！」

バコーーーーーーーーーーーーン！！

バチバチバチバチ…。

攻撃範囲に到達した私は、目の前に展開するバリア目掛けて右手でそのバリアに拳をぶつけた。

「す…すごい…。なんて破壊力だ…」

「出力安定！！物凄い結果が出そうですよ。室長」

「うん…。とりあえず、計測を続けて」

「「「はい！！」」」

私が、バリアに向ってぶつけた拳にさらに力を込めていた向こうで計測機器の所では、その計測結果を見た研究員達がその数値に驚きの声を上げていた。

その声にミツ姉は、冷静にその様子見守りつつ研究員達に指示を出し彼らはその声に答えつつ自分の作業に戻っていた。

「こんの～！！なら、これならどうだ！！マッハキャリバー！！」

＜オーライ相棒！！＞

「はぁーーーーーーーーーー！！」

カシャンカシャン

バリアに攻撃をしていた私は、それがいまだに壊れない事に次の手を講じるためマッハキャリバーに声をかけそれに対しマッハキャリバーはすぐさまそれに答える。

バリアを打ち付けていた右手を一度そのまま一旦引き再度の攻撃態勢に入った。

そして、今度は左手を前に出し空色の魔力球をバリアの目の前に出し引いた右手ではマッハキャリバーがカートリッヂを2発装填していた。

「ちょ…ちょっと…スバル…」

「おいおい…まさかあいつ…」

私の様子を見たミツ姉とユウ兄は、その様子を見つつまさかと言うような顔をし声を上げていた。

「ディバイーーーーーーーーーン…バスターーー！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーーン！！

ミツ姉達がそんな様子である事を私は知るよしもなく私は、バリアの前に作った魔力球を殴りつけあのなのはさんの必殺魔法を繰り出した。

その魔法を受けたバリアは、こっぱ微塵にその機械事砕け散った。

「うっしゃーーーーー！！やったーーーーーーー！！」

「やっちまったな…あいつ…」

「仕方がないね…それで、計測は出来た？」

「はい。それについてはもちろんですが…」

「まぁ、今後のためのいい経験って事で…」

バリアを完全破壊した事を確認した私は、その場で大喜びをしていた。

ミツ姉達は、私に破壊されたバリアの残骸を唖然とした様子でそれを見ながらそれぞれその感想などを言っていた。

その後、私はそのバリアを作るのにかなりの時間を浪費した事を知りただひたすら謝りその後も色々なテストに参加してその日を終えることとなった。

ティアは、ミオちゃんと書類を作りその後ミツ姉と共にそれを提出しに外回りに同行。

そして、私がバリアを壊した事を知りその帰り道でティアにヴァイス陸曹が操縦するヘリの中でもんのすご～くお説教をくらいながら帰る事となるのであった。

その７２（後書き）

以上連続投稿でした。

とりあえず、地上本部襲撃の前に遣り残してある事を全てやりきってからそっちの方に行きたいと思いますのでもう少々お付き合い下さい

その７３（前書き）

聖王教会　騎士カリムの執務室

シャッハ視点

「そうですか…。あまり進んではいませんか…」

「ええ…。スクライア司書長が頑張って調べてくれてはいるんだけどやはりミツキちゃんの協力なしでは…ね」

騎士カリムがヴェロッサからの報告書を読みながら浮かない顔をしながら、ヴェロッサの方を見ながらそんな感想をもらす。

それを聞いたヴェロッサは、騎士カリムが執務をこなすデスクの前に立ちスクライア司書長の頑張りを評価しつつもお手上げのポーズを取りながら騎士カリムの言葉を返す。

ヴェロッサは騎士カリムからの依頼でスクライア司書長が調べている「影の守護者」の件について、その支援と彼のボディガードを現在行っている。

今回は、その作業状況の報告のためにここに訪れているのだがその作業状況は芳しくないらしい。

「ですが、その存在を示す遺跡も既に発見しているとの事でしたからそこを調べればなんとか…」

「あれは、スクライア司書長が手に入れた論文の半分に載ってたのをただ見つけただけでそれ以外の事については何にもわかってはいないんだ。それにその論文もどうやら例の犯罪組織が蒼天の石を手に入れそれを武器として高く売るために作ったものでムツキ・サエグサ博士本人のものではないらしい可能性が出てきたんだ」

騎士カリムとヴェロッサのやり取りを聞いていた私が、それに対し疑問の声をあげそれを聞いたヴェロッサがそうではない可能性を示唆した。

「それは、本当なんですか?ヴェロッサ?」

「あくまでも可能性なんですけど、この間たまたまケインに会った時にそんな事を言われてね。なんでも、彼の妹のミオちゃんがその論文を手に入れてミツキちゃんに見せたらそう言われた事があったってね」

「ファントム・ナイツのケイン・メイファ副司令が…。では、本物はどこにあるのですか?」

「そこまでは、ミオちゃんも深くは聞かなかったらしい。だって…彼女の両親は、彼女の目の前でかつての仲間達に…」

ヴェロッサの話を聞いた騎士カリムは、その事についてヴェロッサに詳細な説明を要求。

それに対しヴェロッサは、自分がどうしてその事を知ったのかを明かしその話に騎士カリムが疑問を提示。

騎士カリムからの疑問を聞いたヴェロッサは、ミオ・メイファさんがそこまで深くは聞いていないことを言いそして、ミツキさんの過去の事をあげなぜそれを聞けなかったを苦そうな顔をしながらそれに答える。

「そうでしたね…。では、それについては現状のままでよろしいでしょう」

「わかりました、姉さん。それと、最近変な噂が流れてきてね。なんでも、聖王が復活してこの世界を変えるって噂なんですけど…知ってます？」

「いえ…。私は存じてませんが…シャッハ、あなたは知っていますか？今の噂？」

騎士カリムの結論を聞いたヴェロッサは、彼が聞いたと言うその噂の事を知っているのか騎士カリムに確認。

それを聞いた騎士カリムは、その事は知らない事を言い私も確認してきた。

「ええ…。信者さんの中で、そんな事を言っている人がいるのは確かですが…。でも、それってただの噂じゃ？」

「僕も最初は、そう思っていたんだけどその裏であの黄天が絡んでいるみたいでね。姉さんの耳に入れておこうとおもうってね」

私が騎士カリムからの問いかけに答えヴェロッサに質問した所、ヴェロッサはそれがただの噂ではないらしいと告げそして、彼が黄天の名を出した所騎士カリムが厳しい顔をしだした。

「黄天?それって以前騎士はやてからの報告書にあった…」

「そうです。黄天は、我が聖王教会が出来る以前から存在していたと言われそれを生み出したのは聖王王家の者とはやての報告書の中にあったものです。それをスクライア司書長の調べでそれが正しい事が明らかになりましたが…。その後の調べで、それはとてつもなく邪悪な存在でその力は強大…。そもそも我々がなぜ、ミツキさんが持つ蒼天の石に固執する事になったのか…。それは、あれをこの世からその存在自体を密かに消し去るためである事がわかりました。それと…あれがもし表舞台に出てくれば、聖王教会がその裏で密かに処理していた所謂黒歴史についてその全てを明らかにされた上!聖王教会のその存在意義自体も危うくなりかねない事も…。その事だけは、絶対に阻止しなければなりません!!ヴェロッサ!至急その噂について調査して下さい!あれがどこにいるのか、彼とつながっている人物等がいないか等徹底的に!!」

「わかりました。姉…いや騎士カリム…それでは失礼します」

ヴェロッサの話を聞いた私が、彼の言った黄天と言う言葉を聞き疑問の声を上げる。

私の話を聞いた騎士カリムは、その事を説明しさらにそれが表舞台に出てこられると聖王教会のその存在自体危ういとその危機感を露わにしヴェロッサに対しその噂の事を調査するよう依頼。

ヴェロッサは、それを二つ返事で了承。

その部屋を後にした。

その一方で、私は普段常に冷静でおられる騎士カリムが今まで見た事もないような慌てた様子を見てそれにただ驚きを隠せずにいた。

「今まで私達がミツキさんに対して行ってきた事が今回の事で裏目に出なければいいのですが…」

ヴェロッサが部屋を出た後、私が紅茶を入れなおしていた所騎士カリムがふとそんな事をもらしていた…。

その声に私は、何も答える事が出来なかった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７３…始まります」

その７３

その７３

ミッドチルダ西部　山岳地帯にある湖

ティアナ視点

「やった～！！釣れた～！！」

「よかったね！エリオ君！」

「エリオやる～！！」

「よ～し！！次は私が釣るぞ～！！」

「やるな～エリオ」

「本当、すごいわね」

「だが、餌はつけられねぇけどな（笑）」

私、スバル、エリオ、キャロそれにユウとアルト、ヴァイス陸曹の７人はヴァイス陸曹に誘われ休日を利用し湖に釣りをしに来ている。

それぞれが湖に釣り糸を垂らしながら、釣りを楽しんでいた所エリオをが大きな魚を見事釣り上げた。

エリオは、自分で釣り上げた魚を持ちながら大喜び。

それを見たキャロがエリオにまるで自分の事のような態度で声をかえそれにアルトが続く。

アルトの声に続きスバルが次は自分だと釣竿をギュッと握りその後ヴァイス陸曹と私が驚きの声をあげ最後にユウがエリオがまだ餌をつけられない事を笑いながら話していた。

「それにしても、よくこんな所知ってましたね？」

「ああ…。その～なんだ～…昔知り合いに教えてもらったんだよ」

「ふ～ん…そうなんだ…」

そのやり取りの後、エリオが釣った魚を釣針からヴァイス陸曹が取ってあげていた所エリオが陸曹に質問。

それを聞いたヴァイス陸曹は、なんだか曖昧にしながらそれに答えそれを聞いたアルトが納得したような声を上げていた。

「ねぇ？ユウ兄？ここ…もしかしてずっと前にここ…来た事な～い？」

「う～ん…一度来たような…来なかったような…。ダメだ！いまいち思い出せねぇ」

「それってどこかと間違ってるんじゃないの？スバル？」

「そうかな～…」

ヴァイス陸曹とエリオがそんなやり取りをしていた所、スバルがユウに以前ここに来た事がないか？と質問していた。

その質問対しユウは、腕組みをしながら色々と思い出していたようだが彼の中にはどうやらその記憶がイマイチ記憶されおらず曖昧な答えを返しそのやり取りを聞いた私がどこかと間違っているのでは？と疑問の声をあげた。

私のそんな声を聞いたスバルは、いまいち納得していないような声をあげそれに答えていた。

「そろそろか…。よ～し！お前等！俺はこれから別のポイントで釣るからお前等はここで釣ってるんだぞ！いいな！」

「「「「は～い」」」」

「あいよ」

「わっかりました～！！ヴァイス陸曹！」

そんな中、ヴァイス陸曹は自分は別の所で釣りをするからここにいろと私達に命じそれを聞いた私達はその旨を了承し私達が返事をしその後ユウとアルトが声をあげそれを確認したヴァイス陸曹はその場を後にした。

同湖近くのとある施設の跡地付近

ノア視点

「これで、よしっ！っと。ノア！お花持ってきて！」

「あいよ～！！」

あたいとミツキは、ミッドチルダ西部の山の奥地にある廃墟に足を運んだ。

なんで、ここに来たからと言えばまぁ～なんつうかちょっとした用事があってな（笑）

と…とにかく！！その廃墟近くにある大きな木の下をミツキが掃除をしそれが終わった所であたいがもっていた大きな花束を持ってくるよう声をかけてきた。

そのミツキの声を聞いたあたいは、持っていた花束をもってミツキにそれを渡した。

「ごめんね…。こんなになるまでほっといて…。でも！次に来る時にはもっと綺麗な花持ってくるから…。それと…もし私がそっちに行く事になったら…また仲良くしてね」

「バぁ～ロぉ～！！それはもっと後になるっていっつも言ってるだろうが！！と言う訳でババアになるまでミツキはそっちに行かせね

ぇからここで待っててくれよな！みんな！！」

「そうだったね…。ゴメン…、そう言う事だからまた掃除に来るね」

「それで良いんだよ！！ったく…」

あたいから花束を受け取ったミツキは、その花を大きな木下に置かれた多くの石の前に置きそしてその場にしゃがみ込み手を合わせた。

そして、ミツキがここに眠るあいつ等に声をかけた。

ミツキの声を聞いたあたいは、ミツキに一喝をしミツキ同様あいつ等に声をかける。

あたいの声を聞いたミツキは、あたいに謝った上で再びあいつ等に声をかけあたいはそれいい旨を声にだし目を瞑り手を合わせた。

「やっぱり来てたな…。ミツキ…」

「なんで、あんたがここに来てるのよ?ヴァイス…」

あたいとミツキが目を瞑り手を合わせていた所、後から男の声でミツキに話かける声が聞えてきた。

それの声に対しミツキは、そのままの体勢でその男…つまりヴァイスにここにいる理由を聞いた。

「今日は休みだったんで、ユウ達つれて例の湖に釣りに来ててな。その来る途中にお前の車を見かけてな。それでここに来たらお前等がいたって訳だ」

「たまたまねぇ～。本当かしら？」

「まぁな。それにしても、ユウもスバルもここの事まるで覚えてなかったぜ。なんせ、あのポイントはお前に教えてもらって言うのによ～」

ミツキの問いかけにヴァイスは、たまたまである事を告げそれを聞いたミツキはヴァイスの方を振り返りながら疑問の声をあげた。

ミツキが振り返った事によりミツキと向き合う格好になった事で私服姿のミツキを正面から見たヴァイスは、なんだかテレてるような顔をし頭をかきながらスバルとユウがあの湖の事を覚えていなかった事をあげそれに対し疑問の声をあげた。

「そんなの当たり前よ。なんせ、あの2人がここに来たのなんて、小さい頃にウチの両親のお墓をここから移した時だけだしそれにここに眠るみんなの事はユウには関係ない事だしね」

「関係ない…か…。俺にはそうは思えないがな」

「あんた…まさかユウ達にその事を言ったんじゃないでしょうね？」

ヴァイスの問いかけにミツキは、それが当然といった様子でそれに答えそのミツキの話にヴァイスは疑問の声を上げる。

その声を聞いたミツキは、ムッとした様子でヴァイスに今までのやり取りでわいた疑問をヤツにぶつけた。

ミツキの横であたいもまたムッとした様子でヴァイスを睨みつける。

そもそもユウ達には、研究所が黄天の襲撃に会ってその時にミツキとユウの両親が殺されたと説明している。

だが、それはあくまで大雑把な話でその詳細については詳しくは話していない。

「それについては、まだ話してはいない。だが、なんでお前は何か大事が起こりそうになる前に必ずここに来てその多くの石に手を合わせる!!そいつ等は、お前の両親を殺した連中だろ!!それをなぜ!!」

「それについては、何度も言ったでしょ!!この研究施設が襲撃に会った時にまず、ここに眠るみんなが迎撃に向ってくれたんだけどそれがダメで…。それであの黄天がみんなの死体を操ってパパやママを殺す事になったって!!その後アイツが黄天を倒してくれたんだけど…。でも結局、アイツの体…黄天に乗っ取られちゃってちゃって…。それで、あいつの体を乗っ取った黄天と…みんなを私が…」

ミツキの問いかけを俯きながら答えたヴァイスは、その後今まで自分の中に燻っていた疑問をミツキにぶつける。

それを聞いたミツキは、最初は声を荒げていたが昔の事を思い出した様子で次第にその声はトーンダウン。

最後には、目に涙を浮かべながらその声に答えた。

「はぁ〜。なぁ、ヴァイス?おめぇの疑問についてはもっともだがこの事自体結構複雑でな。なんせ、あの黄天の能力を見てまだ生き残っているのがあたいとミツキしかいねぇし今はまだその事を証明

する事が出来ねぇ。ユウ達にその事を話してねぇのも下手にこの事を話をして今のおめぇみたいに思われたくねぇからだ。それとミツキが関係ねぇと言ったのもあいつ等の犠牲のおかげで自分が生き残っているなんてそんな責任をもってほしくねぇって昔ここに寝てる連中からミツキが言われてたからでな。それによ～、ここに寝てる連中ってミツキが生まれた時からずっと苦楽を共にした連中だぜ？そんな連中に唾吐きかけるなんて事…おめぇに出来るか？ヴァイス？」

「そうだったな…。悪い…俺が言いすぎた。俺も手を合わさせてもらってもいいか？ミツキ？」

ヴァイスとミツキのやり取りを見ていたあたいは、ため息をしながらヴァイスにミツキがなぜこうしているのかその理由を説明した。

あたいの話を聞いたヴァイスは、頭をかきながらあたいの説明でその事を納得させるような態度を取りそしてあたい達に謝ってきた。

そして、その後ヴァイスは自分も手を合わせてもいいか？とミツキに聞きそれを聞いたミツキは持っていたハンカチで涙を拭きながらそれを了承するように黙ったまま頷いた。

「俺は、ヴァイス・グランセニックちゅうしがないヘリパイだ。ミツキとは、あいつが管理局に入ってからの腐れ縁でな。正直言ってあんた達のことは俺は知らないしここが襲撃を受けた事もミツキとノアの話と当時の捜査資料でしか知らない。それで、今俺が言った事も管理局の資料ではそうなっているしこの事件を知る大方の人間はそう思っている。それが原因で今…ミツキを泣かせちまった。それについてはあんた達にも謝らなきゃいけない…。スマン！！それでな…もしよかったら…。この無茶ばかりする馬鹿を守ってやって

くれ。ミツキがここに来るって事は、この後大事が起こるって事だからな。その時俺は…正直言って、何が出来るかわからねぇがあんた達が命がけで守ったコイツ等を…。と言うより俺は、部署がミツキとは違うからあのクソガキになるが…。俺は俺なりの方法でなんとかするつもりだ。だが、俺も出来る限りの事はやって見るがそれがダメな時は…頼むは…」

「あんたにそんな事言われたくないわよ！！まったく…」

「まっ！ヴァイスは、ともかくみんなに心配かけさせないようにするってこったな」

「お…お前等…」

ミツキの了承を受けたヴァイスは、あいつ等が眠る大きな木の木陰に置いてある４５個の石の前にしゃがみそんな事を言いながら手を合わせた。

そのヴァイスの声を聞いたミツキは、それに対し腕組みをしながらムッとし声をあげその横であたいもまたヴァイスなんぞに頼らないと声をあげる。

あたいとミツキの話を聞いたヴァイスは、手を合わせたままの状態でムッとしたような声をあげていた。

それからそれから…。

ミツキ視点

「どうだ？これから、ユウ達と合流しないか？スバルやティアナもアルトもいるんだが？」

「いいわよ。みんな楽しんでる所、邪魔しちゃ悪いし」

みんなが眠るお墓にヴァイスが手を合わせてくれた後、私に向ってユウ達と合流しないか？と声をかけてきた。

それを聞いた私は、ユウ達の邪魔はしたいないとそれを断った。

「それによ～。今ユウ達と合流すると色々と面倒な事になりそうだからな。あっ、でもあたいがお邪魔って事であればあたいだけで帰るけどな」

「な…なんでコイツと！？2人っきりにならなきゃいけなねぇんだ！！」

「ちょっと！！それってどういう意味よ！！」

私の話の後、ノアが私とは別の理由をヴァイスに告げ自分が邪魔であれば、自分だけ帰るとなんだかニヤけながらそんな事を言い出した。

それを聞いたヴァイスは、すぐさま私と2人っきりになる事に文句を言い出す。

ヴァイスの文句を聞いた私は、その意味を怒りながらヴァイスに確認する。

「そのまんまの意味だよ!!だ~れがこんな歩く火薬庫みたいな女なんかと…」

「ひっど~い!!だ~れが、歩く火薬庫よ!!武装隊くずれのヘリパイなんかに言われたくないわよ!!」

「なんだとーーー!!」

「何よーーーーー!!」

私の問いかけにそのまんまの意味だと声を荒げながら言い返してきたヴァイスに対し私は、その声に怒りを露わにしながらさらに言い返す。

それからお互いに顔を近づけながらにらみ合いながら文句を言い続ける私とヴァイス。

「まっ…、ケンカする程仲が良いって言うからな…。まさに夫婦喧嘩は猫も食わねぇってか?」

「「ノアーーーーーーーーー!!」」

そんなやり取りを両腕を頭の後ろで組みながら呆れた様子で見ていたノアが私達に向ってそんな声をあげた。

ノアの声を聞いた私とヴァイスは、先ほどまでの口ゲンカがまるで嘘のように2人声を合わせてノアの名を呼び睨みつけた。

「やべぇ!?聞えてたか!?逃げろ!!」

「こらっ!!ノア!!待ちなさーーーーーーい!!」

「待ちやがれ!!このやろう!!」

私とヴァイスの態度を見たノアは、自分の声が私達に聞えていたことに驚きの声をあげすぐさま逃げに転じた。

逃げ出したノアに気づいた私は、声をあげそれをおいかけヴァイスもまた私同様声をあげながら逃げるノアを追う。

そんな追いかけっこが続いた後、ノアを捕まえた私は彼女に対しオヤツ抜きを宣告。

その宣告を聞いたノアは、「それだけは!!」泣きながら私に許しをこうが私はそれをゆるさずそれをみたヴァイスはそろそろユウ達と合流しなければと言い私達と別れる事となった。

帰りの車の中でスバルからヴァイス達と釣りをしたとの画像つきメールが届いた。

そこには、スバルが大きな魚を釣ってご満悦している様子が写っていたがどうやらヴァイスは本当にみんなのお墓の存在を言っていなかったらしくそのメールの中でスバルがこんなことを聞いて来た。

ねぇ、ミツ姉？今送った画像なんだけど…ここって一度ミツ姉に連れて来てもらった事ない？ユウ兄とティアとそれにギン姉にも聞いて見たんだけどみんなその答えがいまいち曖昧なんだよね。

だから、ミツ姉！ここどこだか知らない？

ぜったい！！来た事ありそうなんだよ！！

もし知ってたら教えて！！

スバルより

そのスバルのメールに対し私は、「ごめんね」と呟きながら知ってる事とは違う所の事をあげそこじゃない？とそのメールを返信した。

私の返信したメールに対しスバルは、「そっか～。わかった」と納得した内容のメールを返した。

「あ～あ…。いったい、いつまで嘘を突き通せばいいのかな～？」

スバルの返信メールを見た私は、そんな事を呟きながら止めていた車を走らせ始めた。

「な～に…。今回の事で全部片付けられたもうスバル達に嘘なんてつかなくてもいいさ…」

「あいつが出てくればね…。だけどね…」

私の呟き…と言うよりボヤキを聞いた助手席に座るノアがそのボヤキに答えそれを聞いた私がそれに対し返答した。

「出てくるさ…。必ずな…。そのために打てる手は、全て打っておいたんだ…。うまく行くさ」

「そう願いたいもんだね…」

「ああ…」

私の話を聞いたノアは、心配するような声をあげる私をまるで元気付けるかのように話かけてきた。

ノアの話を聞いた私は、そうであること願いたいと言いそれを聞いたノアもそれを同意するかのようにそれに返事をした。

そんな話をしながら私達が家路へと向かった。

それから数日後…。

地上本部からの一時退去のリミットとなり私は、ノアやナリアちゃん達と共にミッドチルダを後にした。

その７３（後書き）

はやて
「さて…どうやったん？その７３？」

作者
「…またですか？あの～私のセリフ取らないで下さい」

はやて
「ええやないの？ウチかてやりたかったんやから。それにしてもこれでいよいよになるんか？」

作者
「そうですね。今回の話で粗方の周辺事情やユウ達の日常については書き終えたんで、いよいよ地上本部襲撃のお話に突入したい所なんですが…その前に…」

はやて
「ん？なんや？」

作者
「パンパカパーン！！おかげさまをもちましてこの「影の守護者」！！７０万ＨＩＴをついに超えてしまいました！！これも皆様のおかげです！！どうもありがとうございました！！それで今回、そろそろ何かそれを記念したお話をと思いまして活動報告の方にアンケートを掲載しましたがこちらでもやってみたいと思います。期限は２月１３日のお昼の１２時まで！！下記にある感想からお答えください。それでその選択肢になりますが…はやてさん！お願いします」

はやて
「よっしゃ!!ほなら、アンケートの内容の発表をするで!!今回のアンケートは７０ＨＩＴ記念小説を書くにあたってどんな内容のお話がええか?っちゅうもんや。それでその選択肢は…

1、ユウ達の過去のお話

2、他の作者さんとのコラボ（特別編やら外伝、ＩＦ話のようなもの）

3、キャラ達による座談会

4、サブキャラによるスピンオフ

とまぁ、この４つの中からえらんでな～。

ちなみに、2に関してはコラボ希望などがあれば一緒に感想に書いてほしいのと4に関してはどのキャラの話がいいのかリクエストなんかがあればこっちとしてはありがたいんよ」

作者
「とりあえず、思いついたままを選択肢に入れてみましたがこれ以外に何かあれば感想欄に書いて下さい。あと既に活動報告の方で選んでくれた方もこっちで再度選んで頂いても問題ないですから」

はやて
「なんや?もうすでに何でもありな状況になってないんか?」

作者
「いや～。ただでさえ感想が少ないもんで、これをやっても誰も答

えてはくれないのでは？と思ってしまってこんな状況になっております（笑）」

はやて
「それは、あんたの文才がないからやろ！！」

作者
「そうとも言いますが…。ともかく！！地上本部襲撃に入る前にこの記念小説をやった後！と言う事になりますのでご了承ください」

はやて
「みなさん、ドシドシ参加してな～！！それじゃ、今回はここまで！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念！！タイトル等はまだ未定！！」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オ～フ～！！」

作者
「んな！それも私のセリフ！！それにヴィヴィオまで…。とりあえず、アンケートの方よろしくお願いします。以上、こんな感じでした。では…また…」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　前編」（前書き）

機動六課宿舎内　八神家の部屋

はやて視点

「なんや…こんな朝早くから…」

（何ボォーっとした声だしてんねん！！今日そっちでなんやイベントがあるんやろ？）

ウチがヴィータと一緒にベットで寝てたら、急にウチの端末がなりだした。

それで目ぇ覚ましたウチは、ヴィータを起こさんようにその部屋を出てその通信に応じた。

すると、その通信の向こうから自分と同じ声が聞えてきなんやイベントがあるのか？と聞いて来た。

「イベント…もしかして、「クラナガン・フェスティバル」の事か？それなら今日もやってるで？」

（それやーーーーーー！！なぁ、そのイベントでなんや賞金がでるヤツあるやろ？それに参加するための参加証くれへんか？）

寝起きのまんまの頭でその声に答えた所、通信画面の向こうで大きな声でそれであってる旨を叫びそのイベントで賞金がかかったイベ

ントに参加するための参加証がほしいと言って来た。

「それは、無理なんよ～。そのイベントへの参加申し込みは既に終わってるし当日参加は出来へんのや」

（なら！あんたは、持ってるんか？）

「そのイベントの参加証は、持ってへんけどそのイベントでも使える共通パスなら持ってるで。それがあれば、そのイベントにも参加出来るけど…あげへんで！！なんせ、高かったんやからな！！」

（そんな殺生な～！！なぁ、頼むわ～。それ…ウチに譲って！！）

「いやや！！ウチかて見たいもんあるんや！！それもそのイベントがやってる時にな！！つ～訳で、ほな…」

ウチの答えを聞いたウチと同じ声の人は、ウチが持ってる共通パスを譲ってほしいと言ってきた。

それをウチは即効で拒否。

それでも食い下がってくるをウチはひたすら拒否しまくった。

すると…。

（なら…強行手段や…。八神組を舐めたらアカンよ…。こんな事があろうかと、楓とミツキさんに頼んで共同開発をしてもらった強制同キャラ入れ替えマシーン…この！！「万年バズーカ」を使ってウチとあんたを今すぐ入れ替えてウチがその共通パスをゲットしたる！！）

「万年バズーカ?それって、千〇バズーカをパクッただけやろ!!それよりも今すぐ変わる…?アカン!!今はアカン!!ちょい待ち!!」

ウチとのやり取りを業を煮やした八神組のウチは、強行手段といいどっかのアニメのネーミングをちょっと変えただけの機械を使ってウチといますぐ入れ替わると言い出した。

その声に対し、ウチは条件反射でツッコミを入れたのちふと冷静に自分の格好を見た。

そして、今変わると色々と不味い状況にもなりかねないと判断し向こうのウチに少し待つよう告げた。

(そんなの問答無用や…。そう言えば、さっきから音声オンリーで映像は映らへんけどなんや面白い事にでもなるんか~?ほな…いくでぇ~…)

通信画面の向こうから聞えてくる声は、ウチ話には一切応じず問答無用で入れ替わると言い出した。

でも、なんでこんなにウチが慌てるかと言えば昨日ヴィータと一緒にベットに入ったのはいいんやけどウチ…パジャマに着替えてへんねん。

って、言うか下着の上には昨日仕事をしてた時に来ていたブラウスのみ…。

ちなみに、制服の上着とスカートは何時の間にか脱いどったらしく

今はヴィータが寝ている部屋に転がっとる。

しかも着ているブラウスは、ただ羽織っとるだけでその中の下着が見えてる状態…。

そもそも音声オンリーにしたのはある意味このいやらしい状態を隠すためやったんよ。

「アカン！！今のウチの格好はヤバイねんて！！（ドーン！！）なぁ…ちょいま…ち…て…」

「あ…ユウ達の所のはや…て…さん…（タラ…）」

ウチがもう一人のウチにもう少し待つよう言ってた所、大きな音の後急に辺りの様子が変わった。

するとウチの目の前には、下着の上にブラウスを羽織っているウチを見て鼻から鼻血を流しながら顔を真っ赤し直立不動でフリーズしとる力君が立っておった。

その光景を見たウチも赤面しながらその場でフリーズ…。

「おい！力！！はやては入たのか？！って…あ…」

「嘘…はやてちゃん…」

その後から、ドアを開けて入ってきた飛鳥さんと向こうのシャマルがこの状況を見て2人ともその場でフリーズ…。

さらにその後から北斗やヴィータ、それにサイモンと次々と部屋に

入って来ようとする八神組の面々…。

「と…とりあえず!!男は入るな!!」

バタン!!

「ほら!!力君も外に出て!!」

いち早く状況をフリーズをといた飛鳥さんが入ってこようとする男どももその部屋から締め出しシャマルが力君の腕を引っ張り外で出そうとする。

ここ…もしかして…力君達の世界のウチの家…なんやよね…ほんでもってこの状況…。

「いやーーーーーーーーーーーーーーーー!!」

バチコーーーーーーーーーーーーーーーン!!

ドーーーン!!

キーーーーーーーーン!!

「な…なんで…それもこの力は…ウチのはやてと同じくらい…じゃ…」

キラッ!!

ようやくフリーズを解いたウチは、目の前でその部屋をでようとする力君をその場の勢いで殴り飛ばした。

すると、ウチに殴られた力君はその部屋の壁をぶち破りコッチのウチと同じくらいとそう感想を漏らしながら青空の向こうへと飛んでいくのであった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　前編」…始まります」

ウチお嫁にいけへん！！

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　前編」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　前編」

クラナガン市内　繁華街

ユート視点

「ええっと…。あっちか？それともこっちか？…それにしても同じフラナガンでも世界が違うと道まで違うのか…」

俺は、辺りをキョロキョロしながら目的地への道を探していた。

今回ここに来たのは、フェイトとティアナからのお願いを聞きとあるイベントに参加するためであったのだがどうやら道に迷ってしまったらしい…。

違う世界でも同じミッドだからと思ってここの地図などを事前に用意してこなかったのが運の尽き。

デバイスのシステムも多少違うから、デバイスにここの地図もダウンロードする事が出来ずしかも通貨が違うからタクシーも呼べやしない。

「こんな事なら、ティアナの言う事聞いとけばよかったな」

俺は、そんな事を呟きながら辺りをキョロキョロしながら道を聞けそうな人を探した。

あの人なら…。

辺りを見渡した所、恐らく同年代であろう女の子に道を聞こうと彼女に近づいた。

「あの…すいません。道を尋ねたいんですが…」

「えっ?私に?」

声をかけた女性は、自分を指差しながら俺にその事を確認してきた。

「ええ…そうです。それで、この近くにクラナガン中央ホールってありますか?」

「ごめんさない!!私、ここの世界の人間じゃないんですよ。でも、目的地は、同じみたいですから一緒に道を知ってる人探しませんか?」

「ここの世界の人間じゃない?それって…」

俺は、彼女にそうである事を言いそして今回の目的地であるクラナガン中央ホールの場所を聞いた。

すると、彼女は俺の声を聞くや否や頭を下げて謝ってきてそしてこの世界の人間ではないと言ってきた。

それを聞いた俺は、疑問の声を上げる。

「ええ…。私、南楓っていいます。今回ちょっとした用事があってここに来てるんですけど元々住んでるのがこの世界とは違う…いわゆるパラレルワールドの人間なんです。って、いきなり言われても信じてもらえませんよね？」

「いえ、実を言うと俺もこの世界の人間じゃなくてあなたの言うパラレルワールドの人間なんです。恐らく南さんとは違う世界の…。あっ！申し送れました、俺…ユート・ランスローっていいます。今回は、今言った所でやるイベントに参加するつもりで来たんですけど…どうやら道に迷ってしまって…」

俺の疑問の声に南楓と名乗る女性は、自分がパラレルワールドの人間であることをつげ右手で頭の後ろをかきながらアハハッと笑いながら話してきた。

それを聞いた俺は、驚きの声をあげ自分も南さんとは、違うパラレルワールドの人間である事を告げ自己紹介をした。

「私の事は、楓って呼んで下さい。それにしても、こんな偶然ってあるんですね。それはそれとして、これからどうしましょうか…」

「そうですね…。あっ！俺の事は、ユートでいいですよ！楓さん。そうですね…やはり誰かに道を聞いた方がいいんじゃないですか？誰かいないのかな？」

「わかりました、ユートさん。そうですよね～。それしかないですよね」

お互いの自己紹介を終えた俺と楓さんは、お互いの事を名前で呼び合う事を確認しながら誰かこの辺の道に詳しそうな人を探すように2人キョロキョロと辺りを見渡す事となった。

それにしても…なんて偶然だよ。

たまたま声をかけた人が、俺とは違う世界の人間だなんて…。

運がいいのか悪いのか…。

俺は、楓さんと共に辺りをキョロキョロしながらふとこんな事を考えていた。

同市内　繁華街

スバル視点

「スバル！！早く来ないと遅れるわよ！！」

「待ってよ～！！ティア～！！」

私とティアは、昨日から行われているクラナガン・フェスティバルを見に行くためにティアと一緒に繁華街を歩いていた。

そんな中、街中に出ている出店を見ていた私にティアが急ぐよう声をかけてきた。

それを聞いた私は、目の前で今や遅しと焼きあがりそうになって出店のオジサンにコロコロと転がされているたこ焼きに未練を残しながらティアの後を追った。

昨日から1週間の予定で行われているこのクラナガン・フェスティバル。

簡単に言えば、なのは隊長達のふるさとでいう所のお祭りってヤツ。

いろんな会場で展示会やライブや映画の鑑賞会などクラナガンの市内全域を使っていろんなイベントが行われている。

そのためにいたる所に出店が出ていて…。

私の手には、別の出店で買った綿アメや焼きソバなどを持っている。

そして、そのメイン会場って言うのが私とティアがこれから行こうとしているクラナガン中央ホール!!

ここでは、そのホールの中と外で色んなイベントが行われていて私とティアはミツ姉が参加協力している「技術博inクラナガン」のそのお手伝いをしに行こうって所。

それでね!その…お手伝いをすると…。

「スバル!!早くしないと受付が終わっちゃうわよ!!それでもいいの!!」

「わ~!!それはダメ~!!だから、待ってよ~!!ティア!!」

出店の誘惑に取り付かれていた私の耳に再びティアの催促の声が聞えてきた。

それを聞いた私は、その誘惑をなんとか振り切り急いでティアの元へと向ってた。

「まったく…。毎年毎年…いい加減にしなさいよね！これは、元々あんたが言い出したんだから…」

「ごめ～ん…。綿アメ上げるから許して！！ね！！」

ティアに追いついた私は、イライラしながら待っててくれたティアから怒れる。

その声を聞いた私は、ティアに誤りながら自分が食べていたのとは別の綿アメをティアに渡し許しを請う。

「…ったく…しょうがないわね。…今回だけよ…」

「やった！！あれっ？ねぇティア？あれって楓さんじゃない？」

「あっ本当だ。それも男の人と一緒に！スバル！！ここは、そっとしておきましょ。もしかしたら、デートかもしれないし…」

ティアから許しを得た私は、声を上げて喜んだ後辺りをキョロキョロしている楓さんと男の人の姿を見つけティアナにその旨を伝えた。

それを聞いたティアは、もしかしたらその男の人とデートをしているかも知れないからそのままスルーしようと言ってきた。

「うん…。そうしたいのは山々なんだけど…。向こうも気づいちゃったみたい…ほら…」

「お～い！！ティアナにスバル！！ちょうどよかった！」

「ホントだ…。こっちに来てるわね」

ティアの声を聞いた私は、ティアと同じようにしようとしていたことを明かすがそれをする前に向こうがこちらの存在に気づいてしまった事をティアに告げた。

すると、向こうから楓さんの声が聞え彼女とその男の人が私達に近づいてきた。

それを見たティアは、なんだか関わりたくないような顔をしながらそんな声を出しこちらに向ってくる楓さん達に苦笑いをしていた。

「お久しぶりです！！スバル！ティアナ！！」

「久しぶり！！楓さん！！」

「お久しぶり、楓さん。それにしてもいったいどうしてこっちに来たの？それに…その人は？」

「もしかして～…その人とデート！？」

私達と合流した楓さんは、私とティアに声をかけてきた。

それを聞いた私達は、私、ティアの順でその声に答え一緒にいる男の人の事を聞いてみた。

「「で…デート!!」」

「違う違う!!この人とは、ついさっき近くで会っただけで…」

「そ…そうなんだよ!ティアナ!!この人とはただ道を聞いただけで…」

「あれっ?ねぇ?ティア?この人と知り合い?」

「えっ!?そんな訳ないわよ!!初めてよ!!」

私の問いかけに2人して驚きの声をあげ、そしてその後楓さんがそれが違う旨を言い次にその男の人がティアに向ってそれが違う事を言っていた。

その様子を見た私は、ティアにこの男の人が知り合いであるか聞いて見た。

ティアは、その男の人様子と私の質問に驚きの声をあげこの人とは知り合いではない事を言ってきた。

「あっ!!この人は、ユート・ランスローさんって言って私とは違うパラレルワールドの人なの!!それでユートさん、この2人はこの世界のスバルにティアナ!あなたの世界にいる2人とは違う人なの!私は、前にこの世界に一度来たことがあってその時に知り合ったんです」

「そ…そうなんですか?すいません、つい自分の世界のティアナと勘違いしてしまって。改めまして、ユート・ランスローといいます。

この世界とは、別のパラレルワールドの人間です」

私達のやり取りを見ていた楓さんが、慌てふためくその男の人…ユート・ランスローさんって人に自分の世界の私達とは違う事とその男の人が楓さんとは別の世界の人間である事を私とティアに説明してきた。

その後、そのランスローさんが自己紹介と楓さんと同じ説明を私と言うよりティアにしていた。

「は…はぁ…」

「って言う事は、ランスローさんってもしかして…。向こうのティアと付き合ってたりしてるんですか？」

「さっきから、見てるとなんだかそんな感じが…」

「えっ！！そ…それは…」

「どうなんですか～？」

「さぁ…全て話しちゃいましょうよ？ユートさん？」

「「さぁ！！さぁ！！」」

ランスローさんの説明を聞いたティアは、今ひとつ納得出来ないような声をあげそれを見た私がランスローさんに自分の世界のティアとはどうなのか？と聞いてみた。

私の声に楓さんもどうやら今までの様子を見て私と同じ事を思って

たようでそんな声を上げる。

その一方でランスローさんと言えば、いきなりの私からの質問に驚きの声をあげる。

彼のそんな態度を見た私は、ニヤケながら彼につめよりそれに楓さんも続く。

「そ…そんな事よりも!!道を聞かなくてもいいんですか?楓さん!!」

「え～…でも、私としては今は道を聞くよりもそっちのことのほうが…」

「す…スバル!!時間!!時間!!」

「うわぁーーーーー!!しまったーー!!もうこんな時間!!急いでクラナガン中央ホールに行かなくちゃ!!」

私と楓さんの追及にランスローさんは、大声をあげ楓さんに道を聞かなくてもいいのか?と質問をした。

ランスローさんの質問に対し、楓さんはなんだか甘えるような声をだしながらそれよりも私の質問の方が気になると言いその質問を却下していた。

そんなやり取りをしていた所、ティアがクロスミラージュで時間を確認しながら私の肩を叩き声をあげた。

その声に私は、マッハキャリバーを取り出し時間を確認。

そして、その時間が押し迫っている事を確認し驚きの声を上げた。

「えっ!!クラナガン中央ホール!?私達もそこにいきたかったんだよ。悪いけど、一緒に連れてってくれる?」

「わかりました。なら、ついて来て!!あんたもでしょ!?なら、一緒に来なさい!!」

「ああ!わかった!!」

私の声を聞いた楓さんは、自分達も同じ所に行くつもりである事を告げ一緒に連れてってほしいと言ってきた。

楓さんのその声にティアは、その旨を了承。そして、ランスローさんにも声をかけついてくるよう言った。

ティアの声にランスローさんは、それを同意する声をあげ私を先頭に走り出し急ぎクラナガン中央ホールへと向った。

クラナガン中央ホール敷地内　とある受付

ユウ視点

「オイコラッ!!そこっ!!列を乱すな!!受付には間に合うから焦るなって」

「受付終了は、後5分で～す！！」

「ええ～っと…。これが、受付票になるからな。なくすなよ」

ここクラナガン中央ホール外の受付には、いくつもの列が出来ていて俺は「受付はこちら↓」の看板を持ちながらその列を整理している。

俺と同じ看板を持ったナリアは、左手でその看板を持ち空いた右手にはメガホンを持ちながら受付時間の終了5分前である事を言いそして、受付にいるノアが申し込み者に受付票を渡していた。

なんで、俺達がこんな事をしているかと言えばこのイベントには色々な催し物があってそれに参加するためには事前に申し込む必要があるんだ。

その申し込みには期限が設けられていてそれが過ぎればその後の申し込みは一切受け付けない事になっている。

でも、色んな理由でその申し込みが出来なかった人のために各イベント会場で会場設営やらその準備などの手伝いをする事で各イベントに参加出来る当日パスを手に入れられるって事でこの会場にもその当日パス目当てで来ている連中が列を作ってるって訳。

ちなみにこれは、一般的には公開されておらず知らない人もまだ沢山いる。

それにこれをやる会場とやらない会場とがあって、みんな色々と調べた上でここにやって来たって事さ。

主催者側からすれば、期限を守らないヤツが悪いって事になるが俺達のようなそのイベントにブースを出す連中からすればその会場設営のためのとにかく人数が必要でな。

そのために主催者にかけあって、その会場設営なんかの伝代…所謂労働奉仕する事でその当日パスを無料で発行しようって風にしてもらってな。

今回俺達は、姉貴が室長をやってる１０８の技術開発室の展示ブースの設営を手伝ってくれる人がほしくてこうして当日パスを大量に用意して人を集めているって訳だ。

なんせ、色々と機材が多くてな。

それで、姉貴の所じゃ毎年のようにこうして人を集めている。

ちなみに、ノアが渡した受付票って言うのが手伝ってくれた後にそれが当日パスに化けるって寸法になっている。

なんせよ～、昔は、受付で当日パスを渡していたんだが手伝いせずにパスを受け取ってそのままドロンしちまうヤツがたくさんいてな。

中には、受付で書いた住所が嘘の住所だったって事もあって今ではこんな形になっている。

「それにしても、スバル達おせぇ～な？」

「ええ…。確か毎年ここの手伝いしに来てくれてるんですよね？だったら場所は変わっていないハズだから迷う事はないんだろうけど…」

「大方、ここに来るまでにある出店にでもひっかかってるんじゃないか？」

「だろうな？もしかして、またタイムオーバーでミツキに泣きつくんじゃねぇだろうな？」

「それって去年の話だったよな？あの時は、さすがの姉貴も頭抱えてたしな」

「受付時間残り1分で～す！！受付を済ませていない方はお急ぎ下さ～い！！」

受付が大方片付いてきた所で、ノアが俺とナリアに近づいてきてスバル達が来ていない事に声をあげた。

それを聞いたナリアが以前から場所が変わっていない事をあげ道に迷っている可能性を否定していたが、それを聞いた俺がスバルが出店で引っかかっている可能性を示唆。

俺の声を聞いたノアが、その可能性について同意をしそして、スバルが去年ここの受付時間に間に合わずウチの姉貴に泣きついて無理やり受付していた事をあげ今年もその可能性をいってきた。

ノアの話に俺がそれが去年の話であることをつげそのときの姉貴の様子を思い出しながら話をし、その一方でナリアが残り1分前である事をメガホン片手に声を上げていた。

「ユウーーーーーにぃーーーーーーーーー！！」

「おっ！！きたな！！」

「急いで下さい！！スバルさん！！ティアナさん！！それに…」

「おい！！ありゃ、楓じゃねぇか？それに誰だ？あいつ？」

ナリアが声を上げて残り時間を言っていた所、スバルが俺の声を呼びながら走ってきた。

その声に俺は、スバル達を確認し声を上げる。

俺の声を聞いたナリアもどうやらスバル達の姿を確認し急ぐよう声をあげその後から来る見たことがある姿に声を詰まらせる。

ノアもスバル達の後から来る楓さんの姿に気づき驚きの声をあげそして、その後から来る男の姿を見て疑問の声をあげていた。

「セーーーーーーーーフ！！でしょ？ノア？」

「ああ…それもギリギリな…」

「ハァハァ…まったく…毎度毎度…」

「もしかして、楓も当日パスがほしいんか？」

「そうそう！！それっ！！どうしたらもらえるの？」

「それでは、こちらで受付してください」

「あんたも当日パス希望なのか？」

「いや…俺は、これがあるから」

そんな中、スバルが受付前にセーフのポーズをとりながら滑り込んできた。

そして、それでいい事をノアに確認。

スバルの声を聞いたノアは、それでいい旨を告げ受付票を準備する。

スバル後からたどり着いたティアナは、息を切らせそして毎度毎度と怒りながら用意された受付票に記載を始める。

2人の様子を見ていたノアは、楓さんも当日パスが必要なのか確認しそれを聞いた彼女はそれをどうしたら貰えるのかを聞いて来た。

楓さんの質問に対し、ナリアが受付票への記載をしてもらうよう告げ彼女もその指示に従う。

最後に受付にスバル達と一緒に来た男性に俺が彼もまたスバル達と同じであるのかを確認。

すると、その彼は自分が持っていたバックからカードを取り出しそれを俺に見せスバル達とは違う旨を伝えてきた。

「こいつは、ここの迎賓館で行われる「晩餐会」で演奏する人に出される「招待パス」じゃねぇか?って言う事は、あんた音楽家とか演奏家とかなんかかい?」

「いや、俺はこの世界とは違う世界にある機動六課って所でやっか

いになってるユート・ランスローって言います。一応バイオリンは弾いてはいますがそれは、趣味みたいなもんです。今回は、俺の世界にいるフェイトとティアナに俺には内緒でこれにもうしこまれちゃいまして…。それで、その審査にも通ってしまってここに来てるんです」

ランスローと名乗る男のカードを見た俺は、それが今日の夜にここの迎賓館で行われる晩餐会に参加する演奏家達のみに特別出されるパスである事をつげ彼が音楽家なんかなのかを確認した。

すると、彼はその事を否定し自己紹介をしそれが趣味みたいなものと今回ここに来たのも自分の世界のフェイト隊長とティアナに勝手に申し込まれ審査も通った事を言ってきた。

「自分の世界の？って事は、あんたはパラレルワールドの人間…なるほど、そう言う事か。俺の名はユウ・サエグサって言ってな。この世界の六課に所属している一等陸士だ。それで、あっちにいるのがナリアであそこにいるちっちゃいのがノアだ。俺の事は、ユウで構わないし俺たちには変な気遣いは無用だぜ。ユート」

「ああ…。わかった。なら、そうさせてもらうよ、ユウ。それとナリアとノアも俺の事はユートで構わないからな」

「あいよ～」

「わかりました～。ユートさん」

「ねぇねぇ、ユウ兄？どうしてそんなにその人の話を簡単に信じちゃうの？」

ユートからの話を聞いた俺は、彼が持っていた招待パスを見ながら彼が言ってた事を納得し自己紹介とナリアとノアを紹介した。

俺の話を聞いたユートは、俺の話を了承。

そして、ナリアとノアに自分の事を名前で呼ぶよう声をかけその声に対しナリアとノアは、スバル達の受付をしながら声をあげそれに答える。

そのやり取りをみていたスバルが受付を終えたその足で今のやり取りについて、俺に聞いて来た。

「その理由は、この招待パスだ。これは、申し込みをした後に送られてきた演奏の様子を映したものの審査と同時にその演奏をしている人間の身辺調査も同時に行われてるのさ。つまりこれを持つって事は、身辺調査と演奏審査のその両方に通らないともらえないって事さ。それにこのカードには、持ってる人間の住所なんかも端末から確認出来るってて訳だ。ほらっ、よく見てみろ。ユートがパラレルワールドの人間だって書いてあるだろ?」

「本当だ〜」

「でも、なんで身辺調査まで?俺、今回のことについてあまり聞かされてはいないんだけど…」

スバルの問いかけに対し、俺はユートが持っていたカードをスバルに見せながらその事について説明した。

俺の説明に対しスバルは、納得の声をあげその一方でユートがなぜ身辺調査が必要なのかと聞いて来た。

「そいつはな、ユートがでるその晩餐会って言うのがこの世界の経済、財界の人間達が出席して行われるもんなんだ。そして、この晩餐会で演奏してそして、それが認められればこの世界でＣＤデビューなんかも出きるかもしれねぇしその演奏家に混じってテロや事件を起そうとする連中が入り込むかもしれないからな。それで、身辺調査をやっているのさ。それもかなり厳しくな。それに審査も厳しくって、毎年それに出られるのは、数千人が申し込んでその中のたったの数名のみ。ちなみに今のユートについては、ユートの世界の八神部隊長とフェイト隊長なんかがその身元保証人としてなっているみたいだな」

「げぇ！！そ…そんな所で俺、演奏するのか？だから、フェイトとティアナのヤツ…。あんなに俺に行けって行ってたのか…」

俺は、自分のポケットから端末を取り出しそのカードに登録されている内容を確認しながら身辺調査の必要性を説明。そして、彼の身元保証人としてユートの世界の八神部隊長とフェイト隊長の名を上げその身元が保証されている事を彼に告げた。

俺の説明を聞いたユートは、その話に納得しつつも演奏する晩餐会の事を聞き驚き…と言うか聞いてないと言った様子で声を上げる。

「まぁまぁ、とりあえず今は演奏する事だけの事を考えるこったな。ユートの世界のフェイト隊長だって、ただお前の演奏を色んな人に聞いてもらいたかっただけかもしれねぇし」

「そうそう。とりあえず今はその後の事については、考えないほうがいいわよ。私もあんたがどんな演奏をするのか聞いてみたいし」

「ありがとう。ユウ…それにランスターさん」

「ティアナでいいわよ。どうせ、向こうの私もそう呼んでるでしょ？スバルもそれでいいわよね？」

「うん！いいよ！」

「ああ…。わかったよ。それじゃ、俺はユートで…ティアナそれにスバル」

愕然とするユートを見た俺は、彼に対し気楽に演奏する事を告げその後にティアナも続いてくれた。

俺達の話を聞いたユートは、その事についてお礼をいいティアナの事をランスターと呼んだ。

それを聞いたティアナは、ユートに対し名前で呼ぶよう言いそしてそれをスバルにも確認した。

スバルは、ティアナの声に対し二つ返事でそれを了承。

そして、ユートは名前を言い直し自分の事も名前で呼ぶようスバル達を言い二人ともそれを了承していた。

「なぁ…スバル…。もしかして、ユートとあいつの世界にいるティアナって…」

「恐らく…」

ティアナとユートのやり取りと見ていたノアは、ユートと彼の世界

のティアナの関係についてスバルに耳打ちにして確認していた。

その声を聞いたスバルは、恐らくと言いながらそれを彼に聞えない
な小声で了承していた。

そして、俺達は受付を済ませたスバル達とユートを連れて姉貴が待
つ会場へと足を運んだ。

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　前編」（後書き）

作者
「如何でしたでしょうか？７０万ＨＩＴ記念小説！！アンケートの結果、コラボになりましたので今回はその投票をして下さったマグネス先生の「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～罪と罰と運命の堕天使」とジャン先生の「勇者指令ダグオンＡ' ｓ」とのダブルコラボを「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　前編」」としてお送りいたしました！！」

ノア
「それにしてもよ…。いいのか？あんなにユートイジッて？」

作者
「その辺については、マグネス先生にちゃんと許可を得てやってますので問題はないかと思います」

ノア
「なるほどな…。口調についてはどうしたんだ？」

作者
「それについては、ユートについては、初対面なんで丁寧口調にユウと打ち解けた所で丁寧な会話を崩していき楓の場合は、ユートとは丁寧な口調でスバル会話ではお互い同年代って事がジャン先生との感想のやり取りや前回のコラボなんかで知ってますから普通にしてみました。ちなみに普通の口調は、楓さんが主人公「勇者指令ダグオンＡ' ｓ　風の詩」での口調を参考にしました」

ノア
「出番関係は？」

作者
「出番については、今回の話は元々ジャン先生との感想のやり取りで思いついたものなんでそこにユートが来たって言うような感じにしてます。それと各作品事に来てもらっている人数が違いますので一人一人の出番となればユートの方が多いとは思いすが作品ごとだと同じくらいではないか？思っています。ですが、力達については前回にもやっていますのでユートが話の中心にしてあります。ちなみにこちらでの時間軸は、ＪＳ事件終了後となっております」

ノア
「へぇ～…。なら、イジルのはユートだけになるのか？」

作者
「元々ユートの方はシリアスの話になってましたので、ギャグパートでの扱いが難しいんですよね。とりあえず、ティアナいじりはこれからもやっていきますが…。ですが、もちろんそれだけではなく今回は力にもそれは用意してますしユウについてもやっていくつもりです。ですが、主力はユートになりますけどね（笑）」

ノア
「やっぱり…（笑）なら、あたいも参加しよ～っと！！んで、次回は？」

作者
「ミツキ達との合流ですね。それと入れ替わった八神組のはやてさんのその後についても書いていき予定としては3話くらいを予定しております」

ノア
「３話で終わっかな～？まっ、いいや！！それじゃ、次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　中編」！！」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オーーーーーーフ！！」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　中編」（前書き）

クラナガン市内へと向う一般道　車の車内

アルト視点

「何！！当日パスなんてあるんか？」

「ええ、一般的にはあんまり知られてはいませんけど」

「僕は、知りませんでした」

「私も…」

私が運転する車の車内では、その車の助手席に座る八神組の組長である八神はやてさんが当日パスの存在を知り驚きの声を上げてた。

その声を聞いた私は、その事自体一般的には知られていない旨を言い後部座席に座っているエリオとキャロが自分達も知らない旨を言っていた。

「なら…楓がその当日パスっちゅうのを手に入れたらアカンっちゅう事やな…」

「それにしても、組長さんはどのイベントに参加するつもりなんですか？」

「賞金が出るイベントに出るとは聞いてますが…」

私の話を聞いた組長さんは、腕組みをしながら楓さんの名を上げ彼女が当日パスを手に入れると不味い事になると言い出していた。

その彼女の声を聞いたエリオとキャロは、組長さんがいったいどんな賞金のかかったイベントに参加するのか聞いていた。

でも、いったいなんでこんな状況になっているかといえば…。

ウチの八神部隊長と私の横にいる組長さんが入れ替わった後、部隊長の部屋を出た彼女に私が捕まりイベントの会場まで連れてってほしいと言われエリオとキャロもイベントを一緒に見て回るとの事で私も先輩達の手伝いをしに行く予定があったんでユウから借りた車に乗せてクラナガン中心部へと向ってるって訳。

ちなみに、なんで力君達の世界の部隊長を組長さんと呼んでいるかといえばウチの部隊長と組長さんは同じ顔してるからね…。

例え住む世界は違うと言えど、こっちじゃ私達の上司になるから普通にはやてさんとも呼びずらいのでこう呼ぶ事にした。

「ん？ウチか？ウチはこれに参加するんや。この「フードファイターＶＳ料理人！！ガチンコバトル！！」ちゅうのにな」

「それって…どんなイベントなんですか？」

「名前の通りだよ。つまり料理人達が大食いの人達に食べ物を食べさせてその人達がおなか一杯で倒れるか料理人の人達が倒れるか…。そのどちらか一人になるまでそれが続くイベントだよ」

「それで、その最後の一人になった人には賞金１００万が出るっちゅう事でウチは料理人としてでるつもりや」

「それで…食べる側として出そうな楓さんには、出てほしくないって訳ですか…」

エリオとキャロの質問に対し組長さんは、持っていたそのイベントのチラシをみながら参加するイベントの名前を言う。

それを聞いたエリオとキャロは、それがどんなイベントなのかと聞きその説明を私がした。

私の説明が終わった後、組長さんは自分が料理人側としてでる旨を言いそれを聞いた私がなぜ楓さんが出てくると不味いのかと言うその意味がわかりそれを苦笑いしながら声に出した。

「それだけやない！！こっちの世界のスバルにギンガ、それにエリオも出てこられたら困んねん。まぁ…もしみんな出てきてもミツキと潰しあいでもしてもらって…。フフフのフ～」

「あっ！！それ、無理ですよ。だって先輩とスバルとギンガさんってもう既に何回も優勝とかしてて殿堂入りになってて参加する事自体出来ないんですよ」

「なんやとーーーーーーーー！！」

私の話を聞いた後、組長さんは楓さんだけでなくエリオにスバルにギンガさんの名を上げその人達には出てほしくないと言い出した。

そして、もし出てきても先輩に全て片付けてもらって共倒れをして

もらうとなんだか怪しい作戦と不適な笑みをしていた。
組長さんの話を聞いた私は、その怪しい作戦が無理である事を告げその理由について話をした。
それを聞いた組長さんは、再び車内で大声を出し驚いていた。
「で…殿堂入りですか…」
「あの食欲なら、そうなりますよね…。それにしてもなんで参加していたんですか?スバルさん達?」
「ユウの話だと…食費を浮かせるためだったみたいだよ?元々、スバルのお母さんも食べる人みたいだったらしくてそれにスバルとギンガも入るでしょ?一食にかかる食費もかなりかかってたみたいで、それを浮かせるためにスバルとギンガをつれて参加してたみたい。そして、その後先輩も出るようになってスバル達がお腹が一杯になったら先輩が作るのを辞めたりとかその逆の事をしてみたりとかして優勝をしまくってて…。それで、スバルのお母さんが亡くなった後も3人で交互に優勝してそれが認められて…。と言うより、それ以外の人達が優勝出来ないって事で殿堂入りになったみたいだよ」
「まぁ…そうなるわな…。なら!なおさら楓の参加だけは絶対阻止せなアカン!!それとエリオも出んといてや!」
私の話を聞いたエリオは、その話に唖然とした様子で声を上げキャロもまたスバル達の食事風景を思い出しながら唖然とした声を出しその後なぜそうなったのかと聞いて来た。
その質問に対し、私はユウから聞いた話としてその理由を説明。

私の話を聞いた組長さんは、呆れた声を出しつつも改めて楓さんの参加阻止をすると言いそしてエリオにも参加しないよう声を上げていた。

「だ…大丈夫ですよ。僕は、その時間フェイトさんと食事をする約束になってますから…」

「それならええわ…。なら、後は楓がどこでその当日パスをゲットするかやな…。なぁ、アルト？あんたどこで取れるかわかるか？」

組長さんの話を聞いたエリオは、その勢いに恐れおののきながら参加できない事をつげその答えに組長さんは納得。

今度は、私に当日パスを手に入れられるのはどこか聞いて来た。

「それなら、この時間なら先輩の所ですよ。そこしかこの時間に受付してませんし。それに今そこに向っている所ですし、エリオとキャロもその辺で下ろせばいいんだよね？」

「はい！！シャーリーさんに作ってもらった予定表にもその辺って書いてありましたから」

「また作ったんだ…。シャーリーさん…」

組長からの質問に対し私は、すぐさまそれに答えすでにそこに向っている旨を伝える。

そして、エリオとキャロにその辺で下ろせばいいのか？と確認。

私の質問にキャロがシャーリーさんが作成した今日の行動予定表にはそう書いてある事を言いそれを聞いた私は、また作ったのかと呆れた声をあげていた。

そして、私達は共通の目的地になった先輩達がいるクラナガン中央ホールへと向って車を走らせた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　中編」…始まります」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　中編」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　中編」

クラナガン中央ホール敷地内

「技術博ｉｎクラナガン」の会場

陸士１０８部隊技術開発室の特設ブース

ミツキ視点

「こら～！！力君！！ちゃんと働きな～い！！」

「へ～い…って痛つつ…。なぁ！ギンガさん！俺って怪我人なんだからもうちょっと優しくしてよ…」

「飛鳥さんは、力君は不死身だから大丈夫って言ってたわよ～！！」

「飛鳥…。てめぇ…」

「だって、そうだろ?ほらほら、サボってないで働いた働いた!!」

私がいるテントの前では、メガホンを持ったギンガが資材運びをサボっている力君に対しそのメガホンを使って声をあげてサボらないようにと声を上げていた。

その声を聞いた力君は、自分の頭と腕などに巻かれた包帯を見せながら自分は怪我人なんだからとアピールする。

だが、飛鳥さんが事前にギンガに彼は不死身だから問題ないといっていたらしくその事を声に出して言っていた。

ギンガの声を聞いた力君は、彼の横で資材を運ぶ飛鳥さんを睨みながら声を上げそれを見た飛鳥さんはあっけらかんとしながらそれに答えていた。

「それにしても…力君…なんで、包帯なんか巻いてるんだろ?」

「それについては、力さんも飛鳥さんも教えてくれないんですよね〜」

「ヴィヴィオも知らな〜い」

テントの中では、ギンガ達のやり取りを見ていた私がノートパソコンを開いて展示する機材のプログラムのチェックをしながら力君が包帯をしているのに疑問の声をあげた。

私の声を聞いたミオちゃんは、ヴィヴィオと一緒に会場内で配布予定のパンフレットの整理をしながらその理由について力君も一緒にいる飛鳥さんも教えてはくれないと言いヴィヴィオも知らないと声

をあげた。

なぜ、力君達とヴィヴィオがここに入るかと言えば…。

まず、ヴィヴィオは昨日から高町さんとハラオウン執務官があれこれイベントにゲストとして呼ばれているため忙しくヴィヴィオと一緒に入れないって事でウチに昨日から泊まりに来てて今日はここにも私と一緒に来てるって訳。

そして、力君達はと言えばなんでもウチのはやてと力君達の世界のはやてが私と楓さんで共同開発した機械を使って入れ替わったらしくそれを伝える連絡が私の元に入ってそんでもって力君達もそのはやてを追ってこっちに来たんだよね。

でも、コッチに来た彼らは自分達の世界のはやての捜索そっちのけでここで発行される当日パスをゲットして色んなイベントに参加して賞金をゲットしようとここの会場設営の手伝いを始めた。

それで良いのか聞いて見たら力君曰く…。

「どのみち、はやてもイベントの賞金目当てでこっちに来てるだろうからどっかの会場で鉢合わせでもするだろうよ」

との事。

ちなみに、その連絡を当初受けたのがヴィヴィオでその後私が変わったんだけど…。

そのヴィヴィオによると通信画面の向こうから、

「ウチ…もうお嫁に行けへん」

とのこっちのはやてらしき声とその泣き声が聞えていたとか。

それと私に通信をしてきたのは、こっちのはやてではなく飛鳥さんでこっちのはやては一度も顔を出す事はなかったけどその通信画面の端っこに映っていた人が入っているように膨らんだ布団の陰から狸の尻尾が見えてたような見えていなかったような…。

「ミツ姉～!!ギン姉～!!」

「あっ!!お爺ちゃん!!それに飛鳥さん!!」

「スバル!!それにティアナ!!」

「楓じゃねぇか!?」

「やっぱりここに来たね」

私達がなんだかんだ話をしながら作業を進めていた所、私とギンガを呼ぶスバルの声が聞えてきた。

その声を聞いたギンガは、その声がした方向を見た所スバルとティアナ達の姿が見えその声に答える。

スバルの声の後、その後にいた楓さんが力君達の姿を見て驚きの声をあげそれを聞いた二人は力君、飛鳥さんの順で声をあげていた。

「これで、全員?」

「ああ…。これで終わりだぜ」

「それじゃ、ミオちゃん。それぞれに担当を割り振ってもらってもいいかしら？」

「わかりました」

「あっ！そうだ！ミオ！彼は、今夜の晩餐会の参加者で…」

スバル達が私がいる所まで来た所で私は、ノアにこれで全員かと確認した。

すると、ノアは、そうである事を言いそれを聞いた私はミオちゃんにそれぞれの担当を振り分けるよう指示をだしその支持にミオちゃんが了承。

私とミオちゃんのやり取りを見ていたティアは、ミオちゃんに対し一緒に来た男性を指差しながらその彼が晩餐会の参加者である事を言いその名前をつげようとしたところミオちゃんがそのティアの声を征した。

「あなたは、確か…ユート・ランスロー様ですね」

「あ…はい、そうですが…あたなは？」

「こいつは、陸士１０８部隊技術開発室情報部所属のミオ・メイファ三等陸士っつってな。こんなナリだがユートが今夜でる晩餐会を主催しているメイファグループの総帥の娘さんだ」

「このナリとは、いったいどういう意味ですか！？ユウお兄様！！」

ティアの話を征したミオちゃんは、彼の前に立ち彼の名前を言いその彼はそうである事をいいながら驚いていた。

その様子にユウがミオちゃんの頭をポンポンと叩きながらミオちゃんを紹介。

そのユウの紹介がミオちゃんにとっては、どうやら気に入らなかったらしくユウに向って声を荒げ文句を言っていた。

「まぁまぁ、ミオちゃんは晩餐会の審査にも関わっていてね?それであなたの事を知ってたって訳。へぇ〜…あなたが、あの音楽好きのダンさんが聞き惚れた演奏をしていたって言うユート・ランスローさんかぁ〜。あっ!私は、ミツキ・サエグサって言ってこのブースを出している陸士１０８部隊技術開発室の責任者でこの馬鹿の姉です。よろしくね♪」

「馬鹿とは、なんだよ!!馬鹿とは!!」

「仕方がありません…。ユウお兄様ですから…」

「「「うんうん…」」」

「てめぇ等…」

ユウに対し怒るミオちゃんを落着かせた私は、その彼に対しミオちゃんが彼の事を知っている訳を話そして自分の自己紹介をした。

それを聞いたユウは、自分の事を馬鹿と呼ばれた事に腹を立て私に文句を言うがそれを見たミオちゃんはユウだから仕方がないと言い

その声にスバルとティアナそれにギンガも頷きながら納得しその様子にユウは苛立ちを露わにしていた。

「そうなんですか、よろしくお願いします。俺の事はユートって呼んで下さい。それとミツキさんでいいですか?あなたが言ってたそのダンさんって言うのは…」

「それで構わないわよ?ユート君。それで、ダンさんって言うのは、ミオちゃんのお兄さんで晩餐会の責任者よ」

「今回、ユートさんにこちらにおいで頂いたのもあなたの演奏を聞いたダンお兄様が大変すばらしいとの事でぜひともその演奏を生で聞きたいとのことで…。それで、あなたの世界にダンお兄様自ら赴いてその旨を推薦者であるあなたの世界のハラオウン執務官にお話をしご招待したと言う訳です」

私の話を聞いたユート君は、自分の事名前で呼ぶよう言いそしてダンさんの事について渡しに聞いて来た。

その話を聞いた私は、ダンさんの事について説明し私の説明の後ミオちゃんが今回ユート君を呼ぶに至る経緯について説明した。

「ったく、相変わらずだな…?ダンのヤツは」

「ええ…。ダンお兄様は、昔っからお兄様が気に入られた演奏をする方には自分で出演交渉しちゃってましたから」

「そ…そんなに評価してもらえて光栄です…」

私とミオちゃんの話を聞いたノアは、やれやれといった様子をしな

がら声をあげそれを聞いたミオちゃんがダンさんがこうするのは昔からだ苦笑いしながらノアと話しをしていた。

そのやりとりを聞いていたユート君は、恐縮しながらそれを声にだしていた。

「それじゃ、ユート君は手伝いから外すとして…（ちょ～と！！待った～！！）」

「何？このちょっと待ったコールは？」

「古いよ…それ…」

ユート君とのやり取りを終えた私は、改めて役割分担の支持を出そうとした所それに待ったをかける声がした。

それを聞いた私は、その声に反応し声をあげ私の声を聞いたノアがそれが古いと突っ込みを入れていた。

「楓の参加はさせへんで！！」

「は…はやて！？」

「ほ～ら、来た…」

「はやてさん！！なんで私の参加がダメなんですか？」

私達が声をした方を見るとはやてが走りながらこっちに向ってきた。

その姿を見た力君が驚きの声をあげ、そして飛鳥さんがやっぱり来

たと言う態度でそれを声に出し楓さんと言えば自分が参加がダメと言うその訳を聞いていた。

「そ…それは！！なんでもや！！」

「そんな～！！」

「アルト…？どういう事？」

「ハァハァハァ…。えっと先輩、これにはカクカク云々という理由がありまして…」

楓さんの質問に対しその理由をハッキリとはいわずそれを聞いた楓さんは、その理由に涙目になりながら驚きの声をあげていた。

その一方で私は、後から来たアルトにその訳を聞きアルトは息を切らせながらその訳を話した。

「まぁまぁ、はやて。大方賞金目当てだろうけどちょっと強引じゃない過ぎやしないか？」

「そ…そんな訳ないやろ！？」

はやてと楓さんのやり取りを見ていた飛鳥さんが、そのやり取りの仲裁に入りはやての目的がイベントである賞金である事を言うがそれを認めないはやて。

「へぇ～。なら、このチラシなんだろうね～？何々…「フードファイターＶＳ料理人！！ガチンコバトル！！」あらっ？これって今回

やるイベントで一番高い賞金がでるヤツじゃない？」

「あっ！！それは！！」

「それっ！？私も出ようと思っていたイベントですよ！」

「なるほどね。そう言うわけか…」

はやて達のやり取りを見ていた私は、組長のはやてに近づき彼女の着ていた服のポケットからイベントのチラシを取り出しその中身を読みあげた。

私の声を聞いたはやては、驚きの声を上げ楓さんはそのイベントに自分も参加する旨を言ってきた。

そして、飛鳥さんと力君ははやてがなぜ楓さんをイベントに参加させないと言ったその訳がわかり飛鳥さんがその旨を声に出していた。

「ねぇ、ミツ姉！？なら、昔私達やってたアレ？教えてあげれば？」

「あれっていったい…」

「ああ…。昔私とスバルにギンガもこのイベントに出ててね？スバルとギンガが食べがる側で私が食べさせる側でね。それで、その時に上手い事お互いに同じ賞金をゲット出来る方法を私が考えてね」

私達がそんなやり取りをしていた所、スバルが私達が昔やってた方法を教えればといってきた。

それを聞いたティアナが、疑問の声をあげその声を聞いた私がその

事について説明した。

「それ!?教えて!!なぁ!!ミツキ!!」

「私も知りたい!!ぜひ、教えて下さい!!」

私の話を聞いたはやてと楓さんは、ぜひともそれが聞きたいと私によってきた。

「なら、楓さんのイベントへの参加はさせないってのはナシって事でいいんだな?はやて?なんせ、この方法は食べる側と食べさせる側その両方に仲間がいないと成立しないからな」

「わかった、それでええよ。んで、その方法は?」

「方法は、実に簡単!!あのイベントって優勝者にだけ賞金がでるだけじゃなくって毎年どちらかにチャンスタイムってのが何回か設けられていて全てのその賞金とれば優勝賞金と同額になるのよ。それで、それがなかった方が優勝してチャンスタイムが来た方がそれを全てとる。ちなみにユウがいった両方に仲間がいないと成立しないって言うのは、食べる側は作る物を自由に作れるから自分の仲間以外の人達がお腹一杯になるような料理を出してそのライバルを減らすの。その一方で食べる側は、自分の仲間以外の料理人の料理だけを食べてとにかく料理を作らせるのよ。でもまぁ、その方法も食べる人も沢山食べる人が必要だし作る側も沢山作れる人じゃないと成立しないんだけどね。私の予想としては、今回のチャンスタイムは食べる側だとおもうんだけどね」

私達のやり取りを見ていたユウが、はやてに対しそれを教える変わりに楓さんの参加を認めるよう言いそれを聞いたはやてはそれを了

承。

それを聞いた私は、その方法を彼女達に伝えた。

「なるほど、それならはやては楓の飯を作った事があるから大丈夫だし食べる側にも楓がいるしね」

「それに俺と飛鳥も食べる側で加われば、なんとかなるさ！！」

「そうやね！？力君！！それにミツキやスバル達は出られへんちゅうしほな、それで決まりや！！」

私の説明を聞いた飛鳥さんがその説明に納得の声をあげそれに力君も彼女に続く。

それを聞いたはやては、力君達の話に同意しそして私達が参加出来ない事をあげその作戦で行く事を決めた。

「それとは、別件なんだけど…。ねぇ？楓さん？こっちにあるドリル特急とかこっちで展示させたいんだけど手伝ってくれる？」

「もちろん！！後、私の趣味もいくつか展示してもいいですか？」

「いいわよ。でも、変な薬を飲み物に混ぜたり展示するロボットの性能を勝手にアップさせたりしないでね？（ギロッ！）。それと力君達にも色々と協力してほしいんだけど…いいかな？」

「え～！！そんな～！！（ギロリ！！）…は～い…。わかりました…」

はやて達との話を終えた私は、それとは別件と言い楓さんから以前買った彼女の趣味の一環を展示したいのでそれの手伝いをしてほしいと彼女に依頼。

楓さんの話を了承し余計な事はしないようにと彼女を睨み忠告をした。

それを聞いた楓さんは、そんな～！！と驚きの声を上げるが私が再度睨みつけるとそれをしない事を了承した。

そして、それ以外のものも展示したいと言い私はそれを了承しさらに力君達にも協力を依頼した。

「もしかして、俺達のロボットも展示しようって魂胆なのか？」

「それには、色々と手間がかかって時間が足りないからそれは無理なんだけどビラ配りとかヒーローショーとかしてこのイベントの盛り上げ役をしてほしいのよ。もちろん、バイト代は弾むわよ。これくらいでどう？」

「こんなに～！！いいよな？はやて？なぁ！？」

私の話を聞いた力君は、自分達のロボットも展示したいのか？と聞いて来たがそれには時間がかかるため無理である事と彼らに依頼したい内容をつげテントから電卓を取ってきてバイト代を彼らにしめした。

それを聞いた力君は、その金額を大喜びしそれをはやてに確認。

「我々をポチとお呼び下さい。ミツキ様！！」

「いや…。それはいいから…」

力君の声にはやては、その電卓の金額を見た途端私の前に跪きなんだか訳のわからない事を言っていた。

その様子に私は、呆れながら声を上げていた。

「それじゃ、改めて作業の分担をするとして…。あっ!?そうだ!!ユート君、受付してこなきゃ!!」

「えっ!?そうなんですか?でも、その場所が…」

「なら、ティアが案内すればいいじゃん!?」

「す…スバル!?あんた!!」

「そうだね。そう言えば、ユートさんにさっきの事をはぐらかされたままだったし!!」

「ええっ…!!それは…その…」

はやての態度を確認した私は、改めて作業の分担の事について言おうとしたがその前にユート君が晩餐会に参加するための受付を済ませないといけない事を言いそれを聞いたユート君は声をあげた。

それを聞いたスバルは、それをティアナがすればいいと言い出しその声にティアナが驚きの声をあげる。

スバルの後に楓さんが何かはぐらかされたと言い今度は、それを聞

いたユート君が驚きの声を上げた。

「何？そのはぐらかされたって？」

「えっとねぇ…。それは…ゴニョゴニョゴニョ…」

「へぇ～そうなんだぁ～」

「いったいなんなんですか？」

「えっとねぇ…。ゴニョゴニョ…」

楓さんの話に疑問を感じた私は、その事を声にあげそれを聞いたスバルが私に耳打ちをしそれを聞いた私は納得の声をあげた。

その私の声を聞いたアルトが、私に声をかけ私がアルトに耳打ち…。

と言った感じでまるで伝言ゲームのように何時の間にかこの場所にいる全員にその事が伝わり全員がニヤニヤしながらティアナとユート君の方をみていた。

そして…。

「それじゃ！！そう言う事で！！」

「ちょ…ちょっと！！ミツキさん！！」

「まぁ…なんだぁ…。これも予行演習だと思って頑張れ！！なっ！ユート」

「おい！！ユウ！！ちょっと待て！！なんだよ！それっ！？それに楓さん！！それにみんな～！！」

私の一声でみんな一斉にその場にユート君とティアナを残しそれぞれの作業へと移動しだした。

それを見たティアナが声をあげるがみんなは、それを無視。

そして、ユウがユート君の肩を叩きながらこっちのティアナを使って予行演習をしろと言いその場を後にした。

ユウの声を聞いたユート君は、驚きの声をあげユウに声をあげるがユウもそれを無視。

さらに楓さん達にも声をかけるがそれも無視されていた。

「さてと…念のために…」

「ノア…。その持ってるバックから取り出そうとしている物…そこまでは必要ないんじゃない？（ギロッ！！）」

「そうだね…。いくらデートかも知れないって事ではあるけど○ン○ームを渡す事はないだろう？これでも、私の世界であっちのティアナの面倒を私が見てるんでね？いくらジョークでもそこまでの事は、色んな意味で私も見逃せないね…。（ボキボキ）」

「まっ…待てよ…。そ…そんなに怒らんでもいいじゃないか…」

「問答無用！！」

「弁解の余地無し！！」

ドゴーーーーーーーーーン！！

「ぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

ユウ達のやり取りを見ていたノアが、自分が持って来ていたカバンからある物を見つけそれをティアに渡そうとしていた。

それに気づいた私は、ノアに声をかけ彼女を睨みつける。

私の後、飛鳥さんが私達の所にきて手をボキボキとならしながら私と同じようにそののあの行動をイラだった様子でそれを止める。

その様子を見たノアは、あくまでジョークと言いたじろぐが私と楓さんはそれを許さずノアとお話する事となった。

ちなみにノアの話の後の会話順は、私、楓さんの順ね。

そんなやり取りをしながら私達は、２人を残しその場を後にした。

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　中編」（後書き）

クラナガン中央ホール敷地内

「技術博ｉｎクラナガン」の会場

陸士１０８部隊技術開発室の特設ブース

ナリア視点

「どうやら、いったみたいですよ？あの２人？」

私達がティアナさんとユートさんを残し作業に戻って少しの時間がたって２人がユートさんの受付会場に向うのを私が遠めで確認しその旨を声にだした。

「それにしても…あれでよかったんでしょうか？」

「いいんじゃねぇか？それよりもあっちの方をそろそろとめねぇとな…」

私の声を聞いたミオさんがあれでよかったのかと疑問の声をあげそれを聞いたユウさんが現在ノアさんにお話真っ最中の姫と飛鳥さんの方を指差しながらあっちの方がやばいと声をあげた。

ちなみに、飛鳥さん以外の八神組の皆さんは姫が提示したバイト代

がよっぽどよかったらしく先ほどとは打って変わり物凄い勢いで会場を作り上げていった。

「あれは…私達じゃ、止められませんよ…。それにしてもヴィヴィオちゃん?それな〜に?」

「ん?知らない叔父ちゃんがユウちゃん達に渡してくれって」

「俺にか?ありがとな!ヴィヴィオ…。どれどれ…「次回予告をよろしく　作者」…あんにゃろ〜!!こっちに丸投げしてきやがった」

ユウさんが指を差した方向をみた私は、アレを止めるのは無理と言いそしてヴィヴィオちゃんが何か書かれたの紙を持ってきたのでそれを確認。

ヴィヴィオちゃんは、それがユウさん宛てだと言いそれを聞いたユウはお礼をいいながらその中身を見作者さんが次回予告をこっちに丸投げしてきた事を言ってきた。

ちなみに、ユウさんにお礼を言われたヴィヴィオちゃんは「えへへへ〜♪」っと嬉しさを露わにしていた。

「次回予告ですか…。ちょっと調べてみてみますので、少々お待ち下さい」

「ヴィヴィオもやる〜!!」

「だいたいは、想像がつくと思うんだが…」

ユウさんの話を聞いたミオさんは、自分の端末が置いてある机の前

に座りそれを捜査しながら調べだした。

その一方で、ヴィヴィオちゃんは自分もやりたいと声を上げユウさんは話の内容を想像出来たみたいでそれを声に出していた。

「お待たせいたしました。次回は、ユウさんとアルトさんが晩餐会で結婚式をあげると言う…」

「んな訳あるかーーーーーーーー!!第一、俺とアルトはまだ付き合ってもいねぇし!!」

「ええっ!!そんなお話なの…。あ…あの…ユウ…私はいいよ…そ…その…覚悟は…出来ているから…」

「お前は、何マジになってるんだよ!!アルト!!」

「ええ～!!違うんですか～!?私今、フェラルドさん達にもその事を話そうと…」

「ナリア!!何てめぇは、その話を強制的に成立させようとしてんだ!!そんな事すんじゃねぇ～ーーーーー!!」

「そうだよ!!ユウちゃんは、なのはママと結婚するんだから!!そして、姫ちゃん達と一緒に住むの～♪そしたらヴィヴィオ、姫ちゃん達といつでも遊べるし～♪」

「ヴィヴィオ…。おまえは、何自己中な発言をしてんだ…」

次回の話を調べ終えたミオさんがその事を言うとユウさんがその話をすぐにユウさんは、彼にはめずらしく全力で大声を出しながらそ

れを否定。

その一方、そこに現れたアルトさんはその話が聞えていたようで顔を真っ赤にしながらそれでも言い事をいいさらに私がその旨をフェラルドさん達に伝えようと通信画面を開こうとしてたのでそれが違うとわかり驚きの声をあげた。

アルトさんと私の声にユウさんは、さきほどのミオさんの時と同様全力でそれを突っ込んでいた。

ユウさんの突っ込みの後、ヴィヴィオちゃんもその話を否定しユウさんと高町隊長とが結婚すると言い出した。

それを聞いたユウさんは、その自己中心的な理由にあきれながら声をだしていた。

「申し訳ございません。これは、私達の世界のはやてお姉様の妄想小説でした。本当は、これなんですが…」

「え～っと…。話としては、この後の事になるんだね」

「晩餐会にここの会場の様子…。あと、ユート君とティアナの様子辺りをやるみたいですよ」

そのやり取りの後、ミオちゃんがその事が間違いである事を言いそれを詫びそして、改めて次回の内容を画面に表示した。

それを見たアルトさんが大雑把な内容を言いその後、私がそれをさらに細かくその内容を言った。

「よし！！次回の内容はそんくらいでいいだろう。それじゃ…締めをナリアとアルトそれにヴィヴィオ最後はお前だ！！」

「やったぁ～！！」

私達の話を聞いたユウさんは、内容はそのくらいにして〆のセリフを私とアルトさんそれとヴィヴィオちゃんである様いいその声を聞いたヴィヴィオちゃんは大喜びだった。

ナリア
「それでは…次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！！」

アルト
「祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　後編」！！」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オーーーーーーーーフ！！」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　後編」（前書き）

フラナガン中央ホール施設内

「フードファイターＶＳ料理人！！ガチンコバトル！！」

そのイベント会場

アルト視点

（ななんと！！これで南楓選手！！２００皿突破！！そして！！これを見て、料理人２０番の選手もダウン！！これは物凄い！！すご過ぎる！！）

「まだまだ余裕って感じだな」

「すっごい…僕より食べるんだ…楓さん…」

「なんか見ているだけでお腹一杯になりますね」

司会者の絶叫が会場中に響き渡る。

その様子を見たユウが楓さんの顔を見ながら唖然としながらそれを声にだしそれに続いてエリオ、そしてキャロがそれに続く。

私とユウ、そしてエリオとキャロの４人は、現在「フードファイターＶＳ料理人！！ガチンコバトル！！」に参加している八神組のみんなの応援にこの会場来ている。

イベントの参加者、食べる側２００人料理人も２００人計４００人が両サイドに分かれて料理人がとにかく料理を作りつづけ食べる側はそれをひたすら食べ最後まで残った一人が優勝とその賞金を手に入れるといったもの。

現在の状況としては、食べる側は力さん、楓さんそれになぜか楓さんに敵意剥き出しの北斗さん、大地君それにサイモンを含めたおよそ7人。

楓さん以外は、そろそろ限界といった様子。

それに対し料理人の方は、組長さんを含め6人で全員必死といった様子。

「司会者はん!!助っ人カード投入や!!」

（ここで!!組長選手!!ここまで温存していた助っ人カードでついに使った!!さて!!その助っ人は!!…あ…あれは!!）

私達が、八神組を応援しながら観戦していた所司会者に対し「助っ人カード」なるものの使用を宣言した。

ちなみに、組長さんがなんでこの名前でエントリーしているかと言えばそれはウチの部隊長と同じ名前、同じ顔なものだから下手に暴れられて次の日ウチの部隊長に迷惑がかからないためのもの。

尚、組長さんにはカツラとダテメガネをかけて参加してもらっている。

そして、「助っ人カード」とは…。

このカードは、チャンスタイムが今回は料理人にないため今回は、料理人のみ使用可能なカードであり、このカードを使う事で自分だけの助っ人に３０分間だけ自分に変わって料理を作ってもらえるカード。

ちなみに今回のチャンスカードは、スタート直後の抽選により食べる側と既に決まっておりそれが決まった時に料理人に配布１枚だけ配布され参加者の組長さん以外がこのカードを既にそのチャンスタイムで使ってしまっていた。

組長さんの宣言を聞いた司会者は、そのことをふまえそれを絶叫。

そして、組長さんが呼んだ助っ人を見た司会者は驚きの声をあげた。

「あ！！姉貴！！」

「嘘！！先輩！！」

（なな、なんと！！組長選手が呼んだ助っ人は！！既に殿堂入りを果してるミツキ・サエグサさんだぁ～！！）

その先輩の姿を見た私とユウは、驚きの声をあげ司会者さんも同じく驚いていた。

「お爺ちゃん！！大地！！北斗さん！！サイモン！！気合を入れて下さい！！ミツキさん本気です！！」

「お…おおっ…」

「「てめぇに言われるまでもねぇ!!んぐっ!!」」

(さぁ!!組長選手の助っ人として入ったミツキ選手!!いきなり物凄い勢いでチャーハンを作り始めたぞ〜!!)

先輩が組長さんハイタッチをした後彼女がいたブースに入り料理を作り始めた。

それを見た楓さんは、力さん達に声をかけそれに大使力さんは嘘だろと言う顔をしながら声をあげその一方で北斗さん達は怒り倍増といった様子でその声を返すがお腹が既に限界を超えてきてるらしく3人そろって戻しそうになっていた。

「ここでチャーハン…先輩…鬼だよね…」

「ある程度お腹が一杯になった所でお腹にたまるチャーハンなんて…本気で食べてる人達を一気に潰しにかかってきてませんかね?ユウさん?」

「それだけじゃねぇぜ?よく見てみろ、姉貴を見てその周りの料理人達もいっせいに速度をあげてるだろ?料理人は作った皿の数が勝敗を決めるからなぁ〜。ちなみに食べる側は、自分が食べた分の皿の数で決まるからな」

「それって…つまり…ここで食べる側の人達と料理人のその両方を一気につぶしにかかってきていると?」

「そう言う事。まぁ、あの姉貴とはやての考えそうなこった」

「「「2人とも悪魔…いや…邪神？」」」

会場の様子を見た私が唖然としながら声をあげその一方でエリオがユウに質問していた。

それを聞いたユウは、それについて答えそれを今度は聞いたキャロがユウに質問をした。

キャロの質問を聞いたユウは、キャロの話に納得しながらそれに答えそれを聞いた私、エリオ、キャロが声をそろえて同じ事をいった。

それから5分としないうちにユウが言った通り八神組以外の食べる側の選手と料理人が次々と倒れていくのであった…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　後編」…始まります」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　後編」

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　後編」

クラナガン中央ホール敷地内

「技術博ｉｎクラナガン」の会場

陸士１０８部隊技術開発室の特設ブース内の関係者用テント

スバル視点

「ひ～ふ～み～…。いや～！！こんなに簡単に優勝出来るとは…これもミツキのおかげや！！」

「何言ってるのよ。私は、ただ手伝っただけよ。はやてがあれだけ頑張ったから優勝できたんだよ」

「それにしても～！！ミツ姉！！ユン先生からあんまり無理しちゃダメだって言われてるのに！！もぉ～！！」

「そうだよ～！！それにお薬飲まないと～！！」

陸士１０８部隊のブースにある関係者用のテントには、私とミツ姉とヴィヴィオそれに目的のイベントで優勝した組長さんがここで休憩を取りながら談笑をしていた。

組長さんは、イベントで取った賞金の札束の枚数を数えながらミツ姉に感謝の言葉をかけそれを聞いたミツ姉はそうではない旨を言う。

それを聞いた私は、ユン先生から言われていた事をあげ調子が悪いのに助っ人として出たミツ姉に対し怒りヴィヴィオは私の後に続きつつミツ姉に薬を飲むように言った。

「それにしても、今回は大入りだね。これは、はやて達のおかげだね。ゴクゴク…にっがぁ～」

「それは、あんだけバイト代出すって言うたからや。あれみて力君達やる気満々やったからな」

「それにしてもダグオンってこっちでも人気なんだね～」

「ヴィヴィオも後で力君になのはママと一緒に写真取ってもらうんだぁ～」

会場の様子を見ながら薬を飲んでいたミツ姉は、大入りの状態を見て組長さん達のおかえだと薬を飲んだ感想をいいながら話をしそれを聞いた組長さんはそれはバイト代がよかったからだとミツ姉の話を返している。

その声に私は、ダグオンに返信した力さん達と写真を取るために並んだ大勢の人達を見ながらそれを声にだしその一方でヴィヴィオは、後でなのは隊長と一緒に力さんと写真をとるとそれをルンルン気分で話していた。

「なぁ…ミツキ?こっちのなのはちゃんって…力君襲わへん?」

「大丈夫よ…。それは、そっちの世界だけだから…」

ヴィヴィオの声を聞いた組長さんは、ミツ姉に対しなのは隊長が力さんを襲わないか聞きそれを聞いたミツ姉はそれはこっちではない旨を言う。

「ノア～!!お願いだからそのケーキちょ～だ～い♪」

「いやだよ!!これは、光太郎があたいに食べてくれって持って来てくれたケーキなんだ!!唯でさえ数が少ねぇのに…。それにお前はさっき沢山食ってきたばかりじゃねぇ～か!!」

「甘い物は、別腹っていうでしょ～♪」

「あれだけ食べてまだ食い足りへんのか?楓のヤツ?」

「５００皿以上食べてそれにチャンスタイムの４回のスペシャル特大料理を全部一人食べてその賞金をゲットしてあそ食欲…。すごいねぇ…楓さん…」

そんな話をしていた所ケーキの箱を持ったノアをノアが持っていたケーキがほしいと言いながら楓さんが追いかけていた。

楓さんの声を聞いたノアは、それを拒否。

そして、先ほどのイベントで食べまくっていたことをあげるが楓さんはそれは関係ないとノアの話を返す。

楓さんとノアのやり取りを見ていた組長さんは、呆れながらそれを

声にあげミツ姉もまたそのイベントで楓さんが一人で食べた量をあげながら話をしていた。

「あれ？そう言えば飛鳥さんは？」

「飛鳥は、お酒関係のイベントに出て優勝しまくった後、ビラ配りに行くって言ってここを出で行ったで？」

「へぇ～そうなんだ？でもビラ配りなら、北斗さん達がドリル特急で上空から撒いてるからもういいのに…」

ノア達の追いかけっこを見た後、私が飛鳥さんがここにいない事をあげそれを聞いた組長さんが彼女がここにもういない事をつげた。

その話を聞いたミツ姉が上空からビラを撒いているドリル特急を見ながら飛鳥さんが態々ビラ配りにいく必要はない事をあげていた。

もしかして…ティアとユートさんの事が気になったのかな？

クラナガン中央ホール　迎賓館

飛鳥視点

「ここが迎賓館か…」

私は、ミツキさん達がやっている会場からビラ配りをしながら晩餐会が行われる会場であるここ迎賓館を訪れた。

なんで、私がここに来たかと言えばなんでも受付を済ませたユートをティアナがその案内役をやる事になったってさっきミオちゃんから聞いてね。

その様子を見に来たって訳。

別にユートとどういう関係なのか？って言う事じゃないよ！！

あの子がちゃんとその役目を果しているのか、それを影からこっそり見てみたいだけさ。

ちなみに、この中に入るためには招待券が必要なんだけどミオちゃんにちょっと無理言って急遽それを用意してもらった。

というより、私が勝手に中に侵入しないためにミオちゃんがくれたと言った方がいいんだけね。

最初私は、それはいらないといったんだけどテロリストと間違えられたらたまんないとの事でそれで入ってくれって言ってさ。

まぁ…あの力とコンビと組んでいるせいかどうも私もトラブルメーカーだと思われてるみたいだね…。

私としては、八神組の中でもまともな方だと思ってはいるんだけどね。

そんな事を考えながら私は、その会場内へと足を踏み入れた。

あれっ？なんか…嫌な予感が…。

クラナガン中央ホール　迎賓館　晩餐会　会場内

ティアナ視点

「ティアナ！！危ない！！」

「えっ！？」

ドン！！

バキューーン！！

ユートの受付を終えた私とユートは、私が彼の案内役を任されたため彼と一緒に会場内を歩いていた。

すると突然彼の声が聞えその声に私が反応した所でかれに体を押されその床に倒れこんだ。

そして、そのすぐ後銃声が聞えその弾道が私の真上をすり抜け壁に当たっていた。

「あいつーーーー！！よくもティアナを！！」

「チッ！！外したっ！！ゲホッ！！」

ドサッ

「おい!!てめぇ!!グハッ!!」

ドサッ

私を押し倒したユートは、その銃を発砲した男をすぐに見つけそいつに対し飛びげりをしその男は彼の蹴りを食らってそのまま地面にあお向けに倒れた。

それに気づいた仲間の一人が銃を彼に向けるが彼は、それに気づくや否やその男を殴りつけその男も仰向けに倒れる。

「つ…強い…」

「てめぇ!!よくも仲間を!!いでぇ!!」

「は〜い…そこまでだよ。それとも私にこの腕…折られたい?」

「飛鳥さん?どうしてここに?」

ユートが彼らを倒す姿を見た私は、体を起こしならがその強さに圧倒した様子でそれを声にだし仲間が倒される様子を見たもう一人の男が怒号を彼に浴びせた所で後から現れた飛鳥さんに腕を後でに関節技を決められていた。

そして、飛鳥さんは、その男に対し声をあげその一言でその男は戦意を喪失しその場に崩れ落ちた。

その様子を見たユートが飛鳥さんに声をかけていた。

「いや～。ミオちゃんから晩餐会の招待券をもらってね。どんなもんなのか来て見た所、こんな所に出くわしたって訳。大丈夫かい？ティアナ？」

「ええ、ユートのおかげでなんとか。ありがとね。ユート」

「いやいや。それにしてもコイツ等は…」

ユートの質問に対し飛鳥さんは、それに答えつつ私に対し大丈夫か？と聞いて来た。

その質問に対し私は、ユートのおかげと彼にお礼をいいながらそれに答える。

私の話にユートは、テレながらそれに答えその男達がその場にいた警備員に連れて行かれるのを見ながら彼らが一体何者なのか？と聞いて来た。

「おそらく、管理局を好意的には思っていない連中だと思うわ。だって彼らが腕につけていた腕章って有名なテログループのもんだもだし。それに私が狙われたのも恐らく私がミツキさんの関係者だってわかっていたからね。彼らのターゲットにされていたから…ミツキさん…」

「やれやれ…。ミツキさんには、手が出せないからってその関係者のティアナをってかい…。まったく！！なんて連中だ！！」

「こう言った事は、何度もあるのか？ティアナ？」

私の話を聞いた飛鳥さんは、苛立ちを露わにしながら声をあげその一方でユートは私に心配そうな顔をしながら質問をして来た。

「昔っから何度かあったわよ。誘拐されかかった時もあるし…。でも、そのときはミツキさんやノアが助けてくれたけど…。いつか…私が執務官になったら絶対にあいつ等を捕まえてやるわ」

「なるほどな…。という事は、と言う事は六課が終わったらフェイトの補佐官になるのかい？」

ユートの質問に答えた私に対し彼は、納得しつつその後の事を聞いてきた。

「フェイト隊長からは…確かに補佐官にならないか？って誘われてはいるんだけど…私は…」

「そういや、ユートは知らなかったか。ミツキさんは、あのブースの責任者のほかに執務官と地上本部の少将それにこの世界にだけある独立部隊の司令官を兼務してるんだ。それにこっちのティアナの面倒を昔から見ててね。ティアナは、フェイトのと言うよりミツキさんの補佐官になりたいのさ。でも、カクカク云々の問題があってね？今、色々と調整している所なんだよ？」

ユートの質問に対し私は、フェイト隊長から誘われている事をあげつつもそれへの名言はさけた。

その様子を見ていた飛鳥さんが、ユートに私達のミツキさんの事を説明しそしてその辺の事情について説明をした。

「へぇ～。うまく行くといいね。ティアナ」

「うん、ありがとう」

飛鳥さんの話を聞いたユートは、その話に納得しつつそれが上手くいくよう笑顔で綿新話をして来た。

それを聞いた私も彼に笑顔で答えた。

「あっ!!いけない!!ユートそろそろ!!」

「わかった。それじゃ!!いって来る」

そんなやり取りをした後、私は時間を確認した所そろそろ彼が控え室に入らないといけない時間である事に気づきかれに声をかけた。

私の声を聞いたユートは、その旨を了承しながらその場を後にした。

そして、私と飛鳥さんは演奏が行われる会場へと入り彼の演奏を聞くことにした。

ユート視点

「ふぅ〜」

ティアナ達と別れてから少し時間がたった後、いよいよ俺の出番となった。

ステージに立ち会場の周りを見てみるとティアナに飛鳥さん、それにミツキさんや八神組のみんなやユウ達の姿が見えた。

その顔を見た後、深呼吸をして持ってきたバイオリンを構えた。

会場は、さすが迎賓館と言う名前がついているくらいな豪華な会場で少し上を見ると大きなシャンデリアをいくつもあり観客は、そこに用意された高そうな椅子に座りながらこちらが演奏するのを今や遅しと待っていた。

そして、その会場の奥にはイートスペースがあってそこにいたスバルとエリオが食べ物を口に一杯含めながらこちらを見ていた。

「クスッ。それじゃ…そろそろ…」

スバル達の様子を見た俺は、クスリと笑みを浮かべた。

そして、最後にティアナの顔をもう一度見た上で演奏を開始した。

弾いた曲は、会場に合わせてクラッシック系の落着いた曲をセレクトして3曲ほど弾いた。

なんせ、会場の空気が今まで引いてた所と違ってとても格調が高いという感じだったからな。

最初の内は、その会場の空気に飲まれそうになったけどその時ちょうどティアナの顔を目に入りそれを見たらなんだか落着けた。

違う世界のティアナか…。

俺は、そんな事を考えつつも自分の世界にいるティアナのことを考えながら…。この曲が彼女に届くようにと…そんな想いを込めながら最後の曲を引きそして俺の演奏が終わった。

シーーーン…。

演奏が終わった所、急にその会場が静まり返った。

やっぱり…場違い…だった…よ…えっ？

パチパチパチパチパチパチ…ドワーーーーーー！！

「ブラボー！！」

「ブラボー！！」

「ピュー！！ピュー！！」

それから少したった所で少しずつ拍手が鳴り出しそれが会場全体に広がり気がついたらその会場にいた全員がスタンディングオベーションをしていた。

物凄い拍手とそこから聞えてくるブラボー等の歓喜の声と口笛の音。

俺は、どうしたらいいのか戸惑いながらもそれを受けた。

そして、その後その声がアンコールの声に変わりそれを聞いた俺は、会場の関係者にどうすればいいのか念話で確認を取り2曲をアンコ

ールとして弾いてくれと言われ急遽2曲をアンコールとして弾いた。
その2曲を弾き終えた後も再び20分のスタンディングオベーションを受けそして、ようやく俺は演奏を終える事が出来た。
でも、緊張はしたけど…弾いてて楽しかった…。
そんな感想を思いならが控え室へと戻っていきそして、その後ユウから会場設営の打ち上げがあるから来ないか?と言われ案内役のティアナと一緒にその打ち上げ会場へと向う事にした。

クラナガン中央ホール付近　打ち上げ会場

ユウ視点

「今日は皆さんお疲れ様でした。撤去の時もぜひ手伝って下さいね!それじゃ、カンパーイ!!」

「「「「「カンパーイ!!」」」」」

カシャン!!

姉貴の乾杯の音頭の後、その場にいた全員がそれぞれにグラスを重ねる。

今回のこの打ち上げは、会場設営を手伝ってくれた連中にお疲れ様と撤去の時もよろしくと言う意味を込めていくつかのブースを出した連中と合同で行われているもの。

でも、そのブースを出した連中って言うのがファントムの連中でそのほとんどが俺に取っては顔見知りって感じでこの関連でこれのスポンサーにはメイファ財団がついている。

会場は、大きな倉庫の中で行われていてその中に色んな店がフードコートみたいな感じでそれぞれその日限りの店を出し食事や酒を無料で提供している。

なんで、無料かと言えばスポンサー様がその辺全ての面倒一挙を見てくれたって訳。

毎年これが楽しみで毎回手伝いに来てる連中までいるくらいだ。

ちなみに俺とアルト、ゲンヤの爺にギンガは、この連中と考えは同じで手伝っていてスバル達六課の連中やユートに八神組の連中はこれに初参加って訳だ。

本来ユートは、手伝ってはいないんだがせっかく今日知り合ったんだからな。

姉貴に頼んで参加ＯＫにしてもらったんだ。

「打ち上げでこの規模ってすごいよね。でも、お酒はダメだからね♪ユウ君」

「げぇ…、マジですか?なのは隊長?…ちょっとだけ…（お話…す

る？）イッ！！イエ…ナンデモ…。でもまぁ、こんなになるのもいくつかのブースが合同が共同でやってますからね。手伝ってる人数も多いですからこんな規模になっちゃいますよ。ハハハッ…はぁ…（がくッ）」

俺とアルトたちが陣取る席の近くにいたなのは隊長が会場の規模の大きさに驚きながら俺に話し掛けてくる。

そして、俺が飲もうとしていたビールを取り上げ未成年だから飲酒はダメと注意してきた。

なのは隊長の声に対し俺は、ちょっとだけ？と聞いてみたがその声を聞いた途端黒化しセットアップをしようとするするなのは隊長を見てその意見をすぐに却下。

その後、なのは隊長の問いかけ答えた後俺は隊長にバレないようにこんな事なら呼ばなきゃ良かったとガックリと肩を落としため息をしていた。

「どうしたの？あんた？そんなにがっかりして？それはそれとしてねぇ、ユウ？あんたユートがどこ言ったのか知らない？」

「なんだティアナか…。なんでもねぇよ。ん？ユート？はは～ん…さては、お前…ユートのヤツの事さてはまんざらでもなかったって…（ドーン！！）グベェボッ！！」

酒が飲めない事で落ち込んでいた俺に声をかけてきたのはティアナだった。

彼女は、あたりをキョロキョロと見渡しながら俺にユートの事を聞

いて来た。

それを聞いた俺は、ついにティアナのヤツに春でもきたかと思いながらそれを声に出した所ヤツにハンマーで殴られそのまま地面にたたきつけられた。

「んな訳ないでしょうが！！私は！！ユートの護衛件案内役だから聞いてるのよ！！まったく！！」

「まさか…ハンマーでくるとは…いったいどこから…」

「あっ！？それ私がさっきティアナに貸したんだよ。そう言えばさっきオーリス三佐がユートと先輩をどっかに連れて行ったの見たわよ？」

ハンマーで俺を殴りつけたティアナは、そのハンマーの下敷きになる俺を見下ろすような格好そうではない旨を俺に言ってきた。

それを聞いた俺は、そんな事よりもこのハンマーがいったいどこで出て来たのか？と言うほうが気になりそれを声にだした。

俺の声に聞いたアルトが俺の問いかけに答えそして、ティアナの質問にも答えていた。

「オーリス三佐が？一体どこへ…」

「さぁ？んでもあの人の事だから、変な事には姉貴やユートを誘う事はねぇだろうが…」

「あっ！！あそこ！！」

「あそこって…嘘！！」

「おいおい…ユートに爺にヴァイスに姉貴…それにオーリス三佐にフェラルドっていったいステージに上がってなにやらかす気だ？連中？」

アルトの話を聞いたティアナがその話に疑問の声をあげそれを聞いたハンマーの下敷きから脱出した俺が、変な事には巻き込まないだろうとティアナとそんな話をしていた所アルトがこの会場にあるステージを方を指差しながら叫びだした。

その声を聞いたティアナが彼女が指を指した方を見て驚きの声を上げた。

俺もまたその方を見てみた所、なんとステージ上には何時の間にかそこにはドラムセットと楽器類がまるでこれから何かライブでもやるんじゃないのか？って言う風にセッティングされていた。

そして、そのステージの裾からヴァイスにオーリス三佐、フェラルドにナカジマの爺に姉貴…最後にユートの順番で登場しセッティングされた楽器をとり準備を始めた。

そんな様子を見た俺は、疑問の声をあげる。

ちなみにドラムがヴァイスでウッドベースが爺、ピアノがオーリス三佐でキーボードが姉貴そんでもってギターがフェラルドでバイオリンがユートって感じだな。

カンカンカンカン！！

俺達がそんな疑問を抱いていた所、準備を終えたヴァイスがドラムのスティックを使ってカウントを取り出しそして何の前触れもなく連中により演奏が始った。

オオッ～！！

曲は、アップテンポの曲でどっかで聞き覚えがあると思っていたら地球でやってるテレビのテーマソングだった。

確か…情熱なんとか言うドキュメンタリー番組だったな。あれって。

こっちでも似たような番組をやっていて同じ曲をテーマソングとして使っていたため、会場にいる連中全員が聞き覚えがあるといった感じで声を上げそしてその音楽にノリノリになっていた。

そういや、前に一度その番組でなのは隊長達を取材に来ていて今度八神組を追いかけたいとかなんとか言ってたような…。

ワッーーーーーー！！

一曲目がちょうど終わった所で会場にいた連中全員が拍手喝采で大盛り上がりを見せた。

拍手喝采が終わった所でそのまま2曲目へと進んで行った。

曲が進んでいくにつれて会場中がユートが奏でるやさしくそして時には荒々しい演奏に酔いしれ、姉貴やフェラルド達のテクニックに歓声をあげていた。

そして、そのライブはそれから４，５曲程演奏した後大歓声の中その幕を閉じた。

そのライブ終了後…。

打ち上げ会場の一角　とあるＢａｒスペース

ノア視点

カランカラン。

「へぇ～この会場にこんなＢａｒがあったなんてね。それに…」

「おっ！ゲンヤのおっちゃんにオーリスじゃねぇか？ライブお疲れだったな」

あたいと飛鳥がこのＢａｒスペースに足を運んでその仕切られた部屋の中に入った。

その仕切られた部屋の中に入った飛鳥は、外とは違う静かな雰囲気に驚きを露わにしその一方であたいは先客でいたゲンヤのおっちゃんとオーリスの姿を見つけ声をかけた。

「お～！！ノアに飛鳥じゃねぇか！？いや～オーリスに誘われてな。まぁ…昔取った杵柄ってヤツだ」

「晩餐会でのユート君の演奏を聞いてね。なんか昔やってた腕がうずいちゃって…。それでナカジマ三佐達とユート君を誘って急遽あれをやったって訳よ」

あたいが声をかけた所、ゲンヤのおっちゃんオーリスの順であたいの声に答えそしてオーリスがライブを始めた理由を告げた。

「それにしてもヴァイスとフェラルドは、ともかくとしてよくミツキがやったもんだよな～。あいつライブには恥ずかしがって出ねぇのによ」

「そりゃ、最初の内はそうだったわよ。だから、最後には無理やりステージに連れて行ったわよ。ステージ立たせてしまえば逃げ場はないからね」

「だろうな。アハハハハッ！！」

オッちゃん達の話を聞いたあたいは、あのミツキがよくステージ立ったもんだとその理由をオーリスに聞いてみた。

すると、オーリスはどうやらミツキを無理やり引きずり出したらしくそれを聞きあたいは声を上げ笑いながら飛鳥と共にオッちゃん達の横の席についた。

「どうぞ」

「あっ、どうも。へぇ～いいグラス使ってますね～。それに中に入っている氷も。（ゴクゴク）美味しい。これ…○崎ですよね？でも…私が贅沢する時に飲むものとは少し違うような…」

「ほぉ～。よくお気づきで。グラスは、いいものを使ってますしこの氷は、地球の南極という所の氷です。それにこの○崎は、先ほどの氷と同じ地球製で今お出ししたのはその製造工場でのみ限定販売されているものだそうです。ちなみにこのウイスキーも氷も、あちらにいるナカジマ三佐からの差し入れです」

「なっ！！南極の氷ってに工場のみの限定○崎！いいんですか？こんな高いもの？」

あたいとオーリスがそんな話をしていたその一方では、飛鳥がここのマスターであるダンにウイスキーのロックを注文しその注文しその味を確かめそして飲んだグラスを揺らしその事でグラスの中の氷の音がグラスに当たる音を楽しみながらダンに色々と話し掛けていた。

それを聞いたダンは、飛鳥のその知識の豊富な事を誉めつつウイスキーなどの事について説明。

そして、それがおっちゃんからの差し入れである事をつげた。

ダンの説明を聞いた飛鳥は、その話に驚きの声をあげた。

「いいって事よ。ノアからおめぇさんがその辺に詳しいって事を教えてもらっていたからな。それにこのウイスキーは元々ミツキからのお土産でな。値段は、普通の所で売っている物とあまり変わらん

らしい。んでもってこの氷は、ダンが買った物を去年少し分けてもらったもんだ。さすがの俺でもこんな高い物手が出せねぇからな」

「さすが、メイファグループの次期後継者!!太っ腹だなそれに店もいい雰囲気だしな」

「いえいえ。ナカジマ三佐には、色々とよく教えてもらってますのであれはそのお礼です。それにこのスペースは俗に言う金持ちの道楽程度の物でですから出せるのもウイスキーとその他アルコール類それとジュースくらいなものです。ですが、雰囲気を大切したかったのでミツキさんにお願いしてここだけ仕切りを立てて外の雑音を消すようにしただけですよ。」

飛鳥の声におっちゃんは、遠慮するなと言う態度でダンの説明に補足を付加える。

その話を聞いたあたいが、ダンに対し話し掛けた。

あたいの話を聞いたダンは、微笑みながらそれに答えなぜこの店だけ仮設の建物を用意してその中にこの店を作ったのかその理由について説明した。

「へぇ〜。でも、カクテルに使う酒や道具もいいものがあるじゃないですか?」

「あれは、カクテルができる方がその腕を存分に揮えるようにように用意したものですので私は出来ないんですよ」

「そうですか。なら、このウイスキーのお礼に私がやってもいいですか?」

「どうぞ。あちらから入れますので」

飛鳥は、店内を見回しカクテル出使う道具類を見つけてダンに質問をした。

それを聞いたダンは、それについて答えダンの話を聞いた飛鳥は、ダンに自分がそれをしてもいいかと確認を取りその許可を取り付けた所でカウンターの中に入りその準備を始めた。

カシャカシャカシャ

「ほぉ～。中々の腕じゃねぇか？」

「ありがとうございます。これでも向こうでＢａｒをやってますんで。どうぞ、皆さんには飛鳥スペシャルです。そしてノアには、フェニックス」

「（ゴクゴク）美味しいわこれ」

「ああ。上手い！！」

「ありがとうございます。まだまだありますからね」

カクテルを作り出した飛鳥の姿を見たオッちゃんは、感心するような声を上げそれを聞いた飛鳥がそれにお礼をいいつつも人数分のカクテルをつくりみんなの前に出した。

そのカクテルを飲んだオーリスとおっちゃんの順でその感想をのべそれを聞いた飛鳥は、なんだかホッとした様子で自分の席に置いて

あったウイスキーを飲みながら次の注文を催促していた。

打ち上げ会場内　イートインスペース

ミツキ視点

「ああ…。うん…明日帰るから…。それじゃ、お休み」

プツン。

「あれっ？どうしたの？ユート君そんな所で？もしかしてぇ～向こうのティアナと通信でもしてたぁ～？やっぱり！！付き合ってるんでしょ！？」

「（ドキッ！！）あっ、ミツキさん！！いやっ！！これは…その～…」

私が空いたお皿を下げに会場の奥へと戻っていた時、その会場の隅っこでユート君が誰かと通信をしそれがちょうど終えていた所だった。

それを見つけた私は、その通信からもれて聞えた声とユート君のそのときの顔から向こうのティアナと付き合っているのかと彼に聞いてみた。

私からの質問をいきなり受けたユート君は、顔を赤らめそしてシドロモドロになりながら受け答えをしていた。

「そんなにならなくてもいいわよ。ちょっと、聞いてみただけだしそれで弄ったりはしないわよ」

「そうですか？でも、ああ言うのを目の当りにしたら…」

「あ～あれねぇ～…」

ユート君の態度を見た私は、その事で弄ったりしない事も言うがユート君は私の話を目の前でやっているある光景を見ながらあまり納得出来ないっと言った声をあげその光景の方を見た私もそれに納得の声をあげた。

んで、何をやってるかと言えば…。

「あれっ？ユウとアルトの結婚式は？」

「ティアナてめぇ…何訳のわからん事言ってるんだ？んな事やる訳ねぇだろ！！」

「え～！！せっかく式も友達に頼んで予約しようとどれにしようかアルトと選んでいたのに～！！」

「やらないの？…私はやっても良いけど…」

「スバル！！てめぇは、何話を進めようとしてるんだ！！それにア

ルト！！だからマジになるなっつ～の！！」

「それじゃ、これにサインを…」

「ああ…って！！ヴァイス！！これ婚姻届じゃねぇか！？てめぇ何逃げ道無くすような事してんだ！！」

私とユート君の目の前では、ティアナとスバル…それにヴァイスの3人がユウとアルトの関係を弄っていた。

どうやら、スバルからブースでユウを弄っていたときの事を聞いたティアナがその話をここで持ち出しそれを聞いたスバルがどっから持ってきたのかのかわからない結婚式の会場のパンフレットを広げマジになりつつあるアルトと共にその会場を選んでいた。

それを見たユウは、それに突っ込みを入れていたがその後今度は、ヴァイスが自分で用意した婚姻届をユウにサインさせようと彼の前に出した。

ヴァイスから出された書類に対しユウは、胸元からペンを取り出しそれにサインをしようとするもすぐにそれが婚姻届であることに気づきヴァイスに突っ込みを入れていた。

さらに…別な所では…。

「なぁ…あんたいったい何やってるんや？」

「ん？何ってウチ…力君にお嫁にいけなくされたんや…。だからそ

の責任を取ってもらおうって思ってな～。なぁ～リく～ン♪」

「えっ…と…その～…こ…これはだな…つまり…」

椅子に座る力君の横で彼の腕に自分の腕を絡めて甘えているウチのはやてを見つけた組長のはやては2人の前に仁王立ちで立ち2人イラつきながら話かける。

それ話を聞いたウチのはやては、組長のはやてにまるでその光景を見せ付けるかのようにその理由を言いつつも彼の腕にさらに寄り添い甘えた声を出した。

それに対し力君はと言えば、何やら思いつく節があるみたいで顔を真っ赤にしながらシドロモドロな声をだしながら組長のはやてに説明をしようとしていた。

「へぇ～…。責任をか…そりゃよかったわね…力君…（ギロリ！！」

「それにしてもなんであんたそんなに怒ってるんや？ははぁ～ん…やっぱりあんた力君の事が…ってあれ？ちょ…ちょと！！ウチの力君をいったいどこへと連れてくつもりや～～！！（狸化）」

「（ズルズル…）おい！！はやて！！これには訳がって！！よく考えてみりゃそもそもお前が～！ギャーーーーー！！！」

ボジテーン！！

力君とウチのはやての話を聞いた組長のはやては、ギロリと力君の方を睨みながら黒化しそして感情の篭っていない声でそれは良かったというような話をしていた。

その様子を見たウチのはやてがなぜそんなに苛立つのかと組長のはやてに聞きそして彼女が力君の事をどう思っているのかその憶測を言おうとした所で、力君の来ていた服の胸倉を掴み彼を会場の奥へと連れて行った。

その組長のはやての行動にウチのはやては、狸の尻尾と耳をだしながらそれに対し声を上げる。

組長のはやてに奥へと引きづられて行く力君はと言えば、彼女に対し色々と説明をしようとするがそのいずれもが組長のはやてには火に油を注ぐ結果となりその後お仕置きスペシャルを会場の外で食らうハメになった…。

「まったく…。いくらなんでもやりすぎじゃない？はやて？」

「ええやん！！ウチの柔肌をで勝手に見たんや！！それの報いや！！それにウチの復讐はまだ終わってへん…。組長のウチにな…ふふふ…楽しみやな～♪」

会場の外へと連れて行かれる力君達の姿を見た私は、ウチのはやてに近づき彼女に声をかけた。

私の声に気づいたウチのはやては、私の声にこれだけじゃ済まないしまだ終わっていない言いなんだか怪しい声をだしていた。

「いったい何を企んでるのよ？私に教えてくれてもいいじゃない？」

「そうやな、もう仕込みの方は済んどるから後はもう一人のウチが家に帰るだけやからな～ええよ。実はな～ゴニョゴニョ…」

そんなウチのはやての様子を見た私は、彼女に対し何を企んでいるのかを聞きそれに彼女が私に耳打ちをすると言った形でそれに答えた。

んで、何を企んでいるかと言えば…。

どうやら、八神組会長のノルウェールさんに今回のはやての入れ替わりの事をチクッたらしい。

その話を聞いたノルウェールさんは、詳しい話を聞きたいと言い現在八神組のはやての家で彼女の帰りを今や遅しと待っているらしい…。

まぁ、入れ替わった上にウチのはやての通常パスを勝手に使ったんだからお咎めナシって訳には行かないだろうけど…。

でも、力君の一件についてはあれは事故で済まされるだろうからって一度ぶっ飛ばしただけじゃ収まらなかったからこうしたって訳か…。

それに力君をぶっ飛ばした時の力って、どうやらあの時1回限りだったみたいだから組長のはやてを使ったって事だしあの2人を弄ってみたかったからという意味合いもあったらしい…。

でも、まぁあの2人…なんだかんだ良いカップルになりそうなんだけど…。

「なぁ…ミツキ？あんたの方はいったいどうなってるんや？」

「ん？私の方？そんなのある訳ないじゃない？」

そんな事を考えていた所、ウチのはやてが私の方を向いて私の恋愛関係について聞いて来た。

ウチのはやての話を聞いた私は、すぐさまその話を否定。

「何言っとんのや～！？あんたＩＦであの人といい関係になっとたし本編でもヴァイスと～…」

「はぁ！？い…ＩＦ話はともかくとしてなんで私がヴァイスなんかと～！！」

「あっちでもそうなっとるみたいやけど…」

私の話を聞いたウチのはやては、ここことは別の話のことをあげそんな事はないと私に詰め寄ってくる。

その話を聞いた私は、ＩＦ話の事に関してはともかくと言いつつもヴァイスとの事についてはさらに否定。

でも、ウチのはやてはその話を聞いた所別の方向を指差しながらその可能性を考えてるのは自分だけではないと言い出した。

「ヴァイス陸曹～？先輩とはいったいどうなんですか～？いい加減教えて下さいよ～？」

「そうですよ！！ちゃんと答えましょうよ！！ヴァイス陸曹？姫とは、いったいどんな関係なんですか？」

「これで、形勢逆転だな～。ヴァイス…。さ～て、とことん話でも聞かせてもらうか？お兄さん…？（ニヤリ）」

「あ…アルトにナリア…それにユウまで…。お兄さんなんてよぶなぁ～！！あいつとは只の腐れ縁で～！！付き合っちゃいねぇ～よ！！それにだれがあんな短気でペテン師の機械オタクなんかと～！！」

プチッ！！

私がウチのはやての方を見た所、ヴァイスがユウとナリアとアルトの３人がヴァイスに私のとの関係を聞いて来た。

ちなみに会話順は、アルトにナリア…それにユウとヴァイスの順番なんだけどもね…。

「ちょっと～…だぁ～れが、短気でペテン師の機械オタクですってぇ～！！（怒）」

「み…ミツキ！！い…今の話を…」

「ええ…。ちゃんと聞えてたわよ？それに～ユウ！アルト！！それにナリア！！あんた達…何その場から逃げ出そうとしてるの～？（怒怒）」

ヴァイス達のやり取りを見ていた私は、彼が言った会話に怒りを覚えヴァイスに近づき彼に声をかけた。

私を見たヴァイスは、その表情が引きつった表情で私のほうを見そして彼の話を聞いた私はその話を聞きつつもその場から立ち去ろうとするユウ達にも声をかける。

「「「い…いや～その～なんと言うか…それじゃ…」」」

怒怒怒！！

「それじゃ！！じゃ！！なーーーーーーーーい！！あんた達も同罪よ！！落ちろ！！カトンボ共ーーー！！」

ドンガラガッシャーーーン！！

「「「「ギャーーーーーーーーーーーー！！」」」」

私の声を聞いたユウ達は、そろいも揃って言い分けをしようとしたが良い言い訳が思い浮かばず苦笑いをしながらその場から立ち去ろうとする。

その姿を見た私は、完全にブチ切れその場にいたユウ、アルト、ナリアそれにヴァイスをブチのめし彼らの悲鳴と轟音がその場に響き渡った。

「こりゃ、やり過ぎたわ。まさにこれは、ミツキの顔も三度まで…なや…これは…くわばらくわばら…」

そんな光景を見たウチのはやては、そんな事をふと漏らしつつもその場をイソイソと片付け始める私の手伝いをしその後何事もなかったかのように会場内では盛り上がりをみせていた。

打ち上げ会場外

ユート視点

「あっ！ここにいたのね！ユート！！ったく…探したわよ！！」

「ちょっと外の空気を吸いたくなってね。ゴメン」

俺がミツキさんからの追求を避けるために会場の外へと逃げ出しその近くにあった木陰に腰掛け座っていた所、ティアナが俺に声をかけてきた。

そう言えば、こっちのティアナって俺がこっちのミッドにいる間俺の案内役件護衛役だったっけか？

その対象者が急にいなくなったらそりゃ探さないといけないよな。

そう考えつつ俺は声をかけ来たティアナにお詫びをした。

「そう言えば、良い演奏だったわよ。晩餐会でもさっきのライブでも。でも、なんで引き受けたの？あのライブ？」

「ありがとう。あれは、ここに来てすぐにオーリス三佐から俺の演奏に感化されたらしくて一緒にやらないかって誘われてね。それで」

ティアナの話を聞いた俺は、その理由を彼女に告げた。

「へぇ～そうだったんだ。それにしてもナカジマ三佐とミツキさんまで出て来た時には驚いたけど」

「そう言えば、ミツキさん。オーリス三佐に引きずられながらステージに上がっていたよな（笑）それにしてもみんなうまかったなぁ～。それに楽しかったよ。一緒に演奏をして」

俺の話を聞いたティアナは、そう答えながら俺の横に座りライブ時の事を話し始めた。

その話を聞いた俺は、そのライブをやる前にオーリス三佐に引きずられながらそのステージ向かうミツキさんの姿の事を思い出しながらその事をティアナに話をした。

それにしても…違う世界の人間とは言えやっぱり…。

「もしかして私に惚れた？と言うよりも向こうの私の事を惚れ直したって所かな？」

「てぃ…ティアナまで！！」

「フフフ…冗談よ冗談！それにしても、ユートって本当解り易いんだから（笑）」

「まったく…冗談にしてはきつ過ぎないか？」

「たまにはいいんじゃない？」

俺がそんな事を考えていた所、どうやらその事がティアナにバレてたみたいでドキリとした一言を俺に言ってきた。

それを聞いた俺は、それを驚きつつもそう言う意味ではない事を声を荒げながら言うがそれを見たティアナは微笑みながらそれが冗談

である事を言ってきた。

ティアナのそんな話に対し俺は、不貞腐れされながらそれに言い返しその様子に対しティアナはそれを冗談交じりの笑顔でそれを返してきた。

「あのさ…。ティアナは、どうしてミツキさんの執務官補佐になりたんだ？ユウ達は彼女の事を管理局を辞めさせようとしているのに…」

「……確かに私がやりたい事は、ユウ達からすれば間逆の事なんだろうけど…。でも…」

俺は、ふと思った疑問をティアナに聞いてみた。

その問いかけに対しティアナは、急に俯きそしてそれが次第に何か思いつめた様子になりそして、一度話し始めたがすぐにその口は止まりまるで言葉を選ぶかのように次第にその重い口を開いていった言った。

「私…昔色々とミツキさんに迷惑とかかけててね。それで、まだ何にもそれを返せてないの。それにあの体だから…。私としてもすぐにでもやめてもらいたいしその辺に着いては、ユウ達と同じ気持ちよ。でも、私としてはミツキが持ってる捜査とかの方法やその知識とか色々学びたい気持もあるの。だって…あの人のその能力の事は、死んだ兄さんも認めていたし…。私も…あの人の事は、すごいと思うから…」

「そうか…。ゴメン…余計な事聞いたみたいで…」

そうか…。ティアナに取っても色々と複雑な気持だったんだ…。

俺は、余計な事を聞いたと思い彼女に謝った。

「何そんな事言ってるのよ！そんな事を言われてもどうする事も出来ないでしょ！！でも、その気持ちだけは素直に受け取っておくわ。ありがと」

「ティアナ…」

「それにユウ達にも私の気持はもう話をしてあるし、ミツキさんも可能な限り私の面倒をみたいって言ってくれてる…。それで、今治療とか頑張ってくれてるみたいって言ってくれてる…。それで、今治療とか頑張ってくれてるみたいらしいし部隊長とかフェイト隊長とかも色々と動いてくれてるみたい。ナカジマ三佐からもなんとかしてやるから暴走だけはするなって言われてるしね。後もし、私が暴走なんかしたらスバルやユウやそれにギンガさんが私の事をぶん殴るって言ってるし…。そう言えばチンク達にも同じ事言われてたかしら（笑）」

俺のお詫びを聞いたティアナは、少し怒った後笑顔で俺の気持ちだけは受け取ると言った。

それを聞いた俺は、彼女に声をかけるがその後ティアナが現在の状況について色々と話をしてくれた。

「ティア～！！いつまでそこにいるのよ～！！ご飯なくなっちゃうよ～！！」

「わかった！！今行く！！そろそろ、中に入らない？早く行かないとスバルや楓さん達に食べ物全部たべられちゃうわよ？」

彼女の話を聞いた俺は、それをどう答えようか悩んでいた所少し離れた所からスバルがティアナに声をかけてきた。

その声を聞いたティアナは、そのスバルの声に答え俺に中に入ろうと誘ってきた。

「ああ…そうだな。行こうかティアナ」

「ええ…」

ティアナの話を聞いた俺は、その誘いに乗りその場から立ち上がりティアナと一緒に中に入る事にした。

「ちゃんと…守って上げなさいよ…向こうの私の事を…」

「ああ…もちろん…。って!!ええっ!!」

建物の中に入る途中、俺の横を歩いていたティアナが急に俺にそんな事をポツリと言ってきた。

それを聞いた俺は、真面目な顔をしながら答えたがよくよく考えてみたら俺…そんな事は一言も…。

「あっ!!やっぱりそうだったんだ!!顔が赤いわよ。ユート!?」

「ティアナ!!てめぇ!!コラッ!!待て!!」

「嫌よ♪待たないわよ～!!」

俺がその事に気づいた事に気がついたティアナは、俺の本心がそうだったんだとどうやら気づいたらしくニヤニヤとしながら驚く俺に声をかけ顔が赤い事を指摘してきた。

その話を聞いた俺は、その場で怒り出した。

俺の態度の急変を見たティアナは、その場から急いで逃げ出した。

俺は、そのティアナの姿を見ながら彼女を追いかけそしてそのまま会場へと入りユウ達や酒が入ったこっちのはやて達に捕まりそのまま大宴会に巻き込まれそこで朝まで過ごす事となった。

そして、次の日昼過ぎ…。

「気をつけて帰るのよ。ユート」

「ああ…ティアナも頑張ってな。それじゃ」

「ええ…ありがと。それじゃ」

ホテルに帰って少し眠った後、俺の世界へと帰る事となった。

俺の世界に帰るための次元ポートの入り口で案内役のティアナと少しの会話をした後、俺は自分の世界へと帰ることになった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息」

……おわり

祝！！７０万ＨＩＴ記念～「戦士達の休息　後編」（後書き）

作者
「いや～！！なんとか終えることが出来ました！！如何でしたか？７０万ＨＩＴ記念小説の後編？」

ミツキ
「それにしても、なんや八神組が何時の間にかほとんど出てなかった？それに違う作品の人の名前が…。あれはいったい…」

作者
「それについては、ジャン先生からの感想で今回の話の事が書いてありましてそれをこっちでアレンジして使っちゃいました（笑）勝手に使った事に関してはお詫び申し上げます」

ミツキ
「まぁ…、それについては私からも謝ります。ごめんなさい。それにしても…なんかイマイチ終わり切ってないようなきがするんだけど…」

作者
「そうですね。今回は、八神組のはやてさんの結末とかユートとティアナの関係とか曖昧に終わらせた所はありましたがその辺についてはそうするのか各作者さんなどの考え方もありますのでそんな感じしたのとその後どうなったかなんて所を書いてくだされればいいかな？って考えたためこうなりました」

ミツキ
「そう言えば、前回の力君達の世界のはやてと入れ替わった時の事

をジャン先生の方でも書いてくれたしね」

作者
「まぁ、そんな感じです。ユートについては、ただ弄るだけって言うのもなんだったんで色々とそうではない所も書いてみましたがどうでしたかね?何かあればすぐに修正しますので」

ミツキ
「よろしくお願いしま~す!!んで、書いてみた感想としては?」

作者
「そうですね…。とにかく今回は、ダブルコラボとの事で来てもらったキャラ達のイメージを壊さないようにしながらさらに空気にさせないようにするのがとにかく大変でしたね。ですが所々空気なってしまっている所はありましたが…。書くのは大変でしたがまたやりたいですね」

ミツキ
「ちなみに…どんな事を思いついたの?」

作者
「例えば、ミツキさんのＩＦ話にユートに登場してもらうとかユウ達の過去に八神組のメンバーが登場したり…なんて事を思いつやるかきはしましたがそれについてどうかは現在まだ不明です」

ミツキ
「い…ＩＦ!!!あれで終わりじゃなかったの?」

作者
「あれはあれでとりあえず終わらせましたが、なんかネタがあれば

またやろうかなって思ってまして。個人的にはあの話は気に入ってますし（笑）」

ミツキ（顔真っ赤）
「へ…へぇ～…。そうなんだ…。それで次回は？」

作者
「今のところは、本編に戻りたいと思っています。ですが、何か思いつけばまた違う話になるかも…。ちなみに本編についてはいよいよ地上本部襲撃に突入したいと思っています。それでは、今回はここまで！！ミツキさん！！〆のセリフ、よろしく！！」

ミツキ
「りょうか～い。それでは、次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７４！！」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オ～フ！！」

その７４（前書き）

その７４

管理局　本局　クロノの執務室

クロノ視点

「そうか…。結局わからずじまいだったか…」

「すまんなぁ～。クロノの君…」

執務室の応接スペースにあるソファーに座る私の目の前に座っているはやてから、私が彼女に依頼していた件についてその報告を受けた。

そのはやての報告に私は、予想通りといった感想を持ちつつもその答えをそのまま鸚鵡返しで彼女に返しそれを聞いた彼女は申し訳なさそうな声をあげた。

「別にはやてが謝る事ではない。あの陰険女の秘密主義がいけないんだ」

「クロノ君…。ミツキがミッドにおらんと口が饒舌になるんやね…。まぁ…ミツキが秘密主義なのは、ウチも同感なんやけど…。今度ミ

ツキに会ったらこの事チクッたろ」

「そ…、それは…！！それだけは」

はやての話に私は、彼女をフォローするつもりで言ったのだがつい口がすべり余計な事まで話をしてしまう。

私の話を聞いたはやては、その事をミツキに言うと言い出し彼女の話に私は慌てふためいてしまった。

「冗談や、冗談（笑）でも、ユウの話だとこのまま無事に公開意見陳述会が終われば何にもしないって事らしいしそれが確認出来るまでは警戒態勢を取ってくるっちゅう事は確かや」

「そうだな…。それで済めばいいんだが…」

はやての話に私は、納得の声をあげる。

そもそもはやてにお願いした内容と言うのが、ミツキが率いるファントム・ナイツのその動向をミツキの弟のユウにそれとなく聞いてもらう事である。

だが、はやての話によれば退去している施設にて警戒はしているが何も起こらなければ何もしないとの事。

それ以上の事については、聞き出せなかったとの事。

はたして…もし、何かあった場合…ヤツはどう出てくるのか…。

「そういえば…ユウのヤツ…。もし、何か起これればレジアス中将かオーリス三佐に「蒼龍の首飾りを使え」って言えってミツキからウチに伝えて欲しいって伝言を受けてたみたいやけど…。クロノ君？それ何の事かわかる？ユウに聞いてもあいつも何の事だかわからへんって話なんやけど…」

「「蒼龍の首飾り」？いや…私も何の事やら…。とにかく、それがなんらかの合図か防衛のための手段なんだろう…。その伝言については、彼女の言う通りにした方がいいな。頼めるか？はやて？」

私の話を聞いたはやては、急に何かを思い出したかのようにミツキからの伝言を私に話してくれた。

その話を聞いた私は、ミツキとレジアス中将達の間でのみ取り交わされている何かと判断しその伝言の通りにするようはやてに頼んだ。

「わかったよ。それじゃ、ウチは地上本部に行って向こうの様子を見てくるわ。それじゃ」

「ああ、頼んだぞ。はやて…いや、八神部隊長」

「了解しました。クロノ提督」

私の話を聞いたはやては、それを了承し地上本部の警備任務に戻ろうと席をたった。

それを聞いた私は、彼女を送り出すよう声をあげそれを聞いたはやては私に敬礼しその部屋を後にした。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７４…始ります…」

その７４

公開意見陳述会　当日

機動六課隊舎　司令室

アルト視点

「地上本部…現在の所、以上ありません」

「ありがとう、ルキノ。引き続き警戒を続けてくれ」

「わかりました。グリフィスさん」

私は、現在六課の司令室にて地上本部で行われている公開意見陳述会への警戒任務を行っている。

スバル達フォワード陣は、前日の夜から会場での警備任務についていて私達ロングアーチの面々は司令室からのバックアップがその主な任務。

画面に映る地上本部は、今のところいたって平穏で会場から配信されている中の映像では、現在レジアス中将が以前から導入を推進し

ている新型兵器「アインヘリアル」のその優位性について演説をしている所が映っている。

「この映像…。ヴィータちゃんが見たら「そんなの必要ない」って言ってるでしょうね？」

「確かに…でも、レジアス中将の意見に同意する人達はいますからね？なんせ、カリスマ性はありますから…中将は…」

司令室を訪れていたシャマル先生が、そのレジアス中将の映像をみながらそんな事をグリフィスさんに話し掛けそれを聞いたグリフィスさんは中将が持つカリスマ性をあげそれに続く人達の事をあげていた。

「そうね。私もそう思うわ。でも、あれだけの物は本当に必要なのかしら？私は、疑問に思うわ」

「そう言えば…ミツキさんもあれに関わっていたんじゃない？ねぇ？アルト？」

グリフィスさんの話に疑問の声をあげるシャマル先生。

そして、その話を聞いたシャーリーさんはユウの過去のことについて私に聞いてきた。

「ええ…。確か…計画当初は参加していたみたいなんですけど…。でも、防衛するにはあれだけじゃ今の魔導士中心の現状ではただでかいだけの的にしかならないって中将に意見をして…。それで、先輩…それ以来、そのプロジェクトから外されたみたいです…。それで、今は魔力がない人でも使える非殺傷設定が可能な武器やバリア

の研究をしているんです。ミッドを守りたいのは、魔導士も普通の人間も同じだろうからって」

「そうね…。その気持ちは誰だって同じね…。魔力があろうがなかろうが…」

「そうですね。それはそうと、ユウのヤツはどこにいったんだ？こっちに顔を出すよう言って置いたんだが？」

シャーリーさんからの問いかけに私は、当時の事を思い出しながらそのときの事に話をした。

それを聞いたシャマル先生が納得の声をあげ、それにグリフィスさんがそれに続きつつもユウが来てない事について疑問の声にあげていた。

「あっ！ユウ君なら、さっきザフィーラがなんでも彼に話があるって彼と一緒にどこかに行ったわよ？」

「ザフィーラが？めずらしいですね？」

グリフィスさんの話を聞いたシャマル先生は、ユウをザフィーラさんが2人でどこかに連れて行ったとの話をしその声にグリフィスさんが「へぇ～」っといった声を上げていた。

機動六課施設内　訓練スペース付近

ザフィーラ視点

「いったいなんの話しだい?ザフィーラのとっつぁん?」

「少し気になる事があってな?単刀直入に聞こう。ユウ…お前は何を企んでいる?ヴィヴィオをいったいどうしようとするつもりだ?」

私は、隊舎内をウロチョロしているユウを捕まえ人気のない所に連れて来た。

そして、訓練スペース付近まできた所で私の後ろから着いて来るユウが私に声をかけきたのを聞きその場に止まり後を振り向き真剣な眼差しで彼を見つめそしてに彼にそう問い掛けた。

「やれやれ…。これじゃ、まるで俺が取り調べを受けてるみたいだな…。な~に、別にヴィヴィオをどうこうしようって訳じゃねぇよ?念のためってヤツさ?」

「念のため?…詳しく説明をしてはくれないか?」

私の問いかけを聞いたユウは、観念と言うよりやれやれとった様子で私の問いかけに答えそれを聞いた私はその曖昧な答えに詳細な説明を求めた。

「こいつは、まだ確証は得られちゃいねぇが今回もし地上本部が襲撃を受けた場合それにヴィヴィオも巻き込まれるんじゃねぇかって思ってな。それであれこれ動いているって訳だ」

「随分、すんなりと答えるんだな?ミツキからの指示か?」

私の話にユウはすんなり答えた。

だが、その話を聞いた私はその話をそのまま信じず彼に疑いの目を向ける。

「まぁな?それに、今回は姉貴達のフォローがないに等しいからな。それに最悪の場合とっつぁんとシャマル先生に踏ん張ってもらわないけねぇ～からな?」

「なるほど…。と言う事は、六課が襲撃を受けると予測しているのだな?それにしても、我々だけでは不安か?」

ユウの話を聞いた私は、そこから彼らが考えていそうな事を想像し彼に三度問い掛ける。

「確かにとっつぁんとシャマル先生は優秀なのはわかっている。だが、俺達は常に最悪の状況を想定して動いている。いくら2人が優秀だとしても周辺部隊からの救援なしでそれに大多数でこられたらたまったもんじゃねぇだろ?だから、そう言うときの事を考えてヴィヴィオを先にある所に逃がすつもりだ。だがそれについては、秘密だ。でも、ヴィヴィオの身の安全だけは保証するぜ。これは姉貴から俺に命じられた最優先事項だからな」

「そうか…。その言葉…信じていいのだな?」

私の問いかけにユウは、いつなく真剣な眼差しでそれに答える。

それをみた私は、彼に確認をとった。

「ああ…。そうしてもらえるとこちらとしても助かる」

「わかった。では、お前…いや、ミツキが想定する最悪の状況で私達はどれくらい耐えていればいいのだ？」

「そうだな…。１５…いや、２０分くらい頼むわ。こっちとしては色々とまだやる事があってな。それで具体的には…ゴニョゴニョ…」

彼のその真剣な顔を見た私は、彼を信じる事とし彼らの考えを聞こうとした。

ユウは、最初の内は普通に話をしていたが詳細な部分については私に耳打ちをしそしてそれが終わるとその場を後にした。

さて…。この事が吉と出るか凶と出るか…。

ユウが去った後、私は空を見上げながら何事も起こらない事を願いつつもふとそんな声をもらしていた。

地上本部施設内　臨時のヘリポート

ヴァイス視点

「お疲れ様でぇ～す！！ヴァイス陸曹！」

「差し入れです。どうぞ」

「おお～サンキュウな！！スバルにティアナ」

俺が地上本部まで、部隊長を送迎した後ヘリの燃料を補給していた所スバルとティアナがコーヒーを差し入れしに着てくれた。

2人からの声に答えた俺は、ティアナからコーヒーが入った紙コップを受け取り一息入れることにした。

「おっ!?これっ、うまいな!誰が入れた?」

「それ入れたのなのは隊長です。隊長の実家が喫茶店をやってるって事で隊長自らそこのコーヒーを再現してくれたんですよ」

「へぇ〜。そうなのか?後でお礼を言わなくっちゃな」

俺がコーヒーを一口のみそれがあまりにも上手かったので誰が入れたのかを彼女達に確認。

すると、ティアナが俺になのは隊長が入れてくれた事を言いそれに俺が答える。

「それでぇ〜。ヴァイス陸曹?アルトから…何か預かってませんか?」

「さぁ?何の話かな?(ニヤニヤ)」

「そ…そんな〜!!私、それだけが楽しみだったのに〜(泣)」

「そんな泣く事じゃないだろ?ったく…わかった、わかった。隊長達やエリオ達にもちゃんと渡すんだぞ?」

「りょうか〜い♪」

ティアナとの話を終えた俺にスバルが、モジモジしながら何かを聞いて来た。

それを聞いた俺は、その事を知ってはいたがスバルをからかう意味でワザと惚けて見せた。

すると、それを見たスバルは急に俺に近づき涙目で訴えてきた。

それに圧倒された俺は、すぐさま観念しヘリの奥を指差しながら他のメンバーにも渡すようにつげた。

俺の話を聞いたスバルは、そのアルトを含めたロングアーチの面々からの差し入れであるダンボール一杯に入ったお菓子を持ちながら満面の笑みでその場を後にした。

「ん？ティアナ？お前は行かなくてもいいのか？」

「はい…。ですが、その前にひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

スバルが去った後、その後に続かないティアナを見た俺は彼女に声をかけた。

すると、ティアナは俺に質問があると言いそれに対し俺はそれを了承した。

「昔…武装隊にいたんですね？すいません、勝手に調べちゃいました。それで…なぜ、ヘリパイに？」

「ったく…。まっ、色々とあったんだよ。色々とな？」

ティアナからの質問は、俺の過去の事であった。

それを聞いた俺は、細かく説明する気はなかったため曖昧に答えた。

「そうですか…。でも、よくミツキさんが狙撃手としてヴァイス陸曹を指名していたとか…」

「それは、俺がアイツに頼んでたんだよ。じゃないと俺見たいな凡人を指名したりしねぇだろ？アイツが？」

俺の答えを聞いたティアナは、さらに自分で調べてきた事の中で気になっていた事を俺に聞いて来た。

それを聞いた俺は、やれやれといった顔をしつつそれに答えていた。

「わかりました。ありがとうございました。でも…ヴァイス陸曹がヘリパイになってから…ミツキさん…一度も狙撃手を使ってはいないんです…。それでは！失礼します！！」

「ああ…」

俺の話を聞いたティアナは、なんだが納得していない様子ではあったがそれ以上の追求はせずに俺がヘリパイになって以降狙撃手を使っていない事をあかし俺に敬礼をしその場を後にした。

「そんなのわかってるよ…。俺がこんなだからアイツが無茶しなきゃいけなくなったんだ…。それなのに…俺は…」

俺は、コーヒーを飲みつつそんな事を呟き給油作業を終え六課へと戻る事となった。

機動六課隊舎付近　とある森

ユウ視点

「遅いわよ…」

「悪い悪い…。ちょっと野暮用でな」

「まったく…。それで、物はあるの？」

ザフィーラのとっつぁんとの話を終えた俺は、六課の隊舎から少し離れた森の中である女性と会っていた。

俺に気づいたその女は、俺が送れた事に苛立ちつつも早速取引を始めようとしていた。

「ああ…。それはここの中だ。確認してくれ」

ピッ、ピッ、ピッ

「確認したわ。それじゃ、こっちも確認してもらえる？」

ガチャ。

「ＯＫだ」

「それじゃ、取引成立って事で…」

「その前にひとつだけいいか？なんで、あんたの親玉は急にこの取引に応じたんだ？」

その女の態度を見た俺は、持っていた端末をその女に渡しその中にあるクレジットを確認させた。

端末を確認した女は、今度はおれに持っていた大きなケースを渡しその中身を確認するよう言ってきた。

その中身を確認した俺は、その場から立ち去ろうとするその女に対し質問をした。

「そうね…。なんでも、面白そうだからだそうよ？それに道化を演じるのなら騙す側もしてみたいとか…」

「いいのかよ？そんないいかげんな親玉について？あんたは？」

「あなたに言われたくないわよ。あなたもよくあのお姉さんについていってるわよね？（そうかい？俺に取っちゃいつもの事だ）そう

…でも、意外と楽しいわよ?これも。それと、親玉って言わないでね?ドクターって言わないと彼…怒るから（笑）それとあんたじゃなくて私はドゥーエって言うの?これから、よろしくね?ユウ君♪」

「へいへい…。わかったぜ、ドゥーエさん」

俺の問いかけに答えたを聞いた俺は、それに答えつつその話に呆れながらさらに彼女に質問をした。

それを聞いた彼女は、それにニヤケながら答えそして俺が言ってた事を訂正していた。

ドゥーエさんの話に俺は、やれやれと言った様子でそれに答え俺は六課に戻り最後の準備を始める事となった。

さぁ〜てと、あとは…。

スカリエッティのアジト

スカリエッティ視点

「ドクター。時間です」

研究室でこれから始る茶番劇…と言うかイベントの最終チェックをしていた所にウーノがその開始時間を告げに私の元を訪れ声をかけてきた。

「そうか…。なら、始めようか…ウーノ」

「はい、ドクター」

私の話にウーノはそう答え研究室から、他のナンバーズ達に指示を出していた。

さて…賽は投げられた…。

時代は、いったいどちらを選ぶのか?

彼か?それとも私?それとも…。

楽しみだ…。

これから…ククククッ…アーハッハッハ!!

その７４（後書き）

感想待ってます

その７５（前書き）

機動六課　司令室

アルト視点

「上空にガジェット出現！！数３００…３５０…まだ増えています！！」

「周辺部隊に応援を！！」

「ダメです！！ジャミングが酷くて通信繋がりません！！」

公開意見陳述会が始って数時間がたった。

それまで、特に何も起こっていなかったのでこのまま終わればいいな？なんて考えていた所突如周辺部隊との通信が出来なくなりおまけに望遠カメラの映像からは地上本部が襲撃を受けている映像が私達の目に飛び込んできた。

グリフィスさんの指示で、周囲の状況を確認し始めようとしていた時レーダーに数百体のガジェットが移りルキノからその報告がグリフィスさんに入りそこから別の指示が飛んだ。

でも、その周辺部隊にも通信が取れないとシャーリーさんからの報告にグリフィスさんは苦悶の表情で次の指示を出そうとしていた。

「シャマル先生とザフィーラさんに迎撃を！！それとユウを急いで

呼び出してくれ！！」

「はい！！」

グリフィスさんからの指示で私は、ザフィーラ達に迎撃に向うよう通信をした。

「ザフィーラさん！！敵が現れ…」

「わかっている！！私もシャマルも既に向っている。現状としてはシゲフィールクライゼル・フォン・ラーゼリッヒ二等陸尉が開発したバリアで中への侵入を抑えいる所だ」

「し…シゲフィール…って一体誰の事ですか？」

ザフィーラさんに通信を取り敵の事をつげようとした所、あちらももう気づいていて既に対処をしているとの事。

そして、私が聞いた事もない名前を言ったザフィーラさんに私は思わず頭に「？」マークを浮かべながら聞いてしまった。

「アルト～、それってシゲさんの本名だよ」

「えっ！！そうなんですか？シャマル先生！？」

私の質問に対してザフィーラさんの横にいたシャマル先生がその質問に答える。

「ええ！そうよ！」

「シャマル先生～。それは内緒にしてくれっていったじゃないですか～」

「私は、アルトが聞いて来たから答えただけだもん♪最初に言ったのはザフィーラよ」

「す…スマン…。ついうっかり言ってしまった」

私の質問に答えたシャマル先生の後ろからまいったな～と言った表情のシゲさんが現れ通信画面の向こう側でシャマル先生とザフィーラさんと話をしていた。

「それはそうと、おい！司令室のあんちゃん！！とりあえずこんな事もあろうかとユウに頼まれてバリアを作っておいた！！でも、急ごしらえだからあまり時間はもたねぇ！！だから、非戦闘員は急いで避難させてくれ！！この数…正直不味いぞ！！」

「わ…わかりました！！シャーリー！！急いで非戦闘員の避難を！！それとルキノは、周辺部隊への連絡も続けてくれ！！あとシゲさん！！そっちにユウはいませんか？彼にも迎撃を…」

シャマル先生達と話をしていたシゲさんは、先ほどの表情とは打って変わり真剣な表情でグリフィスさんに現状を伝えそれを聞いたグリフィスさんはシャーリーさんとルキノに指示を出しシゲさんにユウの居場所を聞いた。

「ユウは、何やらやる事があるらしくてな。今は、ここにはいないぜ」

「あいつ～！！こんな時に…」

「それとアルト！お前にユウからの伝言だ！！「ＯＫ，ａｒｅ ｙｏｕ ｓｅｒｉｏｕｓ ｗｈｅｔｈｅｒ ｉｔ ｉｓ ｔｈｅ ｏｐｅｎｉｎｇ ｏｆ ｔｈｅ ｐａｒｔｙ，ａｎｄ ｔｈｅ ｐｒｅｐａｒａｔｉｏｎｓ ａｒｅ ｇｏｏｄ？（さぁ、パーティの始まりだ！！準備はいいかい？マジかよ！？）」」

「わ…わかりました！！」

「アルト！！今のは、いったいなんなんだ！！」

シゲさんからユウがいない事を告げられたグリフィスさんは、その苛立ちを露わにする。

そして、今度は私にシゲさんがユウからの伝言を伝えそれを聞いた私は急いでパネルを展開する。

それを見たグリフィスさんから私に声を荒げながら質問してきた。

「今のユウからの伝言は、ユウからのファントムのジョーカーとしての指示です！！意味は、よくわかりませんがとにかくこれを聞いたら急いでファントムに連絡してくれって！！それとユウはファントムの立場で既に動いている事も意味しているそうです」

「通信って…こんなジャミングが酷い状態で…いったいどうやって？」

グリフィスさんからのといかけに答えた私に今度はルキノから疑問の声があがった。

「別に通信する訳じゃないんだよ?ええ～っと…ここをこうして…これでヨシッ!!」

プシュー!!

「えっ!!何これ!?って言うか、いったいいつの間にこんな仕掛けを!!」

ルキノ問いかけに対し私は、手を動かしたまま答えそして私のいるデスクの横から小さい正方形上の箱が出て来た。

その光景に驚きを露わにするシャーリーさん。

「これについては、後からって事で…。それで…この箱の中に…。あっ!あった!!お願い!!行って!!フェアリー・バタフライ!!」

「黄色い蝶?」

「き…消えた…」

シャリーさんの声に答えつつも私は、その箱の中から黄色の蝶を取り出しそれを両手で包み胸の辺りで願い込めてその場から解き放った。

その蝶をみたグリフィスさん、ルキノの順で声をあげそして私の手から解き放たれた蝶はその手から上に飛び上がりその場から消えてどこかへ行ってしまった。

お願い…。

間に合って…。

私は、蝶が消えた辺りを見ながらそう呟いていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７５…始ります…」

その７５

その７５

地上本部内　展望スペース

フェラルド視点

「こりゃあ…まいったな～」

俺は、展望スペースにあるソファーに座りその横で意識をなくしてるミオによっかかれたままの状態頭を抱えていた。

俺達がなんでここにいるかと言えば、まぁ…簡単に言えばミッドを退去すると見せかけて一部の人間だけ公開意見陳述会に別人になりすまして侵入してるって事だ。

ちなみにここに入るためのＩＤやらは、全て姫とミオ達による偽造品でバレたら大変って訳なんだが…。

「おい！！急いでその扉を開けろ！！」

「ち…地上本部が攻撃されてる！！それに停電でエレベーター止まってるぞ！！」

俺達の周りでは、いきなりの状況の変化に局員達が大慌てといった

様子だ。

なんせ、ついさっきまで平穏無事だったのがいきなり停電になったのかと思ったら外では恐らくガジェットによる攻撃始まったんだからな。

その音に気づいたミオは、すぐさま意識を失い自分で事前に放っていた蝶達からの情報を集めだした。

ミオは、こうやって自分の意識を次元空間に飛ばす事で自分で色んな所に移動したり自身魔力で作り出した蝶達とやり取りが出来るっつう「フェアリー・バタフライ」ってレアスキルを持っているんだ。

でもまぁ、飛ばせるのは意識だけで意識を飛ばしている間体のほうは無防備になってしまうっつうデメリットもあるんだが…。

ちなみに同じ能力を持ち尚且つその体事移動出来るのがノアなんだが、あいにくとアイツは姫達と一緒に退去した施設に行っててな。

どちらにしろまずはミオの意識が戻らんと話が始らんか…。

俺は、そう思いつつ局員達がエレベーターの扉を開けようとしている。

その中には、高町とあのハラオウンの嬢ちゃんもいるようだ。

助けたいのは山々なんだがなぁ～。

でも、勝手に動いたら怒られるしミオをこのままにも…。

「う〜ん…。フェラルドさん…お待たせしました」

「おおっ！んで、状況は！？」

俺がアタフタしていた所、ようやくミオが目を覚ました。

ミオの声を聞いた俺は、急ぎ状況を確認した。

「状況は、とりあえず最悪です。プランを作戦プランDに変更せざるを得ません。と言う訳でフェラルドさん！！」

「おう！！その言葉！！待ってたぜ！！」

俺の声にミオは険しい表情をしながら俺の問いかけに答える。

そして、作戦プランの変更を言いようやく俺に出番が回ってきた。

なのは視点

「もう一度だ！！せぇ〜の！！」

「「「おりゃ〜！！」」」

「クッ…。このままじゃ…」

「フェイトちゃん…。落着いて…。まずはここから出ないと…」

「うん…。わかった」

私とフェイトちゃんの目の前では、男性局員達がここの部屋の唯一の出入り口であるエレベーターの出入り口のドアを開けようとしていた。

停電の影響で電気で動いている物は、全てその動作を停止していてそれに念話とかの通信も現状では出来ない状態。

なんからのジャミングとかされてるとは思うんだけど…。

それに会場内でのテロを防ぐ意味合いから中にいる局員達はデバイス持って入れないとの事で私やフェイトちゃんは自身のデバイスをスバル達に預けたまま…。

これについては、要人警護の観点から一部の人間にはデバイスを所持できるよう意見も出されたがそれを逆に利用されかねないといけないし誰かだけを特別扱いには出来ないとの事でその意見は却下されていた。

まさか、この状況を利用してくるなんて…。

そう考えていた所、私の横ではフェイトちゃんが苛立ちの声をあげいた。

私は、それを聞くとフェイトちゃんに落着くよう声をかけその声を聞いたフェイトちゃんは落着きを取り戻していた。

「これからどうすの？なのは？」

「とりあえず、ここをなんとか出て事前にスバル達に言っておいた合流場所に行ってレイジングハートを受け取らなきゃ…。それがな

いと私達は何も出来ない」

「そうだね。エリオ達…無事でいてくれるといいけど…」

「大丈夫。そのために今まで鍛えてきたんだから。それとここがこの状況だと、六課の方も心配だね」

「うん。みんな…大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。絶対に…」

エレベーターの出入り口をみんなが開けている間私とフェイトちゃんは、今後の予定とかを話し合っていた。

心配そうな声をあげるフェイトちゃんに私は、自分に言い聞かせるように声をかける。

そう…焦りは禁物…。

今は、今の自分が出来る事をするんだ。

私は、その昔フェラルド教官から言われた事を何度も繰り返し唱えながらエレベーターの出入り口が空くのを待っていた。

「くっそ～！！もう一度だ！！」

「おい！！もっと手を貸せ！！そこのヤツ！！お前だよ！！お前！！」

「だぁ～れが、お前だぁ！！テメェ等こそ邪魔だ！！そこをどきや

がれ!!」

「な!なのは…この声…もしかして…」

男性局員達が再度エレベーターの出入り口をあけようと他の人達にも手助けしてもらうよう声をかけていた。

そんな中、その中の一人が大柄の男性に声をかけた所その声に対し大声で怒号が響き渡った。

その声を聞いたフェイトちゃんは、私に確認を取ってくる。

私は、その声を確認しつつもその声がした方を見てみた。

「ふぇ…フェラルド教官!!いったいどうしてここに!?」

「おう!!高町か!!まぁ、色々とあってな。とりあえず、ここから出るからそこの連中をどかせろ!!」

「ここを出るって…いったいどうやって?」

声がした方をみれば、フェラルド教官がこちらに向けて歩いてきてた。

それを見た私は、彼に声をかける。

フェラルド教官は、私の声に気づき出入り口にいる男性局員達をどかせるよう私に言ってきた。

その話に私は、疑問の声をあげた。

「ったく、お前なぁ～。昔教えただろ？こういった場合の対処法を？でもまぁ、その時のお前は訓練校で同じ事を習ったって大見得をきっていたがな」

「えっ！？でも、あれは…手を魔力で包んでガードするだけでこういう事には…」

フェラルド教官の声に私は、その時のことを思い出しながらさらに質問した。

「な～に、ようはそれを応用するだけだ。簡単に言えば魔力で手を包んでそれをグローブ代わりして…。後はこうやって…。おーーーーーーーーりゃーーーーーーーー！！」

ドゴーーーーーーーーーーーーン！！

私の問いかけに対しフェラルド教官は、その説明をしつつ自身の右手を魔力で覆いそしてそのままエレベーターの出入り口を殴りつけた。

すると、教官が殴りつけた辺りは爆音と共に入り口のドアは大破。

あれだけ苦労していた男性局員達が目を丸くする中、そのドアを開ける…というより壊してしまった。

「それでは！私は先行します！！フェラルドさんは、プラン通りに！！それとフェラルドさんの相棒も既にこっちに向ってもらっていますので！！」

「おうよ!!気ぃつけろよ!ミオ!!」

「はい!!フェラルドさんもお気をつけて!!」

唖然とする私達を尻目にその後から突如ミオちゃんが現れフェラルドさんにそう言い残すとその壊したドアから外へと飛び出していった。

「ええっ…とぉ～。教官?。これ、不味くないですか?色々と…」

「んなこたぁ～。現場判断ってヤツだ。壊れたもんは後で直せば済むだろうが!それじゃいくぞ!!高町!!」

「壊れたと言うより教官が壊したんじゃ…（行かないのなら、置いて行くぞ!!）あっ…はい!!行こう!!フェイトちゃん!!」

「うん!!」

ミオちゃんが飛び出した後、私は一応教官にこれは不味いのでは?と聞いてみた。

私の声に教官は、現場判断の一言でそれを一蹴。

そして、教官もまたそこから外へと出ようと私達に声をかける。

教官の声に聊か疑問を残しつつも私とフェイトちゃんは、教官の後に続きその部屋を脱出する事となった。

その７５（後書き）

感想待ってます

その７６（前書き）

地上本部　公開意見陳述会会場内

はやて視点

「状況の確認を急げ！！」

「はやくドアを開けろ！！」

「ダメです！！外との通信がまったく取れません！！」

会場内では、停電のため全ての灯りが消え局員達がレジアス中将直々の陣頭指揮の元現状の確認と会場からの脱出作業に奔走している。

「主はやて…。如何致しますか？このままでは…」

「そうやね。なのはちゃん達や六課の事も心配やけど、今ヘタにうち等が動いて帰ってパニックを引き起こすかもしれへんからな…。さて…どうしたらええんやろ？」

ウチの横にいたシグナムが心配そうな顔をしながらウチに声をかけてきた。

その声にウチは、少し考え込みながらいかに会場内にパニックを起こさずここから脱出するのか？その方法に一計を案じていた。

恐らく…これはスカリエッティ一味によるものやろうな…。

これを起こさせへんためにウチ等がいるハズやったのに…。

アカン、アカン!!

今は、起こってしまった事よりもこれからの事を考えなアカン!!

ウチは、自分の頭をブンブンと数度横にフリながらマイナス思考になっていた頭をプラス思考へと強制的に移行しようとする。

こんな時…、あの眼鏡狸がおってくれたら…。

ん?眼鏡狸?…。

そうや!!!

「あっ!!主はやて!!いったいどちらに!!」

「レジアス中将の所や!!ウチには、まだやれる事があったんや!!」

シグナムからの問いかけに答えたウチは、ユウからの伝言の事を思い出し急いでそのメッセージを伝える相手の所へ向っていった。

みんな…無事でいてな…。

機動六課隊舎上空

オットー視点

「ほう…バリアとは…。連中もなかなかやるではないか」

私とディード、それにゼール様の３人は、一緒に連れてきたガジェット達と共に機動六課隊舎への攻撃を開始した。

当初の作戦通り、まずはガジェット４５０機による波状攻撃を開始した所機動六課隊舎の周りにバリアが張られそれによりガジェット達の攻撃が阻まれていた。

その様子を見ていたゼール様は、その全身に覆う騎士甲冑にその表情までは見えないが上ずった声をあげていた事からこの状況をおそらく楽しんでおられる様子。

「このバリア…。どうやらたいした性能は持っていない様子。このまま攻撃を続けていればすぐに破壊出来ますが？如何致しますか？ゼール様？」

「そうだな…。ただ篭城するためのバリアであればこのままでも問題はないが…。これが単なる時間稼ぎにすぎないとすれば…」

「篭城であれば問題ありませんが、時間稼ぎとなればターゲットに逃げられる恐れがあります」

私は、機動六課が張ったバリアを調べその結果をここの指揮にあたるゼール様に報告し指示を仰いだ。

その問いかけに対し、ゼール様は腕組みを崩さないまま２つの可能

性を示唆。

その後をディードが続く。

「どちらにせよ、こちらのスケジュールではあまり六課に時間をかけてはおられないからな。ならばここは、私自ら出向いてターゲットを捕獲する。オットーとディードは、この場で待機。そして、私が戻り次第機動六課に総攻撃をかけここにいる連中を皆殺しにしろ！いいな」

「「ハッ！」」

ディードの声を聞いたゼール様は、そう私達に指示を与えると転送魔法らしきものを自身の足場に展開しその魔方陣の中へと消えていった。

そして、私とディードはその場にてゼール様の指示どおり待機しながら機動六課への攻撃の様子を眺めていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７６…始ります…」

その76

その７６

地上本部　地下

フェイト視点

私となのはそれにフェラルド教官の３人は、先ほどまでいた部屋からエレベーターについているロープを使って地下まで降りそして、スバル達との合流ポイントに急ぎ向っていた。

先頭を走るフェラルド教官に続いてなのはそして、私と続き目の前にある瓦礫をフェラルド教官が先ほど同様両手に魔力を集めそれで瓦礫を破壊しながら進んでいる。

でも…。

「なっ…なのは！ひとつ聞いてもいいかな？」

「何？フェイトちゃん」

「あのさ、フェラルド教官の事なんだけど…。本当に手に魔力を集めただけであれ程の瓦礫やエレベーターのドアなんかを破壊する事なんて出来るのかな？」

私は、ここに来るまで感じていた疑問をなのはに聞いてみた。

すると…。

「あっ、あれね？あれは確か…ほらっ！よくテレビとかで「気」とか言うのを使って壷とか瓦とかを割っちゃうヤツやってたでしょ？あれと同じで、昔フェラルド教官に地球でやってたそういったバラエティー番組を見せたら教官…その人の所に行ってその「気」ってヤツを習いに行っちゃったの。そしてそれを習得しちゃったみたいで…。つまり教官が今までやっていたあれは、手に魔力で覆った上で「気」を右手に集めてドアとかを壊していたって訳。そう言えばあの後、よく授業中にそれを自慢してたな～」

「えっ！！あれって、手品とか何かのトリックとかなんかじゃなかったの！？」

なのはの話しを聞いた私は、その話に驚きの声を上げた。

だって、あの番組私も見た事があるんだけど…魔法かなんかのトリックを使ったものだと思っていたから…。

「あれはトリックなんかじゃなぇ！本当だ！俺が聞いた話によればこれを極限まで使いこなせるようになると髪は金髪で逆立って星ひとつを壊せるようになるんだと」

「う…嘘！！」

私の話を聞いたフェラルド教官は、こちらを向きながら笑顔で話をして来た。

その話に驚きの声を上げる私。

「きょ…教官…。それは、漫画での話じゃないですか？」

それを見たなのはが呆れながら、突っ込みを入れる。

「そうだったか？まぁいい…行くぞ！！」

なのはの声にフェラルド教官は、惚けつつも先を急ぐように声をあげそれに私となのはが続いた。

そう言えば…フェラルド教官って少し長め金髪の髪でその体は筋肉ムキムキな感じで…なのはが言ってたその漫画に出てきそうな感じと言うより、どこかの世界にいる「〇・クラッシャー」って言われる整備士の人みたいな気が…。

私は、なのはの前を走るフェラルド教官背中を見ながらふとそんな事を考えてしまっていた。

「止まれ！！」

そして、そこからおよそ5分ほど走った所でフェラルド教官が私達に向けて声を上げ止まるよう指示を出してきた。

「どうかしたんですか！？フェラルド教官？」

「おいっ！高町…何か音、聞えないか？」

「音？ですか？」

フェラルド教官の声にその場に立ち止まったなのはがフェラルド教官に声をかける。

そして、フェラルド教官の話しを聞いた私となのはは耳を澄ませその音が出ているのかを確認した。

ギュイーーーーーーーーーーン！！

「確かに音がします！！これは…何か…モーターの駆動音のような音が…前から！！あれは…ガジェット？型！！それも大勢で！！」

「後からもだよ！！なのは！！」

「まずいなぁ…。この狭い細道で前後からか…」

「挟み撃ち…ですね。どうしますか？教官…」

耳を澄ませて聞いてみた所、私達がいる地下の細い一本道のその前後から聞えてきた。

その音を確認したなのはと私は、フェラルド教官の方をまるで指示を仰ぐよう見そしてなのはがフェラルド教官に話し掛けた。

「そうだな…ん？あれは？」

「えっ!?何!?」

「あれは…斧の上に人が乗って…飛んでくる?」

なのはの声にフェラルド教官は、難しそうな顔をしながら考え込んだ。

そして、彼が前を見た所前方から来るガジェット達を追い越すかのように巨大な斧の上をまるでサーフボードに乗るかのようにスイスイとそのガジェット達をすり抜けながらこちらの方に飛んできた。

「いーーーーーーーーーーーーーやっ…ほーーーーーーーーーーーーい!!」

「あれは!!ノア!!それにファイバード!!よっしゃー!!これなら!!」

「おっ!?フェラルド!!いい所にいたな!!(こいっ!!ファイバーーーーーーーーーーーード!!)だとよ?んじゃ、いくぜ!!」

<あいよー!!お嬢!!旦那!!>

ガジェットを追い越したそれに乗っていた大人の格好をしたノア(フルモード)が声をあげながらこちらに向ってくる。

それに気づいたフェラルド教官は、声を上げる。

フェラルド教官の声に気づいたノアは、彼女が乗るその巨大な斧「ファイバード」に声をかけそしてそのスピードをあげた。

「高町!!ハラオウン!!お前等2人は、瓦礫に隠れてろ!!コイツ等は、俺とファイバードとノアで殺る!!」

「えっ?この数を!?たった3人で?」

「フェイトちゃん!!今のままじゃ私達はただの足手まといになるだけ!!ここは、教官達に任せよう!!それに教官とファイバードのコンビならこの程度の数くらい、まったく問題ないから」

「う…うん…わかったよ。なのは」

フェラルド教官からの指示を聞いた私は、その指示に疑問の声をあげる。

その声になのはが私の腕を引っ張りながらそれが問題な事をつげ、なのはの声に私は疑問を残しつつもなのはと一緒に近くの瓦礫の影に隠れる事にした。

「よっしゃ!!いくぜ!!」

私となのはが瓦礫に隠れた事を確認したノアは、声をあげその場から飛び上がる。

そして、誰も乗っていないファイバードはそのままフェラルド教官の下へ。

ガシッ!!

「おっしゃーーーー!!一気に行くぞ!!ファイバーーード!!」

＜おうさ！！＞

飛んできたファイバードの柄の部分を右手で掴んだフェラルド教官は、ファイバードに声をかけながら掴んだ右手をそのまま後に回し飛んできた勢いを殺す。

教官の声にファイバードは、ついているカードリッヂを2つ程ロード。

トン。

「前は、任せたぜ！！」

「おうっ！！なら、後は頼むぞ！！ノア！！」

「あいよ！！」

ファイバードを受け取ったフェラルド教官の方に飛んできたノアが彼の左肩に一度着地。

そして、彼等に声をかけ彼の肩を利用し再度飛び出した。

ノアの声に答えたフェラルド教官は、ノアが飛び出した後ファイバードを両手で持ちそしてそれを振り上げた。

「食らいやがれ！！フレイム…バード！！クラーーッシュ！！」

「ガイヤナックル、モード3！！いくぜ！！シューーーティング…

ブレイカーーーーーーーーーーーー！！」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴーーーーーーーーン！！

ノアが離れた後フェラルド教官は、振り上げたファイバー度をそのまま振り下ろした。

振り下ろしたファイバードからは、まるでフェニックスのような火炎魔法を纏った鳥が前方のガジェット達へと飛び立ちそのままガジェット達と激突。

それにより前方のガジェット達は、全滅。

その一方、フェラルド教官の肩から飛び出したノアは、そのままの状態で自身の右手につく篭手方ストレージデバイス「ガイヤ・ナックル」の右手拳の前に巨大なドリルに展開した。

展開させたドリルを回転させ、そして自身の周りに白銀の魔力を纏いながらその勢いのまま後方から来たガジェット達へと突撃。

ノアがそのガジェット達に突撃してから数秒後、その場から爆発が起きた。

そして、その爆発から脱出したノアはフェラルド教官の背中あわせの状態で着地。

爆発した方を見つめながら、展開していたドリルをしまいそして構えたまま残りがないか確認をしていた。

＜残存は…ナシ！！とりあえず、ここはもう大丈夫だぜ？お嬢に旦那＞

「ふぅ～。ともかく助かったぜ～、ノアにファイバード。にしてもよくここにこれたな～」

残存している機体がない事を確認したファイバードが声をあげた所で教官とノアは、その警戒をときお互いに向き合いながら教官がノアに話しかけた。

「ああ、ミオの例の蝶から連絡をもらってな。ミツキの指示で艦隊を動かそうと最初はしてたんだが、あいつ等…どうやらあたい達が転送出来ないようにこっちに来る次元世界の間に強力なネットを張って艦隊が来るのを阻止してたんだ。それで、数人だけなら通れる所を見つけて先行部隊としてあたい達がこっちに来たってことさ。ちなみにファイバードは、こっちに行く時に連れてけって強引についてきたんだよ」

＜あったりめぇだろう！こんな楽しいお祭りにおいらをおいてけぼりにするなんざぁ～、ゆるせるかっ！てんだ＞

フェラルド教官の声にノアが事情を説明しその後をファイバードが続いて話をしていた。

「教官！！ファイバード！！それにノア！！お疲れ様」

＜おう！！誰かと思えば高町の嬢ちゃんじゃねぇか！久しぶりだな！！＞

「本当、お久しぶりだね？ファイバード？その様子だとようやく夢がかなったの？」

ノア達が談笑をしていた所、安全を確認した私となのはが彼女達に近づきなのはが彼女達に声をかけそれを聞いたファイバードがなのはと話をしていた。

「ねぇ？なのは？私にも紹介してくれないかな？えっと…その…」

＜おう！おいらは、ファイバードっつうフェラルドの旦那専用の巨大斧型インテリジェントデバイスだ！んでもって夢ってのが、巨大な合体ロボット型デバイスのＡＩになる事だぜ！だが、その夢はまだまだ先のようだ…。なんせ、今回もまだ斧だしそれにおいら一人でまだ飛べねぇんだ。さっきみたいに、ノアがおいらの操縦と燃料変わりの魔力をおいらに送ってもらってその上でおいらに搭載されたオリジナルの飛行魔法を使ってなんとか飛べるようになったんだ。…それに…まだ、その最大の障害が…＞

「最大の障害？それっていったい…」

なのはに話し掛けた私にファイバードが自己紹介をしてくれた。

でも、その荒っぽい話し振りに私はタジタジになりながら彼の話の中にあった「最大の障害」について彼に聞いてみた。

「それは、こいつの持ち主のフェラルドって訳さ。でも…その理由

ってのが…プププッ！！」

「ノア！！笑うんじゃねぇ！！コイツは、色々とわがままなんだよ！！なんせ待機モードにはつまらねぇって言ってならねぇし、ロボット型のデバイスになりてぇとか言い出すし！！第一！！ファイバードがロボットになったら俺はコイツの中の狭いコックピットで暴れなくちゃなんねぇんだ！そうなったら俺がつまらなくなる！だから、ダメだ！！」

「それなら、別のデバイスをミツキに作ってもらえばいいのに…（俺はコイツでなきゃダメなんだ！！）」

私の問いかけに対し今度は、ノアがフェラルド教官の方を見そして、その理由に笑いを堪えながらそれに答える。

それを聞いたフェラルド教官は、笑いを堪えるノアに怒りつつも私にその理由を話してくれた。

「ねぇ…なのは…。昔から思ってたんだけど…フェラルド教官って…私と同じ…」

「そうだよ！生粋のバトルマニアだよ！！フェイトちゃんと同じ…ね♪もちろん、ファイバードもだけど」

フェラルド教官が私にその理由を話してくれた後、ノアの突っ込みに対応している間私はなのはにフェラルド教官は自分と同じでは？と聞いてみた。

するとそれを聞いたなのはは、笑顔でそうである事を私に教えてくれた。

「それで、ノア？あなたはこれからどうするの？もし、よかったら私達と一緒に…」

「これから、スバル達とも合流するから一緒にどう？」

ノアとフェラルド教官の話がすんだ所でなのは、私の順でこれから一緒に行かないか？と彼女を誘ってみた。

「そうしたいのは山々なんだが…すまねぇ！あたいはあたいでこれから色々とやる事があってな、一緒にはいけねぇ。けど、あたいが確認出来る限りあいつ等は今の所はまだ無事だ。それとミツキからの指示でフェラルドはこのままなのは隊長達と一緒にスバル達と合流するまでついてやってくれ。んでもって、合流した後は好きに暴れて言いとさ」

「おうよ！！」

私達の誘いにノアは、残念そうな顔をしながらそれを断りフェラルド教官にミツキさんからの次の指示を与えそれを聞いたフェラルド教官はそれに返事をしていた。

「そうか…。なら、気をつけてね！ノア」

「ああ！そっちもな！それと…スバル達の事…頼むわ…なのは隊長、フェイト隊長」

「うん！まかせて！！」

「わかった」

ノアの話を聞いたなのは最初は残念そうな顔をしていたが直に切り替え彼女に声をかけた。

それを聞いたノアは、それに答えつつもスバル達の事を私達に託しその場を後にした。

「さて…俺達も急ぐぞ！！」

「「はい！」」

ノアを見送った私達は、フェラルド教官の声に返事をしスバル達との合流ポイントへと走り出した。

機動六課隊舎内　格納庫

ヴァイス視点

（隊舎内に侵入者発見！！近くにいる武装隊員は、急いでそちらに急行して下さい！！）

まったく…、侵入者？いったいどこから…。

俺は、司令室から聞えてくるアルトの声を確認しながらストームレイダーでセットアップした上で急ぎ格納庫へと向っていった。

その通信から聞えてくる、司令室とシゲさん達がいる整備員達の詰

め所でのやり取りを聞くところによると…。

現状では、非戦闘員の避難もまだ済んでおらずそれにバリアの方も急ごしらえで部隊長の許可を得ないで作っていたためそんなには持たない。

だから、急いで六課隊舎を放棄して脱出しようと提案しているシゲさんに対しグリフィスは救助が必ず来るハズだからとりあえず非戦闘員の人達が避難するまでバリアを持たせて欲しい。

そして、もしバリアが壊れてもシャマル先生達が既に戦闘準備を整えてくれているから多少は持つ！だから、シゲさん達も急いで避難してくれとのやり取りが続いている。

正直言って、俺も外を見たがあの数はいくらシャマル先生やザフィーラの旦那が優秀であってもかなりマズい…。

だが、こうは言ってみても俺達は管理局の局員だ！！

俺やグリフィスにも多少なりに局員としての意地とプライドってヤツがある。

だから、部隊長達も地上本部で頑張っているんだ！！

部隊長達の留守の六課を俺達で守れなくてどうする！！

その強い意志が俺をその侵入者がいると言われる格納庫へとその歩みを進めさしていた。

（レーダーに反応です！！マスター！！）

ストームレイダーからの声に俺は、物陰に隠れそしてストームレイダーを構えそれについているスコープから格納庫の中の様子を見た。

すると…。

「あ…あれは…。ヴィヴィオ!!それにヤツは!!」

ガクガク…ガクガク…。

スコープで見えた先には、気を失った様子のヴィヴィオを抱えた小学生くらいの子供がたっていた。

まだ、こちらには気づいていない!!

今なら!!

俺は、ストームレイダーのその引き金を引こうと指をその引き金に指をあてる。

だが…。

「どうした?打たないのか?」

んな!!気づいていたのか!!

そこにいた少年は、こちらを見ないままこちらに声をかけてくる。

俺は、その声に驚きつつも引き金を引こうとする。

だが…。

そこから、指は動く事はなくその場で俺は何時の間にかガクガクと震えていた。

「そんなに震えて…。お前、新兵ではないのであろう?ヴァイス・グランセニック?」

俺の様子に気づいたその少年は、こちらを向き物陰に隠れたままの俺に声をかけてきた。

「てめぇ…なんで俺の名を…」

「そんな事は、調べればすぐにわかる。貴様…昔妹打ってそれからデバイスを握れなくなったのであろう?だから、この格好で現れた。どうだ?中々面白い趣向だろ?」

俺の問いかけにその少年は、ニヤリとしながらその訳を話してきた。

「へ…ヘドが出る話だぜ!!それにお前の事を俺が知らないと思っていたのか?黄天!!…いや!!ゼール!!」

「ほう…私の名を貴様が知っていたとは…。だが、それを貴様が知っていたからどうなる事でもない。貴様はここで死ぬのだから…」

ゼールの話に俺は、啖呵を切った上で奴の名を叫んだ。

俺の話に奴は、最初こそ驚いた様子だったがすぐにニヤけた顔に戻りそして、黄金色の魔力弾を自身の周りに数十発展開させた。

「そんな事…やってみないとわからないぜ！！」

「フッ…これを見てもまだそんな口が叩けるとはな…。だが…それもここまでだ。サウザント…アクション…」

奴の話しに俺は冷や汗をかきつつも俺は、ストームレイダーの引き金を引いた。

「くっ…くっそーーーーーーー！！うわぁーーーーー！！」

ドゴーーーーーーーーーーーン！！

引き金を引くと同時に奴が放った魔力弾が俺を襲う。

それを俺は、かわす事が出来ずそれをくらいそしてその魔力弾によって破壊された瓦礫の中に埋もれていった。

「フッ…。他愛もない…。心配せずともすぐにあの出来そこないもお前の後を追わせてやるさ。さて、それでは行きましょうか？聖王様…。フフフ…ハーーーーハッハッハッ！！」

瓦礫の中で薄れ行く意識の中で俺は、奴の声を聞きそしてヴィヴィオを連れて自身で展開した転送魔法の中に消え行く奴を見…。

そして…

すまねぇ…ミツキ…。

すまねぇ…みんな…。

俺は、そう呟きながら意識を失っていった。

その７６（後書き）

次もあります。

その77（前書き）

機動六課隊舎　上空

オットー視点

「ん？転送反応…ゼール様か…」

ビュイーーーン。

私のレーダーにゼール様の転送反応の表示がでた。

それを確認するとほぼ同時にまずは少年の格好をしたゼール様が現れそしてすぐにいつもの全身黄金色の鎧兜に覆われた姿に戻った。

「お疲れ様ですした。ゼール様、それで首尾の方は？」

「この通りだ。それで、クワットロはまだか？奴がこれを引き取りに来るとの事であったが…」

ゼール様の姿を確認したディードが彼に話し掛ける。

それを聞いたゼール様は、その腕に抱えた少女をディードにみせながら彼女の回収に来るハズのクワットロお姉様の事をディードに聞いた。

「残りおよそ、２０秒で到着されます。来ました」

「お待たせしました～。ゼール様♪」

ゼール様の話に私が答えた直後、クワットロお姉様が現れ彼に声をかけた。

「遅いぞ」

「申し訳ございませ～ん♪いろいろと準備をしておりまして～」

クワットロお姉様の話にゼール様は、一言でそれに答えそれに対しクワットロお姉様は妖しい笑みを浮かべながらそれに答える。

「まぁいい。さっさと聖王様をスカリエッティの所へ持っていけ。それと、遅れた罰としてあのバリアをなんとかしろ（は～い♪わっかりました～♪）では、私はこれより次の作戦に映る」

「「はっ」」

「いってらしゃいませ～♪」

そう言い残したゼール様は、持っていた陛下をクワットロお姉様に渡し地上本部の方へと飛び立っていった。

「それで、如何いたしますか？クワットロお姉様？」

「あの程度のバリア、私たちが手を出す程の物ではないわよ。オットーちゃん、数十体のガジェット達にこれから指示する一点をいっせいに集中攻撃させて。これであのバリアもおしまいだから♪それ

じゃ、私は、聖王陛下をドクターの所へお連れするから…。あとはお願いね」

「了解しました。クワットロお姉様」

クワットロお姉様は、そう指示した後私の所に攻撃するポイントを示しドクターの所へと飛び立っていった。

「攻撃ポイントを各ガジェットに指示完了。攻撃…開始…」

クワットロお姉様がいなくなった後、私が攻撃開始をガジェット達につげた。

そして…。

ドゴーーーーーーーーーーーーーーン!!

「バリア…消失確認…」

「一斉攻撃開始…」

バリアの消失を確認した私に続きディードが次の指示をガジェット達に与えていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７７…始ります…」

その77

その７７

地上本部　公開意見陳述会会場

オーリス視点

「オーリス三佐!!」

「あなたは、八神二佐!?どうかされましたか?」

私が周囲の状況確認等に追われていた所、八神二佐が私に声をかけてきた。

「レジアス中将に至急お話しがあります!!取り次いでいただけますか?」

「中将にですか?今中将は陣頭指揮でお忙しく、よろしければ私が承りますが?」

八神ニ佐からその内容を聞いた私は、事前に決められていた緊急時

のマニュアル通りの対応を八神ニ佐にした。

「構いません。何せこれは、レジアス中将もしくはオーリス三佐に告げてほしいとの事でしたから」

「中将か私に？それはいったい…」

八神ニ佐からの話しに私は、疑問の声をあげる。

「はい…。何か起こればレジアス中将かオーリス三佐に蒼龍の首飾りを使えと伝えて欲しいと私がユウを通してのミツキからの伝言です。この事を中将にもお伝え頂けますか？」

「蒼龍の首飾り…わかりました。急ぎこの事を中将にお伝えいたします。では…」

八神ニ佐からの言葉に私は、態度を硬化させその場を後にしようとした。

「あの！！ちなみにその蒼龍の首飾りというのは？いったい…」

「それは、あなたが知る必要はありません。それでは失礼いたします」

その場から離れる私を八神二佐が呼び止め「蒼龍の首飾り」について聞いて来た。

彼女の話しに私は、知る必要がない旨を言い半ば強引にその場から立ち去った。

はやて視点

「くっ…。やっぱ教えてはくれへんかったか」

オーリス三佐にミツキからの伝言を伝えたウチは、そのついでにその伝言の中で気になっていた「蒼龍の首飾り」の事についてオーリス三佐に聞いてみた。

だが、それについては一切答えてもらえず彼女が立ち去った後その悔しさを露わにしていた。

「主はやて!!こちらにおられましたか?」

「シグナム!?いったいどないしたん?」

ウチが悔しがっていた所遅れてきたシグナムがウチに声をかけてきた。

そう言えばシグナムの事…すっかり忘れとったわ（笑）

「主はやて!!アレをご覧下さい!!スカリエッティが…」

「なんやと!!」

シグナムの話にウチは、シグナムが指を指した方を見た。

すると、そこには先ほどまでなかった巨大スクリーンが登場しその画面には外の様子と恐らくホログラフィーによるものやろう巨大なスカリエッティの姿が映りだしていた。

ウチとシグナムは、今いる場所からその画面が見やすい場所まで移動しその様子を見ることにした。

（如何ですかな？公開意見陳述会の会場にお集まりの皆さん、それにこの映像をご覧の皆さん…。この私の作品達によるデモンストレーションは？）

「ふざけるな！！」

「貴様！！いったいなんのつもりだ！！」

「こんな事をして許されるとでも思っているのか！！」

画面に映るスカリエッティが憎たらしい笑みを浮かべながらウチ等に向けて話をしてきた。

その声を聞いた会場からは、まるで野次にも似た怒号が響き渡っていた。

「許される？あなた方は、いったい何を言っているのですか？そもそもこれはあなた達腐った管理局の上層部及び最高評議会の方々が招いたものではないですか？」

「な…何ーーーーーーー！！」

「き…貴様っ！！いったい何を根拠にこんな事を！！」

ニヤケながら話をするスカリエッティに対し、恐らく管理局の上層部にいる連中かと思われる人達がまるで火に油を注がれたように怒

りをさらに露わにする。

「クックックッ…それについては、私の計画が成就した時にでも明らかにするといたしますか。ですが、それまであなた方が生きていればの話しになりますが。さて…今回私自らこうして現れたのには、訳がありまして…。単刀直入にお伺いいたしましょうか。「蒼龍の首飾り」はいったいどこにありますか？スポンサーのレジアス中将？」

「中将がスカリエッティのスポンサー？そ…それに蒼龍の首飾りやと！！」

スカリエッティの話しにウチは、驚きの声をあげた。

その一方、会場では先ほどまでの罵声の嵐はどこへやらそのスカリエッティの話しについて何のことだが確認している声等ざわつき始めその視線の全てが会場にいたレジアス中将の方へと向っていた。

「いったい何の事だ？私にはさっぱりわからない事だ。それよりさっさと武装を解除し投降しろ！！スカリエッティ！！」

「やれやれ…。惚けますか…。では、今回特別に教えてあげましょう。「蒼龍の首飾り」というのは、あなた方管理局や聖王教会ならびに各種方面の色々な方々が探していた情報管理システム及び巨大防衛システムの事です。そもそもこのシステムは、物質や人間を他の次元世界や目的の場所までピンポイントで転送するシステムの事をさしているのですが実を言うとそれだけのものではない…。この「蒼龍の首飾り」は、それ以外にも重要拠点の防衛のための防衛システムを搭載しておりましてね…。これが実にやっかいなもので、これを発動すれば今まで有利に働いていた敵側のシステムや魔法等

その全てがキャンセルされてしまうといった物なのです。私の計画を成就させるためにはそれが大変邪魔でしてね…。それで、この「蒼龍の首飾り」を作る計画に当初から参加していたレジアス中将にそのありかをお聞きしたいと思いまして。それと、それを扱う事が出来る者の…。ユウ・サエグサとその姉のミツキ・サエグサのその所在を彼の上司であり彼女の友人である機動六課の部隊長の八神はやて二佐にお伺いしたいのですが？」

「何ッ！！あのシステムが！！」

「レジアス中将！！あなた今まで言ってた事は嘘だったのですか！？」

「説明をしていただこう！！レジアス中将！！」

「あの小娘め～！！やはりそうだったのか！！」

「今ヤツ等はどこにいる答えろ！！八神二佐！！レジアス中将！！」

中将の話に対しスカリエッティは、その「蒼龍の首飾り」についての説明をした上でそのありかとユウとミツキの所在についてウチに聞いて来た。

彼の話しに会場中からは、そのシステムを欲していた連中からレジアス中将やウチに向けてその事を問いただす声が響いていた。

それに対し中将は、「知らん」の一言でその声を一蹴。

中将の解答を聞いたスカリエッティは、やれやれといった様子をしながらその視線を今度はウチに向けてきた。

「ユウなら、六課におると思うけどウチは今朝からずっとこっちにおったからなぁ～。今日については、六課におらんとなるとウチにはさっぱりや。それにミツキに関しては、ファントムの連中と一緒にミッドから離れとるっちゅう話しやで？」

「そうですか…。こちらでも2人との今朝まで、それぞれの部署にいる事はわかってはいたのですが…。なら、強引にでも出てきてもうとしましょうか…。彼とその姉であるミツキ・サエグサさんに…。そして、彼等から「蒼龍の首飾り」の事を聞き出せばいいのですから…」

「強引にやと！！いったい何をするつもりや！！スカリエッティ！！」

ヤツの問いかけに答えたウチは、スカリエッティの話しに怒りを露わにした。

「それは、見てのお楽しみです…。八神二佐？それでは…。あっ！！そうだ、そうだ。もし、命が惜しい方がおれば私の所までご連絡を。オープンチャンネルで私に呼びかけていただければ私の娘達が随時対応いたしますので…。それでは…」

プツン。

「クッ…」

ウチの話しにスカリエッティは、ニヤニヤしながら答え最後にウチ等に対し投降を呼びかけその映像は終了した。

その消えた画面をみながらウチは、現状では何も出来ない自分に対し苛立ちを露わにしていた。

地上本部　地下最下層

巨大情報防衛及び情報管理システム「蒼龍の首飾り」

中央コントロールルーム

ミツキ視点

「やっぱり…ここしかないよね…」

ミオちゃんからの連絡を受けた私は、滞在していた拠点からノア達と共に先行部隊としてこちらに到着。

そして、彼等と別れた後この地上本部の地下…その最下層にある巨大情報防衛及び情報管理システム「蒼龍の首飾り」の封印をとく作業を合流したミオちゃんと共に行っていた。

そもそもこのシステムは、私の両親とその研究チームのみんなで考えレジアス中将などの協力によりこういう時のために地上本部の地下に超極秘で建造されたもの。

ユウのデバイスの中にあった例の設計図を具現化したものだ。

当初は、これを使ってミッドの防衛につく計画であったがそのエネルギーの根源である今は私が持つ蒼天の石が人間との契約が必要でありこのシステムを使うという事はある意味人柱をささげなければならない事から私の両親、その研究チームのチーフそれとレジアス中将そして、ファントムナイツの相談役で伝説の三提督の一人であるミゼット・クローベル提督との間で話し合いこの場にて封印される事となった。

それに気づいたその研究チームに資金援助などをしていた組織がそれに怒り、黄天を使いその施設を攻撃…。

その研究チーム…そして、その組織から監視役として派遣された私の仲間達…その全員がその事については一言も口を割ることなく…この世を去った…。

その生き残りである私も…それにノアも…中将からその事直接私に口にするまでの間その事を聞かれても黙秘を貫き通し私が局員になってからもその事については、中将とミゼット提督…。それに、フアントムのごく一部の人達にしか話しをしてはいないし中将やミゼット提督も同様の対応をしてくれていた。

ユウには、例の設計図を見せた後に少しだけ話はしたけどここには連れてきた事はない…。

そして、現状でこれを使う事が最良の手段であると考えた私は、このシステムの中央コントロールルームの中にいる。

ここは、人が一人入れるだけど狭い球状のスペースでここからこのシステムをある程度操作することが出来るしある意味ここは私専用に作られている。

だって…。

この計画が実行された場合…。

ここにいるはママじゃなくて私…だったんだから…。

計画当初は、私の前の蒼天の石の契約者である私のママがここに入る事になっていたんだけど私が蒼天の石との契約が可能である事がわかった時に私が自ら志願したの。

当時まだ赤ん坊だったユウには、両親の存在が必要だって思ってね。

でも…それで計画が進んでいた所突如、ママとパパはその事に対し猛反対をしてきた。

そして、私がその反対する理由を聞いた所出て来たのが養子縁組の書類…。

あれには本当びっくりしたわよ。

そもそも私の体をユン先生が私に内緒で調べた時にその遺伝子を検査した所、どうやら私はパパとママの精子と卵子による体外受精で生み出された物がベースの試験管ベイビーである事がわかったんだって。

その後、そのベースにした遺伝子を色々と弄ったためにパパとママが持ち得ない能力を私が持ちえたらしくそれを聞いたパパとママがそれなら自分の娘だ！と考えたらしくそう言う行動に出たんだって。

それに私の名前の「ミツキ」って名前も、パパのムツキの「ツキ」とママのミリーの「ミ」をとって自分達で産めなかった変わりに自分の娘だって表すためにつけたとか…。

話を聞いた私は、もちろんその事に感動したしそれ以上2人には反論せずにそれを受け入れその当時の名前であった「425番」から「ミツキ・サエグサ」にその名を変えユウのお姉ちゃんとなり家族を得る事が出来た。

でも、そんな幸福な時間もあっと言う間に終わり…。

そして、私は、その亡くなった両親との約束を破りここにいる。

ここには、もう二度と近づくなと言われていたんだけど…。

ごめんなさい…パパ…そして、ママ…。

今、みんなを守るためにはこれが必要なの…。

悪い娘を許して下さい…。

私は、辺りを眺めながらそんな事を考えていた。

「ミツキ!!やはりここにおったか!!」

「れ…レジアス中将!!いったいどうして?」

私が作業を進めていた所、いきなりレジアス中将からの通信が入った。

「今、ミゼット提督の所に来ていたノアからここにお前が来ていることをオーリスが聞き出してくれてな。それで通信をした。それで、やはり…使わなくてはならないのか？…それを？」

「はい…。現状からするとこのままでは、地上本部が壊滅する恐れがあります。それと先ほどのスカリエッティからの通信からすると私とユウの知り合いのその全てが私たち…。いえ、私が出ていかないおかげでその生命の危険にさらす事になります。それにただ、私一人が出て行った所でこの状況をひっくり返す事は恐らく出来ません。ですので、これを使って今足止めをくってるファントムの艦隊の邪魔をしているあのネットを除去、そして今戦っている局員達に有利なるようにこのシステムを使ってするまでです！」

中将からの通信に私は、怒られると思っていたが中将は現状を把握しているらしく心配そうな顔をしながら私がここに来ている事を知った理由等を話す。

それを聞いた私は、作業の手を止めないままこのシステムを使う理由を中将に告げた。

「そうか…。なら…仕方がない…。私もそれの使用を許可しよう。だが、システムの長時間の使用とお前が人柱になる事さらにお前が死ぬ何てことは絶対にゆるさん！！いいな！！」

「はい！わかりました…。それと…ありがとうございます」

私の話を聞いたレジアス中将は、すまなそうな顔をしながらそう答えそれに対し私は作業の手を止め通信画面に映るレジアス中将に敬礼をしそれに答えた。

「それで、システム起動まで後どれ位かかる？」

「システムの封印の解除作業はその大半の作業は終えております。後は、ミツキお姉様がいる中央コントロールからのエネルギーの充填作業におそよ５～１０分程度のお時間を頂きたいのですが？」

「ミオちゃん、相変わらず作業早いね。こっちもこれでヨシっと！！後は…トリガーを…あっ！！中将？ひとつお願いがあるんですけど…いいですか？」

レジアス中将の話にこの部屋の外にあるサブコントロールルームにいたミオちゃんから作業具合についてその説明が入る。

それを聞いた私は、彼女のその作業の手早さの感心した声を上げその後中将にお願いをしたいと願い出た。

「なんだ、言ってみろ」

地上本部　公開意見陳述会会場内　臨時司令室

はやて視点

「なんやて！？そのトリガー役をウチがするんか？」

（そう！！お願いできる？はやて？）

スカリエッティのあの通信の後、オーリス三佐がウチをこの会場内に急遽設けられた臨時の司令室（とは言っても会場の隅っこに机や

椅子をならべて外から見えないようにしただけのものなんやけどな）
に呼びだされ通信画面の向こうにいたミツキから「蒼龍の首飾り」
のトリガー役を頼まれた。

「その前に、トリガー役って一体何をするんや？」

（な～に、やる事はいつもと変わらないわよ。私がエネルギーの作
る役でミオちゃんが照準とエネルギーのコントロールを担当。そし
てはやては、いつも通りに自分の魔法を詠唱してそれを発射するだ
けよ）

ミツキの頼みにウチは、疑問に感じていたことを彼女に聞いてみた。
するとミツキは、いつもの調子で飄々（ひょうひょう）と役割分担
を説明する。

「と言う事は、いつもリインがやってる事をミツキとミオちゃんが
やるって事でええんか？」

（そう言う事。ただ、その呪文は真上に発射してほしいの。そうし
ないとそのシステムの魔法が広範囲に広がらないのとシステム自体
かなり老朽化しているから何度も使う事は出来ないから、それだけ
は頭に入れといて。それが反撃の狼煙になるハズだから…）

ミツキの話を聞いたウチは、再度ミツキに質問をした。
それに対しミツキは、それでええ事と注意点をウチに言ってきた。

「了解や。それと…これが、最後の質問や。これを使った後、ミツ
キ…あんた自体が大変な事になる…何てこと…ないよな？」

「そ…それは…」

ウチは最後の質問を真剣な眼差しで彼女にぶつける。

そのウチの質問に対しミツキ…どうやら返答に困っている様子。

そりゃ、当然の質問やろ？

これを使ってみんなを助ける事にはウチも賛成や。

でも、みんなが助かってミツキ一人がその犠牲になる何てこと…ウチは絶対にそんな事に手は貸せん！！

それに、そんな事をしたらユウ達に何言われるかわからんからな。

「まぁ、このシステムを使う以上ミツキの魔力は結構消費されるしこれを見た黄天が間違いなくミツキを狙ってくる事になるしミツキもヤツとの決着をつけたがっている。その決着がどうなるのかはあたいにもわからねぇが、システムを使っただけでミツキが死ぬなんてことは今サブコントロールルームにいるミオがそんな事絶対にさせねぇ。あたいもミオもその気持ちは、はやてと同じだ…」

（私もそうはさせません！！絶対に！！もし、ミツキお姉様がそんな事をしようもんなら強制的に中から出て頂きます！！）

（ノア…ミオちゃん…）

返答に困っていたミツキを見かねたノアがウチの肩をポンと叩きながらその理由をウチに告げ別の通信画面からは、ミオちゃんが真剣

な表情でウチに訴えかけてきた。

それを聞いたミツキは、自分の考えをまるで見透かされた様子で驚きながらも感謝しているような声を上げていた。

「そうか…。わかったわ、なら協力する。その代り、黄天との対決には横槍をいれさせてもらうしこれが済んだらご飯をおごってもらうで！ミツキ…」

（わかったわ…はやて…それとありがとう…）

ミオとノアの話しを聞いたウチは、彼女達に協力する事を決断した。

それを聞いたミツキは、うっすらと涙を浮かべながらウチの答えに感謝の意を述べていた。

「そうと決まれば早速準備開始や！！」

「おう！！」

（（了解！！））

「「「「「おーーーーーーーーーーーー！！」」」」」

ウチの号令を合図に近くにいたノアと通信画面の向こうにいるミツキとミオちゃん…それに周辺にいた地上本部の局員達さらに本局の局員達までもその事を聞いてたらしく、その会場にいる全員が声をあげそして反撃のための準備を始めた。

その７７（後書き）

まだまだ続きますのと感想待ってます

その７８（前書き）

地上本部施設内　地下道

ティアナ視点

「スバル！！先行しすぎ！！少し落着きなさい！！」

「だ…だって！！ギン姉が！！ギン姉が！！」

無事なのは隊長達との合流を果した私たちは、なのは隊長と一緒にいたフェラルドさんと別れフェイト隊長とエリオそれにキャロの３人が六課の方へと向かった。

そして、私となのは隊長それとスバルの３人で今だ連絡がつかないギンガさんの所へと現在向っている。

私を抱っこした状態で飛行するなのは隊長の前をスバルが焦りの表情で先行していた。

スバルに先行しないよう私が告げるが、彼女はいっこうにそれを聞こうとはしない。

「仕方がないよ。こういう所だとスバルの方が速いから…。とにかくこっちも急ぐよ！！ティアナ！！」

「わかりました。なのは隊長」

スバルの先行に怒る私をなのは隊長が宥め飛行速度を上げる事を私

に言い私はその指示に従った。

私の声を聞いたなのは隊長は、飛行速度をあげ先行するスバルの後を追った。

ギンガさん…どうか無事でいて下さい…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その７８…始ります…」

その78

その７８

機動六課隊舎内　司令室

グリフィス視点

「格納庫大破!!シゲさん達の安否不明!!」

「交代の武装隊との連絡取れません!!」

「ヴァイス陸曹!!ヴァイス陸曹!!ダメです!!ヴァイス陸曹との連絡取れません!!」

シャーリー、ルキノそれにアルトからの報告が次々と入る。

張っていたバリアもガジェット達による一点集中砲火によりすでに消失。

現在の残存戦力と言えばシャマル先生とザフィーラさんのみ…。

「ユウからの連絡は!!（まだです!!）クッ!!こんな時にあいつ…。救援は!?（ＳＯＳは出しつづけていますが返事がありません!!）」

アルトに対しユウからの連絡が来たか確認するが連絡はなくルキノに救援の確認をしてもそれもこないとの応答が僕の所に入る。

既にガジェット達の攻撃により六課隊舎は半壊。

画面から見える映像からは、まるで火の海の中をシャマル先生とザフィーラがガジェット達との交戦の映像が表示されている。

僕の判断が間違っていたのか…。

シゲさんに言われた通りすぐに退避していればこんな被害になる事は…。

「戦闘機人の一人がこちらに向ってきます!!それにガジェットからの砲撃!!ここを直撃します!!」

「退避だ!!みんな逃げろ!!」

ドカーーーーーーーーーーン!!

「うぁあああああああああああーーーー!!」

僕は、自分がした判断に後悔しデスクについていた手を握り締めていた頃シャーリーからガジェットの砲撃がここに直撃するとの報告が入った。

それを聞きハッとした僕は、シャーリー達にこの場からの退避を命じる。

だが…その判断もまた…遅かった…。

バチバチ…。

バチバチ…。

ガラガラ…。

「うっ…。み…みんな…無事か？」

ガジェットの砲撃を受けた司令室は、その攻撃により爆発を起こした。

その爆風により僕は吹き飛ばされ自分の体の上にのった瓦礫をよけながら立ち上がり辺りを見ながらみんなの無事を確認しようと声をだした。

破壊された司令室は、その機能をすでに失っており停電し暗くなっ

たその司令室はつい先ほどまで大型スクリーンがあった場所にガジェットの砲撃によるものであろう大きな穴が空いており壊れた機器が放つ電気の光とその穴から入る外光があたりを照らしていた。

その光を便りに僕は、みんなを探した。

「う…ううん…」

ガラガラ

「る…ルキノ!!ルキノ!!大丈夫か!!」

瓦礫の中から頭を抑えながら立ち上がろうとするルキノを見つけた僕は、彼女の元へといきふらつきながら立つ彼女をささえながら怪我の具合を確認した。

「わ…私は、大丈夫です。グリフィスさん…」

「よかった…。君が無事で」

僕の声を聞いたルキノは、痛みを抑えながら今出来る限りの笑顔でそれに答えてくれた。

「悪いけど…。そんなにイチャイチャしないでくれるかな?グリフィス君?」

「えっ!?そ…そんな事…。よかった!!シャーリーも無事で」

「何!?そのついで見たいな言い方!!（怒）」

僕とルキノの光景を少し離れた所から見ていたシャーリーが腕を抑えながら声をかけて来る。

それを聞いた僕とルキノは、2人とも顔を真っ赤にしながらその場から離れ僕がシャーリーの無事を喜ぶような声を上げるが彼女はどうやらそれを信じてもらえてないらしい…。

イラついた顔をしながら僕に詰め寄ってきた。

まったく…、いくら彼氏がいないからって…八つ当たりもいい所だよ。

「なんか言った!!グリフィス君!!（怒）」

「イエ…ナンデモアリマセン…。シャーリーサマ…」

僕の心の中のボヤキが聞えたのかさらに怒りを露わにするシャーリー。

「あ…アルト!!」

「えっ!!…あれは、戦闘機人!!」

僕とシャーリーのやり取りを微笑ましい表情で見ていたルキノが僕等がいる所の奥で起き上がろうとしていた頭と右腕から血を流してるアルトに近づく誰かの姿を見つけアルトに声をかける。

それに気づいた僕がそれが戦闘機人である事をつげた。

「アルト…クラエッタだな?」

「な…何よ!!（ヴォン）うっ!!」

アルトに近づいた戦闘機人は、彼女の名を確認。

それに答えたアルトに対し、手に持っていた赤い光を放つ二本の剣のその一本を彼女の喉元に突きつけた。

アルト視点

「私の名は、ディード。ドクターの命により私と共にきてもらう。アルト・クラエッタ」

「アルトをいったいどこへ連れて行く気だ!!戦闘機人!!」

私の喉元に剣をつきたてた戦闘機人…ディードと名乗った彼女は私をどこかへ連れて行くと言い、それを聞いたグリフィスさんがそのディードに問いただす。

「動くな!!動くとこいつがどうなるか…。それとこいつをどこへ連れてく事など、貴様等に言う命令を私は受けていない。私が受けている命令は、このアルト・クラエッタを連れて行く事とそれ以外の…全員の抹殺…」

「私達全員の…」

「ま…抹殺…」

「クッ…!!」

ディードの言葉にルキノ、シャーリーさんの順では顔を真っ青にしながら声を上げその一方でグリフィスさんはそうはさえまいと彼女達の前に出て苦悶の声をあげていた。

「もしかして…。私を使ってユウと先輩をおびき出そうって言うんじゃないわよね？それは残念ね！！いくら私を人質に取っても先輩やユウは…（グイッ！！）クッ…」

「利用価値を決めるのは、貴様ではない。ドクターだ！それとあまりおしゃべりが過ぎると私の手元が狂ってしまう事もあるのだぞ？いいのか？」

ディードがなぜ、私を連れて行こうとしてたのかすぐにわかった私は彼女にカマをかけてみた。

だが、それを言いかけている所でディードは私の喉元につきたてていた剣に少し力をこめた。

そして、その剣をつきたてた私の喉から少し血が流れそれを見ながら彼女は無機質な表情で私を威圧する。

ディードの威圧とその無機質な表情に私は、戦意を喪失してしまった。

またなの…。

また…。

私は、先輩とユウの足手まといになっちゃうの？

そんなの嫌だよ…。

「フッ…。情けない…。貴様、管理局の人間なのに泣くのか？」

そんな事を考えていたら何時の間にか涙が出ていた。

私を見下ろしていたディードが、そんな私に声をかけてきた。

ディードにそう言われ必死に涙を止めようとするが、私の目から流れるその涙は止まってはくれなかった。

「そんな情けないヤツがいたとはな？これは、とんだお笑い種だ！！」

涙が止まらない私を見たディードは、罵った言葉を私にぶつける。

ユウ…。

お願い…。

助けて…。

その罵倒を受けた私は、その声に悔しがりながら心の中で…。

今ここにはいないユウに…。

祈るような気持で彼にその助けを求めていた。

そして、止まらない私の涙が地面にポタリと落ちた。

その時…。

「それは、悔し涙って言うんだぜ！！戦闘機人！！」

バシュ！！

ボン！！

「クッ！！誰だ！！（ドカッ！！）ぐあっ！！」

そんな声が聞えると同時にディードに向って紅色の魔力弾が彼女に命中。

体制を崩しながらその魔力弾が飛んできた方を見ながら声を上げるディードに今度は赤と黒の刀が彼女を外へと吹き飛ばした。

「大丈夫か？アルト？」

「ゆ…ユウ！！うぇーーーーーーーーーーん」

ガシッ！！

ディードが吹き飛ばされその場に座り込んだ私の前にバリアジャケット姿のユウが現れ声をかけてきた。

その姿に私は、思わず彼に抱きつき泣き出してしまった。

「おいおい…。落着けっての」

「だって…。だってぇーーーー！！」

泣き止まない私に対しユウは、いつもの調子で私を落着かせようとする。

でも、その緊張感から開放された私はまるで子供のように泣いたまま彼から離れようとはしかった。

「少し遅くないか？ユウ？」

「本当、もう少し遅かった危なかったわよ」

ユウの姿を見たグリフィスさんとシャーリーさんが泣き止まない私を他所にユウに声をかけた。

「申し訳ない。ちょっと援軍を呼ぶのに少し手間取ってな。だが、もう大丈夫だ」

「援軍？」

グリフィスさん達の話しにユウは、外の方を見ながらそう答えた。

それを聞いた二人は、疑問の声を上げながら外を見た。

「おーーーーーーーーーりゃーーーーーーーー！！いっぜぇ！！ファイバーーーーーーーーーーーーーーード！！」

＜オーケー！！旦那！！＞

ドガガガガガーーーーーーーーーーーーーーン！！

「イージス！！シェル！！！発動！！（ドーーーーーン！！）大丈夫ですか？シャマル先生！！ザフィーラさん！！」

「ええ…なんとか…」

「危うい所だった…」

司令室の外では、フェラルドさんがファイバード共に次々とガジェットを破壊しシャマル先生とザフィーラさんへの攻撃をナリアちゃんがイージス・シェルでそれを防ぎ二人に声をかけていた。

ナリアの声を聞いた二人は、シャマル先生ザフィーラの順で安堵の声をあげた。

ビュイン

「ユウ君!!シゲさん達も無事よ!!それにヴァイス陸曹も!!彼等の事は、こっちはまかせて!!」

「ああ!!そっちは頼むぜ!!クラリスさん!!」

「わかったわ」

プツン

そして、ユウの目の前に突如通信画面が開きその中からクラリスさんが現れシゲさん達の無事を伝えそれを聞いたユウがあとの事をクラリスさんにまかせる旨の話をしその通信画面が閉じた。

「これは…。いったい…」

「ああ、本来ならここへの援軍はもっと来るハズだったんだがちょっと今足止めを食っててな。それで、ファントムがいた施設から姉

貴とノア、それにナリアとクラリスさんが先行部隊として先にこっちに来てたのを知ってな。そんで先に潜入していたミオとフェラルドに連絡を取って姉貴とノアそれとミオ以外、急遽こっちに来てもらうよう俺が呼びに行ってたって訳。それともう少ししたら、もっと援軍が来るハズだぜ。ちなみに俺は、普通に司令室のドアからここにはいったんだが…。それにしてもひでぇ～な。こりゃ」

唖然とした表情のシャーリー達に対しユウがその理由をつげつつ周りを見て驚きの声をあげる。

「それは、君が来るのが遅いからだ。イテテッ」

「「そうそう」」

「おいおい…。そりゃないぜ…」

ユウの話しにグリフィスさんがユウのせいにするような話をしそれに続くシャーリーさんとルキノ。

「お…おのれぇーーーーーーーーーー！！ユウ・サエグサーーーーー！！」

「おおっと、どうやら俺にお客さんみたいだ。グリフィスさん、みんなの事を頼む…。それとここは俺たちに任せて避難してくれ。（わかった。すまないユウ…）」

「グスン。ユウ？平気なの？」

少しばかりの談笑をしていた私たちの前に怒りの表情のディードがあいた穴の前に浮いていた。

それを見たユウが、グリフィスさんにそう言い預けながらこの場から避難するよう声をかける。

ユウの話しに私は、涙を拭きながら心配そうな声をあげる。

「心配するな、アルト。すぐに済むから！だからお前は、グリフィスさん達と一緒に避難してろ。それにお前の悔し涙の分…。きっちりヤツに返してきてやっからよ」

「本当？（ああっ！）（アルト…行こう…このままだとユウ君の邪魔になる…）はい…。わかりました、シャーリーさん…。それとユウ！！…絶対だよ！！絶対！！」

「わ～ったよ！！だから行け！！」

心配する私に対しユウは、私の両肩を掴みそして私の顔を見ながら笑顔そう言ってくれた。

それを聞いた私は、それを了承し優しく声をかけてきたシャーリーさんの手引きによりみんなと一緒に司令室を後にしようとする。

司令室を出る間際、ディードと退治するユウの背中を見ながら私は再び声をかけユウの声を聞いた上でその場を後にした。

ユウ視点

「すぐに終わる…だと…。貴様…随分でかい口をたたくのだな？」

「なぁ～に、そのままの事を言ったまでだ。かまいたち！！」

バシュ！！

アルト達がここから退避した所で、ディードが俺に声をかけてきた。

それを聞いた俺は、そう答えつつかまいたちをヤツに向けて放った。

「ふん！！その程度の攻撃！！…ぐあっ！！」

俺が放ったかまいたちをディードは、後方に下がりながらそれを交わしながら声を上げる。

その行動を確認しつつ俺は、ヤツの司令室から外に出ヤツの真上まで行き紅をヤツの右肩に振り下ろした。

紅の斬撃を食らったディードは、そのまま海の近くの地上の激突した。

「ディーーーード！！くっそーーーーー！！ＩＳレイストーム！！」

ビュイーーン！！

ガキン！！

ドーーン！！

「んな！！レイストームが！！」

地上に激突するディードを見たオットーは、俺に対しＩＳを発動。

地上に降りた俺に対し向けて光線を放った。

俺は、その光線を紅であさっての方向に弾いた。

それを見たオットーが驚きの声をあげる。

「てめぇ等…いくらなんでもこりゃ、やりすぎだぜ…。いくら俺でも堪忍袋の尾が切れるってんだ」

「何をーーーーー！！ＩＳ！！ツインブレイズ！！たぁーーーーー！！」

オットーの光線を弾いた俺は、ディードが落ちた場所に怒りに満ちた声を上げながら歩いて向う。

その声を聞いたディードがＩＳを発動。

落ちた後に出た爆風の中から飛び出しながらその双剣で俺を攻撃してきた。

ガキン！！

「まだまだ！！」

ガキン！！

飛び出してきたディードは、双剣の片方を俺に振り下ろす。

それに対し俺は、それを紅で受け止めさらに声を上げたディードがもうひとつの双剣を今度は横から俺の腰辺りを目掛け切り込みそれに対し俺は、もうひとつの剣をゲイルでそれを受け止めた。

ギリギリ…。

「クッ…」

「なんだよ…。そんなもんかよ…」

紅とゲイル、それにヤツの双剣との間で鍔迫り合いになった所でディードはさらに力をこめる。

それに対し俺は、そんなもんかと声をあげる。

「まだ…そんな減らず口を叩くか!!」

ガキン!!

「その口!!すぐに聞けなくしてやる!!なっ!!」

カチャリ。

「うるせぇ!!アルト怒り…食らいやがれ!!メテオ…ブレイカーーーーーーーーー!!」

「うわぁあああああああ!!」

ドゴーーーーーーン！！

俺の話にディードは、さらに苛立ちを露わにしディードがその鍔迫り合いから離れ再び俺に切りかかろうとした所でゲイルをヤツに目の前に向けて構けそして俺が至近距離でメテオブレイカーを発射。

それをまともに食らったヤツは、再び海近くまで吹き飛ばされそのまま意識を失い地面にあお向けで倒れていた。

オットー視点

こ…こんなの…ヤツのデータにはない。

それになんだ…あのヤツから出ている赤黒い蒸気みたいなものは…。

ディードがヤツの砲撃魔法に吹き飛ばされるのを見た私は、以前クワットロお姉様から見せてもらったヤツのデータにこのような戦闘能力がない事を確認しさらに今度は私にに近づくヤツの体から赤黒い蒸気のようなものを見て驚きの声を上げていた。

「クッ…くっそ…」

「ディード！！おのれ！！ＩＳレイストーム！！」

ビュン！！ビュン！！

ドーン！！ドーン！！

ヤツに吹き飛ばれたディードは、そのダメージが大きい様子で中々

立ち上がろうとは出来ずにいた。

それを見た私は、ディードの前に立ちレイストームをヤツに向けて放った。

私が放ったレイストームに対しヤツは、それを交わしながら物凄いスピードで私に近づいて来る。

「遅いぜ!!そんで持ってこいつは、六課のみんなの分だ!!シューディング…ストライク!!」

「ぐあああああああああ!!」

ドーーーーーーーン!!

それに対し私は、さらにレイストームを放つがそれも交わされそして、恐らくヤツのトップスピードで私の前に現れたヤツは、その加速を利用しその勢いのまま私を切りつけた。

ヤツの攻撃を受けた私は、その場にふわりと浮かびそのまま地面に背中から落ち…そして、意識を失った。

その７８（後書き）

あともうひとつ！！

その７９（前書き）

地上本部上空

はやて視点

「ひ…ひどい…」

ミツキとの打ち合わせを終えたウチは、会場に現れたシスターシャッハからデバイスを受け取り同じくデバイスを受け取ったシグナムとシスターシャッハと共にその会場を出て半壊した地上本部の建物の上空に上がり反撃の狼煙を上げるための準備をしつつその周辺を眺めていた。

辺りは、つい数時間前までの光景とは裏腹にまるで焼け野原の状態で外で警備をしていた局員達が攻めてくるガジェット達に応戦している。

シグナムは、準備を進めるウチを上空から警護し空を飛べないシスターシャッハは地上からウチを警護しつつガジェット達を排除してくれている。

ちなみに脱出を手伝ってくれたノアは、連絡が取れないギンガやスバル達のことを心配しとったミツキの変わりにウチ等とは別行動を取ってる。

「結局…ウチ等は止められへんかったなぁ…」

さらに六課の状況については、六課に向ってくれてるというクラリスさんから「怪我人は出とるがみんな無事」との連絡がミオちゃんからその報告入ったのを聞いたウチは、それについては安堵しつつもカリムの予言を止める事が出来なかった事にふとこんな事をもらし悔しさを滲ませていた。

（はやてお姉様、準備の方はよろしいですか？）

「こっちは、準備ＯＫやで？ミオ。そんでそっちは？」

（こちらも準備ＯＫです）

（それじゃ、行くよ！！はやて！！ミオちゃん！！」

「よっしゃ！！みんな！！もうちょい踏ん張ってな！！」

ミオからの通信に答えたウチは、気持ちを切り替えもうひとつの通信画面に映るミツキから作戦開始の合図を聞き周りにいるみんなに声をかけた後呪文の詠唱を開始した。

地上本部地下最下層

巨大情報防衛及び情報管理システム「蒼龍の首飾り」

サブコントロールルーム

ミオ視点

「はやてお姉様、広域魔法の詠唱開始。ならびに中央コントロールルームよりミツキお姉様、システムの起動および蒼天の石の発動確認。エネルギー充填開始」

カチッ。

ピピピッ、カシャカシャ…。ヴィーーーーーーーーン

「蒼龍の首飾り」の外に設けられていたサブコントロールルームにいる私は、はやてお姉様の呪文の詠唱開始とミツキお姉様のシステム起動及び蒼天の石の発動を確認した後システムにエネルギーを充填させるスイッチを押した。

すると、その部屋にある機器が一斉に動き出しその部屋の窓の外では「蒼龍の首飾り」が輝き始めた。

この「蒼龍の首飾り」と言うシステムは、地上本部の地下最下層にある巨大な地下空間に極秘で作られた物。

その存在について私とケインお兄様は、ファントムに加入した時に相談役であるミゼット提督からこの事を聞かされていた。

全長約２０ｍを超えるその巨大なリング状の機械の中央に球状の形をした今ミツキお姉様が居られる中央コントロールルームが存在する。

まるで、地球の近くにある土星を思わせるその白い機械は元々その全てのコントロールをその中央コントロールルームで行えるよう設計されていた。

ですがそれだと中で操作するミツキお姉様に多大なる負担がかかりすぎるとの事で、防衛システムの発動を別の魔導士による広域魔法に載せて発動させる事。

さらに今私がいるこのサブコントロールルームから、ミツキお姉様が作り出す「蒼天の石」の力をその周りにあるリングで増幅する事で出来るそのエネルギーの充填そしてコントロールする事が出来る場所をそのシステム外部に作るよう設計が変更。

ですが、それが完成した直後ミツキお姉様を始めとした組織から派遣されその研究チームの監視任務をしていた計４７人全員と研究チームの職員並びにその施設にいる人達との間で行われた養子縁組や結婚等…。

研究施設の人達との関係を形式上深めると言った行為…。

さらに、そこから広がった反対運動等によりその計画は頓挫。

システムの解体には、莫大な費用がかかるためこの場に封印しそして現在に至る。

その事について私は、その時つくられた報告書等をミゼット提督からのお話を聞いた後見せて頂き知りえた事。

「これが、あのお方が望んだ…。人と神が人に与えた力の…それが、行き過ぎたひとつの形…」

私は、そう呟きながらもシステムの正常動作を確認。

そして、システム発動及び呪文の詠唱が終了される時間を確認しそ

の報告をしようとその部屋にある通信用のマイクに手をさせ述べた。

再び地上本部上空

はやて視点

（システム発動並びに呪文の詠唱まで残り２０秒…）

ミオちゃんからの報告にウチは、右手で空に掲げた騎士杖シュベルトクロイツと左手で開いた「夜天の書」のページを読み上げながらその報告を聞いた。

みんな…もうちょいまってな…。

ウチの周りでは、ウチ等の事に気づいたガジェット達が一斉にそれを阻止せんと攻撃をかけて来る。

それに対し、シグナムを始めてとした地上本部並びにこの会場にいた本局の局員達が必死にその攻撃を阻止してくれている。

これや！！なんで今のこの光景が今まで出来へんかったんや！！

ウチは、その光景を見ながら今までなぜ地上本部と本局の魔導士達が協力せずにお互いの縄張り争いばかりしていたのかとそう思い呪文の詠唱を続けていた。

そして…。

（エネルギー充填…１２０％。呪文の詠唱完了）

（はやて！！）

「うっしゃーーー！！いくで！！フレースヴェルグ！！」

バシュ！！

ドーーーーーーーーーーーーーーーン！！

ミオからの報告を受けたミツキからウチに声がかかった。

それを合図にウチは、上空に向けてフレースヴェルグを発射。

打ち出したフレースヴェルグの砲弾は、上空を覆っていた雲を突き抜け爆発。

そして、その勢いにより上空の雲は吹き飛ばされその砲弾からは蒼い光が雨のように地面に降り注ぎその地表が蒼く輝き始めた。

グオーーーーーーーーーーーン！！

「な…なんや！！」

（あっ…あれは！！ケインお兄様の一番艦ネェイル・ファントムとミハエル・グリニッヒ提督が指揮をする2番艦…アーク・ビエラ！！よかった！！ファントムからの援軍の到着です！！はやてお姉様！！）

地表が輝き出してから少したった頃、その状況を見ていたウチの横を2隻の次元航行艦が2つの巨大な転送魔法の中から現れウチの横を通り過ぎていった。

それを見たウチは驚きの声をあげ通信画面に映るミオからそれがファントムからの援軍である事を告げた。

「よっしゃー！！さぁ！！反撃の狼煙はあがったで！！それに援軍も来た事やし反撃開始や！！」

「「「「「おおっーーー！！」」」」」

ミオの声を聞いたウチは、その周囲で戦っとったみんなに激を飛ばしそれを聞いたみんなが一斉の声を上げた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その79…始ります…」

その79

その７９

地上本部地下道

チンク視点

「ギン姉を返せーーーーーーーーーーーーーーー！！」

ドン！！ドン！！

「くっ…。まだか！！ノーヴェ！！ウィンディ！！」

「もうちょっとッス～」

「ええい！！さっさと入れ！！」

姉、チンク、ウィンディの３人は、予定されていた作戦通りプロトタイプ・ファーストことギンガ・ナカジマをこの地上本部の地下道にて襲撃。

捕獲する事に成功した。

だが、その捕獲したプロトタイプ・ファーストをその場所からドクターの元へ連れて行こうとした所。

今度は、プロトタイプ・セカンドことスバル・ナカジマにその現場を発見され姉が彼女の攻撃を阻止している間にノーヴェとウェンディで確保したプロトタイプ・ファーストを箱の中に入れこの場から脱出しつつドクターの元へとこの地下道を利用し運び出すといった作業を行っていた。

だが、その作業もプロトタイプ・ファーストが中々箱に入らない事とプロトタイプ・セカンドの予想以上の抵抗により元々立てていた作戦スケジュールよりかなりの遅れを出している。

そもそも、この作戦…。

タイプ・ファーストを捕獲するまでは、この通りだったのだが捕獲したタイプ・ファーストの運搬役をこいつ等に殺されたセインが行うハズであった。

そのセインが殺された事により、残った我々が陸路よりそれを運搬する事に作戦が変更され現在に至る。

「それにしてもコイツ…いったいなんなんだ?」

姉は、タイプ・セカンドの攻撃を自身の防御魔法で防いでいるがその威力は当初戦っていた時より相当上がっている。

さらにヤツ自身デバイスであろうローラーブレードは、すでに大破しておりそして本人も体はボロボロ…。

それに左腕からは、切断されたケーブル等が剥き出しになっていて動かず今はその残った右腕についたナックル上のデバイスでひたすら姉の防御魔法をただ殴りつけている。

だが、その威力はまるで貫通ダメージを受けいるかのように姉の体中に響き渡り姉の見るところ少なからずヤツ自身もその攻撃によるダメージを受けいている。

なぜ、辞めない…。

なぜ、ヤツは諦めない…。

姉の中で広がる動揺。

今まで姉が見てきた敵の中でコイツは、その中で群を抜く諦めの悪いヤツ。

普通のヤツなら、ある程度の所で諦めるのが普通なんだがコイツはいくら姉が吹き飛ばそうが諦めようとは一切しない。

まるで、自分がどうなろうと知ったことかと言わんばかりにひたすら金色の目を光らせ姉に向けて右腕を振りつづけていた。

「チンク姉!!そろそろ脱出するぜ!!」

「わかった!!このまま姉がコイツを抑えているからお前達は先に行け!!（でも!!）いいから行け!!」

ノーヴェからの脱出の合図を聞いた姉は、脱出しようとその地下道に作った脱出用の穴のその入り口で声をかけていたノーヴェ達に先

に脱出するよう声をあげる。

それを聞いたノーヴェが反論するが、姉はさらに声を荒げ先に行くよう告げる。

「ノーヴェ…行くッス」

「わかったよ…。だが、ちゃんと脱出するんだぜ！！チンク姉」

「ああ…。わかった」

姉の声を聞いたウェンディは、自身が持つライディングボードにタイプ・ファーストを入れた箱を載せＩＳ「エリアルレイヴ」にてそれを浮かせながらノーヴェの肩をポンと叩きながら先に行こうと彼女に声をかける。

それを聞いたノーヴェも姉に声をその声を了承し姉に声をかけその場から脱出していった。

「行かせるかーーーーーーーーーーーーー！！」

ドーーーーーーーン！！ドーーーーーーーーーーン！！

「くぅううううう！！ここは通さん！！」

タイプ・セカンドの攻撃はさらに苛烈を増し姉はそれを苦悶表情しながら防御魔法でそれを受け止める。

こうなれば…。

ヒュン！！

ボン！！

「クッ！！」

「うがぁあああああああ！！」

ドサッ！！

姉は、左手で防御魔法を維持しながら空いた右手でスティンガーを出しヤツが右手を振りかぶった瞬間に防御模倣を解除しヤツに向けてスティンガーをなげその体に当たる直前に姉のＩＳ「ランブルデトネイター」を発動。

投げたスティンガーの爆発を利用し姉は、その爆風を利用しその脱出口まで移動する事に成功。

それと同じく爆風を受けたヤツは、姉とは逆側に吹き飛ばされ地面に仰向けで倒れこんだ。

「はぁ、はぁ、はぁ…これで…なんとか…」

立ち上がろうとしているが中々立ち上がれないヤツを見た姉は、計画のもうひとつであるタイプ・セカンドの捕獲を諦め脱出を優先しようと壁壁づたいにその出口から脱出しようと移動を開始した。

だが…。

「うぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

「グハッ！！」

ドン！！！

「の…ノーヴェ！！」

姉がその脱出口に入ろうとした所、中からウェンディらしき叫び声が聞えたかと思ったら次の瞬間先に脱出していたハズのノーヴェがその出口から吹き飛んで出来て近くの瓦礫に激突した。

その光景に姉は、驚きの表情でノーヴェの名を叫んだ。

「まったく…。こんなになるまで無茶をして…」

「み…ミツ姉…ゴメン…」

「き…貴様は！！」

ノーヴェが吹き飛んで来た直後、今度はタイプ・セカンドがいる方向から別人の声が聞えてきた。

姉がその方向を見ると倒れていたタイプ・セカンドを抱き起こそうとしているバリアジャケット姿の女性の姿が見えた。

その女性から声をかけられたタイプ・セカンドは、申し訳なさそうにか細い声をあげそれを見た姉は、驚きの声を上げた。

「なんだぁ、もう来たのか…。ミツキ?でも、いったいどうやって?」

「そんなの簡単よ?ノア。だって、もうシステムに火は入っているから後はそれを維持するだけ。それについては、ミオちゃんにお願いしているしそうなったら私があそこにいる必要はもうないしね。だから、ミオちゃんにお願いしてシステムの転送装置を使ってここまで飛ばしてもらったのよ」

姉が驚いていた所、今度は脱出口から気を失っているウェンディを左肩にかかえ右手にはタイプ・ファーストが入った箱を持ったノアが現れタイプ・セカンドを抱き起こしているその女性…ミツキ・サエグサに声をかけいきなり現れた理由を確認。

それに対しミツキ・サエグサは、その理由を告げそれを聞いたノアは納得の声を出しながらウェンディをおろし箱の中からタイプ・ファーストをだしていた。

「こんのーーー!!やりやがったなぁーーーー!!まずは、てめぇからだ!!ミツキ・サエグサ!!セインとディエチの仇!!」

「ま…待て!!ノーヴェ!!そいつに不用意に手を出すな!!そいつは!!」

ミツキ・サエグサとノアがそんなやり取りをしていた所、瓦礫からノーヴェが立ち上がり彼女の近くにいたミツキ・サエグサに対し「ジェットエッヂ」のスピードに乗り「ガンナックル」で攻撃をしかけた。

それを見た姉は、ノーヴェに声をかける。

だが、ノーヴェは姉の言う事を聞かずにそのまま攻撃を続行した。

「み…ミツ姉！！危ない！！」

「大丈夫よ…スバル。あなた…、いったい何の事を言っているのかよくわからないけど…。よくもスバルとギンガをこんなにしたわね…。誰にケンカを売ったのか…教えてあげる…」

「うるせぇ！！死ぬのはてめぇだ！！」

ノーヴェの攻撃を見たタイプ・セカンドが声を上げる。

それを聞いたミツキ・サエグサは、心配そうな顔をしているタイプ・セカンドに対し安心させるよう声をかけその場に立ち上がりそして振り向きノーヴェを睨みながらそう声をかける。

ノーヴェは、それに対し反論しつつ「ガンナックルを振りかぶりミツキ・サエグサに向けてその拳で彼女を殴ろうとした。

次の瞬間…。

「風神の舞…ゼロ式…」

ズバッ！！

「ぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

ドサッ！！

「の…ノーヴェ！！」

ノーヴェがミツキ・サエグサに対し攻撃を仕掛けた所、彼女はその死角に回り込んで背中に収めてあった刀らしきデバイスでノーヴェを切り裂いた。

切り裂かれたノーヴェは、そのカウンターをまともに食らい宙に舞いながら地面に激突。

ノーヴェに声をかけたが返事はなかった。

どうやら、非殺傷設定だったらしくその体には切り裂かれた後はないままその意識を失っていた。

「よ…よくも!!ノーヴェとウェンディを食らえ!!スティンガー!!ＩＳ発動!!ランブルデトネイター!!」

ドン!!

ドン!!

ノーヴェの姿を見た姉は、ミツキ・サエグサに対し手に出したスティンガー数本彼女に投げそしてＩＳを発動した。

「ノア!!スバルとギンガをお願い!!」

「あいよ!!」

ミツキ・サエグサは、ノアにそう告げるとスティンガーの爆発を回避しながら姉に近づいて来る。

「くっ…くっそーーーーーーー!!」

「遅いよ…。風神の舞…2式!!」

ズバッ、ズバッ!!

「ぐぁあああああああああああ!!まだまだ…」

スピードに乗ったミツキ・サエグサは、先ほどの刀型のデバイスを左手に持ち右手には羽扇型デバイスを小刀に変化をさせ二刀流で姉を切り裂かれながらそのまま奥に吹き飛ばされ壁に激突した。

その攻撃を食らった姉は、壁に激突したがすぐに体制を立て直しスティンガーを手に持ち彼女に反撃をしようと迫り来る彼女に向け飛び込む。

「これで終わり…風神の舞…1式…」

ズバッ!!

「ぐぁあああああああああああああ!!」

ドサッ。

だが、飛び込んだ直後姉の目の前に現れたミツキ・サエグサはそう言い残しながらそのスピードのまま姉を刀のようなデバイスで切り裂き姉はその勢いに吹き飛ばされ再び壁に激突。

そして、その意識を失った。

ティアナ視点

「スバル！！ギンガ！！無事なの！！」

「み…ミツキさん！！それにノア！！」

私となのは隊長の2人が、スバルがいる所にようや到着した所そこには倒れていた戦闘機人が3人と地面に横になっていたスバルとギンガさん。

それにその怪我の具合を見ていたミツキさんとその様子をうかがっていたノアがたっていた。

その場所に入ったなのは隊長がスバルに対し声をかけ私がミツキさんとノアがいる事に驚きの声をあげていた。

「とりあえず、結構怪我はしているけど命の方は2人とも大丈夫よ」

「ったく…。心配かけやがって…」

私を下ろしているなのは隊長に対しミツキさんが2人の怪我の状態をつげそれを見ていたノアがホッとした様子でスバル達に声をかけていた。

「よかった…。それにしてもこれは…2人で？」

「いや、1人はあたいが倒したが後の2人はミツキがやったのさ」

ミツキさんの声を聞いたなのは隊長は、ホッとした様子で現状をノ

アに確認。

それを聞いたノアは、誰が倒したのか簡単になのは隊長に説明していた。

「それにしても…この辺ってこんなに明るいのかしら…」

「違うわよ。これは、これこれこーゆー理由で…」

スバル達の様子を確認した私は、辺りが青白く明るくなっている事に対し疑問の声をあげる。

それを聞いたミツキさんは、その理由を私となのは隊長に説明してくれた。

「なるほど…。それで…」

「それじゃ、私とノアはまだやるべき事があるから2人の事をお願いね♪高町一等空尉（わかりました）」

ミツキさんの話し対し納得の声をあげるなのは隊長に対しそう言い残すとミツキさんはなのは隊長の返事を確認した後ノアと一緒にその場を後にした。

「み…ミツ姉…。いっちゃ、ダメだよ…。今のままじゃ…」

「スバル！！いったいそれどういう事なの!?」

2人がその場を後にした直後、倒れていたスバルがミツキさんを心配する声をあげていた。

それを聞いた私は、スバルの顔を見ながらそれがどういう事なのか確認した。

「い…嫌な予感がするんだ…。これって、ミツ姉が倒れる時と同じ感じ…。とにかく、ミツ姉を止めてよ…。ティア…」

「な…なのは隊長!!」

スバルからその話を聞いた私は、なのは隊長に急ぎ指示を仰いだ。だって!スバルがこう言い出した時って必ずミツキさんは…。

「わかったよ、スバル。でも、まずはスバルとギンガを救護班のところに連れて行ってからだよ。ミツキさん達については、通信の方も回復したからこの事を私からはやてちゃんに伝えてキチンと対応してもらうから…。それとティアナは、2人を救護班に渡したらはやてちゃんの指示にしたがって!!私は、2人を連れてってからそのまま迎撃に参加するから」

「わかりました。いい!!スバル!!後の事は私達に任せて!!わかった!!」

「うん…」

なのは隊長の指示を聞いた私は、それを了承しスバルにもそれを納得させ二人を救護班の元へと連れて行くための行動を開始した。

その７９（後書き）

感想待ってます。

８０万ＨＩＴ記念　「休養と再開、デバイス案…その前の日」（前書き）

どうも、左近　　遼です。

いつもこの作品を呼んでいただき真にありがとうございます。

おかげさまを持ちましてこの度ＰＶが８０万ＨＩＴを超える事が出来ました！！

これも読者の皆様のお蔭です。

真にありがとうございました。

それを記念して今回本編をお休みさせて頂き記念小説をお送りしたいと思います。

その内容と言えば…。

マグネス先生が連載をしている「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～罪と罰と運命の堕天使～」とのコラボ小説になります。

さらに！！

今回は、ちょっとした企画を用意しておりますの詳しくはあとがきにて説明をしたいと思います。

それでは！！

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～８０万

ＨＩＴ記念　「休養と再開、デバイス案…その前の日」…始ります…」

８０万ＨＩＴ記念　「休養と再開、デバイス案…その前の日」

８０万ＨＩＴ記念　「休養と再開、デバイス案…その前の日」

「影の守護者」ｓｉｄｅ

フラナガン郊外　機動六課隊舎内

会議室

ティアナ視点

「えっ!?ユートが来るの!?」

「はい…。ですが、名前はツバサ・ランスローさんに変わりましたがユートさんに間違いはありませんよ。ティアナお姉様」

六課を訪れたミオが私となのは隊長、それにスバルを会議室に呼び出しそしてユートがこちらに来る事を告られた。

「名前が変わった?それっていったい…」

「ユート君って確かクラナガンフェスタの晩餐会で演奏して次の日に新聞の一面を飾った人の事だよね?それに、その後の打ち上げでも演奏してくれた…」

「はい、以前に晩餐会でダンお兄様の直接交渉にてお越し頂き最高

の演奏を披露してくださった方です。高町隊長も打ち上げ会場でお会いになってましたからご存知かと。それと名前が変わった事については、色々とご事情があるらしいのでその辺の事についてはこちらの書面で確認して下さい」

ミオの説明の後にユートがツバサに名前が変わっていた事にスバルが疑問の声をあげ、次になのは隊長が彼のことを思い出しながらそれをミオに確認。

隊長達の問いかけにミオは、もって来た書類を私達に渡しながらその問いかけに答えていた。

「ふ～ん…。それで、ユート…じゃなったそのツバサが来るのと私とスバルになのは隊長だけを呼び出したのはいったいどういう関係性があるの？」

「うんうん。ティアは、ツバサ君と仲が良かったからって言うのはわかるけど…。どうして私となのは隊長が？」

「スバル…。あんたね…」

ミオの答えを聞いた私は、ここに呼ばれた理由をミオに確認。

それを聞いたスバルは、私のほうをニヤニヤしながら見つつ私の後に続く。

その様子を見た私は、スバルを睨みつけた。

「そもそも今回は、ツバサさんの世界の八神部隊長の方からユウお兄様に新しいデバイスの作成と休養を取らせてほしいとの事をダン

お兄様の方に連絡がありまして。デバイスの方については、既にユウお兄様に依頼しておりますが休養の方となると…」

「なるほど…。つまりツバサ君の色恋に関しての事ではやてちゃんに追いまわされる可能性があるからそれを阻止してほしいって事だね」

「そっか…。ヴィータ副隊長に聞かれると部隊長に話がいっちゃって…」

話を聞いたなのは隊長は、納得した様子でその理由を確認しスバルも納得した様子で声を上げていた。

「そうなんですが…。実を言いますと状況は、もっと深刻で…」

「まさか!!はやてちゃん…もう知ってるって事!?」

「はい…。どうやら、ユウお兄様に説明させて頂いていた時に一緒にいたアルトお姉様からはやてお姉様の耳に…。さらに今回は、八神家の皆様ばかりかハラオウン執務官までもがあちらの方に参加しているらしく…」

ミオの話を聞いたなのは隊長が驚きの声を上げそれを聞いたミオが詳細な経緯を説明した。

「ふぇ…フェイトちゃんまで!?それってどうして?」

「そういえば、フェイト隊長…。あの打ち上げの時「なんで別世界のティアは、あんだけいい男を捕まえられるの?」ってボヤいてましたけど…」

「つまり…。フェイトちゃんは、自分が彼氏が出来ない理由をツバサ君からみつけようとしてるんだね…」

「恐らく…。まぁ、その理由についてはこちらの作者がハラオウン執務官のカップリングをいまだに考えていないと言う事だけなのですが…」

その経緯を聞いたなのは隊長は、再び驚きの声をあげスバルが打ち上げの時フェイト隊長がボヤいていて事を披露。

それを聞いたなのは隊長は、そこから自分なり推理を話した。

なのは隊長の推理を聞いたミオは、一応に納得しつつも私達ではどうする事も出来ない理由をあげていた。

って言うか、なんで作者が面倒くさがってやらなかった事の尻拭いを私達がしなくちゃいけないのよ!!

…それは…その方が面白いからです…

な!!何!!今の!!まさか…。

作者~!!(怒)

私が心の中で怒りをぶちまけていた所どこからともなく声が聞えその理由を告げていった。

「ともかく、本来ならミツキお姉様が動く所なのですがお姉様の今

の状況だとあまり無理をさせたくありませんしダンお兄様からユウお兄様のバックアップに専念して頂きたいとの事で高町隊長ならびにスバルお姉様とティアナお姉様に話をした次第なんです。お願いできますか？」

「そうだね…。そう言えばその前に、ミツキさんってあまり体調がよくないってヴィヴィオから聞いてたけど？」

「はい…。クラナガンフェスタ前から新しい治療を色々と試しているんですけど…それが、中々うまくいってなくて…。それにミツ姉…ティアが来るまでなんとかするって言い張ってて…。あっ！！ティア！！ゴメン！！そんなつもりじゃ…」

「構わないわよ。そもそも私が無理なお願いをしてるんだから。それに私としてもツバサの新しいデバイスの作成にユウ一人で出来るなんて思ってもいないし」

話を元に戻したミオの話になのは体調は、スバルにヴィヴィオから聞いたと言うミツキさんの体調について聞いた。

その声にスバルは、その状況を説明しつつその原因を私のせいと言いそうになりそれに気づいた途端私に謝ってきた。

謝るスバルに私は、気にしていないという振りをしながらその事について特に責めはせず私なりの理由を話しミオの話を了承した。

「なら、私もツバサ君にはゆっくりと休んでもらいたいからミオちゃんの話受けるよ。スバルもいい？」

「はい！！もちろんです！！なのは隊長！！」

私の話を聞いたなのは隊長は、ミオの話を受諾。
そして、スバルにもそれでいいのかを確認しスバルもそれを了承していた。

その一方…。

機動六課隊舎内　部隊長室

シグナム視点

「ええか！！敵は恐らく、ティアナやスバル達や！！だからと言って手ぇ抜いたらあかんで！！」

「そうだね。今回は、ミツキさんがユウのバックアップに専念するからとは言えあのミオちゃんがいるからね…。情報戦では間違いなく勝てない…」

「なら、正々堂々と正面からスバル達にぶつかるまでだ！！あの２人がどこまで強くなったのか試してやる！！」

六課の部隊長室では、ツバサが明日来る予定となっている転送ポート周辺の地図を広げながらいかにしてその彼をそこから機動六課の取調室まで連行するのか…その作戦会議が開かれていた。

参加メンバーは、主はやてにテスタロッサ。それに私にシャマル、ヴィータにザフィーラにリイン…。それにバックアップとしてなぜ

かグリフィスとルキノが参加させられていた。

主はやての声にテスタロッサが、その理由を告げその一方でヴィータがスバルとティアナがどれくらい強くなったのかを試すためだけに参加している事を告げていた。

「シグナム…。いいのか？止めなくて？」

「ええ～。ザフィーラなんで！？こんな面白い事…。なんで止めようとするの～♪」

「シャマル…。お前…完全に楽しんでいるな…。この状況を…（もちろん♪）それにこれは、主はやてからの命令だ。いかにふざけた事であっても我等はそれに従わなければいけない。それに私としてもあのツバサ・ランスローがどれくらい強いのか試して見たくてな」

主はやて達の様子を見たザフィーラは、呆れた様子で私にこの状況を止めなくてもいいのか？と聞いて来た。

それを聞いたシャマルは、それに驚きの声をあげそのシャマルの様子を見た私がシャマルにこの状況を楽しんでいるか？と確認。

私の声にシャマルは、笑顔でそうである事をつげその後ザフィーラに対しこれを止めない理由を告げた。

「だが…。ヤツは今デバイスを持ってはいないのだぞ？もしかしてユウがヤツのデバイスを完成させた後模擬戦でもするつもりか？」

「いや…。恐らくユウがデバイスを完成させた後の模擬戦はこちらではなくツバサの世界でさせるつもりだろう。なにせこちらとあち

らでは戦う相手が違うらしいからな。その辺の調整については向こうのシャーリーにでもさせるつもりだろうからな。だから、ヤツを捕らえ主はやて達の用向きが終わった後にでも戦うつもりだ。もちろん、デバイスについてはこちらで用意するつもりだ」

「シグナム…。お前…」

ザフィーラからの問いかけに答えた私の様子にザフィーラは呆れていた。

「ええか!!勝負は、ツバサが転送ポートから出て来た所で決まる!!出迎えはウチがするかとヴィータとザフィーラは、スバルとティアナを止め!!シグナムは、ユウを確保しぃ!!そして、シャマルとリインとフェイトちゃんは、ウチと一緒に来てな。そして、グリフィス君とルキノはアルトとスバルから向こうの動きを聞き出し!!取調室に連行したらウチとフェイトちゃんでいかにして向こうのティアナを落として一体どこまでやったんか吐かす!!それが、済んだ所でユウにデバイスをつくらせつつシグナムの要望通り模擬戦でもなんでもさせてやる!!ええな!!」

「「「「「「ええ!!(おう!!)(はい!!)(はいですぅ～!!」」」」」」

「シグナム…。お前…目が輝いているぞ…。よっぽど嬉しいらしいな…。恐らくこの声はお前には届いてはいないか…」

主はやてからの作戦の説明に対し、ザフィーラ以外全員がそれに答えるように声を上げる。

その一方で、ザフィーラはその声に一応頷きつつ私に声をかけるが

私は目を輝かせツバサとの模擬戦がいかに楽しい戦いになるのかを想像しつつザフィーラの声を無視していた。

フラナガン市外　ユンの病院

ミツキの病室

ユウ視点

「へぇ〜。そんな事になってるんだ…」

「すいません…先輩。ついうっかり…」

俺とアルトは、姉貴が検査入院をしている病室来てユート…じゃなかったツバサがこっちに来る事。

それに呼応して部隊長達が動いている事やあいつの新しいデバイスの開発について姉貴に協力してもらえるかどうか確認していた。

俺の話の後、姉貴がなるほどと言った様子で声をあげそれを聞いたアルトがついうっかり部隊長に話をしていた事を詫びていた。

「別に謝んなくたっていいわよ。はやて達については、ミオちゃんから高町さんにも協力してもらえるって連絡が来たし彼のデバイスがどんなものになるかってのも興味があるしね。あとは…」

「それで、医者の立場としてはどうなんだい？ユン先生？姉貴はこういってるけど？」

アルトの話に姉貴は、笑顔でそれに答え部屋片隅で壁に寄りかかりながら俺達の話をただ黙って聞いていたユン先生の方を見た。

それに気づいた俺は、ユン先生の意見を聞いた。

「そうだね…。本来なら、あまり外出はしてほしくないと言いたい所だが…。まぁ、八神達の企みを止めるためにミツキがその現場に出て戦わない事とデバイスについても作成に関わるのはいいが無理はしない事。このふたつの条件が飲めるなら、外出を認めてやろう」

「「やった～♪」」

「そりゃ、ありがたい。俺としても、向こうから送られてきたツバサの力のデータを見て正直頭を抱えていた所だったんでな。姉貴に協力してもらえるんなら、なんとかなりそうだ。ちなみに姉貴には、ヴィヴィオとスバルそれにナリアにアルトとかが交代で見張り役としてついててくれるって話はつけてあるしな」

「それに、ギンガさんとティアナがツバサの案内役件部隊長達からの護衛としてついててくれるってなってますし…。なのは隊長も彼のデバイスが完成するまで部隊長達の行動に目を光らせてくれるって言ってくれてましたから大丈夫ですよ！！ユン先生！！」

ユン先生からの答えを聞いた姉貴とアルトは大喜び。

そして俺は、ホッとしながら姉貴に無理させないようにスバル達に見張り役を頼んだ事を説明。その後にアルトがこっちについたツバ

サの案内役にティアナ達がついている事やなのは隊長が部隊長達に対し監視の目を光らせる事をつげていた。

「ともなれば、デバイスを作るのは六課でやるのかい？」

「今のところはな。だが、状況次第じゃ技術開発室の連中にも協力してもらわなきゃならないかもしれないからな。そうなったら１０８でやるかもな。なんせ、ミオの話だとなんだがいい状況じゃないみたいだしな」

「つまり…。あまり時間が取れないかもしれないって事？」

ユン先生の問いかけに答えた俺に対し姉貴が質問をして来た。

「詳しくは、ツバサから聞かなきゃならねぇが向こうの部隊長の話だとそういうニュアンスらしい。だが、出来るだけゆっくりとツバサに休養…と言うよりも静養を取らせてやってやってくれ事だ。肉体的にも精神的にもな」

「なら、時間があったら私の所にもそのツバサってヤツを連れてきな。特別に私直々に見てやるから」

「そうね。ユン先生にも見てもらった方がいいかもね。でもまぁ…状況次第だけど…」

俺の話にユン先生がツバサを見てくれると言いそれを聞いた姉貴もそれに同意するように声を上げていた。

「それについては、ティアナとギンガに話をつけておくよ。あいつの側にいる連中の方が俺よりもその判断がつけ易いからな。つ～訳

でアルトも頼むな」

「もちろん！！」

ユン先生と姉貴話に俺は、ティアナ達にその事を伝えるようにいい立場的には俺達とツバサ達との中継役も兼ねるアルトに声をかけた。

その声を聞いたアルトは、名誉挽回を得たかのような笑顔を見せながら俺の声に答えていた。

「罪と罰と運命の堕天使」ｓｉｄｅ

フラナガン市内転送ポート

ツバサ視点

「気をつけて行ってきてね。ツバサ」

「ああ…。ありがとうティアナ」

ユウ達の世界に行く準備を終えた俺は、フラナガンにある転送ポートから休養と新しいデバイスの作成のために彼等の世界に行こうとしていた。

転送ポートには、ティアナが見送りに着てくれて出発準備が出来たというアナウンスが流れる中俺に声をかけてきた。

その声を聞いた俺は、着替えなどが入ったカバンを持ちながらそれに答えていた。

「ついたら、ちゃんと連絡してね。それと…」

「ああ…。それと？何？ティアナ？」

俺の声を聞いたティアナは、なんだが顔を赤らめながら連絡するよう言いその後何かをいいかけた。

その声を聞いた俺は、その様子に疑問を感じながらそれを聞き返した。

「む…向こうの私とかに手を出したりなんかしたらゆるさないんだから…（ボソボソ）」

「えっ！？何！？聞えないよ！？ティアナ？」

俺の声にティアナは、俯いた様子でボソボソと小さな声で何かを言っていた。

その声が聞えなかった俺は、ティアナにさらに聞き返した。

すると…。

「いいわよ！！そんな事どうだって！！さっさといきなさい！！時間よ！！ツバサ！！」

「あっ…ああ…。わかったよ、それじゃ」

俺の再度の追及に対しティアナは、顔を真っ赤にしながら急に怒り出し出発の時間が迫っている事を告げてきた。

そんなティアナに対し俺は、何がなんだかわからないままでティアナに背中を押されるように出発ゲートがある方へと歩きだした。

この時の俺は、ユウ達の世界ではやて達があんな企みをしていた事について…まったく知らないでいた…。

そして、俺に取って生涯忘れられないとんでもない休日が始る事となった。

ＮＥＸＴ「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～罪と罰と運命の堕天使～「休養と再開、デバイス案」」へ続く。

８０万ＨＩＴ記念　「休養と再開、デバイス案…その前の日」（後書き）

作者
「如何でしたか？８０万記念ＨＩＴ小説！！」

ノア
「んなー！！なんだこの中途半端な終わり方は！！まさにこれからって感じじゃねぇか！！それにあたいの出番は！？」

作者
「まぁ…。ノアの出番については、これからって事になりますが…。今回こんな感じになった事については、前書きにも書きましたがある企画に関係するためにこんな形になりました」

ノア
「企画？なんだそりゃ？そういや最後にあった「ＮＥＸＴ　「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～罪と罰と運命の堕天使～」休養と再開、デバイス案」」へ続く」ってなんなんだよ！！もったいぶらずに教えろ！！」

作者
「いまから説明しますから…。まず、今回のその企画というのが２作品でひとつの話の前後編をやってしまおうと言う企画でこちらではその話の前編を今お送りしました。そして、マズネス先生の「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～罪と罰と運命の堕天使～でその後編をお送りするといった形を取らせて頂いております」

ノア
「へぇ～。それだからあんな風になったって訳か…。なんだか面倒

くさいな…それ…」

作者
「それを言わないで下さい。そもそもこれをやろうと思ったきっかけがマグネス先生の方からユウに出演依頼が来まして、それでその前の話の感想を私が書いた所その返信の方でマグネス先生の方からそれが執筆依頼に変わりまして…。その時こちらでも８０万ＨＩＴ小説のネタに詰まっていた所だったもんで、いっその事それの前編をこっちでやらせてもらえないか?聞きました所、快く快諾を頂きましたのでこうなったと言う訳です」

ノア
「つまり…。話自体は、二作品を跨ぐが書いているのはウチの作者って事になるのか?」

作者
「まぁ…、そんな所です。ですが、私自身他の作者さんの作品に執筆する事自体初めての事になりますしどんなリアクションが出るのか結構楽しみにしております」

ノア
「ちなみに…向こうでもいつものノリでやっていくのか?それで大丈夫なのか?」

作者
「その辺については、問題ないですよ。とにかくツバサを弄り倒してほしいとの事だったもんで…」

ノア
「そういや、ユウにも弄り役に回ってもいいって言ってたしな…。

そんで、こっちの方の次回は？」

作者

「とりあえず、本編に戻る予定をしております。そして、この話の続きは「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～罪と罰と運命の堕天使～の方でお楽しみ下さい」

ノア「んじゃ、次回！！「休養と再開、デバイス案」　その力、光か闇か…」

その８０（前書き）

地上本部　上空付近

ゼスト視点

「なっ！！なんだ！！急に空が明るくなりやがった！！」

「慌てるな、アギト。恐らくミツキが「蒼龍の首飾り」を発動させたのであろう…」

「それってレジアス中将達が封印したってヤツか？」

「ああ…。引き返すなら今のうちだぞ？アギト？」

俺とアギトは、スカリエッティ達が地上本部を襲撃している隙を狙って俺の目的を果すためにここに来ている。

本来なら、アギトにはルーテシア達の側にいてもらいたかったのが…。

ちなみにアギトには、あのシステムの事についても既に説明をしている。

これから俺が、行おうとしている事はあきらかにあいつらに対し敵対する行為でありあのシステムの影響範囲にでも入れば俺もアギトもシステムに敵と判断されてしまいその影響を諸に受けてしまう事

も…。

「何度も同じ事を言わすなよ!!旦那!!あたいは、旦那が無茶をしないための言わば監視役だ!!それにあいつ等にもやられた借りを返さなきゃならねぇからな」

「いいのか?お前ミツキ達の所で相当ない扱いを受けてたらしいのではないのか?それを仇で返しても…」

「んぐ!!…そ…それは…そうだ!!それはそれ!!これはこれだ!!」

俺の考えを見通したかのようにアギトは、ここにいる理由を告げた。

それに対し、アギト達がファントムナイツに保護された時の状況を理由にそんな事をしてもいいのか?と聞いてみるがアギトは最初こそギクリとした様子であったが結局強引にそれを言い返してきた。

なぜ?保護されたアギトがここにいるのかと言えば…。

俺が、ミツキの弟であるユウ・サエグサとの間で交わした約束…。

あの研究施設でヤツが入手したデータをミツキが解析したものを俺のところまでアギトが運んできてそのまま居座ってここまでついて来た…と言うわけだ。

元々、アギトが保護されるのを受け入れたのもルーテシアの事もあったがミツキからこの役目をミツキから頼まれたからだからだ。

本来なら、ミツキ自身が来たかったのであろうがそうすれば俺がそ

のデータを受け取らない事をあいつはわかっていたのであろうしそれにあいつ自身も決着をつけなければならない相手がいるからな。

だが…。あいつが、あのシステムの封印を解いたとすれば…。

あいつ自身…。

まさか!!

「そのまさかだよ…。ゼスト…」

「げぇ!!ユン!!…ユン先生…。って!!旦那とユン先生って知り合いだったのか!?」

「単なる腐れ縁だ…」

「まぁ…お互いの寝起きの顔とホクロの数まで知る仲とでもしとこうか?」

「ええっ～!!だ…旦那のホクロの数まで…（ポッ）」

俺がある事に気がついたちょうどその時、アギトが目の前にユンがいる事に気がつき声を荒げユンを呼び捨てにしようとしたがあいつのその迫力に負け名前を言い直していた。

そして、俺とあいつが知り合いであることに驚きの声をあげた。

それに対し俺とユンはそれぞれに違う理由を言うが、ユンが言ったその理由にアギトは、顔を赤らめ口をパクパクさせながらさらに驚いていた。

「何をしに来た?まさか?俺を止めにでも来たのか?」

「無愛想なのは相変わらずだね~。いやなにミツキから一度死んだやつが生き返ったって聞いたからそれを確認しに来たまでさ…」

「そうか…。なら、他をあたるがいい…。俺は、生き返ってなどいない…。人造魔導士として生まれ変わったのだからな…」

「そうかい…。なら、生まれ変わったかどうか…。確認させてもらおうかい?」

アギト視点

なっ!!なんだ…。2人から感じるこの迫力は…。

あたしの横にいる旦那とユン先生から感じるその迫力に正直ビビリまくっていた。

お互いに真剣な表情で向き合いさっきから2人だけの会話を展開している。

当然あたしは、蚊帳の外にされてるし二人の関係の詳しい所を聞きたい所なんだが…。

あたしは、その事が聞きたいは山々ではあるが2人の会話に入り込めずにいた。

そんな時…。

（地上本部周辺にいるファントムナイツの全魔導士に告げます。現在、こちらに向って巨大な魔力反応が向ってきております。その魔力反応から黄天の可能性が高いと思われ、これより作戦をフェイズ3からフェイズ6に以降致します。繰り返します…。現在…）

「黄天だと!?って事はゼールのヤツが!!」

ユン先生の通信端末から聞えて来たミオからの連絡を聞いたあたしは、そのミオからの通信内容を聞き驚きの声をあげた。

だが、今にでも戦闘が始りそうな感じの旦那とユン先生にはその通信内容やあたしの声すら聞えていない様子…。

いったいあたしは、どうすりゃいいんだ～!!

この状況…なんとかしてくれ～!!

辺りを2人が放つ緊張した空気に耐え切れなくなったあたしは、頭を抱えながら今にも泣きそうになりながら心の中で叫びつづけた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８０…始ります…」

その８０

その８０

地上本部内　臨時司令室

はやて視点

「なんやと！！それっ！！ホンマか！？ティアナ！！」

（はい…。ミツキさんと別れたすぐ後、スバルがそう言っていました。それで、現在スバルとギンガさんは救護班に引渡しなのは隊長はそれを確認した後迎撃に出ていて部隊長には私の方から連絡するよう言われました。それじゃ、私は…これで。（プツン））

システムを発動させたウチは、臨時司令室に戻り通信が回復した所でティアナの方からスバルとギンガがスカリエッティの仲間からの襲撃を受け２人とも重症。

そして、それをミツキとノアが助けた後スバルがミツキを止めろと言ってたとの報告を受けティアナとの通信を終えた。

「ミオ！！現在のミツキとノアの位置はわかるか？」

（申し訳ございません、はやてお姉様。ミツキお姉様達の位置については、先ほどの戦闘以後ロスト。恐らくこちらのレーダーやシステムが反応できないようにミツキお姉様が細工を施していったと思

われます）

「あんの馬鹿～！！」

ドン！！

ティアナの報告を受けたウチは、ミオにミツキ達の現在位置を確認。

だが、ミオ曰くどうやらミツキのヤツ…。さっきの戦闘以降、こっちのレーダーがミツキ達を捕らえられないようなんや細工をしていったとの報告が入った。

それを聞いたウチは、目の前にあったデスクを握りこぶしで叩き付けながら怒号をあげていた。

（どうやら、その心配はしなくてもいいぜ。はやて）

「この声…。ヴィータか！？いったいどういう事や？」

苛立つウチをまるで宥めるように突如ヴィータから通信が入った。

（今、リインと一緒にでかい魔力反応を追ってここまで来たんだが…）

（その魔力反応って言うのが、普通とはまるで違うんですよ～。なんだが…、昔ミツキさんから感じたのと同じような…）

ウチの応答にヴィータ、リインの順でその状況をしてきた。

「み…ミツキと同じやと？」

（ああ…。あのアルト達を庇った時と同じような…。あんな力…ミツキ以外に出せるヤツがいるとすれば…。おいっ！！ミオ！！その黄天ってヤツの特徴ってのを教えろ！！）

（で…ですが…）

「ミオちゃん。ウチからも頼むわ。ヴィータ達にその特徴を教えてやってくれへんか？」

驚きを露わにするウチにヴィータは、あの事件の時…ミツキから感じた力と似ている事を告げた。

さらにそれがミツキ以外で出せるすればそれが黄天だけなのではないか？との考えに至ったヴィータは、ミオに対し黄天の特徴を教えるよう言い出した。

ヴィータの話にミオは、困惑したような声をあげるがさらにウチからもミオに頼んでみた。

もし、それがそうだとしてヴィータがなんとかしてくれるのであればそれに越した事はないからな。

（…わかりました。黄天の身体特徴は体格は大柄で、全身黄金色の騎士甲冑を身にまといそれに白いマント。それと鎧と同じ色のフェイスマスクをしており…）

（ヴィータちゃん！！）

（ああ…。どうやら、ビンゴのようだぜ…。はやて…）

ウチからのお願いに対しミオは、考え込んだ後渋々黄天のその身体特徴を教えてくれた。

それを聞いたリインは、ヴィータに声をかけそれを聞いたヴィータがその特徴と近づいてきているその大きな魔力を持つ人物とを確認しそうである事をウチに伝えてきた。

（行けません!!魔導士であるあなた方が黄天に近づけば…。間違いなく!!）

（んな事やってみなけりゃわからねぇだろ!!あいつは、私とリインで止める!!通信以上!!（プツン））

（あっ!!お待ちください!!）

「なぁ?ミオちゃん?なんで魔導士だとアカンの?ヴィータやて相当な実力の持ち主やで?それを…」

一方的にヴィータが通信を終了させた後もミオは、ヴィータ達に待つよう声を荒げていた。

それを聞いてたウチは、その真意をミオに確認してみた。

（それは…黄天の…その能力自体がやっかいなものなんです…）

「やっかいな能力?」

（はい…。それは…）

ウチからの問いかけを聞いたミオは、ヴィータへの通信を諦めウチにその理由を説明し始めた。

地上本部周辺空域

ゼール視点

「ほぉ…。これが…」

クワットロ達と別れた俺は、例のシステムの確保とあの出来そこないが持つ「蒼天の石」の奪取するためにヤツがいると思われる地上本部へと飛行しながら向っていた。

地上本部に近づいた所、目の前の景色が急に明るくなりそして、蒼い雨のような光を目撃した。

それを見そして、その光からヤツの力を感じ少しばかり驚いていた。

俺自身、あのシステムが動いているのを見るのは初めてでありその存在自体俺を見つけ蘇らせた組織のデータバンクにあったのを見た限りだったしな。

それを見た俺は、「これは使える」と感じ当事の俺に肉体を与えたその組織からの命令…。

あの研究施設の襲撃を利用しそれを手に入れるために襲撃したのだからな。

だが、それもあの出来そこないとヤツのお蔭で取り損ねその腹いせにその組織を壊滅させさらに聖王教会や管理局の馬鹿どもを利用しあの襲撃で唯一生き残ったあの出来そこないから聞き出そうとしたが…それも全て失敗。

だが、少なからずヤツには相当なダメージを与える事は出来たが俺自身も幾度もなくファントムの連中やヤツと交戦したお蔭で表向き動きづらくなりそれで今回スカリエッティが事を起こすとの情報を掴みそれを利用しようと考えヤツの手伝いをしている。

ちなみに、ウーノのクワットロは既に俺の意のまま。

その事については、恐らくスカリエッティのヤツは気づいてはいないだろうしこれがうまく行こうが行くまいがヤツの奥の手は既に俺の手の中…。

こちらの思惑通りに向えばこの世界はおろか全次元世界が全て俺のもの…。

ククククッ…。

仮にもし今回の事が失敗してもスカリエッティにその全てを押し付けられるし、いくら俺の肉体を壊しても俺自体死ぬ事はないのだからな…。

（ゼール様）

「ウーノか？いったいどうした？」

俺がそんな事を考えていた所、ウーノから通信が入った。

（はい…。機動六課を襲撃していた妹達並びにタイプファースト、セカンドの奪取に向っていた妹達…その全員が管理局の連中に拘束されました）

「何？それで残っているのは？」

ウーノからのその通信内容を聞いた俺は、少しばかり驚きつつも残っている戦力をウーノに確認した。

（はい…。残っている戦力は、私にクワットロそれに先程フェイトお嬢様を撃墜したトーレ。それと、現在も管理局への潜入任務に当たっているドゥーエの４人…。それとドクターのガジェットは半分以下が残っているのみとなっております）

「なるほど…。それで俺の戦力の方は？」

（そちらについては、その全てを温存しておりさらに生産ラインも全て正常に稼動中。さらにクワットロが現在その動力源の製造にも着手しており、この戦いが終わりゆりかごが稼動するまでには全て整うとの報告をうけております）

ウーノからの報告に対し俺は、納得したような声をあげさらにそれとは別の…つまり俺自身が持つ戦力の事を確認した。

その声にウーノは、その稼動状況やこの戦闘には一切戦力を投入していない事など…その詳細な内容を報告してきた。

「それで、スカリエッティのヤツはどうしている？」

（ドクターは、現在戦況を観覧しつつ今後の対応を思考されているかと思われます。どうやら、ドゥーエに対しいくつかの指示を与えているようです。いかがされますか？）

「しておけ…。恐らく捕まった戦闘機人達をドゥーエを使って脱出でもさせようとしているのだろうからな。こちらは予定通りに行く。俺は、これからあの出来そこないからヤツの石を貰い受けに行く。ヤツさえいなければ俺に危害を加えられるヤツなどはいなくなるのだからな。その後、例のシステムを掌握…全てが終わる…」

報告を聞いた俺は、スカリエッティの現在の様子を確認。

ウーノからの報告そして、今後の対応方法を聞いて来たことに対し俺は予定通りに行く事を告げた。

そして、これからの俺の行動予定をウーノ告げ不適な笑みを浮かべていた。

（かしこまりました。それと…ドクター以外にヤツの事はいかがされますか？あの出来そこないの弟…ユウ・サエグサについては？拘束されたオットー達が残していった通信記録によればヤツ自身何か魔力とは違った力を持っていたとか…）

「おそらく、あの出来そこないがヤツに何かを与えたに過ぎないのであろう。ほおって置け！仮にもし、俺の前にヤツが現れたのであればあの出来そこない同様！！叩き潰すまでだ！！」

（かしこまりました…。では…）

プツン。

ウーノからの問いかけ対し俺は、この俺に指図でもするのか！と思いつつい声を荒げてしまった。それに対しウーノはその無表情な顔のままで俺の苛立ちを無視するかのようにその内容を確認後通信を終了した。

「余計な心配を！！…まぁ…いい…。全てが終わればヤツ等も用なしなのだからな」

通信を終えた俺は、苛立ちが残っていたのを落着けるように自分に対し声をかけながら飛行をし続けていた。

そんな時だ…。

「そこの金ピカの鎧ヤロー！！止まれ～！！」

「時空管理局ですぅ～！！止まるのですぅ～！！」

下の方から声が聞えて来た。

それにしても金ピカの鎧ヤロー？

いったい誰の事だ？

リイン視点

「それは、てめぇの事に決まってるだろ～が！！このデカブツの金ピカが～！！」

「ヴィータちゃん!?まだ何もしていないのに何イラついてるんですかぁ!!」

リインとヴィータちゃんが、地上本部の周辺空域に反応があった所に向っていた所不信人物を発見。

先程、ティアナとはやてちゃんとのやり取りを聞きミオちゃんから黄天の身体特徴を確認しそれが同一人物である事を確認。

ヴィータちゃんとリインでその場にて止まるように声をかけるが、その停止命令をその不審者は完全に無視。

さらにその人から何かを感じたのかヴィータちゃんが、急に怒り出しそれをリインが止めるように声をかけたのですが…。

「んにゃろ～!!これでもくらえ～!!」

ガキーン!!ガキーン!!

ギューーーーーン!!

「ヴィータちゃん!!まだ早いですよ～!!」

「いいんだよ!!停止命令無視って事にしておけば!!」

激昂していたヴィータちゃんは、数発の魔力弾を生成。

そして、その不審者にむけてアイゼンでその魔力弾を打ち出した。

それを見たリインがヴィータちゃんを止めるがそれを聞いたヴィータちゃんはその事に対し嘘をつこうとしてたのです…。

本来なら、何回も声をかけた後に攻撃を開始するのですが…。

そんなこんなをしていた所、ヴィータちゃんが発射した魔力弾がその不審者に向けて飛んでいき間違いなく命中するハズだったのでです。

でも…。

フッ…。

「んな!!あたしの魔力弾が!!」

「き…消えたです～!!」

その不審者に当たる直前、いきなりその魔力弾が消えてしまったのでぅ～!!

「ん?今のはいったいなんだ?」

「んなろ～!!もう一度だ!!」

ガキーン!!ガキーン!!

ギューーーーーーン!!

フッ…。

「またですぅ～！！」

「ちっ…てめぇ…いったいどんな手品を使ってやがる！！」

再び発射されたヴィータちゃんの魔力弾もその不審者に当たる直前でまた消えてたのです。

それを見たリインが驚きの声をあげ、ヴィータちゃんがようやくその場に止まりこちらを見るその不審者に向けて声をかけた。

「ほぉ～…。誰かと思えば、闇の書の守護騎士の…確かハンマー使いだったか…。もう一人のは、初めて見る顔だが…」

「てめぇ、私の質問に答えろ！！」

「ヴィ…ヴィータちゃん…。知り合いなんですか？あの人と…」

「知るか！！あんなヤツ！！」

こちらを見た不審者は、ヴィータちゃんの質問には一切答えずそれどころかヴィータちゃんに対しまるで知り合いのように声をかけてきた。

その対応にヴィータちゃんは、眉を潜めながら自分の質問に答えるように言いそしてリインがヴィータちゃんに知り合いであるのか？と声をかけそれを聞いたヴィータちゃんはそうではない事をリインに言って来たのです。

「おいおい…。その昔同じ戦場を一緒にかけた仲ではなかったではないか？…そうか…そう言えば貴様達の今の主…相当の腑抜けであ

ったな…。俺の記憶がないのはそいつのせいか…」

「てめぇ!!はやての事を馬鹿にするな!!」

「そうですよ!!はやてちゃんは腑抜けではないですよ～!!」

リイン達のやり取りを聞いたその不審者は、まるでこちらにわかるようなため息をしながらヴィータちゃんと知り合いである事を言いさらにはやてちゃんの事を馬鹿にしたんです!!

それを聞いたヴィータちゃんにリインは、当然その事に怒り出したのです～!!

「フッ…。腑抜けを腑抜けと言って何が悪い。貴様も主が変わって随分腑抜けになったものだな…。昔の貴様の方がまだよかったぞ。闇の書の復活のためにリンカーコアを奪い取り…。そして、全て破壊し続けていた頃の貴様の方がな。あの頃のお前は、目がギラギラしていたぞ。まるで全てを破壊する事を楽しんでいたかのようになっ!!」

「違う…」

「えっ!?ヴィータちゃん?今なんて?」

リイン達の声を聞いたその不審者は、まるで逆ギレするかのように声をあげさらに今度はヴィータちゃんの事まで悪く言ったのです!!

それを聞いたヴィータちゃんは、何かを思い出しかのように急に俯いていた。

そして、プルプルと震えた様子のまま横にいるリインにも聞えないくらいの小さな声でつぶやきリインは何を言ってたのか聞き返したのです！！

すると…。

「違うっていってるだろがーーーーーーー！！てめぇに私の何がわかるってんだ！！」

「ヴィ…ヴィータちゃん！！待つのですよ～！！」

そして、

リインが静止を無視しその不審者に向けて突撃していったのです。

「ならば、その身を持って思いだすがいい！！黄天を所持し聖王の影の守護者たるこのゼール・ブラックの…、その恐ろしさを！！」

ドーーーーーーーーーーーーーン！！

「ヴィータちゃん！！」

ヴィータちゃんの突撃を見たゼールと名乗るその不審者は、腕組みをしたままヴィータちゃんにむけて立ち向かっていった。

そして、２人が激突した所で大きな音と光が辺りを包み込んだ。

その眩しさにリインは、手をかざしヴィータちゃんを心配するような声を上げその光が落着くのを待つ事しか出来なかったのです。

その８０（後書き）

作者
「いよいよ、本編も８０話に突入！！そして、地上本部襲撃も後半戦に突入しました！！」

ルーテシア
「それは、作者がダラダラやってるかだと思うよ。そもそもあの話に後半戦なんかないし…」

作者
「それは、アニメでの話ですよね…。それにしてもなんでここに？」

ルーテシア
「それはね、下水道の話以来私…出番がないから…。アギトには出番があったのに…。だからここに来たの」

作者
「な…なるほど…。そうでしたか…。それはそれとしていかがでしたか！？その８０！！」

ルーテシア
「それはそれって言うのがちょっとひっかかるけど…。それにしても後半戦って？」

作者
「簡単に説明をすれば、前の話までをその７９までの話を前半戦としその８０からは後半戦と称しております」

ルーテシア
「本当…。簡単な説明ね…」

作者
「（ギクッ！！）まぁ…。前半戦と言うは、原作アニメに近い形でお送りしこれからの後半戦と言うのはいよいよ完全オリジナル展開でお送りする事となります…。これで良いですか？」

ルーテシア
「ふ～ん…。それでもっと具体的には？それに私の出番は？」

作者
「そ…それだけ？まぁ…（コホン！）具体的言えば、いよいよこの作品での悪役もその本性を露わにした事ですしそのゼール対ミツキそして！！それにユウがどうかかわるのか！！と言った所ですかね…。ちなみにここでのルーテシアさんの出番は…。（ギロリ！！）状況次第って事で…」

ルーテシア
「仕方がないね…。そもそもアニメでもこの頃ってあまり出番がなかったし…。でも、今度のコラボする時…私も出してね。楓さんにいろんな事聞きたいし…」

作者
「い…色んな事と言うと？」

ルーテシア
「具体的には、ダグベースの事。だって、あんなに面白そうな建物って見た事がないし…。ミツキさんから少しは聞いてたけど…もっと色んな事聞きたいし…。それに私…将来建築関係に興味持ちそう

だから…」

作者
「な…なるほど…。ｖｉｖｉｄでそんな事になってましたからね…」

ルーテシア
「それにしても、ヴィータさんとゼールとの関係やゼストとユン先生が昔恋人同士だったとかオリジナル展開になっタ途端ずいぶんとやらしてない？」

作者
「ゼストとユンの関係については、元々そういう関係で行こうと考えていましたからね。なんせ、ゼストとのカップリングなんて私が知る限りありませんでしたし。それにヴィータ達とゼールの関係については、ドラマＣＤでそんな節がありましたからね。こういうのもありえるかな？と思いまして…。ちなみに本編でゼールが言っていた事は、その昔…ヴィータ達がはやての前の主の時に同じ戦場に味方としてゼールがいたと言う設定で同じくノアもミツキ…さらにはその前の契約者であるミリーの前の契約者の時に同じ戦場にいた事にもなります。でもまぁ、敵だったり味方だったりしてたりはしますが…」

ルーテシア
「へぇ～…。それなら、さっき私が言ってたコラボの事も簡単だよね？そんな設定が出来るくらいだから（イラッ）」

作者
「さっきスルーした事…根に持ってますね…。ですが、こればっかりは私一人の決断では…」

ルーテシア
「（ギロリ！！）ガリュー…」

ガリュー
「（コクン）…」

ちゅどーーーーーーーーーーーん！！

作者
「ぎゃーーーーーーーーーーーーーー！！」

ルーテシア
「さて…作者にお仕置きも済んだ事だし…。ねぇ、ヴィヴィオ？最後あれ…一緒にやらない？」

ヴィヴィオ
「うん！！りょうか～い♪」

ルーテシア
「それじゃ、次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８１…」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オ～フ～！！」

その８１

地上本部施設外

ティアナ視点

「んもぉ～！！いったいどこにいるのよ！！ミツキさんは！！」

部隊長との通信を次の指示を得ぬまま半ば強引に終えた私は独自にミツキさんとノアの居所を探している。

本来なら、なのは隊長の指示を優先し部隊長に次の指示を仰ぐ所なんだけどスバルが言ってた事がずっと気になってて言う事だけ言って単独行動を取っている。

こんな事…。

ミツキさんが知ったら怒られるだろうな…。

でも、もう誰かを失う何てこと…。

絶対にイヤ！！

スバルがミツキさんに対して予言じみた事を言った時…。

それは、必ず当たる…。

これは、ユウ達やナカジマ家のみんな…それに部隊長とかも認めている所。

それがなぜなのかについては、ギンガさん曰く…。

小さい頃からミツキさんにべったりだったスバルが、そのミツキさんの顔色や息遣い…。さらには、無意識で感じていた彼女の魔力なんかを直感的に判断しているのでは？

との事。

その現場に私も何度か居合わせていた事もありその事を信じている。

「はぁ…はぁ…。ダメだ…。私一人じゃ…何も…」

それから、ただ我武者羅に走ってはみたものの息切れを起こすその場に膝に手をつき息を整えていた。

そんな時…。

（こちら…ロングアーチ０３！！スターズ０４！！応答して！！ティアナ！！無事なの！！返事をして！！）

この声…。

「こちら…スターズ０４…。聞えてます…」

（よかった～！！無事なんだね！！それで、他のみんなは？）

「それよりも…。この通信…。普通の通信じゃないわよね？どういう事なの？アルト？）

アルトからの通信に応答した私に対し、通信の向こうでは歓喜の声と共に他のみんなの事について聞いて来た。

それに対し私は、いつも六課で使っている通信コードとは違う事を気づきその事について聞いてみた。

（それについてなんだけど…）

私の問いかけに対しアルトは、先程とは裏腹に急に沈み返ったかのようになりまるで言葉を選ぶかのように静かにｋタリ始めた。

ファントムナイツ所属

次元戦闘艦　ネェイル・ファントム　医務室

アルト視点

（六課が？それ本当なの？アルト？）

「うん…。それで、今六課のみんなはファントムの次元戦闘艦の医務室で治療を受けている所。今通信しているこの回線については、ファントムの回線を借りて通信しているの。それでそっちは？」

ティアナからの問いかけに対し、私はそのありのままを説明した。

でも…その言葉は、自分でも信じられない程に冷静に…そして慎重に言葉を選びながら六課襲撃について説明していた。

（そうなの…。こっちの方は、スバルとギンガさんが怪我をしてこっちの医療班のところに今運んだ所。それで…）

私の説明を聞いたティアナは、その事について安堵しつつも今度は、こちらの問いかけに答えてくれた。

スバルとギンガさんが戦闘機人の襲撃を受け、それを先輩とノアが助けてくれた事。

それにその時スバルが言っていた事…。

「せ…先輩が！やっぱり…」

（今やっぱりって言ったわよね！！それって、いったい何の事なのよ！！あんた！また何か隠してない！！）

「そ…そんな事…（説明しなさい！！）ハイッー！！」

ティアナからの話を聞いた私は、思わずやっぱりと言ってしまいそれをティアナに聞かれてしまった。

それを何とかかわそうとしたが、通信画面の向こうのティアナのその激怒した表情に押され説明する事となった。

そもそも、この計画が私に知らされたのはヴィヴィオ達がファントムの隊舎に訪れた時の事。

先輩はその時、もしスカリエッティ達が公開意見陳述会に襲撃をかけて来たのなら恐らく地上本部襲撃については恐らくそれは陽動…。

本来の目的は、別にあると先輩は予想。

そして、その目的が何かまではわからないが考えられる可能性がある施設の中にレリックの保管されていると情報が既に漏れている六課が含まれてた。

レリックについては、既に本局の別の場所に移送されており部隊長達の予測ではそれはないだろうとされいた。

それについては、私からも先輩に説明したんだけど…その時先輩は…。

「確かに、アルトが今私に話してくれた通りだと思うけど…。どうしても引っかかる事があるんです。それは…」

先輩はそう言うと少し考えを纏めるような姿勢を取りつつその引っかかる事…。

つまりなぜ、ヴィヴィオがあの時レリックを持っていたのか？

それに彼女が乗ったヘリを攻撃していたのも…。あれ程の攻撃をなぜレリックが乗ったヘリを攻撃したのか？

ただ、ルーテシアちゃん達を逃がすだけの攻撃ならあいつらが欲し

がっているレリックが乗っている以上威嚇程度で十分なハズ…。

それをまるでそれが乗っていない…。もしくは、この程度の攻撃は問題ないと言わんばかりに攻撃していた事自体が先輩としては気になっていたとの事。

私への指示と言うのが、もし六課が襲撃された時六課隊舎を放棄するよう進言する事。それがダメなら、その事をミオちゃんから預かった蝶を使ってそのことを伝えユウが援軍が来るまで無茶をさせないようにする事。

でも…。ふたつ目の指示については、みんなを止められなかったしその時の情報で黄天…。

すなわち、ゼールがこの件に関わる可能性がある旨の情報が飛び込んできたのを聞いた先輩の表情が…まるである決意に満ちた表情になったのを見た私とユウが無茶しないよう言ってはみたんだけどその帰り道…。

私とユウは…

「「絶対に何かやらかす!!」」

とそんな話をしていた…。

との事をティアナに説明した。

ちなみにその事をスバルティアナ達に言わなかったのも極力この話を他に漏らしたくないとの先輩からの指示によるもの…。

それを聞いたティアナは、当然怒っていたけど…。

（それで！！ミツキさんの今の居所は！？）

「いくらなんでも、それは無理だよ～！！なんせ、この通信を統括しているのはミオちゃんなんだから～。彼女に聞いて見たら「わからない」の一点ばりだったから私なんかじゃわかる訳ないよ～！！」

（クッ…）

苛立ったままのティアナの問いかけに対し私は、泣き言を言いそれを聞いたティアナ苦悶の表情を浮かべていた。

再びティアナ視点

んもぉ～！！この役立たず～！！

アルトからの話を聞いた私は、地面をアルトに気づかれないよう地団駄を踏みながら心の中でそう文句を言っていた。

でも、アルトの言っている事はあながち間違ってはおらず今使っている通信回線はファントムの物…。

それを統括しているミオがわからないと言っているのだからそれを借りている状態のアルトにそれ以上の事をしろと言っているのだから…。

私は、自分にそう言い聞かせつつその苛立ちを落ち着けようとした。

考えろ…。

考えるんだ…。

もし、この状況をあの2人なら…。

いや!!あの人なら、いったいどうしたのかを…。

自分を落着かせた私は、自分が尊敬するあの二人ならいったいどうしていたのだろうか?考える事にした。

一人は、当然ミツキさん。

でも、今私が探しているのがミツキさんだからそう考えてもうまく行く訳がないと考えもう一人の…彼女ならどうしてたのかを考えようとした。

あの人なら…。

確かあの人…アナログ派だったからまず自分の足を使うわよね?

それに…。

彼女独自の…その野生の勘って言うのかな?

それを駆使していくつもの難事件を解決している。

でも、そのやり方は違法捜査や犯人を半殺しにしたりしているからいまだに三等陸士なのよね…。

ミツキさんからは、あの人のやり方はある程度実力がついてからならやってもいいけどその心意気だけは常に見習えって言われてて…。

それに私に対し、格闘技なんかをたまに彼女がいる別世界から教えに来てくれてもいる。

さらに、ミツキさんも向こうに居候なんかもしてたりしているし…。

まったく…。

その別世界の私って羨ましいわよ!!

なんせ、あの2人の捜査方法なんかを常に間近で見られるんだから!!

（ねぇ～ティアナ…。話がズレて来てな～い？）

「えっ!?ち…違うわよ!!」

そんな事を考えていたらアルトからそんな突っ込みを受けた。

アルトの声を聞いた私は、ギクリとしながらそれを否定していた。

でも…。自分の足で何もつかめないとしたら…。

そうだ!!

「ねぇ!!アルト!!そのシステムの影響範囲って調べられる？」

（それは出来るけど…。いったいどうして？）

自分の頭の中を元に戻した私は、再びあの人なら?と考え始めた。

そして、ある事を思いつきそれが出来るのか?アルトに聞いてみた。

「ミツキさんが戦おうとしている相手…つまりは、そのゼールってヤツの思考を考えてみたのよ!!つまり、そのシステムの影響範囲に入れば少なからずあいつもその影響を受けるだろうから…。あいつからすれば、その範囲の外で戦おうとするハズ!!だから、その影響範囲の外で通常の魔力とは違う…ミツキさんが持つあの「蒼天の石」の力に似た力がないか探してほしいの!!だって…あんたはそのミツキさんの力を間近で見たんでしょ!?だったら…」

アルトの問いかけに答えた私は、心の中でアルトの過去トラウマを引っ張り出してしまうかもしれない事を詫びつつも彼女に頼んでみた。

(先輩の石の力に似た力…。わかったよ!!やってみる!!ちょっと待ってて!!)

「ありがとう…アルト…。それと…ゴメン!!ミツキさんの力の事ってあんたにとっては…」

(だ…大丈夫だよ!!ティアナ!!私だって先輩に無茶してほしくないから…このくらい…心配しないで!!)

「わかった。よろしくね…アルト」

プツン。

私の頼みを聞いたアルトは、どうやら過去の事を思い出したらくし怯えた表情をしながらそのことについて了承してくれた。

それを見た私は、アルトに謝った。

でも、アルトはそれを無理やりの笑顔を作りながらもその事について問題ない事を言ってくれた。

アルトの話を聞いた私は、再度彼女にお願いしつつもその通信を終えその連絡が来るまで再び自分の足を使ってミツキさんを探す事にした。

その８１（後書き）

作者
「いかがでしたか？「その８１」！？」

ルーテシア
「それにしても…本当、バトル描写以外となるとスラスラ書けるのね？」

作者
「（ギクリッ！！）まぁ…その事については、得て不得手というものが…」

ルーテシア
「それで？本編の中でティアナさんが言ってたミツキさんが居候しているとか言ってたのは？」

作者
「ああ～、あれですか？実を言えばよくコラボさせて頂いているジャン先生の「勇者司令ダグオンＡ'ｓ　不死鳥が舞う」の方でウチのミツキがレギュラーとして参加させて頂いているのでその番宣の意味を込めて入れさせて頂いたのとこっちの方では何も言っていなかったのでその説明するためにネタとして入れてみました。そして、許可なしで今ジャン先生の名前を使った事をお詫びいたします」

ルーテシア
「ふ～ん…。そうなんだ。それで、ティアナさんが言ってたミツキさん以外のもう一人の尊敬する人って…」

作者
「ここまで言えば皆まで言わなくてもいいと思います。ルーテシアさんも想像している「管理局の野獣」です（笑）」

ルーテシア
「一応、許可をもらっていないからボカしてるようだけど…。そうなんだ…それで？こっちではその話はしないの？そのとき私は当然出るわよね？」

作者
「それについては、やりたいとは思いますが今はそのタイミングを計っている所です。なんせ、地上本部襲撃の話をしているのにいきなり別の話とは正直な所いきずらいですしね。と言う訳で、誰が出るのかについても現在は未定です」

ルーテシア
「（うまく逃げたわね…）と言う事は、当面は今の流れで行くって事？」

作者
「今のところは、そんな感じですね。ですが、何かあれば切れのいい所で何かあるかもしれませんが…」

ルーテシア
「そうだね。９０万ＨＩＴ記念とかもあるかもしれないしね」

作者
「まだまだ先の話ですし、行くかどうかもわからない状況なので…。これればっかりは読者の皆様方に見捨てられないようにしていく限りです。それでは！！今日はここまで！！尚、〆の台詞については前

回同様ルーテシアちゃんとヴィヴィオちゃん！！お願いします！！」

ルーテシア
「わかったよ…。それじゃ…次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８２…」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オ～フ～！！」

その８２（前書き）

ファントムナイツ所属

次元戦闘艦　ネェイル・ファントム　医務室

アルト視点

「え～っと…これがこうで…あれが、ああなって…と…」

ティアナからのシステムの影響範囲について頼まれたわたしは、検査結果を待ちつつ頭と左腕に巻かれた包帯を気にしつつファントムから借りた端末を使ってそれを調べている。

先輩…。

やっぱり、あのゼールってヤツとの決着をつけるつもりなのかな…。

端末を操作しつつもここ最近聞かされた事を思い出しつつあれこれ考えていた。

そもそもユウや先輩とは、ユウと訓練校で同じクラスでその授業で出された課題で同じ班になった事がきっかけで…。

課題が終わった後も、ヴァイス陸曹と一緒になって色々と遊んでいたし色んな事にも…色んな事にも巻き込まれたりした…。

訓練校を卒業した後は、それぞれ別の部隊に行く事になって…六課で再開するまではたまにあいつが私がいた部隊に応援として来るく

らいでしか会う機会はなかったけど…。

それとは別に先輩とは、整備の事について色々と教えてもらうために度々会って結果的にファントムのサポーターにもなった…。

だから、先輩が決着をつけたがっている気持ちも少しだけだけど理解しているつもりだし…。

あいつが、それをさせたくない気持も…。

だって、もしそんな事になったら間違いなく先輩はあの力を使うだろうしそれが先輩の寿命を縮める事になる事をあの時…ユン先生から聞かされているから…。

私も先輩には、ずっと生きててほしいし…。

それに…あいつにも…無茶はしてほしくない…から…。

私は、端末が検索を開始した事を確認した所で操作していた手を休め自分の気持ち整理し始めていた。

もし…。

先輩がゼールと戦う事になったら…

あいつは、どうするんだろう?

その時…私は…。

ピーーーーーー！！

「あっ、終わった…。それで結果は…っと…」

そんな事を考えていた私の所に端末から検索結果の終了を告げる音が鳴りそれに気づいた私は、今まで考えていた事を辞め検索結果を確認した。

「結構大きいなぁ…。これをティアナ一人でなんて…。とても、無理だよぉ～」

結果を確認した私は、その影響範囲の大きさに落胆の声をあげさらに調べを進めていた。

ビー！！ビー！！

「ダメか…。やっぱり、先輩みたいには上手くいかないなぁ～…。あれ？この反応は…アンノーン？…つまり…局員でもファントムでもない…って事だよね？これ？それも３つも…」

私は、システムのその広大な影響範囲の中からゼールがせめてきそうな方角を想定しながらその範囲を狭めようと試みた。

でも、その結果は全てエラーで端末からはその旨を伝える音が鳴り響いていた。

そんな中、魔導士達が今いる場所の位置情報を表示する画面の中に識別不明を示す反応がそれも３つも同じ所に固まって表示されていた。

「いったい…。誰なんだろう？それに…その３つの中のひとつが魔導士の反応じゃない…。それなら…」

私は、その３つの反応を調べるべく端末を操作。

そして、その中のひとつが魔導士だと表示するものではない事を確認した。

「この近くに監視用のサーチャーはっと…。あっ！！あった！！これこれ…」

３つアンノーンについて確認その内容を確認した私は、その反応の近くに監視用のサーチャーが近くにないか確認。

それを見つけた私は、そのサーチャーから送られてくるその映像を確認した。

「えっ～！！なんであの人達がここにいるの！？」

その映像を見た私は、驚きの声を上げた。

「ダメダメ！！いつまでも驚いてちゃダメだったんだ。でもなんで力君達が？ここに…。それもシステムの影響範囲内にいるんだろう？どういう訳で来ているのかは、わからないけど…。今は！！」

いつも通りのリアクションをしていた私は、今はそんな場合じゃないと思い返し頭をブンブンと左右に振りながら冷静さを取り戻しその状況を考察。

でも、私じゃその理由についてわかる訳もなくとりあえずティアナ

に協力してもらおうと彼等と連絡を取る事にした。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８２…始ります…」

その８２

その８２

地上本部周辺地帯

力視点

「くんくん…。こっちか？」

「飛鳥さん！！こっちの方が強い匂いがしますよ～！！」

「お前等…。いったい何してんだ？」

こっちの世界に来た俺、飛鳥、楓の３人は、激戦の最中をミツキさんを探していた。

あたりを見渡しながら探す俺に対し、飛鳥と楓は周辺の匂いを嗅ぎながらあれこれと話をしていた。

それを見た俺は、その光景に疑問を投げかけてみた。

「何って、匂いからミツキさんを探そうとしてるんじゃないか？」

「そうですよ～。だって、ここじゃどういう訳か私達の探査魔法なんかが使えからこうするしかないでしょう！それになんだか段々体が重くなって来たような…」

「お前等犬か！！それに探すなら、もっと別な方法があるだろうが

！！」

「何言ってんだい。これでも、私は「管理局の獣」だよ？自分の五感を相当訓練したからねぇ～。こっちの方が早く見つかるよ」

「私も飛鳥さんを見習って鍛えましたから…。それに！！なんかいい方法でもあるんですか？おじいちゃん！！」

俺の疑問の対し飛鳥がミツキさんを探していると言いそれに続き楓が探査魔法が使えないためこうしてると飛鳥の後に続いてきた。

それを聞いた俺は、彼女達に突っ込みを入れてはみたが飛鳥が自分の五感を凄まじく鍛えたらしく自身に満ちた声でそれに答えさらに楓が俺に別の方法でもあるのか？と聞いて来た。

「う～…ん…。ない…」

「だろ？」

「やっぱり…」

「だよな～！！（笑）」

楓の質問に対し俺は、あれこれ考えては見たがいい答えが見つからずそれがないと彼女達に告げそれを聞いた二人はやっぱりと言った様子でそれを見た俺は、右手で後頭部をポリポリとかきながら笑っていた。

ちなみに今の会話順は、俺、飛鳥、楓最後がまた俺…だからな！！

（激戦最中のそんな所で、何呑気な事を言ってるんですか～！！）

「おっ！？この声は…」

「アルトさん！！」

「いい所で、出て来てくれたねぇ～。お久しぶり」

そんな事をしていたら、いきなり俺たちの所にアルトからの通信が突っ込みと共に聞えて来た。

アルトの声を聞いた俺がその声に気づき声を上げ、それに楓がアルトの名を呼びさらに飛鳥が呑気な声でアルトとの再会を喜んでいた。

ファントムナイツ所属

次元戦闘艦　ネェイル・ファントム　医務室

アルト視点

だぁ～から！！なんでそんなに呑気でいられるのよ～！！

力君達と通信を取った私は、彼等の周りで局員達の攻撃魔法やガジェットからの攻撃が飛び交う…そんな状況の中で呑気でいた彼等を見ながら心の中で叫んでいた。

（だって…。俺達八神組だし…）

（こんな状況、しょっちゅうだしね）

「へェ…ソウナンデスカ…」

私の心の叫びを聞いたかどうかはわからないけど、その理由について力君、飛鳥さんの順でその理由を言いそれを聞いた私はその理由に呆れながらジト目でそれに答えていた。

（それはそれとして…。この体が重い感じ…いったいなんですか？それにこの青い光は…？それにアルトさん！！その怪我は？）

（それって、スバルがつけてるあの鉢巻の真似か？）

「ち…がーーーーーーーーーーーーう！！痛っ！！…それについては、カクカク云々…。と言う訳で六課が襲撃されて…。それに、どうやらそのシステムが力君達の事を敵だと判断し始めているからそうなっていて今その解除をミオちゃんにお願いしてる所だからもうちょっと待ってね。それで…なんでこっちの世界に？」

（あれは、鉢巻じゃなくてリボンだよ～！！）

ん？どこからともなくスバルの声が…。

でも、今はスバルにかまっていられる状況じゃないから気のせいって事にしておこう。

とりあえず、状況の説明っと…。

（そんな～！！（泣））

スバルの声を無視しつつ力君達の答えに呆れていた私に今度は、楓さんから質問が私の耳に入ってきた。

楓さんに続いて力君からボケが飛んできたので、それを全力で突っ込みを入れる私。

そうしたら、痛めた所が急に痛み出しその痛みを堪えながら私は…システムの事や六課や地上本部がスカリエッティ達によって襲撃された事を彼等に説明。

次になぜ、力君達がこっちの世界に来たのかを聞いてみた。

（それについてなんだが…。私は、ミツキさんにちょっと用があってね。それで、こっちに来たらこんな事になっててね。もし、ミツキさんならここに来てるだろうと思ってここに来たんだ。）

（私は…。未来のこっちのヴィヴィオちゃんに頼まれ…違った！私も飛鳥さんと同じでミツキさんとユウ君に用事があって…アハハハッ！！）

（俺は…。ただ、ついて来ただけだ）

（違うだろ！！お前は、あのままいたらウチ等の世界のはやてにコキ使われるのがイヤでついて来ただけだろ！？）

（それを言うな！！飛鳥！！）

私の問いかけに対し、まずは飛鳥さんがそれに答えそれに続き楓さんが何かをその理由を言いかけた所で何かに気づき大慌てで別の理由を言っていた。

そして、最後に力君がその理由について答えたがそれを聞いた飛鳥

さんがそれではない別の理由を言いその声を聞いた力君が飛鳥さんに対し声を荒げていた。

（それで、ミツキさんがどこにいるかわかります？アルトさん？）

「それについては、私も色々と調べてるんですが…先輩…どうやらミオちゃんにもどこにいるのかわからないようにしてるみたいで…。どこにいるのかわからないんです」

力君と飛鳥さんのやり取りを他所にして楓さんが私に先輩の居所を聞いて来た。

それに対し私は、先輩がスバル達を助けに行った後からその行方をノアと共に晦ませている事を告げた。

（本当かい？それ？…まっ、ミツキさんならやりかねない事だろうけどね。あの人、他人まかせにするより自分でやった方が楽って考える節があるみたいだったし）

「ええ、飛鳥さんの言う通りなんです。先輩…本当に自分勝手にやっちゃう事が多いですから。まったく…こっちの心配しているのを知らずに…」

（でも、それだけアルト達を巻き込みたくないって事だろうね。それで、どうして私達に通信を？）

私の話を聞いた飛鳥さんは、その事について私に確認をしそして少し考えた後先輩ならやりかねないとその可能性を示唆していた。

飛鳥さんの話に私は、その考えに同意しつつ少しだけ先輩に対して

の愚痴をこぼした。

その愚痴に対し飛鳥さんは、なんだが苦笑いをしていた様子で先輩の事をフォローしつつも私が飛鳥さん達に通信してきた訳を聞いて来た。

「あっ！！そうだった。それで、飛鳥さん達にお願いがあるんです！！」

飛鳥の問いかけに対し私は、そもそも彼女達に通信を取った訳を忘れていたのを思い出しその訳を話し始めた。

地上本部周辺地帯

楓視点

「えっ？スバルがそんな事を…」

（うん。それで、その事を聞いたティアナが私の所にシステムの影響範囲を調べてほしいって連絡してきて…。それで、調べてはみたんだけど、その範囲が大きくてとてもティアナ一人じゃ調べ切れないからティアナの手伝いをしてほしいの！！お願い！！）

アルトさんからその訳を聞いた私達は、先程までのまったりとした感覚から一変。

それぞれ真剣な眼差しでアルトさんの話を聞いていた。

話の中で、こっちのスバルがミツキさんを止めてほしいっとティア

ナに言ったのを聞いた私は、驚きの声をあげた。

それを聞いたアルトさんは、その事に答えつつもその班ナシの続きを言いそして私達にティアナの手伝いを依頼してきた。

「いいよ。それで、その影響範囲ってどれくらいなの？」

（地上本部を中心におよそ半径５００Ｋｍくらいの範囲で…）

「デカっ！！それをティアナを含め４人でやれってか！！ファントムの連中は使えないのか？」

（ファントムは、現在戦闘中で先輩を探すための余剰人員は避けないし…。それに先輩が抜けてもいいように指揮権をご隠居様に移行してて…。それに先輩がこんな事をする事もなんだか黙認されてると言うか先輩がゼールと戦う事自体…暗黙の了解がされてるような気がして…）

アルトさんの話を聞いた飛鳥さんは、私とおじいちゃんの顔を見つつ二つ返事でその事について了承。

そして、そのシステムの影響範囲がいったいどれくらいのものなのかをアルトさんに聞いた。

飛鳥さんの質問にその影響範囲を聞いたおじいちゃんは、その範囲の大きさをたった４人で調べなきゃいけない事に驚きの声をあげさらにファントムの人達はそれに参加できないのかと聞いていた。

おじいちゃんの声にアルトさんは、申し訳なさそうな顔をしつつそれが出来ない訳を私達に話をしてくれた。

「つまり…。既にその根回しは済んでいるって事だね？」

（はい…。そう言う事だと思います）

アルトさんの話に飛鳥さんが話を要約しその事アルトさんに確認。

それを聞いたアルトさんは、その事で凡そ間違いない事を告げた。

「う～ん…。それにしても人手が足りねぇ…。いっその事炎さん達にでも応援を頼むか？」

「それじゃ、時間がかかりすぎだよ。なんせ、そのゼールってヤツと戦う前にミツキさんを見つけるもしくは戦ってる最中にそれに割って入らなきゃならないんだから…」

彼女の話におじいちゃんは、自分達の世界から初代ダグオンである炎さん達を助っ人として呼ぶ事を提案。

それを聞いた飛鳥さんが時間がかかると言う理由でその提案を却下していた。

もしかして…。

遅かったのかな？

おじいちゃんと飛鳥さんとのやり取りを見ていた私は、ふとそんな事を考え始めた。

今回、私がこっちに来た理由…。

それは、ここに来る前以前私がミツキさん達趣味で作ったロボットのメンテナンスのためにこっちに来ようとした時どういう訳かこことは先の…。

つまり未来のここの世界に到着してしまい、そこであった成長し高町さんの養女となったヴィヴィオちゃんから「過去を変えてくれ」と頼まれたためだ。

そこでは、ＪＳ事件が起こった後ある事件が起こりそのことが影響してこっちの六課の人達がバラバラになり…。

そして、ミツキさんはシステムに飲み込まれさらにユウ君までもが…。

私が訪れたのは、その事件が起こってから数年後の世界…。

そこで、色々な事があって…なんとか無事に私がいる世界に帰ってこられたんだけど…。

その帰り際、ヴィヴィオちゃんにその事を頼まれこっちの世界で起こった事件の事でミツキさんの所に行きたがっていた飛鳥さんと…八神組の組長で私達の主であるこっちの世界のはやてさんにコキ使われる事から逃れてきたおじいちゃんと共にユウ君達の世界へと訪れミツキさんがとりあえず入そうなこの地上本部へと来て見たって訳なんです。

でも、私がそのここの未来の世界に行ってた事はおじいちゃん達には話しておらず二人にはアルトさんに説明したのと同じ事を言ってこっちに来ている。

なんでかって、言うと未来で起こる出来事を伝える事が歴史の改変につながってしまいかねないため。

おじいちゃん達の世界の未来から来た私は、そうやっておじいちゃん達にも未来で起こる出来事について伝えてはいない。

だって、もしそんな事を言って私が生まれなかった大変だし。

でも、言わなくてもやれる事はいっぱいあるからそうする事でおじいちゃん達の手伝いをしている。

そうだ…。

もし、来るのが遅くても…。

まだなんとかなる…いや!!なんとかする!!

私は、自分の心の中で感じた一抹の不安を吹き飛ばし考えを改める事にした。

「いよ〜!!ユウじゃねぇか!?悪いんだけど、ちょっと手伝ってくれ!!」

え…?ユウ君?

私があれこれ考えていた所、通信画面にユウ君が現れそれを見たおじいちゃんが彼に声をかけいた。

ファントムナイツ所属

次元戦闘艦　ネェイル・ファントム　医務室

ユウ視点

「なるほど…。そう言う訳か…」

六課を襲撃していたガジェット達をフェラルド達と共に一掃した俺は、アルト達の事が気になり医務室を訪れていた。

医務室に入った俺は、グリフィスさんやらシャーリーさん達に声をかけつつその中で誰かと通信しているアルトを見つけ声をかけた。

そこで、アルトと通信をしていた力達と再会を果しヤツから手伝ってほしいと依頼された。

最初はいったい何の事かと疑問に思っていたが、アルトからその事情を聞き納得の声を上げていた。

（んで！どうなんだ？ユウ？）

「それについては、構わないぜ。なんせ、俺も姉貴をこれから探そうとしていた所だからな。それに影響範囲を全部調べなくてもよさそうだ。なんせ、六課にそのゼールってヤツがいたみたいだからな」

「えっ…。それっ、どういう事なのユウ？」

納得の声を上げていた俺に通信画面の向こうにいる力から俺に対し、答えの催促がきた。

それに対し俺は、それを了承。

さらにゼールが六課に来ていた事を告げその話を聞いたアルトが疑問の声をあげた。

「簡単に言えば…六課が襲撃を受けていた時、格納庫に侵入者がいたろ？それがヤツでその目的はヴィヴィオの誘拐…。ヤツはその目的をまんまと果しやがったって訳さ」

（えっ…。ヴィヴィオちゃんが？）

「もしかして…。ヴァイス陸曹もそいつに？」

「そういうこった。まさかヤツ自身が来るとは…。こっちも想定外だったって訳さ…。クソッ！！」

俺の説明を聞いた楓さんに驚きの声を上げそれに続きアルトがヴァイスが襲ったヤツがゼールなのか？と聞いて来た。

それを聞いた俺は、そうである事を言い悔しさを露わにした。

「ん？飛鳥さん…。何か言いたそうな顔してるけど…。どうしたんですか？」

（いや…なんでもない。気にしないでいいよ。となると六課の隊舎がある方角からヤツが来るって訳だね。これで大分範囲については、絞り込めたけど…。でも、もしミツキさんをそれで見つける事が出来てもいったい誰が彼女を説得するさ？いっとくけど私じゃ無理だけどね…）

（と言うより一緒になって戦ってそうだな…。飛鳥なら…）

（それは、あんたも同じだろ？力？）

俺の話を聞いた飛鳥さんは、何か気がついたらしくその表情に気づいたアルトが彼女に声をかける。

その声に対し飛鳥さんは、なんでもないといい先程までの真剣な表情を少しだけ緩めいったい誰が姉貴を説得するのか？と疑問の声をあげその後自分で無理だとお手上げのポーズを取っていた。

飛鳥さんのその態度に対し、力が飛鳥さんなら説得すらしないと言いそれを聞いた飛鳥さんはそれは力も同じだろうと呆れた様子で彼を見つめ力もそうである事を同意していた。

「それが最大の問題だよな～。せめて、ユン先生が近くにいてくれたらなぁ～。なんせ、先生もどっかに行っちまって行方がわからないんだよ」

（げぇ！！マジか！！）

「ともなると…後は、ナカジマ三佐か…レジアス中将…でも2人を連れ出すとなると結構手間がかかるし～」

飛鳥さんの声に俺がそれに対し同意しさらにユン先生もまた行方不明である事を告げた。

それを聞いた力が驚きの声をあげそれに続きアルトが爺と中将の名を上げるがその2人だと時間がかかる事を言い手がないと言った様子でそんな声を出していた。

（その事については、私に任せてもらえませんか？私に言い方法があるんです）

（楓！？その方法って言うのは？）

（それは、秘密です。それじゃ！！後の事はお願いします！！とにかく時間がないんで！！）

（お…おい！！楓！！）

「いっちゃった…」

俺達や通信画面の向こういた力達…全員が諦めかけていたそんな時、楓さんが自分に任せて欲しいと言い出した。

それを聞いた力が、その方法を聞き出そうとするもそれについては秘密とだけ答え楓さんはその場を離れていった。

その行動に力が、止めようとするが楓さんはそれを聞かずそのまま行ってしまいそれを見たアルトが唖然とした声を上げていた。

（仕方がないねぇ～。なら、その事については楓に任せるとして私はティアナと合流してからその絞り込んだ範囲を調べるからユウは力と合流してくれないか？なんせ、このままこっちのティアナをほっとくと何しだすかわからないからねぇ～）

「了解だ。なら、そうした方がよさそうだな。それじゃ、合流ポイントはコッチで指定するからそのポイントまで来てくれるか？力？」

（ああ…。でも、ちゃんとナビしてくれよな。なんせ、こっちの世界の道なんてイマイチよくわからないからな）

「わかったよ。それについては、私がするから安心して」

（わかった。なら、よろしく頼むぜ！！アルトさん）

「うん！！それじゃ！！行動開始！！」

（（「了解」））

楓さんが行った後、飛鳥さんがこれからどうするのかを俺達に指示。

それを聞いた俺もそれで同意し力に対しそれでいいか確認。

俺の声に対しそれを同意しつつもナビをしてもらえるよう要求。

その要求に対しアルトがナビを担当すると言いそれを力も同意。

最後にアルトの合図で俺達はその行動を開始した。

それにしても…なんで、アルトが仕切ってんだ？

その８２（後書き）

作者
「如何でした！！その８２！！」

スバル
「てぇ！！なんで、本編に力さん達が出てきてるのよ～！！」

作者
「今回のゲストは、単独で登場～！！スバルさんでぇ～す！！」

スバル
「やっほ～！！って、私の質問を無視しないで～！！」

作者
「はいはい…。わかりましたよ。今回なぜ、力達が登場したかと言えばジャン先生の「勇者司令ダグオンＡ'ｓ」の最終回にウチの３人が助っ人として登場しまして今回は言わばそれのお返しといった感じで登場して頂きました。ですが、本当はもっと後に登場して頂く予定ではおりましたが「その８１」でのジャン先生の感想を見たときこの話が思い浮かんだんで予定変更で登場して頂きました。尚、その辺の許可はいただいて下ります」

スバル
「へぇ～。そんな事になってたんだ～。それにしても力さんはともかくとして、飛鳥さんと楓さんはなんかありそうなんだけど…」

作者
「それについては、３人それぞれに伏線を張ってます。尚、それを

やるかはまだわかりませんが楓さんが行ってた未来の世界については所謂ＢＡＤエンドのその後となっております」

スバル
「それ…。言っちゃっていいの？」

作者
「元々、力達を本編に出すと決めた時から楓の話はおもいついていましたからね。別に出しても構いませんしそもそもやるかどうかも決めてませんし…。もうひとつ言えば、飛鳥と力の方は本編にも絡んだ話になります」

スバル
「うわ～！！いつもにもなくネタバラシの大盤振る舞いだね！！」

作者
「これくらいは問題ありませんし、これで何かしらあったら面白いですし（笑）」

スバル
「うわっ…。言い切ってるよ…」

作者
「とまぁ、こんな感じで色々と妄想と展開しておりますので期待しないで待っててて下さい」

スバル
「それで？次回は？」

作者

「次回については…そろそろ連載して1年が近くなってきてますのでそれをするか本編になるのか…。まだ決めかねてる所です。それではスバルさんにヴィヴィオ〆の台詞をよろしく！！」

スバル
「ふ～ん…ＯＫ！！それじゃ！！いくよ！！ヴィヴィオ！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！！」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オ～フ～！！」

その８３（前書き）

地上本部内　臨時司令室

はやて視点

「なんやて！！相手の魔力を吸収して自分の力に変れるやと！！」

ミオちゃんから黄天の能力を聞かされたウチは驚きの声を上げていた。

（それだけでは、ありません。黄天…すなわちゼールは、その相手の魔力を吸収するだけではなく倒した相手…もしくはその時の協力者等を洗脳し自分の従者とする能力を有しております。さらに、ヤツに倒された者の魂を別の体に移し…その魂を無理やりヤツに従わせるようする事も出来…。ファントムでもヤツを発見しても無闇に攻撃しないようそう指示が出ております）

「そんな能力まで…。でも、確かに魔力を吸収する能力は、怖いけど…ヴィータやてその位対処出来るやろ？要するにそいつに捕まらなければええんやろ？」

それ以外の能力を聞かされたウチは、驚くのを辞め冷静に考えを巡らしその対処方法をミオに言ってみた。

（はい…。ですが、それだけでは不十分なんです。ゼールは、戦闘時に自らの周りにＡＭＦのようなフィールドを形成しそこに来る魔力での攻撃を全て己の力に変えてしまうんです）

「んな無茶苦茶な！！それやったら、ウチ等魔導士に対処出来る方法なんてないやんか！！」

ウチが言った対処方法をミオがそれを肯定してつつもそれだけではヤツには対処出来ないと言い、そしてミオちゃんからその訳を聞いたウチはその無茶苦茶な能力にやけくそ気味に声を上げた。

（対処方法ならあります。先程ＡＭＦのようなフィールドと言いましたように基本的にはＡＭＦと同様の対処をすればいいのです。ですが、ゼール自身相当な防御力がありファントムの中でも一部の幹部クラスの人間しか彼の相手は出来ませんしそもそもそれを知らないとゼールの思う壺になり…最悪の場合…ゼールに洗脳されてしまう…。もしくは、その魂がヤツによって利用される可能性が有り…）

「それで止めてたんか…。それにしてもファントムの一部の幹部クラスって事は、あんたのお兄さんであるケイン副司令やフェラルドって事になるんやな？」

（はい！！特にケインお兄様の場合、お兄様自らが持つ氷の魔力変換を使いその力を使いお兄様が持つサーベルに纏わせる「アイシング・サーベル」という技があり…過去にはそれでゼールを追い詰めた事も…）

ウチの声を聞いたミオちゃんは、ファントムが持つゼールに対してのその対処方法を説明。

それを聞いたウチは、その説明の中で気になった事をミオちゃんに聞いてみた。

ウチの質問を聞いたミオちゃんは、まさに「待ってました！！」と言わんばかりにその目を輝かせあの鉄火面…もとい！！彼女の兄であるケイン副司令の事を説明し始めた。

「それについては、また今度なぁ～」

（そ…そんな～！！せっかく、ケインお兄様のその素晴らしさをはやてお姉様にご説明しようと致してた所なんですよ～！！）

そんなミオちゃんに対しウチは、呆れ気味にその事については次の機会にでも…とそれを止めた。

ウチの声に対しミオちゃんは、半べそになりながら驚きに声をあげる。

まさか…あのミオちゃんがブラコンやったとはなぁ…。

それもあのケイン副司令にって…。

画面の向こうでなんとかそれを再会させようと必死になるミオちゃんを見ながらついそんな事を考えていた。

（システムの影響範囲外に設置されていた監視用のサーチャーより入電！！システムの影響範囲外で戦闘確認！！敵は、お…黄天！！黄天を発見！！現在管理局所属の魔導士と交戦中！！その黄天と相対している魔導士は…。出ました！！機動六課所属のヴィータ三等空尉！！戦況は…ヴィータ三等陸尉が押されています！！）

「…んな！！ヴィータが！！それ本当か！！ミオちゃん！！」

ミオちゃんがいる場所の近くにいたオペレーターからの声を聞いたウチは、驚きの声をあげそれをミオちゃんに急いで確認した。

（はい…。それは、事実です…。はやてお姉様）

「アカン！！ヴィータが危ない！！ミオちゃん！！悪いんやけど…そっちでもこれに対処してくれへんか！？ウチもシグナムと共に直にヴィータの元へ向う！！」

（了解…）

ウチの声を聞いたミオちゃんは、それが事実である事をウチに伝えそれを聞いたウチはミオちゃんにお願いをしその答えを確認した上で臨時司令室を後にした…。

ヴィータ…。

無事でいてな…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８３…始ります…」

その８３

その８３

地上本部周辺空域

ヴィータ視点

「はぁ…はぁ…。ちきしょ…。なんでこっちの攻撃が通らねぇんだ…」

（ヴィータちゃん！！とにかく落着いて下さいです！！どうやら相手は、ヴィータちゃんを怒らせてペースを乱しているみたいなんですから！！）

黄天と遭遇した私とリインは、ヤツをこれ以上行かせないためにヤツ相対していた。

戦闘開始当初は、私一人でヤツと戦っていたのだがこっちの攻撃が一切ヤツまで届かない状況を見かねたリインが私とユニゾンを強行…。

だが、それでも状況は変わらず戦況としては一方的にヤツの攻撃をこっちが食らっている状況だ。

それにしても…魔力弾をヤツにお見舞いすれば、ヤツに届く前に消えそれならとアイゼンで攻撃すれば…ヤツにそれを意図も簡単に受け止められ…それで受け止められたアイゼンがまるでその機能を停

止したみたいに止まっちまい…そうなった所でヤツの魔力弾での攻撃を食らっちまう…。

つまりは、それの繰り返し…。

さらにこっちが攻撃する度にヤツの魔力が上昇しこっちの魔力の消費がいつもより激しいって…。

リインもその状況を理解している様子で私に対しまずは、落着くよう声をかけてくる。

私は、その声を聞きつつ現在の状況を分析しようとするがいまだに冷静になりきれてはいなかった。

「どうした?そんなものか!?まったく…。これだから、腑抜けな主を持つと…。どうだ?いっその事私の下につかないか?そうすれば今よりもっと強い力を…」

「断る!!」

(リインも同じです!!)

ヤツと距離を取った私に対しヤツは、自分の部下にならないか?と声をかけてきた。

それを聞いてた私は、ヤツの話が終わる前にそれを断りそれに続いてリインもまた私と同じ答えをヤツに言い放った。

「そうか…。なら、貴様を倒してその上で強制的に従わすとするか…」

「へっ！！やれるもんならやってみろ！！」

（リインも同じです！！）

「その減らず口…。いったい、いつまで続くのかな？サウザント…アクション…」

私とリインの答えを聞いたヤツは、そう言い放つと自身の周りに大量の魔力弾を形成。

そして、それを私の所に向け一斉に放った。

「それはもう飽きたんだよ！！」

（そうです！！）

それを見た私とリインは、飛んできたその魔力弾を次々と交わしながらヤツに近づく。

「くらいやがれーーーーーー！！（ボン！！）ガハッ！！」

「それはこちらの台詞だ。そんな馬鹿のひとつ覚えのような攻撃…。いつまでもこの私が付き合ってられるとでもおもったのか？そろそろ貴様の相手にも飽きた。落ちろ…」

ドドドドドドドドーーーーーーーーーーン！！

「うわぁーーーーーーーーーー！！」

（きゃーーーーーーーーーーーー！！）

ヤツに近づく事に成功した私は、その攻撃範囲に到着した所でアイゼンを振りかぶった。

そして、アイゼンを振り下ろそうとした瞬間…。

一発の魔力弾が私のわき腹にヒットした。

思わぬ攻撃に私は、苦悶の声を上げそれを見たヤツは、そんな私を見つめながらまるで私にはもう用がないと言わんばかりな声を出し再び大量の魔力弾を形成し私に向けてそれを放った。

不意な攻撃を食らいその状況から抜け出せては入なかった私は、その攻撃に対し防御する暇もなくそれをまともに食らいその場から噴き飛ばされた

そして、私とユニゾンをしていたリインもまた私と同じ様子で防御魔法を展開する前にその攻撃が私に直撃したためなすすべを失いそれを私と共に食らってしまった。

「ほぉ…。これを食らってもまだ立つか…」

「う…うるせぇ…。そんな攻撃…。屁でもねぇぜ…。なぁ？リイン？」

（は…はいです…。ヴィータちゃんにリインも…。そんな豆鉄砲…ヴィータちゃんとリインには効かないですよ…）

ヤツの攻撃を食らい、その影響で私の周りに煙が立ち込めそれが晴

れそれでも立っている私を見たヤツは少し驚いた声をあげていた。

それを聞いた私は、ぜぇーぜぇーと息を整えながら強気な発言をしそれが同じかどうかリインにも聞いてみた。

私の声を聞いたリインもまた私同様の答えをヤツに向けて言い放った。

だが…ヤツの攻撃によって私のバリアジャケットは既にボロボロな状態。

しかもアイゼンもその攻撃によって中破といった状態で…ヤツの攻撃によってそのダメージも相当受けているらしく、正直な所…今は立っているのが精一杯といった状況。

それでも、あんなヤツなんかに屈したくない気持ちでヤツに向って強気な発言をしたし…はやてを馬鹿にした事…それに私自身あんなヤツと一緒にされたくないといったそんな私なりの意地で立っていた。

「そうか…。なら、その豆鉄砲で…。いったい、どこまで耐え切れるのか？試してやろう？サウザント…アクション…」

「くっ…！！くそっ！！さっきの攻撃で体が…」

（ヴィータちゃん！！）

「（うわぁーーーーーーーーーーーーーーーー！！）」

ドドドドドドドーーーーーーーーーーーーーーーン！！

私とリインの話を聞いたヤツは、そう言いだすと三度大量の魔力弾を形成し私達に向けてそれを放った。

それを見た私は、すぐに回避行動を取ろうとするがさっきの攻撃により思うように体が動かなかった。

それを見たリインが私に向け声を上げるが時既に遅し…。

飛んできたその大量の魔力弾を交わす事が出来ずそれを食らってしまった。

ゼール視点

「ふ…。落ちたか…」

ヤツに向けて攻撃が着弾したのを確認した私は、その影響であがる煙をみながらそうもらしていた。

だが、その煙が晴れヤツが本当に落ちたのを確認するためにその場に留まり煙が晴れるのを待っていた。

なぜかと言えば、その煙が上がってからヤツが落ちているのを確認していないからだ。

先程言っていた通り落ちたヤツを洗脳し、その上で恐らく地上本部にいるのであろうあれの主と戦わせようと考えいたからであり…。

あの出来そこないにもある程度、その影響が出るであろうと…そう画策していたためだ。

そうするためにヤツの防御力を計算した上で今まで攻撃をしていた…と言う訳でもあるが…。

なにせ、これをやるにはヤツの体が必要だからな…。

別にヤツが死んでいても別に構いはしないが、その魂を別の体に移すにしても…その体がないとそれを作るのにも時間がかかるし別の体だと…そもそもこれをやる意味がないからな…。

「そろそろ煙が晴れるか…。どれどれ…。ん?…あれは…なんだ?あの球状の物体は…まさか!?」

そんな事を考えていた所、ちょうどそろそろ煙が晴れそうなのを確認した私はその思考を辞め煙が晴れるのを待った。

すると、その晴れた煙の中から現れたのはヤツの姿…ではなく青い色をした…何かの羽根ような物で包まれた…球状の物体が現れた。

その姿を見た私は、一瞬それがいったいなんなのか?わからなかったが直にそれがなんなのかを理解し声を上げた。

ヴァサァ!!

「やはり貴様か…」

私がそれがなんなのか…その確信を得たと同時にその球状の物体が

崩れその中から、あの出来そこないが気を失いかけたヤツの前に立つかのように現れた。

それを見た私は、自身の確信が間違いない事を確認しながら現れたあの出来そこない向けて声をかけた。

ノア視点

「やっぱり…出て来たわね?ゼール…。それにしても…相変わらずのようね?」

（み…ミツキさん…。それにノア…）

「大丈夫か?2人共?まっ…後はあたい達に任せな」

ゼールの声を聞いたミツキは、ヤツを睨みながらその声に答えていた。

その様子を見ていたリインが弱々しい声を上げ、それを聞いたあたいがその声に答える。

「後は、お前等に任せろだ!?…ふ…ふざけるな…。誰がお前なんかに助けを求めた?（ドス!!）ガハッ!!」

（ヴィ…ヴィータちゃん!!ノア!!いったい何をするんですかー!!）

そんな様子を聞いていたヴィータがボロボロな状態でまだ戦おうと言わんばかりな声をあげ、それを聞いたあたいがヴィータの後に回り込み…そして、彼女に首の後ろに軽く右手を振り下ろした。

ヴィータは、気を失わせその場から落ちようとする。
それをあたいが落ちないように受け止めた所でリインが声を荒げていた。
「心配すんな。単に気を失ってもらっただけだ」
（そ…そんな！！）
「悪いけど…。今はそんな事に付き合ってられないのよ…リイン…。それにこのままここにいても、ヤツに利用されかねないからね…。例えば、ヤツに洗脳された貴方達と…はやて達を戦わせると言った形でね？」
（えっ？…はやてちゃん達とリイン達が？）
声を荒げるリインに対しあたいが、気を失わせただけと説明。
それに対し納得しないリインに今度は、ミツキがさらにその説明を加えた。
ミツキの話を聞いたリインは、それがいったいどういう事なのかわからないと言った様子でその話を聞いていた。
「詳しい事は、後で説明するから…。とりあえず、今はここから離れて…。それじゃ、ノア？お願いね？」
「あいよ…。それじゃ、いくぜ！！」

そんなリインの声を聞いたミツキは、あたいに2人を安全な所まで連れて行くよう指示。

それを聞いたあたいは、一抹の不安を抱えながら2人を連れその場を離れていった。

（こいつ等を置いて来たら…すぐに戻ってくるからな?それまで…絶対に無茶すんじゃねぇぞ!!ミツキ…）

（わかったわよ…。ノア…）

ミツキから離れていくその途中で、あたいは念話でそう言いそれに対しミツキは、無茶はしないと言った。

だが、そんなミツキの言葉をあたいが信じる訳も無く…。

あたいは、飛行スピードを上げていった。

ミツキ視点

「ふっ…。いいのか?行かせて?」

「別に…。元からこの状況にするつもりだったし…。それにあんたが用があるのは私だけじゃないの?ゼール?」

ノアが離れていった後ゼールは、私の方を見ながら余裕な声でその場に残った私に対しそう話し掛けてきた。

それを聞いた私は、今までの事を思い出しながらその声に答える。

「そう言えばそうだったな…。なら、さっさと私に従ってもらおうか？４２５番？」

「それは、昔の名前…。今の私は、ミツキ・サエグサよ？いいかげんにそのくらい覚えて！！」

バシュ！！

私の声に対しゼールは、過去の事をどうやら思い出したらしく私の昔の名前でヤツに従えと…言い放ってきた。

それを聞いた私は、今はその名前じゃない事を言いヤツに向けて風舞を放った。

「そんな攻撃…私に効くとでも…何っ！！どこにいった！！」

私が放った風舞を避けたゼールは、相変わらずの余裕な態度で風舞をヤツがいたそのすぐそばでそれを消して見せた。

そして、私がいた所を見てそれが効かない事をアピールしようとしていた。

でも、その時にはもうそこには私の姿は無く…。ヤツは、その場から消えた私の姿を探しながら声を荒げる。

「ここよ…。（んな！！）相変わらず…人の事を上から目線でしか見ないのね？そんな態度だから…私の姿を見失うのよ？…風神の舞…ゼロ式…」

ズバッ！！

「ぐぁっ！！その程度…」

ドン！！

「くっ…」

辺りをキョロキョロ見渡すゼールに対し私は、彼の背中に回りこみそして…彼に対し声をかけた後風神の舞ゼロ式をファルシオンで切りつけた。

その攻撃を食らったヤツは、そのダメージを受けつつもその場から離脱しようとしていた私に対し右手で殴りつけてきた。

ゼールの攻撃に対し私は、それを交わしきれずヤツの攻撃を食らいその場から吹き飛ばされ少し離れた所でようやく体制を整え直す事が出来た。

「まったく…。相変わらずの馬鹿力ねぇ…」

「相変わらずチョロチョロと…。まるで、動き回る蝿みたいなヤツだ」

ヤツとのファーストコンタクトを終えた私は、ダメージを受けたお腹を抑えながらそんな感想を漏らす。

それを聞いたゼールは、私の攻撃を受けたわき腹を抑えながら苛立ちを露わにしていた。

そんな言い合いから少しだけ沈黙した時間が立ち、お互いを改めて見合った途端2人ともお互いに対しその攻撃を再開。

ヤツに対し私は、蒼天の石の力を込めた大量の魔力弾を…そしてヤツは私と同じ数くらいの魔力弾をそれぞれ形成。

先程までの接近戦から打って変わり今度は、砲撃戦が始った。

その８３（後書き）

アルト

「感想待ってま～す！！」

その８４（前書き）

地上本部　エントランス

はやて視点

「あっちの負傷者は、こっちに移動させ！！んでもってそこにあるもん全てどけ！！負傷者が横になるスペースを増やすんや！！」

「はい！！」

臨時司令室を出てヴィータの元へと行こうとしていたウチとシグナムは、その途中エントランスにいた局員に呼び止められその場の現場指揮にあたっていた。

ほんまは、そんな事ほったらかしにしてヴィータの所に行こうと思ったんやけど負傷者が多すぎて大混乱になっていてな。

さらにその現場を指揮していたはずの指揮官が、ガジェット達の攻撃によって崩れた瓦礫の下敷きになりその場を指揮出来る人間がおらんくなっていて臨時司令室に連絡を取っても今そこに回せる人材がないとの事。

そこにたまたまウチ等が来たもんで、そこの局員に頼まれて仕方がなく指揮を採ってるっちゅう訳や。

ちなみにシグナムにもウチの補佐を頼んでおってウチとは少し離れた所で色々と指示を出しておる。

「八神ニ佐!!八神ニ佐!!」

「なんや!!」

「八神二佐にお会いしたいという方が…」

「んなの後にしぃ!!今ウチは急がしいんや!!」

「そ…それが…（ゴリッ）」

「ん?…あ…あんたは…?」

周辺の局員達に対しウチが色々と指示を出していた所、その中の一人がウチに声をかけてきた。

それを聞いたウチは、後回しにするよう言うがその局員は顔を青ざめたままその後をチラりと見ながらその対応に苦慮していた。

局員のそんな様子を見たウチは、その事が気になり彼の後ろを見てみた所…。

「こっちの世界のウチの娘はどこだ?」

「ひぃぃぃぃぃ!!八神二佐!!なんとかして下さい!!」

「あんた北斗やないの!!いったい何してんねん!!」

ウチがその局員の後ろのほうに目をやるとここことは別の世界…。

つまりは、力君達と同じ世界にいるはずの北斗がその局員の背中に

銃を押し付けウチに向って声をかけてきた。

「もう一度聞く…。こっちの世界のウチの娘はいったいどこにいる？」

「あ…主はやて！！」

「うわぁ～。やっぱりやっちゃってたか～」

「あっ…。シグナム？それにサイモン！！なんであんた等がここに？」

北斗は、そんなウチの声を一切聞こうとはせず再び同じ質問をしてきた。

そんなウチ等の所にさらにシグナムと北斗同じく力君達と同じ世界にいるサイモンが現れそれを見たウチは驚きの声をあげここにいる理由を聞いた。

「いや～。ウチの組長から飛鳥と楓について行った力のヤツを追えって言われて北斗と2人でこっちに来たのはいいんだけど、北斗のヤツこっちに来た途端こっちの世界のキャロちゃんの事が心配になってか一人勝手に…（ズドン！！）あっぶないな！！いきなり撃つヤツがあるか！！」

「うるさい。余計な事を言うな…」

ウチの話を聞いたサイモンは、こっちに来た理由をウチに対し説明。

その途中、どうやらサイモンが言った事がズボシでありそれを言い

当てられた事がよっぽど頭に来てたらしくサイモンに向けて自身が持つ銃を発砲しそれを交わしたサイモンは、北斗に対し文句を言う。

サイモンの文句に対し北斗は、サイモンの方を一切見ずにその声を返していた。

「はぁ～。まったく…このくそ忙しい時に…。わかった！！キャロの現在位置を教えるからその局員を今すぐ離し！ミオ…悪いんやけど頼めるか？」

（了解…。キャロさんは、現在ポイントＫＺ８６の海上にてヴォルテールを召喚しガジェット達と交戦中です。これでよろしいですか？北斗さん？）

「わかった…」

「た…助かった～」

そのやり取りを見たウチは、大きくため息をしながらキャロの現在位置を教える代りに今銃を突きつけている局員を離すよう言いミオにその位置を教えるよう依頼。

ミオは、そんなウチの依頼に対しキャロの位置とその状況を北斗に対し説明。

その声に北斗は、局員に向けていた銃を下ろしその場を後にした。

「それにしても力君達まで…。もしかして…今向こうのウチって…今例の…」

「うん。いつもの急性力苛めたい症候群が始っててね？」

「しかし、主はやて？北斗のヤツをあのままにしておいては…」

「そうやね？なら、ミオ悪いんやけどそっちの方から北斗サイモン…それにこっちに来ているっちゅう力君達に見方の識別信号をつけてもらえんか？そやないとこっちの怪我人が増えるだけや？それと力君達とヴィータ達の状況を教えてくれへんか？」

（了解しました。それとヴィータ副隊長とリイン曹長については、どうやらミツキお姉様達がその戦いに割って入りノアお姉様と一緒にこちらに向っている様子。お二人ともお怪我をおっているようで、現在増援されたガジェット達と合流された楓さんと共に交戦中。尚飛鳥さんは、ティアナお姉さまと力さんはユウお兄様とそれぞれに合流を果しノアお姉様達と同様に増援されたガジェット達と交戦中。その数はどんどん増えております）

「えっーーーーーーーー！！こっちの世界の親びん達がーーーーーー！！」

北斗のそんな後ろ姿を見たウチは、サイモンに対し力君達の世界にいるウチの状況について思い当たる節があったのでそれを聞いた所どうやらそうらしくそれを確認したウチは今度はミオに対し力君達やヴィータ達の状況等を確認した。

ウチの声に対しミオは、その状況について淡々説明。

すると、ウチがリアクションをする前にサイモンが驚きの声をあげた。

うっ…先を越された…。

「主はやて！！指示を！！」

「そうだよ！！力達の事は、とりあえず後回しでいいから
俺にもこっちの親びん達位置を教えてくれよ！！」

サイモンにウチより先にリアクションされた事にショックを受けていたウチに対しシグナムとサイモンが、ウチに対し支持を仰いで来た。

「そ…そうやね。とりあえず、ミオ！！ここから一番近い場所はどこや！！」

（はい…。ここからだとノアお姉様達の所が一番近いかと…。ポイントＡＺ４８です）

おそろく…今ユウ達の所にいるガジェット達は、まさに彼等に対しての言わば足止めのため…。

どうやら、ほんまにミツキとそのゼールってヤツの戦いを邪魔させたくないらしいのやな…。

なら、ウチはまずはその状況から抜け出すための突破口を切り開くまでや！！

「よっしゃ！！なら、シグナムとサイモンは今ミオが言った位置に急行！！ノア達の援護に回って！！それが終わったらユウ達の援護にまわってな」

「了解！！（あいよ！！）」

シグナム達の声に対し元の状態に戻ったウチは、ミオに対しここから一番近い場所を確認し少し考えた上でそこへ向うよう支持。

その声を聞いた二人は、走りながらその場を後にした。

ほんまなら2人別々に援護に向わせたい所なんやけど、サイモンがこっちの世界の地理には詳しくないやろうからな。

そのため、シグナムをその案内役として一緒に行かす事にしたんやけど…。

北斗のヤツ…。

ミオからその場所の位置を聞いただけでわかるんやろうか？

まぁ…。

これで迷ってたらまさに自業自得や…。

シグナム達を見送ったウチは、ふとそんな事を考えつつその現場での対応に戻る事にした。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８４…始ります…」

その８４

その８４

地上本部周辺空域

ゼール視点

ドドドドドドドーーーン！！

「クッ…」

あの出来そこないとの戦闘が始って、あれから少しの時間がたっていた。

ファーストコンタクトは、すでに終え現在はお互いに魔力弾による砲撃戦がすでに始っていた。

お互いそれぞれにおよそ数百発の魔力弾を精製しては打ち出し至る所でその爆発がおきていた。

どうやら、ヤツはその魔力弾の中に蒼天の石の力を少しだけ込めて放っているらしく相殺しきれなかったその弾丸が俺の魔力吸収用フィールドを突き抜け俺に当たりそのダメージを受けた俺は思わず声を漏らしていた。

その一方、ヤツはこの砲撃戦でのダメージは無い様子。

「チッ…。幻術か…。いまいましい！！」

ヤツの様子に対し俺は、苛立ちを露わにする。

それもそうだ。

何せヤツは、幻術を使い自身の姿をいくつも作り出しその上でこちらに対し攻撃を仕掛けてきている。

さらに自身の姿を見つけられないようにするため周辺にジャミングを展開そして、その幻術によって作り出した自身の分身数体による同時攻撃や自分自身の姿を消しこちらの死角から攻撃をしてきたりとその対応に苦慮していた。

「だが…。いくらそのような小細工をしても、こちらの方が破壊力が上!!ならば!!黄天の力よ!!その破壊の力を我が前に示せ!!トライデント・ランス!!くらえ!!デス!!サイクロン!!」

ドドドドドーーーーーーーーーーーーン!!

「「「うわぁぁーーーーーーーーー!!」」」

ヤツの攻撃を受けながら、俺は、右手を上に上げさらに自身周りに黄金色の魔法陣を展開。

そして、その手に三極の矛を召喚しそれを握り真横に振りかざしいくつもの竜巻を作り出しヤツに向けて放った。

俺が放った竜巻は、ヤツが作り出した幻術による分身や魔力弾を次々と破壊。

その竜巻が通り過ぎた後には、息を整えダメージを受けた様子のヤツが一人。

おそらく俺のデス・サイクロンにて受けたダメージであろう傷ついた左腕を抑えながら立っていた。

ミツキ視点

「はぁ、はぁ…やっぱり…そう簡単にはいかないようね…でも、まだまだいける！」

ヤツのデス・サイクロンを受けた私は、ヤツを目の前にしながらその攻撃によって受けたダメージの確認とその回復を待ちつつ次の手を考えていた。

私のダメージは、着ていたバリアジャケットがさっきの竜巻によっていくつか切り裂かれそれによって左腕やら足などからは血が流れていたのとそれによって受けた魔力ダメージ。

おそらくそれが一番大きいわね…。

クッ…。

それにしても…相変わらずの破壊力ね…。

私は、ヤツから受けたダメージの痛みを堪えつつも思考を巡らせる。

やつの攻撃は、その巨体を活かし繰り出される攻撃とその膨大な魔力から作り出される黄天の力を使っての魔力弾による攻撃…。

その戦闘スタイルこそ実に単純明快なんだけど、その破壊力は実に厄介なもの。

でも、その攻撃による消費する魔力も激しいはずなんだけど…。

どうやら、私の前に戦ったヴィータからその魔力を存分に吸収していたらしくまだまだ元気一杯なのとそもそも私との体格差により一回に受けるダメージが私の方が大きい…。

それに対し私の方は、首飾りに使った魔力の回復がしきれてないのとさっきのダメージ…。

さらにいつまで私の体が持つのかどうか…。

「まったく…。ヴィータのヤツ…」

私は、余計な事をしてくれたヴィータの事を少し恨みつつも自分に対しさらに不利な条件が増えた事への対応についてその思考をさらに巡らしていた。

でも、ヤツがあの矛を出したって事はどうやら消耗戦にはもっていく気がないって事よね？

それについては、こっちにとってはありがたい事だけど…。

「なら…」

自身のダメージなどの回復などを待ちならがヤツがその間に攻撃することへの警戒をしつつ、思考を巡らせていた所ヤツが黄天のその力の象徴でもあるその三極の矛を出した事に気がつきそこからヤツ

の思考を読もうとする事にした。

そもそも私が持つ蒼天とヤツが持つ黄天、それに紅天…。

この3つの石には、それぞれその力共にその力を最大限に扱うための専用の武器が存在する。

そして、今ヤツが持っているその矛がまさにそれ。

私場合、今はノアにそれを預かってもらっていて今持ってるデバイスだとせいぜい5，6割の力でその力に耐え切れなくなって壊れちゃうのよ。

それを使うともなればヤツも本気でおそらく短気決戦をしてくるだろうと考えた私は、一言そう呟いたあと蒼の魔方陣を展開。

さらにそこから、魔力光を白銀に変えていった。

魔力光の色が変わるのは、私の中にある蒼天の石の力の…その割合を増やしているから。

さっきまでは、その魔力弾一発に対し約数パーセントだったんだけど今はその石の力を全体の半分まであげた。

石の力を半分まで引き出す事…。

それは、ユン先生やノアからは石の力をノア抜きで半分以上は使うなって言われてそれ以上使うと命の保証は出来ないとまで言われているその限度。

でも、それは私が正常な状態の時の事であって今の状態の私だとおそらくギャンブルの領域入るわよね？

「ごめんなさい…。でも…今は…」

私は、そう呟きながらノアやユン先生に対しその警告を無視する事を詫びながら半分からさらにその割合を増やしていきそれに応じて私の魔力光はさらにその光を放ち始めていった。

「今度は、こちらからだ！！」

「来た！！」

私が石の力をさらに引き出していた所、それに気づいたゼールが三極の矛を構えたままこちらにそう声を上げながら向ってきた。

それに対し私は、声を上げそれに対応すべくファルシオンと蒼翔扇を短刀モードにし二刀流でそれを受けようとそれらを構えた。

「くらえ！！」

「クッ…」

ガキーン！！

ガキーン！！

私に近づいて来たゼールは、持っていたドライデント・ランスを真上から振りかざし私に攻撃を仕掛けてきた。

それに対しわたしは、それを蒼翔扇で払いその反動を利用しヤツの死角に回り込みファルシオンで切りかかった。

私のその攻撃に対しゼールは、それを矛の柄の部分で受けその勢いのまま私を弾き飛ばす。

ヤツのその馬鹿力により弾き飛ばされた私は、クルりと体と反転させすぐに体制を整え今度はこちらから攻撃を仕掛ける。

状況としては、私がヤツの周りを動き回り一撃離脱の要領で攻撃をしかけその一方でゼールがその場から動かず私の攻撃をその三椏の矛で受けたりその逆に攻撃して来るといった様子。

そのやり取りの中、私の体にさらに切り傷が増えヤツもまたその鎧に私の斬撃の後が増えていった。

でも、私が与えるダメージは大して大きなダメージには至ってはいない…。

「なら…これならどう!!シャイニング・ブラスター!!」

「ぬっ!!幻術!!しまった!!グォォォォォーーーーーー!!」

ドーーーーーン!!

ヤツの状況を即座に感じた私は、ヤツをファルシオンで攻撃すると幻術を使ってそれを見せそれに対し迎撃をして来たヤツの死角に周りこんで右手に持っていた蒼翔扇を扇形態にしその前に魔方陣を展開。

そして、私は持っている最大の砲撃魔法であるシャイニング・ブラスターをヤツ目掛けてお見舞いしてやった。

まんまと私の幻術に騙されたゼールは、それに気づきそしてしまった！と言う声を上げながらその爆発によって産まれた光に飲み込まれていった。

「はぁ…はぁ…ど…どうよ？（ドクン！！）んクッ！！…」

ゼールが飲み込まれた爆発から離脱した私は、息を整えながらその様子を見ていた。

でも、ヤツから受けたダメージと現状で自分の体が耐えられる以上の石の力使った事から産まれたその反動により体から激痛が生じた。

その痛みに対し私は、右手で胸の辺りのバリアジャケットギュっと握りしめ苦悶の表情を浮かべながらその痛みに耐えていた。

「き…貴様ぁー！！よくもこの私を！！」

「はぁ、はぁ…よくお似合いよ？そのボロボロのマント？」

煙が晴れヤツの姿が見えた所でゼールは、まさに怒り心頭といった様子で怒りに満ちた声をあげる。

それを見た私は、ヤツが着ていたボロボロの白いマントを見て嫌味を込めてそれに答えていた。

ヤツの状態は、全身に覆われた黄金色の鎧には至る所にひびや私の攻撃によってその一部がかけたり穴が空いていたりしていた。

特に大きいのは、ヤツが左手で押さえている右わき腹の部分。

つまりは、私の砲撃を一番近くで受けた部分。

そこが一番大きく穴があいておりその隙間からおそらく鎧の下に来ているインナーだと思われる布がチラチラと見えていた。

あそこを狙えば…。

でも、ヤツにこれ以上の徹底的なダメージを与える手段と言えば…。

もう…。

あれしか…。

私は、自身の状態とヤツの状態を確認しながら次の手を考えていた。

「それしか…ないか…」

でも、予想以上に石の力のその反動が大きく用意していた手が次々と消え残る手段がひとつしかなくなっていた。

ゼール視点

ちっ…。

予想以上のダメージを受けたか…。

俺は、息を整えつつもヤツから受けたダメージの回復をしようとしていた。

ヤツから受けたそのダメージは、こちらの想定していたものをはるかに上回り以前ヤツと戦ったときよりもどうやら腕を上げていた事をどうやら認めざるを得ないようだ。

だが…。

こちらが与えたダメージもどうやら大きいらしい。

何せ今攻撃をしてこないと言う事は、あちらも相当ダメージを受けているらしいのとあの苦悶の表情…。

どうやら、肉体の方が悲鳴が上がっているようだ。

そもそもヤツは、例の組織が作り出した人造魔導士の失敗作。

生きていても自爆テロなどに使う人間爆弾くらいでしか使い道のないヤツ。

それが、蒼天の石の力を借りて半ば強引に生き長らえているのだ。

これほどの戦闘を繰り返せばその弊害も出るだろうからな。

ようやく、今までヤツに局員や聖王教会の連中を使って行ってきたあれがその効果を表してきたようだ。

「ならば…。ここはいっきにケリをつけるか…」

俺は、ヤツの様子をジッと見つめながらそのダメージの程度等を推察。

そして、そこから次にどうするのかを考えひとつの結論に達しその行動を開始しようとした。

「むっ…！来たか！！」

俺がその行動を開始しようとしていた所、俺よりもヤツの方が先に動き自身の姿をその場から消した。

「どこから来る…」

ヤツが消えた事を確認した俺は、辺りを目で見渡しながらヤツがいったいどこから現れるのかを探がそうとする。

だが、ヤツは現れない…。

「まさか？逃げたのか？いや…そうではない…いったいどこにいる？」

時間がいくら経っても現れないヤツに対しそんな声をもらす。

だが、何度となくヤツと戦ったり等をしある程度ヤツのその性格をも把握している事からそれがそうではないとすぐにその確信に変わりその警戒のレベルをさらに上げていった。

もし、俺がヤツだとして…狙う所といえば…。

警戒のレベルを上げ行くのと同時に次にヤツがどんな手段でどこを狙ってくるのか、それにすばやく対応もしくは未然にそれを防ぐべくヤツのその思考を読み始める。

「来たか！！ちょこざいな！！」

そして、その思考が完了しようとした所で目の前から大きな魔力弾が数発こちらに向って飛んできた。

ブオン。

その魔力弾に対し俺は、ドライデント・ランスを振りかざしその魔力弾を切り裂いた。

「何っ！！」

ドドドドーーーーーン！！

だが、次の瞬間その魔力弾の中から小さな魔力弾が現れ俺に対しまるで雨あられのように降り注いできた。

それを交わす事が出来なかった俺は、防御姿勢を取りそれに耐えた。

フッ…。

「これで！！」

「隙をついたとでも思ったか！！貴様がこの一番大きく穴が空いたわき腹を狙って来る事はわかっていたわ！！」

ドン！！

「グフッ！！…」

フッ…。

「何！！幻術！！」

大量の魔力弾その攻撃に耐えた俺に対し、その直後ヤツが俺の右わき腹付近に姿を表し一番ダメージが与えられるであろうその穴が空いた所に持っていた刀を突き刺そうとし声をあげる。

それを見た俺は、それが想定通りである事声にあげ刀を突き刺そうとするヤツの顔を右手の裏拳で殴り飛ばした。

だが、次の瞬間…吹き飛ばされるヤツの姿がすぐに消えそれが幻術である事を察した俺は驚きの声をあげる。

だが…当たった感触は残っている。

と言うことは…。

グサ！！

「ング！！き…貴様ぁーーーーーーーー！！（バチバチ）ぐわぁーーーーーーーー！！」

ヤツが再び姿を消した後、俺は先程ヤツを殴りつけたその感触を確かめながらその幻術をかける前にすくならずのダメージを与えた事

を確認していた。

それが、ヤツの対してわずか一瞬のスキを与えてしまったのだ。

次の瞬間、背中に激痛を感じそれを確認した所ヤツが俺の背中に刀を突き刺している光景見えそれに対し怒りの声をあげる。

さらにその刀から恐らく蒼天の石の力をこちらに流し込んでいるせいで、体が上手くコントロール出来ずにいた。

そして、全身にまるで電撃を浴びているような激痛が訪れその痛みを訴えるように俺は、悲鳴に似た声をあげていた。

ミツキ視点

「さっきの言葉…。熨しをつけてそのままお返しするわ!!私がそんな単純な手を使うとでも思っていたの!!」

ゼールの背中にファルシオンを突き刺した私は、そういいながらファルシオンからヤツの体内に向けて石の力を流し込んだ。

「ま…まさか…貴様ッ!!わざと俺の攻撃を食らった後に幻術を発動させたのか!!ぐあぁぁぁぁあ!!」

「そのまさかよ!!全ては、あんたが幻術だったのかそれともそうでなかったのかその迷いからでるスキを作り出すため!!さぁ!!これで終りよ!!ゼール!!私と一緒にみんなの所に連れてってあげる!!」

私の話を聞いたゼールは、さっきヤツが一瞬迷ったあの瞬間を作り

出すために私がわざとヤツに殴られそしてその後に幻術を発動させた事に気づきそれを声にあげるが自身の体内に流れる蒼天の石の力によるダメージに再び悲鳴をあげてた。

その声を聞いた私は、その通りである事とこれから私が一体何をするのか…。その真の目的をヤツに離した。

「貴様っ!!まさか自爆する気か!!だが、残念だったな!!いくら貴様がいくら足掻こうが、肉体は滅んでも黄天の石が存在し続ける限りこの俺は…」

「それはどうかしら?私がただ自爆するだけなら、わざわざ石の力をあんたの体に流し込んだりなんかしないわよ!!」

私の話を聞いたゼールは、驚きの声をあげるがすぐに自分の方が有利であるその理由を言ってきた。

それを聞いた私は、そんな事も計算の内に入っていると言わんばかりその話を言い返す。

「くっ!!蒼天の石の力を俺の流し込んでいるのは、俺の中にある黄天の石を破壊する事が目的か!!いいのか!?そんな事をすれば貴様の仲間の肉体を破壊する事にもなるんだぞ!!それに貴様自身も!!」

「ええ!!だからこそ、私の命をその代償にするの!!あんたさえこの世からいなくなれば、ユウ達に余計な事をさせなくてすむ!!それにみんなの魂さえ開放出来れば私の命なんて安いもんよ!!」

私の話を聞いたゼールは、こうしている理由をすぐに理解し次にそ

れを阻止しようとしてきた。

ヤツのそんな話に対し、私はそれをキッパリと言いきりその覚悟をヤツに示した。

「くっそーーーーーーーーーーーー!!」

ファルシオンから出ていた光が徐々にその刺した所からその外へと広がりを見せ始める。

みんな…怒るだろうな…。

こんな事して…。

両手でファルシオンの握り手を押さえその力を流し込んでいた私は、ふと頭の中でそんな事を考えていた。

そして、次から次へと懐かしい光景が頭の中を過ぎっては消え…まるで走馬灯のように流れていった。

みんな…。

ごめんなさい…。

走馬灯が終わった所で私は、心の中でみんなに詫びた。

ーふざけるな!!ー

「えっ？」

私がその覚悟を決めその光の中に包まれ様とした所で、私の頭の中にふと懐かしい男の人の声が聞えて来た。

その声に私は、驚きの声をあげさらにそれが誰だかもわからないまま…。

私とゼールは、その光の中に包まれていった…。

その８４（後書き）

作者
「いや～。この後いったいどうなるんでしょう?と言う訳で如何でしたか?その８４！」

スバル
「って言うかミツ姉どうなったのよ！！教えてよ！！」

ギンガ
「いや…。ここで教えたら元も子もないと思うよ…。それもそうだけど前回の力さん達に続いて今回は、北斗さんとサイモンさんが出てきたんだけど…あれって…」

作者
「あれについては、前回の話を公開した後ジャン先生の方から２人も出してと言った内容のメールが来ましてそれで検討を重ねた結果こうなったと言う訳です」

スバル
「えらく大げさな事言ってるようだけど…」

作者
「元々、あの２人場合個性がかなり強いですからね。それに話の流れから言って中々出しづらい状況だったもので…」

ギンガ
「だから、前書きに出したのね?」

作者
「まぁ、そんな所です。なんせ、力達を含めた5人が揃うとある意味最強みたいな設定になってるのとあの2人と元々絡んでいるなのはキャラがこちらだとかなり出番が無いキャラになってしまい…」

スバル
「なんだか今日は、言い訳が多いような…」

作者
「結局の所あの2人については、その出番自体はかなり少ないものになってしまう可能性がありそれでよければと言う事で出演してもらった事になります」

ギンガ
「ふ〜ん…。それで、ミツキさんの方は?」

スバル
「そうだよ!!物凄く中途半端だよ!!あれじゃ!!それに最後あの「ふざけるな!」って誰が言ったの!!」

作者
「ミツキについては、元々ああなる事が決まっていたのでそうしました。それに、あれがどんなリアクションが産まれるのかがとりあえずしりたくてああしたのと。あの声については、次の本編にて…。ですが、察しのいい方ならわかると思います。いまだチラチラとしか出てないキャラがまだおりますので」

スバル
「そう言えば、そんな人がいたような…。あーーー!!わかった!!ザフィーラだ!!」

ギンガ
「それはないと思うよ…。スバル…」

作者
「それはそれで、面白いとは思いますがそんな所を感想などでいただければ幸いです。主要キャラの自爆シーンなんて中々見ないですし先程も言いましたがどんなリアクションがあるのかある意味楽しみにしてますので」

スバル
「それじゃ！次回はそれで決まりって事で！！」

作者
「いえ…。次回については、本編を離れ特別編をお送りいたします」

スバル
「え～！！ひっぱるのーーーーーー！！」

作者
「まぁ、そんな所と後この作品がこの間で連載1周年を迎えたのでそれについての記念小説になります」

ギンガ
「もうそんなになるんだ…。なんだかあった言う間ね？」

スバル
「と言うより、ダラダラやりすぎ…」

作者

「その辺はそれとして…。ちなみに今回の記念小説については、シリーズ企画として行くつもりのものの第一段になります。と言う訳で今回はここまで！！〆の台詞をナカジマ姉妹のお二人にお願いします」

ギンガ
「ＯＫ！！それじゃ、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～１周年記念「フォト・メモリーズ」～ユウ＆アルト編～「２人の始まり…」

スバル
「テイク…オフ…」

１周年記念「フォト・メモリーズ」～ユウ＆アルト編～「２人の始まり…」（前書き）

皆さんこんにちは。

作者の左近　遼です。

このたびは、皆様のおかげでさる５月１９日に連載１周年を迎える事ができました。

これも読んでいただいた皆様のお蔭です。

真にありがとうございました。

それを祝しまして今回は、その記念小説をお送りいたします。

読んでいただければ幸いです。

それでは！！

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～１周年記念「フォト・メモリーズ」～ユウ＆アルト編～「２人の始まり…」始ります…。

1周年記念「フォト・メモリーズ」～ユウ&アルト編～「2人の始まり…」

1周年記念「フォト・メモリーズ」～ユウ&アルト編～「2人の始まり…」

機動六課宿舎内　談話室

ギンガ視点

「なつかしい～！！これどこに合ったんですか？ギンガさん？」

「これは、この間ウチにあった写真を整理してた時に色々と出て来たね？それをアルバムに入れていくつか持ってきたんだけど。それで、この写真もその中の1枚でミツキさんにこの写真の事を聞いたらアルトに渡してくれって頼まれて持ってきたのよ」

今日1日の任務を終えた私にスバル、そしてアルトにティアナにエリオとキャロの6人は宿舎にある談話室にてお菓子を食べながら寝るまでの時間を過ごしていた。

ちなみにユウは、今日はナイトシフトのため不参加。

そんな中、私は家にあった写真を整理していた時に出て来た写真のいくつかを小さいアルバムに入れて持ってきていた。

なんだか…なつかしくなっちゃってね。

それで、その中の1枚…ミツキさんからアルトに渡すように頼まれ

た写真をそのアルバムの中から取り出し彼女に手渡した。

私が渡した写真を見たアルトは、驚きの声をあげその写真がどこから出てきたのかを聞いて来たのでそのときの事を彼女達に説明した。

「それにしても…この写真…。ミツキさんにユウ、それにヴァイス陸曹にアルトって…。いったいなんの写真よ？」

「これはね。私が訓練校にいた時に取ったものでね？…その時確か…」

写真を見たティアナがアルトに対してそう質問した所、彼女はなんだか感慨深い表情になりつつその時の事を話てしれた…。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～１周年特別企画「フォト・メモリーズ」～ユウ＆アルト編～…始ります…」

今から遡る事、およそ６～７年前…。

フラナガン郊外　訓練校　教室

アルト視点

「やったぁ〜！！希望通りだぁ〜！！」

「えっ！？どこどこ…？って、それって陸の地上部隊じゃない！？まったく…。驚かすんじゃないわよ！！私は、てっきり本局行きかと思ったわよ！！」

「別にいいじゃない！私が希望したんだから…」

その時、私が入た教室では私達訓練生が年に一回自分が希望した管理局の各部署に見学しに行ける施設見学会のその見に行ける場所の発表が行われていた。

先生からその行き先が記載されたプリントを見た私は、大喜びをしていた。

それを見た同じクラスのクラスメイトの一人が驚きの顔をしながら私が持っていたプリントを見、それを見てほっとした様子をしながら私に声をかけてきた。

彼女の話を聞いた私は、顔をプーっとしながらそれに答えてる。

そもそも、この施設見学会…。

私達がミッドにある全訓練校で一斉に行われるもので訓練生がそれぞれに希望を出し、管理局にある様々部署に行きその部署がどんな物なのか卒業前に見学出来るといったもの。

それで、私が在学中のこの訓練校だと、卒業すれば自動的に地上本部の各部隊への勤務となり本局に行く可能性なんてある意味ないに

等しい。

だから、見学出来る部署の中には本局の部署なんかもありそこに今の内に見ておこうと言うみんなの希望がそこに人気が集中。

でも、本局側での対応人数も限られていたため本局への見学希望者達については先生達が事前に見学者の抽選を行いその結果がプリントにてそれを現在配布中。

そのため本局に希望を出している人達に取っては今まさに気が気でないといった様子。

「それにしても…。あんたも物好きねぇ？私達みたいな内勤組は、卒業したらそんな所いつでも見に行けるだろうに？それをわざわざ希望するなんて…。それに！！今のうちから将来有望な局員に唾をつけとかないと貧乏局員と結婚するハメになるわよ！！」

「だってぇ～。陸士１０８部隊の技術開発室なんて、見に行きたくても中々見に行けないって言うし…。それにそこの室長さんって、女の人だって言うから…。もしかしたら色んな話を聞けるかなぁ～なんて、思ってね？」

さっき私に話し掛けてきたクラスメイトが、あきれた様子でなぜそこに希望を出したのかその理由を聞いて来た。

それを聞いた私は、その理由をオドオドしながら話をした。

私達のクラスは、管理局で内勤を希望する生徒がまとめて集められいくつかのクラスに分けられたもの。

だから、このクラスの中には事務を希望する人や私みたいに整備を希望する人がいてそれぞれその希望する職種に合わせて授業を受けると言った形を取っている。

ちなみに今、話し掛けてきているクラスメイトは事務職を希望。

そして、今回のこの施設見学会で将来所謂逆玉に乗るべくその相手をゲットするために本局への希望を出したとか…。

「でも、その室長って人の名前…。わからないんでしょ？そもそも、その技術開発室ってここ1～2年の間に出来たばかりじゃない？それにあんたが期待してるような所じゃないかもしれないわよ？」

「そんな事ないわよ～！！」

「それじゃ…。あれは何？」

「えっ…」

私のその理由を聞いたクラスメイトは、私がまだその室長の名前を知らない事やまだ出来て浅い事を理由にあげ私の想像とは違う可能性を示唆。

それを聞いた私は、その可能性を否定するもその彼女は教卓の方を指差しながらそこで行われていた光景を私に見せた。

「先生～！！頼む！！あそこだけは…。１０８の技術開発室だけは勘弁してくれ～！！」

「サエグサ…。そもそも、お前はどこでもいいって言ってたろ？だ

から、希望者が空いていた所に入れたんだ。文句を言うな!!」

「だからって、あそこはねぇ～だろ!!はっ!!…そうか!!…先生にどっかから圧力が…（ガン!!）痛ってぇ～!!」

「んな訳ねぇ～だろ!!」

クラスメイトが指を刺したその先では、自分の行き先が書かれたプリントを握り締めた私と同じクラスのユウ・サエグサ君が先生に対しその行き先の変更を必死な様子で求めていた。

それを聞いた先生は、それに対し呆れつつもそれに答えそれを聞いたユウがなんだか訳のわからない事を言っていた。

サエグサ君のそんな話を聞いた先生は、彼の頭に向けて拳骨をを振りかざしそんな事はない事をつげていた。

「サエグサ君…。いったい何やってんのよ?」

「さぁ?あの様子だとよっぽどあんたが希望していた所に行きたくないみたいよ?あっーーーーーーーーー!!本局じゃない!!先生!!私!!ここ嫌!!本局にして～!!」

その光景を見た私は、飽きれた様子で声をあげそれを見たクラスメイトはその様子から推測したその理由を自分の所に来たその行き先が書かれたプリントを見ながら言っていた。

プリントにかかれていたものを確認した彼女は、サエグサ君が渋々その場を立ち去るのを確認した上で自分の希望先と違う事に先生に文句をいいに言っていた。

あっ！！ちなみにこの時の私とユウは、今とは違って単なるクラスメイトの一人って事だったからお互いに私が彼の事を「サエグサ君」って呼んでて彼が私の事を「クラエッタ」ってお互いの事を呼んでいたし会話も挨拶程度のものだったんだよ。

「よ～し！！これで、全員に行き渡ったな！！それじゃ、１時間後にそのプリントに書かれた場所に向う事！！以上！！解散！！」

どうやら、そのクラスメイトの意見も却下されたらしくそれが片付いた所で先生よりこれからの指示が与えられ私はその教室から出る事となった。

訓練校施設内　校門

ユウ視点

「ちっきしょ…。なんでよりよってあそこなんだ…」

「まだ、文句言ってるの？いいかげん諦めなよ？サエグサ君？」

教室を出た俺とクラエッタがプリントに指定されていた校門で俺達がこれから行く陸士１０８部隊技術開発室に案内してくれるここの卒業生…。

つまりは、俺達はその先輩局員が来るのを待っている。

その先輩を校門によっかかりブツブツと文句をいいながら待つ俺をその横にいたクラエッタが呆れた様子をしながら声をかけてきた。

「何言ってんだクラエッタ？お前は、あそこの…特にあの室長の恐ろしさを知らないからそう言えるんだよ？」

「恐ろしさって…。でも！その室長って人、確か女の人でしょ？ともなれば私としてはなんだか憧れちゃうなぁ～」

クラエッタの声を聞いた俺は、アイツに対しその理由を説明。

それを聞いたアイツは、俺の話を納得せずさらに希望に満ちた顔しながら俺の横で校門によっかかり空を見つめながら俺の話に答える。

その瞬間…。

空を見上げながら微笑むアイツのその顔を横目で見て少しドキッとしたのは…

恐らく気のせいだ。

（ちょっと～！！少しは、気にしなさいよ！！）

と、どこからともなくクラエッタの声が聞えたような…。

ちなみに俺の横にいるクラエッタではないのであしからず。

まぁいい…。

「いっとくが憧れるのは辞めといた方がいいぜ？あの室長に関わる

とろくな事がねぇしそれに、憧れる程出来た人間でもねぇぜ？」

「なんで、そんな事わかるのよ！！」

「まっ…。噂だよ。噂」

クラエッタの声を聞いた俺は、少し考えた後それをしないようアイツに忠告した。

それを聞いたクラエッタは、納得しない様子でそれに対し反論。

アイツの反論に対し俺は、あくまで噂で聞いた事にしてそれに答えた。

ちなみにクラエッタ及び俺のクラス連中は、俺がこれから行く所の室長…つまりウチの姉貴と俺が姉弟である事をしらないし俺も特には言ってはいない。

なんせ、これを言うと色々と面倒だしな。

それに先生達もこういった事については、特に気にもしてないしその事を使って嫌味とかも言ってはこない。

なぜかと言えば、そういった連中が俺以外にも結構いるらしくそれに忙しいからいちいちそこまで覚えてられねぇんだと。

それにしても…そこの室長が女だって事だけであそこを希望するなんてな。

「何よ？まるで、人を小バカにするような顔で見て？」

「嫌何。よくもまぁ、対した調べもせずに希望を出せたもんだなぁ～って思ってな」

「どこでもいいなんて希望を出してたヤツなんかにとやかく言われる筋合いはなーーーーーーーーい！！」

そんな事を考えていた所ムスっとした様子のままでいたクラエッタが俺の方を向いて声をかけてきた。

クラエッタの声に対し俺は、思っていた事をそのままアイツに話をした。

俺の話を聞いたクラエッタは、俺のほうを向き声を荒げていた。

「なんだ？お前等だったんか？」

「えっ？…ヴァイス先輩！！（ヴァイス！！）って、サエグサ君も知ってるの？ヴァイス先輩の事？」

そんなやり取りをしていた所、校門の外側から誰かの声が聞えて来た。

それを聞いた俺達は、その声がした方を見て2人してそこにいた男性…。

つまりは、ヴァイスに向けて声をかけそれを聞いたクラエッタが驚きの様子で俺にさらに声をかける。

「こいつはな、俺の知り合いの弟でいろいろと遊んだりしてたんだ

よ、アルト。ちなみにアルトは、俺が昔いた部隊で世話になった人の孫でな。たま～にその人に会いに行ってた時に会っててな。それにしてもお前達2人そろって同じ訓練校で同じ所を希望するとはな～」

「俺は違う！！なんであんな所！！」

「はいはい…。それにしても、ヴァイス先輩がもしかして案内役なんですか？」

クラエッタの声を聞いたヴァイスは、俺達に近づきそして俺の頭をポンポンと叩きながら俺とヴァイスの関係をクラエッタに説明。

そして、それが終わると今度は俺に対しクラエッタとの関係を説明しこの事が驚きだった事を告げていた。

ヴァイスの話に対し俺は、そうではない事を言いその声にクラエッタは俺の声をもううんざりと言った様子で聞き流しつつヴァイスに対し質問をしていた。

「ああ、そういうこった。よろしく頼むな」

「こちらこそ。よろしくお願いします」

「大方…。オーリスさんに命令されたんだろうけど…（ガン！）って！！殴るな！！」

「お前は、一言余計なんだよ！！それじゃ、いくぞ」

「「はい！！（へ～い）」」

クラエッタの声に対しヴァイスが答え、それを聞いたクラエッタが頭を下げながらヤツに挨拶をする。

その横で俺は、ヤツがここに来た理由ぼやいていた所をヤツに頭を殴られ頭を抑えていた。

俺の様子を見たヴァイスは、殴った理由を言いつつもすぐに出発をする事を言いそれを聞いた俺とクラエッタはヤツの後に続いた。

陸士１０８部隊　部隊長室

ゲンヤ視点

「えっ!?見学者?来るんですか?ウチに?」

「ああ、そういうこった」

俺が座るデスクの前に立っていた技術開発室の室長、ミツキ・サエグサが驚きの声をあげながら俺の話を聞きそれが事実であるのか?と聞き返してきた。

それを聞いた俺は、それが事実である事を彼女に告げる。

「それにしても…。いったいどこの誰ですか?そんな物珍しい人って…」

「さぁな？なんせ、俺も今朝聞いたばかりだし誰が来るかについてもくればわかるって事とお前に害をなすようなヤツじゃねぇとさ」

俺の話を聞いたミツキは、「ふ～ん」と言った様子でその見学者の事について聞いて来た。

その声に対し俺は、その事については今朝聞いたばかりの事で誰が来るかもわからない事をつげた。

なんせ、ウチの技術開発室って言うのはまだ出来て左程時間は経ってはいねぇし大きい成果もまだ上げちゃいねぇ。

それにいち地上部隊にある歴史が浅い技術開発室を見るよりも本局にある技術開発部にいった方が色々といいんじゃねぇか？と言うのが大半の考えであり俺やミツキも同意見なんでな。

と言うわけで、技術開発室が始ってからまだ一人も見学者は来てねぇし来ねぇからって別に気にはしてはいなかった。

だから、今回のこの事態に俺やミツキも驚いてるって訳さ。

「まったく…。オーリスのヤツ…。いっつもいきなりなんだから…」

「まぁまぁ。とにかく、受け入れの準備の方は頼むな。理由はどうあれ、せっかく来てくれるんだ。期待は裏切らねぇようにしねぇとな」

「はい。わかりました。それじゃ…」

「おう。頼むぜ」

俺の話を聞いたミツキは、俺に連絡を入れてきたオーリス補佐官に対し文句を言っていた。

それを聞いた俺は、その指示の遅さについてはともかくとしてとりあえずその見学者の受け入れ準備をするようミツキに対して指示。

俺のそんな話にミツキは、すぐに頭を切り替え俺に敬礼をした後その部屋を後にした。

でもまぁ…。

あのお嬢ちゃんがこういう事をし出すと言う事は、なんらかのドッキリみたいな事でもあるんだろうな?

さて…。

それがいったいなんなのか…。

ちったぁ～、楽しみだな…こりゃ…。

ミツキが去った部隊長室で俺は、そんな期待を思いつつもその様子をこっそりと見ようと自分の仕事を急いで片付ける事にした。

技術開発室内　オフィス

ミツキ視点

「という訳で、見学者がウチに来る事になったからよろしくね？」

「「「「は～い」」」」

部隊長室を後にした私は、ゲンヤさんから聞いた事を研究員達に説明。

それを聞いたみんなは、それぞれ作業をしながら返事をしていた。

「それにしてもよ。いったい何を見せるんだ？」

「う～ん…。とりあえず、今やってる研究や実験なんかを見てもらったり…。出来そうな事があったら体験してもらうくらいかな～。それに何が見たいのかも聞いて見ないと…」

「ふ～ん…。んで、案内は誰がやるんだ？訓練校からその見学者を連れ来るのってウチの連中じゃねぇんだろ？」

私の話を聞いたノアが、私の横で頭の後ろし両手を回しプカプカと浮かびながら具体的な話を私に聞いてきた。

「そうらしいわね？それについては、みんな今は手が一杯だから私がやるとして…。ノアには、執務官の方の仕事をやってもらいたいのよ」

「なるほど。書類出しと外回りだな！まかせとけ！！」

「お願いね」

「あいよ～！！」

ノアの質問に対し私は、案内役を私がする事とそれとは別にノアに対し執務官の方の仕事をやってもらうよう彼女に依頼。

それを聞いたノアは、その内容を確認した上でその部屋を後にした。

（サエグサ室長。受付に見学希望者が到着しました）

「わかりました。すぐに行きます。さてと…。そろそろ来る頃だから私も準備しなくっちゃね」

ノアが部屋を出るのを確認した私の所に、受付からその見学者が来たとの連絡が入った。

それを見た私は、見学者を迎えに行くべく受付へと足を運んだ。

地上本部　受付

ヴァイス視点

「なぁ…。帰ってもいいか？」

「お前なぁ…。単位、無くなってもいいのか？」

「それは困る！！だから、その辺は…ヴァイス先輩に～」

「する訳ねぇ～だろ！！」

ユウとアルトを連れてきた俺は、受付に声をかけ今回の受け入れ先

の担当者であるミツキを呼び出してもらっていた。

そして、彼女が来るまでの間その受付付近でユウがまだグチグチと文句を言いさらに俺に対し来た事にしてくれと頼んできた。

ヤツの声に対し俺は、そんな事は出来ないときっぱりと断っていた。

なんせ、ちゃんとやらねぇと後でオーリスに何言われるのかわかったもんじゃねぇからな。

今回、俺がこの件をオーリスから仰せつかったのもアイツの命令によるもの…。

なんで、そんな事が出きるかといえば…。

昔、俺がオーリスを地上本部内でレジアス中将の娘とは知らずにナンパした事がきっかけ。

それで、後でその事を知った俺に対しオーリスがその事を親父にバラすと言い出し無理難題を俺に言い出してきた。

今回もそれの一環だが…。

でも、なんで断れねぇかと言えば…。

ヤツの父親…つまりは、レジアス中将にもしそんな事が耳に入ったら何をされるのかわかったもんじゃないと言う事だ。

現にオーリスに手を出しその事が中将にバレた男共が、彼女と別れさせられるべく地方に移動を食らっていたと言う事例が多々あるか

らな…。

つまりは、俺もその中に入りたくはないといった所。

でも、そのおかげで今回あの機械オタクが驚く顔を直に拝めるんだ…。

やってて悪い事ばかりではない。

今回…。オーリスから頼まれたミッションは、連中を連れてくるだけではなくこれから来るであろうミツキが驚く顔を写真に取って送るというもの。

写真の撮影については、既にストームレイダーに頼んであるしオーリスの話によればミツキは今日の見学者の中に自分の弟いるなんて事は知らないとの事。

つまりこれは、ミツキに仕掛けた軽いどっりきであってユウに帰られてしまうとその計画が実行出来なくなると言った所だ。

ちなみに俺とオーリス、それにミツキの3人はそのナンパの一件依頼色々と遊んだりする中であり昔は色々と悪戯とかもしていた。

役割分担は、俺が実行役件言い出しっぺでオーリスがそれを指揮。

そして、ミツキが参謀役としてその作戦を立案し必要な機材なんかを用意するといったものであった。

「もしかして…。あの白衣を来た人って…」

「げぇ！！よりにもよって！！」

おっと…。

なんだかんだ事を考え入たらどうやら来た見たいだ。

後は、アルト…よろしく！！

アルト視点

えっーーーーーーーーーー！！

なんで私なんですか！？

まったくもう！！

とにかく！！ヴァイス先輩の横で待っていた私とサエグサ君の目の前に白衣を来た女性が近づいて来るのが見えた。

それに気づいた私が声をあげそれに続きサエグサ君も嫌そうな顔をしながら声をあげていた。

でも、あの女性…。どっかで見たことあるような…。

「ん？嘘…。な…なんであんたがここに！？まさか…（パシャ！！）えっ！？…」

「うっしゃーーーーーー！！どっきり成功ーーーーーー！！いや～！いい驚きっぷりだったぜ！！ミツキ！！今のその表情、しっか

りと収めさしてもらったからな」

私達に近づいて来たその女性は、サエグサ君の顔を見た途端驚いた顔をしていた。

次の瞬間、ヴァイス先輩が手に持っていたストームレイダーから光が放たれその中身を確認したヴァイス先輩が喜びを露わにしていた。

「もしかして…。ヴァイス…あんたまさか…」

「ピンポーン！！そのまさかだよ？ミツキ？」

「そんなこったろうと思ったよ…」

「えっ！？いったいなんの話なんですか？」

「ヴァイス！！ストームレイダーをこっちに渡しなさい！！」

「やなこった！！ストームレイダー！！急いでこの画像をオーリスに送れ！！」

＜了解＞

ヴァイス先輩の声を聞いたその女性は、プルプルと体かすかに揺らしながら今の事をヴァイス先輩に確認。

それを聞いたヴァイス先輩は、どっきりである事を認め先輩に続きサエグサ君がやれやれと言った様子で声を上げていた。

彼等のそんなやり取りについていけない私は、説明を求めていたが

どうやらその私の声が合図となりヴァイス先輩とその女性が追いかけっこを始めだした。

そして、その追いかけっこの最中ヴァイス先輩がストームレイダーに対し今取った画像をどこかに送る指示しそれにストームレイダーも答えていた。

それから…およそ１０分後…。

「それじゃ、改めて紹介するぜ。こちらが陸士１０８部隊技術開発室の室長、ミツキ・サエグサ一等陸尉だ。そんで持ってコッチが見学者のアルト・クラエッタ、ユウ・サエグサ候補生です」

「よろしくお願いします！！（どうもっ）」

「ちょ…ちょっと！！サエグサ君！！」

先程の追いかけっこ終了し技術開発室のオフィスに移動しそこの室長であるミツキ・サエグサ一等陸尉を至る所に包帯が播かれたヴァイス先輩からそれぞれ紹介されていた。

ヴァイス先輩の声の後、私はそこの室長に挨拶をするがその横でサエグサ君は面倒くさいと言った様子。

それを見た私は、彼のズボンと叩きながらちゃんとするよう注意を促す。

ちなみに、ヴァイス先輩がなぜ、包帯だらけなのか？と言えば先程の追いかけっこでヴァイス先輩がサエグサ室長に捕まりボコられ…。今に至る…。

「まったく…。訓練校に入って少しは変わるかな？って思っていたけど、相変わらずなのね？ユウ？」

「当たり前だろ？大体なんで身内に挨拶せにゃならん！！」

「えっ…？身内？」

彼のその態度を見た室長は、サエグサ君に呆れた様子で声をかけそれに対し彼が答えその声に対し疑問を感じた私が声を上げていた。

「そういや、アルトには言ってなかった。ここにいるユウとミツキは姉弟なんだよ？それにミツキは執務官も兼務している」

「えっーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！こいつと室長さんが姉弟！！それに執務官も兼務って…。お…思い出しだ！！確かあなたは、現役最年少で執務官試験に合格し数々の難事件を解決した…あの…サエグサ執務官…。あわわわわ…」

「そんなに対した事じゃねぇよ？そんな事」

「お前が言うな！！」

そんな私の疑問に対しヴァイス先輩がサエグサ君とその室長さんの

関係等について説明しくれた。

それを聞いた私は、以前にニュースなんかで彼女が出ていた事を思い出し、その驚きと共にその弟がこんなヤツである事…そのふたつのことについて同時に驚いていた。

そんな私の態度を見たサエグサ君が偉そうな態度で、私のそれに答えそれを見ていたヴァイス先輩に突っ込みを受けていた。

ま…まさか…あの有名人にこんな所で会っちゃなんて…。

私は、ヴァイス先輩とサエグサ君とのやり取りを呆れた様子で見ているサエグサ室長を見ながらそんな事を考えていた。

なんせ、サエグサ執務官と言えば本局からも一目置かれている程の優秀な執務官で地上本部が誇る有能な人材の一人であり「陸の最後の砦」なんて新聞に書かれるくらいその捜査能力は他の追随を許してはいない。

その一方で、その優秀過ぎる能力を嫉んだ本局の局員とかが根も葉もない噂を流していてその事が影響して未だ地上本部の所属となっている…なんて話もある。

ちなみに、ウチの訓練校の捜査課の人達は彼女目当てで地上本部を希望し色んな事を聞こうとしていたらしい…。

「えっ～っと、アルト…クラエッタさん…だったわよね？今日はどんなものが見たい？どうせ、ウチの馬鹿（ユウの事）に聞いても「参加してた事にしといてくれ！」とかなんとか言って帰ろうするだろうから？」

「当たり前だ！！」

「そんな事で威張らないの！！」

「えっ…。でも…そんな私が…」

「そんなに緊張しなくてもいいのよ？今の私は、ここの室長でウチに見学しに来てくれたのが今回初めてでね？どうやってやっていけばいいのかよくわからなくって…。それで、あなたにリクエストを貰おうともらってね？」

私があれやこれや考えていた所、サエグサ室長が私に声をかけてきた。

その声を聞いたサエグサ君は、「えっへん！」といった態度で自慢げな態度を取りそれを見た室長がツッコミをいれていた。

室長の話を聞いた私は、その問いかけに戸惑っていた。

そんな私を見た室長は、その理由を私にやさしい笑顔で私の緊張をほぐしながら話してくれた。

「それじゃ…。お言葉に甘えて…。色んな実験とかどんな設備があるのか…とか…あっ！後！！サエグサ室長に色々と整備の事を教えてもらえたら…」

「いいわよ！！んじゃ、それで行きましょう！！ユウもちゃんと参加するのよ？じゃないよ単位あげないから♪」

「あっ…。ありがとうございます！！」

「んげ！！…へ～い…」

室長の話を聞いた私は、ずうずうしいかな？と思いながらも自分が希望していた事を室長にぶつけて見た。

それを聞いた室長は、二つ返事でそれを了承してくれそしてサエグサ君にも参加するよう釘を刺した。

室長のそんな話に私は、頭をさげながら室長にお礼を言いその横でサエグサ君はがっかりしながら返事をしていた。

それから…私達の見学が始まりいったい何をしていたのか？と言えば…。

陸士１０８部隊野外訓練場

ドカーーーン！！

ドカーーーン！！

「な…なんで俺がーーーーーーーーーーー！！」

「あんた！！逃げ足だけは、自慢できるんでしょ！？だったらその自走式小型爆弾「Ｇ３号」から逃げ切って見なさい！！」

野外訓練場を縦横無尽に逃げ回り大声を出すサエグサ君。

そして、その彼をあの黒くてカサカサとしたあれの形をした自走式

小型爆弾「G3号」がおいかけ彼に近づいた所で自爆をしていた。

この実験は、逃げ足の速い人間に対しどれくらいの反応するかを見る実験…との事。

私は、それを野外訓練場に設置されたテントの中からそれを見その横で室長がマイク片手にサエグサ君の訴えに答えていた。

そんな様子を見ていた私は、彼がなぜここに来たくなかったのか？…その理由がわかったような気がしていた。

実験を見た後、そこにある施設等を見学し室長にも色々と話をし最後に今日の記念として室長達と写真を撮ってその日の見学を終えた。

その帰り道…。

クラナガン郊外　市道

ユウ視点

「ん～♪んん～♪」

「おいおい…。そんなに浮かれて歩いていると変なヤツだと思われるぞ？」

技術開発室での見学を終えた俺とクラエッタは、宿舎に帰るその帰り道。

俺の横で鼻歌交じりでルンルン気分のクラエッタに対し少し困惑気

味な俺が声をかけた。

「いいじゃない別に！！それにしても、こんな私に手取り足取り色々と教えてくれた上に自分が使ってた整備の本までくれるなんて…。本当良い人だよね～。どっかの誰かさんと違って。でも、未だに信じられないよね～？あの人の弟があんただったなんて？」

「仕方がねぇだろ？そうなっちまってんだから？変われるもんなら変わってほしいもんだ」

俺の話を聞いたクラエッタは、ムッとした様子でそれに答え陸士１０８を出てからずっと胸に抱きかかえていた姉貴からもたった本を見ながら俺に嫌味交じりにそう言い返してきた。

それを聞いた俺は、ため息をしながらそれをかえす。

「それは…無理だけど…。でも、サエグサ君も色々と大変なんだねぇ～。（ユウだ）えっ…？」

「だから、俺の事は、ユウって呼べって言ってんだよ。なんせ、お前、姉貴の連絡先まで聞いてたろ？つ～事は、サエグサが２人もお前の知り合いにいるんだ。これから色々と面倒な事になるだろうからそう呼べって事さ」

俺の話を聞いたクラエッタは、自分の言ってた事が俺に不快感を与えたと思ったのだろうか俺に同情するような話をして来た。

その話の途中、俺は、クラエッタに対し自分の名前で呼ぶようなんだか照れくさくなりながら言いそれに驚いたアイツに対しその理由を述べた。

「確かに…そう…だよね…。よしっ!!決めた!!なら、そう呼ぶから私の事はアルトって呼ぶ事!!いい!!ユウ!!」

「ああ…。わかったぜ?アルト」

「なら、さっさと帰ろう?ユウ?あ〜あ、お腹すいた〜」

「お前なぁ…」

俺の話にクラエッタ…じゃなかったアルトは、驚きながらも少し考え…そして、何かを決心した様子自分もファーストネームで呼ぶよう俺の方を向きそう言ってきた。

それを聞いた俺は、それを了承し何やらすっきりとした様子のアルトに呆れながら夕日が沈みかけていたその帰路を急ぐ事にした。

けど、あいつといるとなぜかホッとするし何より居心地がよかったな…。

俺は、前を行くアルトの背中を見つめながらふとそんな事を考えていた。

アルト視点

い…言っちゃった…。

それもあんな偉そうに…。

ユウとの帰り道お互いの事をファーストネームで呼び合う事を決め

あった後、私は、彼の前を歩きながらそんな事を考えていた。

彼の前を歩いていたのは、自分の中でまだドキドキしているのが収まらないためであり今までの自分ならまず有り得ない行動に出てしまったのがその原因。

こんな気持ち…いったいいつから持つようになったんだろう？

今日？

いや…。初めて実習で一緒になった時から？

それとも…。

今考えたら気づいた時には、彼の事を目で追うようにもなっていたし正直今日一日中楽しかったのも室長さんと話が出来た事よりも彼と一緒にいれた事がその原因かもしれない…。

「おい！アルト！！そんなに急ぐなって！！夕飯は急がなくても待ってくれるぜ？」

「や～だよ～♪あんたこそさっさと来ないと置いてくわよ～」

「ったく…」

そんな事を考えていたら後からユウが声を私に急ぐなと声をかけてきた。

彼を聞いた私は、後を振り返り悪戯交じりの顔をしながらそう声をかけその歩く速度を速めた。

私のそんな様子を見たユウもまた、まるで私を追いかけるようにその歩く速度を上げていくのであった。

今思えば…これが、私に取ってこれから色んな事に巻き込まれるそもそものきっかけになっていた事をそのときの私はまだ知らないまま…。

そんな事は露知らずその時の私は、その場で感じた高揚感に包まれながら彼と過ごす時間(とき)を存分に楽しんでいた…。

～時は、戻り機動六課宿舎

ギンガ視点

「へぇ～。そんな事があったんだ～」

「まっ、今となって考えたらそれが、色んな事を知るきっかけになったのかな？」

アルトの話を聞いた後、スバルがアルトにそう声をかけそれを聞いたアルトが色んな事を思い出しながらそう呟いていた。

「でも、いきなりアイツの事を名前で呼べって言われてはいそうですかって答えたわよね？」

「それに自分の事を名前で呼べって言ってたよね～。…って、ねぇ

？アルト…もしかして…ユウ兄の事を…」

「ちっ…違うよ！！ぜぇ～ったいに！！そんな事…」

アルトのそんな声がした後、ティアナがアルトの話の中で疑問に感じた事をアルト質問しそれにスバルが続きさらにアルトがユウの事が好きなんじゃないか？とニヤニヤしながら彼女に顔を近づけながら問い掛けてきた。

それを聞いたアルトは、顔を真っ赤にしながら両手の広げブンブンとその前で振りながらそれを否定していた。

「それ…本当～？（ジトー）あっ！！逃げた！！」

「エリオ！キャロ！アルトを追って！！」

「「は…はい！！」」

スバルの更なる問いかけに対しその対応に困ったアルトは、その場から逃走。

それを見たスバルが声をあげ、さらにティアナがエリオとキャロに彼女を追うよう指示。

ティアナのそんな指示に2人は、ドキッとしつつもその声に返事をしスバルと一緒になってアルトを追いかけるのであった。

はぁ～…。

あの様子だと…。

まだまだ時間がかかりそうね？

あの2人…。

私は、そんなアルト達を見ながらため息をつきながらそんな事を考えていた。

1周年記念「フォト・メモリーズ」～ユウ&アルト編～「2人の始まり…」（後

作者
「如何でしたか？1週年記念小説？」

ユウ
「まさか俺とアルトの話で来るとはなぁ？」

アルト
「そうだよ。私は、どっかの作品とコラボでもするんじゃないかと思っていたよ」

作者
「その事についても考えましたが、今回のこの「フォト・メモリーズ」についてはシリーズ化も考えておりますのでそうなるとまずは、ウチだけでやるがいいかと考えまして…」

アルト
「となると、それでコラボもあるの？」

作者
「それは、ありえます。なんせ、1枚の写真から話が始る形をとっておりますのでコラボも可能なんです」

ユウ
「なるほどな…。んで？シリーズ化っていったいどうするつもりだ？」

作者

「具体的には決まってはいませんが、とりあず今は特別編の中のひとつとして考えておりますしこれが別の話として不定期連載になるかもしれませんし…。これからですね？」

アルト
「ふ～ん…。んで、次回は？」

作者
「一応本編を予定してはおりますが、どうなるのかは今の所未定です」

ユン
「んじゃ！！〆るとするか！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～！！」

アルト
「テイク…オフ…」

９０万ＨＩＴ記念「フォト・メモリーズ」～勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　影の守護者編～

左近

「え～、いつもこの作品をお読みいただき真にありがとうございます。前回の１周年記念を持ちましてこの作品が９０万ＨＩＴを超える事になりました。これもいつも読んでくださる読者様のおかげです。ありがとうございました。

それで、今回はそれを祝し特別編ととして「フォトメモリーズ～勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　影の守護者編」と題しジャン先生が連載しウチのユウとアルトが参加しております「勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ」を影の守護者バージョンにしてお送りいたします。尚詳しい設定などについては、ジャン先生の作品をご覧下さりたい事と本編の続きを期待されてる方には申し訳ございませんがもう少しお待ちくださる事をご了承頂ければ幸いです。それでは、どうぞお楽しみ下さい」

―――――――

アルトの話を聞き終えた私達は、アルトとスバル達が追いかけっこをしているのを横目でそれが終わるのを呆れながらみていた。

そんな中、その追いかけっこから離脱してきたキャロが私が持ってきたアルバムを見てそんな事を聞いて来た。

「う～んとね、気になったのを適当に持ってきたからどれがどうだか…」

「そうなんですか…。でしたら、見せてもらってもいいですか？（いいわよ）ありがとうございます。どれどれ、あっ！これって、力さん達の世界で起きたあの次元嵐の時の写真ですよね？」

それを聞いた私は、そのアルバムの中身を全て把握していない事を告げる。

私の話に対しキャロは、その中身を見たいと私に言い私はそれを了承しそのアルバムをキャロに手渡した。

アルバムを見たキャロは、その中の1枚を見て私にその時の出来事の時のでは？と聞いて来た。

「そうよ。このときは大変だったわね～」

「へぇ～。そうだったんですか？私はあの時ユウと一緒だったからギンガさん達とは、離れ離れだったんでよくわからないんですけど…そっちはどうだったんですか？」

キャロが持つ写真を見た私は、その時の事を思い出しながらその写真を見つめる。

その光景に、追いかけっこからなんとか逃げ延びてきたアルトがその時の事を聞いて来た。

「それはコッチの台詞だよ！アルト。アルトは、ユウ兄とどうだったのよ？特にダグベースに合流する前…」

「えっ！！…そ…それは…」

アルトの話に対し私が答えようとしていた所、アルトに追いついてきたスバルが彼女の横にヌッと現れその時アルトはユウと何をして来たのかを聞く。

その声に対しアルトは、顔を赤らめながら口篭もってしまう。

「なら、こっちがその時の話をするからあんたもしなさいよね！」

「それで、決まり～！！」

「ええっ～！！そんな～！！」

そんなアルトの姿にティアナが、スバルの逆側からこれまたヌッと現れお互いにそのときの話をしようと提案。

ティアナの提案にスバルが即座にそれで決定するとの声ををあげその声に私やエリオ、それにキャロまで頷きながら同意を示しそれを見たアルトが驚きの声をあげていた。

そう…。

これは、力君達の世界で突如発生した次元嵐の影響により私を始めとした機動六課の面々。

ならびにファントム・ナイツの面々が別次元に飛ばされ、ミツキさんが持つ次元航行艦「ひなぎく」に助けてもらった時の…。

アルトとユウは、飛ばされた砂漠で漂流していた所を助けてもらったヴォルフガングさんと共にダグベースの面々と合流するまでのＩＦみたいなお話です。

それでは…。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～９０万ＨＩＴ記念「フォト・メモリーズ」～勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ影の守護者編～「嵐の中で輝いて」～始ります。

９０万ＨＩＴ記念「フォト・メモリーズ」～勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　影の守護者編～

９０万ＨＩＴ記念「フォト・メモリーズ」～勇者大戦ブレイブサーガＡ’ｓ　影の守護者編～「嵐の中で輝いて」

別次元　森林地帯上空　次元航行艦「ひなぎく」艦橋

ナリア視点

「いや～。助かったわ～。正直どうなるかと思ったわ～」

「本当…もしかしたら、このまま野宿が続くかと思ったわよ…。なんせ、こっちには大食らいがいるから…」

「もしかして…それって私とエリオとギン姉の事？」

「そのまさかよ！！あんた達がとにかく食べるもんだからコッチはその食料確保のために奔走するハメになったんだから！！」

「てぃ…ティア…。ギブギブ…」

私が艦長を勤める次元航行艦「ひなぎく」では、突如起きた次元嵐の影響により普段いる世界とは違う世界に飛ばされた。

そして、その世界の事を調査していた所同じくこの世界に飛ばされここ２～３日野宿をしていたと言う八神部隊長を始めとした機動六

課の皆さんと合流した。

艦橋に訪れた八神部隊長が、キャプテンシートに座る姫に対し感謝の意を述べそれを聞いたティアナが頭をかかえながらそのときのことを思い出していた。

そんなティアナさんに対しあっけらかんとしたスバルさんがその事が自分の事では？と聞きその声に激怒したティアナさんがスバルさんにヘッドロックを決めながらそうである事を告げる。

その一方でスバルさんは、ギブアップを宣言していた。

「まぁまぁ…それより、これで全員？ユウとアルトとヴィヴィオちゃんの姿が見えないんだけど…」

「その3人については、どうやらあの嵐の時にはぐれたままなんや…」

「そっか…」

スバル達のやり取りを見たキャプテンシートに座る姫が2人に対し落着くよう声をかけユウさん達の姿が見えない事について八神部隊長に質問した。

それを聞いた八神部隊長は、あの嵐の時その3人とはぐれてしまった事を告げその声に姫が一言答えさらに2人して心配そうな顔をしながら高町隊長の顔をチラリと見ていた。

「私なら大丈夫だよ！はやてちゃんにミツキさん！！ヴィヴィオは、絶対無事でいるはずだから。それよりもミツキさん…すいません！

！私達がついていながら」

「いいわよ、そのくらい。あの子ももう子供じゃないんだからそれに恐らくなんとか生きてるだろうし」

「そういう時の事については、あたいとフェラルドでユウにしこたま仕込んどいてるからな。まっ、アルトもユウと逸れてなけりゃなんとかしてるだろうよ」

その2人の視線を感じた高町隊長は、まるで心配をかけないような態度をとりながらその視線に答えさらにユウさん達と逸れてしまった事を姫に詫びていた。

高町さんのそんな声に姫は、笑顔をみせながらそれに答えその横にいたノアさんが2人も無事だろう?と言い責任を感じていた高町隊長を宥めていた。

「それにしてもウチ等がここで野宿をしている間、あんた達は何をしてたんや?」

「とりあえず、この近辺にいた人達を救助してその人達の怪我とかをユン先生に見てもらうために野戦病院を含めたコミュニティを作ってね。今はそこの防衛と周辺の調査をしていた所よ」

「防衛って…そんなに物騒なんですか?ここって」

そんなやり取りを終えた所で、八神部隊長の方からこちらの今までの行動について聞いて来た。

八神部隊長のそんな質問を聞いた姫がその事について答えた所、そ

の声に対し今度はティアナさんが疑問の顔を浮かべながら質問をしてきた。

「野党とかの類は、まだ出てきてないんですけど私達がいた世界ではまだ見たことがない怪物が度々襲ってきてるんです」

「その怪物って言うのが、救助した連中の話によると天界生物って言うらしくてな。その行動目的や襲ってくる理由なんかについては、まだ不明なんだが口々に「勇者、勇者」って言ってるみたいなんだ」

ティアナさんの質問に対し私、ノアさんの順でその事について答える。

「勇者？って…なんだか思いつく節があるんのやけど…」

「それは、私もそんな節があってね？それで、あの嵐について調べてみたら今回のこの事態の発生源って言うのがどうやら力君達の世界で起きたのがこっちにまできたみたいなのよ？」

「やっぱりそうなんやね…」

私達の答えを聞いた八神部隊長があれ？っと言うような顔をしながら疑問の声をあげた。

それを聞いた姫が気になっていた事を事前に調べていてその結果を彼女達につげた。

姫の話を聞いた八神部隊長は、納得したような声をあげていた。

「とりあえず、この周辺の状況が落着いたらダグベースと合流して

みようかとおもうんだけど…。はやて達は、どうする？」

「そうやね。その時どうするかまでは、すぐには決められへんけど当面の間行動は共にさせてもらうわ」

納得した八神部隊長の顔を見た姫は、こちらの今後の事についての方針を八神部隊長話をする。

それを聞いた八神部隊長は、そこまでの事についてはすぐには決められないが当面は一緒に行動する事を姫に話をしていた。

「ＯＫ。なら、とりあえずコミュニティに一度戻って…」

ビー！！ビー！！

「レーダーに反応！！例の天界生物が現れました！！その数、大小合わせておよそ３０！！」

八神部隊長の話を聞いた姫が艦の行き先をコミュニティへと向けるために指示を出そうとした所、敵の反応とその数を告げる報告が突如私達の耳に入ってきた。

「さっそくおいでなすったな！！なら、ウチ等も出撃するで！！ミツキ！！」

「その必要はないわよ？はやて。この程度の数、態々はやて達の手を借りるまでもないわ！！ナリア！！第一次戦闘配備！！それとラグナ・ブラストのスタンバイ！！それとノア！！フェラルド達と一緒にラグナ・ブラストで片付けそこねたのをお願い！！」

「あいよ！！」

報告を聞いた八神部隊長は、自分達もこの戦闘に参加する事を姫に告げるがそれに対し姫が今さっき合流したばかりの六課の皆さんに手を借りるまでもない告げその意見を却下。

そして、私とノアさんに対し迎撃するための支持を出しその指示にノアさんが艦橋を後にした。

「了解！！第一次戦闘配備を発令！！魔導士隊に出撃の準備を！！ラグナ・ブラストスタンバイ！！敵集団に対しラグナ・ブラスト発射後残りを魔導士隊とひなぎくの副砲や魔導ミサイルなどで一気に殲滅します！！」

「ラグナ・ブラストスタンバイならびにバリアフィールド展開開始！！「蒼楓システム」起動確認！！発射まであと2分！！」

「魔導士隊は、出撃準備を！！尚、大型の天界生物についてはひなぎくで対応しますので魔導士隊の皆さんは、等身大の天界生物への対処を優先して下さい」

「な…ナリアちゃん、かっこいい～！！」

「なんか凛々しい感じがしますね」

「うん。なんだが憧れちゃうね？フリード？（くきゅ～）」

姫の指示を聞いた私は、姫が座るキャプテンシートの前に立ち全クルーに対し指示をだす。

それを聞いた艦橋にいるオペレーター陣がその指示にしたがいそれぞれの作業を開始する。

私の様子をその横で見ていたスバルさんが目を輝かせながらそんな声を出しその後にエリオ君とキャロちゃんがスバルさんの後に続いてきた。

ちょっと…テレちゃいますね…。

この状況。

そんな事を考えながら私は、スタンバイ状況の様子を眺めていた。

この次元航行艦「ひなぐき」は、我がファントム・ナイツの総旗艦であり地上本部の地下にある「蒼龍の首飾り」の小型版のシステムを搭載している。

それで、首飾り同様姫が持つ「蒼天の石」の力をこの艦でも利用する事が出来、それを利用した艦を包む防御フィールドの「バリア・フィールド」とこの艦の主砲である「ラグナ・ブラスト」や副砲やミサイルなどの所謂魔導兵器を搭載してなっている。

さらに遠距離からでもハッキング出来るハッキング・システムを搭載していてその昔、首飾りの開発段階で構想されその途中で開発が中止されいたものを姫がファントムに入隊した後に完成させたものである。

そして、その石の力のお蔭で、天界生物の攻撃に対し「バリア・フィールド」のその効力を十二分に発揮されこのひなぎくが無傷で健在している。

でも、蒼天の石の力を使うと言う事は、姫があの首飾り同様この艦にあるメインシステムに入りその力をチャージしなければならなかったのため今まではその負担が大きく中々ひなぎくが出撃する事はなかった。

それでＪＳ事件の地上本部襲撃の際、姫がお怪我をされ病室で眠っている間に私の独断でその時ちょうど来ていた楓さんに頼んで姫への負担がかからないようにするためにこの艦自身で魔力を作り出しそれを使って蒼天の石の力を擬似的につく出す「蒼楓システム」を作ってもらいメインシステムの変わりに搭載してもらってた。

それを使い姫は、それ以上の負担を強いる事はなくその事件を終えることが出来た。

でも、姫自身私が姫に許可を得ずにやった事に対し納得していなかったようでＪＳ事件後元に戻すって言ってたんだけど私やノアさん、さらにユウさん達にも説得に参加してもらいＪＳ事件後もそのまま使用している。

ちなみにこの艦のイメージは、火星に単独と乗り込んでいった民間の戦艦の…そのＡ型なんですって。

ふ～ん…。

「攻撃準備完了！！天界生物、射程内に入りました！！」

「姫？スタンバイＯＫです」

「それじゃ、ラグナ・ブラスト…撃て！！」

ドギューーーーーーーーーーーーーーーン！！

管制オペレーターの方から天界生物から射程内に入った事と攻撃準備が整った事を告げる報告を聞いた私は、姫に近づきその報告をつげる。

その声を聞いた姫は、ラグナ・ブラストの発射を指示。

するとひなぎくのふたつに別れていた艦首部分の間に5連の蒼い魔方陣が現れその後ろから巨大なエネルギー砲が発射された。

ちなみにこれは、な○しこの○ラビティ・ブラストの発射している所に5連の魔方陣をつけて発射するのをイメージしていただければわかりやすいと思いますだって…。

ドゴゴゴゴゴーーーーーーーーーーーーーーン！！

「天界生物に直撃確認！！残存しているのは大型のが5体小型の等身大のものが１０体！！」

「なら、魔導士隊出撃。それと魔力ミサイルを誘導型にセットして準備。大型の物については、ひなぎくの魔導ミサイルや副砲などで対処。先程も言ってましたが魔導士隊は、等身大サイズの方を優先して下さい」

「ノアさん！！フェラルドさん！！お願いします！！」

「あいよ！！（まかせろ！！）」

ラグナ・ブラスト発射した後、その結果の報告を聞いた姫は引き続き魔導士隊の出撃を指示。

そして、大型の物についてはひなぎくで対応すると念を押すかのようなにその指示をだしていた。

姫の声に続き私が、ひなぎくの魔導士隊を指揮するノアさんとフェラルドさんに声をかけその声を聞いた二人は、私の声に答えつつひなぎくから出撃していった。

「ミサイルセット完了!!」

「ミサイル発射。魔導士隊には当てないようにね。それと打ちもらした大型の物をこっちに引き寄せるわよ」

「了解!!魔導ミサイル!!発射!!」

バシュ、バシュ!!

ヒューーーーーーーーーーーーン。

ドゴーーーーーン!!

ノアさん達が出撃した後、管制オペレーターの方からミサイルの発射準備が整ったとの報告が私達の元に入りそれを聞いた姫が発射指示をだしひなぎく後部から巨大な魔力弾が発射され天界生物に次々と命中していった。

「ミサイル全弾命中!!残存は…まだいます!!天界生物!本艦にむけて突進してきます!!」

「回避！！」

「間に合いません！！天界生物来ます！！」

「対ショック防御！！皆さん！！何かに捕まって下さい！！」

ミサイルの爆発によって出来た煙の影響でその結果を確認していた所、その目の前にいきなり大型の天界生物が現れこちらに向かい突進してきた。

オペレーターからその報告を聞いた私が、回避するよう支持をだすがそれが無理であるとの報告を受け艦橋にいた全員に対し何かに捕まるよう支持をだした。

ドン！！

バチバチ！！

「うわぁぁぁぁぁ！！ぶつかるー！！…ってあれ？」

近づいて来た天界生物のその姿を見たスバルさんが大声を上げ大騒ぎをしていた所突如その突進が止まりバチバチといった音が辺りに響いていた。

その光景に気づいたスバルさんは、疑問の声をあげていた。

「そんなに慌てないでスバルそれにナリア。あんな突進くらいじゃ、このひなぎくのバリア・フィールドは破られないから」

「本当だぁ～」

「す…すいません…つい…」

スバルさんのそんな疑問の表情を見ていた姫がどうしてこうなったのかをスバルさんに説明。

そして、このいきなりのこの状況に対し慌てながら指示をしていた私と大慌てだったスバルさんに対し落ちつくようやさしく声をかけその声に対しスバルさんが関心したような声を上げ私が姫に詫びていた。

「なら、その弁解としてこれの結末をつけてくれる？」

「わかりました！！」

反省していた私に対し、姫が私に対しバリア・フィールドを破れず一度その場から下がった天界生物に対しその決着をつけるよう私に声をかける。

それを聞いた私は、その支持を了承しその旨を声に出し再び姫の前にたった。

「副砲発射スタンバイ！！目標、前方、天界生物！！」

「発射スタンバイ完了！！いつでもいけます！！」

私の支持を聞いたオペレーターは即座副砲の発射スタンバイを終えいつでもいけると私に報告してきた。

それを聞いた私は、チラッと姫の方を見た。

「いいわよ?やっちゃいなさい!!ナリア!!」

「はい!!副砲!!撃てぇーーーーーーー!!」

ドギューーン!!

ドゴーーーーーーーン!!

「やった~!!」

私のそんな様子を見た姫は、私に対し笑顔で声をかけてくれた。

それを聞いた私は、副砲の発射を指示。

副砲より放たれた魔力砲は、天界生物に見事命中し撃破する事に成功しその様子を見たスバルさんが喜びの声を上げていた。

「天界生物の全滅を確認。魔導士隊、帰還します」

「わかりました。魔導士隊収容後、コミュニティにもどります。よろしいですか?姫?」

「いいわよ?それで」

その後、オペレーターからの報告を受けた私は、その後の指示を出しそれでいいのか姫に確認した。

私の声に姫は、それでいい旨を私に伝え私達はコミュニティに帰還

する事となった。

そういえば…ユウさん達…今ごろ何やってるんだろう？

別次元　砂漠地帯

ユウ視点

いいなぁ～。そっちはクーラーがあって…。

「アイス食べた～い！！ねぇ、ジュースまだぁ！？ジュース！！」

あの嵐によってこの砂漠地帯に飛ばされた俺とアルトは、その場にいても何も変わらないため最初いた場所から移動を開始してまる１日以上が経っていた。

その目的としてはとりあえず、砂漠におそらくあるであろうオアシスを探そうとあちこち歩きまわっているのだが…。

「お風呂入りたぁ～い！！」

そう言えばそろそろ歩き出して、２時間くらい経つのかな？二日目の…。

「んもぉ～！！無視するな～！！（どごーん！！）」

「グベボっ！！…てめぇ！！いきなり後ろからハンマー振り下ろすんじゃねぇ！！」

「それはあんたが無視するからでしょ！！」

「うるせぇ！！こんな熱い状況でそんな事にイチイチつきあってられっか！！」

「そんな事ですって～！！…あっ…」

アルトの前を歩いていた俺は、その後ろから聞えてくるアルトの声を完全に無視しながらオアシスを探していた。

すると、そんな様子に怒りを覚えたアルトがいきなりハンマーを召喚しその後ろからおれに向けてそれを振り下ろしてきた。

アルトのハンマーを食らった俺は、いきなりのそのアルトの行動に対し文句を言う…がそれを聞いたアルトは、俺の声にさらに激怒し声それを声にあげようとしていた所急に怯えた様子で俺の後ろのほうを指差していた。

「なんだぁ？いきなり…（ゆ…ユウ…う…後ろ…）何？後ろ！！げぇえぇぇぇぇぇ！！アルト！！逃げろ！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！何これ～！！」

アルトのそんな様子に対し俺は、疑問を感じつつ苛立ったままでいた。

そんな俺に対しアルトが後ろを見るよう言ってきたのでそうしてみ

た所、俺の後ろには今まで見た事が無い巨大な化け物が1体立っていた。

化け物を見た俺は、驚きを露わにしそいつがまだこちらに気づいていない事を願いつつアルトにその場から逃げるよう声をかけそれを聞いたアルトも驚きの声をあげながらその場から逃げ出した。

ギロッ…。

ドドドドドド…。

「げぇ!!気づきやがった!!お前が大声だすもんだから気づいちまっただろうが!!」

「私じゃないよ!!ユウが大声を出すからだよ!!」

そんな俺たちの様子にその化け物がどうやら気づいたらしく俺たちの後をおってきた。

化け物が追って来るのを見た俺は、アルトにせいだと文句を言いそれを聞いたアルトは俺のせいだと2人してお互いにその責任をなすりつけあいながらその場から走って逃げていた。

「ちぃ!!このままじゃ、いずれ追いつかれるな。おい!アルトちょっと我慢しろよ!!」

「えっ!?何?ちょ…ちょっと!!いきなり何してんのよ!!」

後ろの様子をみながら走っていた俺は、いずれ俺達に追いつかれるとそう判断。

アルトに一声かけた後、アルトの体を抱き上げその場から飛行魔法を使って飛び立った。

その様子にアルトは、驚きの声をあげジタバタとしていた。

「おい！！暴れるなって！！落ちるだろうが！！」

「だってぇ！！まだお嫁に行く前なんだから～！！」

「なら、このまま落ちてお嫁に行く前にあの化け物の餌になりたいのか！？（それも嫌！！）なら、黙って捕まってろ！！」

「うん…」

暴れるアルトに対し俺は、落着かせるよう声をかける。

だが、そんな俺の声に対し一行に落着かないアルト。

それに対し俺は、なかば脅しのような台詞をアルトにかけた所どうやら、納得してくれたらしくお姫様抱っこされていた俺の首元を両腕でしっかりと捕まりなんとかその場から逃げ出す事に成功する事ができた。

アルト視点

「とりあえず、なんとか撒いたな。ってお前まだへそ曲げてんのか？」

「むぅ～！！ブー！！ブー！！」

あの怪物に出会った場所から結構遠く離れた所に降り立ったユウは、私を下ろした後その周囲を確認。

そして、その怪物がいない事を確認した上で安堵をした様子でその横で先程のユウにいきなり抱き上げられた事にブーたれていた私に声をかけてきた。

ユウのその声を聞いた私は、口を尖らせ不機嫌な顔をしながら擬音のみでそれをかえしていた。

「やれやれ…。悪かったよ。だから、いいかげん機嫌を直してくれよ？」

「ふ～んだ」

「まったく…。ん？アルト！！危ねぇ！！（ドン！！）ガハッ！！」

「うわっ！！（ドサッ）って、何今度はいきなり突き飛ばして～！！ってユウ！！」

そんな様子を見ていたユウは、やれやれと言った様子をしながら私に謝ってきた。

ユウの声に対し私は、まだ許す気がなかったのでそれをまるで無視するかのような態度とった。

私のそんな様子に頭を抱えていたユウは、なにか気づいたらしく私に声をかけた後今度は私を突き飛ばした。

突き飛ばされた私は、砂漠に頭からダイブ。

そして、顔についた砂を落としながらユウに文句を言おうとしその方を見た所さっき見たのより小さく等身大サイズの化け物がユウを上空に吹き飛ばしそしてそのまま今度は地面に叩きつけていた。

ユウが砂漠に叩きつけられたのを見た私は、心配そうな声をだしたがその様子に対し何も出来ないでいた。

「…メテオ…ブレイカーーーーーーー!!」

ドゴーーーーーーーーーン!!

「ユウ!!大丈夫なの!?」

私がそんな様子でいた所、砂漠の下からユウの声が聞えたと思ったらいきなり地面の下から紅色の閃光が噴出しその化け物を撃破。

そして、その閃光が消えた後そこからセットアップしたユウが現れ私の前に降り立ってきた。

ユウの姿を確認した私は、彼に近づき声をかける。

「ああ…。なんとかな…。どうやら、この辺はあの化け物がうじゃうじゃいるみたいだな?まさか地面から現れるなんて聞いてないぜ?それにどうやら今の光に気づいたみたいで次々出て来たようだぜ?」

「ど…どうしよう…」

私の声を聞いたユウは、右手に紅、左手にゲイルを構えながら私の声に答えさらに砂漠の下から次々と現れるその化け物をみながらその状況を私に説明してくれた。

それを聞いた私は、不安そうな声をあげる。

「しゃ～ねぇ～な。俺がオトリになるから、お前はこの場から逃げろ」

「そんな事出来る訳ないでしょ！！私もここに残る！！」

「バァ～ロォ！！お前がここにいて何が出来るんだよ！！」

「足手まといになる事くらいわかってるわよ！！でも！！私言ったわよね！！ゆりかご戦の前に。例え足手まといになろうが最後までユウと一緒にいるしあんたが勝ってにどっか行こうもんなら絶対にそれを見つけ出して連れて帰るし迎えにも行くって！！」

私にその状況を説明してくれたユウは、自分がオトリになるから私に逃げろと言ってきた。

それを聞いた私は、それをすぐさま拒否。

このままだと足手まといにしかならないと言って来るユウに対し以前にユウに話した事をもう一度彼につげた。

「…ったく…お前なぁ…。そんなんだとお嫁にいけなくなるぞ？」

「そうなったら、誰かさんに責任を取ってもらうからいいもん！！」

私の声を聞いたユウは、呆れながらニヤけながら私に声をかけそれを聞いた私も笑顔でそれに答える。

「そうかよ…。なら！！いっちょやったるか！！」

「うん！！」

「いくぜ！！…って…えっ？うわっ！！」

ドゴゴゴゴゴゴーーーーーーーーーーーン！！

そんな私の様子にユウは、どうやら覚悟を決めたみたいで私に対し声をかけそれに私も答えその攻撃を開始しようとしたと所突如上空からミサイルやビームが私達に周りに降ってきた。

「ゲホッゲホォ…。もぉ～！！いったいなんなのよ！！」

「…ったく…次から次へと…おい！！アルト！！アレを見ろ！！」

「あれって…確か…飛龍！！って事は、エースの…（大丈夫か！！おぬし達！！）って違うのか…ガクッ…」

そのミサイルなどの攻撃により私達の周りにいたその化け物達は全滅しそれによって出来た砂煙にまみれていた私は、その砂煙払いながら文句言いそしてユウもまた渡し同様文句を言いながら上空から降りてきた黒いロボットを発見。

そのロボットが私達に声をかけてきた。

ユウの声を聞き上空を見た私は、そのロボットが飛龍である事を確

認。

そして、そのイケメンパイロットの名前を想像し喜ぼうとしていた所それとは違う老人の声が聞えてきた。

それを聞いた私は、自分の予想とは違った事にガッカリとしていた。

ヴォルフガングの基地内　ダイニングルーム

ヴォルフガング視点

「危ない所を助けてくれてありがとな」

「いやいや、こまった時はお互い様じゃよ」

「あ～あ…。てっきりエースのジョーさんだと思ってたのに…」

「悪かったの。ジョーではなくて」

飛龍に乗ってこの地域の調査に訪れたワシは、その調査の最中天界生物に襲われていた2人を発見。

そして、2人を助けワシの基地まで案内した後飛龍をベースモードにし基地内にあるダイニングルームにて2人と色々と話をしていた。

まず、ユウと名乗った男がワシにお礼を述べそれにワシが答えた所今度はアルトと名乗った女子が飛龍のパイロットがジョーではない事にガッカリとした声をあげたのでワシはそれに不機嫌な様子でこ

たえていた。

「まぁまぁ、それよりもじいさんはあの化け物についてなんだか詳しいようだがあれはいったいなんなんだ？」

「詳しい所までは、まだわかってはおらんが今回のこの事象のその原因をそもそも作ったのは連中の仕業じゃ」

「と言う事は、あの化け物に知性があるって事？」

ワシとアルトの様子を見たユウがワシ等を宥めるような声をあげて後質問をしてきおった。

それにワシが答えた所、今度はアルトからの質問が飛んできた。

「いや、あいつにはそんな能力は恐らくないわい。ワシの調べによればどうやら、あいつ等を操る連中がおるらしい」

「つまり…あいつ等の飼い主がいてそいつ等が今回のこの事態を引き起こしたって事か？」

「そう言う事じゃ」

アルトの質問に対しワシは、そうではない旨を答えそれを聞いたユウが自分なりの解釈をワシに確認して来たのでそれで大方間違いない事をヤツに告げた。

「そうなんだ…。ねぇ、ユウ？ここの通信機を借りて先輩や部隊長達に連絡取れないのかな？とりあえず、無事な事を伝えないと」

「そうだな。なぁ、ここの通信機を借りれないか？」

「それは、無理じゃ。なんせ、今はおぬし達が元々いた世界も含め色んな世界がグチャグチャにかき混ぜられた上にそれによって出来たエリア間での移動や通信がしずらい状況でな。ワシも色々と通信を送っているのだが未だにそれが出来ない状況じゃ」

アルトの声を聞いたユウは、ワシに対し通信機が借りたいと声をかけきた。

それを聞いたワシはそれが無理である事を言いその理由についても述べた。

「ともなれば、ここから脱出してその他のエリアに行って探すしかないのか…」

「そういう事じゃ。しかも他の次元間を行くにもさっきも言ったが色んな世界がごちゃまぜになっておって、ワシも今までにいくつもの次元を越えてきたがわけがわからん世界ばかり出てくるしそこにおぬし達の仲間がいるとも限らんしのぉ～」

ワシの声を聞いたユウは、すぐさま次の可能性を示唆。

その可能性についても難しい事をワシがユウに述べた。

「となると、ここでみんなが来るのを待つしかないのか…」

「そこでじゃ！どうじゃろ？おぬし達どうせ住む家もないのじゃろ？ここにこのままおらんか？おぬし達が満足出来る程ではないが衣・

食・住くらいならここで確保出来るのじゃが？」

ワシの話に対しユウは、まいったなと言う様子で声をあげておった。

そんな様子を見たワシは、秘めていた提案を彼等にしてみた。

「んで、もしそれを受けたとして俺達はいったい何をすればいいんだ？まさか、無料でって訳にはいかねぇんだろ？」

「ほぉ～。物分りがよくって助かったわい。そうじゃな、ワシがおぬし達にそれを提供する変わりにこの飛龍に乗ってここを襲ってくる連中と戦ってほしいんじゃ。その間ワシは、あの次元嵐の調査と研究をするうもりじゃ。それに関連してそのサポートの方も同時に頼みたい」

ワシの提案を聞いたユウは、それを受けたとして自分達が一体何をするのか？と聞いて来た。

それを聞いたワシは、ここに来る前に2人に飛龍のコックピットの中でやってもらったシュミレーションの結果をみながらその意図を2人につげた。

2人にやらせたそのシュミレーションと言うのがさっきいた化け物をユウとアルトの2人で操縦する飛龍でいくつ撃破出来るかという物。

その結果は、エースのジョー程ではなかった中々なもので当然ワシよりも上であった。

この事を踏まえ、そして2人の話を色々と聞きながらそのコンビネ

ーションの良さや細々した所を確認し二人になら飛龍を任せられると総合的に判断し現在に至る。

「どうするの？ユウ？」

「そうだな。とりあえず、受けるしかねぇ～だろ？なんせ、ここを出ちまったらこのじいさんの言うとおりなんだからな？」

「だよね～。それに私、いいかげん体洗いたいし…」

「なら、決まりじゃの。そう決まればさっそく作業開始じゃ」

「いったい何をする気なの？」

ワシとユウとのやり取りを見ていたアルトがユウに対し声をかけておった。

その声にユウは、ワシの提案を受ける事しかない旨を言いそれを聞いたアルトもそれしかない事に同意していた。

2人の結論を聞いたワシは、座っていた椅子から立ち上がり二人に早速作業に取り掛かる旨を伝えた。

それを聞いたアルトが、ワシに対し質問をしてきおった。

「飛龍の強化と調整じゃよ。なんせ今の飛龍はワシに合わせて調整しておるからの。それをまずは、メインパイロットを務めるユウに合わせて調整しなおさなければならないのとコヤツが使いやすいようにおぬしが持つそのデバイスとやらを魔力で再現し飛龍でも扱えるようにする機能をつけなければならんからの」

「なるほど～。なら、私達も手伝うわよ。なんせ、二人とも元々整備士なんだから」

「それは頼もしいのを～。なら、手伝ってもらおうかの？ユウにアルト？」

「は～い♪」

「やれやれ…。しゃ～ないやるとするか」

こうして、ワシ等3人は、ダグベースにいる連中と合流するまでの間ここで共に暮らす事になった。

じゃが、まさかあの2人があんな事やこんな事までするとはのぉ～（笑）

「えっ！？そうなの…。なら…覚悟を決めなきゃ…。うん…」

「するかーーーーーーーーーーーーー！！」

ワシの冗談に対し顔を真っ赤にしたアルトがなんだかブツブツと言いその一方でユウは、その可能性を完全に否定しておったわい…。

それでこの後どうなったのかについては…。

おぬし達の想像に任せるわい…。

機動六課宿舎内　談話室

ギンガ視点

「それで!!いったいどうなったのよ!!アルト」

「だから～!!何にも無かったんだってば～!!（泣）」

アルトの話を聞いたスバルとティアナは、前回に引き続きアルトに対し尋問を行っていた。

「本当の所はどうだったんでしょうね?ギンガさん?」

「さぁ?でも、キャロがこの話題に食いついてくるなんて珍しいわね?いったい何があったの?」

その様子を見ていた私の所にキャロが声をかけてきた。

キャロのその突然の質問に対し私は、驚きつつもその理由について聞いてみた。

「それは…もし、何かあったら今後の参考のために…色々と聞いて見たくて…その…エリオ君と…」

「きゃ…キャロ!!いきなり何言い出してるの!!」

私の質問に対しキャロは、顔を赤らめ横にいたエリオをチラチラと見ながらその理由を言いそれを聞いたエリオもまた顔を真っ赤にしながらあたふたとしていた。

「ふ〜ん…。そうよね？そう言う事なら、ちゃんと聞いた方がいいわよね？なんせ、ここにはそういう事を経験している人って少ないから…」

「ぎ…ギンガさんまで〜！！」

キャロのその理由を聞いた私は、ニヤニヤしながらその話に同意するかのような声をあげあたふたしているエリオをちょっとだけ苛めてみた。

そんな私の様子を見たエリオは、さらにその動揺を露わにしていた。

まっ…そんな事よりも自分の方をなんとかしなくっちゃ…でも…相手が…。

そう思いつつも相手がいない事に気づいた私は、深いため息をしながらその様子をただただ眺めていた。

90万HIT記念「フォト・メモリーズ」～勇者大戦ブレイブサーガA’ｓ　影の守護者編～「嵐の中で輝いて」

作者
「いかがでしたでしょうか?勇者大戦ブレイブサーガA’ｓ　影の守護者編～「嵐の中で輝いて」」

ノア
「それにしても許可関連の方は大丈夫なのか?」

作者
「それについては、ジャン先生の方にその許可を頂いているので問題はありません。それに現在ジャン先生が掲載している「勇者大戦ブレイブサーガA’ｓ」の方でユウとあアルトが登場しておりますのでその番宣の意味も込めております。一度読んで見てください。面白いですよ?」

ノア
「そうだな。あたいからも頼むよ。話が変わるが、今回なんだかネタばれみたいな事多くねぇか?」

作者
「それについては、あえてやったと思ってください。なぜかといえば今回、この話で先にその結果のみをお伝えしそれがどうやってそうなったのか?を本編の方で見ていただくための言わばその布石みたいなものにしたもんで」

ノア
「って、またわかりづらい事を…。果たしてこれに読者がついてきてくれるのかな?」

作者
「ついてきてほしい…と言うのが私としての願望なんですが、こればっかりはどうなるのかはまだわかりません」

ノア
「とりあえず、本編でやってた時にそう言えばこんな事やってたな？って思い出してもらえればこっちとしては良かったって事か？」

作者
「そうしていただければありがたいですね」

ノア
「そういや、あたい達…ロボットには乗らねぇのか？」

作者
「当初は、それをしようと考えていたんですが元々の作品の流れを考え今回はそれについては無しにしました」

ノア
「なるほどなぁ～。いきなり、そうなったらビックリしすぎて読者が引いちゃうかもしれねぇからな？」

作者
「まぁ、そんな所ですかね？ちなみに当初の予定ではこうなっておりました」

スバル&ギンガ　ガンバスター

ノア　ゴットガンダム

ティアナ　　ガンダムマーク？

フェラルド　　ザク？（マシュマーＶｅｒ）

ノア
「まったく脈絡がないような…」

作者
「そんな事はないですよ？ガンバスターについては、所謂鉢巻つながりですしそれぞれなんらかの兼ね合いを含めた上での設定ですから」

ノア
「つまり、ティアナは、指揮をする女性ってのとフェラルドは、持ってる武器つながり。んでもってあたいは？」

作者
「こうした方が面白そうだったからです！！」

ノア
「いい切んなよ！！そんな事で！！」

作者
「まぁ、殆どが思いつきみたいなもので実際に今後乗せるかどうかについても不明です」

ノア
「ふ～ん…んで、次回は？」

作者
「とりあえず、本編を予定しておりますがどうなるのかその詳細については不明と言う事で」

ノア
「またかよ…。んじゃ、〆るぜ！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！！」

ヴィヴィオ
「テ～イク…オーーーーーーーーフ！！」

その８５（前書き）

地上本部周辺地域

ゼール視点

ドォーーーーーーーーーーーーン！！

「くっ…。くそっ！！まさか、ヤツがあんな事をしてくるとは…」

出来そこないが起こした光に包まれた俺は、そこから発生した衝撃波によりどうやら地面に背中から叩きつけられたようだ。

俺が落ちたその場所には、その衝撃の凄さをまるで物語るように小規模なクレーターが出来ている。

その事に気づいた俺は、ヤツが仕出かしてくれた事に対し愚痴をこぼしながらそのクレーターの外へと這い上がり周囲を確認した。

その周囲には、あの出来そこないの姿は見当たらない…。

もしかして、またどこかに潜んでいるのか？

辺りを確認していた所、ヤツの姿はなくその上空にはさっきのあの衝撃により出来た煙が漂っていただけであった。

その様子に安堵の様子を一瞬は、見せたが先程のようにまだどこかに隠れているのでは？と再度周囲を改めて確認してみた。

「ヤツはいない…。ふっ…。どうやら、ヤツだけ吹き飛んだか。それに俺の中にいたあの厄介者の反応もなくなっている…。と言う事は、ヤツは俺を道連れにするのではなく俺の中に取り込んだ自分の仲間を道連れにしたと言う訳か…。これは、愉快な話だ!!ハァーハッハッハ!!」

辺りにヤツがいない事を確信した俺は、ヤツだけが吹き飛びおまけに以前ヤツと戦った際にその肉体事取り込んだヤツの仲間の反応も体内には無かった事に気づき道連れにしたのがそいつだった事に大声でその場で笑った。

そもそも、ヤツが俺と戦っているその理由がそいつだからな!!

なぜ、そうなったのか?と言えば…。

ヤツの仲間…確か名前は、ミューゼル・カーバインとか言っていってたか?

あの出来そこないと戦う前にそいつと戦い、その時使っていた肉体が使い物にならなくなったためにその代用として死に掛けていたそいつを取り込みそれを使ってその後ヤツと戦ったりもした。

だが、その最中事もあろうかヤツは俺の支配に抗ってきたのだ。

通常俺にその肉体や魂を取り込まれたヤツは、その精神をも支配され俺の想いのままなはずなんだがヤツだけは違った。

どういう訳か一向に俺の支配に抗い続け時より俺の意識すら乗っ取りその動きを封じようとしたり独自で行動しようとしてたりしてい

た事があり、別の体を手に入れたと同時にヤツを俺の…と言うより黄天の中にある黒龍の精神の奥深くにその肉体事押し込めてやった。

だが、それでもヤツは俺に色々と干渉をしつづけてきていたのでホトホト困っていたのだが…。

ちなみになぜ、黒龍を封じたのに黄天かと言えば…。

これに名をつけた聖王教会の連中が聖黄を照らす光を意味すると言う事でつけたらしい…。

「さて…。少し予定が狂ってしまったが、とりあえずあの出来そこないも死んだ事だし例のシステムでも奪いに…」

「それは、どうかな？」

「誰だ！！」

ヤツがいなくいなくなった事で、少々感慨耽っていた俺はそもそもここに来たその理由を思い出しその場を立ち去ろうとした。

そして、その事を声に出した所上空から突然男の声が聞えていた。

それを聞いた俺は、上空を見上げそれを確認する。

「まさか…。俺の姿を忘れた訳ではないよな？なんせ、俺の体を使っていたんだからな？」

「貴様…。ミューゼル・カーバイン！！」

上空を見上げた所、そこには気を失っているあの出来そこないを両腕に抱えた長髪の黒髪を靡かせ黒のズボンとインナーの上に同じく黒の騎士甲冑をつけたミューゼル・カーバインが空に立っていた。

（イメージ的には、宇宙人に対抗する攘夷志士の爆弾魔の戦争時の姿）

なぜ…ヤツが…？

俺は、ヤツがいきなり現れた事に驚き上空に浮かぶヤツを見上げていた。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８５…開始だ」

その８５

地上本部周辺地域

ノア視点

「急げ～！！」

ガジェット達からの足止めを食らっていたあたいは、ミツキがいた方角から蒼い光が光ったのを確認。

そして、まだあたいの周りにいたガジェット…その数およそ数百体を合流してきた楓とシグナムそしてサイモンに押し付け急ぎミツキの元へと急いだ。

あんにゃろ～！！

あたいが行くまで無茶するなっつったのに！！

自爆なんかしやがって！！

…でも！！あたいとのリンクが微弱だが、まだ切れてねぇ！！

って、事は…まだ生きてる！！

ミツキの元へと急ぎ飛んでいくあたいは、ミツキが仕出かした事がなんなのかあの光を見た途端にすぐに把握。

さらにミツキとあたいの間にある魔力供給のリンクがまだ微弱だが繋がっている事を確認。

心の中でミツキ対し文句を言いつつも状況を確認するために飛行速度をさらにあげた。

「見えた！！って…あいつは！！おい！！ミューゼルじゃねぇか！？それにミツキ！！」

あたいがミツキの反応をが出ている位置付近まで来た所、そこには地面に傷だらけで立っているゼールとそこから少し離れた所にミツキを抱いて立っていたミツキのかつての仲間であるミューゼル・カーバインが睨みあっている光景が見えた。

それを見たあたいは、すぐさまミューゼルに声をかけ彼の横へとおりたった。

「ノアか…。やはり早いな」

「久しぶりに会ったのかと思えば相変わらずかよ？それにしてもいったいどうして？確か…ゼールに取り込まれてたんじゃ？」

彼に声をかけその横に降り立ったあたいに対し、ミューゼルは相変わらずのぶちょう面であたいの声に答えてきた。

その話を聞いたあたいは、その様子に呆れつつもなぜ彼が現実世界に出てこれたのかその理由を聞いた。

「それは、ミコ（ミツキの事）のお蔭だ。彼女が自爆する際、ヤツ

の体に蒼天の石の力を流し込んだんだ。その時にヤツの中に封じ込められていた俺達の呪縛がその流れ込んできた石の力でとけたのさ。それで、ミコが自爆しようとしていた事に気づいた俺たちは、自爆を止めるために俺達全員の力を合わせてミコがヤツに刺した刀を押し返してヤツの体から弾き飛ばしてをたんだ。彼女を吹き飛ばした後俺達の中で唯一肉体がある俺が、弾き飛ばされ事で気を失って地面に落ちようとしてたミコを受け止めた…。と言う事だ」

「なるほど…。あたいが見たさっきの光ってのは、ミツキが自爆する光じゃなくてお前達がゼールの体から出てくる時の光って訳か…。でも、俺達って？」

あたいの質問に対しミューゼルは、その状況を淡々と説明してくれた。

それを聞いたあたいは、自身が見た状況とミューゼルが教えてくれた事をまとめ彼に確認をとりさらにその中で気になった事を彼に聞いてみた。

「もう忘れたのか！彼等は、俺とミコと共にあの研究所に組織から派遣されそして、襲撃してきたゼールに肉体を滅ぼされその魂をヤツに支配されていた４５人の仲間達の事だ！！彼等が心が折れそうになった俺に声をかけ続けてくれたお蔭で俺もヤツの支配に抗い続けられたのだからな」

「悪ぃ…。それでそいつ等は？（外に出た途端、天に召されていったさ…。あとの事は頼むと言い残してな）そうか…。なら！！後は、あたいとあんたでこいつを！！」

あたいの質問に対し、ミューゼルはその質問が感に触ったらしく怒

りの声をあげつつその事について説明してくれた。

それに対しあたいは、その時の事を思い出し素直にミューゼルに謝りそしてその連中がその後どうなったのかを彼に確認。

彼の答えを聞いたあたいは、ミューゼルと共にゼールを倒そうと声をあげ構えた。

「そうだといいんだが…。だが、ミコがそれを納得するかな？（う…う～ん）」

「だよな～。それでどうする？」

「もう少ししたらユン先生が来る。恐らく騎士ゼストから俺が以前、彼に渡したミコ用の回復魔法が入った魔法カードを持ってきてくれるだろう。それで、ミコを回復させてくれ。だが、あくまでその効果は一時的なものだ。それをミコを説明した上でどうするのかをノアと2人で決めてくれ。俺は、それまで時間を稼ぐ。今まで俺達を存分に利用してくれたお礼も含めてな」

「わかったよ。でも、無理はすんなよ？いくらなんでもミツキと話する前に死なれたら、あたいがミツキに怒られるんだからな？（わかった。ミコの事を頼む）あいよ」

あたいの声を聞いたミューゼルは、意識が回復しそうなミツキをみながら彼女がそれじゃ納得しないだろう？と言いそれを聞いたあたいは彼と同じ事を考えどうするのか？を聞いてみた。

すると、彼はすでに周り状況を把握していたらしくユン先生が近くにいてゼスト隊長と会っていたいた事と隊長がユン先生にミツキ用

の回復カードが渡されている事をあたいに話し出した。

さらに、それでミツキを回復させた上でどうするのかを決めて欲しいといいそれを聞いたあたいはそれを了承。

そして、ミューゼルからミツキを受け取りそれのための時間稼ぎをしてくれると言ってゼールに相対する彼の背中を見送りつつ無理はしないよう告げそれを聞いたミューゼルもそれを了承した。

ミツキ視点

ガキーン!!

ガキーン!!

ドーーーン!!

「…ツキ!!おい!!起きな!!ミツキ!!（ペシペシ）」

う…う〜ん…。

「ミツキ!!目ぇ覚ましたか?」

「の…ノア?それに…ユン先生?わ…私…」

辺りには大きな音で私が意識を回復した所、目の前には私の頬を叩くユン先生の顔と声をかけ続けていたノアの顔が見えた。

それを見た私は、イマイチその状況がつかめないため2人にそれを

確認した。

どうやら、私は地面に寝かされてるらしい…。

「ふぅ～。これで、一安心だね」

「まったくだ。まずは、ここは天国でも地獄でもねぇからな?んで、なんでお前がここにいるかと言うとあいつがお前の自爆を阻止してくれたお蔭さ?」

「あいつって…?ぜ…ゼロ?!（ミューゼルの事）なんで、あいつが!?」

私の声を聞いたユン先生は、安堵の声をあげそれを聞いたノアがその声に納得しつつも私をその場から状態を起こしながらゼールと戦っているゼロの姿を私に見せてくれた。

それを見た私は、彼の姿に驚きの声を上げた。

＜ちなみになぜ私が、ミューゼルの事ゼロと呼んだかと言えば…。

私達がいた組織からのお互いをそう呼びあっていたから。

その組織での私達が生まれた順で番号を割り振られそれで呼ばれていたが、それが嫌で自分達で決めた最初の名前。

彼が４２０番だったからその０をとってゼロ。

私が４２５番で、その２５がなまってミコ。

それは、研究所に言って名前がミューゼル・カーバインとミツキ・

サエグサになっても変わらずそう呼び合っていたから今でもそう呼んでいるのよ♪＞

「それについては、カクカク云々でな？それで、今お前の胸元にあるカードがユンがゼスト隊長からカードって訳さ？」

「ゼストのヤツ…。私には何にも言わずにあの光を見た途端、そのカードを私に渡してアギトと一緒にこの空域から去っていったよ？「また出直す」っていってな？」

「そうですか…。それで、後どれくらいで回復しますか？」

私の驚きの声に対しノア、ユン先生の順でその状況を説明してくれた。

それを聞いた私は、その説明のあったカードをみつつ後どれ位で回復するのかを聞いた。

「そうだね…。とりあえず後5～6分もしりゃ回復す…（姉貴！！）（ミツキさん！！）おや？お前達？以外と早かったわね？いったいどうやってガジェットの足止めを交わしてきたんだい？」

「「力に（飛鳥さんに）ガジェットを押し付けてきた！！」」

「なるほどな」

私の質問に対しユン先生が答えている最中、ユウとティアナが私達の所にたどり着いてきた。

それを見たユン先生が2人にどうやってここまできたのかを確認。

すると、2人そろって力君と飛鳥さんに押し付けてきたと言いその声に対しノアが納得の声をあげていた。

「それで、姉貴は!!」

「大丈夫よ。まだ生きてる。それにもう少ししたらゼロの援護をしなきゃ…」

「何言ってるんですか!!そんな体で!!」

「そうだ!!後は俺達に任せろ!!」

ノア達と話をしていたユウは、彼女に対し私の状態を確認。

それを聞いた私は、その声に答えさらにゼロの援護をすると彼等に話をした。

私の話に対しティアナ、ユウの順でそれに反対する声をあげた。

「そうね…。そろそろ任せないといけないわよね…。それでないとみんなに怒られちゃうもん。でも、その前に見せなきゃいけないものがあるの…」

「見せなきゃいけないもの?それっていったい…」

「まぁ、簡単に言えば石を持った者の戦い方ってヤツだな?これについては、ティアナと言うよりユウ…お前に対してだ。でも、ティアナもちゃんと見とけよ?もしかしたら、以外な所で役に立つかもしれねぇから。そんじゃ、行くか?ミツキ?(ええ…)」

ユウ達の話を聞いた私は、彼等に後の事を任せると言いつつもその前に見せなきゃいけないものがあると2人の顔を見ながらその事を告げた。

それに対しティアナが疑問の声を上げ、その声に今度はノアがその事について説明しそれが終わった所で私に声をかけその声を聞いた私は、それに答えながら立ち上がりノアと一緒にそこから歩き始めた。

「ちょ…ちょっと待ってください！！」

「おい！！そんなんじゃわからねぇよ！！」

「2人とも…。その事については、すぐにわかるさ。それにミツキももう死ぬような真似はしないみたいだしな？さてと…おい！！ミオ！！これから、ミツキがやろうとしてる事を病院にいるスバルとギンガ…それとアルトにも見せてやんな！！（はい…わかりました。映像回します）頼むよ」

歩き出した私とノアに対しティアナとユウがそれを止めようと声を上げる。

でも、それに対し私とノアは答えずその代りにユン先生が2人の方を叩きつつ彼等を宥めつつその事について彼等に話をしながらさらにミオちゃんに対しこの映像を見せるよう言いそれを聞いたミオちゃんがその指示に従った。

ユウ視点

いったい…何をやろうってんだ?姉貴とノアは?

ユン先生からの説明を受けた俺とティアナは、その話に戸惑う事しか出来なかった。

「ユウ?どうすんのよ?」

「どうするもこうするもねぇだろ?ああなったら姉貴は止まんねぇし、恐らくあれに割って入っても追い返されるかユン先生に止められるだけだろうな?」

「つまり…。見てる事しか出来ないって訳ね?なんだか、歯痒いわね…」

戸惑ってる俺に対し、ティアナもまた同じ様子で俺に声をかけてきた。

ティアナの声に俺は、この状況じゃどうす事も出来ないと言いそれを聞いたティアナは歯痒い表情を見せていた。

「なら…その気持ちを今は貯めとくんだ。これが終わったら当面の間、ミツキは身動きがとれなくなるからね?だからこそ、あんた達に見ててほしいのさ。自分の本当の力を。そして、受け取ってやんな?あの子の気持ちを」

「わかった。なら、しっかりと見ててやる」

「私も!!」

そんな俺達に対しユン先生が、やさしく声をかけてきた。
先生の話を聞いた俺とティアナは、その話に納得をしその目にしっかりと焼き付ける事を俺、ティアナの順で先生に誓った。
そして、俺達の前に立つ姉貴とノアを見た。

ミツキ視点

「ふぅ～。さて、始めるとしますか？いい？ノア？」

「もちろん！！でも、今のミツキの状態じゃそんなに長続きはしないぜ？せいぜいもって5分…夢幻無双はお前と後1人だけだ。それ以上だと…」

「わかってる。なら、ゼロと私…その2人だね。いっきに決めるわよ！おいで…ノア…」

「あいよ！！行くぜ！！」

ユウ達と戦いを続けるゼロとのその間くらいまで来た私は、深呼吸をしノアに声をかけた。

私の声に対しノアは、いつでも言いと言いさらに今の私の状態から制限時間は5分である事さらにこれから使う魔法の効果が得られる上限人数が自身も含め2人を告げた。

それを聞いた私は、ゼロと2人でいっき決める事を宣言にノアに声をかけた。

私の声にノアが答えた後、フルモードだったノアはいつものサイズに戻りそして光を放ちながら私の胸元へと入っていった。

本当なら…見せたくなかった…。

私一人で全部片付けてユウ達には、自分達やりたい事をやってほしかったし面倒な事に巻き込んじゃうから…。

でも…。

「くっ…!!はぁぁぁぁ!!」

「何!!しまった!!」

「来たか!!」

ノアが私の中に入った事により、彼女の中に封印してあった石の力が一気に開放され私の周りを白銀のオーラが包み込んだ。

その様子に気づいたゼールは、ゼロとの間で鍔迫り合いを続けながら驚きの声あげその一方ゼロはようやく来たかと安堵の声を上げた。

今の私にしてあげる事…。

それは…。

「蒼き龍の名を持つ優しき龍よ。我との盟約に基づき闇を切り去く

剣とその願いを守りし衣を与えたまえ！！その力を持ち集いし願いの…光指す道を示さん事を！！蒼翔扇！！フォルム・ツヴァイ！！」

ドーーーーーーーーーーーーン！！

ユン視点

「な…なんだありゃ！！」

「ミツキさんのバリアジャケットが変化した！！それに武器も！！」

ノアがミツキの中を入りそして、その力を解放。

そして、白銀の光が彼女を包み込んでいた状態で何かを呟蒼翔扇を天にかざした。

すると、ミツキの周りから白銀の光が空に向って放たれその空に向って放たれた光が再びミツキの元に落ちとそれが原因で爆音が鳴り響いた。

私達がその爆音とそこから起きた衝撃が落着き再び彼女を見てみた所、ミツキのバリアジャケット上着が空色の羽織「蒼天の羽衣」に変わりさらに持っていた武器が2本の日本刀…「光龍」と「蒼龍」に変わっていた。

それを見たユウとティアナは、驚きの声をあげた。

「あれが、蒼天の石の完全開放の状態…。「蒼姫光天（そうひこうてん）」ミツキ曰く「フォルム・ツヴァイ」さ」

「フォルム・ツヴァイ…」

「なんて力だ…。」

驚くユウとティアナに対し私があの状態の事を説明した。

私の説明に対しティアナ、ユウの順でその巨大な力に驚きの声を出していた。

「こうなると早いよ!!あんた達!!目ぇそらすんじゃないよ!!」

「あ…ああ」

「はい!!」

2人の様子を見た私は、目をそらさないよう声をかけそれを聞いたユウとティアナはその声に答え真剣な表情に変わった。

ミューゼル視点

ズザザザザッ!!

「ようやく来たな!!ミコ!!」

「久しぶりね?ゼロ。いっきに行くわよ!!」

「ああ!!」

ゼールとの鍔迫り合いから離脱した俺は、ミコの横まで下がり足を

滑らせその勢いを殺し彼女の横で立ち上がり声をかけた。

その声を聞いたミコは、再会の挨拶もそこそこに一気に決める旨を俺に告げて来たので俺もその声に答える。

「俺が仕掛ける！！」

「わかった！！はぁぁぁぁぁ！！夢幻無双！！発動！！」

ダッ！！

ヴォォォォォン！！

ミコの声に答えた俺は、自分から仕掛ける旨を言いその場から飛び出した。

その声に答えたミコは、自身の周りに魔方陣を展開。

蒼天の石の完全開放状態でのみ使える夢幻無双を発動させた。

＜夢幻無双＞

蒼天の石の力を使い高度な幻術を一定の空間にかけ、それを利用し相手を翻弄そこから剣舞や射撃魔法にて相手を倒す蒼天の石の力を完全解放した時にしか使えないフィールド魔法

そのフィールド内に入った敵は、幻術と実体の見分けをつける事自体困難を極める。

さらに、実体を攻撃されてもそれを瞬時に幻術に切り替える事も出

来そのバリエーションは多い。

尚、フィールド内にいる見方に対してもミツキと同じ効果を得られる事が出来複数での同時利用も可能だが、人数が増える分ミツキへの負担も大きくなる。

ちなみに現在のミツキの状態では、ミツキも含め2人が限界であり通常状態でも数人がミツキの体が耐え切れる限度である。

「くっ!!また幻術か!!（ブォン）クソッ!!こ…これは夢幻無双!!（ズバッ!!）グハッ!!」

ミツキがかけた夢幻無双がゼールの周りを包み込む。

それにより辺りは、白い靄が立ち込めるその中から朱槍を持った俺が切りかかりそれに気づいたゼールが俺を切り裂く。

だが、それは俺の姿した幻術でありそれに気づいたゼールは声を上げるがその死角から俺がヤツの背中を切り込み声をあげる。

「そうよ!!この夢幻無双で、私達とあんたとの因縁にケリをつける!!（ズバッ!!）」

「そうだ!!これが俺たちの恨みの一撃だ!!そして、もうこれ以上、貴様の野望のために俺達のような人達を増やさないために!!」

「「今ここで!!あんた（貴様）を止める!!」」

ゼールの声を聞いたミコそして、俺順でその声に答えながら次から次へと俺とミコによる連続波状攻撃が続く。

その攻撃に対しゼールは、俺達を捕らえる事が出来ず一方的にその攻撃を受け続けさらに二人が同時に声をあげながらヤツの体を切り裂く。

スバババッ!!

「く…くそ!!このままでは…」

「「「「「逃がさないわよ!!シャイニング・ブラスター!!」」」」」

「ぐぁぁぁぁぁぁ!!」

ドゴーーーーーーーーーーーン!!

「まだだ!!電光石火!!」

スバッ!!

「ぐはぁぁぁぁ!!」

俺達の波状攻撃に対しゼールは、その場から逃げだそうとするがそれに気づいたミコがヤツの周りに5人現れヤツを囲みその全員でシャイニング・ブラスターをヤツに向けて放った。

その爆発が収まりその場に立ち尽くすヤツに今度は俺が、ヤツに向けて持っていた朱槍に雷の魔力変換でえた力を込めヤツに突撃し切り裂く技電光石火でヤツにさがにダメージを与える。

バチバチ…。

バチバチ…。

ドスン！！

「くっ…。まさか、ここまで追い込まれるとは…。そろそろこの体も限界か…。ならば…」

俺の電光石火を食らったヤツは、その場で膝をつきなにやら呟いていた。

「これでトドメよ！！」

「くらえ！！夢幻無双！！」

「蒼雷陣！！」

ヤツが膝を突いた俺達は、トドメを指すためにお互いにヤツにゼールに近づきさらに幻術で分身。

そして、その全員で一気に切り込む技夢幻無双　蒼雷陣でヤツに最後の攻撃をしかけた。

ズバババッ！！

「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ドーーーーーーーーーーン！！

俺達の攻撃をまともに食らったヤツは、その場で声を上げ爆発を起こした。

バタン！！

「がっ…ガハッ！！（ゴボッ）」

「やったの？」

「いや…。どうやら、倒したのはゼールが使っていた肉体だけのようだ。ヤツは、石の姿に戻りどうやら脱出したみたいだ」

爆発を起こしたヤツの肉体は、黒焦げになってはいるも辛うじて生きているらしく口から血を吐きながらその意識をなくしていった。

それを見たミコがヤツを倒したのかどうかを俺に確認してきた。

ミコの声に対し俺は、今残っているのがヤツがさっきまで使っていた肉体のみでゼール自身は石の姿に戻りその場から既に離脱していた事を告げた。

「そ…そう…。やっぱり今の私じゃ…これが限界…だったのようね…」

ビュイーーーーーーン。

「しゃ～ね～よ。でも、みんなを解放出来たんだ。今はそれで満足しな」

「そうだな。それにどうやら、お前の気持ちを彼等はちゃんと受け

取ってもらえたようだ」

「姉貴！！」

「ミツキさん！！」

俺の話を聞いたミコは、夢幻無双を解除。

そして、元の姿に戻ったミコは、意識もうろうな状態で俺の声に答え今の自身の状態では、ここまでが限界である事を残念がっていた。

ミコの話を聞いたノアが、俺を含めたみんなをゼールから解放した事をあげそれで満足するよう言う。

それに続いて俺が俺達の元へと駆けつけるミコに声をかける彼等の姿を見ながら彼女の気持ちをちゃんと受け取ってくれた事をつげた。

「そう…。なら、それで満足…しなきゃね…。後の事は…よろしくって言っといて…ね…（ガク）」

「ああ…。わかった」

「ゆっくり休みな…。ミツキ…」

俺達の話を聞きそして、駆け寄ってくるユン先生達の姿を見た見たミコはそう俺とノアに言いつつその場から意識を手放し俺の胸元へと倒れこんできた。

ミコの声に俺は、彼女を受け止めつつそれを了承しノアも俺の後にそれを了承した。

この戦いが終りを告げた後、他の世界から応援にかけつけてきたと言う八神組と言う連中を中心にガジェット達を一掃。

スカリエッティ達が仕掛けてきた地上本部襲撃は、それで終り告げる。

だが、後にＪＳ事件と呼ばれるこの事件のほんの序章にしか過ぎなかった事を…。

その時の俺達は、まだ知らずにいた。

その８５（後書き）

作者
「如何でしたしょうか！？その８５！！」

はやて
「それにしてもミツキが無事でよかったわ～。それにしてもあのミューゼルって？」

作者
「本編でも説明しましたが、ミューゼルはミツキがいた組織の仲間の内の一人であり彼女とコンビを組んでいた人物です。このコンビは、産まれた時からその組織によって決められておりその影響でミツキが唯一裸を見せても恥ずかしがらない人物です」

はやて
「なんやて～！！と言う事は、あのミューゼルとあ～んな事やこ～んな事や…」

ミューゼル
「違う！！ミコとは、単なるコンビでありお互いの裸を見たのも訓練後の洗浄のときにたまたま見ただけだ！！」

作者
「おおっ！！いきなりでましたか！！ミューゼルさん」

ミューゼル
「ミコの変わりだ」

はやて
「それにしても…なんや？今の態度？やっぱり…」

作者
「と言うよりそもそもそんな予定はありません。さらに言えばこの二人…ＳＥＥＤのキラとカガリみたいな感じだと思っていただければいいかと思います。ちなみにＣＶは、イメージキャラ同様石田彰さんです」

はやて
「って、なんで決まってるのや？」

作者
「これは、ミツキさんのイメージキャラである「逮捕しちゃうぞ」の二階堂頼子さんの話で男性キャラとの絡みがある話だとその相手役がこの石田彰さんだったんです。それで、こうなりました」

ミューゼル
「そう言う事らしい」

はやて
「なんや、つまんないの～」

作者
「そんな事言っててていいんですか？これで、彼と誰がくっつくのかわからないんですよ？ちなみに個人的な話ですが、ジャン先生の所の飛鳥さんとの絡みなんか楽しみにしてますけど（笑）」

はやて

「そ…そうやった!!でも、なんで飛鳥なん?」

ミューゼル
「それは、それぞれのＣＶつながりだろう…」

作者
「おひまな方は調べて見て下さい。それでは、今回はここまで!!」

ミューゼル
「次回…魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者…」

はやて
「テイク…オフ…」

追伸!!
新連載をはじめした!!

その名も…

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ影の守護者ＣＲＯＳＳ!!

本編でこちらの都合上、公開出来なかった話を短編集みたいな形でそちらでお送り致します。

栄えある一発目は、コラボ作品をお送り致します。

そのお相手はと言えば…

見てのお楽しみ!!

では…また…

その８６（前書き）

ファントム・ナイツ　本部

ミハエル・グリニッヒ提督の執務室

フェイト視点

「それじゃ、なのは…これをよく読んでからサインしてね」

「わかったよ。フェイトちゃん」

地上本部襲撃事件がおきて１週間が経過した。

現在、襲撃を受けた地上本部やその周辺部隊の復旧作業をしつつその事件を起したスカリエッティ一味の居所を管理局及び聖王教会の教会騎士団が全力で捜査をしている。

そんな中、私となのはは、ファントム・ナイツの現司令代理で参謀長のミハエル・グリニッヒ提督の執務室でヴィヴィオとなのはの養子縁組の書類に必要事項を記載してもらおうとしている。

執務室の奥にあるデスクでそれについている椅子に座りその様子を笑顔で見ているグリニッヒ提督の前にある応接用のソファーに座ったなのはがその前にあるテーブルにたったままの私がその書類を置き書類について説明。

その説明の後、なのはがその書類を手に取りながらそれを確認している。

さらに私たちの様子を応接用のソファーの横でケイン副司令とミオちゃんが直立不動な状態で、それを見ていた。

なぜ…。

こんな事になったのかと言えば、それは、地上本部襲撃事件が終わってから2日目の出来事だった。

襲撃を受けた機動六課の隊舎の捜索をしていた私達の所にミオちゃんが現れ、私となのはをここへと案内してくれた。

執務室を訪れた私達にグリニッヒ提督の方からヴィヴィオが無事である事そして、彼女が聖王のクローンであり古代ベルカ王家が建造した機動兵器「聖王のゆりかご」の機動するためのキーである事が彼の口から語られた。

その話を聞いた私達は、驚きを隠せずには入られずさらに追い討ちをかけるかのように提督の口から今回の事を気にヴィヴィオをケイン君やミオちゃんの実家であるメイファ家に養女に出さないか?とそんな提案があった。

私となのはがその理由について聞いた所、今回の事でヴィヴィオが聖王のクローンとしてわかった以上この事件が解決した後どんな事に巻き込まれるのかわからないとの事。

さらに、機動六課のその任務が1年と時間が区切られており、この期間が過ぎてもヴィヴィオの引き取り先が決まっていなかった場合の事がまだ決まってはいないといった事。そして、この状況でのヴィヴィオを引き取ってくれる人が出てくる可能性が低い事などをあ

げそれであればその財力や何かあった場合にケイン副司令やミオちゃんもいるメイファ家に養子に入った方が良い判断し今の保護者である私となのはにその話をしたとの事。

この話に対し私は、反対したがその一方なのはは「その方がヴィヴィオのためになるかも」とその提案に受けようとしていた。

その話に私は、納得はせずなのはを説得するが頑固なのははその意見を変えずに一度はファントムが用意した書類にサインをしようとした。

でも、その時突如その部屋に蒼い転送魔法が開き大きくなり（聖王モード）、自身の事を全て知ったヴィヴィオが現れ、私と一緒になのはを3時間をかけ説得。

そして、ようやくなのはもその態度を変え自分で引き取り守る事を宣言。

提督からの提案を断った。

そして、今日改めて私が用意したヴィヴィオとなのはが親子になるための書類に彼女がサインをしようとしている。

あの後、ヴィヴィオは、元の状態に戻りなのはがどうしてここに来れたのか？と聞いた所ヴィヴィオが…。

「おっきい姫ちゃんにこの事を教えてもらって…ここに送ってもらったの～」との事。

その話にその場にいた全員がチンプンカンプンな様子だったが、何

よりなのはとヴィヴィオがこれからずっと一緒になる事に私を含め全員が祝福を送っていた。

「書いたよ…フェイトちゃん」

「うん。わかった。それじゃ確認するね」

私があれこれ考えながらなのはの様子を見ていた所、なおんはが書類を書き上げた事を私に告げそれを聞いた私はその書類を確認する。

「問題ないよ、なのは。それでは提督?ご確認して頂けますか?」

「わかりました。どれどれ…よろしい。問題ないでしょう」

「それでは、この書類は私のほうで処理させていただきます。それで…今日、ヴィヴィオは?」

「ちゃんと来て貰ってますよ。ミオ、ナリアに連絡を取ってヴィヴィオを連れて来てもらってください（わかりました）」

書類を確認した私は、提督にその書類を再度確認してもらいそれが問題ない事を確認してもらった所でヴィヴィオの事について聞いてみた。

すると提督は、ヴィヴィオがここに来ている事を告げミオちゃんにヴィヴィオと一緒にいるナリアちゃんに連絡を取るよう指示。

それを聞いたミオちゃんは、その部屋にある固定の端末から別室にいるナリアちゃんに連絡を取った。

ガチャ

「失礼します」

「あ〜!!なのはママにフェイトママ!!」

「「ヴィヴィオ!!」」

ミオちゃんが連絡を取ってから少したった後、ナリアちゃんがヴィヴィオを連れて執務室にやって来た。

私達を見たヴィヴィオは、声を上げ手を繋いでいたナリアちゃんの手から離れそれに気づき声を上げながら彼女に近づく私達の元へと駆け寄りお互いに抱き合った。

ミオ視点

「もうこれでひと安心ですね」

「やれやれ…一時はどうなるかと思いましたが…」

「それにしても提督自ら悪役にならなくても…それについては私がすると申したのに…」

「ケインお兄様だと、毒が強いせいで帰って高町隊長達のご気分を悪くしかねないと提督がおっしゃってたではないですか…」

「ですが…」

高町隊長達が抱きあう姿を見た私達は、その光景を微笑みながら見ていた。

するとその光景を見たナリアさんとご隠居様がホッと旨を撫で下ろした様子で声をあげ、その声を聞いたケインお兄様が提督に対し話をしだした。

その声に今度は、私が前にご隠居様が発言された事をあげケインお兄様に説明する。

だが、お兄様はイマイチご納得されていない様子。

そもそも、今回なぜこんな事をしたかと言うとヴィヴィオちゃんがスカリエッティに狙われる可能性を示唆したミツキお姉様がユウお兄様に対しヴィヴィオちゃんの偽者を用意するからもし六課が襲撃を受けた場合それとすり替えるよう指示。

さらに私には、本物のヴィヴィオちゃんを私の所有の別邸に身を隠すよう指示を出された事に始る。

その後、六課が襲撃されヴィヴィオちゃんがファントムの調べやユン先生にヴィヴィオの体を調べてもらった事で聖王のクローンである事が解った事により、彼女の身の安全を図るためにメイファ家で養女にするという表向きの理由をつけそれを高町隊長達に説明。

今後の事を彼女達に考えさせ、それでも引き取って育てると言う事を決断させようと一芝居うった訳なんです。

何せ、あれだけ懐いているヴィヴィオちゃんを他の所に養子だすなんて時間が経てば経つほどつらい事になります。

それに、聖王のクローンと解った以上今後彼女があらゆる事態に巻き込まれる危険性がある事についても説明する事が必要であったからなんです。

我々は、その事も踏まえ新たに親を探すよりも高町さんが引き取り育てた方がよいとの結論を出していたのですが、当初はなりゆきにまかせる事にしてたんです。

ですが、この状況の急変によりいつゼールが彼女を狙って来るのか解らなかったために少しお節介かとは思いましたがこうしたと言う訳なんです。

本当なら、なりゆきにまかせそれが六課終了近くまでその行き先が決まってなかった場合、ミツキお姉様がご隠居がやった役をするハズだったんですが…。

ですが、いきなり聖王モードになって現れたヴィヴィオちゃんには正直驚きました。

あれについては、まさに計算外の事であり…あの魔力光からミツキお姉様が関与している可能性があります。

ですが…お姉様は現在ゼールとの戦闘の際に受けた攻撃のダメージとその際発作をおこされたために意識不明の重体。

現在、ユン先生の病院のＩＣＵにて２４時間体制で治療を受けているのでその可能性については低いのですが…。

まぁ、そんな事もありましたが…結果的に高町隊長がヴィヴィオちゃ

ゃんを引き取る事になりその目的は達成されました。

そして、今回のこの事件が解決するまでの間ヴィヴィオちゃんはその身の安全の保護のために私の別邸にて預かる事になりました。

さらに、あの書類を書いてもらう前に既にその別邸に入れるキーを高町隊長には渡したりするためにこちらにおいで頂いた…と言う事になります。

「でも、結果的に目論み通りになったからいいじゃないですか？それではご隠居様？私はこれで」

「そうですか。なら、ひなぎくの件はあなたに一任します。好きなようにして下さい。姫の方には、目を覚まされてから私の方からご説明致しておきますので」

「よろしくお願いします」

私がそんな事を思い描いていた所、お兄様の話を聞いたナリアさんが結果的に丸く収まった事について言いそして、ご隠居様に声をかけその声にご隠居様がそれに答え彼女は執務室を後にした。

「それじゃ、ヴィヴィオ。ミオちゃんに迷惑かけちゃダメだよ！（うん…わかった。２人は…またヴィヴィオに会いに来てくれる？）もちろん！！これが終わったらずぅ～っと！！一緒だよ！！」

「本当！！」

「本当だよ。ヴィヴィオ」

ナリアさんが部屋を退室した後、色々と話をしていた高町隊長達が仕事があるからとヴィヴィオちゃんに声をかけ執務室を後にしようとしていた。

高町隊長の声に対し、寂しそうな顔をしながらそれに答えるヴィヴィオちゃん。

そんな態度の彼女に対し高町隊長とハラオウン隊長の順で彼女を元気づけるかのように声をかけそれを聞いたヴィヴィオちゃんは笑顔に戻っていった。

「それじゃ、ヴィヴィオの事をよろしくお願いします」

「わかりました。確かにお預かりいたします」

「メイファとファントム・ナイツの名にかけて彼女を無事にあなた方の元へとお返しいたします」

「ケイン副司令…」

「よろしくお願いします！！」

ヴィヴィオとの会話を終えた2人は、私たちの元を訪れヴィヴィオの事について私達の話をしそれに私、ケインお兄様の順でそれに答えた。

その声に対し驚くハラオウン隊長に対し高町隊長は深深と頭をさげ執務室を後にした。

「さて…。ヴィヴィオの件についてはミオ…あなたに託します。（

はい…わかりました）それとケイン副司令、あなたには、情報部からの情報によればなにあら聖王教会と本局の間に姫の事に対しなにやら不穏な動きがあるとの報告が入りました。この事についての対処の方をお願いしたいのですが…」

「ハッ！！了解いたしました！！では…」

「行きましょうか？ヴィヴィオちゃん？（はぁ～い）」

2人が執務室を後にした後、ご隠居様の方からそれぞれに指示が出せれそれを聞いたケインお兄様と私はそれを了承。

そして、私はヴィヴィオちゃんと共に執務室を後にし別邸へと戻る事にした。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８６…始ります…」

その８６

その８６

ユンの病院　廊下

ユウ視点

「いや～。すまないねぇ～、こんな事頼んじゃって～。なんせ、こっちじゃ捜査権限がないみたいでね～私」

「ったく…。そんくらい自分の世界で上司に頼みゃ、すぐにでも出してくれただろうに…」

「私しゃ、そういうのが面倒でね」

「要するに…こっちに来て姉貴に頼もうとでも思っていたらその当てが外れたって所か…」

「そう言う事」

地上本部の襲撃事件の後始末なんかであれこれしていた所に、突然飛鳥さんの方から連絡が入った。

そして、この病院で今回の事件の重要人物として管理局からの監視付きで入院している姉貴の昔の仲間…ミューゼル・カーバインに会わせて欲しいと言ってきた。

最初こそ断ろうとしたが、俺自身あの男に色々と話がしたいと思い

なんとかこんとか時間を作り飛鳥さんをここに案内した。

その廊下を歩く俺に対し、飛鳥さんは急な依頼をした事を詫びそして俺たちの世界では自分には捜査権限が無い事を俺に告げた。

飛鳥さんの話に対し俺は、飛鳥さんが所属している部署の方からこっちの世界に捜査出来るように手続きをするよう言ってみたがそれに対し彼女はその手続きが面倒だと言いそれをしてこなかった事を言ってきた。

彼女のそんな話しに対し俺は、飛鳥さんの思考を読みそれを聞いてみた所どうやらそれであってたらしい。

「それで？ヤツに会っていったい何をするつもりなんだ？」

「さぁ？それは、会ってから話すさ」

廊下を歩き続ける俺は、飛鳥さんにここに来た理由を聞くがそれを聞いた彼女はそれをはぐらかした。

「あっ！！ジョーカー！！ご苦労様です」

「ごくろうさん。ファントム・ナイツ本隊所属、ジョーカーオブクラウンのユウ・サエグサだ。さっき連絡をしたが、入れるか？（どうぞ。ただし医師の立会いでとなりますがよろしいですか？）ああ…ありがとな」

ヤツがいる病室の前までたどり着いた所、その入り口の横に座っていたファントム所属の警備担当者が俺の姿を見た途端声をあげながら立ち上がり敬礼をして来た。

それを見た俺は、それに対し返礼をしファントムでの立場で名を名乗り中に入れるかどうか警備担当者に確認してみた。

俺の話に対し、その警備員は中に入れる事と医師の立会いでの事になる旨を言いそれを了承。

そして、その彼に対し無理を言った事に対し感謝を言いそのドアから中に入っていった。

「ジョーカー？いったい、なんだいそれ？」

「コードネームみたいなもんさ。それも色々な特権付きのね」

「ふ～ん」

中に入る直前、飛鳥さんが俺とその警備担当者が言ってたジョーカーの事について聞いて来た。

それに対し、俺は話すと面倒な事になるので大雑把にその事を説明し飛鳥さんはそれに疑問を残しつつも中に入っていった。

ユンの病院　ミューゼルの病室

飛鳥視点

「おっ！！来たね？」

「すいません。急に頼んじゃって」

「いいさ。こちとら丁度こいつの面倒を見てた所なんでな」

ユウの後に続いてその病室入った私は、先に入ったユウとここの病院の医師件医院長のユン・エリシャ先生とが話している姿が見えてきた。

そして、その部屋の奥のベットに横に今回の私のお目当ての彼…ミューゼル・カーバインが横になりながらその話をしている様子を見ていた。

「ユン先生？こいつが本当に？」

「ああ…。そうだよ、こいつがあの赤ん坊だったユウだよ？ミューゼル？」

「信じられん…。あの円らな瞳で愛くるしい笑顔を振り撒いていたあのユウが…。まるで魚が、死んだような目をしたヤツに成り下がるなんて…」

「成り下がるってどういうこった！！それに俺は、魚が死んだような目なんかしてねぇ！！」

その2人の話が済んだ所で、そのミューゼルがユン先生に対しユウを見ながら自分が過去に見ていた彼と今目の前にいる彼とが同一人物なのかを確認。

彼の話に対し先生は、そうである事を言いそれを聞いたミューゼルはそれを信じていないと言うような声をあげそれを聞いたユウはその話に納得出来ない様子で声を荒げた。

「まぁまぁ、それで?今回はいったいなんの様だい?コイツに?」

「それは…ここにいる飛鳥さんが…」

2人のやり取りを見ていたユン先生は、それをなだめつつも今回ここに来た理由をユウに聞いて来た。

それを聞いたユウは、後にいた私の方を向きながらそう答え彼の声に私はその前に出てミューゼルに話し掛けた。

「私は、この世界とは違う管理局に所属している東飛鳥ってもんだ。ちょっと、ミューゼルに聞きたい事があるんだけど…いいかい?」

「誰かと思えば、管理局の野獣か…。思っていたよりまともなヤツだったんだな」

「そりゃ、どうも。それよりなんで私の事を?」

「それは、ゼールがこの世界だけの支配を狙っていた訳ではないからな。だから、他の世界の有力な魔導士の事を調べていたのをヤツの中から見ていた知りえたんだ。無論…お前の仲間である八神組の事もな」

「なるほど…。それなら話が早い…。私はあんたに「大蛇」の事が聞きたくね?話してくれるかい?」

彼に話し掛けた私に対し、ミューゼルはどうやら私や力達の事も知っていたらしく自分が思っていた私と違う印象に戸惑いながらもそれに答える。

その話に対し私は、それに一応お礼を言いなぜ知っていたのかその理由を聞きその答えを彼が話をし自身の目的に対してっとりばやく話が済みそうである事を確信した。

「いったい、なんなんだよ?その「大蛇」って」

「俺とミコ…つまりお前の姉であるミツキが産み出された組織の名前だ」

「なっ!!」

「ちょ…ちょっと待て!!それって、確かゼールが壊滅させたんだろう?それがなんで飛鳥さんの世界に?」

私の単刀直入な質問に対し、ユウがそれに疑問の声をあげその話にミューゼルが淡々とその大蛇について答えた。

ミューゼルのその答えに対し、さすがの私も予想だにしない爆弾発言に驚きの声をあげさらにユウが質問をしてきた。

なるほど…。

そりゃ、ミツキさんもあんなに必死になって捜査するわけだ…。

「どうやら、最初っから話をしなきゃならないねぇ。お互いに」

「そうしてもらえるかい?飛鳥(はい)」

ユウの声を聞いた私は、その頃のミツキさんの事を思い出しながら自分が知っている話を最初から話をする必要がル事言いそれを聞い

たユン先生がそうするよう私に頼んできた。

その話に私は、了承し話し始めた。

事の始まりは、ミツキさんが私達の世界にある事件捜査のために訪れその事件後そのまま私の家に転がり込んで来た時に起きた時に起きた事件に端を発する。

その事件と言うのが、ミツキさんが単独でピースカンパニーって言う輸入商品なんかを扱う会社を調べている時にある疑惑がかけられたんだ。

私達は、そのミツキさんにかけられた疑惑の事を調べていたんだけどその途中にミツキさんが逮捕されちゃってね。

それで、ミオやノアに協力してもらって調べていたらその会社の事が浮び上がりさらに調べた所…。

人造魔導士やそこからとった臓器なんかを売りさばいている会社だって事がわかったんだ。

んで、この会社にその人造魔導士や臓器を提供していたのが…。

「大蛇って訳か…」

「そう言う事。それで、ミツキさんがこっちに帰った後、私の世界で連続の自爆テロ事件が起きてね。今回は、そっちの捜査なんだが私の調べじゃそれにも大蛇が絡んでいるらしくてね。でも、その大蛇って組織がこっちでいくら調べても何にも出てこなくって…。んで、楓がこっちの世界に用があるって事だったからそれに便乗させ

てもらったって訳さ」

私がここに来た訳をしていた所、その事を先読みしたユウが私に声をかけた。

その声に私は、そうだと答え説明を続けた。

「なるほど…。なら、次は俺の番か…。そもそもゼールは、この世界の征服だけではなく他の世界の征服も企んでいる。大蛇は、俺達のような人造魔導士を大量に生み出しそれを管理局によく思わない組織等にそのピースカンパニーを経由させる形でそれを売りさばいていたんだ。その失敗作も含めてな。そして、ゼールは自らの野望のために利用するために大蛇を一度自らの手で潰し、そいつ等の魂を洗脳しそれを利用。自分のいい様に動かせるようにい駒として使っていたんだ」

「ちょっと待ちな。人造魔導士の完成したヤツが傭兵やボディーガードなんかとして売りさばかれるって言う話はあの会社にミツキさんと乗り込んだ時に聞いたんだが失敗作もって…。もしかして、使える臓器だけを売りさばいてるって訳かい？」

ユウと私のやり取りを見ていたミューゼルが私の後に続いて話し出した。

その話を聞いた私が疑問に感じた事を聞いてみた。

「それもあるが、それよりもいい方法をヤツ等は思いついたんだ。その失敗作の人造魔導士のリンカーコアを強制的に暴走させ爆弾として利用する事だ」

「んな！！」

「…ヘドでるね…そいつ等…」

私の質問に対しミューゼルは、淡々とその質問に答えその話ユウが驚き私は怒りを覚えた。

「人造魔導士は、その開発に莫大な予算がかかりさらに失敗作を処理するにもその開発自体が違法なためヘタにする事が出来ない。それに爆破テロをするにも爆発を起した実行犯の事が調べられればそれを計画した組織のアジトなんかがバレる恐れがある。そのそれぞれのリスクを補うためにそう考えついたのがその方法だ。恐らく東の世界で起きた自爆テロもその方法でやったんだろう？（ああ…多分…）」

「なら…もしかして、姉貴やあんたを親父達の所に送ったそもそもの理由ってのが…」

「お前が考えてる通りだ、ユウ。ミコ…いやミツキは、お前の両親達が行っていた研究の成果が別の組織なんかに渡らないようそれが起きた場合のために潜入したんだ。そして、もしそうなった場合…もしくはその研究が完成しのを手に入れ機密保持のために自爆する予定だったんだ。そして、人造魔導士の完成体である俺がその指揮を取り爆発するまで彼女や他の自爆予定の仲間達を守る手はずになっていた」

私達の様子を見ながらミューゼルは、話を続け私に質問していたのでそれに答えた。

その後、ユウがミツキさんの事について質問してきた。

その話にミューゼルが答えそれを聞いたユウは、俯いたままその話を聞いていた。

「その話を他の研究所に往診にいってた時に私が、そこの職員達からそんな噂があるって聞いてね。それで、もしかしてと思ってミューゼル達の健康診断の際に隅々まで調べてたんだ。それで、その中の連中に人造魔導士の失敗作が入る事やミツキがユウの両親の遺伝子をベースに作られてる事がわかってね。それをムツキとミリーに話した所、２人揃って「自分達の娘にそんな事はさせたくない」とかいいだしてね。それで、研究所の連中に声をかけミツキやミューゼル達を含めた総勢４７人全員をそれぞれ養子として迎えてそんな事から足を洗わせようとしたのさ。ちなみにミューゼルの養父は、あの研究所の所長でノアはこの事については関係ないからね。私やユウの両親達が勝手にやった事さ」

「あの話を聞いた時、俺達はようやく人間として生きていけると思っただんだ。だが、それは組織には隠してやった事で組織にその事や地上本部と蒼龍の首飾りを建設していた事がバレた。それに激怒したその組織は、当事発見され人間の肉体が与えられたばかりのゼールを使ってその報復のために襲撃する事を決めた言う情報を俺達の仲間の一人が掴んだんだ。俺達は、それを迎撃すべく研究所のみんなと当時赤ん坊であったお前と…その篭りをしていたミコを逃がすためにゼールと戦い…そして敗れた…。無論、ミコには内緒でな。そして、ミコはその事に気づき研究所のみんなを逃がし俺達の事を安否を確認しようとしたがゼールに魂を洗脳され別の肉体を与えられた仲間達の襲撃を受け…そこで両親達を殺され…蒼天の石をミリーさんから受け継ぎノアと共に俺の肉体を手に入れたゼールその仲間達と戦ったんだ…」

ミューゼルの話の後、再びユン先生がその話の続きを話その後にミューゼルが続いた。

「なるほど…。それで、ミツキさん私が詳しい内容を聞こうとした時に「これは、私が一人でやらなけりゃいけない事なの。だって…みんなの命を私が奪って…あいつが私達が幸せだった時間を奪ったんだから…」って言って、私にも何も教えてくれなかった訳だ。そうだ、あんたに伝言を頼まれてたんだ。ミツヨって子があんたに会ったら「あなたを感じることが出来た時間…とても幸せでした」って伝えてくれってさ」

「それで…ミツヨは…」

「死んだよ。私とミツキさんの2人でピースカンパニーに突入した時にその会社のガード役として私と戦って…。そして、私がその戦いに勝った後組織の機密保持のために事前に彼女の身体に仕掛けられてた自爆装置が動き出しちゃってね…。気づいた時には、もうどうする事も出来なくて…。ゴメン…助けられなかった。ちなみに私は、あの子から大蛇の事を聞かされたんだ」

「そうか…」

2人の話を聞いた私は、その事件の時のミツキさんの事を思い出しながらその時気になっていた事がようやくひとつに繋がった事に納得の声を上げそしてその時敵として現れた女の子から頼まれていた伝言をミューゼルに伝えた。

それを聞いたミューゼルは、その後の彼女の事について私に聞いてきたので私は正直にその時の事を彼に話した。

私の話に彼は、少し悲しそうな顔をしながら一言答えてきた。

そして、私はそれ以上詳しく聞く事は辞め「まいったな」と言う様子のユウと共にその病室を後にした。

スカリエッティのアジト

クワットロ視点

プシュー。

「お疲れ様でした～。ゼール様♪」

地上本部での戦闘を終え黄天の石の状態で帰還されたゼール様は、私がゼール様の命で、この世界を征服した後に使うため用意していた戦闘機人の体に乗り移った。

そして、その肉体の最終調整を終え今ようやく生体ポットの中から出てこられた所、私が声をかけた。

「まさか、この肉体を使う事になるとは思わなかったがそれにしても中々な物だな。（誉めて頂きありがとうございます。ゼール様♪）それで、聖王はどうした？」

「それが、偽者でした。レリックをあの子の中にいれようとした瞬間突如爆発を起しましそれがわかりました。尚、その偽者の製作にはドクターが関与していた様子でどうしてそんな事をしたのかについてはいまだ不明ですが既に拘束しアジトのドクターの部屋にいて頂いております。それとその際、トーレがドクター側につき我々と交戦。今は、ドクター同様トーレを拘束し拷問室におります。です

が、その時の交戦でゼール様の戦力の一部を使ってしまいました。
申し訳ございません」

生体ポットから出て来られたゼール様は、その出来のよさを誉めその声に私が答えた。

そして、捕らえてきた聖王様の事をウーノお姉様に聞きその声にウーノお姉様が彼女が偽者であった事とその作製にドクターが関与していた事、そして、ドクターを捕らえる際にトーレお姉様がドクター側につきそれとの戦闘でゼール様が所有されている戦力のその一部を使ってしまった事を陳謝していた。

「構わん。それで、トーレは拷問室にいるんだな？（はい）では、奴にあって俺の戦力に加えてやろう」

「それはよろしい考えですわ♪では、私がそこまでご案内致します♪」

ウーノお姉様の報告を聞いたゼール様は、いつもの金色の鎧を纏いながらその事について許しトーレお姉様の居所を確認自身の戦力に加えると言いそれを聞いた私がその部屋まで案内を始めた。

スカリエッティのアジト

拷問室

「貴様等か…」

「怖い顔しないで下さいよ～。トーレお姉様♪」

「ふん！！洗脳された貴様等に姉呼ばわりされたくはない！！」

トーレお姉様がいる拷問室を訪れた私達に対し大の字でそこの壁に拘束されていたお姉様は、怖い顔をしながら私達に声をかけそれに私が答えた。

「威勢がいいな。これなら、俺の戦力としても充分役に立つ」

「お前は…ゼール！！私が貴様の戦力になるものか！！私が仕えるのはドクターだけ…んぐっ！！」

「貴様の意見等聞いてはいない。お前は、ただ俺が決めた事にただ従ってればいいんだ」

私とトーレお姉様のやり取りを見ていたゼール様は、その後から現れトーレお姉様に声をかけた。

その声を聞いたトーレお姉様は、その姿を見た途端激怒。

ゼール様の戦力には、ならないと虚勢をはるがその声を聞いたゼール様はその声の途中にトーレお姉様の顔をその手でアイアンクローの要領で掴みまるで怒りを抑えてるような声で彼女を威圧する。

「ぐっ…ぐがぁぁぁ！！そんな事…絶対に…」

「ふっ…。そんな事すぐに言えなくなる…。スピリット・バインド…」

「ぐぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！…」

ゼール様のアイアンクローを受けたトーレお姉様は、その痛みを露わにしつつも尚もその戦力になる事を拒否。

すると笑みを浮かべるような声をだしたゼール様は、トーレお姉様の顔を掴んでいる腕の周りにいくつものリンク状バインドを形成。

そして、彼が持つ魂をも洗脳出来る魔法…「スピリット・バインド」を発動させその腕にあったリングをその腕からトーレお姉様の体への移動させた。

彼女の体に移ったそのリングは、トーレお姉様の肉体その全ての部分に整然と並ぶように身体を包みそれが終わるとリングが小さくなりながらその体の中に入っていった。

リングがトーレお姉様の肉体に入った瞬間、お姉様は、大声を出しそれが激痛である事をつげた。

ちなみに私やウーノお姉様の時は、対した痛みでは無かったわよ。

ゼール様曰く、この魔法に逆らえば逆らう程その痛みが強くなるんだそうよ。

そもそも「スピリット・バインド」は、ゼール様に負けた物の魂や肉体には、それが決した時点で自動的にがかかるらしいんだけど…。

今回は、それとは違うからああやってトーレお姉様にダメージを与え心の中に敗北感が見えた所でゼール様自身の手で魔法を発動させないといけないし時間もかかるらしいのよ。

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！ああ！！ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！

！がっ…」

「気を失いましたわ」

「これでいい。スピリット・バインドはコイツに完全にかかっている。目を覚ませばコイツは俺の駒だ」

「それで、今後の事についてですが…」

あれからかなりの時間がたった。

ゼール様の魔法に抵抗し続けるトールお姉様の絶叫が拷問室に響き渡る。

そして、その声を上げていたお姉様のその声が突如止まりお姉さまが肩をガックリ落としそのまま動かなくなった。

私がその様子を確認した所、どうやら気を失ってたらしくその事を報告したらゼール様がこれでいい旨を伝えてきた。

その声を聞いたウーノお姉様が、今後の事についてゼール様に質問した。

「計画は、そのままだ。スカリエッティが蘇らせた聖王のゆりかごを使いこの世界を俺の物にする（ですが…その起動キーである聖王が…）心配するな。俺の中にも聖王の肉体が保存してあるそれを使ってゆりかごを起動させる。だが、起動させる事は出来ても完全にその機能を使えるわけではない」

「と言う事は、ゆりかごを完全に機能させるにはあの聖王がいると

言うことですね♪」

「そう言う事だ。クワットロ！！お前は、聖王を捕まえるための準備を始めろ！！ゆりかごが上空に上がりきるまでにあれを捕らえて来い！！例のシステムを使っても構わん！！ウーノは、ゆりかごの起動準備と戦力の体制を整えろ！！」

「「はっ！！」」

ウーノお姉さまの質問に対しゼール様が答え、その話で疑問に感じた事を私とお姉様がさらに質問しそれを彼が答えそして今後の指示をだした。

それを聞いた私達は、その声に答え拷問室を後にそろぞろ準備を始めた。

その８６（後書き）

作者
「如何でしたか？その８６？って今回は、殆ど地上本部襲撃後についての説明会でしたね」

はやて
「ってなんであないな事になったん？」

作者
「いや～。当初は、ヴィヴィオとなのはの件については１話使ってやろうかと思ったんですがあまり深く掘り下げるのもなんかな？と思いこうなりました」

はやて
「って深く掘り下げんでもええの？なんや変な事をヴィヴィオが言っとったんやけど…」

作者
「それについては、おいおい…って言うかいずれ明らかにしますよ」

はやて
「なんや、曖昧な答えやな…。それで？飛鳥の方はどうなってるねん？なんかありそうやけど…」

作者
「そぉ～なんです！！実を言うとこの前の話が「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　ＣＲＯＳＳ！！」の方でコラボ話として公開しております！！それと今回そちらの方である作

者さんが公開しておりますもう2作品ともコラボした物が公開しております！！尚、その中に1つが今回の話で飛鳥さんがこちらにくる事になった理由が明らかになります！！」

はやて
「うわっ！！なにいきなりなんかあったん？」

作者
「いえ…特には…まぁ、思いついたが吉日…と言うわけです。ちなみに「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　ＣＲＯＳＳ！！」へは、この小説の小説案内ページにある「私の名前」をクリックして頂きその次のページに私が掲載している作品名が公開されております。その中から「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者　ＣＲＯＳＳ！！」を選択していただければその小説の案内ページに行く事が出来ます！！さらに！！今回！！「Ｒ１８場外乱闘」場外乱闘の方も久々に更新しました！！今回は、ユウ×アルトでお送り話は「その２５」の前の話になります」

はやて
「ちなみに「Ｒ１８場外乱闘」へは、ノクターンのページの検索欄に「なのは」で検索してもらえたら出てくるようになっとるけど…１８以下の人は見れへんで！！」

作者
「とまぁ、今回は、番宣だらけになってしまいましたが感想などそれぞれに頂ければ幸いです」

はやて
「それじゃ！！次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！！…テイク…オフ…」

その８７（前書き）

陸士１０８部隊　隊舎内

飛鳥視点

「…という訳だからお願い！！協力して！！ノアちゃん」

「な～にが「という訳で」でだ！！ん な話、信じられる訳ねぇだろ！！」

「そこをなんとか～！！お願い！！ね♪」

「出来るかぁー！！」

ミューゼルの病室を出た私は、こっちで捜査を始めようとしたが力達から連絡が入り陸士１０８部隊を訪れていた。

するとそこには、力達以外にノアがいてそこで楓がここに来た理由が話され協力してほしいとの事だったんだが…。

「なぁ、お前…。今の話信じられるか？」

「さぁ？なんせ、ここの世界の未来の話だからね？いくら楓が力の子孫で未来から来たにせよさすがに話だけじゃ…なんとも」

楓の話にノアは、まったく信じておらずその協力を拒否。

さらに力達もその話に首を傾げ、力がサイモンに声をかけ楓とノア

のやり取りを見ながらそんな話をしていた。

「なぁ？お前は、どうなんだ？飛鳥？」

「私は、楓の話がどうであれやるべき事はもう決まってるからそれをするだけさ」

「だよな～。もしこのまんま帰ったらはやてに何言われるのかわからんしな」

「ああ…。これをさっさと解決してミツキに俺の弾丸を作ってもらわねぇとそろそろ弾丸がなくなりそうだしな」

「お前はそっちか！！」

サイモンと話をしていた力が、今度は私にその事を聞いて来た。

その話に私は、自分の考えを言い力もそれを同意。

だが、北斗だけは私たちとは考えが少しばかり違うらしく力の話に続いた北斗の声に私たちは唖然としサイモンがツッコミを入れていた。

にしても…。

ミツキさんにそんな隠し球があったとしたら、ちと面倒な事になりそうだしそれをなんとかするにはノアの協力は必須…。

さて…。

どうしたもんだか…。

カサッ。

私がそんな事を考えていたらノアに必死に頼み込んでいる楓の懐から手紙らしきものが地面に落ちてきた。

「ん？楓？これ落し物だよ？」

「あっ！！これは！！」

「なんだ？コレ？男からのラブレターか？」

「ラブレターがこんなに質素なものか？このアホが」

「なんだとーーーーーー！！」

楓の落とした物を拾い上げた私は、それを彼女に手渡そうとした。

すると、それを見た楓が驚きの声をあげさらにサイモンが男からの手紙だと言い出し…。

仕舞いには、そのサイモンの話に対し北斗が呆れた様子で声を上げその北斗の話に怒りを覚えたサイモンはそれに対し怒りを露わにしていた。

「はぁ…。あんた等は…。んで？いったいなんなんだか説明してくれる？んでないと自体の収集がつかないから」

「ええ…。これは、私がこの世界の未来のユウさんからこの時代の

ノアちゃんに渡してくれって頼まれたものなんです。ノアちゃん、私の話に納得が出来ないのならこれを読んでからその結論を出して」

「わかった…。こ…コイツは…」

サイモンと北斗のやり取りに頭を抱えていた私は、自体の収集を楓に依頼。

その話に楓は、その事について説明しそれをノアに手渡した。

楓からその手紙を渋々受け取ったノアは、その手紙の中身を見て驚いていた。

「ん？いったい中身は、なんなんだ？」

「だから、男からの…」

「まだ言うかのまったく…。どこまで、能天気な頭をしてやがんだ？」

「何を～！！」

ノアの驚く声に私たちは、彼女の後ろに回りその中身をみようとした。

そんな中サイモンは、まだ先程の冗談めいた事を言いつづけされに対し北斗がさらに呆れ再び二人の間でいがみ合いを始ろうとしていた。

「まぁまぁ、それにしてもなんだいこのミミズが這ったような字は

？」

「さぁ？私にも中身がなんなのかまでは…」

「コイツは、読むもんじゃねぇよ。こうするんだ」

ピカーーーーーー！！

北斗たちのいがみ合いに私がこのままじゃ先が進まないと判断、それを落着けその手紙の中身を楓に聞いてみた。

私の話に楓は、中身までは知らないと声をあげそれを聞いてたノアがその手紙の前に自身の手をかざした。

「な…なんだ！！急に手紙が光やがった！！」

「それに手紙の中の青い文字が浮かび上がってノアちゃんの中に…入っていく…」

「あんた…いつの間に自分だけ、サングラスを用意してるんだい？」

「いや～。なんとなくいるかな？って思って…」

ノアが手をかざした所、突如その手紙が光だし中に書いてあった青い文字がそこから浮び上がりノアの中へと吸収されていった。

その光景に力が驚きの声を上げながら腕で顔を隠す。

私も力と同じようにしていた所、その横で何時の間にか用意していたサングラスをかけていた楓が眩しくて見えないノアの様子を私た

ちに伝えていた。

その光が落ち着いてきた所でその事について、楓に聞いてみた所…楓は照れながらそれに答えていた。

「な～るほどな。わ～ったよ。おめぇの話…信じてやんよ」

「本当！！」

「なんだい。いきなりの手の平返しかい？理由くらい教えてくれてない？」

ノアを包んでいた光を収まった所で、納得の声をあげいきなり楓に協力すると言い出した。

その様子に楓は、喜びを露わにし私はそのいきなりの態度の変化にその理由を求めた。

「いいぜ。こいつは、書いてある文字の中に自分の記憶を書いたヤツの魔力の中に封じ込めてそれで書いたもんだ。これが出来るのは、あたいが知る限りあたいとミツキだけでそれが出来るヤツじゃねぇとさっき言ってたミミズが這いまわったようにしか見えないって訳さ。んで、こいつの中身なんだが…今起こっているこの状況の後の事で…その視点はあたいだった…」

「なんで、それが自分だってわかるんだ？いくら書いたヤツの記憶が見れたとしてもお前とは限らんだろう？」

「普通の人間サイズなら、そういう事も考えられるんだがこの中身にはいつもあたいが見ている目線と同じ光景が写っていたからな…。

それにあたいの声でメッセージが入っていたんだ…「ミツキやユウの未来を変えてくれ」ってな…」

ノアの説明に対し疑問を感じた北斗が、いつもとは違い冷静な声で自身が感じた疑問をぶつける。

それに対しノアは、少しションボリした様子でその疑問に答えていた。

「んで、具体的にはどうする気だ？」

「え～っと…。とりあず、そのミツキさんが持ってる「ひなぎく」って戦艦の改造をユウさん達が画策しようとしているハズだから…。（ああ…。そういや、ユウからも楓と同じ事を頼まれたんだが断ってる。なんせ、いくらミツキのためとはいえ…あれを利用しとうするヤツはたくさんいるからな。ユウには、悪いとは思ってはいたが…これぱっかりはな…。ちなみに楓にも石の力についは教えないけど、そのシステムの力を生成する部分をあたいが用意するって事で協力するからな）うん…。それでいいよ。それで、それをユウさん達に変わって私がするようにして…ノアちゃんにはそれを用意してもらう。おじいちゃん達には、ヴィヴィオちゃんの警護と聖王教会について調べてほしいんです。未来のユウさん達でもそこまでは手が回らなかったみたいなんで」

「わかった。なら、あたいはちと用意するもんがあるからそれを取って来る。そのシステムが出来たら連絡をくれ（うん。それじゃ、お願い）」

話を終えたノアが、具体的な事にについて楓に質問をする。

それを聞いた楓は、私達も含めたその場にいた全員に対し指示を出した。

無論、ミツキさんやユウ達には、このことについては内密って事で。

なんせ未来の事だからね。

それを知られちゃ、色々と面倒だからね。

ちなみにノアについては、ミツキさんの石の力について色々と教えてもらわないといけないからその説得の材料として話をしたんだと。

楓との確認を終えたノアは、その場に転送魔法を展開させその場から去っていった。

「そうかい。なら、聖王教会の方については私が適任だろうから私がやるか。ヴィヴィオの方については、頼むよ。相棒」

「わかった。でも、お前もやりすぎんなよ？ユウ達に知られちゃ色々と面倒な事になりそうだからな」

「わかった。それじゃ」

ノアがいなくなった後、その場に残っていた私達はそれぞれの役割を私が決め相棒である力に声をかけた。

それに笑顔で答えた相棒は、お互いの拳をその場でコツンとぶつけ私がその部屋を出て言った。

「それじゃ、俺たちもいくとするか…。なぁ、クソ坊主？」

「てめぇ…死にてねぇのか!?」

「まぁまぁ、それじゃ!!行動開始〜!!」

「「おまえ（おめぇ）が仕切んな!!」」

「なんでこんな時だけいきピッタリなんですか〜!!」

私が出た後、残ったサイモンと北斗が三度いがみ合いを始めさらにそれを宥めていた楓が仕切ってした事に2人で声を合わせツッコミをいれていた。

さて…。

やるとしますか…。

楓達の声を背中で聞いていた私は、気合を入れなおし捜査を再開した。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ〜影の守護者〜その８７…始ります…」

その87

その８７

クラナガン総合病院　一階　エントランス

ティアナ視点

「えっと…。まずは、スバルとギンガさんの病室が…」

襲撃された機動六課隊舎の状況を調べて終えた私は、ここに入院しているスバル達の様子を見に訪れていた。

ここの病院。

ユン先生個人が運営している病院で、内科や外科を始め…過去に起こった人体実験などで改造された人達の治療まで行っている巨大総合病院。

本来スバル達は、六課の関連で聖王教会が運営している聖王病院や管理局関連の病院に入院するはずだったんだけど…。

ここの病院の医院長であるユン先生が、２人の主治医との事もありエリオ達とは別にこの病院に入院している。

でも、ユン先生が主治医と言ってもそれはあくまで戦闘機人以外の人としての病気だけで、戦闘機人関連についてはマリーさんが見ている。

それで、今回は人としての部分の怪我もあるからこっちにマリーさんがこっちに泊り込んでユン先生と共に2人を診察しているそうよ。

ちなみにスバルとギンガさん以外にも、ミツキさんにヴァイス陸曹…それにアルトも通院でここに通っている。

まぁ…見舞いする立場からすれば、今回…多くの人間を見舞いしなければならないためひとつの病院ですませてほしかったんだけど…。

「えっと…。エレベーターは…こっちか…。あれ?あの2人…なにやってるの?」

そんな事を考えながら、まず最初に向おうとしているスバル達の病室の階へと上がるエレベーターを探していた私の視線の先にエントランスにある椅子に腰かけ難しい顔をしているユウとナリアの姿を見つけ二人に近づいていった。

ナリア視点

「やっぱり…。ダメでしたか…」

「ったく…。ノアのヤツ…「ダメだ」の一点張りだったからな。人の話をちっとも聞かねぇ」

ご隠居達の元を離れた私は、ひなぎくの改修についてユウさんと会っていた。

なせ、ユウさんと会っているかと言えば…。

私が改修する予定である「ひなぎく」には、地上本部の地下に埋設

されている「蒼龍の首飾り」のメインシステムを小型化した物が搭載されている。

これにより「ひなぎく」は、本来の力を発揮する事が出来るんですが…これをするとなると姫がそのシステムの中で蒼天の石の力を発揮しなければならなくなり…。

今の姫の状態でそれをすれば、姫の命にも関わると考えそのメインシステムを別のシステムに改修しようとユウさんに相談を持ちかけたんです。

その話にユウさんは、自身のデバイスの中から彼のご両親が生前に私と同じ事を考えたらしくその設計図を取り出しそれを元に「ひなぎく」用に改修しようと考えた。

でも、それには、どうしても石の力について知る必要があり…ユウさんがそれを知るノアさんに協力を求めたのですが…断られちゃいまして…。

「どうしましょう？これから？」

「どうするもこうするもねぇだろ？ノアの協力が得られない以上俺たちでなんとかするしかねぇ。なんせ、もしゼールが浮遊要塞とかなんかで攻撃をしかけてきたら間違いなく目を覚ました姉貴は「ひなぎく」を使うからな。それに他の二隻もそれぞれに任務についちまってるから…。それをそっちに回す事も出来ねぇ。だが、姉貴が「ひなぎく」を出す前に連中のアジトを叩けりゃ別なんだけどな」

「そうですね…。でも、ファントムの調査部や管理局や聖王教会の方でも探してるんですけど…中々見つからないらしいです。どうや

らユウさんが前に見つけてくれた情報から見つけだしたアジトの方も場所を変えたらしく、もぬけの殻だったそうです」

私の問いかけに対しユウさんは、それしかないと断言しつつ今後の事を私に話…。それを聞いた私は、現状を説明しながらひなぎくを使わないで済む可能性を信じようとしていた。

「そうか…。なら、それにかけるしかねぇか。なんせユン先生からも「「ひなぎく」を姉貴に使わせるな!!そうじゃないと命の保証は出来ない」って言われてるからな～。」

「その話…。私にも詳しく聞かせてもらえるかしら?ユウ?」

「てぃ…ティアナさん!!」

「ティアナ!!お…お前!!なんでここに…まだ六課の捜査中じゃ…」

私とユウさんが、希望にも似た事を話してちょうどその時…。

座っていた椅子の後の方から、激怒したティアナさんが現れた。

どうやら…ティアナさんは、私達の話をこっそりと聞いてたらしく…その姿に私達は驚きの声をあげていた。

「シグナム副隊長が、「ここはもういいから見舞いにでも言って来い」って言ってくれてね?って言うか!!あんたまだスバル達と話をしてないんでしょ!!アルトから聞いたわよ!!それに…今の話!!また私達に隠してコソコソ何かしよってんでしょ!!さっさと教えなさい!!」

「ナ…ナンノハナシダカ…」

「ワタシモナンノコトダカ…」

「しらばっくれないんじゃないわよ!!ちなみに今の話…クロスミラージュに録音してもらってるのよ?ねっ?クロスミラージュ?」

＜ｙｅｓ!再生しますか?＞

「ええ…そうしてもらおうかしら?」

激怒するティアナさんの声に対し私達は、なんとかそれから逃れるため知らないフリをしてみた。

でも、ティアナさんは、その事を既に想定していたらしく…私達の会話を彼女のデバイスに録音させいたらしくそれを再生させた。

「どう?納得してくれた?」

「ゆ…ユウさん?」

「はぁ…。なぁ、いつの間に姉貴みたいな事覚えてんだ?」

再生されたその音声を聞きながら、私はどうしようかとユウさんの顔を覗き込んだ。

するとユウさんは、お手上げといった様子でティアナさんに話し掛けた。

「そりゃ、これからのために勉強してるからね？こういった事くらい出来なきゃミツキさんの補佐なんて出来ないわよ？」

ユウさんの問いかけに対し、自慢下な顔をしながらティアナさんがそれに答える。

「いっその事、飛鳥さんやフェイト隊長の補佐にでもなりゃいいのに…」

「飛鳥さんには、もう補佐がいるし…。それにフェイト隊長だってシャーリーさんが…。それに私は、ミツキのさんの補佐を…。って！！何言わせんよ！！」

ガン！！

「痛ってぇーーーーーー！！」

ティアナさんの返答を聞いたユウさんは、やれやれと言った感じでそれをさらに返す。

それに対しティアナさんは、一旦考え込んだ様子をしながら二人には既に補佐がいる事を言い出し…。

さらには、姫の補佐を自分がしたいとその考えを述べた。

そして、それを言い終えた後、どうやら素に戻ったらしく恥ずかしそうな顔をしながらユウさんの頭を殴りつけた。

「あの～。もしよかったら今の話については、私から話すとして…。ユウさんは、スバルさん達と話をされた方が…」

「そうね!?そうしなさいよ!!」

「何をいまさら…」

「いいから行く!!それとも…また殴られたい?」

「へいへい」

ティアナさんに殴られたユウさんは、頭を抱えながらその痛みを訴えていた。

その様子を見ていた私は、このままだと話が進まないと考え2人に対しひとつの案を提案をしてみた。

私の提案に対しティアナさんは、それを了承。

その一方…ユウさんは、面倒くさそうな顔をしながらそれを拒否しようとしてた所…。

拳を握り締めたティアナさんの圧力に屈しその場を後にした。

「さて…詳しい話を聞かせてもらおうかしら?」

「はい…。わかりました」

ユウさんが去った後、彼が座っていた場所に座ったティアナさんが私に話を聞こうと声をかけてきた。

それに対し私は、真剣な表情をし…ユウさんにした話を同じ内容を

ティアナさんに話し始めた。

クラナガン総合病院　ミツキの病室

スバル視点

「…」

ここに入院している私は、ギン姉と一緒の病室から別の部屋に入院しているミツ姉の部屋を訪れていた。

部屋にあるベットで眠っているミツ姉の横に椅子置いて座っている私は、特に話かける事はせずただ黙ったままミツ姉の手を握っていた。

私が…。

あの時、無茶なんかしなければ…。

止められたかも知れないのに…。

顔には酸素マスク…そして、体には、点滴や色々な機械をつけて眠っているミツ姉を見ながら私は自分がした事を後悔していた。

ガチャ

「やっぱり、ここにいたのか？スバル？」

「あっ…。ユウ兄？」

私の頭の中に後悔やタラレバ敵なものがグルグルと回っていた所、突然その部屋のドアが開きユウ兄が中に入ってきた。

「元気そうだな？んで、怪我の具合の方はどうだ？」

「まだ寝てる。とりあえず峠は越えたみたい…ミツ姉」

部屋に入ってきたユウ兄は、私に声をかけてきた。

それを聞いた私は、ユウ兄とは顔を合わせずミツ姉の顔を見ながらその体調の事を話をした。

「姉貴の事は先生から聞いてるさ。お前の方はどうなんだ？スバル？」

「私は…大丈夫…」

「そっか…」

私の話を聞いたユウ兄は、ミツ姉の事ではなく私の事を聞いていたらしく言葉を変え同じ質問をしてきた。

その話に私は、まるでその事をさけるかのようにサラッと返した。

ユウ視点

「…」

「…」

スバルとの簡単なやり取りと終えた後、その部屋に沈黙が流れていた。

あれ以来、俺もどう話していいのかわからず部屋の壁に立ったままもたれかけベットに寝ている姉貴とその横で腕や頭に包帯を巻いたまま黙って座っているスバルの様子をみていた。

部屋の中には、姉貴につけられてる医療機器の音とスバルが腕を動かす度に鳴る機械音だけが響いていた。

にしても…どうすっかな？

なんせ、俺自身…スバルとギンガが戦闘機人だって事を知ったのがつい最近でしかも知らなかったのは俺だけらしかったからな。

その事をじじいから聞かされた俺は、スバル達とどう話していいものかわからないままるで二人を避けるかのように仕事に没頭していた。

まっ、俺一人だけに教えてもらえなかった事に対しての苛立ちをどうしていいのか迷っていたのがその原因だけどな。

じじいと話をした時…俺に教えなかったその理由として言われたのが、スバルとギンガを普通の人間として育てたかったからなんだと。

ちなみに姉貴とノアは、じじい達から直接言われた訳ではなく、２

人を保護した際その現場に実際にいたから知ってただけなんだと。

それに小さい頃のスバルは、戦闘機人の力を恐れていたらしく子供の俺にその事を話せばさらに傷つくかもしれなく…。

いずれ言おうとはしてたんだが、本人達の意向もありいえなかったとの事。

まぁ…。

俺も同じ立場ならそうとも考えるだろうが…。

このまま帰ったら、ティアナ辺りからのお話が間違いなくありそうだしな…。

どうすりゃいいんだか…。

スバル視点

ど…どうしよう…。

ユウ兄…帰ってくれないよ…。

無機質な音だけが響く部屋の中で2人の沈黙はさらに続いていた。

私は、ドアの近くで腕組をしながら壁によしかかりこちらの方を見つめるユウ兄をチラチラ見ながらどうしようか迷っていた。

ユウ兄に…。

知られちゃった…。

もう私…普通の人間として見てもらえない…。

私の中でずっと思っていたひとつの不安。

もし、ユウ兄が私とギン姉が戦闘機人だと知れば人間としてではなく化け物として見られるんじゃないかって言う事…。

それが、今…現実の物となり私の中でその不安が恐怖に変っていた。

私に取ってユウ兄は、悪戯好きなんだけどやさしい隣に住んでいるお兄ちゃん。

家で一緒にご飯を食べている時や学校に一人で行くのが怖い私を…。

ギン姉と一緒によく気にかけてくれ…。

いっぱい遊んでくれた。

そんなユウ兄の事を私は、大好きで…。

ずっとこんな関係が続けばいいな…なんて思っていたんだけど…。

その関係には…。

もう戻れない…。

二度と…。

「なぁ？スバル？」

「（ドキッ！！）な…何…？」

そんな恐怖が私の中を包み込み…沈黙が続く中、その沈黙を打ち破るかようにユウ兄が声をかけてきた。

ユウ兄の声に対し私は、ついに自分の体の事が聞かれる！と思いドキッとしそして怯えながらその声に答えユウ兄の方を意を決して見てみた。

すると…。

ぷにっ！！

「へっ？」

彼の方を向いた所、そこにはユウ兄はおらず次の瞬間私の右頬に何かがぶつかったような感触を覚えた。

「ゆ…ユウ兄？」

「ひっかかったな！！この単純なヤツめ（笑）」

その感触に戸惑っていた私に対し何時の間にか私の後ろに回りこんでいたユウ兄が、自身の指で私の頬をぷにぷにとつきながら悪戯交じりの笑顔で声をかけてきた。

「んもぉ～！！こんな時になにしてるんだよ！！」

「ようやく、らしくなってきたじゃねぇか？」

「ふへっ？どういう事？」

そんなユウ兄の顔を見た私は、その場から立ち上がりユウ兄につめより激怒した。

つめよる私に対しユウ兄は、ほっとした様子でやさしく声をかけてきた。

「だってよぉ～。俺が知るおまえって1年３６５日元気いっぱいって感じだったからなぁ～」

「それじゃ、まるで私が天然の馬鹿みたいだって言ってるように聞えるんだけど…」

私の問いかけに対しユウ兄は、頭をかきながらそれに答えその話に私がジト目をしムスっとした様子で言い返す。

「まぁまぁ、そんなに怒んなよ。姉貴の事については、お前だけの責任じゃねぇさ。止められなかった俺たちにも責任がある。それにお前の体の事は大して気にしてねぇから…心配すんな」

「そ…そんな訳ないでしょ！！だ…だって、今私が右手を動かせば機械の音がするし…。それに、そんな人間この世にいない…し…」

激怒する私をまるで宥めるように話し掛けてくるユウ兄に対し私は、納得せずにそれを言い返す。

けど、ユウ兄にその話をしていた所…段々不安がこみ上げてきて…

何時の間にかトーンダウンしてしまっていた。

「確かに気にならないと言えば嘘にはなるが…それも個性って事でいいんじゃねぇか？」

「個性？」

ユウ兄の話に私は、疑問の声をあげた。

「だってよ。お前はさっき「そんな人間はいない」って言ってたけどこの世の中に同じ人間なんているのか？全員なんだかんだ色々と違うだろ？まっ、双子だって顔とかは似てるが考え方とかは違うんだから。そうだろ？（う…うん…。で…でも！！機械を入れた人間なんて！！）なら、お前は何者んだ？（えっ？）お前は、プロトタイプ・セカンドっつうスカリエッティが作った戦闘機人と同じ物なのか？」

「違う！！私は、そんなんじゃない！！私は！！母さんと父さんの娘のスバル・ナカジマ！！そんな物なんかじゃない！！」

私の疑問に対しユウ兄は、その事を納得させようとするがその話私は…納得できずにいた。

そんな中ユウ兄は、先程までの優しい顔から真剣な顔に一変し問い掛けてきた。

ユウ兄の話に私は、それを否定するかのように声を荒げる。

「…なら、それでいいじゃねぇか？（えっ？）誰がなんと言おうとお前がそう考えてるのならそれで。ちなみに俺は、姉貴の時にも言

ったが産まれはどうであれスバルはスバルで…ギンガはギンガだって事だ。理由は、もう聞くなよ」

「つまり…面倒くさいから考えたくないってことだよね？」

ユウ兄からの冷たい言葉に激怒していた私の話を聞いた彼は、その言葉にホッとした様子でまた優しい表情に戻りミツ姉の時と同じ事を私にも…そして、この部屋にはいないギン姉に対してもその考え方は変らない事を告げてきた。

そして、その理由について聞くなと言うユウ兄に対し私は、ジト目でその時の事を思い出しながら話をした。

「そういうこった。にても…お前何泣いてんだ？」

「えっ？な…何でもないよ！！」

私の話にユウ兄は、私の顔から涙が零れてるのを見て不思議そうな顔をしながらその事について聞いて来た。

その話に私は、自分の顔をから涙が零れてる事を確認し顔を真っ赤にしながら急いでそれを拭きその理由については答えなかった。

だって…。

ユウ兄にあんな事言われて…。

うれしくなって…それに…なんだか恥ずかしくって…。

それに…なんだか胸の奥がドキドキしてて…。

ユウ兄の顔が見れないよ～！！

いったい何…

私！！変だよ！！

「なら、そろそろ行くか？スバル？」

「ふ…ふぇ！！ど…どこに行くの？」

ドキドキが収まらず彼に背を向ける私に対しユウ兄が私に対しここから別の所に行くと私を誘ってきた。

それに対しドギマギしたままそれを返す。

「ここの一階さ。そこに今ナリアとティアナがいてな。そこで姉貴がこれからやらかそうとしている事をなんとかしようって話をしている所なのさ。まっ、最初は俺とナリアでやろうかと思っていたんだが…。それがティアナにバレてな…」

「行く！！それにギン姉も一緒に！！」

「わかった。なら、まずはギンガの所に行って…。そこにティアナ達も来てもらうか？」

「うん！！」

私の問いかけに対しユウ兄がそれに答える。

その話を聞いてた私は、そこに行く事を即答。

さらにギン姉もそれに参加してもらう事をユウ兄に告げる。

私の話にユウ兄は、それを了承しギン姉がいる病室にティア達も集合してもらう事を確認しその部屋を後にした。

そして、その時にはもう…。

胸のドキドキは納まっていた…。

クラナガン総合病院　スバルとギンガの病室

ギンガ視点

「どうやら上手く言ったみたいね？」

「まぁな。それにしてもなんでここに楓さんがいるんだ？」

スバルが出て行った後、その部屋にひとりで本を読みながらすごして私の所に元気になったスバルとユウ。

そして、それに続きティアナにナリア…さらに楓さんがこの部屋を訪れた。

いきなりのその光景に驚いた私は、スバルとティアナからユウ達がしようとした事を聞かされた。

私にその事を話すスバルを見たティアナが、ユウに声をかけそれを

聞いたユウはここに楓さんがいる事を聞いていた。

ちなみに…。

スバルとユウがミツキさんの病室で何を話していたのかついては、スバルが教えてはくれなかった。

話をしようとするユウの口を抑えてまでね。

やれやれ…。

まったく…何をやらかしたんだか…。

あいつは…。

「それはですね。なんでも、ひなぎくのシステムについて楓さんが自分に任せて欲しいって…」

「そうなのか？楓さん？」

「ええ。前にミツキさんから「ひなぎく」事を教えてもらって…。それで、今の私に何か出来ないかな？って思っていたらナリアさんとティアナがそんな話をしている所に出くわしたんで…。それで２人にお願いしたんです」

元気いっぱいの様子で帰ってきたスバルを見ながらそんな事を考えていた私の耳に、ユウの問いかけに答えるナリアの声が入ってきた。

その話にユウが楓さんにそれを確認。

楓さんは、ユウの話にその理由を答えていた。

「けど…。ティアナ達の話によると…ミツキさんの石の力って…ノアの協力が必要なんでしょ?それはどうする気なの?」

「それについては、もう話はつけてます。でも、力については教えてはもらえないんですけど…。それに変わる物を用意してくれるって事で…」

楓さんの話に対し私は、自分のベットに腰掛けながらその話とティアナ達から聞いた話を総合した上で疑問を楓さんに投げかけた。

それに対し楓さんは、答えた話を聞いたユウが疑問の声をあげた。

「いったいあの頑固者をどう口説いたんだ?」

「そ…それについてはき…企業秘密って事で…」

「なんだが歯切れが悪いわね…」

「そうですよね?ハハハッ!」

ユウの問いかけに対しそれをはぐらかそうとする楓さんに対しティアナも疑問の顔をしながらそれを追求。

それに対し楓さんは、それを頭をかき笑いながらその追求から逃れようとしていた。

「それでいいんじゃないかな?それで。だって…楓さんに動いてもらえば私たちは、それ以外の事に集中出来るんだから」

「そうね。ミツキさんが、起きる前に黄天を捕まえればいい訳だし」

「それに…スカリエッティもね？」

楓さんのそんな様子を見ていたスバルが、その事には言及せずに楓さんに任せようと言い出した。

その声に私も同意しティアナも続き…結局その場にいた全員がスバルの話に同意した。

「だな…。なら、ひなぎくの事はナリアと楓さんに任せるとしてだな。（わかりました！！）（任せて下さい）それにしてもスバルもたまにはいい事いうじゃねぇか」

「「たまには」じゃないよ～！！」

「全く…コロコロと…。まるで、秋の空みたいね」

「それがあの子のいい所なんだけど…ね」

私たちの話の最後にユウがスバルの意見に同意する声を上げた後、それを言ったスバルの頭を自身の手でグシャグシャに撫でながらその事を誉めた。

それに対しスバルは、それをおさえようしつつそれに笑顔で答えていた。

スバル達のそんな様子を見ていたティアナは、呆れた声をあげそれを聞いた私は…苦笑いをしながらそれに答えていた。

でも…。

これで、なんとかなりそうね。

ティアナの話に苦笑いしていた私は、その一方で小さな希望の光を感じていた。

そして、この時の事が…。

私たちの未来を変えていた事に…。

後から楓さんに言われるまで気づいては入なかった…。

マイナスではなく…。

プラスの未来へと…。

変わっていた事に…。

その８７（後書き）

作者
「お待たせいたしました！！久しぶりの本編更新！！「その８７」！！いかがでしたか？」

ミツキ
「それにしても…随分時間がかかったわね？」

作者
「それについては、大変申し訳ございませんでした！！言い訳を言わせてもらえば、クロスの方の「楓編」がとにかく難産だったのとリアルの方で小説をかける状態ではなかったもんで…こうなってしまいました。申し訳ございません」

ミツキ
「それにしても…色んな意味で今年は当たり年ね？特にリアルの方で…」

作者
「それについては、もう笑うっきゃないですね。昨年末にヘルニアになり…。そして、今年になって実家に引っ込む事になり…。さらに親族の死去により色々と振り回された挙句に喘息持ちにまでなりましたから（笑）」

ミツキ
「もしかして…その辺の事が更新の遅れの理由？」

作者

「それもありますし…仕事が忙しかったのもその理由の中に含みますがね？」

ミツキ
「まぁ…作者の愚痴はそろそろ終りにして…。とりあえず、次回からどうなるの？そろそろゆりかご戦も始りそうなんだけど…」

作者
「そうですね。もう少ししてからって事になりますけど、とりあえず今回の話で八神組フラグは回収できましたね」

ミツキ
「フラグって…飛鳥さんと楓さんのしかなくって…。それに、まだまだこれからって感じのような…」

作者
「それについては、ゆりかご戦の中で明らかにしていく予定ですが…。今回は、なぜここに来たのかについては今回の話で終りになります」

ミツキ
「つまり…さらに詳しい話については、クロスの方を見てね♪って事？」

作者
「そう言う事です。よろしくお願いします。それでは！！今回はここまで！！ミツキさん！！〆て下さい」

ミツキ
「おっけ～！！それじゃ、次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒ

ｉｋｅｒｓ～影の守護者！！その８８…テイク…オフ…」

ユア
「あいっ！！」

ミツキ
「えっ！！なんでユアちゃんがここにいるの！？」

その８８（前書き）

クラナガン郊外　ファントム・ナイツ格納庫

楓視点

「これが「ひなぎく」…」

「はい。これが、ファントム・ナイツの零番艦であり我が部隊の総旗艦…「ひなぎく」です」

ユウさん達との話を終えた私は、ナリアさんと共にファントム・ナイツの格納庫にてミツキさんが駆る次元航行艦「ひなぎく」と対面をしていた。

目の前に広がる白い艦影を見て驚きの声を上げる私に対しナリアさんは、ひなぎくの設計資料を片手に持ちながらそれを紹介してくれた。

「これって、確か…ナリアさんが艦長なんだよね？」

「艦長と言っても艦の運営のその殆ど、姫がなされてますので私はその補佐をしているだけで…艦長なんて名ばかりのものです。それで、具体的な話なんですが…」

私の話を謙遜しながら答えるナリアさんは、その場で資料を開きこの艦の具体的な改修について話し始めた。

この艦…。

見た感じは、火星まで単独で行った〇でしこのA型に似ているが…その機能まるで別物。

装備自体は、艦首にある主砲「ラグナ・ブラスト」に副砲と魔導ミサイルに遠距離からもハッキング出来るハッキングシステムに艦全体を包み込む事が出来る「フィールド・バリア」とそんなに変わらないが…。

一番の違いは、ミツキさんが持つ蒼天の石の力をフルで使えるよう設計されて入ること。

ただ、その力があるかないか…またはミツキさんの体調次第でその性能は雲泥の差がでてしまうとの事。

そのため、ミツキさんの体の事を考えた当時のファントムの相談役が通常の任務での使用を禁止。

有事の時のみの使用が許される事になっていた。

今がまさにその時…。

「…だいたいこんな感じでの改修を予定してるのですが…。メインシステムの方は、どうされるつもりなんですか?」

「それについては、私に任せて!もう設計図は出来ているから」

「これですか…。でも、これを一体どうやって手に入れたんですか?「ひなぎく」については、ある意味トップシークレットに入ってくるものなんですが…」

私がナリアさんの説明を聞きつつそんな事を考えていた所、彼女から私が担当するひなぎくのメインシステム…。

つまりは、蒼龍の首飾りのメインシステムの小型版を別な物に返る事についての詳細な説明を求めてきた。

それを聞いた私は、自身満々な態度でナリアさんにその設計図を見せた。

でも…その画面を見たナリアさんは、その出所にについて疑問の声をジト目をしながら聞いて来た。

「そ…それは…。ユウさんが持っていた設計図を私がここに来るまでに、作り直してみたんだよ…ハハハッ！」

「そ…そうなんですかぁ～！！さすがは楓さんですね！！まさに天才ですよ！！」

「そう？そんなんじゃないけど…。（よかった～。ナリアさんが単純で…）」

ナリアさんの問いかけに対し私は、その場で考えた理由あたふたしながら答えてみた。

それに対し彼女は、それを信じ目をキラキラさせながら私を賞賛していた。

彼女のそんな答えに私は、内心ホッとしながらそれに答える。

「それじゃ、私は、打ち合わせ等がありますので後のことはお願いします」

「わかりました。それじゃ」

私との間で、そんなやり取りを終えたナリアさんは打ち合わせがあると言いその場を後にした。

そんな彼女を見送った私は、作業を開始すると共に我が最愛の弟に対しこちらでは手に入らない部品の調達を依頼するメールを出すのであった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８８…始ります…」

その８８

その８８

本局　クロノの執務室

アルト視点

「六課が襲撃された時に貴様が出していた、あの赤い蒸気みたいな物は…いったいなんだ？」

「さぁ？」

「貴様は、何か能力を隠してるのか！？」

「普通ですが？」

「なら！！（バン！！）デバイスに何か仕掛けがあるのか！！」

「姉貴に聞いて下さい。あれは、元々姉貴が作ったものなんで…。って言うか呼ばれた理由は取り調べですか？そうであるなら帰らせて下さい。色々と予定があるもんで」

「貴様ぁ～！！」

いったい…。いつまで続くの…これ？

執務室では、各ソファーに座ったクロノ提督とヴェロッサ・アコース査察官…それに八神部隊長がその目の前に立ち私の横にいるユウ

に対し六課襲撃の際のユウが出していた紅い蒸気についてその映像を出しながら聞いていた。

その画面を見ながら質問をするクロノ提督に対しユウは、いつもの通り面倒くさそうにそれを返していた。

ユウのそんな態度に対しクロノ提督は、次第に苛立ちを露わにしついには提督が座っている前にあるテーブルを両手で叩いた上で立ち上がり声を荒げる結果となった。

立ち上がった提督をアコース査察官に抑え落着かせようとしているが、そんな様子には見向きもせず白々しい態度を取っていた。

ちなみに私がここに呼ばれた理由っていうのが、ヴァイス陸曹の変わりにペリパイをするよう部隊長から指示を受けるため…なんだけど…。

私の件が終わってからかれこれ1時間…。

ずっ～っと、このやり取りが続いてるんだよね…。

早く座りたい…。

「まぁまぁ、クロノ君も少しは落ち着き！にしてもユウ？あんた確か自分のデバイスを自分で整備とかしてるんやろ？それなら、ミツキに聞かんでもあんたがわかるはずやろ？」

「俺がやってるのは、簡単なものだけで。フルメンテとなると姉貴に頼んでるんですよ。なんせ、構造が複雑な上ブラックボックスみたいなもんがあって…そこの部分となると姉貴じゃないと解らない

んですよ」

「さよか…。なら、仕方がないなぁ～」

そんな様子を見ていた部隊長が、冷静な態度…と言うか既に諦めた様子でユウに質問をした。

ユウがその質問に答えると、部隊長は難しい顔をしながらその声に答える。

「なら！！貴様のデバイスを私が預かり本局で詳しく調べる！！」

考え込む部隊長に対しアコース査察官に抑えられたクロノ提督がユウのデバイスを取り上げると言い出した。

「いいですよ？でも、こいつは名目上俺の個人所有って事になってますけど…。実際は、ファントムの管理化にあるものですからね？もし持ってくなら、ファントムの許可を取って下さい」

「（クッ！！）くれると思うか？その許可を…」

「思ってませんよ（笑）」

「貴様ぁ～！！（クロノ！！落着け！！こうなる事ははやてから言われてるだろ！！）…そ…そうだったな…。すまない。ヴェロッサ…」

それに対しユウは、ニヤニヤと悪戯交じりの顔をしながらそれに答えその答えを聞いた提督は悔しがった。

提督のそんな態度を見た部隊長は、呆れた様子で彼に問いかける。

それを聞いたユウは、確信した様子で笑いながらそれに答えそんな彼の様子に提督はさらに激怒…。

アコース査察官が、必死にそれを抑え…彼の声でようやく落着きを取り戻した。

「それで、まだ何かあるんですか?」

「それについては、ウチの方から。まずこれからなんやけど…。ユウとアルトについては、これから六課の整備班と共に壊れた隊舎の変わりになるものの整備を頼むわ。それについてファントムにも了承を取ってるからなユウ?ちゃんとやってや?（ちぇ…）それで…もう一つあるんやけど…」

落着いたクロノ提督の様子を見たユウは、早く帰りたいと言わんばかりに他にあるのか?と聞いていた。

それを聞いた部隊長が、私とユウのこれからについての指示を言いそれがいい終わるとチラリとクロノ提督の方を見た。

「もう一つは、一等陸士としての君にではなく…ファントム・ナイツのジョーカーオブクラウンとしての君に聞きたい。これから六課は、スカリエッティ逮捕にむけてその行動を開始する。その際そのアジトを攻略する事になるが、その時君はどうするつもりだ?」

部隊長の視線を感じたクロノ提督は、先程とは打って変わり冷静な態度でユウに質問を投げかけた。

「そんな事は簡単さ。姉貴…いや、サエグサ司令からは、六課をサポートするよう命じられている。スカリエッティのアジトの攻略には参加させてもらう。もちろん、戦闘要員としてな。だが、参加はするがスカリエッティ逮捕には協力はしない。俺のターゲットは…ゼール一人だからな」

「つまり、あんたは、スカリエッティと一緒にいるであろうゼールを捕まえるためにウチ等と行動を共にするってわけやな？（そういうこった。ダメといったら勝手させてもらうぜ？）そんな事は言わへんよ。こっちとしては、ユウがどうするのかを聞きたかっただけやから」

クロノ提督の話を聞いたユウもまたそれにあわせるかのように冷静な態度で答えそれを部隊長が要約しながら答える。

部隊長の話にユウは、そうである事を答えもし部隊長達がそれを認めなければ六課を離れ単独で行動すると言い出す。

どうやら部隊長達は、ユウをどうこうするよりも彼がどう行動するのかを確認したかっただけらしくその話を聞いた後私達は執務室を後にした。

ユウの話に部隊長は、それを否定…。

ユウがあのゼールと…。

私は…。

執務室を出た後、ユウの横を歩く私は…。

ある決意をしながら彼の横を歩いていた。

はやて視点

「まったく…。あの姉弟は、そろいもそろって…」

「だから、いったやろ！ユウに聞いた所で知らん存ぜずで逃げられるって…」

「まぁでも、当初の予定は達することが出来たんだから…。それにしてもよくファントムが我々の提案を飲んだね？はやて？」

「それもまぁ、あのご隠居様のおかげや」

ユウ達が退室した後の室内では、出された紅茶を口にしながら雑談をしていた。

今回、クロノ君達がウチを介してファントムに提案した事は実に簡単。

ユウをファントムの隊員としてそちらでは使わず、六課隊員として今まで通り行動させてもらうという事。

ウチ等としては、こんな自体やし一人でも多くの人間が欲しく…。

今ユウに抜けられるとこちらがまずいって事やね。

でも…、その話がクロノ君からのものという事でいくつかの条件はついたんやけど…。

そんな中、クロノ君がユウの態度を思い出してか苛立ちを露にしそれをウチとヴェロッサが宥めつつ彼がウチに質問をしてきた。

「ファントムのご隠居…確か…ミハエル・グリニッヒ提督…だったか…。まさかあのお方がファントムに入たとはな」

「そうだね」

ウチの話に二人は、ご隠居様の事を知ってる振りをしながら話をしていた。

「なんや、二人共…？知り合いやったんか？」

「そうではないけど…相当な有名人だよ。でも、一部の人達にだけ…になるんだけど」

「相当なやり手らしい。彼は、元々ミゼット提督の右腕だったお方だ。定年を向かえるまで裏方に徹し、彼女を陰で支えていたそうだ」

「定年を迎えて管理局を退官した後、悠悠自適な生活を送っているとは聞いていたけど…」

そんな二人の様子を見たウチは、ご隠居様と知り合いなのか確認してみた。

ウチの話に対しヴェロッサ、クロノ君、ヴェロッサの順番でその事について説明してくれた。

「そ…そんなにすごい人やったんやね…。ご隠居様って…」

「ともなると。ファントムのバックには、相当な人物がいるって事だね？クロノ？」

「ああ…。だから、誰一人としてあそこに手を入れる事が出来ずにいたんだ」

二人の話に驚くウチに対し、ヴェロッサとクロノ君はこの事でファントムへの警戒心を露にしていた。

「なんや？二人して…。まさか、ファントムになんかしようとかしてへんよな？」

「そういう意味では、ないんだけど…」

そんな二人を見たウチは、疑問の声をあげる。

それに対し、ヴェロッサが苦笑いをしながらそれに答えさらにクロノ君がその詳細な内容について話をし出した。

「これは、はやてには関係ないが…。今回の事で、レジアス中将になんらかの処分が下されることが既に決定している。これにより、地上本部の勢力は壊滅的なダメージを受け…今までの管理局内での勢力図がガラッと変わる事が予想されてるんだ」

「つまり…。上の方では、もう既に今回の事件が終った後の事を考えてる人たちがいるって事さ」

「まだ事件が解決してへんのにか！？（そうだ）それじゃ…クロノ君達も？」

クロノ君の話の後にヴェロッサが続く。

それに対しウチは、驚きと戸惑いの声をあげる。

「そうせざるをえないだろう。何せ、おかしな連中に管理局を任せる訳にはいかないからな」

「それで、そのためには、地上本部とつながりの強いファントムを取り込もうと色んな所が僕たちを含め色々と画策しているって事さ。いい意味でも…悪い意味でも…ね？」

「つまり…。それによっては、ミツキの身も危ないって事やな？」

クロノ君、ヴェロッサの順で話していた内容を聞いたウチは、ミツキのことについても聞いてみた。

「そうだ。中には、まだ彼女の力を調べ…モルモットにしかねない輩もいるからな」

「先に言っておくけど…。僕達は、ミツキちゃんをどうこうするつもりはないからね」

「ただ、あいつが持つあの力が、どんな物でそれが仮に暴走した場合…どう世界に影響を及ぼすのか…。それが知りたいだけだ。その力をどうこうするつもりはない」

「なるほどな…。それであんな条件を…」

ウチの話に先ほどと同じ順番で話をしそれを聞いた時、ふとご隠居様と話をしていたときの事を思い出していた。

「いったい何のことだい？その条件って…」

「それについてはなぁ…」

ウチの声にヴェロッサが疑問の声を上げてるのを聞いたウチは、そのときの事を詳しく話し始めた。

ファントム・ナイツ本部内　ミハエル・グリニッヒ提督の執務室

ミハエル視点

「私に捜査権を？なんだっていきなり？」

「ノアから頼まれましてね。なんでも、そちらで起きた事件の捜査をこちらでなさりたいとか…」

「ええ…。でも、それだけじゃないんですけど…」

私の執務室には現在、八神組の飛鳥さんとケイン副司令がおり彼女に対しこちら側での捜査件付与について話をしていていた。

執務室にあるソファー私の前には、飛鳥さん座っている。

そして、私の後ろで直立不動のままでケイン副司令が立っている。

私は、彼に座るよう告げたのですが…。

彼は、このままでいいとの事でそのままにし話を進めた。

私の話に対し彼女は、驚く…と言うよりも、いきなりの展開に戸惑ってるといった所か…。

「そうですか…。それならこの提案は、あなたに取って有効かと思うのですが…。何かご不満でも？」

彼女の話しをしていた私は、彼女の中になんらかの不満があると感じその事について聞いてみた。

「不満…と言うわけではないんですが…。こういう話には必ず裏があるからこっちの世界に来た時は、その事を必ず聞いとけって…。お宅の司令官様にアドバイスを以前に受けたもので…」

「姫が…。まったく…あのお方は…」

「なるほど…。では、キチンと話をしなければなりませんね。ケイン君」

「ハッ！！」

私の問いかけに対し、飛鳥さんは以前に姫から受けたアドバイスの事を上げ…詳細な…というよりその話の裏事情について聞いて来た。

それを聞いた私は、ケイン副司令に対しその説明を依頼した。

「今回のこの件に対し、あなたに話す前に機動六課の八神部隊長に話を通しております。（それは、何故？）それは、あなたの捜査をやりやすくするためと…。（それと？）ユウをあなたの捜査から引き離すためです」

「なんで、そんな事を？そもそもユウにも関連する話だろ？それを何故？」

副司令の話に疑問の声をあげる飛鳥さん。

それを聞きケイン副司令は、淡々と話を続ける。

「確かに…。今回のあなたが捜査している事に対して…ユウは、かなり深く…と言うより今回の件の当事者の一人の…息子になる訳ですから。（だろ？なら、あいつにも知る権利がある）ええ…。ですが…それについては、調べる必要が彼にはないと言う事です。何せ、彼は姫が寝ている間にゼールとの決着をつける事を考えてるでしょうから」

飛鳥視点

「なるほど…。つまりその事については、ゼールから聞かされるだろうからその事に集中させたい…と…」

「そういう事です。それとこの件に関しては、ゼールだけではなく…管理局や聖王教会など…。今まで表舞台には、出てこなかった連中が色々と画策しているようです」

「つまり、そいつ等を一掃するのが最大の目的で…それにユウが出張ってこられると面倒な自体になりかねない…と…。なら、なんで

私にこの話を？」

ケイン副司令からの話を聞いた私は、その話を自身の中で要約しそれを話にした。

それに対し今度は、ご隠居様がそれに答え私がそれに対し質問をする。

「通常なら、このような事はお願いしません。ですが…今回の件については、彼等の他にゼールやスカリエッティ達の件もあります。我々は、そちらへの対処を余儀なくされているため…そちらに手を回すとなると…」

「なるほど…。いつもなら様々な自体を影で処理していたあんた達が表舞台に出ざるを得ず…。そのあんた達が抜けた穴を私が埋めるって事かい？でも、私一人でやるのかい？それに…私のやり方は、知ってるだろ？いいのかい？いつも通りやっても？」

私の質問に対しケイン副司令は、まるで苦虫をかんだような表情でそれについて答える。

それを聞いた私は、それに対し感じた疑問を言ってみた。

だってそうだろ？

通常なら、一部隊で対処する自体を私一人でって…。

それにいつも通りやったら、後でミツキさんになに言われるかわかったもんじゃないからね。

ちなみになぜ私が敬語を使ってるかといえば…。

なんせ、このご隠居様って…ノアやミツキさんから聞いた話によると相当な人らしいからね。

万が一の意味も含め…と言うか、社会人としての当たり前の事として敬語を使っている。

「ご心配には及びません。我々もバックアップはさせてもらいますし、いつも通りやって頂いても結構です。（いいのかい？）ええ…構いません。なにせ、あなたがやった事についての後始末は…クロノ提督にやって頂く事になりましたから。（なんで！？）いやはや…。事の始まりは、あちらからユウを今まで通り整備兵及び戦闘要員として六課に置いておいてほしいとの依頼が八神部隊長の方から我々にありまして…。それについては、こちらとの利害が一致はしましたが…。よくよく考えるとこのままでは、あちら側に有利にしか働かないです。なにせ、彼をあちらにいかせる事で彼がハラオウン派に利用されると言うデメリットもはらんでおりますから」

「という事は…まさか、その腹いせに私の後処理の全てを任せる事を条件に出したって訳ですか？（いえ…あなただけではなくこちらに来た八神組の皆さん全ての後始末を…です）そいつは、なんだかかわいそうだね？なら、好きに使わせてもらうよ？いいかい？」

私の話にご隠居様は、飄々とした顔をしながら質問に答えた。

それを聞いた私は、ケラケラと笑いながらそれに答え彼のデスクの上に置いてあった捜査権がある事を示す私のＩＤカードを手に取った。

「構いません。大いに暴れてください。それと…力君達にもそう伝えてください」

「わかったよ。それじゃ」

私の話にご隠居様は、笑顔でそれに答える。

それを聞いた私は、最初使っていた敬語を止め普段の言葉使いでそれに返事をしその部屋を後にした。

その８８（後書き）

作者
「如何でしたでしょうか！！その８８！！」

ミツキ
「今回も説明会みたいな感じだったわね？」

作者
「まぁ…。今回については、前回までの話のユウサイドでの話と楓と飛鳥のその後の話になってしまいましたんで…こんな感じになりました」

ミツキ
「それはそうといつ私は起きるの？」

作者
「それについては、まだまだ先になりすね」

ミツキ
「ちぇ…。つまんないの…。そういえば周りが随分と慌ただしいような…。なにこれ？くす球？」

ぱんぱかぱ～ん！！

突然のファンファーレと共にくす球が割れる。

作者
「昨年の５月より更新してまいりましたこの「魔法少女リリカルな

のはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～」になりますが、前回の話にてついに！！ＰＶ１００万ＨＩＴを超える事が出来ました！！」

ミツキ
「うっそ～！！」

作者
「本当です！！これも今まで読んでくださった読者の皆様のおかげです！！ありがとうございました！！」

ミツキ
「ありがとうございました！！」

作者
「それに伴ない、特別編をやりたいと思っております！！内容については、まだ未定ですが楽しみにしてて下さい！」

ミツキ
「だ！そうです（笑）」

作者
「それでは、今回はここまで！！ミツキさん〆ちゃってください！！」

ミツキ
「ＯＫ！！それじゃ、次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！！その８９…テイク…オフ…」

その８９（前書き）

本局　格納庫内　アースラ艦橋

アルト視点

「まったく…。何もこんな廃艦直前のボロ船を態々使えるようにするなんてな。部隊長もいったい何考えてんだか…」

「何言っているんですか！！このアースラは、部隊長達に取って思い出がいっぱい詰まった船なんですよ！！それをボロ船呼ばわりするなんて！！それにこの船は！！」

「まぁまぁ、ルキノ。落着いて…」

私、ユウ、グリフィスさんにシャーリーさんそれにルキノのロングアーチの面々はこれから私たちの活動拠点になる次元航行艦アースラの最終チェックを行っていた。

そんな中、機器をチェックしていたユウがアースラを活動拠点にする事に疑問の声をあげていた。

ユウの声の聞いた船マニアのルキノが、その声に激怒。

彼に対しアースラがどんな戦歴を持った船なのかを説明しようといきり立ち、それをシャーリーさんが宥めていた。

「部隊長達に思い出があるかどうかはわからねぇが、武装がない船をこんな時に使おうなんざ普通の部隊長なら考えはしないぜ？いく

らなんでも。まっ…、平穏な状況なら別だがな」

「元々、破壊された隊舎の変わりとしての運用を種としてるからね。前線まででる事まではしないさ」

「だと…。いいんだが…」

ルキノとシャーリーさんのそんな様子を見たユウが、彼女に対しなぜそんな事をいったのかを説明しそれを聞いたグリフィスさんが今回のことについてのその意図を彼に説明した。

グリフィスさんの説明にユウは、一応納得はするもののなんだか歯切れの悪い返事をしていた。

「そう言えば、ルキノって船に詳しいんだよね？（ええ…まぁ）それじゃアースラを含めた全ての船の事わかるの？」

「大体は、解るんですけど…。三隻ほどわからないんですよ」

「その3隻って？」

ユウの歯切れの悪い返事の後、悪くなったその場の空気をよくするべくシャーリーさんがルキノに船のことで質問をした。

それを聞いたルキノは、照れながらもそれに答えそれを聞いたシャーリーさんがさらに質問をした。

「えっと…。ＸＬ級次元航行戦艦　ネェル・ファントム…同じくアーク・ビエラそれと…ＸＹＺ級次元航行戦艦ひなぎくって言う名前で…。その船については名前しかわからないんです。マニアの間で

は、その3隻は幻の船って言われてて…」

「「…へェ…。ソウナンダ…」」

シャーリーさんの問いかけにあれこれと説明を加えつつそれに答えていた。

それを聞いたユウと私は、ルキノの話に唖然としつつもファントムの事を関係のない人間には言えない事もあり（一部例外あり）棒読み状態でそれに答えていた。

「それで!!この間!!地上本部が襲撃された時にこのウチの2隻が現れたって噂がネット上に広まって、その時の画像がこれで…望遠レンズで取ったらしいんですけど…ぼやけてて…。これがアーク・ビエラでもう一隻がネェル・ファントムってらしいんです。でも、私が一番見たい船が出てないんですよ～（その船って?）それがこのひなぎくって言う…（うんうん）」

「ねぇ?ユウ?」

「なんだよ?」

「もし、ルキノが先輩のひなぎくを見たら…」

「ひっくり返る事は間違いねぇな。それに今、楓さんがそのひなぎくの整備をしてるなんて言ったら面倒な事になるから絶対に言うなよ!」

「うん…。わかった…あっ!そうだ。ユウ、後でちょっと…いい?」

「ああ。わかった」

私たちのそんな様子を知っているのか知らないのかルキノは、シャーリーさんに話を続けていた。

その話にシャーリーさんは、まるで聞き上手な人のように話を聞き二人の様子を見ていた私はユウに話し掛けていた。

ユウの話に私は、もしルキノをひなぎくがある所につれていけば大変な事になりそうな予感を思いつつ彼の話に頷いていた。

そして、私は彼に自分の決意を告げるため…ユウを呼び出した。

それはそうと楓さん…なにやってるんだろう？

その楓と言えば…。

ファントム本部内　格納庫　ひなぎく艦内

「あれ？このヘリ…。へぇ～、すごいなぁ～。よし！！これも…。もしもの事があったら大変だからね！なら、これをこうして…」

と、ひなぎくに搭載されている兵器類をあれこれと勝手に改造しているのであった。

「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者～その８９…始ります…」

その89

本局内　格納庫　アースラ艦内　廊下

スバル視点

「はぁ！！お前何言ってんだ！！」

「何ってもう決めたんだから！！いいじゃない！！」

「いい訳ねぇだろ！！部隊長に話してねぇだろそれ！？」

「い～っつも一人勝手にやってるあんたに言われる筋合いはないわよ！！」

私…いったい何やってるんだろう…。

怪我が治り無事退院した私は、整備中のアースラ内部にて迷惑をかけた六課のみんなに一人でお詫び行脚をしていた。

そんな中、ロングアーチのみんなに謝るべく彼等がいる艦橋へと向っていた所ユウ兄とアルトがなにやら言い争ってる声が聞えて来た。

2人の声を聞いた私は、いつもならそのケンカを止めてるハズが今は物陰に隠れてこっそりその様子を近くでみていた。

しかもなんだかドキドキしながら…。

そういえば、ユウ兄とアルトってすんごく仲がいいよね？

結構、一緒に行動してるし…。

休みの日だって2人で出歩いてたし…。

それに…2人が付き合ってるって噂だって流れてたし。

でも…2人は、それを否定してたけど?

いっそのこと…このまま仲悪くなっちゃえばいいのに…。

そうすれば、私がユウ兄と…。

ずっと一緒に…。

あれ?なんでそんな事思っちゃうんだろう?

同じ六課で働いてるのに…。

2人の怒号を聞いていた私は、俯きながらそれを聞きつつそんな事を考えていた。

後から考えてみたら、ミツ姉の病室でユウ兄に優しく声をかけてもらってからと言うもの私の中で四六時中ユウ兄の事が頭の中から離れなくなっていた。

そして、自分以外の女性と仲良く話をしているのを見るとムッとしてたしなんだか今でも胸の辺りがモヤモヤしてるし…。

私…なんか変だ。

まだ治ってないのかな?私の体?

それとも…別の病気なの?

…

…

…

やっぱり変だ。

私…

そんな事を考えつつ、2人の話に再び耳を傾けた。

「とにかく、なんでそんな事になったのかその理由を教えてくれ。ゼールの所に行く俺についてくなんて…海鳴の頃のお前を見てたら考えつかないぜ?そんな事?あんなにビビってたお前が?」

「そ…そりゃ、私だって怖いよ。でも…今のあんたを見てたらなんだかどっかにいっちゃいそうで…それで…(んな事あるかって)だって!!あんた!!ゼールを倒すなんて…。先輩とあのミューゼルさんの2人がかりでようやく撃退した相手をあんた一人でって!!」

ユウ兄は、興奮しているアルトをまるで落着かせるように冷静な態度で話をすすめアルトがなんでユウ兄について行くと言い出したのかその理由を聞いていた。

「だからかな？（ちょっと！！あんた死にに行くつもり！？）んな訳ねぇよ。（だったら、どうして！？）俺がもしゼールを倒せば姉貴を超えられるんじゃないか？って考えもあるし、それになにより俺がやんなきゃなんねぇ気がしてな？」

「ユウ…」

そして、ユウ兄からゼールと戦う理由を聞かされたアルトは目に涙を浮かべ心配そうな様子で彼を見つめてそんな彼女をユウ兄は優しい顔で見つめていた。

アルト…。

もしかして…。

ユウ兄の事…。

それに、ユウ兄も…。

アルトの事…。

2人のそんなやり取りをこっそり見ていた私の頭の中にふとそんな事が思い浮かび。

なんだか、悲しい気持ちが流れ…。

「あれ？私…なんで泣いてるの？止まらない」

気づいた時には、涙が止まらなくなっていた。

そして、自分が泣いているのを確認した私は訳がわからなくなっていき…。

2人の話を最後まで聞かずにその場を後にした。

アルト視点

「あれっ?スバル?」

「どうした?アルト?何さっきからあっちの方を睨みつけんてんだ?」

「ふぇ!?な…なんでもないよ」

艦橋の最終チェックを終えた私は、ユウをその近くの艦内にある休憩スペースに呼び出して話をしていた。

そんな中、私がふと目を別な所にやるとその場から離れるスバルが見えたのでそれを声に出した。

私の声を聞いたユウは、すぐさま私が見ていたのと同じ方を見るがその時にはもうスバルの姿はなかった。

疑問の声をあげる彼に対し私は、なんでもない事を彼に告げた。

もしかして…今の話…。

それに…なんだかさっきのスバル泣いてたような…。

でも、もし…スバルがユウの事が好きでも…。

私は…。

そんな事を考えながら、スバルが入なくなった後を私は見つめ彼との話に戻すため頭を切り替え彼に話しかけた。

「ねぇ？ユウ？どうしてそんな気がしたの？ユウがしなきゃならないって？」

「あの時…ゼールと決着をつける前…ノアが言ってたのさ。俺によく姉貴の戦いを見とけってな。そんで、それを見てたら姉貴が俺に何かを託したような気がしてな。それがいったいなんなのかはまだわからねぇが？」

「なら！！私も！！」

ユウの話を聞いた私は、自分の中に感じてた不安…。

彼がこのままいなくなるんじゃ？と言う思いを拭えずにいた。

そして、このまま離れたくない気持ちを彼にぶつけた。

「それはダメだ！！（なんでよ！！）足手まといだ！！」

「足手まといでも構わない！！あんたがこのままいなくなっちゃうくらいなら、最後までユウと一緒にいる！！それに、あんたが勝手にどっか行こうもんなら絶対にそれを見つけ出して連れて帰るし迎えにも行く！！」

「ったく…。お前なぁ…。なら、俺は勝手にするから六課の仕事を

終わらせたら迎えに来い。お前が来る前に全部片付けておくから。
それと…それまで、コイツを預かっててくれ」

「何よ…。これ？」

私は、自分の中にあった彼への気持ちを正直に伝えた。

それに対し彼は、制服の内ポケットの中にしまってあった古びたペンダントを取り出しそれを私に手渡した。

ペンダントを受け取った私は、それが何か彼に聞いた。

「こいつは、昔姉貴から持たされてたもんでな？俺の中じゃ大事なもんのひとつさ。そいつを預けとくから、今回はこれで我慢しろよな」

ユウ視点

「なんだか納得出来ない…」

「あのな…」

アルトは、俺が渡したペンダントを見ながら憮然とした様子で納得しないと声をあげてた。

そもそも、このペンダント…。

姉貴がウチの両親から預かってたものらしく、中にある菱形の宝石の中に魔力を込める事で数回分の防御魔法が展開出来るって代物。

姉貴からは、大切な人を離れた場所でも守りたい時に使えと言われたもんだ。

ただ、こいつを受け取った時とひとつだけ違うのが。

俺が姉貴から預かった時には石の色は青色だったが俺がその石に魔力を込めたら石の色が赤に変わっていた。

一度も使った事ねぇのに…。

その理由については、原因不明…。

まったく…。

これでも、なけなしの勇気を出した方なんだぜ?

それを気づけっての。

「まっいっか。今回はこれでゆるしてあげる。でも…」

「でもって…まだなんかあるのか?」

そんな事を考えていたら、自分の中で納得をつけたアルトが声をあげその声に俺が疑問の声をあげる。

「私が迎えに行くまで…絶対に死なないでね。もし死んでたら…絶対にゆるさない」

「ああ…。わかったよ。お前も死ぬなよ?」

「うん。約束する」

真剣な顔をしながらそんな事を言ってきたアルトに対し俺は、彼女にも同様の約束をしその場を後にした。

本局内　格納庫　アースラ艦内　医務室

シャマル視点

「なるほど…。それでここに来たって訳かい」

「はい…。先生!!私!!なんかの病気なんですか!?」

アースラの医務室にいた私は、クラナガン総合病院に入院していた六課隊員の怪我の具合などをここを訪れていたその病院の医院長であるユン・エリシャ先生に話を聞いていた。

そんな中、半べそをかいたスバルが「なんかの病気になった」と駆け込んできた。

驚きを隠せない私に対しユン先生は、興奮しながら説明をするスバルを強制的に椅子に座られ問診を始め現在に至る。

「そうだね。こいつは、難しい病気だね?そうだろ?シャマル先生?」

「ですね。これぱっかりは…私達医者でも…」

「そんな～!!それじゃ、治らないんですか!!」

「治すすべを今の私じゃ持ち合わせていない」

「そんな…」

スバルの話を聞いた私とユン先生は、それがなんなのかをすぐに確信。

深刻そうな顔をするスバルに対し、まるで追い討ちをかけるかのように話し始めた。

そんなやり取りが少しの間続き…。

「そろそろ辞めにしませんか?これ以上やったら、目を覚ましたミツキちゃんに何言われるかわかりませんから」

「なんだい、もう終りかい?私としちゃもう少しスバルを弄りたかったんだが…。こんな与太話を本気で信じるんだから面白くってしょうがない」

「先生…それは言いすぎじゃ…」

「ふぇ!?じゃあ…今の話は…」

深刻なやり取りをしていた私は、スバルがなんだかかわいそうになり本当のことを話すべくユン先生に声をかけた。

それを聞いたユン先生は、その事について納得した様子を見せその

一方スバルは驚きの声をあげていた。

「う〜ん。嘘じゃないって訳ではないけど…。重病ってわけではないのよ？（じゃあ！！いったいなんなんですか！？）それはね…。恋の病よ？（恋の…病？）そう。つまり、スバル…あなたは、ユウ君の事が大好きになっちゃってるって事よ」

「えっ！？私が、ユウ兄の事を？」

私の話にスバルは、顔を真っ赤にしながら驚いていた。

「ああ。だから、こいつばっかりはおまえ自身の手で決着をつけないと医者の私達じゃどうにもならないって事さ」

「まぁ、ユウ君を強制的にスバルの事を好きにさせる事ならいくらでも出来るけどね（それは…いいです）なら、自分でなんとかしなさい。いい？（はい…わかりました）」

そんな様子を見ていたユン先生は、自分達ではどうにも出来ない事をつげさらに私が黒くなりつつユウ君を誘惑する魔法でもかけようか？とスバルに声をかけた。

すると、スバルがそれを断ってきたので自分でなんとかするよう声をかけそれに納得したスバルはなんだか明るい顔をしながら医務室を後にした。

「どうなりますかね？スバル？」

「さぁね？こればっかりは、本人達次第だからね。ユウがどちらを選らぶにしろその結果を認めてやんなきゃ。ミツキにもそう言っと

くつもりさ。そういや、八神の方はどうなんだい？あいつだっていかげんそろそろ…」

スバルが出て行った後、ニヤケながらその結果をどう予測するのかユン先生に聞いてみた。

それに対しユン先生は、わからないフリをしつつはやてちゃんの事を私に聞いて来た。

「それが…どうやら、なのはちゃん達と一緒で仕事の方に恋しちゃってるみたいで…。そっちの方は…」

「やれやれ。せめて、組長でも見習ってくれりゃいいんだけどね？相手は別として」

「ですね」

私の話を聞いたユン先生は、呆れながらも組長の事を話をしその話に私も納得しながら色々と話をしていた。

本局内　格納庫　アースラ艦内　スバルとティアナの部屋

ティアナ視点

「それで？どうするのよ？告白するの？あいつに？」

「わかんない…。だって、あの様子だったら私…確実に断られちゃうもん。ユウ兄に…」

新しく割り当てられた部屋で荷物の整理をしていた私の所にスバルが戻ってきた。

そして、お詫び行脚をしてと思っていた私にスバルはユウとアルトのやり取りの事…さらにユン先生とシャマル先生から言われた事を私に話をしてきた。

スバルの話に私は、ベットに座る彼女に対し整理している手を止めずにどうすのかを聞いてみた。

私の話にスバルは、どうしていいのかわからない…と言った様子だった。

そして、少しの沈黙が私達の間に流れた。

「ねぇ？ティアならどうする？やっぱり言うの？こんな時に？」

「さぁ？その時の気分次第よね？こんな時だからこそ言うかもしれないし逆に終わってからまで取っておくかもね？」

「ティア！！ちゃんと答えて！！」

考え込むスバルに対し私は、黙々と荷物整理を続けるなかスバルがその沈黙を打ち破るかのように質問をしてきた。

それに対し私は、曖昧な答えで返しそれに怒ったスバルが声を荒げる。

「そんなの知らないわよ！！あんたの問題でしょ！！それに私がそうしろって言ってあんたそれするの！？」

「そ…それは…ゴメン」

私に怒りを露わにするスバルに対しカチンときた私は、その感情を向き出しに彼女に詰め寄った。

その言葉にスバルは、言葉を失いシュンとしてまった。

あっちゃ～。

どうやら、本気で悩んでるみたいね…。

はぁ～。仕方がない…。

「言い過ぎた。ゴメン」

「ううん。こっちこそ…ゴメン」

私の言葉に本気で凹んだ様子のスバルを見た私は、自分が言いすぎた事に気づき頭をかいた後彼女に謝った。

それを聞いたスバルも謝ってきた。

「お～い！！着替えもって来たぞ～！！って、お前等…なにやってんだ？」

「あれ？ノア？ちょうどよかったわ。あんたも付き合ってよ？この子の相談に？」

「んあ？いったいなんの話だ？」

スバルとそんな事をしていた所、ノアが私達の着替えを持ってきたのでこの話に巻き込む事にした。

ノア視点

「…にしても、なんであいつなのよ？アルトにしてもあんたにしても？」

「…と言われても…。よくわかんない。ノア？どうしたらいいかな？」

隊舎を吹っ飛ばされ着替えがなくなった2人に着替えを持ってきたあたいに、ティアナからスバルがユウに恋をしたから相談に乗ってくれと頼まれ着替えを渡したのちその話を聞いた。

部屋にあった椅子に腰掛けるティアナは、なんでユウなのかと疑問の声をあげそれをベットに座り俯いたままのスバルが答え2人の間にプカプカ浮かぶあたいにも声をかける。

「う～ん…。それにはまずおめぇの気持ちを聞かんとな？」

「って、言われても…」

あたいの言葉にどうしたらいいのかわからないといった様子のスバル。

「なんせ、恋って初めてだもんね～。スバルにとっちゃ」

「そういうティアはした事あるの？」

「そ…それは…」

そんなスバルを見たティアナが偉そうな態度を取り、それを見たスバルがムスっとした様子でティアナも恋した事あるのかと問いただす。

スバルの問いかけに顔を赤らめ言葉を詰まらせるティアナ。

「そういや、訓練校に入るちょっと前か…。確か、その時の担任の先生に…。」

そんな様子のティアナを見たあたいは、ティアナの過去の事を思い出しその事を口に出した。

「ちょっと、ノア！！」

「ノア！！クッキー3個上げるからその話、もっと聞かせて！！」

あたいの声に驚きを露わにするティアナ。

その一方、スバルは目を輝かせ手持ちのクッキーであたいを即座に買収。

ティアナの初恋話を聞こうとする。

「おお～！！確か…そんときゃ～ミツキにその先生の事を調べてもらって…（スパーン！！）んぎゃ～！！」

「今は、あんたの事…でしょ!?スバル…?」（ギロッ）

「うん…。そ…そうだったね?」

クッキーをスバルから大喜びで受け取ったあたいは、その時の事を話し出した所どこからともなくスリッパを召喚。

それであたいを叩き落とした。

さらに、スバルに詰め寄りその話はもう終りと言わんばかりに彼女を威嚇。

さずがのスバルもこれ以上の追及をさけた。

本局内　格納庫　アースラ艦内　展望室

なのは視点

「ふぅ〜。さてと…。もうひと踏ん張り…あれっ?スバル?どうしたの?そんなため息ついて?」

「ふぇ!?な…なのは隊長!!えっ…えっと…あの…そ…そうだ!!相談に乗ってもらえますか!!」

「いいよ?とりあえず、そこにでも座ろっか（は…はい!!」

私が一息入れ残った仕事を片付けようとその部屋に向おうとしていた所、アースラ内にある展望ルームでため息をつきながら考え事をしていた。

それを見た私は、彼女に声をかけそれを聞いたスバルが相談を持ちかけてきたので近くにあったベンチに座りその話を聞いた。

「…それで、ティアとノアにも相談に乗ってもらったんですけど…どうしていいのかわからなくなって…。それで、気分転換を含めてここに来たんです。私…どうしたらいいんでしょうか？なのは隊長？」

「う～ん…。それは…」

スバルの話を聞いた私は、その問いかけに頭を悩ませた。

だって…。

教導についてとかだったらともかく、私…男の子の事をそんな風に考えた事がなくって…。

ゆ…ユーノ君だって、単なるお友達…だし…。

（なのは！！そ…そんな～！！）

う～ん…。なんて言ったら…。

う～ん。

う〜ん。

プスプス…。

「な…なのは隊長…頭から湯気…出てますけど…大丈夫ですか？」

「だ…大丈夫！！大丈夫！！ちょ…ちょっと待ってね」

「は…はい…」

とユーノ君が、泣き崩れているような声が聞えたようなきがしたんだけどそれを見事にスルーした私は頭から湯気をだしながら必死にどう答えていいのかを考えていた。

それを見ていたスバルは、驚きながらも心配そうな声をあげその声に私は問題ない旨を伝えた。

とは言え、スバルがあのユウ君の事を好きになるなんて…。

そんな事、まったく気がつかなかった。

正直な所、こんな状況でスバルがこんなに落ち込んでる状態だと現場に出たら間違いなく危ない…。

ここは上官として…。

ダメダメ！！

ここで怒ったら、ティアナの時の二の舞いだよ！！

私は、頭をブンブンと振りながら過去の失敗の事を思い出し考え直し始めた。

ここは、戦技教導官としてでもスターズ分隊の隊長でもなく…ひとりの女性…高町なのはとして答えなきゃ…。

でも…いったいどうすれば…。

そういえば、ティアナの時もヴィヴィオが私以外に懐かなかった時も…ミツキさんに助けてもらったんだよね？

もし…彼女なら…。

すぅ～…はぁ～…。

ミツキさんなら…。

すぅ～…はぁ～…。

どうスバルに…。

考えている中ミツキさんに助けてもらった事を思い出した私は、スバルに解らないように自分を落着かせるために深呼吸をしながら彼女ならどうするのかを考えた。

そして…。

「ねぇ？スバル？そんなに答えを急がなくてもいいんじゃないかな

？」

「えっ！？どうしてですか？」

私の話に驚くスバル。

そんなスバルに私は、話を続けた。

「だって、スバルは今日始めてユウ君の事が好きだって気づいた。でも、その気持ちが本当なのか…。本当にスバルがユウ君の事が好きなのか…その自信が持ててないんじゃないのかな？」

「確かに…。で…でも！！もし、このまま何もしなくてアルトとユウ兄が…付き合ってたりでもしたら…」

話を続ける私に対し自分の中にある不安をぶつけるスバル。

それに対し冷静に…そして、やさしくスバルに話をした。

「そうなるかどうかは、まだわかんないよ？（だって、あの様子じゃ！！）私は、その時の事を見てないからわからないけど…。でも、未来は、誰にもわからないものなんだよ。例え力君達の未来から来た楓さんでもそうならない可能性だってあるんだから」

「つまり…。私がユウ兄と付き合ってる可能性も？」

そんな私の話にスバルは、感情剥き出しの状態で立ち上がる。

でも、私は態度を変えずにやさしく語り続ける。

そして、私の気持ちが通じたのかスバルは…立ったまま落ち着きを取り戻し再びベンチに腰掛け私の話に質問をしてきた。

「あると思うよ。だから、今はその気持ちを大切にして彼に自分の気持ちを伝えられるようになるまで育ててあげた方がいいと思うの。って、男の人を好きになった事のない私が偉そうに言うのもなんだけど…」

「そ…そんな事…。あ…ありがとうございました!!なんだか、気持ちが楽になったみたいです。そうしてみます!!それで…また相談してもいいですか?」

「私でよければいつでもいいよ」

「ありがとうございます!!失礼します!!」

どうやら、私の話にスバルは納得してくれたらしくいつもの笑顔に戻り私に一礼をした後その場を後にしていった。

「ふぅ〜。これで、いいのかどうかはわからないけど…。でも、スバルが納得してくれたのならいいか…。さぁてと、仕事仕事!!」

スバルが去った後、その場に残っていた私はひと伸びし自分の仕事へと戻る事にした。

自分が男の人に恋する事などすぐに忘れて…。

その８９（後書き）

作者
「如何でしたでしょうか「その８９」！！」

ミツキ
「今回は、最終決戦に前の恋愛話?にしても結果は出さないの?」

作者
「よくあるパターンとしてここで、結論をだしてから最終決戦へといったパターンがよくありますけどちょっと違うかな?と思いまして」

ミツキ
「どういう事?」

作者
「コレは個人的見解になりますが、スバルって恋愛についてはまったく関心がないキャラだったんで早い段階で気づかないんじゃないかと。それで、ここまで引っ張った上で今回悩ませるようにしてみました」

ミツキ
「でも、その相談相手の最後が高町さんに…。彼女だって恋愛には関心がないんじゃないの?」

作者
「それは、ミツキさんがいないからです。本来、ウチの作品でこういった事についての相談役ってミツキさんが担当って事になってま

したから。そのミツキさんが、今は出られないんで誰か別の人を…と考えたていたらちょうどなのはが相談役らしい事を一切してなかったんでやってみたらしっくり来たんでそのまま採用したんです」

ミツキ
「なら！私を出してよ！！」

作者
「それは、無理です（笑）」

ミツキ
「ちょっと～！！」

作者
「なんせ、当初からのそう決めてましたんで…ちなみにここで私を撃墜しても無理ですよ（笑）」

ミツキ
「そんな～！！んで、これからはどうなるのよ？」

作者
「そうですね。次回については、今回がスバルがメインだったんでティアナの話をしてその後力達やゼール達の状況をやってからゆりかご戦へと突入していきたいと思います。１００万ＨＩＴの記念小説をやってからになりますけど（笑）それじゃ、今回はここまで！！」

ミツキ
「それじゃ、次回！！魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～影の守護者！！その９０！！…テイク…オフ…」

ユア
「あいっ！！」

ヴィヴィオ
「ユアちゃん！！ヴィヴィオの出番取らないで！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4954l/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜影の守護者

2011年10月12日15時50分発行